

はじめに

『絶句類選評本』は、唐代から清代にわたる七言絶句の名詩三千首を、2
1の類に分けて編集し、欄外に簡単な批評文を添えた書である。

はじめ、津藩の儒者・津阪東陽（名は孝緯。1744-1825）が、類別の書
「絶句類選」を編集した。序文によれば、文政7（1824）年に完成したら
しいが、生前には刊行に至らなかったようである。子息の津阪有功らの手
によって刊行されたのは、その死から3年後の文政11（1828）年のこと
であった。

その後、同じ津藩の儒者・斎藤拙堂（名は正謙。1797-1865）が、この
「絶句類選」中の主な詩に批評を書き加えた。この批評文を加えた書は、
「絶句類選評本」として文久2（1862）年に刊行された。

21の分類は

節序（季節）、禁省（宮中へのつとめ）、宴会、閑適、尋訪（人を訪ね
て）、遊覧、贈答（詩のやりとり）、送別、客旅（旅にあって）、感慨、
悼傷（人の死をいたむ）、仙釈（道教や仏教）、憑弔（昔をしのぶ）、
征戍（国境守備）、宮掖（奥御殿）、閨閣（妻の思い）、歌曲、詠古（歴
史をうたう）、農桑（農家のくらし）、凶画（絵画にちなんで）、詠物
（身のまわり）
となっている。

（以上、ブログ <https://userweb.pep.ne.jp/c6v00030/r006.html> から引用、
詳細はこのブログ参照）

上記ブログにあるように、江戸時代には**初心者用の漢詩製作の手本**とし
て用いられ、頼山陽も愛読したようである。

その他、**一般的に知られていない「元詩」明詩**に**亘る多くの詩を、同
じ分類に「唐詩」「宋詩」と並べて採録した**ところに特徴がある。

明治十四年に小型本として翻刻されているが、非常に字が細かく実用に
耐えるかどうか疑問である。その後、一九七八年に復刻されているが、原

本を写真に撮って印刷したものであり、訓点、送り仮名が不鮮明であるという問題があった。

このたび、「人文学オープンデータ共同利用センター」から、原本の鮮明な写真画像が公開されているのを見つけ、PDF化し、「搜韻」を利用して翻刻して電子データとすると共に、簡単な語釈を付け加えた。

三千首というと「過ぎたるは、なお、及ばざるが如し」の感じを受けるが、幸いに電子データは場所を取らないし索引が可能であるから、ダウンロードして、今後の研究に使用していただきたい。

ワードデータは、2段階に折り畳みであるので、適宜、展開して使用されたい。

なお、本作業は、「搜韻」が無ければ、八万四千字の手入力を必要とし、しかも俗字との戦いなることから、実質的に不可能であった。実際に、約5%が「搜韻」になく、これらの扱いに非常に時間を要した。

「搜韻」の出現は、「産業革命」に等しい物があり、漢詩検索の他、作詩においても、用例検索、膨大な「詩語集」として非常に有効であり、「韻別分類」「対句詩語集」を殆ど不要にしまっていると思われる。

それと共に、「搜韻」に付属する「漢語大詩典」は「大漢和辞典」に比して収録語彙数が圧倒的に豊富であり、本作業の語釈付けにおいても、約0割は「漢語大詩典」によった。また、「大漢和辞典」もデジタル版を使用することによって、紙の物の数十倍の速度で引くことができ、作業の効率化に役立った（最近、バージョンアップされ、文書から、コピー・アンド・ペーストで、熟語の直接検索が出来るようになったようである。）。

新しいツールを使いこなすことが、今後、必須になると思われる。

使用参考文献

- ★唐詩選 『唐詩選』（岩波文庫）。『唐詩選詳説』（明治書院）。
- ★唐詩三百首 『唐詩三百首』（東洋文庫）。『唐詩三百首詳解』（大修館）。
- ★『三体詩』（朝日新聞社）。国会図書館デジタルコレクション。
- ★『和漢名詩選類評釈』（明治書院）
- ★『漢詩大系』（集英社）
- ★『中国詩人選集』（岩波書店）
- ★『新釈漢文大系』（明治書院）
- ★『柳宗元詩選』（岩波書店）
- ★『宋詩選注』（東洋文庫）

参照ブログ

- ★「詩詞世界」
- ★「WEB 漢文大系」
- ★「漢詩の朗読」

絶句類選標本 一

絶句類選 卷之一 節序類

★立春

律回歲晚冰霜少

春到人間草木知

便覺眼前生意滿

東風吹水綠差差

立春

律回^{かえ}りて歲^く晚れ 冰霜^{まれ} 少なり

春^{じんかん} 人間に到らば 草木 知る

便^{すなわ}ち覺ゆ 眼前に 生意の満つるを

東風 水を吹いて 緑 差々たり

宋 張栻

【語釈】

○律：始。立春の意。○人間：人間世界。○東風：春風。○差差：齊しくないさま。

(参考文献) 『中国名詩集』(岩波書店)

★立春

自折梅花插鬢端

韭黄蘭茁簇春盤

潑醅酒軟渾無力

作惡東風特地寒

立春

自^{びんたん}ら梅花を折りて 鬢端^さに挿す

韭^{ひこう}黄 蘭^{らんし} 茁^{むら} 春盤に 簇^{むら}る

潑^{はつばいしゅ}醅酒 軟にして 渾^{にじ}りて力無く

悪^なを作し 東風 特に地に寒し

宋 朱淑真

【語釈】

○韭黄：韭の根、最も美味な所。○蘭茁：共に香草。○春盤：立春の日に作った春餅、生菜。○潑醅：酒を醸す。

★立春

金 党懷英

水結東溪凍未漪
風凌枯木怒猶威
不知春力來多少
便有青蠅負暖飛

水は東溪に結びて凍けて未だ漪あらず
風は枯木を凌ぎて怒りて猶お威あり
知らず春力の来ること多少なるを
便ち青蠅の暖を負いて飛ぶ有り

【語釈】

○漪：さざなみ。○青蠅：蠅の一種。アオバエ。

★人日立春

人日立春

唐 盧仝

春度春歸無限春
今朝方始覺成人
從今克己應猶及
願與梅花俱自新

春度り春歸り限り無き春
今朝方始めて人と成るを覚ゆ
今從り己に克ち応に猶お及ぶべし
願わくは梅花と俱に自ら新たにせん

【語釈】

○人日：陰曆正月七日。○春歸：春が過ぎ去る。

★迎春

迎春

清 盧道悅

律轉鴻鈞佳氣同

律は転じて 鴻鈞こうきん 佳氣同じ

肩摩鞞擊樂融融

肩けんまこくげき摩鞞擊 樂らく 融々ゆうゆう

不須更向東郊去

須もちいず 更に 東郊に向い去るを

春在千門萬戸中

春は 千門万戸うちの中に在り

【語釈】鴻鞞擊

○律…立春。○鴻鈞…天。大自然。○佳氣…良い天気、風景。○肩摩鞞擊…往来の込み合う律形容。○融融…草樹が生い茂っているさま。○東郊…春の郊外の野原。

★早春

早春

唐 韓愈

天街小雨潤如酥

天街の小雨 潤うるおいて酥その如し

草色遙看近却無

草色 遙かに看るも 近づけば却って無し

最是 一年春好處

最も是れ 一年春の好き処

絶勝煙柳滿皇都

絶はなはだ 煙柳えんりゆうの皇都に満つるに勝れりまさ

【語釈】

○天街…都大路。○酥…乳製品。○好處…素晴らしい時。○煙柳…霞で煙って見える柳。○皇都…長安。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★早春

早春

唐 戎昱

陰雲萬里晝漫漫

陰雲 万里 晝に 漫漫まんまん

愁坐關心事幾般

愁坐 心に 関する 事 幾般いくはんぞ

爲報春風休下雪

爲に 報ず 東風 雪を下すを 休めよとや

柳條初放不禁寒

柳條 初めて 放てども 寒を 禁ぜず

【語釈】

○陰雲…雨雲。○漫漫…広く遙かな様。○愁坐…愁いて坐す。○幾般…いくたび。

★早春

早春

清 李浹

華格琴床柳外亭

華格かかく 琴床きんしょう 柳外の亭

案頭一卷太玄經

案頭 一卷 太玄經たいげんきょう

夜來暗過催花雨

夜來 暗に 過ぎて 花雨を 催しうなが

添得苔痕滿徑青

添い 得たり 苔痕 滿徑の 青

【語釈】

○華格…美しく長い木の枝。○琴床…琴をおく机。○案頭…机の上。○太玄經…中国の術数書。西漢の揚雄撰。宇宙本体の万物への展開を象徴的な符号と辞句で表現。○夜來…夜になってから。

★ 春早

春早

金 段繼昌

斷氷銷盡荻芽尖

斷氷 銷尽しょうじんして 荻芽てきが尖るとが

凍壠蘇來白薺添

凍壠 蘇とうろうし来りて 白薺そ添はくせいう

幾片野雲飛不去

幾片の野雲 飛びて去らず

晚風吹作雨纖纖

晚風 吹き作なす 雨せんせん纖々

【語釈】

○銷盡：融け尽くす。○凍壠：畝、畔。○蘇來：よみがえる。○白薺：白いなすな。織纖：細くなよなよししたさま。

★ 正月十五日

正月十五日

唐 熊孺登

漢家遺事今宵見

漢家の遺事 今宵こんしやう 見る

楚郭明燈幾處張

楚郭そかく 明燈 幾處いくとこか張る

深夜行歌聲絶後

深夜 行歌 声絶える後

紫姑神下月蒼蒼

紫姑神しこしんか 下月 蒼々そうそう

【語釈】

○正月十五日：上弦、元夕。この夜、「張燈、觀燈」の儀式が行われ、長安の城門は開け放たれて、松明を灯して観る習慣があった。その様子を詠ったもの。○漢家遺事：唐の習慣。○紫姑神：廁の神。生前は人の妾婦であったが、正妻に疎まれて廁の掃除をさせられ、正月十五日に死んだ。その命日に廁の辺りに酒、餅などを供えて吉凶を卜う。○蒼蒼：月光が青白いさま。

★元夕

元夕

宋 林季謙

燒燈城市又新年

燒灯 城市 又た新年

壁月樓臺萬管絃

壁月 樓台 万ず管絃

獨有廣文窮相眼

独り 広文の窮相眼有りて

一篝燈火照殘編

一篝の燈火 殘編を照らす

【語釈】

○元夕：正月十五日、上弦。この夜、「張燈、觀燈」の儀式が行われ、長安の城門は開け放たれて、松明を灯して観る習慣があった。その様子を詠ったもの。○燒燈：灯火をとます。○壁：星の名、なまめ。○廣文：博士の異称。○窮相眼：窮した様相と眼。○篝：かがり火。○殘編：散佚した残りの書編。

★元夕

元夕

明 湯 珍

火樹銀花巧鬥明

火樹 銀花 巧明を鬥う

笙歌聲沸滿春城

笙歌 声 沸きて 春城に満つ

月華西轉星河澹

月華 西転し 星河 澹なり

猶有香車取次行

猶お 香車の 取次に行く有り

【語釈】

○元夕：正月十五日、上弦。この夜、「張燈、觀燈」の儀式が行われ、長安の城門は開け放たれて、松明を灯して観る習慣があった。その様子を詠ったもの。○火樹：灯火の盛んなさま。○銀花：灯火の形容。○月華：美しい月。○澹：光が淡い。○取次：次第に。

★元宵

元宵げんしやう

清陶姬

滿城無處不張燈
笙韻元宵響沸騰
惟有學吟人愛靜
小樓坐看月高升

滿城処として灯を張ちやうぜざるは無く
笙しやういん韻げんしやう元宵に響きて沸騰す
惟だ吟を学ぶ人の静を愛する有りて
小樓に坐して月の高こうしやう升を見る

【語釈】

○元宵：正月十五日、上弦。この夜、「張燈、觀燈」の儀式が行われ、長安の城門は開け放たれて、松明を灯して観る習慣があった。その様子を詠ったもの。○笙韻：笙の音。○高升：高く昇る。

★春寒

春寒しゆんかん

宋胡仔

小院春寒閉寂寥
杏花枝上雨瀟瀟
午窗歸夢無人喚
銀葉龍涎香漸銷

小院の春寒しゆんかん寂寥せきりやうを閉ざし
杏花枝上雨きやうかしじやう瀟々しやうしやう
午窓の歸夢 人の喚よぶ無く
銀葉ぎんようの龍涎りゆうえん香かおり漸銷ぜんしやう

【語釈】

○春寒：春のまだ浅い頃の寒さ。余寒。○ひっそりとして物寂しいさま。瀟瀟：雨（風）の寂しく降る（吹く）さま。○歸夢：故郷へ帰る夢。○銀葉：銀製の容器（香を焚く）。○龍涎：龍涎香。鯨の胃の分泌物から取った抹香。○漸銷：だんだん消えて行く。

★ 春寒

春寒しゅんかん

元 黄庚

春寒料峭透窗紗
春寒の料峭しゅんかん りょうしょう 窓紗そうしやを透す
睡起晴蜂恰報衙
睡起すいきの晴蜂せいほう 恰あたかも衙がを報ず
怪得曉來風力勁
怪しつよみ得たり 曉來 風力の勁つよきを
滿階香雪落梨花
滿階の香雪 梨花に落つ

【語釈】

○春寒…春のまだ浅い頃の寒さ。余寒。○料峭…春風の肌触りの冷たい形容。○窗紗…窓の薄絹のカーテン。○睡起…眠りより起きる。○報衙…役所に出勤する時刻を知らせる。○曉來…明け方から。○香雪…雪の美称。

★ 春寒

春寒しゅんかん

明 楊守陳

二月燕城暖漸迴
二月えんじょう 燕城えんじょう 暖漸かえく迴る
北風吹雪遍樓臺
北風 雪を吹いて 樓台あまねに遍し
春寒畢竟無多日
春寒 畢竟ひつきょう 多日無し
桃李何須怨未開
桃李もち 何ぞ須いん 未だ開ざるを怨むを

【語釈】

○春寒…春のまだ浅い頃の寒さ。余寒。○燕城…河北省の町○漸…次第次第に。

★ 春寒

春寒

明 郊 韶

春寒時節病頭風

春寒の時節 頭風を病む

惆悵年華逝水同

惆悵す 年華の逝くこと水と同じきを

世事總如春夢裏

世事 総て 春夢の裏の如し

雨聲渾在杏花中

雨声 渾て 杏花の中に在り

【語釈】

○春寒…春のまだ浅い頃の寒さ。余寒。○頭風…頭痛。○惆悵…嘆き悲しむ。○年華…年月、月日。若い年頃。○世事…世の中の事。

★ 寒食

寒食

唐 韓 翃

春城無處不飛花

春城 処として 花の飛ばさるは無く

寒食東風御柳斜

寒食 東風 御柳斜めなり

日暮漢宮傳蠟燭

日暮 漢宮 蠟燭を伝え

青煙散入五侯家

青煙 散じて 五侯の家に入る

【語釈】

○寒食…冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○春城…春の町。○御柳…宮城の柳。○漢宮…唐の宮殿を漢にたとえていう。青煙…蠟燭からたつ青い煙。五侯…高官。公侯伯子男爵。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 寒食

寒食

金 侯 冊

交游零落葉辭枝

交游の零落するは 葉の枝を辞す

歲月崢嶸馬注坡

歲月の崢嶸たるは 馬の坡に注す

燕子不來寒食過

燕子来らず 寒食過ぐ

滿城風雨落紅多

滿城の風雨落紅多し

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○交游：交際。○零落：草樹が枯れ落ちる。落ちぶれる。崢嶸：平凡でないこと。○落紅：落花。

★ 寒食

寒食

金 馬定國

燕泥半落烏衣巷

燕泥 半ば落つ 烏衣巷

柳色全添綠綺窗

柳色 全て添う 緑綺の窓

且伴丁香過寒食

且つ丁香に伴い 寒食過ぎ

弄晴蝴蝶一雙雙

晴を弄ぶ蝴蝶 一に雙々

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目と前後、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○烏衣巷：金陵（今の江蘇省南京市の古称。六朝時代には建康と呼ばれた）の秦淮しんわい河がの南にあった町の名。劉禹錫詩、烏衣巷に「舊時王謝堂前燕，飛入尋常百姓家」とある。○緑綺窗：緑の綾絹のカーテンで蔽った窓。○丁香：香木の名。フトモモ科の常緑高樹。実を丁子といい、香料・薬用に用いる。○雙雙：つがいのさま。

★ 寒食

寒食

清 王碧瑩

芳草青青柳放芽
東風搖曳幾枝花
宵燈不丐隣家火
春月如波浸碧紗

芳草 青々 柳芽を放つ
東風 搖曳ようえいす 幾枝の花
宵燈しょうとう 丐こわず 隣家の火
春月 波の如く 碧紗を浸す

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○東風：春風。○揺曳：翻り飛ぶ。○丐：こ。○碧紗：緑色の窓のカーテン。

★ 鄜州遇寒食城外醉吟

ふしゅう

鄜州にて寒食に遇い城外にて醉吟す

唐 韋莊

滿街楊柳綠絲煙
畫出清明二月天
好是隔簾花樹動
女郎撩亂送鞦韆

滿街の楊柳 緑糸の煙
画いき出だす 清明 二月の天
好すし是だれ 簾を隔すてて花樹動き
女郎 撩りょうらん乱らんして 鞦韆しゅうせんを送る

【語釈】

○鄜州：陝西省延安市南部。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○醉吟：酒に酔った状態で詩を作ること。○清明：清明節。二十四節気の一つ。春分のと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○女郎：若い女性。○撩亂：入り乱れる。○鞦韆：ぶらんこ。

★ 襄陽寒食

襄陽の寒食

唐 于鵠

烟水初銷見萬家

煙水初めて銷しやうして 万家を見る

東風吹柳萬條斜

東風柳を吹いて 万條まんじやう 斜めなり

大堤欲上誰相伴

大堤に上らんと欲して 誰を相い伴わん

馬踏春泥半是花

馬 春泥しゆんていを踏まば 半ば 是れ花

【語釈】

○襄陽：湖北省襄陽市。○烟水：水上の靄。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○東風：春風。○萬條：数多くの柳の枝。○春泥：春のぬかるみ。

★ 寒食山中

寒食山中

明 謝肇淪

白雲流水淨含沙

白雲 流水 沙さを含みて淨きよし

傍水斜陽三兩家

水そに傍う斜陽 三兩家

一夜山中寒食雨

一夜 山中 寒食の雨

杜鵑啼落刺桐花

杜鵑とけん 啼き落とす 刺桐しどうの花

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○杜鵑：ホトトギス。○刺桐：樹木の名。桐に似て、とげがある。

★寒食夜

寒食の夜

唐 韓偓

側側輕寒翦翦風

側々たる輕寒 翦々たる風

杏花飄雪小桃紅

杏花は雪を飄えし 小桃は紅なり

夜深斜搭鞦韆索

夜深くして斜搭 鞦韆の索

樓閣朦朧煙雨中

樓閣 朦朧として 煙雨の中

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○側側：寒く冷ややかなさま。○輕寒：薄ら寒さ。○翦翦：風の薄ら寒いさま。○鞦韆：ブランコ。○朦朧：ぼんやりとしているさま。○煙雨：きりさめ。

★寒食夜

寒食の夜

宋 蘇軾

漏聲透入碧窗紗

漏声 透りて入る 碧窓紗

人靜鞦韆影半斜

人静かにして 鞦韆 影 半ば斜めなり

沈麝不燒金鴨冷

沈麝 焼かず 金鴨 冷かなり

淡雲籠月照梨花

淡雲 月を籠めて 梨花を照らす

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○漏聲：水時計の音。○窗紗：薄絹の窓のカーテン。○鞦韆：ぶらんこ。○沈麝：沈香、乱麝、共に香木。○金鴨：金の香炉。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 清明前一日雨中作

清明前一日 雨中の作

元 劉 渙

小窗新緑著枝輕

小窓の新緑枝に著いて輕し

寒逐東風陣陣生

寒は東風を逐いて陣々として生ず

燕子不來花落盡

燕子來たらず花落ち尽き

一簾疏雨又清明

一簾の疏雨又清明

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○東風：春風。○陣陣：とぎれとぎれに続くさま。○燕子：燕。

★ 清明

清明

唐 杜 牧

清明時節雨紛紛

清明の時節雨紛々

路上行人欲斷魂

路上の行人魂を断たんと欲す

借問酒家何處有

借問す酒家 何れの処にか有る

牧童遙指杏花村

牧童遙かに指さす 杏花の村

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○雨紛紛：こぬか雨が降りしきる様子。○行人：旅人。杜牧を指す。○欲斷魂：気が滅入ってしまう。○借問：試しに尋ねてみることに。

★清明

清明

宋 王禹偁〔魏野〕

無花無酒過清明

花無く酒無く清明を過ぐす

興味都來似野僧

興味 都すべて來たりて野僧に似たり

昨夜鄰家乞新火

昨夜 鄰家 新火を乞う

曉窗分與讀書燈

曉窓より分与す 讀書の灯

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○野僧：田舎の僧。○新火：寒食が終わった後の新しい火。

★清明

清明

明 瞿佑

經年躑躅在京華

年へを経て躑躅せうとつして京華に在り

又見東風禦柳斜

又た見る 東風 御柳の斜めなるを

客裏不甘佳節過

客裏かくり 甘んぜず 佳節の過ぎるを

借人亭館看梨花

人ていかんの亭館を借りて 梨花を見る

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○躑躅：足場を失うさま。○京華：都。○東風：春風。○御柳：宮城の柳。○客裏：旅の中、異郷。○佳節：ここでは清明節。

★ 清明日次弋陽

清明の日 弋陽よくよう やどに次る

唐 權徳輿

自歎清明在遠郷

みずか 自ら歎く 清明に 遠郷みづかに在るを

桐花覆水葛溪長

桐花 水を覆い 葛溪かつけい長し

家人定是持新火

家人 定めて是れ 新火を持ち

點作孤燈照洞房

転じて孤灯なと作し 洞房を照らしならん

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○弋陽：江西省上饒市弋陽縣。○次：宿泊する、留まる（多くは舟）。○葛溪：溪の名称。○定是：きつと。○新火：寒食が終わった後で新たに起こした火。○洞房：婦人の寢室。

★ 清明感傷

清明の感傷

宋 戴復古

客中今日最傷心

かくちゆう 客中 今日 最も心を傷ましむ

憶著家山松樹林

おくちやく 憶著 家山の松樹の林

白石岡頭聞杜宇

はくせきこうとう 白石岡頭 杜宇とうを聞き

對他人墓亦沾巾

他人の墓まに対して 亦 巾きんを沾うるおおす

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○客中：旅の途中。○憶著：憶う。着は助詞で動詞の後におき、動作の進行や完成をあらわす。○白石岡：白い石の岡。固有名詞？○頭：ほとり。○杜宇：ホトトギス。故郷に帰れと鳴く。○巾：ハンカチ。

★ 清明日舟次吳門

清明の日舟 吳門に次る

宋 方岳

篷窗恰受夕陽明

篷窓 恰も 夕陽を受けて 明かなり

楊柳梨花半月程

楊柳 梨花 半月の程

老去不知寒食近

老去りて知らず 寒食の近きを

一篙烟水載春行

一篙の煙水 春を載せて行く

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○次：宿泊する、留まる（多くは舟）。○吳門：甘肅省甘谷県。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○一篙：一棹ほどの深さ。○烟水：靄を含んだ水。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 清明日偶成

清明の日 偶成

明 袁宗

窗下脩書寄遠人

窓下 書を脩めて 遠人に寄す

燕泥時復浣衣巾

燕泥 時に復た 衣巾を浣す

東風催下清明雨

東風 催下す 清明の雨

鶯老花殘又一春

鶯老い 花は残り 又一春

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○燕泥：燕が巢作りの為に銜えて運ぶ泥。○衣巾：衣とハンカチ。○東風：春風。○催下：うながすように下す。

★ 清明山遊

清明山に遊ぶ

清 畢海珖

路折村橋一徑賒

路折れて村橋一徑を賒すあま

綠楊烟外酒帘斜

綠楊煙外酒帘斜しゅれんめなり

暖風細雨催寒食

暖風細雨寒食を催しうなが

開遍青山郁李花

開遍かいへんす青山郁李花いくりか

【語釈】

○清明：清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○煙外：靄の外。○酒帘：酒屋の目印の旗。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○開遍：遍く開かせる。○郁李花：かぐわしい杏の花。

★ 雒口清明

雒口の清明らくしゅう

清 王士禛

楊柳依依碧映沙

楊柳 依々として 碧沙に映へきず

每逢佳節惜年華

佳節かせつに逢う毎に 年華ねんかを惜しむ

好春欲暮無人見

好春 暮んと欲して 人の見る無く

閑看東風落杏花

閑かに看る 東風の 杏花を落とすを

【語釈】

○雒口：地名、不祥。○依依：細くなよなよしているさま。○佳節：吉日。○佳節：年月、月日。○東風：春風。

★ 上巳

上巳じょうし

宋 楊萬里

正是春光最盛時
 桃花枝映李花枝
 鞦韆日暮人歸盡
 只有春風弄彩旗

正に是れ 春光 最も盛んなる時
 桃花の枝は 李花の枝に映ず
 鞦韆 日暮くれて 人帰り尽き
 只だ 春風の 彩旗を弄する有り

【語釈】

○上巳：旧暦三月三日。この日、流水の畔でみそぎをして、一年の厄を払う習慣があった。○鞦韆：ブランコ。○彩旗：彩られた旗。美しい旗。

★ 上巳看花

上巳じょうしに花を見る

明 楊基

東湖東畔柳枝長
 滿苑飛花亂夕陽
 何處祓除兒女散
 過來流水鬱金香

東湖東畔 柳枝長し
 滿苑の飛花 夕陽に乱る
 何れの処か 祓除 兒女散じ
 過ぎ来る流水 鬱金香

【語釈】

○上巳：旧暦三月三日。この日、流水の畔でみそぎをして、一年の厄を払う習慣があった。○飛花：飛ぶ柳絮。○祓除：汚れを祓い除く。○鬱金：香草の一種。

★春日

春日

宋 晁冲之

陰陰溪曲綠交加
小雨翻萍上淺沙
鵝鴨不知春去盡
爭隨流水趁桃花

陰々たる溪曲緑交加す
小雨 萍を翻して淺沙に上らす
鵞鴨は知らず春の去り尽くすを
争いて流水に随つて桃花を趁う

【語釈】

○陰陰…木が茂つて暗いさま。○溪曲…谷のくま。○交加…入り交じる。○萍…うきくさ。○淺沙…浅い砂浜。○鵞鴨…あひるとカモメ。○趁…追いかける。

★春日

春日

宋 蘇軾

鳴鳩乳燕寂無聲
日射西窗潑眼明
午醉醒來無一事
只將春睡賞春晴

鳴鳩 乳燕 寂として声無し
日は西窓を射して眼に澆ぎて明らかなり
午酔より醒め来りて 一事無し
只だ春睡を將つて春晴を賞す

【語釈】

○鳴鳩…いかるが。鳩の一種。○乳燕…燕のひな。○午酔…昼に酒を飲んで酔うこと。○西窗…寢室の窓。○潑…そそぐ。○春睡…春のうたたね。

★春日

春日

宋 呂祖謙

短短菰蒲綠未齊

短々たる菰蒲こばく綠未だ齊ひとしからず

汀州水暖雁行低

汀州ていしゅう水暖かにして雁行低し

柳陰小艇無人管

柳陰の小艇 人の管する無く

自送流花下別溪

自おのずから流花を送りて別溪を下る

【語釈】菰蒲

○短短…短いさま。○菰蒲…マコモとガマ。○汀州…中州。なぎさと中州。○管…つかさどる。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★春日

春日

宋 張栻

花柳芳州十日晴

花柳 芳州 十日の晴

五更風雨送殘春

五更の風雨 殘春を送る

莫嫌紅紫都吹盡

嫌う莫かれ紅紫すべの都て吹き尽くすを

新綠滿園還可人

新綠 滿園 還また人に可なり

【語釈】

○花柳…赤い花と緑の柳。紅花緑柳。○芳州…美しい花の咲いている中州。○五更…午前四時頃。○紅紫…色とりどりの花。

★春日

春日

宋 僧法具

焼燈過了客思家

焼灯 過了かりようして 客 家かくを思おもう

獨立衡門數暝鴉

独ひとりり 衡門こうもんに立たちて 暝鴉めいあを数かずう

燕子未來梅落盡

燕えんし子 未なだ来きらざるに 梅 落おち尽つくし

小窓明月属梨花

小窓の明月 梨花しよくに属ぞくす

【語釈】

○焼燈：灯火。○衡門：木を横たえて作った粗末な門。隱者の家、又はその門。○暝鴉：夜の烏（の声）。○梅：梅花。○属：ちようどくにあたる。今ちようどそのときである。

★春日

春日

金 劉 鐸

翠微深處幾人家

翠微すいび 深ふかき処 幾 人 家

風颺輕烟雨壓沙

風は輕煙を颺あげ 雨は沙すなを压おす

寒勒野桃開較晚

寒は野桃を勒ろくして 開ひくこと較やや晚おそし

向陽纔有兩三花

陽ひに向むかって纔わずかに有あり 兩三花

【語釈】

○翠微：薄緑色のもや。○輕烟：軽やかな霞。○勒：制御する。

★ 春日偶成

春日偶成

明 樊 阜

硯池香沁墨雲乾

硯池けんちの香しつ沁しつして墨雲ぼくうん乾かんく

酒醒無情懶著冠

酒醒しゆせいむるも情無じやうむく冠かんを著ちやくくるに懶もろうし

燕子歸遲春欲盡

燕子えんし歸かへりること遅おそく春はる尽つきんと欲ほつし

落花吹雨小樓寒

落花らくわ雨あめを吹ふいて小樓せうろう寒さむし

【語釈】

○硯池：硯の墨が溜まる凹部、ここでは、そこに溜まった墨汁。○沁：紙にしみこむ。○墨雲：詩を書いた墨の痕。○燕子：つばめ。

★ 春日雜興

春日雜興

宋 釋道潛

雨闌中庭暖日浮

雨闌うげつの中庭ちゆうてい暖日だんじつ浮うかぶ

春禽百種聚喧啾

春禽しゆんきん百種ひやくしゆ聚あつりて喧啾けんしゆう

粉腰蜂子尤無頼

粉腰ふんようの蜂子ほうし尤なほも無頼ぶらい

撓遍花鬚未肯休

花鬚かびんを撓遍ぎやうへんして未だ肯きんえて休やすせず

【語釈】

○雨闌：雨でしまった門。○喧啾：鳴き声が騒がしいさま。○蜂子：蜂。○無頼：無頼漢。○撓遍：あまねく繞る。

★ 絶句

絶句

宋 王 雱

一雙燕子語簾前
病客無慘盡日眠
開遍杏花人不見
滿庭輕雨綠如煙

一雙の燕子 簾前に語る
病客 無慘 尽日眠る
遍く杏花を開きて 人見ず
満庭の軽雨 緑煙の如し

【語釈】

○一雙：ひとつがい。○簾前：簾の前。○病客：病気の旅人。○無慘：気分がさわやかでないさま。○盡日：一日中。

★ 絶句

絶句

宋 吳 濤

遊子春衫已試單
桃花飛盡野梅酸
怪來一夜蛙聲歇
又作東風十日寒

遊子 春衫 已に單を試む
桃花 飛び尽くし 野梅 酸なり
怪しみ来たる 一夜 蛙声の歇むを
又た作す 東風 十日の寒

【語釈】

○遊子：旅人。○春衫：春の着物。○單：薄着。○怪來：怪しむ、來は助字。○東風…：春風。

★ 春景

春景

元 劉 因

病餘身世淡無情

病余の身世淡の情無し

但覺春來暖漸生

但だ覺ゆ 春來たりて 暖漸く生ずるを

送客出門花已謝

客を送りて 門を出れば 花已に謝す

問知昨日是清明

問いて知る 昨日是れ清明

【語釈】

○病余…病氣あがり。○身世…この世とこの身。○謝…散り去る。終わる。○清明…清明節、二十四節氣の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。

★ 春曉偶成

春曉偶成

明 金 涓

清晨睡起覺衣單

清晨に睡起し 衣單を覺ゆ

亭館東風怕倚欄

亭館の東風 欄に倚りて 怕なり

一夜好春吹作恨

一夜好春 吹いて 恨を作す

梨花寂寞雨鳩寒

梨花 寂寞として 雨鳩 寒し

【語釈】

○清晨…清い曙。○衣單…薄い着物。○東風…春風。○怕…しずか。恐れる。○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。○雨鳩…雨の中で鳴く鳩。

★春晝

春昼

明居節

泥香江暖燕來時
泥香り江あたたか暖にして燕來たる時
紅白花深桃李枝
紅白花は深し桃李の枝
草色一簾門半掩
草色一簾門半ば掩とざし
臥看雙蝶趁遊絲
臥して看る 雙蝶の遊糸を趁おうを

【語釈】

○双蝶…つがいの蝶。○遊絲…ゆらゆらする蜘蛛の糸。○趁…追いかける。

★春日漫興

春日漫興しゅんじつまんきやう

明薛蕙

草芽半吐參差碧
草芽半ば吐はき參差しんしの碧みどり
花蕊初開淺淡紅
花蕊かずい初めて開きて淺淡せんたんの紅
安得黃金高北斗
安いづくんぞ得ん黃金の北斗より高きを
盡輸青帝買東風
青帝じんゆに尽輸して東風を買わん

【語釈】

○漫興…なんとなく催した感興。○吐…現れる。○參差…疎らに散らばっているさま。○花蕊…花のしん。○青帝…五天帝の一つ、春を司る。○盡輸…贈る、盡は前置詞で、し尽くすの意。○東風…春風。

★ 春日雜詩

春日雜詩

清 袁 枚

千枝紅雨萬重煙
 千枝の紅雨 万重の煙

畫出詩人得意天
 画き出す詩人得意の天

山上春雲如我懶
 山上の春雲 我が懶の如く

日高猶宿翠微巔
 日高くして猶お宿す翠微の巔

【語釈】

○雜詩：今日のおもむくままに作った形にとらわれない詩。○紅雨：紅色の花が落ちるさまのたとえ。煙：もや。○懶：朝寝坊。○翠微巔：山の八合目あたり。碧色の山気のただよう山の頂。

(参考文献) 『漢詩大系』第22卷

★ 春夜

春夜

宋 蘇 軾

春宵一刻值千金
 春宵 一刻 值千金

花有清香月有陰
 花に清香有り 月に陰有り

歌管樓臺聲細細
 歌管 樓台 声 細々

鞦韆院落夜沈沈
 鞦韆 院落 夜 沈々

【語釈】

○歌管：歌声と管弦の音。○細細：か細いさま。○鞦韆：ぶらんこ。○院落：中庭。○沈沈：夜が静かにふけていくさま。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★ 春夜

春夜

宋 王安石

金爐香盡漏聲殘

金爐香尽きて漏声残すざん

翦翦輕風陣陣寒

翦々たる輕風陣々として寒しせんせん

春色惱人眠不得

春色 人を悩ませて 眠り得ず

月移花影上欄干

月は花影を移して 欄干に上らしむのぼ

【語釈】

○金爐：金屬製の炉の美称。○漏聲：水時計の音。○殘：崩れる。消えて行く。○翦せん：そよそよとしたさま。○陣陣：ときれときれに続くさま。○春色：春景色。春の様子。

(参考文献)

『漢詩鑑賞辞典』

★ 春夜

春夜

宋 僧斯植

玉樓臺畔柳生煙

玉樓台畔柳煙を生ずぎよくろうだいはん

况是春風杜宇天

况いわんやはれ 春風 杜宇の天なるをや

一片月光涼似水

一片の月光涼水の似しごと

半扶花影上鞦韆

半ばは花影を扶けて 鞦韆に上らしむたす

【語釈】

○玉樓臺：玉で飾った楼台。○煙：もや。霞。○杜宇天：ホトトギスが無き躑躅（杜鵑花）が咲く頃の爽やかな空。○鞦韆：ブランコ。

★ 春夜

春夜

宋 王同祖

迢迢清夜静無譁

迢々たる清夜静にして譁か無く

月色千門噪亂鴉

月色 江城 乱鴉 噪さわぐ

醒酒忽驚寒轍骨

酒醒めて忽ち驚く寒の骨に徹するを

不知殘雪在梅花

知らず 残雪の 梅花に在るを

【語釈】

○迢迢…遙かなさま。遠いさま。○譁…喧しいこと。○江城…江辺の街。

★ 春夜

春夜

明 丘吉

銀瓶澆茗漱春醒

銀瓶ぎんべいは茗めいを澆そそぎ 春は醒ていを漱すすぐ

倚遍彫闌睡未成

遍あまねく 彫闌ちようらんに倚りて 睡ねむり 未だ成らず

燈火誰家庭院裏

灯火 誰が家の庭院うちの裏

櫻桃花下尚吹笙

桜桃花下 尚お笙おうとうかかを吹く

【語釈】

○銀瓶…銀でできた瓶。○茗…茶。○醒…酒に酔った状態。○彫闌…彫刻のある欄干。○庭院…やしき。門、塀の中の空き地。

★ 晩春

晩春

宋 張耒

睡足高簷春日斜

ねむり 睡足りて 高簷 春日斜なり

碾聲初破小龍茶

てんせい 碾声 初めて破る 小龍茶

樓邊綠樹飛紅盡

桜辺の緑樹 飛紅尽き

春色牆陰老齊花

春色 牆陰 齊花老ゆ

【語釈】

○高簷…高い簷。○碾聲…挽き臼の音。○小龍茶…茶の銘柄？○飛紅…落花。○春色…春景色、春の気配。○牆陰…垣根の影。○齊花…なずなの花。

★ 晩春

晩春

宋 謝逸

門前楊柳暗沙汀

門前の楊柳 沙汀に暗し

雨濕東風未放晴

雨 湿りて 東風 未だ晴を放たず

點點落花春事晚

点々たる落花 春事晚れ

青青芳草暮愁生

青々たる芳草 暮愁生ず

【語釈】

○沙汀…水辺の砂浜。○東風…春風。○春事…春の農作業。春の楽しいこと。○暮愁…夕方の愁。

★ 晩春

晩春

宋 戴復古

池塘渴雨蛙聲少

池塘 雨に渴かわきて 蛙声けいせい少なり

庭院無人燕語長

庭院 人無く 燕語えんご長し

午枕不成春草夢

午枕ごちん 成らず 春草の夢

落花風靜煮茶香

落花 風靜かにして 煮茶しやちやの香かおり

【語釈】

○池塘…池。○庭院…門、塀の中の空き地。○午枕…昼寝。

★ 春暮

春暮

宋 方岳

卷中未有好詩看

卷中かんちゆう 未だ 好詩を看る 有らず

草滿池塘夢已闌

草は池塘に満ち 夢 已たけなわに 闌 なり

客又不來春又暮

客かく 又た来らず 春 又た暮る

一簾新雨杏花殘

一簾の新雨 杏花ざん 残す

【語釈】

○卷中…書物の中。池塘…池の土手。○殘…散り落ちる。損なわれる。

★ 春晚

春晚

宋 范成大

夕陽槐影上簾鉤

夕陽の槐影 簾鉤に上る

一枕清風夢昔遊

一枕の清風 昔遊を夢む

夢見錢塘春盡處

夢に見る 錢塘 春 尽くる処

碧桃花謝水西流

碧桃 花 謝して 水西に流る

【語釈】

○槐影：えんじゆの木の影。○簾鉤：簾を掛ける鉤。○錢塘：浙江省杭州市にあった
県。○花謝：はなが散り終わる。

★ 春晚

春晚

宋 范成大

寂寥春事冷於秋

寂寥たる春事 秋よりも冷かなり

雨打風吹斷送休

雨打ち 風吹きて 断送し休す

點檢梨花成一夢

点検すれば 梨花 一夢と成る

蘸紅新緑滿枝頭

蘸紅 新緑 枝頭に満つ

【語釈】

○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○春事：春の楽しいこと。○断送：すて送
る。うちやる。○蘸紅：水に浸したような紅。

★ 春晚

春晚

宋 方岳

青梅如豆带烟垂
紫蕨成拳著雨肥
只有小橋楊柳外
杏花未肯放春歸

青梅 豆の如く煙を帯びて垂る
紫蕨 拳しびけんを成して 雨に著つきて肥こえたり
只だ 小橋 楊柳の外ほかに有り
杏花 未だ肯えて 春を放ちて帰らず

【語釈】

○烟：霞、靄。○紫蕨：わらび。

★ 春晚

春晚

宋 僧道潜

曉風池沼水瀾翻
春盡淮南麥秀寒
院落無人日亭午
柳花如雪滿闌干

曉風 池沼 水 瀾翻ちしやうらんほん
春 盡 淮 南 麥 秀 寒 しわいなん
院 落 人 無 く 日 亭 午いんらくていご
柳 花 雪 の 如 く 闌 干 に 満 つ

【語釈】

○瀾翻：水や波が翻るさま。○淮南：安徽省淮南市。○麥秀：麦が良く生長し、まだ実らない状態。○麥秀：延びた麦。○院落：門や塀で囲った屋敷の中の中庭。○亭午：正午。○柳花：柳絮。

★暮春

暮春

元 貢性之

吳娃二八正嬌容

吳娃ごあい二八にはち正きょうように嬌容

鬥草尋花趁暖風

草と鬥たたかい花を尋ねて暖風を趁おう

日暮歸來春困重

日暮れて歸り来れば春困しゅんこん重し

鞦韆間在月明中

鞦韆しゅうせん閑かに月明うちの中に在り

【語釈】

○吳娃…呉の地方の美女。吳姫。○二八…十六歳。○嬌容…美しい容姿。○鬥草…草花を採る。○趁…おいかける。後に付いていく。○春困…春の日のけだるさ。○鞦韆…ふらんこ。

★暮春

暮春

元 貢性之

惜花公子愛春晴

花を惜しむ公子 春晴しゅんせいを愛す

駿馬驕嘶曉出城

駿馬しゅんめ驕嘶きょうせいして曉に城を出ず

半醉歸來人共看

半ば酔いて歸り来たれば 人共に看る

笑將金彈打流鶯

笑って金彈もを將もって流鶯りゅうおうを打つ

【語釈】

○公子…諸侯の諸子。○驕嘶…おごり高ぶって嘶く。○金彈…黄金の弾。○流鶯…飛んでいる鶯。

★暮春

暮春

元 趙 雍

緑陰庭院碧窗紗

緑陰の庭院 碧窓の紗

半卷珠簾映晚霞

半ば珠簾しゆれんを卷けば 晚霞ぼんかに映ず

芳草萋萋春寂寂

芳草萋々せいせい 春寂々せきせき

東風吹墮落殘花

東風吹き墮おとす 落殘らくざんの花

【語釈】

○庭院：やしき。門や塀の中の空き地。○碧窗紗：緑色の窓のカーテン。○珠簾：珠すだれ。○晚霞：夕焼け。○萋萋：草が盛んに茂っているさま。○寂寂：寂しく静かなさま。○東風：春風。○落殘：散り残り。

★暮春

暮春

清 尤翼宗

江城春色暮萋萋

江城の春色 暮せいせいに萋々

畫閣春風鳥亂啼

画閣がかく 春風鳥 乱れ啼く

幾片殘紅留不得

幾片の殘紅ざんこう 留まるを得ず

又隨流水過橋西

又た流水きようせいに随って 橋西きようせいを過ぐ

【語釈】

○江城：川辺の町。○春色：春景色。春の気配。○萋萋：草が盛んに生い茂っているさま。○畫閣：絵で彩られた楼閣。○殘紅：散り残りの赤い花。

★ 暮春即事

暮春即事

宋 楊萬里

花時追賞夜將朝
花過遲眠日儘高
又與山禽爭口腹
執竿挾彈守櫻桃

花時追賞すれば夜將に朝ならんとす
花過ぎて遅眠すれば日已に高し
又た山禽と口腹を争い
竿を執つて弾を挾み櫻桃を守らん

【語釈】

○花時：花の咲く時節。○追賞：賞を追い求めること。○遅眠：遅く寝る。○山禽：山に棲む鳥。○口腹：飲食。

★ 暮春雜興

暮春雜興

宋 葛起耕

燕子聲中日正長
讀殘書卷亂堆牀
夢回却愛西窗寂
閑看松花帶夕陽

燕子聲中日正に長し
讀殘の書卷 乱れて牀に堆し
夢 回りて 却つて 愛す 西窓の寂なるを
閑に看る 松花の夕陽を帶ぶを

【語釈】

○讀殘：読み残し。○書卷：書物。○夢回：夢から覚め来たる。○西窓：寢室の窓。○寂：静か。

★ 晩春即事

晩春即事

宋 高翥

輕煙終日鎖樓臺

輕煙けいえん終日樓台を鎖ざす

細雨絲絲半濕苔

細雨しじゆ糸々として半ば苔を湿らす

杜宇一聲青嶂外

杜宇とつ一聲青嶂の外

谿流時送落花來

谿流けいりゆう時に落花を送りて来る

○即事…事にふれて、その場に應じて詩を作ること。○輕煙…軽やかな靄、霞。○細雨…小雨。○絲絲…細いさま。微弱なさま。○杜宇…ホトトギス。○青嶂…屏風のよ
うな青山。

★ 暮春即事

暮春即事

宋 曹翺

門外無人問落花

門外人無く落花を問う

綠陰冉冉遍天涯

綠陰ぜんぜん冉冉あまね天涯に遍し

林鶯啼到無聲處

林鶯りんおう啼きて無声に到る處

春草池塘獨聽蛙

春草の池塘ひと独り蛙を聴く

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に應じて詩を作ること。○冉冉…次第に進み行くさま。
むくむくと動くさま。○天涯…天の果て。ごく遠いところ。○池塘…池の土手。

★ 暮春雜興

暮春雜興

元 善住

雨入孤城草木新
香紅半逐馬蹄塵
卻憐杜宇無情甚
不解迎春祇送春

雨は孤城に入りて 草木新なり
香紅は半ば 馬蹄の塵を逐う
却つて憐れむ 杜宇の無情の 甚しきを
春を迎うを解せず 祇だ春を送る

【語釈】

○孤城…ぼつんとある街。○香紅…花。○逐…追いかける。○杜宇…ホトトギス。○無情…心情がない。○祇…ただりだけである。

★ 暮春雜興

暮春雜興

元 善住

紅藥花開春欲歸
綠楊陰暗燕爭飛
晚來一陣東風雨
又送餘寒上客衣

紅藥 花開きて 春帰らんと欲す
綠楊 陰暗くして 燕争いて飛ぶ
晚來 一陣 東風の雨
又た 余寒を送りて 客衣に上る

【語釈】

○紅藥…芍薬。○晚來…日暮れ時、來は助字。○東風…春風。○餘寒…春先の寒さ。○客衣…旅の衣。

★暮春吟

暮春吟

宋 邵雍

林下居常睡起遲
那堪車馬近來稀
春深晝永簾垂地
庭院無風花自飛

林下の居きよ常に睡起すいき遅し
那なんぞ堪えん 車馬の近きたく来ること稀なるに
春深く 昼永く 簾すだれ地に垂る
庭院風無く花 自おのずから飛ぶ

○睡起：睡りから醒めること。○庭院：やしき、門や塀の内側の空地。

★絶句

絶句

明 蘇 濂

新筍抽林與屋齊
亂紅飛過畫欄西
流鶯不管春來去
坐向綠陰深處啼

新筍 林を抽ぬきて屋と齊ひとし
乱紅 飛び過ぐ 画欄がらんの西
流鶯は管せず 春の来りて去るに
坐して 緑陰深き処おに向いて啼く

【語釈】

○亂紅：乱れ飛ぶ赤い花。○画欄：彩られた欄干。○流鶯：ウグイス。○不管：関わりない。意に介しない。

★春感

春感

明 潘 高

江水悠悠泛畫橈

江水 悠悠ゆうゆう 画橈がとうを泛うかぶ

東風何處不魂銷

東風 何れの処しよごんか 魂銷しよごんせざる

春歸萬里無消息

春歸しゆんきり 万里 消息無し

又過垂楊舊板橋

又た過きゆうぐ 垂楊しゆうようの 旧板橋きゆうばんきよう

【語釈】

○悠悠…ゆったりしたさま。○畫橈…画船、いろどられた船。○東風…春風。○魂銷…魂が消える。○春歸…春が過ぎ去る。○消息…音信。便り。○板橋…木で作った橋。

★春殘

春殘る

清 張 藻

斐几熏爐百衲琴

ひき くんろ びやくのうきん
斐几 熏爐 百衲琴

綠陰門巷晝沈沈

綠陰もんこうの門巷 晝 沈々

春來小苑無人掃

しゆんらい
春來 小苑 人の掃はらう無く

花落窓前一寸深

花落ちて 窓前 一寸の深しん

【語釈】

○斐几…かやの木で作った机。○熏爐…香を焚く炉。○百衲琴…桐を膠で繋いで作った琴。○門巷…家の門とちまた。○沈々…静寂なさま。○春來…春のうち、來は助字。

★送春

春を送る

唐 羅 鄴

欲別東風剩黯然
亦知春去有明年
世間爭那人先老
更對殘花一醉眠

東風に別れんと欲して 剩あまつさえ 黯あん然ぜんたり
亦また知る 春去りて 明年有るを
世間 争いかんせん 人先に老ゆるを
更に 残花に対して 一醉眠る

【語釈】

○東風…春風。○剩…あまつさえ。○黯然…気が晴れないさま。○世間…世の中。○争那…どうしようか。どうしようもない。○殘花…散り残りの花。

惜春

春を惜しむ

元 黄 庚

新緑園林雨過時
黃鸝無語恨春歸
楊花怕逐東風去
搭住欄干不肯飛

新緑の園林 雨過ぐる時
黃鸝こうり 語無く春の帰るを恨む
楊花 東風を逐おいて去ることを怕おそれ
欄干とつじゆうに搭住して 肯えて飛ばず

【語釈】

○黃鸝…高麗ウグイス。○春歸…春が過ぎ去る。○楊花…柳絮。○逐…追う。従う。
○搭住…懸かり留まる。

★ 三月盡日

三月尽日 じんじつ

唐 李昌符

江頭從此管弦稀
散盡遊人獨未歸
落日已將春色去
殘花應逐夜風飛

江頭 此れ従り 管弦 稀なり
遊人 散じ尽くして 独り未だ帰らず
落日 已に春色を將つて去り
殘花 応に夜風を逐いて飛ぶべし

【語釈】

○盡日：月の終わりの日。○江頭：川のほとり。○遊人：遊び楽しむ人。○遊人：春景色、春の気配。○殘花：散り残りの花。○應：「まさにくすべし」と読み、この場合推量（きつとくに違いない）を示す。○逐：追う、従う。

★ 憶春

春を憶う おも

元 馬 臻

斷畦零落薺花明
雨過平湖水漸生
坐久忽思春去遠
綠陰濃淡隱啼鶯

斷畦 零落して 薺花 明なり
雨は平湖を過ぎ 水 漸く生ず
坐すこと久しくて 忽ち 春去の遠きを思う
綠陰 濃淡 啼鶯を隠す

【語釈】

○斷畦：切り立ったあぜ。○零落：草樹が枯れ落ちること。落ちぶれること。○薺花：なずなの花。○平湖：平らな湖。○春去：春が過ぎ去ること。○啼鶯：鳴いている鶯。

★ 立夏日作

立夏の日の作

宋 謝邁

小簾含風六尺牀

小簾 風を含む 六尺の牀

竹奴從此合專房

竹奴 此こ従り 房を専らにせしむ

吾身瓠落都無用

吾が身 瓠落 都て無用

占得山間一味涼

占め得たり 山間 一味の涼

【語釈】

○簾：竹で編んだ筵。○竹奴：涼を取るために牀席に置く竹籠、竹夫人、竹姫。○合：「まさにくせしむべし」と読み、「そうあるべき、そうあるはずだ。」と訳す。○瓠落：浅く平らで物を入れられないさま。入り用のものなど全くないこと。

★ 初夏

初夏

宋 司馬光

四月清和雨乍晴

四月 清和 雨 乍ち晴れ

南山當戶轉分明

南山 戸に当って 転た分明

更無柳絮隨風起

更に 柳絮の 風に因って起る無く

惟有葵花向日傾

惟だ 葵花の日に向って傾く 有るのみ

【語釈】

○清和：天候の調子がとれて爽やかなこと。○當戸：部屋の入り口のすぐ間近な処まで。○葵花：ひまわり。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★初夏

初夏

宋 曾鞏

雨過横塘水滿堤

雨は横塘を過ぎて 水は堤に満つ

亂山高下路東西

乱山高下 路の東西

一番桃李花開後

一番の桃李 花開く後

惟有青青草色齊

惟だ 青々 草色の 斉しき有るのみ

【語釈】

○横塘…江蘇省南京市の西南にある堤。

(参考文献) 『和漢名詩選類評釈』

初夏

初夏

明 謝五娘

啼鳥聲中午夢回

啼鳥 声中 午夢 回

篆香重撥已成灰

篆香 重ねて 撥て 己に 灰と 成る

東風似恨春歸去

東風 春の 帰るを 恨むに 似て

吹送楊花入戸來

楊花を 吹き送り 戸に入りて 來る

【語釈】

○夢回…夢が覚める。○篆香…香の一種。○東風…春風。○楊花…柳絮。

★初夏

初夏

明 謝五娘

庭院薰風枕簟清
海榴初發雨初晴
香銷夢斷人無那
聽得新蟬第一聲

庭院の薰風 枕ちんてん簟清し
海榴かいりゅう初めて発ひらき 雨初めて晴る
香き銷え 夢絶えて人 那いかんともする無し
聴き得たり 新蟬の第一声

【語釈】

○庭院：やしき、門や塀の内側の空地。○枕簟：枕とたかむしろ。寝具。○海榴：ざくろ、石榴。○無那：どうしようもない。

★初夏即事

初夏即事

宋 王安石

石梁茅屋有彎碕
流水濺濺度兩陂
晴日暖風生麥氣
綠陰幽草勝花時

石梁せきりょう 茅屋ぼうおく 彎碕わんきあり
流水せんせん 濺々として 兩陂りょうひを渡る
晴日 暖風 麥氣ばくきを生じ
綠陰 幽草 花時かじに勝れり

【語釈】

○石梁：石橋。○茅屋：茅葺きの家。○彎碕：曲がった岸。○濺濺：水が勢いよく流れるさま。○兩陂：兩岸の土手。○麥氣：麦の穂を渡る風の香り。麦の伸びる陰曆四月頃の氣候。○花時：花が咲き誇る頃。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★早夏

早夏

宋 陳造

安石榴花猩血鮮

あんせきりゆうか しょうけつ
安石榴花 猩血鮮なり

涼荷高葉碧田田

りょうか たんたん
涼荷 高葉碧 田々

鱒魚入市河豚罷

じぎよ
鱒魚 市に入りて 河豚 罷む

已破江南打麥天

だばく
已に破る 江南 打麥の天

【語釈】○安石榴：ザクロの一種。○猩血：真っ赤な色。○涼荷：涼しい蓮の葉。○田田：蓮など水草がの広い葉が水に浮かんでいるさま。○鱒魚：このしろ。○河豚：ふぐ。○打麥：麦を刈り入れる。麦を打つ。

★山居首夏

山居の首夏

元 李 祁

東風滿意綠週遭

しゅうそう
東風 滿意綠 週遭

乍著單衣脫敝袍

たちま たんい ちやく へいぼう
乍 單衣を着し 敝袍を脱す

最愛晚涼新浴罷

ばんりょう
最も愛す 晚涼 新たに浴を罷めて

坐看春筍過林高

しゅんじゅん
坐して看る 春筍の林を過ぎて高きを

【語釈】

○首夏：夏の初め、初夏、孟夏。○東風：春風。○週遭：あたり一面。○滿意：意に満ちる。心から満足する。○単衣：ひとえの着物。○敝袍：破れどてら。○春筍：春の筍

★ 即事

即事

元 趙孟頫

湘簾疎織浪紋稀

湘簾しょうれん 疎まばらに織りて 浪紋ろうもん 稀まれなり

白苧新裁暑氣微

白苧はくちよ 新たに裁えて 暑氣び 微びなり

庭院日長賓客退

庭院 日長くして 賓客ひんかく 退かえり

繞池芳草燕交飛

池を繞る芳草 燕交飛す

【語釈】

○即事…事に触れて、その場のことを題材にして詩を作る。○湘簾…湘妃竹を用いて織ったすだれ。○浪紋…波の模様。○白苧…白いからむし。○庭院…やしき。門や堀の内側の空地。○賓客…おきやく。

★ 夏意

夏意

宋 蘇舜欽

別院深深夏簟清

別院 深々として 夏簟かてん 清し

石榴開遍透簾明

石榴 開くこと 遍あまねく 簾すだれに透りて 明あきらなり

樹陰滿地日亭午

樹陰 地に満ち 日は亭午

夢覺流鶯時一聲

夢覺さむれば 流鶯き時に一声

【語釈】

○別院…別の建物。○夏簟…夏に用いる竹製のむしろ。○石榴…ざくろ。○亭午…正午。○流鶯…枝を繞る鶯。

★揚州端午呈趙帥

揚州ようしゅうにて端午たんごに趙帥ちやうしに呈す

宋 戴復古

榴花角黍鬪時新

榴花りゅうか角黍かくしよ時新じしんを鬪わせ

今日誰家不酒樽

今日た誰が家か酒樽しゅそんあらず

堪笑江湖阻風客

笑うに堪えたり江湖風はばに阻まる客かく

却隨蒿艾上朱門

却こつて蒿艾こうがいに隨つつて朱門しゆもんに上る

【語釈】

○揚州：江蘇省揚州市。○端午：陰曆五月五日の節句。○趙帥：趙という姓の師、不祥。○榴花：ザクロの花。○黍鬪：ちまき。○時新：そのとき新しく出した品、はしり。○蒿艾：よもぎ。○朱門：高位高官のやしき。

★夏景

夏景

明 宣宗

暑雨初過爽氣清

暑雨しゆ初めて過すぎて爽氣そうき清し

玉波蕩漾畫橋平

玉波ぎよ蕩漾とうようとして画橋ゐあき平かなり

穿簾小燕雙雙好

簾れんを穿うつ小燕しょうえん双々しうしう好し

泛水閑鷗箇箇輕

水みづに泛かぶ閑鷗かんおう箇々こゝろ輕ろし

【語釈】

○爽氣：さわやかな気分。○玉波：波の美称。○蕩漾：ただようさま。揺らぐさま。○畫橋：彩られた橋。○雙雙：二羽ずつ。○閑鷗：のんびりしたかもめ。○箇箇：おのおの。

★ 夏日

夏日

明 蘭廷瑞

終日憑欄對水鷗
 園林長夏似深秋
 槐龍細灑鵝黃雪
 涼意蕭蕭風滿樓

終日欄に憑り 水鷗に對す
 園林の長夏 深秋に似たり
 槐龍 細に洒う 鵝黃の雪
 涼意 蕭々 風樓に満つ

【語釈】

○憑：寄りかかる。○長夏：昼の長い夏の日。陰曆六月。○槐龍：龍のような老木の槐樹。○鵝黃：ここでは柳のこと？鵝黃雪は柳絮？○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。

★ 夏日雜題

夏日雜題

宋 陸游

午夢初回理舊琴
 竹爐重炷海南沈
 茅簷三日蕭蕭雨
 又展芭蕉數尺陰

午夢 初めて回り 旧琴を理む
 竹炉 重ねて炷く 海南沈
 茅簷 三日 蕭々の雨
 又た展ぶ 芭蕉 数尺の陰

【語釈】

○午夢：昼寝の夢。○回：夢が覚める。○炷：香などを焚く。○海南沈：沈香の一種。○茅簷：茅葺きのノキ。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○展：伸びる。

★ 夏日雑題

夏日雑題

明 唐 寅

長夏山村詩興幽
長夏の山村 詩興 幽なり
趁涼多在碧泉頭
涼を趁い 多くは 碧泉の 頭に在り
松陰滿地凝空翠
松陰 地に満ち 空翠を凝す
肯逐朱門襜褕流
肯えて逐わんや 朱門襜褕の流れ

【語釈】

○長夏：昼の長い夏の日。陰曆六月。○碧泉：清い泉。○空翠：滴るような碧色を呈すること。高い木の緑色。○朱門襜褕：暑い日に盛服を着て高位高官の家を訪れるような愚か者。

★ 夏日偶題

夏日偶題

明 豊 坊

金鴨香銷夏日長
金鴨 香 銷えて 夏日 長し
拋書高卧北窗涼
書を 抛ちて 高卧す 北窓の 涼
曉來驟雨山頭過
曉來の 驟雨 山頭を過ぐ
梔子花開滿院香
梔子 花開いて 滿院 香し

【語釈】

○金鴨：鴨の形をした金属(銅)製の香炉。○高卧：枕を高くして横になる。○曉來：明け方から。○驟雨：にわか雨。○梔子：くちなし。○滿院：中庭一杯。

★ 己未夏日雜興

己未夏日雜興きび

元 善住

纖纖碧草與階齊

纖々たる碧草階と齊しせんせん ひと

濃綠陰中杜宇啼

濃綠陰中杜宇啼のうりよくいんちゅう どう

花院晝長聽正好

花院昼長くして聽くこと正に好しはなゐん ひるながくして 聴くこと せいによし

帶聲飛過粉牆西

声を帯びて飛び過ぐ粉牆の西おび せんしょう 西

【語釈】

○己未…干支の一つで、つちのとひつじの年。○纖纖…細いさま。か細いさま。○階…ぎざはし。○杜宇…ホトトギス。○花院…花木を育成する園。○粉牆…白く塗った塀。

★ 山亭夏日

山亭の夏日かじつ

唐 高 駢

綠樹陰濃夏日長

緑樹陰濃にして夏日長しかげ こまやか かじつ

樓臺倒影入池塘

樓台影を倒にして池塘に入るさかしま ちとう

水晶簾動微風起

水晶の簾動いて微風起りれん

一架薔薇滿院香

一架の薔薇滿院香しいっか しょうび

【語釈】

○山亭…山の別荘。○陰濃…木々の葉が生い茂って暗くなっていること。○池塘…大きな池。○一架…棚一杯の。○薔薇…バラ。○滿院…中庭一杯。

★夏夜追涼

★夏夜涼を追う

宋 楊萬里

夜熱依然午熱同
開門小立月明中
竹深樹密蟲鳴處
時有微涼不是風

夜熱 依然として 午熱に同じ
門を開いて小立す 月明の中
竹深く 樹密なり 虫の鳴く処
時に微涼有り 是れ 風ならず

【語釈】

○追涼…涼しさを求める。○夜熱…夜の暑さ。○午熱…正午頃の暑さ。○小立…しばらくの間、立ったままである。○月明…月明かり。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』 『漢詩大系』

★夏夜

夏夜

宋 方岳

河漢微明星乍稀
碧蓮香濕襲人衣
夜涼如水琉璃滑
自起開窗放月歸

河漢 微かに明るく 星 乍ち稀なり
碧蓮 香 湿りて 人衣を襲う
夜涼 水の如く 琉璃 滑 なり
自ら起き 窓を開いて 月を 放 にして帰る

【語釈】

○河漢…銀河。○碧蓮…緑色の蓮。

★ 大暑

大暑

金 趙 元

早雲飛火燎長空

早雲^{かんうん} 火を飛ばし 長空を燎^やく

白日渾如墮甌中

白日 渾^{すべ}て 甌^{そうちゆう}中に墮つるが如し

不到廣寒冰雪窟

広寒の冰雪の窟^{いわや}に到らずんば

扇頭能有幾多風

扇頭^{せんとう} 能く 幾多の風 有らんや

【語釈】

○大暑：二十四節季の一つ。新曆七月二十三日頃。夏のひどい暑さ。○早雲：ひでり雲。○長空：大空。○白日：耀く太陽。○甌中：こしきの中。○廣寒：尽きにあるとされる広寒府という宮殿。○冰雪窟：ひむしろ。○扇頭：扇の面の上。
(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 暑夜

暑夜

明 釋宗渤

此夜炎蒸不可當

此の夜 炎蒸^{えんじょう} 当たるべからず

開門高樹月蒼蒼

門を開けば 高樹 月 蒼々^{そうそう}

天河只在南樓上

天河は 只だ南樓の上に在り

不借人間一滴涼

借さず 人間^{じんかん} 一滴の涼

【語釈】

○炎蒸：蒸し暑さ。○不可當：耐えられない。敵わない。○蒼蒼：月の青白い色の形容。○天河：天の川。○人間：人間社会。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★夏興

夏興

清 乾隆帝

梧桐月影上紗窓

ごとう 梧桐の月影 しゃそう 紗窓に上る

涼露微侵暑氣峰

りようろ 涼露 かす 微かに侵す しよくきよう 暑氣峰

草際蛩聲纒唧唧

そうさい 草際の蛩聲 わすか 纒に しよくきよう 唧唧

林間螢火故雙雙

けいか 林間の螢火 ごとさら 故に そうそう 双々

【語釈】

○梧桐：桐とおおぎり。○紗窓：薄絹を張った窓。○暑氣：夏の暑さ。○蛩聲：コオロギの声。○唧唧：かすかな声。○雙雙：二つずつ。

★六月念三日立秋

六月念三日立秋

宋 楊萬里

暑中剩喜立秋初

じようき 暑中剩喜す はじめ 立秋の初

特地西風半點無

特地 西風 半点も無し

旋汲井華澆睡眼

ほしいまま 旋に井華を汲んで すいがん 睡眼に澆ぎ

灑將荷葉看跳珠

れいしよう 荷葉に灑將して ちようじゆ 跳珠を看ん

【語釈】

○念三日：二十三日。念は二十。剩喜：盛んに喜ぶ。○立秋初：立秋は二十四節季の一つで、新曆八月八日頃を言うが、次の処暑までの期間を言うこともあり、ここでは、その始め、即ち立秋の日を言う。○特地：特に、ことさら。地は助字。○半點：少しばかり。○井華：朝最初に汲んだ井戸水。この水を用いれば顔色が良くなると言う。○灑將：そそぐ。將は助字。○跳珠：おどる水滴。

★立秋

立秋

明 龔 昴

煙雲暗澹仲宣樓

煙雲 暗澹あんたんたり 仲宣樓ちゆうせんろう

荏苒年華逝水流

荏苒じんぜんたる年華ねんか 逝水流る

白首鄉山千里外

白首の郷山千里の外ほか

滿城風雨又新秋

滿城の風雨 又た新秋

【語釈】

○煙雲：霞と雲。かすかに煙った景色。○暗澹：暗くてはつきりしないさま。暗くて静かなさま。○仲宣樓：樓の名。湖北省当陽県の東南にある。王粲が「登樓賦」を作った。○荏苒：歲月の長引くさま。○年華：年月。○逝水：流れ去る川の水。再び帰らない物のたとえ。○白首：白髪頭の老人。郷山：郷土の山。

★早秋

早秋

元 劉 因

昨朝一葉見秋生

昨朝 一葉いちよう 秋の生ずるを見る

今日千巖萬壑清

今日 千巖せんがんばんがく 萬壑 清し

欲借西風蘇病骨

西風を借りて 病骨を 蘇よみがえらせんと欲し

暫來石上聽松聲

暫しばらく石上来たりて 松聲しょうせいを聽く

【語釈】

○千巖萬壑：多くの山々。○西風：秋風。○病骨：病気の身。

★新秋

新秋

明 劉 泰

暑退新涼透碧紗

暑退しよいて新涼碧紗へきさに透る

砧聲不斷是誰家

砧聲ちんせい絶えざるは是れ誰が家ぞ

酒醒小立殘陽裏

酒醒さめて小立す殘陽ざんようの裏うち

閒數籬邊紫豆花

閑かに数う籬辺りへんの紫豆花しとうか

【語釈】

○新涼…秋の初めの涼しき。初秋の涼風。○碧紗…緑色の薄絹のカーテン。○砧聲…衣を打つ砧の音。○小立…ちよつと立ち止まる。○小立…しばしたたずむ。○殘陽…沈みかけの夕陽。○籬邊…垣根のあたり。○紫豆花…ベニバナインゲン。

★初秋

初秋

清 張實居

颯颯西風吹薜蘿

颯颯たる西風薜蘿へいらを吹く

炎天伏枕一時過

炎天えんてん 枕に伏し 一時に過ぐ

山中事事秋來好

山中事々 秋來好し

只恐浮雲變態多

只だ恐る 浮雲の 変態の多きを

【語釈】

○颯颯…風がさつと吹く形容。○西風…秋風。○薜蘿…華面、蔓草の一種。隱者の衣服、住居。○事事…その時その時に。○秋來…秋になってから。○変態…いろいろな形を変えること。

★ 七夕

七夕ひちせき

唐 李郢

烏鵲橋頭雙扇開

烏鵲橋頭 双扇開くうじやくきょうとう そうせん

年年一度過河來

年々 一度 河を過って來たる

莫嫌天上稀相見

嫌う莫かれ 天上 相い見ること稀なるを

猶勝人間去不回

猶お勝る 人間 去りて 回らざるにまさ じんかん かい

【語釈】

○烏鵲橋…かささぎの橋。七夕の夜に、牽牛と織女が天の川で出会うとき、かささぎがその翼で橋をかけるという。○雙扇…牽牛と織女の扇。○人間…人間社会。

★ 七夕

七夕ひちせき

宋 戴復古

天上銀蟾曲似鈞

天上の銀蟾 曲りて鈞に似たりぎんせん こう

萬家簫鼓響新秋

万家の簫鼓 新秋に響くしょうこ

從來世事皆兒戲

從來 世事 皆 兒戲せい

不獨人間乞功樓

独り 人間の乞功楼のみならずじんかん きつこうろう

【語釈】

○銀蟾…月の異称。月にはヒキガエルがいるということから。○鈞…つりばり。○簫鼓…管弦。音楽。○從來…かねてより。○世事…世の中の事。○乞功楼…七夕の日に庭に建てる彩飾を施した樓。

★七夕

七夕

金 邊元勳

高樓人散酒罇空

高樓 人は散じ 酒罇空し

漫擬新文送五窮

漫に擬す 新文の五窮を送るを

獨倚南窗夜岑寂

独り 南窓に倚りて 夜 岑寂

一鈎涼月下疎桐

一鈎の涼月 疎桐を下る

【語釈】

○酒罇空…酒樽は空っぽ。○新文…新たに作った文。○五窮…智窮、學窮、文窮、命窮、交窮。○岑寂…ひっそりとして寂しい。○一鈎涼月…一つの釣り針のような涼しい月。○疎桐…まばらな桐の林。

★和人七夕

人の七夕に和す

宋 胡仔

乞巧筵開玉露秋

乞巧 筵を開く 玉露の秋

一鈎涼月掛西樓

一鈎の涼月 西樓に掛かる

人間百巧方無奈

人間 百巧 方に 奈ともする無し

寄語天孫好罷休

語を寄す 天孫 好みて罷休せよと

【語釈】

○乞巧…七夕に、人家の女が、綵縷を結び、七孔の鍼をち、几・酒脯・果を中に陳(つら)ねて、以て巧を乞う祭り。○筵…宴席。○一鈎涼月…一つの釣り針のような涼しい月。○方…まさしく。○無奈…どうしようもない。○天孫…織女星。○罷休…仕事を休む。

★ 中元弄月

中元月を弄ぶもてあそ

清 張光啓

小臺露坐月東生

小台に露坐すれば月東に生ずろぎ

松影參差酒數行

松影參差として酒數行しんし

且向今宵邀一醉

且つて今宵に向いて一醉を邀うおんしょう お

中秋未可定陰晴

中秋未だ陰晴を定むべからずいんせい

【語釈】

○中元：陰曆七月十五日。○露坐：屋根のない所に座る。○參差：ふぞろい。○向：於に相当し場所や対象を示す。述語に後置された場合は、置き字として訓読しない。○邀：迎え入れる。○中秋：陰曆八月。○陰晴：曇りと晴れ。

★ 早秋月夜

早秋月夜

唐 雍陶

身閑伴月夜深行

身は閑にして月に伴いて夜深くして行くしずか

風觸衣裳四體輕

風は衣裳に触れて四体軽し

爲見近來天氣好

近來天氣の好きを見る為に

幾篇詩興入秋成

幾篇の詩興 秋に入りて成る

【語釈】

○近來：このごろ。ちかごろ。○詩興：詩の面白み。風流の楽しみ。ここでは詩。

★社日

社日

唐 王 駕

鵝湖山下稻梁肥

がこさんか とうりよう
鵝湖山下 稻梁肥ゆ

豚柵雞埒半掩扉

とんさく けいじ
豚柵 雞埒 半ば扉を掩ざす

桑柘影斜秋社散

そうしや
桑柘 影斜めに 秋社散じ

家家扶得醉人歸

たす
家々 醉人を扶けて歸る

【語釈】

○社日：土地神を祀る日。立春後第五の戌の日を春社、立秋後第五の戌の日を秋社という。○鵝湖山：荷湖山ともいう。信州鉛山県、現在の江西省鉛山県にある山。○稻梁肥：晩秋の豊作をいう。梁は穀物。○豚柵：豚を飼っているところ。柵は、穴。○猪は坑(あな)で飼われていた。○雞埒：鶏を飼っているところ。埒は、鳥のねぐら。○桑柘：桑の木。やまぐわ。○影斜：夕暮れをいう語。

(参考文献) 『三体詩』

★秋思

秋思

唐 王 涯

網軒涼吹動輕衣

もうけん りようすい
網軒の涼吹 輕衣を動かし

夜聽更長玉漏稀

ぎよくろう まれ
夜に聴く 更に長き玉漏の稀なるを

月度天河光轉濕

うた うるお
月は天河を度りて 光 転た湿う

鵲驚秋樹葉頻飛

かささぎ しぎ
鵲は秋樹を驚かせ 葉頻りに飛ぶ

【語釈】

○網軒：網で飾られている軒。○涼吹：涼しい風。○玉漏：水時計(美称)の音。○天河：天の川。

★秋思

秋思

唐 王涯

宮連太液見蒼波 たいえき そうは
 暑氣微消秋意多 びしょう
 一夜輕風蘋末起 ひんまつ
 露珠翻盡滿池荷 ろしゆ ほんじん か

宮は太液に連なり蒼波を見る
 暑氣微消して秋意多し
 一夜輕風蘋末に起き
 露珠翻尽す滿池の荷

【語釈】

○太液…太液池。唐では大明宮の中にあつた。○蘋末…てんじそう（うきくさの一種の葉末）。○露珠…露の玉。○翻盡…翻る。○荷…蓮の葉

★秋思

秋思

唐 劉禹錫

自古逢秋悲寂寥 いにしえよ
 我言秋日勝春朝 せきりよう
 晴空一鶴排雲上 せいこう いっかく
 便引詩情到碧霄 すなわ へきしやう

古自り秋に逢いて寂寥を悲しむ
 我は言う 秋日は春朝に勝れりと
 晴空一鶴雲を排して上り
 便ち詩情を引いて碧霄に到る

【語釈】

○秋思…樂府題。普通は旅情、別離の意を含むが、ここでは、秋についての感想という意味。○自古…昔から。○便…たちまち。○碧霄…青空。

（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

★ 秋思

秋思

唐 劉禹錫

山明水淨夜來霜

山明さんめい 水淨すいじょう 夜來やらいの霜

數樹深紅出淺黃

數樹すうじゆの深紅しんこう 淺黃せんおうに出ず

試上高樓清入骨

試こころみに高樓たかろうに上れば 清せい骨こつに入る

豈如春色嗾人狂

豈あに人ひとを嗾そそのかして 狂くるせしむ如ごとからんや

【語釈】

○秋思：樂府題。普通は旅情、別離の意を含むが、ここでは、秋についての感想という意味。○夜來：昨夜からの。○深紅：濃い紅色。○春色：春景色。春の気配。○豈：どうして〜であろうか。反語。

★ 秋曉

秋曉しゅうせう

宋 劉 翰

亂鴉啼散玉屏空

亂鴉らんあ 啼なき散ちじ 玉屏ぎよへい空くうし

一枕新涼一扇風

一枕いつしんの新涼しんりやう 一扇いつせんの風

睡起秋聲無覓處

睡起すいきすれば秋聲しゅうせい 覓もとむる処ところ無なく

滿階梧葉月明中

滿階まんかいの梧葉ぶつえつ 月明げつめいの中ちゆう

【語釈】

○玉屏：美しい屏風。○一枕：一眠り。○新涼：秋に入って始めて感じる涼しさ。○睡起：眠りより起きる。○秋聲：秋の気配を感じさせる風や物の音。○無覓處：どこから起こるのか分からない。○梧葉：アオギリの葉。

★ 秋夕

秋夕 しゅうせき

唐 竇鞏

護霜雲破月朦朧

護霜雲 破れて 月 朦朧 ごそう とうろう

烏鵲爭飛井上桐

烏鵲 争い 飛ぶ 井上 の 桐 うじゃく せいじょう

半夜酒醒人不覺

半夜 酒 醒むれば 人 覚えず さ

滿池荷葉動秋風

滿池 の 荷葉 秋風 に 動く かよう

【語釈】

○護霜…方言で露を結ぶこと。○朦朧…おぼろげなさま。○烏鵲…カササギ。○井上…井戸の上。○人不覺…人影がない。○荷葉…蓮の葉。

★ 秋夕

秋夕 しゅうせき

宋 朱熹

一雨生涼杜若洲

一雨 涼は生ず 杜若洲 とじやくしゅう

月波微漾綠溪流

月波 微かに漾く 緑溪 の 流 かす うご りよくけい ながれ

茅簷歸去無塵土

茅簷 歸り去りて 塵土 無く ちえん じんど

淡薄閑花遶舍秋

淡薄 の 閑花 舍を繞りて 秋なり たんはく かんか めぐ

【語釈】

○杜若洲…ヤブメウガの生えている中州。○月波…月影の映っている波。○茅簷…茅で葺いたのき。○淡薄…あっさりしている。○閑花…閑雅に咲いた花。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

秋夜

秋夜

宋 陳與義

中庭淡月照三更

中庭の淡月たんげつ 三更を照らし

白露横空河漢明

白露 空に横たわりて 河漢 明あきらなり

莫遣西風吹葉盡

西風をして 葉を吹いて 尽さしむる 莫れ

却愁無處著秋聲

却って愁う 秋声を著あらわす 処無きを

【語釈】

○淡月：おぼろ月。○三更：午前零時頃。○白露：白露、白い靄、ここでは後者。○河漢：銀河。○西風：秋風。○秋聲：秋の気配を感じさせる物音。○著：あらわす。

〔参考文献〕 『漢詩大系 16』

★ 秋夜

秋夜

元 曹之謙

寂寂江城夜向闌

寂々せきせきたる 江城 夜 闌たけなわに向う

西風吹雁叫雲端

西風 雁かりを吹き 雲端うんたんに叫ぶ

一聲遠過南樓去

一声 遠く過ぎ 南樓に去り

月滿碧天秋水寒

月は碧天へきてんに満ち 秋水寒し

【語釈】

○寂寂…ひっそりして物寂しいさま。○江城…川の畔の町。○西風…秋風。

★ 秋夜

秋夜

明 黄姬水

蟬歇還驚絡緯鳴
 秋風忽已動江城
 山窓寂寂無眠夜
 梧葉芭蕉聽雨聲
 蟬歇やんで還また驚おどろく絡緯らくいの鳴なぐを
 秋風あきかぜ忽たちまち已まに江城かきに動うく
 山窓やままど寂せき々せき眠ねる無なき夜
 梧葉ごよう芭蕉ばしやうに雨あめ声こゑを聴きく

【語釈】

○絡緯…コオロギ。○江城…川の畔にある町。○江城…川辺の街。○寂寂…ひっそりとして物寂しいさま。○梧葉…あお桐の葉。

★ 江上秋夜

江上の秋夜

宋 僧道潜

雨暗蒼江晚未晴
 井梧翻葉動秋聲
 樓頭夜半風吹斷
 月在浮雲淺處明
 雨暗あめく蒼江そうかう晚くれて未なだ晴はれず
 井梧せいこ葉はを翻ひえして秋聲あきこゑ動うく
 樓頭すいたん夜半よ風かぜ吹断ふす
 月つきは浮雲うきぐもの浅あき處ところに在ありて明あきらかなり

【語釈】

○井梧…井戸の傍にあるアオギリ。○秋聲…秋の気配を感じさせる風や物の音。

★ 江亭秋晚

江亭秋晚

元 本 誠

獨倚清江秋思長
晚潮初上水亭涼
海門風起雙巒暝
一抹銀花湧夕陽

独り清江に倚り 秋思長し
晩潮初めて上りて 水亭涼し
海門 風起りて 双巒暝く
一抹の銀花 夕陽に湧く

【語釈】

○江亭…川に臨む亭。○清江…清い川。○秋思…樂府題。普通は旅情、別離の意を含むが、ここでは、秋についての感想という意味。○水亭…川に臨んだ亭。○海門…川が海に入るところ。○雙巒…二つの峰。○銀花…灯火の形容。

★ 九日

九日

唐 韋應物

今朝把酒復惆悵
憶在杜陵田舍時
明年九日知何處
世難還家未有期

今朝 酒を把りて 復た 惆悵す
憶いは 杜陵 田舎の時に在り
明年九日 知んぬ何れの処ぞ
世難 家に還りて 未だ期 有らず

【語釈】

○九日…九月九日。○惆悵…嘆き悲しむ。○杜陵…長安の南にあった地名、作者の出身地。○田舎…田舎の家。○世難…世の乱れ。

★ 九日

九日きゅうじつ

唐 張 諤

秋葉風吹黃颯颯

秋葉風吹きて黃颯々きつさつ

晴雲日照白鱗鱗

晴雲日照して白鱗々りんりん

歸來得問茱萸女

歸來問い得たり茱萸の女きらい しゆゆ じよ

今日登高醉幾人

今日の登高幾人を酔せわしと

【語釈】

○九日宴：陰曆九月九日、重陽の節句。この節句のならわしとして、小高い丘に登り、茱萸を髪にかざし、菊の花を浮かべた酒を飲むなどして一年の厄払いをする習慣があった。○黄：黄ばんだ葉。○颯颯：風がさつと吹く音。○晴雲：秋晴れの空に浮かぶ雲。○日照：（雲が）日に照らされて。○白：白く。○歸來：帰り道で。来は助辞。○得問：尋ねてみた。得は「くする機会を得た」の意。○茱萸女：茱萸を髪にさした女たち。酒宴の席で客の相手をする商売女を指す。○茱萸：吳ご茱しゆ萸ゆ。和名カワハジカミ。（参考資料）『唐詩選』

★ 九日

九日

宋 戴復古

醉來風帽半欹斜

醉來風帽半ば欹斜すいらい ふうぼう ぎしや

幾度他鄉對菊花

幾度か他郷にて菊花に対す

最苦酒徒星散後

最も苦なるは酒徒星散の後しゆと せいさん

見人兒女倍思家

人の兒女を見て倍ますます家を思う

【語釈】

○九日：九月九日、重陽の節句。○欹斜：そばだち斜めになること。○星散：星の如く四方に散らばる。

（参考文献）

『和漢名詞選類評釈』

★ 九日

九日きゅうじつ

明 李攀龍

黄花白髮病中新

黄花こうか 白髮 病中に新たなり

壁上常懸漉酒巾

壁上常に懸かる 漉酒の中

九日空齋似寒食

九日きゅうじつ 空齋くうさい 寒食に似て

更無風雨亦愁人

更に 風雨無く 亦また 人を愁えしむ

【語釈】

○九日：九月九日。○黄花：ここでは菊をいう。○漉酒巾：酒を漉す布。ここでは陶潜が頭巾で酒を漉した故事に基づき頭巾をいう。○空齋：空室。○寒食：冬至から一○五日目、この日を挟んで前後の計三日間は火を使うことを禁じた。

★ 九月九日憶山中兄弟

九月九日 山中の兄弟を憶う

唐 王維

獨在異鄉爲異客

独り 異郷に在って 異客いかくとなり

每逢佳節倍思親

佳節かせつに逢う毎ごとに 倍ますます 親を思う

遙知兄弟登高處

遙かに知る 兄弟けいてい 高たかきに登る処

遍插茱萸少一人

遍あまねく 茱萸しゆゆを挿さんで 一人いちにんを少かくを

【語釈】

○異郷：よその土地。見知らぬ土地。他郷。ここでは都長安を指す。○異客：旅に出て他郷にいる人。作者自身を指す。○佳節：めでたい日。節句や祝日。ここでは重陽の節句を指す。○倍：ますます。ふだんの日よりいっそう。

○親：血のつながりのある人。身内。○遙知：遠く離れていてもはっきり知っている。登高：（重陽の節句の行事で）山に登る。処：ここでは「する時」の意。遍：みんな。○茱萸：呉茱萸。和名カワハジカミ。

【参考文献】

『漢詩鑑賞辞典』『唐詩選』

★ 九日感懷

九日の感懷

宋 黃庚

新橙初試蟹螯肥
一曲清歌酒一卮
料得故園秋正好
黃花應怪客歸遲

新橙初めて試み蟹螯肥ゆ
一曲の清歌酒一卮
料り得たり故園の秋正に好きを
黃花 応に客歸の遅きを怪しむべし

【語釈】

○九日：九月九日。○新橙：実ったばかりの橙。○蟹螯：蟹のはさみ。○卮：さかずき。○故園：故郷。○黃花：この場合は菊。○應：「まさにくすべし」と読み「きつ」とであるに違いない。」の意。○客歸：旅人が家に帰る。

★ 九日示殿卿

九日 殿卿に示す

明 李攀龍

床頭濁酒浸黃花
門外蕭條五柳斜
此日登高人盡醉
不知秋色在陶家

床頭の濁酒 黃花を浸し
門外 蕭條として 五柳斜なり
此の日 登高の人 尽く酔い
知らず 秋色の陶家に在るを

【語釈】

○九日：九月九日。○殿卿：殿方。○黃花：この場合は菊。○蕭條：物静かなさま。○五柳：五本の柳。陶淵明の庭には五本の柳があった。○秋色：秋景色、秋の気配。○陶家：陶淵明の家。

★ 九日同于鱗賦

九日きゅうじつ于鱗うりりんと同に賦ふす

明 吳國倫

秋深木落雁南飛

秋深く木落ちて雁がん南に飛ぶ

客裏風光欲授衣

客裏かくり風光ふうこう授衣じゆいならんと欲す

燕市酒酣聊供賦

燕市酒たけなわ酣たけなわにして聊いささか供に賦す

龍山家在未能歸

龍山に家い在れども未だ歸る能わず

【語釈】

○九日：九月九日。○于鱗：李攀龍。嘉靖23年（1544年）進士となる。その後、陝西提学副使など地方官を歴任し、河南按察使となる。後七子と称された明代詩壇の古文辞派の筆頭に挙げられる。○客裏：旅の中。○風光：景色、眺め。○授衣：陰曆九月。○燕市：戦国時代の燕の都城（現在の北京）。○龍山：林省遼源市。

★ 九日憶家

九日家を憶う

清 萬夔輔

尋詩繞遍一籬花

詩を尋ねて繞めぐぐること遍あまねく一籬いちりの花

落葉聲中日易斜

落葉らくよう聲せい中日斜いめなり易し

憶得高堂臨別語

憶い得たり高堂臨別の語

授衣時節望還家

授衣じゆいの時節かえ家に還るを望む

【語釈】

○九日：九月九日。○尋詩：詩句を尋ね求める。○一籬花：籬にある一つの花。菊。
○高堂：父母。○授衣：陰曆九月。

★ 重陽日寄韋舍人

重陽の日 韋舍人いしやじんに寄す

唐 趙 嘏

節過重陽菊委塵

節は重陽を過ぎ 菊塵すてに委られ

江邊病起杖扶身

江辺 病より起きて 杖たすけに扶らるる身

不知此日龍山會

知らず 此の日 龍山の會

誰是風流落帽人

誰か是れ 風流 落帽の人

○韋舍人：不祥。○節：季節。○委：投げ捨てる。○龍山落帽人：他者の嘲りの的になった時、鷹揚とした態度で応じ、度量の広さで逆に周囲の人望を得ることを言う。『晉書』卷九十八《桓溫列傳 孟嘉》『世説新語』（韋舍人を指すか？）か。

★ 重陽阻雨

重陽 雨はばに阻まる

唐 司空圖

重陽阻雨獨銜杯

重陽 雨に阻まれ ひとり杯ひとを銜ふくむ

移得山家菊未開

山家を移し得たるも 菊 未だ開かず

猶勝登高閑望斷

猶お勝る 登高して 閑かに望断するに

孤雲殘照馬嘶回

孤雲 殘照 馬いなな嘶かえきて回る

【語釈】

○重陽：旧曆九月九日。この日、高所に登って菊酒を飲み、厄を祓う習慣があった。○望断：去って行く物を見えなくなるまで見送る。○殘照：夕陽の光。入り日の余光。

★ 秋懷

秋懷

宋 劉 宰

一抹紅綃日脚霞	一抹の紅は綃ゆ 日脚の霞
千林暮靄納歸鴉	千林の暮靄 歸鴉を納む
西風捲盡梧桐葉	西風捲き尽くす 梧桐の葉
乞與中庭散月華	中庭に乞与して 月華を散ず

【語釈】

○日脚：雲の隙間から漏れてきた日光。○暮靄：夕もや。○西風：秋風。○梧桐：あ
おぎり。○乞與：与える。○月華：月の光。

★ 立冬

立冬

明 王稚登

秋風吹盡舊庭柯	秋風 吹き尽す 旧庭の柯
黄葉丹楓客裏過	黄葉 丹楓 客裏に過ぐ
一點禪燈半輪月	一点の禪灯 半輪の月
今宵寒較昨宵多	今宵の寒は 昨宵に較れば多し

【語釈】

○柯：木の枝。○丹楓：紅葉した楓。○客裏：旅の中。○禪灯：寺廟の灯火。

★ 初冬作贈劉景文

初冬の作 劉景文に贈る

宋 蘇軾

荷盡已無擎雨蓋

荷は尽きて 已に 雨を擎ぐる蓋無く

菊殘猶有傲霜枝

菊は残して 猶お 霜に傲る枝有り

一年好景君須記

一年の好景君 須く記すべし

正是橙黃橘綠時

正に是れ 橙黃橘綠の時

【語釈】

○劉景文：名は季孫、景文は字。タングート族の西夏と戦った將軍劉平の子で、このとき、杭州で民兵を率いていた。○荷盡：蓮の葉がすっかり枯れてしまった。○擎：高く差し上げること。○蓋：かさ。○菊殘：菊が盛りを過ぎて咲き衰えたこと。○傲霜：霜に負けない。○須：すべからくすべしと読み、当然すべきであるの意。○橙：ユズ。○橘：ミカンの類。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』 『漢詩大系17』

★ 冬日即事

冬日即事

宋 高翥

江上凝冰約水痕

江上の凝氷 水痕を約す

門前殘雪綴谿雲

門前の殘雪 谿雲を綴る

杖藜獨立梅梢月

藜を杖つき 独り立つ 梅梢の月

成就清寒到十分

清寒を成就して 十分に到る

【語釈】

○即事：事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○水痕：さざなみ。○約：制限する。○綴：とどめる。○藜：軽いので老人、隠者の杖として用いられる。○梅梢：梅の梢。○清寒：晴朗な寒さ。

★ 都中冬日

都中の冬日

宋 戴復古

脱却鸛裘付酒家
忍寒圖得醉京華
一冬天氣如春暖
昨日街頭賣杏花

鸛裘そうきゆうを脱却して酒家に付く
寒を忍んではか図き得たり京華けいかに酔うを
一冬の天氣春の如く暖あたたかなり
昨日街頭きようか杏花を売る

【語釈】

○鸛裘：鸛鵝（首長く緑色の鳥。形は雁に似、皮を裘に作る）の皮で作った冬の衣。
○酒家：酒屋。○京華：花の都。

★ 冬夜

冬夜

明 蘭廷瑞

枕上詩成夜思澄
起尋筆硯旋呼燈
銀瓶取浸梅花水
已被霜風凍作冰

枕上ちんじよう詩成りて夜思澄む
起きて筆硯ひっけんを尋ね旋す呼燈を呼ぶ
銀瓶ぎんべいに梅花を浸して水を取れば
已に霜風を被りて凍りて氷と作るな

【語釈】

○枕上：目が覚めてまだ起き上がらない状態。○夜思：夜の思い。○旋：すぐに。○銀瓶：銀の瓶。○霜風：骨を刺す寒さの風。

★ 冬夜

冬夜

明 毛鈺龍

玉井無聲戸已扃
 一庭霜月冷如凝
 誰憐寂寞書窗下

玉井 声無く 戸 已に扃す
 一庭の霜月 冷かなること凝るが如し
 誰か憐む 寂寞たる 書窓の下

凍影梅花伴夜燈
 凍影の梅花 夜燈に伴うを

【語釈】

○玉井：井戸の美称。○扃：閉ざす。○霜月：霜の夜の寒い月。○寂寞：ひっそりとして寂しいこと。○書窗：書齋の窓。

★ 至節即事

至節即事

元 馬 臻

店舎喧譁徹夜開
 熒煌燈火映樓臺
 歡遊未曉不歸去
 早有元宵氣象來

店舎の喧譁 夜を徹して開く
 熒煌の燈火 楼台に映ず
 歡遊 未だ曉に帰り去らず
 早く元宵の氣象の来る有り

【語釈】

○至節：夏至又は冬至。この場合は冬至。冬至は一陽来復の日として祝われ、徹夜をする習慣があった。○即事：事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○喧譁：かまびすしさ。○熒煌：光輝く。○歡遊：飲び遊ぶ人々。○元宵：正月十五日、上元節。この夜灯火をともして騒いだ。○氣象：景色。

★雪晴

雪晴る

宋 鄭獬

天外丹霞一抹紅

天外たんかの丹霞 一抹の紅

瓦溝已見雪花溶

瓦溝がこう 已に見る雪花の溶けるを

前山未放曉寒散

前山 未だ曉寒ぎょうかんを放ちて散ぜず

猶鎖白雲三兩峰

猶お鎖さざす 白雲 三兩峰

【語釈】

○丹霞：日が照って赤く耀く霞。○瓦溝：屋根の雨水を集めて流すところ。○曉寒：曉の寒さ。○三兩峰：二、三の峰。

★歲晚書事

歲晚事を書すさいばん

宋 劉克莊

書生元不信禳祥

書生 元きしやう 禳祥を信ぜず

老去無端慮事詳

老去りて 端無くも事を 慮おもんばかること 詳つまひらかなり

白髮社巫來報吉

白髮しやふの社巫 来りて吉を報あやす

明朝渌井更苦牆

明朝 井さらを渌さらい 更に牆おほを苦うう

【語釈】

○歲晚：大晦日。○禳祥：占いによる吉凶。○無端：これといったきっかけもなく。思いがけず。○社巫：神社の巫女。

★ 歲晚書事

歲晚事を書す

宋 劉克莊

門冷如冰儘不妨
由來富貴屬蒼蒼
誰能却學癡兒女
深夜潛燒祭竈香

門冷やかなること氷の如きも 俛せて妨がず
由來 富貴 蒼々に屬す
誰か能く 却つて 癡兒女に学びて
深夜 潜に竈を祭る香を焼かんや

【語釈】

○歲晚…大晦日。○儘…そのままにしておく。○由來…もともと。○蒼蒼…青い天。ここでは天の思し召し。○竈…かまど。

★ 歲晚書事

歲晚事を書す

宋 劉克莊

歲晚郊居苦寂寥
日高鹽酪去城遙
深深榕逕苔牆裏
忽有銀釵叫賣樵

歲晚の郊居 苦だ寂寥
日高くして 塩酪 城を去りて遙かなり
深々たる榕徑 苔牆の裏
忽ち 銀釵の 売樵を叫ぶ有り

【語釈】

○歲晚…大晦日。○郊居…郊外の住まい。○寂寥…しずかで物寂しいさま。○鹽酪…塩と乳漿。○榕逕…榕の木の下之路。○苔牆…苔が生えた牆。○銀釵…銀のかんざし(を挿した娘)。○樵…たきぎ。

★ 歳晚書事

歳晚事を書す

宋 劉克莊

主公晩節治家寛
 主公の晩節 家を治むること 寛なり
 婢慣奴驕號令難
 婢慣れ 奴驕り 号令難し
 圃在屋邊慵種菜
 圃は屋辺に在れども 菜を種うるに慵く
 井臨砌畔怕澆蘭
 井は砌畔に臨めども 蘭を澆ぐを怕る

【語釈】

○歳晚…大晦日。○主公…主人。○晩節…大晦日。○寛…人に対して厳しくないさま。○圃…畑。○砌畔…階段の直ぐそば。○澆…洗う。○蘭…家畜などを囲い込む柵。

★ 歳晚書事

歳晚事を書す

宋 劉克莊

日日抄書懶出門
 日々書を抄して 門を出ずるに懶し
 小窗弄筆到黄昏
 小窓に筆を弄して 黄昏に到る
 Y頭婢子忙勻粉
 Y頭の婢子 忙しく粉を勻え
 不管先生硯水渾
 管せず 先生の硯水の渾るを

【語釈】

○歳晚…大晦日。○抄…書き写す。○黄昏…たそがれ。○Y頭…あげまき頭。○婢子…召使い少女。○不管…気にしない。

★ 歲晚書事

歲晚事を書す

宋 劉克莊

丐客鶉衣立戸前

丐客かいかく 鶉衣しゅんい 戸前に立つ

豈知儂自殘年窘

豈に知らんや儂われ 自らみづか 殘年に窘むをくるし

染人酒媪逋猶緩

染人せんじん 酒媪しゅおう は逋ほ して猶お緩おだやか かに

且送添丁上學錢

且つ送るてんてい 添丁に学に上る錢を

【語釈】

○歲晚：大晦日。○丐客：乞食。○鶉衣：破れ衣。○染人：染め物工。○酒媪：酒を
売る老婆。○逋：租税を滞納する。○添丁：男の子。○上學：学問を修めるための
金。

★ 除夜作

除夜作

唐

高適

旅館寒燈獨不眠

旅館の寒燈 独り眠らず

客心何事轉悽然

客心かくしん 何事ぞ 転うた た悽然せいぜん

故郷今夜思千里

故郷 今夜 千里を思う

霜鬢明朝又一年

霜鬢そうびん 明朝 又た一年

【語釈】

○寒灯：薄暗く、寒々とした灯。○客心：旅人の心。○何事：どうしたことか。○
転：いよいよ。ますます。○悽然：物寂しいさま。痛ましいさま。○霜鬢：霜のよ
うな白い鬢。○又一年：一っ年をとる。

(参考文献)

『漢詩鑑賞辞典』 『唐詩選』

★ 除夕

除夕じよせき

明 汪道昆

沈水香焼寶鴨空

沈水香ちんすい焼きて 宝鴨ほうおう空し

長筵酒煖臘燈紅

長筵ちやうえん 酒煖かにして 臘燈ろうとう紅なり

可憐萬戸千門裏

憐む可し 万戸千門の裏

斷送年華是曉鐘

年華ねんかを斷送するは 是れ 曉鐘

【語釈】

○除夕：大晦日の夜。○沈水：沈香（香木の一種）の別名。○寶鴨：鴨の形をした香炉。○空：空になる。○長筵：長い宴会。○臘燈：蠟燭の灯火。○可憐：感嘆詞、ああ。○斷送：捨て送る。○年華：年月。

★ 除夕

除夕じよせき

明 程嘉燧

久客懷人百事慵

久客きゆうかく 人を懐い 百事もつ慵し

春歸幾日是殘冬

春歸ること 幾日ぞ 是れ殘冬

長安雪後無來往

長安 雪後 來往無し

報國門前獨看松

報國門前 独り松を見る

【語釈】

○除夕：大晦日の夜。○久客：長く逗留する旅人。○春歸：春が過ぎ去る。○殘冬：冬の終わり。○來往：人の行き来。○報國門：長安の城門の一つ、不祥。

絶句類選 卷之二

禁省類

★苑中遇雪應制

苑中えんちゆう雪に遇う 応制

唐 劉憲

龍驂曉入望春宮

龍驂りゆうさん曉あけに入る望春宮ぼうしゅんぐう

正逢春雪舞東風

正ただに逢う春雪の東風に舞うに

花光併灑天文上

花光はなみつは併あせて灑ぐ天文の上

寒氣行消御酒中

寒氣さむけは行消す御酒うちの中

【語釈】

○應制：皇帝の明によって作った詩。○龍驂：優れた形をしたそえ馬。○望春宮：宮殿の名。○東風：春風。○花光：花の色彩。○天文：天の模様。○行消：行って消える。

★苑中遇雪應制

苑中えんちゆう雪に遇う応制

唐 除彦伯

千鍾聖酒御筵開

千鍾せんしゆうの聖酒せいしゆ御筵ぎえんに開く

六出祥英亂繞枝

六出りくしゆつの祥英しやうえい乱れて枝を繞るめぐ

即此仙遊對瓊圃

即ち此れ仙遊けんいほ瓊圃けいほに対す

何煩轍迹到瑤池

何ぞ煩わさん轍迹てつせきの瑤池ようちに到るを

【語釈】

○千鍾：鍾は一升の640倍。沢山の意味。○聖酒：皇帝から賜った酒。○御筵：朝廷の宴会。○六出：雪、ここでは六瓣。○祥英：雪の異称。○仙遊：地上に現れた仙人。○瓊圃：神仙の園。○轍迹：車の轍。○瑤池：仙人の居る所。崑崙山にある。

★十五夜御前踏歌詞

十五夜御前踏歌詞

唐 張説

華萼樓前雨露新

華萼樓前かがくろうぜん雨露新たなり

長安城裏太平人

長安城裏ちやうあんじやうり太平の人

龍銜火樹千燈艷

龍は火樹を銜くわえて千燈せんの艷

雞上蓮花萬歲春

雞は蓮花れんかに上りて万歳の春

【語釈】

○十五夜：正月十五日、上元節の夜。この夜、長安では灯籠を灯した夜祭りが行われた。○踏歌：足踏みで調子を取りながら唱う歌。○華萼樓：楼の名。○火樹：光輝く灯火。○蓮花：ここでは蓮の葉をかたどった飾り。○転句、結句は夜祭りの様子を詠ったものであり、龍も雞も飾りと思われる。

★ 上皇西巡南京歌

上皇 南京に西巡する歌

唐 李白

華陽春樹號新豐

華陽の春樹 新豐と号す

行入新都若舊宮

行きて新都に入れば旧宮の若し

柳色未饒秦地綠

柳色は 未だ秦地の緑より饒かならざるも

花光不減上陽紅

花光は 上陽の紅を減ぜず

【語釈】

○上皇：玄宗。○南京：ここでは四川省成都。○西巡：西の地方を視察する。
○華陽：蜀の池。○新豐：漢の高祖が上太后のために築いた町の名。○新都：成都。○舊宮：長安の宮殿。○秦地：関中、長安地方。○花光：花の輝き。○上陽：宮殿の名、上陽宮。○不減：同等である。

★ 上皇西巡南京歌

上皇 南京に西巡する歌

唐 李白

誰道君王行路難

誰か道う 君王 行路難しと

六龍西幸萬人歡

六龍 西幸して 万人歡ぶ

地轉錦江成渭水

地は転じて 錦江は渭水と成り

天迴玉壘作長安

天は迴りて 玉壘は長安と作る

【語釈】

○上皇：玄宗。○南京：ここでは四川省成都。○西巡：西の地方を視察する。○誰道：誰が言うであろうか。誰も言わない。反語。○君王：わが君。玄宗皇帝を指す。○行路難：蜀へ行く道が困難であると。ここでは樂府の曲名「行路難」及び「蜀道難」に基づく。○六龍：天子の車につける六頭立ての馬車。○西：蜀を指す。○幸：天子が出かけることをいう敬語。○六龍：天子の車につける六頭立ての馬車。○西：蜀を指す。○幸：天子が出かけることをいう敬語。○錦江：四川省成都市の中心部を流れる川。○転：天地を回転させる。○渭水：黄河最大の支流。

(参考文献)

『唐詩選』上皇西巡南京歌

★ 上皇西巡南京歌

上皇 南京に西巡する歌

唐 李白

劍閣重關蜀北門

劍閣けんかくの重關ちゅうかん 蜀の北門

上皇歸馬若雲屯

上皇の歸馬きば 雲の若く屯たむろす

少帝長安開紫極

少帝 長安に紫極しきよくを開き

雙懸日月照乾坤

日月を雙懸ならべかけて 乾坤けんこんを照らす

【語釈】

○上皇：玄宗。○南京：ここでは四川省成都。○西巡：西の地方を視察する。○劍閣：棧道の名。○重關：幾重にも重なった関所。○蜀北門：蜀の北門をなしている。○上皇：玄宗を指す。○若雲屯：雲が集まるように群がっている。○少帝：若い天子。○肅宗皇帝を指す。○紫極：天子のいる所。帝座。朝廷を指す。○雙懸日月：太陽と月が空に並び懸かる。○乾坤：天と地。この世界を指す。

（参考文献）『唐詩選』

★ 省中題新植雙松

省中 新植の双松に題す

唐 裴夷直

端坐高宮起遠心

端坐たんざの高宮 遠心を起こし

雲高水闊共幽沈

雲高く 水闊ひろくして 共に幽沈ゆうちん

更堂寓直將誰語

更堂に寓直ぐうちよくして 將まさに誰にか語らんとす

自種雙松伴夜吟

自みづから双松そうしようを種え 夜吟やぎんを伴ともにす

【語釈】

○省中：宮中。○題：書き付ける。題として詩を作る。○端坐：正座。○遠心：遠いことまで感じる心。○幽沈：閑かに世の中から隠れる。○更堂：宮中の堂の一つ。○寓直：順番の宿直。○雙松：二本の松。

★宮詞

宮詞

唐 王建

金殿當頭紫閣重
 金殿きんでんの當頭とうとう 紫閣しかく重なり
 仙人掌上玉芙蓉
 仙人せん掌上しやうじやう 玉芙蓉ぎよくふやう
 太平天子朝元日
 太平たいへいの天子てんし 朝元ちやうげんの日
 五色雲車駕六龍
 五色ごしきの雲車うんしや 六龍りくりゆうを駕がす

【語釈】

○宮詞：宮中の瓊事を詠った詩。○金殿：黄金色の宮殿。○當頭：頭の上に来る。○紫閣：紫色の樓閣。○仙人掌：承露盤（飲むと不老長寿とされた露を受ける盤）を捧げる仙人の像の掌（仙掌ともいう）。○玉芙蓉：承露盤が蓮の花の形をしている。○朝元日：元旦に朝見の儀が行われる。○雲車：非常に高さの高い車（皇帝の御車）。○六龍：天子の車に駕する六頭の馬。

（参考文献）『三体詩』

★獻壽詞

獻壽詞

唐 王涯

宮殿參差列九重
 宮殿しんし 參差しんしとして九重しんしに列す
 祥雲瑞氣捧堦濃
 祥雲しやううん 瑞氣ずいき 堦かいに捧こまげて濃ななり
 微臣欲獻唐堯壽
 微臣こんじ 獻けんぜんと欲ほす 唐堯とうぎやうの壽
 遙指南山對袞龍
 遙こんりゆうかに南山なんざんを指さし 袞龍こんりゆうに對たいす

【語釈】

○獻壽詞：長寿を祈る詩。○參差：不揃いなさま。○九重：宮中。○祥雲：めでたい雲。○瑞氣：めでたい雲気。○堦：きざはし。○唐堯壽：古の皇帝の長寿。○南山：終南山。○袞龍：皇帝の衣服、転じて皇帝。

★ 宮詞

宮詞

唐 王涯

瞳瞳日出大明宮
瞳々 日は出ず 大明宮
天樂遙聞在碧空
天樂 遙かに聞こえ 碧空に在り
禁樹無風正和暖
禁樹 風無くして 正和 暖かに
玉樓金殿曉光中
玉樓 金殿 曉光の中

【語釈】

○宮詞：宮中の瓊事を詠った詩。○瞳瞳：童童。盛んなさま。○大明宮：長安宮の北にある宮殿で皇帝の住居があり、朝見儀が行われるところ。○天樂：宮中の音楽。○禁樹：宮中の樹木。○正和：唐代の雅楽の名。○玉樓：美しい宮殿。○金殿：黄金色の宮殿。

★ 長安秋夜

長安の秋夜

唐 李德裕

内官傳詔問戎期
内官 詔 を伝え 戎期を問う
載筆金鑾夜始歸
筆を載せ 金鑾 夜 始めて帰る
萬戸千門皆寂寂
万戸千門 皆な寂々
月中清露點朝衣
月中の清露 朝衣に点ず

【語釈】

○内官：宮中に在勤している役人。○戎期：戦を始めるのに良い時。○金鑾：翰林学士。○萬戸千門：千門万戸。多くの家々。○寂寂：寂しく静かなさま。○月中：月明かりの中。○朝衣：朝廷に出る時に着る衣服。朝に着た衣服。

★ 秋日池上

秋日の池上

唐 徳宗

禁苑秋來爽氣多

禁苑 秋來たりて 爽氣多し

昆明風動起滄波

昆明 風動きて 滄波起こる

中流簫鼓誠堪賞

中流の簫鼓 誠に賞するに堪えたり

詎假橫汾發權歌

詎ぞ仮わん 汾に横たわりて 權歌を發するを

【語釈】

○禁苑：宮中の庭園。○爽氣：爽やかな氣。○昆明：昆明池（漢の武帝が長安城の西に掘らせた池）。唐にも在ったと思われるが所在不明。○滄波：おおおとした波。○簫鼓：音樂。○詎：どうして。○假：こう。○橫汾發權歌：漢の武帝の秋風辭「汎樓舳兮汾河，橫中流兮揚素波。簫鼓吹，發權歌，極歡樂兮哀情多。」

★ 洛陽秋夕

洛陽の秋夕

唐 杜牧

泠泠寒水帶霜風

泠々たる寒水 霜風を帶ぶ

更在天橋夜景中

更に 天橋は 夜景の中に在り

清禁漏閑煙樹寂

清禁の漏は閑かに 煙樹は寂たり

月輪移在上陽宮

月輪は移りて 上陽宮に在り

【語釈】

○泠泠：水や風の音の清らかなさま。○霜風：しもの氣を帯びた風。冷たい風。○天橋：洛陽の天津橋？。○清禁漏：宮中の水時計。○煙樹：靄にけむる樹木。○上陽宮：洛陽の宮殿の名。

★ 初秋寓直夜景

初秋寓直夜景

唐 鄭畋

鈴條無響閉珠宮

鈴條 響き無く 珠宮を閉ざす

小閣涼添玉藥風

小閣涼は添う 玉藥の風

枕簟滿牀明月影

枕簟 滿牀 明月の影

自疑身在五雲中

自ら疑う 身は五雲の中に在るか

【語釈】

○寓直：輪番制の宿直。○鈴條：鈴を鳴らすために付けた紐。翰林院に入る人が鳴らした。○珠宮：玉で飾った宮殿。○小閣：小さな楼閣。ここでは翰林院。○玉藥：花の名。玉藥花。○枕簟：枕とたかむしろ。寝具をいう。○滿牀：床に満ちる。

★ 宮詞

宮詞

唐 和凝

鳳池冰泮岸莎勻

鳳池 氷泮いて 岸莎勻し

柳眼花心雪裏新

柳眼の花心 雪裏に新なり

都是九重和暖地

都是是れ 九重 和暖の地

東風先報禁園春

東風先に報ず 禁園の春

【語釈】

○宮詞：宮中の瓊事を詠った詩。○鳳池：宮中の中書省の前にある池の名。○岸莎：池の岸に生えているはまなすけ。○勻：均しく生えそろうっている。○柳眼：柳の芽。○九重：宮城。○和暖：やわらぎ揺るぐこと。○東風：春風。○禁園：宮中の庭園。

★ 題館壁

館壁に題す

北宋 劉攽

壁門金闕倚天開

へきもん きんけつ
壁門 金闕 天に倚りて開く

五見宮花落古槐

五たび見る 宮花の古槐に落つるを

明日扁舟江海去

みょうじつ
明日 扁舟 江海に去り

却從雲氣望蓬萊

却つて 雲氣に従つて 蓬萊を望まん
ほうらい

【語釈】

○金闕：宮城。○宮花：宮廷に咲く花。○古槐：古いエンジュの樹。○雲氣：雲のように空中に現れる気。雲をいう。○蓬萊：東海の東にあって仙人が住んでいるという仙山。

★ 晩出左掖門

晩に左掖門を出す

宋 秦觀

金爵觚稜轉夕暉

きんしゃく こりよう
金爵の觚稜 夕暉に転ず

飄飄宮葉墮秋衣

ひょうひょう
飄々として 宮葉 秋衣に墮つ
お

出門塵漲如黃霧

門を出ずれば 塵 漲つて黄霧の如く
みなぎ
こうむ

始覺身從天上歸

始めて覚ゆ 身の 天上從り帰るを
よ

【語釈】

○左掖門：宮城の正門の左側の小さい門。○金爵：屋根に飾る銅鳳。○觚稜：とがった角。○飄飄：風に翻るさま。○天上：宮中。

★館中直宿書事

館中に直宿して事を書す

宋 韓駒

十載名山慣杖藜
杖藜じょうれいに慣れたり
清都直宿夢魂疑
清都ちよくしよくに直宿して夢魂疑う
卧聞長樂鐘聲近
卧ふして聞く長樂ちようがくの鐘聲の近きを
尚憶寒山半夜時
尚お憶ゆ寒山半夜の時

【語釈】

○直宿：宿直。○十載：十年。○杖藜：藜あかざの杖をつくこと。○清都：宮城。○夢魂：夢を見ている魂。○疑：迷う。混乱する。○長樂：宮殿の名。長樂宮。○寒山：寒山寺と思われる。張継「楓橋夜泊」。

★入直召對選德殿賜茶而退

宋 周必大

入直にゆうちよく 選德殿せんとくでんに召對しょうたいし茶を賜り而して退す

緑槐夾道集昏鴉
緑槐りよくかい 道さしはさを夾こんあみて昏鴉集まる
勅使傳宣坐賜茶
勅使でんせん 伝宣して坐して茶を賜わる
歸到玉堂清不寐
歸りて玉堂ぎつどうに到りて清くして寐いず
月鉤初上紫薇花
月鉤げっこう 初めて紫薇花しびかに上る

【語釈】

○入直：宮殿に入って宿直する。○召對：皇帝が臣下を召して政治についての意見を聞くこと。○選德殿：宮殿の名。○緑槐：緑のえんじゆ。○昏鴉：日暮れに飛ぶ烏。○傳宣：旨を伝え述べる。○玉堂：翰林院。○月鉤：釣り針のような月。○紫薇花：あじさい。

★ 直宿玉堂懷舊

玉堂に直宿して旧を懐う

宋 范成大

雪山刁斗不停搥

雪山の刁斗ちようとう搥うつを停とめず

夜把軍書敢顧家

夜軍書とを把とりて敢かえりえて家を顧みんや

珍重玉堂今夜夢

珍重す玉堂今夜の夢

靜聞宮漏隔宮花

靜かに聞きく宮漏きゆうろう宮花を隔わつを

【語釈】

○刁斗…どら。○搥…太鼓を敲く。○玉堂…翰林院。○宮漏…宮中の水時計の音。○宮花…宮中の花。

★ 早赴北宮

早に北宮に赴おもむく

金 趙 據

蒼龍雙闕鬱層雲

蒼龍そうりゆう雙闕そうけつ層雲うつ鬱うたり

湖水鱗鱗柳色新

湖水りんりん鱗々あたら柳色あらた新あらたなり

絶似江行看清曉

絶せえて似にたり江行せいぎやう清曉せいぎやうを看みるに

不知身是趁朝人

知しらず身みは是これ朝あに趁おもむく人ひとなるを

【語釈】

○早…朝早く。○北宮…宮殿の名。○蒼龍…東方の七宿の星。○双闕…二つの宮門。○層雲…重なり合った雲。○鬱…鬱蒼としている。○鱗鱗…麗しくて鮮やかな様。○絶…非常に。○清曉…清らかな暁。○朝…朝廷。

★赴閣雜賦

閣おもむに赴く雜賦

元 虞集

日出風生太液波

日出で風生じて太液たいえき波だつ

畫橋影裏彩船過

畫橋影裏がきょうえいり彩船過ぐ

橋頭柳色深如許

橋頭の柳色深きこと許この如し

應是偏承雨露多

應まさに是れ偏ひとえに雨を承けて露多かるべし

【語釈】

○太液：太液池。宮中に有る池の名前。○畫橋：彩られた橋。○彩船：彩られた船。○橋頭：橋のほとり。○偏：あまねく。○應：「まさにくすべし」と読み「きつとくであるに違いない。」の意。

★玉堂讀卷雜賦次韻

玉堂ぎよくどうどっかんぎつぷ讀卷雜賦次韻

元 虞集

千花覆檻柳垂絲

千花は檻かんを覆い柳は糸を垂たる

晝刻傳呼淑景遲

晝刻の伝呼でんこ淑景遅し

聖主自觀新進策

聖主みづか自ら觀かんず新進の策

侍臣簪筆立多時

侍臣かんぎ筆を簪し立つこと多き時

【語釈】

○玉堂：宮廷。○讀卷：書を読む。○次韻：他の詩と同じ韻字を同じ順で使って詩を作ること。○檻：おぼしま。○傳呼：伝えて呼ぶこと。○淑景：春の景色。○聖主：皇帝の尊称。○觀：目を通す。

★ 夏日閣中入直

夏日閣中入直 かじつ かくちゆう にゆうちよく

元 周伯琦

氷盤堆果進流霞

氷盤果堆く流霞進み か うえずたか りゆうか

中秘繡餘夕景斜

中秘繡余夕景斜なり ちゆうひつ はんよ

畫舫竟從園殿過

画舫竟に園殿に従って過ぎ がぼう つい えんでん

鳳麟洲上數荷花

鳳麟洲上荷花を数う ほうりんしゆうじよう かか

【語釈】

○閣中：宮殿の中。○入直：宿直する。○氷盤：氷を盛った盤。○流霞：流れるもや。○中秘：宮中の奥深いところ。○繡餘：本を紐解いた後。○画舫：彩られた船。○園殿：丸い宮殿。○鳳麟洲：州の名。○荷花：蓮の花。

★ 早朝口占

早に朝す口占 つと こうせん

明 錢 宰

四鼓皤皤起着衣

四鼓皤々起きて衣を着す とうとう

午門朝見猶嫌遲

午門に朝見して猶お遅きを嫌う

何時得逐田園樂

何れの時か田園樂を逐い得て でんえんらく お

睡到人間飯熟時

睡りて人間飯熟する時に到らん じんかん はん

【語釈】

○早朝：朝早く参内すること。○口占：書かないで作った即興の詩。○皤皤：太鼓の音の形容。○午門：北京紫禁城の正門。○田園樂：王維の田園樂其六を指すか。「桃紅復含宿雨，柳綠更帶朝煙。花落家童未掃，鶯啼山客猶眠。」○人間：民間の世界。○飯熟：朝飯が炊きあがる。

★春日應制

春日應制 しゅんじつ おうせい

明 吳伯宗

鍾阜嵯峨曉日紅
萬年佳氣鬱葱葱
蒼松翠竹知多少
總在祥雲五色中

鍾阜嵯峨にして 曉日紅なり
萬年佳氣鬱として 葱々
蒼松 翠竹 知んぬ多少ぞ
總て祥雲五色の中に在り

【語釈】

○應制：皇帝の命令により作った詩。○鍾阜：鍾山のこと、南京の東南にある山。○嵯峨：高く聳え立つさま。○佳氣：瑞兆の気。○鬱：雲や水蒸気が濃密になるさま。○葱葱：優れて気配のよいさま。○蒼松：あおみどりの松。○翠竹：緑の竹。○祥雲：めでたい雲。

★風雨早朝

風雨早に朝す つと ちよう

明 高啓

漏屋雞鳴起濕烟
蹇驢難借強朝天
却思春水江南岸
閒聽篷聲卧釣船

漏屋 雞 鳴いて 湿煙起こる
蹇驢 借り難けれども 強いて 天に朝す
却つて 思う 春水 江南の岸
閑かに 篷声を 聴き 釣船に 卧せしを

【語釈】蹇驢

○早朝：朝早く参内する。○漏屋：雨漏りのする家。○湿烟：湿った靄。○蹇驢：びっこ
の驢馬。○朝天：宮中に参内する。○却：振り返って。○江南：長江中下流の南岸地方。
○篷聲：船の篷窓にかかる雨音。

★ 早至闕下候朝

早つとに闕下けつかに至り朝ちやうに候こうす

明 高啓

月明立傍御溝橋

月明りつぽうに立傍ぎよこうきょうす 御溝橋

半啓宮門未放朝

半ひらば宮門すうりを啓たちまきて 未ほうちやうだ放朝せず

騶吏忽傳丞相至

騶吏すうり 忽たちまち伝ひらう 丞すうり相たちま至ひらると

火城如晝曉寒銷

火城しやう 画しやうの如しやうく 曉寒しやう 銷しやうす

【語釈】

○早：朝早く。○闕下：京城。○候朝：参内。○御溝橋：お堀の橋。○放朝：群臣が許されて参内すること。○騶吏：騎馬の従者。○火城：元日、冬至等の朝会に、数百の松明を灯した物。○銷：消える。

★ 望闕口號

闕けつを望むむ 口號

明 劉仔肩

閭闔排雲玉殿開

閭闔しやうかく 雲を排かして 玉殿開く

千官鵷鷺早朝迴

千官えんろ 鷺鷥そうちやう 早朝かえして迴る

不知誰獻王褒頌

知おらず 誰しやうか献ほうず 王褒しやうの頌ふた

得奉君王萬壽杯

奉ほうじ得ふたり 君王しやう 万寿ばんじゆの杯はい

【語釈】

○闔：宮城の門。○口號：書かないで作った即興の詩。○閭闔：宮城の正門。○玉殿：玉をちりばめた宮殿。○鵷鷺：秩序正しいことのとえ。○早朝：朝早く参内する。○王褒頌：漢の蜀の刺史であった王褒が作った「洞簫賦」のような天子の功徳を褒め称える賦。○君王：皇帝。○萬壽杯：長寿を願う酒。

★ 書事

事を書す

明 方孝孺

伏枕三旬不整冠
枕に伏し三旬冠を整えず
夢魂時復對金鑾
夢魂時に復た金鑾に対す
忽聞盛事披衣坐
忽ち聞く盛事衣を披いて坐すも
今日朝廷立諫官
今日朝廷諫官を立つと

【語釈】

○三旬…三十日。○夢魂…夢の中でのせつない気持。○金鑾…金鑾宮。翰林院のこと。○盛事…大事なこと。○披衣…衣を着る。○諫官…皇帝の行動を諫める官。

★ 夏日出文明門

夏日 文明門を出ず

明 薛瑄

文明門外柳陰陰
ぶんめいもんがいでいんいん
百轉黃鸝送好音
ひやくてんこうりこういん
行過禦溝迴望處
ぎよこうかいぼう
鳳凰樓閣五雲深
ほうおうろうかくごういん

【語釈】

○文明門…宮門の一つとおもわれるが不祥。○陰陰…木が茂って暗いさま。○百轉…さかに轉るさま。○黃鸝…高麗ウグイス。○禦溝…宮苑の流れに沿った路。○迴望…振り返って見る。○鳳凰樓…宮殿の楼の一つ、不祥。○五雲…五色の雲。

★被詔直内閣即事

詔を被り内閣に直す即事

明 胡儼

清曉朝回祕閣重

清曉 朝より回りにて 秘閣重なる

坐看宮樹露華濃

坐して看る 宮樹露華の濃なるを

緑窗朱戸圖書滿

緑窓 朱戸 圖書滿ち

人在蓬萊第一峰

人は蓬萊 第一峰に在り

【語釈】

○内閣：宰相の官署。○直：宿直する。○即事：事に触れてその場のことを題材として作る詩。○朝：朝廷。○祕閣：天子の蔵書を入れた倉庫。○宮樹：宮城の樹木。○露華：美しい露。○蓬萊：東海の東にあり仙人が住んでいるという伝説上の山。ここでは、そのたとえ。

★被詔直内閣即事

詔を被り内閣に直す即事

明 胡儼

浩蕩春風雨散絲

浩蕩たる春風 雨糸を散す

暗移春色上花枝

暗は春色を移し 花枝に上る

雲陰半捲龍樓晚

雲陰 半ば捲き 龍樓 晩る

正是詞臣退直時

正に是れ 詞臣 退直の時

【語釈】

○内閣：宰相の官署。○直：宿直する。○即事：事に触れてその場のことを題材として作る詩。○浩蕩：広く大きいこと。○暗：夜。○春色：春景色。○雲陰：雲のようにおおる。雲の影。○龍樓：太子の宮殿。○詞臣：文学侍従の臣。○退直：宿直明けて退出する。

★迎鑾曲

迎鑾の曲 げいらん

明邊貢

自采民風問老農
微行不遣近官從
那知天子關天象
到處雲成五色龍

みずか 自ら民風を采りて 老農に問う
微行 近官をして從わしめず
那なんぞ知らん 天子の天象に關するを
到る處 雲は五色の龍と成る

【語釈】

○迎鑾：天子の車駕を奉迎すること。○民風：民の風俗、習わし。○微行：おしのび。○天象：天氣。

★迎鑾曲

迎鑾の曲 げいらん

明邊貢

羽盖霓旌曉出遊
紺霞紅日抱江流
雲中帝子三千闕
海上仙人十二樓

うがい 羽盖 げいせい 霓旌 曉しゅつゆうに出遊す
紺霞 紅日 江を抱きて流る
雲中の帝子 三千闕
海上の仙人 十二樓

【語釈】

○迎鑾：天子の車駕を奉迎すること。○羽盖：王侯の車を被う物。○霓旌：儀仗の一つ。○紺霞を五色に染めて作った旗。○出遊：外に出る。○紺霞：紺色の霞。○闕：宮殿。

★ 迎變曲

迎變の曲 げいらん

明 邊 貢

弓如滿月向江開
箭插寒潮捲浪迴
水上鼉鼉莫深避
我皇元為射蛟來

弓は満月の如く江に向つて開く
箭は寒潮を挿して浪を捲いて迴る
水上の鼉鼉深く避くこと莫かれ
我が皇元蛟を射る為に來たる

【語釈】

○迎變：天子の車駕を奉迎すること。○鼉鼉：アオウミガメとワニ。○蛟：みずち。伝説上の龍の一種。

★ 迎變曲

迎變の曲 げいらん

明 邊 貢

揚子江頭駐六師
太平天子賞功時
紅雲影亂黃龍艦
白日光搖繡虎旗

揚子江頭六師を駐む ようすこうとう りくし
太平の天子功を賞する時
紅雲影は乱る黄龍の艦 こうりゆう かん
白日光は揺らぐ繡虎の旗 しゅうこ

【語釈】

○迎變：天子の車駕を奉迎すること。○六師：皇帝の軍。六軍。○黄龍艦：皇帝の威嚴を示す戦艦。○繡虎旗：虎を刺繡した旗。

★ 迎鑾曲

迎鑾の曲 げいらん

明 邊 貢

潮落江門煙水秋

潮は江門に落つ煙水の秋

雲帆八月過揚州

うんぱん 雲帆 ようしゅう 八月 揚州を過ぐ

兩京馳道三千里

ちどう 兩京の馳道 三千里

夾岸垂楊接御溝

さしはさ 岸を 夾む すいよう 垂楊 ぎようこう 御溝に接す

【語釈】

○迎鑾：天子の車駕を奉迎すること。○煙水：靄霞と水。靄が立った川。○雲帆：雲のよ
うに大きな帆（を持った船）。○兩京：北京と南京。○馳道：天子や貴人の通る道。おな
りみち。○御溝：禁中の堀。

★ 諸將入朝歌

諸將入朝歌

明 何景明

大將龍旗朝帝京

大將の龍旗 帝京に朝す

至尊親遣貴臣迎

至尊 親しく 貴臣をして迎えしむ

侍中獨領嫖姚部

侍中 独り領す 嫖姚の部

戰馬皆歸龍虎營

戰馬 皆な歸る 龍虎の營

【語釈】

○入朝：来朝して天子に謁見すること。○龍旗：龍の旗印。○帝京：帝都。○朝：参内す
る。○至尊：天子。○侍中：門下省の長官。○嫖姚：霍去病。○部：軍隊。○龍虎營：帝
京の軍營。

★ 諸將入朝歌

諸將入朝歌

明 何景明

群公陪宴柏梁臺
群公宴に陪す 柏梁臺
殿上傳呼萬壽杯
殿上 伝呼す 万寿の杯
元戎節鉞來江上
元戎 節鉞 江上に來り
使者樓船泛海迴
使者の樓船 海に泛びて迴る

【語釈】

○入朝：来朝して天子に謁見すること。○陪宴：貴人の宴会に陪席する。○柏梁臺：漢の武帝が築いた台で、ここではそれを真似た楼台。○萬壽杯：長寿の酒を入れた盃。○元戎：軍の総帥。○節鉞：皇帝から將軍に与えられた鉞。○樓船：櫓を持った船。

★ 諸將入朝歌

諸將入朝歌

明 何景明

戰士歸來盡武冠
戰士 歸り來りて 尽く武冠
紫纓騶馬跨金鞍
紫纓 騶馬 金鞍に跨す
可憐萬國城頭月
憐れむべし 万国 城頭の月
照見沙場白骨寒
照し見る 沙場 白骨の寒きを

【語釈】

○入朝：来朝して天子に謁見すること。○紫纓：紫色の冠のひも。○騶馬：よく軍を率いる者。○金鞍：金の鞍。○可憐：感嘆の言葉。ああ。○沙場：沙漠。

★ 山曉望大内作

山曉 大内を望みて作る

明 湯 珍

龍樓佳氣繞鐘山

龍樓の佳氣 鐘山を繞り

鳳瓦參差苑樹閑

鳳瓦 參差として 苑樹閑なり

一片日華凌曉霽

一片の日華 曉を凌ぎて霽れ

金光浮動翠微間

金光 浮動す 翠微の間

【語釈】

○山曉：山の曙。○大内：天子の寢所。○龍樓：太子の宮殿。○佳氣：めでたい気。○鐘山：南京の東南にある山。○鳳瓦：鳳をかたどった瓦。○苑樹：御苑の樹。○日華：太陽の光。○翠微：薄緑のもや。

★ 萬壽節

萬壽節

明 石 星

憶昔聯班覲壽闈

憶う 昔 連班して 寿闈に覲え

御鑪香焰靄金扉

御鑪の香焰 金扉に靄むを

逢時欲上千秋鏡

時に逢いて 上らんと欲す 千秋鏡

雲水蒼茫隔京畿

雲水 蒼茫として 京畿を隔つ

【語釈】

○萬壽節：天子の誕生日。○聯班：次位を連ねる。○壽闈：？○闈：天子に謁見する。○御鑪：宮中の香炉。○香焰：香木の日。○千秋鏡：？○蒼茫：水などの青々として果てしないさま。○京畿：都。

★苑中寓直

苑中寓直 えんちゆうぐうちよく

明 夏言

湧玉亭前放夜舟

湧玉亭前 夜舟を放つ ゆうぎよくていぜん

碧荷香静雨初收

碧荷 香静かにして 雨初めて収まる へきか

遥看北岸紅煙裏

遥かに見る 北岸紅煙の裏 うち

水殿珠簾盡上鉤

水殿の珠簾 尽く鉤に上せらるを しゅれん ことごと こう じょう

【語釈】

○苑中…御苑の中。○寓直…順番の宿直。○湧玉亭…亭の名。不祥。○碧荷…
緑の蓮の葉。○紅煙…赤い靄。○水殿…水中又は水辺の殿堂。○珠簾…たますだれ。○鉤
…簾をまきあげて掛ける鉤。

★夏日應制

夏日 応制

明 張昇

荷亭翠柳晝網縵

荷亭の翠柳 晝網縵 いんろうん

柳外何妨逗火雲

柳外 何ぞ妨げん 火雲を逗むるを かうん とど

太液風來涼似水

太液 風来たりて涼水に似たり

瑤琴一曲奏南薰

瑤琴 一曲 南薰を奏す ようきん

【語釈】

○應制…皇帝の命令で作った詩。○荷亭…蓮で囲まれた亭。○翠柳…緑色の柳。○網縵…
天地の気が入り交じって盛んなさま。○火雲…夏の雲。雷雲。○太液…太液池。この時代
北京の宮城の西苑にあった。○瑤琴…玉で飾った琴。○南薰…曲名？

★瀛臺賜宴恭紀

瀛台に宴を賜わり恭紀す

清 王士禛

朝來勅賜宴淋池

朝來 勅賜して淋池に宴す

桂檝蘭舟待水嬉

桂檝 蘭舟水を待ちて嬉ぶ

渡盡雲沙回首望

雲沙を渡尽して首を回らして望めば

綠楊風外颭黃旗

綠楊 風外 黃旗颭ぐ

【語釈】

○瀛臺：太液池の側にあつた樓台。○恭紀：敬つて記す。○朝來：朝から。○勅賜：詔勅を賜ること。○淋池：陝西省西安市付近にあつた池の名。○桂檝：桂の木で作つた梶。○蘭舟：木蘭の木で作つた舟。○雲沙：雲と沙。○渡盡：渡る。盡は助字。○黃旗：黄色い旗。皇帝の儀仗の一つ。

★瀛臺賜宴恭紀

瀛台に宴を賜わり恭紀す

清 王士禛

越羅呉錦尚方來

越羅 呉錦 尚お方來

黃紙書名繡作堆

黃紙 名を書して繡 堆を作す

次第鴈行齊拜賜

次第 鴈行 齊く賜を拝し

涼蟬聲裏謝恩廻

涼蟬声裏 恩を謝して廻る

【語釈】

○瀛臺：太液池の側にあつた樓台。○恭紀：敬つて記す。○越羅：越の地方で産する目が細くてやわらかな絹織物。○呉錦：呉の地方で産する美しい錦。○方來：まさに来る。○黃紙：詔書。○繡：ぬいとり、えぎぬ。○次第：順に従つて。○鴈行：朝廷に並ぶ官吏の行列。○賜：皇帝から賜つたもの。

★ 雪中直南書房

雪中 南書房に直す

清 張英

爐煙暖散墨池氷

炉煙 暖は散ず 墨池の水

滿苑瑤華夜色澄

滿苑の瑤華 夜色澄む

秘閣小臣沾聖澤

秘閣の小臣 聖沢に沾う

梅花香裡讀書燈

梅花香裏 讀書の灯

○南書房：南にある書室。○直：宿直する。○爐煙：香炉の煙。○墨池：硯の墨の溜まる凹部。○瑤華：玉のように美しい花。○夜色：夜の景色。夜の気配。○秘閣：天子の蔵書を収める館。○聖澤：天子のめぐみ。

★ 行宮後苑賜宴恭賦

行宮の後苑にて宴を賜わり恭いて賦す

清 查慎行

華貂環座盡公侯

華貂に環座するは 尽く公侯

特許詞臣與宴遊

特に許す 詞臣 宴遊を与にするを

滿引金樽歌既醉

金樽を滿引して 歌 既に酔う

謝恩齊上木蘭舟

恩を謝し 齊しく上る 木蘭の舟

【語釈】

○華貂：貂の皮で作った美しい敷物。○環座：丸くなって座る。○公侯：貴族。○詞臣：文学侍従の臣。○金樽：黄金の酒樽。酒樽の美称。○滿引：飲み干す。

★ 圓暎園泛舟恭賦

圓暎園に舟を泛べ 恭いて賦す

清 張延玉

煙波清廻泛輕航

煙波 清廻し 輕航を泛ぶ

蘋末風生六月涼

蘋末 風は生ず 六月の涼

此景祗應圖畫見

此の景祗だ 応に図画に見るべし

十州二島水中央

十州 二島 水の中央

【語釈】

○圓暎園…不祥。○煙波…水面のもや。○輕航…軽い舟。早い舟。○蘋末…うきくさ、水草の上。○祗…ただ。○應…「まさにくすべし」と読み、「きつとくだろう、きつとくに違いない」の意。

★ 共送回變

回變を共送す

清 除 倬

龍帆除颺彩雲飄

龍帆 除に颺がり 彩雲 飄 える

拜送霓旌望斗杓

霓旌を拜送し 斗杓を望む

白髮雖甘青嶂老

白髮 青嶂に老を甘すと 雖も

丹心猶戀紫宸朝

丹心 猶お恋ゆ 紫宸朝

【語釈】

○回變…帰る天子の船。○龍帆…天子の船の帆。○彩雲…朝日や夕陽に照らされて彩られた雲。○霓旌…五色の羽毛の旗。皇帝の儀仗の一つ。○斗杓…北斗七保星。○拜送…拝み見送る。○青嶂…切り立った青山。○丹心…真心。○紫宸朝…北京の紫禁城。

★ 試院即事

試院即事 しいうんそくじ

清 陳沂震

畫戟森嚴晝漏遲

畫戟 がげき 森嚴 しんげん 晝漏遲 がろう し

凝香燕寢日斜時

香を凝す えんしん 燕寢 えんしん 日斜なる時

柝聲繞院人聲寂

柝聲 たくせい 院を繞ぐり めぐ 人聲寂たり

滿箔春蠶正吐絲

滿箔 まんぱく の 春蚕 しゅんさん 正に糸を吐く は

【語釈】

○試院：試験場。○即事：事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○畫戟：色彩や模様を施した鉞。○森嚴：おごそかなさま。○晝漏：色彩や模様を施した水時計。○燕寢：帝王の居室。○柝聲：拍子木の音。○滿箔：まぶし（糸を吐くようになった蚕を移して繭を作らせるためのすだれ）一杯の。○春蠶：春の蚕。

★ 放内苑諸禽

内苑に諸禽を放つ ないえん しよきん

明 陳沂

多年調養在雕籠

多年 ちようよう 調養 ちようよう 雕籠に在り

放出初飛失舊叢

放出 きゆうそう 初めて飛び きゆうそう 旧叢を失う

祇為恩深未能去

祇 まさ に 恩深きが為に あた 去る能わず

朝來還繞上陽宮

朝來 ちようらい 還り繞る めぐ 上陽宮 じようようきゆう

【語釈】

○内苑：宮中の庭園。○調養：養育する。○雕籠：精密にできた鳥かご。○舊叢：古い住处。○祇：まさに。○朝來：明け方から。○上陽宮：宮殿の名。洛陽の東南にあった。

絶句類選 卷之三 宴會類

★ 宴春源

春源に宴す

唐 王昌齡

源向春城花幾重

みなもと しゅんじょう
源は春城に向い花は幾重いくちよう

江明深翠引諸峯

江明かにして深翠しんすい諸峯を引く

與君醉失松溪路

君と酔いて失す松溪しょうけいの路

山館寥寥傳暝鐘

山館りょうりょう寥寥めいししょう暝鐘を伝う

【語釈】

○春城：春の街。○深翠：濃いみどり。○山館：山の旅館。○寥寥：しんととして静かなさま。○暝鐘：晩鐘。

★ 龍標野宴

龍標野宴 りゅうひょうやえん

唐 王昌齡

沅溪夏晚足涼風

沅溪 げんけい 夏晚 涼風足る

春酒相攜就竹叢

春酒 あいたずさ 相携えて竹叢に就く ちくそう

莫道絃歌愁遠謫

道 い 莫 なか 絃歌 げんか 遠謫 えんたく を愁うと

青山明月不曾空

青山 明月 かっ 曾て空しからず

【語釈】

○龍標：湖南省黔陽県。王昌齡が謫されたところ。○沅溪：川の名、沅水ともいう。○春酒：春に醸した酒。○竹叢：たけやぶ。○絃歌：音楽と歌。○遠謫：遠くに左遷されること。

★ 李四倉曹宅夜飲

李四倉曹宅にて夜飲す りしせうせう

唐 王昌齡

霜天留飲故情歡

霜天 そうてん に留飲 りゆういん すれば 故情 こじょう 歡 よろこ ぶ

銀燭金爐夜不寒

銀燭 金爐 夜寒からず

欲問吳江別來意

問わんと欲す 吳江 べつらい 別來の意

青山明月夢中看

青山 明月 夢中に看る

【語釈】

○李四倉曹：不祥。四は排行。倉曹は官職名。○霜天：霜が降りる日の空。○留飲：留ま
って飲む。○故情：旧情。○銀燭：銀の燭台。○金爐：金の香炉。○吳江：吳淞江の別
名。江蘇省の県名。○別來：別れてから。

★ 洛陽客舍逢祖詠留宴 洛陽の客舎にて祖詠に逢いて留宴す 唐 蔡希寂

綿綿漏鼓洛陽城 めんめん ろうこ 綿々たる漏鼓 洛陽城

客舍貧居絶送迎 かくしゃ ひんきよ 客舍 貧居 送迎を絶つ

逢君買酒因成醉 君に逢いて酒を買い 因りて酔を成す

醉後焉知世上情 醉後 焉ぞ知らん 世上の情

【語釈】

○客舍…旅館。○祖詠…盛唐の詩人。洛陽の人。王維とは幼友達。○留宴…人を引きとどめて、酒を酌み交わすこと。○綿綿…長く続いて絶えないさま。○漏鼓…水時計の時刻を知らせるために鳴らす太鼓。○客舍…旅館。○絶送迎…客を送り迎えることがない。○焉…「いづくんぞくん（や）」と読む。「どうして〜であろうか、いや〜でない」と訳す。反語の形。○世上情…俗世間のつまらぬ義理人情。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 山行留客 山行 客を留む 唐 張旭

山光物態弄春輝 山光 物態 春輝を弄す

莫爲輕陰便擬歸 輕陰の爲に 便ち歸を擬すること莫かれ

縱使清明無雨色 縱使 清明 雨色無くも

入雲深處亦沾衣 入雲 深き処 亦た 衣を沾す

【語釈】

○山光…山の輝き。○物態…物のありさま。○春輝…春の日光。陽春の和気。○弄…めぐる。○輕陰…薄曇り。○便…ただちに。○擬…凶る。○縱使…たとえ。○清明…清明節。二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日ごろに当たる。○雨色…雨の気配。

★ 酒泉太守席上醉後作

酒泉の太守 席上 醉後の作

唐 岑 参

酒泉太守能劒舞

酒泉の太守 能く劒舞す

高堂置酒夜擊鼓

高堂に置酒して夜鼓を撃つ

胡笳一曲斷人腸

胡笳一曲 人の腸を断つ

座上相看淚如雨

座上相看 淚雨の如し

【語釈】

○酒泉：郡名。今の甘肅省酒泉市。○能：上手に。○高堂：大広間。○置酒：酒宴を開くこと。○胡笳：北方民族の胡人が吹く葦あしの葉の笛。物悲しい音色を出す。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦

唐 杜 甫

書堂にて飲む 既に夜 復た李尚書を邀え 下馬して月下に賦す

湖月林風相與清

湖月 林風 相与に清し

殘尊下馬復同傾

殘尊 下馬して 復た同に傾く

久拌野鶴如霜鬢

久しく拌つ 野鶴如たる 霜鬢

遮莫鄰雞下五更

遮莫 鄰雞の五更を下ぐるを

【語釈】

○書堂：胡侍御の書齋を指す。○李尚書：李之芳。○殘尊：残った酒。○拌：うつちらかす。○野鶴如：如野鶴の倒置法。○双鬢：左右の鬢の毛。○遮莫：ままよ。○隣雞：隣りの鶏。○五更：今の午前四時。○下ぐる：鶏が時を告げること。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 宴詞

宴詞

唐 王之渙

長堤春水綠悠悠

長堤 春水 綠悠悠
みどりゆうゆう

吠入漳河一道流

吠は漳河に入りて 一道流る
けん

莫聽聲聲催去權

聽く莫れ 声々去權を催すを
きよとう うなが

桃溪淺處不勝舟

桃溪 淺き処 舟に勝えず
とうけい

【語釈】

○悠悠：他と変わりになくゆったりしたさま。○吠：谷。○漳河：湖北省を流れる川。○聲：此処では權の音。○去權：船が離れていく。○桃溪：桃の花が咲いている溪。○勝舟：（旅愁の重みで）舟が進まない。

★ 宴城東莊

城東の莊に宴す

唐 崔敏童

一年始有一年春

一年 始めて 一年の春有り

百歲曾無百歲人

百歲 曾て 百歲の人無し

能向花前幾回醉

能く 花前に向いて 幾回か酔わん
よ お

十千沽酒莫辭貧

十千 酒を沽って 貧を辞する莫れ
か

【語釈】

○城東莊：長安の東郊にある庵の玉山草堂。○一年：一年経つ。○始：やっと。はじめ。○能：～できる。～が可能である。○向：～に。～にて。～に於いて。○花前：（春の）花の咲く所で。○十千：一万錢。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 奉和家兄宴城東莊

家兄の「城東の莊に宴す」に和し奉る

唐

崔惠童

一月主人笑幾回

一月主人笑うこと幾回ぞ

相逢相識且銜杯

相逢あいあ相識あいし且しばらく杯ふくを銜まん

眼看春色如流水

眼まに看る春色流水の如し

今日殘花昨日開

今日の殘花は昨日開きし

【語釈】

○城東莊：長安の東郊にある庵の玉山草堂。○一月：一月のうちで。値：思いがけなく出会うこと。且：ひとまず。ともかく。銜杯：酒を飲む。○春色：春の景色。○殘花：枝に散り残っている花。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 對月荅元明府

月に対して元明府に荅う

唐

戴叔倫

山下孤城月上遲

山下の孤城 月の上ること遅し

相留一醉本無期

相留あいとどめて一醉もと本期無し

明年此夕遊何處

明年ゆ此の夕 何れの処にか遊ばん

縱有清光好對誰

縱たとい清光有りととも 好く誰にか對せん

【語釈】

○元明府：不祥。○孤城：ぼつりとある街。○明府：太守。県令。○期：機会。約束。○縱：たとえ。○清光：清らかな月の光。

★楚州韋中丞筓篔

楚州韋中丞の筓篔

唐 張祐

千重鉤鎖撼金鈴

千重せんちょうの鉤鎖こうさ金鈴きんねいを撼ゆすり

萬顆真珠瀉玉瓶

萬顆かの真珠まゆくへい玉瓶ぎよくへいに瀉そそぐ

恰值滿堂人欲醉

恰あたかも値あう滿堂まんどうの人ひと醉よめわんと欲ほす

甲光纔觸一時醒

甲光かこう纔わずかかに觸ふれて一時いちじに醒さむ

【語釈】

○楚州：江蘇省淮安市。○韋中丞：不祥。中丞は官職で監察官。○筓篔：樂器の一首。○千重：いくえにも重なった。○鉤鎖：彎曲した鎖。○撼：揺する。動かす。○萬顆：多くの粒。○玉瓶：玉でできた瓶。○恰：ちょうど。○恰：ちょうど。○値：でくわす。○甲光：？。○觸：ふれる。さわる。

★花下醉

花下に酔う

唐 李商隱

尋芳不覺醉流霞

芳はなを尋たずねて覺しえず流霞りゅうかに酔ようを

倚樹沈眠日已斜

樹よに倚よりて沈眠ちんみんすれば日は已いに斜しやめなり

客散酒醒深夜後

客散きやくさんじ酒さけは醒さむ深夜しんやの後のち

更將紅燭賞殘花

更さらに紅燭こうしやくを將もつて殘花ざんかを賞あせん

【語釈】

○流霞：たなび動くもや。○沈眠：深く眠り込む。○紅燭：赤い灯火。○殘花：散り残りの花。

★ 三月晦日贈劉評事

三月晦日 劉評事に贈る

唐 賈島

三月正當三十日
三月正に当たる三十日
風光別我苦吟身
風光 我が苦吟の身に別る
共君今夜不須睡
君と共に今夜睡るを須いず
未到曉鐘猶是春
未だ 曉鐘に到らざれば 猶お是れ春

【語釈】

○晦日：一ヶ月の月末の日、三月晦日は春の最後の日。○評事：大理寺（最高裁判所）に属する下級の裁判官。○正當：ちょうどになる。○風光：美しい自然のながめ。○苦吟：苦心して詩歌を作ること。○不須：く不及ばない。もちいず。○睡：ねむる。○曉鐘：黎明を告げる鐘の音。○猶是：なおまだくだ。

（参考文献）『三体詩』

★ 貴侯園

貴侯園

宋 穆脩

名園雖自屬侯家
名園 自ら侯家に屬すと 雖も
任客閒遊到日斜
客の閑遊に任せて 日の斜めなるに到る
富貴位高無暇出
富貴位高 出ずる暇無し
主人空看折來花
主人空しく看る 折來の花

【語釈】

○貴侯園：貴人公侯の庭園。○侯家：貴人の家。○閒遊：静かにのんびりと遊ぶ。○位高：位の高い人。○折來：人が折ってしまったあと。來は助字。

★ 謝寇相公見訪

寇相公の訪れらるに謝す

宋 魏野

晝睡方濃向竹齋

昼睡方に濃く竹齋に向う

柴門日午尚慵開

柴門日午尚お開くに慵し

驚迴一覺遊仙夢

驚迴す一覺遊仙の夢

村巷傳呼宰相來

村巷伝呼す宰相來たると

【語釈】

○寇相公：不祥。相公は宰相のこと。○晝睡：昼寝。○竹齋：竹を植えた書室。○向：場所、対象を示す前置詞。○柴門：芝で作った粗末な門。謙遜して使う。○日午：正午。○驚迴：驚く？○一覺：夢が覚めること。○遊仙夢：仙界に遊ぶ夢。○村巷：村里。

★ 過外弟飲

外弟に過ぎりて飲す

宋 王安石

一自君家把酒杯

一たび君が家にて酒杯を把りて自り

六年波浪與塵埃

六年波浪と塵埃と

不知烏石岡邊路

知らず烏石岡辺の路

至老相尋得幾回

老い至りて相尋ぬること幾回を得ん

【語釈】

○外弟：義理の弟。○過：「によぎる」と読み訪れる。○波浪：波乱の人生。○塵埃：俗世間の生活。○烏石岡：岡の名。所在地不定。

★示公佐

公佐こうさに示す

宋 王安石

殘生傷性老耽書
年少東來復起予
各據槁梧同不寐
偶然聞雨落階除

生をざん殘し性を傷つけ老いて書に耽ふける
年少東來復また予を起す
各おのの槁梧よに拋ともり同いに寐ねず
偶然雨の階除かいじょに落つるを聞く

【語釈】

○公佐：蘇東（？）一〇七九，磁州滏陽（今河北磁縣）人。○殘：損なう。○年少：若いとき。○東來：東方にやってくる。○起予：自分の心を開き明らかにする。○槁梧：琴。○據：寄りかかる。○階除：階段。

★答師厚夜過見詒

師厚が夜過ぎて詒よせらるるに答う

宋 韓維

幽居直欲學忘言
忍對賢豪遂默然
談到精微夜寥闐
秋風時下竹窗前

幽居ゆうきよ直ただ言を忘るを學まなばんと欲す
忍しのびて賢豪けんごうに対して遂ついに默然もくぜん
談だんじて精微せいゐに到り夜寥闐りようせん
秋風時下竹窓の前

【語釈】

○師厚：不祥。○幽居：僻地の静かな住まい。○賢豪：賢く優れた者。○默然：黙っているさま。○寥闐：しずかで物寂しいさま。○竹窗：竹林に面した窓。

★ 贈孫莘老

孫莘老に贈る

宋 蘇軾

嗟予與子久離群
耳冷心灰百不聞
若對青山談世事
當須舉白便浮君

嗟す 予と子久しく離群たるを
耳冷 心灰にして 百たび聞かず
若し 青山に対し 世事を談ずれば
當に 須く 白を挙げ 便ち君を浮すべし

【語釈】

○孫莘老：孫覺。○離群：友達から離れていること。○耳冷：耳が聞こえないこと。○心灰：灰のような心。○青山：青青と木の茂っている山。○世事：俗世間のこと。○當：まさに。ほんとうに。○須：すべからくすべしと読み、当然くすべきであるの意。○白：盃。○浮：罰杯を飲ませる。

（参考文献）『漢詩体系』

★ 吉祥寺賞牡丹

吉祥寺にて牡丹を賞す

宋 蘇軾

人老簪花不自羞
花應羞上老人頭
醉歸扶路人應笑
十里珠簾半上鉤

人は老いて花を簪し 自は羞じず
花は応に羞ずべし 老人の頭に上るを
酔いて帰り 路人に扶けらる 応に笑うべし
十里の珠簾 半ば鉤に上せらる

【語釈】

吉祥寺：杭州にあった寺院名、ボタンの名所。賞：見て楽しむ。簪：かんざしをさす。不
自：別にくとは思わない。醉歸：酔って帰ること。扶：支える。応：応（まさ）にくすべ
し、当然：であろう。珠簾：玉スダレ。鉤：簾をとめるかぎ。

（参考文献）『中国詩人選集二―5』

★ 集于昌齡之舍

于昌齡の舍に集う

宋 孔平仲

一醉昏昏萬不知
一たび酔いて 昏昏 万 知らず
黄昏促席夜深歸
黄昏 席を促して 夜深くして 歸る
明朝惟見家人說
明朝 惟だ見る 家人の 説くを
昨夜歸時雪滿衣
昨夜 歸る時 雪衣に 満つと

【語釈】

○于昌齡…不祥。○昏昏…うつらうつらしているさま。○黄昏…たそがれどき。

★ 和微之飲む楊路分家聽琵琶

宋 韓維

微之の「楊路分家に飲して琵琶を聴く」に和す

朱弦四十昔嘗聞
朱弦 四十昔 嘗て 聞く
藝不論多貴絶倫
芸は 多を論ぜず 絶倫を 貴ぶ
少損新聲放平淡
少し 新声を損い 平淡を 放ち
免教醉殺白頭人
白頭人を 醉殺せしむことを 免れしめよ

【語釈】

○微之…不祥。○楊路分家…不祥。○嘗…曾て。常に。○絶倫…同類からかけ離れていること。○新聲…新しい曲。○平淡…あっさりしていること。○白頭人…白髪頭の老人。○醉殺…ひどく酔わせる。

★小酌元衛弟聽雨

元衛弟と小酌して雨を聴く

宋 樓 鑰

小閣臨流暑氣清

小閣流れに臨みて 暑氣清く

藕花的的照人明

藕花 的々 人を照らして 明かなり

移牀更近欄邊坐

牀を移して 更に 欄辺に近く坐せば

要聽棋聲雜雨聲

要 棋聲の雨声に雜じるを聴かん

【語釈】

○元衛弟…不祥。○小酌…軽く酒を飲む。○藕花…蓮の花。○的的…明らかさま。○欄邊…手すりのほどり。○要…必ず。きつと。○棋聲…碁を打つ音。

★春日同社會飲張園小樓得飛字

宋 史彌寧

春日 同社 張園小樓に會飲して 飛の字を得たり

殘紅委地水平池

殘紅 地に委られて 水池に平かなり

楊柳陰陰鶯亂飛

楊柳 陰々 鶯 乱れ飛ぶ

山色滿樓新雨後

山色 樓に滿つ 新雨の後

一簾風絮卷春歸

一簾の風絮 春を卷いて帰る

【語釈】

○同社…仲間。同学の者。○張園小樓…樓の名。不祥。○得飛字…くじ引きで韻字を決めるときに「飛」の字が当たったこと。○殘紅…散り残りの花。○委…見捨てる。捨てる。○陰陰…葉が茂ったさま。○山色…山の景色。○一簾…連なって下るさま。○風絮…風に飛ぶ柳絮。

★次韵李端叔題孔方平書齋壁

宋 釋道潜

李端叔りたんしゆくの「孔方平こうほうへいの書齋へきの壁へきに題す」に次韻す

端居終日少逢迎

端居たんきよ終日ほうげい逢迎まれ少なり

佳客時來一座傾

佳客けいかく時に來たりて一座傾むく

不見諸郎事弦管

見ず諸郎しよらう弦管を事とすを

幽窗唯有讀書聲

幽窓ゆうそう唯だ有り讀書の聲

【語釈】

○李端叔：李之儀。北宋の官僚で詩人。○孔方平：孔夷。北宋の隱者。○題：詩を壁に書き付けること。○次韻：同じ韻字を同じ韻所で用いて詩を作ること。○端居：ふだん。○逢迎：人を迎え接待する。○佳客：良い客。○一座：同じ席に座せる者。○傾：酒を飲む。○諸郎：もろもろの男兒。○幽窓：静かな窓。

★飲歸

飲みて帰る

元 方回

激灑紅深百盞澆

激灑れんえん紅こう深くして百盞澆せんせぞぐ

醉歸不覺路迢迢

醉歸し覺えず路ちようちようの迢々たるを

臨分情味殷勤甚

臨分わかれに臨みて情味じようみ殷勤いんぎんなること甚し

暗遣人扶過畫橋

暗あんに人をして扶たすけて画橋よきを過らしむ

【語釈】

○激灑：水面が月や日の光に映じてきらめくさま。○百盞澆：沢山の酒を頂いた。○迢迢：遙かに遠いさま。○分：別れ？○情味：心のおもむき。○暗：ひそかに。○畫橋：模様や色彩で色どられた橋。

★寒食逢杜賢良飲

寒食 杜賢良に逢いて飲む

明 高啓

楊柳無煙江水長

楊柳 煙無く 江水長し

鄰家風雨杏餠香

鄰家の風雨 杏餠香し
きょうとうかんぱ

逢君共把金陵酒

君に逢い 共に把る 金陵の酒
と

忘却今朝在異郷

忘却す 今朝 異郷に在るを
こんちよう

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目、この日を挟んで前後の計三日間は火を使うことを禁じた。

○杜賢良：杜という徳と才能のある人。○煙：靄、霞。○杏餠：杏で作った飴。寒食には火が使えないので、飴が好まれた。○金陵：南京。

★趙待製席上

趙待製の席上
ちようたいせい

明 沈夢麟

春城飛絮日顛狂

春城の飛絮 日に顛狂
てんきよう

簾幕風微燕子忙

簾幕 風微かにして 燕子忙し
れんぼく かす えんし

醉後不知羅袖薄

酔後知らず 羅袖の薄さを
すいご らしゆう

牡丹花上月如霜

牡丹花上月 霜の如し
ぼたんかじよう

【語釈】

○趙待製：不祥。○飛絮：飛ぶ柳絮。○顛狂：挙動が落ち着かないさま。○簾幕：簾と幕。○羅袖：薄絹の袖。

★ 贈藩介軒

藩介軒に贈る

明 藩 翊

錦繡湖山罨畫樓

錦繡湖山罨画楼

君家住在小瀛洲

君が家に住して小瀛洲に在り

洞簫吹上花間月

洞簫吹き上ぐ花間の月

十二珠簾不下鉤

十二の珠簾鉤を下らず

【語釈】

○藩介軒：不祥。○錦繡：錦と縫い取りのある着物。美しい物のたとえ。○罨畫樓：彩色した檜の楼。○瀛洲：東海中にあって仙人が住むと伝えられる山。○洞簫：尺八に似た竹製の管楽器。○珠簾：玉すだれ。○鉤：簾を捲き上げた紐をかける金具。

★ 席上偶成

席上偶成

明 孫一元

楊花燕子弄春柔

楊花燕子春柔を弄す

醉倚箜篌笑未休

酔いて箜篌に倚り笑い未だ休まず

依舊清風明月好

旧に依り清風明月好し

買船吹笛過滄洲

船を買い笛を吹きて滄洲を過ぐ

【語釈】

○楊花：柳絮。○燕子：つばめ。○春柔：春の和らぎ。○弄：めぐる。○箜篌：楽器の一種。○依：従う。○滄洲：河北省滄県の東南地方。隱棲の地とされた。

★ 招張少坤

張少坤を招く

明 李攀龍

蕭蕭落木下江干

蕭々たる落木 江干を下る

秋老東林白露寒

秋老いて 東林 白露寒し

爲報陶家新酒熟

為に報ず 陶家 新酒熟すと

黄花三徑待君看

黄花 三徑 君を待ちて看る

【語釈】

○張少坤…不祥。○蕭蕭…物寂しい様子や音の形容。○江干…江のふち。○秋老…秋がふけて過ぎ去ろうとする。○陶家…陶淵明の家。○黄花…ここでは菊。○三徑…隱者の庭門。

★ 郭壽郷園亭醉賦

郭壽の郷園亭にて酔いて賦す

明 謝榛

郭家亭子夾松篁

郭家亭子 松篁を 夾む

把酒臨池幽興長

酒を把り 池に臨めば 幽興長し

人在千山秋色裏

人は 千山秋色の裏に在り

不知雲氣滿衣裳

知らず 雲氣の衣裳に満つるを

【語釈】

○郭壽郷園亭…不祥。○郭家亭…不祥。○松篁…松と竹。○幽興…奥ゆかしいおもむき。○雲氣…雲のような気配。雲。

★ 留鄒訃士

すうきよし
鄒訃士を留む

清 元 鼎

新開蘭蕙正芳菲

新開の蘭蕙らんけい 正ほうひに芳菲

初到鮭魚居饌肥

初めて到る鮭魚饌じぎよ せんに入りて肥ゆ

正是風光好三月

正せいに是れ 風光 好三月

如何抛却渡江歸

如何いかんぞ 抛却ほうきやくして 江を渡りて帰らん

【語釈】

○鄒祇謨…鄒訃士。清初の人。○蘭蕙…蘭と蕙、かおりぐさ。○芳菲…花の良いにおい。

○鮭魚…このしろ。○饌…ごちそう。○風光…景色。○如何…どうしてか。反語。○抛却…なげうつ。却是強調の助字。

★ 春除日洪慶之過飲

春除の日 洪慶こうけいと過飲かいいんす

清 高承埏

憐君臥病已經旬

憐む 君が病に臥して 已に旬を經たるを

出郭尋春却送春

郭かくを出で 春を尋ね 却って春を送る

歸路只應乘醉眼

歸路 只だ応に醉眼に乘まずべし

柳花如雪倍愁人

柳花 雪の如く 倍ます人まを愁えしむ

【語釈】

○春除日…旧曆三月三十日。○洪慶…不祥。○應…「まさにくすべし」と読み「くするの
がよい」の意。○乘醉眼…酔った眼で見ると。「乘」は利用するの意。○柳花…柳絮。

★ 江上期汪松研不至

江上汪松研を期すも至らず

清

王元勳

相期江上采芙蓉

あいき
相期す 江上に芙蓉を采るを

行盡前灘尚未逢

ぜんだん
前灘を行き尽すも 尚お未だ逢わず

空見林梢明月出

りんしょう
空しく見る 林梢 明月の出ずるを

淡烟城郭起疎鐘

そしょう
淡煙 城郭 疎鐘 起る

【語釈】

○汪松研…不祥。○前灘…前の灘。○林梢…林の樹のこずえ。○淡煙…淡い靄、霞。○疎鐘…疎らかな鐘の音。

絶句類選標本 二

絶句類選 卷之四 閑適類

★ 山中蒼俗人

山中にて俗人に答う

唐 李白

問余何意栖碧山

余に問う 何の意あつて 碧山へきざんに栖すむと

笑而不荅心自閑

笑つて答えず 心 自おのずから閑かんなり

桃花流水杳然去

桃花 流水 杳然ようぜんとして去る

别有天地非人間

別に 天地の 人間じんかんに非あざる有り

【語釈】

○何意：…どんな考えで。どういうわけで。○碧山：青々とした奥深い山。○閑：…のどか。○桃花流水：…桃の花びらが水の上を流れていく。○杳然：はるか遠いさま。○天地：…世界。○人間：俗世間。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 山中與幽人對酌

山中にて幽人と對酌す

唐 李白

兩人對酌山花開

兩人對酌して山花開く

一杯一杯復一杯

一杯一杯復た一杯

我醉欲眠卿且去

我酔いて眠らんと欲す卿且く去れ

明朝有意抱琴來

明朝意有らば琴を抱きて來たれ

【語釈】

○幽人：隱者。○對酌：差しむかいで酒をくみかわすこと。○卿：親しい間柄の相手
を呼ぶ語。君。○且：「しばらく」と訓讀し、ひとまず。まあちよつと。○有意：氣
が向いたなら。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 山房春事

山房春事

唐 岑参

風恬日暖蕩春光

風恬かに日暖かく春光を蕩す

戲蝶遊蜂亂入房

戲蝶遊蜂乱れて房に入る

數枝門柳低衣桁

數枝の門柳衣桁に低く

一片山花落筆牀

一片の山花筆床に落つ

【語釈】

○恬：静か。やすらか。○戲蝶：戯れるような蝶。○遊蜂：遊ぶような蜂。○衣桁：布か
け。○筆牀：筆かけ。

★ 江上所居

江上の所居

唐 顧況

家在雙峰蘭若邊

家は 雙峰蘭若の辺に在り

一聲秋磬發孤煙

一声の秋磬 孤煙を發す

山連極浦鳥飛盡

山は極浦に連なり鳥飛び尽き

月上青林人未眠

月は青林に上りて人未だ眠らず

【語釈】

○江上…江のほとり。○雙峰…二つの峰。○蘭若…寺。○秋磬…磬はへの字型の金属、石でできた楽器で主に寺院で合図に使われた。○孤煙…一筋の靄、霞。○極浦…遠方の浦。○青林…清浄な青青とした山林。

★ 山中

山中

唐 顧況

幽人自愛山中宿

幽人自ら愛す 山中の宿

況在葛洪丹井西

況や 葛洪が丹井の西に在るをや

窗中有箇長松樹

窓中 箇れ 長松樹有り

半夜子規來上啼

半夜子規來たりて 上りて啼く

○幽人…隱者。○葛洪…晉の人。神仙の術を好み、練丹術を伝えた。○丹沙を掘った井戸。○半夜…真夜中。○子規…ホトトギス。

江村即事

江村即事

唐

司空曙

罷釣歸來不繫船

釣りを罷め 帰り来りて 船を繋かず

江村月落正堪眠

江村 月落ちて 正に眠るに堪えたり

縱然一夜風吹去

縱然 一夜 風吹き去るとも

只在蘆花淺水邊

只だ 蘆花 淺水の 水辺に在らん

【語釈】

○江村：川辺の村。○即事：事に触れてその場のことを題材として作る詩。○繫船：舟を係留しないで流れに任せる。○堪：ふさわしい。○縱然：たとえであつても。○蘆花：あしの花、秋に咲く。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★ 山居

山居

唐

武元衡

身依泉壑將時背

身は 泉壑に依り 將に時に背かんとす

路入煙蘿得地深

路は 煙蘿に入り 地の深きを得

終歲不知城郭事

終歲 知らず 城郭の事

手栽松竹盡成陰

手栽の松竹 尽く陰を成す

【語釈】

○泉壑：泉の湧き出る溪。○將：「まさにくせんとす」と読み「今もくしようとする」の意。○煙蘿：靄の立ちこめた葛。○地深：人里離れている地。○終歲：一生。

★ 夏晝偶作

夏晝の偶作

唐 柳宗元

南州溽暑醉如酒
隱几熟眠開北牖
日午獨覺無餘聲
山童隔竹敲茶臼

南州じょくしよの溽暑 醉うこと酒の如し
几きによ隠こつて熟眠じゆくみんし 北牖ほくゆうを開く
日午にちご 独り覚め 余声無し
山童 竹を隔て 茶臼を敲く

【語釈】

○夏晝偶作…夏の昼に、たまたま作った詩。○南州…南国の永州、作者が左遷された先の地。○溽暑…蒸し暑いこと。○隱…よりかかる。○几…机。○北牖…北側の窓。○牖…れんじ窓。○日午…正午。○餘声…ほかの物音。丸う茶臼…茶の葉をひいて抹茶にするのに用いるひき臼。

(参考文献)

『三体詩』

★ 憶事

事を憶う

唐 元稹

夜深閑到戟門邊
却繞行廊又獨眠
明月滿庭池水淥
桐花垂在翠簾前

夜深く閑かに戟門げきもんの辺ほとりに到る
却こつて行廊こうろうを繞めぐり又独り眠る
明月庭に満ち池水す淥む
桐花とうか垂れて翠簾すいれんの前に在り

【語釈】

○戟門…ほこで作った門。○行廊…屋根のある道。○淥…澄む。○翠簾…緑色のすだれ。

★宿寶使君莊水亭

寶使君の莊水亭に宿す

唐 白居易

使君何在在江東

使君 何にか在る 江東に在り

池柳初黃杏欲紅

池柳 初めて黄にして 杏 紅ならんと欲す

有興即來閑便宿

興有れば即ち来たり 閑なれば 便ち宿す

不知誰是主人翁

知らず 誰か是れ 主人の翁

【語釈】

○寶使君…不祥。使君は刺史のこと。○莊水亭…不祥。○江東…長江下流の南の地方。○池柳…池の畔の柳。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集九』

★夜涼

夜涼

唐 白居易

露白風清庭戸涼

露白く 風清らかにして 庭戸涼し

老人先著夾衣裳

老人 先ず著く 夾衣裳

舞腰歌袖拋何處

舞腰 歌袖 抛ちて何れの処ぞ

唯對無弦琴一張

唯だ対す 無弦の琴一張

【語釈】

○庭戸…庭。○著…着る。○夾衣裳…裏地付きの着物。○舞腰歌袖…舞を能くする妓女と歌を良くする妓女。○拋…解放する。○無弦琴…陶淵明が愛したような弦の無い琴。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集十二(上)』

★ 晩秋閑居

晩秋の閑居 かんきよ

唐 白居易

地僻門深少送迎 へき 地は僻に門は深くして送迎少なり
 披衣閑坐養幽情 はのお かんぎ 衣を披り閑坐して幽情を養う
 秋庭不掃攏藤杖 はら 秋庭掃わず藤杖を携え
 閑蹋梧桐黃葉行 しず 閑かに梧桐の黃葉を踏みて行く

【語釈】

○閑居：世間との交わりをやめ、煩わされることなく、心静かに住むこと。○地僻：その場所が辺鄙である。○閑坐：静かに坐る。○幽情：心の奥底に潜んでいる気持ち。○藤杖：フジの木で作られたつえ。○梧桐：あおぎり。○黄葉：もみじ葉。
 (参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集(三)』

★ 青溪村居

青溪の村居

唐 熊孺登

深樹黃鸝曉一聲 こうり 深樹の黃鸝 曉に一声
 林西江上月猶明 あきらか 林西江上月猶お明なり
 野人早起無他事 やじん 野人早起し他事無し
 貪繞沙泉看笋生 させん めぐ しゅんせい 沙泉を繞り笋生を看るを貪る

【語釈】

○青溪：青色を帯びた谷川。○黄鸝：高麗うぐいす。○野人：うわべを飾らない誠意の在る人。田舎者(自分を謙遜して使う)。○沙泉：砂地に湧く泉。○笋生：出てきた筍。

★ 葺夷陵幽居

夷陵の幽居の葺しゅう

唐 李涉

負郭依山一徑深

かく そむ 山に依りて 一徑深し

萬竿如束翠沈沈

ばんかん とげ みどりちんちん
万竿 束の如く 翠沈々

從來愛物多成癖

從來 物を愛し 多く癖と成る

辛苦移家爲竹林

しんく 辛苦して家を移すは 竹林の爲なり

【語釈】

○夷陵：湖北省宜昌市夷陵区。○幽居：隱者の住まい。○葺：かやぶき屋根。○郭：城外の町。○萬竿：多くの竹。○沈沈：草樹の茂っているさま。○從來：かねてから。

★ 疾愈歩庭

疾やま愈いええて庭を歩す

唐 陸暢

桃紅李白覺春歸

とうこうりはく 桃紅李白 春の帰るを覚ゆ

強歩閑庭力尚微

かんでい 強いて 閑庭に歩すれば 力尚お微なり

從困不扶靈壽杖

こん よ 困に從りて扶けず 靈壽の杖

恐驚花裏早鶯飛

きょうきょう 恐 驚す花裏に早鶯の飛ぶに

【語釈】

○春歸：春が過ぎ去る。○閑庭：物静かな庭。○靈壽杖：エギの木で作った杖。

★初醒

初めて醒む

唐 雍陶

心事得勝暫拋愁

心事しんじ 勝ち得たり 暫しばらく愁うれいを拋なげうつを

醉臥涼風拂簟秋

酔よいて涼風りやうふうに臥たし 簟たんを払はうの秋

半夜覺來新酒醒

半夜 覺おえ來たれば 新たに酒醒さむ

一條斜月到牀頭

一條の斜月しやうげつ 牀頭しょうとうに到る

【語釈】

○心事…心に思うことがら。○得勝…を勝ち取る。○簟…たかむしろ。○覺來…目覚める。來は助字。○牀頭…枕元。

★老圃堂

老圃堂ろうほどう

唐 薛能

邵平瓜地接吾廬

邵平しょうへいの瓜地かち 吾が廬ろに接し

穀雨乾時偶自鋤

穀雨こくう 乾く時 偶たまたみ自ら鋤かす

昨日春風欺不在

昨日 春風 不在を欺かき

就牀吹落讀殘書

牀に就つき 吹き落とす 讀殘よみこぼの書

【語釈】

○老圃堂…作者の書齋の名。老圃は、畑作りによくなれた農夫のこと。老農に同じ。○邵平瓜地…邵平の瓜畑。邵平の故事あり。○接吾廬…廬は家。○穀雨…二十四節氣のひとつで、穀物を育てる雨の意。○偶自鋤…鋤は、田畑を耕すこと。○就床吹落…床に置いていた書物が吹き落とされた。○讀殘書…読みかけの書物。

(参考文献) 『三体詩』

★ 鄂杜郊居

鄂杜郊居

唐 温庭筠

槿籬芳杜近樵家

槿籬 芳杜 樵家に近く

穉麥青青一逕斜

穉麥 青々 一徑斜めなり

寂寞遊人寒食後

寂寞たる遊人 寒食の後

夜來風雨送梨花

夜來の風雨 梨花を送る

【語釈】

○鄂杜：杜陵。長安の西の地名で、西漢の宣帝の陵墓があるところ。○槿籬：むくげの生け垣。○芳杜：美しい森。○樵家：樵の家。○穉麥：畑の麦。○青青：青青として茂っているさま。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○遊人：旅人。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○夜來：昨夜からの。

★ 小樓

小樓

唐 儲嗣宗

松杉風外亂山青

松杉風外 乱山青し

曲几焚香對石屏

曲几 焚香 石屏に対す

記得去年春雨後

記し得たり 去年 春雨の後

燕泥時汚太玄經

燕泥 時に太玄經を汚すを

【語釈】

○松杉風：松や杉の林を吹く風。○曲几：脇息。○焚香：燃やした香。○石屏：屏風のように切り立った石。○記得：覚えている。○燕泥：燕が巣作りのために加える泥。○太玄經：書の名前。

★ 即事

即事

唐 杜牧

小院無人雨長苔
小院 人無く 雨苔を長ず
滿庭修竹間疎槐
庭に満つる修竹 疎槐に間わる
春愁兀兀成幽夢
春愁 兀々として幽夢を成し
又被流鶯喚醒來
又た流鶯に喚び醒まされ来る

【語釈】

○即事…その場の事柄や様子、風景をよんだ詩歌。○小院…小さな奥庭。修竹…長い竹。
○間…まじわる。○疏…まばらな。○槐…エンジュ。兀兀…動かないさま。○幽夢…ぼんやりしたゆめ。○被…（…のために）…れる。○流鶯…木から木へと飛び移って鳴くウグイス。

★ 春夕酒醒

春夕酒醒む

唐 陸龜蒙

幾年無事傍江湖
幾年か無事 江湖の傍
醉倒黃公舊酒壚
酔倒す 黄公の旧酒壚
覺後不知明月上
覚めて後 明月の上るを知らず
滿身花影倩人扶
満身の花影に 人の扶けを俤う

【語釈】

○江湖…川と湖。田舎。隠棲地。○醉倒…酔いつぶれる。○黄公舊酒壚…黄公酒壚。黄公が酒を飲んだ酒屋、竹林の七賢の行きつけの酒屋。『世説新語・傷逝』

★ 自遣

みずか や
自ら遣る

唐 陸龜蒙

無多藥圃近南榮

多無く薬圃南宮に近し

合有新苗次第生

新苗の次第に生ずを合有す

稚子不知名品上

稚子は知らず名品の上

恐隨春草鬪輸贏

恐らくは春草に随つて輸贏を闘わさん

【語釈】

○自遣：自ら自分の心を慰める。○無多：少しばかり。○藥圃：薬草畑。○南榮：南向き
の軒。○合有：合わせて有する。○稚子：おさなご。○輸贏：負けと勝ち。

★ 曛黑

くんこく

唐 韓偓

古木侵天日已沈

古木 天を侵し 日 已に沈み

露華涼冷潤衣襟

露華 涼冷として衣襟を潤す

江城曛黑人行絶

江城 曛黑にして 人行絶え

唯有啼鳥伴夜砧

唯だ 啼鳥の夜砧に伴う 有るのみ

【語釈】

○曛黑：日暮れの暗さ。○露華：美しい露。○衣襟：衣と襟。○江城：川辺の町。○曛黑
：日が暮れて天が暗くなるありさま。○人行：人通り。○夜砧：夜打つ砧の音。

★ 醉著

すいちやく
醉著

唐 韓偓

萬里清江萬里天
万里の清江 万里の天
一村桑柘一村煙
一村の桑柘 一村の煙
漁翁醉著無人喚
漁翁 醉著して 人の喚ぶ無く
過午醒來雪滿船
午を過ぎて 醒め来れば 雪船に満つ

【語釈】

○醉著：酔っ払ってしまふこと。著は、動詞の後に置き、動作の完了、進行を示す助字。
○清江：清い川。○桑柘：桑と山桑。○煙：靄、霞。○過午：昼過ぎ。

★ 涼思

りょうし
涼思

唐 吳融

松間小檻接波平
松間の小檻 波に接して平かなり
月澹煙沈暑氣清
あわ
月澹く 煙沈みて 暑氣清し
半夜水禽棲不定
せい
半夜 水禽 棲 定らず
綠荷風動露珠傾
りよくか
緑荷 風動して 露珠傾く

【語釈】

○涼思：涼しさの思い。○小檻：小さなおぼし。○煙：水面に立つ靄。○半夜：まよなか。○水禽：水鳥。○棲：ねぐら。○綠荷：緑の蓮の葉。○風動：風で揺れ動く。○露珠：露の玉。

★ 山居即事

山居即事

唐 吳融

萬事 翛然ゆうぜん只有某
小軒 高淨たん簾涼時
闌珊らんさん半局和微醉
花落中庭樹影移

万事 翛然ゆうぜんとして 只ただ某き有り
小軒 高淨たんにして 簾りょう涼なる時
闌珊らんさん 半局 微醉に和し
花落ち 中庭 樹影移る

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○翛然…物事にとらわれない様。○某…某。○簾…たかむしる。○闌珊…散り乱れるさま。○半局…碁一極の半ば。○

★ 閔郷寓居

閔郷 寓居

唐 吳融

六載 抽毫侍禁闈
不堪多病決然歸
五陵年少如相問
阿對泉頭一布衣

六載 毫りくさいに抽ちゆうして 禁闈きんいに侍す
多病に堪えず 決然として歸る
五陵の年少 如もし 相問わば
阿對泉頭あたいせんとうの一布衣いちほい

【語釈】

○閔郷…河南省にある県名。○寓居…仮の宿。○六載…六年。○抽毫…人々から抜きんでる？○禁闈…朝廷。○五陵…漢の高帝以下五帝の陵があったところで、富豪の人が住んでいた。李白「少年行」。○年少…若者。○阿對泉…河南省靈宝県の泉。○布衣…位の無い人。

★晴景

晴景

唐 王 駕

雨前初見花間葉
雨後兼無葉底花
蛺蝶飛來過墻去
應疑春色在鄰家

雨前初めて見る花間の葉
雨後兼ねて葉底の花無し
蛺蝶 飛来たりて 墻を過ぎて去る
応に春色の鄰家に在るを疑うべし

【語釈】

○兼…すべて。一括して。○蛺蝶…蝶々。○應…「まさにすべし」と読み、「当然」
すべきだ、当然で有るはずだ」の意。○春色…春景色。

★溪興

溪興

唐 杜荀鶴

山雨溪風卷釣糸
瓦甌篷底獨斟時
醉來睡着無人喚
流下前灘也不知

山雨 溪風 釣糸を卷く
がほう ほうてい どくしん
瓦甌 篷底 独斟の時
酔い来りて 睡着し 人の喚ぶ無く
流れて前灘を下るも也た知らず

【語釈】

○瓦甌…瓦で出来小盆。○篷底…小舟の中。○獨斟…独りで堪える。○睡着…ぐっすり眠
る。着は強め、完了を示す助字。○前灘…前の早瀬。

★ 春日晏起

春日晏起
しゅんじつあんき

唐 韋 莊

近來中酒起常遲
臥看南山改舊詩
開戸日高春寂寂
數聲啼鳥上花枝

近來酒に中りて起くこと常に遅し
臥して南山を看て 旧詩を改む
戸を開ければ 日高くして 春寂々
数声の啼鳥 花枝に上る

【語釈】

晏起…朝おそく起きること。近來…このごろ。中酒…酒を飲み過ぎて、気分が悪くなる。
南山…終南山のこと、長安の南方にある山。寂寂…さびしいさま、静かなさま。啼鳥…鳴く鳥、さえずる鳥。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 書齋謾興

書齋謾興
しよざいまんきよう

唐 翁承贊

官事歸來衣雪埋
兒童燈火小茅齋
人家不必論貧富
惟有讀書聲最佳

官事より帰り来たれば 夜 雪埋まる
兒童の燈火 小茅齋
人家 必ずしも 貧富を論ぜず
惟だ 読書の声の 最も佳き有り

【語釈】

○書齋…書房。○謾興…そぞろな興。○官事…役所つとめ。○茅齋…茅葺きの質素な部屋。

★ 間吟

閑吟

唐 賈至

湘中老人讀黃老

湘中老人しようちゆうろうじん 黃老こつろうを讀む

手援紫藟坐碧草

手に紫藟しるいを援ひきて 碧草ひに坐す

春至不知湖水深

春至りて 知らず 湖水の深きを

日暮忘却巴陵道

日暮 忘却す 巴陵はりようの道

【語釈】

○君山：洞庭湖中にある山。○湘中：湖南省の別名。○黃老：黃子と老子。○紫藟：紫色の藤。○援：手に取る。○巴陵：湖南省岳陽県。

★ 題隱霧亭

隱霧亭に題す

唐 魚玄機

春花秋月入詩篇

春花 秋月 詩篇に入る

白日清宵是散仙

白日 清宵 是れ散仙

空捲珠簾不曾下

空しく珠簾しゆれんを捲くいて 曾くつて下さず

長移一榻對山眠

長く一榻いっとうを移うつして 山に對して眠る

【語釈】

○隱霧亭：陝西省西安市にあった亭。○入詩篇：作った詩の中に書き込む。○白日：耀く太陽。○散仙：未だ仙職に就けない仙人。○珠簾：珠簾。○榻：椅子。

★ 絶句

絶句

中 呂 巖

莫道幽人一事無
道う莫かれ幽人一事無しと
閑中儘有靜工夫
閑中 尽く静工夫有り
閉門清書讀書罷
門を閉じ清書を読むを罷め
掃地焚香到日晡
地を掃い香を焚き日晡に到る

【語釈】

○道：言。○幽人：隱者。○閑中：暇な中。○靜工夫：静かに心の修養・意思の鍛錬などに心を用いること。○清昼：清く晴れた昼。○日晡：日暮れ。

★ 夏日城中作

夏日城中の作

唐 僧齊己

竹低莎淺雨濛濛
竹低く莎浅くして雨 濛々
水檻幽窗暑月中
水檻 幽窓 暑月の中
有境牽懷人不曾
境有り 懷を牽き人 会せず
東林門外翠橫空
東林門外 翠 空に横わる

【語釈】

○莎：はますげ。○濛濛：煙るようにもやっとしていさま。○水檻：水のほとりの手すり。○幽窗：静かな窓。○東林：東辺の林。東林寺を指すこともある。○空：大空。

★ 山中作

山中の作

唐 處默

席簾高捲枕高敲
 門掩垂蘿蘸碧溪
 閑把史書眠一覺
 起來山日過松西

席簾せきれん 高捲こうけん 枕まくら 高たかく 敲たた だつ
 門かど は 垂蘿すいら に 掩おほ われ 碧溪ひた に 蘸ひた さる
 閑しずか に 史書ししよ を 把と り 眠ねむり 一いっ 覺かく
 起き き 来き た れ ば 山日さんじつ 松西しょうせい に 過す ぐ

【語釈】

○席簾：席の簾。○高捲：高く巻くの意味で、智を現さずに世を逃れること。○敲：傾ける。○垂蘿：垂れ下がったカズラ。○碧溪：緑色の谷川の水。○蘸：ひたす。○眠一覺：一眠り。

★ 春居雜興

春居雜興

宋 王禹偁

兩株桃杏映籬斜
 粧點商山副使家
 何事春風容不得
 和鶯吹折數枝花

兩株りゅうしゆ の 桃杏とうきょう 籬かき に 映か じて 斜か なり
 粧しょう 点てん す 商山しょうざん 副使ふくし の 家
 何事なに ぞ 春風はるかぜ 容ゆる し 得え ざる
 鶯うい に 和な して 吹ふ き 折し てる 数枝かずえだ の 花

【語釈】

○雜興：さまざまな感興。○兩株：二株。○粧點：化粧する。○商山：陝西省商嶺の東にある山。○副使：正使の幕僚。○容：ゆるす。

〔参考文献〕 『漢詩大系 16』

★ 春晝偶書

春晝偶たまたま書す

宋 寇準

白晝偶成芳草夢

白晝たまた 偶たまたま成る 芳草の夢

起來幽興有誰知

起來きらいの幽興ゆうきよう 誰有たれつてか知る

風簾不動黃鸝語

風簾ふうれん 動うごかず 黃鸝こうりの語

坐見庭花日影移

坐まして見る 庭花にちえい 日影にちえいの移るを

【語釈】

○偶書：たまたま作った詩。○芳草：かおりぐさ。忠貞・賢徳の人の喩え。○起來：起床してから。○幽興：奥ゆかしいおもむき。○有誰知：反語、誰も知らない。○風簾：風に吹かれている簾。○黃鸝：高麗ウグイス。

★ 自作壽堂因書一絶以誌之

宋 林逋

自みづから壽堂じゆどうを作る 因よりて一絶を書し 以これつて之しるを誌す

湖上青山對結廬

湖上けつろの青山 結廬けつろに對す

墳頭秋色亦蕭疏

墳頭ふんとうの秋色しゅうしよく 亦また蕭疏しやうそ

茂陵他日求遺稿

茂陵もりよう 他日たじつ 遺稿いごうを求むとも

猶喜曾無封禪書

猶なお喜かぶ 曾かつて封禪ふうぜんの書 無なきを

【語釈】

○壽堂：生前に作る墓。○結廬：結んだ廬。○修竹：長い竹。○秋色：秋景色。○蕭疏：寂しくまばらなこと。○茂陵：漢の武帝の墓。○封禪：皇帝が天と地を祭る儀式。

(参考文献) 『漢詩大系 16 宋詩選』 司馬相如の故事

★ 暑中閑詠

暑中閑詠

宋 蘇舜欽

嘉果浮沈酒半醺
床頭書冊亂紛紛
北軒涼吹開疎竹
卧看青天行白雲

かか 嘉果 浮沈して 酒 半ば 醺ず
しょうとう 床頭の書冊 乱れて 紛紛
ほくけん 北軒 涼吹きて 疎竹を開き
が 卧して 看る 青天に白雲の行くを

【語釈】

○嘉果…美味な果実。○醺…ほろ酔い。○書冊…書籍。○紛紛…混じり、乱れ合うさま。
○北軒…北側ののき。○疎竹…疎らに生えた竹。

★ 冬日偶書

冬日偶書

宋 蘇舜欽

謾走聲名三十年
亦曾文采動君前
玉顔皓齒他人樂
獨守殘燈理斷編

ばん 謾に 声名に 走ること 三十年
ま 亦た 曾て 文采 君前を 動かす
ぎよくがん 玉顔 皓齒 他人の 樂しみ
ざんとう 独り 残灯を守りて 断編を 理す

【語釈】

○偶書…たまたま作った詩。○謾…軽率なさま。○聲名…名声。○文采…文章著述の立派なもの。○君前…主君の前。○玉顔皓齒…美しい顔と白い歯、美人の形容。明眸皓齒。○殘燈…消え残りの灯火。○斷編…切れ切れの本。文章。○理…直して治める。

★ 夏日西齋即事

夏日西齋即事

宋 司馬光

榴花映葉未全開

榴花 葉に映じ 未だ全くは開かず

槐影沈沈雨勢來

槐影 沈々 雨勢來る

小院地偏人不道

小院 地は偏にして 人到らず

滿庭鳥迹印蒼苔

滿庭の鳥迹 蒼苔に印す

【語釈】

○西齋…西側の書齋。○即事…事にふれて、その場に应じて詩を作ること。○榴花…ザクロの花。○槐影…エンジュの木の影。○沈沈…草樹の茂っているさま。○雨勢…あまけ。○地偏…市街から離れていること。○鳥迹…鳥の足跡。○蒼苔…青い苔。○印…印を押し、たように標す。

★ 静夜

静夜

宋 司馬光

午夜空齋四悄然

午夜 空齋 四 悄然

清寒透骨不成眠

清寒 骨に透り 眠を成さず

秋風故揭疏簾起

秋風 故に 疏簾を 掲て起り

正漏月華來枕前

正に月華を漏して 枕前に來る

【語釈】

○午夜…真夜中。午後十二時頃。○空齋…人気の無い書齋。○四…四方。○悄然…物寂しいさま。○清寒…清い寒さ。○故…ことさらに。故意に。○疏簾…まばらな簾。○正…ちようど、ぴったりと。○月華…華やか月明かり。○枕前…枕元。

★ 溪陰堂

溪陰堂 けいいんどう

宋 蘇軾

白水滿時雙鷺下

白水滿る時 雙鷺下る はくすいみつ そうろ

綠槐高處一蟬吟

綠槐高き処 一蟬吟ず りよくかい いっせん

酒醒門外三竿日

酒は醒む門外三竿の日 さ もんがいさんかん

臥看溪南十畝陰

臥して看る溪南十畝の陰 ふ けいなんじゅっぼ

【語釈】

溪陰堂：『溪前堂』ともする、揚州儀真県の東、范氏の園の堂の名。・白水：清らかな水。きれいな水。双鷺：つがいになっているサギ。綠槐：青々としたくわい。吟：（セミが）鳴く。酒醒：酒が醒める意。三竿日：日が竹竿を三本つぎ合わせたほどの高さ（のぼ）る。臥看：寝転んでみる。溪南：谷の南側。・十畝：10畝（ほ）（ぼ）。約60アール。畝：1畝は約1.82アール。十畝陰：谷一帯の日陰の地を指す。

（参考文献）『漢詩大系17』

★ 溪光亭

溪光亭 けいこうてい

宋 蘇軾

決去湖波尚有情

決去するに 湖波 尚お情有り な

卻隨初日動簷楹

却って 初日に随い 簷楹に動く えんえい

溪光自古無人畫

溪光 古自り 人の画く無く いにしえよ

憑仗新詩與寫成

新詩に 憑仗して 与に写成す ひょうじょう とも しゃせい

【語釈】

○決去：辞して去る。長く結別する。○初日：朝日。○簷楹：家の軒下の梁柱。○溪光：溪の風景。○憑仗：依頼。○寫成：写して（画くことを）為す

★南堂

南堂

宋 蘇軾

掃地燒香閉閣眠

地を掃はらい 香を焼たき 閣かくを閉じて眠る

簾紋如水帳如煙

簾紋てんもんは水の如く 帳とばりは煙の如し

客來夢覺知何處

客かく来たりて 夢は覚む 知る 何れの処ぞ

挂起西窗浪接天

西窓かを挂け起せば 浪天に接す

【語釈】

南堂：黃州左遷時に蘇軾が住んでいた臨皋亭の小堂。閣：部屋を仕切る板。簾紋：敷物の模様。煙：霞み、もや。挂：しとみ戸のような窓を上懸けあげる。

(中国詩人選集二―五)

★秋意題邢敦夫扇

秋意 邢敦夫の扇に題す

宋 秦觀

月團新碾瀾花瓷

月團げっだん 新たに碾てんして 花瓷かじに瀾に

飲罷呼兒課楚詞

飲やみ罷んで 兒を呼よび 楚詞そしを課かす

風定小軒無落葉

風 定りて 小軒 落葉無く

青蟲相對吐秋絲

青虫せいちゅう 相對あいたいして 秋糸を吐く

【語釈】

○月團：団茶。茶を固めて丸い餅の形にした物。○碾：挽きつぶす。○花瓷：花模様の磁器のポット。○瀾：煮る。○課：勉強をさせてみてやる。○風定：風がおさまる。○青蟲：蜘蛛。

(参考文献)

『漢詩大系 16』

★ 春日作

春日の作

宋 秦 觀

春禽葉底引圓吭
臨罷黃庭日正長
滿院柳花寒食後
旋鑽新火爇爐香

春禽 葉底に 円吭を引く
黄庭を臨し罷わるも 日正に長し
滿院の柳花 寒食の後
旋ち 新火を鑽りて 炉香を爇く

【語釈】

○春禽：春の小鳥。○引圓吭：つぶらな声で鳴いている。○黄庭：道教の黄庭經のこと。養生を説く。○臨：臨書。○滿院：問や塀で囲まれた庭一杯。○寒食：冬至から一〇五日目、この日を挟んで前後の計三日間は火を使うことを禁じた。○鑽：火打ち石で火をおこすこと。○新火：寒食後に起こす新しい火。○炉香：香炉の香。○爇：焼く。

★ 春雨中偶成

春雨中偶成

宋 張 耒

春陰只與睡相宜
卧聽鳴禽語復飛
一縷斷香浮不散
何人深院晝熏衣

春陰 只だ睡を与えて 相宜し
卧して聽く 鳴禽の語りて復た飛ぶを
一縷の断香 浮きて散ぜず
何人か深院 晝衣を熏ず

【語釈】

○春陰：春の曇り。花曇り。○鳴禽：囀る小鳥。○一縷：一筋の。○断香：連なつた香煙。○深院：奥深くにある中庭。奥まつた寺院。○熏衣：衣に香を炊き込める。

★ 春睡

春睡しゅんすい

宋 張耒

東風冷峭著衣寒	東風 <small>れいしょう</small> 冷峭 衣 <small>つ</small> に著 <small>つ</small> きて寒し
雲影深沈美睡天	雲影 <small>うんえい</small> 深 <small>うんえい</small> く沈 <small>びすい</small> む 美睡 <small>びすい</small> の天
青杏園林花盡落	青杏園林 <small>せいぎょうえんりん</small> 花 <small>せいぎょうえんりん</small> 落 <small>せいぎょうえんりん</small> ち尽 <small>せいぎょうえんりん</small> き
晚風吹雨濕鞦韆	晚風 雨 <small>しゅうせん</small> を吹 <small>うるお</small> いて 鞦韆 <small>しゅうせん</small> を湿 <small>うるお</small> す

【語釈】

○東風…春風。○冷峭…寒さが身にしみるさま。○美睡…気持ちよい睡り。○鞦韆…ブランコ。

福昌官舎後四絶句

(宋詩選注 2-115)

宋 張耒

無客門闌盡日扃
 兩行喬木擁寒廳
 吏胥借問官何在
 流水聲中看竹行

★水亭

水亭

宋 游酢

清溪一曲繞朱樓

清溪せいけい 一曲しゅろう 朱樓めぐを繞る

荷密風稠咽斷流

荷は密に風は稠とい断流に咽むせぶ

夾岸垂楊烟細細

岸を夾さしはさむ垂楊 煙細々

小橋流水即滄洲

小橋 流水 即ち滄洲そうしゅう

【語釈】

○清溪：清い谷川。○一曲：一曲がり。○荷：蓮の葉。○稠：ととのう。○斷流：流れを断つこと。○烟：靄、霞。○細細：細やかでかすかなさま。○滄洲：水の青い州。隱者のいるところ。

★庚子年還朝飲酒作

庚子こうしの年朝に還りて飲酒するの作

宋 韓駒

三年逐客卧江臯

三年 逐客ちくかく 江臯こうこうに卧がす

自與田翁酌小槽

自みづからと田翁でんおうと 小槽しょうそうに酌しゃくす

飲慣茆柴諳苦硬

茆柴ぼうさいを飲み慣れ 苦硬くこうを諳そらんず

不知如蜜有香醪

知らず蜜の如き 香醪こうろう有るを

【語釈】

○朝：朝廷。○逐客：中央より追放された人。○江臯：江岸、江辺の地。○田翁年取った農夫。○茆柴：江南地方の酒の一種。味わいの薄い濁り酒で酸味が強い。○諳苦硬：苦みとえぐみを嫌というほど味わう。ここでは「人生の苦難を嫌というほど味わう」の意も込められ、一種、掛詞的になっている。○小槽：酒を絞る時の木の台。転じて、自家製の酒。○香醪：美酒。

★ 弈棋絶句

弈棋 絶句 えきぎ

宋 洪炎

新秋遣悶只圍棋

新秋 悶を遣るは 只だ圍棋 もん や た い き

病不銜杯亦廢詩

病により 杯を銜えず 亦た詩を廢す ま

對局蕭然兩無語

對局 蕭然 両りながら語無し しょうぜん ふた

箇中君子有爭時

箇の中に 君子の争う時有り こ

【語釈】

○弈棋：碁を打つこと。○遣：気を紛らわす。○悶：もだえ。心身の逃れがたい苦痛。
○圍棋：碁を囲む。○蕭然：物寂しいさま。

★ 宿北巖院

宿北巖院に宿す ほくがんいん

宋 王觀國

雲巖亂石漱寒泉

雲巖 乱石 寒泉に 漱ぐ うんがん くちすず

通夕泉聲到枕邊

通夕 泉声 枕辺に到る つうせき ちんべん

宛似昔年嚴瀨口

宛も似たり 昔年 嚴瀨口 あたか せきねん げんせこう

五更風雨宿溪船

五更の風雨 溪船に宿るに ごせいん けいせん

【語釈】

○北巖院四川省達県の西北、鳳凰山にある寺院。○雲巖：雲のかかっている巖。○通夕：夜通し。○宛似：まるでこのようである。○嚴瀨口：浙江省桐廬県の南にあり。東漢の嚴光が隠居して釣りをしていたところ。○五更：夜明け前。○溪船：溪を行く船。

★西樓

西樓

宋

呂本中

小院無人日自長
小院人無く日自おのずから長し
隔簾時有芰荷香
簾を隔れんてて時に芰荷きかの香かおり有り
客游未作安居計
客は遊かくびて未だ安居の計を作さず
更借西樓一夜涼
更に借かる西樓一夜の涼

【語釈】

○芰荷：ヒシとハスの葉。○客：故郷を離れている人。○安居：安らかな生活。

★正月末雪中小酌

正月末雪中に小酌す

宋

呂本中

柳着河冰雪着船
柳は河氷に着つき雪は船に着つく
小桃應誤取春憐
小桃まさ応に誤まって春憐しゅんりんを取るべし
牀頭有酒須君醉
牀頭しょうとう酒有り須すべからく君醉すべからうべし
又廢蒲團一夜禪
又た廢ほたんす蒲團一夜の禪

【語釈】

○河氷：川に張っている氷。○小桃：桃の一種で初春に開花する。○應：「まさに〜すべし」と読み、「きつと〜に違いない」の意。推量。○春憐：？○蒲團：僧侶が座禪用に使う敷物。

★ 婆娑園

婆娑園 ばさえん

宋 崔 鷗

晚禽噪竹百千翅

晚禽 ばんきん 竹に噪ぎ さわ 百千翅

殘菊橫枝三兩花

殘菊 枝を横たえ三兩花

好在山園養衰疾

好し 山園に在りて 衰疾 すいしつを養わん

風波不到野人家

風波 ふうは 到らず 野人の家

【語釈】

○婆娑園：園の名。不祥。○晚禽：夕方の小鳥。○翅：鳥の翼。羽ばたく。○殘菊：損なわれた菊。○三兩：二三。○衰疾：衰え病むこと。○風波：ごたごたしたたしたこと。世間のわづらい。○野人：田舎に住んでいる人。

★ 江樾軒書事

江樾軒書事 こうえつけんしよじ

宋 曾 紆

臥聽灘聲瀾瀾流

臥 ふして聽く灘聲 たんせい 瀾瀾 かかくとして流るるを

冷風淒雨似深秋

冷風 淒雨 深秋に似たり

江邊石上烏白樹

江邊の石上 烏白樹

一夜水長到梢頭

一夜 水長くして 梢頭 しやうとうに到る

【語釈】

○江樾軒：家の名、不祥。○灘聲：溪の音。○瀾瀾：激しい水の音。○淒雨：物寂しく冷たい雨音。○烏白樹：木の名。ナンキハゼ。○江邊：川辺。○梢頭：梢の上。

★ 江樾軒書事

江樾軒書事 こうえつけんしよじ

宋 曾紆

竹間嘉樹密扶疏

竹間の嘉樹 かじゆ 密にして扶疏たり ふそ

異郷物色似吾廬

異郷の物色 吾が廬 いおり に似たり

清曉開門出負水

清曉 せいぎよう に門を開きて 出て水を負え いでお ば

已有小舟來賣魚

已に 小舟 しょうしゅう の来りて 魚を売 きた る有り

【語釈】

○清樾軒…家の名、不祥。○嘉樹…立派な木。○扶疏…木の枝が広がるさま。○物色…ありさま。○負…背中に担う。

★ 絶句

絶句

宋 呂希哲

老讀文書興易闌

老いて 文書を読み 興 たけなわ 闌 なり易し

須知養病不如閑

須く知るべし 病養 びようよう は閑 かん にしかざるを

竹牀瓦枕虚堂上

竹牀 ちくしょう 瓦枕 がちん 虚堂 きやうどう の上

卧看江南雨後山

卧 ふ して 看る 江南 雨後の山

【語釈】

○闌…尽き果てようとする。終わりに向かう。○須…「すべからくすべし」と読み「当然」すべきである」の意。○養病…病気の養生をする。○竹牀…竹製のベッド。○瓦枕…瓦製の枕。○虚堂…人気の無い堂。○江南…長江流下流の南岸地方。

★ 雨夜不寐

雨夜寐いねず

宋 趙鼎

西風吹雨夜瀟瀟

西風雨を吹いて夜瀟々しやうしやう

冷爐殘香共寂寥

冷炉 殘香 共に寂寥せきりやう

要作秋江篷底睡

秋江の篷底 睡ほうてい ねむりを作すを要せず

正宜窗外有芭蕉

正まさに宜よろし 窓外に芭蕉有るは

【語釈】

○西風：秋風。○瀟瀟：風雨の寂しく降る（吹く）音のさま。○冷爐：冷えた香炉。○殘香：残っている香のかおり。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○篷底：舟の底。舟の中。

★ 晚酔口占

晚酔口占ばんすいこうせん

宋 吳可

晚酔扶筇過竹村

晚酔 筇つえに扶たすけられて 竹村ちくそんを過ぐ

數家殘雪擁籬根

數家の殘雪 籬根りこんを擁ようす

風前有恨梅千點

風前 恨み有り 梅千點

沙上無人月一痕

沙上さじやう 人無なく 月一痕つきいっこん

【語釈】

○口占：紙に書かずに作った即興の詩。○扶筇：杖をつく。○竹村：竹林のある村。○擁籬根：垣根の根元を被う。○沙上：砂の上。

★ 春日作

春日の作

宋 陳與義

朝來庭樹有鳴禽

朝來 庭樹 鳴禽有り

紅綠扶春上遠林

紅綠 春を扶けて 遠林に上る

忽有好詩生眼底

忽ち 好詩の 眼底に生ずる有り

安排句法已難尋

句法を安排して 已に尋ぬること難し

【語釈】

○朝來：朝から。○鳴禽：さえずる小鳥。○安排：程よく加減する。

★ 雨過

雨過ぐ

宋 陳與義

水堂長日清鷗沙

水堂の長日 鷗沙を清む

便覺京塵隔鬢華

便ち 覚ゆ 京塵 鬢華を隔つを

夢裏不知涼是雨

夢裏 知らず 涼は是れ 雨なるを

卷簾微溼在荷花

簾を卷けば 微溼 荷花に在り

【語釈】

○水堂：水に臨む堂。○鷗沙：かもめが棲息する砂洲。○便：たちまち。○京塵：京洛（都会）の塵。○鬢華：花のように白い鬢。○夢裏：夢の中。○微溼：かすかな水気。うるおい。

（参考文献）『漢詩大系 16』

★ 次韻傅子文絶句

傅子文の絶句に次韻す

宋 陳與義

風雨門前十日泥

風雨 門前 十日の泥

荒街相伴只筇枝

荒街 相伴あいとものないいて 只ただ 筇枝きょうし

従今老子都無事

今いまよ従り 老子すべ 都すべて無事

落盡園花不賦詩

園花を落とし尽くして 詩を賦よせず

【語釈】

○次韻：他の詩と同じ韻字を同じ順序で使って詩を作ること。○傅子文：不祥。○荒街：荒れた町。○筇枝：筇竹で作った杖。○従今：これから。○老子：老人の自称。○都：全て。○無事：やることが無い。

★ 石隈病起

石隈病起

宋 陳與義

幽人病起山深處

幽人びようき 病起す 山深き処

小院鴉鳴日午時

小院 鴉鳴く 日午の時

六尺屏風遮宴坐

六尺の屏風 宴坐を遮り

一簾細雨獨題詩

一簾の細雨 独り詩を題す

【語釈】

○石隈：水利上の水流を調節する閘門。○病起：病が治る。○幽人：隠者。○小院：小さな門や壁で仕切られた庭。○日午：正午。○宴坐：宴会の場所。○一簾：連なって下るさま。

★ 偶作

偶作

宋 程 俱

薰風習習動林光

くんぷう しゅうしゅう 薰風 習々 林光を動かし

紫翠陰中草木香

しさいんちゅう 紫翠陰中 草木香ばし

山鳥一聲清晝永

山鳥 一声 清晝永く

白雲深處北窗涼

白雲 深き処 北窓涼し

【語釈】

○薰風：おだやかな初夏の風。○習習：風がそよそよと吹くさま。○林光：林を透過する陽光。○紫翠：青紫の山色。○清晝：清らかな昼。

★ 夜

夜

宋 朱 熹

獨宿山房夜氣清

独り山房に宿して 夜氣清し

一窗涼月共虛明

一窓の涼月 共に虚明きよめい

鄰雞未作人聲絶

鄰雞りんけい 未だ作さず 人声絶ゆ

時聽高梧滴露鳴

時に聽く 高梧こうぼの滴露に鳴くを

【語釈】

○山房：山の寺院、家。○夜氣：夜の空気。○虚明：空しいあかり。○鄰雞：となりの家の雞。○高梧：高いアオギリの木。

★失題

失題

宋 朱熹

短棹長簑九曲灘

短棹 長簑 九曲の灘

晚來閑弄釣魚竿

晚來 閑に弄す 釣魚の竿

幾回欲過前灣去

幾回か 前灣を去り過んと欲して

却怕斜風特地寒

却って怕る 斜風の特地に寒きを

【語釈】

○失題：特に題を付けなかった詩。題が分からない詩。○短棹：短い釣り竿。○長簑：長い蓑。○九曲灘：福建省武夷山の九曲溪。朱熹の学舎のあった処。○晚來：夕方になつてから。○特地：突然。忽然。

★昨夕不知有雪而晨起四望遠峰皆已變色再用元韻作兩絕句

宋 朱熹

昨夕雪有るを知らず 而して晨に起きて四望すれば遠峰皆已に色を變ず 再び元韻を用いて兩絶句を作る

朔風吹盡暮雲平

朔風 吹き尽きて 暮雲平かなり

室暖爐紅睡達明

室暖かく 炉 紅にして 睡 明に達る

但怪朝來滿山白

但だ怪しむ 朝來 満山の白きを

不知昨夜打窗聲

知らず 昨夜窓を打つ声

【語釈】

○四望：四方を眺める。○朔風：北風。○明：夜明け。○朝來：朝から。朝になつて。

★ 絶句二首

絶句二首

宋 歐陽鉄

桑麻得雨更青葱
 芍薬留春結晚紅
 怪得鳥聲如許好
 此身還在亂山中

桑麻 雨を得て 更に青葱
 芍薬 春を留めて 晩紅を結ぶ
 怪しみ得たり 鳥声 許の如く好きを
 此の身は 還た 乱山の中に在り

【語釈】

○桑麻：桑と麻。○青葱：翠綠色。○晚紅：盛りを過ぎた花の色。○許：このように。

★ 絶句二首

絶句二首

宋 歐陽鉄

爲憐紅杏亞枝斜
 看到斜陽送亂鴉
 又是一春窮不死
 天教留眼看鶯花

爲に憐む 紅杏の枝に亜りて斜なるを
 見る 斜陽の 乱鴉を送るに到るを
 又た是れ 一春 窮まりて死せず
 天は 眼を留めて 鶯花を看せしむ

【語釈】

○爲：よってゝする。○憐：かわいがる。○紅杏：紅色の杏。○亞：寄り集まる。○斜陽：夕陽。○亂鴉：乱れた鳥の群。○又是：またも。その上。○鶯花：鶯の鳴く花。

★ 玉山觀

玉山觀

宋 謝 諤

微明燈火夜堂幽

微明なる灯火 夜堂幽なり

聽徹絲桐萬慮休

糸桐を聽徹すれば 万慮休す

骨冷魂清眠不得

骨冷え 魂清くして 眠り得ず

竹風蕭瑟滿庭秋

竹風 蕭瑟たり 満庭の秋

【語釈】

○玉山觀：古代伝説中の仙山。長安藍田県の東南にある山。○幽：奥深い。物静か。○聽徹：聴いてその奥まで理解する。○萬慮：全てのおもんばかり。○蕭瑟：（秋風が）物寂しいさま。

★ 寓郡城客舍熱不可寐與程彦舉坐語達旦

宋 吳 徹

郡城の客舎に寓して 熱して寐ぬべからず 程彦舉と坐して語り 旦に達す

淡月微雲對倚樓

淡月 微雲 対して樓に倚る

無聲河漢自西流

声無き河漢 自から西に流る

高城忽起梅花弄

高城 忽ち起る 梅花弄

散作晴空萬里秋

散じて晴空 万里の秋と作る

【語釈】

○郡城：群の中心の街。○客舎：旅館。○程彦舉：宋の徽州休寧の人。高宗紹興十七年の進士。鄱陽主簿となる。○旦：朝。夜明け。○淡月：光の薄い月。○微雲：かすかな雲。○倚：寄りかかる。○河漢：銀河。○梅花弄：笛の曲名。

★偶成

偶成

宋 吳儼

晚來一雨破炎蒸

ばんらい 一雨 炎蒸を破る

蕉葉葵花照眼明

しょうよう 菊花 眼を照らして明かなり

稍與燈花尋舊約

や 燈花と 旧約を尋ぬるも

却嫌庭樹作秋聲

却って嫌う 庭樹の 秋声を作すを

【語釈】

○晚來…夕方からの。○炎蒸…蒸し暑さ。○蕉葉…芭蕉の葉。○葵花…ひまわり。○燈花…燃え残りの灯心が花の形になったもの。○舊約…古い約束事。

★宴坐菴

えんざあん 宴坐菴

宋 范成大

五更風竹鬧軒窗

五更の風竹 軒窓鬧がし

聽作江船浪動牀

聴く 江船の浪 牀を動と作すを

枕上翻身尋斷夢

枕上 身を翻えして 断夢を尋ぬれば

故人待漏滿鞦韆霜

故人 漏を待ち 満鞦韆の霜

【語釈】

○宴坐菴…不祥。宴坐は座禪、安坐。○五更…夜明け前。○鬧…騒がしい。○枕上…床の上。○斷夢…中斷した夢。○漏…水時計。僅かな時間。○滿鞦韆…履一杯。

★ 寒夜獨步中庭

寒夜中庭に独歩す

宋 范成大

忍寒索句踏霜行
刮面風來鬚結冰
倦僕觸屏呼不應
梅花影下一窗燈

寒を忍び 句を索て 霜を踏みて行く
面を刮り 風来たりて 鬚 氷を結ぶ
倦僕 屏に触れて 呼べども 応えず
梅花影下 一窓の灯

【語釈】

○刮：削る。風が吹く。○倦僕：眠っている召使い。○屏：ついたて。

★ 睡覺

睡覺ねむりさ

宋 范成大

尋思斷夢半瞢騰
漸見天窗紙瓦明
宿鳥噪羣穿竹去
縣前猶自打殘更

断夢を尋思して 半ば 瞢騰
漸く見る 天窗 紙瓦の 明 なるを
宿鳥 噪ぎ 群れ 竹を 穿ちて 去る
縣前 猶自 残更に 打す

【語釈】

○尋思：心を静めて考慮する。○斷夢：中断した夢。消えた夢。○瞢騰：うっとりする。ふらふらする。○漸：だんだんと。○天窗：屋上に設けた光と風を通す窓。○紙瓦：紙で出来た瓦。○宿鳥：巢に宿っている鳥。○縣前：役所の前。○猶自：いまだ。○殘更：五更のこと、夜明け前。

★ 緩帶軒獨坐

帯を緩め軒に独坐す

宋 范成大

午日烘開豆蔻苞

午日烘開き 豆蔻苞ずこうしげる

檐塵飛動雀爭巢

檐塵たんじん 飛動して 雀すずめ 巢を争う

蒙蒙困眼無安處

蒙蒙もうもうたる 困眼こんがん 安んずる処無く

閒送爐煙到竹梢

閑かに炉煙ろえんを送り 竹梢ちくしょうに到る

【語釈】

○午日：五月五日、端午の節句。○烘：かがり火。○豆蔻：菓草の名。○苞：草樹が密生する。○檐塵：軒先の塵。○蒙蒙：おぼろげなさま。○困眼：眠そうな目つき。寝ぼけまなこ。○竹梢：竹のこずえ。

★ 聽雨

雨を聽く

宋 楊萬里

歸舟昔歲宿嚴陵

歸舟きしゆう 昔歲せきさい 嚴陵げんりやうに宿す

雨打疎篷聽到明

雨は疎篷そぼうを打ち聽くこと明めいに到る

昨夜茅簷疎雨作

昨夜ちえん 茅簷そう 疎雨なを作し

夢中喚作打篷聲

夢中むちゆう 喚さけびて 篷とまを打つ声なと作る

【語釈】

○昔歲：去年。○嚴陵：嚴陵瀨。浙江省桐廬県の南にある瀨，東漢の嚴光が隱居して釣りをした処。○疎篷：まばらな篷の舟窓。○明：あかつき。○茅簷：茅葺きののき。○疎雨：まばらな雨。○夢中：夢の中。

★ 春暖郡圃散策

春暖郡圃散策
しゅんだんぐんぼさんさく

宋 楊萬里

已覺朝來退袂衣
已に覚ゆ 朝來 袂衣を退くるを
ちようらい

日光風力軟如癡
日光 風力 軟きこと痴の如し
ち

倩誰留許春寒著
誰を倩いて 春寒を留許し著け
こ

更放梅花住少時
更に梅花をして 住むこと少時なら放めん
し

【語釈】

○郡圃：江西省宜春市郡圃。○朝來：夜明け以降。○袂衣：あわせ。冬の衣。○春寒：春の初めの寒さ。○留許：留める。「許」は意味の無い助字。○著：「つける」が原義で、〈動詞＋「著」〉で「〜し続ける」という持続形となる。

★ 閑居初夏午睡起

閑居初夏午睡より起く
かんきよしよか

宋 楊萬里

梅子留酸軟齒牙
梅子は酸を留めて 齒牙を軟ぐ
しが やわら

芭蕉分綠與窗紗
芭蕉は綠を分けて 窓紗に与う
そうしゃ あた

日長睡起無情思
日長くして 睡起し情思無し
すいき じょうし

閑看兒童捉柳花
閑に看る 兒童の柳花を捉うを
しずか りゆうか とら

【語釈】

○閑居：静かな生活。○梅子：梅の実。○留酸：酸っぱさが口に残る。○軟齒牙：歯が浮いたように感じる。○窗紗：窓に張った薄い紗のカーテン。睡起：起床より起きる。○無情思：何も思うことがない、何となく物憂い様子。○閑看：のんびりと眺めている。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 閑居初夏午睡起

閑居初夏午睡より起く

宋 楊萬里

松陰一架半弓苔

松陰 一架 半弓の苔

偶欲看書又嬾開

偶 又 嬾開 又た開くに嬾し

戲掬清泉灑蕉葉

戲 掬れに清泉を掬い 蕉葉に灑げば

兒童誤認雨聲來

兒童誤つて認む 雨聲 來るか

【語釈】

○閑居：静かな生活。○松陰：松の影。○一架：柱と柱の間。○半弓：弓形。○蕉葉：芭蕉の葉。○灑：水などを注ぎかける。○雨聲：雨の音。雨。

★ 夏月頻雨

夏月頻りに雨ふる

宋 楊萬里

一番暑雨一番涼

一番の暑雨 一番の涼

真箇令人愛日長

真箇 人をして 日の長きを愛さしむ

隔水風來知有意

水を隔てて風来りて 意有るを知る

爲吹十里稻花香

爲に吹く 十里 稻花の香

【語釈】

○一番：一回。○真箇：まことに。真実で偽りなく。

★ 山居秋日睡起

山居 秋日睡起すいき

宋 楊萬里

客至從嗔不著冠
起來信手攬書看
小蜂得計欺儂睡
偷飲晴窗硯滴乾

客至りて 嗔りに従りて 冠を著せず
起き来たりて 手に信せ 書を攬りて看る
小蜂 計り得たり 儂の 睡を欺くを
偷み飲む 晴窓 硯滴乾く

【語釈】

○睡起：眠りより起きる。○信：何かの力に任せる。○攬：持つ。○儂：わたし（俗語）。
○硯滴：硯のみずさし。

★ 山居雪後

山居 雪後

宋 楊萬里

一點紅塵未敢生
松間雪後政堪行
日光半破風微度
時作高林落果聲

一点の紅塵 未だ敢て生ぜず
松間 雪後 政に行に堪えたり
日光 半ば破れ 風 微に度り
時に 高林落果の 声を作す

【語釈】

○紅塵：車馬が引き起こす粉塵。○堪行：出かけるのに相應しい。

★ 偶題

偶題

宋 徐似道

老去功名不掛懷

老去りて功名 懷を掛ず

高眠之外只清齋

高眠の外 只だ清齋

偶因種竹便多事

偶々 竹を種えるに因りて 便ち多事

風葉掃餘還滿階

風葉 掃い余りて 還た階に満つ

【語釈】

○偶題…たまたま作った詩。○掛懷…思いを残す。思いをかける。○清齋…心を清らかにして物忌みすること。○因…くによって。○便…すぐに。

★ 秋日郊居

秋日郊居

宋 陸游

行歌曳杖到新塘

行歌し 杖を曳きて 新塘に到る

銀闕瑤臺無此涼

銀闕 瑤台 此の涼無し

萬里秋風菰菜老

万里の秋風 菰菜老け

一川明月稻花香

一川の明月 稻花香し

【語釈】

○郊居…郊外、田舎の家。○行歌…歩きながら唱う。○新塘…新しい堤。○銀闕…白銀で作った宮城の門。○瑤臺…立派な宮殿。○菰菜…河原のまこも。○老…熟しているさま。

★ 戲答野人

戲れに野人に答う

宋 陸游

日飲雲根一脈泉
 日に飲む 雲根うんこん 一脈の泉

知君骨相自應仙
 知る 君の骨相 自おのずから応まさに仙なるべきを

曲肱閑卧茅簷下
 肱を曲げ 閑かに卧すが 茅簷の下

買斷南山不用錢
 南山を買斷ばいだんして 錢ぜにを用いず

【語釈】

○野人：隱者。○雲根：深い山で雲の生ずる処。○骨相：骨格。相貌。○應：「まさに」
 「べし」と読み「きつと」に違いないの意。○仙：仙人。○茅簷：萱葺きののき。○南山
 ：終南山。君山などがあるが、特定出来ないの、南の山とする。隱棲の地とされる終南
 山が近いのか？○買斷：買い切って独占する。

★ 記夢

夢に記す

宋 陸游

信命從來不問天
 命まかに信せて從來 天を問わず

經句無酒亦陶然
 句を経て 酒無く 亦また陶然

夢爲估客揚州去
 夢は估客こかくと為りて揚州ようしゅうに去り

水調聲中月滿船
 水調聲すいちようせい中 月 船に満つ

【語釈】

○句：十日間。○陶然：うっとりするさま。○估客：行商人。○揚州：江蘇省揚州市。○
 水調：曲の名。○月：ここでは月光。

★雨夜

雨夜

宋 陸游

庭院蕭條秋意深

ていゐん しょうじょう
庭院 蕭條として 秋意深し

銅爐一炷海南沈

銅炉 一炷 海南に沈む

幽人聽盡芭蕉雨

幽人 聽き尽す 芭蕉の雨

獨與青燈話此心

獨り 青燈と 此の心を話す

【語釈】

○庭院：門塀内の建物の内空地。○蕭條：物静かなさま。○秋意：秋の趣き。秋の気配。
○炷：灯心。○海南：南部の浜海の地。○幽人：隱者。○青燈：青い光の灯火。

★小軒

小軒

宋 陸游

砧杵聲中歲月流

ちんきんせい ちゅう
砧杵声中 歲月流る

小軒風露一簾秋

小軒の風露 一簾の秋

人間走遍心如石

じんかん じんかん
人間 走ること 遍くして 心石の如し

分付寒螿替說愁

かんしょう ぶんよ
寒螿に分付して 愁を説くに替ゆ

【語釈】

○砧杵：衣を打つ砧。○寒螿：寒蟬。秋の終わりの蟬。○分付：分け与える。

★ 夏日雜題

夏日雜題

宋 陸游

東吳五月黄梅雨

東吳 五月 黄梅の雨

南浦孤舟白髮翁

南浦の孤舟 白髮の翁

貂插朝冠金絡馬

貂插 朝冠 金絡馬

多年不入夢魂中

多年入らず 夢魂の中

【語釈】

○東吳：古代の吳の地。○黄梅雨：梅雨。○南浦：南方の水辺に面した地方。送別の地の意味に使われる。江西省南昌県の西南。○貂插：？○朝冠：朝廷に出るときの冠。○金絡馬：良馬を指す。○夢魂：夢。

★ 晚涼

晚涼

宋 陸游

竹簟平鋪八尺床

竹簟 平に鋪く 八尺の床

脱中高卧對疏篁

巾を脱し 高卧し 疎篁に対す

近村得雨知何處

近村 雨を得 知んぬ何れの処ぞ

此地無風亦自涼

此地 風無く 亦た 自ら涼し

【語釈】

○竹簟：竹製のたかむしろ。○巾：頭巾。○高卧：世間を脱して暮らす。高眠。○疏篁：疎らな竹林。

★秋興

秋興

宋 陸游

村酒甜酸市酒渾

村酒は甜酸てんさん 市酒は渾じい

猶勝終日對空樽

猶まさお勝る終日 空樽くうそんに對するに

茅齋不奈秋蕭瑟

茅齋ぼうさい 奈いかんともせず 秋蕭瑟しゅうひつ

踏雨來敲野店門

雨を踏たみ 來りて敲たたく 野店の門

【語釈】

○村酒：村で作った酒。○甜酸：（発酵しすぎて）甘酸っぱい。○空樽：空の酒樽。○茅齋：萱葺きの部屋。○蕭瑟：秋風の音。○野店：田舎の店。野原の茶店。

★東窓

東窓

宋 陸游

寂寂東窗午夢殘

寂々せきせきたる東窓 午夢残る

更堪春雨作春寒

更に春雨に堪なえ 春寒を作す

蠻童未報煎茶熟

蠻童ばんどう 未だ報なぜず 煎茶の熟すを

一卷南華枕上看

一卷なんかの南華 枕上まくらに看る

【語釈】

○寂寂：寂しく静かなさま。○午夢：午睡の夢。○春寒：春先の寒さ。○蠻童：南方からきた男児の召使い。○熟：煮る。煎じ終わる。○南華：「南華真經」のこと「莊子」の別名。

★小園

小園

宋 陸游

小園烟草接鄰家

小園の烟草えんそう 鄰家りんせうに接す

桑柘陰陰一徑斜

桑柘陰々そうたくいんいん 一徑斜いんせうめなり

卧讀陶詩未終卷

卧がして陶詩を読み 未だ卷かんを終えず

又乘微雨去鋤瓜

又た 微雨に乗じて 去ゆきて瓜すを鋤く

【語釈】

○小園：小さな畑。○烟草：かすみに包まれた草原。○桑柘：クワやヤマグワ。陰陰：薄暗く、もの寂しいさま。○陶詩：陶淵明の詩。○乘：くを利用して。○微雨：こさめ。○去：出かける。○鋤：すきで耕す。

(参考文献) 『中国詩人撰集二一八』

★冬夜聽雨戲作

冬夜雨を聴き戯れに作る

宋 陸游

繞簷点滴如琴筑

簷のきを繞めぐぐる点滴きんちく 琴筑の如し

支枕幽齋聽始奇

枕を支えて 幽齋ゆうさい 聴いて始めて奇きなり

憶在錦城歌吹海

憶う 錦城きんじょうの歌吹海かすいかいに在りて

七年夜雨不曾知

七年の夜雨かっ 曾かつて知らず

【語釈】

○点滴：雨だれの音。○琴筑：琴と筑（楽器で十三弦あり竹で鼓す）。○錦城：錦官城（成都）。○歌吹海：歌舞音曲の盛んである場所。

★ 枕流軒

枕流軒 ちんりゅうけん

宋 郭 綽

招提避雨寄孤眠

招提 しょうだい 雨を避け 孤眠 こみん に寄る

夜静溪聲到枕邊

夜静かにして 溪聲 けいせい 枕邊 ちんべん に到る

引得五湖清入夢

五湖を引き得て 清夢 せいむ に入り

拍天波浪一漁船

天を拍 う つ波浪 一漁船

【語釈】

○枕流軒：安吉県（浙江省湖州市の県）の嚴真觀にある。○招提：寺院。○孤眠：独り寝。○枕邊：枕元。○五湖：古代の五つの湖。初説あり。一般に太湖を中心とする湖。

★ 次松風閣韻

松風閣韻に次す しょうふうかくいん

宋 裘萬頃

白雲殊不作俗態

白雲 殊に 俗態 ぞくたい を作さず

流水更似知人心

流水 更に 人心を知るに似たり

溪邊濯足溪上坐

溪邊 けいへん に 足を濯 あ り 溪上 けいじょう に坐す

樵唱一聲秋滿林

樵唱 しょうしょう 一声 秋 林に満つ

【語釈】

○松風閣：広東省中山市にある西山寺にある閣。○俗態：いやしい姿。○樵唱：きこりの歌。

★ 初夏偶書

初夏偶たまたま書す

宋 張 栻

江潭四月熟梅天

江潭こうたん 四月じゅうくばい 熟梅の天

頃刻陰晴遞變遷

頃刻けいこく 陰晴いんせい 遞たがひに變遷

掃地焚香清畫水

地を掃はらう焚香ふんこう 清画せいがすい水

一窗修竹正森然

一窓の修竹しゅうちく 正まさに森然しんぜん

【語釈】

○江潭：江の深い淵。○熟梅天：晩春初夏の梅が熟するころの天気。○頃刻：非常に短い時間。○陰晴：曇りと晴れ。○焚香：焼香。○修竹：長く高い竹。○森然：樹木のこんもりと茂るさま。

★ 夜景

夜景

宋 魏了翁

遠鐘入枕雪初晴

遠鐘 枕に入り 雪初めて晴れ

衾鐵稜稜夢不成

衾きんでつ 鐵稜りょうりょう 々として 夢成らず

起傍梅花讀周易

起きて 梅花に傍そばいて 周易しゅうえきを読む

一窗明月四簷聲

一窓の明月しえん 四簷しえんの聲

【語釈】

○遠鐘：遠くから聞こえて来る鐘の音。○衾鐵：寒さで凍り付き鉄のように硬く冷たくなった布団。○稜稜：寒さの厳しいさま。○周易：『易経』、五経の一つで占いの書。○四簷聲：四方ののきから滴る音。ここでは、屋根に積もった雪が解けて滴があちこちから滴る音。

★ 讀書

讀書

宋 盧祖皋

細字燈前老不使
 小齋新冷夜無眠
 數聲牆竹蕭蕭雨
 一縷銅爐淡淡煙

細字 灯前 老て 便ならず
 小齋しょうさいの新冷夜 眠る無し
 数声しゅうせいの 牆竹しょうちく 蕭々しょうしょうの雨
 一縷いちるの銅炉 淡々の煙

【語釈】

○細字：細かい字。○不便：（細かい字を見るのに）不便である。○小齋：小さな書齋。
 ○牆竹：垣根に植えてある竹。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。
 ○一縷：絶えようとして僅かに繋がっているさま。○淡淡：薄くかすかなさま。

★ 次韻南軒喜雨

「南軒 雨を喜ぶ」に次韻す

宋 張孝祥

北風吹雲如裂絲
 赤龍卷水尾倒垂
 雷轟電激不敢駐
 驅入吾家喜雨詩

北風 雲を吹いて 糸を裂く如し
 赤竜 水を巻いて 尾 倒さかしまに垂たる
 雷轟らいこう 電激でんげき 敢あえて 駐とどまらず
 驅かけて 吾が家の 雨を喜ぶ詩に入る

【語釈】

○南軒：江蘇省南京市南軒。○赤竜：赤い竜。ここでは稲妻の形容。○雷轟：雷のとどろき。○電激：稲妻。

★ 夏日西湖閑居

夏日西湖閑居

宋 汪莘

十里湖山苦見招
柳堤荷蕩赤欄橋
待他朝市人歸後
獨泛扁舟吹玉簫

十里の湖山 苦ねんじろに招き見る
柳堤 荷蕩 赤欄の橋
他の朝市人の帰るの後を待ち
ひとり 扁舟を泛うかべ 玉簫を吹く

【語釈】

○閑居：静かにのんびりと暮らすこと。○荷蕩：ハスの花が一面に咲いた湖。○赤欄：赤い欄干。○扁舟：小舟。○玉簫：玉で出来た縦笛。

★ 夏日閑坐

夏日閑坐

宋 徐璣

無數山蟬噪夕陽
高峰影裏坐陰涼
石邊偶看清泉滴
風過微聞松葉香

無數の山蟬 夕陽に噪ぐ
高峰影裏 陰涼に坐す
石邊 偶々見る 清泉の滴るを
風過ぎ 微かに聞く 松葉の香しきを

【語釈】

○閑坐：閑かに坐る。○陰涼：物陰で涼しくて爽やかなところ。○聞：臭いをかぐ。

★新涼

新涼

宋 徐璣

水満田疇稻葉齊
 日光穿樹曉煙低
 黄鶯也愛新涼好
 飛過青山影裏啼

水満ちて田疇 稲葉 斉う
 日光 樹を穿ち 曉煙 低し
 黄鶯 也た愛す 新涼の好しきを
 飛んで 青山影裏に過りて啼く

【語釈】

○田疇：田、田畑。○曉煙：朝靄。○黄鶯：黄鸝。コウライ鶯。○也：また。○青山：青々とした山。○過：「くによぎる」と読み、訪れるの意。「くをよぎる」と読むときは通過するの意。

★湖上寓居雜咏

湖上寓居雜咏

宋 姜夔

湖上風恬月澹時
 卧看雲影入玻瓈
 輕舟忽向窗邊過
 揺動青蘆一兩枝

湖上風恬に月澹き時
 卧して見る 雲影の玻瓈に入るを
 輕舟 忽ち 窓辺に向つて過ぎ
 揺動す 青蘆の一兩枝

【語釈】

○寓居：仮住まい。○雜咏：（主題を決めずに）色々な事物を詠じた詩。○恬：穏やか。静か。○玻瓈：ガラス。ここではガラスのように透き通った水面を言う？○輕舟：小舟。○青蘆：青い蘆。

★ 梁家渡

梁家の渡わたし

宋 蕭彦毓

遠水環沙翠作灣
遠水 沙を環りて 翠 灣を作す
紅塵飛不入青山
紅塵 飛べども 青山に入らず
涼風一枕秋宵夢
涼風 一枕 秋宵の夢
夢繞千巖萬壑間
夢は繞る 千巖 万壑の間

【語釈】

○梁家渡…不祥。○遠水…遠く離れた場所にある川。○紅塵…車馬の起こす塵。○千巖萬壑…多くの山と谷。

★ 山居二首

山居二首

宋 朱繼芳

空山薇蕨供清齋
空山の薇蕨 清齋に供す
世事悠悠不挂懷
世事 悠悠 おもい か
梅溽得風醒午枕
梅溽 風を得て 午枕醒む
竹陰轉影上南階
竹陰 影を転じて 南階に上る

【語釈】

○空山…人気の無いひっそりとした山。○薇蕨…ゼンマイとワラビ。○清齋…心を清らかにして物忌みすること。○世事…俗世間のこと。○悠悠…のんびりしたさま。○懷…おもい。○梅溽…陰曆四月。梅が熟する頃の蒸し暑さ。○午枕…昼寝。

★ 山居二首

山居二首

宋 朱繼芳

宿雨初乾一杖藜

宿雨 初めて乾き 一杖の藜 しゆくう あかぎ

欲呼漁艇訪前溪

漁艇を呼ばんと欲して 前溪を訪う ぜんけい おとな

碧桃花落無尋處

碧桃 花落ちて 尋ぬる処無し へきてい

惆悵人間日又西

惆悵す 人間 日又西す ちゆうちよう にんげん

【語釈】

○宿雨…長い雨。○藜…木の一種。軽いので老人、隠者の杖として用いられる。○碧桃…緑色の桃の花。○惆悵…嘆き悲しむ。

★ 雜興

雜興

宋 方岳

是非不到野溪邊

是非 到らず 野溪の辺 はとり

只就梧桐聽雨眠

只だ 梧桐に就いて 雨を聴いて眠る ごとう

睡熟不知溪水長

睡 熟して知らず 溪水の長きを ねむり

鷺鷥飛上釣魚船

鷺鷥 飛び上る 釣魚の船 ろし

【語釈】

○是非…善悪共に。○梧桐…あおぎり。○溪水…谷川の水。○鷺鷥…サギ。

★ 山眠

山眠

宋 方岳

借得松風一覺眠

松風を借り得えて一覺の眠

旋燒枯葉煮山泉

旋かえつて枯葉こようを燒かきて山泉さんぜんを煮にる

人間蟻蛭王侯夢

人間にんげん蟻蛭ぎしお王侯おうこうの夢

不到梅花紙帳邊

到いたらず梅花紙帳ばいさうの邊へに

【語釈】

○一覺眠…一眠り。覺は眠りの単位。○旋…また。○蟻蛭王侯夢…南柯の夢（南柯太守伝）。はかないことのとえ。○梅花紙帳…いろいろな模様を組み合わせた寝具。

★ 夜深

夜深

宋 周弼

虚堂人靜不聞更

虚堂きょどう人靜にんじやうかにして更こうを聞きかず

獨坐書床對夜燈

書床しよしょうに獨坐どくざして夜燈やとうに對たいす

門外不知春雪霽

門外もんがい知しらず春雪はるゆきの霽はるるを

半峰殘月一溪冰

半峰はんぽうの殘月ざんげつ一溪いっせきの冰ひやう

【語釈】

○虚堂…高堂。うつろな堂。○更…時間の単位。時間を知らせる物。○書床…書齋の床。○霽…晴れる。

★ 數日

數日

宋 趙師秀

數日秋風欺病夫

數日の秋風 病夫を欺く

盡吹黃葉下庭蕪

ことごと 黄葉を吹いて 庭蕪に下る

林疎放得遙山出

まばらにして 遙山を放ち得て出だすも

又被雲遮一半無

又雲に遮られて 一半無し

【語釈】

○庭蕪：庭に叢がっている草。○遙山：遙か遠くの山。○一半：半分。

★ 絶句

絶句

宋 趙師秀

黃梅時節家家雨

黄梅の時節 家々の雨

青草池塘處處蛙

青草 池塘 処々の蛙

約客不來過夜半

客を約して 来らず 夜半を過ぐ

閑敲棋子落燈花

閑に棋子を敲けば 灯花落つ

【語釈】

○黃梅時節：梅が熟して黄色になる頃。黃梅雨はさみだれ、梅雨のこと。○約：招く。○夜半：まよなか。○棋子：碁石。○燈花：焼け残った灯心が花のようになったもの。

★寒夜

寒夜

宋 杜耒

寒夜客來茶當酒

寒夜 客來りて 茶酒に當つ

竹爐湯沸火初紅

竹爐 湯沸きて 火初めて紅なり

尋常一樣窗前月

尋常 一樣 窓前の月

纔有梅花便不同

纔に梅有りて 花 便ち同じからず

【語釈】

○當…の代わりにする。○竹爐…竹の籠の中に小鉢を入れた道具の一種で、炭を入れて暖をとるのに使う。○尋常…普通。

★賞茶

茶を賞す

宋 戴昺

自汲香泉帶落花

自ら香泉を汲みて 落花を帶ぶ

漫燒石鼎試新茶

漫ろに石鼎を燒き 新茶を試す

綠陰天氣閑庭院

綠陰の天氣 閑なる庭院

卧聽黃蜂報晚衙

卧して聽く 黃蜂の 晚衙を報ずるを

【語釈】

○香泉…香りの有る泉（固有名詞とは採らない）。○漫…なんとなく。○石鼎…石でできた鼎。○晚衙…夕方に官吏退出の時刻を報ずる合図。

★ 春日五絶

春日五絶

宋 劉克莊

歸到城門欲發更
 馬頭惟有暮鴉迎
 小窗了却觀書課
 幾首殘詩旋補成

歸りて城門に到れば 発更はつこうならんと欲す
 馬頭ばとう 惟だた 暮鴉ぼあの迎むかう有り
 小窓りょうきやく 了りょうきやく 却すかんしよ 観書の課
 幾首の残詩 旋ついで補成す

【語釈】

○發更：初更。夜の初め。○了却：完了する。閉める。却是完成・完了を示す助字。○旋…ついで、すぐさま。○補成：補完。

★ 出關

関を出す

宋 葉紹翁

脱衣命僕洗塵埃
 籬落人家未見梅
 出得城門能幾步
 船頭便有白鷗來

衣を脱し 僕に命じて 塵埃じんあいを洗う
 籬落りらくの人家 未だ梅を見ず
 城門を出で得ること 能くよ幾歩ぞ
 船頭 便じて 白鷗の来たる有り

【語釈】

○關：南宋の首都臨安城の北門。○僕：召使い。○籬落：かきね、まがき。○便：熟練する。

★ 題葉靖逸東庵

葉靖逸の東庵に題す

宋 周端臣

一庵自隱古城邊

一庵自ら隱す 古城の辺へん

不是山林不市塵

是れ 山林ならず 市塵してんならず

落月半窗霜滿屋

落月半窓 霜屋おくに滿つ

卧聽宰相去朝天

卧がして聽く 宰相去りて 天に朝すと

○葉靖逸：宋の處州龍泉の人。○市塵：店舗の集中する市街。○宰相：中書、尚書、門下の三省の長官。○朝天：朝廷に参内する。

★ 春日江居

春日江居

宋 葉元素

家住夕陽江上村

家は住じゅうす 夕陽せきやう 江上の村

一灣流水護柴門

一灣の流水 柴門さいもんを護る

種來松樹高於屋

種しゅうじゆえ來る松樹 屋よりも高し

借與春禽養子孫

借しゅんきん與しやくよして 子孫を養わん

【語釈】

○家住：家がある。○江上：江の畔。○柴門：柴で作った粗末な門。○借與：貸し与える。○春禽：春の鳥。

★ 晩涼

晩涼

宋 毛珣

窓前灑地著胡床

窓前の灑地れいち 胡床ことを著たつ

浴罷閑來坐晩涼

浴罷やみて 閑かん 來きたり 晩涼ばんりやうに坐ます

更取壁燈移暗處

更へに 壁燈かきとうを取りとりて 暗處あんじよに移うつし

待他月上竹邊牆

他たを待まちてば 月つきは 竹邊ちくへんの牆かきに上ある

【語釈】

○灑地：水をそそいだ地。○胡床：折りたたみ式の背もたれのある腰掛け。○著：設ける。○晩涼：夕方の涼しさ。

★ 偶題

偶題

宋 杜範

雲外亂山才約略

雲外の乱山わざか 才やくりやくに約略

雨中平野更淒迷

雨中の平野 更せいめいに淒迷

有人支枕篷窗底

人ひと有りて 枕まくらを支たう 篷窗ほうそうの底

卧看羣牛渡野溪

卧ふして看みる 群牛ぐんぎうの野溪やけいを渡わたるを

【語釈】

○偶題：たまたま作った詩。○才：わずかに。○約略：ぼんやりとしている。○淒迷：さびしくすさまじい。○篷窗：舟の窓。転じて舟。

★ 溪居冬夜

けいきよとうや
溪居冬夜

宋 何洪

茅屋瀕溪只數椽

茅屋 溪に瀕りて只だ數椽

護籬黃犬枕莎眠

籬を護る黃犬 莎に枕して眠る

柴扉不掩松梢月

柴扉 掩わず 松梢の月

恐有山陰泛雪船

恐らくは 山陰に 雪に泛ぶ船有らん

【語釈】

○茅屋：萱葺きの粗末な家。○瀕：すぐ側にある。○數椽：數軒。椽は家を数える単位。
○莎：はまなすげ。○柴扉：柴で作った粗末な扉。○掩：閉ざす。○松梢：松の梢。

★ 山間秋夜

山間の秋夜

宋 真山民

夜色秋光共一闌

夜色 秋光 共に一闌

飽收風露入脾肝

飽くまで 風露を収めて 脾肝に入る

虚簷立盡梧桐影

虚簷 立ち尽す 梧桐の影

絡緯數聲山月寒

絡緯 數聲 山月寒し

【語釈】

○夜色：夜の気配。○秋光：秋の月の光。○一闌：一つの欄干。闌は欄に同じ。○風露：秋の風と露。○虚檐：誰もいない軒、縁側。○梧桐：青桐。○絡緯：こおろぎ、くつわむし。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★春晴

春晴

宋 周氏

瞥然飛過誰家燕
驀地香來甚處花
深院日長無個事
一瓶春水自煎茶

瞥然 飛び過ぐ 誰が家の燕
驀地 香来たる 甚の処の花
深院 日長くして 個事無し
一瓶の春水 自ら茶を煎る

【語釈】

○瞥然…ちらりとひらめくさま。○驀地…まっしぐらに。○深院…奥まった庭。○個事…
箇々の些細なこと。

★絶句

絶句

宋 除守信

汲汲光陰似水流
隨時得過便須休
兒孫自有兒孫計
莫與兒孫作馬牛

汲々たる光陰 水流に似たり
時に随い過ぐことを得て 便ち休すを須む
兒孫 自ら有り 兒孫の計
兒孫の与に 馬牛と作ること莫れ

【語釈】

○汲汲…いそがしいさま。○光陰…年月。時間。○便…ただちに。

★ 山居雜頌

山居雜頌 さんきよきよざうしやう

宋 饒節

禪堂茶罷卷殘經

禪堂 茶を罷めて 殘經を巻く ざんけい

竹杖芒鞋信脚行

竹杖 芒鞋 脚に信せて行く ちくじやう まか

山盡路回人跡絶

山尽き 路回りて 人跡絶ゆ みちめぐ じんせき

竹雞時作兩三聲

竹雞 時に作す 兩三声 ちくけい な

【語釈】

○雜頌…とりとめもなく作った詩。○殘經…読み残した經典。○竹杖…竹の杖。○芒鞋…ススキのわらじ。○竹雞…鳥の名、鷓鴣に似た小さな鳥。

★ 次韻

次韻

宋 饒節

楊柳池塘表裏青

楊柳 池塘 表裏の青 ちやうちやう

魚兒偷眼畏蜻蜓

魚兒 偷眼して 蜻蜓を畏る ちゆうがん せいてい

夜來雨過菖蒲靜

夜來 雨過ぎて 菖蒲静かに

倒浸中天四五星

倒浸す 中天の四五星 たうしん

【語釈】

○池塘…池の堤。池。○偷眼…ぬすみ見をする。○蜻蜓…とんぼ。○夜來…昨夜から。○倒浸…池の水に逆さまに写っている。○中天…天の真ん中。

★次韻蔡堅老秋日

蔡堅老の「秋日」に次韻す

宋 釋正宗

秋容淡薄晚煙孤

秋容しゅうよう淡薄たんぱくにして晚煙ばんえん孤なり

千里誰開水墨圖

千里誰か開く水墨の図

欲借扁舟乘興去

扁舟を借り興に乗じて去り

臥看月影弄風蒲

臥がして月影げつえいの風蒲ふうほを弄ろうすを看みんと欲す

【語釈】

○蔡堅老：蔡杓。宋の建昌南城の人。○次韻：同じ韻字を同じ順序で使って詩を作ること。○秋容：秋景色。○淡薄：あっさりしていること。○晚煙：夕もや。夕食を作るかまどの煙。○扁舟：小舟。○乘興：興味に乗ずる。○風蒲：風に吹かれる蒲。

★廬山雜興二首

廬山雜興二首

宋 釋德洪

幽花疏竹冷梢雲

幽花ゆうか疏竹そちく梢雲しょううん冷やかなり

江北江南正小春

江北江南まさ正しょうしゆんに小春

但得青山常在眼

但た得せいざん青山せいざんの常じょうに眼がんに在あるを得

不妨白髮暗隨人

妨あげず白髮はくはつの暗あんに人ひとに隨まうを

【語釈】

○廬山：江西省九江市の南にある山。陶淵明隱棲の地として名高い。○雜興：さまざまな趣。○幽花：人知れずに咲く花。○梢雲：高い雲。○小春：小春日和。○青山：あおあおと木の茂った山。○白髮：白髮の老人。

★ 廬山雜興二首

廬山雜興二首

宋 釋德洪

別開小徑入松關
半在雲間半雨間
紅葉滿庭人倚檻
一池寒水動秋山

別に小径を開き松関に入る
半は雲間に在り 半は雨間
紅葉庭に満ち人は檻に倚る
一池の寒水秋山を動かす

【語釈】

○廬山：江西省九江市の南にある山。陶淵明隱棲の地として名高い。○雜興：さまざまな趣。○松關：自然の松をそのまま門としたもの。○檻：おぼしま。

★ 秋興

秋興

金 吳 激

後園雜樹入雲高
萬里長風夜怒號
憶在錢塘江上寺
松窗竹閣瞰秋濤

後園の雜樹雲に入りて高し
万里の長風夜怒号す
憶いて錢塘江上の寺に在り
松窓の竹閣 秋濤を瞰る

【語釈】

○錢塘江：浙江省を流れる河川、海嘯で有名。○松窗：松に臨んだ窓。書斎。○竹閣：竹で組んだ樓閣。○秋濤：秋の大波。秋に起こる錢塘江の海嘯。

★ 宿湖城簿廳

湖城の簿庁ぼちように宿す

金 吳 激

日遅風暖燕飛飛

日遅く風 暖あたたかにして燕飛々

古柳高槐面翠微

古柳 高槐 翠微すいびに面す

卷上疏簾無一事

疏簾それんを巻き上げて 一事無し

滿池春水照薔薇

滿池の春水 薔薇しょうびを照らす

【語釈】

○湖城：湖に面した街。○簿廳：主簿の官舎。○飛飛：飛ぶさま。○高槐：高いエンジュの樹。○翠微：薄緑色の靄。山の緑深いひっそりした中腹のあたり。○疏簾：疏らな簾。○春水：春の川を豊かに流れる水。○薔薇：ばら。

★ 不出

出でず

金 劉仲尹

好詩讀罷倚團蒲

好詩 読み罷やみて 団蒲だんぼに倚る

唧唧銅餅沸地爐

唧しよしよ々として 銅餅どうへい 地炉ちろに沸く

天氣稍寒吾不出

天氣 稍やや寒く 吾 出でず

氍毹分坐與狸奴

氍毹くゆ分坐して 狸奴りこに与う

【語釈】

○團蒲：蒲の穂で作った円形の座布団。○唧唧：嘆息する声、虫の形の形容。○銅餅：銅で作ったつるべ。○地爐：地下に設けた暖炉。○氍毹：毛織りの敷物。○分坐：座を分ける。○狸奴：狸。

★ 一室

一室

金 劉仲尹

老來湖海媿陳登

ろうらい こかい ちんとう は
老來 湖海 陳登に媿ず

只有頭鬚未是僧

ただ とうはつ
只だ頭鬚の 未だ是れ僧ならざる有り

坐對黃昏鐘鼓定

坐して こうこん
坐して黃昏に對せば 鐘鼓定まる

竹根吹火上吟燈

ちくこん
竹根 火を吹き 吟燈に上る

【語釈】

○老來…年をとってから。○湖海…世の中。いなか。○陳登…魏の人で呂布の討伐に功績があった。○黃昏…たそがれ。○竹根…竹製の酒器。○吟燈…詩人の照明。

★ 野堂

野堂

金 王庭筠

雲自知歸鳥自還

おのずか
雲 自 知ら帰るを知り鳥 自 知ら還る

一堂足了一生閑

一堂 了するに足り 一生閑なり

門前剝啄定佳客

はくたく
門前 剝啄するは 定めて佳客

簷外屏顔皆好山

れんがひ せんがん
簷外 屏顔 皆好山

【語釈】

○了…(一生)を全うする。○剝啄…(門を)敲く。○簷外…軒のそと。○屏顔…高くそびえる。

★ 所見

所見

金 劉 鐸

綸竿老子綠蓑衣

綸竿の老子 緑蓑の衣
りんかん りよくき

細雨斜風一釣磯

細雨斜風 一釣磯
いっちょようき

正是鄰家社醅熟

正に是れ 隣家 社醅熟し
まさまじ

柳條穿得錦鱗歸

柳條に 錦鱗を 穿ち得て歸る
りゅうじょう きんりん うが

【語釈】

○綸竿：釣り竿（を持った）。○緑蓑：緑色の蓑。○釣磯：魚を釣るときに坐る石。○社醅：祭りのための酒。○柳條：柳の枝。○錦鱗：魚の美称。

★ 雨晴二首

雨晴る二首

金 趙秉文

東風時送瓦溝聲

東風時に送る 瓦溝の聲
がこう

欹枕幽窗夢自驚

枕を 欹てて 幽窓 夢 自ら驚く
そばだ ゆうそう おのずか

睡起不知雲已散

睡起して知らず 雲の已に散ずるを
すいき

夕陽偏掛挂柳梢明

夕陽 偏に 柳梢を 掛けて 明なり
せきよう ひとえ りゅうしやう か あきらか

【語釈】

○東風：春風。○瓦溝：瓦屋根の排水溝。○欹枕：枕を傾ける。枕に欹るといふ読み方もある。○幽窗：閑かなまど。○夢驚：夢が覚める。目が覚める。○睡起：眠りから起きる。○偏：特に。ただ。○挂：ひっかける。○柳梢：柳の梢。

★ 雨晴二首

雨晴る二首

金 趙秉文

一抹平林媚夕暉
一抹の平林 夕暉に媚ぶ
山烟漠漠燕飛飛
山煙 漠々 燕 飛々
倚欄遙認天邊電
欄に倚りて 遙かに認む 天辺の電
何處行人帶雨歸
何れの処の行人か 雨を帯びて歸る

【語釈】

○夕暉：ゆうやけ。○山烟：山にかかっている霧。○漠漠：一面に続いているさま。ひろびろとして果てしないさま。○飛飛：とんでいるさま。○欄：欄干。○天邊：空の果て。○電：いなずま。○行人：旅人。

★ 雑詩

雑詩

金 王 礪

瓦爐柏子細煙消
瓦 爐 柏子 細煙消ゆ
閑讀禪經破寂寥
閑かに禪經を読めば 寂寥を破る
風細月高人已靜
風細く 月高く 人已に静なり
隔窗疎竹夜蕭蕭
窓を隔つ 疎竹 夜蕭々

【語釈】

○雑詩：心の趣くままに作った自由でとらわれない詩。○瓦爐：瓦で作った炉。○柏子：柏子香、香木の一つ。○寂寥：ひっそりしてもの寂しいさま。○蕭蕭：物寂しい様子や物音などの形容。

★ 山寒

山寒し

金 辛 愿

山寒春静早關門

山寒く春静かにして 早く門を關ざす

新月微光照短垣

新月の微光 短垣を照らす

可恨暮雲欺落景

恨むべし 暮雲の落景に欺くを

却將殘靄助黄昏

却って殘靄を將って 黄昏を助く

【語釈】

○落景…夕陽。○欺…压倒する。○殘靄…夕焼け。○黄昏…たそがれ。

★ 睡起

睡起

金 高士談

平生心性樂疎慵

平生の心性 疎慵を楽しむ

多病追歡興亦空

多病 歡を追いて 興 亦た空し

睡起不知春已老

睡起して知らず 春の已に老ゆるを

一簾紅雨杏花風

一簾の紅雨 杏花の風

【語釈】

○睡起…眠り醒めて起き上がる。○平生…平素、通常。○心性…性格。○疎慵…無精なこ
と。○春老…晩春になる。○一簾…雨の降るさま。○紅雨…赤い落花の雨。

★ 雑詩

雑詩

金 劉 豫

竹塢人家傍小溪

ちくお 竹塢の人家 小溪に傍う

數枝紅杏出疏籬

ごうきよう そり 數枝の紅杏 疏籬に出ず

門前山色帶煙重

門前の山色 煙を帯びて重く

幽鳥一聲春日遲

ゆうちよう 幽鳥 一声 春日遅し

【語釈】

○雑詩：心の趣くままに作った自由でとらわれない詩。○竹塢：竹が盛んに茂っている曲。○紅杏：赤い杏の花。○疏籬：まばらな垣根。○幽鳥：隠れ住む鳥。

★ 雑詩

雑詩

金 劉 豫

風荷柄柄弄清香

ふうか へいへい 風荷 柄々 清香を弄す

輕薄沙禽落又翔

さきん 輕薄なる 沙禽 落ち又翔ぶ

紅日轉西漁艇散

紅日 西に転じて 漁艇散ず

一川山影暮天涼

一川の山影 暮天涼し

【語釈】

○雑詩：心の趣くままに作った自由でとらわれない詩。○風荷：風に揺れる蓮の葉。○柄柄：明るくかがやくさま。○輕薄：薄く軽い。○沙禽：砂浜にいる鳥。

★ 西城道中

西城道中

金 周 昂

草露幽香不動塵

そうろ 草露の幽香塵を動かさず

細蟬初向葉間聞

さいせん 細蟬初めて葉間に向いて聞く

溟濛小雨來無際

めいもう 溟濛たる小雨来たりて際無し

雲與青山淡不分

雲と青山と淡くして分たず

【語釈】

○西城：廣東省陽江市陽春市。○幽香：ほのかな淡い香り。○細蟬：細い蟬の声。○溟濛：薄暗い。

★ 即事

即事

金 周 昂

一牀安置似僧居

一床安置し僧居に似たり

白髮忘梳動月餘

くしけず 白髮梳るを忘れ動もすれば月余

懶性漸成愁把筆

らんせい 懶性漸く成りて筆を把るを愁う

小詩常擬倩人書

小詩常に人を倩いて書せんと擬す

【語釈】

○即事：事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○動：いつも。ともすれば。○月餘：一月余り。○懶性：怠惰な性格。○漸：だんだんと。○倩：代わりに仕事をするように頼む。○擬：定める。

★ 山居

山居

金 元好問

詩腸搜苦怯茶甌

詩腸 搜苦 茶甌を怯ゆ

信手拈書卻枕頭

手に信せて 書を拈って 却って 頭に枕す

簷溜滴殘山院靜

簷溜 滴残り 山院静なり

碧花紅穗媚涼秋

碧花 紅穗 涼秋に媚ぶ

【語釈】

○詩腸：詩を作ろうとする心。○搜苦：好い詩句を捜して苦吟する。○茶甌：茶をわかす小さな釜。○簷溜：軒からしたたり落ちる水。○山院：山にある寺院。○媚：美しい。

★ 山中秋夜

山中秋夜

元 黄庚

石床彈月鶴聽琴

石床 月に弾じて 鶴琴を聴く

玉宇凝秋絶點塵

玉宇 秋を凝らして 点塵を絶つ

萬里無雲銀漢淡

万里 雲無く 銀漢淡し

一天風露溼星辰

一天の風露 星辰を溼す

【語釈】

○石床：坐ったり寝たりするときに使う石製の用具。○彈月：月明かりの下で琴を弾く。○玉宇：佳麗な宮殿。大空。○凝：完全なものにする。形作る。○點塵：小さな埃。○銀漢：天の川。○風露：雨と霧。○星辰：星。

★ 楓塘別業

ふうとうべつぎよう
楓塘別業

元 尹廷高

白雲缺處露簷牙

白雲 欠く処 簷牙を露す
えんが あらわ

雞犬相聞僅數家

雞犬 相聞こゆ 僅かに數家
けいけん わず

幽鳥不啼林寂寂

幽鳥 啼かず 林寂々
せきせき

滿山黃霧落松花

滿山の黃霧 松花に落つ
こうむ しょうか

【語釈】

○楓塘：楓が植えてある堤。○別業：別荘。○簷牙：軒のきばのように突き出た部分。○幽鳥：隠れている鳥。○寂寂：寂しく静かなさま。○黄霧：黄色い霧。

★ 喜晴

晴るるを喜ぶ

元 趙孟頫

久雨厭厭愁殺人

久雨 厭々 人を愁殺す
きゅうう えんえん しゅうざつ

晚晴猶得見青春

晚晴 猶お 青春を見るを得たり
な

急須走馬西湖路

急ぎ 須らく 馬を西湖の路に走らすべし
すべか

楊柳淡黃如麴塵

楊柳 淡黄にして 麴塵の如し
ようりゅう たんこう きくじん

【語釈】

○久雨：長雨。○厭厭：安らかで静かなさま。○愁殺：ひどく愁わせる、殺は程度の激しいことを示す助字。○晚晴：夕方に晴れること。晩年になつて俗世間から優越することの比喩。○須：「すべからくすべし」と読み、「くするのが当然である」の意。○西湖：浙江省杭州市の西にある風光明媚な湖。○楊柳：やなぎとねこやなぎ。○麴塵：青に黄色を加えたような色。

★ 即事

即事

元 趙孟頫

庭槐風静緑陰多

庭槐 風静かにして 緑陰多し

睡起茶餘日影過

睡起し 茶余 日影過ぐ

自笑老来無復夢

自ら笑う 老来 復夢無きを

閒看行蟻上南柯

閑に看る 行蟻の南柯に上るを

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○庭槐…庭に植えてあるエンジュ。○睡起…眠りから覚める。○茶餘…茶を飲んだ後。○老来…年取ってから。○復夢…再び夢を見る。○行蟻…蟻の行列。○柯…反りあがっている屋根のひさし。

★ 絶句

絶句

元 趙孟頫

春寒惻惻掩重門

春寒 惻々 重門を掩う

金鴨香殘火尚温

金鴨 香残して 火尚お温かし

燕子不来花又落

燕子 来らず 花 又た落つ

一庭風雨自黄昏

一庭の風雨 自ら黄昏

【語釈】

○春寒…春の初めの寒さ。○惻惻…ねんごろなさま。○重門…重なった門。○金鴨…金属で作った鴨型の香炉。○殘…燃え尽きる。○燕子…つばめ。○黄昏…たそがれ。

★ 静芳亭

静芳亭

元 袁 桤

簾外群山當畫屏
れんがい 簾外の群山 がへい 画屏に当たる
 白雲如水度中庭
わた 白雲 水の如く 中庭を度る
 松花落徑無人掃
はら 松花 徑に落ち 人の掃う無く
 失卻莓苔一半青
しつきやく 失却す ばいたい 莓苔 一半の青

【語釈】

○静芳亭…不祥。○簾外…簾の外。○畫屏…画で裝飾した屏風。○失卻…失う、却是完了を示す助字。○莓苔…青苔。○一半…1/2。約半分。

★ 秋夜

秋夜

元 貢 奎

空牀坐對一燈青
くうしょう 空床に坐して対す 一灯 青し
 手擊蒲團醉欲醒
さま 手 蒲團を撃ちて 醉を醒さんと欲す
 夜半竹風如雨過
す 夜半 竹風 雨の如く過ぐ
 起看明月步中庭
ちゅうてい 起きて明月を看て 中庭を歩す

【語釈】

○空牀…独り寝の寝台。○竹風…竹林を通り過ぎた風。

★ 醉起

醉起

元 薩都刺

楊柳樓心月滿床

よつりゆうろうしん
楊柳樓心月床に満つ

錦屏繡褥夜生香

きんべい しゅうしん かおり
錦屏 繡褥 夜 香を生ず

不知門外春多少

知らず 門外 春 多少なるを

自起移燈照海棠

みずか
自ら起き 灯を移し 海棠を照らす

【語釈】

○楊柳樓：妓楼。○錦屏：錦で刺繡をした屏風。○繡褥：刺繡をしたしとね。

★ 山中

山中

元 薩都刺

夕陽欲下行人少

せきよう
夕陽 下らんと欲して 行人少なり

落葉蕭蕭路不分

しょうしょう
落葉 蕭々として 路分かたず

脩竹萬竿秋影亂

しゅうちく ばんかん
脩竹 万竿 秋影乱れ

山風吹作滿窓雲

な まんそう
山風 吹き作す 満窓の雲

【語釈】

○行人：旅人。道行く人。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○脩竹：長い竹。○萬竿：多くの竹。○萬竿：秋の日光。秋の趣のある景色。

★露坐

露坐

元 張翥

官街人静鼓夔夔

官街 人静かにして 鼓 夔々とうとう

獨坐中庭滿扇風

独坐す中庭 滿扇まんせんの風

墮地一絲和露溼

地に墮おつる一糸 露やわらを和ゆるげて溼うるい

青蟲懸在月明中

青虫 懸かかりて 月明の中に在り

【語釈】

○露坐：屋外に坐る。○官街：官舎。○夔夔：太鼓の音の形容。○懸：ぶら下がる。

★偶成

偶成

元 倪瓚

坐看青苔欲上衣

坐して 青苔せいたいの 衣いに上らんと欲するを見る

一池春水靄餘暉

一池の春水 余暉よきに靄かすむ

荒村盡日無車馬

荒村 尽日 車馬無し

時有殘雲伴鶴歸

時に 殘雲の 鶴を伴いて帰る有り

【語釈】

○偶成：たまたま作った詩。○餘暉：夕焼け。○盡日：一日中。○殘雲：残った雲。

★ 用前韻序山家幽寂之趣 前韻を用い山家幽寂の趣に序す 元 葉 顯

夕陽香徑逐東風

せきよう こうけい
夕陽 香徑 東風を逐う

瘦策輕扶數落紅

そうさく けいふ
瘦策 輕扶 落紅を数う

信步偶隨流水去

まか たまたま
歩に信せ 偶々流水に随って去り

不知身到白雲中

知らず 身は白雲の中に到るを

【語釈】

○香徑…花の咲く道。落花で埋もれた道。○東風…春風。○瘦策…細い杖。○輕扶…軽い杖。○落紅…散り落ちる赤い花。

★ 閑居

かんきよ
閑居

元 仇 遠

鳥雀喧秋未肯棲

ちようじゃく
鳥雀 秋に 喧しく 未だ肯えて棲まず

狂風吹樹影離披

きやうふう
狂風 樹を吹き 影離れて披く

屋邊尚有斜陽在

おくへん
屋邊 尚お 斜陽の在る有り

更看山人一局棋

まき
更に看る 山人 一局の棋

【語釈】

○閑居…心閑にくらすこと。○鳥雀…雀などの小鳥。○山人…世を離れて山中に住んでい
る人。○棋…囲碁。

★ 絶句

絶句

元 吳景奎

蘆花方褥竹方床

ろか ほうじよく ちくほうしやう
蘆花 方褥 竹方床

葛帳含風薤簟涼

かつちやう ふうを 含み 薤簟涼し
葛帳 風を含み 薤簟涼し

夜半起來山月白

夜半 起き来たれば 山月白く

滿天清露灑衣裳

満天の清露 衣裳に 灑ぐ
そそ

【語釈】

○方褥：四角なしとね。○竹方床：竹で出来た寝台。○葛帳：葛布のとばり。○薤簟：にらで作ったむしろ。

★ 即事

即事

元 滕斌

美人閑倚曲闌干

みづか しまか によ きよくらんかん
美人 閑かに倚る 曲闌干

酒醒香銷午夢殘

酒醒め 香銷して 午夢残る
ごうしやう

燕子不來春社去

えんし 来らず 春社去る
燕子 来らず 春社去る

一簾疏雨杏花寒

いちれん 疏雨 杏花寒し
いちれん

【語釈】

○即事：事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○倚：もたれる。○曲闌干：曲がつた欄干。○銷：消え尽きる。○春社：豊作を祈る春の祭。○一簾：一つのすだれ。○疏雨：まばらな雨。

★小園即事

小園即事

元 陳 深

淡黄楊柳著烟輕
細草茸茸襯屐行
行到水邊心會處
夕陽一樹杏花明

淡黄の楊柳煙に著いて輕し
細草 茸々 屐に襯して行く
行きて 水辺に到り 心の会する処
夕陽 一樹 杏花 明 なり

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○淡黄楊柳…淡黄色の芽がでたしだれ柳。○烟…霧、霞。○茸茸…草の盛んに茂ったさま。○襯…ぴったりくつつく。○屐…履き物。

★春日閑居雜興

春日閑居雜興

元 馬 臻

花底飛觴酒浪翻
纔迎春至又春殘
日斜客散鑪煙盡
自洗窑瓶插牡丹

花底 觴を飛ばして 酒浪 翻る
纔かに 春至を迎かえ 又た 春殘
日斜にして 客散じ 鈿煙尽く
自ら窑瓶を洗い 牡丹を挿す

【語釈】

○閑居…心閑にくらすこと。○花底…花の下。○飛觴…盃をあげる。○酒浪…酒の波。○春至…春分。○春殘…春まさに終わろうとしている時期。○鑪煙…香炉の煙。○窑瓶…釜と瓶。

★ 水軒夏日

水軒すいけんの夏日

元 馬 臻

碧窗畫寂幽意長

碧窓へきそう 昼寂せきとして 幽意ゆうい長し

竹陰滿地琴尊涼

竹陰ちくいん 滿地まんち 琴尊きんそん涼し

輕雷送雨遠不到

輕雷 雨を送りて 遠くして 到らず

雪白水花生晚香

雪白せつはくの水花みづはな 晚香ばんこうを生なず

【語釈】

○水軒：水辺の家屋。○寂：静かでひっそりしたさま。○幽意：物静かな思。○滿地：地面一杯。○琴尊：琴と酒樽、文士が悠閑の生活を送る道具。○輕雷：大きくない雷の音。○雪白：雪のように白い。○晚香：寺院で夕方に焚く香のようなかおり。

★ 即景

即景そくけい

元 鄧 彧 之

樹影禽声門半開

樹影じゆせい 禽声きんせい 門半ば開き

牆東一逕沒蒿萊

牆東しょうとうの一徑いちけい 蒿萊こうらいを没す

池塘通得官溝水

池塘ちとうは 官溝かんこうの水を通し得て

時送青萍幾點來

時に 青萍せいひようの幾點いくてんを送り來きたる

【語釈】

○即景：目の前の景色をそのまま詠った詩。○牆東：垣の東。○蒿萊：よもぎとあかざ。○池塘：池。○官溝：公的な溝。○青萍：浮き草。

★ 静軒

静軒

元 行端

六戸虚凝湛不揺
 六戸りくこ きよぎよう 虚凝 湛えて揺れず
 従教塵世自喧囂
 従さもあらばあ 教じんせ 塵世 自ら喧囂おのずか けんきようなるを
 階前盡日無人到
 階前じんじつ 尽日 人の到る無く
 只有閒雲伴寂寥
 只だかんうん 閒雲せきりようの 寂寥せきりように伴う有るのみ

【語釈】

○虚凝…？○従教…さもあらばあれ、ままよ。○塵世…けがれた世の中。○喧囂…かまびすしく騒がしい。○盡日…一日中。○閒雲…閑かでのんびりとした雲。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま。

★ 絶句三首

絶句三首

元 清珙

茅屋低低三兩間
 茅屋ぼうおく 低低ていてい 三兩間
 團團環繞盡青山
 団々だんだん 環繞かんぎよう 尽く青山こじんと
 竹床不許閒雲宿
 竹床ちくしょう 不許かんとん 閒雲しんぐんの 宿するを
 日未斜時便掩關
 日 未だ斜すなわめならざる時 便おおち関おおを掩う

【語釈】

○茅屋…萱葺きの粗末な家。○低低…低いさま。○三兩間…二三間(間隔の単位)。○團團…丸いさま。○環繞…ぐるりと取り囲む。○竹床…竹製の寝台。○閒雲…しずかでのんびりした雲。○掩關…門を閉ざす。

★ 絶句三首

絶句三首

元 清珙

深秋時節雨霏霏
深秋の時節 雨霏々ひひ
蘚葉層層印虎蹄
蘚葉 層々 虎蹄を印すせんよう そうそう こてい
一夜西風吹不住
一夜 西風 吹いて住まずや
曉來黃葉與階齊
曉來 黃葉 階と齊しぎょうらい こうよう ひと

【語釈】

○霏霏：雨や雪がしきりに降るさま。○蘚葉：苔の葉。○層層：層になって重なっているさま。○虎蹄：虎の足跡。○西風：秋風。○曉來：明け方から。

★ 絶句三首

絶句三首

元 清珙

山舎無聊夜卧遅
山舎さんしゃ 無聊ぶりよう 夜卧遅やが
因君記得去年時
君に因りて 記し得たり 去年の時よ
豆花棚下曾分榻
豆花棚下 曾て榻を分かちとうかほうか かつ とう
月落松梢尚詠詩
月は松梢しょうしょうに落ちて 尚お詩を詠ぜしを

【語釈】

○山舎：山の家。○無聊：心配事があつて楽しまないこと。○夜卧：夜寝ること。○記得：覚えてゐる。○榻：寝台。○松梢：松の梢。

★ 睡起

睡起

元 僧本誠

花下拋書枕石眠
起來閒漱竹間泉
紙窗石鼎灰猶煖
殘燼時飄一縷煙

花下書を抛ちて石を枕に眠る
起き来たりて閑かに漱ぐ竹間の泉
紙窓石鼎灰猶お煖く
残燼時に飄わす一縷の煙

【語釈】

○紙窗：紙を貼った窓。○石鼎：石製のかなえ。○残燼：燃え残り。○一縷：一筋の糸。

★ 湖村菴即事

湖村の菴即事

元 惟則

竹根吠犬隔溪西
湖雁聲高木葉飛
近聽始知雙櫓響
一燈浮水夜船歸

竹根吠犬溪西を隔て
湖雁声高くして木葉飛ぶ
近く聴き始めて知る双櫓の響
一灯水に浮んで夜船帰る

【語釈】

○湖村：湖に面した村。○即事：事にふれて、その場に应じて詩を作ること。○吠犬：犬のほえる声。○湖雁：湖に住む雁。○雙櫓：二つの大きなカイ。

★ 晩晴

晩晴

明 韓 奕

水國秋来少見晴
夕陽忽映小窗明
西風颯颯林間葉
乍聽猶疑是雨聲

水國 秋来りて 晴を見ること 少なり
夕陽 忽として 小窓に映じて 明なり
西風 颯々 林間の葉
乍ち聴き 猶お疑う 是れ雨声なるかと

【語釈】

○水國：水の豊富な地方。○忽：ぼんやりとして捉え難いほど遙かなさま。○西風：秋風。○颯颯：風がサツと吹くさま。

★ 漫興

漫興

明 史 遷

灑東煙樹杜陵家
百尺深潭似浣花
布袖龍鐘筇竹杖
也勝裘馬在天涯

灑東の煙樹 杜陵の家
百尺の深潭 浣花に似たり
布袖 竜鐘として 筇竹の杖
也た勝る 裘馬の天涯に在るに

【語釈】

○漫興：一時の感興に乗じて作った詩。○灑東：灑水（四川省奉節県にある川）の東。○杜陵：地名、陝西省西安市東南、杜甫が住んでいたところ。○深潭：深い淵。○浣花：浣花溪、成都で杜甫草堂があったところ。○布袖：布衣の袖。○龍鐘：老いてやつれ悩むさま。○筇竹：杖に適する竹の名。○裘馬：軽裘肥馬、生活が豪奢であることの形容。

★ 偶睡

偶睡ぐうすい

明 高啓

竹間門掩似僧居	竹間門を掩 <small>おお</small> いて僧居 <small>おぼ</small> に似たり
白豆花疎片雨餘	白豆花 <small>まぼら</small> 疎 <small>まぼら</small> なり 片雨 <small>よ</small> の余
一榻茶煙成偶睡	一榻 <small>いっとう</small> の茶煙 <small>いっとう</small> 偶睡 <small>ぐうすい</small> 成り
覺來猶把讀殘書	覺 <small>と</small> え來たりて 猶 <small>と</small> お把 <small>と</small> る 讀殘 <small>どくざん</small> の書

【語釈】

○偶睡…いねむり。○片雨餘…一方だけに降る雨の雨上がり。○榻…こしかけ。○覺來…目が覚める。來は助字。○把…手に取る。
 (参考文献) 『中国詩人撰集二—10』

★ 春日懷江上

春日江上おもを懷う

明 高啓

一川流水半村花	一川の流水 半村の花
舊屋南鄰是釣家	旧屋 <small>なんりん</small> の南隣 <small>なんりん</small> は 是れ釣家 <small>ちようか</small>
長記歸篷載春醉	長記 <small>ちようき</small> す歸篷 <small>きほう</small> 春醉 <small>しゅんすい</small> を載せ
雲籠殘照雨鳴沙	雲は殘照を籠め 雨は沙 <small>すな</small> に鳴るを

【語釈】

○釣家…釣り人の家。○長記…長い間記憶している。○歸篷…帰り舟。○殘照…夕焼け。

★ 故山春日

故山春日

明 楊基

梨花兩枝春可憐
下馬折花山徑邊
山中人家改新火
隔樹吹來榆柳煙

梨花 兩枝 春 憐 われむべし
馬を下り 花を折る 山徑の辺
山中の人家 新火を改ため
樹を隔てて 吹き来たる 榆柳の煙

【語釈】

○可憐：感嘆のことば。ああ。○故山：ふるさとの山。○新火：寒食の後で、改めて着けた火。○榆柳：にれと柳。

★ 春暮西園雜興

春暮西園雜興

明 楊基

疎疎簾影漾微波
庭戸無人鳥自過
一樹楊花三日雨
池塘春水綠萍多

疎疎たる 簾影 微波に 漾う
庭戸 人無く 鳥 自ら過ぐ
一樹の楊花 三日の雨
池塘の春水 緑萍多し

【語釈】

○雜興：さまざまな趣き。○疎疎：まばらな。○簾影：すだれのかげ。○楊花：柳絮。○綠萍：緑の浮き草。

★ 題静楽軒二首

静楽軒に題す二首

明 王 紱

前溪氷泮緑生波
前溪 氷 泮 けて 緑波を生ず
ぜんけい と ち りよくは
好雨催花向曉過
好雨 花を催して 曉に向つて過ぐ
うなが
宿酒未醒眠未起
宿酒 未だ醒めず 眠 未だ起きず
しゆくしゆ さき ねむり
半窓紅日鳥聲多
半窓の紅日 鳥声多し

【語釈】

○静楽軒：山西省忻州市静楽県にあるようだが不祥。○宿酒：前の日に飲んだ酒。○紅日
…赤く耀く朝日。

★ 題静楽軒二首

静楽軒に題す二首

明 王 紱

秋聲早已到梧桐
秋聲 早や已に 梧桐に到る
しゅうせい は じゆとう
露氣生涼湛碧空
露氣 涼を生じ 碧空に湛えたり
ろくき しょうをせい せきうにたんえたり
獨倚闌干待明月
独り 闌干に倚り 明月を待てば
どくい らんかん により げいげつをまちば
紫簫吹散木樨風
紫簫 吹き散す 木樨の風
ししやう ぶきさんす もくせい

【語釈】

○秋聲：秋の気配を感じさせる風や葉の音。○梧桐：あおぎり。○露氣：露の気。○紫簫
…紫色の簫。

★ 曉立

曉あけつぎに立つ

明 吳與弼

靈臺清曉玉無瑕

靈台れいだい 清曉せいせいぎょう 玉たまに瑕きず無し

獨立東風玩物華

獨ひとりり東風とうふうに立たちて物華ぶつわを玩あそぶ

春氣夜來深幾許

春氣しゅんき 夜來やらい 深いきこと幾許いくばくぞ

小桃又發兩三花

小桃しょうたう 又また 発ひらく 兩三りうさん花

【語釈】

○靈臺：帝王が天文を見るために使った楼台。○清曉：清らかな暁。○東風：春風。○物華：景色。風景。玩：もてあそぶ。めでて楽しむ。○幾許：どのくらいか。○兩三花：二三の花。

★ 午睡起

午睡より起く

明 陳獻章

道人本自畏炎炎

道人だうじん 本自もとより 炎々えんえんを畏おそる

一榻清風捲畫簾

一榻いつたつの清風せいふう 昼ひる 簾れんを捲まく

無奈華胥留不得

無いかんともするなし 奈な 華胥かきよを留とどめ得えざるを

起凭香几讀楞嚴

起おきて 香几かうきに凭より 楞嚴ろうげんを讀よむ

【語釈】

○道人：道を求める人。○本自：もとから。本来。○炎炎：灼熱のさま。○榻：寝台。こしかけ。○無奈：どうしようもない。○華胥：安樂平安な境地。○香几：香りのある机。○楞嚴：楞嚴經、仏教の經典の一つ。

★ 幽居

幽居ゆうきよ

明 萬節

數里莓苔一逕斜
數里の莓苔ばいたい 一徑斜めなり
洞門深處有人家
洞門 深き処 人家有り
東風昨夜知多少
東風 昨夜 知んぬ多少ぞ
吹落庭前滿樹花
吹き落す庭前 滿樹の花

【語釈】

○幽居：人目を避けて静かに暮らす家。○莓苔：青苔。○洞門：洞穴の入り口。○洞門：
洞穴の入り口。○東風：春風。○知多少：多少が分からない。

★ 春園即事

春園即事

明 余翔

睡起西窓日欲斜
睡起すいきすれば 西窓 日斜めならんと欲す
溪邊汲水自烹茶
溪邊に水を汲んで 自みずから茶を烹にる
捲簾坐看雙飛燕
簾を捲き 坐して看る 双飛の燕
衝落櫻桃幾片花
衝つき落とす 桜桃 幾片の花

【語釈】

○睡起：眠りから覚める。○溪邊：谷のほとり。○双飛：つがいで飛ぶ。

★ 山中懶睡

山中懶睡

明 王守仁

掃石焚香任意眠
醒來時有客談玄
松風不用蒲葵扇
坐對青崖百丈泉

石を掃い 香を焚いて 意に任せて眠る
醒め来れば 時に客の談玄する有り
松風用いず 蒲葵の扇
坐して対す 青崖百丈の泉

【語釈】

○懶睡：懶けて眠ること。○談玄：道を談ずる。○蒲葵扇：蒲と葵で作った扇。

★ 春日書院

春日書院

明 魯鐸

門巷青苔隔路溪
小桃開滿磬池西
枕書眠著無人喚
花裏東風百舌啼

門巷 青苔 路を隔つる溪
小桃 開きて 滿磬池の西
書を枕に 眠りに著き 人の喚ぶ無し
花裏 東風 百舌啼く

【語釈】

○門巷：門庭の裏にある街。○磬：への字型をした楽器。○花裏：花の中。○東風：春風。

★ 桃溪

桃溪とうけい

明 魯 鐸

世路悠悠已倦遊

世路せろ悠悠ゆうゆう 已けんゆうに倦遊

桃溪深處草堂幽

桃溪とうけい 深しんき処 草堂幽ゆうなり

東風自解幽人意

東風とうふう 自おのずから幽人の意を解し

不遣飛花逐水流不

飛花をして 水を逐おいて流れしめず

【語釈】

○桃溪：桃の花が咲いている溪。○世路：世の中。世渡りの道○悠悠：他と関わりなくゆったりしたさま。○倦遊：官職を求めらるることに飽きる。○草堂：草葺きの粗末な家。○幽：ものしずか。奥ゆかしい。○東風：春風。○幽人：世を避けて隠れ住む人。

★ 醉着

醉着すいちやく

明 孫一元

瓦瓶倒盡醉難醒

瓦瓶がへい 倒れ尽じんき 醉醒すいせいめ難し

獨抱漁竿臥晚汀

独ひとりり 漁竿りょうかんを抱かかりて 晚汀ばんていに臥がす

風露滿身呼不起

風露 身に満みち 呼よべども起たぎず

一江流水夢中聽

一江の流水 夢中に聴きく

【語釈】

○醉着：酔っ払う、着は動作の進行や完了を現す助字。○漁竿：釣り竿。○晚汀：夕方のなぎさ。○風露：風と霧。

★ 山窓晝睡

山窓昼睡

明 祝允明

身在雲房夢亦閒
身は雲房に在りて夢亦た閑
松頭鶴影枕屏間
松頭の鶴影枕屏の間
一聲隔谷鳴華雉
一声谷を隔てて華雉鳴き
信手推窓滿眼山
手に信せて窓を推せば滿眼の山

【語釈】

○雲房：隱者や僧侶の家の部屋。○枕屏：枕の前の屏風。○華雉：雉の美称。

★ 山居

山居

明 傅汝舟

竹下焚香對玉屏
竹下に香を焚き玉屏に対す
春風池上酒初醒
春風池上酒初めて醒む
閑箋一捲長生訣
閑に箋す一捲長生の訣
解與溪南白鶴聽
溪南の白鶴に解与して聽かしむ

【語釈】

○玉屏：玉で飾った屏風、屏風の美称。○箋：注釈を付ける。○一捲：一巻。○長生訣：長生きをする秘法を書いた道教の書。○溪南：溪の南側。○解與：解き明かして与える。

★雨中漫興

雨中漫興

明 楊 慎

風裊芭蕉羽扇斜

風 芭蕉に裊しなやかにして 羽扇斜うせんめなり

雲峯苔壁對簷牙

雲峰うんぽう 苔壁たいへき 簷牙えんがに對す

滿城連日黃梅雨

滿城 連日 黃梅の雨

開遍金釵石斛花

開くこと遍あまねねし 金釵 石斛の花

【語釈】

○漫興：なんとなく催した感興。○裊：しなやか。○羽扇：鳥の羽で作った扇。○雲峯：雲まで届くような高い峯。○苔壁：昔の生えた壁。○簷牙：軒のとがったところ。○黃梅雨：さみだれ。○金釵：黄金で作った簪（石斛）の別名。○石斛：多年生植物。バルブ。

★山館

山館

明 薛 蕙

山館蕭條客到稀

山館 蕭條しょうじょうとして 客の到ること稀まれなり

幽人閒暇坐披衣

幽人 閒暇かんか 坐して衣を披おおう

日長燕子丁寧語

日 長くして 燕子えんし 丁寧に語る

風静楊花自在飛

風 静かにして 楊花ようか 自在に飛ぶ

【語釈】

○山館：山中の家。○蕭條：物静かなさま。○幽人：世間から離れて一人住む人。○閒暇：…ひま。○披衣：衣を着る。○楊花：柳絮。

★ 閑興

閑興かんきょう

明 文徵明

酒闌客散小堂空

酒闌たけなわにして客散じ小堂空し

旋卷疎簾受晚風

疎簾それんを旋卷せんけんして晚風を受く

坐久忽驚涼影動

坐ること久くして忽たちまち驚く涼影りょうえいの動くに

一痕新月在梧桐

一痕の新月 梧桐ごとうに在り

【語釈】

○旋卷：捲き上げる。○疎簾：まばらなすだれ。○一痕：欠けた月（三日月）の形容。○新月：月令の若い月。○梧桐：あおぎり。

★ 後園

後園

明 羅洪先

南村雲雨北村晴

南村は雲雨うんう 北村は晴

晴鳩雨鳩更互鳴

晴鳩せいきゆう 雨鳩うきゆう 更も互ごもいに鳴く

東風吹雨衣不濕

東風 雨を吹けども 衣ころも湿らず

我在桃花深處行

我は 桃花深き処に在りて行く

【語釈】

○雲雨：雲と雨。○晴鳩：晴れた時に鳴く鳩。○雨鳩：雨の日に鳴く鳩。○東風：春風。

★客窗雜興

客窗雜興

明 翫 安

酒渴呼童俛井華

酒渴 童を呼びて 井華を俛ましむ

眠來苔徑月初斜

眠り来たれば 苔徑 月初めて斜なり

小窗紅葉時飛下

小窓の紅葉 時に飛び下る

誤作春風送落花

誤って春風の落花を送ると作す

【語釈】

○客窗：旅館の窓。○雜興：様々なおもむき。○酒渴：酒に酔ったのどが渴いた状態。○井華：井戸の清らかな水。○苔徑：苔の生えた径。

★省中

省中

明 高 岱

蕭蕭竹徑暝煙浮

蕭々たる竹徑 暝煙浮ぶ

散帙鳴琴事事幽

散帙 鳴琴 事事幽なり

若比瀟湘漁父隱

若し 瀟湘の漁父の隠に比せば

門前只少木蘭舟

門前 只だ 木蘭の舟少なり

【語釈】

○省中：宮中。○蕭蕭：物寂しいさま。○竹徑：竹林の中の道。○暝煙：暗い霧。○散帙：読書。○事事：ことごとくに。○幽：もの静かで奥ゆかしいさま。○瀟湘：瀟水と湘水が合流して洞庭湖に濯ぐあたりの地方。

★ 春日睡起

春日睡起しゅんじつすいせい

明 盧 溟

深巷無人靜掩扉
桃花香暖午風微
小窓睡起支頤坐
閒看營巢燕子飛

深巷 人無く 静かに扉を掩ざす
桃花 香 暖かにして 午風微かなり
小窓に睡起して 頤を支えて坐す
閑に看る 巢を営して 燕子飛ぶを

【語釈】

○睡起：眠りから起きる。○深巷：奥まった道。○睡起：眠りから覚めて起き上がる。

★ 山居雜興

山居雜興

明 屠 隆

傍山結屋借烟霞
松裏藤蘿映月華
曉起不知風露冷
提壺汲水自澆花

山に傍いて 屋を結びて 煙霞を借る
松裏の藤蘿 月に映じて 華なり
曉に起きて 知らず 風露の冷なるを
壺を提げて 水を汲み 自ら花に澆ぐ

【語釈】

○雜興：さまざまなおもむき。○烟霞：靄と霞。○藤蘿：ふじつる。○風露：風と霧。

★ 山居雜興

山居雜興

明 屠 隆

琳宮翠獻宿氤氳

琳宮 翠獻 氤氳に宿す

鶴淚天風只自聞

鶴淚 天風 只だ 自ら聞く

昨夜石樓窓不鎖

昨夜 石樓 窓 鎖さず

曉來飛入滿床雲

曉來 飛び入る 満床の雲

【語釈】

○雜興…さまざまなおもむぎ。○琳宮…道教の寺。○翠獻…翡翠で飾った酒樽。○氤氳…
氣の和らぐさま。○石樓…石造りの楼閣。○曉來…曉から。

★ 山中即事

山中即事

明 陳益祥

釣罷歸來萬事懶

釣を罷め 帰り来たりて 万事 懶し

松梢一半夕陽春

松梢 一半 夕陽の春

竹窓読罷楞嚴偈

竹窓 読み罷む 楞嚴の偈

月上東山第幾峯

月上 東山 第幾峯

【語釈】

○即事…事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○一半…半分。○竹窓…竹林
に面した窓。○楞嚴…楞嚴經，仏教の經典のひとつ。○偈…仏徳を讃えた韻文。○第幾峯
…多くの峰。

★ 貞溪初夏

貞溪初夏

明 邵亨貞

巡簷燕子掠晴絲
隔水茶煙出院遲
草色入簾人不到
午風吹暖夢迴時

簷を巡る燕子 晴糸を掠む
水を隔てる茶煙院を出て遅し
草色簾に入り人 到らず
午風吹きて暖かなり 夢 廻る時

【語釈】

○貞溪：不祥。○晴絲：虫類が吐いて空中に浮遊する糸。○院：住居の中にある庭。○簾…垂れ幕。

★ 客散

客散ず

明 方太古

客散書堂秋日涼
山風吹雨葛花香
竹床籐簾茶初熟
消受山人午睡長

客散じ書堂 秋日涼し
山風 雨を吹いて 葛花香し
竹床 籐簾 茶初めて熟し
消受す 山人 午睡の長きを

【語釈】

○書堂：書齋。○葛花：くずの花。○籐簾：籐で作ったたかむしろ。○消受：享受する。受ける。

★ 題張原琛蓬窗

張原琛の蓬窓に題す

明 葉子奇

銀絲魚鱠碧芹羹

銀糸の魚鱠 碧芹の羹

曾記扁舟越上行

曾て記す 扁舟 越上に行くを

今日小軒風味似

今日の小軒の風味に似たり

滿川風雨看雲生

滿川の風雨 雲の生ずるを見る

【語釈】

○張原琛：不祥。○蓬窗：苦をかけた舟の窓。○銀絲：細作り。○魚鱠：魚の刺身。○碧芹：緑色の芹。○羹：スープ。○記：記憶する。○扁舟：小舟。○越上：越の地方。○小軒：小さな家。

★ 水榭

水榭

明 史鑑

溪聲到枕驚春夢

溪声 枕に到り 春夢を驚かす

露氣入簾生夜寒

露氣 簾に入り 夜寒を生ず

自起開門看明月

自ら起きて 門を開き 明月を見る

和花移過曲闌干

花に和し 移過す 曲闌干

【語釈】

○水榭：水のうえにある家。○驚：夢から覚める。○移過：通り過ぎる。○曲闌干：曲がった欄干。

★看梅偶成

看梅偶成かんばいぐうせい

明 林俊

消息東風兩月前

消息の東風 兩月の前

西湖索莫老逋仙

西湖 索莫さくばくたり 老逋ろうほせん仙

雪蓬昨夜還扶醉

雪蓬せっぽう 昨夜 還また醉たいを扶たすけ

移近梅花一處眠

移りて梅花びんぎわに近く 一處ひとところに眠る

【語釈】

○偶成：偶々作った詩。○消息：吹いたり止んだりする。○東風：春風。○兩月：二月。
○索莫：もの寂しいさま。○逋仙：宋の詩人林逋、西湖の孤山に隱棲した。○雪蓬：明の時代の詩人、謙謨（明湖廣華容の人、号は雪蓬）。

★夏景

夏景

明 張宇初

深院碁聲日正長

深院の碁声 日正に長し

博山添火試沈香

博山 火を添えて 沈香を試す

道人鞭起龍行雨

道人 鞭を起こし 竜 雨を行う

帶得東潭水氣涼

東潭とうたんの水気を 帶び得て涼し とうたん

【語釈】

○深院：寺院の奥深いところ。○碁声：碁を打つときの碁石の音。○博山：博山香、香炉の一種。○沈香：香木の一種。○道人：道を得た人。僧侶。○龍行雨：龍神が雨を降らせる。○東潭：東側にある淵。

★ 吹笛

笛を吹く

明 豊越人

空林醉卧不知秋
手採芙蓉下小舟
明月滿天涼似水
閒吹短笛過滄洲

空林に醉卧し 秋を知らず
手に芙蓉を採りて 小舟に下す
明月滿天 涼しきこと水に似たり
閑かに短笛を吹いて 滄洲を過ぐ

【語釈】

○空林：人気の無い林。○醉卧：酔って臥せる。○滄洲：水の蒼い浜辺、隠者のいるところ。

★ 聞笛

笛を聞く

明 張煒

雨後閑庭暑氣収
倚欄花竹暗香浮
誰家玉笛凌雲起
吹動長安萬戸秋

雨後の閑庭 暑氣収る
欄に倚れば 花竹 暗香浮ぶ
誰が家の玉笛か 雲を凌いで起る
長安に吹動す 万戸の秋

【語釈】

○閑庭：静かな庭。○暗香：どこからともなく漂って来る香。○玉笛：笛の美称。

★春日閑居

春日閑居

明 王虞鳳

濃陰柳色罩窗紗

濃陰の柳色 窓紗を罩む

風送爐煙一縷斜

風は炉煙を送り一縷斜なり

庭草黃昏随意綠

庭草 黃昏 随意に緑なり

子規啼上木蘭花

子規啼き上る 木蘭の花

【語釈】

○濃陰：濃い黒さ。○罩：包み込む。○窗紗：窓にかけた薄絹のカーテン。○一縷：ひとすじ。○黃昏：たそがれ。○子規：ほととぎす。

★夏日偶成

夏日偶成

清 黄幼藻

深院塵消散午炎

深院 塵 消え 午炎を散ず

篆煙如夢晝淹淹

篆煙 夢の如く 晝 淹々

輕風似與荷花約

輕風 荷花と約するに似て

為送香來自捲簾

為に 香を送り来りて 自ら簾を捲く

【語釈】

○偶成：たまたま作った詩。○深院：奥まったところにある中庭。○午炎：昼の暑さ。○篆煙：篆字のように曲がって細く立つ香煙。○淹淹：気力のないさま。○簾：すだれ。

★ 夏日書懷

夏日 懷おもひを書す

明 僧明秀

緑遍庭前雨乍晴
緑庭前に遍あまねく雨 乍たちまち晴れ
南風一枕篆烟輕
南風 一枕いっちゃん 篆烟輕てんえんかろし
起來散步槐陰下
起あきたたり 散歩かす 槐陰かいの下
閑聽幽禽三兩聲
閑しずかに聽きく 幽禽ゆうきんの三兩聲

【語釈】

○篆煙：篆字のように曲がって細く立つ香煙。○槐陰：エンジユの木陰。○幽禽：山に隠れ住む鳥。

★ 漁村夜歸

漁村夜歸

明 宗衍

月落蘋汀宿霧凝
月は蘋汀に落ち 宿霧しゆくむ凝こる
小橋霜冷挂漁罾
小橋 霜冷やかに 漁罾ぎよせうを挂かく
歸來已是三更後
歸り来たれば 已に是れ 三更の後
水際人家尚有燈
水際の人家 尚お灯有り

【語釈】

○蘋汀：浮き草がある渚。○宿霧：夜霧。○凝：形成される。止まる。○漁罾：漁網の一種。○挂：掛ける。○三更：午前零時前後。

★ 山居

山居

明 僧徳清

平湖秋水浸寒空

平湖の秋水 寒空を浸し

古木霜餘落葉紅

古木 霜余 落葉 紅なり

石徑小橋人迹斷

石徑 小橋 人迹 断え

一菴深鎖白雲中

一菴 深く 鎖す 白雲の中

【語釈】

○平湖：平らな水面の湖。○霜餘：霜が消えた後。

★ 秦淮夏日詞

秦淮夏日詞

清 紀映鐘

六月秦淮氣自涼

六月 秦淮 氣 自ら涼し

八窗敞受午風長

八窓 敞受 午風 長し

楸枰畫靜無人語

楸枰 昼 靜にして 人語 無く

堂背罨巒綠樹光

堂背の罨巒 緑樹の光

【語釈】

○秦淮：南京市内を通る河の名、その兩岸は歓楽街であった。○八窗敞受：仏教の用語。八つの感覚器官（眼、耳、鼻、舌、身、意）とそれらに対応する八つの感覚境（色、声、香、味、触、法）との間に生じる八つの接触（眼接、耳接など）によって生じる八つの受（眼受、耳受など）のこと。○午風：昼頃吹く風。○楸枰：碁盤。○堂背：堂を背にする。○罨巒：宮廷の門。

★ 夏日雜興

夏日雜興

清

朱彝尊

桐陰細細白花攢

桐陰細々 白花攢まる

吾愛吾廬暑亦寒

吾は愛す 吾が廬 暑亦た寒なるを

縱少圍碁消永日

縦い 囲碁の 永日を消すること少なしとも

也應騎馬勝麁官

也 應に 馬に 騎りて 麁官に勝るべし

【語釈】

○桐陰…桐の木陰。○細細…細やかなさま。ほそぼそとしたさま。○縦…たといても。

○圍碁…囲碁。○永日…長い日。○麁官…武官。

★ 春日南垞雜詩

春日南垞雜詩

清

朱彝尊

社公小雨不黏沙

社公の小雨 沙に粘ぜず

瞥見迎風燕子斜

瞥見す 風を迎えて 燕子斜めなるを

料是東家巢已定

料るは 是れ 東家 巢 已に定まり

但來花底啄芹芽

但だ 花底に來りて 芹芽を啄むかと

【語釈】

○南垞…南の丘。○雜詩…心の趣くままに作った自由でとらわれない詩。○社公…土地の神。国土を保護する神。○黏…表面にへばりつく。○瞥見…ちらりと見る。○料…推量する。○東家…不特定の家を指す常用語。○芹芽…芹の芽。

★春日南垞雜詩

春日南垞雜詩

清 朱彝尊

移種盆松六尺強
移種盆松 六尺強
欲充車蓋蔽斜陽
車蓋に充ち 斜陽を蔽わんと欲す
不知黛色成陰日
知らず 黛色 陰を成す日
此地何人結草堂
此地何人か 草堂を結ぶかを

【語釈】

○南垞：南の丘。○雜詩：心の趣くままに作った自由でとられない詩。○移種：移植する。○車蓋：車を蔽う傘。○斜陽：夕陽。○黛色：青黒色。○草堂：草葺ぎの家。

★臨漪園

臨漪園

清 湯準

閑園隨意採芳蓀
閑園 随意に芳蓀を採る
興到常攜酒一尊
興 到り 常に携う 酒一尊
却笑平泉太多事
却 笑う 平泉 太だ多事なるを
苦將木石戒兒孫
苦に 木石を將つて 兒孫を戒しむ

【語釈】

○臨漪園：不祥。○閑園：静かな庭園。○芳蓀：香草の一種。○平泉：河北省承德市平泉県。○太：はなはだ。○苦：ねんごろに。

★ 雑詠

雑詠

清 先 著

移植甘蕉為綠陰
經年長大已成林
天寒霜落休輕剪
恐有秋來未死心

移植せし甘蕉 綠陰を為す
經年 長大 已に林を成す
天寒く霜落ち 輕剪することを休む
恐らくは 秋来りて 未死の心有らん

【語釈】

○雜詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○甘蕉：バナナの樹。○輕剪：軽く鋏で切る。○未死心：まだ死んでいないという心。

★ 秦淮雜詠

秦淮雜詠

清 沈德潛

柳花飛盡綠陰濃
雨到煙雲濕不飛
村酒正香茅舍靜
漁翁閑却釣魚磯

柳花 飛び尽き 綠陰 濃なり
雨到りて 煙雲 湿りて 飛ばず
村酒 正に 香くして 茅舍 靜かなり
漁翁 閑却す 釣魚の磯

【語釈】

○秦淮：南京市内を通る河の名、その兩岸は歓楽街であった。○雜詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○柳花：柳絮。○綠陰：木の影。○煙雲：靄と雲。○村酒：いななか作りの酒。○茅舍：萱葺きの粗末な家。○閑却：なおざりにする。

★ 題李百藥湖草堂

李百藥りひやくやくの湖の草堂に題す

清 謝芳連

罷釣歸來解釣筒

釣やを罷め 歸り来たりて 釣筒ちようとうを解く

題詩燈火夜深紅

詩を題して 灯火夜深くして 紅なり

湖村犬吠人眠盡

湖村 犬は吠え 人眠り尽くし

商女棹歌煙月中

商女とうかの棹歌 煙月うちの中

【語釈】

○李百藥…李必恒、清江蘇高郵の人、『三十六湖草堂集』がある。○草堂…草葺きの家。

○釣筒…釣った魚を入れる筒。○題詩…詩を書き付ける。○商女…妓女。○棹歌…舟歌。

○煙月…おぼろ月。

★ 月夜獨歩

月夜獨歩

清 趙唵會

涼夜冷冷露氣清

涼夜りようや 冷々れいれい 露氣ろき清し

疏簾竹簟月三更

疏簾それん 竹簟ちくたん 月 三更

滿庭樹影無人語

滿庭の樹影 人語無く

惟有蟲聲草際鳴

惟ただ 虫声むしこゑの 草際そうさいに鳴く有るのみ

【語釈】

○冷冷…清くすがすがしいさま。○疏簾…まばらな簾。○竹簟…竹製のたかむしろ。○三更…午前零時ごろ。

★ 睡起

睡起すいき

清 趙唵會

門雖近市静無詭

門は市に近しと雖も静かにして詭しきこと無し

風味居然隱士家

風味 居然きよぜんたり 隱士の家

一枕夢回日亭午

一枕 夢は回かえりて 日は亭午ていじこ

晴窓坐對水仙花

晴窓に坐して對す 水仙の花

【語釈】

○睡起：眠り醒めて起き上がること。○詭：やさしい。○風味：奥ゆかしい趣。○居然：安らかなさま。○隱士：隱者。○一枕：一眠り。○夢回：夢から覚める。○亭午：正午。

★ 讀書東臯

讀書東臯とうしやう

清 黃有源

江村四月棟花香

江村 四月 棟花とうか香し

乳燕低飛送夕陽

乳燕にゅうえん 低く飛んで 夕陽せきやうを送る

独坐攤書無箇事

独坐 書を攤ひらきて 箇事こじ無く

石爐茶沸篆烟涼

石炉 茶沸てんえんいて 篆煙せんえん涼し

【語釈】

○東臯：東の丘。○江村：水辺の村。○棟花：おうちの花。○乳燕：子持ちの燕。○攤：開く。○箇事：猶一事。○篆烟：篆字のように曲がって細長い煙。

★ 絶句

絶句

清 趙執贇

窮愁暮暮復朝朝

窮愁 暮々 復た 朝々

幸有圖書慰寂寥

幸に 凶書の 寂寥を慰むる有り

一枕北窗回午夢

一枕 北窓 午夢 回り

桃花滿地兩蕭蕭

桃花地に満ち 両つながら蕭々

【語釈】

○窮愁：激しい愁い。○寂寥：ひっそりとしたもの寂しいさま。○一枕：一眠り。○午夢：昼寝の夢。○蕭蕭：閑なさま。

★ 春日雑詠

春日雑詠

清 高 珩

青山如黛遠村東

青山 黛の如く 村の東に遠し

嫩緑長溪柳絮風

嫩緑 長溪 柳絮の風

鳥雀不知郊野好

鳥雀は知らず 郊野 好きを

穿花翻戀小庭中

花を穿がち 翻えりて恋う 小庭の中

【語釈】

○雑詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○青山：青青とした山。○嫩緑：新緑。○鳥雀：雀などの小鳥。○郊野：街の外の野原。

★即興

即興

清高珩

夜合花前夜漏遅

夜合花前よるごうかせん夜漏遅やろうし

微風白紵正相宜

微風はくちよ白紵はくちよ正あに相宜いよろし

瑤臺不在重霽上

瑤台ようだい重霽じゅうせいの上に在らず

高枕空庭月滿時

枕を高うす空庭月滿つる時

【語釈】

○夜合花：ときわれんげ。○夜漏：夜の水時計。○白紵：麻布の目が細かくて真つ白なもの。○瑤臺：玉をちりばめた立派なうてな。○重霽：？○空庭：人気の無い庭。

★雑言

雑言

清田露

花飛両眼苦昏朦

花飛び両眼こんもう昏朦こんもうに苦しむ

把卷唯宜坐日中

巻とを把とり唯ただ宜よろしく日中に坐す

鬢鬚一雙新上額

鬢鬚あいたい一雙あいたい新たに額かに上る

燈挑猶作蠹書蟲

灯かを挑かげ猶たお蠹書虫としよちゅうと作る

【語釈】

○昏朦：目がくらむ。○把：手に取る。○卷：書物。○鬢鬚：雲のたなびくさま。○一雙：二つ共に。○額：門や壁の高い所に字や絵を書いて掲げたもの。○蠹書蟲：書を食べる虫。

★ 夏日雑賦

夏日雑賦

清 蔡忠立

閑身祇合住林泉

閑身 祇だ合に 林泉に住すべし

山史茶経手一編

山史 茶経 手一編

向晚磯頭看不盡

晩に向う 磯頭 看尽さず

白鷗飛破緑溪烟

白鷗 飛び破る 緑溪の煙

【語釈】

○閑身：暇な身分。○祇：ただ。○合：「まさに「すべし」と読み、「きつと」しなけれ
ばならない、「すべきである」の意。○山史：人名、王宏撰の号。○茶経：茶を示した
書の名称。○磯頭：磯のほとり。○烟：もや、霞。

★ 夏日雑賦

夏日雑賦

清 蔡忠立

隴上農歌新月白

隴上りょうじょうの農歌 新月白し

澗邊鳥亂夕烟濃

澗邊かんべん 鳥乱れて 夕煙せきえん濃し

小樓好對寒山寺

小樓 好く 寒山寺に對し

睡醒時間夜半鐘

睡ねむり 醒めて 時に聞く 夜半の鐘

【語釈】

○隴上：丘の上。○農歌：農作業で歌う歌。○澗邊：溪のほとり。○夕烟：夕もや。○寒
山寺：江蘇省蘇州市姑蘇区にある寺院。張繼の「風橋夜泊」で有名。

★ 事

即事

清 孫寶仁

野浦山溪一徑通

野浦山溪一徑通ず

柴門茅屋繞丹楓

柴門茅屋丹楓を繞るめぐ

朝看雁鷺清波裏

朝に雁鷺を看る清波の裏うち

夕下牛羊落葉中

夕に牛羊を下す落葉の中うち

【語釈】

○即事：事にふれて、その場に应じて詩を作ること。○野浦：野原の川のほとり。○柴門：柴で作った粗末な門。○茅屋：茅吹きの家。○丹楓：赤い楓。

★ 即景

即景

清 劉正遠

江上秋原落木深

江上秋原落木深し

蕭蕭竹樹鳥聲沈

蕭々たる竹樹鳥声沈む

夕陽雨歇殘霞斂

夕陽雨歇んで残霞斂まり

草際惟聞蟋蟀吟

草際惟だ聞く蟋蟀の吟

【語釈】

○即景：目の当たりの景色。○落木：秋になって葉の落ちた木。○蕭蕭：物寂しい様子や音の形容。○殘霞：残った夕映え。○蟋蟀：コオロギ。

★ 山居遣興

山居興を遣る

明 張永瑗

六扇疎櫺畫未開
六扇疎櫺画未だ開かず
高居迥自絶塵埃
高居迥はるかにおのずか自ら塵埃を絶つ
鈎簾偶為看山色
鈎簾こうれん偶たまたま山色を看るを為す
恰放雙飛燕子來
恰あたかも双飛そうひの燕子を放ち來る

【語釈】

○遣興：楽しむ。○疎櫺：まばらな飾り模様のついた格子。○鈎簾：簾を捲き上げて鈎にかける。○雙飛：対に為って飛ぶ。

★ 山塘雜詩

山塘雜詩

明 趙文哲

欄干曲象枕迴溪
欄干きよくうく曲象かいけい枕のぞ迴溪に枕む
芳樹重重月影低
芳樹ちようちよう重々月影低し
深掩銀屏人未睡
深く銀屏を掩おほいて人未だ睡らず
玉簫聲在畫樓西
玉簫の聲画樓の西に在り

【語釈】

○山塘：山の堤。○雜詩：心の趣くままに作った自由でとらわれない詩。○曲象：僧などが用いる背もたれの曲がった椅子。○枕：臨む。○重重：重なり合うさま。○銀屏：銀で裝飾した屏風。○玉簫：簫の美称。○畫樓：絵の書いてある楼。

★ 自雜藏園圖

自ら雜藏園の図に題す

明 蔣士銓

換却春衣試晚涼
破雲片月點新光
蛙聲漸起棲鴉睡
風弄一池荷葉香

春衣を換却して 晚涼を試む
雲を破る片月 新光を点ず
蛙声 漸く起こり 棲鴉 睡る
風は弄す 一池 荷葉の香

【語釈】

○雜藏園圖…不祥。○換却…換える、却是動作の完了を示す助字。○棲鴉…住み着いている鳥。○弄…楽しむ。

★ 山居絶句

山居絶句

清 袁枚

穿林繞磴問桑麻
空翠無聲染素紗
笑撲衣裳似胡蝶
半粘竹粉半松花

林を穿ち 磴を繞ぐり 桑麻を問う
空翠 声無く 素紗を染む
笑って衣裳を撲てば 胡蝶に似たり
半ばは竹粉に粘り 半ばは松花

【語釈】

○穿…通り抜ける。○磴…石を敷き詰めた道。○桑麻…桑と麻。農事。○空翠…高い木などの緑色。○素紗…白い砂。○胡蝶…蝶々。

★消夏詩

消夏詩しよつかし

清 袁 枚

不著衣冠近半年

衣冠を著つげざること 近半年

水雲深處抱花眠

水雲 深き処 花を抱いて眠る

平生自想無官樂

平生 自おのずから想おもう 無官の樂しみを

第一驕人六月天

第一の驕人きやうじん 六月の天

【語釈】

○消夏：避暑。○著衣冠：官職に就く。○平生：常日頃。○驕人：驕ってほしいままの人。

★山居雜興

山居雜興

清 馮 班

秋氣清寒病骨知

秋氣 清寒 病骨知る

亂蛩聲裏欲眠遲

亂らんきやうせいり蛩聲裏 眠らんと欲すること遅し

月明半夜誰敲戸

月明 半夜 誰か戸を敲く

應是山人得好詩

應これに是れ 山人こうし 好詩を得たるなるべし

【語釈】

○雜興：さまざまなおもむき。○亂蛩聲裏：乱れ鳴くコオロギの聲の中。○半夜：真夜中。○應：「まさにすべし」とよみ「きつとくであるに違いない」の意。○山人：山に住む隠者。

★ 孫園剪牡丹歸

孫園に牡丹を剪りて帰える

清 王陸禊

尋春閑訪野人家

春を尋ねて 閑しずかに訪ぬ 野人の家

扶醉歸來日未斜

酔を扶たすけて 歸り来たれば 日 未だ斜めならず

買得扁舟小於葉

買得たる扁舟 葉よりも小なり

半容人坐半容花

半ば人を容いれて坐し 半ば花を容いる

【語釈】

○孫園…不祥。○野人…田舎に住んでいる人。○扁舟…小舟。○扶醉…酔っているのに敢えて。

絶句類選 卷之五 訪尋類

★ 崔處士林亭過

崔処士の林亭に過ぎる

唐 王維

緑樹重陰蓋四鄰

緑樹 重陰 四隣を蓋う

青苔日厚自無塵

青苔 日に厚く 自ら塵無し

科頭箕踞長松下

科頭箕踞 長松の下

白眼看他世上人

白眼看他の世上の人

【語釈】

○崔處士：盧象、張九齡に拔擢されて左補闕、司勳員外郎となる。王維の母方のいとこ。
○重陰：深い陰。○四隣：あたり。四辺。○科頭箕踞：頭を現し脚を開いて坐る、縦恣輕漫な態度。○白眼看他世上人：世を冷ややかに見る、他は助字。「白眼視」は、晋書、阮籍伝による。

(参考文献)

『『唐詩選』』

★ 三日尋李九莊

三日 李九の莊を尋ぬ

唐 常建

雨歇楊林東渡頭

雨は歇む 楊林 東渡の頭

永和三日盪輕舟

永和 三日 輕舟を盪かす

故人家在桃花岸

故人家は 桃花の岸に在り

直到門前溪水流

直ちに門前に到る 溪水の流に

【語釈】

○三日：三月三日、上巳の節句。○楊林：黒龍江省哈爾濱市楊林郷。○永和：年号。○輕舟：小舟。○故人：昔なじみ、親しい人。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 過鄭山人所居

鄭山人が所居に過る

唐 劉長卿

寂寂孤鶯啼杏園

寂々として 孤鶯 杏園に啼き

寥寥一犬吠桃源

寥寥として 一犬 桃源に吠ゆ

落花芳草無尋處

落花芳草 尋ぬる処無く

萬壑千峰獨閉門

萬壑千峰 独り門を閉ず

【語釈】

○過…立ち寄る。○鄭山人…未詳、山に住んでいる鄭氏。○所居…住まい。寂寂…ひっそり。○万壑千峰…多くの谷と峰。○閉門…門をしめる、世間との交際を絶つたとえ。

(参考文献) 『三体詩』

★ 休暇日訪王侍御不遇 休暇日に王侍御を訪いて遇わず

唐 韋應物

九日驅馳一日閑 九日きゅうじつ驅馳くちして 一日いちじつ閑かんなり

尋君不遇又空還 君を尋ねて遇あわず 又空しく還える

怪來詩思清人骨 怪み來たる 詩思の人骨を清からしむるを

門對寒流雪滿山 寒流かんりゅうは門に對して 雪は山に滿つ

【語釈】

○侍御：皇帝の側に使える人。○驅馳：走り回ること（当時の役人は、9日働き、1日休暇であった）。○怪來：あやしむ（「來」は助辞）。○詩思：詩を作ろうと思う心。○人骨：人。

（参考文献）『三体詩』

★ 草堂村尋羅生不遇

草堂村に羅生を尋ねて遇わず

唐 岑 參

數株谿柳色依依 數株の谿柳 色依依いたり

深巷斜陽暮鳥飛 深巷 斜陽 暮鳥ぼちよう飛ぶ

門前雪滿無人迹 門前 雪滿じんせきち 人迹じんせき無し

應是先生出未歸 應こに是れ 先生 出いでて 未だ歸らざるべし

【語釈】

○草堂村：不祥。○羅生：不祥。○依依：おぼつかないさま。○深巷：奥まった道。○應：「まさにしすべし」と読み、「きつと」であるに違いない」の意。

★ 赴李少府莊失路

李少府の莊に赴いて路を失う

唐 皇甫冉

君家南郭白雲連

君が家の南郭 白雲連らなる

正待天晴弄石泉

正に 天晴を待ち 石泉を弄す

月照煙花迷客路

月は 煙花を照らし 客路に迷う

蒼蒼何處是伊川

蒼々 何れの処か 是れ 伊川

【語釈】

○李少府：不祥。○失路：迷子になる。○南郭：南側のくるわ。○弄：楽しむ。○煙花：花がすみ。○客路：客として行った道。○蒼蒼：草木などが青く繁るさま。○伊川：河南省西部を流れる川。

★ 尋道者隱不遇

隠者を尋ねて遇わず

唐 竇 鞏

籬外涓涓澗水流

籬外 涓々として 澗水流る

槿花半點夕陽收

槿花 半ば点じ 夕陽収る

欲題名字知相訪

名字を題して 相訪うを知らせんと欲す

又恐芭蕉不耐秋

又た恐る 芭蕉の 秋に耐えざるを

【語釈】

○涓涓：水がちよろちよろ流れるさま。○澗水：山谷中の溪水。○槿花：むくげの花。○点：滴がしたたるように落ちる。○相訪：訪問する、相は行為が相手に及ぶことを示す。

★ 題友人山居

友人の山居に題す

唐 戴叔倫

四郭青山處處同

四郭の青山 処々同じ

客懷無計答秋風

客は 秋風に答うに 計無きを懷う

數家茅屋清溪上

數家の茅屋 清溪の上

千樹蟬聲落日中

千樹の蟬声 落日の中

【語釈】

○四郭：四方の城郭の外。○青山：青青とした山。

★ 過鄭處士

鄭處士に過る

唐 白居易

聞道移居村塢間

聞道く 居を村塢の間に移し

竹林多處獨開關

竹林多き処 独り関を開くと

故來不是求他事

故に來りて 是れ 他事を求めず

暫借南亭一望山

暫く 南亭を借りて 一たび山を望まん

○鄭處士：不祥、處士は士であって、まだ使えていないもの。○村塢：山村。○關：門を閉ざすかんぬき。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集三』

★ 曲江夜歸聞元八見訪

曲江より夜歸りて元八の訪れらるを聞く

唐

白居易

自入臺來見面稀

台に入りてより来た面を見ること稀なり

班中遙得揖容輝

班中遙かに容輝に揖することを得たり

早知相憶來相訪

早に知る相憶いて來たりて相訪えるを

悔待江頭明月歸

悔ゆらくは江頭に明月を待ちて歸りしを

【語釈】

○曲江：長安東南にある池の名。○元八：不祥、八は排行。見：受け身、尊敬を示す助字。臺：御史台。○來：このかた、以來。○班中：宮中での官吏の班列。○容輝：輝かしい容貌。○揖：両手を組んで会釈する。○江頭：曲江の岸辺。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集三』

★ 訪山家

山家を訪う

唐

長孫佐輔

獨訪山家歇還涉

独り山家を訪いて歇みて還た涉く

茅屋斜連隔松葉

茅屋 斜めに連なり 松葉を隔つ

主人聞語未開門

主人 語を聞けども 未だ門を開かず

繞籬野菜飛黃蝶

籬を繞る野菜 黄蝶飛ぶ

【語釈】

○歇：停止する。○涉：そぞろ歩きをする。

★ 劉補闕西亭晚宴

劉補闕の西亭の晚宴

唐 朱慶餘

蟲聲已盡菊花乾

虫声 已に尽き菊花乾く

共立松陰向晚寒

共に松陰に立ち 晩に向つて寒し

對酒看山俱惜去

酒に対し 山を見て 俱に去るを惜しみ

不知斜日下欄干

知らず斜日の欄干の下にあるを

【語釈】

○劉補闕：不祥、補闕は官名で天子を諫める役。

★ 城西訪友人別墅

城西に友人の別墅を訪う

唐 雍陶

澧水橋西小路斜

澧水橋西 小路斜めなり

日高猶未到君家

日高くして 猶お未だ君が家に到らず

村園門巷多相似

村園門巷 多くは相い似たり

處處春風枳殼花

処々の春風 枳殼の花

【語釈】

○別墅：園林にある別荘。○澧水橋：不祥、澧水は長江の支流で洞庭水域に属す。○門巷：門前にある村里の道。○枳殼：からたち。

★ 韋處士郊居

韋處士の郊居

唐 雍陶

滿庭詩境飄紅葉

滿庭の詩境 紅葉に飄りひるがえ

繞砌琴聲滴暗泉

砌を繞る琴声 暗泉に滴るしたた めぐ

門外晚晴秋色老

門外の晚晴 秋色老い

萬條寒玉一溪煙

万条の寒玉 一溪の煙

○韋處士：韋郊のこと、官戸部侍郎に到る。處士は偉人を呼ぶときに着ける言葉。○詩境：詩趣に富んだ場所。○砌：階の下の敷き瓦をしいた場所。○暗泉：目に見えない泉。○晚晴：夕方の晴。○秋色老：秋の気配が深まる。○寒玉：清らかな水。竹。

★ 過南鄰花園

南鄰の花園を過ぐ

唐 雍陶

莫怪頻過有酒家

怪しむ莫かれ 頻りに酒有る家に過ぐるをしき よ

多情長是惜年華

多情は長く是れ 年華を惜しむねんか

春風堪賞還堪恨

春風は賞するに堪え 還た恨むに堪えたりま

纔見開花又落花

纔わずかに開花を見しに 又た落花

【語釈】

○過：「を過ぎる」と読むときは「通過する」、「に過ぎる」と読むときは「訪れる」。○是：助辞、動詞の前に置かれて強調する。○年華：歲月。

(参考文献) 『三体詩』

★訪友人幽居

友人の幽居を訪う

唐 雍陶

落花門外春將盡
飛絮庭前日欲高
深院客來人未起
黃鸝枝上啄櫻桃

落花門外春將に尽きんとす
飛絮庭前日高からんと欲す
深院客来れども人未だ起きず
黃鸝枝上にて桜桃を啄む

【語釈】

○幽居：隱者のすまい。○將：「まさにくせんとす」と読み「いまにもくしようとする」の意。○飛絮：飛んでいる柳絮。○深院：奥まった中庭。○黃鸝：高麗ウグイス。○櫻桃…さくらんぼ。

★訪隱者不遇

隱者を訪ねて遇わず

唐 李商隱

城郭休過識者稀
哀猿啼處有柴扉
滄江白石樵漁路
日暮歸來雨滿衣

城郭過ぐことを休め 識者稀なり
哀猿啼く処 柴扉有り
滄江白石 樵漁の路
日暮れ帰り来たれば 雨衣に満つ

【語釈】

○識者：見識のある人。○哀猿：悲しんでいる猿。猿の声は悲しく聞こえる。○柴扉：柴で作った粗末な門。○滄江：青い川。○樵漁：樵と漁夫、共に隱者をさす。

★ 題王侍御宅

王侍御の宅に題す

唐 李羣玉

門向滄江碧岫開
地多鷗鷺少塵埃
綠陰十里灘聲裏
閑去王家看竹來

門は滄江碧岫に向つて開く
地に鷗鷺多く塵埃少なし
綠陰十里灘声の裏
閑かに王家を去りて竹を見て來る

【語釈】

○王侍御：不祥、侍御は官名で侍従。○滄江：青い川。○碧岫：緑色の連なった山。○鷗鷺：鷗とサギ。○緑陰：木陰。○灘聲：灘の水音。○王家：朝廷。王侯の家。

★ 訪隱者不遇

隱者を訪ねて遇わず

唐 高駢

落花流水認天台
半醉閑吟獨自來
惆悵何處去
滿庭紅杏碧桃開

落花流水 天台を認む
半ば酔い 閑かに吟じ 独り自ら來る
惆悵す 仙翁 何れの処にか去る
滿庭の紅杏 碧桃 開く

【語釈】

○天台：天台山。此処では秘境の意？○惆悵：嘆き悲しむこと。○仙翁：世俗を離れた翁、隱者のこと。

★ 郊居友人相訪

郊居の友人を相訪ぬ

唐 崔道融

柴門深掩古城秋

柴門さいもん深く掩おおう 古城の秋

背郭縁溪一徑幽

郭かくを背かにし 溪せに縁そいて 一徑幽なり

不有小園新竹色

小園の新竹の色に有らずんば

君來那肯暫淹留

君来りて 那なんぞ肯かえて暫しばらくも淹留かんりゅうせんや

【語釈】

○郊居：郊外の住まい。○柴門：柴で作った粗末な門。○郭：城を囲む二重の城壁のうち外側。○縁：沿う。○那：なんぞ、反語。○淹留：久しく留まる。

★ 尋隱者不遇

隱者を尋ねて遇わず

宋 魏野

尋真誤入蓬萊島

真を尋ねて誤って入る 蓬萊ほうらいの島

香風不動松花老

香風動かず 松花老ゆ

採芝何處未歸來

芝を採り 何れの処か 未だ帰り来らず

白雲滿地無人掃

白雲 地に満ち 人ひとの掃はらう無し

【語釈】

○蓬萊：仙山の名、東海の東にあって仙人が住んでいるという。

★ 訪陳處士

陳處士を訪ぬ

宋 蔡襄

橋畔修篁下碧溪
橋畔篁を修めて碧溪を下る
君家元在此橋西
君の家元此の橋の西に在り
來時不似人間世
來る時似ず人間の世に
日暖花香山鳥啼
日暖かに花は香り山鳥啼く

【語釈】

○陳處士…不祥。處士は民間にあつて仕官しない人。○篁…笛。○人間世…俗世間。

★ 書湖陰先生壁

湖陰先生の壁に書す

宋 王安石

茆檐長掃淨無苔
茆檐 長に掃い 淨くして苔無し
花木成畦手自栽
花木 畦を成すは手 自ら栽う
一水護田將綠繞
一水 田を護り 緑を將ちて繞り
兩山排闥送青來
兩山 闥を排し 青を送り來る

【語釈】

○湖陰先生…楊德逢、作者が隱棲した金陵の近くにいた人物。○茆檐…茅吹きの軒。○長…常に。○畦…一区画の畑。○排闥…くぐり門を力で押し開く。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 對雪憶往歲錢塘西湖訪林逋

宋 梅堯臣

雪に對し 往歲おうさい 錢塘西湖に林逋りんぼを訪いしことを憶う

昔乘野艇向湖上

昔野艇やていに乗りて湖上に向う

泊岸去尋高士初

岸はくに泊して去り高士を尋ぬるの初

折竹壓籬曾礙過

折竹せつちく籬まがきを圧して曾かつて過すぐるを礙さまたぐ

却穿松下到茅廬

却かえつて松下うがを穿ち茅廬まうに到る

【語釈】

○往歲：往年、昔。○錢塘西湖：浙江省西湖、この孤山に林逋が隱棲した。○林逋：北宋の詩人、鶴を妻、梅を子として西湖の孤山に隱棲して生涯を終えた。○野艇：鄉村の小舟。○高士：在野の隱君子、品行の高尚な人。林逋のこと。○礙過：通り過ぎるのを妨げる。○茅廬：茅葺きの粗末な家。

★ 訪隱者

隱者を訪うおとこな

宋 郭祥正

一徑沿崖踏蒼壁

一徑崖そに沿そい蒼壁そうへきを踏む

半塢寒雲抱泉石

半塢はんお寒雲せんせき泉石せんせきを抱く

山翁酒熟不出門

山翁酒熟して門を出でず

殘花滿地無行跡

殘花地に満ち行跡無し

【語釈】

○塢：村落の周圍に繞らされた防御用の小さな土塁。村落。○山翁：山に隱棲した翁。○殘花：色あせた花。散り残りの花。○行跡：人の通った跡。

★金陵訪楊氏

金陵に楊氏を訪う

宋 陳 輔

北山松粉末飄花

北山の松粉 未だ花に飄らず

白下風輕麥脚斜

白下 風輕くして 麦脚斜めなり

身似舊時王謝燕

身は 旧時の 王謝の燕に似て

一年一度到君家

一年一度 君が家に到る

【語釈】

○北山：北邙山、洛陽の北に在り漢代の王侯の墓がある。○松粉：松の花粉。○白下：江蘇省南京市の西北。○王謝：六朝時代の貴族、王氏と謝氏。

★訪石林

石林を訪う

宋 劉一止

山行不用瘦藤扶

山行用いず 瘦藤の扶るを

度石穿雲意自徐

石を度り 雲を穿ち 意 自ら徐やかに

夜過西巖投宿處

夜過ぎて 西巖 投宿する処

滿身風露竹扶疏

満身の風露竹 扶疏たり

【語釈】

○石林：石が浸食されて林のようになった景勝の地。○瘦藤：瘦せた藤。○投宿：宿をとる。○扶疏：植物が枝を四方に広げるさま。

★ 題吳公輔庵

吳公輔の庵に題す

宋 陳 東

一徑縈迴屋數間

一徑 縈迴す 屋數間

我來聊欲寄清閑

我來つて 聊か 清閑を寄せんと欲す

道人杖履知何處

道人 杖履 知んぬ 何れの処ぞ

空鎖烟霞萬疊山

空しく 鎖ざす 煙霞 万疊の山

○吳公輔：南劍州劍浦の人、詩人。○縈迴：まといめぐる。○屋數間：数間の大きさの家。○清閑：静かで閑なさま○杖履：老人を尊敬して言う言葉。○煙霞：靄と霞。○萬疊山：幾重にも重なりあつた山。

★ 過從子澤家

子沢の家を過從す

宋 樓 鑰

楚楚初篁脱綠苞

楚楚 初篁 緑苞を脱す

城居約略似荒郊

城居 約略 荒郊に似たり

土膏更得春風力

土膏 更に春風の力を得て

直引薔薇上竹梢

直ちに薔薇を引いて竹梢に上る

【語釈】

○過從：訪問する。○子澤：不祥。○楚楚：清らかで美しいさま。○初篁：筍から育つた竹。○綠苞：緑の筍の皮。○約略：大体、あらかし。粗雑。○荒郊：荒れた野原。○土膏…土の中の植物を育てる養分。

★ 過故家

故家に過ぎる

宋 樓 鑰

團團桂樹擁簷牙
舊日輕黃滿樹花
惆悵秋清無一葉
空餘枯枿縋寒瓜

だんだん
けいじゆ えんが
ちゆうぢゆう
けいわう まんじゆ
ちゆうぢゆう
こがっ
かんか
かけ

団々たる桂樹 簷牙を擁す
旧日の輕黄 滿樹の花
惆悵す 秋清くして 一葉無きを
空しく 枯枿を余し 寒瓜を縋く

【語釈】

○故家：故郷の家。○團團：丸いさま。○簷牙：軒の尖ったところ。○輕黄：柳。○惆悵：嘆き悲しむ。○惆悵：なげきかなしむ。○枯枿：枯れた切り株。○寒瓜：冬瓜。○縋：懸ける。

★ 訪中洲

中洲を訪う

宋 姚 鑞

踏雨來敲柳下門
荷香清透紫綃裙
相逢未暇論奇字
先向水邊看白雲

たた
かこう
あいあ
すいへん

雨を踏み 来りて 敲く 柳下の門
荷香 清く透る 紫綃の裙
相逢いて 未だ奇字を論ずる 暇あらず
先ず 水辺に向い 白雲を見る

【語釈】

○中洲：河川の中にある中洲。○荷香：蓮の花の香。○紫綃：紫色のうすぎぬの衣。○裙：衣の裾。○奇字：古い文字。

★期袁卿見過因出失值寄詩謝之

明 高啓

袁卿が過らるる期 出るに因りて値うを失す 詩を寄せて之に謝す

非關遠出負幽期

遠く出でて幽期に負くに關するに非ず

自是江邊枉棹遲

自らはれ 江邊 棹を枉ぐることに遅し

誰道空迴君恨切

誰か道う 空しく迴り 君が恨み 切なりと

未應如我到家時

未だ応に 我の如く 家に到らざる時なるべし

○見過：訪問される。○因出：外出していた為。○幽期：逢おうと約束していた時。○江邊：川のほとり。○枉：まげる。○應：まさにくべし、と読み、きつとくに違いないの意。

★雪中喜劉戸曹見過

雪中劉戸曹の過らるるを喜ぶ

明 高啓

滿城春雪禁花開

滿城の春雪 禁花開く

愁對寒窓欠酒盃

愁いて 寒窓に対し 酒杯を欠く

喜子遠能來慰我

喜ぶ 子が 遠くより 能く 来りて 我を慰むを

扁舟不肯過門回

扁舟 肯えて 門を過ぎて 回らず

【語釈】

○劉戸曹：不祥。○禁花：宮庭庭園の花、ここでは雪が花のように見えること。○子：劉戸曹のこと。○扁舟：小舟。

★ 秋日過子問郊居

秋日過子郊居を問う

明 王伯稠

映竹縁溪三兩家

竹に映じ溪に縁る三兩家

陰陰樹影日將斜

陰々たる樹影日將に斜ならんとす

翩翩黃蝶穿疏蓼

翩翩たる黃蝶疏蓼を穿ち

唧唧秋蟲語豆花

唧々として秋虫豆花に語る

【語釈】

○縁…沿う。○陰陰…木が生い茂って暗いさま。○將…「まさにくせんとす」と読み「いまにもろしそうである」の意。○翩翩…鳥や昆虫が身軽に飛ぶさま。○疏蓼…まばらなたつ。○唧唧…虫の鳴き声の形容。

★ 上菁山訪張山人

菁山に上り張山人を訪う

明 徐賁

此日尋君竟不逢

此の日君を尋ねて竟に逢わず

閑行直到最高峰

閑に行き直ちに到る最高峰

歸時已是斜陽後

歸時已に是れ斜陽の後

惆悵荒山寺裏鐘

惆悵す荒山寺裏の鐘

【語釈】

○菁山…不祥。○張山人…不祥。山人は世を逃れて山中に住んでいる人。○惆悵…嘆き悲しむこと。

★ 訪某附馬

某附馬を訪うぼうふば おとな

明 孫 賁

青春附馬不還家

青春 附馬 家に還らず

公主傳宣坐賜茶

公主 伝宣でんせんして 坐して茶を賜う

十二碧闌春似海

十二碧闌 春 海に似たり

隔窗閒殺碧桃花

窓を隔てて 閑殺す 碧桃花へきとうか

【語釈】

○某附馬：不祥。附馬は補助役のこと？○公主：皇帝、諸侯の娘。○傳宣：旨を伝え述べる。○碧闌：緑色の欄干。○閑殺：ひどく閑かな思いにさせる。殺は人を甚だしく思わせる意の助字。○碧桃花：桃の花の一種。

★ 尋隱者不遇

隱者を尋ねて遇わず

明 徐永寧

杖藜徐步出荒原

杖藜じょうれい 徐おもむろに歩み 荒原に出ず

漠漠寒雲掩洞門

漠々ばくばくたる 寒雲 洞門を掩おおうう

流水桃花人不見

流水 桃花 人見えず

孤鶯飛過綠楊村

孤鶯こおう 飛過りぐ 緑楊りよくようの村

【語釈】

○杖藜：藜（あかざ）の杖をつくこと。○徐：ゆっくり。○漠漠：一面に続いているさま。○寒雲：寒々として見える雲。

★劉氏南亭子

劉氏の南亭子なんていし

明 蔣山卿

洛水橋南學士家

洛水橋南らくすいきょうなん 學士の家

青林遙映碧山斜

青林遙かに碧山へきざんに映じて斜なり

春風細雨柴門閉

春風細雨さいもん 柴門を閉ざす

一樹鶯啼杏子花

一樹鶯は啼くきょうし 杏子の花

【語釈】

○劉氏：不祥。○南亭子：南の亭。○洛水橋：洛陽を流れる洛水に架かっている橋。○柴門：柴で作った粗末な門。○杏子：杏の木。

★次儒珍韻

儒珍の韻に次す

明 謝鐸

莞海東頭去路賒

莞海東頭かんかいとうとう 去路賒きよろはるかなり

獨乘羸馬到君家

獨り羸馬るいばに乗りて 君が家に到る

十年夢裏相尋處

十年夢裏むりに 相尋ぬる處

依舊青山兩岸花

旧に依りてよ 青山 兩岸の花

【語釈】

○儒珍：不祥。○次：次韻。同じ韻字を同じ順にして作った詩。○莞海東頭：莞海（不祥）の東のほとり。○去路：旅行く道。○賒：はるか。○羸馬：やせ疲れた馬。○夢裏：夢の中。○依舊：昔のまま。

★毛園萃芳亭與沈中白丘月渚同賦

明 楊慎

毛園の萃芳亭にて沈中・白丘・月渚と同一賦す

繚垣洞屋鎖烟霞

垣を繚らす洞屋 煙霞に鎖さる

五色離披百種花

五色の離披 百種の花

客子看來猶駐馬

客子 看來りて 猶お馬を駐む

主人何事不歸家

主人 何事ぞ 家に帰らざる

【語釈】

○毛園萃芳亭：不祥。○沈中・白丘：不祥。○月渚：杜東、邵武（現在の福建）の人。○洞屋：洞窟の中にある家。○煙霞：霞と靄。○離披：分散して垂れ下がっているさま。○客子：旅人。○看來：見る。來は助字。

★夜過張子不遇

夜 張子に過ぎりて 遇わず

明 皇甫汸

偶隨明月過君家

偶、明月に随つて 君が家に過ぎる

幽徑無人自落花

幽徑 人無く 自ら落花

書帙亂拋青玉案

書帙 乱拋す 青玉案

尚餘螢火掛窓紗

尚お 螢火を余して 窓紗に掛く

【語釈】

○張子：不祥。○幽徑：静かな小径。○書帙：書籍。○亂拋：乱暴に抛つ。○青玉案：青い玉で飾った机。○窓紗：窓を蔽う薄絹のカーテン。

★訪劉山人不遇

劉山人を訪いて遇わず

明 李攀龍

南窓狼藉半牀書

南窓の狼藉 半床の書

階下蒼苔罷掃除

階下の蒼苔 掃い除くを罷む

似是隣人邀作社

是れ隣人の 邀めて社を作すに似たり

不然應釣錦川魚

然らず 応に 錦川の魚を釣るなるべし

【語釈】

○劉山人…不祥。山人は山に住む隱者。○狼藉…乱れたさま。○邀…求める。○社…土地の神を祭ること。○應…「まさにくすべし」と読み「きつとくに違いない」の意。○錦川…錦水、成都の平原を流れる川。

★宿林泉觀

林泉の觀に宿す

明 李攀龍

盥漱焚香坐翠微

漱に盥い 香を焚き 翠微に坐す

煙霞猶在芟荷衣

煙霞 猶お芟荷の衣に在り

怪來不作人間夢

怪しみ來る 人間の夢を 作さざるを

一夜寒泉拂牖飛

一夜寒泉 牖を払って飛ぶ

【語釈】

○觀…道教の廟。○盥…洗う。○翠微…山のみどりの奥深いひっそりした中腹のあたり。薄緑色のもや。○煙霞…もやと霞。○芟荷…ヒシと蓮。○怪來…怪しむ。來は助字。○寒泉…冬の冷たい泉。○牖…窓。

★ 汝思見過林亭

汝思 林亭に過ぎらる

明 李攀龍

五柳陰陰逼酒清
一杯須見故人情
明朝馬上聽黃鳥
不似樽前喚友聲

五柳 陰々として 酒に逼りて清し
一杯 須らく見るべし 故人の情
明朝 馬上 黃鳥を聴かん
似ず 樽前 友を喚ぶ声に

【語釈】

○汝思：不祥。○五柳：陶淵明の庭には五本の柳があつた。又、柳は別れの印。○陰陰：木が茂つて暗いさま。○須：「すべからくすべし」と読み「当然くすべきだ」の意。○故人：古くからの友人。○黃鳥：コウライ鶯。○樽前：酒樽の前。

★ 訪葛徵君

葛徵君を訪ぬ

明 謝榛

西城閑訪葛洪家
籬落秋餘白荳花
高枕自知無俗夢
數椽茅屋在煙霞

西城 閑かに訪ぬ 葛洪の家
籬落 秋余 白荳の花
高枕 自ら知る 俗夢無きを
數椽の茅屋 煙霞に在り

【語釈】

○葛徵君：不祥。○葛洪：西晋・東晋時代の道教研究家、ここでは葛徵君をそれになぞららている。○籬落：かきね。○秋餘：秋が終わって。○白荳：白豆。○高枕：高枕でねること。○數椽：數軒、椽は家を数える言葉。○茅屋：茅吹きの粗末な家。○煙霞：もやと霞。○數椽：篆書のように連なっている數軒の家。

★ 北山訪梁思伯不值

北山に梁思伯を訪ねて値わず

明 梁有譽

竹塢無塵日已曛

竹塢塵無く日已に曛ず

數聲啼鳥隔花聞

數聲の啼鳥花を隔てて聞く

平蕪一望涼風起

平蕪一望すれば涼風起り

吹落江城萬樹雲

吹き落す江城万樹の雲

【語釈】

○北山：不祥。○梁思伯：梁孜、広東省順德の人。○竹塢：竹が生い茂った山村。○曛：暗い。○平蕪：草が生い茂った平らな原野。○江城：川の畔にある街。

★ 北山訪梁思伯不值

北山に梁思伯を訪ねて値わず

明 梁有譽

此日相期汗漫遊

此の日相期す汗漫遊

獨尋猿鶴北山頭

独り猿鶴を尋ぬ北山の頭

池塘花落無人管

池塘花落ちて人の管する無く

空鎖蟬聲一院秋

空しく鎖す蟬声一院の秋

【語釈】

○北山：不祥。○梁思伯：梁孜、広東省順德の人。○汗漫遊：世俗を離れた遊び。○池塘：池の周りの土手。○無人管：人間が手を加えず自然のままにする。○一院：一つの中庭。

★ 訪陳徳英

陳徳英を訪ぬ

明 龔明卿

椅岸成橋通小蹊

岸に椅子橋を成し 小蹊に通ず

溪流清浅草萋萋

溪流清浅草萋々

野花自落春歸去

野花自ら落ち春帰り去り

澗戸無人山鳥啼

澗戸人無く山鳥啼く

【語釈】

○陳徳英…不祥。○萋萋…草が盛んに生い茂っているさま。○春歸…春が過ぎ去る。○澗戸…山間の家。

★ 真州訪譚子羽

真州に譚子羽を訪ぬ

明 陳鶴

海上尋君路半迷

海上に君を尋ね路半ばにして迷う

畫船如入武陵溪

画船武陵溪に入るが如し

橋迴流出桃花水

橋廻りて流出す桃花の水

應有人家在樹西

應に人家の樹西に在る有るべし

【語釈】

○譚子羽…不祥。○畫船…画で彩られた船。○武陵溪…桃花源記にある武陵溪を流れる溪の意。○應…「まさにすべし」と読み、「きつとであるに違いない」の意。

★宿魯生西齋

魯生の西齋に宿す

明 程嘉燧

石橋明月正東峰

石橋の明月正に東の峰

仄聴南屏隔水鐘

仄に聴く南屏水を隔つる鐘

昨夜西窓風不斷

昨夜西窓風断えず

半疑巖瀑半疑松

半ば巖瀑かと疑い半ば松かと疑う

【語釈】

○魯生：不祥。○西齋：西の部屋。○南屏：南側の目隠しの壁。○巖瀑：岩にかかった滝。

★過孫山人故居

孫山人の故居に過ぎる

明 僧明秀

谿邊野竹暎寒沙

谿辺の野竹寒沙に映じ

茅屋青山處士家

茅屋青山処士の家

燕子歸來寒食雨

燕子帰り来たる寒食の雨

春風開徧野棠花

春風開きて徧し野棠の花

【語釈】

○孫山人：不祥、山人は山に住む隠者。○故居：古いすみか。○寒沙：寒々とした砂浜。○茅屋：茅吹き粗末な家。○處士：民間にあって仕官していない人。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○野棠：野原の海棠。

★ 喜蔣用弼至自閩南

蔣用弼が閩南びんなんより至るを喜ぶ

清

週亮工

海水群飛百丈高

海水群飛して百丈の高

同君城上擁弓刀

君ともと共に城上にて弓刀を擁す

戰瘢莫向燈前看

戰瘢灯前おに向いて看ること莫なかれ

恐惹霜華上鬢毛

恐らくは霜華そうかを惹ひいて鬢毛びんもうに上らん

【語釈】

○蔣用弼…不祥。○閩南…福建省の南。○自…より。○戰瘢…戦いで負傷した傷跡。○霜華…美しい霜。ここでは白さが強調される。

★ 題程氏水樓

程氏の水樓に題す

清

彭孫適

舊館重来倍寂寥

旧館重ねて来れば倍ますます寂寥

隔溪惟見柳千隔

溪を隔てて惟だ見る柳千条

黄花水榭無人到

黄花こうか水榭人の到る無く

獨對西風看落潮

独り西風に対して落潮を看る

【語釈】

○程氏…不祥。○水樓…水辺又は水中の楼。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま。○黄花…黄色の花。菊の花。○水榭…水際の亭、水亭。○西風…秋風。○落潮…引き潮。

★訪張道士題壁

張道士を訪ね壁に題す

清 袁 凱

道士門前春日温

道士の門前 春日温あたたかし

千重碧草睡鷺羣

千重の碧草 鷺群がぐんを睡らす

山風忽送桃花雨

山風さんふう忽たちまち送る 桃花の雨

濕遍牀頭白練裙

湿遍しうへんす 床頭の白練裙はくれんくん

【語釈】

○張道士…不祥。○鷺羣…鷺鳥の群。○濕遍…遍く湿らせる。○白練裙…白絹製のすそも。

★尋友

友を尋ぬ

清 王仔園

亂鳥棲定夜三庚

乱鳥らんす棲すみ定まり 夜三庚

樓上銀燈一點明

楼上の銀灯 一点明いちてんあきらかなり

記得到門還不叩

記し得たり 門に到りて 還また叩かざるを

花陰悄聽讀書聲

花陰かすか 悄かすかに聴く 讀書の声

【語釈】

○三庚…午前零時頃。○銀燈…銀色の灯火。○記得…おぼえている。心にしるし留める。○悄…かすか。

★ 州道上過故人居

通州道上 故人の居を過ぐ

清 金 潢

城北城南數里遙

城北城南 數里遙はるかなり

青山依約似相招

青山 依約いやくとして 相招あいまねくに似たり

西風驢背沈吟客

西風 驢背ろはい 沈吟ちんぎんの客かく

疎雨殘陽舊板橋

疎雨そう 殘陽ざんよう 旧板橋きゅうはんきょう

【語釈】

○通州：江蘇省南通市。○故人：古くからの友人。○依約：かすかなさま。依稀。○西風：秋風。○驢背：驢馬に乗る。○沈吟：思いに沈む。○殘陽：夕陽。○舊板橋：古い板の橋。

★ 宿程菑湖書堂不寐題壁時菑湖赴西郷燕席

清 蔣士銓

程菑湖ていせいこの書堂に宿し 寐いねず 壁に題す 時に菑湖せいこ 西郷し燕席に赴く

華筵絲竹蠟堆盤

華筵かえん 糸竹しちく 蠟盤ろうばんに堆うすたかし

傀儡登場椅醉看

傀儡かいらい 場に登り 醉よに椅子いすりて看る

豈料空齋亂書裏

豈あに料はからんや 空齋くうさい 乱書らんしゆの裏うち

有人消受五更寒

人の 五更の寒を 消受しょうじゆする有りとは

【語釈】

○程菑湖：不祥。○菑湖：不祥。○西郷：西に向かつて坐る。通常、客人が座る位置。○燕席：宴席。○華筵：華やかなむしろ。宴会。○絲竹：管弦、音楽。○蠟：蠟燭。○傀儡：操り人形。○空齋：人氣の無い書齋。○五更：午前四時頃、夜明け前。○消受：忍んで受ける。

絶句類選標本 三

絶句類選卷之六 遊覧類

★同武平一遊湖

武平一とせと湖に遊ぶ

唐 儲光羲

朦朧竹影蔽巖扉

朦朧もうろうたる竹影 巖扉がんびを蔽おほう

淡蕩荷風飄舞衣

淡蕩たんとうたる荷風 舞衣ひるがえに飄ひるがえる

舟尋綠水宵將半

舟は綠水を尋ね宵將まさに半なかばならんとす

月隱青林人未歸

月は青林に隠れ人未だ帰らず

【語釈】

○武平一：并州文水の人，名は甄。○朦朧：ほのぐらくぼおつとしているさま。○巖扉：いわやの扉。○淡蕩：ゆつたりしてとらわれのないさま。○荷風：蓮を通り抜けた風。○將：「まさにせんとすと読み、「いまにもくしそうである、これからくしたい」の意。○青林：青々とした林。

★ 春行寄興

春行寄興

唐 李華

宜陽城下草萋萋

宜陽城下草萋々

澗水東流復向西

澗水東に流れて復た西に向う

芳樹無人花自落

芳樹人無く花自ら落ち

春山一路鳥空啼

春山一路鳥空しく啼く

【語釈】

○春行：春の行楽。○寄興：感興を詩に託して述べる。○宜陽：河南省宜陽県。○城下：城壁の外。町の郊外。○萋萋：草が盛んに茂っているさま。○澗水：谷川の水。○芳樹：芳しい花の咲いている春の木。

(参考文献) 『唐詩選』 『漢詩鑑賞時点』

★ 望廬山瀑布

廬山の瀑布を望む

唐 李白

日照香爐生紫煙

日は香炉を照らして紫煙を生ず

遙看瀑布挂長川

遙に看る瀑布の長川を挂くるを

飛流直下三千尺

飛流直下三千尺

疑是銀河落九天

疑うらくは是れ銀河の九天より落つるか

【語釈】

○廬山：陶淵明以来、数々の詩に詠まれている江西省九江市南部の名勝。東西二大伽藍があり、南方仏教の中心地。○香爐：香炉峰、廬山の主峰の一つ、形が高香炉に似ているからこう呼ぶ。○紫煙：紫のもや。山気が日光に霞む様子。○疑是：くと疑うほどだ。○九天：空の非常に高いところ。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★ 東魯門泛舟

東魯門とうろもんに舟を泛ぶ

唐 李白

日落沙明天倒開

日落ち 沙明すなにして 天 倒さかしまに開く

波搖石動水縈迴

波揺れ 石動きて 水 縈迴えいかいす

輕舟泛月尋溪轉

輕舟 月を泛うかべて 溪を尋ねて 転ずれば

疑是山陰雪後來

疑らくは是れ 山陰 雪後に來るか

【語釈】

○東魯門：山東省濟寧市の地名。○縈迴：めぐりめぐる。○山陰雪後：王徽之嘗て山陰（浙江省紹興市）に居り、忽然想起し剡中（浙江省嵊縣）住在し安道に戴る、于是に夜雪初霽が在り、月色清朗の夜里、小舟に乗り去りて他を望み看る、門に過りて入らずして返える。（『世説新語』任誕）

（参考文献）『漢詩大系 8』

★ 遊洞庭湖

洞庭湖に遊ぶ

唐 李白

洞庭西望楚江分

洞庭西に望めば楚江分る

水盡南天不見雲

水尽きて南天雲を見ず

日落長沙秋色遠

日落ちて長沙秋色遠し

不知何處弔湘君

知らず何れの処にか湘君を弔わん

【語釈】

○洞庭湖：湖南省北部にある巨大な湖。○楚江：長江の湖南・湖北省一帯の川を指す。○水盡：水平線。○長沙：湖南省長沙市。○秋色：秋の景色。○湘君：洞庭湖に注ぐ湘水の女神のこと。堯帝の二人の娘、姉の娥が皇こうと妹の女英じよえいは、ともに舜帝の妃となったが、舜帝が没した時、その後を追って湘水に身を投げて死に、水神になったという。

（参考文献）『唐詩選』

○ 遊洞庭湖

洞庭湖に遊ぶ

唐 李白

洞庭湖西秋月輝

洞庭湖西 秋月輝どうついき

瀟湘江北早鴻飛

瀟湘江北 早鴻飛しょうぶ

醉客滿船歌白苧

醉客 船に満ち 白苧を歌う

不知霜露入秋衣

知らず 霜露 秋衣に入るを

【語釈】

○洞庭湖：湖南省北部にある巨大な湖。○瀟湘江：洞庭湖の南の瀟水・湘水。八箇所の佳景は瀟湘八景と呼ばれた。◇鴻：大型の水鳥。ひしくい（大雁）や白鳥の類。◇醉客 李白自身とその連れを客観視して言う。◇白苧：白紵歌。古くから伝わる歌曲。
（参考文献） 『漢詩大系 8』

★ 魯門泛舟

魯門に舟を泛ぶ

唐 李白

水作青龍盤石堤

水は青竜と作り 石堤に盤なす

桃花夾岸魯門西

桃花 岸を夾さしはさむ 魯門ろもんの西

若教月下乘舟去

若し 月下に舟に乗じて去もさらしめば

何啻風流到剡溪

何啻なんぞただ 風流 剡溪に到るのみならんや

【語釈】

○魯門：山東省の地名。○何啻：「なんぞたら〜のみならんや」と読み、「どうして単に〜だけであろうかの意。○剡溪：浙江省曹娥江の上流。○風流剡溪：王子猷の故事（『世説新語』任堪）

★ 峨眉山月歌

峨眉山月の歌

唐 李白

峨眉山月半輪秋

峨眉山月半輪の秋

影入平羌江水流

影は平羌江水に入って流る

夜發清溪向三峽

夜清溪を発して三峽に向う

思君不見下渝州

君を思えども見えず渝州に下る

【語釈】

○峨眉山：四川省峨眉の東南にあるけわしい山。○平羌江：峨眉山の北側を流れる青衣江。○三峽：四川省の奉節県から湖北省の宜昌までの大渓谷。途中三つの渓谷があるのをまとめて、「三峽」という。○清溪：四川省漢源県。○渝州：今の重慶。

（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』『唐詩選』

★ 滁州西澗

滁州の西澗

唐 韋應物

獨憐幽草澗邊生

独り憐れむ幽草の澗辺に生ずるを

上有黃鸝深樹鳴

上に黃鸝の深樹に鳴く有り

春潮帶雨晚來急

春潮雨を帯びて晩來急なり

野渡無人舟自橫

野渡人無く舟自ら横たわる

【語釈】

○滁州：安徽省滁州市。○西澗：西側の谷川。○幽草：奥深い谷に生ずる草。○澗邊：谷川の岸辺。○黃鸝：コウライウグイス。○深樹：生い茂った木々。春潮：春の日のうしお。○晩來：夕暮れになってから。○野渡：田舎の舟渡し場。郊外の渡し場。

（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』『唐詩選』

★絶句

絶句

唐 杜甫

兩箇黃鸝鳴翠柳

兩箇りようこの黃鸝こうり 翠柳すいりゅうに鳴き

一行白鷺上青天

一行いっこうの白鷺はくろ 青天せいてんに上る

窗含西嶺千秋雪

窓せは含むむ 西嶺せいれい 千秋の雪

門泊東吳萬里船

門はくは泊す 東吳とうご 万里の船

【語釈】

○兩箇：二つ。○黃鸝：コウライウグイス。○翠柳：緑の柳。○一行：一列。○含：窓枠に景色がはめこまれていているようなさま。○西嶺：成都西方の山。○千秋雪：万年雪。○東吳：東のほうの呉の地方。江蘇省。

(参考文献) 『中国名詞集』

★漫興

漫興

唐 杜甫

腸斷春江欲盡頭

腸断ちようだん 春江 尽きんと欲する頭ほどり

杖藜徐步立芳洲

杖藜じようらい 徐おもむくに歩き 芳洲ほうしゅうに立つ

顛狂柳絮隨風去

顛狂てんきやうの柳絮りゅうじよ 風に随つて去り

輕薄桃花逐水流

輕薄の桃花 水おを逐つて流る

【語釈】

○漫興：なんとなく催した感慨。○腸斷：思いのたかまりが消失していくこと。○欲盡頭：春を盛りにしていた景色の構成要素が消滅していくこと。○杖藜：藜（アカザ、軽いので老人、仙人の杖として用いる）を杖にする。○徐歩：おもむろにあるく。○芳洲：美しい中洲。○顛狂：気が狂う。動作が落ち着かないことの喩え。

(参考文献) 『中国詩人撰集』

★泛洞庭湖

洞庭湖に泛ぶ

唐 賈至

江上相逢皆舊遊
湘山永望不堪愁
明月秋風洞庭水
孤鴻落葉一扁舟

江上相逢うは皆旧遊
湘山永望すれば愁に堪えず
明月秋風洞庭の水
孤鴻落葉一扁舟

【語釈】

○洞庭湖：湖南省北部にある巨大な湖。○旧遊：昔からの交友。○湘山：洞庭湖にある君山。○孤鴻：孤独なおおとり。○扁舟：小舟。

★泛洞庭湖

洞庭湖に泛ぶ

唐 賈至

楓岸紛紛落葉多
洞庭秋水晚來波
乘興輕舟無近遠
白雲明月弔湘娥

楓岸紛紛落葉多し
洞庭秋水 晚來波だつ
興に乗じて 輕舟 近遠無し
白雲 明月 湘娥を弔う

【語釈】

○洞庭湖：湖南省北部にある巨大な湖。○楓岸：楓の木の立ち並ぶ岸边。○紛紛：入り乱れて散るさま。○秋水：秋の澄んだ水面。○晚來：夕方とともに。夕暮れを迎えて。來は、時をあらわす語につく助辞。○波：動詞として「なみだつ」と読む。○乘興：感興のわくままに。興の赴くままに。東晋の王徽之の故事（『世說新語』任湛）。○白雲明月：白雲たなびき、明るい月の光の下で。○湘娥：洞庭湖に注ぐ湘水の女神（娥皇と女英）のこと。

（参考文献）『唐詩選』

★春郊

春郊

唐 錢起

水遶冰渠漸有聲
水は 冰渠を遶り 漸く声有り
氣融煙塢晚來明
氣は 煙塢を融かし 晚來明かなり
東風好作陽和使
東風 好く 陽和の使と作り
逢草逢花報發生
草に逢い 花に逢い 發生を報ず

【語釈】

○春郊：春の郊外。○冰渠：氷の張った溝。○漸：だんだんと、次第に。○煙塢：もやのかかっている村。○晚來：夕方になってから。○東風：春風。○陽和：のどかな春候。○發生：春が来たこと。

★宿石邑山中

石邑山中に宿す

唐 韓翃

浮雲不共此山齊
浮雲も 此の山と 齊しからず
山靄蒼蒼望轉迷
山靄 蒼々として 望み 転た迷う
曉月暫飛千樹裏
曉月 暫く 飛ぶ 千樹の裏
秋河隔在數峰西
秋河は隔てて 數峰の西に在り

【語釈】

○石邑：河北省石家莊市の西、鹿泉県（河北省石家莊市鹿泉区）の古名。○共：「と」と読み、「く」と訳す。与に同じ。○不：齊：等しくない。○山靄：山にかかる靄もや。○蒼蒼：青黒い色の形容。○望：眺めやると。眺めわたせば。○転：いよいよ。ますます。○迷：方角に迷う。○秋河：天の川。

（参考文献）『唐詩選』

★ 洛中即事

洛中即事

唐 竇鞏

高梧葉盡鳥巢空

高梧こうこ 葉尽はつき 鳥巢ちようそう空し

洛水潺湲夕照中

洛水らくすい 潺湲せんかん 夕照ゆづの中

寂寂天橋車馬絶

寂々せきせきたる天橋てんきやう 車馬しやま絶え

寒鴉飛入上陽宮

寒鴉せむぎ 飛び入るいり 上陽宮じやうやうきゆう

【語釈】

○洛中…洛陽の街。○即事…事にふれて、その場に应じて詩を作ること。○高梧…高いアオギリ。○洛水…洛陽を流れる川。○潺湲…浅い水の流れるさま。○寂寂…寂しくしげくなく。○天橋…天上の橋のような橋。洛水橋のこと？○上陽宮…洛陽の宮殿の名。

★ 曲江春望

曲江春望

唐 盧綸

菖蒲翻葉柳交枝

菖蒲は葉を翻えし 柳は枝を交うまじ

暗上蓮舟鳥不知

暗に蓮舟れんしゆうに上り 鳥知らず

更到汀花最深處

更に汀花ていかの最も深き処ところに到れば

玉樓金殿影參差

玉樓 金殿 影 參差しんしたり

【語釈】

○曲江…長安の東南にある池。○暗…ひそかに。○蓮舟…蓮の実を採るための舟。○汀花…なぎさに咲く花。○玉樓…玉で飾った楼閣。楼閣の美称。○金殿…金で飾った宮殿。宮殿の美称。○參差…不揃いなさま。連なっているさま。

★ 山店

山店

唐 盧綸

登登山路何時盡
登々たる山路 何の時にか尽く
決決溪泉到處聞
決々たる溪泉 到る処に聞ゆ
風動葉聲山犬吠
風は葉声を動かして 山犬吠ゆ
一家松火隔秋雲
一家の松火 秋雲を隔つ

【語釈】

○山店：山中の店。○登登…のぼるさま。○決決…水の流れるさま。さらさら。○松火…
照服用のたいまつ。

★ 城東早春

城東早春

唐 楊巨源

詩家清景在新春
詩家の清景 新春に在り
柳嫩鶯黄色未勻
柳嫩にして 鶯黄色 未だ勻わず
若待上林花似錦
若し 上林花の 錦に似たるを待たば
出門皆是看花人
門を出ずるは 皆是れ 花を見る人

【語釈】

○清景：清新な風景。○嫩：わかく柔らか。○鶯黄色：鶯の雛の黄色、柳の新芽の色に比
したものの。○上林：漢の武帝が築いた宮殿、転じて天子の御苑をいう。
(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★逢鄭三遊山

鄭三ていさんの山に遊ぶに逢う

唐 盧仝

相逢之處花茸茸

相逢あいあうの処 花茸じょうじょう々

石壁攢峰千萬重

石壁 攢峰さんぼう 千萬重せんまんじゅう

他日期君何處好

他日 君を期すに 何れの処か好からん

寒流石上一株松

寒流 石上 一株いっしゆの松

【語釈】

○鄭三：不祥。○茸茸：草（花）が盛んに繁っているさま。○攢峰：集まった峰。○千萬重：数多く重なりあっているさま。○期：逢うことを期待する。

★同張籍曲江春遊寄白舍人

張籍ちやうせきと同一どういに曲江に春遊し白舍人に寄す

唐 韓愈

漠漠輕陰晚自開

漠漠ぼくぼくたる輕陰けいいん 晚おのずかに自ら開く

青天白日映樓臺

青天 白日 樓台に映ず

曲江水滿花千樹

曲江に水は満ち 花千樹

有底忙時不肯來

底の忙時 肯えて來らざる有り

【語釈】

○張籍：唐吳郡の人。字は文昌。 德宗貞元十五年の進士。累遷して水部員外郎となる。
○白居易：白居易。○曲江：長安の南西にある池。○漠漠：一面に続いているさま。○輕陰：薄い雲。○底：草稿（枢密院での用語）。○忙時：忙しい時。

★隄上行

隄上行

唐 劉禹錫

酒旗相望大隄頭

酒旗相望む 大隄の頭

堤下連檣堤上樓

堤下の連檣 堤上の楼

日暮行人爭渡急

日暮れて行人 渡を争うこと急なり

槳聲鳴軋滿中流

槳聲鳴軋 中流に満つ

【語釈】

○隄上行：樂府題、船着き場を詠った曲。○酒旗：酒屋の旗。○相望：あちこちに見られる。○連檣：帆柱が連なっているさま。○行人：旅人。○槳聲：舵の音。○鳴軋：ぎしぎしという音を立てる。

(参考文献) 『中国名詩選』

★月望洞庭

月に洞庭を望む

唐 劉禹錫

湖光秋月兩相和

湖光 秋月 両つながら相和す

潭面無風鏡未磨

潭面 風無けれども 鏡 未だ磨かず

遙望洞庭山水翠

遙かに望む 洞庭 山水の翠なるを

白銀盤裏一青螺

白銀盤裏の一青螺

【語釈】

○洞庭：洞庭湖（湖南省北部にある巨大な湖）にある君山。○潭面：淵の水面。○鏡未磨：細かい波が立っている。○白銀盤：銀の皿。○青螺：青い田螺。

★ 自朗州召至京戲贈看花諸君子

唐 劉禹錫

朗州ろうしゅうよ自り召されて京に至り 戲たわむれに花を看る諸君子に贈る

紫陌紅塵拂面來 紫陌紅塵面を払って來る

無人不道看花回 人の花を看て回ると道わざるは無し

玄都觀裏桃千樹 玄都げんとかんり觀裏桃千樹

盡是劉郎去後栽 尽たうたうく是れ劉郎去りて後栽えたり

【語釈】

○朗州：湖南省常德市。○自：「より」と読み、「くから」と訳す。時間・場所などの起点を示す。○紫陌：都大路。○紅塵：にぎやかな町の道路に舞い上がる土ぼこり。○払面來：顔に当たって飛んで來る。○玄都觀：長安にあった道教の寺院。○劉郎：劉さん。劉禹錫自身をいう。

（参考文献） 『唐詩選』

★ 與賈島閑遊

賈島と閑遊かんゆうす

唐 張籍

水北原南草色新 水北すいほく原南げんなん草色新たなり

雪消風暖不生塵 雪消え風暖かにして塵を生ぜず

城中車馬應無數 城中まちの車馬ま応に無數なるべきも

能解閑行有幾人 能よく閑行かんこうを解するは幾人か有る

【語釈】

○賈島：中唐の詩人、推敲で有名。○閑遊：のんびり遊ぶ。○水北：川の北。○原南：原野の南。○能：～出来る。○閑行：心閑に歩く。

（参考文献） 『和漢名詞選類評釈』

★隄上行

隄上行

唐

劉禹錫

江南江北望煙波

江南江北 煙波を望む

入夜行人相應歌

夜に入りて 行人 相應じて歌う

桃葉傳情竹枝怨

桃葉は情を伝え 竹枝は怨む

水流無限月明多

水流 限り無く 月明多し

【語釈】

○隄上行：樂府題、船着き場を詠った曲。○煙波：水面のもや。○行人：旅人。

★上香爐峰

香爐峰に上る

唐

白居易

倚石攀籬歇病身

石に倚り籬を攀じ 病身を歇ましむ

青筇竹仗白紗巾

青筇の竹仗 白紗の中

他時畫出廬山障

他時 廬山の障を 画き出ださば

便是香爐峰上人

便是是れ 香爐峰上の人

【語釈】

○香爐峰：廬山の一つの峰。○青筇：竹の一種。○白紗：白い薄絹。○巾：ハンカチ。○他時：後日。○廬山：江西省九江市南部にある名山。○障：ついたて。○是：英語の be 動詞にあたり、「コレ」と訓読する。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 香山避暑

香山避暑

唐 白居易

紗中草履竹疎衣

紗中 草履 竹疎衣

晚下香山蹋翠微

晚に香山を下りて 翠微を蹋む

一路涼風十八里

一路 涼風 十八里

臥乘籃輿睡中歸

臥して 籃輿に乗じて 睡中に帰る

【語釈】

○香山：香山寺、洛陽の寺の名。○紗中：薄絹の頭巾。○竹疎衣：竹の繊維を織って作った衣。晚下：日暮れ。翠微：山の八合目。籃輿：竹を編んで作った籠。

（参考文献）『新釈漢文大系 白氏文集十一』『和漢名詞選類評釈』

★ 和裴相公傍水閑行

裴相公の傍水閑行に和す

唐 白居易

行尋春水坐看山

行きて 春水を尋ねて 坐して山を看

早出中書晚未還

早に中書を出て 晩れに未だ還らず

為報野僧巖客道

為に報ず 野僧 巖客の道

偷閑氣味勝長閑

閑を偷しむ気味は 長閑なるに勝れりと

【語釈】

○裴相公：裴度。河東聞喜（山西省）の人。中書侍郎、同中書門下平章事（宰相）となった。節度使を抑圧し、宦官に対しても強硬策をとり、憲宗、穆宗、敬宗、文宗の四朝にわたって活躍した。○中書：中書省。○野僧：山野を歩く僧。○巖客：木犀のこと。○偷閑：忙中に閑暇をとること。○気味：意趣あるいは情調。

（参考文献）『新釈漢文大系 白氏文集 九』

★暮江吟

暮江吟

唐 白居易

一道残阳铺水中 一道の残陽 水中に鋪き
半江瑟瑟半江紅 半江は瑟瑟 半江は紅なり
可憐九月初三夜 憐むべし 九月初三の夜
露似真珠月似弓 露は真珠に似 月は弓に似たり

【語釈】

○一道…一筋。○残陽…夕陽。○瑟瑟…さびしい音や色の形容。ここでは、水の碧く清んださま。○可憐…深い感動を表す言葉。ああ。○初三夜…月の三日目。

(参考文献) 『中国名詩選』 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★三月晦日題慈恩寺

三月晦日慈恩寺に題す

唐 白居易

慈恩春色今朝盡 慈恩の春色 今朝 尽き
盡日裴回倚寺門 尽日 裴回し 寺門に倚る
惆悵春歸留不得 惆悵す 春 歸りて 留め得ざるを
紫藤花下漸黃昏 紫藤花下 漸く 黃昏

【語釈】

○晦日…三十日。○慈恩寺…西安市南東郊外にある仏教寺院であり、三蔵法師玄奘ゆかりの寺。○春色…春の気配。○惆悵…嘆き悲しむ。○春歸…春が過ぎ去る。○紫藤花…紫色の藤の花。○漸…だんだんと。○黃昏…たそがれ。

(参考文献) 『漢詩大系』 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 題水月臺

水月台に題す

唐 李涉

平流白日無人愛

平流 白日 人の愛する無く

橋上閑行若箇知

橋上 閑行すれば 箇 若か知る

水似晴天天似水

水は晴天に似 天は水に似たり

兩重星點碧琉璃

兩重 星點 碧琉璃

【語釈】

○水月臺：不祥。○平流：閑かな水流。○閑行：閑かに歩く。○若箇：何処。○兩重：重なりあう。○星點：点々とした星。○碧琉璃：瑠璃のような緑色で透明なさま。

★ 題侯仙亭

侯仙亭に題す

唐 沈亞之

新創仙亭覆石壇

新たに創く仙亭 石壇を覆す

雕梁峻宇入雲端

雕梁 峻宇 雲端に入る

嶺北嘯猿高枕聽

嶺北の嘯猿 枕を高くして聴き

湖南山色捲簾看

湖南の山色 簾を捲いて看る

【語釈】

○侯仙亭：不祥。○新創：新たに作る。○石壇：石で出来た壇。○雕梁：彫刻が施された梁。○峻宇：広大な家。○嘯猿：猿の鳴き声。○山色：山の景色。

★ 雨霽登北岸

雨霽れて北岸に登る

唐 盧殷

稻黄撲撲黍油油

稻黄 撲々 黍油々

野樹連山澗自流

野樹 山に連つて澗 自ら流る

憶得年時馮翊部

憶い得たり 年時 馮翊部

謝郎相引上樓頭

謝郎 相引いて 樓頭に上るを

【語釈】

○稻黄：黄色く実った稻。○撲撲：打ち当たるさま。○油油：伸びて美しいさま。○澗：溪水。○年時：年月。昔年。○馮翊：地名。○謝郎：謝さん。不祥。

★ 同諸隱者夜登四明山

諸隱者と同一夜 四明山に登る

唐 施肩吾

半夜尋幽上四明

半夜 幽を尋ね 四明に上る

手攀松桂觸雲行

手は松桂を攀じ 雲に触れて行く

相呼已到無人境

相呼べば 已に到る 無人の境

何處玉簫吹一聲

何れの処の玉簫 吹くこと一声

【語釈】

○四明山：浙江省寧波市の四明山。○半夜：真夜中。○四明：四明山○幽：深い趣き。○玉簫：玉で作った笛。笛の美称。

★ 天津橋望春

天津橋望春

唐 雍陶

津橋春水浸紅霞

津橋の春水 紅霞を浸し

煙柳風絲拂岸斜

煙柳 風糸 岸を払って斜めなり

翠輦不來金殿閉

翠輦 来らず 金殿閉ざす

宮鶯銜出上陽花

宮鶯銜えて出ず 上陽花

【語釈】

○天津橋：洛陽の西南にある橋。○津橋：天津橋。○紅霞：夕焼け。紅色の霞。○煙柳：靄や霞で煙った柳の林。○風絲：そよかぜ。○翠輦：天子の乗り物。○金殿：宮殿。○宮鶯：宮殿に住むウグイス。○上陽宮（洛陽の宮殿の名）の花木、美人にたとえる。

★ 秋塘曉望

秋塘曉望

唐 杜牧（吳商浩）

鐘盡疎桐散宿鴉

鐘 尽きて 疎桐 宿鴉散ず

故山煙樹隔天涯

故山の煙樹 天涯を隔つ

西風一夜秋塘曉

西風 一夜 秋塘の暁

零落幾多紅藕花

零落す 幾多の紅藕花

【語釈】

○秋塘：秋の堤。○宿鴉：ねぐらの烏。○故山：故郷の野山。○煙樹：靄にかすんでいる樹。○西風：秋風。○零落：草木が枯れ落ちること。○幾多：たくさん。いかほど。○紅藕花：蓮の花。

★ 江南春

江南の春

唐 杜牧

千里鶯啼綠映紅

千里鶯啼いて緑紅に映ず

水村山郭酒旗風

水村山郭 酒旗の風

南朝四百八十寺

南朝 四百八十寺
しひやくはっしんじ

多少樓臺煙雨中

多少の樓台 煙雨の中

【語釈】

○江南：揚子江下流の江南地方。○水村：水辺の村。○山郭：山間の村。○南朝：南北朝時代の宋、齊、梁、陳、吳・東晋の六朝。○煙雨：こぬか雨

(参考文献)

『漢詩鑑賞辞典』 『漢詩大系』

★ 山行

山行

唐 杜牧

遠上寒山石徑斜

遠く寒山に上れば 石徑 斜めなり

白雲生處有人家

白雲 生ずる処 人家有り

停車坐愛楓林晚

車を停めて 坐に愛す 楓林の晩

霜葉紅於二月花

霜葉は 二月の花よりも 紅なり

【語釈】

○山行：山歩き。○寒山：秋から冬にかけての、さむざむとした山。○石徑：石の多い小道。○楓林：カエデの林。紅葉林。○霜葉：霜にうたれて紅葉した葉。○於：「A」於「B」の形で「AはBより(も)く(なり)」と読み、「AはBよりもくだ」と○二月花：陰曆二月。桃の花を指す。

(参考文献)

『漢詩鑑賞辞典』 『漢詩大系』

★ 三十六灣

三十六灣

唐 許渾

縹緲臨風思美人

縹緲ひょうびょうとして風に臨み美人を思う

荻花楓葉帶離聲

荻花てきか 楓葉 離聲を帯ぶ

夜深吹笛移船去

夜深くして笛を吹き 船を移し去れば

三十六灣秋月明

三十六灣 秋月明らかなり

【語釈】

○三十六灣：自注があつて、この場合湖南省岳陽市にある湾。○縹緲：遠くかすかなさま。○美人：立派な人。○荻花：荻の花。○離聲：離別の声音。○去：行く。

★ 雲開見華山

雲開き華山を見る

唐 李頻

夹道人家水竹間

道みちを夹さしはさみて人家 水竹閑しずかなり

馬頭山色畫應難

馬頭の山色 画くこと 応まさに難かるべし

天公故自開雲幕

天公 故ことごとに 自おのずから 雲幕うんぼくを開き

乞與蓮峰仔細看

蓮峰れんほうを乞きつ与つよして仔細しじゆに看せしむ

【語釈】

○華山：陝西省華陰市にある山、五嶽の一つ。○馬頭山：崑山にある山。○天公：天帝。○乞與：与える。○蓮峰：華山の峰の一つ。

★松江早春

松江早春

唐 皮日休

松陵清淨雪消初

松陵 清淨にして 雪消ゆるの初

見底新安恐未如

見底 新安 恐 未だ如かず

穩凭船舷無一事

穩かに 船舷に凭り 一事無く

分明數得鱸殘魚

分明に 數え得たり 鱸殘魚

【語釈】

○松江：上海市内を流れる川で蘇州河とも呼ばれる。○見底：水の清いさま。○新安：浙江省杭州市。○如：行く。○船舷：ふなべり。○分明：はっきりと。○鱸殘魚：しらうお。

★晚渡

晩に渡る

唐 陸龜蒙

半陂風雨半陂晴

半陂は風雨 半陂は晴

漁曲飄秋野調清

漁曲 秋に飄りて 野調清し

各漾蓮船逗村去

各々 蓮船を漾して 逗村に去り

笠簷衰袂有殘聲

笠簷 衰袂 殘聲に有り

【語釈】

○半陂：波の周期の半分。○漁曲：獵師の歌う舟歌。○野調：村野の曲調。○蓮船：蓮の実を採る船。○漾：うかべる。○逗村：宿の村。○笠簷：笠のひさし。○衰袂：古く衰えた袖。

★ 九華樓晴望

九華樓晴望

唐 張喬

一夜江潭風雨後

一夜江潭風雨の後

九華晴望倚天秋

九華晴望天に倚る秋

重來此地知何日

重來此地何れの日か知らん

欲別殷勤更上樓

別れんと欲して殷勤に更に樓に上る

【語釈】

○九華樓…不祥。○江潭…江水の深い処。○九華…九華樓のこと。○重來…重ねてくる。

★ 長溪秋望

長溪秋望

唐 唐彦謙

柳短莎長溪水流

柳は短く 莎は長く 溪水流る

雨微煙暝立溪頭

雨は微かに 煙は暝く 溪頭に立つ

寒鴉閃閃前山去

寒鴉は閃々として 前山に去り

杜曲黃昏獨自愁

杜曲は黃昏に 独り 自ら愁う

【語釈】

○秋望…秋の眺め。○暝…暗い。○閃閃…動いてひらめくさま。○杜曲…西安の東南の地名。

★野塘

野塘やじょう

唐 韓偓

侵曉乘涼偶獨來
 不因魚躍見萍開
 卷荷忽被微風觸
 瀉下清香露一杯

曉おを侵かし涼じょうに乗じて偶たまたま、独り來る
 魚の躍るに因よらずして萍ひょうの開くを見る
 卷荷けんか忽ち微風に触れられ
 瀉そぎ下す清香の露一杯

【語釈】

○野塘：野原の中の池。侵曉：明け方。○乘涼：納涼する。乘は便乗の乘。○萍：浮き草。○卷荷：巻いている蓮の葉。

(参考文献) 『三体詩』

★溪岸秋思

溪岸秋思

唐 杜荀鶴

桑柘窮頭三四家
 挂罾垂釣是生涯
 秋風忽起溪灘白
 零落岸邊蘆荻花

桑柘窮頭 三四家
 罾そうを掛け釣ちようを垂るる 是れ生涯
 秋風忽ち起って溪灘白し
 零落す 岸辺の蘆荻花

【語釈】

○桑柘：桑と柘の木。農作業養蚕のことを指す。○窮頭：窮まった人達的首領。○罾：魚を捕るよつであみ。○垂釣：釣り糸を垂れる。○溪灘：溪の早瀬。○零落：しぼんで落ちる。○蘆荻花：蘆と荻の花。

★ 秋霽

秋霽しゅうせい

唐 崔道融

雨霽長空蕩滌清
雨霽はれて 長空 蕩滌とうじょうされて清し
遠山初出未知名
遠山 初めて出いで 未だ名を知らず
夜來江上如鉤月
夜來 江上 鉤こうの如き月
時有驚魚擲浪聲
時に 驚魚の浪に擲おどる声有り

【語釈】

○長空…大空。○蕩滌…洗い清める。○夜來…夜になってから。○鉤…釣り針。○擲…おどる。

★ 竹枝詞

竹枝詞ちくしし

唐 孫光憲

門前春水白蘋花
門前の春水 白蘋はくひんの花
岸上無人小艇斜
岸上 人無く 小艇 斜なり
商女經過江欲暮
商女 經過し 江 暮んと欲す
散拋殘食飼神鴉
殘食さんぼうを散拋さんして 神鴉しんあを飼う

【語釈】

○竹枝詞…劉禹錫が左遷されていたときに土地の民謡をもとに作った詩の形態、男女の情愛や土地の風俗を詠う。○白蘋…白い浮き草。○商女…妓女。○散拋…ばらまく。○神鴉…鳥のこと。

★ 灞上

灞上はしじょう

唐 乾干著

鳴鞭晚日禁城東

鞭を鳴す 晚日 禁城の東

渭水晴煙灞岸風

渭水の晴煙 灞岸の風

都傍柳陰回首望

都て 柳陰に傍いて 首を回らして望めば

春天樓閣五雲中

春天 樓閣 五雲の中

【語釈】

○灞上：西安の東南にある丘。○禁城：天子の宮殿、長安。○渭水：関中を東流し黄河に繋がる川。○灞岸：灞上を流れる川の岸。○五雲：五色の雲。

★ 馬上作

馬上の作

唐 僧貫休

柳岸花堤夕照紅

柳岸の花堤 夕照 紅なり

風清襟袖鬢瓏瓏

風清くして 襟袖 鬢は瓏瓏

行人莫訝頻迴首

行人 訝る莫かれ 頻りに首を迴らすを

家在凝嵐一點中

家は 凝嵐 一点の中に在り

【語釈】

○襟袖：えりとそで。○鬢：馬を制御する手綱。○瓏瓏：明潔のさま。○行人：旅人。

★ 碧瀾堂

碧瀾堂 へきらんどう

宋 陳堯佐

苕溪清淺雪溪斜

苕溪 ちようけい 清淺にして 雪溪斜めなり

碧玉光寒照萬家

碧玉 光寒く 万家を照らす

誰向月明中夜聽

誰か 月明に向つて 中夜に聴く

洞庭漁笛隔蘆花

洞庭の漁笛 蘆花を隔つ へだ

【語釈】

○碧瀾堂：浙江省湖州市にある堂の名。○苕溪：浙江省天目山近くの溪。○雪溪：浙江省湖州市を流れる川の名。○碧玉：ここでは月のこと。○中夜：半夜。真夜中。○洞庭：洞庭湖、湖南省北部にある大きな湖。

★ 題文潞公曲水閣

文潞公の曲水閣に題す ぶんろこう きよくすいかく

宋 賈昌朝

畫船載酒及芳辰

画船 酒を載せて 芳辰に及ぶ ほうしん

丞相園林溟水濱

丞相の園林 溟水の浜

虎節麟符拋不得

虎節 麟符 抛ちて得ず

却將清景付閑人

却つて 清景を将つて 閑人に付す かんじん

【語釈】

○文潞公：不祥。○曲水閣：不祥。○畫船：彩られた船。○芳辰：美しい春の時候。○溟水：河南省の川。○虎節麟符：共に割り符。○閑人：閑かに暮らす人。

★ 出鴈蕩回望常雲峰

鴈蕩を出で常雲峰を回望す

宋 趙抃

遊遍名山未肯休
名山を遊遍して未だ肯えて休まず
征車已發尚回眸
征車已に発して尚お眸を回らす
高峯亦似多情思
高峯亦た情思の多きに似て
百里依然一探頭
百里依然一たび探頭す

【語釈】

○鴈蕩：浙江省温州市にある山の名。○常雲峰：不祥。○遊遍：遍くあそぶ。○征車：旅人を乗せる車。○情思：思い。○依然：前のまま。○探頭：頭を出す。

★ 豊樂亭遊春

豊樂亭に春を遊ぶ

宋 歐陽修

緑樹交加山鳥啼
緑樹 交加して 山鳥 啼き
晴風蕩漾落花飛
晴風 蕩漾として 落花 飛ぶ
鳥歌花舞太守醉
鳥 歌い 花 舞いて 太守 酔う
明日酒醒春已歸
明日 酒醒むれば 春 已に 帰らん

【語釈】

○豊樂亭：安徽省の滁州に歐陽脩が作ったあずまや。○交加：枝と枝が交わる。○蕩漾：のどかにゆるぎ動く。○太守：歐陽脩自ら。○春歸：春が去る。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 豊樂亭遊春

豊樂亭に春を遊ぶ

宋 歐陽修

春雲淡淡日輝輝

春雲 淡淡 日輝輝

草惹行襟絮拂衣

草は行襟を惹き絮は衣を払う

行到亭西逢太守

行きて亭西に到り 太守に逢わば

籃輿酩酊插花歸

籃輿に 酩酊して 花を挿して 歸るならん

【語釈】

○豊樂亭…安徽省の滁州に歐陽脩が作ったあずまや。○淡淡…薄いさま。○輝輝…明るく輝くさま。○惹…ひっぱる。○絮…柳絮。○太守…刺史。○籃輿…竹製の籠。

★ 豊樂亭遊春

豊樂亭に春を遊ぶ

宋 歐陽修

紅樹青山日欲斜

紅樹 青山 日斜めならんと欲す

長郊草色綠無涯

長郊の草色 緑 涯り無し

遊人不管春將老

遊人は管せず 春將に老いんとするを

來往亭前踏落花

亭前に來往して 落花を踏む

【語釈】

○豊樂亭…安徽省の滁州に歐陽脩が作ったあずまや。○長郊…広々とした郊外。○無涯…果てが無い。○遊人…遊覧客。○不管…気に掛けない。○春將老…春が暮れようとしている。○將…「まさにくせんとす」と読み「今にもくしそうである」「すぐにくしよう」の意。○來往…行き來する。

(参考文献)

『漢詩鑑賞辞典』

★ 淮中晩泊犢頭

淮中犢頭に晩泊す

宋

蘇舜欽

春陰垂野草青青

春陰野に垂れ草青青

時有幽花一樹明

時に幽花の一樹に明なる有り

晩泊孤舟古祠下

晩泊の孤舟古祠の下

滿川風雨看潮生

滿川の風雨潮の生ずるを見る

【語釈】

○淮中：淮河の中。○犢頭：犢頭磯、淮河の中部の岸边にある渡し場の名前。○春陰：春の暗雲。○垂野：原野の上に低く垂れ込める。田野が暗雲によって覆われていることを形容する。○幽花：ひっそりと静かで辺鄙な場所の花。○明：明瞭。ここでは、花の色が鮮やかで、人目を奪うことをさす。○古祠：古い廟。○潮生：潮が満ちる。

(参考文献) 『中国名詩選』

★ 獨歩至洛濱

独歩して洛濱に至る

宋

司馬光

草軟波清沙徑微

草軟かく波清くして沙徑微なり

手攜箒竹著深衣

手に箒竹を携えて深衣を著す

白鷗不信忘機久

白鷗信ぜず機を忘ること久し

見我猶穿岸柳飛

我を見て猶お岸柳を穿ちて飛ぶ

【語釈】

○沙徑：砂を敷き詰めた小径。○箒竹：杖に適する竹の名。○深衣：士大夫の朝祭の次服。○岸柳：岸に植えてある柳。

★初晴

初晴

宋 王安石

一抹明霞暗淡紅
一抹の明霞 暗淡の紅
瓦溝已見雪花溶
瓦溝 已に見る 雪花の溶するを
前山未放曉寒散
前山 未だ 曉寒を放ち散ぜず
猶鎖白雲三兩峰
猶お鎖さす 白雲 三兩峰

【語釈】

○明霞：燦爛とした雲霞。○暗淡：暗くて淡い。○瓦溝：瓦屋根の雨水を集める溝。○雪花：雪。○三兩峰：二三の峰。

★鍾山晚歩

鍾山晚歩

宋 王安石

小雨晚風落棟花
小雨 晚風 棟花を落す
細紅如雪點平沙
細紅 雪の如く 平沙に点ず
槿籬竹屋江村路
槿籬 竹屋 江村の路
時見宜城賣酒家
時に見る 宜城 売酒の家

【語釈】

○鐘山：江蘇省南京市玄武区に位置する山。○棟花：おうちの花。○細紅：。○平沙：平らな砂浜。○槿籬：むくげの垣根。○江村：川辺の村。○宜城：湖北省襄陽市に位置する県級市（南京から見えるか疑問。別の地名？）。

★初晴

初晴

宋 王安石

幅巾慵整露蒼華
幅巾 整に慵うく 蒼華を露す
度隴深尋一徑斜
隴を度り 深尋すれば 一徑斜めなり
小雨初晴好天氣
小雨 初めて晴れ好天氣
晚花殘照野人家
晚花 殘照 野人の家

【語釈】

○幅巾…頭巾。○蒼華…白髪のある頭。○隴…丘。○深尋…遠くを尋ねる。○晚花…遅咲きの花。○殘照…日が沈んだあとの夕焼け。○野人…田舎の人。

★庚申正月遊齊安

庚申正月齊安に遊ぶ

宋 王安石

水南水北重重柳
水南 水北 重々の柳
山後山前處處梅
山後 山前 処々の梅
未即此身隨物化
未だには 即ち此の身 物化に随わず
年年長趁此時來
年年 長く 此の時の來るを趁う

【語釈】

○齊安…広東省江門市。○重重…重なり合うさま。○處處…所々にある。○物化…事物の変化。○趁…追い掛ける。

★ 壬戌正月再遊

壬戌正月再遊じんじゅうしげつさいゆう

宋 王安石

風暖柴荆處處開
雪乾沙淨水洄洄
意行却得前年路
看盡梅花看竹來

風暖くして 柴荆 処々に開く
雪乾き 沙淨く 水洄々
意行 却って得たり 前年の路
梅花を看尽し 竹を看て來る

【語釈】

○壬戌…干支の一つ。○柴荆…柴の戸。○洄洄…めぐりめぐる。○意行…意のままに行く。

★ 微雨登城

微雨城に登る

宋 劉敞

雨映寒空半有無
重樓間上倚城隅
淺深山色高低樹
一片江南水墨圖

雨は寒空に映じ 半ば有無
重樓 閑かに上りて 城隅に倚る
淺深の山色 高低の樹
一片 江南 水墨の図

【語釈】

○重樓…二重の樓閣。○城隅…城郭の隅。○江南…長江中下流の南岸地方。

★ 萬里橋……

万里橋……

宋 呂大防

萬里橋西萬里亭

ばんりきょうせい
万里橋西 万里の亭

錦江春漲與隄平

きんこう
錦江 春 漲 っ て 隄 と 平 か な り

拏舟直入修篁裏

ふねをひ
舟を拏き 直ちに入る 修篁の裏

坐聽風湍徹骨清

まゐり
坐ろに聴く風湍骨に徹して清し

【語釈】

○萬里橋：四川省成都市にある橋。○錦江：成都を流れる川。○修篁：長い竹。○坐：な
んとなく。○風湍：風の渦巻く音。

★ 遊春

遊春

宋 晏幾道

一年花事又成空

一年の花事 又 空と成る

擁鼻微吟半醉中

鼻を擁して 微吟す 半酔の中

夾道桃花新過雨

道を 夾む桃花 新たに過ぐ雨

馬蹄無處避殘紅

馬蹄 殘紅を避くに 処無し

【語釈】

○花事：春遊して花を見ること。○擁鼻：鼻を蔽う。○殘紅：地上に落ちている赤い花。

★次韻王忠玉遊虎丘

王忠玉の虎丘こきゅうに遊ぶあそぶに次韻す

宋 蘇軾

當年大白此相浮

當年 大白たいはく 此こゝに相浮あいうかぶ

老守娛賓得二丘

老守 賓ひんを娛あそびしみ二丘を得たり

白髮重來故人盡

白髮 重ねて来れば 故人 尽つき

空餘叢桂小山幽

空しく 叢桂そうけいを余して 小山 幽なり

【語釈】

○王忠玉：王瑜，字は忠玉，真定（河北省正定）の人、亳州知事となる。○遊虎：江蘇省蘇州市にある山。○當年：壯年期。○大白：大盃。○老守：蘇州の太守である王忠玉の伯父。○娛賓：客（私）をもてなすことを楽しみにする。○二丘：人名の丘と地名の丘。○白髮：白髪になった自分。○故人盡：王忠玉の伯父が死去した。○叢桂：叢がっている桂の木。

★金山夢中作

金山夢中の作

宋 蘇軾

江東賈客木綿裘

江東の賈客かかく 木綿きゆうの裘

會散金山月滿樓

会 散じて金山 月 楼に満つ

夜半潮來風又熟

夜半 潮うしお来たりて 風又た熟す

臥吹簫管到揚州

臥がして 簫管しょうかんを吹きて 揚州に到らん

【語釈】

○金山：江蘇省鎮江市の山。○江東：江蘇省南部。○賈客：商人。○木綿裘：綿入りの衣。○潮來風又熟：潮が満ち、順風となる。○簫管：管楽器。○揚州：江蘇省揚州市。

★望湖樓醉書

望湖樓の醉書すいしよ

宋 蘇軾

黒雲翻墨未遮山 黒雲墨を翻ひるがええして 未だ山を遮さえらず
白雨跳珠亂入船 白雨珠を跳おどせて 乱れて船に入る
卷地風來忽吹散 地を卷きたき 風來きたつて 忽たちまち吹散ず
望湖樓下水如天 望湖樓下ぼうこうろうか水 天の如し

【語釈】

○望湖樓：浙江省杭州市西湖このほとりにあった樓。○醉書：酒に酔った勢いで作った詩。○翻墨：墨をぶちまける。○白雨：夕立の白く見える雨滴。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』

★暴雨初晴樓上晚景

暴雨初めて晴る樓上の晚景

宋 蘇軾

秋後風光雨後山 秋後の風光 雨後の山
滿城流水碧潺潺 滿城の流水 碧せんせん潺々たり
煙雲好處無多子 煙雲 好き処 多子無く
及取昏鴉未到間 及取きゅうしゅす 昏鴉こんあ 未だ到らざるの間

【語釈】

○風光：景色。○潺潺：浅い水の流れるさま。さらさら。○煙雲：雲と霞。○多子：多くの卿大夫。多くの男子。○及取：取るに及ぶ。(昏鴉)を採り上げて論ずると。○昏鴉：夕暮れに飛ぶ烏。

★ 澄邁驛通潮閣

澄邁驛ちやうまいえきの通潮閣つうちやうかく

宋 蘇軾

餘生欲老海南村

余生老いと欲す海南の村

帝遣巫陽招我魂

帝ふよう巫陽をして我が魂を招かしむ

杳杳天低鶻沒處

杳々ようようとして天低れ鶻こつの没する処

青山一髮是中原

青山一髮いつぱつ是れ中原

【語釈】

○澄邁驛：海南島北部の宿場町。○餘生：残りの人生。○欲老：年老いていこう。帝：天帝。遣：くに、をさせる。○巫陽：『楚辭』「招魂」に出てくる巫女の名。杳杳：遙かなさま。○低：低くたれ込める。○鶻：はやぶさ。○青山一髮：青い山影が、一筋の線になつて。○是：英語の be 動詞に相当し、「コレ」と訓読する。○中原：中華の地。こゝでは、中国本土を指す。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』 『漢詩大系』

★ 望海樓晚景

望海樓の晚景

宋 蘇軾

橫風吹雨入樓斜

横風 雨を吹いて楼に入って斜なり

壯觀應須好句誇

壯觀そつかん 応まさに須すべらく好句にて誇るべし

雨過潮平江海碧

雨過ぎて潮平かにして 江海碧なり

電光時掣紫金蛇

電光 時に掣せいす紫金しきんの蛇だ

【語釈】

○望海樓：浙江省温州市にある楼。○応須：「まさにすべからくすべし」と読み「必ずしななければならない」「必ずしするはずである」の意。○電光：いなずま。○掣：引く張る。○紫金蛇：赤銅色の稲妻。

★ 題東林壁

東林の壁に題す

宋 蘇軾

横看成嶺側成峰

横より看れば嶺を成し 側よりすれば峰を成す

遠近高低總不同

遠近 高低 総て同じからず

不識廬山真面目

廬山の真面目を識らざるは

只緣身在此山中

只だ身の 此の山中に在るに縁る

【語釈】

○東林：東林寺、廬山（江西省九江市南部）のふもとに西林寺と東林寺があった。○題壁：壁に詩を書きつけること。○横看：横の方から眺めわたすと。○成嶺：連なった山になる。○側：そば。○成峰：鋭く聳える峰となる。○廬山：山の名、江西省九江市の南方にある。○真面目：本来の姿。

（参考文献）『漢詩大系』

★ 吳興

吳興

宋 林希

遠郭芙蕖拍岸平

郭を遶る 芙蕖 岸を拍ちて平かなり

花深蕩槳不聞聲

花深くして 槳を蕩かす声を聞かず

萬家笑語荷花裏

萬家の笑語 荷花の裏

知是人間極樂城

知る是れ 人間 極樂城

【語釈】

○吳興：浙江省湖州市。○郭：二重になった城壁の外側。○芙蕖：蓮の花。○槳：舟をこぐ櫂。○人間：人間世界。

★ 偶成

偶成

宋 程顥

雲淡風輕近午天
 雲淡く風軽く午天に近し
 望花隨柳過前川
 花を望み柳に随い前川を過ぐ
 旁人不識余心樂
 旁人は識らず余心の樂しみを
 將謂偷閑學少年
 將に謂わんとす閑を偷みて少年を學ぶと
 ★

【語釈】

○偶成…たまたま作った詩。○午天…ひる。正午。○旁人…傍らのひと。○余心…のびのびとした心。○偷閑…ひまをぬすむ。なまける。

★ 在當塗作

當塗に在りて作る

宋 沈括

豹堂春水綠泱泱
 豹堂の春水緑泱々たり
 謝市烟深柳線長
 謝市煙深くして柳線長し
 卷幔夕陽留不住
 幔を卷けば夕陽留まり住まず
 好風將雨過梅塘
 好風雨を將つて梅塘を過ぐ

【語釈】

○當塗…江蘇省揚州市九江。○豹堂…不祥。○泱泱…水の深く広いさま。○謝市…不祥。○柳線…柳の細い枝。○不住…絶えない。○梅塘…梅が植えてある隄。

★北郭

北郭

宋 文同

繞樹垂蘿蔭曲堤

樹を繞る 垂蘿 曲堤を蔭う

暖烟深處亂禽啼

暖煙 深き処 乱禽 啼く

何人來此共携酒

何人か 此に來て 共に酒を携えん

可惜拒霜花一谿

惜しむべし 拒霜花の一谿

【語釈】

○北郭：城壁の北側。○垂蘿：垂れ下がったかづら。○暖烟：春霞。○拒霜花：木芙蓉。

★納涼

納涼

宋 秦觀

携杖來追柳外涼

杖を携え 來りて追う 柳外の涼

畫橋南畔倚胡床

画橋の南畔 胡床に倚る

月明船笛參差起

月明に 船笛 參差として起り

風定池蓮自在香

風定まりて 池蓮 自在に香ばし

【語釈】

○画橋：色彩で彩られた橋。○胡床：背もたれがあり、不用のときはたたんでおく。○參差：入り乱れるさま。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 秋日

秋日

宋 秦觀

霜落邗溝積水清
 霜落ちて 邗溝 積水清し

寒星無數傍船明
 寒星 無數 船に傍いて明らかなり

菰蒲深處疑無地
 菰蒲 深き処 地無きかと疑うに

忽有人家笑語聲
 忽ち 人家 笑語の声有り

【語釈】

○邗溝：江南にあった運河。○積水：積もった水。○菰蒲：まこもとがま。
 (参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 泗州東城晚望

泗州東城の晚望

宋 秦觀

渺渺孤城白水環
 渺々たる 孤城 白水環る

舳艫人語夕霏間
 舳艫 人語 夕霏の間

林梢一抹青如畫
 林梢 一抹 青きこと 画の如し

應是淮流轉處山
 應に是れ 淮流 転ずる処の山なるべし

【語釈】

○泗州：江蘇省淮安市盱眙県。○晚望：夕景色。○渺渺：遠くかすかなさま。○白水：清
 い川。夕陽で白く光った川。○舳艫：船。○夕霏：夕暮れの霧と霞。○林梢：林のこず
 え。○應：「まさにべし」と読み、「おそらくにであろう」の意。○是：英語の be
 動詞にあたり、「コレ」と訓読する。○淮流：川の名、不祥。

(参考文献) 『宋詩選注』

★金山晚眺

金山晚眺

宋 秦觀

西津江口月初弦
 水氣昏昏上接天
 清渚白沙茫不辨
 只應燈火是漁船

西津の江口 月は初弦なり
 水氣 昏昏として 上りて天に接す
 清渚 白沙 茫として 弁せず
 只だ応に 灯火は是れ漁船なるべし

【語釈】

○金山：江蘇省鎮江市の西にある山。○西津：長江西岸。○初弦：三日月。○水氣：水面の霧。○昏昏：薄暗いさま。○辨：見分ける。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつ」とであるに違いない」の意。

(参考文献) 『宋詩選注』

★湖上絶句

湖上絶句

宋 張耒

風蕩雲容不成雪
 柳偷春色故衝寒
 湖邊艇子衝烟去
 天畔青山隔雨看

風は雲容を蕩して 雪を成さず
 柳は春色を偷みて 故に寒を衝く
 湖辺の艇子 煙を衝いて去り
 天畔の青山 雨を隔てて看る

【語釈】

○雲容：雲の有様。○春色：春景色。○艇子：船。○煙：霧、霞。○天畔：天のあたり。
 ○青山：青々した山。

★ 鄂州南樓書事

鄂州南樓にて事を書す

宋 黄庭堅

四顧山光接水光
凭欄十里芰荷香
清風明月無人管
併作南樓一味涼

四顧すれば 山光 水光に接す
欄に凭れば 十里 芰荷 香し
清風 明月 人の管する無く
併せて南樓 一味の涼を作す

【語釈】

○鄂州：湖北省武漢市の長江以南の地区。○書事：事柄の感慨を書きしるす。○山光：山の景色。○水光：水面の輝き。○闌：手すり。○凭：もたれる。○芰荷：菱と蓮。○管：司る、支配する。

(参考文献) 『漢詩大系18』

★ 春日遊湖上

春日湖上に遊ぶ

宋 徐俯

雙飛燕子幾時回
夾岸桃花蘸水開
春雨斷橋人不渡
小舟撐出柳蔭來

双飛の燕子 幾時か回
岸を夾む桃花 水を蘸して開く
春雨 断橋 人渡らず
小舟 撐て柳蔭を出て来る

【語釈】

○雙飛：つがいで飛ぶ。○蘸：ある物を水につける。○斷橋：壊れた橋。○撐：棹で船を進める。

★ 到飛泉

飛泉に到る

宋

曹勛

曉入飛泉帶月華
山如相識路如家
百蟲不響露初下
開盡一川蕎麥花

曉に飛泉に入り 月華を帶ぶ
山は相識の如く 路は家の如し
百虫響かず 露初めて下る
開き尽す 一川 蕎麥の花

【語釈】

○月華：月の光。○相識：顔なじみの友人。○蕎麥：そば。

★ 游梅坡席上雜酬

梅坡に遊び 席上雜酬す

宋

李彌遜

風約疏梅蘸石泉
山涵弱柳借廚烟
竹籬茅屋傾樽酒
坐看銀鈎上晚川

風は疏梅を約し 石泉を蘸す
山は弱柳を涵し 廚煙を借る
竹籬茅屋樽酒を傾く
坐そぞろに看る 銀鈎ぎんこうの晚川ばんせんに上るを

【語釈】

○梅坡：梅の植えてある堤。○雜酬：雜談。○約：招き結ぶ。○蘸：物を水につける。○涵：物を水につける。○廚烟：厨房から出る煙。○竹籬：竹垣。○茅屋：茅吹きの家。○銀鈎：釣り針のような月。

★ 城上晩思

城上の晩思

宋 陳與義

獨憑危堞望蒼梧
落日君山如畫圖
無數柳花飛滿岸
晚風吹過洞庭湖

独り 危堞に憑り 蒼梧を望む
落日 君山 画図の如し
無数の柳花 岸に満ちて飛び
晚風 吹き過ぐ 洞庭湖

【語釈】

○危堞：高い危険な城。○蒼梧：湖南省永州市九嶷山。○君山：洞庭湖中にある山。○柳花：柳絮。○洞庭湖：湖南省北東部にある淡水湖。

★ 題柳溪別墅

柳溪の別墅に題す

宋 姚孝錫

雨霽風和不動塵
柳邊携酒賞晴春
頻來溪鳥渾相識
度水穿花不避人

雨 霽れ 風 和みて 塵を動かさず
柳辺 酒を携えて 晴春を賞す
頻に 来る 溪鳥 渾て 相識
水を度り 花を穿ち 人を避けず

【語釈】

○柳溪：柳の茂る溪。○別墅：別荘。○相識：相識った仲間。

★ 石壁寺山房即事

石壁寺の山房即事

宋

沈與求

望斷南崗遠水通

望斷す南崗遠水通す

客檣來往酒旗風

客檣來往す酒旗の風

畫橋依約垂楊外

畫橋依約たり垂楊の外

映帶殘霞一抹紅

映帶す殘霞一抹の紅

【語釈】

○石壁寺：浙江省衢州市石壁寺。○山房：寺院の部屋。○即事：事に触れて感じたことを、そのまま詠った詩。○望斷：遠くを眺める。○南崗：南の丘。○客檣：客を乗せる帆船。○酒旗：酒屋の旗。○畫橋：彩られた橋。○依約：かすかなさま。○映帶：景色のいどろりが互いにつりあう。○殘霞：日が沈んだ後の夕映え。

郎官湖春日

郎官湖の春日

宋

李 祁

兩山收雨暗平沙

兩山雨を収めて平沙に暗し

遮斷溪梅隔水花

溪梅を遮斷し水を隔つる花

留得烟林作圖畫

煙林を留め得て図画と作す

依稀松磴有人家

依稀たる松磴人家有り

【語釈】

○郎官湖：湖北省漢陽にある湖。○平沙：平らな砂浜。○煙林：靄のかかった林。○依稀：ぼんやりしている。○松磴：松のある坂道。

★萬松嶺

万松嶺

宋 李質

蒼蒼森列萬株松

蒼々たる森列 万株の松

終日無風亦自風

終日 風無く 亦た 自ら風あり

白鶴來時清露下

白鶴 来たる時 清露下る

月明天籟滿秋空

月明 天籟 秋空に満つ

【語釈】

○萬松嶺…浙江省杭州市にある峰。○蒼蒼…草樹などが青く茂るさま。○天籟…風などの天籟の音。

★題齊山翠微亭

齊山の翠微亭に題す

宋 岳飛

經年塵土滿征衣

年を経て 塵土 征衣に満つ

得得尋芳上翠微

得々 芳を尋ねて 翠微に上る

好山好水看不足

好山 好水 見て足らず

馬蹄催趁月明歸

馬蹄 催して 月明を趁いて 歸る

【語釈】

○齊山…安徽省貴池の南にある山。○翠微亭…不祥。○征衣…旅の衣。○得得…わざわざ。○翠微…山の八合目付近。

★ 出山道中口占

山を出ず道中口占

宋 朱熹

川原紅紫一時新
川原紅紫一時に新たなり
暮雨朝雲更可人
暮雨朝雲更に人に可なり
書冊埋頭何日了
書冊頭を埋めて何れの日にか了せん
不如拋却去尋春
如しかず 拋却ほうきやくして去りて春を尋ねんには

【語釈】

○口占：紙に書かずに作った即興の詩。○川原：原野。○紅紫：いろとりどりの花。○了
…終える。全うする。○拋却：拋つ、却は動作の完成、完了を示す助字。

★ 水口行舟

水口行舟

宋 朱熹

昨夜扁舟雨一簑
昨夜さくや 扁舟へんしゅう 雨一いつさ簑
滿江風浪夜如何
滿江の風浪 夜如何いかに
今朝試捲孤篷看
今朝 試みに孤篷を捲いて看る
依舊青山綠樹多
旧きゅうに依り青山 綠樹多し

【語釈】

○行舟：船旅。○扁舟：小舟。○孤篷：一つだけある船の篷窓。○依舊：以前のまま。○
青山：青々とした山。

★ 入瑞巖道間得四絶句

瑞巖ずいがんに入り道間どうかんに四絶句を得たり

宋 朱熹

清溪流過碧山頭

清溪 流れ過ぐ 碧山へびざんの頭ほどり

空水澄鮮一色秋

空水くうすい 澄鮮ちようせん 一色の秋

隔斷紅塵三十里

隔斷かくだんす 紅塵こうじん 三十里

白雲黃葉共悠悠

白雲 黃葉かうよう 共に悠悠ゆうゆうたり

【語釈】

○瑞巖：位置不祥。○空水：天と水。○澄鮮：清新。○隔斷：間を隔てる。斷は意味を強める助字。○紅塵：車馬の上げる塵。○悠悠：他と関わりなくゆったりとしたさま。

★ 醉下祝融峰

醉下祝融峰

宋 朱熹

我來萬里駕長風

我來つて 万里 長風に駕す

絶壑層雲許盪胸

絶壑ぜつがくの層雲か 許く胸うしを盪かす

濁酒三杯豪氣發

濁酒 三杯 豪氣発し

朗吟飛下祝融峰

朗吟 飛下る 祝融峰しゆくゆうほう

【語釈】

○祝融峰：湖南省東部にある南岳・衡山の諸峰の最高峰。○駕：御する。操縦する。○長風：遠くから吹き渡ってくる風。○絶壑：深く険しい谷。○層雲：いくえにも重なった雲。○許：このように。

(参考文献)

『漢詩鑑賞辞典』

★ 晩歩

晩歩

宋 真山民

未暝先啼草際蛩

未だ暝なざるに先に啼く草際の蛩

石橋暗度稻花風

石橋暗に渡る稲花の風

歸鴉不帶殘陽去

歸鴉残陽を帯びて去らず

留得林梢一抹紅

留め得たり林梢一抹の紅

【語釈】

○暝：暗い。○歸鴉：ねぐらへ帰る鳥。○殘陽：夕陽。○林梢：林のこずえ。

★ 高景山夜歸

高景山より夜歸る

宋 范成大

伊軋籃輿草露間

伊軋籃輿草露の間

夜涼月暗走屣顏

夜涼しく月暗くして屣顔を走らす

忽逢陂水明如鏡

忽ち陂水の明かなること鏡の如きに逢う

照見沈沈倒景山

照見す沈々倒景の山

【語釈】

○高景山：不祥。○伊軋：船槳、櫂などの軋る音の形容。○籃輿：あじろの籠。○屣顏：山の高く険しい様。○陂水：堤の中の水。○照見：映し出す。○沈沈：草木の生い茂るさま。○倒景：逆さになって見える。

★横塘

横塘

宋 范成大

南浦春来绿一川

南浦なんぼ 春来たりて绿一川

石橋朱塔兩依然

石橋せききょう 朱塔しゅとう 両ふたつながら依然たり

年年送客横塘路

年々かく 客を送る横塘おうとうの路

細雨垂楊繫畫船

細雨すいよ 垂楊すいよう 画船を繫ぐ

【語釈】

○横塘：蘇州市中央のやや南寄りにある古い堤の名。○南浦：別れの港。（別れの港である）南の方のなぎさ。○一川：一面の原野、満川。○依然：もとのままである。○畫船：彩られた船。

（参考文献）『和漢名詩選類評釈』『宋詩選注』

★碧瓦

碧瓦

宋 范成大

碧瓦樓頭繡幙遮

碧瓦樓頭へきがろうとう 繡幙しゅうま 遮さる

赤欄橋外綠溪斜

赤欄橋外せきらんきょうがい 綠溪斜りくせきめなり

無風楊柳漫天絮

風無くして楊柳やうりゆう 漫天まんてんの絮じよ

不雨棠梨滿地花

雨ふらず棠梨どうり 滿地まんちの花

【語釈】

○碧瓦樓頭：青い瓦の楼のほとり。○繡幙：刺繍をしたとばり。○赤欄橋：赤い欄干の橋。○漫天：天にはびこる。○絮：柳絮。○棠梨：やまなし、からなし。

★ 晩歩

晩歩

宋 范成大

排門簾幕夜香飄

排門はいもん 簾幕れんばく 夜香ひるがえ 飄ええ

燈火人聲小市橋

燈火 人聲 小市の橋

滿縣月明春意好

滿縣まんけん 月明 春意好し

旗亭吹笛近元宵

旗亭きていの吹笛 元宵げんしやうに近し

【語釈】

○排門：門に到って拝謝する。○簾幕：すだれとまく。○滿縣：県内一杯。○旗亭：料理店、酒亭。○元宵：上元、正月十五日。この夜、火祭が行われた。

★ 胥口

胥口

宋 范成大

扁舟拍浪信西東

扁舟 浪を拍うち 西東に信まかす

何處孤帆萬里風

何れの処こはんの孤帆か 万里の風

一雨快晴雲放樹

一雨 快晴 雲 樹を放ち

兩山中斷水粘空

兩山 中斷し 水空くわうに粘ねんす

【語釈】

○胥口：不祥。○扁舟：小舟。○孤帆：一つの帆船。

★ 桐川郡圍梅極盛皆圍抱高木浙中無有

宋 范成大

桐川郡圍梅とうせんぐんぼ 極めて盛なり 皆圍抱かいいほうの高木 浙中せつちゅうに有る無し

家住丹楓白葦林

家は住すじゅう 丹楓たんふう 白葦はくいの林

横枝一笑萬黃金

横枝おうし 一笑よろ 万ず黃金

玉溪園裏逢千樹

玉溪園裏ぎょくけいえんり 千樹に逢い

還盡春風未足心

還り尽くしてかえ 春風 未足の心

【語釈】

○桐川郡圍：不祥。○皆圍抱：不祥。○浙中：不祥。○家住：家はくにある。○丹楓：紅葉した楓。○白葦：白いあし。○玉溪：溪の美称。○未足心：まだ満ち足りない心。

★ 夜歸

夜歸る

宋 范成大

竹輿伊軋走長街

竹輿ちくよ 伊軋いあつ 長街を走る

掠面風清醉夢迴

面を掠むかする風 清く 醉夢すいむかえ迴る

曲巷無聲門戸閉

曲巷きょくこう 声無く 門戸閉ず

一燈猶照酒壚開

一灯な 猶お照らす 酒壚しゅろの開くを

【語釈】

○竹輿：竹製のこし。○伊軋：○伊軋：船槳、櫂などの軋る音の形容、この場合、輿のきしみ。○曲巷：街の曲がりくねった道。○酒壚：酒を温める爐、酒屋。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 晩歩西園

晩に西園を歩す

宋 范成大

料峭輕寒結晚陰

料峭りょうしょうたる 輕寒 晚陰を結ぶ

飛花院落怨春深

飛花いんらく 院落 春の深きを怨む

吹開紅紫還吹落

紅紫を吹き開きて 還また吹き落とす

一種東風兩様心

一種の東風 兩様の心

【語釈】

○料峭：春風の肌触りの冷たいことの形容。○輕寒：薄ら寒さ。○晚陰：夕方に空が暗くなること。○院落：屋敷の中の中庭。○東風：春風。

★ 龍津橋

龍津橋りゅうしんきょう

宋 范成大

燕石扶欄玉作堆

燕石えんせき 欄らんを扶たすけ 玉堆ついでを作す

柳塘南北抱城迴

柳塘りゅうとう 南北城を抱かかいて迴めぐる

西山剩放龍津水

西山しよざん 剩放じょうほうす 龍津りゅうしんの水

留待官軍飲馬來

留めて官軍の馬みづかに飲のみい來たるを待まちつ

【語釈】

○龍津橋：不祥。○燕石：燕山から出る玉に似た石。○欄：欄干。○剩放：余りを放つ。○龍津：龍門（洛陽の東の地名）。○官軍：南宋の軍。

★ 拄笏亭晚望

拄笏亭の晚望

宋 范成大

林泉隨處有清涼

林泉 隨處に 清涼有り

山繞闌干客自忙

山は闌干を繞り 客 自ら忙し

溪雨不飛虹尚飲

溪雨 飛ばず 虹尚お飲す

亂蟬高柳滿斜陽

亂蟬 高柳 斜陽に滿つ

【語釈】

○拄笏亭…不祥。○林泉…山林と泉、隱棲の地を指す。○亂蟬…乱れ啼く蟬。

★ 泛西湖

西湖に泛ぶ

宋 楊萬里

西湖雖老爲人容

西湖 老いたりと 雖も 人の為に容す

不必花時十里紅

必ずしも 花時 十里の紅ならず

卷取郭熙真水墨

卷取す 郭熙 真水の墨

枯荷折葦小霜風

枯荷 折葦 小霜の風

【語釈】

○西湖…浙江省杭州の西にある風光明媚な湖。○郭熙…水墨画の名人。○枯荷…枯れた蓮。○折葦…折れたあし。

★ 泛西湖

西湖に泛ぶ

宋 楊萬里

曲曲都城繚翠微

曲々たる都城 翠微を繚り

鱗鱗湖浪動斜暉

鱗々たる湖浪 斜暉に動く

天寒日暮遊人少

天寒く日暮れて 遊人少なり

兩岸輕舟星散歸

兩岸の輕舟 星散じて 歸る

【語釈】

○曲曲：彎曲しているさま。○翠微：山のみどりの深いひっそりとした中腹のあたり。○鱗鱗：うろこのような波の波紋の形容。○斜暉：夕陽。○遊人：遊び楽しむ人。○

★ 晚望

晚望

宋 楊萬里

病身似怯暮來風

病身 怯に似たり 暮來の風

老眼還驚霽後虹

老眼 還た驚く 霽後の虹

落日偏明松表裏

落日 偏に明らかなり 松の表裏

好山分占水西東

好山 分占す 水の西東

【語釈】

○暮來：暮れ方からの。○霽後：雨が晴れた後の虹。○分占：分けて占める。

★ 早春新晴

早春新晴

宋 楊萬里

嫩水春來別樣光
嫩水 春來 別樣的 光
草芽綠甚却成黃
草芽 綠 甚 だしくして 却って 黄を成す
東風似與行人便
東風 行人の与に 便ずるに似て
吹盡寒雲放夕陽
寒雲を吹き尽くし 夕陽を放つ

【語釈】

○嫩水：春水。○春來：春になってから。○別樣：普通とは異なった。○東風：春風。○行人：旅人。○便：有利にする。

★ 晚登淨遠亭

晚に淨遠亭に登る

宋 楊萬里

簿書纔了晚衙催
簿書 纔に了らば 晚衙 催す
且上高亭眼暫開
且く 高亭に上らば 眼 暫く開く
野鴨成羣忽驚起
野鴨 群を成し 忽ち 驚起す
定知城背有船來
定めて知る 城背 船の來る有るを

【語釈】

○淨遠亭：江蘇省常州市にある亭。○簿書：財物の出納を記録した帳簿。○晚衙：夕方に勤務を終わって退出すること。○驚起：驚いて飛び立つ。○定知：きつとそうであるにちがいないと知る。○城背：街の裏側。

★ 題代度寺竹亭

代度寺の竹亭に題す

宋 楊萬里

行盡空房忽畫欄

行き尽くす 空房 忽ち画欄

竹光和月入亭寒

竹光 月に和し 亭に入りて寒し

壁間題字知誰句

壁間の題字 知んぬ誰の句ぞ

醉把殘燈子細看

酔て 殘燈を把りて 子細に看る

【語釈】

○代度寺：江西省吉安市にある寺。○空房：寂しい人のいない部屋。○畫欄：彩られた欄干。○題字：書き付けられている字。○殘燈：消え残りの灯火。

★ 晩歩

晩歩

宋 楊萬里

半匹輕煙束翠山

半匹の輕煙 翠山を束ぬ

一梳寒月印青天

一梳の寒月 青天に印す

生憎野燒無端甚

生憎 野燒 端無くも甚だし

直上高林杳靄邊

直ちに 高林に上る 杳靄の辺

【語釈】

○匹：約9m。○輕煙：薄い靄霞。○野燒：野火。○無端：おもいがけなく、ゆくりなく。○杳靄：暗い靄霞。

★ 尋涼鹽橋

塩橋に涼を尋ぬ

宋 楊萬里

燈火希疎夜向中
追涼只與熱相逢
意行行到新橋上
兩岸無人四面風

灯火希疎にして夜中に向う
涼を追いて只だ熱と相逢う
意行行きて到る新橋の上
兩岸人無く四面の風

【語釈】

○鹽橋：塩を積んだ船が停泊する橋。○希疎：稀少。○意行：心のままに、歩に任せて。

★ 過臨平蓮蕩

臨平の蓮蕩を過ぐ

宋 楊萬里

人家星散水中央
十里芹羹菰飯香
想得薰風端午後
荷花世界柳絲鄉

人家星散す 水の中央
十里芹羹菰飯香ばし
想得たり 薰風端午の後
荷花世界 柳糸の郷

【語釈】

○臨平：臨平山の側の湖の名。○蓮蕩：蓮池の堤。○星散：星のように散らばっていること。○芹羹：芹のあつもの。○菰飯：マコモの実が入った飯。○薰風：初夏の心地よい風。○端午：旧暦五月五日。端午の節句。○荷花：蓮の花。○柳絲：しだれ柳の枝。

(参考文献) 『漢詩大系16』

★ 登浄遠亭

浄遠亭に登る

宋 楊萬里

池氷受日未全開
池氷 日を受け 未だ 全くは開かず
旋旋波痕百皺來
旋々たる波痕 百皺來たる
野鴨被人驚得慣
野鴨 人に驚かされ 得慣し
作羣飛去却飛回
群を作し 飛び去り 却って飛び回る

【語釈】

○浄遠亭…不祥。○池氷…池に張った氷。○開…解ける。○旋旋…やや、ゆったりしたさま。○百皺…多くのさざ波。○得慣…慣れることができた。

★ 花時遍遊諸家園

花時 遍く諸家の園に遊ぶ

宋 陸游

爲愛名花抵死狂
愛するが為に 名花 死に抵して狂す
只愁風日損紅芳
只だ愁う 風日の 紅芳を損するを
綠章夜奏通明殿
綠章 夜 奏す 通明殿
乞借春陰護海棠
乞いて 春陰を借りて 海棠を護らんことを

【語釈】

○名花…海棠をさす。○抵死…死に到るまで。○風日…風と日。○紅芳…赤い花。○綠章…緑色の奏書、道士が天神に奏するのに用いる。○通明殿…天上の玉帝の殿名、常に雲を擁している。乞借…乞いて借りる。春陰…春の花曇り。

(参考文献) 『漢詩大系16』

★ 花時遍遊諸家園

花時あまね 遍あまね 諸家の園に遊ぶ

宋 陸游

飛花盡逐五更風
不照先生社酒中
輸與新來雙燕子
啣泥猶得帶殘紅

飛花 尽つく 逐お 五更ごしょう の風
照あ ざず 先生 社酒しゃしゅ の中
輸ゆ 与よ ず 新來しんらい の 雙燕子そうえんし
泥くわ を 啣くわ えて 猶なほ お 殘紅ざんこう を 帶お ぶ を 得え たり

【語釈】

○花時：花の盛りの時。○五更：夜明けがた。○社酒：春祭り（春社）と秋祭り（秋社）に飲む酒。○輸與：給与。○雙燕子：つがいの燕。○殘紅：日が沈んだあとの夕焼け。

★ 湖村月夕

湖村の月夕げつせき

宋 陸游

錦城曾醉六重陽
回首秋風每斷腸
最憶銅壺門外路
滿街歌吹月如霜

錦城きんじょう 曾かつ 酔よ いし 六重陽りくちようよう
回こ 首うべ を 回めぐ らせば 秋風あきかぜ 毎つね に 断腸つね
最も も 憶おぼ う 銅壺門外どうこもんがい の 路
滿街まんがひ の 歌吹かすい 月霜げつそう の 如ごと し

【語釈】

○錦城：錦官城、成都。○六重陽：重陽の節句六回。六年のこと。○銅壺門：成都府の役所の側にあった門。○歌吹：歌と管楽器の音。

（参考文献）『漢詩大系 19』

★冬初出遊

冬初めて出遊す

宋 陸游

蹇驢渺渺涉烟津

蹇驢 渺々 煙津を渉る

十里山村發興新

十里の山村 興を発して新なり

青旆酒家黄葉寺

青旆の酒家 黄葉の寺

相逢俱是畫中人

相逢うは 俱に是れ 画中の人

【語釈】

○蹇驢：びつこの驢馬。○渺渺：遠くて果てしないさま。○烟津：靄のかかった津。○青旆：青い旗、酒屋の目印。

★夜歸

夜歸る

宋 陸游

芡浦菱陂夜半時

芡浦 菱陂 夜半の時

小舟更著疾風吹

小舟 更に著す 疾風の吹くを

青燐一炬楓林外

青燐 一炬 楓林の外

鬼火漁燈兩不知

鬼火 漁燈 兩つながら知らず

【語釈】

○芡浦：オニバスの生えた浦。○菱陂：菱の生えた池。○青燐：青く光る。○炬：たいまつ。○鬼火：おにび、きつねび。

★雨後

雨後

宋 陸游

雨後涼生病體輕

雨後涼生じて病体輕し

閑拖拄杖出門行

閑に拄杖を拖着しずかいて門を出て行く

槐花落盡桐陰薄

槐花落ち尽し桐陰薄し

時有殘蟬一兩聲

時に有り殘蟬ざんせんの一兩聲

【語釈】

○拄杖：杖。○槐花：エンジュの花。

★湖中

湖中

宋 陸游

橫林渺渺夜生烟

橫林びょうびょう渺々夜に煙を生じ

野水茫茫遠拍天

野水ぼうぼう茫茫遠く天を拍つ

菱唱一聲驚夢斷

菱唱りょうしょう一聲夢を驚かして断ち

始知身在釣魚船

始めて知る身は釣魚の船に在るを

【語釈】

○渺渺：広く果てしないさま。遠くかすかなさま。○烟：霞、靄。○茫茫：広遠なさま。広く大きいさま。○菱唱：菱の実をとるときに歌う歌。○驚夢：目を覚めさす。

★湖中

湖中

宋 陸游

河漢横斜斗柄低
啼鴉掠水未成栖
怪生凄爽侵肌骨
船繫秦皇酒甕西

河漢 横斜して斗柄低く
啼鴉 水を掠め未だ栖を成さず
怪生す 凄爽 肌骨を侵すを
船は繋がる 秦皇 酒甕の西

【語釈】

○河漢：銀河。○斗柄：北斗七星の柄の部分。○栖：鳥が宿りをする。○怪生：怪しむことではない。○凄爽：非常に爽やかなこと。○秦皇：秦の始皇帝。○酒甕：酒がめ。

★江瀆池納涼

江瀆池納涼

宋 陸游

雨過荒池藻苳香
月明如水浸胡床
天公作意憐羈客
乞與今年一夏涼

雨過ぎ 荒池 藻苳香し
月明 水の如く 胡床を浸す
天公 羈客を憐れむの意を作し
乞与す 今年 一夏の涼

【語釈】

○江瀆池：四川省成都市青羊區江瀆池。○藻苳：藻とアサザ。○胡床：背もたれのある腰掛け、不用の時にはたたんでおく。○天公：天帝。○羈客：旅人。○乞與：与える。

★ 過靈石三峰

靈石三峰を過ぐ

宋 陸游

奇峰迎馬駭衰翁

奇峰 馬を迎え 衰翁を駭かす

蜀嶺吳山一洗空

蜀嶺 吳山 一洗して空し

拔地青蒼五千仞

地を抜く青蒼 五千仞

勞渠蟠屈小詩中

渠を勞し 蟠屈す 小詩の中

【語釈】

○靈石三峰…浙江省衢州市江山市江郎山。○奇峰…高くそびえている峰。○一洗…残らず洗いすすぐ。○青蒼…森林。○仞…長さの単位、漢では八尺。○勞…煩わす。○蟠屈…曲がりくねる。○渠…車の外輪。

★ 烟波即事

煙波即事

宋 陸游

烟波深處卧孤篷

煙波 深き処 孤篷に卧す

宿酒醒時間斷鴻

宿酒 醒むる時 断鴻を聞く

最是平生會心事

最も是れ 平生 会心の事

蘆花千頃月明中

蘆花 千頃 月明の中

【語釈】

○烟波…霧が立ちこめている水面。○孤篷…一つだけの舟。○宿酒…二日酔い。○斷鴻…群れから離れた孤雁。○是…英語の be 動詞にあたり「コレ」と訓読する。○平生…ふだん、平常。○頃…182アール。

★夢中作

夢中作

宋 陸游

繫馬朱橋上酒樓

馬を朱橋に繫ぎ酒樓に上る

樓前敷水拍堤流

樓前の敷水堤を拍ちて流る

春風又作無情計

春風 又た作す 無情の計

滿路楊花輓雪球

路に滿つ楊花 雪球を輓す

【語釈】

○敷水：陝西省華陰県を流れる川の名。○楊花：柳絮。○輓：車が早くまわる。ここでは混じえるの意？

★除夜自石湖歸苕溪

除夜 石湖より 苕溪に帰る

宋 姜夔

細草穿沙雪半銷

細草 沙を穿ち 雪半ば銷ゆ

吳宮烟冷水迢迢

吳宮 煙 冷やかにして 水迢々たり

梅花竹裏無人見

梅花竹裏 人の見る無く

一夜吹香過石橋

一夜 香を吹いて 石橋を過ぐ

【語釈】

○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○苕溪：浙江省湖州市。○穿沙：砂を突き通して芽吹く。○吳宮：春秋時代の吳王の宮殿。○烟：靄、霞。○迢迢：遙かなさま、遠いさま。

★除夜自石湖歸苕溪

除夜石湖より苕溪に帰る

宋 姜夔

笠澤茫茫雁影微

笠沢 茫茫 雁影 微かり

玉峯重疊護雲衣

玉峰 重疊として 雲衣を護る

長橋寂寞春寒夜

長橋 寂寞として 春寒き夜

只有詩人一舸歸

只だ 詩人一舸の帰る有るのみ

【語釈】

○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○苕溪：浙江省湖州市。○笠澤：太湖（江蘇省、浙江省に跨がる大きな湖）にそそぐ川の名。○茫茫：広大なさま。ひろびろとしたさま。○重疊：幾重にも重なり合うさま。○雲衣：雲の気。○寂寞：ひっそりして物寂しいさま。○一舸：一つの舟。

★湖山十詠

湖山十詠

宋 王希呂

雨挾東風作嫩寒

雨は 東風を挟み 嫩寒を作し

短牆圍水柳藏烟

短牆は 水を囲み 柳は煙を蔵す

游人不出西湖靜

遊人は出でず 西湖 静かなり

白鷺飛來在畫船

白鷺 飛来り 画船に在り

【語釈】

○嫩寒：うすら寒さ。○短牆：短い牆。○烟：靄、霞。○游人：観光客。○畫船：彩られた船。

★ 出郊雑咏

出郊雑咏

宋 王 炎

閉戸不知春色佳

戸を閉じて 春色の佳なるを知らず

柳梢欲暗可藏鴉

柳梢 暗くして 鴉を蔵すべからんと欲す

鴨頭新緑齊腰水

鴨頭の新緑 齊腰の水

女頬輕紅刺眼花

女頬の輕紅 眼を刺す花

【語釈】

○出郊：郊外に出ること。○雑詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○春色：春景色。○藏鴉：鴉を隠して住ませる。○鴨頭：鴨の頭。○齊腰：整った腰。○女頬：女性の頬。○輕紅：薄紅色。

★ 出郊雑咏

出郊雑咏

宋 王 炎

道上東風掠面輕

道上の東風 面を掠めて輕し

一犁雨足得新晴

一犁雨 足りて 新晴を得たり

草頭蛺蝶自由舞

草頭の蛺蝶 自由に舞い

林下鷓鴣相對鳴

林下の鷓鴣 相對して鳴く

【語釈】

○出郊：郊外に出ること。○雑詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○一犁雨：春雨。○蛺蝶：ちょうちよう。○鷓鴣：イカルガとハシトビガラス。

★ 題石門奉真觀

石門の奉真觀に題す

宋 劉 宰

疊障爲屏石作門

疊障は屏と為り 石は門と作る

陰雲漠漠雨昏昏

陰雲 漠々 雨 昏昏

清游到晚不知去

清游 晩に到り 去るを知らず

要上峯頭望曉暎

峰頭に上り 曉暎を望まんと要す

【語釈】

○石門：江蘇省蘇州市の地名。○奉真觀：道教の寺院。○疊障：重なりあつた山峰。○陰雲：黒雲。○漠漠：一面に続いているさま。○昏昏：暗いさま。○清游：優雅に遊び賞すること。○要：～することを求める。～しようとす。○曉暎：朝日の光、転じて朝日。

★ 遊武夷

武夷に遊ぶ

宋 詹 義

石廩巖前繫小舟

石廩の巖前 小舟を繋ぐ

娟娟明月照清秋

娟々たる明月 清秋を照らす

仙人一夜吹長笛

仙人 一夜 長笛を吹く

三十六峰雲盡收

三十六峰 雲 尽く収まる

【語釈】

○武夷：福建省崇安県の南にある山。○石廩：衡山（五嶽の一つで湖南省にある）？○娟娟：美しく清らかなさま。○三十六峰：多くの峰々。

★雨中過蘇堤

雨中 蘇堤を過ぐ

宋 葛天民

一堤楊柳占春風

一堤の楊柳 春風を占む

柳外群山細雨中

柳外の群山 細雨の中

人苦未晴渾不到

人未だ晴渾の到らざるを苦しみて

只宜老眼看空濛

只だ宜しく 老眼 空濛を看るべし

【語釈】

○蘇堤：浙江省杭州市の西湖にある蘇軾が築いた堤。○細雨：こぬか雨。○晴渾：晴れて輝く太陽の光。○宜：「よろしくすべし」と読み、「くするのが妥当である」「くするのがよい」と訳す。○空濛：小雨や霧などのために、空の薄暗いさま。

★看山

山を看る

宋 葛天民

我本田夫作比丘

我本 田夫 比丘と作る

也知騎馬勝騎牛

也た知る 馬に騎るは 牛に騎るに勝るを

如今馬上看山色

如今 馬上にて 山色を看る

不似騎牛得自由

似ず 牛に騎りて自由を得たるに

【語釈】

○田夫：農夫。○比丘：仏教語、僧侶。○如今：今。○山色：山の景色。

★ 山行即事

山行即事 さんこうそくじ

宋 高翥

落盡桐花春已休
桐花を落尽して春已に休む
過牆新竹籜初抽
牆を過ぐ新竹籜初めて抽ず
山行步步黃泥滑
山行 歩々 黃泥 滑なり
小立谿橋聽雨鳩
谿橋に小立して雨鳩を聴く

【語釈】

○即事…事に触れて、その場のことを題材にして詩を作る。○籜…魚を捕らえる竹籠。○抽…芽をふく。○小立…立ち止まる。○谿橋…溪に架かる橋。○雨鳩…雨の中で鳴く鳩。

★ 登六和塔

六和塔に登る りくわとう

宋 鄭清之

經過塔下幾春秋
經過す塔下 幾春秋
每恨無因到上頭
毎に恨む 上頭に到るに 因無きを
今日始知高處險
今日始めて知る 高処の險
不如歸去卧林邱
如かず 歸去して 林邱に卧すに

【語釈】

○六和塔…浙江省杭州市にある塔。○上頭…塔の高いところ。○因…理由。○林邱…林の中の家。

★舟上

舟上

宋 徐照

小船停槳逐潮還

小船槳を停めて潮を逐いて還る

四五人家住一灣

四五の人家一灣に住す

貪看曙光侵月色

貪り見る曙光の月色を侵すを

不知雲氣失前山

知らず雲氣の前山を失するを

【語釈】

○槳…舟をこぐ櫂。○雲氣…雲。

★雁池作

雁池の作

宋 翁卷

包家門外柳垂垂

包家門外柳垂々

搖蕩春風滿雁池

搖蕩たる春風雁池に満つ

爲是城中最佳處

是れ城中最も佳き処が為に

每經過此立多時

此を經過する毎に立つこと多時なり

【語釈】

○雁池…皇帝の御苑にある池。○包家門…不祥。○垂垂…垂れ下がっているさま。○搖蕩…揺れ動くさま。○多時…長い時間。

★野望

野望

宋 翁 卷

一天秋色冷晴灣
無數峰巒遠近間
閑上山來看野水
忽於水底見青山

一天の秋色 晴灣に冷なり
無数の峰巒 遠近の間
閑に 山に上り来たりて 野水を看れば
忽ち 水底に青山を見る

【語釈】

○野望：野原の眺め。○秋色：秋景色。○峰巒：連なっている山。

★南塘即事

南塘即事

宋 翁 卷

半川寒日滿村煙
紅樹青林古岸邊
漁子不知何處去
渚禽飛去拗罾船

半川の寒日 村煙に満つ
紅樹 青林 古岸の辺
漁子は知らず 何れの処に去るかを
渚禽 飛び落ち 罾船を拗す

【語釈】

○南塘：浙江省温州市南塘。○即事：事に触れて、その場のことを題材にして詩を作る。
○寒日：寒冷の天気、冬の太陽。○村煙：村の炊飯の煙。○漁子：漁夫。○渚禽：渚に済む鳥。○罾船：魚を捕る網を持った船。○拗：ねじる。向きをかえさせる。

★ 江村晚眺二首

江村晚眺二首

宋 戴復古

數點歸鴉過別村
隔灘漁笛遠相聞
孤蒲斷岸潮痕濕
日落空江生白雲

数点の帰鴉 別村を過ぐ
灘を隔つる漁笛 遠く相聞く
孤蒲の断岸 潮痕湿り
日落ち 空江 白雲生ず

【語釈】

○歸鴉：ねぐらにかえる鳥。○灘：早瀬。○孤蒲：マコモとカバ。○潮痕：潮が引いた後に付く跡。○空江：人のいない川。

★ 江村晚眺二首

江村晚眺二首

宋 戴復古

江頭落日照平沙
潮退漁船閣岸斜
白鳥一雙臨水立
見人驚起入蘆花

江頭の落日 平沙を照らす
潮退きて 漁船 岸に閣かれて斜めなり
白鳥 一雙 水に臨んで立つ
人を見て 驚起して 蘆花に入る

【語釈】

○江村：川辺の村。○江頭：川のほとり。○平沙：平らな砂浜。○閣：船を岸につける。○一双：ひとつがい。○驚起：おどろいて。

(参考文献) 『中国名詩選』

★ 樓上觀山

樓上觀山

宋 戴復古

九陌黃塵沒馬頭

九陌きゅうはくの黃塵こうじん 馬頭を没す

人來人去幾時休

人來り 人去りて 幾時か休せん

誰家樓上身無事

誰が家の樓上か 身無事ならん

長對青山不下樓

長く 青山に対して 樓を下らず

【語釈】

○九陌…都大路。○無事…事が無いこと。

★ 湖上

湖上

宋 方岳

連天芳草晚淒淒

天つらに連なる芳草 晩に淒々せいせい

蹀躞花邊馬不嘶

蹀躞ちようしやう 花邊 馬嘶いななかざ

蜂蝶已歸絃管靜

蜂蝶ほうちやう 已に歸り 絃管げんかん静なり

猶聞人語畫橋西

猶お聞く 人語 画橋の西

【語釈】

○淒淒…さびしく、いたましいさま。ひえびえとしたさま。○蹀躞…馬の歩くさま。○絃管…音楽。○畫橋…画で彩られた橋。

★湖上

湖上

宋 方岳

緑波如畫雨初晴
一岸烟蕪極望平
日暮落花風欲定
小樓絃管壓新聲

緑波は画の如く雨初めて晴れ
一岸の煙蕪望を極めて平かなり
日暮の落花風定まらんと欲し
小樓の絃管新声を圧す

【語釈】

○烟蕪：靄に煙った草原。○絃管：音楽。○新聲：新しい歌曲。

★獨立

独り立つ

宋 方岳

茅茨烟樹水溶溶
籬落人家帶晚春
獨立西風無一事
自撐短艇看芙蓉

茅茨煙樹水溶々
籬落人家晚春を帯ぶ
独り西風に立ち一事無く
自ら短艇を撐えて芙蓉を見る

【語釈】

○茅茨：茅吹きの家。○烟樹：靄のかかった樹木。○溶溶：水がさかんに流れるさま。○籬落：垣根。落はかこい。○短艇：小舟。○撐：さおで船を進める。

★ 歸途過銅官山

歸途 銅官山を過ぐ

宋 戴 昺

山徑崎嶇落葉黃
山徑 崎嶇きくとして 落葉黃なり
青松疎處漏斜陽
青松 疎そなる處 斜陽を漏らす
鳴禽無數聲相應
鳴禽めいきん 無數 声相應じ
一陣微風野菊香
一陣の微風 野菊かんば香し

【語釈】

○銅官山…不祥。○崎嶇…道が険しいさま。○鳴禽…さえずる鳥。

★ 夜過鑑湖

夜 鑑湖かんこを過ぐ

宋 戴 昺

推篷四望水連空
篷とまを推して 四望しぼうすれば 水空くうに連なる
一片蒲帆正飽風
一片の蒲帆ほはん 正まさに 風に飽く
山際白雲雲際月
山際さんさいの白雲 雲際うんさいの月
子規聲在白雲中
子規の聲は 白雲うちの中に在り

【語釈】

○四望…四方を遠望する。○蒲帆…蒲で織った帆。

★ 出城

城を出ず

宋 劉克莊

小憇城西賣酒家

小憇す 城西 売酒の家

綠陰深處有啼鴉

綠陰深き処 啼鴉有り

主人歎息官來晚

主人 歎息す 官の來ること 晚きを

謝了醪醖一架花

謝了す 醪醖 一架の花

【語釈】

○官：作者自身。○謝了：感謝する。了は動作の完了を表す助字。謝却とも言う。○醪醖…二度かもした酒。

★ 扶胥

扶胥

宋 劉克莊

一陣東風掃噀霾

一陣の東風 噀霾を掃い

天容海色豁然開

天容 海色 豁然として開く

何須更網珊瑚樹

何ぞ須いん 更に 珊瑚樹を網するを

祇讀韓碑也合來

祇だ韓碑を読み 也た來るを合す

【語釈】

○扶胥…？。○噀霾…曇って吹く風と土砂を降らす雨。○天容…天の様子。○海色…海の気配。○豁然…広々と開けているさま。○韓碑…唐の憲宗のときに淮西の乱を平らげた功績を標した碑文。文は韓愈による。

★ 溪行

溪行けいこう

宋 李庭

枯木扶疏夾道傍
野梅倒影浸寒塘
朝陽不到溪灣處
留得橫橋一板霜

枯木扶疏ふそにして道傍どうぼうを夾さしはさむ
野梅影かげを倒さかしまにして寒塘かんどうを浸ひたす
朝陽あさひ 到いたらず 溪灣けいわんの処
留とどめ得えたり 橫橋よこはし 一板いつぱんの霜

【語釈】

○扶疏：木の枝の四方に広まるさま。○寒塘：寒々とした池。○溪灣：谷川の彎曲したところ。

★ 江山晚眺

江山の晚眺

宋 黄榮仲

十里滄波自在流
滿天風月下蘆洲
待携六幅生綃去
畫出江南水墨秋

十里の滄波 自在に流れ
滿天の風月 蘆洲ろしゅうを下る
六幅の生綃せいしやうを携もえ去るを待ち
画えき出す 江南 水墨の秋

【語釈】

○晚眺：夕暮れの眺め。○蘆洲：蘆の生えた中洲。○幅：布の横の広さ、周代は二尺二寸。○生綃：絵を描いた巻物。○江南：長江中下流の南岸地域。

★ 過溪

溪を過ぐ

宋 葉茵

筍輿軋軋亂山中

筍輿軋々 乱山の中

籬落桃花潑眼紅

籬落の桃花 眼を澆して紅なり

小駐渡頭呼艇子

小駐の渡頭 艇子を呼び

一溪淺綠漾晴風

一溪の淺綠 晴風に漾う

【語釈】

○筍輿：竹の輿。○軋軋：進みがたいさま。○籬落：かきね。○潑：そそぐ。○小駐：しばし留まる。○渡頭：渡し場。○艇子：船頭。

★ 過垂虹

垂虹を過ぐ

宋 何應龍

垂虹橋下水連天

垂虹橋下水 天に連なる

一帶青山落照邊

一帶の青山 落照の辺

三十六陂煙浦冷

三十六陂煙浦 冷やかなり

鷺鷥飛上釣漁船

鷺鷥飛上がる 釣漁の船

【語釈】

○垂虹橋：江蘇省蘇州市垂虹橋。○落照：夕陽。夕焼け。○三十六陂：江蘇省蘇州市内の地名。○煙浦：霞、靄に煙った浦。○鷺鷥：さぎ。

★ 羊角埤晚行

羊角埤晚行

宋 宋伯仁

葛裙蒲履帽烏紗
迤邐乘涼到水涯
數寺晚鐘聲未歇
滿身涼月看荷花

葛裙かっくん 蒲履ほり 烏紗うさを帽ぼうにす
迤邐いり 涼りやうに乗じて 水涯すいがひに到る
數寺すうじの晚鐘ばんしゆ 声こゑ 未だ歇やまず
滿身まんしんの涼月りやうげつ 荷花けふかを看る

【語釈】

○羊角埤…不祥。○葛裙…かざらで織った衣。○蒲履…蒲であんだ草履。○烏紗…黒い薄絹で作った帽子。隠者がかぶる。○迤邐…あちらこちらとつたい歩くこと。

★ 探春

春を探ぬ

宋 戴益

盡日尋春不見春
芒屨踏遍嶺頭雲
歸來適過梅花下
春在枝頭已十分

尽日 春を尋ねて 春を見ず
芒屨ぼうあい 踏遍とうへんす 嶺頭りやうとうの雲
歸り来たりて 適過てきかす 梅花めいかの下
春は枝頭に在りて 已に十分

【語釈】

○芒屨…ススキで作った草鞋。○踏遍…遍く歩き回る。○適過…通り過ぎる。

★春遊

春遊

宋 宋李任

草色江城緑四圍

草色 江城 緑 四に囲む

客中天氣近單衣

客中 天氣 單衣に近し

蛛絲似惜春歸去

蛛糸 惜しむに似たり 春の帰り去るを

網住桃花不許飛

桃花を網住して 飛ぶを許さず

【語釈】

○江城：川の畔にある街。○客中：旅の途中。○單衣：ひとえの衣。○蛛絲：蜘蛛の糸。
○網住：網でとらえて留める。

★武夷

武夷

宋 葛長庚

幾點沙鷗泛碧流

幾点の沙鷗か 碧流に泛ぶ

蘆花兩岸暮雲愁

蘆花 兩岸 暮雲愁う

鼓樓巖下一聲笛

鼓樓巖下 一声の笛

驚落梧桐飛起秋

梧桐を驚落して 秋を飛起す

【語釈】

○武夷：武夷山、中国・福建省にある黃崗山（2158メートル）を中心とする山系の総称。
九曲溪が観光地として有名。○沙鷗：砂浜に住む鷗。○鼓樓巖：九曲溪の中にある名巖。
○梧桐：おおぎり。○驚落：驚かせて落とす。○飛起：飛び起こす。

★採蓮

採蓮さいれん

唐 滕傳胤

忽然湖上片雲飛
 忽然湖上片雲飛こつぜん
 不覺舟中雨濕衣
 覺えず舟中雨の衣を湿すをうるお
 折得蓮花渾忘却
 折り得たる蓮花渾て忘却しすべ
 空將荷葉蓋頭歸
 空しく荷葉を將もつつて頭を蓋おおつて歸る

【語釈】

○採蓮…蓮の花を採る。○忽然…突然。○忘却…忘れる。却是動作の完了を示す助字。○荷葉…蓮の葉。

★題八詠樓

八詠樓に題す

宋 李清

千古風流八詠樓
 千古の風流 八詠樓はちえいろう
 江山留與後人愁
 江山 留りゅう与よす 後人の愁
 水通南國三千里
 水は通ず 南國 三千里
 氣壓江城十四州
 氣は圧す 江城 十四州

【語釈】

○八詠樓…浙江省金華市南隅にある楼。○留與…留め与える。○江城…川の畔にある街。

★ 臨平道中

臨平道中りんぺいどうちゆう

宋

釋道潜

風蒲獵獵弄輕柔

風蒲りょうりょう 獵々として 輕柔ろろうを弄す

欲立蜻蜓不自由

立たと欲すも 蜻蜓せいてい 自由ならず

五月臨平山下路

五月りんぺいさんか 臨平山下の路

藕花無數滿汀洲

藕花くわか 無數 汀洲ていしゅうに満つ

【語釈】

○臨平：杭州の江西県にある山の名。○風蒲：風に吹かれる蒲の葉。○獵獵：風の吹く声。○輕柔：軽く柔らかなさま。○蜻蜓：とんぼ。○藕花：蓮の花。○汀洲：なぎさとと中州。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 東園

東園

宋

釋道潜

曲渚回塘孰與期

曲渚 回塘いずれ 孰与か期せん

杖藜終日自忘歸

杖あかざを杖つき 終日おのずか 自ら帰ることを忘る

隔林彷彿聞機杼

林を隔て 彷彿ほうふつとして 機杼きひを聞く

知有人家住翠微

知る 人家の 翠微すいびに住する有るを

【語釈】

○曲渚：曲がった渚。○回塘：曲がったつつみ。○藜：草の一種で幹が軽いので老人、隱者の杖にする。○彷彿：かすかなさま。○機杼：機織りの杼の音。○翠微：山の緑の深い中腹あたり。

★秋江

秋江

宋 釋道潜

赤葉楓林落酒旗

赤葉 楓林 酒旗に落ち

白沙洲渚夕陽微

白沙 洲渚 夕陽微かなり

數聲柔櫓蒼茫外

數聲の柔櫓 蒼茫の外

何處江村人夜歸

何れの処の江村か 人夜に帰る

【語釈】

○酒旗：酒屋の旗（青）。○洲渚：中洲のなぎさ。○柔櫓：船をこぐ櫓の軽い音。○蒼茫
…水面などの青々として果てしないさま。○江村：川辺の村。

★北固樓

北固樓

宋 僧仲殊

北固樓前一笛風

北固樓前 一笛の風

碧雲飛出建健康宮

碧雲 飛び出ず 建健康宮

江南二月多芳草

江南 二月 芳草多し

春在濛濛細雨中

春は濛々 細雨の中に在り

【語釈】

○北固樓：江蘇省鎮江市北固山にある樓。○健康宮：不祥。建昌宮（江蘇省南京市の宮殿）のことか？○江南：長江中下流域の南岸地方。○濛濛：（霧や小雨で）煙るようにはやっとしていゝさま。

★絶句

絶句

宋 釋志南

古木陰中繫短篷

古木陰中 短篷を繫ぐ

杖藜扶我過橋東

藜を杖き 我を扶け 橋東を過ぐ

沾衣欲濕杏花雨

衣を沾して 湿さんと欲す 杏花の雨

吹面不寒楊柳風

面を吹いて 寒からず 楊柳の風

【語釈】

○短篷…小舟。○藜…草の一種で幹が軽いので老人、隠者の杖として用いられる。

★放船

船を放つ

宋 姚鏞

數幅蒲帆破曉煙

數幅の蒲帆 曉煙を破り

一篙春水漲平川

一篙の春水 平川に漲る

誰家池館多楊柳

誰が家か 池館 楊柳多し

時送飛花到客船

時に飛花を送り 客船に到る

【語釈】

○幅…布の幅の単位、周では二尺二寸。○蒲帆…蒲で作った帆を持つ船。○一篙…釣り竿一本くらの長さ。○池館…池の畔にある館。○飛花…飛ぶ柳絮。

★ 泝舟

泝舟そしゅう

宋 僧涪溪

舟入沙湾一段清

舟は沙湾さわんに入り一段と清し

枯蘆風起作霜晴

枯蘆ころう風起り霜晴そうせいを作す

江邊怕有梅花發

江邊えん怕おそらくは梅花ひらの発ひらく有らん

說輿梢工近岸撐

梢工しょうこうに說与せつよして岸き近く撐さばえしむ

【語釈】

○泝舟…さかのぼる舟。○沙湾…砂浜のある湾。○梢工…船頭。○說輿…言って聞かせ
る。○撐…船を棹で留める。

★ 閩山

閩山りよざん

金 蔡珪

西風絶境撫孤松

西風せいふう絶境ぜつきよう孤松こしょうを撫ぶす

千里川原四望通

千里川原四望通る

但怪林梢看鳥翼

但ただ怪しむ林梢りんしょうに鳥翼ちようよくを看るを

不知身到碧雲中

知らず身は碧雲せきうんの中に到るを

【語釈】

○閩山…醫無閩山の略称。遼寧省北鎮県の西にある山。○西風…秋風。○絶境…人界から
離れた所。○四望…四方の眺め。

★ 濟南黃臺

濟南の黃台

金 任 詢

滿目江南烟水秋

滿目の江南 煙水の秋

濟南重到憶南游

濟南 重ねて到り 南遊を憶う

便欲移家漁市側

便すなわちち 家に移さんと欲す 漁市の側

輕蓑短棹弄扁舟

輕蓑 短棹 扁舟を弄す

【語釈】

○濟南：山東省濟南市。○黃臺：台の名前。○滿目：目一杯に映る。○江南：長江中下流域の南岸地方。○煙水：霧に煙る川面。○便：ただちに。○扁舟：小舟。

★ 暮春山家

暮春の山家

金 麻九疇

山烟向晚白濛濛

山煙 晩に向つて 白はく濛もう々

人過梨花樹底風

人は梨花を過ぐ 樹底の風

一犬不鳴村徑黑

一犬 鳴かず 村徑 黒し

野燈孤起遠林中

野燈 孤ひとり起おこく 遠林うちの中

【語釈】

○濛濛：おぼろげなさま。うすぐらいさま。○野燈：野原にある灯。

★春遊

春遊

金 趙秉文

無數飛花送小舟

無數の飛花 小舟を送る

蜻蜓款立釣絲頭

蜻蜓 款立す 釣糸の頭

一溪春水關何事

一溪の春水 何事にか関す

皺作風前萬疊愁

皺と作す 風前 万疊の愁

【語釈】

○蜻蜓…とんぼ。○款立…留まり立つ。○萬疊…多く重なり合ったさま。

★暮歸

暮に帰る

金 趙秉文

貪看孤鳥入重雲

孤鳥の重雲に入るを 貪り見て

不覺青林雨氣昏

覺えず 青林に 雨氣の昏きを

行過斷橋沙路黑

行きて 斷橋を過れば 沙路黒し

忽從電影得前村

忽ち 電影に従りて 前村を得たり

【語釈】

○雨氣…雨の降りそうな気配。○斷橋…壊れた橋。○電影…稲妻。

★ 即事

即事

金 趙秉文

樓頭不見暮山重 樓頭見ず暮山の重るを
遙認青林雨意濃 遙かに認む青林雨意の濃きを
一陣風來忽吹散 一陣風来つて忽ち吹き散ず
斷雲還補兩三峯 斷雲還た補う兩三峰

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に応じて詩を作ること。○雨氣…雨の降りそうな気配。○
一陣…雨や風などのひとしきり。

★ 山行

山行

金 趙秉文

石頭犖确水縱横 石頭犖确水縱横
過雨山間草履輕 過雨山間草履輕し
未到上方先滿意 未だ上方に到らざるに先ず意満つ
倚天青壁看雲生 天に倚る青壁雲の生ずるを見る

【語釈】

○犖确…山に石の多いさま。○過雨…通り雨。○倚天…空に寄りかかるように聳える。

★ 郊行

郊行

金 酈 權

溪橋納納馬蹄輕

溪橋 納々 馬蹄輕し

竹裏人家犬吠聲

竹裏の人家 犬の吠ゆる声

行盡灘光溪路黒

灘光を行尽して 溪路黒し

隔林燈火夜深明

林を隔つる 灯火 夜深くして 明かなり

【語釈】

○郊行：郊外の野原を漫遊すること。○納納：うるおい湿るさま。○行盡：行き尽くす。

★ 日觀峰

日觀峰

金 蕭 貢

半夜東風攪鄧林

半夜の東風 鄧林を攪し

三山銀闕杳沈沈

三山の銀闕 杳として沈々

洪波萬里兼天湧

洪波 万里 天を兼ねて湧き

一點金鳥出海心

一点の金鳥 海心より出ず

【語釈】

○日觀峰：山東省泰安市日觀峰。○半夜：真夜中。○東風：春風。○鄧林：古代神話伝説に出てくる樹林。○三山：伝説で海上にある三つの神山。○銀闕：道教で天上にある白玉宮。○沈沈：夜が靜にふけて行くさま。○洪波：大波。○金鳥：太陽。○海心：海の真ん中。

★ 東樓雨中

東樓雨中

金 王元粹

雨入溪樓不見山

雨は溪樓に入りて 山を見ず

雨晴依舊數峰間

雨晴れて 旧に依り 數峰 閑なり

韋郎詩句王維畫

韋郎の詩句 王維の画

好在幽人指顧間

好し 幽人は 指顧の間に在り

【語釈】

○東樓…不祥。○依舊…旧来の如く。○韋郎…韋応物。○幽人…隱者。○指顧間…非常に近い距離。

★ 馬嵬道中

馬嵬道中

金 杜 恂

垂柳陰陰水拍堤

垂柳 陰々 水 堤を拍つ

春晴茅屋燕争泥

春晴 茅屋 燕 泥を争う

海棠正好東風惡

海棠 正まさに好く 東風わらう惡し

狼藉殘紅送馬蹄

狼藉ろうぜき 殘紅 馬蹄を送る

【語釈】

○馬嵬…陝西省興平県、安史の乱において楊貴妃が殺されたところ。○陰陰…木が茂って暗いさま。○茅屋…茅葺きの家。○東風…春風。○狼藉…散る花。○殘紅…散り残りの花。

★游南城

南城に遊ぶ

金 李好復

園林晴晝蔚如烟
園林の晴昼 煙の如く蔚として
林外支流盡水田
林外の支流 尽く水田
落日趣墟人已散
落日 墟を逐いて 人已に散じ
鷺鷥飛上渡頭船
鷺鷥 飛上がる 渡頭の船

【語釈】

○烟：靄、霞。○蔚：雲霧が濃く深いさま。○墟：市の立つ村里。大きな丘。○鷺鷥：しらすぎ。○渡頭：渡し場。

★雨後

雨後

金 馮辰

東風花外錦鳩啼
東風花外 錦鳩啼き
喚起西山雨一犁
喚起す 西山雨 一犁
緑滿蔬畦人不到
緑は蔬畦に満ち 人到らず
桔槔閒立夕陽低
桔槔 閑かに立ち 夕陽低し

【語釈】

○東風：春風。○錦鳩：しらこばと。いかるが。○一犁：ひとすきほど。○蔬畦：菜畑。○桔槔：はねつるべ。

★ 梁園春

梁園の春

金 元好問

暖入金溝細浪添

暖は金溝に入りて細浪添う

津橋楊柳綠纖纖

津橋の楊柳 緑 纖々

賣花聲動天街遠

売花の声は動き 天街遠く

幾處春風揭繡簾

幾処の春風か 繡簾を掲ぐ

【語釈】

○梁園：河南省開封市梁苑。○金溝：美しい堀。○細浪：さざなみ。○津橋：渡しにかけ
る橋。○纖纖：かぼそいさま。○繡簾：刺繍をほどこした簾。

★ 清湖春早

清湖春早

元 方回

樓上春陰覆曉雲

楼上の春陰 暁雲を覆う

一河天淨碧沍沍

一河 天淨く 碧 沍々

雨宜不驟風宜細

雨は宜しく驟ならざるべく 風は宜しく細なるべし

閑倚闌干看水紋

閑かに 闌干に倚りて 水紋を見る

【語釈】

○春陰：春の曇り。春霞。○沍沍：広々としているさま。○宜：「よろしくすべし」と
読み、「くするのが妥当である」「くするのがよい」の意。○驟：にわか降る。

★雨過

雨過ぐ

元 黄 庚

雨過山頭雲氣溼
雨は山頭を過ぎ雲氣溼し
潮生渡口岸痕深
潮は渡口に生じ岸痕深し
一聲短笛斜陽外
一声の短笛斜陽の外
知有漁舟泊柳陰
知る漁舟の柳陰に泊する有るを

【語釈】

○雲氣：雲の気配。雲。○渡口：渡し場。○岸痕：潮が引いた後岸に残った痕。

★江景

江景

元 黄 庚

寒生雁背天將雪
寒は雁背に生じ天將に雪ふらんとす
冷入魚鰓水欲冰
冷は魚鰓に入り水氷らんと欲す
釣艇歸來江路暝
釣艇歸り来たりて江路暝し
舟人分火點漁燈
舟人火を分け漁灯を点す

【語釈】

○將：「まさに〜せんとす」と読み、「今にも〜しそうである」の意。○魚鰓：魚のえら。○釣艇：釣り船。漁船。

★ 暮景

暮景

元 黄 庚

浮雲開合晚風輕

浮雲 開合して 晚風かろ輕し

白鳥飛邊落照明

白鳥の飛邊ひへん 落照明かなり

一曲彩虹横界斷

一曲の彩虹さいこう横に界斷かいだんし

南山雷雨北山晴

南山は雷雨 北山は晴

【語釈】

○開合…分合。○飛邊…飛んでいるあたり。○落照…落日。夕焼け。○界斷…分け開く。

★ 江村

江村

元 黄 庚

極目江天一望餘

極目きよくもくの江天一望 餘ほろかなり

寒煙漠漠日西斜

寒煙ばくばく 漠々 日は西に斜めなり

十分秋色無人管

十分の秋色 人の管する無く

半屬蘆花半蓼花

半ばは 蘆花りょうかに属し 半ばは 蓼花

【語釈】

○極目…見渡す限り。○江天…川と空。○餘…広大なさま。○寒煙…寒い靄霞。○漠漠…一面に続いているさま。○秋色…秋景色。○蓼花…たでの花。

★ 溪上

溪上

元

劉秉忠

蘆花遠映釣舟行

蘆花遠く映じて釣舟行く

漁笛時間三兩聲

漁笛時に聞く三両声

一陣西風吹雨散

一陣の西風 雨を吹いて散じ

夕陽還在水邊明

夕陽せきよう還また 水辺に在りて明らかなり

【語釈】

○一陣：風や雨などのひとしきり。○西風：秋風。

★ 東城

東城

元

趙孟頫

野店桃花紅粉姿

野店の桃花 紅粉の姿

陌頭楊柳綠烟絲

陌頭はくの楊柳 綠煙りよくえんの糸

不因送客東城去

客かくを送り 東城に去るに 因よらずんば

過却春光總不知

春光を過却かきやくして 総すべて知らざらん

【語釈】

○野店：田舎の店、野原の茶屋。○紅粉：紅おしろい。○陌頭：道ばた。○綠烟絲：柳の細い枝に芽が萌え出て煙の如きさま。○過却：見ないで空しく過ごす。○去：行く。○春光：春景色。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★ 湖上暮歸

湖上暮に帰る

元

趙孟頫

春陰柳絮不能飛

春陰 柳絮 飛ぶ能わず

雨足蒲芽綠更肥

雨足りて 蒲芽 緑 更に肥えたり

政恐前呵驚白鷺

政に恐る 前呵の 白鷺を驚かすを

獨騎歎段遶湖歸

ひとり 歎段に 騎りて 湖を遶りて 帰る

【語釈】

○春陰：春の曇り。春がすみ。○前呵：先払いをする人。○歎段：子馬。

★ 晨出郊

晨に郊に出ず

元

張養浩

雲駁疎陰漏日華

雲 駁にして 疎陰 日華を漏らし

矐矐晨色散林鴉

矐々たる 晨色 林鴉を散ず

馬前怪底猶明月

馬前 怪底す 猶お明月

路轉滿川蕎麥花

路は 転ず 満川 蕎麥の花

【語釈】

○郊：郊外の野原。○疎陰：疎らな影。○日華：太陽の光。○矐矐：おぼろげなさま。薄
明るいさま。○晨色：暁の景色。○林鴉：林に棲む鳥。○怪底：驚き怪しむ。○蕎麥：そ
ば。

★ 黃華山中

黃華山中

金 王庭筠

道人邂逅一開顏
道人邂逅して一たび開顏す
為借筇杖策我屨
為に筇杖を借りて我屨を策す
幽鳥留人還小住
幽鳥人を留め還た小住す
晚風吹破水中山
晚風吹き破る水中の山

【語釈】

○黃華山：不祥。○道人：徳の高い人。道教の僧侶。○邂逅：偶然会う。うちとけるさま。○開顏：楽しみ笑う。○筇杖：筇竹の杖。○幽鳥：隠れ住む鳥。○小住：しばらく住む。

★ 即事

即事

元 許有壬

幾家門繫釣魚船
幾家の門は繫ぐ釣魚の船
一陣風香燎麥烟
一陣の風は香る燎麥の煙
畫出太平村落景
画き出す太平村落の景
酒旗多在綠楊邊
酒旗は多く綠楊の辺に在り

【語釈】

○即事：事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○一陣：風や雨などのひとしきり。○燎麥：麦柄を燃やすこと。○酒旗：酒屋の青い旗。

★ 晚眺

晚眺

元 周 權

閃閃歸鴉過別林
斜陽流水意沈沈
數聲樵笛人何處
一路寒山晚翠深

閃々たる 歸鴉 別林を過ぐ
斜陽 流水 意 沈々
數聲の 樵笛 人 何れの処ぞ
一路 寒山 晩に 翠深

【語釈】

○閃閃：動いてひらめくさま。○沈沈：さかなさま。○寒山：秋から冬にかけての物寂しい山。○翠深：緑色が深いこと。

★ 晚渡

晚渡

元 周 權

離離野樹綠生煙
灼灼山花爛欲燃
酤酒人歸春渡寂
柳根閒繫夕陽船

離々たる 野樹 緑煙を生ず
灼々たる 山花 爛として 燃んと欲す
酒を酤いて 人 帰り 春渡 寂たり
柳根 閑かに 繫ぐ 夕陽の船

【語釈】

○晚渡：夕暮れの渡し場。○離離：草木の繁茂しているさま。○緑煙：緑色の靄霞。○灼灼：花がさかんに咲いているさま。○爛：鮮やかなさま。○酤：酒を買う。○春渡：春の渡し場。

★ 上京即事

上京即事

元 薩都刺

沙苑棕毛百尺樓

沙苑さえん 棕毛そうもう 百尺の樓

天風搖曳錦絨鈎

天風ようえい 搖曳ようえいす 錦絨鈎にしきじゅうこう

内家宴罷無人到

内家や 宴罷やみて 人の到る無く

面面珠簾夜不收

面面の珠簾 夜収まらず

【語釈】

○即事：事にふれて、その場に应じて詩を作ること。○沙苑：陝西省大荔県の南、渭水に臨む。○棕毛：元の上都の別殿の通称。○揺曳：揺れたなびく。○錦絨鈎：鈎にかかった錦で出来た織物。○面面：各方面。○珠簾：玉すだれ。

★ 阻風南露筋過羅漢寺登樓看山茶

元 薩都刺

南露筋なんろきんにて風に阻まれ 羅漢寺らかんじに過ぎりて 樓に登り 山茶を見る

野寺尋春酒未醒

野寺に春を尋ねて 酒 未だ醒めず

不知幾日過清明

知らず 幾日か 清明を過ぐを

小闌干外東風急

小闌干外しょうらんかんがい 東風 急なり

一樹山茶落晚晴

一樹の山茶 晚晴に落つ

【語釈】

○南露筋：不祥。○羅漢寺：湖北省武漢市にある寺。○山茶：常緑の樹。サザンカの花の咲く木。○清明：清明節、二十四節気の一つ。春分のと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○東風：春風。○山茶：サザンカ。○晚晴：夕暮れの晴れた空。

★ 沙湖晚歸

沙湖晚に帰る

元 朱徳潤

山野低回落雁斜
炊煙茅屋起平沙
櫓聲歸去浪痕淺
搖動一灘紅蓼花

山野を低回し落雁斜なり
炊煙茅屋平沙に起く
櫓声帰り去り浪痕浅し
揺動す一灘の紅蓼花

【語釈】

○茅屋：茅葺きの家。○平沙：平らで広い砂原。○灘：満ち潮のときは水没し、引き潮のときは現れる場所。○紅蓼花：赤いたでの花。

★ 雙井院前小立

双井院前小立

元 倪瓚

山色微茫好放船
秋渠野水夕陽邊
西風更灑菰蒲雨
羨爾沙鷗自在眠

山色微茫たり好し船を放たん
秋渠野水夕陽の辺
西風更に灑し菰蒲の雨
羨む沙鷗の自在に眠るを

【語釈】

○雙井院：江西省修水県にある院？○小立：しばしたたずむこと。○山色：山の景色。○微茫：かすかでぼんやりしているさま。○西風：秋風。○菰蒲：マコモとガマ。○羨爾：うらやむ。爾は助字で訓読しない。○沙鷗：砂浜に住む鷗。

★ 過弋陽

弋陽を過ぐ

元 高克恭

雷聲驅雨過山西

雷声 雨を駆して 山西を過ぐ

山腹雲根似削齊

山腹の雲根 削齊に似たり

日暮牧兒歸不得

日暮れて牧兒 帰るを得ず

料應白水漲前溪

料るに 応に 白水の前溪に漲るべし

【語釈】

○弋陽：江西省上饒市弋陽縣。○驅：驅り立てる。追い出す。○雲根：雲の生ずる所。○削齊：削り整える。○應：「まさにべし」と読み、「おそらくであろう」の意。○白水：清い水。

★ 夕陽

夕陽

元 何中

斜陽盡入笛聲中

斜陽 入り尽す 笛声の中

兩岸樵漁一水通

兩岸の樵漁 一水通ず

楊柳已疏楓漸落

楊柳 已に疏にして 楓 漸く落つ

黃花渾未識秋風

黃花 渾て 未だ 秋風を識らず

【語釈】

○樵漁：樵と漁師。○漸：次第次第に。○黃花：黄色い花。ここでは菊。

★湖光山色樓口占

湖光山色樓にて口占す

元 顧瑛

天風吹雨過湖去

天風 雨を吹いて湖を過ぎて去る

溪水流雲出樹間

溪水 雲を流して樹間より出ず

樓上幽人不知暑

樓上の幽人 暑を知らず

鉤簾把酒看虞山

簾を鉤し 酒を把りて 虞山を看る

【語釈】

○湖光山色：湖と山の景色。○口占：紙に書かず即興で詩を作ること。○天風：空を吹く風。○幽人：隠れ住む人。隠者。○鉤簾：簾を巻き上げて留め金にかけて留める。○虞山：江蘇省蘇州市にある山。

★湧金門見柳

湧金門にて柳を見る

元 貢性之

湧金門外柳垂金

湧金門外 柳金を垂る

三日不來成綠陰

三日 来らざるに 緑陰を成す

折取一枝入城去

一枝を折り取り 城に入りて去れば

使人知道已春深

人をして 道は 已に春の深きを 知らしめん

【語釈】

○湧金門：臨安（杭州市）の西の城門。○柳垂金：柳の垂れ下がった枝の芽が金のように見えること。○去：行く。

★ 和郭安道治書韻

郭安道治書の韻に和す

元 周 馳

西風吹起白頭波
西風吹き起こす 白頭の波
半夜扁舟掠岸過
半夜 扁舟 岸を掠めて過ぐ
不向長橋沾一醉
長橋 一醉を沾して 向わず
滿天明月奈秋何
滿天の明月 秋を奈何せん

【語釈】

○郭安道：郭安、元の保定の人、字は安道、監察御史から集賢大學士にいたる。○治書：官職名。○韻：詩。○西風：秋風。○半夜：真夜中。○扁舟：小舟。○沾：買う。○奈A何：「Aをいかんせん」と読み「Aをどのようににしようか」の意。

★ 小橋

小橋

元 彭 炳

落花如雪馬蹄香
落花 雪の如く 馬蹄 香し
幾樹黃鸝欲斷腸
幾樹の黃鸝 腸を断たんと欲す
行到小橋春影碧
行きて到る 小橋 春影 碧なり
一溝晴水浸垂楊
一溝の晴水 垂楊を浸す

【語釈】

○黃鸝：コウライウグイス。○春影：春景色。○晴水：晴れた日の水。○垂楊：垂れ下がった柳の枝。

★湖景

湖景

宋 徐元杰

花開紅樹亂鶯啼
花開いて紅樹 乱鶯啼き
草長平湖白鷺飛
草長くして 平湖 白鷺飛ぶ
風物晴和人意好
風物 晴和 人意好し
夕陽簫鼓幾船歸
夕陽 簫鼓 幾船か帰る

【語釈】

○平湖：平らな湖。○風物：眺め。○晴和：晴れてのどかなこと。○簫鼓：管弦。音楽。

★早春湖上

早春湖上

元 郭君彦

柳牙黄淺不勝春
柳^{りゅう}牙^が黄^{こう}淺^{せん}不^た勝^た春
沙暖泥香草色新
沙^{すな}暖^な泥^な香^か草^{くさ}色^{しき}新^{あらた}なり
鶻鶻雙飛湖水闊
鶻^{けい}鶻^く雙^{ふた}飛^とし湖^{うみ}水^{みづ}闊^{ひろく}
相思愁殺倚欄人
相^{そう}思^し愁^{しゅう}殺^{さつ}す欄^{らん}に倚^よる人

【語釈】

○鶻雙：オシドリに似た紫色の水鳥。○雙飛：つがいになって飛ぶ。○相思：（相手を思
う）。互いに思う。○愁殺：ひどく愁えさせる。

★春日即興

春日即興

元 龍仁夫

枯藤處處領春華

枯藤 処々 春華を領す

遮莫東風顫帽紗

遮莫 東風の帽紗を顫す

點破蕪青黃世界

点破す 蕪青の黄世界

一枝香雪小梨花

一枝の香雪 小梨花

【語釈】

○枯藤：枯れた藤。○春華：春の花。○遮莫：ままよ。○東風：春風。○帽紗：薄絹で作った帽子。○點破：發く。○蕪青：カブラ菜。○香雪：白い花。

★西湖春日壯遊即事

西湖春日壯遊即事

元 馬 臻

遶湖無處避芳塵

湖を遶り 芳塵を避くるに処無く

疊鼓紅旗彩鷁新

疊鼓 紅旗 彩鷁 新なり

冉冉春雲來不斷

冉冉たる春雲 来りて断ぜず

涌金門外踏青人

涌金門外 青を踏む人

【語釈】

○即事：その場の事を詠ずる詩。○芳塵：落花。○疊鼓：太鼓の音。○彩鷁：水鳥の一種、転じて船を指す。○冉冉：むくむくと動くさま。○涌金門：臨安（広州市）の西の城門。○青：春。

★ 西湖春日壯遊即事

西湖春日壯遊即事

元 馬 臻

鏤玉雕瓊簇鬧竿

鏤玉 雕瓊 鬧竿に簇がり

珠花翠葉縷金籃

珠花 翠葉 縷金の籃

東家年少貪遊冶

東家の年少 遊冶を貪り

正值明朝三月三

正に値たる 明朝 三月三

【語釈】

○即事…その場の事を詠ずる詩。○鏤玉…玉をちりばめる。○雕瓊…玉をぎざむ。○鬧竿…賑やかな竿。○珠花…珠を削って花の形にした装飾品。○翠葉…緑の葉。○縷金…金の糸で編んだ。○籃…かご。○遊冶…楽しみを求めて外出すること。○三月三…上巳の節句。

★ 西湖春日壯遊即事

西湖春日壯遊即事

元 馬 臻

一路亭臺間酒家

一路の亭台 酒家に間す

漸看楊柳綠藏鴉

漸く見る 楊柳の 緑鴉を蔵すを

太平官府無民訟

太平の官府 民訟無く

補種沿隄四季花

補いて種う 隄に沿う 四季の花

【語釈】

○即事…その場の事を詠ずる詩。○酒家…酒屋。○漸…だんだん、次第次第に。○官府…政府機関。○民訟…民衆からの訴え。○補種…後から追加して植えること

★ 西湖春日壯遊即事 西湖春日壯遊即事

元 馬 臻

畫船過午入西林 画船午を過ぎて 西林に入る
人擁孤山陌上塵 人は孤山を擁して 陌上の塵
曾被弁陽模寫盡 曾って 弁陽に模写し 尽さる
晚來閑卻半湖春 晚來 閑却す 半湖の春

【語釈】

○即事…その場の事を詠ずる詩。○畫船…画で彩色を施した船。○午…正午。○孤山…西湖にある島。林逋隱棲の地。○陌上…道の上。○弁陽…人名？○晚來…夕方になつてから。○閑卻…捨てて顧みない。

★ 西湖春日壯遊即事 西湖春日壯遊即事

元 馬 臻

天街夜市已喧闐 天街の夜市 已に喧闐
半掩城門玉漏傳 半ば城門を掩し 玉漏伝う
籠燭絳紗爭道入 籠燭 絳紗 道を争いて入り
湖心猶有未歸船 湖心 猶お有り 未だ帰らざる船

【語釈】

○即事…その場の事を詠ずる詩。○天街…首都の街道。○喧闐…人があふれて騒々しいさま。○玉漏…水時計の美称。○籠燭…手提げの灯火。○絳紗…赤い薄絹。

★ 一峰雲外菴

一峰雲外の菴わん

元 僧惟則

平田水語稻花香
平田水語りて稻花香かんばし
半解蘿衣受晚涼
半ば蘿衣らゐを解いて 晚涼を受く
景物雙清秋正好
景物 双つながら清く 秋正まさに好し
亂山雲外又斜陽
乱山雲外 又た斜陽

【語釈】

○蘿衣：うすぎぬの衣。○景物：景色、風景。

★ 次韻王文明絶句漫興

王文明おうぶんめいの絶句漫興に次韻す

明 劉基

芙蓉湖上夕陽低
芙蓉湖上 夕陽せきよう低し
楊柳枝頭一鳥棲
楊柳枝頭ようりゆうしとう 一鳥棲む
獨倚闌干看山色
独り 闌干らんかんに倚り 山色を看れば
白雲飛過若耶溪
白雲 飛び過ぐ 若耶溪じゃくやけい

【語釈】

○王文明：王麟、紹興路山陰の人、詳細不明。○芙蓉湖：蓮の花が咲く湖の一般名と思われる。○山色：山の景色。○若耶溪：浙江省紹興市若耶山の溪。

★ 過閩關

閩関を過ぐ

明 劉基

漠漠輕雲結晚陰
 依依斜日掛遙岑
 炊烟忽起桑榆上
 散作鮫綃抹半林

漠々たる輕雲 晚陰を結び
 依依たる斜日 遙岑に掛る
 炊煙 忽ち起る 桑榆の上
 散じて 鮫綃と作り 半林を抹す

【語釈】

○閩關：福建省にある関所のような地形の地、詳細不詳。○漠漠：一面に続いているさま。
 ○晚陰：夕暮れの暗さ。○依依：遠くぼんやりとしているさま。○遙岑：遙かな峰。○桑
 榆：桑とこれ、転じて木をいう。○鮫綃：人魚の薄絹。○抹：ぬる。

★ 蘭溪棹歌

蘭溪棹歌

明 汪廣洋

涼月如眉掛柳灣
 越中山色鏡中看
 蘭溪三日桃花雨
 夜半鯉魚來上灘

涼月 眉の如く 柳湾に掛かる
 越中の山色 鏡中に看る
 蘭溪 三日 桃花の雨
 夜半 鯉魚 灘に上つて来る

【語釈】

○蘭溪：浙江省金華市にある名勝の溪。○棹歌：舟歌。○柳灣：柳を植えた湾。○越中：
 浙江省。○山色：山の景色。○鏡中：ここでは、鏡のような水面。○灘：早瀬。

★ 蘇溪亭

蘇溪亭

明 汪廣洋

蘇溪亭上草漫漫

蘇溪亭上草漫漫

誰倚東風十二欄

誰か倚る東風十二欄

燕子不歸春事晚

燕子歸らず春事の晩

一汀烟雨杏花寒

一汀の煙雨 杏花寒し

【語釈】

○蘇溪亭…不祥。○漫漫…広く遙かなさま。○東風…春風。○春事…春景色。○烟雨…こぬか雨。

(注) 唐・戴叔倫に同一の詩あり。

★ 登石鐘山望廬山

石鐘山に登りて廬山を望む

明 張治

廬嶽亭亭翠萬重

廬嶽亭亭翠萬重

懸泉千尺掛飛龍

懸泉千尺 飛竜を掛く

石鐘山下江如鏡

石鐘山下 江鏡の如し

映出青天五老峰

映し出だす 青天 五老峰

【語釈】

○石鐘山…江西省北部湖口県にある山。○廬山…江西省九江市南にある名山。○亭亭…高く聳え立つさま。○懸泉…瀑布。○石鐘山…不祥。○五老峰…廬山の名峰。

★江村即事

江村即事

明 高啓

野岸江村雨熟梅
野岸の江村 雨梅を熟す
水平風軟燕飛回
水平かに 風軟かく 燕飛び回る
小舟送餉荷包飯
小舟 餉を送る 荷包の飯
遠旆招沽竹醞醕
遠旆 沽うを招く 竹醞醕

【語釈】

○江村：川辺の村。○即事：事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○餉：昼の弁当。○荷包飯：蓮の葉で包んだ飯。○遠旆：遠くの旗。○沽：（さけ）を買う。○竹醞醕：…かもした酒の一種。

★舟歸江上過斜塘

舟江上の斜塘を過ぎて帰る

明 高啓

漫漫村塘水沒沙
漫漫たる村塘 水沙を没す
清明初過已無花
清明 初めて過ぎて 已に花無し
春寒欲雨歸心急
春寒 雨ふらんと欲し 帰心急なり
不駐扁舟問酒家
扁舟を駐め酒家を問わず

【語釈】

○斜塘：斜めになった池の堤。○漫漫：遠く遙かなさま。○村塘：村の溜め池。○清明：清明節。二十四節気の一つ。春分の一と一五日後、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○春寒：春の薄ら寒さ。○扁舟：小舟。

★消夏灣

消夏灣

明 高啓

涼生白苧水浮空
涼は白苧に生じ 水は空に浮ぶ
湖上曾開避暑宮
湖上 曾て開く 避暑宮
清簟疎簾人去後
清簟 疎簾 人去りて後
漁舟占盡柳陰風
漁舟 占め尽す 柳陰の風

【語釈】

○白苧：しろからむしで織ったかたびら。○避暑宮：不祥。○清簟：竹で編んだ涼しいむしろ。○疎簾：まばらな竹製のすだれ。

★春郊挾彈

春郊挾彈

明 吳彦貞

五陵年少出新豊
五陵の年少 新豊を出す
紫鞞銀鞍耀玉驄
紫鞞 銀鞍 玉驄に耀く
挾彈遲迴楊柳陌
弾を挟み 遅迴す 楊柳の陌
馬蹄輕逐落花風
馬蹄 軽く逐う 落花の風

【語釈】

○春郊：春の郊外の野原。○挾彈：現在のパチンコのように玉で獲物を撃つ道具。○五陵：漢の高帝以下五人の帝の墓があるところの付近、豪遊の人が多く住んでいる。○年少：若者。○新豊：長安の東にある美酒の産地。○紫鞞：紫色のたずな。○銀鞍：銀の鞍。○玉驄：韋毛馬の美称。○遲迴：ぶらぶらする。

★ 一鑑亭

一鑑亭いつかんといで

明 金元立

桃源不隔鳳城遙

桃源 隔たず 鳳城ほうじょう 遥なり

翠瑣朱欄十二樓

翠瑣すいさ 朱欄しゆらん 十二樓

荷葉滿塘香露白

荷葉 塘に満ち 香露白し

玉人乘月坐吹簫

玉人 月に乗じて 坐して簫を吹く

【語釈】

○一鑑亭…不祥。○桃源…桃源郷。○鳳城…長安。○翠瑣…鎖模様を施した緑色の宮門。
○朱欄…朱色の欄干。○荷葉…蓮の葉。○塘…池。○玉人…玉のように高潔な人。○乗月…月明かりのもとで。

★ 晚眺

晚眺ばんちよう

明 趙迪

白雲深處野人家

白雲 深き処 野人の家

倚杖閒吟日未斜

杖よに倚りて 閑吟かんぎんすれば 日は未だ斜めならず

江上數峯看欲盡

江上の數峰 看れば 尽きんと欲す

晚鐘殘月入蘆花

晚鐘 殘月 蘆花に入る

【語釈】

○野人…野にあって仕えぬ人。○閒吟…閑かに吟ずること。

★揚州

揚州ようしゅう

明曾榮

翠裙紅燭夜調笙

翠裙すいくん紅燭こうしよく夜笙を調す

一曲嬌歌萬種情

一曲の嬌歌きょうか万種ばんしゆの情

二十四橋春水綠

二十四橋春水綠なり

蘭橈隨處傍花行

蘭橈らんぎょうは隨處ずいじょ花に傍そばいて行く

【語釈】

○揚州：江蘇省揚州市。○翠裙：緑色の裾。○紅燭：赤い灯火。○嬌歌：なまめかしい歌、美しい歌。○二十四橋：揚州にある24の石橋。○蘭橈：小舟の美称。

★塔頂

塔頂

明郭登

塔頂新晴獨自登

塔頂新晴独みずかり自ら登る

畫欄高倚十三層

画欄高よく倚よる十三層

不知眼界高多少

知らず眼界高たかきこと多少なるを

地上行人似凍蠅

地上の行人こうじん凍蠅とうように似たり

【語釈】

○新晴：雨あがりの晴。○画欄：彩色された欄干。○眼界：目の届く範囲。○行人：行き交う人。○凍蠅：氷った蠅。

★ 春日泛爽亭

春日の泛爽亭ぼうそうてい

明 楊承鯤

江畦高城背日斜

江畦かうけい 高城たかき 背日斜はいじつめなり

竹西茅屋是漁家

竹西ちくせいの茅屋こ 是れ漁家

南山雨歇春流急

南山 雨歇やんで 春流急なり

多少遊魚上淺沙

多少の遊魚せんさ 淺沙せんさに上る

【語釈】

○江畦：川の側の畑。○背日：夕陽。○茅屋：茅ぶきの家。○是…は動詞にあたり、「コレ」と訓読する。○多少：多く。○淺沙：沙底の浅い川。

★ 湖上暮歸

湖上暮に帰る

明 史 鑒

鴨群呼去水雲空

鴨群かうぐん 呼び去る 水雲の空

香滴菘花露氣濃

香滴かうか 菘花こまや 露氣濃こまや かなり

僧寺茫茫看不見

僧寺ぼうぼう 茫茫 看れども見えず

暮煙生處忽聞鐘

暮煙 生ずる処 忽ち鐘を聞く

【語釈】

○水雲：水と雲。○菘花：おおだての花。○茫茫：あきらかでないさま。○暮煙：夕餉の煙。

★ 觀城歌

觀城の歌

明 邊 貢

睥睨連雲十二樓

睥睨^{へいげい}す雲に連なる 十二樓

西南形勝數荆州

西南の形勝 荆州^{けいしゅう}を数う

已教峴首為屏繞

已に峴首^{けんしゅ}をして 屏と為りて繞らしめ

更遣巴江作帶流

更に巴江^{はこう}をして 帶と作りて流れしめん

【語釈】

○觀城：山東省聊城市莘県。○睥睨：流し目で見る。にらむ。○形勝：地勢、風景などの優れていること。○荆州：湖北省、湖南省と四川省の一部。○峴首：湖北省襄陽県の南にある峴山。○巴江：重慶のあたりを流れる川。

★ 春日漫興

春日漫興

明 李夢陽

十日不出花盡開

十日出でざるに 花開き尽くす

城南城北看花來

城南城北 花を看て來たる

即教閉戸從花盡

即ち戸を閉じて 花の尽くるに従わしめ

莫遣看花不醉廻

花を看て 醉わずして 廻らしむる莫かれ

【語釈】

○漫興：一時の感興に乗じて作った詩。

★終南篇

終南篇

明 何景明

離宮別館舊京華
離宮の別館 旧京華
表裏關河屬漢家
表裏の関河 漢家に属す
二閣天圍青錦帳
二閣の天圍 青錦の帳
五臺雲湧石蓮花
五台 雲湧く 石蓮花

【語釈】

○終南：陕西省西安市の終南山、隱棲の地。○京華：帝都。○關河：函谷関等の関と黄河。○五臺：中尚書、門下省、中書省、秘書省、禦史台の総称。○石蓮花：景天科植物。ハリソゴ。

★溪上漫興

溪上漫興

明 何景明

雙飛灘鷓戀青莎
双飛そうひの灘鷓けいちよく 青莎せいさを恋い
對舞蜻蛉愛碧波
對舞ついでの蜻蛉せいらい 碧波を愛す
一夕水風開菡萏
一夕の水風 菡萏かんだんを開き
畫船齊唱採蓮歌
画船 齊唱す 採蓮歌

【語釈】

○漫興：なんとなく催した感興。○雙飛：つがいで飛ぶ。○灘鷓：おしどり。○青莎：青いハマナスゲ。○對舞：対を為して舞う。○蜻蛉：とんぼ。○菡萏：蓮の花のまだ開かぬもの。○画船：彩色された船。○採蓮歌：樂府の曲の一つ、蓮を採るときの歌で、男女の相愛を歌う。

★ 郊行

郊行

明 莊 昶

凌兢瘦馬踏春泥
凌兢の瘦馬 春泥を踏み
雪後郊原綠未齊
雪後の郊原 緑未だ齊わらず
一抹午煙風隔斷
一抹の午煙 風隔斷す
野鷄聲在竹林西
野鷄の聲は 竹林の西に在り

【語釈】

○凌兢：寒さに戦慄するさま。○春泥：春の雪解けの水。○郊原：原野。○午煙：昼餉の煙。○隔斷：隔て開く。

★ 飲龍井

龍井を飲む

明 孫一元

眼底閑雲亂不開
眼底の閑雲 乱れて開かず
偶隨麋鹿入林來
偶また 麋鹿に随って 林に入りて来る
平生於物元無取
平生 物に於いて 元取る無し
消受山中水一杯
消受す 山中の水一杯

【語釈】

○龍井：浙江省餘姚縣の龍泉寺にある井戸。○閑雲：のんびり漂う雲。○麋鹿：鹿。○平生：つねひごろ。○消受：受けて用いる。

★遊淮曲

遊淮曲

明 王 謳

高捲珠簾白玉鉤
吳歌楚舞幾時休
市橋燈火三庚後
客醉歸來月滿樓

高く珠簾を捲く白玉の鉤
吳歌 楚舞 幾時にか休む
市橋の灯火 三庚の後
客酔いて 帰り来れば 月楼に満つ

【語釈】

○珠簾：珠でできた簾。○鉤：簾などを捲き上げて吊す留め金。○三庚：真夜中。

★春城曲

春城曲

明 金 鑾

雨餘芳草遠萋萋
春暖遊人信馬蹄
日暮畫樓歸去晚
落花香裏路東西

雨余の芳草 遠く萋々
春暖くして 遊人 馬蹄に信す
日暮れて 画楼 帰り去る晚
落花香裏 路 東西す

【語釈】

○雨餘：雨上がり。○萋萋：草木が生い茂っているさま。○遊人：旅人。遊びに出かけた人。○畫樓：絵や色彩で飾られた楼。

★ 横翠樓

横翠樓

明 華 察

溪邊畫閣霞春輝

溪辺の画閣 春輝 霞たり

雲外高窗面翠微

雲外の高窓 翠微に面す

遙望仙人練丹處

遙かに望む 仙人 丹を練る処

朝朝常見五雲飛

朝々 常に見る 五雲 飛ぶを

【語釈】

○横翠樓…不祥。○畫閣…絵や色彩で彩られた閣。○春輝…春の光。春の日。○翠微…山
のみどりの深いひっそりとした中腹のあたり。○丹…仙薬の一つ。○朝朝…毎日。○五雲
…五色の瑞雲。

★ 清虚閣

清虚閣

明 華 察

月上孤峯静夜分

月は孤峰に上り 静夜分る

憑高四望斷塵氣

高きに憑りて 四望し 塵気を断つ

天空萬籟人俱寂

天空 万籟 人と俱に寂なり

惟有疎鐘在白雲

惟だ 疎鐘の 白雲に在る有り

○清虚閣…不祥。○四望…四方をながめやる。○萬籟…万物の風で起こる響き。

★春望

春望

明

李先芳

芳草萋迷一徑斜

芳草萋迷して一徑斜なり

澹煙疏雨諫新鴉

澹煙疏雨新鴉を諫がす

城南春色濃於酒

城南の春色酒よりも濃し

醉殺千林桃杏花

醉殺す千林桃杏花の花

【語釈】

○春望：春の眺め。○萋迷：草木が盛んに生い茂るさま。○澹煙：薄い靄。○新鴉：生まれ
れたばかりの烏。○春色：春景色。○醉殺：すっかり酔わせる。

★蓬萊閣

蓬萊閣

明

吳維嶽

群山映帶曙霞開

群山映帯して曙霞開く

千尺巉巖海上臺

千尺の巉巖海上の台

仙馭有無春色裏

仙馭の有無春色の裏

長空雲盡鳥飛廻

長空雲尽き鳥飛び廻る

【語釈】

○蓬萊閣：不祥。○映帶：色つや又は景色の彩りが互いに写り合う。○曙霞：曙の霞。○
巉巖：高く峻しいいわお。○仙馭：鶴（仙人の乗り物）。○春色：春景色。春の世界。

★ 同明卿惟敬登太白樓

明卿惟敬めいけい いけいととも同どうに太白樓たいはくろうに登のぼる

明 除中行

醉携すい仙客せんかく上雲梯じやううんたい

酔すいいて仙客せんかくを携たづなえて雲梯うんたいを上のぼる

睥睨へいげい烟霽えんせい萬象ばんざう低ひ

睥睨へいげいす煙霽えんせい萬象ばんざうの低ひきを

即欲じやく乘風じやうふう登日觀じつかん

即じやくち風ふうに乗のりじて日觀じつかんに登のぼらんと欲ほす

蒼茫そうぼう海色かいしき使人し迷ま

蒼茫そうぼうたる海色かいしき人ひとをして迷まわ使しむ

【語釈】

○明卿惟敬：不祥。○太白樓：安徽省黃山市太白樓李白が訪れた。○仙客：仙人のような高潔な人、明卿惟敬を言う。○雲梯：雲の梯子。仙人などが空に登っていくときに用いる。○睥睨：流し目で見る。にらむ。○烟霽：かすんだ空。○万象：万物。○日觀：山東省泰安市日觀峰。○蒼茫：水面などの青々として果てしなく広いさま。

★ 西湖采蓮曲

西湖采蓮曲せいこさいれんせききょく

明 伊臺

湖市羅裙映玉缸

湖市の羅裙らくん玉缸ぎよくわうに映うつず

蘇堤楊柳拂船窓

蘇堤の楊柳えんりう船窓せんそうを払はらう

采蓮誤觸鴛鴦起

采蓮さいれん誤ごつて鴛鴦えんおうに触ふれて起たき

飛向花間還自雙

飛とびて花間おに向むかいて還かへり自おのずから双ならぶ

○羅裙：薄絹の裳裾。○玉缸：細長い素焼きの瓶の美称。○蘇堤：西湖にある蘇軾が作った堤。○采蓮曲：蓮を採るときの労働歌で、樂府の一つ。男女の情を歌う。○采蓮：采蓮船。○采蓮：采蓮船。○鴛鴦：おしどり。○向：場所を示す前置詞。○雙：つがいになる。

★金陵元夜

金陵元夜

明 歐大任

舊京門巷盛繁華
雙鳳銜燈出帝家
寶馬嘶殘三市月
玉笙吹過五陵花

旧京門巷繁華盛なり
双鳳灯を銜え帝家を出ず
宝馬嘶き残る三市の月
玉笙吹き過ぐ五陵の花

【語釈】

○金陵：南京。○元夜：正月十五日、上限節の夜。○舊京：旧都。○門巷：家の門と町中の道。○繁華：繁栄して美しいさま。○雙鳳：一对の鳳凰。○帝家：皇宮。○寶馬：貴重な駿馬。○三市：大市、朝市、夕市の三つの市。○玉笙：笙の美称。

★若耶詞

若耶詞

明 潘明臣

嫣然越女勝荷花
蕩漾輕舟過若耶
紅藕牽絲風欲斷
綠楊撩影日初斜

嫣然たる越女荷花に勝る
蕩漾たる輕舟若耶を過ぐ
紅藕糸を牽け風断たんと欲す
綠楊影を撩えて日初めて斜めなり

【語釈】

○若耶：江蘇省紹興市の南にある山、溪。○嫣然：素直で美しいさま。しとやかなさま。○越女：越（紹興市のあたり）の女、西施をはじめ美女が多い。○荷花：蓮の花。○蕩漾：揺るぎ動く。○輕舟：軽やかな小舟。○紅藕：赤いレンコン。

★ 青溪

青溪

明 沈明臣

窈窕清溪盡日尋
窈窕^{ようちよう}たる清溪 尽日尋ぬ
雨收風歇翠沈沈
雨収まり 風歇^やんで 翠^{みどり} 沈々
一雙燕子翻花出
一雙の燕子 花を翻^{ひるがえ}して出^いで
始覺人家住隔林
始めて覚ゆ 人家の住して 林を隔つるを

【語釈】

○窈窕：容貌の美しいさま。○盡日：一日中。○沈沈：草木がさかんに生い茂っているさま。○人家住：人家が在る。

★ 春日湖上

春日湖上

明 劉泰

步逐東風踏軟沙
歩して 東風を逐^おい 軟沙^{なんさ}を踏む
背人驚鷺去斜斜
人に背き 鷺を驚かして 去ること斜々たり
兩株紅杏疏籬外
兩株の紅杏 疏籬^{そり}の外
知是湖村賣酒家
知る 是れ 湖村 酒を売る家

【語釈】

○東風：春風。○去：行く。○斜斜：斜めなさま。○兩株：二株。○疏籬：まばらな垣根。

★ 春日湖上

春日湖上

明 劉 泰

小鬟扶處醉曹騰

小鬟しょうかん扶たすくる処 醉曹騰すいぼう とうぐ

落日寒生半臂綾

落日 寒は生なず 半臂はんびの綾あや

燕子不來春尚淺

燕子來きんらず 春尚お浅あし

湖陰留得未消冰

湖陰こいん 留とどめ得たり 未だ消えざる氷

【語釈】

○小鬟：女の召使い。○醉曹：酔った状態の人。○騰：馳せる。跳び上がる。○半臂綾：袖の短い、又は無い薄絹の上衣。○湖陰：湖の日影の部分。

★ 夏日登樓

夏日登樓

明 謝 鰲

一林疎竹半池萍

一林の疎竹 半池ひようの萍

高閣涼多酒易醒

高閣 涼多く 酒醒め易し

隔浦夕陽孤島外

浦を隔せきつる夕陽 孤島そとの外

白雲飛斷亂山青

白雲 飛断し 乱山青し

【語釈】

○萍：うきくさ。

★湖上梅花歌

湖上梅花の歌

明 王稚登

山煙山雨白氤氳

山煙 山雨 白氤氳いんうん

梅蕊梅花濕不分

梅蕊 梅花 湿りて分れずしめ

渾似高樓吹笛罷

渾て似たり 高樓にて 笛を吹き罷むすべ

半隨流水半為雲

半ばは 流水に随い 半ばは雲と為る

【語釈】

○山煙：山にかかっている靄、霞。○氤氳：天地の気の盛んなさま。○梅蕊：梅の花の蕊の部分。

★湖上梅花歌

湖上梅花歌

明 王稚登

虎山橋外水如煙

虎山橋外こざんきょうがい 水煙の如し

雨暗湖昏不繫船

雨暗く湖昏くらくして 船を繫がず くら

此地人家無曆日

此の地の人家 曆日無し

梅花開日是新年

梅花開く日は 是れ新年

【語釈】

○虎山橋：不祥。○煙：靄、霞。○曆日：曆により日を知ること。

★ 雑言

雑言ざつげん

明 王稚登

凍雲寒樹曉模糊
水上樓臺似畫圖
紅袖誰家乘小艇
捲簾看雪過鴛湖

凍雲寒樹 曉に模糊ももこたり
水上の樓台 画図に似たり
紅袖こうしゆう 誰が家か 小艇に乗る
簾を捲き雪を看て 鴛湖えんこうを過ぐ

【語釈】

○雑言：よもやまの事を詠った詩。○模糊：はっきりしないさま。ぼんやりしているさま。○紅袖：赤い袖で転じて美人。○鴛湖：浙江省嘉興の西南にある湖。湖中に煙雨楼がある。

★ 白下春遊曲

白下春遊の曲

明 金大輿

江南春暖杏花多
拾翠尋芳逐隊過
滿地綠陰鋪徑轉
隔枝黃鳥近人歌

江南 春暖くして 杏花多し
翠すいを拾い 芳ほうを尋ねて 隊おを逐いて過ぐ
滿地の綠陰 徑ほを鋪して転じ
枝を隔つる黄鳥 近人の歌

【語釈】

○白下：南京の西北の地。○江南：長江下流の南側の地方。○拾翠：婦女子の春遊びをいう。○尋芳：美しい景色を賞して遊ぶ。○逐隊：多くの人に從つて。○鋪：広げる。○黄鳥：コウライウグイス。

★ 白下春遊曲

白下春遊の曲

明 金大輿

白馬金鞍遊冶郎
醉攜紅袖上梅岡
銀鈿金雁春風裏
指點江山坐夕陽

白馬金鞍遊冶郎
醉いて紅袖を携えて梅岡に上る
銀鈿金雁春風の裏
江山を指点し夕陽に坐す

【語釈】

○白下…南京の西北の地。○遊冶郎…風流な若者。○紅袖…赤い袖で転じて美人。○銀鈿…銀でできたかんざし。○金雁…金属製の雁をかたどった飾り。○指點…手で物を指し示す。

★ 白下春遊曲

白下春遊の曲

明 金大輿

何處佳人婀娜妝
青山初日照流黃
輕羅半掩金跳脱
春寺燒香繞畫廊

何れの処の佳人か婀娜の妝
青山の初日照流黄を炤にす
輕羅半ば掩う金跳脱
春寺香を焼いて画廊を繞る

【語釈】

○白下…南京の西北の地。○婀娜…軽く柔らかくて美しいこと。○初日…朝日。○炤…明るく照らす。○流黄…褐黄色。○輕羅…軽い薄絹。○金跳脱…歯の腕輪。○畫廊…絵や色彩で彩られた廊下。

★夜同黄白中步至孤山尋梅

明 謝肇淛

夜黄白中ともと同じこざんに歩して孤山に至り梅を尋ぬ

望湖亭上大堤斜

望湖亭上ぼうこていじょう 大堤 斜めなり

夜到孤山處士家

夜に到る 孤山処士の家

殘冬滿林霜月暗

殘冬 林に滿ち 霜月暗し

不知何處是梅花

知らず 何れの処か 是れ梅花

【語釈】

○黄白中…不祥。○孤山…西湖中であつた山。林逋の隱棲地。○望湖亭…西湖にあつた亭。○大堤…白居易が西湖に作つた堤、白堤。○孤山処士…林逋。○是…さる動詞にあたり「コレ」と訓読する。

★靈源洞曉起

靈源洞れいげんどう 曉に起く

明 安國

拂曙禪房夢乍醒

拂あけぼのを払う禪房 夢 乍たちまち醒む

數聲啼鳥倚欄聽

數聲の啼鳥 欄に倚りて聽く

海上霞出樹凝紫

海上 霞 出で 樹紫を凝らす

天際雲來山斷青

天際 雲來りて 山 青を断つ

【語釈】

○靈源洞…不祥。○禪房…禪室。禪寺。○欄…欄干。○天際…空の果て。

★春郊即事

春郊即事

明 宋登春

春風嫋嫋夕陽西
芳草菲菲楊柳隄
行盡溪山有茆屋
青林深處一鳩啼

春風嫋嫋夕陽の西
芳草菲菲楊柳の隄
行き尽くす溪山 茆屋有り
青林 深き処 一鳩啼く

【語釈】

○春郊：春の郊外の野原。○即事：事にふれて、その場に應じて詩を作ること。○嫋嫋：しなやかで美しいさま。○芳草：美しい草。○菲菲：草木の茂るさま。○茆屋：茅吹きの家。

★晚登九華山

晩に九華山に登る

明 吳兆

望江亭望晚江晴
颯颯秋兼風水聲
寺隔數峰猶未到
禪燈幾點翠微明

望江亭望 晩江の晴
颯々たる秋は兼ね 風水の聲
寺は数峰を隔て 猶お未だ到らず
禅灯幾点 翠微明たり

【語釈】

○九華山：安徽省青陽県西南の山。○望江亭：不祥。○颯颯：風のさつとふくさま。また、その形容。

★ 晩歸

晩に帰る

明 鬨宗仁

送客歸來息樹根

客を送りて 帰り来たり 樹根に息う

蕭疏楓葉掩柴門

蕭疏たる楓葉 柴門を掩う

暮煙未即全遮眼

暮煙 未だ即ち 全くは眼を遮らず

猶露橋西一兩村

猶お 露おす 橋西 一兩村

【語釈】

○蕭疏：寂しくまばらなさま。○柴門：柴で作った粗末な門。○暮煙：ゆうもや。○露：つゆでぬらす。

★ 寓玉清觀

玉清觀に寓る

明 葉子奇

徑草微微護淺沙

徑草 微々 淺沙を護る

小山叢竹玉清家

小山の叢竹 玉清の家

牽牛延蔓無多碧

牽牛 延蔓し 多碧 無し

點綴秋光一兩花

秋光を點綴す 一兩花

【語釈】

○寓：仮に宿泊する。○玉清觀：不祥。○叢竹：叢がった竹林。○玉清：高潔。○牽牛：牽牛花、あさがお。○點綴：ほどよくとりあわせて飾る。○秋光：秋景色。

★石湖

石湖

明 周砥

煙中白鶴獨飛還
煙中白鶴 独り 飛び還るかえ
相伴孤雲盡日閑
相に伴う 孤雲 尽日 閑なりしずか
落日放船湖水上
落日 船を放つ 湖水の上
一簾秋色看青山
一簾の秋色 青山を見る

【語釈】

○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○煙中：霧、霞の中。○秋色：秋景色。

★長橋

長橋

明 蘇大年

綠陰高樹映清潭
綠陰 高樹 清潭に映ずせいたん
一舸夷猶酒半酣
一舸の夷猶 酒半ば 酣なりたけなわ
最愛西城城下路
最も愛す 西城 城下の路
長橋煙雨似江南
長橋の煙雨 江南に似たり

【語釈】

○清潭：清い淵。○一舸：一つの小舟。○夷猶：ためらっていること。○煙雨：こぬか雨。○江南：長江中下流の南岸地方。

★華陽雜韻

華陽雜韻

明 廖孔説

林間風靄日氤氳

林間の風靄かぜあい 日氤氳いんうん

乍露孤峰半未分

乍たちまち孤峰を露あらわして 半わかば未だ分たず

一夜雷聲在山下

一夜雷聲 山下に在り

始知身出萬重雲

始めて知る 身ばんちようは万重の雲を出でしを

【語釈】

○華陽：四川省成都市武侯区。○雜韻：とりとめも無く作った詩。○風靄：風にたなびく靄。○氤氳：気の和らぐさま。○萬重：多く重なり合う。

★古塘即事

古塘即事ことうそくじ

明 張金

布穀聲中日又斜

布穀聲中ふこくせいちゆう 日又斜なり

石橋流水兩三家

石橋 流水 兩三家

鄉村春色無人管

鄉村の春色 人の管する無し

開盡棠梨幾樹花

開き尽す棠梨とうり 幾樹の花

【語釈】

○古塘：古い堤。○即事：事に触れて、その場のことを題材にして詩を作る。○布穀：呼子鳥。○春色：春景色。○棠梨：野生の梨。

★ 竹枝詞

竹枝詞 ちくしし

明 朱妙端

横塘秋老藕花殘

横塘 秋 老いて 藕花 殘す くわう かざん

兩兩吳姬蕩槳還

兩々の 吳姬 槳を 蕩かして 還る かじ うご かえ

驚起鴛鴦不成浴

鴛鴦を 驚起し 浴を 成さず えん おう

翩翩飛過白蘋灘

翩翩として 飛び過ぐ 白蘋の 灘 へん べん かくひん かね

【語釈】

○竹枝詞：劉禹錫が左遷されていたときに土地の民謡をもとに作った詩の形態、男女の情愛や土地の風俗を詠う。○横塘：南京市の西南にある堤。○藕花：蓮の花。○殘：損なわれる。○吳姬：吳の地方出身の妓女、美人が多い。○鴛鴦：おしどり。○翩翩：鳥が身軽に飛ぶさま。○白蘋：白い浮き草。○灘：早瀬。

★ 曉過横塘

曉に横塘を過ぐ

明 戒襄

半幅蒲帆九里汀

半幅の 蒲帆 九里の 汀 ほはん たい

石湖秋水接天青

石湖の 秋水 天に 接して 青し

舟人指点蘼蕪外

舟人 指点す 蘼蕪の 外 びふ ぶ

一帶青山是洞庭

一帶の 青山 是れ 洞庭

【語釈】

○横塘：南京市の西南にある堤。○半幅：一幅は二尺二寸、ここでは余り意味は無い。○蒲帆：蒲で作った帆。○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○指点：指さして示す。○蘼蕪：センキュウの苗。○洞庭：洞庭湖、湖南省北部にある大湖。

★立玉亭

立玉亭りつぎよくてい

明法聚

山當崖斷孤亭立
山は崖斷がいだんに当たり孤亭立つ
竹樹廻環翠萬層
竹樹かいかん廻環し翠みどり万層
倒看夕陽深澗底
倒さかしまに看る夕陽せきよう深澗しんかんの底
不知雲外有歸僧
知らず雲外に歸僧有るを

【語釈】

○立玉亭…不祥。○崖斷…切り立った崖。○廻環…回り廻る。○深澗…深い谷。○雲外…雲の彼方。

★西湖曉行

西湖曉行

明清澹

海角瞳矐日欲生
海角瞳矐日生ぜんと欲す
山南山北淡煙横
山南山北淡煙横わる
春風吹斷沙禽夢
春風吹斷すいだん沙禽さきんの夢
人在綠楊隄上行
人は綠楊隄上に在りて行く

【語釈】

○西湖…浙江省杭州の西にある風光明媚な湖。○海角…海のはて。○瞳矐…日が初めて出るとききの薄明かりがさすさま。○淡煙…淡い靄。○沙禽…砂浜に棲息する鳥。

★ 漁村夜歸

漁村夜歸

明 宗 衍

月落蘋汀宿霧凝
小橋霜冷挂漁罾
歸來已是三更後
水際人家尚有燈

月は 蘋汀ひんていに落ちて 宿霧凝る
小橋 霜 冷く 漁罾ぎよそうを挂く
歸り来たるは 已に 是れ 三更の後
水際の人家 尚お灯有り

【語釈】

○蘋汀：浮き草の生えた渚。○宿霧：夜来の霧。○漁罾：魚を捕る網。○三更：真夜中。

★ 百嘉村見梅花

百嘉村に梅花を見る

清 龔鼎孳

天涯疎影伴黃昏
玉笛高樓自掩門
夢醒忽驚身是客
一船寒月到江邨

天涯の疎影 黃昏こうこんを伴い
玉笛 高樓 自おのずから門おおを掩う
夢醒めて 忽ち驚く 身は是れ客これなるを
一船 寒月 江村に到る

【語釈】

○百嘉村：不祥。○天涯：空のはて。○疎影：梅の異称。○黄昏：たそがれ。○玉笛：笛の美称。○是：be動詞にあたり「コレ」と訓読する。○客：旅人。○江村：川辺の村。

★ 上接筍峰至隱屏絕頂

接筍峰せつしゅんほうに上りて隱屏絕頂いんぺいぜつちやうに至る

清

施閨章

躡盡危梯倚翠微

危梯きていを躡盡じやうじんして翠微すいびに倚よる

松門巖屋坐忘歸

松門 巖屋 坐して歸るを忘る

雨從天柱峰頭過

雨は 天柱峰頭てんちゆうほうとうに従つてに過ぎ

雲向臥龍潭上飛

雲は 臥龍潭上がりようたんじやうに向つて飛ぶ

【語釈】

○接筍峰：福建省南平市の接筍峰。○隱屏：不祥。○危梯：危険な梯子（のような山道）。○躡盡：踏み尽くす。○松門：自然の松を門とした物。○天柱峰：福建省南平市天柱峰。○臥龍潭：貴州省黔南臥龍潭。

★ 西湖竹枝

西湖竹枝せいこちゆうし

清

施閨章

荷葉橫塘官路斜

荷葉 橫塘 官路 斜めなり

吳姬日出浣春紗

吳姬 日出でて 春紗しゆんさを浣う

兒家種蓮取蓮実

兒家 蓮を種え 蓮実れんじつを取る

囑付遊人莫采花

遊人に囑付しよくふして 花を采る莫なかれ

【語釈】

○西湖：浙江省杭州市にある風光明媚な湖。○竹枝：劉禹錫が左遷されていたときに土地の民謡をもとに作った詩の形態、男女の情愛や土地の風俗を詠う。○橫塘：横にある水塘。○吳姬：吳の地方の妓女。美人が多い。○春紗：うすぎぬの春着。○兒家：青年期の女性。○囑付：いいつける。頼む。○遊人：旅人。

★ 荷湖館

荷湖館 かこかん

清 施閨章

隔林烟火幾人家

林を隔つる煙火幾人家

古廟江頭噪晚鴉

古廟江頭 こびょうこうとう 噪ぐ なわ 晚鴉 ばんあ

欲問芰荷香寂寂

問わんと欲す きか 芰荷 かおり 香寂々 せきせき

一川新漲白蘋花

一川 みなぎ 新に漲る はくひんか 白蘋花

【語釈】

○荷湖館…不祥。○古廟江頭…古い廟のある川のほとり。○芰荷…ひしとはす。○寂寂…さびしく静かなさま。○白蘋花…白いうきくさ。

★ 黃花谷

黃花の谷

清 申涵光

竹杖尋源入上方

竹杖 ちくじょう 源を尋ね 上方に入る い

滿山榭葉晚蒼蒼

滿山の榭葉 こくよう 晩に蒼々 そうそう

亂碑零落遊人少

亂碑 れいらく 零落し 遊人 まれ 少なり

一道飛泉下夕陽

一道の飛泉 せきよう 夕陽に下る

【語釈】

○黃花…黄色い花。菊。○竹杖…竹を杖にして。○上方…上界。○榭葉…かしわの葉。○蒼蒼…さかなさま。○零落…草木が枯れ落ちること。○遊人…旅人。

★ 汎舟明湖

舟を明湖に汎ぶ

清 申涵光

四郭山圍嵐氣昏

四郭山圍みて嵐氣昏し

竹籬疎樹一江村

竹籬疎樹一江の村

醉中見月忘風露

醉中月を見て風露を忘る

夜半吹簫過水門

夜半の吹簫水門を過ぐ

【語釈】

○明湖：明浄な湖。○四郭：城郭の四周。

★ 馬上回望中條口号

馬上中條を回望す口号

清 黄文驥

辭滿期年心自閑

滿を辞し年を期して心自ら閑なり

中條盡日白雲間

中條尽日白雲の間

從茲更去向五湖

茲こゝより從り更に五湖に向つて去り

看遍五湖湖上山

看遍かんへんす五湖湖上の山

【語釈】

○中條：山西省運城市中條山。○回望：振り返り望む。○口号：紙に書かずに作った即興の詩。○看遍：あまねく看る。○五湖：五つの湖、諸説あり特定不能。

★真州雜詩

真州雜詩

清 王士禛

江干多是釣人居

江干 多く是れ 釣人の居ちやうじん きよ

柳陌菱塘一帶疎

柳陌 菱塘 一帶に疎なりりゆうはく りやうとう まぼら

好是日斜風定後

好きかな是れ 日斜めにして 風定まる後

半江紅樹賣鱸魚

半江の紅樹 鱸魚を売る

【語釈】

○真州：江蘇省揚州市儀征市。○江干：川の畔。柳陌：柳を植えた道。○菱塘：菱を植えた堤。○半江：川の片側。○鱸魚：日本のすずきに似た淡水魚。

（参考文献）『中国詩人撰集二—13』

★山行

山行

清 劉逢源

寂歴空山鹿豕蹤

寂歴せきれきたる空山 鹿豕ろくしの蹤

石樑苔滑椅孤筇

石樑せきりよう 苔なめらか 滑なめらかにして孤筇こせつに椅よる

岸花零落隨流去

岸花れいらく 零落して 流ながれに随なって去り

秋到溪南第幾峰

秋は到る 溪南の第幾峰

【語釈】

○寂歴：ひっそりとして物寂しいさま。○空山：人気の無い山。○鹿豕：鹿と猪。○石樑：…岩石のかど。○孤筇：一つの杖。○零落：草木が枯れ落ちること。○第幾峰：多くの峯。

★ 武夷九曲權歌

武夷九曲權歌

清 朱克生

一曲津亭入畫船 一曲津亭 画船に入る
江天落月滿平川 江天落月 平川に満つ
大王峯外浮雲散 大王峰外 浮雲散じ
兩岸鐘聲出曉煙 兩岸の鐘声 曉煙に出ず

【語釈】

○武夷九曲權歌：武夷山（黃崗山を中心とする山系の総称）の九曲溪を歌った舟歌。○一曲：九曲の内の第一曲（溪谷の曲がったところ）。○津亭：渡し場にある旅館。○画船：彩色された船。○大王峯：一曲にある峰。○曉煙：夕靄。

★ 金陵紀行

金陵紀行

清 顔光敏

身騎龍背上青霽 身は 竜背に騎り 青霽に上る
路轉峯迴出麗譙 路は 峰迴に轉じ 麗譙を出だす
雨氣全吞幽壑樹 雨氣 全て吞む 幽壑の樹
風聲直送大江潮 風声 直ちに送る 大江の潮

【語釈】

○金陵：南京。○青霽：あおぞら。碧空。○峯迴：峰がめぐる。○麗譙：美しい楼。○幽壑：奥深い谷。

★ 東湖曲

東湖の曲

清

朱彝尊

十里湖光一葉舟

十里の湖光 一葉の舟

五層塔火浴中流

五層の塔火 中流に浴す

曉來寺寺霜鐘急

曉來 寺々 霜鐘急なり

驚起啼鳥掠渡頭

啼鳥を驚起し 渡頭を掠む

【語釈】

○東湖：湖北省宜昌市の東にある湖。○一葉舟：一つの小舟。○渡頭：渡し場。○霜鐘：冬の明け方の鐘。○驚起：驚かせて起こす。

★ 山行

山行

清

高詠

滿谷寒煙日暮平

滿谷の寒煙 日暮に平かなり

松杉十里夜猿聲

松杉 十里 夜猿の聲

仙居尚在數峯外

仙居 尚お 數峰の外そとに在り

已覺此中非世情

已に覺ゆ 此の中 世情に非ざるを

【語釈】

○寒煙：さみしい靄。○仙居：仙人のすまい。世俗を超絶した清廉な住まい。

★ 遠眺

遠眺えんちよう

清 惲 格

暮雲千里亂吳峰
落葉微聞遠寺鐘
目盡長江秋草外
美人何處採芙蓉

暮雲千里 吳峰を乱す
落葉 微かに聞く 遠寺の鐘
目尽すもくじん 長江 秋草の外
美人 何れの処にか 芙蓉を採る

【語釈】

○吳峰：吳の地方の峰。○目盡：見尽くす。見渡す限り。○芙蓉：蓮の花。

★ 明湖別業

明湖の別業

清 張實居

平湖一望碧連天
臨水人家屋似船
翡翠巢來花砌下
慈姑生出卧床前

平湖 一望すれば 碧みどり 天に連なる
水に臨む 人家おく 船に似たり
翡翠ひすい 巢すくりて来る 花砌かさいの下
慈姑じこ 生出す 卧床がしょうの前

【語釈】

○明湖：不祥。○別業：別荘。○翡翠：かわせみ。○花砌：花の咲いたみぎわ。○慈姑：慈しみ深いしうとめ。

★ 澗山瀨

澗山瀨

清 張實居

漠漠漁村雪壓扉
江波不動釣船歸
畏人水鳥時驚去
直向寒山影裏飛

漠々たる漁村雪は扉を圧す
江波動かず釣船歸る
人を畏る水鳥時に驚きて去り
直ちに寒山影裏に向つて飛ぶ

【語釈】

○澗山瀨…不祥。○漠漠…ひっそりとしているさま。○寒山…秋から冬にかけての物寂しい山。

★ 石壁

石壁

清 湯右曾

迴崖沓嶂翠浮空
峭壁巉巉插水中
直是五丁開不得
天然暈出錦屏風

迴崖 沓嶂 翠空に浮ぶ
峭壁 巉々 水中に挿す
直に是れ五丁開いて得ず
天然 暈出す 錦屏風

【語釈】

○迴崖…曲がりくねった山崖。○沓嶂…幾重にも重なりあつた峰。○峭壁…壁のように険しく聳った崖。○巉巉…高く険しいさま。○五丁…力士。○暈出…暈のように重なって作り出す。

★海幢寺觀大水西下

海幢寺にて大水の西下するを觀る

清

沈用濟

鬱水西來萬壑奔

鬱水 西來して 万壑に 奔る

倒翻塔影盪雲根

塔影を倒翻して 雲根を盪す

中間一束高腰峽

中間 一束 高腰峽

直放驚濤出海門

直ちに驚濤を放ち 海門を出ず

【語釈】

○鬱水：重なり合った水。○西來：西に向かって来る。○萬壑：多くの谷。○倒翻：倒転して空に飛び上げる。○雲根：山岩。○高腰峽：不祥。○驚濤：人心を驚かすような大波。○海門：河川が海に入るところ。

★洞庭始波

洞庭始めて波だつ

清

乾隆帝

滿天秋色晚雲低

滿天の秋色 晚雲低し

碧漲寒江遠欲迷

碧 漲る 寒江 遠くして迷わんと欲す

棹破煙波三百里

棹破す 煙波 三百里

好風吹送岳陽西

好風 吹き送る 岳陽の西

【語釈】

○洞庭：洞庭湖、湖南省北部にある巨大な湖。○秋色：秋景色。○寒江：寒々とした川。○棹破：舟を棹さして進め行き尽くす。○煙波：水面にかかった靄。○岳陽：岳陽楼。湖南省岳陽県の洞庭湖に面した楼閣。

★ 鶯脰湖詞

鶯脰湖詞

清

沈德潛

湖波起穀晚風餘
一抹殘霞畫不如
傍岸漁家盡收網
綠楊深處賣銀魚

湖波穀こくを起す 晚風の余
一抹の残霞 画しけども如しからず
岸に傍かたう漁家 尽ことごとく網を収め
綠楊 深き処 銀魚を売る

【語釈】

○鶯脰湖…不祥。○穀…縮緬のようなさざ波。○残霞…残った夕映え。

★ 西湖

西湖

清

沈德潛

十里長堤遍種花
花間搖蕩酒旗斜
大蘇風流人不識
偏問西冷蘇小家

十里の長堤 遍あまねく花を種ゆ
花間に揺蕩ようどうし 酒旗斜めなり
大蘇たいその風流 人は識しらず
偏あまねく問とう 西冷 蘇小そしょうの家

【語釈】

○西湖…浙江省杭州の西にある風光明媚な湖。○揺蕩…揺れ動く。○酒旗…酒屋の目印の旗。○大蘇…蘇軾。○問…訪問する。○西冷…浙江省杭州市西冷橋。○蘇小…小蘇、蘇轍。

★野渡

野渡

清

沈徳潜

弧村揺蕩酒旗風

弧村 揺蕩す 酒旗の風

野岸人家翠柳中

野岸の人家 翠柳の中

略似江南渡傍渡

略ぼ似たり 江南渡傍の渡に

一湾春水晚霞紅

一湾の春水 晚霞紅なり

【語釈】

○野渡：野原の渡し場。○揺蕩：揺れ動く。○酒旗：酒屋の目印の旗。○江南：長江中下流の南岸地方。○渡傍：不祥。○晚霞：夕焼け。

★西湖雜句

西湖雜句

清

沈徳潜

湖光宜雨最宜晴

湖光は 雨に宜しく 最も晴に宜し

好景偏憐夜色清

好景 偏憐すれば 夜色清し

十里畫船歌舞歇

十里の画船 歌舞歇み

月明静聴按琴聲

月明かにして 静に聴く 琴を按ずる声

【語釈】

○西湖：浙江省杭州の西にある風光明媚な湖。○雜句：とりとめもなく作った詩。○偏憐：特別に愛する。○夜色：夜の気配、夜の景色。○画船：彩られた船。○按：手で撫でる、弾く。

★ 西湖雜句

西湖雜句

清 沈德潛

數聲柔櫓畫波還 數聲の柔櫓 波を画かくして還る
暮色蒼然滿四山 暮色そうぜん蒼然として 四山しざんに滿つ
勘破西湖塵土夢 勘破かんぱす 西湖 塵土の夢
夜涼月白話禪關 夜涼く 月白くして 禪関ぜんかんに話す

【語釈】

○西湖：浙江省杭州の西にある風光明媚な湖。○雜句：とりとめもなく作った詩。○柔櫓：船を操るかけ声。○暮色：夕暮れの気配。○蒼然：日暮れの薄暗いさま。○勘破：見破る。○禪關：心を一に定め、妄念を除く法。

★ 漢川

漢川

清 周準

漢川城郭枕江堤 漢川の城郭 江堤まくらに枕す
黯澹烟波日乍低 黯澹あんたんたる煙波 日 乍たちまち低し
我欲停橈訪神女 我 橈かじを停めて 神女を訪わんと欲す
暮山無限楚雲西 暮山 限り無し 楚雲の西

【語釈】

○漢川：湖北省荊門市を流れる漢江。○枕：臨む。○黯澹：暗くてはつきりしないさま。○煙波：川面の靄。○橈：船をこぐ櫂。○神女：巫山の神女（『文選』宋玉）。○楚雲：楚の空の雲。

★ 過廢園

廢園を過ぐ

清 李 勉

誰家亭院自成春
窗有莓苔案有塵
偏是關心鄰捨犬
隔牆猶吠折花人

誰が家の亭院か 自ら春を成す
窓に莓苔有り 案に塵有り
偏に是れ 心に関す 隣捨の犬
牆をてて 猶お吠ゆ 花を折る人に

【語釈】

○亭院：建物の内側の庭園、苑。○莓苔：青苔。○案：机。○隣捨：隣の家。

★ 楊溪返棹

楊溪返棹

清 李 勉

薄暮清溪一棹開
片雲忽作數聲雷
前途昏黑不知處
龍挾海天風雨來

薄暮の清溪 一棹開く
片雲 忽ち作す 数声の雷
前途 昏黒 処を知らず
竜は 海天 風雨を 挾て来る

【語釈】

○楊溪：柳が生えている溪。○返棹：舟を返す。○一棹：一つの小舟。○片雲：ちぎれ雲。○昏黒：夕やみ、真っ暗なこと。○竜：雷を起こす龍神。

★南西門外即目

南西門外即目

清 恆 仁

澄潭初月影微微

澄潭^{ちようたん} 初月影 微微々たり

雨過涼生透葛衣

雨過ぎて 涼生じ 葛衣^{かつい}を透す^{とお}

十里亂蟬風兩岸

十里の乱蟬 風 兩岸

藕花香送釣船歸

藕花^{くわか} 香りて 釣船の帰るを送る

【語釈】

○即目：目の前の景色を詠った詩。○澄潭：澄んだ淵。○初月：三日月。○微微：奥深く
閑かなさま。○葛衣：葛で編んだ夏用の衣。○亂蟬：乱れ鳴く蟬。○藕花：蓮の花。

★江上

江上

清 石 年

春山春水碧迢迢

春山 春水 碧^{みどり} 迢々^{ちようちよう}

病起扶筇過野橋

病起 筇^{つえ}に扶けられて 野橋に過^よぎる

幾日不尋江上夢

幾日か尋ねず 江上の夢

東風吹長杜蘅苗

東風 吹長す 杜蘅^{とこらう}の苗

【語釈】

○岩岩：遙かなさま。遠いさま。○病起：病み上がり。○過…（くによぎる）と読むとき
は訪れる。（をよぎる）と読むときは通過するの意。○東風…春風。○吹長…吹いて長く
する。○蘅苗：草の名、葵の一種。

★ 出郊

出郊

清 祁文友

桃花點點萩長芽

桃花 点々 萩芽を長ず

出郭吟行到日斜

郭を出て 吟行し 日の斜なるに到る

一夜東風吹雨過

一夜 東風 雨を吹いて過ぎ

滿江新水長魚蝦

滿江の新水 魚蝦を長ず

【語釈】

○出郊：郊外の野原に行くこと。○郭：街を取り囲む城壁のうち外側のもの。○東風：春風。○魚蝦：水中の生物。

★ 遊揚州僧寺

揚州の僧寺に遊ぶ

清 龔元超

煙蘿深處石稜層

煙蘿 深き処 石稜 層をなす

翠竹玲瓏月作燈

翠竹 玲瓏として 月 灯と作る

聽是誰家吹玉笛

聴く是れ 誰が家か 玉笛を吹く

畫欄清冷夜深憑

画欄 清冷 夜深くして憑る

【語釈】

○揚州：江蘇省揚州市。○煙蘿：靄の籠めた蔦。○石稜：岩石の角。○翠竹：緑色の竹。○玲瓏：さえて鮮やかなさま。透き通るように美しいさま。○画欄：彩られた欄干。○清冷：清らかで透き通っているさま。○憑：寄りかかる。

★ 過松陵

松陵を過ぐ

清 程永作

橘柚秋風十里程

橘柚 秋風 十里の程

垂虹亭下水蕪平

垂虹亭下 水蕪平かなり

龍拖急雨長橋過

竜は急雨を拖せ 長橋を過ぐ

遮却吳江一半城

遮却す 吳江 一半の城

○松陵…不祥。○橘柚…橘と柚。○垂虹亭…不祥。○水蕪…みずな。○遮却…遮る。却是完了、完成を示す助字。○吳江…江蘇省蘇州市に位置する市轄区。○一半…半分。

★ 遊霞園

霞園に遊ぶ

清 張琦

峯巒曲折水淙淙

峰巒 曲折して 水淙々

花映蕃籬竹映窓

花は蕃籬に映じ 竹は窓に映ず

最好小亭東山望

最も好し 小亭 東山の望

青山缺處露秋江

青山欠く処 秋江を露す

【語釈】

○峯巒…重なった峰々。○淙淙…さらさらと水の流れるさま。○蕃籬…かきね。まがき。

★鄧尉山觀梅

鄧尉山の觀梅

清 張夢喈

山日初升静素暉

山日初めて升りて素暉静なり

梅花如雪満山圍

梅花雪の如く満山囲む

費家湖口支筇處

費家湖口筇を支える處

香氣晴烘客子衣

香氣晴れて烘る客子の衣

【語釈】

○鄧尉山…江蘇省蘇州市にある山。梅の名所。○素暉…白い光。○費家…心○客子…旅人。

★石湖秋汎

石湖の秋汎

清 劉璜

輕船斜向五湖開

輕船斜めに五湖に向かいて開く

秋水空明浸石苔

秋水空明 石苔を浸す

忽聽雲間鈴鐸響

忽ち聴く雲間に鈴鐸の響くを

楞伽山色送青來

楞伽の山色 青を送りて来る さんしよく

【語釈】

○石湖…江蘇省蘇州市の西南にある湖。○五湖…太湖のこと。○鈴鐸…すず。○楞伽山…江蘇省吳県の南西にある山。○山色…山の景色。山の気配。

★遊平山堂

平山堂に遊ぶ

清 履宗秦

韶光淡沲綺橋東

韶光 淡沲 綺橋の東

香海慈雲靄碧空

香海 慈雲 碧空に靄む

隔岸蘭舟橫玉笛

岸を隔つる 蘭舟 横玉笛

數聲吹散柳條煙

數聲 吹き散ず 柳条の煙

【語釈】

○平山堂…不祥。○韶光…春ののどかな景色。○淡沲…淡くかすんだ舟を泊めることができる入り江。○綺橋…華やかに飾りたてた橋。○香海…香りの漂う海。○慈雲…一面に広がった雲。○蘭舟…木蘭で作った美しい舟。○柳條煙…かすんで見える柳の枝。

★吳淞雜詠

吳淞雜詠

清 徐薊坡

蒲帆斜趁鯉魚風

蒲帆 斜めに趁う 鯉魚の風

卵色遙天浸碧空

卵色の遙天 碧空を浸す

幾點水萍花影外

幾点の水萍か 花影の外

滿灘涼雨浴鳧翁

灘に満つる涼雨 鳧翁を浴す

【語釈】

○吳淞…吳淞江、江蘇省蘇州市の松江。○雜詠…(主題を決めずに)色々なことを詠じた詩歌。○蒲帆…蒲で織った帆を持つ船。○鯉魚…鯉。○水萍…草の名、水辺に生えるおほぐさ。○鳧翁…雄の雞。

★ 柳湖春泛

柳湖春に泛ぶ

清 顧宗泰

蜻蛉一葉破空濛

蜻蛉一葉空濛を破り

暁色晴開遠翠濃

暁色晴開きて遠翠濃かなり

試向潮音高閣望

試みに潮音に向つて高閣より望めば

彎環九朶碧芙蓉

彎環九朶碧芙蓉 わんかん

【語釈】

○蜻蛉一葉…水をかすめるトンボのような小さな一つの小舟。○空濛…何も無い壕。○遠翠…遠く見える緑。○彎環…彎曲して輪のようになっていゝさま。○九朶…多くの枝。

★ 石湖舟中

石湖舟中

清 顧宗泰

楞伽山畔翠溟濛

楞伽山畔翠溟濛 りゆうがさんばん

十里横塘累約通

十里の横塘累約通ず

一路竹枝聲不斷

一路の竹枝聲断えず

蘭橈斜漾鯉魚風

蘭橈斜に漾う鯉魚の風

【語釈】

○石湖…江蘇省蘇州市の西南にある湖。○楞伽山…江蘇省呉県の南西にある山。○溟濛…雨がそぼ降つて薄暗いこと。又はその雨。○蘭橈…小舟の美称。○鯉魚…鯉。

★石湖舟中

石湖舟中

清

顧宗泰

鷓鴣點點撲晴沙

鷓鴣きょうせい 点々として 晴沙せいさを撲うつ

柳陌菱塘一逕斜

柳陌りよつじやう 菱塘 一徑斜いちけいしやなり

好是短篷疎雨歇

好よし是こゝれ 短篷たんぼう 疎雨そ歇やみ

嫩涼初放拒霜花

嫩涼びりよう 初はめて放はなつ 拒霜きよそうの花

【語釈】

○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○鷓鴣：足長サギとゴイサギ。○柳陌：柳を植えた道。○菱塘：菱の生えた池。○短篷：小舟。

★石湖舟中

石湖舟中

清

顧宗泰

穀紋新漲漫沙汀

穀紋みなき 新あたらしに漲なって 沙汀しやていに漫まつ

綠曲紅欄水面亭

綠曲 紅欄 水面の亭

遙望具區山色好

遙はかに望のぞむ 具區ぐく 山色好よし

彎環七十二峯青

彎環わんかん たり 七十二峯の青

【語釈】

○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○穀紋：穀物が風にそよいで紋をなすこと？○沙汀：砂の渚。○綠曲：。○紅欄：紅色の欄干。○具區：太湖のこと。○彎環：丸い形容。

★ 趙埠口

趙埠口 ちやうぶくちう

清 葉承宗

長隄密柳板橋連

長隄の密柳 板橋に連なる はんきよう

紅蓼花中繫釣船

紅蓼花中 釣船を繫ぐ こうりようかちゆう

漁父狂歌歸酒市

漁父 狂歌して 酒市に帰り

高竿掛網夕陽邊

高竿に網を掛く 夕陽の辺 せきよう ほとり

【語釈】

○趙埠口：不祥。○密柳：密集した柳の木。○紅蓼花：赤いたでの花。

★ 吳門雜詠

吳門雜詠 ごもんざつえい

清 楊學基

岩桂香飄艷素秋

岩桂け 香 飄えり 素秋 艶なり

石湖風静水悠悠

石湖 風静かに 水悠悠 いづゆゆう

洞簫吹出山頭月

洞簫 吹き出だす 山頭の月

兩岸輕煙半未収

兩岸の輕煙 半ば未だ収らず

【語釈】

○吳門：甘肅省甘谷県。○雜詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○素秋：秋。○石湖：江蘇省蘇州市の西南にある湖。○悠悠：のんびりしたさま。他と関わりなくゆったりしたさま。○洞簫：縦笛。○輕煙：かるい靄。

★ 吳門雜詠

吳門雜詠
しもんざつえい

清 楊學基

廻塘夜火刺船行
廻塘の夜火 船を刺して行く
かいとう

銀觸高燒水榭明
銀觸 高く焼いて 水榭明らかなり
すいしゃ

兩岸采菱歌不絶
兩岸 菱を采る 歌絶えず

木蘭舟上又吹簫
木蘭舟上 又た簫を吹く

【語釈】

○吳門：甘肅省甘谷県。○雜詠：（主題を決めずに）色々なことを詠じた詩歌。○廻塘：周りの堤。○水榭：水に望む台榭。水亭。

★ 夜夢遊秦淮

夜夢 秦淮に遊ぶ
しんわい

清 張香岩

雨餘山色浮天遠
雨余の山色 天に浮びて遠し

月下潮聲拍岸多
月下の潮声 岸を拍ちて多し

醉後不知身是夢
酔後 知らず 身は是れ夢なるを

半橋疎柳聽漁歌
半橋の疎柳 漁歌を聴く

【語釈】

○秦淮：南京市内を通る河の名、その兩岸は歓楽街であった。○雨余：雨上がり。○山色：山の景色。山の気配。

★ 龍溪即事

龍溪即事

清 宿鳳翀

石蘚青青石瀨清

石蘚 青々 石瀨清し

夜深扶醉逸溪行

夜深くして 酔を扶け 溪を遶りて行く

屐聲驚起幽棲鳥

屐聲 驚起す 幽棲の鳥

飛上山橋向月鳴

飛びて 山橋に上りて 月に向って鳴く

【語釈】

○龍溪…不祥。○即事…事にふれて、その場に応じて詩を作ること。○屐聲…履き物の音。○驚起…驚かせて起こす。○幽棲…隠れ住む。

★ 陽邱道中

陽邱道中

清 王敬公

谷口雲埋一逕斜

谷口 雲 埋みて 一径斜なり

荒巖老樹叫殘鴉

荒巖 老樹 殘鴉 叫ぶ

山村寂寞行人少

山村 寂寞として 行人少なり

落日風吹躑躅花

落日 風は吹く 躑躅花

【語釈】

○陽邱…山東省濟南市章丘市。○殘鴉…残っている鳥。○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。○躑躅花…つつじ。

★泰安道中

泰安道中

清 孔傳縱

東風拂面柳枝低
宛轉溪山路欲迷
十里桃花新過雨
夕陽遙映盧門西

東風 面を払って 柳枝低し
宛轉たる溪山路 迷わんと欲す
十里の桃花 新たな過雨
夕陽 遥かに映ず 盧門の西

【語釈】

○泰安：山東省泰安市。○東風：春風。○宛轉：変化すること。○盧門：不祥。○過雨：通り雨。○盧門：不祥。

★夢村

夢村

清 安致遠

丹楓黃菊晚秋圖
石碓奔流響轆轤
行過小橋人影寂
一溪秋水泛輕鳧

丹楓 黃菊 晩秋の図
石碓 奔流 響く轆轤
小橋を行過すれば 人影寂なり
一溪の秋水 輕鳧を泛ぶ

【語釈】

○丹楓：紅葉した楓。○石碓：石うす。○轆轤：井戸の水くみ用の滑車。○輕鳧：かるがるとした鳧（小型の鴨の一種）。

★ 明湖絶句

明湖絶句

清 葉正夏

一水深洄舊路微
殘荷衰柳送斜暉
此翁尚有機心在
驚起閑鷗作隊飛

一水 深洄えいかいして 旧路かすか微なり
殘荷 衰柳 斜暉を送る
此の翁 尚お 機心在る有り
閑鷗を驚起なして 隊なを作して 飛ばしむ

【語釈】

○深洄：回り廻る。○殘荷：損なわれた蓮の葉。○斜暉：夕陽。○機心：いつわり企むころ。いたずら心。

★ 維揚出遊

維揚出遊

清 田 露

籃輿穩坐挂詩瓢
獨出城闈輿自多
秋水多情山色近
人從畫裏過紅橋

籃輿らんよ 穩おだやかに坐して 詩瓢しひょうを挂かく
獨り 城闈じょういんを出で 輿おのずか 自ら多し
秋水 多情にして 山色近し
人は 画裏がに従って 紅橋を過ぐ

【語釈】

○維揚：揚州（南京市）の別称。○籃輿：かご。○詩瓢：詩を書いた紙を入れる大きな瓢箪。○城闈：城郭。○山色：山の景色。山の気配。○畫裏：絵の中。

★ 儀微入江

儀微江に入る

清 李永紹

白沙州外唱橈歌

白沙州外 橈歌を唱う

曲港回橋取次過

曲港 回橋 取次 過く

一帶葭蘆沿岸綠

一帶の葭蘆 岸に沿いて緑に

青山無數隔江多

青山 無數 江を隔つること多し

【語釈】

○儀微：江蘇省江都県。○白沙州：白い砂で出来た中洲。○橈歌：舟歌。○取次：しばらく。○葭蘆：ヨシとアシ。

★ 南澗晚歸

南澗 晩に帰る

清 楊青望

嶽寺風聲起暮鐘

岳寺の風声 暮鐘起る

殘陽歸去興尤濃

殘陽 帰り去りて 興 尤も 濃なり

停車欲認登臨處

車を停めて 認めんと欲す 登臨の処

忘却西南第幾峯

忘却す 西南 第幾峰

【語釈】

○澗：谷。○嶽寺：山岳にある寺。○殘陽：夕日、入り日。○登臨：高いところに登って下を見下ろす。○第幾峰：多くの峰。

★湖中絶句

湖中絶句

清

顧肇維

罨畫溪頭風味秋

あんがけいとう 罨画溪頭 風味 秋なり

采菱遊女木蘭舟

さいりよう 采菱の遊女 木蘭の舟

遠山一帶青如洗

遠山一帶 青洗うが如し

幾處湘簾捲畫樓

いくところ 幾処の湘簾 画楼に捲く

○罨畫溪：浙江省長興県の西にある溪。○風味：奥ゆかしい趣き。○采菱：菱を採る。○湘簾：竹の簾。○畫樓：絵や彩色で飾られた楼。

★郊行

郊行

清

陳徳榮

芳園青草緑離離

芳園の青草 緑 離々たり

好是人家祭掃時

好し是れ 人家 祭掃の時

何處紙錢焼不盡

何れの処の紙錢か 焼いて尽きず

東風吹上野棠枝

東風 吹き上ぐ 野棠の枝

【語釈】

○郊行：郊外の野原に行くこと。○芳園：花が咲き誇っている庭園。○離離：草木が繁茂しているさま。○祭掃：親族の墓を祀ること。○紙錢：死者を祀るときに燃やす紙幣。○東風：春風。○野棠：野生の梨。

★ 晩望群城燈火

晩に群城の燈火を望む

清 蔣士銓

市火船燈閃亂螢

市火の船灯 乱螢を閃かす

紅雲拖墨夜冥冥

紅雲 墨を拖いて 夜冥々

却疑身在層霽上

却って疑う 身は層霽の上^{そうせい}に在るか

俯見人間有列星

俯^ふして見る 人間^{じんかん}に 列星有るを

【語釈】

○冥冥：暗くかすかなさま。○層霽：天空。○俯見：俯瞰する。○人間：人間世界。

絶句類選標本 四

絶句類選 卷之七 贈答類

★ 寄韓鵬

韓鵬かんほうに寄す

唐

李

頎き

爲政心閑物自閑

政を為し心閑なれば物自おのずから閑なり

朝看飛鳥暮飛還

朝あしたに看し飛鳥暮に飛び還かえる

寄書河上神明宰

書を寄す河上神明の宰

羨爾城頭姑射山

羨うらやむ爾なんじが城頭の姑射山こしやざん

【語釈】

○韓鵬…不祥。○河上…黄河のほとり。○神明宰…神を祀る官吏。韓鵬のこと？○城頭…
城壁の上。○姑射山…山西省臨汾市姑射山。

★ 寄孫山人

孫山人に寄す

唐 儲光羲

新林二月孤舟還

新林二月 孤舟還る

水滿清江花滿山

水は清江に満ち 花は山に満つ

借問故園隱君子

借問す 故園の隱君子

時時來往住人間

時々來往して 人間に住まるかと

【語釈】

○山人：世を捨てて山中に隠れ住む人。○寄：詩を人に託して送り届けること、贈は、詩を直接手渡すこと。○新林：春になって新しく芽吹いた林。○孤舟還：一艘の小舟で帰る。○水滿清江：春の水が清らかな川に満ちあふれている。○借問：ちよつとお尋ねしますが。○故園：古くから住み慣れた庭園、孫山人の住居を指す。○隱君子：世を避けて山中に隠れ棲む徳の高い人、孫山人を指す。

（参考文献）『唐詩選』

★ 寄穆侍御出幽州

穆侍御が幽州に出るに寄す

唐 王昌齡

一從恩譴度瀟湘

一たび 恩譴に従って 瀟湘を度る

塞北江南萬里長

塞北 江南 万里長し

莫道薊門書信少

道う莫れ 薊門 書信少なりと

鴈飛猶得到衡陽

鴈飛びて 猶お 衡陽に到るを得ん

【語釈】

○穆侍御：不祥、侍御は天子の侍従。○幽州：北京。○恩譴：左遷の命令。○瀟湘：湘江、洞庭湖に注ぐ川。○塞北：幽州。○江南：長江中下流の南側、作者のいる地名。○薊門：北京にある場所の地名。○衡陽：湖南省衡阳市。

★ 酬李穆見寄

李穆りぼくが寄せらるるに酬ゆ

唐 劉長卿

孤舟相訪至天涯

孤舟あいと相訪あいついて 天涯に至る

萬轉雲山路更賒

万転ばんてん雲山路 更にほろみ賒せなり

欲掃柴門迎遠客

柴門を掃はいて 遠客を迎えんと欲すれば

青苔黃葉滿貧家

青苔 黄葉 貧家に満つ

【語釈】

○李穆：劉長卿の娘婿。○酬：詩を送られたことの返礼。○相訪：尋ねてくる。○天涯：地の涯。ここでは、作者（：劉長卿）の許のこと。○万転：何度も向きを変える意。雲山：雲のかかった高い山。○賒：遠い。○柴門：柴（しば）を編んでつくった粗末な門。○遠客：遠くから来た客、ここでは李穆を指す。○黄葉：もみじ葉、秋になって葉が黄色く変わる葉。○貧家：貧しい家、寒家。

（参考文献）『三体詩』

★聞王昌齡左遷龍標遙有此寄

唐 李白

王昌齡が龍標りゅうひょうに左遷せらるるを聞き遙かに此の寄有り

楊花落盡子規啼

楊花落ち尽くして子規啼く

聞道龍標過五溪

聞道きくならく龍標五溪を過ぐと

我寄愁心與明月

我愁心を寄せて明月あたに与う

隨風直到夜郎西

風に随つて直ちに到れ夜郎の西

【語釈】

○龍標：県名、湖南省洪江市西南の黔城鎮。○寄：詩を人に託して送り届けること。○楊花：柳絮。○子規：ホトトギス。○聞道：聞くとともに。○五溪：地名、洞庭湖の西南端、湖南省常德市の西方にあった五つの川。○寄愁心与明月：君を思う愁いの心を明月に託そう。○隨風：どうか風に乗って。○夜郎：龍標の西北にある夜郎県のあたりを指す。

（参考文献）『唐詩選』

★ 巴陵贈賈舍人

巴陵はりようの賈舍人かしゃじんに贈る

唐 李白

賈生西望憶京華

賈生西望すれば京華けいかを憶う

湘浦南遷莫怨嗟

湘浦に南遷して怨嗟すること莫かれ

聖主恩深漢文帝

聖主の恩は漢の文帝より深し

憐君不遣到長沙

君を憐み長沙に到らしめず

【語釈】

○巴陵：湖南省岳陽市。○賈舍人：不祥、舍人は中書舍人。賈至？○賈生：賈舍人。○京華：宮城、長安。○湘浦：湘江のあたり（洞庭湖の南）。○南遷：南方に左遷されること。○聖主：皇帝。○長沙：湖南省長沙市。

★ 南流夜郎寄内

南のかた夜郎やろうに流されて内に寄す

唐 李白

夜郎天外怨離居

夜郎天外離居を怨む

明月樓中音信疎

明月樓中音信そ疎なり

北雁春歸看欲盡

北雁春歸える看て尽きんと欲す

南來不得豫章書

南來得ず予章よしょうの書

【語釈】

○夜郎：貴州省、雲南省の地。○内：妻。○雁：書を運ぶ鳥。蘇武の故事。○豫章：江西省南昌市、李白の妻はここにいた。

（参考文献）『漢詩大系 8』

★ 寒食寄京師諸弟

寒食 京師の諸弟に寄す

唐

韋應物

雨中禁火空齋冷

雨中の禁火 空齋冷ひややかなり

江上流鶯獨坐聽

江上の流鶯 独り坐して聴く

把酒看花想諸弟

酒を把り 花を見て 諸弟を想う

杜陵寒食草青青

杜陵の寒食 草青青々

【語釈】

○寒食：当時から百五日目、この日をと前後一日は火を使わない。○京師：長安。○空齋：人氣の無い部屋。○流鶯：枝を飛び回る鶯。○杜陵：西安市雁塔区三兆邑西北にあたる、漢の宣帝の陵があったので名付けられた。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 閑居寄諸弟

閑居 諸弟に寄す

唐

韋應物

秋草生庭白露時

秋草 庭に生ず 白露の時

故園諸弟益相思

故園の諸弟 益ますます相思あいおもう

盡日高齋無一事

尽日 高齋 一事無し

芭蕉葉上獨題詩

芭蕉葉上 独り詩を題す

【語釈】

○閑居：閑かな生活。○白露：二十四節季の一つ、旧曆九月八日頃。○故園：故郷。○盡日：一日中。○高齋：高雅な書齋。

★ 登樓寄王卿

樓に登りて王卿に寄す

唐 韋應物

踏閣攀林恨不同

閣を踏み 林を攀ずに 同じくせざるを恨む

楚雲滄海思無窮

楚雲 滄海 思窮まる無し

數家砧杵秋山下

數家の砧杵 秋山の下

一郡荆榛寒雨中

一郡の荆榛 寒雨の中

【語釈】

○王卿：不祥。踏閣：：樓閣に登ること。踏は、登る。また、閣を台閣（朝廷）とし、朝廷で活躍するという解釈もある。○攀林：樓閣が林の中にあるため、その坂道をよじ登ること。○恨不同：君と一緒でないのが残念である。○楚雲：楚の空に浮かぶ雲。楚の地。作者がいるところ。○滄海：大海原。王卿がいるところ。○砧杵：布を打つ砧の音。○榛：：雑木の茂み。

（参考文献） 『唐詩選』

★ 酬柳郎中

柳郎中に酬ゆ

唐 韋應物

廣陵三月花正開

廣陵 三月 花正に開く

花裏逢君醉一廻

花裏 君に逢いて 酔うこと一廻せん

南北相過殊不遠

南北 相過ぎること 殊に遠からず

暮潮歸去早潮來

暮潮歸り去って 早潮來る

【語釈】

○柳郎中：不祥。○廣陵：揚州。○花裏：花のもとで。○酔一廻：心ゆくまで一度酔いたいものだ。○南北：長江を隔てて南は作者のいる蘇州、北は柳某のいる揚州を指す。○相過：互いに行き來すること。○歸去：潮が引いて行く。

（参考文献） 『唐詩選』

★ 玉關寄長安李主簿

玉關にて長安の李主簿に寄す

唐 岑 參

東去長安萬里餘

東のかた 長安を去ること 万里余

故人何惜一行書

故人 何ぞ惜しむ 一行の書

玉關西望堪腸斷

玉關 西望すれば 腸 断ゆるに堪えたり

況復明朝是歲除

況や復た 明朝 是れ歲除なるをや

【語釈】

○玉關…玉門関。○李主簿…不祥。○腸堪断…非常に悲しいさま。○是…是動詞にあたり、「コレ」と訓読する。○歲除…大晦日。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 苜蓿峰寄家人

苜蓿峰にて家人に寄す

唐 岑 參

苜蓿峰邊逢立春

苜蓿峰辺 立春に逢い

胡蘆河上淚沾巾

胡蘆河上 涙巾を沾す

閨中只是空相憶

閨中 只だ是れ 空しく相い憶う

不見沙場愁殺人

沙場の 人を愁殺するを見ず

【語釈】

○苜蓿烽…のろし台の名。苜蓿は、うまごやし。○胡蘆河…西方の塞外にある川の名。胡蘆は、ひょうたんの別称。○沾巾…ハンカチを濡らす。○閨中…妻の寝室を指す。○相憶…私のことを思ってくれているだろうが。相は、動作に対象があることを示す言葉。○沙場…沙漠。○愁殺…ひどく悲しませる。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 寄王舍人竹樓

王舍人の竹樓に寄す

唐 李嘉祐

傲吏身閑笑五侯

傲吏ごうり身閑しずかにして五侯を笑う

西江取竹起高樓

西江に竹を取り高樓たを起つ

南風不用蒲葵扇

南風用いず蒲葵ほきの扇

紗帽閑眠對水鷗

紗帽さぼう閑に眠り水鷗すいおうに對す

【語釈】

○王舍人：不祥。舍人は中書舍人。○傲吏：物事に屈しない官吏、王舍人のこと。○五侯：漢の元帝の時代の「一日五侯」。○蒲葵扇：ピンロウで作った扇。○紗帽：うすぎぬで作った頭巾。

★ 寄楊侍御

楊侍御に寄す

唐 包何

一官何幸得同時

一官何さいわいの幸ぞ時を同じくすることを得たるは

十載無媒獨見遺

十載なかたち媒無く独り遺のこさる

今日不論腰下組

今日論ぜず腰下ようかの組

請君看取鬢邊絲

請う君看取せよ鬢邊びんべんの糸

【語釈】

○楊侍御：不祥、侍御は侍御史。○一官：一つの官職。○媒：自分を推薦してくれる仲介者。○獨見遺：ひとり昇進から取り残されてしまった。見は「る」「らる」と読み、「くされる」と訳す。受身の意を示す。○腰下組：腰に下げた印綬。○看取：よく目をとめて見る。取は、動詞の意味を補足する助辞。○鬢邊糸：鬢のあたりの白髪。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 重贈鄭鍊

重ねて鄭鍊に贈る

唐 杜甫

鄭子將行罷使臣

鄭子將ていしに行かんとし使臣を罷む

囊無一物獻尊親

囊のうに一物の尊親に獻ずる無し

江山路遠羈離日

江山路遠し羈離きりの日

裘馬誰爲感激人

裘馬 誰か感激の人た為らん

【語釈】

○鄭鍊：不祥。成都で地方官をしていたが郷里の襄陽に帰って親を見るといいう人物である。○君臣：皇帝の使者。○囊：旅のための荷物入れの袋。○尊親：親族。○裘馬：上等の軽い皮衣と立派馬。富貴の人を指す。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 贈花卿

花卿に贈る

唐 杜甫

錦城絲管日紛紛

錦城きんじょうの糸管 日に紛々

半入江風半入雲

半ばは江風に入り半ばは雲に入る

此曲祗應天上有

此の曲祗ただだ応に 天上に有るべし

人間能得幾回聞

人間じんかん能く幾回か聞くを得ん

【語釈】

○花卿：唐の猛将、花敬定のこと。成都にあったとき、皇帝専用の曲を奏しさせた。○錦城：錦官城。成都の別称。○糸管：琴などの弦楽器と笛などの管楽器。○紛紛：入りみだれて賑やかなさま。○應：「まさにくすべし」と読み「くすべきである」「くであるべきである」の意。○天上：天界（皇帝）。○人間：俗世間。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 江南逢李龜年

江南にて李龜年に逢う

唐 杜甫

岐王宅裏尋常見
崔九堂前幾度聞
正是江南好風景
落花時節又逢君

岐王の宅裏 尋常見
崔九の堂前 幾度か聞く
正に是れ 江南の好風景
落花の時節 又た君に逢う

【語釈】

○江南：ここでは洞庭湖の南の地方を指す。○李龜年：玄宗に寵愛された当時有名な男性歌手。○岐王：玄宗の弟、李範。○崔九：崔滌という貴族。玄宗に寵愛された。○正是：ちょうど今くである。

（参考文献）『唐詩選』

★ 酬張繼

張繼に酬ゆ

唐 皇甫冉

悵望南徐登北固
迢遙西塞阻東關
落日臨川問音信
寒潮唯帶夕陽還

南徐を悵望して 北固に登る
迢遙たる西塞 東関を阻む
落日 川に臨み 音信を問えば
寒潮 唯 夕陽を帯びて還る

【語釈】

○張繼：中国、盛唐の詩人。「楓橋夜泊」の詩で知られる。○南徐：江蘇省鎮江市。○北固：江蘇省鎮江市にある山。○迢遙：はるかさま。○西塞：浙江省湖州市の西南にある山。○東關：安徽省含山県の西南、三国時代の呉の諸葛恪が住んだところ。

（参考文献）『三体詩』

★ 旅次寄湖南張郎中

旅次 湖南の張郎中に寄す

唐 戎昱

寒江近戸漫流聲

寒江 戸に近く 漫流まんりゅうの聲

竹影臨窗亂月明

竹影ちやくえい 窓に臨み 月明を乱す

歸夢不知湖水闊

歸夢は知らず 湖水の闊ひろきを

夜來還到洛陽城

夜來 還り到る 洛陽城

【語釈】

○旅次：旅の途中の宿。○湖南：湖南省。○張郎中：不祥。○漫流：あふれ流れる水。○月明：月明かり。○歸夢：故郷に帰る夢。○湖水：洞庭湖の水。○夜來：夜になってから。

★ 寄南游兄弟

南游の兄弟に寄す

唐 竇鞏

書來未報幾時還

書来りて 未だ報いせず 幾時いくときにか還えるを

知在三湘五嶺間

知る 三湘五嶺の間に在るを

獨立衡門秋水闊

独り立つ 衡門こうもん 秋水ひろ闊し

寒鴉飛去日銜山

寒鴉 飛び去り 日山くわを銜う

【語釈】

○南游：南方を旅する。○三湘：湖南省の湘郷、湘潭、湘陰の地。○五嶺：大庾嶺、越城嶺、騎田嶺、萌渚嶺、都龐嶺の総称。○衡門：横木を渡しただけの門。粗末な家。

★代書寄京洛舊遊

書に代えて京洛の旧遊に寄す

唐 戴叔倫

今年十月温風起

今年十月温風起る

湘水悠悠生白蘋

湘水悠悠 白蘋を生ず

欲寄遠書還不取

遠書を寄せんと欲して 還た 敢てせず

却愁驚動故鄉人

却って故郷の人を驚動せんことを愁う

【語釈】

○京洛…洛陽。○舊遊…古くからの友達。○湘水…湘江、洞庭湖に流入する川。○悠悠…
他と関わりなくゆったりしたりしたさま。○白蘋…白い浮き草。○遠書…遠くからの手紙。○驚
動…非常に驚かす。

★贈殷亮

殷亮に贈る

唐 戴叔倫

日日河邊見水流

日々 河辺に 水の流るるを見る

傷春未已復悲秋

春を傷むこと 未だ已まざるに 復た秋を悲しむ

山中舊宅無人住

山中の旧宅 人の住む無く

來往風塵共白頭

風塵に來往して 共に白頭

【語釈】

○殷亮…人名、不詳。○河邊…川のほとり。○舊宅…かつての住まい。○來往…行ったり
来たり、うろつろつすること。○風塵…けがれた俗世間。○白頭…白髪頭、年をとったこと
を示す常用語。

(参考文献)

『三体詩』『和漢名詞選類評釈』

★ 聽夜雨寄盧綸

夜雨を聽き盧綸に寄す

唐 李端

暮雨蕭條過鳳城

暮雨 蕭條しょうじょうとして 鳳城ほうじょうを過ぐ

霏霏颯颯重還輕

霏々ひひ颯々さつさつ 重還また輕

聞君此夜東林宿

聞く 君 此の夜 東林の宿

聽得荷池幾番聲

聽き得たり 荷池 幾番の聲

【語釈】

○盧綸：唐の詩人。山西省運城市永濟市の人。大曆十才子の一人。○蕭條：もの寂しいさま。○鳳城：帝都長安。○霏霏：雨や雪のしきりに降るさま。○颯颯：雨の降るさま。○東林：東の林の中の宿。○荷池：蓮のある池。

★ 酬浩初上人欲登仙人山見貽

唐 柳宗元

浩初上人が仙人山に登らんとして貽おくらるるに酬ゆ

珠樹玲瓏隔翠微

珠樹 玲瓏れいろうとして 翠微すいびを隔つ

病來方外事多違

病來 方外事 多くは違ちがう

仙山不屬分符客

仙山は屬ぞくさず 分符ぶんぷの客

一任凌空錫杖飛

一任しやくじょうす 空を凌しのぐ 錫杖しやくじょうの飛とぶに

【語釈】

○浩初上人：不祥。○珠樹：樹木の美称。○玲瓏：さえて鮮やかなさま。○翠微：緑色の山八合目あたり。○病來：病氣になつてから。○方外：世俗を超越した世界。○分符客：朝廷から任命された官吏。○錫杖：道士や僧などの用いる頭に鈴をつけた杖。仙人が空に飛ばして、それに乗つて天空を飛ぶという。

参考文献 『唐詩選』

★ 酬曹侍御過象縣見寄

唐 柳宗元

曹侍御が象県に過ぎりて寄せらるるに酬ゆ

破額山前碧玉流

破額山前 碧玉流る

騷人遙駐木蘭舟

騷人 遙かに駐む 木蘭の舟

春風無限瀟湘憶

春風 限り無し 瀟湘の憶

欲採蘋花不自由

蘋花を採らんと欲すれども 自由ならず

【語釈】

○侍禦：侍御史、皇帝の側に使える役人。○象縣：嶺南道柳州の県（広西壮族自治区象州県）。○破額山：象県の中の柳江のほとりにある山。○碧玉：清く青く澄んでいる喩え。騷人：屈原をはじめとする『楚辞』の世界の人、曹侍御をいう。遥駐：象縣と柳州は、50 kmほど離れている。○木蘭舟：木欄で作った船、船の美称。○瀟湘：湘水と瀟水の合流しているところ、洞庭湖の南。○瀟湘意：曹侍御に逢いたいのだが果たせないこと。○蘋花：浮き草の一種の花。

（参考文献）『柳宗元詩集』

★ 憶樂天

樂天を憶う

唐 劉禹錫

尋常相見意殷勤

尋常に相見て 意 殷勤なり

別後相思夢更頻

別後 相思い 夢みること 更に頻なり

每遇登臨好風景

登臨して 好風景に遇う毎に

羨他天性少情人

羨む 他の 天性 情少き人

【語釈】

○樂天：白居易。○尋常：常日頃。○殷勤：ねんごろ。○登臨：高いところに登って俯瞰すること。○天性：生まれつき。○情：感情。

★ 與歌者何戡

歌者何戡うたぢやかかんに与う

唐 劉禹錫

二十餘年別帝京

二十余年 帝京に別れ

重聞天樂不勝情

重ねて天樂を聞き 情に勝えず

舊人唯有何戡在

旧人唯だ 何戡かかの在る有り

更與殷勤唱渭城

更に与ために 殷勤いんきんに 渭城いじょうを唱う

【語釈】

○何戡：長安で著名な歌手。○帝京：長安。○天樂：人間世界を離れたような良い音楽。
○情：感情。○殷勤：ねんごろ。○渭城：王維の「送元二使安西」。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 道州郡齋臥疾寄東館諸賢

唐 呂 溫

道州ぐんざいの郡齋やまいにて疾ふに臥し 東館の諸賢に寄す

東池送客醉年華

東池 客かくを送り 年華ねんかに酔う

聞道風流勝習家

聞道きくならく 風流は 習家に勝ると

獨臥郡齋寥落意

独ぐんざいり郡齋ふに臥す 寥落りょうらくの意

隔簾微雨濕梨花

簾れんを隔つる微雨 梨花を湿す

【語釈】

○道州：湖南省永州市道県。○郡齋：群主の住居。○年華：春の光。○聞道：聞くところ
によれば。高陽池。○習家：湖北省襄陽市にある古跡名。○寥落：落ちぶれたさま。

★ 二月朔日は貞元舊節有感寄黔南寶三洛陽盧七

唐 呂 溫

二月朔日 是れ貞元じょうげんの旧節きゅうせつに感有りて 黔南げいなんの寶三とうさん洛陽ろしちの盧七ろしちに寄す

同事先皇立玉墀

同ともに先皇こうに事ことし 玉墀ぎよくちに立つ

中和舊節又支離

中和ちゅうわの旧節きゅうせつ 又た支離しり

今朝各自看花處

今朝けさ各自各自 花はなを看みる處ところ

萬里遙知掩淚時

萬里ばんり 遙はるかに知しる 涙なみだを掩おほう時とき

【語釈】

○貞元：唐の徳宗の年号。○旧節：旧暦の節日。○黔南：貴州省黔南市。○寶三：不祥。○盧七：不祥。○先皇：先の皇帝。○事：従事する。玉墀：朝廷。○中和：旧暦二月二日。○支離：ばらばらでとりとめの付かないこと。○掩：覆い隠す。

★ 寄李渤

李渤りぼつに寄す

唐 張 籍

五度溪頭躑躅紅

五度溪頭ごたせきとう 躑躅ちつちく紅こうなり

嵩陽寺裏講時鐘

嵩陽寺裏そうやうじら 講時こうじの鐘かね

春山處處行應好

春山はるさん 処々ところどころ 行いけば 応おほに好このかるべし

一月看花到幾峰

一月いちげつ 花はなを看みて 幾峰いくほうに到いたる

【語釈】

○李渤：洛陽人科挙に合格しなかったが太子賓客となった。崇山の小室山に隠棲した。○五度溪：崇山にある溪。○躑躅：つつじ。○嵩陽寺：崇山にある寺。○應：「まさにくすべし」と読み、「おそらくであろう」「たいていのはずである」の意。

(参考文献) 『三体詩』

★ 聞樂天授江州司馬聞樂天授江州司馬

唐 元稹

樂天の江州司馬を授けらしを聞く

殘燈無焰影幢幢

殘灯 焰無く影 幢々

此夕聞君謫九江

此の夕べ君が九江に謫せられしを聞く

垂死病中驚坐起

垂死病中驚きて坐起すれば

暗風吹雨入寒窗

暗風雨を吹いて寒窓に入る

【語釈】

○殘燈：燃え尽きようとしている灯火。○幢幢：揺れ動くさま。○謫：流刑に処される。
○九江：江州（江西省北部に位置する地級市）。○垂死：瀕死。○坐起：起きて坐る。○
暗風：暗闇の中を吹く風。○寒窓：冷たい冬の窓。

（参考文献）『唐詩選』

★ 江南送北客因憑寄徐州兄弟書

唐 白居易

江南に北客を送りて 因りて徐州の兄弟に憑みて書を寄す

故園望斷欲何如

故園 望斷するも 何如せんと欲す

楚水吳山萬里餘

楚水 吳山 万里余

今日因君訪兄弟

今日 君に因りて 兄弟を訪う

數行鄉淚一封書

數行の郷淚 一封の書

【語釈】

○江南：長江中下流の南側の地。○徐州：江蘇省徐州市。○故園：故郷。○望斷：とことん望見する。○楚水吳山：吳楚の地の山水。○郷淚：故郷を思う涙。

（参考文献）『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 贈江客

江客に贈る

唐 白居易

江柳影寒新雨地
江柳影は寒し新雨の地
塞鴻聲急欲霜天
塞鴻 声 急に霜ならんと欲する天
愁君獨向沙頭宿
愁う 君が独り 沙頭の宿に向うを
水遶蘆花月滿船
水は蘆花を遶り 月は船に満つ

【語釈】

○江客：江上の旅人。○江柳：川辺の柳。○塞鴻：北の辺地から来る雁。○沙頭：沙洲のほとり。

（参考文献） 『和漢名詞選類評釈』 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★ 同李十一醉憶元九

李十一と同一に酔いて元九を憶う

唐 白居易

春來無計破春愁
春來 計無く 春愁を破る
醉折花枝當酒籌
酔いて花枝を折りて 酒籌に当つ
忽憶故人天際去
忽ち憶う 故人の天際に去るを
計程今日到梁州
程を計れば 今日 梁州に到る

【語釈】

○李十一：李夷簡、唐の宗室、劍南節度使、御史大夫、淮南節度使に至る。○元九：元稹。○春來：春になってから。○春愁：春のものの悲しさ。○破：消す。○酒籌：飲んだ盃の数を数える算木。○天際：天涯、遙か彼方。○梁州：陝西省漢中府。

（参考文献） 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★禁中夜作書與元九

禁中夜書を作りて元九に与う

唐 白居易

心緒萬端書兩紙

心緒万端 書兩紙

欲封重讀意遲遲

封ぜんと欲して重ねて読み 意遅々たり

五聲宮漏初鳴後

五声の宮漏 初めて鳴りて後

一點窗燈欲滅時

一点の窓灯 滅せんと欲する時

【語釈】

○禁中：天子の住む宮殿。○元九：元稹。○心緒萬端：心の中で思っているさまざまの事。○書兩紙：二枚の紙にしたためる。○五聲：五更、午前四時ごろ。○宮漏：宮中の漏刻。

（参考文献）

『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★雨夜憶元九

雨夜元九を憶う

唐 白居易

天陰一日便堪愁

天陰ること一日なれば 便ち愁うに堪たり

何況連宵雨不休

何ぞ況んや 連宵 雨休まざるをや

一種雨中君最苦

一種 雨中 君 最も苦しまん

偏梁閣道向通州

偏梁の閣道 通州に向う

【語釈】

○元九：元稹。○一種：一種に、当時の俗語。○最：ちょうど今、時あたかも、当時の俗語。○偏梁：辺鄙な漢中、四川の地域。○閣道：棧道。○通州：四川省にあった州。

（参考文献）

『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 曉眠後寄楊戸部

曉眠ぎようみんの後のち楊戸部ようこぶに寄す

唐 白居易

軟綾腰褥薄緜被

軟綾なんりよう 腰褥ようじよく 薄綿被はくめんび

涼冷秋天穩暖身

涼冷りようれいたる秋天りゅう 穩暖おんだんたる身

一覺曉眠殊有味

一覺いっかくの曉眠ぎようみん 殊じゆに味あじ有り

無因寄與早朝人

早朝人そうちようじんに寄よ与すするに 因よしな無し

【語釈】

○曉眠：明け方出仕をせずに眠っていること。○楊戸部：楊汝士。元和四年の進士。○軟綾：柔らかくて細やかな絹織物。ここでは敷き布団。○腰褥：腰までの綿入れ。○薄綿被：薄く軽い掛け布団。○涼冷：寒々としたさま。○穩暖身：安穩で寒い思いをしない身。○一覺：一眠り。○寄與：送り与える。○早朝人：朝廷に朝出かける人。役人。

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 十一』

★ 得袁相公書得

袁相公えんせうこうの書の得をたり

唐 白居易

穀苗深處一農夫

穀苗こくびよう 深こき処こ 一農夫

面黑頭斑手把鋤

面黒かしろく 頭斑かしろまだらにして 手すに鋤きを把とる

何意使人猶識我

何いぞ意いわん 使人い 猶いお我われを識しり

就田來送相公書

田いに就いき 來いりて送いる 相公さうこうの書

【語釈】

○袁相公：袁滋、蔡州郎山の人、中書侍郎平章事、戸部尚書に至る。○穀苗：生長した稲の苗か。○一農夫：白居易自身。○何意：思いがけなく。○使人：使者。○就田：他の中に入る。

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 早入皇城贈王留守僕射 早に皇城に入り王留守僕射に贈る 唐 白居易

津橋残月曉沈沈 津橋の残月 曉に沈々
風露淒清禁署深 風露 淒清 禁署に深し
城柳宮槐謾搖落 城柳 宮槐 謾に揺落す
悲愁不到貴人心 悲愁は到らず 貴人の心

【語釈】

○早：朝早く。○王留守僕射：王起、当時、僕射で東都留守であった。○津橋：洛陽の洛水にかかる、天津橋ともいう。○沈沈：静まりひっそりとしたさま。○淒清：ひっそりと静まりかえっているさま。○禁署：宮中の官庁。城柳：城内の柳。○宮槐：宮廷のエンジユ。謾：むやみやたらに。○搖落：秋になり葉が落ちる。

（参考文献）『和漢名詩選類評釈』『新釈漢文大系 白氏文集 十二上』

★ 在巴南望郡南山呈樂天 巴南に在りて郡南の山を望みて樂天に呈す 唐 白行簡

臨江一嶂白雲間 臨江 一嶂 白雲の間
紅綠層層錦繡班 紅綠 層々 錦繡班なり
不作巴南天外意 作さず 巴南 天外の意
何殊昭應望驪山 何ぞ 殊ならん 昭應 驪山を望むに

【語釈】

○巴南：蜀の地。○樂天：白居易。○臨江：川に臨む。○錦繡：錦ぬいどりのある絹。○昭應：明らかに答える。○驪山：陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。

★和孫明府懷舊山

孫明府が旧山を懷うに和す

唐 雍陶

五柳先生本在山

五柳先生本山に在り

偶然爲客落人間

偶然客と為りて人間に落つ

秋來見月多歸思

秋來月を見て歸思多し

自起開籠放白鷗

自ら起きて籠を開き白鷗を放つ

【語釈】

○孫明府：未詳、明府は県令の尊称。○五柳先生：陶淵明、ここでは孫明府。○爲客：客は旅人。○人間：俗世間。○秋來：秋になる。○歸思：本いた山に帰りたいたいという思い。○白鷗：キジ科の鳥。

（参考文献）『三体詩』

★寄揚州韓綽判官

揚州の韓綽判官に寄す

唐 杜牧

青山隱隱水迢迢

青山隱々水迢々

秋盡江南草木凋

秋尽きて江南草木凋む

二十四橋明月夜

二十四橋明月之夜

玉人何處教吹簫

玉人何れの処にか吹簫を教う

【語釈】

青山：青く見える山。隱隱：かすんではっきりしないさま。迢迢：はるかに遠くまで続いている様子。草木凋：草木が枯れる。二十四橋：揚州城の内外の水路にかかった虹橋。玉人：貴公子、韓綽を指す。吹簫：簫の笛を吹く。

（参考文献）『新釈漢文大系 詩人編 9』

★ 懷吳中馮秀才

吳中の馮秀才を懷う

唐 杜牧

長洲苑外草蕭蕭

長洲苑外草蕭々

却算遊程歲月遙

却つて遊程を算うれば 歲月遙なり

唯有別時今不忘

唯だ別時の今忘れざる有り

暮煙秋雨過楓橋

暮煙 秋雨 楓橋を過ぐ

【語釈】

○吳中：江蘇省吳県（蘇州市）。○馮秀才：馮という姓の科挙試験合格者。○長洲苑：古の苑の名、春秋時代の吳王・闔閭が遊獵した処。○蕭蕭：ものさびしいさま。○却：かえつて。○遊程：旅路の行程。○唯有：ただだけがある。○別時：別れたとき。○暮煙：夕暮れに立つもや。楓橋：江蘇省蘇州市の郊外にある橋の名。

参考文献 『杜樊川絶句詳解』

★ 別王十後遣京使累路附書

唐 杜牧

王十に別れて後京に遣る使の累路に書を附す

重關曉度宿雲寒

重関 曉に度りて 宿雲寒し

羸馬縁知步步難

羸馬 縁りて知る 歩々の難

此信的應中路見

此の信 的に 応に 中路に見るべし

亂山何處拆書看

乱山 何れの処か 書を拆きて看ん

【語釈】

○王十：不祥。○重關：重なった門。○累路：重なった路。○宿雲：昨夜からの雲。○羸馬：瘦せた馬。○此信：この手紙。○應：「まさにすべし」と読み、この場合推量を示す。

参考文献 『杜樊川絶句詳解』

★ 寄桐江隱者

桐江の隱者に寄す

唐 杜牧

潮去潮來洲渚春
 潮去り潮來たる 洲渚の春

山花如繡草如茵
 山花 繡の如く草 茵の如し

嚴陵臺下桐江水
 嚴陵台下 桐江の水

解釣鱸魚有幾人
 鱸魚を釣るを解するは 幾人か有る

【語釈】

○桐江：浙江省杭州市桐廬県。○洲渚：中洲。○繡：刺繡をした布。○茵：しとね。○嚴陵臺：後漢の嚴陵（隱者で釣りをして暮らし、光武帝の招きに応じなかった）が釣りをしていたところ。ここでは、隱者を嚴陵になぞらえる。

参考文献 『杜樊川絶句詳解』

★ 宿駱氏亭寄懷崔雍袞

駱氏の亭に宿し 崔雍袞に寄懷す

唐 李商隱

竹塢無塵水檻清
 竹塢 塵無くして 水檻清し

相思迢遞隔重城
 相思う 迢遞 重城を隔つを

秋陰不散霜飛晚
 秋陰 散ぜず 霜飛晚し

留得枯荷聽雨聲
 枯荷を留め得て 雨声を聴く

【語釈】

○駱氏：駱山人、詳細不祥。○崔雍袞：不祥。○竹塢：竹の茂っている堤。○水檻：水に臨んでいる欄干。○遞隔：はるか。遠いさま。○秋陰：秋の曇り、秋の冷ややかさ。○枯荷：枯れた蓮の葉。

★夜雨寄北

夜雨北に寄す

唐 李商隱

君問歸期未有期
君 歸期を問えども 未だ期有らず
巴山夜雨漲秋池
巴山の夜雨 秋池に漲る
何當共剪西窗燭
何か 共に 西窓の燭を剪りて
却話巴山夜雨時
却つて 巴山 夜雨を話す時なるべき

【語釈】

○北：妻。○歸期：家に帰る時。○巴山：陝西省西郷県の南西にある山、寂しい所を指す場合が多い。○西窓：西の窓、女性の部屋の窓。○「卻」：振り返る。

(参考文献) 『漢詩鑑賞辞典』 『唐詩選』

★寄令狐郎中

令狐郎中に寄す

唐 李商隱

嵩雲秦樹久離居
嵩雲秦樹 久しく離居す
雙鯉迢迢一紙書
双鯉 迢々 たり 一紙の書
休問梁園舊賓客
問うを休めよ 梁園 旧賓の客
茂陵秋雨病相如
茂陵の秋雨 病相如

【語釈】

○令狐郎中：右司郎中（尚書省の役人を右司の長官）である令狐綯（令狐楚の子）。○嵩雲：五岳の一つ崇山（河南省登封県の南）にかかる雲。○秦樹：陝西省の樹木。○雙鯉：二匹の鯉、雁と共に手紙をもたらず物とされている（『文選』卷二十七）。○迢迢：遙かに遠いさま。○一紙書：令狐郎中からの手紙。○休問梁園舊賓客：梁園は、前漢の景帝の弟の凌の孝王の庭園で司馬相如を始めとする文人たちを賓客として招いた、自分を司馬相如をたとえ、令狐楚を孝王にたとえた物。○茂陵：漢の武帝の陵墓、司馬相如が晩年病臥してすごした所。○病相如：病気の司馬相如にも似た自分。

(参考文献) 『唐詩選』 『唐詩三百首』

★ 寄雲臺觀田秀才

雲台觀の田秀才に寄す

唐 馬 戴

雲壓松枝拂石窗

雲松 枝を圧して 石窓を払う

幽人獨坐鶴成雙

幽人 独坐し 鶴 双を成す

晚來漱齒敲冰渚

晚來 齒を漱ぎ 氷を敲く渚

閑讀仙書倚翠幢

閑に 仙書を読み 翠幢に倚る

【語釈】○雲臺觀：陝西省華山市雲台峰にある道觀。四川省綿陽市の雲台觀。○田秀才：不祥。秀才は科擧の地方試験合格者。○幽人：隱者。○晚來：夕方になってから。○翠幢：緑色の円柱（仏教では經文を刻みこんだもの）。

★ 還淮卻寄睢陽

淮に還って却た睢陽に寄す

唐 孟 遲

梁王池苑已蒼然

梁 王の池苑 已に蒼然

滿樹斜陽極浦煙

滿樹の斜陽 極浦の煙

盡日回頭看不見

盡日 頭を回して 看れども見えず

兩行愁淚上南船

兩行の愁淚 南船に上る

【語釈】

○淮：淮水、安徽省と江蘇省を流れる川。○睢陽：河南省商丘市。○梁王：魏（梁）の君主。○池苑：池と花木のある庭園。○蒼然：古びた家の形容。○極浦：遙かに遠い砂浜。○盡日：一日中。

★ 寄友人

友人に寄す

唐 李羣玉

野水晴山雪後時

野水晴山雪後の時

獨行郵路更相思

村路 独行して 更に相い思う

無因一向溪頭醉

一に因る無くして 溪頭に向いて酔う

處處寒梅映酒旗

処々の寒梅 酒旗に映ず

【語釈】

○相思：相手のことを思う。「相」は動作が相手に及ぶことを示す。○溪頭：溪のほとり。○酒旗：酒屋の目印の旗。青色。

寄維揚故人

維揚の故人に寄す

唐 張喬

離別河邊縮柳條

離別 河辺に 柳条を縮ぶ

千山萬水玉人遙

千山 万水 玉人遥なり

月明記得相尋處

月明 記得す 相尋ねし処

城鎖東風十五橋

城は鎖す 東風 十五橋

【語釈】

○維揚：揚州。○故人：古くからの知り合い。○縮柳條：柳の枝を輪にして首にかける。「輪」が「還」に通ず。○玉人：故人のこと。○十五橋：揚州にかかる多くの橋、普通は二十四橋という。

(参考文献) 『三体詩』

★ 寄鄰莊道侶

隣莊の道侶に寄す

唐 韓偓

聞説經句不啓關

聞説く經句 関を啓かずと

藥窓誰伴醉開顏

藥窓誰に伴いて酔いて顔を開かん

夜來雪壓村前竹

夜來雪は圧す村前の竹

剩見溪南幾尺山

剩し見る溪南幾尺の山

【語釈】

○道侶：共に修行する者。○聞説：聞くところによれば。○經句：十日あまり。○啓關：門を開く。○藥窓：書齋の窓。○夜來：夜になってから。○剩：おまけに。更に。

★ 寄江南逐客

江南の逐客に寄す

唐 韋莊

三年音信阻湘潭

三年の音信 湘潭を阻む

花下相思酒半酣

花下 相思いて酒半ば 酣なり

記得竹齋風雨夜

記得す竹齋 風雨の夜

對牀孤枕話江南

床に対して孤枕 江南を話せしを

【語釈】

○江南：長江中下流域の南側の地。○逐客：地方に左遷された役人。○湘潭：湘潭湖南省湘潭市湘潭県。○相思：相手のことを思う。「相」は動作が相手に及ぶことを示す。○記得：はっきり憶える。○竹齋：外に竹を植えた書齋。○孤枕：独り寝。○江南：長江中下流の南岸地方。

★ 山中寄友人

山中友人に寄す

唐 李九齡

亂雲堆裏結茅廬

亂雲堆裏らんうんついでり 茅廬ぼうろを結ぶ

已與紅塵跡漸疎

已に紅塵と跡とよろそ 漸く疎まぼろなり

莫問野人生計事

問うこと莫かれ野人生計の事

窗前流水枕前書

窓前の流水 枕前の書

【語釈】

○茅廬：茅吹きの粗末ないおり。○紅塵：車馬の起こす塵埃。○野人：人里離れて住む隠者。

★ 贈野老

野老に贈る

唐 陳陶

何年種芝白雲裏

何れの年か芝を種うう 白雲うらの裏

人傳先生老萊子

人は伝うう 先生 老萊子らうらいしと

消磨世上名利心

消磨す世上名利の心

澹若巖間一流水

澹あわきこと 巖間がんかんの一流水の若し

【語釈】

○野老：村野の老人。○老萊子：春秋時代楚の賢人。世を避けて隠棲し、楚王の招きにも応じなかった。○消磨：すり切れて無くなる。

★ 寄人

人に寄す

唐 張泌

別夢依依到謝家
別夢 依依いゝいとして 謝家に到る
小廊迴合曲闌斜
小廊 迴合し 曲闌斜きよくらんななめめなり
多情只有春庭月
多情は 只だ 春庭の月に有り
猶爲離人照落花
猶お 離人の為に 落花を照らす

【語釈】

○寄：詩を手紙で送る。○別夢：別れた後相手のことを思う夢。○依依：相手のことを思うさま。○謝家：才女の家、（恋人である）女性側の家。○小廊：小振りな渡り廊下。○小振りなまわり廊下。○建物（：正房）の両外側の廊下。○迴合：周囲をめぐる。○曲闌：まがった欄干。○多情：情愛が深く感じやすいこと。○只有：ただ：だけがある。ただ：よりほかはない。○離人：別れていった人、ここでは作者自身。

（参考文献）『唐詩三百首』

★ 答韋丹

韋丹に答う

唐 僧靈澈

年老心閑無外事
年老いて 心閑かにして 外事がいじ無し
麻衣草座亦容身
麻衣 草座 亦た身を容いる
相逢盡道休官去
相逢いて 尽ことごとく道いう 官を休やめて去らんと
林下何曾見一人
林下 何ぞ曾かつて 一人を見ん

○東林寺：江西省廬山にある名刹。○韋丹：韋丹、字は文明。○外事：外部に関すること。ここでは俗世間のできごとをいう。○麻衣草坐：三衣一鉢、樹下石上などと同じように仏道の修行者をいう。○何曾：何は反語。未だ曾て一人も見ることがないの意。

★馬當呼鴉不至偶成呈同行諸官

宋 余靖

馬當 鴉を呼びて至らず 偶たまたま成る 同行の諸官に呈す

昔年曾泛馬當灣

昔年 曾て泛うかぶ 馬當灣

團飯喚鴉篙楫間

團飯 鴉を喚ぶ 篙楫の間

今日江頭飛不下

今日 江頭 飛びて下らず

應知人世足機關

応に人世を知り 機關 足るべし

【語釈】

○馬當：江西省彭澤県の東北にある山名。○馬當灣：馬当山の近くの河の湾。○團飯：おむすび。○篙楫：棹や櫂のような舟を進める道具。○江頭：川のほとり。○應：まさにくすべし、と読み、きつとくだろう、きつとくに違いない、の意。○機關：計略を繞らす心底。

★闕下答傅逸人

闕下 傅逸人に答う

宋 張詠

蕭蕭疎葦映門墻

蕭々たる疎葦 門墻に映す

見説新秋膾味長

見説く新秋 膾味の長さを

何事輕拋來帝里

何事ぞ軽く 抛て 帝里に來り

至今魂夢遶寒塘

今に至りて 魂夢 寒塘を遶らんとは

【語釈】

○闕下：宮廷の門の下。○傅逸人：傅霖、青州（山東省）の人、隱棲して仕官しなかつた。○蕭蕭：物寂しいさまや音声の形容。○疎葦：まばらなヨシ。○門墻：門の垣。○見説：見たと言うことには。○膾味：なますの味。○帝里：帝都。○魂夢：夢。○寒塘：さむざむとした池塘。

★呈友人

友人に呈す

宋 高言

昨夜陰風透膽寒
昨夜陰風胆に透りて寒し
地爐無火酒瓶乾
地炉 火無くして 酒瓶乾く
男兒慷慨平生事
男兒 慷慨 平生の事
時復挑燈把劍看
時に復び 灯を挑げ劍を把りて看る

【語釈】

○陰風：朔風、寒い風。○地爐：地下に設けた暖炉。○慷慨：意氣が盛んで感激しやすいこと。○平生：常日頃。○挑：火を掻き起こす。

★病酒呈晉州李八丈

酒に病んで晉州の李八丈に呈す

宋 司馬光

身如五嶺炎蒸裏
身は 五嶺の如し 炎蒸の裏
心似三江高浪中
心は 三江に似たり 高浪の中
誰道醉鄉風土好
誰か道う 醉郷 風土好しと
舟車常願不相通
舟車 常に願うも 相通ぜず

【語釈】

○晉州：山西省臨汾市。○李八丈：不祥。○五嶺：広西省桂林市五嶺。○炎蒸：ひどく蒸し暑いさま。○三江：多くの川、地名として不特定。○醉郷：酔った気分を別の天地に比して言う。○舟車：舟に乗って旅行すること。

★ 與北山道人

北山の道人あたに与う

宋 王安石

蒔果疏泉带浅山

果を蒔まき 泉を疏とし 浅山を带おぶ

柴門雖設要常關

柴門さいもん 設くと雖いえども 常に關することを要す

別開小徑連松路

別に小徑を開き 松路に連なる

祇與鄰僧約往還

祇つしみて 隣僧と 往還を約せん

【語釈】

○北山…鍾山、南京の東北にある山。○道人…道教の師。○疏…通す。○带…取り囲む。
○柴門…柴でできた粗末な門。○關…門を閉ざす。

★ 贈王寂

王寂わうしやくに贈る

宋 蘇軾

與君暫別不須嗟

君と暫しばらく別る 嗟なげくを須もちいず

俯仰歸來鬢未華

俯仰ふぎやうのうちに 歸來せん 鬢びん 未だ華かならざるに

記取江南煙雨裏

記取きしゆす 江南 煙雨うらちの裏

青山斷處是君家

青山 断ゆる處 是れ君が家

【語釈】

○王寂…山西省汾陽市の人、真宗の時代の朝人。○俯仰…仰ぎ見る。○華…白髪。○記取…しっかり憶える。○江南…長江中下流域の南岸地方。○煙雨…こぬか雨。

★ 彭城遇子由

彭城にて子由に遇う

宋 蘇軾

別期漸近不堪聞

別期漸く近し聞くに堪えず

風雨蕭蕭已斷魂

風雨蕭々として已に魂を断つ

猶勝相逢不相識

猶お勝る相逢いて相識らず

形容變盡語音存

形容変じ尽くるも語音存するに

【語釈】

○彭城：江蘇省徐州市。○子由：弟の蘇轍。○別期：別れるとき。○漸：段々と。○蕭蕭：物寂しい様子や物音などの形容。○転結句：後漢末の党錮の禁により別れ別れになった夏馥と夏静の兄弟が再びあったときに、お互いの顔も分からず、言葉だけが通じたという故事。

★ 贈張繼愿

張繼愿に贈る

宋 蘇軾

受降城下紫髯郎

受降城下の紫髯郎

戲馬臺南舊戰場

戲馬台南の旧戦場

恨君不取契丹首

恨む君が契丹の首を取らず

金甲牙旗歸故郷

金甲牙旗故郷に帰るを

【語釈】

○受降城：敵人の投降者を受け入れる為の城、内蒙古の烏拉特旗の北にある。○紫髯郎：紫色の鬚をした男。○戲馬臺：河北省臨漳県の西にあった台。○金甲：金色のよろい。○牙旗：象牙の飾りのある旗。大将旗。

★ 寄四明神智師

四明の神智師に寄す

宋 沈遼

甬水樓頭看盡山

甬水樓頭 尽して山を見る

南城寺裏扣禪關

南城寺裏 禪関を扣く

老師多事猶相記

老師 多事 猶お相記す

千里馳書慰病孱

千里 書を馳せて 病孱を慰む

【語釈】

○四明：浙江省宁波市西南にある山。○神智：才知が卓越していること。○甬水樓：浙江省宁波市甬江にある樓。○南城寺：不祥。○禪關：禪門。○相記：覚えていいる。相は動作が相手に及ぶこと。○病孱：病弱の人。

★ 馬上口占呈立之

馬上の口占 立之に呈す

宋 陳師道

廉纖小雨濕黄昏

廉纖たる 小雨 黄昏を湿す

十里塵泥不受辛

十里の塵泥 受辛せず

轉就鄰家借油蓋

転じて 隣家に就き 油蓋を借る

始知公是最閑人

始めて知る 公は是れ 最も閑人なるを

【語釈】

○口占：紙に書かず即興で作った詩。○立之：不祥。○廉纖：微雨の形容。○黄昏：たそがれ。○受辛：つらいことを受け入れる。○油蓋：油を引いた傘。○公：立之のこと。○閑人：清閑で事のない人。

★ 謝陳昌國惠酒

陳昌國が酒を恵まるるに謝す

宋 郭祥正

欲瀉瓊漿洗我憂

瓊漿を瀉ぎ 我が憂いを洗わんと欲す

玉壺分送不知休

玉壺分ち送りて 休むを知らず

醉來一覺還鄉夢

酔來りて 一たび覺む 郷に還る夢

看盡江南二十州

看尽す 江南二十州

【語釈】

○陳昌國…不祥。○瓊漿…仙人の飲み物、転じて美酒。○玉壺…酒壺の美称。○江南…長江中下流の南岸の地域。

★ 月下懷廣勝華師

月下に広勝華師を懷う

宋 郭祥正

下方遙憶上方僧

下方遙かに憶う 上方の僧

素月青林隔幾層

素月 青林 幾層を隔つ

鐘磬聲沉香篆炷

鐘磬 声は沈みて 香篆む

只應詩思冷如冰

只だ応に 詩思 冷なること氷の如くなるべし

○下方…人間の下世界。○上方…上界。寺院。○素月…明月。○磬…への字型をした打楽器。○香篆…香を焚いた煙。○應…「まさにべし」、と読み、「たぶんくだろう、きつとくに違いない」の意。○詩思…詩の心。

★ 謝人惠茶

人の茶を恵むに謝す

宋 韓駒

白髪前朝舊史官

白髪の前朝の旧史官

風爐煮茗暮江寒

風炉茗を煮て暮江寒し

蒼龍不復從天下

蒼竜復た天従り下らず

拭淚看君小鳳團

涙を拭いて君を見る 小鳳団

【語釈】

○前朝：前の時代の朝廷。○史官：典籍を司る官。○風爐：小型の炉、酒や茶を煮るのに使う。○蒼龍：蒼い龍。○小鳳團：茶葉の精品。

★ 行至華陰呈舊同舍

行きて華陰に至り 旧同舍に呈す

宋 韓駒

落日同騎款段游

落日 同に款段に騎りて遊ぶ

倦依松石弄清流

倦みて松石に依り 清流を弄す

蓬萊漢殿春分手

蓬萊漢殿 春手を分ち

一笑相逢太華秋

一笑し相逢う 太華の秋

【語釈】

○華陰：陝西省渭南市華陰。○同舍：同宿者。同僚。○款段：馬。○蓬萊漢殿：不祥。○太華：華山。五岳の一つ。陝西省華陰にある。

★ 偶書二絶呈館中舊同舍

偶二絶を書し館中の旧同舍に呈す

宋 韓駒

去年看曝石渠書
去年 石渠の書を曝すを見る
内酒均頒白玉腴
内酒 均しく頒つ 白玉腴
今日醉登延閣望
今日 酔いて 延閣に登りて望む
幾人回首憶窮途
幾人か 首を回らして 窮途を憶う

【語釈】

○同舍…同宿者。同僚。○石渠…皇室の蔵書を収める宮殿。○内酒…宮廷で作った酒。○白玉腴…酒の名。○延閣…帝王の蔵書の閣。○窮途…行き詰まりの道。困窮の道。

★ 偶書二絶呈館中舊同舍

偶二絶を書し館中の旧同舍に呈す

宋 韓駒

御本曾看錦帕舒
御本 曾て看る錦帕の舒ぶるを
醉驚飛閣上凌虚
酔いて驚飛し閣上 虚を凌ぐ
而今卧病衡门底
而今 病に卧す 衡門の底
自晒茆簷幾卷書
自ら晒す 茆簷 幾卷の書

【語釈】

○同舍…同宿者。同僚。○御本…禁中所蔵の本。○錦帕…銀の布。○舒…展開する。○而今…現在。○衡門…横木を渡しただけの粗末な門。○茆簷…カヤの軒。

★簡甯子儀兩絶

甯子儀に簡す兩絶

宋 呂本中

只恐老去被花惱
更欲忘憂須酒澆
何似山堂病居士
閉門高枕過春朝

只だ恐る 老去りて 花に悩ませらるるを
更に憂いを忘れんと欲して 酒を須いて澆ぐ
何に似たるや 山堂の病居士
門を閉じ 枕を高くして 春朝を過ぐ

【語釈】

○甯子儀：不祥。○山堂：山中の隱者の住まい。○居士：隱者。

★和何季崇簽判

何季崇簽判に和す

宋 曹勛

羈思登臨已怯秋
紫萸黃菊更添愁
海光不動暮山紫
人在天涯空倚樓

羈思 登臨 已に秋に怯ゆ
紫萸 黃菊 更に愁いを添う
海光動かず 暮山紫なり
人は天涯に在りて 空しく樓に倚る

【語釈】

○何季崇簽判：不祥。○羈思：羈旅の思。○登臨：高いところに登って下方を眺める。重陽の節句の習わし。○紫萸：茱萸。重陽の節句に登臨したとき、頭に挿す。○黃菊：重陽の節句に登臨したとき、菊酒を飲む。○天涯：空のはて。

★ 和顔持約

顔持約に和す

陳與義

半篙寒碧秋垂釣
半篙の寒碧 秋 釣を垂る
一笛西風夜倚樓
一笛の西風 夜 樓に倚る
多少巫山舊家事
多少の巫山 旧家の事
老來分付水東流
老來分付す 水の東流するに

【語釈】

○顔持約：顔博文。德州（山東省陵県）の人。徽宗政和八年（一一一八）進士。欽宗靖康二年（一一二七）秘書省著作郎となる。○半篙：釣り竿半分の長さ。○西風：秋風。○巫山：三峽の巫峽にある山。○老來：老年になってから。○分付：分け与える。

★ 兵火之後家藏墳籍蕩然寄居江村欲借書諸公先寄此詩

宋 王庭珪

兵火の後 家藏の墳籍 蕩然たり 江村に寄居し 諸公に書を借りんと欲して 先に此の詩を寄す

卜築江村翠嶺坳
卜築す 江村 翠嶺の坳
喜君書室近衡茅
喜ぶ 君が書室 衡茅に近きを
牙籤插架幾千冊
牙籤 架に挿す 幾千冊
準擬從頭借一抄
準擬す 從頭 借りて一抄せん

【語釈】

○墳籍：古文書。○蕩然：あとかたもないさま。○卜築：占って家を建てる。○翠嶺：緑の山嶺。○坳：くぼみ。○衡茅：粗末な家。○牙籤：象牙で作った書籍の見分けの札。○準擬：なぞらえ擬すること。○從頭：最初に。○一抄：まず最初に一読する。

★ 懷劉溫其

劉溫其を懷う

宋 劉子翬

結茅同隱水雲間
何日柴車不往還
憶得松林長嘯罷
歸時明月遍秋山

茅を結んで 同じく隠る 水雲の間
何日柴車 往還せず
憶い得たり 松林 長嘯罷むを
歸時 明月 秋山に遍からん

【語釈】

○劉溫其…不祥。○結茅…粗末な家を建てる。○柴車…裝飾のない簡素な車。○長嘯…長く嘯く。

★ 寄懷密菴

密菴に寄懷す

宋 劉子翬

曾訪高人上翠峯
至今清興逐松風
籃輿夢想行山處
白葛花開細雨中

曾て 高人を訪ね 翠峰に上る
今に至りて 清興 松風を逐う
籃輿 夢想す 山を行く処
白葛 花は開く 細雨の中

【語釈】

○密菴…不祥。○高人…志の高尚な人。○清興…清らかな楽しみ。○籃輿…こし。○白葛…白いかずら。○細雨…こぬか雨。

★ 觀林長仁書卷戲題問答二首

宋 朱熹

林長仁りんちょうじんが書卷を觀て 戲たわむれに問答を題す二首

猿去山空鶴亦飛 猿去り山空しくして鶴亦た飛ぶ

柴門空掩釣魚磯 柴門空しく掩う釣魚の磯

門前樹葉都黃了 門前の樹葉都て黃了す

何事幽人久不歸 何事ぞ幽人久しく帰らざるは

【語釈】

○林長仁…不祥。○柴門…柴で作った粗末な門。○黄了…すっかり黄色くなる。○幽人…幽隱の人。隱者。

★ 觀林長仁書卷戲題問答二首

宋 朱熹

林長仁りんちょうじんが書卷を觀て 戲たわむれに問答を題す二首

爲愛雲泉百尺飛 雲泉の百尺を飛ぶを愛するが為に

故將茅屋傍苔磯 故こゝせむらに茅屋ぼうおくを將もつて苔磯たいきに傍かたう

幾年清夢黃塵裏 幾年の清夢 黃塵の裏うち

此日秋風一棹歸 此の日 秋風 一棹いっせう帰る

【語釈】

○林長仁…不祥。○雲泉…瀑布。○茅屋…茅葺きの粗末な家。○苔磯…苔の生えた磯。○一棹…一つの小舟。

★ 祠事齋居聽雨呈劉子晉

祠事齋居 雨を聴き劉子晉に呈す

宋 朱熹

刀筆常時篋笥盈
刀筆常時 篋笥に盈つ
齋祠今喜骨毛清
齋祠今 喜ぶこと 骨毛に清きを
與君此日俱無事
君と 此の日 俱に無事
共愛寒階滴雨聲
共に愛す 寒階 滴雨の聲

【語釈】

○祠事齋居：祭礼に際して齋戒を行う為の居所。○劉子晉：不祥。○刀筆：筆。○笥盈：竹製の物入れ。○齋祠：心を清めて祀る。

★ 和子服老弟黃楊詩

子服老弟の黃楊詩に和す

宋 朱熹

聞道黃楊山上頭
聞道く 黃楊山上の頭
千峰環抱百泉幽
千峰 環抱して 百泉幽なり
羨君拄杖年年去
羨む 君が杖を柱いて 年々去り
飽看人間萬頃秋
飽くまで 人間に 万頃の秋を見るを

【語釈】

○子服：丘膺。建寧建陽の人。朱熹の老友。○黃楊：つげの木。○黃楊山：広東省珠海市黃楊山。○環抱：取り巻く。○萬頃：非常に広いこと。

★ 戲贈勝私老友

戲に勝私老友に贈る

宋 朱熹

槐花黄盡不關渠

槐花 黄盡して渠に関せず

老向功名意自老

老いて功名に向いて意 自ら疎なり

乞得山田三百畝

乞い得たり 山田 三百畝

青燈徹夜課農書

青灯 夜を徹して 農書を課す

【語釈】

○勝私老友…不祥。老友は昔から友人。○黄盡…すっかり黄葉する。○乞得…求めて貰うことができた。○青灯…青い灯火。清貧な生活。

★ 寄謝劉彥集菖蒲之貺

劉彥集菖蒲之貺を寄謝す

宋 朱熹

君家蘭杜久萋萋

君が家の蘭杜 久しく萋々

近養菖蒲綠未齊

近く菖蒲を養いて 緑 未だ 齊わらず

乞與幽人伴岑寂

幽人に乞与して 岑寂に伴う

小窗風露日低迷

小窓の風露 日に低迷

【語釈】

○寄謝…礼を伝える。○劉彥集…不祥。○蘭杜…香草の一種。○萋萋…草木が生い茂っているさま。○幽人…隱者。○乞與…与える。○岑寂…高く静かなところ。

★道中憶胡季懷

道中 胡季懷を憶う

宋 周必大

珍重臨分白玉卮

珍重分つに臨む 白玉の卮

醉中那暇說相思

醉中 那ぞ暇あらん 相思を説くに

天寒道遠酒醒處

天寒く道遠くして 酒醒むる處

始是憶君腸斷時

始めて是れ 君を憶う 腸斷の時

【語釈】

○胡季懷…不祥。○白玉卮…白玉でできた杯。○腸斷…ひどい悲しみ、愁い。

★次韻揚子直

揚子直に次韻す

宋 周必大

栽花種竹滿平園

花を栽え 竹を種え 平園に満つ

人道安閒似樂天

人道 安閒 樂天に似たり

自笑鉛黃消永日

自ら笑う 鉛黄 永日を消すを

何如蠻素樂華年

何ぞ如ん 蛮素 華年を楽しむに

【語釈】

○次韻…同じ韻字を同じ順序で用いて詩を作ること。○揚子直…不祥。○安閒…心が落ち着いてゆったりしたさま。○樂天…白居易。○鉛黄…添削、校勘すること。○永日…長い日。○何如…どうしてに及ぼうか。反語。○蠻素…? ○華年…青春の時。

★示七邑宰

七邑宰しちゆいざいに示す

宋 王十朋

九重天子愛民深
九重れいじゅうの天子 民を愛すること深く
令尹宜懷撫隱心
令尹れいいん 宜しくそくいん側隱いだの心を懐くべし
今日黃堂一盃酒
今日 黃堂 一杯の酒
使君端爲庶民斟
使君まは端はに 庶民の為に斟くむ

【語釈】

○邑宰：県令。○令尹：地方長官。○撫隱：哀れみ傷む。○黃堂：地方長官の居所。○使君：刺史。

★和林子望

林子望に和す

宋 陳藻

勸君莫要嘆無官
君に勧む 要かならずしも 官の無きを嘆くこと莫かれ
幸有田園在故山
幸に 田園の故山に在る有り
滿室清風滿林月
滿室 清風 滿林の月
人生何事勝於閒
人生 何事ぞ 閑かんよりも勝まさらんや

【語釈】

○林子望：不祥。○故山：故郷の山。

★ 次韻樂先生吳中見寄

樂先生が吳中に寄せらるるに次韻す

宋 范成大

送春濛雨漲蘋灘

春を送る濛雨 蘋灘に漲る

荷葉田田柳絮闌

荷葉 田々 柳絮の闌

想見垂虹三萬頃

想い見る垂虹 三万頃

拍天湖水釣絲寒

天を拍つ湖水 釣糸寒し

【語釈】

○樂先生…盛曠。武林（浙江省杭州市）の人。○濛雨…こぬか雨。○蘋灘…浮き草のある早瀬。○田田…蓮の葉が水に浮かんださま。連なるさま。

★ 求竹軒詩

法宝璉師 竹軒の詩を求む

宋 陸游

南軒竹色映谿光

南軒の竹色 谿光に映ず

不減吾州五月涼

減ぜず 吾州 五月の涼

猶恨秋來鷗鷺少

猶お恨む 秋 来りて 鷗鷺の少なるを

須君更爲築横塘

須く 君 更に 為に 横塘を築くべし

【語釈】

○法宝璉師…不祥。○竹軒…竹で作った家。○更爲…更に加えて。○須…「すべからくすべし」と読み「当然くすべきである」の意。○横塘…水の隄。

★ 寄題朱元晦武夷精舍

朱元晦の武夷精舍に寄題す

宋 陸游

先生結屋綠巖邊

先生屋を結ぶ綠巖の辺

讀易懸知屢絕編

易を読み懸に知り屢ば編を絶つ

不用采芝驚世俗

用いず芝を采りて世俗を驚すを

恐人謗道是神僊

恐らくは人謗りて是れ神僊と道わん

【語釈】

○朱元晦…朱熹。○武夷精舍…福建省南平市武夷精舍。朱熹が隱棲した所。○懸…かけ離れる。○絶編…古い書物を破る。○神僊…神仙世界の人の。

★ 寄題朱元晦武夷精舍

朱元晦の武夷精舍に寄題す

宋 陸游

身閑剩覺溪山好

身閑にして剩だ覺ゆ溪山の好きを

心靜尤知日月長

心靜にして尤も知る日月の長きを

天下蒼生未蘇息

天下の蒼生未だ蘇息せず

憂公遂與世相忘

憂う公が遂に世と相忘れんことを

【語釈】

○元晦…朱熹。○武夷精舍…福建省南平市武夷精舍。朱熹が隱棲した所。○剩…ほんとうに、非常に。○蒼生…人民。○蘇息…生き返ったような氣持でほっと息をつくこと。

★ 臨安旅邸答蘇虞叟

臨安りんあんの旅邸りょていにて蘇虞叟そよに答う

宋 姜夔

垂楊風雨小樓寒

垂楊 風雨 小樓寒し

宋玉秋詞不忍看

宋玉の秋詞 看るに忍びず

萬里青山無處隱

万里の青山 隠るる処無し

可憐投老客長安

憐むべし 老いて投じ 長安に客かくとなるを

【語釈】

○臨安：浙江省杭州市。○蘇虞叟：不祥。○宋玉：戦国時代の楚国の。屈原の弟子といわれる。楚の襄王のとき大夫となる。○宋玉秋詞：「九弁五首」の冒頭の一節？。

★ 寄張季思

張季思ちようきしに寄す

宋 翁卷

荆吳中隔萬山遥

荆吳けいご 中ば 万山を隔ちて遥なり

那得相逢話寂寥

那なんぞ得ん 相逢せきりよういて 寂寥わを話するを

長憶梅花好時節

長く憶う 梅花 好時の節

訪君船泊古楓橋

君を訪ね 船を泊す 古楓橋

【語釈】

○張季思：不祥。○荆吳：長江中下流域。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○古楓橋：江蘇省蘇州市の楓橋。張継の「楓橋夜泊」で有名。

★ 寄玉溪林逢吉

玉溪ぎょくけいの林逢吉りんほうきちに寄す

宋 戴復古

心腹相知會面稀

心腹相知りて 会面かいめん稀なり

一春未有盍簪期

一春 未だ有らず 盍簪がいしんの期

西窗風雨愁眠夜

西窓の風雨 愁眠の夜

夢到君家賦小詩

君の家に到りて 小詩を賦すことを夢む

【語釈】

○玉溪…江西省上饒市玉溪。○…寓台州臨海（浙江省）の人。仕歴不詳。○會面…会見。
○盍簪…会見。

★ 到南昌呈宋愿父伯仲黄子魯諸丈

宋 戴復古

南昌に到りて 宋愿父そうげんふ・伯仲はくちゆう・黄子魯こうころ・諸丈しよじやうに呈す

一秋無便寄平安

一秋 便たよりの平安を寄する無く

新鴈聲聲報早寒

新鴈しんがん 声々せいせい 早寒を報ず

昨夜檢衣開故篋

昨夜 衣を檢じ 故篋こけうを開き

去年家信把來看

去年の家信 把とり来りて看る

【語釈】

○南昌…江西省南昌市。○宋愿父…宋自逢、婺州金華（浙江省金華市）の人、寧宗嘉定四年進士。累官して楚州通判となる。○伯仲…兄弟。○黄子魯…黄師參、閩清（福建省）の人。嘉定十三年（一二二〇）の進士、国子正となる。○丈…年長者への敬称。○故篋…なじみの箱。○家信…家からの手紙。

★ 到南昌呈宋愿父伯仲黄子鲁诸丈

宋 戴復古

南昌に到りて宋愿父・伯仲・黄子鲁・诸丈に呈す

扁舟幾度到南昌 扁舟幾度か 南昌に到る

東望家山道路長 家山を東望すれば 道路長し

醉裏不知身是客 醉裏 知らず 身は是れ客なるを

故人多處亦吾郷 故人多き処 亦た吾が郷

【語釈】

○南昌：江西省南昌市。○宋愿父：宋自逢、婺州金华（浙江省金华市）の人、寧宗嘉定四年進士。累官して楚州通判となる。○伯仲：兄弟。○黄子：黄師參、閩清（福建省）の人。嘉定十三年（一二二〇）の進士、国子正となる。○丈：年長者への敬称。○扁舟：小舟。○客：旅人。○故人：古くからの友人。

★ 答友人

友人に答う

宋 嚴羽

湘江南去少人行 湘江南に去れば 人行少なり

瘴雨蠻煙白草生 瘴雨 蛮煙 白草生ず

誰念梁園舊詞客 誰か念わん 梁園の旧詞客

枕榔樹下獨聞鶯 枕榔樹下 独り鶯を聞く

【語釈】

○湘江：湖南省长沙市湘江。○瘴雨蠻煙：山川の毒気を含む煙雨。○梁園：帝都汴京（河南省開封市）。○詞客：詩人。○枕榔樹：砂糖椰子の樹。

★ 次韻程弟

次韻弟に程す

宋 方岳

柴門雖設不曾開
柴門 設くと雖も 曾て開かず
俗面向人三寸埃
俗面 人に向う 三寸の埃
却是前溪雙白鷺
却って是れ 前溪の双白鷺
門關不住又飛來
門關に住まず 又た飛來す

【語釈】

○次韻：同じ韻字を同じ順序で用いて詩を作ること。○柴門：柴で作った粗末な門。○俗面：俗人の顔。○門關：関門。

★ 寄書後作

書を寄す後の作

宋 林希逸

幾度題書客未還
幾度か書を題して客未だ還らず
歸鴻節節度鄉關
歸鴻節々 郷関を度る
遙知一紙平安字
遙に知る 一紙平安の字
慈母燈前閣淚看
慈母 灯前に 涙を閣して看るを

【語釈】

○客：旅人。ここでは作者。○歸鴻：帰雁。○節節：逐次。○郷関：郷土。○閣：止め

★ 和仲弟

仲弟に和すちゆうてい

宋 劉克莊

一春簷溜不曾停

一春 簷溜 曾て停めずえんりゆう

滴破空階蘚暈青

滴破す 空階 蘚暈の青てきは

便是家山對床雨

便ち是れ 家山 對床の雨

絶憐老大不同聽

絶だ憐れむ 老大にして 同に聴かざるをはなは

【語釈】

○仲弟…生まれ順が二番目である弟。○簷溜…軒端から落ちる雨だれ。○滴破…滴で打ち破る。○蘚暈…苔の傘。○對床…床を並べて対すること。○老大…老年。

★ 與邵德芳

邵德芳に与うしやうとくほう

宋 林景熙

年少同游古辟雍

年少 同游す 古辟雍こへきよう

文光萬丈掃秋虹

文光 万丈 秋虹を掃うはら

不須舊事談如夢

須いず 旧事の談 夢の如きをもち

燈下相看亦夢中

灯下 相看るも 亦た夢中ま

【語釈】

○與邵德…淳安（浙江省）の人。度宗咸淳七年（一二七一）の進士、處州教授となる。○辟雍…皇帝が設けた大学。○文光…綾のある光。○夢中…夢の中。

★ 懷郭安道

郭安道を懷うかくあんどう

元 周 馳

江南江北路茫茫

江南江北路 茫茫ぼうぼう

明月高樓各異鄉

明月高樓 各異鄉おのおの

旅雁叫雲天似水

旅雁雲に叫び 天水に似たり

故人今夜泊瀟湘

故人 今夜 瀟湘に泊す

【語釈】

○郭安道：郭貫、保定（河北省保定市）の人、世祖至元二十七年に監察御史となり、英宗至治初集賢大学士となる。○江南江北：江蘇省、浙江省、安徽省。○瀟湘：瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地域。

★ 題扇贈弟大監

扇に題し弟大監に贈るていだいかん

元 韓 隣

離離鳴雁落江濱

離々りょうりょうたる鳴雁 江浜に落つ

夢裏年來相見頻

夢裏むり 年來 相見ること頻なり

吟盡楚詞招不得

楚詞を吟尽ぎんじんして 招き得ず

夕陽愁殺椅樓人

夕陽 愁殺しほつうせきす 樓よに椅る人

【語釈】

○弟大監：不祥。○離離：ゆったりして楽しむさま。○夢裏：夢の中。○楚詞：楚辞の「招魂」。○愁殺：ひどく悲しませる。

★ 寄俞秀老清老二居士

俞秀老・清老二居士に寄す

宋

釋道潜

慙愧君家好弟兄

慙愧す 君が家の 弟兄好きを

風流宜與晉人弁

風流 宜しく 晋人と弁ずべし

青鞋布襪能從我

青鞋 布襪 能く我に従う

共入廬山深處行

共に廬山に入りて 深き処に行く

【語釈】

○俞秀老・清老：共に不祥。○居士：道芸に達しながら官に仕えない人。○慙愧：恥じて後悔する。○宜：「よろしくすべし」と読み、「くするのが妥当である」「くするほうがよい」の意。○晋人：不祥。東晋の陶淵明？○青鞋：わらじ。○布襪：布の靴下。○廬山：江西省九江市南部にある名山。陶淵明隱棲の地の近くにある。

★ 辭侍郎蔣公謙客見招北

侍郎蔣公が客を謙して招かるるを辭す

宋

釋惟政

昨日曾將今日期

昨日 曾ぞ 今日を將つて期す

出門倚杖又思惟

門を出で 杖に倚りて 又 思惟す

爲僧只合居巖谷

僧と為り 只だ合に 巖谷に居るべし

國士筵中甚不宜

國士 筵中 甚だ宜しからず

【語釈】

○侍郎蔣公：不祥。○謙：集まって宴会をする。○曾：「なんぞ」と読み「なぜ」「どうして」の意。○合：「まさにすべし」と読み「くにしなければならぬ」「当然くのはずである」の意。○巖谷：山谷。○國士：国家の為に命をささげて尽くす人。○筵中：宴席。

★ 和薛伯通韻

薛伯通の韻に和す

元 耶律楚材

黄花紅葉滿秋山

黄花 紅葉 秋山に満つ

月浸銀河夜未闌

月は銀河を浸し夜未だ闌ならず

寂寞梧桐深院落

寂寞たる梧桐 院落に深し

有人何處倚闌干

人有りて何れの処にか闌干に倚る

【語釈】

○薛伯通…不祥。○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。○梧桐…桐とおおぎり。○院落…垣根でかこった屋敷。屋敷の中庭。

★ 將遊茅山先寄道士張伯雨

元 薩都刺

將に茅山に遊ばんとし先に道士張伯雨に寄す

借騎白鶴訪茅君

借りて白鶴に騎り茅君を訪ぬ

琪樹秋聲隔夜聞

琪樹の秋声 夜を隔てて聞ゆ

料得山中張道士

料り得たり 山中の張道士

開門先掃鶴巢雲

開を門きて 先ず掃う 鶴巢の雲

【語釈】

○將…「まさに〜せんとす」と読み、「今にも〜しようとする」の意。○茅山…江蘇省鎮江市茅山。○道士…道教の僧侶。○張伯雨…杭州錢塘の人、諸名山を遍歴し家を捨てて道士となる。○茅君…仙人となった伝説の人。張伯雨をなぞらえる。○琪樹…仙境の玉樹の花。○秋聲…秋の気配を感じさせる物音。○料得…推量することが出来る。

★ 寄友

友に寄す

元 朱希晦

雨過溪頭鳥篆沙

雨過ぎて 溪頭 鳥沙に篆す

溪山深處野人家

溪山 深き処 野人の家

門前桃李都飛盡

門前の桃李 都て飛び尽くし

又見春光到棟花

又 春光を見て 棟花に到る

【語釈】

○溪頭…谷川のほとり。○篆…足跡を付ける。○野人…田舎の住民。○春光…春景色。○棟花…オウチの花。

★ 懷顧仲瑛

顧仲瑛を懷う

明 楊維禎

五月江聲入閣寒

五月 江声 閣に入りて寒し

故人西望倚闌干

故人 西を望みて 闌干に倚る

珠簾乍卷西山雨

珠簾 乍ち巻く 西山の雨

一片青峰拄笏看

一片の青峰 笏を拄て看る

【語釈】

○顧仲瑛…不祥。○珠簾…玉すだれ。

★ 春夜懷重居字

春夜 重居字を懷う

明 馬治

寺中虚閣每曾登
忽欲看花往未能
夜色蕭條門半掩
獨依寒燭憶高僧

寺中の虚閣 毎に曾ち登らんや
忽ち花を看んと欲して 往くこと 未だ能わず
夜色 蕭條として 門 半ば掩う
ひとり 寒燭に依り 高僧を憶う

【語釈】

○重居字…不祥。○虚閣…人のいない楼閣。○夜色…夜の景色。夜の気配。○蕭條…もの静かなさま。

★ 次翰林都事拜珠春日見寄韻

明 張以寧

拜住が 春日 韻を寄せらるるに次す

日高睡起小窓明
飛絮遊絲弄晝晴
忽憶金河年少夢
柳陰騎馬聽流鶯

日高くして 睡起すれば 小窓明らかなり
飛絮 遊糸 昼晴を弄す
忽ち憶う 金河 年少の夢
柳陰 馬に騎りて 流鶯を聴く

【語釈】

○飛絮…柳絮。○遊絲…糸のような柳の枝。○金河…大黒河、内蒙古自治区を流れる川。○年少…若者。

★泊瓜洲懷舊寄顧利賓王又新

明 劉 炳

瓜洲かしゅうに泊して旧を懐こりい顧利賓王ごりひんおうおうに又新あらたに寄す

潮聲月色滿江船

潮声 月色 江船に満つ

回首春風十六年

首こころを回めぐらせば春風 十六年

憶得石橋楊柳巷

憶おもい得えたり 石橋 楊柳の巷ちまた

珠簾銀燭聽歌眠

珠簾しゆれん 銀燭 歌を聴きいて眠ねりしを

【語釈】

○泊瓜：江蘇省邗江県。○顧利賓王：不祥。○憶得：思い出すことができる。○珠簾：玉すだれ。

★寄紅橋舊人

紅橋の旧人に寄す

明 林 鴻

殘燈影暗別魂消

殘灯 影暗くして 別魂消す

淚濕鮫人玉線綃

淚 湿うるおう 鮫人こうじんの玉線綃ぎよくせんしやう

記得雲娥相送處

記し得たり 雲娥 相送る處

淡烟斜月過紅橋

淡煙 斜めにして 月 紅橋を過ぐ

【語釈】

○紅橋：不祥。○舊人：古くからの知り合い。○別魂：離別の情思。○鮫人：伝説中の人魚。○玉線綃：鮫人の機織り中の涙が玉となること。○雲娥：仙女。○淡煙：淡いもや。

★ 南行途中寄錢塘親友

南行途中 錢塘の親友に寄す

明 施 敬

萬里移家入瘴烟

万里 家を移して 瘴煙に入る

故郷音耗若為傳

故郷 音耗 若為ぞ伝えん

衡陽自古無來鴈

衡陽 古より 來鴈無し

況去衡陽又八千

況や 衡陽を去る 又八千にしてをや

【語釈】

○錢塘：浙江省杭州市。○瘴烟：熱病を起こす山川の悪氣を含む靄。○音耗：音信。○若為：若何、「いかんぞ」とよみ「どうしてししようか」「どうしてくであろうか」の反語。○衡陽：湖南省衡陽市。「衡陽雁断」衡陽は、衡山の南に有り、衡山の南にある回雁峰は険しい峰で、雁がやって来ても、これを越えて南下することはできないと言われた。

★ 寄淮南

淮南に寄す

明 沈 愚

江南相望路迢迢

江南 相望めば路 迢々たり

風滿關河雁影飄

風は 関河に満ち 雁影 飄える

最好鳳凰台上月

最も好し 鳳凰台上の月

共誰攜酒聽吹簫

誰と共に 酒を携えて 吹簫を聴かん

【語釈】

○淮南：不祥。○江南：長江中下流の南の地方。○迢迢：はるかなさま。遠いさま。○關河：関山河川。○鳳凰台：南京市の南にあった楼台。

★ 懷友

友を懷う

明 張 弼

飛花渺渺送春歸
忽漫鉤簾對夕暉
竹下小池雙翡翠
啣魚飛過綠苔磯

飛花 渺々として 春の帰るを送る
忽ち 漫く 簾を鉤して 夕暉に對す
竹下の小池 双翡翠
魚を啣て 飛び過ぐ 綠苔の磯

【語釈】

○飛花：柳絮。○渺渺：広く果てしないさま。○鉤：鉤にかける。○夕暉：夕焼け。○雙翡翠：かわせみのつがい。

★ 寄友

友に寄す

明 史 鑑

柴門流水釣磯閑
夢繞天涯鬢已斑
酒債詩逋還未了
又隨人去看青山

柴門 流水 釣磯 閑なり
夢は 天涯を繞りて 鬢 已に斑なり
酒債 詩逋 還た 未だ了らず
又人に隨いて去り 青山を見る

【語釈】

○柴門：柴で作った粗末な門。○天涯：空のはて。○酒債：酒代の借金。○詩逋：他人から送られた詩でまだ返しの詩を送っていないもの。

★ 題美人寄胡丈

美人に題し胡丈に寄す

明 邊 貢

月宮秋冷桂團團
月宮秋冷かにして桂 団々
歳歳花開只自攀
歳々 花開き 只だ 自ら攀ず
共在人間説天上
共に 人間に在りて 天上を説く
不知天上憶人間
知らず 天上 人間を憶うを

【語釈】

○胡丈：不祥。○月宮：月の中にあるといわれる宮殿。○團團：丸いさま。垂れ下がって
いるさま。○歳歳：年々。

★ 金陵逢方日昇

金陵にて方日昇に逢う

明 邊 貢

燕市分攜十七春
燕市に分携す 十七春
白門相見白頭新
白門に相見て 白頭新なり
鳳凰樓畔含香客
鳳凰樓畔 含香の客
江海飄零有幾人
江海 飄零 幾人か有る

【語釈】

○金陵：南京。○方日昇：浙江省永嘉の人、六書を好む。○燕市：北京。○分攜：離別。
○白門：南京の別称。○鳳凰樓：金陵（南京）にあった楼閣。○飄零：木の葉がはらはら
と落ちること。

★ 寄鄭繼之

鄭繼之に寄す

明 何景明

台嶽中峰綵霧生

台岳 中峰 綵霧生ず

石梁遙挂赤霞城

石梁 遙に挂く 赤霞城

仙潭尺素傳雲鯉

仙潭 尺素 雲鯉を伝う

報爾今尋華頂行

爾に報ず 今華頂を尋ねて行くと

【語釈】

○鄭繼之：鄭善夫、福建閩鼎の人、弘治十八年進士、南京吏部郎中となる。○台嶽：天台
山。○綵霧：色の美しい霧。○石梁：安徽省滁州市天長市。或いは、天台山の名勝石橋？
○赤霞城：天台山の目印赤城峰。○仙潭：仙界の淵。○尺素：手紙。○華頂：浙江省台州
市華頂。

★ 喜戴生得鄉薦

戴生の郷薦を得るを喜ぶ

明 何景明

梁園宋苑總宜秋

梁園 宋苑 総べて秋に宜し

夾道槐花映綺樓

道を夾む 槐花 綺樓に映ず

試問東瀛海邊住

試に問う 東瀛 海辺の住

何如金明池上遊

何如んぞ 金明池上の遊

【語釈】

○戴生：戴冠、河南信陽の人、正徳三年進士、何景明の詩友。○郷薦：科擧の中央試験の
受験資格を得ること。○梁園宋苑：様々な庭園。○東瀛：東海。○金明池：開封の西鄭門
の西北にある池。

★ 江陵舟中贈田李二子

江陵舟中にて田・李二子に贈る

明 楊慎

落月寒沙夜未分

落月 寒沙 夜未だ分たず

玉簫金管醉中間

玉簫 金管 醉中に聞く

明朝回首沅江路

明朝 首を回らす 沅江の路

愁聽清猿和白雲

愁いて聴く 清猿の 白雲に和するを

【語釈】

○江陵：湖北省荊州市江陵県。○玉簫金管：管樂器の美称。○沅江：湖南省懷化市沅江。

★ 失題（吳門）

失題（吳門）

明 金鑾

闔閭城外花如煙

闔閭城外 花煙の如し

洞庭山下水連天

洞庭山下 水天に連なる

安得弄花緣水去

安ぞ得ん 花を弄して水に縁って去るを

與君同上木蘭船

君と同じく上る 木蘭の船

【語釈】

○吳門：春秋時代の吳の都、蘇州市一帶。○闔閭城：吳王闔閭の城、蘇州の別称。○洞庭山：蘇州の西山。

★ 贈滁陽程逸人

滁陽の程逸人に贈る

明 皇甫湜

安道携琴去入吳

安道 琴を携えて 去りて吳に入る

小山遙對白雲弧

小山 遙かに対して 白雲弧なり

梁溪盡處烟波闊

梁溪 尽きる処 煙波闊し

好逐秋風下五湖

好し 秋風を逐いて 五湖に下らん

【語釈】

○滁陽：安徽省滁州市。○程逸人：不祥。○梁溪：川の名。○烟波：川に立つ靄。○五湖…太湖。

★ 荅寄于鱗

于鱗に荅寄す

明 許邦才

結交昔日擬荆高

交まじわりを結び 昔日 荆高けいこうに擬す

那管傍人笑我曹

那なんぞ管せん 傍人の我曹がそうを笑うに

醉後悲歌燕市裏

醉後 悲歌す 燕市うちの裏

一時海内更無豪

一時 海内かいだい 更に 豪 無し

【語釈】

○荅寄：答えて寄せる。○荆高：『史記』刺客列伝の荆軻と高漸離。○我曹：我ら。○燕市：燕の都（北京付近）。○海内：天下。

★ 寄懷元美

元美げんびに寄懷きかいす

明 許邦纒

鴻雁驚秋海上還

鴻雁こうがん 秋に驚き 海上より還かえる

片雲孤月薊門關

片雲 孤月 薊門げいもんの関

奈何昨夜西窗夢

奈何いかんんぞ 昨夜 西窓の夢

不道千山與萬山

道いわず 千山と万山と

【語釈】

○寄懷：思いを寄せる。○元美：不祥。○鴻雁：かり。○薊門：北京城西の地。

★ 簡殿卿

殿卿でんきやうに簡す

明 李攀龍

玉函山色倚嵯峨

玉函ぎよくかんの山色 嵯峨よに倚る

北渚清秋已自波

北渚ほくちよの清秋 已おのずかに自ら波だつ

我欲與君携酒去

我 君と酒を携えて 去らんと欲す

不知何處白雲多

知らず 何れの処か 白雲多きを

【語釈】

○簡：書簡を送る。○殿卿：許邦才、山東省歷城の人、嘉靖二十二年の進士、永寧知州となる。○玉函：山東省歷城にある山。○山色：山の気配、景色。○嵯峨：高く突っ立つて険しいさま。○北渚：北側の水際。

★ 荅寄殿卿

殿卿に荅寄す

明 李攀龍

江南行色照青春

江南の行色 青春を照らす

白髪相看夢裏新

白髪 相い見て 夢裏に新たなり

憶爾故郷歸未得

憶う 爾が故郷に帰ることを 未だ得ざるを

梁園風雪正愁人

梁園の風雪 正に人をして愁えしむ

【語釈】

○荅寄：答えて寄せる。○殿卿：許邦才、山東省歷城の人、嘉靖二十二年の進士、永寧州となる。○江南：長江中下流の南岸の地方。○夢裏：夢の中。○梁園：宮中の庭園。

★ 寄元美

元美に寄す

明 李攀龍

江南風雨夢扁舟

江南の風雨 扁舟を夢む

薊北燕花傍酒樓

薊北の燕花 酒樓に傍う

無那故人揺落盡

那んするとも無し 故人 揺落尽くすを

教君何處不悲秋

君をして 何れの処か 悲秋ならしめん

【語釈】

○江南：長江中下流域の南岸の地方。○扁舟：小舟。○薊北：燕の都（北京）の北○燕花：燕の地方の花。○無那：無奈、どうしようもない。○故人：昔なじみ。○揺落：ゆれ落ちる。亡くなる。

★ 懷明卿

明卿を懷う

明 李攀龍

豫章西望彩雲間

豫章 西望す 彩雲の間

九派長江九疊山

九派の長江 九疊の山

高卧不須窺石鏡

高卧 石鏡を窺うを須いず

秋風憔悴侍臣顔

秋風 憔悴す 侍臣の顔

【語釈】

○明卿…不祥。○豫章…江西省北部。○九派…多くに分かれる。○九疊…多く重なる。○高卧…閑適の気分で安臥すること。○石鏡…石で出来た鏡。許渾詩「高歌一曲掩明鏡，昨日少年今白頭。」

★ 示殿卿

殿卿に示す

明 李攀龍

湖上青山遶屋斜

湖上の青山 屋を遶りて斜なり

蕭條重枉使君車

蕭条 重ねて枉ぐ 使君の車

到來縱遣柴門閉

到来して 縦い柴門をして閉ざしむも

只在東鄰賣酒家

只だ 東隣 売酒の家に在り

【語釈】

○殿卿…許邦才、山東省歷城の人、嘉靖二十二年の進士、永寧知州となる。○蕭條…もの静かで寂しいさま。○枉…わざわざしてくれる。○使君…刺史。○柴門…柴で作った粗末な門。

★ 寄李内翰仲西

李内翰仲西に寄す

明 謝榛

春日芳樽獨解顏

春日芳樽 独り顔を解く

玉堂金闕五雲間

玉堂 金闕 五雲の間

看花忽憶當年事

花を見て 忽ち憶う 当年の事

半醉相將踏月還

半ば酔い 相將あいひきいて 月を踏みて還る あいひき

【語釈】

○李内翰仲西：不祥。○芳樽：美酒。○解顏：笑い顔になる。○玉堂：玉で飾った堂。○金闕：金色で飾った宮門。○五雲：五色の雲。○當年：当時。○踏月：月明かりを踏む。

★ 對月寄壺樑

月に対して壺樑に寄す

明 彭年

天街霜月夜迢迢

天街そうげつの霜月 夜 迢々ちようちよう

淮浦金波蕩畫橋

淮浦わいほの金波 画橋を蕩すどうす

才子行吟青玉案

才子 行吟す 青玉案せいぎよくあん

仙人吹和紫瓊簫

仙人 吹和す 紫瓊簫しけいしょう

【語釈】

○壺樑：伝説中の仙人。○天街：京城の街道。○迢迢：遙かに遠いさま。○淮浦：江蘇省淮安市漣水県。○画橋：画で飾った橋。○青玉案：詞の詞牌の一つ。○紫瓊簫：紫色の玉簫。

★ 于鱗謝病歸濟南寄訊

于鱗に病を謝し濟南に帰りて寄訊す

明 除中行

白雲湖上亂山青

白雲湖上 乱山青し

日日茅堂醉復醒

日々 茅堂に酔いて復た醒む

不是楊雄耽寂寞

是れ 楊雄 寂寞に耽らざれば

千秋誰見大玄經

千秋 誰だ見ん 大玄經

【語釈】

○于鱗…不祥。○濟南…山東省西部にあった州の南部。○寄訊…消息を尋ねる。○茅堂…茅吹きの粗末な堂。○楊雄…漢の揚雄、大玄經を草した。○千秋…千年。○大玄經…、前漢末の揚雄の撰述による『易経』に似た書物。易が陰陽の二爻をのつ重ねた六十四卦によるのに対し、天地人の三才をのつ重ねた八十一首から構成される。

★ 寄荅汝南諸明符

汝南の諸明符に寄荅す

明 除中行

景夷臺上白雲秋

景夷台上 白雲の秋

懸瓠城邊汝水流

懸瓠城辺 汝水流る

却憶諸君明月夜

却つて憶う 諸君 明月の夜

臨風清嘯滿南樓

風に臨み 清嘯 南樓に満つるを

【語釈】

○寄荅…答えて寄せる。○汝南…中国河南省駐馬店市の県。○明符…太守、県令。○景夷臺…不祥。○懸瓠城…河南汝南県にあった街。○汝水…江西省東部を流れる河川。○清嘯…清らかな歌声。

★ 寄徐石亭

徐石亭に寄す

明 徐渭

聞道名園盛牡丹
豪家歡賞到春殘
自憐亦具看花眼
種菜澆畦不得看

聞道きくならく名園牡丹盛んにして
豪家 歡賞して 春殘しゅんざんに到ると
自みづから憐む 亦た花を看る眼を具そなへ
菜を種え 畦はたに澆そそぎて 看るを得ざるを

【語釈】

○徐石亭：不祥。○聞道：聞くところによれば。○春殘：旧曆三月、春の終わり。

★ 遼城寄憶

遼城寄憶

明 愈憲

胡天一望盡高秋
忽傍中原憶舊遊
漢省春風吹視草
庚家明月照登樓

胡天 一望すれば 尽こしごとく高秋
忽たちまち 中原ちゅうげんに傍そいて 旧遊を憶う
漢省かんしょうの春風 視草を吹き
庚家の明月 登樓を照らす

【語釈】

○遼城：遼東城。遼寧省遼陽市。○寄憶：抱いた思いを寄せる。○胡天：北方異民族の空。○中原：黄河中流から下流の地域。○漢省：不祥。○視草：皇帝が起草した詔勅。○庚家：不祥。

★ 寄謝在枕

在枕に寄謝す

明 陳仲湊

孤館蕭條夜不眠
思君斷腸太湖邊
傷心最是樓前月
惆悵清光隔幾年

孤館蕭條として夜眠らず
君を思いて断腸太湖の辺
傷心最も是れ楼前の月
惆悵す 清光幾年をか隔つを

【語釈】

○寄謝：感謝して寄せる。○在枕：不祥。○蕭條：…もの静かで寂しいさま。○大湖：江蘇省南部と浙江省北部の境界にある大きな湖。○惆悵：なげき悲しむ。

★ 與李太虚

李太虚に与う

明 湯顯祖

少年豪氣幾時成
斷酒辭家向此行
夜半梅花春雪裏
小窗燈火讀書聲

少年の豪氣 幾時にか成る
酒を断ち 家を辞して 此の行に向う
夜半の梅花 春雪の裏
小窓の灯火 読書の声

【語釈】

○李太虚：不祥。○少年：若いとき。

★ 寄長安故人

長安の故人に寄す

明

謝肇淪

春時相送出燕都

春時 相送りて 燕都を出ず

秋到江南一字無

秋 江南に到り 一字無し

半夜寒燈數行淚

半夜の寒燈 數行の涙

滿天風雨下西湖

滿天の風雨 西湖に下る

【語釈】

○故人：古くからの友人。○燕都：春秋戦国時代の燕の都の地、北京。○江南：長江中下流の南岸の地方。○一字：一通の手紙。

★ 寄懷王震甫客蜀寄

王震甫の蜀に客するを懷う

明

陳薦伏

邛歛東望草離離

邛歛 東望すれば 草離々たり

峽口春歸未有期

峽口 春歸りて 未だ 期有らず

懷古思鄉兩行淚

古を懷い 郷を思い 兩行の涙

豈堪同在聽猿時

豈に堪えんや 同に 猿を聴く時に在るを

【語釈】

○王震甫：王震、莘縣（山東省東部）の人。龍圖閣直學士、知封府知事となる。○邛歛：四川省にある山。○離離：草が盛んに生い茂っているさま。○峽口：三峽への入り口。○春歸：春が過ぎる。

★ 贈致政司諫劉後峰

致政司諫 劉後峰に贈る

明 李開先

人散燈殘睡正濃

人散じ灯残して 睡正に濃なり

驚迴曉夢思重重

曉夢を驚迴して 思重々

攬衣欹枕從容聽

衣を攬り枕を欹てて 從容として聴く

野店鷄聲野寺鐘

野店の鷄声 野寺の鐘

【語釈】

○致政：致仕した人。○司諫：門下省の諫官。○劉後峰：劉祿、山東省章丘の人、嘉靖二十三年の進士、太常少卿に至る。○殘：燃え尽きる。○驚迴：目が覚める。○重重：深く思うさま。○從容：ゆつたりと落ち着いたさま。

★ 寄曹能始

曹能始に寄す

明 吳兆

聞説官閑心亦閑

聞説く官閑にして 心亦た閑なりと

馬蹄日出不知還

馬蹄 日に出で 還るを知らず

落葉滿城秋似水

落葉 城に滿ち 秋水に似たり

家家樓上有鐘山

家々の樓上 鐘山有り

【語釈】

○曹能始：曹學佺、福建省侯官の人、萬曆二十三年の進士。禮部尚書に至る。○聞説：きくところによれば。○鐘山：南京市の東北にある山。

★ 寄曹能始

曹能始に寄す

明 徐燉

見説風帆出石頭
遠書遙寄雁來秋
不知此地開緘日
又過天涯何處州

見説く風帆 石頭を出ず
遠書 遙かに寄す 雁 来る秋
知らず 此の地 緘の開く日
又た過ぐ 天涯 何れの処の州か

【語釈】

○曹能始…不祥。○見説…見るところによると。○風帆…帆掛け船。○石頭…南京。○緘…書箱。

★ 題林貞孚草堂

林貞孚の草堂に題す

明 鄭允珪

為愛湖山静卜居
石邊花片落春渠
閉門晝寂渾無事
寶鴨煙沈讀古書

為に愛す湖山 静かに居を卜するを
石辺の花片 春渠に落つ
門を閉ざせば 晝 寂かに 渾て無事
宝鴨 煙沈みて 古書を読む

【語釈】

○林貞孚…不祥。○草堂…草葺きの家。○卜居…家を建てる。○寶鴨…香炉。

★ 夏日寄王山人

夏日 王山人に寄す

明

張天英

赤日行天氣欲焚

赤日 天を行き 氣 焚んと欲す

樹根群蟻正紛紛

樹根の群蟻 正に紛々

道人心在羲皇上

道人の心は 羲皇の上^{ぎこう}に在り

睡殺青松一枕雲

睡殺^{すいさつ}す 青松 一枕の雲

【語釈】

○王山人：李訓、事跡不祥。○赤日：烈日。○紛紛：混じり乱れるさま。○道人：道教の師、信者。道德のある人。○羲皇：伏羲、伝説上の帝王。○睡殺：非常に強い眠気を憶えさせる。

★ 楚江懷友

楚江にて友を懷う

明

趙世顯

春來夏口起層波

春來 夏口^{かこう} 層波を起す

秋到衡陽少雁過

秋に 衡陽^{こうよう}に到りて 雁の過ぐる^ここと少なり

獨夜短橈何處泊

獨夜^{たんじやう} 短橈 何れの処にか泊せん

江風蕭瑟月明多

江風 蕭瑟^{しょうしつ}として 月明多し

【語釈】

○春來：春になってから。○夏口：湖北省武漢市夏口。○層波：重なるあった波。○衡陽：湖南省衡陽市。「衡陽雁斷」衡陽は衡山の南にあり、衡山の南にある回雁峰は険しい峰で、雁がやって来ても、これを越えて南下することはできないと言われた。○獨夜：独りで寂しく居る夜。○短橈：短い櫂、小舟。○蕭瑟：物寂しいさま。

★ 寄友人

友人に寄す

明 趙世顯

日暮狂風吹短橈
寒鴉點點草蕭蕭
故人家在千山外
月落猿啼歸夢遙

日暮 狂風 短橈を吹く
寒鴉 点々 草 蕭々
故人の家は 千山の外に在り
月落ち 猿啼いて 帰夢 遙なり

【語釈】

○短橈…短い櫂、小舟。○蕭蕭…物寂しい様子や音声の形容。○故人…古くからの友人。
○歸夢…故郷に帰る夢。

★ 示友

友に示す

清 周亮工

海水群飛百丈高
同君城上擁弓刀
戰癥莫同燈前看
恐惹霜華上鬢毛

海水 群飛す 百丈の高
君とともに 城上 弓刀を擁す
戰癥 同に 灯前に看ること莫れ
恐らくは霜華を惹いて 鬢毛に上らしめん

【語釈】

○戰癥…戦いで受けた傷跡。○霜華…白髪。

★ 贈柳敬亭

柳敬亭に贈る

清 毛奇齡

流落相憐柳敬亭

流落して相憐れむ 柳敬亭

消除豪氣鬢星星

豪気を消除して鬢 星々

江南多少前朝事

江南 多少 前朝の事

說與人間不忍聽

人間に説与して聴くに忍びず

【語釈】

○柳敬亭：明末の説書藝人。大將左良玉の幕客となる。○流落：外地に漂泊する。○星星：白髪まじり。○江南：長江中下流の南岸地方。○前朝：ここでは明王朝。○説與：説き聞かせる。

★ 得劍村寄懷詩次韻答之

清 錢良擇

劍村の寄懷の詩を得たり 次韻して之に答う

宦遊空自滯京華

宦遊 空しく 自ら京華に滯る

誰説狂夫不憶家

誰か説く 狂夫は 家を憶わずと

昨夜客窗風雪裏

昨夜 客窓 風雪の裏

夢歸山館種梅花

夢は山館に帰り 梅花を種う

【語釈】

○劍村：不祥。○寄懷：思いを寄せる。○宦遊：故郷を離れて官を求める。○京華：京城。○客窗：旅館の窓。

★贈某

某に贈る

清 龔錫瑞

従戎二十執戈爻

戎じゆうに従い 二十 戈かしゆ爻とを執る

百戦餘生膽氣粗

百戦の余生 胆氣そ粗なり

飲馬長城休照影

馬みづかに飲かいて長城 影を照すを休やめよ

恐驚霜雪上頭顱

恐とくは 霜雪の 頭顱とうろに上るに 驚かん

【語釈】

○従戎…従軍。○戈爻…ほこ。○照影…自分の姿を映してみる。○霜雪…白髪。○頭顱…頭髪。

★寄虞山王石丞

虞山ぐざんの王石丞おうせきじやうに寄す

清 惲 格

東望停雲結暮愁

東望すれば 停雲 暮愁を結ぶ

千林黄葉劍門秋

千林の黄葉 劍門の秋

最憐霜月懷人夜

最も憐む 霜月 人を懷う夜

鴻雁聲中獨倚樓

鴻雁こうがん聲中 独り楼ちゆうろうに倚る

【語釈】

○虞山…江蘇省蘇州市虞山。○王石丞…王翬、劍門に隱棲した画家。○暮愁…暮れ方の寂しい物思い。○劍門…江蘇省蘇州市劍門。○霜月…陰曆七月。○鴻雁…かり。

★ 懷薊門馬寓公

薊門げいもんの馬寓公ばくうこうを懷う

清 沈德潛

脱帽歌呼號酒狂

帽を脱ぎ 歌呼し 酒狂と号す

吳門煙月薊門霜

吳門ごもんの煙月 薊門げいもんの霜

知君廣武山邊過

知る君が 廣武山こうぶさん辺べんに過よぎり

匹馬寒風弔戰場

匹馬 寒風 戰場を弔うを

【語釈】

○薊門：北京市城西の地域。○馬寓公：不祥。○吳門：江蘇省蘇州市。○煙月：おぼろ月。○廣武山：河南省滎陽市の東北にある山、項羽と劉邦がここで対陣した。

★ 懷楊雙山

楊雙山ようそうざんを懷う

清 沈德潛

沿門濃緑稲苗霽

門に沿う濃緑 稲苗とうびようは霽る

課了新詩旋灌畦

新詩を課了して 旋めぐりて畦あぜに灌す

舊是吾家棲隱地

旧もとは是れ吾家 棲隱の地

夢魂常繞采葑溪

夢魂 常に繞る 采葑さいほうの溪

【語釈】

○楊雙山：不祥。○課了：作り終わる。○灌：水をまく。○采葑溪：蕪が植えてある溪。

★ 寄懷張春帆

張春帆ちようしゆんぱんに寄懷きかいす

清 施朝翰

楊花飛盡白沙州

楊花ようか 飛び尽す 白沙の州

夾水蒼山兩岸流

水を夾さしかむ 蒼山 兩岸の流

忽憶故人從此去

忽たちまち憶う 故人 此ここ従り去るを

西風吹月下江樓

西風 月を吹いて 江樓に下る

【語釈】

○張春帆…不祥。○寄懷…思いを寄せる。○楊花…柳絮。○故人…昔からの友人。○西風…秋風。○江樓…川辺の楼。

★ 懷南村方孟升

南村なんむらの方孟升ほうもうしょうを懷う

清 吳初

經春細雨日昏昏

春を経て 細雨 日ひん昏々たり

每欲招尋嬾出門

毎つねに 招尋しょうじんせんと欲して 嬾ものうく 門を出ず

但得天晴風日好

但だ 天晴れ 風日の好きを得たり

看花一路到南村

花を看て 一路 南村に到る

【語釈】

○方孟升…不祥。○昏昏…暗いさま。○招尋…訪れる。

★ 范性華遲余不至舟發却寄

清 徐教

范性華ほんせいかに余に遅れて至らず舟発し却って寄す

梅綻寒輕二月天

梅ほころ綻び寒輕し二月の天

平山堂外正流連

平山堂外へいさんどうがい正流連なる

那堪暮雨瀟瀟下

那なんど堪えんや暮雨の瀟々として下るに

酒散旗亭客上船

酒散じて旗亭か客船上る

【語釈】

○范性華…不祥。○平山堂…不祥。○瀟瀟…雨風の寂しく降るさま。○旗亭…飲み屋。

★ 題小景寄劉杜五

小景に題し劉杜五に寄す

清 王岱

一壑一邱高枕間

一壑一邱高枕の間

終年無事不開關

終年無事かん関を開かず

那知門外秋冬換

那んど知らん門外秋冬の換わるを

黃葉庭前積滿山

黃葉こ庭前に積みて山に滿つ

【語釈】

○劉杜五…不祥。○高枕…枕を高くして寝ること。○關…門を閉じるかんぬき。

★ 寄王蘭泉

王蘭泉に寄す

清 高景光

牢落塵寰歎索居

牢落塵寰 索居を歎く

清溪一望渺愁予

清溪一望 渺として予を愁えしむ

何當抱被來同宿

何か 當に 被を抱きて 来たりて 同じく宿し

風雨蘆花夜讀書

風雨 蘆花 夜書を読むべし

【語釈】

○王蘭泉…不祥。○牢落…とりとめもないさま。○塵寰…人の住むところ。○索居…ひとり寂しくしていること。○被…夜着。

★ 客有問余近況者詩以答之

客余の近況を問う者有り 詩を以って之に答う

清 王 樞

豪氣於今尚未除

豪氣 今に於いて 尚お未だ除かず

難將壯志付樵漁

壯志を將つて 樵漁に付き難し

短衣射虎南山下

短衣 虎を射る 南山の下

帶月歸來夜讀書

月を帯び 歸り来たりて 夜書を読む

【語釈】

○樵漁…木こりと漁夫、隠者。

★ 秋日寄懷高梓巖

秋日 高梓巖に寄懷す

清 張增慶

琴樽幾載憶南皮

琴樽 幾載 南皮を憶う

明月清風阻舊歡

明月 清風 旧歡を阻つ

欲問離愁何處切

問わんと欲す 離愁 何れの処か切なる

滿庭黃葉雨來時

滿庭の黃葉 雨の來る時

【語釈】

○高梓巖：不祥。○舊歡：昔の楽しみ。○離愁：人と別れる悲しみ。

★ 寄張策時

張策時に寄す

清 吳泰來

江湖一夢逐浮雲

江湖の一夢 浮雲を逐う

禪榻茶烟颺夕曛

禪榻の茶煙 夕曛に颺がる

忽忽停盃思往事

忽々として 杯を停め 往事を思う

酒痕狼藉鬪金裙

酒痕 狼藉たり 鬪金の裙

【語釈】

○江湖：隱棲する人が住む地。○禪榻：座禪を組む腰掛け。○夕曛：落日のあとの餘暉。
○忽忽：ぼんやりしたさま。○往事：昔日。○狼藉：乱れて多いこと。○鬪金裙：ウコンで染めた衣の袖。

★括州寄内

括州かつしゅうにて内うちに寄す

清 劉 璜

屈指刀環悵淡句

指を屈し 刀環とうかん 悵うらみ 淡句しょうしゅん

離居千里滯音塵

離居千里 音塵おんじん 滯とどまる

東流不及桐江水

東流及ばず 桐江の水

一夜寒潮到富春

一夜寒潮 富春に到る

【語釈】

○括州：浙江省麗水市蓮都区。○刀環：刀に付ける環。還るに通じる。○淡句：十年。○音塵：音信。○桐江：浙江省杭州市桐廬県。○富春：富春江，浙江省中部を流れる錢塘江中流部の別称。

★寄無言從弟

無言の從弟に寄す

清 王元勳

別來十日苦相思

別來 十日 苦はなはだ相思う

況是花飛三月時

況いわんや是れ 花飛ぶ 三月の時においてをや

料得夜深孤館裏

料り得たり 夜深よるき孤館うちの裏

一燈明滅坐填詞

一灯 明滅 坐して詞てんを填す

【語釈】

○填：書き記す。

★ 寄無言從弟

無言の從弟に寄す

清 王元勳

起坐當窓殘月明
起坐すれば窓に当りて 残月明らかなり
蕭蕭亂竹作風聲
蕭々たる乱竹 風声を作す
思君不見空惆悵
君を思えども 見えず 空しく 惆悵す
春草池塘無數生
春草 池塘 無数に生ず

【語釈】

○起坐…起きて坐る。○蕭蕭…嘆き悲しむ。○池塘…池の隄。

★ 節母詩為淮南陶太守作

清 袁枚

節母の詩 淮南陶太守の為に作る

烏啼月落夜窓空
烏啼き月落ち 夜窓空し
親授兒書讀未終
親兒書を授け 読むこと未だ終らず
試看採薪風雪裏
試看す 薪を採る 風雪の裏
阿娘手瓜為誰紅
阿娘 手瓜 誰が為にか紅なる

【語釈】

○節母…操の正しい婦人。○淮南…安徽省の中部の地。○陶太守…不祥。○試看…試みに見る。○阿娘…母親

★ 節母詩為淮南陶太守作

清 袁枚

節母の詩 淮南陶太守の為に作る

兒今五馬領淮南

兒今五馬淮南を領す

望見蹲鴟淚便含

蹲鴟に望見すれば 淚便ち含む

記得當年煨蘊火

記し得たり 當年蘊火に煨み

膝前賜與十分甘

膝前に賜与され 十分甘かりしを

【語釈】

○節母：操の正しい婦人。○淮南：安徽省の中部の地。○陶太守：不祥。○五馬：太守の称号。○望見：謁見。○蹲鴟：大芋。○記得：覚えてゐる。○當年：昔。當時。○蘊火：火を貯える。○賜與：与え賜る。

★ 題三妹澄碧樓

三妹澄碧樓に題す

清

張葊齋

小軒近對碧波澄

小軒 近く対して 碧波澄む

隔着疎楊喚欲磨

疎楊を隔着して 喚びて磨んと欲す

最好淡雲微月夜

最も好し 淡雲 微月の夜

半簾相望讀書燈

半簾 相望む 讀書の灯

【語釈】

○三妹澄碧樓：不祥。○隔着：隔てる。着は動作の進行、完了を示す助字。○微月：おぼろ月。○半簾：半分捲き上げた簾。

★ 寄子詩

子に寄す詩

清 徐 氏

家内平安報爾知

家内の平安 爾なんじに報じて知らしむ

田園歳入有餘資

田園の歳入 余資よし有り

絲毫不用南中物

糸毫しじょうも用いず 南中の物

好作清官答聖時

好く清官と作りて 聖時なに答えよ

【語釈】

○餘資：余りの資財。○絲毫：極めて僅か。○南中物：南方の地、作者の子の居る地の産物。○聖時：聖明の天子の御世。

★送司馬道士遊天台

司馬道士が天台に遊ぶを送る

唐

宋之問

羽客笙歌此地遑

羽客の笙歌 此の地に遑たがう

離筵數處白雲飛

離筵りえん 數処 白雲飛ぶ

蓬萊闕下長相憶

蓬萊闕下ほうらいけつか 長く相憶うも

桐柏山頭去不歸

桐柏山頭とうはくけつか 去りて歸らず

【語釈】

○司馬道士：唐代の有名な道士、司馬承禎。○天台：天台山、浙江省天台県の北にある。
○羽客：道士。○離筵：送別の宴席。○蓬萊闕下：蓬萊宮の宮門のあたり、大明宮の別名。○桐柏山：天台山の西にある山。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 送梁六

梁六を送る

唐 張 說

巴陵一望洞庭秋
巴陵一望す 洞庭の秋
日見孤峰水上浮
日に見る 孤峰の水上に浮ぶを
聞道神仙不可接
聞道きくならく 神仙は接すべからずと
心隨湖水共悠悠
心は湖水に随い 共に悠々たり

【語釈】

○梁六：梁知微、潭州（湖南省長沙市）の刺史となった人物。○巴陵：岳州（湖南省岳陽市）の西南にある丘。○孤峰：君山のこと。○聞道：「きくならく」と読み、「聞くとこるによれば」「人の話によると」と訳す。○悠悠：長くゆったりと続くさま。

（参考文献）『唐詩選』

★ 送元二使安西送

元二の安西に使用するを送る

唐 王 維

渭城朝雨浥輕塵
渭城いじょうの朝雨 輕塵うるおを浥す
客舍青青柳色新
客舍かくしゃ 青青せいせい 柳色りゅうしよく 新なり
勸君更盡一杯酒
君に勧む 更に尽せ 一杯の酒を
西出陽關無故人
西のかた 陽關を出ずれば 故人無からん

【語釈】

○元二：不祥。○安西：唐の時代に置かれた都護府の名、現在の新疆ウイグル自治区庫車。○渭城：秦の都で咸陽。○客舍：旅館。○陽關：関所の名、甘肅省敦煌県の西南にあった。○故人：古くからの友人。

（参考文献）『唐詩選』

★ 別李浦之京

李浦の京に之くに別る

唐 王昌齡

故園今在灞陵西
故園今灞陵の西に在り
江畔逢君醉不迷
江畔君に逢いて酔いて迷わず
小弟鄰莊尚漁獵
小弟 隣莊に 尚お漁獵せん
一封書寄數行啼
一封の書は寄す 數行の啼なみだ

【語釈】

○李浦…不祥。○京…長安の都。○故園…ふるさと。○灞陵…漢の文帝の陵墓。長安の東南校外にある。○江畔…川のほとり。江は長江を指す。○醉不迷…酒を飲んでも酔えない意。○小弟…おとうと。○鄰莊…別莊の隣。○漁獵…魚を捕って遊ぶ。
(参考文献) 『三体詩』

★ 芙蓉樓送辛漸

芙蓉樓にて辛漸を送る

唐 王昌齡

寒雨連江夜入吳
寒雨江に連つて夜吳に入る
平明送客楚山孤
平明客を送れば楚山 孤なり
洛陽親友如相問
洛陽の親友 如し 相問わば
一片冰心在玉壺
一片の氷心 玉壺に在り

【語釈】

○芙蓉樓…長江南岸の江蘇省京口（鎮江）の西北にある樓。○辛漸…不詳。○寒雨…寂しい雨、寒々とした雨。○吳…芙蓉樓のある江蘇省京口（鎮江）。○平明…夜あけがた。○楚山…楚の山、山名不詳。○冰心…透き通って清い心。○玉壺…玉で作った壺。（南朝宋の鮑照『代白頭吟』「直如朱絲繩，清如玉壺冰。」に基づく。）

(参考文献)

『唐詩選』

★送薛大赴安陸

薛大の安陸に赴くを送る

唐 王昌齡

津頭雲雨暗湘山

津頭の雲雨 湘山暗し

遷客離憂楚地顔

遷客の離憂 楚地の顔

遙送扁舟安陸郡

遙かに扁舟を送る 安陸郡

天邊何處穆陵關

天辺 何れの処か 穆陵関

【語釈】

○薛大：薛家の長男。○安陸：湖北省の安陸県。○津頭：渡し場。○湘山：君山、洞庭湖中の西北岸の山（小島）の名。○遷客：罪によって遠方に流された人（作者）。○楚地顔：ここでは追放されて憔悴した屈原の顔を言う『漁父辞』「屈原既放，游於江潭，行吟澤畔，顔色憔悴，形容枯槁。」。○天邊：大空の涯。穆陵関：安陸県の東北にあった関の名。

（参考文献）

『唐詩選』

★送魏三

魏三を送る

唐 王昌齡

醉別江樓橘柚香

酔いて 江樓に別るれば 橘柚香しく

江風引雨入舟涼

江風 雨を引いて 舟に入りて涼し

憶君遙在湘山月

憶う 君が遙かに 湘山の月に在りて

愁聽清猿夢裏長

愁え聴かん 清猿の 夢裏に長きを

【語釈】

○魏三：魏家の三男。醉別：酔って別れる意。酔いに別れの辛さをごまかすこと。江樓：川のほとりにある楼。橘柚：タチバナとユズ。江風：川風。湘山：君山のこと、洞庭湖中の西北岸の山（小島）の名。清猿：サル。もの悲しげな鳴き声を出す猿。夢裏：夢の中。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 重別李評事

重ねて李評事に別る

唐 王昌齡

莫道秋江離別難

道う莫かれ 秋江 離別難しと

舟船明日是長安

舟船 明日 是れ 長安

吳姬緩舞留君醉

吳姬 緩舞して 君を留めて 酔わしむ

隨意青楓白露寒

隨意なれ 青楓 白露の寒

【語釈】

○評事：裁判官。○吳姬：吳の地方（現・浙江省）の舞姫。○緩舞：緩やかに舞う。○青楓：青い楓。○白露：露の美称。二十四節氣の一、太陽曆で九月八、九日頃、秋の氣配が著しくなる頃。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 盧溪別人

盧溪にて人と別る

唐 王昌齡

武陵溪口駐扁舟

武陵の溪口 扁舟を駐むるに

溪水隨君向北流

溪水は 君に随って 北に向って流る

行到荆門上三峽

行きて 荆門に到り 三峽を上らば

莫將孤月對猿愁

孤月を將って 猿愁に對すること莫れ

【語釈】

○盧溪：漢の武陵郡に属し、辰州五溪のひとつ。○武陵溪：盧溪に同じ。○扁舟：小舟。○荆門：山名。湖北省宜都県の西北、揚子江の南岸にある。○三峽：長江上流にある三つの峽谷。○孤月：ものさびしく輝く月。猿愁：猿の悲しい鳴き声。

（参考文献）

『唐詩選』

★使還七里灘上逢薛承規赴江西貶官

唐 劉長卿

使つかいして還かへり 七里灘しちりたん上に 薛承規せつしょうきが江西に貶官おちむされ 赴おもむくに逢あう

遷客歸人醉晚寒

遷客せんかく 歸人きじん 晚寒ばんかんに酔い

孤舟暫泊子陵灘

孤舟 暫く泊す 子陵灘しりょうたん

憐君更去三千里

憐む 君が更に去ること 三千里

落日青山江上看

落日 青山 江上に看る

【語釈】

○七里灘：浙江省桐廬県の西南20キロメートルほどの嚴陵山の西にあった長江の難所。
○薛承規：不祥。○江西：江西省。○遷客：地方に左遷された役人。○子陵灘：七里灘。

★七里灘重

七里灘しちりたんにて重ねて送る

唐 劉長卿

秋江渺渺水空波

秋江 渺々びようびようとして 水空しく波だつ

越客孤舟欲榜歌

越客の孤舟 榜歌ぼうかせんと欲す

手折衰楊悲老大

手に衰楊すいようを折りて 老大を悲しむ

故人零落已無多

故人 零落れいらくして 已に多きこと無し

【語釈】

○七里灘：浙江省桐廬県の西南20キロメートルほどの嚴陵山の西にあった長江の難所。
○渺渺：水のはてしなくけむるさま。○越客：越の国（現・浙江省）の旅人、この詩で送別された人物。○榜歌：舟歌。○老大：年をとる。○故人：古くからの友人。○零落：落ちぶれてさびしい。○無多：多くはない。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 重送裴郎中貶吉州

重ねて裴郎中が吉州に貶せらるるを送る

唐 劉長卿

猿啼客散暮江頭

猿は啼き 客は散ず 暮江の頭

人自傷心水自流

人は自ら傷心して 水は自ら流る

同作逐臣君更遠

同に逐臣と作りて 君更に遠く

青山萬里一孤舟

青山 万里 一孤舟

【語釈】

○重送：重ねて送別する。再び見送る。○裴：作者の友人、人物については不明。○郎中：官名、尚書省の六部の四司の各司の長。○貶：罪によって官位をおとされ、地方に流されること。○吉州：今の江西省吉安市。○猿啼：猿が悲しげに鳴く。○客散：見送りの人々がそれぞれ帰っていく。○暮江頭：夕暮れの川のほとり。○水自流：水は水として無心に流れていく。○自：「おのずから」と読むが、ここでは「自然に」の意ではなく、「人は人、水は水、それ自体として」の意。○逐臣：放逐された臣下。○君更遠：君の左遷先は私よりずっと遠い。○青山万里：遙か彼方まで続く青々として見える山。

(参考文献)

『唐詩選』

★送李判官之潤州行營

李判官の潤州行營に之くを送る

唐

劉長卿

萬里辭家事鼓鼙

万里家を辞して鼓鼙を事とす

今陵驛路楚雲西

今陵の驛路 楚雲の西

江春不肯留行客

江春 肯えて 行客を留めず

草色青青送馬蹄

草色 青々として 馬蹄を送る

【語釈】

○李：李某、人物については不明。○判官：官名。節度使・觀察使などの属官。○潤州：江蘇省鎮江市。○行營：節度使や觀察使の役所。○万里：万里の彼方へ。○辞家：自分の家を離れて。○事鼓鼙：軍務に従事することとなった。○鼓鼙：鼓は太鼓、鼙は、騎兵が馬上で打ち鳴らす小太鼓で柄がある、転じて、軍事・軍務をいう。○金陵：江蘇省南京市の古名。○驛路：驛亭間をつなぐ街道。○江春：長江のほとりの春景色。○不肯：「あえてくせず」と読み、「進んでくしようにくしない」と訳す。○行客：旅ゆく人。○不留：引き留めようとはしない。○青青：青々と茂る。○馬蹄：馬の蹄で、馬のこと。

(参考文献)

『唐詩選』

★送杜十四之江南

杜十四の江南に之くを送る

唐

孟浩然

荆吳相接水爲郷

荆吳 相接して 水郷と爲る

君去春江正淼茫

君去りて 春江 正に 淼茫

日暮征帆何處泊

日暮れて 征帆 何の処にか泊す

天涯一望斷人腸

天涯 一望 人の 腸を断つ

【語釈】

○杜十四：不詳。○荆吳：荆（楚の国、湖北省地方）と吳（江蘇省の地方）。○淼茫：水がはてしなく広がっている様。○天涯：天の果て、ごく遠いところ。

（参考文献）

『唐詩選』

★黄鶴樓送孟浩然之廣陵

黄鶴樓にて孟浩然の廣陵に之くを送る

唐

李白

故人西辭黃鶴樓

故人 西のかた 黄鶴樓を辞し

煙花三月下揚州

煙花 三月 揚州に下る

孤帆遠影碧空盡

孤帆の遠影 碧空に尽き

唯見長江天際流

唯だ見る 長江の 天際に流るるを

【語釈】

黄鶴樓：湖北省武漢市武昌区の楼閣。呉の黄武二年（223）の建立と伝えられ、何度も破壊と改修を繰り返してきた、「黄鶴の伝説」で名高い。之：目的地向かって行くこと。広陵：揚州（江蘇省揚州市）の古称。故人：古くからの友人。辞：辞去する。煙花：春がすみの中に咲く花。孤帆：ただ一艘いっそう浮かんで見える舟の帆。碧空：青空。尽：消える。唯：「ただ」と読み、「ただ〜だけである」「ただ〜にすぎない」と訳す。天際：空のはて、水平線の彼方。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 送賀賓客歸越

賀賓客の越に帰るを送る

唐 李白

鏡湖流水漾清波

鏡湖の流水 清波を漾わす

狂客歸舟逸興多

狂客の歸舟 逸興多し

山陰道士如相見

山陰の道士 相見る如し

應寫黃庭換白鵝

応に 黃庭を写し 白鵝に換えるべし

【語釈】

○賀賓客：賀知章。越州（浙江省紹興市）の人。太子賓客とな秘書監を授けられた。○越：浙江省紹興市。○鏡湖：紹興市の側にあった湖。賀知章が賜った。○狂客：賀知章の号。○逸興：優れたおもむき。○山陰道士：王羲之。○黃庭：黃庭經、道教の經典で不老長寿が説かれている。○結句：晉書王羲之傳の故事。

★ 送人使河源

人の河源に使用するを送る

唐 張謂

故人行役向邊州

故人行役し 辺州に向う

匹馬今朝不少留

匹馬今朝 留まること少し

長路關山何日盡

長路 関山 何れの日にか尽く

滿堂絲竹爲君愁

満堂の糸竹 君が為に愁う

【語釈】

○河源：黄河の河源地方、寧夏省銀川のあたりから甘肅省蘭州あたりまでの地域。○行役：官命によって旅に出ること。○邊州：辺境。○匹馬：一匹の馬。○關山：関所のある山。○糸竹：管弦

（参考文献）『唐詩選』

★ 虢州後亭送李判官使赴晉絳

唐 岑 參

虢州の後亭にて李判官の使して晉絳に赴くを送る

西原驛路挂城頭

西原驛路 城頭に挂く

客散江亭雨未休

客散じて 江亭雨 未だ休まず

君去試看汾水上

君去りて 試みに 汾水の上を看れば

白雲猶似漢時秋

白雲 猶お 漢時の秋に似たり

【語釈】

○虢州：河南省三门峡市一带。○後亭：州の庁舎の裏にある庭園のあずまや。○李判官：不祥。○晋：晋州、現在の山西省臨汾県。○絳：絳州、現在の山西省新絳県。○西原：西の原野、虢州から晋州・絳州へ向かう途中の地。○驛路：驛亭間をつなぐ街道。○江亭：川に臨んだあずまや。後亭を指す。○汾水：山西省にある川。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 武威送劉判官赴磧西

武威にて劉判官の磧西に赴くを送る

唐 岑 參

火山五月行人少

火山 五月 行人少なり

看君馬去疾如鳥

君が馬 去りて 疾きこと 鳥の如くなるを看る

都護行營太白西

都護の行營 太白の西

角聲一動胡天曉

角声 一たび動いて 胡天 曉なり

【語釈】

○武威：甘肅省武威市。○劉判官：不祥。○磧西：砂漠の西。安西都護府を指す。○火山：新疆ウイグル自治区トルファンから東に連なる山脈。火焰山ともいう。○都護：安西都護府。○行營：節度使の幕府。○太白：太白星。金星のこと。○角声：角笛。○胡天：胡地の空。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 夜宴南陵留別

夜南陵に宴して留別す

唐 李嘉祐

雪滿前庭月色閑

雪は前庭に満ちて月色閑なり

主人留客未能還

主人客を留めて未だ還る能わず

預愁明日相思處

預め明日を愁い相思う処

匹馬千山與萬山

匹馬千山と万山と

【語釈】

○南陵：広東省陽江市陽春市。○留別：自分が旅立つときに作った詩。○匹馬：一頭の馬。孤独な旅人をいう。

★ 別董大

董大に別る

唐 高適

十里黃雲白日曛

十里の黄雲 白日 曛ず

北風吹雁雪紛紛

北風 雁を吹いて 雪 紛々

莫愁前路無知己

愁う莫かれ 前路に 知己無きを

天下誰人不識君

天下 誰人か 君を識らざらん

【語釈】

○董大：琴の名手、董庭蘭と思われる。○十里：十里のかなたまで、空一面に。○黄雲：黄色い雲、黄塵を巻き上げた雲。○白日：輝く太陽。真昼の太陽。○曛：暗くかすむこと。○紛紛：盛んに入り乱れること。○知己：知人。

(参考文献) 『唐詩選』

★送王道士還京

王道士の京に還るを送る

唐 賈至

一片仙雲入帝鄉

一片の仙雲 帝郷に入る

數聲秋鴈至衡陽

数声の秋鴈 衡陽に至る

借問清都舊花月

借問す 清都の旧花月

豈知遷客泣瀟湘

豈に知らんや 遷客 瀟湘に泣くを

【語釈】

○王道士：不祥。○仙雲：仙人の入る雲、転じて仙人。○帝郷：帝都、長安。○衡陽：湖南省衡陽市。○清都：長安のこと。遷客：左遷されて地方に移された人、作者。○瀟湘：瀟水と湘水の合流した下流、洞庭湖に近い地方。

(参考)

『詩詞世界』

★巴陵夜別王八員外

巴陵にて夜王八員外に別る

唐 賈至

柳絮飛時別洛陽

柳絮 飛ぶ時 洛陽に別れ

梅花發後到三湘

梅花 発く後 三湘に到る

世情已逐浮雲散

世情 已に逐う 浮雲の散ずるを

離恨空隨江水長

離恨 空しく随う 江水の長きに

【語釈】

○巴陵：湖南省岳陽市。○三湘：南湘郷、湘潭、湘陰（或湘源），合稱三湘南省の湘郷、湘潭、湘陰。○離恨：離別の恨み。○江水：長江。

★ 送李侍郎赴常州

李侍郎の常州に赴くを送る

唐 賈至

雪晴雲散北風寒
雪晴れ 雲散じて 北風寒し
楚水吳山道路難
楚水 吳山 道路 難し
今日送君須盡醉
今日 君を送る 須らく 醉を 尽すべし
明朝相憶路漫漫
明朝 相憶わば 路 漫々

【語釈】

○李：李白の族叔（同族で父より年少の者）李暉のこと。○郎：刑部侍郎。○雲散：雲が散る、李侍郎が去っていくことと掛けている。○楚水吳山：楚の川と吳の山。○須：「すべからくべし」と読み、「ぜひする必要がある」「するべきだ」と訳す。○相憶：互いに思い偲んでみても。○漫漫：道路の長く遠いさま。

（参考文献）『唐詩選』

★ 岳陽樓重宴別王八員外貶長沙

唐 賈至

岳陽樓にて 重ねて王八員外が長沙に貶せらるるを宴別す

江路東連千里湖
江路 東に連なる 千里の湖
青雲北望紫微遙
青雲 北に望めば 紫微 遥なり
莫道巴陵湖水闊
道う 莫かれ 巴陵 湖水闊しと
長沙南畔更蕭條
長沙の南畔 更に蕭條

【語釈】

○岳陽樓：湖南省岳陽市の西門の樓。○王八員外：不祥。○長沙：湖南省長沙市。○宴別：送別の宴を催すこと。○江路：長江の航路。○青雲：青空のこと。○紫微：斗星の北東にある十五の星の名。転じて、王宮のこと。ここでは長安の都または朝廷を指す。○巴陵：湖南省岳陽市。○蕭條：物寂しいさま。

（参考文献）『唐詩選』

★送歐陽子還江華郡

歐陽子が江華郡に還るを送る

唐 錢起

江華勝事接湘濱

江華の勝事 湘浜に接す

千里湖山入興新

千里湖山興に入りて新たなり

才子思歸催去權

才子帰るを思い 去權を催す

汀花且爲駐殘春

汀花 且つ為に 殘春を駐む

【語釈】

○歐陽子：不祥。○江華郡：湖南省永州市。○江華：江華郡。○勝事：美しい景色。○去權：帰る舟。○汀花：岸に咲く花。

★送客知鄂州

客の鄂州に知たるを送る

唐 韓翃

江口千家帶楚雲

江口の千家 楚雲を帯ぶ

江花亂點雪紛紛

江花 乱点して 雪 紛々たらん

春風落日誰相見

春風 落日 誰か相見ん

青翰舟中有鄂君

青翰舟中 鄂君有り

【語釈】

○鄂州：湖北省武漢市武昌区。○知：刺史。○江口：長江のほとり。○楚雲：楚の空に浮かぶ雲。楚は、湖北・湖南省一帯を指す。○乱点：あちこちに乱れ散ること。○雪：雪のように。○紛紛：落花が入り乱れて散るさま。○青翰舟：船首に青雀、すなわち鷁という水鳥の形の飾りをつけた船。○鄂君：戦国時代、楚国の公子。結句は『說苑』善説篇の故事を踏まえる。

(参考文献) 『唐詩選』

★送齊山人歸長白山

齊山人の長白山に帰るを送る

唐 韓翃

舊事仙人白兔公

旧と事う 仙人の白兔公

掉頭歸去又乘風

頭を掉り 帰り去りて 又風に乗ず

柴門流水依然在

柴門の流水 依然として在り

一路寒山萬木中

一路寒山 万木の中

【語釈】

○齊山人：未詳、山人は世を捨てて山に隠れ住む人。○白兔公：仙人の名。掉頭：頭をふる、事柄を否定するさま。○歸去：ふるさとに帰る。○柴門：しばで作った門。○寒山：秋から冬にかけてのさびしい山、さむざむとした山。○萬木：きわめて多くの木々。

(参考文献) 『三体詩』

★曾山送別

曾山送別

唐 皇甫冉

淒淒遊子苦飄蓬

淒々たる遊子 飄蓬に苦しむ

明月清罇祗暫同

明月 清罇 祗だ暫く同にす

南望千山如黛色

南のかた 千山を望めば 黛色の如し

愁君客路在其中

愁う 君が客路 其の中に在るを

【語釈】

○曾山：場所は不明。送別：別れていく人を見送る。○淒淒：寂しく辛つらいさま。○遊子：旅人の君。○飄蓬：風に吹かれてころがり飛ばされてゆく蓬。○清罇：清らかな酒をたたえた罇。○黛色：まゆずみの色、かすんで見える遠山の青黒い色に喩える。○客路：旅路、(君の) 行く道。

(参考文献) 『唐詩選』

★送魏十六還蘇州送

魏十六が蘇州に還るを送る

唐 皇甫冉

秋夜沈沈此送君

秋夜沈々 此に君を送る

陰蟲切切不堪聞

陰虫 切々 聞くに堪えず

歸舟明日毗陵道

歸舟 明日 毗陵の道

迴首姑蘇是白雲

首を迴らせば 姑蘇は是れ 白雲ならん

【語釈】

○魏十六：不詳。○清夜：ひっそりとした夜。○沈沈：静まりひっそりとしたさま。○陰蛩：ひそかに鳴くこおろぎ。○切切：悲しいさま。○毘陵：現在の江蘇省常州市。○回首：ふりかえり見る事。○姑蘇：現在の江蘇省蘇州市。○常州市武進区。

(参考文献) 『唐詩選』『三体詩』

★九日送別

九日送別

唐 王之渙

薊庭蕭瑟故人稀

薊庭 蕭瑟として 故人 稀なり

何處登高且送歸

何れの処か 高きに登り 且く 帰るを送らん

今日暫同芳菊酒

今日 暫く 同くす 芳菊の酒

明朝應作斷蓬飛

明朝 応に 断蓬と作りて 飛ぶべし

【語釈】

○九日：陰曆九月九日、重陽の節句。○薊庭：薊州(天津市薊州区)の地。○蕭瑟：秋風がものさびしく吹くさま。○故人：古くからの友人。登高：重陽の節句に小高い丘に登って菊酒を飲み、災厄を払う行事。○且：「しばらく」と読み、「ひとまず」と訳す。○暫：しばらくの間。○芳菊酒：香り高い菊の花を浮かべた酒。○応：「まさに」すべし」と読み、「きつと」であろう」と訳す。再読文字。強い推量の意を示す。○断蓬：北方の蓬よもぎは冬になって枯れると、根が切れて丸いかたまりとなって、風の吹くままに転がって行く。行方の定まらない旅人の身の上に喩えられる。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 丹陽送人

丹陽にて人を送る

唐 嚴維

丹陽郭裏送行舟

丹陽郭裏行舟を送る

一別心知兩地秋

一別心を知る 兩地の秋

日晩江南望江北

日晩れて 江南より 江北を望めば

寒鴉飛盡水悠悠

寒鴉 飛び尽き 水悠悠たり

【語釈】

○丹陽：現在の江蘇省鎮江市。○郭裏：郭は、城郭。○行舟：通り行く舟。一別：別れること。心知：心が自然と知ること。兩地秋：別れた互いの土地が秋の気配となる。江南望江北：江は、長江。長江の南より遙か北の方角を見る。寒鴉：冬からず。○水悠悠：水は、長江の流れのこと。○悠悠は、遠くはるかなさま。

(参考文献) 『三体詩』

★ 送人歸岳陽

人の岳陽に帰るを送る

唐 李益

煙草連天楓樹齊

煙草 天に連なり 楓樹齊し

岳陽歸路子規啼

岳陽の歸路 子規啼く

春江萬里巴陵戍

春江 万里 巴陵の戍

落日看沈碧水西

落日 沈むを看る 碧水の西

【語釈】

○岳陽：湖南省岳陽市。○煙草：霧のかかった草。○子規：ホトトギス。○巴陵：湖南省岳陽市。○戍：守備兵の屯営。

★ 送劉侍郎

劉侍郎を送る

唐 李端

幾人同入謝宣城

幾人か 同ともに入る 謝宣城しゃせんじょう

未及酬恩隔死生

未だ 恩に酬むすいるに及およばざるに 死生を隔へつ

唯有夜猿知客恨

唯ただだ 夜猿やえんの 知客ちかくを恨にくむ有り

嶧陽溪路第三聲

嶧陽えきやうの溪路 第三聲

【語釈】

○劉侍郎：不祥。○同入：ときを同じくして幕下となる。○謝宣城：謝朓のこと。○隔死生：あの世とこの世とに別れること。○客恨：あなたの旅先でのわびしい思い。○嶧陽：嶧山（場所不確定）の南側。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 峽口送人

峽口にて人を送る

唐 司空曙

峽口花飛欲盡春

峽口 花 飛んで 尽つきんと欲ほする春

天涯去住淚沾巾

天涯 去住きょじゅう 涙巾なみきんを沾うるす

來時萬里同爲客

來時 萬里 同ともに 客かくと爲なり

今日翻成送故人

今日 翻ひらつて 故人を送るを成なす

【語釈】

○峽口：長江が三峽から平原にでるところ。○天涯：空の果ての地方。○去住：去ることと留まること。○巾：ハンカチ。○客：旅人。

★ 發渝州却寄韋判官

渝州ゆしゅうを發して却かへつて韋判官いほんがんに寄す

唐 司空曙

紅燭津亭夜見君

紅燭しんてい津亭しんてい夜君を見る

繁弦急管兩紛紛

繁弦急管はんげんきゅうかん兩ふたつながら紛々ふんがん

平明分手空江上

平明に手わかを分わかつ空江の上

唯有猿聲滿水雲

唯だ猿声の水雲に満みつる有あるのみ

【語釈】

○渝州：四川省重慶市。○韋判官：不祥。○津亭：渡し場の前まへにある旅館。○繁弦急管：管弦のおとが繁ひらく急いそなるさま。○紛紛：混まじり合あつて乱みだれるさま。○平明：夜明け。○空江：静しずかな川面。

★ 合溪送人

合溪がつけいにて人を送る

唐 劉商

君去春山誰共遊

君去りて春山誰たれと共にともか遊あそばん

鳥啼花落水空流

鳥啼とていき花落はなちて水空みづしく流ながる

如今送別臨溪水

如今じまこん別わかれを送おくり溪水けいすいに臨まむ

他日相思來水頭

他日また相あ思をいて水頭みづかに來きらん

【語釈】

○合溪：湖北省宜昌市合溪。○如今：今。○水頭：溪のほとり。

★滑州送人先歸

滑州かすしゅうにて人の先に帰るを送る

唐 劉商

河水冰消鴈北飛

河水冰消えて鴈北に飛ぶ

寒衣未足又春衣

寒衣未だ足らず又春衣ならず

自憐漂蕩經年客

自みずから憐れむ漂蕩ひょうとう經年の客かく

送別千回獨未歸

送別千回ひと獨り未だ帰らず

【語釈】

○滑州：河南省安陽市滑県。○河水：黄河の水。○漂蕩：流浪。

★送温台

温台を送る

唐 朱放

眇眇天涯君去時

眇々びょうびょうたる天涯君の去る時

浮雲流水自相隨

浮雲流水 自おのずから相隨う

人生一世長如客

人生一世 長とこしえに客かくの如し

何必今朝是別離

何ぞ必ずしも 今朝こんちよう是れ別離ならん

【語釈】

○温台：不祥。○眇眇：広く果てしないさま。○天涯：空のはて。○客：旅人。

★ 餞裴行軍赴朝命

裴行軍の朝命に赴くを餞す

唐 武元衡

來時聖主假光輝
來時 聖主 光輝を仮す
心侍朝恩計日歸
心に侍む 朝恩 日を計りて歸るを
誰料忽成雲雨別
誰か料らん 忽ち 雲雨の別れと成るを
獨將邊淚灑戎衣
独り 辺涙を將つて 戎衣に灑ぐ

【語釈】

○裴行軍：不祥。○聖主：聖人である皇帝。○光輝：光榮。○朝恩：皇帝の恩。○計日歸：一定の時間が経てば帰ることができる。○邊淚：辺境にある悲しみの涙。○戎衣：旅衣。

★ 送盧起居

重ねて盧起居を送る

唐 武元衡

相如擁傳有光輝
相如 伝を擁し 光輝有り
何事闌干淚濕衣
何事ぞ 闌干として 涙衣を湿すとは
舊府東山餘妓在
旧府 東山 余妓在り
重將歌舞送君歸
重ねて 歌舞を將つて 君の歸るを送らん

【語釈】

○盧三十一：盧士玫、郡望范陽(河北省涿州)の人。德宗貞元四年(七七八)の進士。起居舍人、吏部郎中等を歴任し太子賓客となる。起居は起居舍人。○相如：司馬相如。武帝に召されて「上林の賦」などを作り、漢魏六朝時代の文人の模範となった。○擁伝：四頭立ての伝車に乗って。伝は、四頭立ての駅伝の馬車。『史記』司馬相如伝。○闌干：涙がしきりに流れ出るさま。○旧府：元の役所。旧任地。洛陽を指す。○東山：浙江省紹興市上虞区の西南に位置する。○余妓：多くの妓女。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 伏翼西洞送夏方慶

伏翼ふくよくの西洞せいどうに夏方慶かほうけいを送る

唐 陳羽

洞裏春晴花正開

洞裏の春晴花正ただに開く

看花出洞幾時迴

花を看洞を出でて幾時かえか廻る

殷勤好去武陵客

殷勤いんぎんに好し去れ武陵ぶりやうの客かく

莫引世人相逐來

世人を引いて相逐あいおい來ること莫かれ

【語釈】

○伏翼：こうもり。○夏方慶：徳宗貞元十年（七九四）の進士，生没事跡不祥。○武陵客：世を避けて隠棲する人（陶潜『桃花源記』）。

★ 送蜀客

蜀客しよくかくを送る

唐 張籍

蜀客南行祭碧雞

蜀客しよくかく南行す祭碧雞

木棉花發錦江西

木棉花はな発はなく錦江の西

山橋日晚行人少

山橋日ひ晩れて行人まれ少なり

時見猩猩樹上啼

時に見る猩猩しやうじやうの樹上に啼くを

【語釈】

○蜀客：蜀の生地を離れて旅をする人。○祭碧雞：四川省西昌市にある山。○錦江：成都市中心部を流れる川で、岷江の支流。○猩猩：猿の一種。

★送元結

元結を送る

唐 張籍

昔日同遊漳水邊
昔日同遊す 漳水の辺
如今重說恨綿綿
如今重ねて説く恨み綿々
天涯相見還離別
天涯相見て還た離別
客路秋風又幾年
客路 秋風 又幾年

【語釈】

○元結：魯山（河南省）の人。天宝十二年（七五三）の進士。道州、容州刺史、加授容州を経て都督充本管經略守捉使となる。○漳水：河北省と河南省の境を流れる川。○如今：今。○綿綿：長く続いて堪えないさま。○天涯：空のはて。○客路：旅の道。

★草堂

草堂に別る

唐 白居易

三間茅舎向山開
三間の茅舎 山に向って開き
一帶山泉遶舍迴
一帶の山泉 舎を遶りて迴る
山色泉聲莫惆悵
山色の泉声 惆悵する莫かれ
三年官滿却歸來
三年 官滿たば 歸却し來らん

【語釈】

○草堂：草葺きの粗末な家。○三間：間口三間。○茅舎：茅吹ききの粗末な家。○惆悵：嘆き悲しむ。○却歸：もどる。却是動作の意思を表す接尾語。

（参考文献）『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★ 送魏簡能東遊

魏簡能の東遊するを送る

唐 李涉

獻賦論兵命未通

賦を獻じ 兵を論ずれども 命 未だ通ぜず

却乘羸馬出關東

却つて羸馬に乘じ 關東を出す

灞陵原上重回首

灞陵原上 重ねて首を回らせば

十載長安似夢中

十載の長安 夢中に似たり

【語釈】

○魏簡能…不祥。○獻賦…賦を皇帝に獻ずること。○羸馬…やせ馬。○關東…函谷關の東の地方。○灞陵…陝西省西安市の東にあった県。

★ 送人謫幽州

人の幽州に謫せらるるを送る

唐 陳去疾

臨路深懷放廢慚

路に臨み 深く懷う 放廢の慚

夢中猶自憶江南

夢中 猶お 自ら 江南を憶う

莫言塞北春風少

言う莫かれ 塞北 春風少なりと

還勝炎荒入瘴嵐

還つて 炎荒 瘴嵐に入るに勝る

【語釈】

○幽州…北京。○放廢…罷免され放逐されること。○塞北…万里の長城の北。○炎荒…南方の炎熱荒遠の地。○瘴嵐…熱病を起こす山川の毒気の嵐。

★ 洲送朱萬言

瓜洲かしゅうにて朱萬言しゅまんげんを送る

唐 顧非熊

渡頭風晚葉飛頻
君去還吳我入秦
雙淚別家猶未斷
不堪仍送故鄉人

渡頭ととう 風晩れて 葉の飛ぶこと頻しほなり
君去りて 吳かえに還り 我は秦に入る
雙淚家を別れて 猶お 未だ断えず
堪えず 仍しほりに 故郷の人を送るに

【語釈】

○瓜洲：江蘇省邗江県。○朱萬言：不祥。○渡頭：渡し場。○吳：江蘇省。○秦：陝西省。

★ 送宋處士歸山

宋処士そうしよしが山に帰るを送る

唐 許渾

賣藥修琴歸去遲
山風吹落桂花枝
世間甲子須臾過
逢著仙人莫看棋

薬を売り 琴を修めて 帰去すること遅し
山風 吹き落とす 桂花の枝
世間 甲子かっし 須臾しゆゆに過ぐ
仙人に逢著ほうちやくして 棋を看ること莫かれ

【語釈】

○宋處士：不祥。處士は官に使えない人。○歸去：故郷に帰る。○甲子：暦日。○逢著：出会う。○看棋：『述異記』における「爛柯」

★ 謝亭送別

謝亭しゃていの送別

唐 許渾

勞歌一曲解行舟

勞歌一曲行舟を解けば

紅葉青山水急流

紅葉 青山 水は急流す

日暮酒醒人已遠

日暮 酒 醒むれば 人已に遠く

滿天風雨下西樓

滿天の風雨 西樓を下る

【語釈】

○謝亭：亭の名。謝公亭ともいう。宣城の北側にあり、南齊の詩人・謝朓が宣城の太守に任じられていた時に建てたもの。謝朓が、曾てここで友人の范雲を送別したことで、後には謝亭とは宣城での送別の地として有名になった。○勞歌：勞勞亭での送別の歌、転じて、送別の歌。○解：舟の纜を解く。○日暮：日暮れ。○人：舟に乗って別れて行った人。○滿天：空いっぱい。○西樓：今回、送別の宴を開いた勞勞亭。

（参考文献）『中国名詞集』

★ 別人

人に別る

唐 溫庭筠

江海相逢客恨多

江海に相逢いて 客恨かくこん多し

秋風葉下洞庭波

秋風 葉下りて 洞庭波だつ

酒酣夜別淮陰市

酒 酣たけなわにして 夜 別る 淮陰わいいんの市

月照高樓一曲歌

月は 高樓を照らして 一曲の歌

【語釈】

○客恨：故郷を離れた愁い。○洞庭：洞庭湖、湖南省北部にある湖。○淮陰市：江蘇省淮安市淮陰区。

★ 送人西歸

人の西に帰るを送る

唐 張 賁

孤雲獨鳥本無依

孤雲 獨鳥 本 依る無し

江海重逢故舊稀

江海に 重ねて逢う 故旧稀なり

楊柳漸疏蘆葦白

楊柳 漸く疏にして 蘆葦白し

可憐斜日送君歸

憐むべし 斜日の 君の帰るを送るを

【語釈】

○江海：四方各地。○故旧：旧友。○蘆葦：アシとヨシ。○漸：だんだんと。○蘆葦：アシとヨシ。○可憐：感嘆の言葉、ああ。○斜日：夕陽。

★ 淮上與友人別

淮上にて友人と別る

唐 鄭 谷

揚子江頭楊柳春

揚子江頭 楊柳の春

楊花愁殺渡江人

楊花 愁殺す 江を渡る人

數聲風笛離亭晚

數声の風笛 亭を離るる晩

君向瀟湘我向秦

君は瀟湘に向い 我は秦に向う

【語釈】

○淮上：淮水（現・淮河）華中を流れる河のほとり。○楊柳：柳の総称。○楊花：柳絮。○風笛：風に散る笛の声。○離亭：送別の宴を張る亭。○瀟湘：遙か南方の地湖南省。○秦：長安などのある陝西省の別称。

（参考ブログ） 「詩詞世界」

★送薛學士赴任峽州送

薛學士せしがくしの峽州せきやうしゅうに赴任するを送る

唐 吳融

片帆飛入峽雲深
片帆 飛び入る 峽雲深し
帶雨兼風動楚吟
雨を帯び 風を兼ねて 楚吟を動かす
何似玉堂裁詔罷
何んぞ似たる 玉堂 詔を裁するを罷め
月斜鵝鵲漏沈沈
月斜めにして 鵝鵲しじやく漏ろう沈々たるに

【語釈】

○薛學士…不祥。○峽州…湖北省宜昌市。○片帆…孤舟。○楚吟…楚辭。○玉堂…翰林院。○鵝鵲…宮殿の名。長安の甘泉宮にあった。○漏…水時計。○沈沈…音が断続してかすかに聞こえて来るさま。

★送人歸上國

人の上國に帰るを送る

唐 韋莊

送君江上日西斜
君を送る 江上日は西に斜なり
泣向春風滿樹花
泣いて 春風に向えば 満樹の花
若見青雲舊相識
若し 青雲の旧相識きせうせうしきを見れば
爲言流落在天涯
為に言え 流落りゅうらくして天涯に在ると

【語釈】

○青雲…志の高い人。○舊相識…古い知り合い。○流落…落ちぶれる。○天涯…空のはて。

★ 江上別李秀才

江上にて李秀才に別る

唐 韋 莊

前年相送灞陵春
前年相送る 灞陵の春
今日天涯各避秦
今日 天涯 各 秦を避く
莫向尊前惜沈醉
尊前に向いて 沈醉を惜しむ莫かれ
與君俱是異鄉人
君と俱に 是れ 異郷の人

【語釈】

○江上：長江の畔。○李秀才：李という姓の科挙の貢試に合格した人物。○灞陵：長安の人士が旅立つ人を見送って灞陵橋畔まで足を運び、柳の枝を折って送別の意を表したという。○天涯：空のはて、故郷を遠く離れた地。○避秦：乱を避けて離れていること。○向：於いて。○沈醉：酔いつぶれる。

（参考文献）『和漢名詩選類評釈』

★ 衢州江上別李秀才

衢州の江上にて李秀才と別る

唐 韋 莊

千山紅樹萬山雲
千山の紅樹 万山の雲
把酒相看日又曛
酒を把り 相看れば 日 又 曛ず
一曲驪歌兩行淚
一曲の驪歌 兩行の涙
更知何地再逢君
更に知る 何の地にて 再び君に逢わん

【語釈】

○衢州：浙江省衢州市。○李秀才：李という姓の科挙の貢試に合格した人物。○驪歌：告別の歌。

★暮春瀟水送別

暮春瀟水の送別

唐 韓琮

綠暗紅稀出鳳城
綠暗く紅稀にして 鳳城ほうじょうを出ず
暮雲樓閣古今情
暮雲 樓閣 古今の情
行人莫聽宮前水
行人 聴く莫かれ 宮前の水
流盡年光是此聲
年光りゅうじんを流盡するは 是れ 此の聲

【語釈】

○瀟水…不祥。○鳳城…首都長安の美称。○行人…旅人。○年光…年月。○流盡…流し尽くす。

★送友人之上都

友人の上都かみに之くを送る

唐 法振

玉帛徵賢楚客稀
玉帛ぎよく 賢を徵し 楚客そかく稀なり
猿啼相送武陵歸
猿啼き 相送りて 武陵ふりやうに帰る
湖頭望入桃花去
湖頭の望ぼうは 桃花に入りて去り
一片春帆帶雨飛
一片の春帆 雨を帯びて飛ぶ

【語釈】

○上都…首都、長安。○玉帛…賢者を招く使者。○楚客…故郷を離れて住む人。○武陵…湖南省常德市。『桃花源記』の漁夫の住んでいたところ。○湖頭…湖のほとり。

★ 暮春送人

暮春 人を送る

唐 無悶

折柳亭邊手重攜

柳を折る 亭辺 手を重ねて携う

江煙澹澹草萋萋

江煙 澹々 草萋々

杜鵑不顧離人意

杜鵑は顧ず 離人の意

更向落花枝上啼

更に落花 枝上に向つて啼く

【語釈】

○江煙：水上に立つもや。○澹澹：薄いさま。○萋萋：草木が盛んに生い茂っているさま。○杜鵑：ホトトギス。鳴き声は故郷に帰る思いをつのらせる。○離人：家を離れた人。

★ 送履霜上人還金陵西山

履霜上人の金陵の西山に還るを送る

唐

僧皎然

携錫西山步綠莎

錫を携え 西山 緑莎を歩く

禪心未了奈情何

禪心 未だ了せず 情を奈何んせん

湘宮水寺清秋夜

湘宮 水寺 清秋の夜

月落風悲松柏多

月落ち 風悲みて 松柏多し

【語釈】

○履霜上人：不祥。○金陵：南京。○綠莎：緑草の地。○湘宮：湖南省。

★ 冬日梅溪送裴方舟宣州 冬日梅溪に裴方舟宣州を送る 唐 僧皎然

平明走馬上村橋 平明に馬を走らして 村橋に上る
花發梅溪雪未消 花発く梅溪雪未だ消せず
日短天寒愁送客 日短く天寒く愁いて客を送る
楚山無限路遙遙 楚山限り無く路遙々

【語釈】

○裴方舟：裴濟、郡望河東聞喜（山西省聞喜）の人。代宗大歷中、湖州從事となる。○宣州：安徽省宣城市宣州区。○平明：夜明け方。○楚山：楚の地方の山々。○遙遙：遙かに遠く離れるさま。

★ 送人往長沙

人の長沙に往くを送る

唐 僧齊己

荆門歸路指湖南 荆門の歸路 湖南を指さす
千里風帆興可諳 千里の風帆興 諳ずべし
好聽鷓鴣啼雨處 好し聴く鷓鴣の雨に啼く処
木蘭舟晚泊春潭 木蘭の舟 晩に 春潭に泊す

【語釈】

○長沙：湖南省長沙市。○荆門：湖北省宜昌市荆門山。○湖南：中国南部の省。○風帆：帆掛け船。○春潭：春の淵。

★ 送魏道士

魏道士を送る

宋 張詠

江上蕭蕭木葉飛
天台狂客杖藜歸
莫嫌俗吏勤相顧
曾是嵩陽舊掩扉

江上蕭々として 木葉飛ぶ
天台の狂客 杖藜して帰る
嫌う莫れ 俗吏の勤めて相顧るを
曾是是れ 嵩陽旧扉を掩う

【語釈】

○魏道士：不祥。○蕭蕭：物寂しいさまや音の形容。○狂客：奇行のある人。○杖藜：藜（あかぎ）を杖にする。藜は老人、隱者の杖。○嵩陽：崇山の南側。○杖藜：藜

★ 送易從師還金華

易從師の金華に還るを送る

宋 林逋

吟卷田衣歲向殘
孤舟夜泊大江寒
前巖數本長松色
及早歸來帶雪看

吟卷 田衣 歲 殘 に向う
孤舟 夜泊して 大江寒し
前巖 數本 長松の色
早に歸り来りて 雪を帯びて 看るに及ぶ

【語釈】

○易從師：不祥。○金華：金華山。浙江省金華市の北にある山。○吟卷：詩稿、詩冊。○田衣：袈裟。○歲向殘：一年が残り少なくなる。○大江：長江。

★ 永州送周茂叔還濂溪

永州にて周茂叔の濂溪に還るを送る

宋 任大中

君去何人最淚流

君去りて 何人か 最も 涙流る

老翁身獨宿南州

老翁 身独り 南州に宿す

隨君不及秋來雁

君に随いて 及ばず 秋來の雁に

直到瀟湘水盡頭

直ちに到る 瀟湘 水尽くる頭

【語釈】

○永州：湖南省永州市。○周茂叔：周敦頤、道州營道（湖南省道県）の人。各県の知事を務めた。程顥、程頤等を門下生とする。○濂溪：湖南省道県の川。○南州：重慶から三峡あたりの州。○瀟湘：瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地方。

★ 送客西陵

西陵に客を送る

宋 王安國

若耶溪畔醉秋風

若耶溪畔 秋風に酔い

獵獵船旗照水紅

獵々たる船旗 水を照らして紅なり

後夜錢塘酒樓上

後夜 錢塘 酒樓の上

夢魂應繞浙江東

夢魂 応に 浙江の東を繞るべし

【語釈】

○西陵：浙江省蕭山市西興鎮。○若耶溪：浙江省北部、紹興の若耶山を流れる谷川。鏡湖に注ぐ。○獵獵：物の翻るさま。○後夜：夜半過ぎ。○錢塘：浙江省杭州市。○浙江：錢塘江。

★ 彭城逍遙堂留別瞻兄

彭城の逍遙堂にて瞻兄に留別す

宋 蘇轍

逍遙堂後千尋木

逍遙堂後 千尋の木

常送中宵風雨聲

常に送る 中宵 風雨の声

誤喜對床尋舊約

誤って喜ぶ 对床 旧約を尋ぬかと

不知漂泊在彭城

知らず 漂泊して 彭城に在るを

【語釈】

○彭城：江蘇省徐州市。○逍遙堂：所在地不祥。○瞻兄：蘇軾。○留別：自分が別れて旅立つときに残す詩。○中宵：真夜中。○舊約：昔の約束。○漂泊：さすらう。

★ 彭城逍遙堂留別瞻兄

彭城の逍遙堂にて瞻兄に留別す

宋 蘇轍

秋來東閣涼如水

秋來 東閣 涼しきこと 水の如し

客去山公醉似泥

客去りて 山公の酔 泥に似たり

困卧北窗呼不醒

困卧す 北窓 呼べども醒めず

風吹松竹雨淒淒

風は 松竹を吹き 雨 淒々

○彭城：江蘇省徐州市。○逍遙堂：所在地不祥。○瞻兄：蘇軾。○留別：自分が別れて旅立つときに残す詩。○山公醉：酔った状態で訳が分からなくなること。山公は山簡、字は季倫。西晋時代の人。竹林の七賢、『世説新語』（任誕）白接籬。○淒淒：冷え冷えとしたさま。

★送呂晦叔赴河陽

呂晦叔が河陽に赴くを送る

宋 程顥

曉日都門颯旆旌

曉日都門旆旌颯

晚風鏡吹入三城

晚風鏡吹三城に入る

知公再爲蒼生起

知公再び蒼生の為に起つ

不是尋常刺史行

是れ尋常の刺史の行ならず

【語釈】

○呂晦叔：呂公著。壽州（安徽省鳳台）の人。仁宗時の進士。尚書右僕射兼中書侍郎となる。○河陽：河南省焦作市孟州市。○曉日：朝日。○旆旌：旗。○鏡吹：軍中の樂歌。○知公：沈約。南朝宋・齊・梁の三朝に仕えた政治家。○蒼生：人民。

★別元忠學士八兄

元忠學士八兄に別る

宋 張耒

身逐孤舟似斷雲

身は孤舟を逐いて断雲に似たり

故人追送尚殷勤

故人追送して尚お殷勤なり

秋城夜泊西風岸

秋城夜泊西風の岸

落葉悲蟲獨自聞

落葉悲虫独り自ら聞く

【語釈】

○元忠學士：不特定。○故人：古くからの友人。○追送：送る。○殷勤：愁い傷むさま。

★古離別

古離別

宋 張耒

亭亭畫舸繫春潭

亭々たる画舸 春潭に繋ぐ

直到行人酒半酣

直ちに到る行人 酒半ば酣なり

不管烟波與風雨

管せず 煙波と風雨と

載將離恨過江南

離恨を將つて載せ 江南を過ぐ

【語釈】

○古別離…樂府題。古風な調べにならつて、別離の心情を詠んだ詩。○亭亭…高く聳え立つさま。○畫舸…画で彩られた船。○行人…旅人。○煙波…水面に立つ煙。○離恨…別れの恨み。○江南…長江中下流の南の地方。

★送選兄歸天台

選兄の天台に帰るを送る

宋 曹勛

一笠彌天亦大奇

一笠 弥天 亦た大奇

選公訪我索新詩

選公 我を訪れ 新詩を索す

赤城歸去應相憶

赤城に帰り去りて 応に相憶うべし

十里松風月上時

十里の松風 月の上る時

【語釈】

○選兄…不祥。○天台…浙江省台州市天台山。○彌天…志の高いさま。○選公…選兄のこと。○赤城…赤城峰。天台山の目印となる山。○應…「まさにすべし」と読み、「くすべきである」「きつとくちがいない」の意。

★ 送甘叔懷游廬阜

甘叔懷かんしゅくかいの廬阜ろふに遊ぶを送る

宋 朱熹

匡廬不見幾經年

匡廬きやうろ 見ず 幾年きやうねんを経

一話清遊一悵然

一話清遊 一悵然

此日送君憑問訊

此の日 君を送り 憑よりて問訊もんじんす

千峰影裏舊潺湲

千峰影裏せんぼうえいり 旧もと潺湲せんかん

【語釈】

○甘叔懷：不祥。○廬阜：江西省の廬山。○匡廬：江西省の廬山。○清遊：清雅な遊び。○悵然：歎くさま。がっかりしたさま。○問訊：問いたです。○潺湲：浅い水の流れるさま。

★ 清湘驛送王柳州南歸

清湘驛せいしやうえきにて王柳州わうりゆうしゆうの南に帰るを送る

宋 范成大

南歸北去路茫茫

南歸 北去 路 茫茫ぼうぼう

不是行人也斷腸

是れ 行人こうじんにあらずとも 也また断腸

可惜湘江春夜月

惜むべし 湘江 春夜の月

落花時節照離觴

落花の時節 離觴りしやうを照らす

【語釈】

○清湘驛：不祥。○王柳州：不祥。○行人：旅人。○茫茫：遠く果てしないさま。○断腸：非常な悲しみ。○湘江：湖南省最大の川。○離觴：別れの杯。

★夜離零陵以避同僚追送之勞留詩簡諸友

宋 楊萬里

夜 零陵を離れ 以つて同僚の追送の勞を避け 詩簡を諸友に留む

已坐詩臞病更羸

已に詩臞に坐せられて 病 更に羸る

諸公剛欲餞湘湄

諸公 剛に湘湄に餞せんと欲す

夜浮一葉逃盟去

夜 一葉を浮かべて 盟を逃げて去る

已被沙鷗聖得知

已に沙鷗に聖得知せらる

【語釈】

○零陵：湖南省寧遠市東南。○詩簡：詩を書いた紙。○詩臞：やせ衰えた詩人。○湘湄：湘江と湄江の合流点。○餞：送別する。○一葉：一つの小舟。○聖得知：素早く敏感に知る。

★送鄭節夫

鄭節夫を送る

宋 劉 宰

盛年已去壯心閑

盛年 已に去れども 壯心閑なり

此別懸知後會難

此の別れ 懸に知る 後の会の難きを

願使乾坤同日月

願うに 乾坤をして 日月を同じくせしめば

不妨閩浙異江山

妨げず 閩浙 江山を異にするを

【語釈】

○鄭節夫：不祥。○壯心：豪壯の志。○懸知：計り知る。○乾坤：天地、天帝。○閩浙：福建省と浙江省。

★送真舍人帥江西

真舍人の江西に帥たるを送る

宋 劉克莊

舶客珠犀湊郡城

舶客はくかく 珠犀しゆさい 郡城ぐんじやうに湊みなとす

向來點澆幾名卿

向來かうらい 點澆てんえんす 幾名卿

海神亦歎公清德

海神かいじん 亦また歎なげず 公こうの清德せいとく

少見歸舟箇様輕

見ることまじ少すくなり 歸舟きしゆうの 箇様かように輕かろきを

【語釈】

○真舍人：不祥。○江西：江西省。○珠犀：貴重で珍しい物。○郡城：郡の中心街。○向來：昔から。○點澆：けがす。○幾名卿：多くの名声のある公卿。○清德：高潔な品德。○箇様：このように。

★ 荆南別賈制書東歸

荆南けいなんにて賈制書かせいしよの東あづまに歸かへるに別わかる

宋 鄭起

來時秋雨滿江樓

來きたたる時とき 秋雨あきう 江樓かうろうに満みつ

歸日春風度客舟

歸かへる日ひ 春風はるかぜ 客舟かくしゆうに度わたる

回首荆南天一角

首こゝろを回まわらせば 荆南けいなん 天あまの一角いっかく

月明吹笛下揚州

月明つきあかりに 笛ふえを吹ふいて 揚州やうしゆうを下くだる

【語釈】

○荆南：荊州（湖北省一帯）の南部。○賈制書：不祥。○客舟：客船。○揚州：江蘇省揚州市。

★ 別李寄閑

李寄閑りきかんに別る

宋 僧實存

客氈未暖各東西

客氈かくせん 未だ暖かならざるに 各東西おのおの

望斷吳山杳霞中

望斷ぼうだんす 吳山ごさん 杳霞ようかの中うち

燕子不來春又老

燕子えんし 来らず 春又老ゆ

滿襟離思落花風

滿襟まんきんの離思りし 落花の風

【語釈】

○客氈：旅館での寝床の布団。○望斷：遠くまで見尽くす。○杳霞：深い靄。○滿襟：襟に満ちる。○離思：旅中で故郷に帰りたいという思い。

★ 上逢袁景從

江上袁景從えんけいじゆうに逢う

明 馬燧

茫茫江上浸平沙

茫茫ぼうぼうたる江上かう 平沙へいさを浸す

雁影翩翩帶日斜

雁影がんえい 翩翩へんべん 日を帯びて斜なり

欲駐扁舟風更急

扁舟を駐めんと欲すれば 風更かぜに急なり

明朝相憶即天涯

明朝 相憶うは 即ち天涯

【語釈】

○袁景從：不祥。○茫茫：広々としたさま。○平沙：平らかな砂浜。○翩翩：ひらひら。○扁舟：小舟。○天涯：空のはて。

★逢呉秀才復送歸江上

呉秀才に逢い復た江上に帰るを送る

明 高啓

江上停舟問客蹤

江上舟を停め 客蹤を問う

亂前相別亂餘逢

亂前相別れ 亂余に逢う

暫時握手還分手

暫時手を握り 還た手を分つ

暮雨南陵水寺鐘

暮雨の南陵水寺の鐘

【語釈】

○秀才：学者、知識人階級のこと。○復：ふたたび。○江上：河の畔、川の水面。○客蹤：旅人としての行跡。○亂：元末の張士誠の叛乱。○餘：後。○暫時：しばらくの間。還：また。○南陵：地名。○水寺：水辺にある寺。

(参考資料) 「ブログ 詩詞世界」

★送義烏龔叔安給事歸省

義烏龔叔安給事の帰省を送る

明 方孝孺

鷄舌同含侍紫宸

鷄舌同に含み 紫宸に侍す

朝回東閣每相親

朝より回りにて 東閣毎に相親しむ

片帆忽逐西風去

片帆忽ち 西風を逐いて去る

鴛鷺行中少一人

鴛鷺行中 一人を少く

【語釈】

○義烏：浙江省金華市義烏市。○龔叔安：龔泰、浙江省義烏の人。洪武二十九年拳人となり、官戸科都給事中となる。○給事：給仕中、法令の異失を調べる官。○鷄舌：鷄舌香。奏上するとき口に含んだ。○紫宸：紫宸殿、天子の居所。○片帆：小舟。○鴛鷺行：朝官の行列。

★送林一和

林一和を送る

明 高 様

雨裏春衣惜解携

雨裏 春衣 解携を惜しむ

出門愁見草萋萋

門を出て 愁い見れば 草萋々

憶君獨在星溪月

君を憶いて 独り 星溪の月在り

無那青山杜宇啼

無 那し 青山 杜宇の啼くを

【語釈】

○雨裏…雨の中。○解携…離別。○萋萋…草木が盛んに生い茂っているさま。○無那…どうしようもない。○杜宇…ほととぎす。故郷に帰るを促す。

★ 即事

即事

明 曾 柴

片片飛花逐水流

片々たる飛花 水を逐って流れ

傷春何處最多愁

春を傷みて 何れの処か 最も愁い多き

紅妝獨倚闌干立

紅妝 独り 闌干に倚りて立ち

望盡征帆不下樓

征帆を望尽して 楼を下らず

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に应じて詩を作ること。○片片…ひらひらと軽く飛ぶさま。○紅妝…化粧をした美人。○征帆…旅客を乗せた帆掛け船。○望盡…見えなくなるまで眺める。

★ 淮安別回御史

淮安にて回御史に別る

明 王英

遠別悠悠郷夢頻

遠別悠悠郷夢頻なり

逢君況是異郷春

君に逢う 況や是れ 異郷の春においてをや

可憐河畔青青柳

憐むべし 河畔 青々の柳

又折長條別故人

又 長条を折りて故人に別る

【語釈】

○淮安…江蘇省淮安市。○回御史…不祥。○悠悠…遠く遙かなさま。○郷夢…故郷の夢。
○可憐…感嘆の言葉。ああ。○長條…長い枝。「折楊柳」

★ 送客

客を送る

明 王雲鳳

春濕蒸雲雨欲絲

春は蒸雲を湿し 雨糸ならんと欲す

飄飄遊子別離時

飄々たる遊子 別離の時

愁看陌上青青草

愁い看る 陌上 青々の草

送盡行人總不知

行人を送尽して 総て知らず

【語釈】

○蒸雲…蒸気のような雲。○飄飄…さまようさま。○遊子…旅人。○陌上…道の上。○行人…旅人。

★ 江上送客

江上客を送る

明 鄧 定

別酒臨行醉未消
別酒行に臨みて 醉未だ消えず
緑楊何處繫蘭橈
緑楊何れの処か 蘭橈を繫ぐ
知君最是相思處
知る君が最も是れ 相思う処
月落江頭夜半潮
月落つ江頭 夜半の潮

【語釈】

○蘭橈：小舟の美称。○江頭：川のほとり。

★ 送潘伯振守漢中

潘伯振が漢中に守たるを送る

明 邊 貢

石棧凌雲鳥路斜
石棧 雲を凌ぎ 鳥路斜なり
漢中城府枕三巴
漢中の城府 三巴に枕す
風林落葉猿聲滿
風林 落葉 猿声滿つ
那得行人不憶家
那ぞ得ん 行人家を憶わざるを

【語釈】

○潘伯振：不祥。○漢中：陝西省漢中市。○石棧：石を穿って木を掛け渡した棧道。○鳥路：鳥しか通らないような山間の道。○城府：官府。○三巴：巴郡、巴東、巴西。現在の四川省嘉陵江、綦江流域の東的の地域。

★送顧侍御出守馬湖

顧侍御こじきよが出て馬湖ばこに守たるを送る

明邊貢

露冕南征火井西

露冕ろべん 南征 火井の西

東過漉水北泥溪

東は漉水ろくすいを過ぎ北は泥溪でいけい

借問鄉愁何處切

借問しやもんす 鄉愁 何れの処か切なる

千山明月子規啼

千山 明月 子規啼く

【語釈】

○顧侍御：不祥。○馬湖：安徽省合肥市。○露冕：仙人の冠。○火井：四川省の地名、未確定。○漉水：川名、不祥。○泥溪：溪名、不祥。○借問：ちよっとお尋ねする。

★送蘇通判

蘇通判そつうはんを送る

明邊貢

去歲秋風別省闈

去歲きよさい 秋風 省闈しょういに別る

木樨花落雨霏霏

木樨もくせい 花落ちて 雨霏ひひ々

那知此日江陵郡

那なんぞ知らん 此の日 江陵郡こうりょうぐん

春草連天送客歸

春草 天に連なり 客かくの歸るを送るを

【語釈】

○蘇通判：不祥。○去歲：去年。○省闈：宮中。○霏霏：雨や雪のしきりに降るさま。○江陵郡：不祥。

★ 贈劉君按察雲南

劉君の雲南を按察するに贈る

明 李夢陽

碧雞金馬古黔陽

碧雞 金馬 古黔陽

滇海秋搖日月光

滇海 秋搖れ日月の光

自此蠻中無毒熱

此自 蠻中 毒熱無し

行臺六月有飛霜

行台 六月 飛霜有り

【語釈】

○按察…巡察。○雲南…中国南西の辺境の地。○碧雞…雲南省昆明市の西南にある山。○金馬…酷暑。○黔陽…湖南省懷化市洪江市。○滇海…雲南省昆明市の西南にある昆明湖。○蠻中…異民族の地。○行臺…地方間の役所。

★ 別達生

達生に別る

明 李夢陽

醉約金山觀海流

酔いて約す 金山 海流を觀るを

興飛江漢忽西遊

興 飛びて 江漢 忽ち西遊す

龍沙月色年年滿

龍沙 月色 年々滿ち

獨照匡廬萬仞秋

独り 匡廬を照らす 万仞の秋

【語釈】

○達生…不祥。○金山…上海市松江県附近の海中にある山。○江漢…湖北省武漢市付近。○龍沙…江西省南昌市北の白沙丘。○匡廬…江西省九江市の廬山。○萬仞…非常に深

★送周判官

周判官を送るしゅうはんがん

明 李夢陽

青燈綠酒五花裘

青灯 綠酒 五花の裘かわごころも

客舍新秋螢火流

客舍 新秋 螢火流けいか

問君不飲真何事

君に問う 飲まずんば 真に何事ぞ

明日出城楓葉愁

明日 城を出ずれば 楓葉愁ふうよううれわん

【語釈】

○綠酒：美酒。○客舍：旅館。

★送韓汝慶還關中

韓汝慶の関中に還るを送るかんじよけい

明 何景明

華岳雲臺萬里情

華岳の雲台 万里の情

高秋落日眺秦城

高秋 落日 秦城を眺む

黄河一線通滄海

黄河 一線 滄海に通じ

身在仙人掌上行

身は 仙人掌上に在りて 行く

【語釈】

○韓汝慶：陝西省朝邑の人。正徳三年の進士。工部主事となる。○關中：函谷関の西、陝西省。○華岳：陝西省華陰の華山、五岳のひとつ。○雲臺：華山の北峰。○高秋：天高く爽やかな秋。○秦城：西安。○仙人掌：華山の峰のひとつ。

★送郷人還

郷人の還るを送る

明 何景明

楊柳花飛蕪草青

楊柳花飛んで蕪草青し

故郷南望幾長亭

故郷南望すれば幾長亭

城邊客散重回首

城邊客散じ重ねて首を回し

愁見孤鴻落晚汀

愁い見る孤鴻の晩汀に落つるを

【語釈】

○楊柳…柳絮。○蕪草…乱れ茂った草。○長亭…十里ごとに設けられた宿駅。○孤鴻…群を離れた孤独の雁。

★送陸史之楚

陸史の楚に之くを送る

明 王維楨

楚苑天南暖不遲

楚苑天南暖遅からず

隔年梅柳已多姿

年を隔て梅柳已に姿多し

春來花絮粉粉起

春來花絮粉々として起る

絶勝梁園雪裏時

絶勝たる梁園雪裏の時

【語釈】

○陸史…不祥。○楚…湖南省・湖北省。○楚苑…その地方の庭園。○春來…春になってから。○花絮…柳絮。○粉粉…乱れ飛ぶさま。○絶勝…非常に優れた景色。○梁園…漢代、梁の孝王が営んだ庭園。多く文人を集めて会遊した。転じて帝都、ここでは北京。

★岳陽樓送客

岳陽樓にて客を送る

明 陳達

湖南煙樹遠依依
湖南の煙樹 遠く依々たり
百尺欄干倚落暉
百尺の欄干 落暉に倚る
鐵笛一聲人不見
鐵笛 一声 人見え
茫茫秋水片帆歸
茫茫たる 秋水 片帆歸る

【語釈】

○岳陽樓：中国湖南省岳陽市にある樓閣。黄鶴樓、滕王閣と共に、江南の三大名樓のひとつとされる。○依依：遠くぼんやりとして見えるさま。○落暉：夕陽の光。○鐵笛：鉄の笛、仙人が吹くとされる。○茫茫：広大なさま。○片帆：小さな帆掛け船。

★送劉侍御謫嶺南

劉侍御が嶺南に謫せらるるを送る

明 鄭善夫

尉陀城外泛雲槎
尉陀城外 雲槎を泛ぶ
西望峨眉不見家
峨眉を西望すれども家を見ず
莫道日南天萬里
道うこと莫れ 日南 天 万里と
歸心一夜過三巴
歸心 一夜 三巴を過ぐ

【語釈】

○劉侍御：劉士元、四川省彭県の人、正徳六年進士、御史となるが麟山駅の丞に謫せられるが、復官して右副都御史となる。○嶺南：広東省、広西チワン族自治区、海南省地方。○尉陀城：所在不明。○峨眉：峨眉山、四川省樂山県にある名山。○三巴：巴郡、巴東、巴西。現在の四川省嘉陵江、綦江流域の東的地域。

★送門生楊靜夫北上

門生楊靜夫が北上を送る

明 楊慎

滇海門生廿載遙

滇海の門生 廿載遙なり

飛騰次第上雲霄

飛騰 次第に 雲霄に上る

衰年七十猶羈旅

衰年 七十 猶お羈旅

誰向玄亭慰寂寥

誰だ 玄亭に向いて 寂寥を慰む

【語釈】

○門生：門人。○楊靜夫：許俊。揚州府泰州の人、成化二十年の進士、戸部侍郎に到る。
○滇海：昆明池。雲南省昆明市の西南にある池。○飛騰：高く飛び上がる。○雲霄：高空。
○羈旅：異郷に住むこと。○玄亭：四川成都にある住宅の名。草玄亭。○寂寥：寂しき。

★送別郭子坤赴選

郭子坤の選に赴くを送別す

明 許邦才

老去風雲意氣孤

老去りて風雲 意氣孤なり

因君更與話江湖

君に因りて 更に与に 江湖を話す

定經燕市悲歌地

定めて經 燕市 悲歌の地

為問當年舊酒徒

為に問え 当年の旧酒徒

【語釈】

○郭子坤：不祥。○江湖：川と湖。隱士の住むところ。○燕市：燕の国の都〔北京〕。○
○当年：昔。○酒徒：酒飲み仲間。

★送謝中丞歸射洪

謝中丞が射洪に帰るを送る

明 許邦才

巫峽江陵一水分

巫峽江陵一水分る

猿聲兩岸夜成羣

猿聲兩岸に夜群を成す

遙知月下孤臣淚

遙かに知る月下孤臣の涙

才過三聲不可聞

才に過ぎ三聲聞くべからず

【語釈】

○謝中丞：不祥。○射洪：四川省遂寧市射洪県。○巫峽：長江三峽の一つ。○江陵：湖北省荊州市江陵県。○孤臣：孤立無縁、或いは用いられず遠ざけられた臣。○三聲：猿の三声（『水径注』）。

★贈鄭將軍之銅江

鄭將軍の銅江に之くを贈る

明 李攀龍

銅柱遙臨幕府高

銅柱遙かに幕府に臨みて高し

武陵溪水日滔滔

武陵の溪水日に滔々たり

桃花不及驂騑色

桃花及ばず驂騑の色

併與春光照錦袍

春光と併せて錦袍を照らす

【語釈】

○鄭將軍：不祥。○銅江：不祥。○銅柱：建物を支える銅製の柱。○幕府：大將軍の本營。○武陵溪：湖南省常德市の武陵溪。「桃花源記」の漁夫のいた処。○滔滔：水などが盛んに流れていくさま。○驂騑：駿馬。○錦袍：錦の衣。

★ 送殷正甫内翰之京

殷正甫内翰の京に之くを送る

明 李攀龍

春風忽送漢臣還

春風 忽ち送りて 漢臣還る

再入承明供奉班

再び 承明 供奉の班に入る

怪得文章成五色

怪み得たり 文章 五色成るを

朝朝染翰近龍顏

朝々 翰を染めて 龍顏に近し

【語釈】

○殷正甫：殷士儋。山東省歷城の人、嘉靖二十六年進士、官武英殿大學士となる。○内翰：翰林學士。○漢臣：君臣、殷正甫のこと。○承明：承明殿侍臣が勤務するところ。○供奉班：天子の御用を為す役人。○朝朝：毎日。○龍顏：天子。

★ 寄送方山人歸歙州

方山人が歙州に帰るに寄送す

明 李攀龍

河水悠悠鴈影長

河水 悠悠 鴈影長し

長安回首淚成行

長安 首を回して 涙行を成す

可憐三十年前客

憐むべし 三十年前の客

明日扁舟是故郷

明日 扁舟 是れ故郷

【語釈】

○方山人：不祥。○歙州：安徽省黃山市歙県。○悠悠：他と関わりなくゆったりしたさま。○扁舟：小舟。

★ 送劉戸部督餉湖廣

劉戸部が餉を湖広に督するを送る

明 李攀龍

錦帆南入楚雲重

錦帆 南に入りて 楚雲重し

江上遙看衡嶽峰

江上 遙に看る 衡岳峰

落日蒼茫秋不斷

落日 蒼茫として 秋断えず

青天七十二芙蓉

青天 七十二芙蓉

【語釈】

○劉戸部：不祥。○湖廣：湖北省と湖南省。○錦帆：帆掛け船の美称。○楚雲：楚の地方に見える雲。○衡嶽峰：湖南省衡陽市の衡山。五岳の一つ。○蒼茫：青々として果てしないさま。○七十二：数が多いこと。

★ 送右史之京

右史の京に之くを送る

明 李攀龍

桃花美酒鳳凰樓

桃花 美酒 鳳凰樓

公子乘春作宦游

公子 春に乗じて 宦游を作す

寒食不知何處過

寒食 知らず 何れの処にか過ぐ

縱無風雨亦堪愁

縦い 風雨無くとも 亦た 愁うるに堪えたり

【語釈】

○右史：中書省起居舍人。○鳳凰樓：不祥。○宦游：他国に出て官吏となる。仕官するために郷土を離れる。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。

★ 送子相歸廣陵

子相が広陵に帰るを送る

明 李攀龍

白雲無盡楚天寒

白雲 尽くること無く 楚天寒し

鴻鴈蕭蕭楓樹丹

鴻鴈 蕭々 として 楓樹丹し

楊子月明愁裏度

楊子の月明 愁裏に度り

蕪城雨色夢中看

蕪城の雨色 夢中に看る

【語釈】

○子相…不祥。○廣陵…江蘇省揚州市。○楚天…楚の地方の空。○鴻鴈…かり。○蕭蕭…物寂しいさま。○楊子…江蘇省邗江の南にあった渡し場。○蕪城…廣陵城。江蘇省江都県の街。○雨色…雨景色。

★ 送子相歸廣陵

子相が広陵に帰るを送る

明 李攀龍

廣陵秋色雨中開

広陵の秋色 雨中に開く

繫馬青楓江上臺

馬を繫ぐ 青楓 江上の台

落日千帆低不度

落日 千帆 低く度らず

驚濤一片雪山來

驚濤 一片 雪山來る

【語釈】

○子相…不祥。○廣陵…江蘇省揚州市。○秋色…秋景色。○江上…川岸。○驚濤…人を驚かすような大波。

★ 送劉主簿陞趙府

劉主簿が趙府に陞るを送る

明 張佳胤

遮道頻將車馬停

道を遮ること頻に車馬を將って停む

渭城歌發柳青青

渭城歌発して柳青青

送君欲作巴山月

君を送り巴山の月と作んと欲す

千里相隨過洞庭

千里相隨い洞庭を過らん

【語釈】

○劉主簿…不祥。○趙府…不祥。○陞…昇進する。○渭城…秦の都のあったところ。送別の地。○巴山…大巴山。四川省と陝西省省境にある山。○洞庭…洞庭湖、湖南省北部にある巨大な湖。

★ 送維楊王生遊秦中

維楊王生が秦中に遊ぶを送る

明 李先芳

燕山朔雪暗胡沙

燕山の朔雪胡沙に暗し

又逐秦雲聽暮笳

又秦雲を逐い暮笳を聴く

不念廣陵江上月

念ぜず 廣陵 江上の月

玉人斷腸落梅花

玉人 断腸 落梅花

【語釈】

○維楊王生…不祥。○秦中…陝西省の平原地域。○燕山…河北省の河北平原の北を囲むようにそびえる山脈。○朔雪…北方の雪。○胡沙…異民族の暮らす地域の砂漠。○秦雲…秦中の雲。○暮笳…夕方に吹く胡笳。○廣陵…江蘇省揚州市。○玉人…玉のように高潔な人。○落梅花…棠府題。横笛の曲。

★ 初冬別李山人

初冬 李山人に別る

明 盧叔麟

江城十月雁聲寒

江城 十月 雁声寒し

短髮偏嗟行路難

短髮 偏嗟す 行路難

莫惜脚盃今夜醉

惜しむ莫れ 脚杯 今夜の酔

明朝長鋏向誰彈

明朝 長鋏 誰に向つてか弾ぜん

【語釈】

○李山人：不祥。○江城：川に臨んだ街。○偏嗟：ひとえに嘆く。○行路難：樂府題、旅路の苦勞を詠う。○脚盃：杯を銜える、酒を飲む。○長鋏：長い柄の劍。故郷に帰ること（馮驩の「長鋏歸去乎」と言う歌 『史記』孟嘗君列伝）。

★ 送宗子相還廣陵

宗子相の広陵に還るを送る

明 徐中行

黄金臺下白榆秋

黄金台下 白榆の秋

葉落滹沱急暝流

葉落ちて 滹沱 暝流急なり

南望大江明月裏

南望す 大江 明月の裏

片帆千里下揚州

片帆 千里 揚州に下る

【語釈】

○宗子：宗臣。揚州の人、嘉靖二十九年の進士、吏部稽勳員外郎となる。○廣陵：江蘇省揚州市。○黄金臺：河北省易県の東南、易水の南にあった楼台。滹沱河。○滹沱：河北省西部を流れる川。○暝流：暗い流れ。○大江：長江。

★ 送宗子相還廣陵

宗子相の広陵に還るを送る

明 徐中行

霜落江空楓葉凋

霜落ち江空くして 楓葉凋む

接天寒色廣陵潮

天に接する寒色 広陵の潮

清宵憶爾聽鴻處

清宵憶う 爾が鴻を聴く処

明月揚州第幾橋

明月揚州 第幾橋

【語釈】

○宗子…宗臣。揚州の人、嘉靖二十九年の進士、吏部稽勳員外郎となる。○廣陵…江蘇省揚州市。○寒色…寒冷時の気色。○第幾橋…多くの橋。二十四橋があった。

★ 秋樹下送張雲少憲使

秋樹の下 張雲少憲が使用するを送る

明 潘子震

老樹臨風葉半黃

老樹 風に臨みて 葉 半ば黄なり

一樽岐路又斜陽

一樽 岐路 又斜陽

別君何必折楊柳

君と別れるに 何ぞ必しも 楊柳を折らんや

只此秋聲已斷腸

只だ此れ 秋声 已に断腸

【語釈】

○張雲少憲…不祥。○秋聲…秋の気配を感じさせる風や草木の物音。

★送王元美使江南

王元美おうげんびの江南くわんに使つかするを送おくる

明 宗 臣

千門羽檄正紛紜

千門せんもん羽檄うげき正ただに紛紜ふんでん

搖落西風此送君

搖落よくらく西風せいふう此こゝに君きみを送おくる

匹馬關山秋色裏

匹馬ひつば關山くわんざん秋色あきいろの裏うち

胡笳吹斷萬峰雲

胡笳こか吹斷すいだんす 万峰ばんぽうの雲うみ

【語釈】

○王元美：王世貞。江蘇省蘇州市の人。嘉靖二十六年の進士。官は刑部尚書に至った。○江南：長江中下流の南岸地域。○羽檄：国家有事の時、急速に兵を徴するための檄文。○紛紜：乱れるさま。○搖落：木の葉が揺れ落ちるさま。○西風：秋風。○匹馬：一頭の馬。○関山：関所のある山。○秋色：秋景色。○胡笳：異民族のあし笛。

★送袁山人還廣陵

袁山人えんざんじんの広陵こうりょうに還かへるを送おくる

明 陳 鶴

月出潮生江倒流

月出いづで 潮生うしおじ 江倒流かうりゅうす

別離無奈又逢秋

別離いりか 奈なともする無く 又秋またあきに逢あう

吳江楓葉紅千點

吳江ごかうの楓葉くれない 紅べに 千点せんてん

一夜隨風滿客舟

一夜いちや 風かぜに随したがって 客舟かくしゅうに満みつ

【語釈】

○廣陵：江蘇省揚州市。○無奈：どうしようも無い。○吳江：江蘇省に属する県名。○客舟：旅人を乗せた舟。

★ 送張捨人還永嘉

張捨人の永嘉に還るを送る

明 陳鶴

幾年相憶在京畿
一過呉門便拂衣
君似舟前夜潮水
纔臨江口又西歸

幾年 相憶あいおもいて 京畿けいきに在り
一たび 呉門ごもんに過よぎりて 便すなわち衣いを払はう
君きみに似にたり 舟前ふねまへ 夜潮やちょうの水
纔わづかに江口えいこうに臨まみて 又また 西にしに歸かへる

【語釈】

○張捨人…不祥。○永嘉…浙江省温州市。○京畿…首都。○呉門…江蘇省蘇州市。○夜潮…夜に満ちてくる潮。

★ 樵溪送別

樵溪にて送別す

明 薛欽

秋風迴棹下樵溪
溪水悠悠日欲西
山鳥似憐離別恨
飛來飛去傍人啼

秋風 棹さおを迴めぐり 樵溪しょうけいを下くだる
溪水 悠々ゆうゆう 日 西にしせんと欲ほす
山鳥 離別りべつの恨うらみを憐あわれむに似にて
飛とび来きたり 飛とび去いりて 人ひとに傍そばいて啼なく

【語釈】

○樵溪…不祥。樵の通る溪のこと？○悠悠…他とかかわり無くゆったりとしたさま。

★送客之揚州

客の揚州に之くを送る

明 薛 欽

隋家遺殿鎖塵埃

隋家の遺殿 塵埃に鎖ざさる

鳳輦龍舟去不回

鳳輦 龍舟 去りて回らず

君到廣陵江上望

君 広陵に到りて 江上に望めば

風吹官柳使人哀

風は官柳を吹き 人をして哀ましむ

【語釈】

○揚州：江蘇省揚州市。○隋家遺殿：隨の煬帝が建てた宮殿の残骸。○鳳輦：煬帝が乗った輿。○龍舟：煬帝が引かせた龍船。○官柳：煬帝が植えさせた柳。

★送公孝與下第東歸送

公孝と下第して東に帰る

明 馮 琦

素衣不禁帝京塵

素衣 帝京の塵を禁ぜず

出郭看春已暮春

郭を出で 春を看れば 已に暮春

我自倦遊君未逢

我は自ら倦遊し 君は未だ逢わず

楊花如雪送歸人

楊花 雪の如く 歸人を送る

【語釈】

○公孝：公鼐。山東省蒙陰の人，萬曆二十九年の進士。礼部右侍郎となる。○下第：科挙に落第すること。○素衣：白色の着物。庶民の衣服。○帝京：首都。○郭：城壁。○倦遊：官を求める生涯にあきる。○楊花：柳絮。

★送人之邊

人の辺に之くを送る

明 曹學佺

積雪遼陽路不通
送君此去遠從戎
家山萬里腸堪斷
最是長城鼓角中

積雪の遼陽路通ぜず
君を送れば此より去りて遠く戎に従う
家山万里腸断ゆるに堪えたり
最も是れ長城鼓角の中

【語釈】

○遼陽：遼寧省遼陽市。○戎：軍隊。○長城：万里の長城。○鼓角：太鼓と角笛。

★送人之蜀

人の蜀に之くを送る

明 袁敬烈

霜落孤城夜析哀
巴江楚水片帆開
傷心不獨衡陽雁
更有猿聲巫峽來

霜落ち孤城夜析哀
巴江の楚水片帆開く
心を傷むは独り衡陽の雁のみならず
更に猿声の巫峽より来る有り

【語釈】

○析哀：非常に哀れましいさま。○巴江：四川省を流れる川。○楚水：陝西省商県を流れる川。○片帆：小さな帆掛け船。○衡陽雁：衡陽断雁、衡陽（湖南省の県）に回雁峰という山が有り、雁が超えられないで引き返す。○巫峽：三峽の一つ。

★ 送蕭若愚

蕭若愚を送る

明 徐禎卿

送君南下巴渝深
君を送りて 南に下れば 巴渝深し
予亦迢迢湘水心
予も亦た 迢々 湘水の心
前路不知何地別
前路 知らず 何れの地にか別る
千山萬壑暮猿吟
千山 万壑 暮猿 吟ず

【語釈】

○蕭若愚：蕭世賢、本泰和の。弘治乙醜の進士、按察副使となる。○巴渝：蜀の地名。○迢迢：怨みなどが長く堪えないさま。○湘水：湖南省最大の河川。

★ 送胡生南歸

胡生の南に帰るを送る

明 陳宗虞

揚子江頭落暮潮
揚子の江頭 暮潮落つ
瓜洲夜月起蘭橈
瓜洲の夜月 蘭橈を起す
西湖歸去三千里
西湖 帰り去ること 三千里
家在芙蓉第一橋
家は 芙蓉 第一橋に在り

【語釈】

○胡生：不祥。○瓜洲：江蘇省邗江県南部。○蘭橈：小舟の美称。○西湖：浙江省杭州市の近くにある風光明媚な湖。○芙蓉第一橋：所在不明。

★ 江上送客

江上客を送る

明 李奎

月白霜寒歸路遙
月白く霜寒くして 帰路 遥なり
哀鴻落葉正蕭蕭
哀鴻 落葉ちて 正に蕭々
孤舟今夜泊何處
孤舟 今夜 何れの処にか泊す
卧聴空江落暮潮
卧して聴く 空江 暮潮の落つるを

【語釈】

○蕭蕭：物寂しい音の形容、雨風や馬、落葉など。○空江：物陰のない川。

★ 送客

客を送る

明 鄭琰

野色蕭蕭官渡頭
野色 蕭々 官渡の頭
亂楓飛盡不勝秋
亂楓 飛び尽くして 秋に勝えず
思君後夜看明月
君を思いて 後夜 明月を見る
愁殺鳥啼古戎樓
愁殺す 鳥啼く 古戎楼

【語釈】

○野色：野原の景色。○蕭蕭：物寂しい音の形容、雨風や馬、落葉など。○官渡：公営の渡し場。○後夜：夜半から明け方の間。○愁殺：ひどく愁えさせる。○古戎楼：古い物見櫓。

★ 送鄭先生之漢陽

鄭先生の漢陽に之くを送る

明 徐 燉

垂老無家別故郷

垂老 無家 別故郷

薄遊十里只空囊

薄遊 十里 只だ空囊

楚江風浪孤心客

楚江の風浪 孤心の客

何日漂零到漢陽

何れの日か 漂零 漢陽に到る

【語釈】

○鄭先生…不祥。○漢陽…湖北省武漢市の区。○垂老…老年（杜甫、垂老別）。○無家…（杜甫、無家別）。○薄遊…薄祿で、地方に赴任すること。○空囊…空っぽの財布。○漂零…落ちぶれること。

★ 送僧還義興簡聰聞復

僧の義興に還るを送り聰聞復に簡す

明 僧德祥

別却銅山三十年

別却す 銅山 三十年

因師長憶舊風煙

師に因りて 長く憶う旧風煙

今朝忽送東歸客

今朝 忽ち送る 東歸の客

正是秋江落木前

正に是れ 秋江 落木の前

【語釈】

○義興…江蘇省無錫市宜興市。○聰聞復…不祥。○別却…別れる。却是完了を示す助字。○銅山…江蘇省徐州市。○風煙…俗世間。

★送王石谷遊金陵

王石谷が金陵に遊ぶを送る

清 陳瑚

臺城秋草暮雲殘

台城の秋草 暮雲残る

六代興亡雁影寒

六代の興亡 雁影寒し

無限傷心金粉地

限り無き傷心 金粉の地

憑君畫出與人看

君に憑りて 画き出して 人に与えて看さしめん

【語釈】

○王石谷…不祥。○金陵…南京。○臺城…六朝時代の天子の御所。○六代…六朝。○金粉…繁華綺麗な生活。

★送黄憶溪別駕之蘇州

黄憶溪にて別駕の蘇州に之くを送る

清 黎士弘

青天起舞鬢爛斑

青天 起舞して 鬢爛 斑なり

習習邊風慘別顔

習々たる 辺風 別顔を惨う

同是南來君更遠

同に是れ 南來して 君 更に遠し

莫教歌者疊陽關

歌者をして 陽関を疊ねしむること莫かれ

【語釈】

○黄憶溪…不祥。○別駕…刺史の随行者。○蘇州…江蘇省蘇州市。○鬢爛…髪の毛。○習習…風がそよそよと吹くさま。○陽關…王維の陽関曲（送元二使安西）。○疊…繰り返し歌うこと（陽関三疊）。

★ 送又玄練師

又玄練師を送る

清 黎士弘

塵埃野馬漫粉紜

塵埃野馬 漫に粉紜

誰解閑身伴水雲

誰か閑身 水雲に伴うを解せん

一棹春風乘輿遠

一棹の春風 輿に乗じて遠し

過江先問小茅君

江を過ぎ 先ず問う 小茅君

【語釈】

○玄練師：不祥。○粉紜：入り乱れるさま。○閑身：暇な身。○一棹：一つの小舟。○小茅君：伝説中の仙人。

★ 送陳其年歸宜陽

陳其年の宜陽に帰るを送る

清 王士禛

送客魂銷楓樹林

客を送りて魂銷す 楓樹の林

買田陽羨舊同心

田を買う陽羨 旧同心

花枝照眼蝦籠嘴

花枝 眼を照らす 蝦籠嘴

未得從君弄渚禽

未だ 君に従って 渚禽を弄するを得ず

【語釈】

○陳其年：陳維崧。江蘇省宜興の人。康熙の間学鴻博一等となり檢討を授かる。○宜陽：江蘇省無錫市宜興市。○魂銷：魂が消えるほどの悲しみ。○買田陽羨：官を辞して隱逸生活に入る。○同心：心を同じくする友人。○蝦籠嘴：不祥。○渚禽：渚にいる鳥。

★ 送吳仁趾歸句曲

吳仁趾ごじんぎの句曲くきよくに帰るを送る

清

吳嘉紀

幽居聞在翠微間

幽居聞く翠微すいびの間に在りと

歸去漁樵任往還

帰り去りて漁樵ぎょしょうの往還に任す

屋後鷗飛揚子水

屋後鷗は飛ぶ揚子水ようすすい

門前月出大茅山

門前月は出ず大茅山だいちざん

【語釈】

○吳仁趾：吳麐。江南新安の人、事跡不祥。○句曲：江蘇省鎮江市句容市。○幽居：隱者の住まい。○翠微：山八合目くらい。○漁樵：漁夫と樵、隱者。○揚子水：江蘇省揚州市の揚子江。○大茅山：江蘇省鎮江市句容市にある山。

★ 送湯西崖歸西冷

湯西崖とうせいがいの西冷せいれいに帰るを送る

清

陳錫嘏

遊人經歲在京華

遊人歳を経て京華けいかに在り

忽逐征鴻去路踪

忽たちまち征鴻せいこうを逐いて去路踪きよろはるかなり

何物關心歸思急

何物か心に関して歸思きし急なる

孤山開遍早梅花

孤山開くこと遍あまねし早梅花そうばいか

【語釈】

○遊人：故郷を離れた人。○京華：京城の美称。○征鴻：旅をする雁。○歸思：故郷に帰りたいという気持。○孤山：西湖にある山（島）、梅の名所、林逋の隱棲地。

★ 送通門和尚住持太白山

通門和尚の太白山に住持するを送る

清 朱彝尊

越山東望路迢迢

越山東望すれば路 迢々

澗口寒藤度石橋

澗口の寒藤 石橋を渡る

惆悵空林飛錫遠

惆悵す 空林 錫を飛ばすこと遠きを

海門秋雨浙江潮

海門の秋雨 浙江の潮

【語釈】

○通門和尚…不祥。○住持…住職となる。○太白山…不確定。○越山…浙江省の山。○迢迢…遙かで遠いさま。○澗口…溪の出口。○寒藤…枯れた藤。○惆悵…嘆き悲しむ。○空林…人氣の無い林。○飛錫…錫を飛ばしてそれに乗って空を行く。○海門…川の海への出口。○浙江潮…錢唐江の海嘯。

★ 送孫處士還黃山

孫処士が黄山に還るを送る

清 朱彝尊

蕪城客散亂烏啼

蕪城 客散じ 乱烏啼く

別業黃山路不迷

別業 黄山路 迷わず

後夜相思秋色遠

後夜 相い思い 秋色遠し

月明三十二峰西

月明 三十二峰の西

【語釈】

○孫處士…孫默。江南の休寧の人、一生官職に就かずに過ごした。○黄山…安徽省黄山市にある山岳景勝地。○蕪城…江蘇省揚州市江都区。○別業…別荘。○後夜…夜半から夜明けまでの間。○秋色…秋景色。

★ 送趙秋水還永年

趙秋水が永年に還るを送る

清 朱彝尊

離堂下夜且成歡

離堂 夜をトし 且つ 歡を成す

酒盡休歌行路難

酒尽きて 歌うことを休めよ 行路難

四十逢時猶未晚

四十逢うとき 猶お 未だ晩ならず

看君騎馬入長安

君が 馬に騎りて 長安に入るを看る

【語釈】

○趙秋水：不祥。○永年：河北省邯鄲市永年区。○ト夜：ト夜論。夜通し議論すること。○行路難：樂府題。行く道の険しいことを詠い、別離の情を詠う。○晩：老年。

★ 送譚舍人

譚舍人を送る

清 朱彝尊

大漠霜流磧草枯

大漠 霜 流れて 磧草枯る

郵筒蘆酒急須沽

郵筒 蘆酒 急に須らく沽うべし

雲中西去黃河曲

雲中 西に去る 黃河の曲

未必山川似畫圖

未だ必ずしも 山川 画図に似ず

【語釈】

○譚舍人兄：不祥。○大漠：北西方の大砂漠。○磧草：積み重なった草。○郵筒：竹製の酒具。○蘆酒：酒を飲む方法。樽に葦のパイプを差し込み、その中に吸い込む。

★ 歳暮送張生還呉

歳暮 張生が呉に還るを送る

清 朱彝尊

四野同雲淅淅寒

四野 同雲 淅々として寒し

只應小住共春盤

只だ応に 小住 春盤を共にすべし

懷歸潘岳眞多事

歸るを懷う 潘岳 眞に多事

遺挂重思面壁看

遺挂 重ねて思う 面壁して看るを

【語釈】

○歳暮…年末。○四野…四方の原野。○同雲…雪雲。○淅淅…とどこおるさま。○應…「まさにくすべし」とよみ、「くすべきである」の意。○小住…暫時の住居。○春盤…立春の日に食べる春餅と野菜。○遺挂…使者の遺物。○面壁…壁に向かって座禅をすること。

★ 送馮寶初

馮宝初を送る

清 週稚廉

木末花開柿葉稀

木末 花開きて 柿葉 稀なり

旂亭分手淚霑衣

旂亭 手を分かち 涙衣を霑す

憐君身似江南燕

憐む 君が身は 江南の燕に似たるを

又逐秋風望北飛

又た 秋風を逐いて 北を望みて飛ぶ

【語釈】

○馮寶初…不祥。○木末…木の梢。○旂亭…酒楼。○江南…長江中下流域南岸地方。

★ 去京師

京師を去る

清 沈名孫

一望南天雲樹迷
一望す南天雲樹迷う
滄浪仍臥釣魚磯
滄浪仍ち臥す釣魚の磯
誰言京洛緇塵滿
誰か言う京洛緇塵滿つと
我獨還家是素衣
我独り家に還えるは是れ素衣

【語釈】

○京師…京城。○滄浪…川の名。不確定。○京洛…京城。○緇塵…黒い塵。○素衣…白い衣服。庶民の着物。

★ 暮春送別

暮春の送別

清 高岑

飛花萬點撲征衣
飛花 万点 征衣を撲つ
南浦依依怨落暉
南浦 依々として落暉を怨む
腸斷離亭煙柳色
腸は断え 亭を離る 煙柳の色
留君不住共春歸
君を留め 住わず 春と共に帰る

【語釈】

○征衣…旅衣。○南浦…南面の水辺。送別の地の常用語。○依依…遠くぼんやりとして見えるさま。○落暉…夕焼け。○煙柳…靄霞に煙る柳。

★ 別家人

家人に別る

清 盛 錦

伏雌烹罷勸加餐

伏雌ふくし烹罷にやみて 加餐かさんを勸む

秉燭喃喃語夜闌

燭とを乗りて 喃喃なんなん 夜闌やらんに語す

點檢篋中裘葛具

点検す 篋きょう中 裘葛きゅうかつの具

預知別後寄衣難

預あらかじめ知る 別後 衣を寄するの難きを

【語釈】

○伏雌…母雞。○喃喃…小さな声でべちやくちやしやべるさま。○夜闌…夜が明けようとするとき。○篋中…箱の中。○裘葛…冬の衣と夏の衣。○夜闌…夜が明けようと

★ 送石谷遊金陵

石谷せいくの金陵に遊ぶを送る

清 秦保寅

寒窓風急砌鳴蛩

寒窓 風急なり 砌みぎりに鳴く 蛩こむぎ

夜半挑燈話正濃

夜半 燈かかを挑かげ 話わ正まに濃のうなり

明日石頭城上望

明日 石頭城上に望まば

六朝煙雨孝陵松

六朝りくちょうの煙雨 孝陵の松

【語釈】

○石谷…不祥。○金陵…南京。○挑…灯火をかき立てる。○石頭城…南京市鼓楼区の清涼門の北に位置していた城。○六朝…南北朝時代の六朝。○孝陵…明孝陵。中国の南京玄武区にある紫金山の南麓に位置する明の太祖洪武帝朱元璋と后妃の陵墓。

★ 送劉編修使朝鮮

劉編修りゅうへんしゅうの朝鮮ちょうせんに使用するを送る

清

錢謙益

箕子墓對檀君祠

箕子きしの墓かぶ 檀君だんくんの祠しに對す

墓前山色滿城陴

墓前かぶのの山色さんしき 城陴じょうひに滿つ

知君繫馬無窮思

知る君きみが馬うまを繫つなぐ 無窮むきゆうの思おも

正是春風麥秀時

正ただに是こゝれ 春風しゅんぷう麥秀ばくしゅうの時とき

【語釈】

○劉編修：劉鴻訓。山東省長山の人、萬歷四十一年進士。礼部尚書兼東閣大學士となる。
○箕子：中国殷王朝の政治家。朝鮮で箕子朝鮮を建国した。○檀君：伝説上の古朝鮮の王。○山色：山の景色。○城陴：城壁。○麥秀：麦が伸びる。

★ 送人之武昌

人の武昌ぶしやうに之これを送る

清

劉 瓚

昨夜秋風動桂橈

昨夜 秋風 桂橈けいぎやうを動かす

寒塘紅樹雁聲驕

寒塘の紅樹 雁聲おんせう驕あはる

送君西上潯陽去

君を送りて西上 潯陽しんやうに去り

落月橫江夜半潮

落月 江に横よこわる 夜半よるの潮うしほ

【語釈】

○武昌：湖北省武漢市武昌区。○桂橈：桂でできた船。○寒塘：寒々とした堤防。○潯陽：揚子江南岸九江市。

★ 江上別陳梅岑

江上こうじょう 陳梅岑ちんばいしんに別る

清 葉抱崧

落葉西風水欲波

落葉 西風 水波だたと欲す

天涯分手意如何

天涯に手を分かち 意如何いかに

昨宵明月揚州宿

昨宵さくしやう 明月めいげつ 揚州やうしゅうの宿

畫舫同聽碧玉歌

画舫がぼう 同ともに聽く 碧玉へいぎよくの歌

【語釈】

○西風…秋風。○天涯…空のはて。○揚州…江蘇省揚州市。月の名所。○畫舫…画で飾った船。船の美称。

★ 錢別

錢別

清 王元勳

疎雨斜陽城上樓

疎雨そいう 斜陽 城上の樓

送君此日到瓜州

君を送り 此の日 瓜州かきゅうに到る

蕭蕭落木滄江冷

蕭々しょうしやうたる 落木らくぼく 滄江そうかう冷かに

萬里秋波一葉舟

万里の秋波 一葉いちやうの舟

【語釈】

○疎雨…疎らな雨。○瓜州…甘肅省瓜州県。○蕭蕭…雨風、落葉などの物寂しいさま。○滄江…長江。○秋波…秋日の波。○一葉舟…一つの小さな小舟。

★送伯緒従子旋里

伯緒従子の里に旋るを送る

清 周臨生

桃花新漲緑云

桃花新たに漲り 緑云々

那有離人不斷魂

那ぞ離人 断魂せざる有らんや

遙憶孤舟初出峽

遙かに憶う 孤舟初めて峽を出で

一帆細雨下荆門

一帆の細雨 荆門を下るを

【語釈】

○伯緒従子…不祥。○云云…広いさま。○離人…離れて行く人。旅人。○斷魂…非常に悲しいさま。○荆門…湖北省荆門市。

★送舍弟典返東蒙別業

舍弟典の東蒙の別業に返るを送る

清 程先貞

蹇驢秋盡度荒原

蹇驢 秋 尽きて 荒原を度る

東下顛輿有舊村

東のかた 顛輿に下りて 旧村有り

流水斜通樵徑遠

流水 斜めに通じて 樵徑遠し

寒山萬木一柴門

寒山 万木 一柴門

【語釈】

○舍弟典…不祥。○東蒙…不祥。○別業…別荘。○蹇驢…びっこの瘦せた驢馬。○顛輿…山東省費県。○樵徑…樵だけが通る人知れない道。○寒山…寒々とした山。○柴門…柴で作った粗末な門。

★ 送友人謫長沙

友人の長沙に謫さるるを送る

清 王宣繩

送君遠涉五溪西

君を送りて 遠く渉る 五溪の西

草色萋萋路欲迷

草色萋々 路迷わんと欲す

直上湘江亭北望

直ちに 湘江亭北に 上りて望めば

衡山七十二峰低

衡山七十二峰 低し

【語釈】

○長沙：湖南省長沙市。○五溪：不祥。○萋萋：草木が盛んに生い茂るさま。○湘江：湖南省最大の河川。長沙を流れる。○衡山：湖南省衡陽市にある五岳の一つ。○七十二峰：多くの峰。

★ 送秋谷還益都

秋谷の益都に還るを送る

清 趙善慶

寒鴻何事又南飛

寒鴻 何事ぞ 又南に飛ぶ

九月霜寒欲授衣

九月 霜寒くして 授衣ならんと欲す

況是家郷好風景

況んや是れ 家郷の好風景

滿山紅葉待人歸

滿山の紅葉 人の歸るを待つ

【語釈】

○秋谷：不祥。○益都：山東省濰坊市青州市。○寒鴻：晩秋から冬にかけての雁。秋谷になぞらえる。○授衣：冬の衣を整備すること。○家郷：故郷。

★送宋習九之旋州衛

宋習九の旋州衛に之くを送る

清 王 翰

相看把酒唱驪歌

相^{あい}看^みて酒^{さけ}を把^とり驪^{れい}歌^かを唱^なう

匹馬秋風遠渡河

匹^ひ馬^ば秋^{あき}風^{かぜ}遠^{とほ}く河^{がは}を渡^{わた}る

問月亭前莫回首

月^{つき}に問^とう亭^{てい}前^{まへ}首^{くび}を回^{めぐ}らす莫^なかれと

客星山畔夜猿多

客^{かく}星^{せい}山^{さん}畔^{はた}夜^よ猿^{さる}多^{おほ}し

【語釈】

○宋習九：不祥。○旋州衛：不祥。○驪歌：告別の歌。○匹馬：一頭の馬。○客星：ほうき星。

★送王淑亮之蘇州

王淑亮の蘇州に之くを送る

清 趙 慶

蘆花楓葉憶江天

蘆^{あし}花^{はな}楓^{かぜ}葉^は憶^{おも}ひ江^え天^{てん}を憶^{おも}ひ

夢斷姑蘇二十年

夢^{ゆめ}は断^{こと}ゆ^と姑^こ蘇^そ二十^{にじゅう}年^{ねん}

舊友若逢相問尋

旧^{ふる}友^{とも}若^もし逢^あひ相^あい問^{もん}尋^{じん}すれば

長安多向酒家眠

長^{ちやう}安^{あん}多^{おほ}く酒^{さけ}家^かに向^{むか}ひて眠^ねる

【語釈】

○王淑亮：不祥。○蘇州：江蘇省蘇州市。○姑蘇：江蘇省蘇州市近郊にある呉県の古名。

★送家兄价人入燕

家兄价人の燕に入るを送る

清 王謙

溪雲故故馬頭生

溪雲 故々 馬頭に生ず

芳草萋萋送客程

芳草 萋々 客を送る程

正是黯然分手處

正に是れ 黯然として手を分つ処

東風更送鵲鶯聲

東風 更に送る 鵲鶯の声

【語釈】

○价人：不祥。○燕：春秋戦国時代の燕の地方。北京一帯。○萋萋：草木が生い茂っているさま。○黯然：気が晴れないさま。○東風：春風。

★送楊日補南還

楊日補の南に還るを送る

清 沈欽圻

昨年春盡同為客

昨年 春尽きて 同に客と為り

此日君歸又暮春

此の日 君歸りて 又暮春

最是客中偏送客

最も是れ 客中 偏に客を送る

況堪更送故鄉人

況に堪んや 更に故郷の人を送るに

【語釈】

○楊日補：不祥。○客中：旅の途中。異郷にある中。○況：さらに。ますます。

★ 送李千里適杭州

李千里りせんりの杭州こうしゅうに適するを送る

清 孫廷桂

杭州直下片帆風

杭州直下こうしゅうちよつか片帆へんぱんの風

越嶠吳江四面通

越嶠えつぎやう吳江い四面しに通ず

試問鴟夷歸隱處

試問しもん鴟夷し歸隱きいんの処

五湖烟水至今同

五湖の煙水 今に至るまで同じかと

【語釈】

○李千里…不祥。○杭州…浙江省杭州市。○片帆…小舟。○越嶠…越の地方の尖って高い山。○試問…試みに問。ちよつと尋ねる。○鴟夷…范蠡。呉を滅ぼしたあと、五湖に浮かんで隠棲した。○歸隱…隠棲すること。○五湖…太湖と言われる。○煙水…靄のたつ水面。

★ 送夫子之鳩江

夫子ふしの鳩江きゅうかうに之くを送る

清 范淑鐘

征鞍落葉打離披

征鞍せいあん落葉らく打ちて離披りひ

忍淚臨風錢一卮

涙を忍んで 風に臨み 一卮いっしを錢す

夕照漸低人漸遠

夕照ゆづや漸く低く人漸く遠し

斷鴻聲裏立多時

斷鴻聲裏だんこうせいり立つこと多時

【語釈】

○夫子…男子。將士。○鳩江…安徽省蕪湖市鳩江区。○征鞍…旅人の乗馬。○離披…分散して落ちるさま。○一卮…一杯の酒。○漸…だんだんと。○斷鴻声…絶えだえに聞こえる雁の声。

★ 冬日送別表妹

冬日 表妹を送別す

清 周淑履

蕭蕭風雪逼人寒

蕭々たる風雪 人に逼りて寒し

欲整行裝忍淚看

行装を整えんと欲して 涙を忍びて看る

珍重送君無別語

珍重す 君を送りて 別語無きを

高堂代我問平安

高堂 我に代わりて 平安を問う

【語釈】

○表妹：母方の従妹。○蕭蕭：雨風、落葉等の物寂しい音の形容。○行装：旅の衣裳。○別語：別れの言葉。○高堂：父母。

★ 別淮陰官署

淮陰官署に留別す

清 吳若華

三歳依依玉鏡前

三歳 衣々 玉鏡の前

舊梳妝處最相憐

旧梳妝の処 最も相憐れむ

不知今後紅窓裏

知らず 今後 紅窓の裏

又是何人點翠鈿

又た是れ 何人か翠鈿を点す

【語釈】

○留別：自分が旅立つときの別れ。○淮陰：江蘇省淮安市。○依依：細くなよなよしているさま。○玉鏡：鏡の美称。○梳妝：化粧する。○紅窓：女性の部屋の窓。○点：調べ。○翠鈿：翡翠のかんざし。

絶句類選標本 五

絶句類選 卷之九 客旅類

★ 渡湘江

湘江を渡る

唐 杜審言

遅日園林悲昔遊

遅日 園林 昔遊を悲しむ

今春花鳥作邊愁

今春 花鳥 辺愁を作す

獨憐京國人南竄

独り憐れむ 京国の 人 南竄せられ

不似湘江水北流

似ず 湘江の水 北流するに

【語釈】

○湘江：湘水ともいう。広西チワン族自治区に発して湖南省を北上し、瀟水と合流して洞庭湖に注ぐ川。○遅日：うらかな春の日のこと。○園林：庭園の中の林。昔遊かつて遊んだ時のこと。○邊愁：辺地にある身の憂愁。○獨憐：ひとりわが身を憐れんでいるばかりだ。○京國人：都の人。○南竄：罪によって南方の土地に流されること。

（参考文献） 『唐詩選』

★ 寒食汜上作

寒食汜上の作

唐 王維

廣武城邊逢暮春

廣武城辺 暮春に逢い

汶陽歸客淚沾巾

汶陽の帰客 涙巾を沾す

落花寂寂啼山鳥

落花寂々 山に啼く鳥

楊柳青青渡水人

楊柳青々 水を渡る人

【語釈】

○寒食：寒食節、冬至から百五日目にあたる日の前後三日間。○汜上：汜水の（河南省にある川の名）ほとり。○広武城：古城名、河南省滎陽の東北の廣武山上に東西二箇所ある。○暮春：春の終わり。○汶陽：山東省寧陽県地方。帰客：帰ってきた旅人（作者）。○沾：ぬれる。○巾：ハンカチ状の布。○寂寂：もの寂しいさま。ひっそりとしたさま。○楊柳：ヤナギの総称。○青青：青々とした。

（参考文献）『新釈漢文大系 詩人編 3』

★ 落第長安

落第長安

唐 常建

家園好在尚留秦

家園 好在なるも 尚お秦に留まる

恥作明時失路人

恥ずらくは 明時に失路の人と作る

恐逢故里鶯花笑

恐らくは 故里に 鶯花の笑うに逢うわん

且向長安度一春

且く 長安に向いて 一春を度らん

【語釈】

○落第：科挙に不合格となること。○好在：旧のままである。○秦：長安。○明時：名君の治世。○失路人：志を得ない人。○故里：故郷。

★ 渡浙江問舟中人

浙江を渡り舟中の人に問う

唐 孟浩然

潮落江平未有風
潮落ち江平かにして 未だ風有らず
扁舟共濟與君同
扁舟 共に済る 君と同じ
時時引領望天末
時々 領を引いて 天末を望む
何處青山是越中
何れの処の青山 是れ 越中なるかと

【語釈】

○浙江：錢唐江。○潮落：引き潮。○扁舟：小舟。○濟：川を渡る。○時時：いつも。○引領：首を伸ばす。○天末：空のはて。○越中：浙江省会稽。

（参考文献）『新釈漢文大系 詩人編 3』

★ 秋下荆門

秋荆門を下る

唐 李白

霜落荆門江樹空
霜落ち 荆門 江樹空し
布帆無恙挂秋風
布帆 恙無く 秋風に挂く
此行不爲鱸魚鱠
此の行 鱸魚の鱠の為ならず
自愛名山入剡中
自ら名山を愛して 剡中に入る

【語釈】

○荆門：長江の南岸、湖北省枝城市の西北にある山で、蜀と湖北・湖南地方との境目。○江樹：秋の紅葉した木。○布帆：帆掛け船。○挂：ひっかかる、かかる。○鱸魚：スズキに似た淡水魚。鱠：なます。刺身。「鱸膾蓴羹」西晋の張翰の故事。○剡中：浙江省嵊州市。

（参考文献）『唐詩選』

★ 與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛唐

唐 李白

史郎中欽と黃鶴樓上にて吹笛を聴く

一爲遷客去長沙

一たび遷客と為りて長沙に去り

西望長安不見家

西のかた長安を望めども家を見ず

黃鶴樓中吹玉笛

黃鶴樓中玉笛を吹く

江城五月落梅花

江城五月落梅花

【語釈】

○史郎中欽：郎中の官位にある史欽。○黃鶴樓：武漢の西南の蛇山北黃鶴（長江右岸）にある樓。○一爲：ひとたび：となつてすぐに。○遷客：流罪に処せられた者。○長沙：湖南省省都。○玉笛：玉で作った笛、笛の美称。○江城：川沿いの町。○落梅花：笛の演奏用の「梅花落」という曲名のこと、悲しみを誘う。

（参考文献）『唐詩選』

★ 客中行

客中行

唐 李白

蘭陵美酒鬱金香

蘭陵の美酒鬱金香

玉腕盛來琥珀光

玉腕盛り来る琥珀の光

但使主人能醉客

但だ主人をして能く客を酔わしめば

不知何處是他鄉

知らず何れの処か是れ他郷

【語釈】

○客中行：樂府題、旅先での歌。○蘭陵：地名、山東省最南端の蒼山（の西南30キロメートル）、棗莊市（の東南東40キロメートル）の中間にある。○鬱金香：ミョウガ科の多年草でキゾメグサ（鬱金）の香。○玉腕：玉杯。○他郷：異郷。

（参考文献）『唐詩選』

★横江詞

横江詞 おつし

唐 李白

海潮南去過潯陽

海潮 南に去りて 潯陽を過ぐ じんよう

牛渚由來險馬當

牛渚 由來 馬當よりも險なり ぎゅうちよ ゆらい ばとう

横江欲渡風波惡

横江 渡らんと欲するも 風波惡し

一水牽愁萬里長

一水 愁を牽いて 万里長し ひ

【語釈】

○横江：南京市のあたりにある横江浦の渡し場。○潯陽：江蘇省九江市。○牛渚：安徽省当塗県の西北にある山。○由來：もともと。○馬當：江西省彭沢県の東北にある山。

★望天門山

天門山を望む

唐 李白

天門中斷楚江開

天門 中斷して 楚江開く

碧水東流至北迴

碧水 東に流れて 北に至って迴る めぐ

兩岸青山相對出

兩岸の青山 相對して出ず あいたい

孤帆一片日邊來

孤帆 一片 日邊より來る じっぺん

【語釈】

○天門山：長江兩岸を夾んで門のように聳える二つの山の総称。安徽省当塗県にある博望山（東梁山）と和県にある梁山のこと。○中斷：中が断ち切られること。○楚江：長江。○碧水：青い色をした川の流れ。○迴：まわる、向きを変える。○青山：木が青々と茂っている山。○相對：向かい合う。○出：（大空に）突き出る。○孤帆：ただ、一そのの帆掛け船。○日邊：太陽のある所。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 早發白帝城

早に白帝城を發す

唐 李白

朝辭白帝彩雲間

朝に辭す 白帝 彩雲の間

千里江陵一日還

千里の江陵こつりょう 一日に還る

兩岸猿聲啼不盡

兩岸の猿声 啼いて尽やまざるに

輕舟已過萬重山

輕舟 已に過ぐ 万重ばんちゆうの山

【語釈】

早：時間帶上、はやいこと。白帝：白帝城のこと、昔の城市（都市）の名。朝：あさ。辭：辞去する。彩雲：朝焼けや夕焼けの雲。江陵：湖北省江陵県。猿聲：四川東部の巫峽は、（もの悲しげに啼く）猿の声で有名。輕舟：軽やかな小舟。萬重山：幾重にも重なった多くの山々。

（参考文献）『唐詩選』

★ 春夜洛城聞笛

春夜洛城に笛を聞く

唐 李白

誰家玉笛暗飛聲

誰たが家の玉笛か 暗あんに声を飛ばす

散入春風滿洛城

散じて 春風に入りて 洛城らくじゆうに満つ

此夜曲中聞折柳

此の夜 曲中 折柳せつりゆうを聞く

何人不起故園情

何人か 故園の情を 起さざらん

【語釈】

○洛城：洛陽の街。○玉笛：宝玉でできた笛、笛の美称。○暗：暗闇に、密やかに。○折柳：折楊柳、横吹曲で別れの情をうたった曲名。○故園：故郷。○故園情：故郷を思う気持ち、郷愁。

（参考文献）

『唐詩選』

★逢入京使

京けいに入る使に逢う

唐 岑参

故園東望路漫漫

故園 東に望めば路 漫々まんまん

雙袖龍鍾淚不乾

雙袖そうしゆう 龍鍾りゆうしゆうとして 涙乾かず

馬上相逢無紙筆

馬上に相逢あいあいて 紙筆無し

憑君傳語報平安

君に憑よって 伝語して 平安を報ぜん

【語釈】

○故園…ふるさと、住むべき地。○漫漫…路が長々と続いているさま。○雙袖…両袖龍鍾…失意のさま。涙を流すさま。○相逢…に出逢う、…に(偶然に)出くわす。○憑…たのむ。○傳語…言伝(ことづて)する。○報…知らせる。○平安…無事。

(参考文献)

『唐詩選』

★暮春歸故山草堂

暮春ぼしゆん 故山の草堂に帰る

唐 錢起

谷口春殘黃鳥稀

谷口 春殘しゆんざんして 黃鳥かうちゆう稀なり

辛夷花盡杏花飛

辛夷しんい 花盡きんぎて 杏花きやうか飛ぶ

始憐幽竹山窗下

始めて憐れむ 幽竹 山窓もとの下

不改清陰待我歸

清陰を改めずして 我が帰るを待つを

【語釈】

○暮春…春の景物がすたれた時節。○故山…故郷の山。○草堂…草葺きの家。○春殘…春の景物がすたれる。○黃鳥…コウライウグイス。○辛夷…こぶし。○幽竹…密やかな竹。○清陰…清らかな影。

(参考文献)

『新編中国名詩選』

★ 楓橋夜泊

楓橋夜泊

唐 張繼

月落烏啼霜滿天

月落ち 烏啼いて 霜 天に満つ

江楓漁火對愁眠

江楓 漁火 愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺

姑蘇城外の 寒山寺

夜半鐘聲到客船

夜半の鐘聲 客船に到る

【語釈】

○楓橋：中国蘇州にある運河にかかった太鼓橋。○霜滿天：霜の下りる気配が天に満ちること。霜は地面から上がってくるものだが、中国では天から降りてくるものと考えられていた。○江楓 川沿いの楓の木々。漁火 漁船のいさり火。○愁眠 旅愁を抱いてウトウトしながらたまに目が覚める浅い眠り。○姑蘇：蘇州の旧名。春秋時代の呉の都。○寒山寺：蘇州郊外西のキロの楓橋鎮にある、臨濟宗の寺。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 湖中

湖中

唐 顧況

青草湖邊日色低

青草湖邊 日色低く

黃茅嶂裏鷓鴣啼

黃茅嶂裏 鷓鴣啼く

丈夫飄蕩今如此

丈夫 飄蕩 今此の如し

一曲長歌楚水西

一曲の長歌 楚水の西

【語釈】

○湖中：湖中にて、湖は洞庭湖を指す。○青草湖：一名巴丘湖、洞庭湖の東南部に位置する。○辺：ほとり。○日色：日の輝き。○黃茅瘴：茅が黄ばんで枯れる頃、瘴疫が広まるので、土地の人はこれを黃茅瘴と呼んだという。○飄蕩落ちぶれて流浪すること。○今如此：今このような身の上である。○一曲：一節ひとふし。○長歌：声を長く引き伸ばして歌うこと。○楚水西：楚国の川の西方。

(参考文献)

『唐詩選』

★憶故園

故園を憶う

唐 顧況

惆悵他山人復稀
杜鵑啼處淚霑衣
故園此去千餘里
春夢猶能夜夜歸

惆悵す 他山人 復た稀なるを
杜鵑 啼く処 涙衣を霑す
故園 此より去ること 千余里
春夢 猶お能く 夜々 歸る

【語釈】

○故園：故郷。○惆悵：嘆き悲しむさま。○杜鵑：ホトトギス。

★小孤山

小孤山

唐 顧況

古廟楓林江水邊
寒鴉接飯雁橫天
大孤山遠小孤出
月照洞庭歸客船

古廟の楓林 江水の辺
寒鴉 飯に接し 雁 天に横わる
大孤山 遠くして 小孤出ず
月は照らす 洞庭 帰客の船

【語釈】

○小孤山：安徽省安慶市小孤山。○江水：長江。○大孤山：江西省鄱陽湖の出口にある山。○小孤：小孤山。○洞庭：洞庭湖。湖南省北東部にある淡水湖。

★ 聽角思歸

角を聴いて帰るを思う

唐 顧況

故園黃葉滿青苔

故園の黃葉 青苔に滿つ

夢後城頭曉角哀

夢後の城頭 曉角哀し

此夜斷腸人不見

此の夜 斷腸 人見えず

起行殘月影徘徊

起行すれば 殘月影 徘徊す

【語釈】

○角：角笛。○故園：故郷。○曉角：曉を告げる角笛。○斷腸：はらわたがちぎれるほどの悲しみ。○起行：起きて歩く。○殘月：有り明けの月。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 宿湘江

湘江に宿す

唐 戎昱

九月湘江水漫流

九月 湘江水漫流す

沙邊唯覽月華秋

沙辺 唯だ覽る 月華の秋

金風浦上吹黃葉

金風 浦上 黃葉を吹き

一夜紛紛滿客舟

一夜 紛々として 客舟に滿つ

【語釈】

○湘江：洞庭湖に注ぐ湖南省最大の川。○漫流：意のままに流れる。○月華：月の光。○金風：秋風。○紛々：乱れ飛ぶさま。○客舟：旅客を乗せた舟。

★雲安阻雨

雲安にて雨に阻まる

唐 戎昱

日長巴峽雨濛濛
又説歸舟路未通
遊人不及西江水
先得東流到渚宮

日長く巴峽雨濛々
又た説く歸舟路未だ通ぜずと
遊人及ばず西江の水
先ず東流して渚宮に到るを得たり

【語釈】

○雲安：四川省雲陽県。○巴峽：湖北省巴東県にある峽谷。○霧や小雨で、煙るようにぼおっとしているさま。○遊人：旅人。○西江：長江の中下流。○渚宮：湖北省江陵県の古跡。

★南游感興

南游感興

唐 竇鞏

傷心欲問前朝事
惟見江流去不回
日暮東風春草綠
鷓鴣飛上越王臺

傷心問わんと欲す前朝の事
惟だ見る江流去りて回らざるを
日暮れて東風春草緑なり
鷓鴣飛び上がる越王台

【語釈】

○南游：南方（ここでは呉楚の地方）を旅すること。○前朝：春秋戦国時代の呉越。○江流：長江の流れ。越王臺：越王勾踐が築いた台。

★夜發袁江寄

夜袁江を発して寄す

唐 戴叔倫

半夜回舟入楚鄉
月明山水共蒼蒼
孤猿更叫秋風裏
不是愁人亦斷腸

半夜舟を回らして楚郷に入る
月明山水共に蒼々たり
孤猿更に叫ぶ秋風の裏
是れ愁人ならずも亦た断腸

【語釈】

○袁江：不祥。○楚郷：楚の地、湖北省・湖南省。○蒼蒼：青白いさま。○断腸：はらわたが断えるほどの悲しみ。

(参考文献) 『唐詩選』

★湘南即事

湘南即事

唐 戴叔倫

盧橘花開楓葉衰
出門何處望京師
沅湘日夜東流去
不爲愁人住少時

盧橘 花開きて 楓葉衰う
門を出て何れの処にか 京師を望まん
沅湘 日夜 東に流れて去る
愁人の為に 住まること少時もせず

【語釈】

○湘南：湖南省湘潭県の西。○即事：その場の事を詠じた詩。○盧橘：金柑。○楓葉：楓の葉。○出門：城門を出ること、郊外へ行く意。○京師：帝都。○沅湘：沅江と湘江、共に湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ川の名。○愁人：愁いを抱く人。

(参考文献) 『三体詩』

★ 下第後出關

下第後 関を出ず

唐 盧綸

出關愁暮一沾裳

関を出で 暮を愁い 一に裳を沾す

滿野蓬生古戰場

滿野 蓬は生ず 古戰場

孤村樹色昏殘雨

孤村の樹色 殘雨に昏く

遠寺鐘聲帶夕陽

遠寺の鐘声夕陽を帶ぶ

【語釈】

○下第…科挙の郷試に落第する。○出関…関中（現・陝西省中部で、四つの関の中の地。中心は都の長安）の地より出る。○愁暮…日が暮れたことを愁える。○一…もっぱら。○沾…ぬらす。しめらす。うるおす。○裳…衣服。○滿野…野原いっぱい。○蓬…ヨモギ。○孤村…ぼつんと離れたところにある村。○昏…（日が暮れて）くらい。○殘雨…残り雨。

（参考文献）

『三体詩』

★ 春夜聞笛

春夜笛を聞く

唐 李益

寒山吹笛喚春歸

寒山の吹笛 春の帰るを喚ぶ

遷客相看淚滿衣

遷客 相看着 涙衣に滿つ

洞庭一夜無窮雁

洞庭 一夜 無窮の雁

不待天明盡北飛

天明を待たずして 尽く北に飛ぶ

【語釈】

○寒山…寒々とした山。○春歸…春が来る。○遷客…地方に左遷された人。○洞庭…洞庭湖。○天明…夜明け。

★失題

失題

唐 李益

世故相逢各未閑
世故相逢せこ あいあいて 各おのおの未だ閑かんならず
百年多在別離間
百年多く別離の間に在り
昨夜秋風今夜雨
昨夜の秋風今夜の雨
不知何處入空山
知らず何れの処にか空山に入るを

【語釈】

○世故：世事、世の中の一切のことから。○空山：人氣の無い山。

★雨中怨秋

雨中秋を怨む

唐 楊憑

辭家遠客愴秋風
家を辞し遠客秋風を愴かなしむ
千里寒雲與斷蓬
千里の寒雲断蓬だんぼうを与あしらう
日暮隔山投古寺
日暮れて山を隔て古寺に投ず
鐘聲何處雨濛濛
鐘声何れの処か雨濛濛もうもう

【語釈】

○辭家：家を離れる。○斷蓬：根のちぎれたヨモギ。あてどない旅の象徴。○濛濛：霧や雨で煙るようにはおっとしているさま。

★ 登峴亭

峴亭に登る

唐 司空曙

峴山回首望秦關

峴山首を回らして 秦關を望み

南向荊州幾日還

南のかた 荊州に向いて 幾日か還る

今日登臨唯有淚

今日 登臨して 唯だ 涙有り

不知風景在何山

知らず 風景 何れの山にか在る

【語釈】

○峴亭：峴山にある亭。○峴山：湖北省襄陽県の南ある山。○秦關：関中の地、長安。○荊州：湖北省一帯。○登臨：高いところに登って見下ろす。○風景：風光景色。

★ 江陵使至汝州

江陵に使用して 汝州に至る

唐 王建

回看巴路在雲間

回看すれば 巴路 雲間に在り

寒食離家麥熟還

寒食に家を離れて 麦熟して還る

日暮數峰青似染

日暮れて 數峰 青染むるに似たり

商人説是汝州山

商人 説く 是れ 汝州の山と

【語釈】

○江陵：湖北省荊州市江陵県。○汝州：河南省汝州市一帯。○回看：振り返って見る。○巴路：四川省の道。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。

★宿青陽驛

青陽驛に宿す

唐

武元衡

空山揺落三秋暮

空山 揺落す 三秋の暮

螢過疎簾月露團

螢は疎簾を過ぎ 月露 団たり

寂寞孤燈愁不寐

寂寞たる孤灯 愁いて寐らず

蕭蕭風竹夜窗寒

蕭蕭たる風竹 夜窓寒し

【語釈】

○青陽驛：陝西省漢中市青陽驛。○空山：人気の無い山。○揺落：木の葉が枯れ落ちる。
○三秋：旧曆九月。○疎簾：まばらな簾。○月露：月に照らされた露。○寂寞：ひっそり
として物寂しいさま。○蕭蕭：風雨や落葉などの物寂しい音の形容。

★嘉陵驛

嘉陵驛

唐

武元衡

悠悠風旆繞山川

悠悠たる風旆 山川を繞る

山驛空濛雨似煙

山驛 空濛として 雨煙に似たり

路半嘉陵頭已白

路 半ばにして 嘉陵 頭 已に白し

蜀門西上更青天

蜀門 西上 更に青天

【語釈】

○嘉陵驛：広西百色市嘉陵驛。○悠悠：ゆったりしたさま。○風旆：風になびく旗。○空
濛：小雨が降ったり霽が立ちこめたりして薄暗いさま。○嘉陵：四川省南充市嘉陵市。○
蜀門：劍門山。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 汴州聞角

汴州にて角を聞く

唐 武元衡

何處金笳月裏悲

何れの処の金笳か 月裏に悲し

悠悠邊客夢先知

悠悠たる辺客夢に先ず知る

單于城上關山曲

單于城上 関山の曲

今日中原總解吹

今日 中原 総て吹くを解す

【語釈】

○汴州：河南省開封市。○角：角笛。○金笳：あし笛の美称。○悠悠：愁え悲しむさま。
○邊客：辺地を旅する人。○單于：匈奴の王。○関山曲：関山月。縦笛の曲。○中原：黄
河流域の平原。

★ 春興

春興

唐 武元衡

楊柳陰陰細雨晴

楊柳 陰々 細雨晴れ

殘花落盡見流鶯

残花 落ち尽くして 流鶯を見る

春風一夜吹鄉夢

春風 一夜 郷夢を吹き

夢逐春風到洛城

夢は春風を逐い 洛城に到る

【語釈】

○楊柳：柳の総称。○陰陰：木が茂って暗いさま。○殘花：廃れた花。○郷夢：故郷の
夢。○洛城：洛陽。

★舟行

舟行

唐 權徳輿

蕭蕭落葉送殘秋

蕭々たる落葉 殘秋を送る

寂寞寒波急暝流

寂寞たる寒波 暝流急なり

今夜不知何處泊

今夜知らず 何れの処にか泊せん

斷猿晴月引孤舟

斷猿 晴月 孤舟を引く

【語釈】

○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○殘秋：まさに終わろうとしている秋。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○暝流：くらい水流。○斷猿：猿のときれとぎれの悲しい声。

★登樓

登樓

唐 羊士諤

槐柳蕭疎遶郡城

槐柳 蕭疎として 郡城を遶る

夜添山雨作江聲

夜 山雨を添えて 江声を作す

秋風南陌無車馬

秋風 南陌 車馬無く

獨上高樓故國情

獨り高樓に上る 故国の情

【語釈】

○槐柳：エンジュと柳。○蕭疎：草木が疎らで寂しいさま。○南陌：南に面した道。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 晩次宣溪

晩に宣溪に次る

唐 韓愈

韶州南去接宣溪

韶州 南に去り 宣溪に接す

雲水蒼茫日向西

雲水 蒼茫として 日 西に向う

客淚數行先自落

客淚 數行 先ず 自ら落つ

鷓鴣休傍耳邊啼

鷓鴣 耳邊に啼くことを傍るを休む

【語釈】

○宣溪…不祥。○韶州…広東省韶關市。○蒼茫…水面などの青々として果てしないさま。
○客淚…旅を愁う涙。

★ 柳州二月榕葉落盡偶題

柳州二月榕葉落ち尽くす偶ま題す

唐 柳宗元

宦情羈思共悽悽

宦情 羈思 共に悽々

春半如秋意轉迷

春 半ばにして 秋の如く 意 転た迷う

山城過雨百花盡

山城 雨 過ぎて 百花 尽き

榕葉滿庭鶯亂啼

榕葉 庭に満ち 鶯 乱れ啼く

【語釈】

○柳州（広西壮族自治区の柳州市）。○榕葉…榕樹（あこう）の葉。○偶題…たまたま詩をつくる。○宦情…役人としての思い。○羈思…旅愁、ここでは地方勤めの愁。○悽悽…わびしく悲しいさま。○意…思い。○転…ますます。○迷…悲しみ悼む。○山城…山あいの町、柳州を指す。○過雨…通り雨。

（参考文献）

『柳宗元詩選』

★ 與浩初上人

浩初上人に与う

唐 柳宗元

海畔尖山似劒鉞

海畔の尖山 劒鉞に似たり

秋來處處割愁腸

秋來 処々 愁腸を割る

若爲化作身千億

若爲して化し 身を千億と作し

散上峰頭望故郷

散じて 峰頭に上りて 故郷を望まん

【語釈】

○浩初上人：覃州（湖南省長沙）の人。僧で柳宗元の知り合い。○尖山：尖った山。○劒鉞：劒の切っ先。○秋來：秋になってから。○愁腸：痛ましい心。○若爲：いかんして、どのようにして。

（参考文献）

『柳宗元詩選』

★ 京宿於都亭有懷續來諸君子

唐 劉禹錫

京に赴き都亭に宿す続來の諸君子を懷う有り

雷雨湘江起臥龍

雷雨 湘江 臥竜を起す

武陵樵客躡仙蹤

武陵の樵客 仙蹤を躡む

十年楚水楓林下

十年 楚水 楓林の下

今夜初聞長樂鐘

今夜 初めて聞く 長樂の鐘

【語釈】

○元和甲午歲：西暦814年。○江湖：長江と湘江の地方。○逐客：地方に左遷された人。○武陵：湖南省常德市。○續來：続いてやってくる。○湘江：洞庭湖に注ぐ湖南省最大の河川。○臥龍：雌伏して世に出ていない人材。○樵客：樵のように世に出ない人。○仙蹤：京に召された者の通る道。○楚水：湖北省・湖南省の河川。○長樂：宮殿。

★秋思

秋思

唐 張籍

洛陽城裏見秋風

洛陽城裏 秋風を見る

欲作家書意萬重

家書を作らんと欲すれば 意 万重

復恐匆匆說不盡

復た恐る 匆匆 説きて尽さざるを

行人臨發又開封

行人 発するに臨みて 又た封を開く

【語釈】

○城裏：城壁に囲まれた市街の中。○家書：家族へあてた手紙。○意万重：「あれも書きたい、これも書きたい」と、思いが幾重にも重なること。○匆匆：慌ただしいさま。○行人：飛脚。

（参考文献） 『唐詩選』

★感春

春に感ず

唐 張籍

遠客悠悠多病身

遠客 悠悠 多病の身

謝家池上又逢春

家を謝して 池上 又た春に逢う

明年各自東西去

明年 各自 東西に去り

此地看花是別人

此地 花を見るは 是れ 別人ならん

【語釈】

○遠客：故郷を遠く離れた旅人。○悠悠：うれえるさま。○謝家：家を出る。池上：池のほとり。

（参考文献） 『三体詩』

★ 重陽日至峽道

重陽の日 峽道に至る

唐 張籍

無限青山行已盡

限り無き青山行きて已に尽き

迴看忽覺遠離家

迴看すれば忽ち覚ゆ 遠く家を離るるを

登高欲飲重陽酒

高きに登りて飲まんと欲す 重陽の酒

山菊今朝未有花

山菊今朝 未だ花有らず

【語釈】

○重陽日：旧曆九月九日、重陽の節句。○峽道：峽州（湖北省宜昌市）の道。○迴看：振り返って見る。○転句：重陽の節句には高所に登って菊酒を飲む習慣がある。

★ 邯鄲冬至夜思家

邯鄲の冬至の夜 家を思う

唐 白居易

邯鄲驛裏逢冬至

邯鄲驛裏 冬至に逢う

抱膝燈前影伴身

膝を抱きて 灯前影身に伴う

想得家中夜深坐

想い得たり 家中夜深けて坐し

還應說著遠行人

還た 応に 遠行の人を説著すべし

【語釈】

○邯鄲：河北省邯鄲市。○驛：宿場。○家中：故郷の家族。○應：「まさにしすべし」と読み、「きつとくしてゐるに違いない」の意。○説著：語る。著は成り行きを示す接尾語。○遠行人：故郷を遠く離れた旅人、作者。

（参考文献）『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★宿桐廬館同崔存度醉後作

唐 白居易

桐廬館とうろかんに宿し 崔存度さいそんどと共に醉後ともに作る

江海漂漂共旅遊

江海ひょうひょう漂々として 共に旅遊し

一尊相勸散窮愁

一尊いっそん相勸めて 窮愁きゆうしゆうを散す

夜深醒後愁還在

夜深すいごくして 醒後 愁な還お在り

雨滴梧桐山館秋

雨は梧桐ごとうに滴る 山館の秋

【語釈】

○桐廬館：浙江省桐廬県にある館。○崔存度：不祥。○江海：長江と東海。○漂漂：ただようさま。○旅遊：旅に遊ぶ。○窮愁：窮迫の愁い。○還：やはり。当時の俗語。○梧桐：あおぎり。

（参考文献） 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★江行

江行

唐 白居易

青草湖中萬里程

青草湖せいそうこ中 万里の程

黃梅雨裏一人行

黃梅雨裏かうばいうり 一人行ひとり

愁見灘頭夜泊處

愁い見る 灘頭だんとう 夜泊の処

風翻暗浪打船聲

風は暗浪あんろうを翻えして 船を打つ声

【語釈】

○青草湖：湖南省岳陽県の南にある湖。○黃梅雨：さみだれ。○灘頭：早瀬。

（参考文献） 『新釈漢文大系 十一』

★ 箬峴東池

箬峴の東池

唐 白居易

箬峴亭東有小池

箬峴亭の東に小池有り

早荷新荇綠參差

早荷新荇綠參差たり

中宵把火行人發

中宵火を把りて行人発すれば

驚起雙栖白鷺鷥

驚起す双栖の白鷺鷥

【語釈】

○箬峴：箬峴亭、不祥。○早荷：新芽を出した蓮。○新荇：新芽を出したアサザ。○參差：不揃いなさま。○中宵：夜中。○行人：旅人、作者自身。○雙栖：つがい。○白鷺鷥：白鷺。

〔参考文献〕

『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 登崖州城作

崖州城に登りて作る

唐 李德裕

獨上高樓望帝京

独り高樓に上りて帝京を望めば

鳥飛猶是半年程

鳥飛び猶お是れ半年の程

青山似欲留人住

青山人を留めて住ましめんと欲するに似て

百匝千遭遶郡城

百匝千遭郡城を遶る

せんぐう

【語釈】

○崖州城：海南省海口市琼山区。○帝京：京城。長安。○百匝：多くの巡り。○千遭：多くの周。

★ 再宿武關

武關に再宿す

唐 李涉

遠別秦城萬里遊
亂山高下入商州
關門不鎖寒溪水
一夜潺湲送客愁

遠く秦城に別れて 万里に遊ぶ
乱山 高下 商州に入る
関門 鎖さず 寒溪の水
一夜 潺湲 客愁を送る

【語釈】

○武關：陝西省商南県。○秦城：長安。○商州：陝西省の地名。○關門：関所の門。○潺湲：水の流れるさま。さらさら。○客愁：旅の愁い。
（参考文献）『三体詩』

★ 晚泊潤州聞角

晩に潤州に泊し角を聞く

唐 李涉

孤城吹角水茫茫
曲引邊聲怨思長
驚起暮天沙上鴈
海門斜去兩三行

孤城 角を吹き 水 茫茫 たり
曲は 辺声を引 き 怨思 長し
驚起す 暮天 沙上の 鴈
海門 斜めに去る 兩三行

【語釈】

○潤州：江蘇省鎮江市。○角：角笛。○茫茫：膨大で広々したさま。○邊聲：角笛等の音声。○怨思：恨めしい思い。○驚起：驚いて飛び立つ。○海門：川の海への出口。○兩三行：二三列。

★ 竹枝詞

竹枝詞 ちくしし

唐 李涉

十二峰頭月欲低

十二峰頭月低からんと欲す

空濤灘上子規啼

空濤灘上 くうらいたんじょう 子規啼く

孤舟一夜東歸客

孤舟 かく 一夜東歸の客

泣向春風憶建溪

泣いて春風に向つて 建溪 けんけい を憶う

【語釈】

○竹枝詞：劉禹錫が左遷されていたときに土地の民謡をもとに作った詩の形態、男女の情愛や土地の風俗を詠う。○十二峰：不確定。○空濤灘：不祥。○建溪：福建省南平市建溪。

★ 郵亭殘花

郵亭の殘花

唐 張祜

雲暗山横日欲斜

雲暗く山横たわりて 日斜めならんと欲す

郵亭下馬對殘花

郵亭 馬より下りて 殘花に対す

自從身逐西征府

身 西征府を逐 お いてより

每到花時不在家

花時 かじ に到る毎 ごと に 家に在らず

【語釈】

○郵亭：郵便物の中継所。○殘花：散り残っている花。○自從：「より」と読み、「〜以來」の意。○西征府：不祥。軍務の役所？○花時：花の盛りの時。

★瓜洲聞曉角

瓜洲にて曉角を聞く

唐 張祜

寒耿稀星照碧霄

寒耿 稀星 碧霄を照す

月樓吹角夜江遙

月樓 角を吹き 夜江遙なり

五更人起煙霜靜

五更人 起きて 煙霜靜なり

一曲殘聲送落潮

一曲の殘聲 落潮を送る

【語釈】

○瓜洲：江蘇省邗江県南部。○曉角：曉を告げる角笛。○寒耿：寒々とした光。○碧霄：青空。○角：角笛。○五更：夜明け方。○煙霜：朝靄と霜。○落潮：引き潮。

★夜宿湓浦逢崔昇

夜湓浦に宿し崔昇に逢う

唐 張祜

江流不動月西沈

江流 動かず 月西に沈む

南北行人萬里心

南北 行人 万里の心

況是相逢鴈天夕

況や是れ 相逢う 鴈天の夕

星河寥落水雲深

星河 寥落して 水雲深し

【語釈】

○湓浦：江西省九江市湓浦。○崔昇：博陵安平の人。尚書左丞に至る。○行人：旅人。○鴈天：秋天。○星河：銀河。○寥落：星などの少ないさま。

★宿嘉陵驛

嘉陵かりようえき驛に宿す

唐 雍陶

離思茫茫正值秋

離思ぼうぼう 茫茫 正に秋に値あう

每因風景卻生愁

毎つねに 風景に因り 却かえつて愁を生ず

今宵難作刀州夢

今宵こんしやう 作し難し 刀州の夢

月色江聲共一樓

月色 江聲 共に一樓

【語釈】

○嘉陵驛：嘉陵江（四川省を北から南に縦断し、重慶で長江に注ぐ川）にある宿場。○離思：遠い故郷を偲ぶ気持。○茫茫：果てしなく広いさま。○値：会う。○因：親しむ。○刀州：四川省広元県。

（参考文献）『三体詩』『和漢名詞選類評釈』

★峽中行

峽中きやうちゆうこう行

唐 雍陶

兩崖開盡水回環

兩崖 開き尽して 水 回環かいかんす

一葉纔通石罅間

一葉わずか 纔わづかに通ず 石罅せきかの間

楚客莫言山勢險

楚客そかく 言う莫かれ 山勢さんせい險なりと

世人心更險於山

世人の心は 更に山よりも險なり

【語釈】

○峽中：両側の山の間。行は歌。○回環：回り廻る。○一葉：一小舟。○石罅：石の隙間。○楚客：湖南省・湖北省から来た旅人。○山勢：山の形勢。

★ 西歸出斜谷

西に帰りて斜谷を出す

唐 雍陶

行過險棧出褒斜

險棧を行過し 褒斜を出す

出盡平川似到家

平川に出尽して 家に到るに似たり

無限客愁今日散

限り無き客愁 今日散ず

馬頭初見米囊花

馬頭初めて見る 米囊花

【語釈】

○西歸：西の故郷、西都に帰る。○斜谷：褒斜谷。險棧：険しい棧橋。○平川：平らな河原。○客愁：旅の愁い。○馬頭：馬の上。○米囊花：芥子の花、蜀に多い。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 秋懷

秋懷

唐 雍陶

古槐煙薄晚鴉愁

古槐 煙薄く 晚鴉愁う

獨向黃昏立御溝

独り 黃昏に向いて 御溝に立つ

南國望中生遠思

南国望中 遠思生じ

一行新鴈去汀洲

一行の新鴈 汀洲を去る

【語釈】

○古槐：古いエンジュの樹。○煙：もや。○黃昏：たそがれ。○御溝：宮苑の堀。○南国望中：南国の眺めの中。○遠思：遠く思いをやる。○汀洲：川の中洲。

★ 漢江

漢江 かんじょう

唐 杜牧

溶溶漾漾白鷗飛

溶々 ようよう 漾々 ようよう 白鷗飛 はくおう ぶ

綠淨春深好染衣

緑淨く春深くして衣を染むるに好し

南去北來人自老

南去北來 なんきょほくらい 人 おのずか 自ら老ゆ

夕陽長送釣船歸

夕陽 せきやう 長く送る ちやうせん 釣船の帰るを

【語釈】

○漢江：陝西省西部に源を発し、東に流れ、武漢で長江に注ぐ。○溶溶：水がこんこんとたたえているさま。漾漾：水面がゆらゆら揺れているさま。○南去北來：南へ行ったり、北へ行ったりすること。

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 9』

★ 題齊安城樓

齊安 せいあん の城樓に題す

唐 杜牧

鳴軋江樓角一聲

鳴軋 おえつ たり 江樓 か の角 かく 一聲

微陽澌澌落寒汀

微陽 びやう 澌澌 れんれん として 寒汀 かんでい に落つ

不用憑闌苦回首

用いず 闌 らん に憑りて 苦 く に首 こゝろ を回すを

故鄉七十五長亭

故郷 こきやう 七十五長亭 ちやうてい

【語釈】

○齊安城：広東省恩平市。○鳴軋：悲しみに泣くような声。○江樓：川に面した高殿。○角：角笛。○微陽：かすかな日の光。○澌澌：水が日の光できらめくさま。○寒汀：寒々とした渚。○落：ここでは照らすの意。○憑欄：欄干にもたれかかる。○苦：ねんごろ、ねんいり。○廻首：顔を向ける。○故郷：住むべき所、長安。○長亭：十里毎にある宿場、七十五長亭は、七百五十里。

(参考文献)

『漢詩大系 14』

★ 初冬夜飲

初冬夜飲しよとうやいん

唐 杜牧

淮陽多病偶求歡

淮陽わいよう 多病た 偶たま 求歡た

客袖侵霜與燭盤

客袖かくしゆう 霜を侵して 燭盤しよくばんを与にす

砌下梨花一堆雪

砌下せいかの 梨花りか 一堆いちつの雪

明年誰此凭闌干

明年 誰か 此こゝに 闌干らんかんに凭る

【語釈】

○淮陽多病：漢の汲黯は武帝に遠ざけられが淮陽の太守になったが多病であった。作者自身をなぞらえる。○客袖：旅衣。○燭盤：灯を灯すための油皿。○砌下：石畳。

(参考文献) 『新釈漢文大系 詩人編 9』

★ 夜泊永樂有懷

永樂えいらくに夜泊して懷有り

唐 許渾

蓮渚愁紅蕩碧波

蓮渚れんちよ 愁紅しゆうこう 碧波へきはを蕩す

吳娃齊唱採蓮歌

吳娃ごけい 齊唱さいれんす 採蓮さいれんの歌

橫塘一別千餘里

橫塘 一別 千余里

蘆葦蕭蕭風雨多

蘆葦ろい 蕭々しやうしやう 風雨多し

【語釈】

○永樂：不祥。○蓮渚：蓮のある渚。○愁紅：風雨の後に散り残った花。○吳娃：吳の地の美女。○採蓮歌：蓮をとるときに歌う歌。○蘆葦：アシとヨシ。○蕭蕭：物寂しい様子や音の形容。

★ 題 黃花驛

黃花驛に題す

唐 薛逢

孤戍迢迢蜀路長

孤戍 迢々 蜀路長し

鳥鳴山館客思鄉

鳥鳴き 山館 客郷を思ふ

更看絶頂煙霞外

更に絶頂を看る 煙霞の外

數樹巖花照夕陽

數樹の巖花 夕陽を照らす

【語釈】

○黃花驛：陝西省寶雞市黃花驛。○孤戍：孤立した守りの寨。○迢迢：道の遙かなさま。
○山館：山の中にある宿。○煙霞：靄と霞。○巖花：岩に咲く花

★ 吳門夢故山

吳門にて故山を夢む

唐 趙嘏

心熟家山夢不迷

心熟して 家山夢 迷わず

孤峰寒遶一條溪

孤峰 寒は遶る 一条の溪

秋窗覺後情無限

秋窓 覺めて後情 限り無し

月墮館娃宮樹西

月は墮つ 館娃宮樹の西

【語釈】

○吳門：荊州。○故山・家山：故郷の山。○館娃宮：吳王夫差が西施のために作った宮殿。

★茅山道中

茅山道中ちやうざんどうちゆう

唐 趙 嘏

溪樹重重水亂流
馬嘶殘雨晚程秋
門前便是仙山路
目送歸雲不得遊

溪樹 重々 水乱れて流る
馬嘶いななき 残雨 晚程の秋
門前 便ち是れ 仙山の路
歸雲きうんを目送し 遊ぶことを得ず

【語釈】

○重重…多数が重なり合っていること。○仙山…仙人が住む山。○歸雲…行雲。○目送…目を離さずに見送る。

★西江晚泊

西江晚泊

唐 趙 嘏

江煙靄靄失西東
柳浦桑村處處同
戍鼓一聲帆影盡
水禽飛起夕陽中

江煙 靄々 西東を失す
柳浦 桑村 処々同じ
戍鼓 一声 帆影尽き
水禽 飛び起く 夕陽の中

【語釈】

○江煙…川に立つもや。○靄靄…もやの立つさま。○戍鼓…守備兵の太鼓。○水禽…水鳥。

★ 渡桑乾

桑乾を渡る

唐 賈島

客舍并州已十霜

客舍 并州 已に十霜

歸心日夜憶咸陽

歸心 日夜 咸陽を憶う

無端更渡桑乾水

端無くも 更に渡る 桑乾の水

却望并州是故郷

却って 并州を望めば 是れ故郷

【語釈】

○桑乾…桑乾河、北京の西南を流れ、永定河となる。○并州…山西省太原市。○客舎…旅ぐらしをする。○十霜…十年、「霜」は星霜。○歸心…故郷に帰りたいと思う心。○咸陽…長安の西北にあり、秦の都があった所、ここでは長安を指す。○憶…思い出す。○無端…思いがけず。○更渡…更に（桑乾河を）渡って遠方へ行く。○却…ふり返って。○望…眺める。○故郷…住むべき所。

（参考文献）『唐詩選』

★ 漫書

漫書

唐 司空圖

長擬求閑未得閑

長く閑を求めとめんと擬し 未だ閑を得ず

又勞行役出秦關

又 行役に勞して 秦関を出す

逢人漸覺鄉音異

人に逢い 漸く覚ゆ 郷音の異なるを

却恨鶯聲似故山

却って恨む 鶯声の 故山に似たるを

【語釈】

○漫書…意のむくままに作った詩。○擬…～するつもりである。○行役…官命に従う兵役。○秦關…長安。○漸…だんだんと。○郷音…郷土なまり。方言。○故山…故郷の山。

★ 出東陽道中作

東陽を出で道中の作

唐 方干

馬首寒山黛色濃

馬首の寒山 黛色濃なり

一重重盡一重重

一重重ね尽して一重々

醉醒已在他方界

酔醒むれば 已に 他方界に在り

猶憶東陽昨夜鐘

猶お憶ゆ 東陽昨夜の鐘

【語釈】

○東陽：浙江省金華市東陽市。○寒山：さむざむとした山。○黛色：青黒色。○他方界：別世界。

★ 思江南

江南を思う

唐 方干

昨日草枯今日青

昨日草枯れて 今日青し

羈人又動望鄉情

羈人又動す 望郷の情

夜來有夢登歸路

夜來夢有り 歸路に登る

不到桐廬已及明

桐廬に到らざるに 已に明に及ぶ

【語釈】

○江南：長江中下流の南岸地域。○羈人：旅人。○夜來：夜になってから。○桐廬：浙江省杭州市桐廬県。○明：夜明け。

★早行

早行はやいび

唐羅隱

雨洒江聲風又吹
 扁舟正與睡相宜
 無端戍鼓催前去
 別却青山欲曉時

雨は江聲を洒いで風又た吹く
 扁舟正に睡を与えて相宜し
 端無くも戍鼓前去を催し
 別却す青山曉ならんと欲する時

【語釈】

○早行：夜明け前に出発すること。○江聲：川の流れの音。○扁舟：小舟。○無端：思いがけず。○戍鼓：番兵の鳴らす太鼓。○前去：前進。○別却：別れる。却是完了を示す助字。

★涇溪

涇溪けいけい

唐羅隱

涇溪石險人競懼
 終歲不聞傾覆人
 却是平流無石處
 時時聞說有沈淪

涇溪石険しくして人競いて懼る
 終歲聞かず人を覆するを傾くと
 却って是れ平流石無き処
 時々聞けならく沈淪有りと

【語釈】

○涇溪：安徽省宣城市の涇溪。○終歲：年中。○平流：平静な水流。○時時：常々。○聞説：聞くところによれば。○沈淪：沈没。

★ 東蜀春晚

東蜀春晚

唐 鄭谷

無奈浮生每別離
更堪長慟送春歸
潼江水上楊花雪
偏逐孤舟繚繞飛

いかんともするな
奈 無し 浮生 毎に別離なるを
更に 長慟に堪え春の歸るを送る
潼江水上 楊花の雪
偏えに 孤舟を逐いて 繚繞して飛ぶ

【語釈】

○東蜀：四川省東部。○春晚：晩春。○無奈：どうしようもない。○浮生：浮き世。○長慟：耐えがたいほどの悲しみ。○春歸：春が過ぎ去る。○潼江水：四川省広元市潼江水。○繚繞：めぐりめぐる。

★ 江宿聞蘆管

江に宿し蘆管を聞く

唐 鄭谷

塞曲淒清楚水濱
聲聲吹出落梅春
須知風月千檣下
亦有葫蘆河畔人

塞曲 淒清 楚水の浜
声々 吹出だす 落梅の春
須く知るべし 風月 千檣の下
亦た 葫蘆河畔の人 有るを

【語釈】

○蘆管：胡笳。異民族のアシブエ。○塞曲：辺境の地の曲。○淒清：清く淒涼なさま。○楚水：湖南省・湖北省の川。○須：「すべからくすべし」と読み、「当然くすべきである」の意。○千檣：多くの帆柱。○葫蘆：雲南省の辺地。

★ 街西晚歸

街西に晩に帰る

唐 鄭 谷

御溝春水繞閑坊

御溝ぎょこうの春水 閑坊かんぼうを繞る

信馬歸來傍短牆

馬まに信せて 歸り来り 短牆たんしょうに傍う

幽榭名園臨紫陌

幽榭ゆうしゃ 名園 紫陌しはくに臨み

晚風時帶牡丹香

晚風 時に帶ぶ 牡丹の香

【語釈】

○御溝：宮苑の堀。○閑坊：静かな建物。○短牆：短い垣根。○幽榭：ひっそりした建物。○紫陌：京城郊外の道路。

★ 商山道中

商山道中しょうざんどうちゆう

唐 韓 偓

雲横峭壁水平鋪

雲は峭壁しょうへきに横わりて 水平に鋪く

渡口人家日欲晡

渡口の人家 日 晡くれんと欲す

却憶往年看粉本

却って憶う 往年 粉本ふんぼんを看るを

始知名畫有工夫

始めて知る 名画 工夫有るを

【語釈】

○商山：陝西省商洛市商山。○峭壁：そそり立った山崖。○渡口：渡し場。○晡：日暮れになる。○往年：昔年。○粉本：画稿。

★旅舎遇雨

旅舎雨に遇う

唐 杜荀鶴

月華星彩坐來收

月華 星彩 坐來に収まる

嶽色江聲暗結愁

岳色 江聲 暗に愁を結ぶ

半夜燈前十年事

半夜 灯前 十年の事

一時和雨到心頭

一時 雨に和し 心頭に到る

【語釈】

○月華：月明かり。○星彩：星々のきらめき。○坐來収：次第にうすれていく。○坐來：いながらにして。○嶽色：山の色。○江聲：川の流れる音。○半夜：夜中。○和雨：雨音にあわせて、和は調子を合わせるの意。○心頭：こころ、心中に同じ。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★焦崖閣

焦崖閣

唐 韋莊

李白曾歌蜀道難

李白 曾て歌う 蜀道難

長聞白日上青天

長く聞く 白日 青天に上ると

吾今夜過焦崖閣

吾 今夜 過ぐ 焦崖閣

始信星河在馬前

始めて信ず 星河の馬前に在るを

【語釈】

○陝西省洋県の焦崖山にあった閣。○星河：銀河。

★ 含山店夢覺作

含山店夢覺むる作

唐 韋莊

曾爲流離慣別家

曾かつて流離の爲に家に別るるに慣れ

等閑揮袂客天涯

等閑とうかんに袂たもとを揮ふるい天涯てんやに客かくたり

燈前一覺江南夢

燈前とうぜん一覺いっかく江南の夢

惆悵起來山月斜

惆悵りゆうちようす起き来れば 山月斜さんげつしゃめなり

【語釈】

○含山：浙江省湖州市含山。○等閑：おろそか。なおざり。○揮袂：意気盛んなさま。○天涯：空のはて。○客：旅人。○江南：長江中下流の南岸地域。○惆悵：嘆き悲しむ。○

★ 宿新安村歩

新安の村歩に宿す

唐 王貞白

浙浙寒流漲淺沙

浙せきせき々たる寒流せんき淺沙みなぎに漲り

月明空渚徧蘆花

月明げつめい空渚くうちよ蘆花ろかに徧し

離人偶宿孤村下

離人りじん偶たま々宿まる孤村こそんの下

永夜聞砧一兩家

永夜えいよ砧きぬたを聞く一兩家

【語釈】

○新安：不祥。○村歩：村の船泊場。○浙浙：風や鈴などの寂しい音の形容。○空渚：物影の無い渚。○離人：故郷を離れた人。○一兩家：一二軒の家。

★ 題嘉陵驛

嘉陵驛に題す

唐 張 蠟

嘉陵路悪石和泥

嘉陵路 悪く石泥に和す

行到長亭日已西

行きて長亭に到れば日已に西す

獨倚闌干正惆悵

独り闌干に倚りて正に惆悵す

海棠花裏鷓鴣啼

海棠花裏 鷓鴣啼く

【語釈】

○嘉陵驛…江西省百色市嘉陵驛。○長亭…十里毎に設けられた宿場町。○惆悵…嘆き悲しむ。

★ 關下

關下

唐 崔道融

百二山河壯帝畿

百二の山河 帝畿に壮なり

關門何事更開遲

關門何事ぞ更に開くこと遅し

應從漏却田文後

應に田文を漏却せし従り後

每度聞雞未免疑

每度雞を聞きても未だ疑を免れざるべし

【語釈】

○關下…関所の下。○帝畿…帝都長安のあたり。○關門…関所の門。○應…「まさに」すべし」と読み、「きつとくに違いない」の意。○漏却…取り逃がす。却是完了を示す助字。○田文…孟嘗君。鷄鳴狗盗で秦から逃れた。

★ 荆溪夜泊

荆溪夜泊

唐 李九齡

點點漁燈照浪清
水烟疎碧月朧明
小灘驚起鴛鴦處
一隻採蓮船過聲

点々たる漁灯 浪を照して清し
水煙 疎碧にして 月朧 明なり
小灘 鴛鴦を驚起する処
一隻の採蓮 船 過ぐる声

【語釈】

○荆溪：江蘇省常州市荆溪。○水煙：水面に立つもや。○疎碧：疎らな青緑色。○月朧：おぼろ月。○驚起：驚かせて飛び立たせる。○鴛鴦：おしどり。○採蓮船：蓮を採る船。

★ 獻主司

主司に獻ず

唐 孟賓于

那堪雨後更聞蟬
溪隔重湖路七千
憶昨故園楊柳岸
全家送上渡頭船

那んど堪ん 雨後 更に蟬を聞くに
溪は隔つ 重湖 路七千
憶昨 故園 楊柳の岸
全家 送りて 渡頭の船に上りしを

【語釈】

○主司：部署の主幹。○重湖：洞庭湖。○憶昨：昔を懐う。○故園：故郷。○渡頭：渡し場。

★ 泊秋浦

秋浦に泊す

唐 李中

葦岸風高宿鴈驚
葦岸 風高くして 宿鴈驚く
維舟特地起鄉情
舟を維ぎ 特地 鄉情を起こす
漁兒隔水吹橫笛
漁兒 水を隔てて 横笛を吹く
半夜空江月正明
半夜 空江 月に 明なり

【語釈】

○秋浦：安徽省池州市秋浦。○葦岸：アシの生えている岸。○宿鴈：宿っている雁。○特地：突然。○鄉情：故郷を思う情念。○半夜：真夜中。○空江：静寂な川。

★ 感秋書事

秋に感じ事を書す

唐 李中

宦途憔悴雪生頭
宦途 憔悴 雪頭に生ず
家計相牽未得休
家計 相牽きて 未だ休することを得ず
紅寥白蘋消息斷
紅寥 白蘋 消息断え
舊溪煙月負漁舟
旧溪 煙月 漁舟に負う

【語釈】

○宦途：仕官の道。○家計：一家の生計。○煙月：おぼろ月。

★ 泊巴東

巴東に泊す

宋 王周

偶泊巴東古縣前

偶たま、巴東はとうに泊す古縣こけんの前

宦情郷思兩綿綿

宦情くわんじやう 郷思きやうし 両つながら綿々めんめん

不堪蠟炬燒殘淚

堪たえず 蠟炬ろうきよの 殘淚ざんるいを燒くを

雨打船窓半夜天

雨は船窓を打つ 半夜の天

【語釈】

○巴東：湖北省恩施土家族苗族自治州巴東県。○宦情：仕官したいという志。○郷思：故郷を思う心。○綿綿：長く続いて絶えないさま。○蠟炬：蠟燭の火。○半夜：真夜中。

★ 宿疏陂驛

疏陂そはえき驛に宿す

宋 王周

秋染棠梨葉半紅

秋は棠梨とうりを染め 葉半ば紅なり

荊州東望草平空

荊州けいしゅう 東に望めば 草空くうに平かなり

誰知孤宦天涯意

誰か知らん 孤宦こくわん 天涯の意

微雨蕭蕭古驛中

微雨しやうしやう 蕭々 古驛こえきの中

【語釈】

○疏陂驛：不祥。○棠梨：やまなし。○荊州：湖北省一帯。○孤宦：地位の低い官吏。○天涯：空のはて。○蕭蕭：風雨、葉などの物寂しい音の形容。

(参考文献)

『唐詩選』

★旅泊

旅泊

唐 蔣吉

霜月正高鸚鵡洲

霜月正そうげつ まはに高たかし 鸚鵡洲おうむしゅう

美人清唱發紅樓

美人清唱し紅樓を発す

鄉心暗逐秋江水

鄉心きょうしん 暗く逐おう 秋江の水

直到吳山脚下流

直ちに到る 吳山ござん 脚下きゃつかの流ながれ

【語釈】

○霜月：寒い夜の月。○鸚鵡洲：湖北省武漢市西南の長江にあった中洲。○紅樓：妓女のいる楼閣。○郷心：故郷を思う心。○吳山：江蘇省一帯の山。○脚下：あしもと。

★三湘有懷

三湘懷有さんしゅうわいあり

宋 蕭靜

柳絮飛時別洛陽

柳絮 飛ぶ時 洛陽に別れ

梅花落後到三湘

梅花 落つる後 三湘に到る

世情已逐浮雲散

世情 已おに逐おう 浮雲の散ずるを

離恨空隨江水長

離恨りこん 空しく隨おう 江水の長きに

【語釈】

○三湘：洞庭湖の南側の地方。○離恨：別離の恨み苦しみ。

★ 初過漢江

初めて漢江を過ぐ

唐 崔塗

襄陽好向峴亭看

襄陽好し 峴亭に向いて看るに

人物蕭條属歲闌

人物 蕭條として 歲闌に属す

爲報習家多置酒

為に報ず 習家 多く 置酒せよと

夜來風雪過江寒

夜來の風雪 江を過ぎて寒し

【語釈】

○漢江：湖北省襄陽市漢江。○襄陽：湖北省襄陽市。○峴亭：峴山（湖北省襄陽県の南にある山）にある亭。○蕭條：もの静かなさま。○歲闌：年末。○習家：《晉書・山簡傳》襄陽の豪族であった習氏、佳園池において置酒して遊んだ。○置酒：酒宴を開く。

★ 雨夜

雨夜

宋 張詠

簾幕蕭蕭竹院深

簾幕 蕭々 竹院深し

客懷孤寂伴燈吟

客懷 孤寂 灯に伴って吟ず

無端一夜空塔雨

端無くも 一夜 空塔の雨

滴破思鄉萬里心

滴破す 郷を思う 万里の心

【語釈】

○簾幕：すだれと幕。○蕭蕭：風雨や木の葉等の物寂しい音の形容。○竹院：竹を植えた庭院。○客懷：異郷にある心情。○孤寂：孤独である寂しさ。○無端：思いがけず。何の原因もなく。○空塔：何もないきざはし。○滴破：滴で打ち破る。

★客舟夜雨

客舟夜雨

宋 趙抃

朝發溫江上處溪
小舟無寐枕頻敲
夜來雨作籬條響
恰似當年赴舉時

朝あしたに発あす 温江おんこう 上のぼる 処の 溪
小舟 寐ねむること 無なくして 枕しき 頻しばしばりに 敲たたつ
夜来 雨と作り 籬きよじよ條響ひびく
恰あたかも似にたり 当年 学おもむに 赴おもむく時

【語釈】

○客舟：旅の舟。○温江：四川省成都市温江区。○籬條：竹で作った床。○当年：昔時。

★行次壽州寄内

行きて壽州に次り内に寄す

宋 歐陽修

紫金山下水長流
嘗記當年此共遊
今夜南風吹客夢
清淮明月照孤舟

紫金山しきんざん下 水 長流す
嘗かつつて記す 当年 此に共に遊あそぶを
今夜 南風 客夢かくむを吹き
清淮せいわいの明月 孤舟を照らす

【語釈】

○壽州：安徽省淮南市鳳台县。○次：船泊。○内：妻。○紫金山：南京市の東にある鐘山。○当年：昔年。○客夢：旅先での夢。○清淮：淮南市の美称。

★琵琶亭

琵琶亭

宋

歐陽修

樂天曾謫此江邊
樂天曾て 謫たくさる 此の江辺
已に嘆天涯涕泫然
已に嘆く 天涯 涕なみだ 泫然げんぜんたるを
今日始知予罪大
今日始めて知る 予の罪 大なるを
夷陵此去更三千
夷陵いりよう 此より去りて 更に三千

【語釈】

○琵琶亭：江西省九江市にあった亭。○樂天：白居易。○天涯：空のはて。○泫然：涙がはらはらと流れ落ちるさま。○夷陵：湖北省宜昌市夷陵区。

★泥溪驛中作

泥溪驛でいけいえき中の作

宋

石介

山驛蕭條酒倦傾
山驛 蕭條しょうじょうとして 酒傾うくに倦む
嘉陵相背去無情
嘉陵かりよう 相背あいそむきて 去りて 情無し
臨流未忍輕相別
流れに臨みて 未だ忍しのばず 輕く相別す
吟聽潺湲坐到明
吟じて 潺湲せんかんを聴ききて 坐ざして明めいに到る

【語釈】

○泥溪驛：陝西省寶雞市嘉陵江の近くにある宿場町。○山驛：山の中の宿場町。○蕭條：もの静かで寂しいさま。○嘉陵：四川省南充市。○潺湲：水がさらさらと流れるさま。○明：暁。

★ 題江寧驛舍

江寧の驛舎に題す

宋 王安石

茅屋滄洲一酒旗

茅屋滄洲一酒旗

午煙孤起隔林炊

午煙孤起す 林を隔つる炊

江晴日暖蘆花轉

江晴れ日暖かくして 蘆花轉ず

恰似春風柳絮時

恰も似たり 春風柳絮の時に

【語釈】

○江寧夾口：南京にあった船着場。○茅屋：茅葺きの家。○滄洲：浜水の地。隱棲の地。
○酒旗：酒屋の目印の旗。

★ 江寧夾口

江寧夾口

宋 王安石

落帆江口月黄昏

落帆江口月黄昏

小店無燈欲閉門

小店 灯無くして 門を閉じんと欲す

側出岸沙楓半死

側出して 岸沙 楓半ば死す

繫船應有去年痕

船を繫ぎて 応に去年の痕有るべし

【語釈】

○江寧夾口：南京にあった船着場。○落帆：帆を下ろす。○黄昏：たそがれ。○側出：斜めに飛び出す。○應：「まさにすべし」と読み「きつとくであるに違いない」の意。

(参考文献) 『中国詩人撰集 二』

★ 泊船瓜洲

船を瓜洲に泊す

宋 王安石

京口瓜洲一水間

京口 瓜洲 一水の間

鍾山祇隔數重山

鍾山 祇だ隔つ 数重の山

春風又綠江南岸

春風 又た緑にす 江南の岸

明月何時照我還

明月 何れの時にか 我が還るを照さん

【語釈】

○京口：江蘇省鎮江市。○瓜洲：江蘇省邗江県南部。○鍾山：南京の東にある山。王安石の隠棲地。○江南：長江中下流の南岸地方。

(参考文献) 『宋詩選注』

★ 絶句

絶句

宋 李覲

人言落日是天涯

人は言う 落日 是れ天涯なると

望極天涯不見家

望 極めて 天涯 家を見ず

已恨碧山相掩映

已に恨む 碧山 相掩映して映じ

碧山還被暮雲遮

碧山 還って 暮雲に遮らるるを

【語釈】

○天涯：空のはて。○望極：見渡す限り。○家：故郷の家。

★ 和韓玉汝宿城北馬鋪

韓玉汝が城北の馬鋪に宿すに和す

宋 梅堯臣

暗樹秋風擺葉鳴

暗樹 秋風 葉 擺して鳴き

桃枝竹簟冷逾清

桃枝 竹簟 冷えて 逾清し

孤燈淡淡短亭客

孤燈 淡淡 短亭の客

半夜蕭蕭聞雨聲

半夜 蕭々 雨声を聞く

【語釈】

○韓玉汝：韓縝、開封雍丘（河南省杞県）の人。億子。仁宗慶曆二年（一〇四二）の進士。尚書右僕射となる。○擺：振るい動かす。○竹簟：竹で作ったたたかむしろ。○淡淡：うすい、かすかなさま。○短亭：五里毎に設けられた宿場。○半夜：真夜中。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★ 慈湖夾

慈湖夾

宋 蘇軾

此生歸路愈茫然

此の生 歸路 愈 茫然

無數青山水拍天

無數の青山水 天を拍つ

猶有小船來賣餅

猶お 小船の来つて 餅を売る有り

喜聞墟落在山前

喜んで聞く 墟落の山前に在るを

【語釈】

○慈湖夾：安徽省馬鞍山市慈湖の仮泊所。○茫然：気が抜けぼんやりしているさま。○墟落：村落。

（参考文献）

『漢詩大系 17』

★潤州除夜

潤州除夜

宋 蘇軾

寺官官小未朝參 寺官官小にして 未だ朝參せず
紅日半窗春睡酣 紅日半窓 春睡 酣なり
為報鄰雞莫驚覺 為に報ず 隣雞 驚覚する莫れと
更容殘夢到江南 更に容せ 殘夢の 江南に到るを

【語釈】

○潤州：江蘇省鎮江市。○寺官：寺院の官吏。○朝參：朝廷に参内する。○紅日：赤い朝日の光。○半窓：窓。○驚覺：驚いて目覚めさせる。○江南：長江中下流域の南側。

★淮上早發

淮上早に発す

宋 蘇軾

澹月傾雲曉角哀 澹月 雲を傾けて 曉角哀し
小風吹水碧鱗開 小風 水を吹いて 碧鱗 開く
此生定向江湖老 此の生 定めて 江湖に向いて老ゆ
默數淮中十往來 黙して数うれば 淮中 十たび往來

【語釈】

○淮上：淮水のほとり。○澹月：淡く見える月。○曉角：夜明けを告げる角笛。○碧鱗：碧色の波。○江湖：隱棲する人が住むところ。○淮中：淮水。

〔参考文献〕

『中国詩人撰集 二―6』

★ 虔州

虔州けんしゅう

宋 蘇軾

濤頭寂寞打城還

濤頭とうとう 寂寞せきばくとして 城を打って還る

章貢臺前暮靄寒

章貢台前しょうこうだいぜん 暮靄ぼあい寒し

倦客登臨無限思

倦客けんかく 登臨とうりん 限り無き思い

孤雲落日是長安

孤雲 落日 是れ長安

【語釈】

○虔州：江西省贛州市。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○章貢臺前：江西省贛州市にある台。○暮靄：夕靄。○倦客：旅に疲れた人。

★ 泊真州新河亭

真州しんしゅうの新河亭しんかていに泊す

宋 彭汝礪

鬢毛垂雪欲毵毵

鬢毛びんもう 雪を垂れて 毵々さんさんたらんと欲す

道路風波老不堪

道路の風波 老おいに堪えず

繫纜短亭聊自慰

纜ともづなを繋ぐ 短亭いさき 聊みずかか自ら慰む

青山數點見江南

青山 数点 江南に見る

【語釈】

○真州：江蘇省揚州市儀征市。○新河亭：不詳。○毵毵：毛の長いさま。○短亭：五里ごとに設けられた宿場町。○江南：長江中下流の南岸地方。

★ 里伏驛作

里伏驛りふくえきにて作る

宋 孔平仲

去家一日已思家

家を去りて 一日已に家を思う

浩渺歸期未有涯

浩渺こうひょうたる歸期 未だ涯はて有らず

滿眼春風最多恨

滿眼の春風 最も恨み多し

無言似笑小桃花

無言 笑うに似たり 小桃花

【語釈】

○里伏驛：不祥。○浩渺：広く遙かなさま。○歸期：帰ってくる日。

★ 宿濟州西門外旅舎

濟州さいしゅう西門外の旅舎に宿す

宋 晁端友

寒林殘日欲棲鳥

寒林の殘日 鳥棲すまんと欲す

壁裏青燈乍有無

壁裏の青燈 乍たちまち有無

小雨悒悒人不寐

小雨 悒いんいん々として人寐いねず

卧聽疲馬齧殘芻

卧ふして聴く 疲馬ひばの殘芻ざんすうを齧かじるを

【語釈】

○濟州：山東省濟寧市。○寒林：晩秋から冬の林。○青燈：青い光の油灯。○悒悒：奥深く静かなさま。○疲馬：疲れた馬。○殘芻：残ったまぐさ。

★舟行五絶句

舟行五絶句

宋 張耒

落景秋雲晚不開
落景 秋雲 晩に開かず
天寒古岸野船回
天寒くして 古岸 野船回る
初驚波面微瀾起
初めて驚く 波面 微瀾の起るを
已覺風前細雨來
已に覺ゆ 風前 細雨の來るを

【語釈】

○落景…夕陽。○野船…郷村の小舟。○微瀾…さざなみ。

★舟行五絶句

舟行五絶句

宋 張耒

獵獵西風秋水清
獵々たる 西風 秋水清し
野花寒草傍流生
野花 寒草 流れに傍いて生ず
沙邊水鶴待魚立
沙辺の水鶴 魚を待ちて立ち
石底暗蛩先夜鳴
石底の暗蛩 先ず夜に鳴く

【語釈】

○獵獵…風の吹く音の形容。○西風…秋風。○野花…野草の花。○寒草…枯れ草。○暗蛩…夜になくコオロギ。

★舟行五絶句

舟行五絶句

宋 張耒

渡頭風雨晚生寒

渡頭ととうの風雨 晩くれに生じて寒し

蓑笠漁翁坐釣船

蓑笠さりゆの漁翁 釣船つりぶねに坐す

爲問篷中有魚否

爲たがひに問う 篷中ほうちゆう 魚有いりや否なやと

一雙新鰾出籠鮮

一雙ひとふたの新鰾しんけい 籠かごを出だでて鮮あまなり

【語釈】

○渡頭：渡し場。○蓑笠：蓑と笠。○篷中：舟の中。○新鰾：釣れたての鰾。

★舟行五絶句

舟行五絶句

宋 張耒

天寒野店斷人行

天寒てんかんくして 野店やてん 人行じんこう断とゆ

晚繫孤舟浪未平

晩つなに繫つなぐ孤舟 浪 未なだ平なかならず

半夜西風驚客夢

半夜はんやの西風 客夢かくむを驚おどかし

卧聽寒雨到天明

卧ふして 寒雨かんうを聴きき 天明てんめいに到いたる

【語釈】

○野店：村の茶店。○人行：道行く人。○西風：秋風。○驚客夢：旅先での夢を覚めさせる。○天明：夜明け。

★舟行五絶句

舟行五絶句

宋 張耒

渡頭烟雨欲昏天
渡頭の煙雨 昏んと欲する天
灣畔枯桑繫客船
灣畔の枯桑に 客船を繫ぐ
風打篷窗秋浪急
風は篷窓を打ち 秋浪急なり
一杯寒酒夜深眠
一杯の寒酒 夜深く眠る

【語釈】

○渡頭：渡し場。○烟雨：霧雨。○枯桑：枯れた桑の木。○客船：旅の舟。○篷窗：舟の窓。

★雨中題壁

雨中壁に題す

宋 張耒

去年此日泊瓜州
去年 此の日 瓜州に泊す
衰柳蕭蕭繫客舟
衰柳 蕭々 客舟を繫ぐ
白髮天涯歎流落
白髮 天涯 流落を歎ず
今年對雨古宣州
今年 雨に對す 古宣州

【語釈】

○瓜州：甘肅省敦煌市。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○客舟：旅の舟。○天涯：空の果ての地。○流落：落ちぶれて流浪すること。○宣州：安徽省宣城市宣州区。

★ 遇赦北歸

赦しやに遇あいて北きたに歸かへる

宋

晁補之

山猶故險水猶奔
無復前年濺淚痕
自是人心隨境別
櫓聲帆色盡君恩

山猶やまお故こに險けんにして水猶みづお奔はしる
復またた前年ぜんねん 涙なみだを濺そそぐ痕あと無し
自おのずかは是こゝれ人心じんしん 境きやうに随まつて別わかり
櫓ろ声せい 帆ふ色しき 尽つく君恩きんおん

【語釈】

○赦…大赦。○境…境遇。○君恩…皇帝の恩。

★ 題穀熟驛舍

穀熟の驛舍えきせに題だいす

宋

晁補之

驛後新籬接短牆
枯荷衰柳小池塘
倦游到此忘行路
徙倚軒窗看夕陽

驛えき後のちの新籬しんり 短牆たんしょうに接つす
枯荷こか 衰柳すいりゅう 小池塘せうていとう
倦游けんゆう 此こゝに到いたりて行路ぎやうろを忘わする
徙いた倚ずらに軒窗けんそうに倚より 夕陽せきやうを看みる

【語釈】

○穀熟…不祥。○新籬…新しいまがき。○短牆…短いかき。○枯荷…枯れた蓮の葉。○小池塘…小さな池。○倦游…旅の疲れ。○軒窗…家の窓。

★ 登岳陽樓望君山

岳陽樓に登りて君山を望む

宋 黃庭堅

投荒萬死鬢毛斑

荒に投ぜられて万死鬢毛斑なり

生出瞿塘灩澦關

生きて出る瞿塘灩澦の関

未到江南先一笑

未だ江南に到らざるに先ず一笑す

岳陽樓上對君山

岳陽樓上君山に對す

【語釈】

○岳陽樓：湖南省岳陽市の西門の樓。○君山：洞庭湖中にある山。○荒：辺境の地。
○投：流される。○万死：何度も死ぬ思いをすること。○鬢毛：鬢びんの毛。○斑：白髪
まじりになること。○生出：生きて通り抜けることができた。○瞿塘：瞿塘峡。長江の三
峡の一つ、船の難所。○灩澦関：灩澦堆の難関、瞿塘峡の入り口にある大暗礁長江最大
の難所、「関」は難関の意であるが、ここでは関所の意も懸けている。○江南：ここで
は作者の故郷、分寧（江西省修水県）を指す。○一笑：ちよつと笑うこと。

〔参考文献〕 『中国詩人撰集 二―七』

★ 曉行

曉行

宋 晁沖之

老去功名意轉疏

老去りて功名に意轉た疏なり

獨騎瘦馬取長途

独り瘦馬に騎りて長途を取る

孤村到曉猶燈火

孤村 曉に到れば猶お灯火

知有人家夜讀書

知んぬ 人家に夜讀書する有るを

【語釈】

○轉：いよいよ。○疏：心がうとく熱心で無いこと。○長途：長旅。

★ 泊吳門

吳門に泊す

宋 寇國寶

黄葉西陂水漫流

黄葉 西陂 水 漫流す

籬條風急滯扁舟

籬條 風急にして 扁舟 滯る

夕陽暝色來千里

夕陽の 暝色 千里に 來り

人語鷄聲共一丘

人語 鷄聲 共に一丘

【語釈】

○吳門…不祥。○西陂…西の隄。○漫流…意のままに流れる。○籬條…粗い竹で作った座席。○扁舟…小舟。○暝色…暗い色。

★ 越州道中

越州道中

宋 李光

晩潮落盡水涓涓

晩潮 落ち尽くして 水涓々たり

柳老秧齊過禁煙

柳 老い 秧 齊しくして 禁煙を 過ぐ

十里人家鷄犬靜

十里の 人家 鷄犬 静なり

竹扉斜掩護蠶眠

竹扉 斜めに 掩い 蠶の 眠るを 護る

【語釈】

○越州…江蘇省紹興市。○涓涓…水がチヨロチヨロと流れるさま。○禁煙…寒食節。冬至から百五日目。○蠶…かいこ。

★ 吳門道中

吳門道中

宋 孫覲

小橋分道各東西
寂寂松牖半掩蓬
客夢悠揚殘酒裏
一池荷葉雨聲中

小橋道を分ち 各東西
寂々たる松牖 半ば蓬を掩う
客夢 悠揚す 残酒の裏
一池の荷葉 雨声の中

【語釈】

○吳門…江蘇省蘇州市。○寂寂…寂しくて静かなさま。○松牖…書齋の窓。○客夢…旅先での夢。○悠揚…遠くかすかなさま。○荷葉…蓮の葉。

★ 吳門道中

吳門道中

宋 孫覲

數間茅屋水邊村
楊柳依依綠映門
渡口喚船人獨立
一簑煙雨濕黃昏

數間の茅屋 水辺の村
楊柳 依依として 緑門に映ず
渡口 船を喚び 人 独り立つ
一簑の煙雨 黄昏を湿す

【語釈】

○吳門…江蘇省蘇州市。○數間…間口數間。○茅屋…茅葺き家。○依依…細くなよなよし
ている。○渡口…渡し場。○一簑…ひとしきりの。○煙雨…霧雨。

★ 吳門道中

吳門道中

宋 孫覲

暮色炊烟竹裏村

暮色 炊煙 竹裏の村

人家深閉雨中門

人家 深く閉ざす 雨中の門

數聲寒鳥不知處

數聲の寒鳥 処を知らず

千丈藤蘿古木昏

千丈の藤蘿 古木昏し

【語釈】

○吳門…江蘇省蘇州市。○寒鳥…冬の鳥。○藤蘿…紫藤の通称。

★ 絶句

絶句

宋 譚知柔

漫言無處覓歸田

漫に言う 帰田を覓むるに 処無しと

江北江南水拍天

江北 江南 水 天を拍つ

抖數十年塵上夢

抖數 十年 塵上の夢

秋風吹上釣魚船

秋風 吹き上ぐ 釣魚の船

【語釈】

○漫…なんとなく。○歸田…官職を辞め、故郷に帰って農作業をすること。○江北江南…長江中下流の北側と南側の地方。○抖數…求める。○塵上…俗世間。

★ 襄邑道中

襄邑道中

宋 陳與義

飛花兩岸照船紅
百里榆堤半日風
不知雲與我俱東

飛花 兩岸 船を照らして紅なり
百里の榆堤 半日の風
臥して見る 満天 雲の動かざるを
知らず 雲と我と 俱に東するを

【語釈】

○襄邑…不確定。○榆堤…ニレの木を植えた隄。

★ 早行

早行

宋 陳與義

露侵駝褐曉寒輕
星斗闌干分外明
寂寞小橋和夢過
稻田深處草蟲鳴

露は駝褐を侵し 曉寒輕し
星斗 闌干 分外に 明なり
寂寞たる小橋 夢に和して過ぎ
稻田 深き処 草虫鳴く

【語釈】

○早行…朝早く出発すること。○駝褐…駱駝の毛で作った衣服。○曉寒…曉の寒さ。○星斗…星。○闌干…北斗星。○分外…特別に。○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。

★延平道中

延平道中

宋 朱 棹

一溪春漲午晴初
日透波光綠浸裾
却憶孤山山下路
石橋清澈看叉魚

一溪春は漲る 午晴の初
日は透して 波光 緑裾に浸む
却って憶う 孤山 山下の路
石橋 清澈 魚の叉するを見る

【語釈】

○延平…福建省南平市。○孤山…浙江省杭州市西湖の中にある山、林逋の隠棲地。○清澈…清浄で透き通っていること。○又…交叉する。

★舟次龍湖

舟 龍湖に次る

宋 朱 棹

山雨疎疎心又驚
起瞻天色斗微明
他年一枕江關夢
知憶蓬窗此夜聲

山雨 疎々として 心 又驚く
起きて 天色を瞻れば 斗 微明なり
他年 一枕 江関の夢
知んぬ 蓬窓 此の夜の声を憶ゆを

【語釈】

○次…舟宿りする。○龍湖…江蘇省無錫市にある湖。○疎疎…まばらなさま。○斗…北斗星。○天色…空の様子。○他年…昔。○一枕…一眠り。○江關…四川省重慶市瞿塘峽。○蓬窗…舟の窓。

★陽關詞

陽關詞

宋 陳剛中

客舍休悲柳色新
客舍 悲むを休め 柳色新なり
東西南北一般春
東西南北 一般の春
若知四海皆兄弟
若し 四海 皆 兄弟なるを知らば
何處相逢非故人
何れの処に相逢うも 故人に非ざらん

【語釈】

○陽關詞：王維の「陽關三疊」にあわせて作った詩。○客舍：旅館。○一般：すべて。○四海：全世界。○故人：昔からの友人。

★白沙夜聞灘聲

白沙夜灘聲を聞く

宋 黄公度

錯認松風萬壑傳
錯つて認む 松風 万壑伝うと
又如急雨碎池蓮
又急雨の池蓮を碎くが如し
青燈孤館元無寐
青灯 孤館 元 寐る無し
况復溪聲到枕邊
况や復た 溪声の枕辺に到るをや

【語釈】

○灘聲：早瀬の音。○萬壑：多くの山。○池蓮：池の蓮。○青燈：青い色の油灯。

★古博嶺

古博嶺こはくれい

宋 姚寬

北風獵獵駕寒雲

北風りょうりょう獵々として寒雲を駕がす

低壓平川路欲昏

平川を低圧して路く昏からんと欲す

人馬忽驚俱辟易

人馬忽ち驚へきえきき俱に辟易

一聲乳虎下前村

一声の乳虎前村に下る

【語釈】

○古博嶺…不祥。○獵獵…風の吹く音。○駕…あやつる。○平川…広く平坦な地。○辟易…たじろぐ。○乳虎…生まれたばかりの虎の子。

★江上

江上

宋 劉子翬

江上潮來浪薄天

江上うしおきた潮來つて浪天に薄し

隔江寒樹晚生煙

江を隔つる寒樹ぼん晩に煙を生ず

北風三日無人渡

北風三日人の渡る無く

寂寞沙頭一簇船

寂寞せきばくたる沙頭さとう一簇いちぞくの船

【語釈】

○寒樹…寒天の樹木。○煙…もや。○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。○沙頭…砂洲のほとり。○一簇…一群。

★ 讀林擇之二詩有感

林択の詩を讀みて感有り

宋 朱熹

竹輿傲兀聽嘔啞

竹輿ちくよ傲兀ごうこつ嘔啞おうあを聴く

合眼歸心已到家

眼を合あすれば歸心きしん已に家に到る

遊子上堂慈母笑

遊子ゆうし堂に上りて慈母笑う

豈知行李尚天涯

豈に知らんや行李尚お天涯なるを

【語釈】

○林擇：林用中。福建省福州古田の人。終身仕官せず。○竹輿：竹の輿。○傲兀：高ぶつて屈しないさま。○嘔啞：小兒の語る声。○歸心：故郷に帰りたいと思う心。○遊子：旅人。○行李：旅人の持つ荷物。○天涯：空の果ての地。

★ 疎山道中

疎山道中そざんみちちゆう

宋 曾季狸

江南九月未飛霜

江南 九月 未だ霜を飛ばさず

木葉蕭蕭已半黃

木葉しやうしやう蕭々 已に半ば黄なり

行遍疎山山下路

行きて遍あまねし疎山そざん山下の路

滿山唯有桂花香

山に満ち唯だ桂花の香有るのみ

【語釈】

○疎山：江西省撫州市疏山。○江南：長江中下流の南岸地方。○蕭蕭：物寂しい様子や音の形容。

★ 泊釣臺

釣台に泊す

宋 毛 升

洲渚寒雲薄暮天

洲渚しゅうちよの寒雲 薄暮の天

蕭蕭燈火落帆邊

蕭々しょうしょうたる灯火 落帆の辺ほとり

嚴陵灘下孤舟遠

嚴陵灘下げんりやたんか 孤舟遠し

一夜歸心聽雨眠

一夜歸心 雨を聴きて眠る

【語釈】

○釣臺：嚴陵釣台。東漢の嚴光（光武帝の幼なじみ）が光武帝から召されたのを断つて、釣りをしていたところ。浙江省桐廬市の西にある。○洲渚：中洲。○蕭蕭：物寂しい様子や音の形容。○落帆：帆を下ろした舟。○嚴陵灘：嚴陵釣台の近くにある早瀬。○歸心：故郷に帰りたいという心。

★ 龍州

竜州りゅうしゅう

宋 邵稽仲

峭壁陰森古木稠

峭壁しょうへき 陰森いんしんとして古木稠しほむ

亂山深處指龍州

乱山 深き処 竜州りゅうしゅうを指ゆびさす

猿啼鴉噪溪雲暮

猿啼さわき鴉さわ噪ぎぎて 溪雲暮けいうんくる

不是愁人亦自愁

是れ愁人ならずも 亦また自おのずから愁うう

【語釈】

○龍州：江西省崇左市龍州県。○峭壁：険しい岩壁。○陰森：薄暗く物寂しいさま。

★舟行

舟行

宋 方汝疆

平林漠漠暝烟齊
竹樹蕭森望眼迷
相喚幾聲何處雁
斷霞明處一行低

平林 漠々 暝煙齊し
竹樹 蕭森 望眼迷う
相喚ぶ 幾声 何れの処の雁ぞ
断霞 明かなる処 一行低し

【語釈】

○平林：平原の林。○漠漠：ひろびろとして果てしないさま。○暝烟：夕方の霞霧。○蕭森：樹木が多いさま。○望眼：遠くを見る眼。○断霞：断片的な霞。

★浙江小磯春日

浙江小磯の春日

宋 范成大

客裏無人共一杯
故園桃李爲誰開
春潮不管天涯恨
更捲西興暮雨來

客裏 人無く 共に一杯
故園の桃李 誰が為に開く
春潮は管せず 天涯の恨み
更に 西興の暮雨を捲いて来る

【語釈】

○浙江：錢唐江。○客裏：旅の途中。○故園：故郷。○天涯：空の果ての地。○西興：浙江省蕭山市西北にある渡し場。

★宿閩門

閩門に宿す

宋 范成大

五更潮落水鳴船
霜送新寒到枕邊
報道霧收紅日上
野翁猶蓋短篷眠

五更潮落水船に鳴る
霜は新寒を送りて 枕辺に到る
報道す霧収まりて 紅日上ると
野翁猶お短篷を蓋いて眠る

【語釈】

○閩門：江蘇省蘇州市城西の門。○五更：夜明け方。○報道：告知する。○野翁：田舎の老人。○短篷：小舟。

★將赴建康出城

將に建康に赴かんとして城を出ず

宋 范成大

牒訴繽紛塞甕天
經年癡坐兩三椽
出門納納乾坤大
依舊青山繞畫船

牒訴繽紛甕天を塞ぐ
經年痴坐 兩三椽
門を出で納々 乾坤大なり
旧に依る青山 画船を繞る

【語釈】

○建康：南京。○牒訴：訴状。○繽紛：非常に多いさま。○甕天：非常に狭い地方。○癡坐：變動のないこと。○兩三椽：二三軒。○納納：物を大きく包み入れるさま。○乾坤：天地。○依舊：昔のまま。○画船：絵で飾った船。

★ 餘杭道中

余杭道中

宋 范成大

村媪羣觀笑老翁

村媪そんおち 群がり觀て老翁を笑う

宦途何處苦龍鍾

宦途かんと 何れの処か 苦はなはだだ龍鍾りゆうしよう

霜毛瘦骨猶千里

霜毛 瘦骨 猶お千里

少見行人似箇儂

見ることまれ少なり 行人の箇儂に似たるを

【語釈】

○餘杭：浙江省杭州市。○村媪：村の老婆。○宦途：官吏の次席や昇降。○龍鍾：老い衰えること。○行人：旅人。○箇儂：彼。

★ 阻風泊鍾家村

風に阻まれ鍾家村に泊す

宋 楊萬里

南游端爲看山來

南游 端はたに山を看る為に来る

過眼匆匆首屢回

眼を過ぎて 匆匆そうそう 首 屢回るかいす

不是阻風船不進

是れ 風に阻まれて 船の進まざるにはあらず

何緣看盡萬崔嵬

何に緣よりてか 看尽ばんじんさん 万崔嵬ばんさいかい

【語釈】

○鍾家村：不祥。○南游：南方への旅行。○匆匆：そわそわして落ち着かないさま。○屢回：しばしば廻らす。○萬崔嵬：多くの石のある山。

★舟過謝潭

舟謝潭を過ぐ

宋 楊萬里

夾江百里沒人家
江を夾みて百里人家に没す
最苦江流曲更斜
最も苦しむ江流曲りて更に斜なるに
嶺草已青今歲葉
嶺草已に青し今歳の葉
岸蘆猶白去年花
岸蘆猶お白し去年の花

【語釈】

○謝潭…不祥。○嶺草…嶺に生えている草。○岸蘆…岸に生えているアシ。

★明發瀧頭

明に瀧頭を發す

宋 楊萬里

黒甜偏至五更濃
黒甜偏く五更に至りて濃なり
強起侵星敢小慵
強て起きて星を侵して敢えて小も慵からんや
輸與山雲能樣嬾
輸与す山雲能く様に嬾なる
日高猶宿夜來峰
日高くして猶お宿す夜來の峰

【語釈】

○瀧頭…不祥。○黒甜…ぐっすり眠る。○五更…夜明け。○侵星…曉を払う。○輸與…致し与える。

★夜泊鴉磯

夜 鴉磯に泊す

宋 楊萬里

峽中盡日没人煙
船泊鴉磯也有村
已被子規酸骨死
今宵第一莫啼猿

峽中 尽日 人煙没す
船 鴉磯に泊して 也た村に有り
已に 子規に酸骨し 死せらる
今宵 第一 猿を啼かしむ莫れ

【語釈】

○鴉磯…不祥。○盡日…一日中。○人煙…人家の炊煙。○子規…ホトトギス。○酸骨…憤恨、悲傷の形容。○第一…最も重要なこと。

★早行鳴山

早に鳴山に行く

宋 楊萬里

淡淡清霜薄薄冰
曉寒端爲作新晴
殷勤喚醒梅花睡
枝上春禽一兩聲

淡淡たる清霜 薄々の氷
曉寒 端に為に 新晴を作す
殷勤に 喚び醒ます 梅花の睡るを
枝上の春禽 一両の声

【語釈】

○早…朝早く。鳴山…浙江省温州市鳴山。○淡淡…薄い。かすかなさま。○薄薄…薄いさま。○新晴…雨後の晴れ。○春禽…春の鳥。○一両…ひとつふたつ。

★ 萬安道中書事

萬安道中事を書す

宋 楊萬里

携家滿路踏春華
家を携えて 滿路 春華を踏む
兒女欣欣不憶家
兒女 欣々 家を憶わず
騎吏也忘行役苦
騎吏 也た 行役の苦を忘れ
一人人插一枝花
一人人 挿む 一枝の花

【語釈】

○萬安…海南省直轄県級行政区画萬寧市。○携家…家を離れる。○春華…春の花。○欣欣…喜ぶさま。○騎吏…宿場の役人。○行役…旅の仕事。○一人人…ひとりひとり。

★ 上章戴灘

章戴灘に上る

宋 楊萬里

脱巾枕手仰哦詩
巾を脱し 手を枕し 仰いで 詩を哦す
醉上諸灘總不知
酔いて 諸灘に上り 総て 知らず
回看他船上灘苦
他船の 灘に上る 苦を 回看して
方知他看我船時
方に知る 他の 我が船を 看る時

【語釈】

○章戴灘…不祥。○哦…歌う。○諸灘…いろいろな早瀬。○回看…振り返って見る。

★之官毗陵舟行阻風宿 官に毗陵に之き舟行風に阻まれて宿す 宋 楊萬里

蟲聲兩岸不堪聞 虫声 兩岸 聞くに堪えず

把燭銷愁且一尊 燭を把り 愁を銷し 且く一尊

誰宿此船愁似我 誰か 此の船に宿し 愁 我に似ん

船篷猶帶燭煙痕 船篷 猶お帶ぶ 燭煙の痕

【語釈】

○毗陵…江蘇省常州市。○一尊…酒を飲む。○船篷…船の窓。

★之官毗陵舟行阻風宿 官に毗陵に之き舟行風に阻まれて宿す 宋 楊萬里

千里江行一日程 千里 江行 一日の程

出山似被北風噴 山を出で 北風に噴らるるに似る

東窗水影西窗月 東窓の水影 西窓の月

併照船中不睡人 併せて照らす 船中 睡らざる人

【語釈】

○毗陵…江蘇省常州市。

★ 憩分水嶺望郷

分水嶺に憩い郷を望む

宋 楊萬里

嶺頭泉眼一涓流

嶺頭の泉眼 一涓流

南入虔州北吉州

南のかた虔州に入り 北は吉州

只隔中間些子地

只だ隔つ 中間 些子の地

水聲滴作兩郷愁

水声 滴り 兩郷の愁いを作す

【語釈】

○嶺頭：山頂。○泉眼：泉の湧き出る洞穴。○涓流：微少な水流。○虔州：江西省贛州市。○吉州：江西省吉安市。○些子：不祥。

★ 曉過大臯渡

曉に大臯渡を過ぐ

宋 楊萬里

霧外江山看不真

霧外の江山 看れども真ならず

只憑雞犬認前村

只だ 雞犬に憑りて 前村を認む

渡船滿板霜如雪

渡船 滿板 霜雪の如し

印我青鞋第一痕

印す 我が青鞋 第一の痕

【語釈】

○大臯渡：不祥。○滿板：板の上一面。○青鞋：わらじ。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 過沙頭

沙頭を過ぐ

宋 楊萬里

過了沙頭漸有村
沙頭を過了して漸く村有り
地平江闊氣清温
地平かに江闊くして氣清温なり
暗潮已到無人會
暗潮已に到り人の会する無く
只有篙師識水痕
只だ篙師の水痕を識る有るのみ

【語釈】

○過了：過ぎ去る。○沙頭：砂洲のあたり。○漸：次第に。段々と。○暗潮：小潮。○篙師：船頭。○水痕：潮の引いたあとの印。

★ 聞雁

雁を聞く

宋 陸游

過盡梅花把酒稀
梅花を過ごし尽くして酒を把ること稀に
熏籠香冷換春衣
熏籠香冷えて春衣を換う
秦關漢苑無消息
秦関漢苑消息無し
又在江南送雁歸
又江南に在って雁の歸るを送る

【語釈】

○把酒：酒を飲む。○熏籠：衣に香を炊き込めつとき使うかごのようなもの。○秦關：関中の地、長安。○漢苑：長安の西にあった漢代の上林苑。○消息：おとさた。○江南：長江中下流の見南側の地方。

(参考文献) 『漢詩大系 19』

★ 小雨極涼舟中熟睡至夕

宋 陸游

小雨極めて涼し 舟中熟睡して夕べに至る

舟中一雨掃飛蠅

舟中 一雨 飛蠅を掃う

半脱綸巾卧翠藤

半ば 綸巾を脱して 翠藤に卧す

清夢初回窗日晚

清夢 初めて回えれば 窓日晚れ

數聲柔櫓下巴陵

數聲の柔櫓 巴陵を下る

【語釈】

○飛蠅：うるさく飛び回っている蠅。○綸巾：生糸のひもを編んで作った頭巾。隱者、道士などが好んで用いる。○翠藤：青い藤を編んで作った寝台。涼しいので夏に用いられる。○清夢：すがすがしく心地よい夢。○初回：（夢から）現実に立ち返ったばかり。○柔櫓：強いて流れに逆らったりせず、穏やかにこぐ舟。

（参考文献）

『漢詩大系 19』

★ 建安遺興

建安興遣

宋 陸游

建安酒薄客愁濃

建安 酒薄く 客愁 濃し

除却哦詩事事慵

詩を哦するを 除却して 事々慵し

不許今年頭不白

許さず 今年 頭の白からざるを

城樓殘角寺樓鐘

城樓の殘角 寺樓の鐘

【語釈】

○建安：福建省南平市建瓯市。○客愁：旅の愁い。○哦：吟詠する。○除却：除く。却是助字。○殘角：止まない角笛

★ 別建安

建安けんあんに別る

宋 陸游

敲帽揚鞭晚出城
帽をかたむ敲け 鞭を揚げて 晩に城を出ず
驛亭燈火向人明
驛亭の灯火 人に向つて 明らかなり
多情葉上蕭蕭雨
多情なり 葉上ようじょう 蕭々しょうしょうたる雨
更把新涼送客行
更に新涼を把りてと 客の行くを送る

【語釈】

○建安：福建省南平市建瓯市。○驛亭：宿場町の家。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのものの寂しい形容。○新涼：初秋の爽快な気候。

★ 三峽歌

三峽歌さんさつうた

宋 陸游

十二巫山見九峰
十二巫山じゅうにふざん 九峰くほうを見し
船頭彩翠滿秋空
船頭の彩翠さいすい 秋空に満つ
朝雲暮雨渾虛語
朝雲 暮雨 渾すべて虚語
一夜猿啼明月中
一夜 猿啼く 明月の中うち

【語釈】

○三峽：長江上流、重慶市奉節県の白帝城から湖北省宜昌の南津関にかけてある峡谷。瞿塘峡・巫峡・西陵峡、古来、舟行の難所。○十二巫山：巫山には十二の峰があると云われる。○船頭：舟の舳先（「せんどう」は和語）。○彩翠：彩られた山の緑。○朝雲暮雨：巫山の巫女が楚の襄王に「朝に朝雲となり、暮れに暮雲となる」と言った故事、「高唐賦」による。

（参考文献） 『漢詩大系 19』

★東關

東關とうかん

宋 陸游

煙水蒼茫西復東
扁舟又繫柳陰中
三更酒醒殘燈在
卧聽蕭蕭雨打篷

煙水 蒼茫そうぼう 西復また東
扁舟 又た繫つなぐ 柳陰の中
三更 酒醒めて 殘灯在り
卧して聴く 蕭々しょうしょう 雨篷を打つを

【語釈】

○東關…不祥。○蒼茫…水面などの青々として果てしないさま。○扁舟…小舟。○三更…真夜中。○蕭蕭…主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★梨嶺遇雨

梨嶺りれいにて雨に遇う

宋 黄景説

黒風吹雨又黄昏
雞犬數聲何處村
身在嶺雲飛處濕
不關別淚濺成痕

黒風 雨を吹いて 又た黄昏こうこん
雞犬 數声 何れの処の村ぞ
身は 嶺雲れいうんの飛ぶ処に在りて湿うるい
関せず 別淚の 濺そそぎて痕を成すに

【語釈】

○梨嶺…不確定。○黒風…暴風。○嶺雲…嶺にかかっている曇。○別淚…別れを悲しむ涙。

★ 溪橋晚興

けいきょうばんきやう
溪橋晚興

宋 鄭協

寂寞亭基野渡邊

せきばく
寂寞たる亭基野渡の辺

春流平岸草芊芊

春流岸に平かに草芊々

一川晚照人閒立

いっせん
一川の晩照人間立ち

滿袖楊花聽杜鵑

袖に満つる楊花杜鵑を聴く

【語釈】

○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。○野渡…野辺の渡し場。○芊芊…草木が盛んに生い茂るさま。○晩照…夕陽の餘暉。○楊花…柳絮。○杜鵑…ホトトギス。

★ 晩行

ばんこう

宋 陳淵

晚煙低掃樹千重

晩煙低く掃う樹千重

一簇人家接遠空

いちさく
一簇の人家遠空に接す

日暮荒陂行客盡

日暮れて荒陂行客尽き

只尋牛迹去匆匆

只だ牛迹を尋ねて去りて匆匆

【語釈】

○晚煙…夕靄。○一簇…一群。○荒陂…荒れた隄。○行客…旅人。○牛迹…牛の通った跡。○匆匆…そわそわして落ち着かないさま。

★ 題趙秀才壁

趙秀才の壁に題す

宋 陳造

日日危亭憑曲欄

日々危亭 曲欄に憑る

幾山蒼翠擁烟鬟

幾山の蒼翠 煙鬟を擁す

連朝策馬衝雲去

連朝 馬に策し 雲を衝いて去る

盡是亭中望處山

尽く是れ 亭中望む処の山

【語釈】

○趙秀才：不祥。○危亭：高所に聳える亭。○曲欄：曲がった闌干。○蒼翠：青緑。○烟鬟：雲霧に掩われた嶺の形容。○連朝：連日。○策馬：馬を使って走行する。

★ 蕲春道中

蕲春道中

宋 張孝祥

霜淨波平水落灣

霜淨く 波平かにして 水湾に落つ

我行正在畫圖間

我 行きて 正に 画図の間に在り

簾鉤不用怕風日

簾鉤 用いず 風日を怕るるを

且看江南江北山

且く看る 江南江北の山

【語釈】

○蕲春：湖北省黃岡市蕲春県。○風日：天気。○簾鉤：すだれを捲き上げて懸ける金具。簾を捲くこと。

★ 過九嶺

九嶺を過ぐ

宋 徐璣

斷崖橫路水潺潺

斷崖の橫路 水潺潺

行到山根又上山

行きて 山根に到り 又た山に上る

眼看別峰雲霧起

眼に看る 別峰 雲霧起るを

不知身也在雲間

知らず 身は 也た 雲間に在るを

【語釈】

○九嶺…不祥。○潺潺…浅い水の流れるさま。サラサラ。○山根…山のふもと。

★ 旅夜書懷

旅夜 懷を書す

宋 胡朝穎

十日春光九日陰

十日 春光 九日陰る

故關千里未歸心

故關 千里 未だ歸るの心あらず

遙憐兒女寒窗底

遙かに憐む 兒女 寒窓の底

指點燈花語夜深

灯花を指點して 夜深に語るを

【語釈】

○故關…古い関所。○歸心…故郷に帰りたいたいと思う心。○指點…指指す。○燈花…灯心が花の形になったもの。

絶句

絶句

宋 盧 蹈

客懷耿耿自難寬

客懷 耿耿 自 自ら寛うし難し

老傍京塵更鮮歡

老いて 京塵に傍い 更に飲び鮮し

遠夢已回窗不曉

遠夢 已に回 窓 曉ならず

杏花同度五更寒

杏花 同に度る 五更の寒

【語釈】

○客懷…旅の想い。○耿耿…心が穏やかでないこと。○京塵…帝都の塵。○遠夢…遠くの人を思う夢。○五更…夜明け。

★ 離巫山晚泊棹石灘下

巫山を離れ 晩に 棹石灘下に泊す

宋 李 埴

黄昏風雨阻江濱

黄昏 風雨 江浜を阻む

翠縮羣峯暮色勻

翠 群峰を縮して 暮色勻う

一夜子規啼到曉

一夜子規 啼きて 曉に到る

孤舟愁殺未歸人

孤舟 愁殺す 未だ帰らざる人

【語釈】

○巫山…四川省と湖北省の境にある山。○石灘…石の早瀬。○江濱…長江の浜。○縮…つらぬく。○暮色…夕景色。○子規…ホトトギス。○愁殺…ひどく愁えさせる。

★ 廟山道中

廟山道中

宋 盧祖昇

粉黄蛺蝶遠疎籬

粉黄 蛺蝶 疎籬を遶る

山崦人家挂酒旗

山崦 人家 酒旗を挂く

细雨嫩寒衫袖薄

细雨 嫩寒 衫袖薄し

客中知是菊花時

客中 知る是れ菊花の時

【語釈】

○廟山…浙江省杭州市廟山。○蛺蝶…ちようちよう。○山崦…山の曲がり。○酒旗…酒屋の目印の旗。○嫩寒…うすら寒さ。○衫袖…衣の袖。○客中…旅の途中。

★ 天台道上早行

天台道上早行

宋 戴昺

篋輿軋軋過清溪

篋輿 軋々 清溪を過ぐ

溪上梅花壓水低

溪上の梅花 水を圧して低し

月影漸收天半曉

月影 漸く収まり 天半ば暁く

兩山相對竹雞啼

兩山 相對し 竹雞啼く

【語釈】

○天台…浙江省天台县。○早行…朝早く出発すること。○篋輿…竹の輿。○軋軋…ギシギシという音。○漸…だんだんと。しだいしだいに。○竹雞…鳥の名。鷓鴣に似て小型。

★ 寧川冷渡

寧川冷渡 ねいせんれいと

宋 華岳

峰回路轉六七里

峰 めぐ 回り 路は 転ず 六七里

林靜鳥啼三四聲

林 靜に 鳥は 啼く 三四聲

游女不知行旅恨

游女は 知らず 行旅の 恨

一茶留我話平生

一茶 我を 留めて 平生 へいせい を 話す

【語釈】

○寧川：不祥。○峰回路轉：山の様子が屈曲していて、道路がそれに沿ってくねくねしている形容。○游女：妓女。○平生：平素。

★ 湘潭道中即事

湘潭道中即事 しょうたん

宋 劉克莊

敗絮龍鍾擁病身

敗絮 はいじょ 龍鍾 りょうしゅう として 病身 びょうしん を 擁す

十分寒事 在湘濱

十分の 寒事 湘濱 しょうひん に 在り

若非野店黏官曆

若し 野店 のてん 官曆 かんれき を 粘 ねん するに 非 あら ずんば

不記今朝是立春

不記 ふき 今朝 こんちよう 是 こ れ 立春 りっしん なるを

【語釈】

○湘潭：湖南省湘潭市。○即事：事にふれてその場のことを題材として詩を作ること。○敗絮：損なわれた柳絮。○龍鍾：老いてやつれるさま。○寒事：秋冬の様子。○湘濱：湘江の浜。○野店：野の茶店。○官曆：官府が発行した曆。

★ 壽昌道中

壽昌道中 じゅしょうどうちゆう

宋 劉克莊

山路泥深雪未乾
山路泥深くして雪未だ乾かず
病身初怕浙西寒
病身初めて怕る浙西の寒きを
新年臺曆無人寄
新年の台曆 たいれき 人の寄る無く
且就村翁壁上看
且 しほら 村翁に就きて壁上を見る

【語釈】

○壽昌：湖北省鄂州市。○浙西：浙江省西部。○臺曆：机の上に置く曆。

★ 館頭

館頭 かんとう

宋 劉克莊

雨雪蕭蕭驛埃長
雨雪 しやうしやう 蕭々 えきこう 驛埃長し
不堪流潦入車箱
堪 りゆうりやう 流潦 しゃしやう 車箱に入るに
撫州城外黃泥路
ぶしゅうじやうがい 撫州城外 じやうじやうがい 黃泥の路
即是人間小太行
即ち是れ人間の小太行

【語釈】

○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○驛埃：宿場町に設けられた路程を示す土盛。○流潦：地面を流れる水。○車箱：車の人や物を載せるところ。○撫州城：江西省撫州市臨川区。

★發通州

通州を発す

宋 文天祥

白骨叢中過一春

白骨叢中一春を過ぐ

東將入海避風塵

東のかた將に海に入り風塵を避けんとす

姓名變盡形容改

姓名変じ尽くし形容改まる

猶有天涯相識人

猶お天涯相識の人有り

【語釈】

○通州：江蘇省南通市。○將：「まさにくせんとす」と読み、「いまにもくしようとす」の意。○叢中：草むらの中。○風塵：戦乱。○形容：すがたかたち。○天涯：空の果ての地。○相識：知人。

★暮春雜興

暮春雜興

宋 葛起耕

畫闌目斷楚雲西

画闌目断す楚雲の西

芳草連天客思迷

芳草天に連つて客思迷う

家在江南烟雨裏

家は在り江南煙雨の裏

落花時節杜鵑啼

落花の時節杜鵑啼く

【語釈】

○畫闌：絵画で飾った闌干。○目斷：眼の尽きるところまで見渡す。○楚雲：長江下流の曇。○客思：故郷を離れた思。○江南：長江中下流の南岸地方。○煙雨：霧雨。○杜鵑：ホトトギス。

★ 盱眙旅舎

盱眙の旅舎

宋 路徳章

道傍草屋兩三家

道傍の草屋 兩三家

見客播麻旋煎茶

客を見て 麻を播り 煎茶を旋らす

漸近中原語音好

漸く 中原に近くして 語音好し

不知淮水是天涯

知らず 淮水 是れ天涯

【語釈】

○盱眙…江蘇省淮安市盱眙県。○煎茶…煎じた茶。○漸…段々と。次第に。○中原…黄河流域の平原。○淮水…江蘇省淮安市淮河。○天涯…空の果て。

★ 建州道中

建州道中

宋 無名氏

江南三月已聞蟬

江南 三月 已に蟬を聞く

麥熟梅黃繭作綿

麥熟し 梅 黄にして 繭綿を作す

料得故園煙雨裏

料り得たり 故園 煙雨の裏

輕寒猶自養花天

輕寒 猶自 養花の天

【語釈】

○建州…福建省南平市建甌市。○料得…推量することができる。○故園…故郷。○煙雨…霧雨。○輕寒…うすら寒さ。○養花天…暮春牡丹の花の咲く季節。

★ 睡起

睡起すいき

宋 釋曇瑩

蕙帳煙凝晝掩關

蕙帳けいちよう煙凝こりて 昼かん 関を掩う

落花時節雨闌珊

落花の時節らんざん 雨闌珊

客來驚起還家夢

客來りて驚起す 還家かんかの夢

繞屋春風綠樹寒

屋を繞めぐる 春風 綠樹寒し

【語釈】

○蕙帳…とばりの美称。○掩關…門を閉ざす。○闌珊…散り乱れるさま。○驚起…驚いて夢が覚める。

★ 將渡江

將まほに江を渡らんとす

宋 張斛

無數飛花委路塵

無數の飛花 路塵みすてに委らる

不堪重醉楚城春

堪えず 重ねて 楚城の春に酔うに

明朝回首江南岸

明朝 首こうへを回せば 江南の岸

烟雨昏昏不見人

烟雨 昏昏こんこんとして 人を見ず

【語釈】

○楚城…楚の都、不確定。湖北省宜昌市？○江南…長江中下流南岸の地。○煙雨…霧雨。○昏昏…暗いさま。

★韓陵道中

韓陵道中 かんりやう

金 王庭筠

石頭犖确兩坡間

石頭犖确 せきとう 兩坡の間 りやうひ

不記秋來幾往還

記せず 秋來 いくなか 幾往還 いくわうかん

日暮蹇驢鞭不動

日暮れて 蹇驢 けんろ 鞭すれども動かず

天教子細數前山

天子細に 前山を数えしむ

【語釈】

○韓陵…不祥。○石頭…石塊。○犖确…山に石の多いさま。○兩坡…兩側の隄。○秋來…秋になつてから。○蹇驢…びつこの驢馬。

★渡洛口

洛口を渡る

金 趙元

一脉寒流兩岍氷

一脉の寒流 いちみやく 兩岍の氷 りやうがん

斷橋無力強支撐

斷橋 力無く 強いて支撐す ししやう

忘機羨殺沙鷗好

忘機 ぼうき 羨殺す いさつ 沙鷗の好きを さおう

不省人間有戰爭

省みず 人間 じんかん 戰爭有るを

【語釈】

○洛口…不祥。○一脉…ひとすじ。○兩岍…兩岸。○斷橋…壊れた橋。○忘機…世俗のことを忘れる。○羨殺…非常にうらやましがる。○沙鷗…砂浜の鷗。

★ 宋樓道中

宋樓道中

金 劉從益

十里羊腸路詰盤

十里の羊腸路詰盤

過花穿柳幾廻還

花を過ぎ柳を穿ち幾廻か還る

馬頭忽轉青林角

馬頭忽ち転ず青林の角

緑繞人家水一灣

緑は人家を繞り水は一灣

【語釈】

○宋樓…不祥。○羊腸…曲がりくねった道。○詰盤…険しい。○青林…清浄な山林。

★ 蔡村道中

蔡村道中

金 楊雲翼

水連深竹竹連沙

水は深竹に連なり竹は沙に連なる

村落蕭蕭已暮鴉

村落蕭々已に暮鴉

行盡畫圖三十里

行き尽す画図三十里

青山影裏見人家

青山影裏人家を見る

【語釈】

○蔡村…不祥。○蕭蕭…主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○畫圖…美しい景色。

★ 榆社破口村早發

榆社破口村 早に發す

金 元好問

瘦馬長途懶著鞭

瘦馬 長途 鞭を著すに懶し

客懷牢落五更天

客懷 牢落 五更の天

幾時不屬雞聲管

幾時か 属さず 雞声の管するに

睡徹東窗日影偏

睡は東窓に徹し 日影偏し

【語釈】

○榆社：故郷。○破口村：不祥。○早發：朝早く出発する。○客懷：旅の中での思。○牢落：寂しいさま。○五更：夜明け。○管：司る。○日影：日光。

★ 江行大雨水漲

江行 大雨 水漲る

宋 方回

客路由來但喜晴

客路 由來 但だ晴るるを喜ぶ

山深何況更舟行

山深くして 何ぞ況んや 更に舟行なるをや

孤篷酒醒三更雨

孤篷 酒醒むれば 三更の雨

滴碎愁腸是此聲

愁腸を滴碎するは 是れ此の聲

【語釈】

○客路：旅路。○由來：始まってから以来。○孤篷：一つだけの舟。○三更：真夜中。○滴碎：滴で打ち砕く。○愁腸：愁い悲しむ心。

★ 王干三嶺

王干三嶺 おうかんさんれい

宋 方回

澄練平臯水屈盤

澄練平臯水屈盤 ちようれん へいこう かつばん

青蒼松櫟擁峰巒

青蒼たる松櫟峰巒を擁す しようそう ほうらん しよう

霜晴村落全如畫

霜晴れ村落全て画の如し

一見都忘上嶺難

一見して都て忘る嶺に上る難を

【語釈】

○王干三嶺…不祥。○澄練…白絹。○平臯…水辺の平坦地。○屈盤…かがまりわだかまる。○松櫟…松とくぬぎ。○峰巒…連なる峰々。

★ 見雁有懷

雁を見て懷有り おんい

宋 黄庚

滿眼西風憶故廬

滿眼の西風 故廬を憶う まんがん せいふう ころう

親朋音問久相疏

親朋音問 久しく相疏す しんぼう おんもん かいそ

年年江上無情雁

年々 江上 無情の雁

只帶秋來不帶書

只だ 秋を帯びて来り 書を帯びず

【語釈】

○滿眼…見渡す限り。○西風…秋風。○故廬…故郷の家。○親朋…親族と友達。○音問…音信。○相疏…疎遠になる。○帶書…雁は手紙を運ぶものとされた。蘇武の故事。

★舟次九山

舟九山に次る

宋 黄庚

水雲盡處列奇峰

水雲 尽くる処 奇峰を列す

螺髻參差杳靄中

螺髻 参差たり 杳靄の中

江岸維舟看不了

江岸に舟を維ぎて 看て了らず

煙嵐分碧入疏篷

煙嵐 碧を分かち 疏篷に入る

【語釈】

○水雲：水の上の雲。○螺髻：渦卷いた髻のように聳える嶺々。○參差：不揃い。○杳靄：雲霧が縹渺としているさま。○煙嵐：山林に立ちこめる煙霧。○疏篷：疎らに編んだ舟の窓。

★山行

山行

元 王惲

西來遊宦半忙閒

西來 遊宦 半ば忙閒

六日迢遙道路間

六日 迢遙たり 道路の間

回轉羊腸三百里

回轉 羊腸 三百里

天教馬上飽看山

天馬上 飽くまで山を看せしむ

【語釈】

○遊宦：官職を求めて故郷を離れること。○迢遙：時間の長いさま。○羊腸：羊の腸のよ
うに曲がりくねっていること。

★ 夜次館陶

夜館陶に次る

元 許有壬

三老趨程不憚勞
 船頭坐看月輪高
 烟村漁火微茫外
 一簇人家是館陶

三老程に趨き勞を憚らず
 船頭坐して看る月輪の高きを
 煙村の漁火微茫の外
 一簇の人家是れ館陶

【語釈】

○館陶…山東省聊城市冠県。○三老…船頭。○船頭…舟の舳先。○烟村…もやのかかつて
 いる村。○微茫…はつきりしないさま。○一簇…ひと叢がり。

★ 渡端州峽

端州峽を渡る

元 范梈

權郎得便泝清流
 忽報舟前曉霧收
 蠻語酬人翻自苦
 好山不敢問何州

權郎便を得て清流を泝る
 たちま 忽ち舟前曉霧の収まるを報ず
 ばんご 蛮語人酬えて翻って自ら苦なり
 好山敢えて何れの州かを問わず

【語釈】

○端州…廣東省肇慶市。○權郎…船夫。○蠻語…少数民族の言葉。

★ 曉發山館

曉に山館を発す

元 薩都刺

夢回山館月西斜

夢は回る 山館 月 西に斜なり

曙色千峰動紫霞

曙色 千峰 紫霞を動かす

杜宇一聲山竹裂

杜宇 一声 山竹裂け

鷓鴣飛上野棠花

鷓鴣 飛び上ぐ 野棠の花

【語釈】

○山館：山中の旅館。○夢回：目が覚める。○杜宇：ホトトギス。○野棠：こりんご。

★ 秋夜聞笛

秋夜笛を聞く

元 薩都刺

何人吹笛秋風外

何人の吹笛か 秋風の外

北固山前月色寒

北固山前 月色寒し

亦有江南未歸客

亦た 江南 未だ帰らざるの客有り

徘徊終夜倚闌干

徘徊し 終夜 闌干に倚る

【語釈】

○北固山：江蘇省鎮江市北固山。○江南：長江中下流の南岸の地方。

★ 度淮即事

淮を渡る即事

元 薩都刺

楊花點點衝帆過	楊花 点々 帆を衝いて過ぐ
燕子雙雙掠水飛	燕子 双々 水を掠めて飛ぶ
淮上漁人閑不得	淮上 漁人 閑得ず
船頭對結綠蓑衣	船頭 対し結ぶ 緑蓑衣

【語釈】

○淮：淮河。河南省、安徽省、江蘇省を流れる中国三番目の大河。○即事：事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○楊花：柳絮。○雙雙：二羽ずつ。○淮上：淮河の上。○綠蓑衣：緑色の蓑。

★ 煙雨中過石湖

煙雨中 石湖を過ぐ

元 倪瓚

姑蘇城外短長橋	姑蘇城外 短長の橋
煙雨空濛又晚潮	煙雨 空濛として 又た 晩潮
載酒曾經此行樂	酒を載せて 曾って 経 此の行樂
醉乘江月臥吹簫	酔いて 江月に乗じて 臥して 簫を吹く

【語釈】

○煙雨：霧雨。○石湖：江蘇省蘇州市西南にある湖。○姑蘇城：江蘇省蘇州市。○空濛：小雨が降ったり、靄が立ちこめたりして薄暗いさま。○載酒：船に酒を載せる。○乘江月：江月の明かりの下で。

★ 徳興山中

徳興山中

元 郭奎

石橋斜日萬山陰

石橋の斜日 万山の陰

雲滿寒溪雪滿林

雲は 寒溪に満ち 雪は林に満つ

獨有梅花看不厭

独り 梅花の 見て厭わざる有り

江南春色故園心

江南の春色 故園の心

【語釈】

○徳興：江西省上饒市徳興市。○江南：長江中下流の南岸地方。○春色：春景色。○故園：故郷。

★ 夜過黄泥渡

夜 黄泥渡を過ぐ

元 許謙

夜深風息水安流

夜深く 風息んで 水安流す

白雁黄蘆滿眼秋

白雁 黄蘆 满眼の秋

行李蕭蕭官權穩

行李 蕭々 官權 穩かに

臥看明月過真州

臥して 明月を看 真州を過ぐ

【語釈】

○黄泥渡：不祥。○行李：旅道具を入れる入れ物。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨など
のもの寂しい形容。○官權：公務に使う船。○真州：江蘇省揚州市儀征市。

★夜宿野城

夜野城に宿す

元 成廷珪

露氣涓涓欲二更

露氣涓々 二更ならんと欲す

小舟猶向月中行

小舟猶お 月中に向いて行く

前村知有人家近

前村 知る 人家の 近くに有るを

隔浦微聞犬吠聲

浦を隔てて 微かに聞く 犬の吠ゆる声

【語釈】

○涓涓：水がチヨロチヨロ流れるさま。○二更：午後九時～十一時ころ。

★ 謫會昌

會昌に謫さる

元 滕 斌

莫道文章不直錢

道うこと莫かれ 文章 錢に直らずと

布衣親到玉皇前

布衣 親しく到る 玉皇の前

好詩未足三千首

好詩 未だ足らず 三千首

又為梅花入瘴烟

又た 梅花の為に 瘴煙に入る

【語釈】

○會昌：江西省贛州市會昌県。○直錢：金錢的価値がない。○布衣：無位無官の者。○玉皇：皇帝。○瘴烟：熱病の元となる毒気を含む霧。

★旅夜

旅夜

元 于石

擁爐兀兀坐成眠
夢到家山人不知
半夜酒醒還是客
一庭黃葉雨來時

炉を擁いだき 兀こつこつ々 坐ねむりして 眠ねむりを成す
夢は 家山に到りて 人知らず
半夜 酒醒まむれば 還こた是れ客かく
一庭の黄葉 雨の來きたる時

【語釈】

○擁爐：爐を囲んで暖をとる。○兀兀：一心不乱なさま。○家山：故郷の山。○客：旅人。

★過姑蘇

姑蘇こそを過すぐ

宋 戴表元

水天彌望接青蕪
雲氣漫漫近又無
一色好風三百里
挂帆安坐過姑蘇

水天 彌望やぼう 青蕪せいぶに接す
雲氣 漫まん々 近まづけば 又た 無し
一色の好風 三百里
帆かを挂かけ 安坐し 姑蘇こそを過すぐ

【語釈】

○姑蘇：江蘇省蘇州市。○彌望：見渡す限り。○青蕪：野草の生えている草原。○漫漫：広く遙かなさま。

★ 客窓聽雨

客窓 雨を聴く

明 錢 宰

綠江煙草渺天涯

綠江煙草 天涯に渺たり

燕子來時未到家

燕子 來る時 未だ家に到らず

宿酒恰隨春夢醒

宿酒 恰も 春に随つて 夢醒む

雨聲落盡碧桃花

雨声 落ち尽くす 碧桃花

【語釈】

○客窓：旅館の窓。○煙草：霧の立ちこめた草叢。○天涯：空の果て。○宿酒：二日酔い。○碧桃花：仙人の食べる果実。

★ 夜泊零浦

夜 零浦に泊す

明 張以寧

零浦四更潮已平

零浦 四更 潮 已に平かなり

蕩舟月落唱歌聲

舟を蕩さば 月落ちて 唱歌の聲

山中應是夜來雨

山中 応に是れ 夜來 雨ふるべし

流出落花春水生

落花を流出して 春水生ず

【語釈】

○零浦：不祥。○四更：午前一時～三時頃。○應：「まさにしすべし」と読み、「きつと」であるに違いない」の意。○夜來：夜になってから。

★ 過桐廬

桐廬を過ぐ

明 張以寧

江邊三月草凄凄

江辺 三月 草 凄々

緑樹蒼煙望欲迷

緑樹 蒼煙 望 迷わんと欲す

細雨孤帆春睡起

細雨 孤帆 春睡起く

青山兩岸畫眉啼

青山 兩岸 画眉啼く

【語釈】

○桐廬：浙江省杭州市桐廬県。○凄凄：草が盛んに生い茂っているさま。○蒼煙：蒼茫とした雲霧。○畫眉：画眉鳥。

★ 有感

感有り

明 張以寧

馬首桓州又懿州

馬首 桓州 又た懿州

朔風秋冷黑貂裘

朔風 秋 冷やかなり 黒貂裘

可憐吹得頭如雪

憐れむべし 吹き得て 頭 雪の如きを

更上安南萬里舟

更に 安南に上る 万里の舟

【語釈】

○桓州：不確定。○懿州：湖南省懷化市芷江県。○朔風：寒風。○黒貂裘：黒い貂のかわごろも。○可憐：感嘆のことば。ああ。○安南：浙江省麗水市蓮都区。

★將赴金陵始出閶門夜泊

明 高啓

將に金陵に赴かんとし始めて閶門を出で夜泊す

烏啼霜月夜寥寥

烏啼き霜月夜寥寥

回首離城尚未遙

首を回せば城を離れて尚お未だ遙ならず

正是思家起頭夜

正に是れ家を思い頭を起こす夜

遠鐘孤棹宿楓橋

遠鐘孤棹楓橋に宿す

【語釈】

○將：「まさにくす」と読み「これからくする」の意。○金陵：南京。○閶門：江蘇省蘇州市の城西の門。○寥寥：しんとして静かなさま。○孤棹：一つの舟。○楓橋：江蘇省蘇州市の郊外にある橋、寒山寺の近く。

★將赴金陵始出閶門夜泊

明 高啓

將に金陵に赴かんとし始めて閶門を出で夜泊す

煙月籠沙客未眠

煙月沙を籠めて客未だ眠らず

歌聲燈火酒家前

歌声灯火酒家の前

如何纔出閶門宿

如何纔に閶門を出でて宿すれば

已似秦淮夜泊船

已に秦淮夜泊の船に似たり

【語釈】

○金陵：南朝の首都、南京。○閶門：江蘇省蘇州市にあった城門の一つ。○夜泊：夜舟を泊して眠る。○煙月：おぼろ月。○籠：蔽う。○秦淮：金陵の近くの煙花風流の地。

★ 雨中登天界西閣

雨中 天界の西閣に登る

明 高啓

青山樓閣楚江東

青山の樓閣 楚江の東

身在蒼茫晚色中

身は蒼茫 晚色の中に在り

故國自遙難望見

故國 自ら遙にして望見し難し

不關春樹雨溟濛

関せず 春樹 雨 溟濛

【語釈】

○楚江：湖南省、湖北省一帯の長江。○蒼茫：水などの青々として果てしないさま。○晚色：夕景色。○溟濛：薄暗い。

★ 夜寫家書

夜 家書を写す

明 高啓

月淡梧桐雨後天

月淡く 梧桐 雨後の天

蕭蕭絡緯夜燈前

蕭々たる 絡緯 夜灯の前

誰憐古寺空齋客

誰か憐れむ 古寺 空齋の客

獨寫家書猶未眠

独り 家書を写し 猶お未だ眠らず

【語釈】

○家書：家族からの手紙、家族への手紙。○梧桐：桐とアオギリ。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○絡緯：コオロギ。○空齋：誰も居ない書齋。○家書：家族への、家族からの手紙。

★ 江行

江行

明 高啓

家家魚網映迴橋
春水初生沒樹腰
客路江南烟雨裏
綠蕪芳草恨迢迢

家々の魚網 迴橋に映ず
春水 初めて生じ 樹腰没す
客路 江南 煙雨の裏
綠蕪 芳草 恨み迢々

【語釈】

○客路：旅路。○江南：長江中下流の南岸地方。○煙雨：霧雨。○綠蕪：緑の雑草。○芳草：かおり草。○迢迢：はるかさま。遠いさま。

★ 客夜聞女病

客夜女の病を聞く

明 高啓

歲盡歸期尚杳然
不知汝病復誰憐
隔鄰兒女燈前笑
客舍愁中正獨眠

歲 尽きて 歸期 尚お杳然
知らず 汝の病 復た誰か憐れむ
隔隣の兒女 灯前に笑う
客舍 愁中 正に独り眠る

【語釈】

○歲盡：年末になる。○歸期：家に帰るとき。○杳然：遙かなさま、遠いさま。○隔鄰：垣を隔てた隣。○客舍：旅館。

★ 秋夜同周著作宿婁浦

秋夜 周著作と同一に婁浦に宿す

明 高啓

小廨寒依竹浦雲

小廨寒に依る 竹浦の雲

酒闌相對說離羣

酒闌にして相對し 離群を説く

一聲新鴈誰先聽

一声 新鴈 誰か先ず聴く

今夜江南我共君

今夜 江南 我君と共に

【語釈】

○周著作…不祥。○婁浦…不祥。○小廨…小さな官吏の事務所。○竹浦…竹の多い浦。○離羣…社会から離れていること。○江南…長江中下流の南岸地域。

★ 夜聞雨聲憶故園花

夜 雨声を聞いて故園の花を憶う

明 高啓

帝城春雨送春殘

帝城の春雨 春残を送る

雨夜愁聽客枕寒

雨夜 愁い聴きて 客枕寒し

莫入鄉園使花落

郷園に入りて 花をして 落しむ莫れ

一枝留待我歸看

一枝 留まりて 我の歸るを待ちて 看せよ

【語釈】

○故園…故郷。○帝城…帝都。○客枕…旅の夜。

★ 江行

江行

明 王佐

江水悠悠行路長

江水 悠々 行路長し

孤鴻啼月有微霜

孤鴻 月に啼いて 微霜有り

十年蹤跡渾無定

十年の蹤跡 渾て 定る無し

莫更逢人問故郷

更に 人に逢いて 故郷を問うこと 莫れ

【語釈】

○悠悠：他と関わりなくゆったりしたさま。○孤鴻：群れを離れた一つの雁。○蹤跡：これまで生涯。

★ 燕山春暮

燕山春暮

明 張羽

金水橋邊蜀鳥啼

金水橋辺 蜀鳥啼く

玉泉山下柳花飛

玉泉山下 柳花飛ぶ

江南江北三千里

江南 江北 三千里

愁絶春歸客未歸

愁 絶え 春歸りて 客 未だ歸らず

【語釈】

○燕山：天津市薊県の山。○金水橋：北京天安門前にある橋。○蜀鳥：杜鵑、ホトトギス。○玉泉山：北京市西北にある山。○柳花：柳絮。○春歸：春が過ぎ去る。

★客中感懷

客中感懷

明 王蒙

十年蹤跡厭紅塵

十年の蹤跡 紅塵を厭う

功業無成白髮新

功業 成る無く 白髮新なり

夢裏不知身是客

夢裏 知らず 身は是れ客なるを

覺來惟有影隨身

覺え來るは 惟だ 影の身に隨う有るのみ

【語釈】

○客中…旅中。○蹤跡…これまでの生活。○紅塵…俗世間の塵。○夢裏…夢の中。

★淮西夜坐

淮西夜坐

明 袁凱

蕭蕭風雨滿關河

蕭々たる 風雨 関河に滿つ

酒罷西樓聽鴈過

酒罷みて 西樓 鴈の過ぐを聴く

莫怪行人頭白盡

怪しむ莫れ 行人 頭白の尽するを

異鄉秋色不勝多

異郷の秋色 多きに勝えず

【語釈】

○淮西…淮水（淮河…長江・黄河に次ぐ第三の大河。黄河と長江の間を東西に流れており、下流にある湖で二手に分かれ、放水路は黄海に注ぎ、本流は長江につながっている。）の西の地方。○蕭蕭…もの寂しいさま。○關河…関所の山や川。○頭白盡…頭髮が全く白くなること。○異郷…他郷。○秋色…秋景色。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★客中夜坐

客中夜坐

明 袁 凱

夜色蕭蕭淮水長

夜色 蕭々 淮水長し

故園歸路更茫茫

故園 歸路 更に茫茫

一聲新鴈三更雨

一聲 新鴈 三更の雨

何處行人不斷腸

何れの処の行人 腸を断たざらん

【語釈】

○客中：旅の途中。○蕭蕭：もの寂しいさま。○淮水：長江・黄河に次ぐ第三の大河。黄河と長江の間を東西に流れており、下流にある湖で二手に分かれ、放水路は黄海に注ぎ、本流は長江につながっている。○故園：故郷。○茫茫：遠く果てしないさま。○三更：真夜中。○行人：旅人。

（参考文献） 『墨場必携 明詩選』

★常山道中

常山道中

明 王 偁

前山近曉樹蒼蒼

前山 曉に近く 樹 蒼々

野蕨初肥綠笋長

野蕨 初めて肥え 綠笋長し

一路春風如有待

一路の春風 待つこと有るが如く

馬頭吹送落花香

馬頭 吹き送くる 落花の香

【語釈】

○常山：浙江省衢州市常山県。○蒼蒼：草木などが青く茂るさま。○野蕨：野生のワラビ。○綠笋：緑色のタケノコ。

★ 重登岳陽樓望君山

重ねて岳陽樓に登り君山を望む

明 王 偁

南湖烟水接天流

南湖の煙水 天に接して流る

天際青螺掌上浮

天際の青螺 掌上に浮ぶ

欲弔湘君何處是

湘君を弔わんと欲して 何れの処か是なる

不堪重倚岳陽樓

堪えず重ねて 岳陽樓に倚るに

【語釈】

○岳陽樓：湖南省岳陽市にある古城楼。○君山：洞庭湖中にある山。○南湖：湖南省岳陽市南湖。○烟水：もやの立った水流。○天際：空の果て。○青螺：青い田螺。君山。○湘君：堯帝の妃の娥皇と女英。

★ 夜泊潯陽江驛

夜 潯陽江の驛に泊す

明 王 偁

度盡名山問楚湘

名山を度り尽し 楚湘を問う

扁舟此夜泊潯陽

扁舟 此の夜 潯陽に泊す

琵琶聲斷知何處

琵琶の聲は断え 知んぬ何れの処ぞ

江水江烟自眇茫

江水 江煙 自ら眇茫たり

【語釈】

○潯陽江：長江の江西省九江市あたり。白居易「琵琶行」。○楚湘：修睦。昭宗光化間の廬山の僧正。○扁舟：小舟。○江烟：水の上にたつ靄。○眇茫：広く果てしないさま。

★ 雨中過洞庭

雨中 洞庭を過ぐ

明 王 侔

昨夜南風起洞庭

昨夜 南風 洞庭に起く

曉来湖上雨溟溟

曉来 湖上 雨 溟々

忽看天際驚濤白

忽ち看る 天際に 驚濤白きを

失却君山一點青

君山を失却し 一点青し

【語釈】

○洞庭：洞庭湖。湖南省北東部にある淡水湖。○曉来：夜明けになってからずっと。○溟溟：薄暗いさま。○天際：空の果て。○驚濤：大波。○君山：洞庭湖にある山。

★ 山窓夜雨

山窓夜雨

明 王 恭

深澗垂蘿暗竹房

深澗の垂蘿 竹房に暗し

半枝殘燭雨聲涼

半枝の殘燭 雨声涼し

蕭條樹葉千峰裏

蕭條たる 樹葉 千峰の裏

不獨啼猿斷客腸

独り啼猿の 客腸を断つのみならず

【語釈】

○深澗：山の中の深い谷。○垂蘿：垂れ下がったツタ。○蕭條：草木が枯れしおれるさま。○客腸：旅人のハラワタ。

★ 海城秋晚

海城の秋晚

明 王 恭

西風孤鴈海城頭

西風 孤鴈 海城の頭ほしり

羌笛聲中水亂流

羌笛聲中 水 乱流すきょうてきせいちゅう

楓葉蕭蕭山月下

楓葉 蕭々 山月の下しゅうしやう

戍樓殘火幾家秋

戍樓の殘火 幾家の秋じゆらう

【語釈】

○海城：海辺の街。○西風：秋風。○羌笛：異民族の笛。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○戍樓：守備のための物見櫓。○蕭蕭：主として馬・落葉・風

★ 宜陽山中

宜陽山中ぎやうさんちゅう

明 李昌祺

緑陰重疊鳥間關

緑陰 重疊し 鳥 間關ちようじやう かんかん

野棗花香宿雨殘

野棗花 香しくして 宿雨残るやそうか かんば しゆくう

天遣浮雲都捲盡

天 浮雲をして 都て 捲尽せしめすべ けんじん

教人一路看青山

人をして 一路 青山を看さしむ

【語釈】

○宜陽：河南省洛陽市の県。○重疊：疊のように重なる。○間關：鳥の鳴き声の形容。○野棗花：ナツメにいた植物。○宿雨：昨夜からの雨。○捲盡：撤退し尽くす。

★ 薊門秋夕

薊門の秋夕

明 熊直

清漏遅遅月轉廊
博山銷盡水沈香
重城不鎖還家夢
半夜分明到故郷

清漏 遅々として 月廊に転ず
博山 銷じ尽す 水沈香
重城 鎖さず 還家の夢
半夜 分明に 故郷に到る

【語釈】

○薊門：北京城西の徳勝門外の西北隅。○清漏：清らかな水時計の音。○博山：香炉の一種。○水沈香：香木の一種。○還家夢：家に帰る夢。○半夜：真夜中。○分明：はっきりと。

★ 江上早行

江上早行

明 楊士奇

漢陽磯上鼓初稀
烟柳矐矐一鵲飛
乘月不知行路遠
滿江風露濕人衣

漢陽磯上鼓 初めて稀なり
烟柳 矐矐として 一鵲飛ぶ
月に乗じて 知らず 行路の遠きを
滿江の風露 人衣を湿らす

【語釈】

○早行：朝早く出発すること。○漢陽：湖北省武漢市漢陽区。○烟柳：霧のかかった柳林。○矐矐：ほの暗い様子。○乗月：月明かりの下で。

★ 穆陵關夜雨

穆陵關の夜雨

明 薛瑄

萬山絶頂穆陵關

萬山の絶頂 穆陵関

一上山樓五月寒

一たび 山楼に上れば 五月寒し

烟樹滿川浮暝色

煙樹 川に満ち 暝色 浮ぶ

晚風吹雨濕闌干

晚風 雨を吹いて 闌干を湿す

【語釈】

○穆陵關：不祥。○烟樹：靄、霞のかかった樹木。○暝色：暮色。

★ 舟次石頭口

舟 石頭口に次る

明 李夢陽

窓開面面水風微

窓 開けば 面々 水風微なり

五月江空冷照衣

五月 江空 冷に衣を照らす

此艇果如天上坐

此の艇 果して 天上に坐すが如く

茶烟化作綵雲飛

茶煙 化して 綵雲と作りて 飛ぶ

【語釈】

○次：船泊する。○石頭口：不祥。○面面：各方面。○綵雲：いろいろどられた雲。

★夏口夜泊別友人

夏口夜泊友人に別る

明 李夢陽

黃鶴樓前日欲低

黃鶴樓前日低からんと欲す

漢陽城樹亂鳥啼

漢陽城樹乱鳥啼く

孤舟夜泊東遊客

孤舟夜泊す東遊の客

恨殺長江不向西

恨殺す長江の西に向わざるを

【語釈】

○夏口：湖北省武漢市夏口。○黃鶴樓：武漢市武昌区にある名樓。○漢陽城：武漢市漢陽区。○東遊客：東方にいる旅人。○恨殺：深く恨む。

★竹枝詞

竹枝詞

明 何景明

十二峰頭秋草荒

十二峰頭秋草荒れ

冷烟寒月過瞿塘

冷煙寒月瞿塘を過ぐ

青楓江上孤舟客

青楓江上孤舟の客

不聽猿聲亦斷腸

猿声を聴かずして亦た断腸

【語釈】

○竹枝詞：劉禹錫が左遷されていたときに土地の民謡をもとに作った詩の形態、男女の情愛や土地の風俗を詠う。○十二峰：三峽の巫山にある十二の峰。○冷煙：冷たい靄。○瞿塘：瞿塘峽。白帝城と巫山の間にある峽谷。

★ 餘千道中

余千道中よせんどうちゆう

明 鄭 鵬

樹繞前灣水拍堤 樹は前灣を繞りて水堤を拍つ
白雲極目遠天低 白雲 目を極むれば遠天低し
春光已逐飛花盡 春光 己に飛花を逐いて尽き
猶有多情杜于啼 猶お多情 杜于の啼く有り

【語釈】

○餘千…不祥。○春光…春景色。○杜于…杜鵑。ホトトギス。

★ 舟中即事

舟中即事

明 陳 達

湿霧濛濛畫未開 湿霧 濛々 画 未だ開かず
扁舟何處越王臺 扁舟 何れの処か 越王台
蘆花浅水暫停泊 蘆花 浅水 暫く停泊
恐有前村風雨來 恐らくは 前村 風雨の来る有り

【語釈】

○即事…事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○濛濛…ぼんやりしたさま。○扁舟…小舟。○越王台…浙江省紹興市種山。越王勾踐が登臨したところ。

★沙平道中

沙平道中さへい

明 陳焯

海北海南兩地賒はるか
驅車遙向楚天涯
逢人更入雲深處
一犬黃昏吠落花

海北海南兩地賒はるか
車を駆つて遙かに向う楚の天涯
人に逢いて更に雲深き処に入る
一犬こうこん黃昏落花に吠ゆ

【語釈】

○沙平…不祥。○楚…湖北省・湖南省。○黃昏…たそがれ。

★夜泊闔閭城

闔閭城こうりよじょうに夜泊す

明 孫一元

欲行未行風力柔
吳門挂席夜正幽
秋水半汀鷗共我
好山兩岸月隨舟

行かんと欲して未だ行かず 風力やわらか柔に
吳門 席を挂かけて夜 正まさに幽なり
秋水 半汀はんてい 鷗 我と共に
好山 兩岸 月 舟に隨う

【語釈】

○闔閭城…江蘇省蘇州市の別称。○吳門…江蘇省蘇州市一帯。○挂席…帆をかける。

★ 峽中

峽中

明 楊慎

峽裏青山夢裏過

峽裏の青山夢裏に過ぐ

曉來春比夜來多

曉來春夜來に比ぶれば多し

開篷試看江頭路

篷を開いて 試に看る江頭的路

樹樹殘梅照綠波

樹々 殘梅 綠波を照らす

【語釈】

○曉來…夜明け以来。○夜來…昨夜以来。○篷…舟の窓。○殘梅…散り残りの梅。

★ 望中條山

中条山を望む

明 楊慎

征馬長鳴向北風

征馬 長く鳴いて 北風に向う

崤關回首暮天東

崤関 首を回す 暮天の東

太行過盡中條出

太行 過ぎ尽くし 中条に出ず

一路青山白雪中

一路 青山 白雪の中

【語釈】

○中條山…陝西省南部の山脈。○征馬…旅の馬。○崤關…長安と洛陽を結ぶルートにある関。○太行…太行山西省、河南省、河北省の阪井にある山脈。

★嘉州壁津

嘉州の壁津

明 楊慎

荒津漁火照江城
荒津の漁火 江城を照らす
城下灘聲徹夜鳴
城下の灘声 夜を徹して鳴く
寒笛莫吹楊柳曲
寒笛 吹く莫かれ 楊柳曲
故園回首不勝情
故園 首を回らせば 情に勝えず

【語釈】

○嘉州：浙江省温州市。○江城：川辺の街。○灘聲：早瀬の音。○楊柳曲：樂府題、折楊柳の別称。別れの曲。○故園：故郷。

★馬道壁上次韻

馬道壁上次韻

明 楊慎

嘉陵江水碧迢迢
嘉陵江水 碧 迢々
雷吼晴灘雪湧潮
雷 晴灘に吼え 雪 潮に湧く
岸曲行人愁駐馬
岸曲の行人 愁いて馬を駐む
清猿聲在白雲霄
清猿の声は 白雲の霄るるに在り

【語釈】

○馬道：車馬の通る広い道。○次韻：他の詩の韻字をその順序で使って作った詩。○嘉陵江：不確定。○迢迢：遙かなさま。遠いさま。○岸曲：岸の隈。○行人：旅人。

★ 過滁州

滁州を過ぐ

明 江琦

江北除南數日程

江北除南 數日の程

蕭蕭落木送秋聲

蕭々たる落木 秋声を送る

夕陽滿地鳥飛盡

夕陽 地に滿ち 鳥 飛び尽き

人在亂山堆裏行

人は 乱山 堆裏に在りて行く

【語釈】

○滁州：安徽省滁州市。○江北：長江の北側。○除南：徐州の南？○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○秋聲：秋風や葉の落ちるおとなど、秋の気配を感じさせる音。○堆裏：重なった中。

★ 宿雙溝東岸

双溝の東岸に宿す

明 邵傳

戲馬臺前正夕輝

戲馬台前 正に夕輝

呂梁洪下片帆飛

呂梁洪下 片帆飛ぶ

夢魂更急黃河水

夢魂 更に急なり 黄河の水

萬里關山一夜歸

万里の関山 一夜に帰る

【語釈】

○雙溝：不祥。○戲馬臺：河北臨漳県の西にある台、閱馬台。○夕輝：夕焼け。○呂梁洪：山西省呂梁市。○片帆：小さな帆掛け船。○関山：関所のある山。国境の山。

★ 月夜江行聞笛

月夜江行し笛を聞く

明 茅 坤

月明中天掛席流
江空五月似清秋
忽聞鉄笛風前起
吹動關山萬里愁

月明の中天 席を掛けて流る
江空しくして 五月 清秋に似たり
忽ち聞く 鉄笛の 風前に起るを
吹動す 関山 万里の愁

【語釈】

○掛席：帆を掛ける。○鉄笛：鉄製の笛。隠者が吹くとされる。○關山：関所のある山。国境の山。

★ 汴河守凍

汴河に凍を守る

明 許邦纒

客館寒燈淚滿襟
間關萬里欲歸心
眼前一水冰霜苦
又說三江瘴癘深

客館の寒灯 涙襟に満つ
間関 万里 帰らんと欲する心
眼前 一水 冰霜の苦
又た説く 三江 瘴癘深しと

【語釈】

○汴河：黄河と淮河とを結んだ川。○客館：旅館。○間關：鳥の鳴き声。○三江：不確定。○瘴癘：疫病を引き起こす毒気を含んだ空気。

★ 新添驛

新添驛しんしてんえき

明 許邦纒

野館孤燈半滅明
野館の孤灯 半ば滅明
江孺月落夜潮生
江孺こうぜん 月落ちて 夜潮生ず
無端鄉思三更後
端無はしなくも 郷思 三更の後
聽盡蕭蕭風雨聲
聽き尽くす 蕭々しょうしょう 風雨の聲

【語釈】

○江孺：江辺の地。○無端：思いがけなく。○郷思：故郷を思う気持ち。○三更：真夜中。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★ 江上聞笛

江上笛を聞く

明 吳維嶽

誰家短笛弄晚風
誰が家の短笛ぞ 晩風に弄す
暗逐江風到客舟
暗に江風を逐い 客舟に到る
愁處不知鄉路近
愁う処 知らず 郷路の近きを
梅花飛盡水悠悠
梅花 飛び尽きて 水 悠々ゆうゆうたり

【語釈】

○郷路：故郷への道。○悠悠：他と関わりなくゆったりしたさま。

★ 邊城望月

邊城にて月を望む

明 愈 憲

片月盈盈海外生

片月 盈盈えいえいとして 海外に生ず

遙應九塞一時明

遙かに 応まさに 九塞 一時に 明らかなるべし

望京樓上頻回首

望京樓上 頻ぼうきょうろうじょう しきりに 首こうべを 回めぐらせば

何處清光五鳳城

何れの 処この 清光か 五鳳城ごほうじょう

【語釈】

○邊城：辺地の街。○片月：片割れ月。○盈盈：姿の美しいさま。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとく」に違いない」の意。○九塞：九つの險阻な地方。○望京樓：楼の名前。○五鳳城：帝都。

★ 舟行

舟行

明 林 紀

青山秀色落湖陰

青山の秀色 湖陰に落つ

雲樹依微薄暮林

雲樹 依微たり 薄暮の林

寂寞水扉閑釣艇

寂寞たる水扉 釣艇閑かに

一川煙雨綠蕪深

一川の煙雨 綠蕪深し

【語釈】

○雲樹：霧のかかっている樹木。○依微：ぼんやりしたさま。○寂寞：ひっそりして物寂しいさま。○煙雨：霧雨。○綠蕪：青々と茂っている雑草。○寂寞：ひっそりして物寂しいさま。

★ 興田驛

興田驛 こうでんえき

明 林玉汝

驛亭南下水悠悠

驛亭南下水悠悠 えきていなんか ゆうゆう

滿目青山片片秋

滿目の青山片々の秋 まんめくせいざん ぺんぺん

最是不堪岑寂處

最も是れ岑寂に堪えざる処 もともと せんせき

暝煙寒雨一孤舟

暝煙寒雨一孤舟 めいえん かんう ひとつぶね

【語釈】

○興田驛：不祥。○驛亭：宿場町の亭。○悠悠：他と関わりなくゆったりしたさま。○滿目：見渡す限り。○片片：切れ切れ。○岑寂：わびしく静かなさま。○暝煙：暗い靄。

山行即事

山行即事

明 王世懋

滿目殷紅躑躅新

滿目の殷紅躑躅新なり まんめくいんこう てきぢよく

流光偏感官遊人

流光偏えに感ず官遊の人 りゅうこう ひと

南中氣暖花開盡

南中氣暖にして花開き尽し

三月翻疑不是春

三月翻つて疑う是れ春ならざるを さんげつ かな

【語釈】

○即事：事にふれて、その場に依じて詩を作ること。○殷紅：深紅。○躑躅：つつじ。○流光：時の流れ。○官遊：仕官するために他郷にいる人。

★ 江上聞簫

江上簫を聞く

明 陳輝

潮落荒州客未眠
遙聞鳳吹隔晴川
愁來轉憶孤蓬夕

潮落ちて荒州客未だ眠らず
遙に聞く鳳吹の晴川を隔つを
愁来りて転た憶う孤蓬の夕

赤壁江空月滿船

赤壁江空しく月船に満つ

【語釈】

○荒州：荒れた中洲。○鳳吹：笙や簫などの美称。○孤蓬：風にちぎれて飛ぶ蓬、あてど
ない旅人の象徴。○赤壁：赤い岸壁。

★ 桐慮夜泊

桐慮夜泊

明 薛應旂

夜深孤棹泊桐溪
明月清霜照石堤
木落江空行客少
隔林惟有野猿啼

夜深くして孤棹桐溪に泊す
明月清霜石堤を照らす
木落ち江空くして行客少なり
林を隔てて惟だ野猿の啼く有るのみ

【語釈】

○桐慮：不祥。○孤棹：孤舟。○桐溪：不祥。○行客：旅人。

★ 渡黄河

黄河を渡る

明 方法

野曠天低日欲西
野 広く 天低くして 日西せんと欲す
北風吹雪雁行低
北風 雪を吹いて 雁行低し
黄河渡口行人少
黄河 渡口 とこう こうじんまれ 行人 少なり
一片寒沙没马蹄
一片の寒沙 马蹄を没す

【語釈】

○雁行：飛雁の群れ。○渡口：渡し場。○行人：旅人。

★ 曉過八坼

曉に八坼を過ぐ

明 王叔承

殘星點點照船明
殘星 点々 船を照らして 明らかなり
敲石寒爐曙火生
石を敲きて 寒爐 曙火生ず
推枕坐看江市過
枕を推して坐し 江市を看て過ぐ
夢中聽得賣魚聲
夢中 聴き得たり 魚を売る声

【語釈】

○殘星：夜明けに消えずに残っている星。○敲石：火打ち石を打って火をおこす。○寒爐
…：寒天の火炉。○江市：川辺の集落。

★ 江泊

江泊

明

湯顯祖

寂歴秋江漁父稀
起看殘月映林微
波光水鳥驚猶宿
露冷流螢濕不飛

寂歴たる秋江漁父稀なり
起きて看る残月の林に映じて微なるを
波光水鳥驚きて猶お宿し
露冷にして流螢湿りて飛ばず

【語釈】

○寂歴…ひっそりとしてもものさびしい。

★ 山行聞鷓鴣

山行鷓鴣を聞く

明

陳价夫

楊花似雪草如烟
拂面東風不起塵
無數青山春雨後
鷓鴣聲裏遠行人

楊花雪に似て草煙の如し
面を払う東風塵を起さず
無數の青山春雨の後
鷓鴣声裏遠行の人

【語釈】

○楊花…柳絮。○煙…靄霞。○東風…春風。○遠行…故郷を遠く離れた旅人。

★崖州道中

崖州道中がいしゅうどうちゅう

明 陳邦注

萬里珠崖道路難

万里の珠崖しゅがい道路難し

故郷回首望漫漫

故郷こきやう首を回らせば望み漫々

青山半是猿啼處

青山半ば是れ猿の啼く処

落日西風海色寒

落日西風海色寒し

【語釈】

○崖州：海南省海口市琼山区。○珠崖：赤い色の崖。○漫漫：長く遠いさま。○西風：秋風。

★湘江

湘江

明 陳邦注

長江寂寂一孤舟

長江せきせき寂々一孤舟

楓葉蘆花下急流

楓葉ふうよう蘆花急流を下る

何處漁郎暮吹笛

何れの処の漁郎か暮に笛を吹く

數聲斷腸夕陽秋

数声せきよう断腸夕陽の秋

【語釈】

○寂寂：さびしく静かなさま。○漁郎：漁夫。

★絶句

絶句

明 殷奎

灞陵橋下水潺湲

灞陵橋下水潺湲

人影離披夕照間

人影離披夕照の間

來往總憐車馬好

來往総て憐む車馬の好きを

西風破帽獨南還

西風破帽独り南に還る

【語釈】

○灞陵橋：河南省許昌市灞陵橋。○潺湲：浅い水の流れるさま。さらさら。○離披：ちらばる。○來往：行きかう人。○西風：秋風。○破帽：破れた古い帽子。

★度仙霞嶺

仙霞嶺を度る

明 王毓德

已恨閩天道路賒

已に恨む閩天道路賒なるを

更堪回首隔仙霞

更に堪えんや首を回して仙霞を隔つるを

潺湲已是他鄉水

潺湲已に是れ他郷の水

縱使東流不到家

縦い東に流れしむとも家に到らず

【語釈】

○仙霞嶺：浙江省西南部にある嶺。○閩天：福建省の空。○仙霞：仙霞嶺。○潺湲：浅い水の流れるさま。さらさら。

★ 蘭溪夜泊

蘭溪夜泊

明 王毓德

暮雨孤村繫客船
暮雨 孤村 客船を繫ぐ
漁燈相對未成眠
漁灯 相對して 未だ 眠 成らず
思家淚共蘭溪水
家を思い 涙 蘭溪の水と共に
一夜潺湲過枕邊
一夜 潺湲 枕邊を過ぐ

【語釈】

○蘭溪：浙江省金華市蘭溪。○客船：旅人を乗せた船。○潺湲：浅い水の流れるさま。さらさら。○枕邊：枕元。

★ 龍泉寺五更口示李元之

龍泉寺 五更 李元之に口示す

明 鄭 琰

獻賦論兵事已非
賦を獻じ 兵を論ず 事 已に非なり
西風却憶故山微
西風 却って憶う 故山の微かなるを
五更涼雨醒殘夢
五更の涼雨 殘夢を醒まし
愁殺飄零人未歸
愁殺す 飄零 人 未だ歸らざるを

【語釈】

○龍泉寺：不祥。○五更：夜明け頃。○李元之：不祥。○賦：貢ぎ物。○西風：秋風。○故山：故郷の山。○愁殺：ひどく愁えさせる。○飄零：落ちぶれること。

★ 太平驛

太平驛

明 林廷模

太平溪上客舟過

太平溪上客舟過かくしゆう

坐聽滄浪醉裏歌

坐して聴く滄浪醉裏そうろうすいりの歌

無數落花隨水去

無數の落花 水に随つて去る

前山風雨夜來多

前山の風雨 夜來多し

【語釈】

○太平驛…不祥。○太平溪…不祥。○客舟…旅人を乗せた舟。○滄浪…滄浪の歌。漁父の辞。○夜來…夜になってから。

★ 巫峽夜泊

巫峽夜泊

明 魏文煥

夾峽江流下楚湘

夾峽江流楚湘きやうきやうを下る

猿聲淒切斷人聲

猿聲淒切人聲を断つ

無端驚起三庚夢

端無はしなくも驚起す三庚の夢

恍惚猶疑是故郷

恍惚として猶お疑う 是れ故郷かと

【語釈】

○巫峽…三峽のひとつ。○夾峽…山で刺挟まれた峡谷。○楚湘…長江中下流。○淒切…非常に物寂しいさま。○無端…思いがけず。○驚起…驚き醒ます。○三庚…真夜中。

★分水關

分水關を渡る

明 徐榻

瀟路鶯聲送夕陽

瀟路の鶯声 夕陽を送る

關門樹色遠蒼蒼

關門の樹色 遠く蒼々

婦人不及清溪水

婦人及ばず 清溪の水

一夜東流到故郷

一夜東流し 故郷に到る

【語釈】

○分水關：福建省と浙江省の境の関所。○瀟路：湖南省の瀟水のあたりの道。○蒼蒼：草木が青く茂るさま。

★雨夜

雨夜

明 萬虞愷

弧館殘燈照獨眠

弧館の残灯 独眠を照らす

寒江落木正蕭然

寒江の落木 正に蕭然

西風還送秋宵雨

西風 還た送る 秋宵の雨

併入江聲到枕邊

併せて 江声に入り 枕辺に到る

【語釈】

○蕭然：ものさびしいさま。○西風：秋風。○江声：川の流れの音。○枕邊：枕元。

★ 山行

山行

明 郭文涓

春曉衝風磴道賒

春曉 衝風しゅうふう 磴道とうどう 賒はるか なり

小橋流水抱人家

小橋 流水 人家を抱く

鷓鴣聲裏東風老

鷓鴣しゃこせいり 聲裏 東風老ゆ

開遍棠梨幾樹花

遍あまね 開く 棠梨とうり 幾樹の花

【語釈】

○衝風…衝擊を与えるような風。○磴道…山に登る石径。○東風…春風。○棠梨…野梨。

★ 呂梁

呂梁ろりょう

明 林 燁

十月風寒天雨霜

十月 風寒くして 天霜を雨ふらす

客愁欹枕夜偏長

客愁かくしゆう 枕そばだ を欹ひたえ けて 夜 偏に長し

河流迅似歸心急

河流 迅はや きこと 歸心の急なるに似たり

落月孤舟下呂梁

落月 孤舟 呂梁ろりょう を下る

【語釈】

○呂梁…不祥。○客愁…旅の愁い。○歸心…故郷に帰りたいと思う心。

★ 歸閩宿子規領

閩びんに帰りしきり子規領りょうに宿す

明 王應山

千盤おそ休難や路かた行かた艱
茅舍かくむ清幽しずか客夢かくむ閑しずかなり
杜宇とう不須もち頻かんせい喚醒かんせい
棟花ちくけい飛盡ちくけい竹雞啼ちくけい

【語釈】

○閩：福建省。○子規領：不祥。○茅舍：茅葺きの家。○清幽：清らかで奥深いこと。○客夢：旅先での夢。○杜宇：ホトトギス。○喚醒：鳴いて眠りを覚ます。○棟花：オウチの花。○竹雞：雞に似て大型の鳥の名。

★ 入垓口

垓口がいこうに入る

明 程慶琬

沙いさじ明あきかに水みどり碧みどり淨きんじ無な泥じ
三百灘うすま盤うすま上うすま歛溪きんげい
兩岸うすま青山あき春はる暮ゆふんと欲ほす
棟花れんか飛と盡く竹雞啼ちくけい

【語釈】

○垓口：不祥。○三百灘：多くの早瀬。○歛溪：安徽省黃山市歙県にある溪。○棟花：オウチの花。○竹雞：雞に似て大型の鳥の名。

★宿豊陽

豊陽に宿す

明 郭武

蘋花風急水茫茫

蘋花 風急にして水 茫茫たり

今夜孤舟宿豊陽

今夜 孤舟 豊陽に宿す

誰在江城吹畫角

誰か 江城に在って 画角を吹く

五更残月一天霜

五更の残月 一天の霜

【語釈】

○豊陽：湖南省常德市津市。○蘋花：浮き草（テンジソウ）の花。○茫茫：果てしないさま。○江城：川辺の街。○画角：彩られた角笛。○五更：真夜中。

★晩次安南呂塊站

晩に安南呂塊站到る

明 許天錫

瓊雲歸路正匆匆

瓊雲 歸路 正に匆匆

十里官亭坐晚風

十里の官亭 晩風に坐す

何事最關孤客思

何事ぞ 最も関す 孤客の思

數聲啼鳥木綿紅

数声の啼鳥 木綿紅なり

【語釈】

○安南：広東省雲浮市羅定市。○呂塊站：不祥。○瓊雲：美しい雲。○匆匆：そわそわして落ち着かないさま。○十里官亭：十里毎に置かれ宿場。長亭。○木綿：ベンガル菩提樹。

★靖公弟至

靖公弟至

清 週亮工

荒城兀坐對燈殘
荒城兀坐 灯の残るに對す
歸計先愁百八灘
歸計 先ず愁う 百八灘
爾又遠來餘未去
爾 又た 遠く来り 余 未だ去らず
高堂清淚幾時乾
高堂の清淚 幾時か乾く

【語釈】

○靖公…丁密。東漢の蒼梧岑溪の人、性至孝で清廉な人。○兀坐…高々と坐る。ぼんやりと坐る。○歸計…家に還る計画。○百八灘…多くの早瀬。○高堂…父母。

★青陽峽

青陽峽

清 宋 琬

夾岸長楊接翠微
岸を 夾む長楊 翠微に接し
亂流高下見柴扉
乱流 高下し 柴扉を見る
空山十月無冰雪
空山 十月 冰雪無く
紅葉叢中蛺蝶飛
紅葉 叢中 蛺蝶飛ぶ

【語釈】

○青陽…安徽省池州市。○翠微…青々とした山。○柴扉…柴で作った粗末な門。○叢中…草むらの中。○蛺蝶…チョウチョウ。

★ 過洞庭

洞庭を過ぐ

明 李敬

湖水連雲秋色清

湖水雲に連つて 秋色清し

西風況是客中行

西風 況んや是れ 客中行なるをや

不堪揺落君山樹

堪えず 揺落す 君山の樹

飛入湘江作雨聲

湘江に飛び入り 雨声と作る

【語釈】

○洞庭：洞庭湖。湖南省北東部にある淡水湖。○秋色：秋景色。○西風：秋風。○客中行：旅の途中。○揺落：揺れ落ちる。○君山：洞庭湖中にある山。○湘江：洞庭湖に注ぐ長江右岸の支流。湖南省最大の川。

★ 南還至横浦驛前與程五別處

清 彭孫適

南に還り横浦おうほえき驛に至る 前に程五ていごと別れし処

憶向清秋採白蘋

憶う 清秋に向つて 白蘋はくひんを採る

今来江上值殘春

今来 江上 殘春あに値う

一從横浦三年別

一たび 横浦おうり 三年の別れに従い

南北俱為萬里人

南北 俱ともに 万里の人と為る

【語釈】

○横浦驛：不祥。○程五：不祥。○清秋：清く爽やかな秋。○白蘋：しろいなずな。

★ 江上

江上

清 王士禛

吳頭楚尾路如何

吳頭楚尾路如何ごとうそび いかん

烟雨秋深暗白波

煙雨秋深く白波暗し

晚趁寒潮渡江去

晩に寒潮を趁おい江を渡りて去る

滿林黄葉雁聲多

満林の黄葉 雁声多し

【語釈】

○吳頭楚尾：江蘇省、湖南省、湖北省一帯。○煙雨：霧雨。

（参考文献）『中国詩人撰集二―13』

★ 夜雨題寒山寺寄西樵禮吉

清 王士禛

夜雨寒山寺に題し 西樵・礼吉に寄すせいしやう れいきち

日暮東塘正落潮

日暮 東塘 正に落潮

孤篷泊處雨瀟瀟

孤篷 泊まる処 雨瀟々しょうしょうたり

疎鐘夜火寒山寺

疎鐘 夜火 寒山寺

記過吳楓第幾橋

過ぐるを記す 吳楓 第幾橋ごふう

【語釈】

○寒山寺：江蘇省蘇州市姑蘇区にある臨濟宗の仏教寺院。○西樵：王士禛。王士禛の長兄。○禮吉：王士禛。王士禛の仲兄。○落潮：引き潮。○孤篷：孤舟。○瀟瀟：風雨の寂しく降る（吹く）音のさま。○第幾橋：多くの橋。

★ 荆山口待渡

荆山口 渡るを待つ

清

王士禛

西連豊沛走中原

西のかた 豊沛ほうはいに連つて 中原を走り

風色蕭蕭野渡昏

風色蕭々しょうしやうとして 野渡やとくわ昏し

一望孤城天接水

一望すれば 孤城 天 水に接す

亂山合沓是彭門

乱山 合沓ごうたう 是れ彭門ほうもん

【語釈】

○荆山：不確定。○豊沛：江蘇省徐州市沛県。○中原：黄河下流の平野地域。○風色：景色。○風色：景色。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○野渡：野原の渡。○合沓：合わせ重なる。○彭門：徐州市の門。

★ 雨中度故關

雨中 故関を渡る

清

王士禛

危棧飛流萬仞山

危棧きさん 飛流 万仞ばんじんの山

戍樓遙指暮雲間

戍樓せいじゆ 遙かに指さす 暮雲の間

西風忽送瀟瀟雨

西風 忽たちまち送る 瀟々しょうしやうの雨

滿路槐花出故關

満路の槐花かいか 故関を出ず

【語釈】

○故關：山西省太原府平定州の東にある関所。○危棧：危ない棧橋。○萬仞：非常な高さ。○戍樓：守りのための物見櫓。○西風：秋風。○瀟瀟：風雨の寂しく降る（吹く）音のさま。○槐花：エンジユの花。

★ 郎當驛雨中

郎當驛雨中ろうとうえきうちゅう

清 王士禛

武連縣南雲氣遮

武連縣南ぶれんけんなん 雲氣遮さへきり

郎當驛北石槎牙

郎當驛北ろうとうえきほく 石槎牙しがたり

西風盡日濛濛雨

西風 尽日せいふう 濛濛もうもうの雨

開徧空山白芨花

開くこと徧あまねし 空山くうざん 白芨はくきゅうの花

【語釈】

○郎當驛：四川省梓潼県の宿場町。○雲氣：雲霧。○武連県：四川省広元市劍閣県。○槎牙：角張ったさま。○西風：秋風。○濛濛：霧や小雨で煙るようにもやっとしたさま。○空山：人気のない山。○白芨：ラン科の多年草。

★ 嘉陵江上憶家

嘉陵江上家かりようこうじょうを憶おもう

清 王士禛

自入秦關歲月遲

秦關しんかんに入りて自より 歲月しげつ遅し

棧雲隴樹苦相思

棧雲さんうん 隴樹ろうじゆ 苦ねんごろに相思あいおもう

嘉陵驛路三千里

嘉陵驛路かりようえきろ 三千里

處處春山叫畫眉

処々しよしよの春山はるざん 画眉がび叫なぶ

【語釈】

○嘉陵江：甘肅省から陝西省を通り四川省へと流れる大きな川で、重慶市で長江に合流する。○秦關：関中の地。○棧雲：高い棧道。○隴樹：辺塞の樹木。○嘉陵驛：四川省南充市嘉陵区。○畫眉：画眉鳥。

(参考文献)

『漢詩大系 23』

★途中逢入京使口占

途中京に入る使に逢う口占す

清 曹申吉

連朝風雨百重山

連朝の風雨 百重の山

始信荆門道路艱

始めて信ず 荆門 道路の艱きを

逢着舊鄰煩寄訊

旧鄰に逢着し 寄訊 煩りなり

唯有秋風送馬蹄

唯だ秋風の馬蹄を送る有るのみ

【語釈】

○口占：書かないで作った即興の詩。○連朝：連日。○荆門：湖北省荊門市。○逢着：たまたま逢う。○寄訊：尋ねること。

★早發黃州

早に黃州を發す

清 孫蕙

連朝雨雪歲將蘭

連朝の雨雪 歲將に 蘭ならんとす

枕畔江聲永夜寒

枕畔の江声 永夜寒し

夢裏分明拜家慶

夢裏 分明に 家慶を拜す

渾忘身在古齋安

渾て 忘身 古齋安に在り

【語釈】

○黃州：湖北省黃岡市。○將：「まさにくせんとす」と読み、「いまにもくしそうである」の意。○蘭：終わる。○枕畔：枕辺。○永夜：夜通し。○夢裏：夢の中。○分明：はっきりりと。○拜家慶：家に帰って家族の長を拜すること。○古齋安：？

★ 春日莊浪看雪

春日 莊浪に雪を見る

清 李唵慈

蕭蕭風雪下千巒

蕭々たる風雪 千巒を下る

客裏相看淚不乾

客裏 相看着 淚乾かず

欲典羊裘沽好酒

羊裘を典して 好酒を沽わんと欲し

卻愁明日又春寒

却って愁う 明日又 春寒なるを

【語釈】

○莊浪：甘肅省平涼市莊浪県。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。
○千巒：多くの嶺。○客裏：旅の途中。○羊裘：羊の皮で作ったかわごころも。○典：質に入
れる。○春寒：春先のうすら寒さ。

★ 榆次道中

榆次道中

清 葉映榴

路出榆關西復西

路は出ず 榆関 西復た西

荒原白草怪禽啼

荒原 白草 怪禽啼く

經行百里無人跡

經行 百里 人跡無く

惟有秋風送馬蹄

惟だ 秋風の 馬蹄を送る有るのみ

【語釈】

○榆次：山西省晋中市榆次区。○榆関：北方の辺塞。○白草：北地に生える白い草。○經
行：行程中の径路。

★舟泊廣陵

舟 廣陵に泊す

清 孫 蕙

横塘草碧竹煙涼

横塘 草 碧にして 竹煙涼し

樹帶風鳥繞蜀岡

樹帶 風鳥 蜀岡を繞る

二十四橋何處問

二十四橋 何れの処か問わん

廣陵城下月如霜

廣陵城下 月霜の如し

【語釈】

○廣陵：江蘇省揚州市。○竹煙：竹林中の靄霞。○蜀岡：江蘇省揚州市蜀岡区。○二十四橋：江蘇省揚州市江都県にあった二十四の橋。

★松陵舟中作

松陵舟中の作

清 余 懷

一河春水漲桃花

一河の春水 桃花に漲り

小艇隨風日未斜

小艇 風に随つて 日未だ斜ならず

胡蝶紛紛滿芳草

胡蝶 紛々 芳草に満ち

獨憐遊子不還家

獨り憐む 遊子の家に還らざるを

【語釈】

○松陵：江蘇省の太湖東岸にある町。○春水：春の雪解け水。○紛紛：乱れ飛び散るさま。○芳草：かおりぐさ。○遊子：旅人。

★ 江行

江行

清 朱克生

江頭水漲没沙堤	江頭水漲り沙堤没す
風外征帆落日低	風外の征帆落日低し
細雨寒潮人不見	細雨寒潮人見えず
兩山叢竹鷓鴣啼	兩山の叢竹鷓鴣啼く

【語釈】

○江頭…川辺。○沙堤…砂の堤。○征帆…遠行する舟。○叢竹…叢がる竹。

★ 憶橘

橘を憶う

清 張玉裁

朱實垂垂葉尚青	朱実垂々葉尚お青し
故山千樹未凋零	故山千樹未だ凋零せず
相思不隔長淮水	相思う隔たず長淮の水
一夜鄉心落洞庭	一夜の郷心洞庭に落つ

【語釈】

○朱實…紅色の実。○垂垂…垂れ下がっているさま。○故山…故郷の山。○凋零…萎み落ちる。○長淮…淮河。黄河と長江の間を東西に流る中国第三の川。○郷心…故郷に帰りたいと思う心。○洞庭…洞庭湖。湖南省北東部にある淡水湖。

★ 江行

江行

清・傅昂霄

白雲明月漾微瀾
空外千聲落遠灘
燕子磯頭中夜起
一天星斗大江寒

白雲明月 微瀾に漾う
空外の千声 遠灘に落つ
燕子磯頭 中夜に起き
一天の星斗 大江寒し

【語釈】

○微瀾…さざ波。○空外…遙かな天空。○遠灘…遠い早瀬。○磯頭…磯のほとり。○星斗…満天の星。

★ 蘭溪道中

蘭溪道中

清・傅昂霄

青山隱隱雉樓低
夾岸垂楊綠始齊
滿眼春愁消不得
一帆煙雨過蘭溪

青山 隱々 雉樓低し
岸を夾む 垂楊 緑始めて斉う
滿眼の春愁 消し得ず
一帆煙雨 蘭溪を過ぐ

【語釈】

○蘭溪…浙江省金華市蘭谿市。○隱隱…多いさま。○雉樓…城楼。○滿眼…見渡す限り。○春愁…春の日になんとなく気がふさがりもの悲しく感じられること。○煙雨…霧雨。

★發蒼溪

蒼溪を発す

清葉變

客心如水水如愁

客心 水の如く水 愁の如し

容易歸帆趣疾流

容易 歸帆 疾流を趣う

忽訝船窗送吳語

忽ち訝る 船窓 吳語を送るを

故山月已掛船頭

故山 月 已に 船頭に掛く

【語釈】

○蒼溪…浙江省湖州市。○客心…旅心。○疾流…急流。○吳語…吳の地方の言葉。○故山…故郷の山。○船頭…舟のへさき。

★渡錢塘

錢塘を渡る

清 朱彝尊

渡口乘潮漾北風

渡口 潮に乗じ 北風に漾う

輕舟如馬泝江東

輕舟 馬の如く 江東を泝る

明朝又是山陰道

明朝 又た是れ 山陰道

身在千巖萬壑中

身は 千巖萬壑の中に在り

【語釈】

○錢塘…錢唐江。浙江（杭州湾に注ぐ川）の下流。○渡口…渡し場。○輕舟…速度の速い小舟。○山陰道…浙江省の県名。○千巖萬壑…多くの山と谷。

自贛州至南安灘行口號

贛州自り南安に至り灘行す口号

清 朱彝尊

一片風帆溯急流

一片の風帆 急流を溯る

船人勸道莫深愁

船人 勸めて道う 深愁する莫れと

只應預想歸程樂

只だ 応に 預め 帰程の樂なるを想うべし

柔櫓嘔唾下吉州

柔櫓 嘔唾 吉州を下る

【語釈】

○贛州：江西省贛州市。○江西省贛州市大餘県。○口號：書かないで作った即興の詩。○風帆：帆掛け船。○船人：船夫。○深愁：深く心配する。○應：「まさにくすべし」とよみ「きつとくした方がよい」「きつとくすべきである」の意。○柔櫓：船槳を操る時の声。○嘔唾：舟や車の音。

★ 十八灘

十八灘

清 徐 鈞

萬壑千峰送客舟

萬壑千峰 客舟を送る

槎牙怪石水交流

槎牙 怪石 水 交流す

嶺猿莫更啼深樹

嶺猿 更に 深樹に啼く莫れ

只聽灘聲已白頭

只だ 灘声を聴きて 已に白頭

【語釈】

○十八灘：贛江（江西省を南北に貫く江西最大の川）の十八の險灘。○萬壑千峰：多くの谷と峰。○客舟：旅人を乗せた舟。○槎牙：飛び出した石。○嶺猿：峰にいる猿。○灘聲：早瀬の音。

★金華道中

金華道中きんかどうちゆう

清 邱象隨

一徑煙雲鳥道還 一徑の煙雲 鳥道還る
高盤如黛越中山 高盤 黛の如し 越中の山
不知過盡山多少 知らず 過ぎ 尽くして 山の多少なるを
猶在啼猿萬木間 猶お 啼猿 万木の間に在り

【語釈】

○金華…浙江省金華市。○煙雲…雲と霞。○鳥道…鳥しか通わないような道。○越中…越の地方。

★題旅店

旅店に題す

清 王九齡

曉覺茅簷片月低 曉に覚むれば 茅簷 片月低し
依稀鄉國夢中迷 依稀 たる 郷国 夢中に迷う
世間何物催人老 世間 何物ぞ 人の老いを催す
半是雞聲半馬蹄 半ばは 是れ 雞聲 半ばは 馬蹄

【語釈】

○旅店…旅館。○茅簷…茅吹きの簷。○片月…片割れ月。○依稀…ぼんやりした。○郷国…故郷。

★ 白堤雨泊

白堤雨泊 はくていうはく

清 鄧漢儀

白堤春盡水連空

白堤 春 尽きて 水 空に連なる

吳榜頻吹柳絮風

吳榜 頻りに吹く 柳絮の風

匆匆酒醒眠不得

匆匆 酒醒めて 眠り得ず

五更殘雨打船篷

五更 殘雨 船篷を打つ

【語釈】

○白堤：浙江省杭州市白堤。○吳榜：不祥。○匆匆：慌ただしくて落ち着かないさま。○五更：明け方。○船篷：舟の窓の篷。

★ 溪西早行

溪西早行 けいせいそうこう

清 黃 始

溪上人家秋水生

溪上の人家 秋水生ず

孤舟常自五更行

孤舟 常に 五更自り行く

一聲啼鳥半江月

一声の啼鳥 半江の月

纔到西山天欲明

西山に纔り到れば 天明ならんと欲す

【語釈】

○早行：朝早く出発すること。○五更：夜明け方。

★ 吳江舟夜

吳江舟夜

清 汪洋度

水驛迢遙望不分

水驛 迢遙 望分たず

愁心落葉共紛紛

愁心 落葉 共に紛々

扁舟一夜搖江月

扁舟 一夜 江月を揺がし

入夢吳歌斷續聞

夢に入る吳歌 斷續して聞く

【語釈】

○吳江：江蘇省蘇州市吳江。○水驛：水辺の宿場。○迢遙：遠く遙かなこと。○紛紛：乱れ飛ぶさま。○扁舟：小舟。○江月：川に映っている月。○吳歌：長江下流地方の歌。

★ 晚泊

晩に泊す

清 彭始奮

夜色微茫水驛孤

夜色 微茫として 水驛孤なり

遙遙燈火映寒蘆

遙々たる灯火 寒蘆に映ず

愴然獨夜家十里

愴然 独夜 家十里

煙雨空江聞鷓鴣

煙雨 空江 鷓鴣を聞く

【語釈】

○夜色：夜の景色。○微茫：微かではっきりみえないさま。○水驛：船旅用の宿場街。○遙遙：他と関わりなくゆったりしたりしたさま。○愴然：痛み悲しむさま。○独夜：独り寝の夜。○煙雨：霧雨。○空江：物影の無い川。

★ 將出都赴滇却寄吳中諸友

清 鄂 爾

將に都を出で滇に赴んとし却つて吳中の諸友に寄す

尺書裁罷又重拈

尺書裁すを罷めて 又た重拈す

細字旁添手自緘

細字旁添手自ら緘ず

此去滇陽真萬里

此を去りて 滇陽真に万里

夢魂不易到江南

夢魂易からず 江南に到るは

【語釈】

○吳中…江蘇省吳県一帶。○尺書…書信。○滇陽…不祥。○夢魂…夢の中で魂。○江南…長江中下流の南岸地域。

★ 登蕪湖浮屠

蕪湖浮屠に登る

清 查慎行

落帽家山記幾巡

落帽家山記す幾巡

弟兄南北各傷神

弟兄南北 各神を傷む

茱萸明日重陽酒

茱萸明日 重陽の酒

五處登高各一人

五處登高するは 各一人

【語釈】

○蕪湖…安徽省馬鞍山市蕪湖。○浮屠…仏塔。○落帽…風で帽子を落とす。重陽の節句に、晋の孟嘉が風で帽子を失い、人の嘲りに文を以て答えたという故事。○家山…故郷。○神…心。精神。○茱萸…グミに似た植物。重陽の節句に登高し頭に挿して邪気を払う。○五處…五箇所。

★舟泊無錫

舟無錫に泊す

清 張延璐

九龍山色何媚嫵

九龍の山色 何ぞ媚嫵たる

坐見白雲生縷縷

坐して見る 白雲の縷々として生ずるを

空濛散作波上煙

空濛 散じて 波上の煙と作る

篷窓一夜蕭蕭雨

篷窓 一夜 蕭々の雨

【語釈】

○無錫：江蘇省無錫市。○九龍山：浙江省嘉興市九龍山。○山色：山の景色。○媚嫵：なまめかしい。○縷縷：糸のように細く長く続くさま。○空濛：小雨が降ったり霽が立ちこめたりして薄暗いさま。○篷窓：舟の篷窓。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★南還口號

南還口號

清 沈徳潜

輶車獨去潞河東

輶車 独り去る 潞河の東

回首長安夕照紅

首を回らせば 長安 夕照紅なり

無限離情難忘處

限り無き離情 忘れ難き処

西山蒼翠夢魂中

西山 蒼翠 夢魂の中

【語釈】

○輶車：一人乗りの小さな車。○潞河：不祥。○離情：離別の情。○蒼翠：青緑。○夢魂：夢の中で魂。

★ 夜泊聴雨

夜泊雨を聴く

清 沈徳潜

入夜篷窓罨散絲
夜に入りて篷窓散糸を罨う
深更殘溜滴遲遲
深更殘溜滴ること遅々たり
夢餘忘却空江畔
夢余忘却す空江の畔
猶認春明聴漏時
猶お春明を認め漏時を聴く

【語釈】

○篷窓…舟の篷窓。○散絲…まき散らした糸。○深更…夜更け。○夢餘…夢が覚めた後。
○春明…明媚な春光。○漏時…水時計が時を告げる音。

★ 雨泊話舊

雨泊旧を話す

清 瀋徳潜

寒雨蕭蕭夜打篷
寒雨蕭々夜篷を打つ
篷窗相對一燈紅
篷窓相對して一灯紅なり
十年無限存亡感
十年限り無し存亡の感
併入空江話雨中
併せて入る空江雨に話する中

【語釈】

○蕭蕭…主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○篷窗…舟の篷窓。○空江…物影の無い川。

★秦州舟次

秦州舟次 しんしゅうしゅうじ

清 李 薺

煙燈月暈影微微
煙灯 月暈 影 微々たり
辯得宵行草上飛
弁じ得たり 宵行の草上に飛ぶを
垂髮女兒知盪槳
垂髮の女兒 槳を盪かすを知る
不辭風露送人歸
辭せず 風露の 人の歸るを送るを

【語釈】

○秦州：甘肅省天水市秦州区。○舟次：船泊り。○煙灯：霧のかかっている灯。○月暈：月のかさ。○宵行：螢火。○垂髮：下げ髪。○槳：船をこぐ櫂。

★馬上口占

馬上口占 ばじょうこうせん

清 陸叢桂

夕陽禾黍晚秋風
夕陽 禾黍 晚秋の風
霜氣纒深葉已紅
霜氣 纒に深くして 葉 已に紅なり
無數溪流添夜雨
無數の溪流 夜雨を添え
青山一路白雲中
青山 一路 白雲の中

【語釈】

○口占：書かないで作った即興の詩。○禾黍：稻とキビ。○霜氣：骨を刺すような寒気。

★ 豊潤道中感懐

豊潤道中感懐

清 李應薦

秋山遠近樹高低

秋山遠近樹高低

茅屋重重枕古溪

茅屋重々古溪に枕す

夢裏分明東海曲

夢裏分明東海の曲

却驚身在北平西

却って驚く身は北平の西に在るを

【語釈】

○豊潤：河北省唐山市豊潤区。○茅屋：茅吹きの家。○重重：重なり合うさま。○夢裏：夢の中。○分明：はっきりとしているさま。○北平：北京。

★ 江上遇亦于大兄

江上亦た于大兄に遇う

清 徐白

百種愁情一寸腸

百種の愁情一寸の腸

更罹多難又無郷

更に多難に罹りて又た郷無し

與君一世為兄弟

君と一世兄弟と為る

只是相逢在路傍

只だ是れ相逢うは路傍に在り

【語釈】

○于大兄：不祥。○愁情：悲哀の情思。

★松塘舟次有感

松塘舟次感有り

清 王日祥

芳州鼓楫未嫌遲
欲采靡蕪寄所思
兩岸綠陰人不見
滿船離恨夕陽時

芳州 楫を鼓して 未だ遅きを嫌わず
靡蕪を采りて 所思を寄せんと欲す
兩岸の綠陰 人見えず
滿船の離恨 夕陽の時

【語釈】

○松塘：不祥。○舟次：船泊まり。○芳州：美しい中洲。○靡蕪：おんなかずら。○所思：…思うこと。○離恨：離別の恨み。

★江上

江上

清 徐薊坡

楚天雲樹隔鄉關
隱約帆檣白下還
遙望寒烟秋色裏
數峰青峭夕陽山

楚天の雲樹 鄉関を隔つ
隱約たる帆檣 白下より還る
遙かに望む 寒煙 秋色の裏
數峰の青峭 夕陽の山

【語釈】

○楚天：湖北省・湖南省一帯の空。○鄉關：郷土。○隱約：ぼんやりして分明でない。○帆檣：帆掛け船。○白下：南京西北にある地名。○寒煙：寒い靄。○秋色：秋景色。○青峭：青く高く険しい山。

★ 瓜州夜泊

瓜州夜泊

清 徐薊坡

微茫漁火出江干
大海潮回走急湍
一葉孤篷宿烟雨
蕭蕭木落雁聲寒

微茫たる漁火 江干を出ず
大海潮 回りて 急湍を走る
一葉の孤篷 宿煙の雨
蕭々として木落ち 雁声寒し

【語釈】

○瓜州：甘肅省酒泉市瓜州県。○微茫：ぼんやりしたさま。○江干：かわばた。○一葉：一艘。○孤篷：孤舟。○宿烟：夜来の煙霧。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★ 晚入山東界

晚に山東界に入る

清 施朝幹

山通青充晚陰陰
却望鄉關烟水深
舟子不須輕解纜
今宵猶得聽南音

山は 青充に通じて 晚陰々
却つて 郷関を望めば 煙水深し
舟子 須く 軽く解纜せざるべし
今宵 猶お 南音を聴き得たり

【語釈】

○山東界：太行山脈の東方の意。山東省。○青充：不祥。○陰陰：空が曇って暗いさま。○郷關：故郷。○烟水：靄のかかった川。○須：「すべからくすべし」と読み、「きつとくしなればならない」「きつとくすべきである」の意。○解纜：とも綱をとく。○南音：南方の音楽。

★ 聞琵琶

琵琶を聞く

清 施朝幹

秋風蕭殺草初黃
盡日行人望故鄉
一曲琵琶數行淚
椅樓今夜月如霜

秋風 蕭殺し草初めて黄なり
尽日 行人 故郷を望む
一曲の琵琶 数行の涙
樓に椅れば 今夜月霜の如し

【語釈】

○蕭殺：草木が枯れ落ちるさま。○盡日：一日中。○行人：旅人。

★ 梁溪道中

梁溪道中

清 范雲鵬

秋來重放秣陵舟
擬過梁溪續舊遊
遙望九龍山色好
林端塔影暮煙浮

秋來 重ねて放つ 秣陵の舟
梁溪を過ぎて 旧遊を続がんと擬す
遙かに望む 九龍 山色の好きを
林端の塔影 暮煙浮ぶ

【語釈】

○梁溪：江蘇省無錫市梁溪区。○秋來：秋になってから。○秣陵：南京市にある地名。○九龍：湖南省常德市九龍山。○山色：山の景色。○暮煙：夕靄。

★ 梁溪道中

梁溪道中りょうけい

清 范雲鵬

打頭風急浪花颯

打頭風急にして浪花颯らうかあらし

小市維舟挈玉壺

小市舟を維つなぎ玉壺を挈ひっせぐ

買得高橋魚數尾

買得たり高橋魚數尾

儘拌夜雨洒菰蒲

儘じしはん拌す夜雨の菰蒲こほを洒あらうを

【語釈】

○梁溪…江蘇省無錫市梁溪区。○浪花…波頭。○玉壺…酒壺の美称。○儘拌…任せてすておく。○菰蒲…まこもとガマ。

★ 山窓

山窓

清 張韶庭

空海入夜雨蕭蕭

空海夜に入りて雨蕭々しやうしやう

別盡弧燈漏轉遙

弧灯を別べつじん尽して漏ろう転た遥はるかなり

為怕客中聽不得

為おそに怕る客中かくちゆう聽くことを得ざるを

小窓先日剪芭蕉

小窓先日芭蕉せんを剪す

【語釈】

○空海…空と海。○蕭蕭…主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○別盡…別れる。○漏…水時計。○客中…旅の途中。

★ 寄内

内に寄す

清 王昶

澄江楓落雁初飛

澄江 楓落ちて 雁初めて飛び

杳杳紅樓隔翠微

杳々たる紅樓 翠微を隔つ

料得故園砧杵急

料り得たり 故園 砧杵の急なるを

一燈清淚寄寒衣

一灯の清淚 寒衣を寄す

【語釈】

○内：妻。○澄江：澄んだ川。○杳杳：遙かに遠いさま。○翠微：山の中腹の緑色の部分。○料得：推量することができる。○故園：故郷。○砧杵：衣うつ砧。○寒衣：冬の衣。

★ 錢塘曉發

錢塘 曉に発す

清 王元勳

殘月盈盈傍水明

殘月 盈々 水に傍いて 明らかなり

流波淅淅覺潮生

流波 淅々 潮の生ずるを覚ゆ

孤舟客夢驚初斷

孤舟 客夢 驚きて初めて断ゆ

何處鯨鐘報曉聲

何れの処の鯨鐘か 曉を報ずる声

【語釈】

○錢塘：浙江省杭州市錢塘県。○盈盈：しなやかなさま。○淅淅：風や鈴などの寂しい音。○客夢：旅先での夢。○鯨鐘：釣り鐘。

★ 雨夜舟中

雨夜舟中うやせんちゆう

清 王元勳

湖煙漠漠放孤舟

湖煙漠々はくばく 孤舟を放つ

暮雨蕭蕭動客愁

暮雨蕭々しよつしよつ 客愁を動かす

一夜雁鴻聲不斷

一夜雁鴻がんこう 声断えず

西風吹度白蘋州

西風吹き度る 白蘋州はくひんしゆう

【語釈】

○湖煙：湖に立つ霧。○漠漠：広々として果てしないさま。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○客愁：旅先での愁い。○雁鴻：かり。○西風：秋風。○白蘋州：白い浮き草のある中洲。

★ 湘中雜興

湘中雜興しやうちゆうざつしきゆう

清 王元勳

垂楊垂柳滿長堤

垂楊垂柳すいようすいりゆう 長堤に満つ

薄霧輕煙晚更迷

薄霧輕煙 晚更に迷う

三十六彎春草綠

三十六彎 春草緑なり

鷓鴣聲裏夕陽低

鷓鴣声裏しやこせいり 夕陽低し

【語釈】

○湘中：湘江（洞庭湖に注ぐ長江右岸の支流）のあたり。○雜興：さまざまな感興。○輕煙：かすかな霞。○三十六彎：多くの湾。

★ 五溪雜吟

五溪雜吟

清

王元勳

懸崖峭壁倚空橫

懸崖 峭壁 空に倚りて横わる

下映澄潭徹底清

下は澄潭に映じて 底に徹して清し

山到辰溪隨處好

山は辰溪に到りて 随処好し

天涯寂寞不知名

天涯 寂寞 名を知らず

【語釈】

○五溪：湖南省常德県。○懸崖：高く聳える障壁のような山崖。○峭壁：壁のように険しい崖。○澄潭：澄んだ淵。○辰溪：湖南省懷化市辰溪県。○天涯：空の果て。○寂寞：静かで寂しいさま。

★ 雪川道中和吳東白

雪川道中 吳東白に和す

清

王大壯

孤城迢遞出平沙

孤城 迢遞として 平沙を出す

夾岸青山帶晚霞

岸を 夾みて 青山 晚霞を帯ぶ

一自峰煙人散後

一たび 峰煙 人散ずるの後より

牆頭惟見野棠花

牆頭 惟だ見る 野棠の花

【語釈】

○雪川：浙江省湖州市。○吳東白：不祥。○迢遞：はるかに遠いさま。○平沙：砂漠。○晚霞：日が沈んだ後の餘暉。○峰煙：山にかかったもや。○牆頭：垣根の上。

★ 巴陵道中

巴陵道中 はりょうどうちゆう

清 高 珩

螢火高低照遠明
螢火 高低 遠きを照らして 明らかなり
露涼河漢已西橫
露 涼しくして 河漢 已に 西に横たわる
夢回不識巴陵道
夢 回 かえりて 識 しらず 巴陵 はりょうの道
絡緯分明故國聲
絡緯 らくい 分明 故國の聲

【語釈】

○巴陵：湖南省岳陽市一帶。○河漢：銀河。○絡緯：コオロギ。○分明：はっきりしている。○故國：故郷。

★ 涼暑夜聞風聲因憶去年此日泊舟江上

清 高 珩

涼暑夜 風声を聞き 因りて 去年 此の日 舟を江上に泊するを憶う

安慶城東晚泊船
安慶城東 あんけいじやうとく 晩に船を泊す
江風霜柝夜蕭然
江風 霜柝 そうたく 夜 蕭然 しやうぜんたり
分明湖海餘聲在
分明に 湖海 余声在り
又向長安攪客眠
又た長安に向つて 客眠 かくみんを攪 みだす

【語釈】

○安慶城：安徽省 安慶市。○霜柝：霜の降りる夜の拍子木の音。○蕭然：ものさびしいさま。○分明：はっきり。○客眠：旅先での眠り。

★ 錦陽川道中即事

錦陽川道中即事

清 高 瑾

黄昏留宿在茅亭

黄昏 宿に留つて 茅亭に在り

天上明河淡幾星

天上の明河 淡幾星

穿竹過物聲滴瀝

竹を穿ち 物を過ぎ 声 滴瀝

石泉一夜枕邊聽

石泉 一夜 枕辺に聽く

【語釈】

○錦陽川：山東省濟南市南部の山間地域を流れる川。○即事：事にふれて、その場に応じて詩を作ること。○黄昏：たそがれ。○茅亭：茅吹きのみや。○明河：明るい銀河。○惣：束ねた稲。○滴瀝：滴が垂れる音。○枕邊：枕元。

★ 書蘆溝店壁

蘆溝の店の壁に書す

清 王尊美

蟲聲切切報新秋

虫声 切々 新秋を報す

月落燈昏四壁愁

月落ち 灯 昏く 四壁愁う

殘夢未成催上馬

殘夢 未だ成らず 上馬を催す

一天涼雨過蘆溝

一天の涼雨 蘆溝を過ぐ

【語釈】

○蘆溝：北京市豊台区。○切切：虫の声がたえだえに続くさま。○殘夢：明け方になってうとうとしながらも見続けている夢。

★ 渡汶河

汶河を渡る

清 田同之

汶水洋洋碧玉流

汶水 洋洋 碧玉流る

長堤官柳颺清秋

長堤 官柳 清秋颺る

征人無那銷魂處

征人 那んするとも無く 銷魂する処

落日西風古渡頭

落日 西風 古渡の頭

【語釈】

○汶河…山東省中部を流れる川。○洋洋…水などの満ちあふれているさま。○官柳…大通りに植えてある柳。○征人…旅人。○無那…どうしよもない。○銷魂…魂が体から離れるほどの悲しみ。○古渡…古い渡し場。

★ 過儀微縣

儀微県を過ぐ

清 田同之

布帆無恙大江流

布帆 恙無く 大江流る

兩岸蕭蕭蘆荻秋

兩岸 蕭々 蘆荻秋なり

一夜濤聲喧客夢

一夜 濤声 客夢に 喧しく

曉風殘月過真州

曉風 殘月 真州を過ぐ

【語釈】

○儀微縣…不祥。○布帆…帆掛け船。○蕭蕭…主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○蘆荻…アシとオギ。○客夢…旅先での夢。○真州…江蘇省儀微市。

★ 趙北口

趙北口

清 田同之

十里長堤萬柳垂
十里の長堤 万柳垂る
茫茫淀尾望無涯
茫茫たる 淀尾 望涯無し
西風猶憶秦郵路
西風猶お憶う秦郵の路
蟹舍魚莊夕陽時
蟹舍 魚莊 夕陽の時

【語釈】

○趙北口…河北省保定市趙北口鎮。○茫茫…広大なさま。○淀尾…湖の果て。○西風…秋風。○秦郵…江蘇省 高郵県。○蟹舍…漁家。○魚莊…漁家。

★ 趙北口

趙北口

清 高景光

碧湖如鏡影迢迢
碧湖 鏡の如く影 迢々たり
兩岸人家間柳條
兩岸の人家 柳条に間う
累似鱸鄉亭畔路
累似たり 鱸郷 亭畔の路
夕陽秋水小紅橋
夕陽 秋水 小紅橋

【語釈】

○趙北口…河北省保定市趙北口鎮。○迢迢…遙かなさま。○鱸郷…江南の水郷。

★春日歸泊閩門

春日歸りて閩門に泊す

清樓綺

年年蹤跡感漂蓬

年々 蹤跡 漂蓬の感

冷落柴門煙雨中

冷落たる柴門 煙雨の中

燕子歸來迷舊壘

燕子 歸來して 旧壘に迷い

桃花何處笑春風

桃花 何れの処か 春風に笑う

【語釈】

○閩門…江蘇省蘇州市城西の地。○蹤跡…往来。○漂蓬…風に吹かれて漂うヨモギ。あてどない漂泊者の象徴。○冷落…物寂しい。○柴門…柴で作った粗末な門。○煙雨…霧雨。○旧壘…昨年作った巢。

★再抵東阿

再び東阿に抵る

清 吳象弼

煙中山色水邊村

煙中の山色 水辺の村

草樹蒼黃落日昏

草樹 蒼黄 落日昏し

白雁丹楓兩蕭索

白雁 丹楓 両つながら蕭索

騎驢重過小雲門

驢に騎りて 重ねて過ぐ 小雲門

【語釈】

○東阿…東の隅。○煙中…霞や霧の中。○山色…山の景色。○蕭索…物寂しいさま。○雲門…山門。

★ 贛州道中

贛州道中 かもしゅう

清 袁 枚

樟樹迷離密不分
樟樹 しょうじゆ 迷離 めいり 密にして分たず

幾聲雞犬樹中間
幾聲 しよせい 雞犬 けいけん 樹中 じゆちゆう に聞く

濛濛一縷茅簷白
濛濛 もうもう 一縷 いちる 茅簷 ちたん に白し

知是炊煙是晚雲
知 ち 是 こ 炊煙 すいえん か 是 こ 晚雲 ばんうん か

知る 是れ炊煙か 是れ晚雲か

【語釈】

○贛州：江西省贛州市儲潭鎮。○樟樹：くすのき。○迷離：模糊としているさま。○濛濛：（雨や小雨で）煙るようにぼおっとしているさま。○一縷：一筋の糸。○茅簷：茅製の簷。

★ 江左客中作

江左客中の作 かくちゆう

清 呂 潛

横江閣外數帆檣
横江閣外 おうこうかくがい 數帆檣 すうはんしやう

立盡西風鬢欲霜
立 たち 盡 じん 西風 せいふう 鬢 びん 欲 よく 霜 しも

只有鄉心不東去
只 ただ 有 あ 鄉心 きやうしん 不 な 東去 とうきよ

蚤隨煙月上瞿唐
蚤 つと に 煙月 えんげつ に 隨 つ 瞿唐 くとう に 上 のぼ る

横江閣外 數帆檣

立 たち 盡 じん 西風 せいふう 鬢 びん 霜 しも 欲 よく 霜 しも たらんと欲す

只 ただ 有 あ 鄉心 きやうしん の 東去 とうきよ せざる有り

蚤 つと に 煙月 えんげつ に 隨 つ 瞿唐 くとう に 上 のぼ る

【語釈】

○横江閣：不祥。○帆檣：帆掛け船。○西風：秋風。○鄉心：故郷に帰りたいと思う心。
○蚤：朝早く。○煙月：おぼろ月。○瞿唐：瞿塘峽。長江三峽の一つ。

★舟中絶句

舟中絶句

清 顔光敏

舟開鎮遠大橋東
舟は開く 鎮遠 大橋の東
緑水青山宛轉流
緑水青山 宛も転流す
七十二橋瞬息過
七十二橋 瞬息に過ぎ
滿江風雨下辰州
滿江の風雨 辰州を下る

【語釈】

○鎮遠：貴州省黔東南鎮遠。○七十二橋：多くの橋。○辰州：湖南省懷化市沅陵県。

★戊寅正月六日再至胸城

戊寅正月六日再び胸城に至る

清 安 篁

去歲歸時雪沒腰
去歲 歸時 雪 腰を没す
重來殘雪未全消
重来 殘雪 未だ全くは消ぜず
東風委粟城邊路
東風 粟を委つ 城辺の路
春水溶溶上板橋
春水 溶々 板橋に上る

【語釈】

○胸城：不祥。○去歲：去年。○重来：再来。○東風：春風。○溶溶：水がさかんに流れるさま。

★ 江行

江行

清

雇宗秦

澄江如練客舟輕

澄江練の如く客舟輕し

楚水吳山新雨晴

楚水 吳山 新雨晴る

一片渚花浮動處

一片の渚花 浮動する処

白鷗斜帶夕陽明

白鷗 斜めに夕陽を帯びて 明かなり

【語釈】

○澄江：水の澄んだ川。○練：ねりぎぬ。○客舟：旅人を乗せた舟。○楚水：湖北省・湖南省の川。○吳山：揚州・荊州・交州地方の山。○渚花：渚に咲いた花。

★ 松陵道中

松陵道中

清

雇宗秦

數聲欸乃下輕艫

数声の欸乃 輕艫を下る

飛散波心鷺幾雙

飛散す波心 鷺幾双

正是篷窓高睡足

正に是れ 篷窓 高睡足り

一天幽夢落楓江

一天の幽夢 楓江に落つ

【語釈】

○松陵：江蘇省蘇州市松江。○欸乃：舟歌。○輕艫：輕舟。小舟。○篷窓：舟の篷窓。○高睡：熟睡。○幽夢：ぼんやりとかすかな夢。

★ 歸舟口號

歸舟口號

清 李 繩

濛濛雨氣冷侵衣

濛々たる雨氣冷衣を侵す

遙指吳江舊釣磯

遙かに指さす 吳江 旧釣磯

一路鵝鳩啼不住

一路 鵝鳩 啼いて住まず

綠楊影裏片帆歸

綠楊影裏 片帆歸る

【語釈】

○口號：書かないで作った即興の詩。○濛濛：煙るようにぼおつとしているさま。○吳江：江蘇省に属する県名。○釣磯：釣りをするときに腰掛ける石。○鵝鳩：鳩科の鳥。○片帆：孤舟。

★ 雨中過秀州

雨中 秀州を過ぐ

清 李 繩

樓影湖波枕碧空

樓影 湖波 碧空に枕す

魚莊蟹舍岸西東

魚莊 蟹舍 岸の西東

一聲欸乃知何處

一声の欸乃 知んぬ何れの処ぞ

棹入迷濛煙雨中

棹は 迷濛 煙雨の中に入る

【語釈】

○秀州：浙江省嘉興市。○魚莊：漁家。○蟹舍：漁家。○欸乃：舟歌。○迷濛：煙霧等で景色がはつきり見えないさま。○煙雨：こぬか雨。

★ 過樑溪

樑溪を過ぐ

清 徐洪鈞

東風作意送歸艫

東風意を作し 歸艫を送る

舟子吳歌盡短腔

舟子の吳歌 尽く短腔

一枕夢迴天已曙

一枕夢 迴れば 天 已に曙く

九龍峰影落篷窗

九龍峰影 篷窓に落つ

【語釈】

○樑溪：江蘇省無錫市梁溪区。○東風：春風。○歸艫：故郷に帰る舟。○舟子：船夫。○吳歌：江南の民謡。○短腔：話し方や節回しが短いこと。○一枕：一眠り。○夢迴：夢が覚める。○九龍峰：不祥。○篷窓：船の篷窓。

★ 早行

早行

清 徐 衡

身在層巒疊嶂間

身は 層巒疊嶂の間に在り

還聞空外水潺湲

還た聞く 空外 水 潺湲

忽然行到烟銷處

忽然として 行きて到る 煙の銷する処

擁出楊彭一帶山

擁し出だす 楊彭 一帶の山

【語釈】

○早行：朝早く出発すること。○層巒：重なった峰。○疊嶂：重なった山峰。○空外：野外。○潺湲：水が流れるさま。さらさら。○楊彭：不祥。

★ 廖家溝阻雨

廖家溝にて雨に阻まる

清 任大椿

蕭疎萩巷宿鸚鵡

蕭疎たる萩巷 鸚鵡に宿す

夢裏還家祇自知

夢裏 家に還つて 祇だ自ら知る

無限旅懷言不得

限り無き旅懷 言い得ず

一溪風雨泊舟時

一溪の風雨 舟の泊する時

【語釈】

○廖家溝…不祥。○蕭疎…寂寞。ひっそりとしてもさびしいさま。○萩巷…萩の生えたちまた。○鸚鵡…不祥。○夢裏…夢の中。○旅懷…旅の思い。

★ 道場山晚眺

道場山の晚眺

清 趙士冕

指點江城幾萬家

指点す 江城 幾万の家

歸帆點點日西斜

歸帆 点々 日は西に斜なり

故園遙憶三春月

故園 遥かに憶う 三春の月

滿地芳菲正落花

滿地の芳菲 正に落花

【語釈】

○道場山…不祥。○晚眺…夕方の眺め。○指点…指さす。○江城…川辺の街。○歸帆…帰って行く帆掛け船。○故園…故郷。○三春…晚春。○芳菲…盛んで美しい草花。

★道中紀事

道中紀事

清 陳魯章

月映湖光分外明
月は湖光に映じ分外に明かなり
蘆花影裏一舟横
蘆花影裏一舟横たわる
夜深聞有郷音在
夜深くして聞く郷音の在る有るを
暁起開篷問姓名
暁に起き篷を開き姓名を問う

【語釈】

○紀事…事を記録する。○分外…過分。○郷音…故郷のなまり言葉。○篷…船の窓の篷。

★銅陵夜泊

銅陵夜泊

清 岳滋園

櫓聲乍住月初明
櫓声 乍ち住み 月初めて明らかなり
散步江皋宿雁驚
散步 江皋 宿雁驚く
忽聴鄰舟故郷語
忽ち聴く 隣舟 故郷の語
縦非相識也關情
縦い 相識にあるがとも 也た情に關す

【語釈】

○銅陵…不祥。○江皋…川辺のさつき。○宿雁…巢に宿っている雁。○相識…知り合い。

★五月九日舟中偶成

五月九日舟中偶成

清 張若駒

水窗晴掩日光高
水窓晴掩おおいて日光高し
河上風寒正長潮
河上風寒くして正うしろに潮ちゆうを長ながず
忽忽夢迴憶家事
忽々こつこつ夢迴かえりて家事を憶う
女兒生日是今朝
女兒の生日こ是こんれ今朝ちゆう

【語釈】

○忽忽…心のぼんやりしているさま。○夢迴…夢が覚める。○生日…誕生日。○今朝…今日。

★行路難

行路難こうろなん

清 鄭燮

天明始覺滿身霜
天明始めて覚ゆ満身の霜
抖擻征衫曳馬韁
抖擻とうてつ征衫せいさん馬韁ばきようを曳ひく
茅店煖烟噓冷面
茅店ちてんの煖煙だんえん冷面れいめんを噓はき
射人朝日出林塘
人を射る朝日ちゆうじつ林塘りんたうに出ず

【語釈】

○行路難…行く道の険しいこと。樂府題。○天明…夜明け。○抖擻…振り払う。○征衫…旅衣。○馬韁…馬の手綱。○茅店…茅吹き茶店。○林塘…樹林の中の池塘。

★ 曉行

曉行

清 松 甫

蘆荻飛花白滿汀
停車小憩水邊亭
前林一綫炊烟起
畫斷遙山半角青

蘆荻の飛花 白く汀に満つ
車を停めて 小憩す 水辺の亭
前林 一綫 炊煙起り
画断す 遙山 半角の青

【語釈】

○蘆荻…ヨシとオギ。○一綫…ひとすじ。○畫斷…切断。○遙山…遙か遠くの山。

★ 憶父

父を憶う

清 宋凌雲

吳樹燕雲斷尺書
迢迢兩地恨何如
夢魂不憚長安遠
幾度乘風問起居

吳樹 燕雲 尺書を断つ
迢々たる兩地 恨 何如
夢魂 憚らず 長安の遠きを
幾度か 風に乗じて 起居を問う

【語釈】

○吳樹…江蘇省一帶の樹木。○燕雲…北京市一帶の雲。○尺書…手紙。○迢迢…遙かに遠いさま。○夢魂…夢を見ている魂。○起居…安否。

★ 瀧中

瀧中たにちゆう

清 屈大均

一溪煙雨夕陽晴

一溪の煙雨 夕陽晴るせきやう

瀧口鴛鴦夾岸迎

瀧口の鴛鴦 岸を夾みて迎うたにこう えんおう さしはさま

風送猿聲滿城郭

風は猿声を送り 城郭に満つ

行人忽起故園情

行人 忽ち起す 故園の情たちま

【語釈】

○煙雨…霧雨。○鴛鴦…おしどり。○行人…旅人。○故園情…故郷を思う気持ち。

絶句類選標本 六

絶句類選 卷之十 感慨類

★ 回郷偶書

郷に回りて偶ま書す

唐 賀知章

少小離家老大回

少小 家を離れて 老大にして回る

郷音無改鬢毛摧

郷音 改まる無く 鬢毛摧く

兒童相見不相識

兒童 相見て 相識らず

笑問客從何處來

笑って問う 客は何れの処從より来るかと

【語釈】

○少小…若いとき。○老大…老年。○郷音…故郷の言葉。○鬢毛摧…髪の毛が白くなること。○客…旅人

(参考文献) 『唐詩三百首』

★ 回郷偶書

郷に回^{かえ}りて偶^{たま}ま書す

唐 賀知章

離別家郷歲月多
家郷に離別して 歲月多し
老來人事半消磨
老來 人事 半ば消磨す
惟有門前鏡湖水
惟^ただ門前 鏡湖の水有り
春風不減舊時波
春風 減せず 旧時の波

【語釈】

○家郷：故郷。○老來：歳をとってから。○人事：俗事。人の世の出来事。○消磨：磨り減ること。○鏡湖：浙江省紹興市越城区にあった湖。賀知章が致仕するときに、この湖一帯を玄宗皇帝から賜った。

★ 春思

春思

唐 韋應物

野花如雪繞江城
野花 雪の如く 江城を繞^{めぐ}る
坐見年芳憶帝京
坐して 年芳^{ねんぼう}を見て 帝京を憶う
閨闔曉開凝碧樹
閨闔^{しやうしやう} 曉に開く 凝碧^{ぎやうへき}の樹
曾陪鴛鴦聽流鶯
曾^{かつ}て 鴛鴦^{えんろ}を陪^{ばい}して 流鶯^{りゅうおう}を聽く

【語釈】

○江城：川辺の街。○年芳：美しい春景色。○帝京：帝都。長安。○閨闔：宮城の門。○鴛鴦：オシドリとサギ。○流鶯：枝を飛び回る鶯。

★成口號誦示裴迪

私成口号裴迪に誦示す

唐 王維

萬戸傷心生野煙

万戸 心を傷ましむ 野煙の生ずるに

百官何日更朝天

百官 何れの日か 更に天に朝す

秋槐葉落空宮裏

秋槐 葉は落つ 空宮の裏

凝碧池頭奏管弦

凝碧池頭に 管弦を奏す

【語釈】

○私成口號：ひそかに紙に書かないで作った即興の詩。○裴迪：王維の友人。○萬戸：多くの家々。○野煙：野のもや。○朝天：宮廷に参内する。○秋槐：秋になって葉が散り始めたエンジュ。○空宮裏：主がいなくなつて、空しくなつた宮中。○凝碧池：洛陽にある池の名。

（註：賊軍に仕えて、重刑を免れないところ、無実とされた曰く付きの詩）

（参考文献）

『和漢名詞選類評釈』

★絶句漫興

絶句漫興

唐 杜甫

二月已破三月來

二月 已に破れ 三月来る

漸老逢春能幾回

漸老 春に逢うこと 能く幾回ぞ

莫思身外無窮事

思ふ莫かれ 身外 無窮の事

且盡生前有限杯

且く尽くせ 生前 有限の杯

【語釈】

○漫興：興趣に任せて作った詩。○漸老：次第に老いゆく身。○身外：自身のほか。…無窮：はてしない。

（参考文献）『杜甫全詩注』

一辭故國十經秋 一たび故国を辞して 十たび秋を経たり
 每見秋瓜憶故丘 秋瓜を見る毎に 故丘を憶う
 今日南湖采薇蕨 今日 南湖の 薇蕨を采る
 何人爲覓鄭瓜州 何人の為に 鄭瓜州を覓めん

【語釈】

○故國：故郷。ここでは長安。○秋瓜：秋の瓜。秦の東陵侯邵平は秦が滅んだ後、長安の東門の外で瓜を売って暮らしていた。その瓜がたいへんおいしかったので、人々は「東陵瓜」と呼んだという故事を踏まえる。○故丘：故郷の丘。○薇蕨：ぜんまいと、わらび。○鄭瓜州：杜甫の友人の鄭審、瓜州は村名。

（参考文献）『唐詩選』

★ 初入諫司喜家室至 初めて諫司に入り家室の至るを喜ぶ 唐 竇羣

一旦悲歡見孟光 一旦の悲歡 孟光を見る
 十年辛苦伴滄浪 十年の辛苦 滄浪を伴う
 不知筆硯緣封事 知らず 筆硯 封事に縁るを
 猶問傭書日幾行 猶お問う 傭書 日に幾行

【語釈】

○諫司：天子を諫めるもの（補闕、拾遺）が努める役所。○家室：妻。○一旦：忽ち。○悲歡：悲しみと喜び。○孟光：後漢の梁鴻の妻、夫に定説を尽くし「挙案齊眉」で知られる。自分の妻をなぞらえた。○滄浪：屈原のような流謫の身。○筆硯緣封事：天子へ奏上する諫文に封をすること。○傭書：賃仕事の筆耕文。

（参考文献）『三体詩』

★奉誠園聞笛

奉誠園ほうせいえんにて笛を聞く

唐 竇牟

曾絶朱纓吐錦茵

曾かつて朱纓しゆえいを絶ち錦茵きんいんに吐く

欲披荒草訪遺塵

荒草ひらを披ひらき遺塵いじんを訪わんと欲す

秋風忽灑西園淚

秋風あきかぜ忽たちまち灑そそぐ西園さいえんの淚

滿目山陽笛裏人

滿目まんもくの山陽さんやう笛裏てきりの人

【語釈】

○奉誠園：唐の司徒馬燧の旧宅であった園名。○朱纓：朱色の纓。○錦茵：芳草。○遺塵
…前人の行動の跡。○西園：上林園。

★上汝州郡樓

汝州じょしゅうの郡樓ぐんろうに上る

唐 李益

黄昏鼓角似邊州

黄昏こうこんの鼓角こかく 辺州へんしゅうに似たり

三十年前上此樓

三十年前さんじゅうねん此こゝの樓ろうに上る

今日山川對垂淚

今日こんにち山川さんせん 垂淚すいらいに対す

傷心不獨爲悲秋

心を傷むるは 独り 悲秋の為のみならず

【語釈】

○汝州：河南省汝州市。○郡樓：郡の役所の樓。○黄昏：たそがれ。○鼓角：太鼓と角
笛。○邊州：辺境の地。

★ 聽舊宮人穆氏唱

旧宮人穆氏の唱を聴く

唐 劉禹錫

曾隨織女渡天河

曾て織女に隨い 天河を渡る

記得雲間第一歌

記し得たり 雲間 第一の歌

休唱貞元供奉曲

唱うを休めよ 貞元 供奉の曲

當時朝士已無多

當時の朝士 已に多きこと無し

【語釈】

○宮人穆氏…不祥、宮人は宮女。○織女…穆氏のこと。○渡天河…作者が宮中に入ったこと。○記得…記憶した。○貞元…徳宗の年号。○供奉曲…天子の為に奏する曲。○朝士…朝廷の官。

(参考文献)

『三体詩』

★ 宿府池西亭

府池の西亭に宿す

唐 白居易

池上平橋橋下亭

池上の平橋 橋下の亭

夜深睡覺上橋行

夜深くして 睡覺めて橋を上りて行く

白頭老尹重來宿

白頭の老尹 重ねて 來宿すれば

十五年前舊月明

十五年前 旧月 明らかなり

【語釈】

○府池…河南伊〔河南府の長官〕の役所の池。○平橋…そりが無い平たい橋。○老尹…退官した河南伊、作者。○舊月…往昔のままの月。

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 十二下』

★ 感舊詩卷

旧詩卷に感ず

唐 白居易

夜深吟罷一長吁
夜深く吟じ罷みて一たび長吁す
老淚燈前濕白鬚
老淚 灯前 白鬚を湿す
二十年前舊詩卷
二十年前の 旧詩卷
十人酬和九人無
十人の酬和 九人は無し

【語釈】

○舊詩卷…古い詩を書いた巻物。○長吁…長いため息をつく。○白鬚…白いヒゲ。○酬和…(詩に) 唱和すること。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 十一』

★ 梨園弟子

梨園の弟子

唐 白居易

白頭垂淚話梨園
白頭 涙を垂れて 梨園を語る
五十年前雨露恩
五十年前 雨露の恩
莫問華清今日事
問う莫かれ 華清 今日の事
滿山紅葉鑲宮門
滿山の紅葉 宮門鑲す

【語釈】

○梨園…玄宗が設けた樂士養成所。○話…語。当時の俗語。○雨露恩…万物を育成させ縷雨露のように万民を慈しむ天恩。○華清…華清宮。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★ 詠懷

詠懷

唐 白居易

歳去年來塵土中
 歳去り 年来る 塵土の中
 眼看變作白頭翁
 眼に見る 変じて白頭翁と作るを
 如何辦得歸山計
 如何んぞ 弁じ得ん 帰山の計
 兩頃村田一畝宮
 兩頃りょうけいの村田 一畝いっぼの宮きやう

【語釈】

○塵土…俗世間。○眼看…まざまざと見る。○如何…どのようなにして、反語。○帰山…退官して故郷の山に帰って隠棲すること。○宮…家。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 望月懷江上舊遊

月を望み江上の旧遊を懐う

唐 雍陶

往歳曾隨江客船
 往歳おうさい 曾て 江客こウかくの船に隨う
 秋風明月洞庭邊
 秋風 明月 洞庭の辺
 爲看今夜天如水
 今夜 天 水の如きを看しが為に
 憶得當時水似天
 憶い得たり 当時 水 天に似たるを

【語釈】

○舊遊…昔日の遊覧。○往歳…昔年。○江客…江上の旅人。○洞庭…洞庭湖。湖南省北部にある淡水湖。○憶得…思い出した。

★ 勸行樂

行樂を勧む

唐 雍陶

老去風光不屬身
老去りては 風光 身に属さず
黄金莫惜買青春
黄金 惜む莫かれ 青春をかうに
白頭縦作花園主
白頭 縦たとい 花園の主と作るも
醉折花枝是別人
酔いて花枝を折るは 是れ 別人

【語釈】

○老去：老人になる。○風光：景色。

★ 寄隱者

隱者に寄す

唐 杜牧

無媒徑路草蕭蕭
無媒むばいの徑路 草蕭々しやうしやう
自古雲林遠市朝
古いにしへ自り 雲林 市朝に遠ざかる
公道世間唯白髮
世間に 公道たるは 唯だ白髮
貴人頭上不曾饒
貴人の頭上にも 曾て饒ゆるさず

【語釈】

○無媒：人里離れた寂しい所。逕路：こみち。○蕭々：ものさびしいさま。草がゆれうごくさま。○雲林：隱者の住む処。雲のたちこめる山深き林の中。○市朝：人のおおぜい集まる場所。○公道：公平な。○貴人：身分の高い人。○不曾：決してししない。○不曾饒：ゆるさない、貴人の頭も白髪となる。

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 9』

★秋思

秋思

唐 許渾

琪樹西風枕簟秋

琪樹きじゆ 西風 枕簟ちんでんの秋

楚雲湘水憶同遊

楚雲 湘水 同遊を憶う

高歌一曲掩明鏡

高歌一曲 明鏡を掩う

昨日少年今白頭

昨日の少年 今は白頭

【語釈】

○琪樹：美しい木々、琪は玉の名。○西風：秋風。枕簟：枕と簟（竹で編んだむしろ）、転じて夏の寝具。○楚雲：楚の空に浮かぶ雲、楚は、湖北・湖南省一帯を指す。○湘水：湘江。○同遊：昔いっしょに遊んだ友人。憶：思い出す。○高歌一曲：声高らかに一節ひとふし歌うこと。

（参考文献）

『唐詩選』

★贈彈箏人

箏こじを弾く人に贈る

唐 溫庭筠

天寶年中事玉皇

天寶年中 玉皇に事つかえ

曾將新曲教寧王

曾て新曲を將もつて 寧王に教ゆ

鈿蟬金雁皆零落

鈿蟬でんせん 金雁きんがん 皆零落れいらくし

一曲伊州淚萬行

一曲の伊州いしゅう 淚 万行

【語釈】

○天寶年中：玄宗の時代の年号（七四二～七五六年）。○玉皇：皇帝、玄宗。○李憲：玄宗の兄李憲。○鈿蟬：蟬をかたどった螺鈿の琴の飾り。○金雁：雁に似た金の琴柱。○零落：落ちぶれる。○伊州：伊州曲、北地の哀音を奏でる。

（参考文献）

『三体詩』

★南莊春望

南莊春望

唐 李羣玉

草暖沙長望去舟

草暖かく沙長くして 去舟を望む

微茫煙浪向巴丘

微茫たる煙浪 巴丘に向う

沅湘寂寂春歸盡

沅湘寂々 春歸り尽き

水綠蘋香人自愁

水は緑に 蘋は香しくして 人 自ら愁う

【語釈】

○沙：砂浜。○去舟：去りゆく舟。○微茫：かすかでぼんやりしているさま。○巴丘：湖南省岳陽府。○沅湘：沅江と湘江が流れる一帯。○寂寂：寂しく静かなさま。○春歸：春が過ぎ去る。○蘋：浮き草。

（参考文献）

『三体詩』

★宋州月夜感懷

宋州月夜感懷

唐 儲嗣宗

鴈池衰草露霑衣

鴈池の衰草 露衣を霑す

河水東流萬事微

河水の東流 万事微なり

寂寞青陵臺上月

寂寞たる 青陵台上の月

秋風滿樹鵲南飛

秋風樹に満ち 鵲 南に飛ぶ

【語釈】

○宋州：河南省商丘市睢阳区。○鴈池：帝王の園林中の池。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○青陵臺：山東省鄆州にあった台。

★退朝望終南山

退朝して終南山を望む

唐 李拯

紫宸朝罷綴鴛鸞

紫宸朝罷みて鴛鸞を綴る

丹鳳樓前駐馬看

丹鳳樓前馬を駐むるを見る

惟有終南山色在

惟だ終南山色の在る有るのみ

清明依舊滿長安

清明旧に依り長安に満つ

【語釈】

○退朝：朝見の儀から退出する。○終南山：長安の南にある山。○紫宸：天子の居住する宮殿。○鴛鸞：官吏の比喩。○丹鳳樓：大明宮の上部の門楼。○山色：山の景色。○清明：明るくて朗快なさま。○依舊：以前のさま。

(参考文献)

『唐詩選』

★秋日感懷

秋日感懷

唐 唐彦謙

溪上芙蓉映醉顏

溪上の芙蓉 醉顔に映ず

悲秋宋玉鬢毛斑

悲秋 宋玉 鬢毛斑なり

無情最恨東流水

無情 最も恨むは 東流の水

暗逐芳年去不還

暗に 芳年を逐い 去りて還らず

【語釈】

○宋玉：屈原の弟子と言われ、重用されなかった人。自身になぞらえる。○鬢毛：頭髮。○芳年：青年の頃の良き日。

★ 批子弟理舊居狀

子弟の旧居状を理め批す

唐 楊 玢

四鄰侵我我從伊

四隣 我を侵し 我 伊に従う

畢竟須思未有時

畢竟 須く思うべし 未だ有らざる時

試上含元殿基望

試みに含み 元殿基に上りて 望めば

秋風秋草正離離

秋風 秋草 正に離々たり

【語釈】

○舊居狀：旧居についてのめめ事の訴状。○理：責任を持って納める。○批：批判する。
○四鄰：四方の隣。○須：「すべからくすべし」とよみ「必ずしななければならぬ」の意。○元殿基：蓬萊宮。長安の東郊、龍首山上にあった。高宗が造宮。○離離：草木が生い茂っているさま。

★ 觀野花思京師舊遊

野花を觀 京師の旧遊を思う

唐 無名氏

曾至街西看牡丹

曾て 街西に至り 牡丹を見る

牡丹纔謝便心闌

牡丹 纔に謝し 便ち心 闌なり

如今變作村園眼

如今 變じて 村園の眼と作り

鼓子花開也喜歡

鼓子花 開いて 也た喜歡す

【語釈】

○京師：帝都。○舊遊：昔の交遊。○謝：散る。○如今：今。○鼓子花：ヒルガオ。

★解印

印を解く

唐 廖凝

五斗徒勞漫折腰
 三年兩鬢爲誰焦
 今朝官滿重歸去
 還挈來時舊酒瓢

五斗徒いたすらに勞して漫みだりに腰を折らず
 三年兩鬢誰が為こがにか焦す
 今朝官滿ちて重ねて歸り去る
 還なすきた挈たすきう 來時の旧酒瓢しゅひょう

【語釈】

○解印：官を辞める。○五斗：官吏の薄給（陶淵明）。○折腰：へつらう（陶淵明）。○焦：白髪になる。○酒瓢：酒を入れるひさご。

★長安早秋

長安早秋

唐 子蘭

風舞槐花落御溝
 終南山色入城秋
 門門走馬徵兵急
 公子笙歌醉玉樓

風は槐花かいかに舞い御溝に落つ
 終南の山色 城に入りて秋なり
 門々の走馬 徵兵急なるに
 公子笙歌し 玉樓に酔う

【語釈】

○槐花：エンジュの花。○御溝：宮城の堀。○終南：終南山。長安の南にある山。○山色：山の景色。○公子：身分の高い人の子供。○玉樓：玉で飾った楼閣。

★ 題關右寺壁

關右寺の壁に題す

宋 姚嗣宗

欲挂衣冠神武門

衣冠を挂けんと欲す 神武門

先尋水竹渭南村

先ず尋ぬ 水竹 渭南の村

却將舊斬樓蘭劍

却って 旧と樓蘭を斬る 劍を將って

旋博黃牛教子孫

旋で黃牛に博て子孫に教えん

【語釈】

○關右寺…不祥。○神武門…建業（南京）にあった宮門。○渭南…陝西省渭南市。○樓蘭…西域にあった国の名。○黃牛…黄色い毛の牛。立派な牛。

★ 途中

途中

宋 張詠

人情到底重官榮

人情 到底 官榮を重ぬ

見我東歸夾路迎

我の東歸するを見て 路を夾みて迎う

不免舊溪高士笑

免れず 旧溪 高士の笑

天真喪盡得虛名

天真 喪い尽して 虛名を得たり

【語釈】

○到底…つまるところ。○官榮…官爵の榮譽。○東歸…故郷に帰る。○高士…隱棲して仕官しなかった人。○天真…人間の本性。

★ 雨中聞鶯

雨中鶯を聞く

宋 蘇舜欽

嬌駸人家小女兒

嬌駸たる人家の 小女兒

半啼半語隔花枝

半ば啼き半ば語り 花枝を隔つ

黄昏雨密東風急

黄昏 雨密にして 東風急なり

向此漂零欲泥誰

此漂零に向いて 誰を泥せんと欲す

【語釈】

○嬌駸…なまめかしく愚か。○小女兒…ここでは鶯。○黄昏…たそがれ。○東風…春風。
○漂零…落ちぶれること。

★ 縦筆

縦筆

宋 蘇軾

寂寂東坡一病翁

寂々たり 東坡の一病翁

白鬢蕭散滿霜風

白鬢 蕭散し 霜風に満つ

小兒誤喜朱顏在

小兒 誤って喜ぶ 朱顏在るを

一笑那知是酒紅

一笑 那んぞ知らん 是れ酒紅なるを

【語釈】

○縦筆…手に任せて書いた詩。○寂寂…寂しく静かなさま。○東坡…蘇軾の号。○湖北省黄冈県の地名。○蕭散…消え散じる。○霜風…骨を指すような寒さ。○朱顏…青年の美しい赤い顔。○酒紅…酒に酔ったときの赤ら顔。

★ 天津感事

天津事に感ず

宋 邵雍

前朝無限貴公卿

前朝 限り無き 貴公卿

後世徒能記姓名

後世 徒に能く 姓名を記す

唯有天津橋下水

唯だ 天津橋下の水のみ有りて

古今都作一般聲

古今 都て 一般の声を作す

【語釈】

○前朝…以前の王朝。○天津橋…洛陽の西南にある橋の名。○一般聲…今も昔も変わらぬ尋常一般の声。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★ 春詞

春詞

宋 張耒

靄靄芳園誰氏家

靄々たる芳園 誰の氏の家か

朱門横鎖夕陽斜

朱門 横鎖して 夕陽斜なり

鳩鳴散噪閑庭館

鳩 鳴き散じ噪ぐ 閑庭の館

盡日春風吹百花

尽日 春風 百花を吹く

【語釈】

○靄靄…靄のかかっているさま。○朱門…高貴な身分の人の門。○閑庭…静かな庭。○盡日…一日中。

★ 病中聞雨

病中 雨を聞く

宋 李昭玘

官居寥落禁門東
秋滿長安一夜風
老病不眠成展轉
五更鐘鼓雨聲中

官居 寥落たり 禁門の東
秋は滿つ 長安 一夜の風
老病 眠らず 展轉を成す
五更の鐘鼓 雨声の中

【語釈】

○官居…官吏の宿舎。○寥落…荒れ果ててすさまじいさま。○禁門…宮城の門。○展轉…寝返りを打つ。

★ 宿西軒

西軒に宿す

宋 任伯雨

茅簷不動晚風微
獨對爐烟枕半敲
惟有多情沙上月
依然青瑣照人時

茅簷 動かず 晚風微なり
独り 炉煙に對し 枕半ば敲つ
惟だ 多情 沙上の月のみりて
依然たる青瑣 人を照す時

【語釈】

○茅簷…茅製の軒。茅吹きの家。○依然…昔のまま。○青瑣…くさりの模様を施して青色でかざったもの。

★ 焚香有感

香を焚きて感有り

宋 任伯雨

掃地焚香開竹扉
輕烟郁郁聞朝暉
却思昔日延和殿
對罷會携滿袖歸

地を掃い 香を焚き 竹扉を開く
輕煙 郁々 朝暉の間
却って思う 昔日 延和殿
対し罷みて 曾て滿袖を携えて歸るを

【語釈】

○郁郁…香しいさま。○朝暉…朝日。○延和殿…宮殿の名。○滿袖…香りが満ちた袖（杜甫「朝罷香煙攜滿袖」）。

★ 題諸宮

諸宮に題す

宋 廖剛

蔓草春深綠更齊
玉鞭何處選芳菲
舊時錦綉叢中蜨
却傍疏籬野菜飛

蔓草 春深くして 緑 更に 斉う
玉鞭 何れの処か 芳菲を選ばん
旧時 錦綉 叢中の 蜨
却って 疏籬 野菜に傍いて 飛ぶ

【語釈】

○蔓草…つる草。○玉鞭…玉の鞭。馬に乗った貴人。○芳菲…香花草。○錦綉…花紋色彩で飾った刺繍品。○叢中…くさむら。○蜨…蝶々。○疏籬…疎らなまがき。

★題青泥市蕭寺壁

青泥市蕭寺の壁に題す

宋 岳飛

雄氣堂堂貫斗牛 雄氣堂々 斗牛を貫く
誓將直節報君讎 誓って直節を將つて 君讎に報ぜん
斬除頑惡還車駕 頑惡を斬除し 車駕を還さん
不問登壇萬戶侯 問わず 登壇の萬戶侯

【語釈】

○堂堂：調って盛んなさま。○斗牛：北斗と牽牛の二つの星。○君讎：皇帝の仇（金族）。○報：刑罰を下す。○頑惡：頑強で猛惡な敵。○斬除：切り捨てる。○車駕：皇帝の馬車。○登壇：大将を拜する式壇に登ること。○萬戶侯：一萬戶の封を得た侯爵。

★惜海棠未開

海棠の未だ開かざるを惜しむ

宋 程敦

今年春色可勝嗟 今年の春色 勝えて嗟すべきや
二月山中未見花 二月の山中 未だ花を見ず
長憶去年今夜月 長に憶う 去年 今夜の月
海棠花影到窗紗 海棠花影 窓紗に到るを

【語釈】

○春色：春景色。○窗紗：窓に薄絹のカーテン。

★新亭

新亭

宋 史正志

龍盤虎踞阻江流

龍盤虎踞りゅうばんこきよ 江流を阻むはば

割據由來起仲謀

割拠 由來 仲謀起る

從此但誇佳麗地

此れ従りよ 但だ誇る 佳麗の地

不知西北有神州

知らず 西北に 神州有るを

【語釈】

○新亭：南京市にあつた新亭。王導の故事。新亭の涙。○龍盤虎踞：地勢が險阻で要害の地であることをいう。○割拠：南北朝に別れていたこと。○仲謀：呉の孫権。○佳麗：風光明媚なこと。○神州：新亭に於いて王導が言った晉の地。

★有感

感有り

宋 朱熹

昨夜江邊春水生

昨夜 江辺 春水生ず

蒙衝巨艦一毛輕

蒙衝もうしゅう 巨艦 一毛輕し

向來枉費推移力

向來きょうらい 枉まげて費す 推移の力

此日中流自在行

此の日 中流 自在に行く

【語釈】

○蒙衝：戦いに用いる細長の舟。○向來：これまで（春水で川の水かさが増す前）。○枉まげ：いたづらに。

（参考文献）

『和漢名詞選類評釈』

★ 關題

關題

宗 王 楫

到處江山是戰場

到處江山是戰場

淮民依舊說耕桑

淮民旧に依り耕桑を説く

梅花不識興亡恨

梅花は識らず興亡の恨

猶向東風笑夕陽

猶お東風に向つて夕陽を笑う

【語釈】

○江山…山河。○依舊…昔の如く。○淮民…淮水の流域の民。○耕桑…農業に従事すること。○東風…春風。

★ 會同館

會同館

宋 范成大

萬里孤臣致命秋

万里孤臣命を致たす秋

此身何止一漚浮

此の身何んぞ止まらん一漚の浮くに

提携漢節同生死

漢節を提携して生死を同じくす

休問羝羊解乳不

問うを休めよ羝羊乳を解くかいなやかと

【語釈】

○會同館…外国からの使者を接待するところ。○一漚…一粒の泡。○漢節…天子の使者である事を示す割符。蘇武の故事。○羝羊…男羊。○解乳…乳を出す。○羝羊解乳…蘇武の故事。

★ 鎖宿省中心氣大作通夕不寐

宋 楊萬里

宿省中に鎖され心氣大作る通夕寐ず

絶恨詩人浪許癡

絶恨む詩人浪に許痴なるを

四更無睡只哦詩

四更睡る無く只だ詩を哦う

老鈴枕手眠窗底

老鈴手を枕にして窓底に眠り

急雨顛風總不知

急雨顛風総て知らず

【語釈】

○鎖宿省中…科挙の試験官として試験場に閉じ込められること。○許癡…正しい判断がで
きないこと。○四更…午前一時～二時頃。○顛風…暴風。

★ 感秋

秋に感ず

宋 楊萬里

舊不悲秋只愛秋

旧と秋を悲しまず只だ秋を愛す

風中吹笛月中樓

風中笛を吹く月中の樓

如今秋色渾如舊

如今秋色渾て旧の如し

欲不悲秋不自由

秋を悲しまざらんと欲すれども自由ならず

【語釈】

○舊…以前は。○如今…今。○秋色…秋景色。

★ 秋夕不寐

秋夕寐しゅうしやくせまいず

宋 楊萬里

夏熱通宵睡不成
秋涼老眼又偏醒
窗虛月白清無夢
却爲西風數漏聲

夏熱つうしやう通宵ねむり睡成なりらず
秋涼老眼又偏ひとへえに醒さむ
窓虚しく月白くして清く夢無し
却つて西風為に漏声を数う

【語釈】

○通宵…一晩中。○西風…秋風。○漏聲…水時計の音。

★ 冬夜聞角聲

冬夜聞角声

宋 陸游

憶在梁州夜雪深
落梅聲裏玉關心
山城老去功名忤
臥對寒燈泪滿襟

憶おもひは梁州に在りて夜雪深し
落梅らくばいせいり聲裏玉関ぎよくかんの心
山城に老去りて功名さから忤う
臥して寒灯なみだきんに対し泪襟なみだきんに満つ

【語釈】

○角聲…角笛の音。○梁州…河南省商丘市。○玉關…玉門関。○襟…襟。

★ 秋晚思梁益舊遊

秋晚 梁益の旧遊を思う

宋 陸游

幅巾筇杖立籬門

幅巾 筇杖 籬門に立つ

秋意蕭條欲斷魂

秋意 蕭條として 魂を断たんと欲す

恰似嘉陵江上路

恰も似たり 嘉陵 江上の路

冷雲微雨濕黃昏

冷雲 微雨 黃昏を濕す

【語釈】

○梁益：蜀の地。○舊遊：昔の遊び。○幅巾：頭巾。○筇杖：杖をつく。○籬門：竹垣の門。隱者の住まい。○秋意：秋の気配。○蕭條：物寂しいさま。○嘉陵：四川省東部の嘉陵江。○黃昏：たそがれ。

★ 春晚懷山南

春晚に山南を懷う

宋 陸游

梨花堆雪柳吹綿

梨花は雪を堆みて 柳は綿を吹く

常記梁州古驛前

常に記す 梁州 古驛の前

二十四年成昨夢

二十四年 昨夢と成り

每逢春晚即淒然

春晚に逢う毎に 即ち淒然たり

【語釈】

○山南：陝西省漢中市の南側。○梁州：陝西省漢中市。○昨夢：昨夜の夢。○淒然：寂しくいたまじさま。

(参考文献)

『漢詩大系 19』

★ 春晚懷山南

春晚 山南を懷う

宋 陸游

壯歲從戎不憶家

壯歲 戎に従って家を憶わず

梁州裘馬鬪豪華

梁州 裘馬豪華に鬪う

至今夜夜尋春夢

今に至って夜々春夢を尋ぬ

猶在吳園藉落花

猶お 吳園に在りて落花を藉く

【語釈】

○壯歲：壯年。○從戎：從軍する。○梁州：陝西省漢中市を中心とした州。○裘馬：輕裘肥馬。豪華な生活。○春夢：春の夢。ものごとはかないことの譬え。○吳園：江蘇省蘇州周辺にあった園。

★ 感昔

昔に感ず

宋 陸游

行遍天涯只漫勞

天涯を行遍して只だ漫勞す

歸來登覽興方豪

歸り来りて登覽すれば興方豪なり

雲生神禹千年穴

雲は生ず 神禹千年の穴

雪捲靈胥八月濤

雪は捲く 靈胥八月の濤

【語釈】

○行遍：遍く行く。○天涯：空の果ての地。○漫勞：あてどなくさまよう。○登覽：高所に登って眺める。○神禹：夏王朝の帝王禹。○靈胥：伍子胥の靈。

★ 感昔

昔に感ず

宋 陸游

曾從征西十萬師
 曾て従う 征西 十万の師

白頭回顧只成悲
 白頭 回顧すれば 只だ 悲しみを成すのみ

雲深駱谷傳烽處
 雲は深し 駱谷 伝烽の処

雪密嶓山校獵時
 雪は密かなり 嶓山 校獵の時

【語釈】

○西十萬師：陝西省漢中市にあった南宋の軍隊。○駱谷：陝西省漢中市駱谷、当時の最前線。○傳烽處：のろし台。○嶓山：陝西省漢中市の山。○校獵：鳥獸が逃げないように柵をしてにおいて獵をすること。

（参考文献） 『新釈漢文大系 19』

★ 醉歌

醉歌

宋 陸游

百騎河灘獵盛秋
 百騎 河灘 盛秋に獵す

至今血漬短貂裘
 今に至って 血は漬む 短貂裘

誰知老卧江湖上
 誰か知らん 老いて 江湖の上に卧し

猶枕當年虎鬪體
 猶お枕す 当年の虎鬪體

【語釈】

○河灘：川が浅くて石が露出する地方。○短貂裘：短い貂のかわごころも。○江湖：川と湖の多い地方。隠棲の地。○虎鬪體：虎の頭蓋骨。

★排悶

排悶はいもん

宋 陸游

四十從軍渭水邊
四十軍に従う渭水の辺
功名無命氣猶全
功名命無く氣猶お全し
白頭爛醉東吳市
白頭爛醉東吳の市
自拔長刀割髀肩
自ら長刀を抜いて髀肩を割る

【語釈】

○排悶：煩悶を消す。○四十：四十才。○渭水：西安市近くを東流する黄河の支流。○爛醉：大醉。○東吳：江蘇省蘇州市。○髀肩：豚の肩の肉。

★感舊

旧に感ず

宋 陸游

雕鞍送客雙流驛
雕鞍ちやうあん客かくを送る 雙流驛そつりゆうえき
銀燭看花萬里橋
銀燭花を見る 萬里橋ばんりききょう
三十三年真一夢
三十三年 真に一夢
茆簷寒雨夜蕭蕭
茆簷ぼうえんの寒雨 夜に蕭々しょうしょうたり

【語釈】

○雕鞍：彫刻飾った華美な鞍。○雙流驛：不祥。○萬里橋：四川省成都市にある橋。○茆簷：萱葺きのひさし。○蕭蕭：風や雨のものさびしい音の形容。

★書感

感を書す

宋 陸游

行遍天涯等斷蓬 行きて 天涯に遍きこと 断蓬に等し
作詩博得一生窮 詩を作りて 博ち得たり 一生の窮
可憐老境蕭蕭夢 憐むべし 老境 蕭々の夢
常在荒山破驛中 常に 荒山破驛の中に在り

【語釈】

○天涯：空の果て。○断蓬：根のちぎれた蓬。風に吹かれてさまよう。○博得：得た物は、寂しくだけであった。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。ここでは、寂しくうら悲しいさま。○荒山：尋ねる人もなく荒廃した山。○破驛：荒廃した宿場。

★春日雑詠

春日雑詠

宋 陸游

攪睡禽聲曉傍簷 睡を攪ゆる禽声 曉に簷に傍う
泥人花氣午穿簾 人を泥する花氣 午に簾を穿つ
歡情老去年年薄 歡情 老去りて 年々薄し
困思春來日日添 困思 春來りて 日々添う

【語釈】

○泥：よごす。○花氣：花の香。○午：正午。○歡情：歡びの思。○老去：老年になつて。

★貧甚戯作

貧甚し戯に作る

宋 陸游

糴米歸遲午未炊
家人竊閔乃翁飢
不知弄筆東窗下
正和淵明乞食詩

米を糴かいて帰ること遅く午未だ炊かしがず
家人ひそ窃かに閔あわれむ乃翁だいおうの飢うるを
知らず筆を東窓の下に弄もてあそび
正まさに淵明えんめいの食を乞う詩に和するを

【語釈】

○糴：穀物を買う。○閔：気の毒がること。○乃翁：おまえの父親。○淵明：陶淵明。

★秋風雨大作

秋風雨大に作る

宋 陸游

僵卧孤村不自哀
尚思爲國戍輪臺
夜闌卧聽風吹雨
鐵馬冰河入夢來

僵卧きょうが孤村おのずか自おのら哀あれまず
尚なほお思おもう 国くにの為ために輪臺りんたいを戍まもらんと
夜闌やらん卧ふして聴きく風雨かぜあめを吹ふくを
鐵馬てつば冰河ひやうが夢ゆめに入りて来る

【語釈】

○僵卧：臥したまま動かない。○輪臺：辺境の地の寨。○夜闌：夜明け前。○鉄馬：戦闘用の鎧を着た馬。

★示兒

兒に示す

宋 陸游

死去元知萬事空 死し去らば元知る万事空なるを
但悲不見九州同 但だ悲しむ九州の同きを見ざることを
王師北定中原日 王師北のかた中原を定むる日
家祭無忘告乃翁 家祭忘る無かれ乃翁に告ぐるを

【語釈】

○元知：もともと知っている。○九州：中国全土のこと。○同：一つになること。全土の統一。○王師：天子の軍隊。南宋の軍を指す。○中原：中国の中心とされる黄河中流域一帯のこと。○家祭：我が家の先祖の祭り。○乃翁：お前の父親。
(参考文献) 『中国詩人撰集二 8』

★自哂

自ら哂う

宋 陳普

曾騎白鶴上揚州 曾て白鶴に騎り揚州に上る
頭插花枝秉燭遊 頭に花枝を挿し燭を秉って遊ぶ
樽酒邇來誰是伴 樽酒邇來誰か是れ伴う
白雲收盡數峰秋 白雲収まり尽くす數峰の秋

【語釈】

○揚州：江蘇省揚州市。○邇來：近ごろ。

★自哂

みずか
自ら哂う

宋 陳普

鬥雞走馬醉高陽
今日歸來兩鬢霜
無限少年心上事
半簾豆雨語寒蟿

鬥雞走馬 高陽に酔う
今日 帰来して 両鬢の霜
限り無き少年 心上の事
半簾の豆雨 寒蟿に語る

【語釈】

○鬥雞走馬：闘鶏競馬。古代の博打。晉の時代の酒宴をした園。○高陽：高陽酒弟。酒におぼれて豪放な人のたとえ（史記酈生陸賈列伝）。○心上：心中。○寒蟿：深秋の虫の声。

★自哂

自ら哂う

宋 陳普

世事悠悠酒幾杯
晴窓把鏡獨徘徊
西風吹老梧桐樹
仍送新霜兩鬢來

せいじ ゆうゆう 酒 幾杯
晴窓 鏡を把りて 独り徘徊す
西風 老を吹く 梧桐の樹
なお 新霜を送りて 両鬢に来る

【語釈】

○世事：世上の出来事。○悠悠：無關心なさま。○西風：秋風。○梧桐：アオギリ。

★ 淮村兵後

淮村兵後

宋 戴復古

小桃無主自開花

小桃主無く、自ら花を開く

烟草茫茫帶曉鴉

烟草 茫茫 曉鴉を帯ぶ

幾處敗垣圍故井

幾處の敗垣か 故井を囲む

鄉來一一是人家

鄉來一一是れ人家

【語釈】

○淮村：淮河（南宋と金との国境）流域の村落。○兵：戦い（金軍の侵入）。○烟草：霞みでぼんやりとした遠くの草むら。○茫茫：草が多く生えて乱れているさま。○晚鴉：夕暮れに鳴きながら巢に戻るカラス。○敗垣：壊れた垣根。○故井：古井戸。○向來：今まで。一一：ひとつひとつ。○是……は……である、be動詞にあたる。

★ 題蔡中卿青在堂

蔡中卿が青在堂に題す

宋 戴復古

幾人富貴不能閑

幾人が富貴 閑すること能わず

夜運牙籌日跨鞍

夜 牙籌を運び 日に鞍に跨がる

役役一生忙裏過

役々 一生 忙裏に過ぐ

不知屋上有青山

知らず 屋上に青山有るを

【語釈】

○蔡中卿：蔡青。漳州（建省南漳州市）龍溪の人。農民の軍に殺された。○青在堂：不祥。○牙籌：象牙、骨、角などで作った計数器。○役役：奔走して苦勞するさま。

★ 城市

城市

宋 朱繼芳

身遊城市髮將華
身は城市に遊び 髮將に華ならんとす
眼見人情似權花
眼に 人情の權花に似たるを見る
惟有梁間雙燕子
惟だ 梁間に 双燕子有り
不嫌貧巷主人家
嫌わず 貧巷 主家の人

【語釈】

○將：「まさにくせんとす」と読み、「今にもくしようとしている」の意。○華：白髮。
○權花：木槿の花。權花一日の榮。榮華のはかないことの譬え。○雙燕子：つがいの燕。
○貧巷：貧民の集まるちまた。

★ 老奴

老奴

宋 劉克莊

老奴昔逐我西東
老奴 昔 我を逐いて 西東
捷似猿猱跳絶峯
捷むこと 猿猱の 絶峰に跳るに似たり
今日道旁扶一拐
今日 道旁 一拐に扶けらる
乃公安得不龍鍾
乃公 安んじ得たり 竜鍾たらざるを

【語釈】

○老奴：年取った召使い。○猿猱：猿。○絶峯：山の頂上。○道旁：道の傍ら。○一拐：一つの杖。○乃公：我が輩。○龍鍾：老いてやつれ病むさま。

★ 記夢

夢に記す

宋 劉克莊

父兄誨我髻髮初

父兄 我を誨える 髻髮の初

老不成名鬢髮疎

老いて名 成らず 鬢髮疎なり

紙帳鐵檠風雪夜

紙帳 鐵檠 風雪の夜

夢中猶誦小時書

夢中 猶お誦んず 小時の書

【語釈】

○髻髮…古代の小兒の髪型。○紙帳…紙のとばり。○鐵檠…鉄製の灯火の台。

★ 朱門

朱門

宋 周端臣

朱門茅屋偶爲隣

朱門 茅屋 偶ま隣を爲す

北阮誰憐南阮貧

北阮 誰か憐まん 南阮の貧

却是梅花無世態

却って是れ 梅花 世態無し

隔牆分送一枝春

牆を隔てて 分ち送る 一枝の春

【語釈】

○朱門…紅色の漆で塗った大門。 貴族富豪の家。○茅屋…茅吹きの粗末な家。○北阮・南阮…親族の内で富裕な者を北阮、貧しい者を南阮という。『世説新語』任誕…阮仲容。○世態…世の中の有様。

★ 京城翫月

京城月を翫ぶ

宋 廬登甫

秋滿西湖月正圓

秋は西湖に満ち月正に円なり

家家醉賞椅欄干

家家酔賞し欄干に倚る

西風茅葺長淮地

西風茅葺長淮の地

應有征人帶淚看

應に征人の涙を帯びて看る有るべし

【語釈】

○京城：首都。○西湖：浙江省杭州市にある風光明媚な湖。○醉賞：酔ってめでる。○西風：秋風。○茅葺：茅葺きの粗末な家。○長淮：淮河。長江・黄河に次ぐ第三の大河。○征人：旅人。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。

★ 白髮

白髮

宋 葉茵

半世持竿笠澤濱

半世竿を持つ笠沢の浜

鬢邊留得幾莖春

鬢邊留むを得たり幾莖の春

近來白髮無公道

近來白髮公道無し

暗把黑頭饒貴人

暗に黒頭を把りて貴人に饒る

【語釈】

○笠沢：松江省中国東北の東九省の一部。○幾莖春：少しの黒髪。○公道：公平なやりかた。

★ 兵火後還里

兵火後里に還る

宋 嚴 粲

萬屋煙消餘塔身
還家何處訪情親
舊時巷陌今難認
却問新移來住人

万屋 煙消えて塔身を余す
家に還かえって何れの処にか情親を訪わん
旧時の巷陌こうはく今認め難し
却って問う新移來住の人に

【語釈】

○煙：炊煙。○情親：親人。○巷陌：街通り。○新移來住人：新たに移って来て住んでい
る人。

★ 鏡湖

鏡湖

宋 張惟中

昔年曾過賀家湖
今日烟波太半無
惟有一天秋夜月
不隨田畝入官租

昔年 曾かつて過ぐ賀家の湖
今日 煙波 太半無し
惟ただ 一天 秋夜の月のみ有りて
田畝でんそに随わず官租かんそに入る

【語釈】

○鏡湖：浙江省紹興市会稽山北麓にあった湖。○賀家湖：鏡湖のこと。賀知章が故郷に帰
ったときに、玄宗が鏡湖剡川の一部分を与えたことに由来する。○煙波：水面に立つも
や。○太半：三分の二。○田畝：農村。○官租：租税。

★ 鬻廬

廬を粥

宋 宋氏

自歎年來刺骨貧

自ら歎く 年來 骨を刺す貧なるを

吾廬今已屬西鄰

吾が廬 今 已に 西隣に属す

殷勤說與東園柳

殷勤に説与す 東園の柳

他日相逢是路人

他日 相逢うは 是れ路人

【語釈】

○鬻…売る。○年來…近年以来。○說與…言い与える。○路人…自分と関係の無い人。

★ 不寐

寐ず

金 劉 勳

酪奴作崇攪秋眠

酪奴 崇を作し 秋眠を攪ゆ

追咎前非四十年

追いて 前非を咎む 四十年

一夜蟲聲相計會

一夜 虫声 相計会す

併催白髮到愁邊

併せて 白髮を催し 愁邊に到る

【語釈】

○酪奴…茶。○計會…数え計る。思い計る。

★ 山園

山園

金 辛 愿

歳暮山園懶再行
蘭衰菊悴頗關情
青青多少無名草
爭向殘陽暖處生

歳暮 山園 再行するに懶し
蘭 衰え 菊 悴れ 頗る情に關す
青青 多少 無名の草
争でか 残陽に向つて 暖かき処に生ぜん

【語釈】

○歳暮…年末。○殘陽…入り残っている夕陽。

★ 京城雜詠

京城雜詠

元 歐陽玄

奉詔修書白玉堂
朝朝騎馬侍宮牆
插河東畔垂楊柳
時有鶯聲似故鄉

詔を奉じ書を修む 白玉堂
朝々馬に騎り宮牆に侍す
插河 東畔 垂楊柳
時に鶯声の故郷に似たる有り

【語釈】

○京城…国都。○雜詠…主題を決めずに色々なことを詠じた詩。○白玉堂…翰林院。○朝朝…毎日。○宮牆…宮廷。○插河…闡門を設けた河。○白玉堂…翰林院。○朝

★偶成

偶成

元 倪瓚

紫燕低飛不動塵

紫燕しえん 低く飛び塵を動かさず

黃鸝嬌小未勝春

黃鸝こうり 嬌小きょうしょう 未だ春に勝えず

東風綠遍門前草

東風とうふう 綠遍あまね 門前の草

暮雨寒煙愁殺人

暮雨ぼりう 寒煙かんえん 人を愁殺しゅうさつす

【語釈】

○黃鸝…コウライウグイス。○嬌小…声の柔細なさま。○東風…春風。○寒煙…寒い靄。

★南田夜雨

南田夜雨なんでんやう

元 黄鎮成

四簷春雨夜浪浪

四簷の春雨 夜浪々ろうろう

記得吹笙近竹房

記得す 笙を吹いて 竹房に近きを

三十五年江海夢

三十五年 江海の夢

又隨歸鴈過瀟湘

又 歸鴈に随つて 瀟湘しょうしょうを過ぐ

【語釈】

○南田…浙江省温州市南田鎮。○四簷…四方の軒。○浪浪…雨の降り続くさま。○記得…心にしるし留める。竹房…竹で囲まれた部屋。○瀟湘…湘水と瀟水の合流しているところ、洞庭湖の南。

★秋思

秋思

元 孫存吾

雁落西風字字沈

雁は西風に落ちて 字々沈む

嫩涼偷入藕花心

嫩涼 偷み入る 藕花の心

眼前多少關心事

眼前 多少 心に関する事

嗟與寒螿徹夜吟

寒螿に嗟与して 夜を徹して吟ぜしむ

【語釈】

○西風：秋風。○字字：雁の群れのたとえ。○嫩涼：初秋の微かな寒さ。○藕花：蓮の花。○寒螿：秋に無く虫。○嗟與：嘆き与える。

★有感

感有り

明 劉基

浪動江淮戰血紅

浪は江淮に動いて 戦血紅なり

羽書應不達宸聰

羽書 応に宸聰に達つせざるべし

紫薇門下逢宣使

紫薇門下 宣使に逢う

新向湖州召畫工

新たに 湖州に向いて 画工を召すと

【語釈】

○江淮：長江と淮河。○羽書：急を要する檄文。○應：「まさにすべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。○宸聰：皇帝の聴聞。○紫薇門：皇帝の宮城の門。○宣使：軍事を司る官。○湖州：浙江省湖州市。

★ 自贊

自贊

明 顧瑛

儒衣僧帽道人鞋
儒衣僧帽道人くつの鞋
天下青山骨可埋
天下青山骨埋むべし
還憶少年豪傑興
還また憶う少年豪傑の興
五陵裘馬洛陽街
五陵きゅうばの裘馬洛陽の街

【語釈】

○道人：道教の僧侶。○少年：若い頃。○五陵：漢の高帝以下五帝の陵があったところで、富豪の人が住んでいた。李白「少年行」。○裘馬：輕裘肥馬。豪華な生活。

★ 感舊遊

旧遊に感ず

明 吳興弼

石橋門巷落花深
石橋 門巷もんこう 落花深し
晴日光風鳥亂吟
晴日 光風 鳥 乱吟す
人事暗隨春夢改
人事 暗く隨う 春夢の改まるに
綠楊還似舊時陰
綠楊 還また 旧時の陰に似たり

【語釈】

○門巷：門庭内の道。○光風：雨がやんだ後の光を浴びた風。○亂吟：乱れ鳴く。

★ 秋日雜興

秋日雜興

明 何景明

寒蟬啼斷槿園空
萬樹凋傷八月中
只有南山蒼桂在
一株花發向秋風

寒蟬かんじょう啼めい斷きんえん 槿園空し
萬樹ちようしやう凋傷す 八月中
只だ南山 蒼桂そうけいの在るのみ有りて
一株花ひら発ひらいて 秋風に向う

【語釈】

○寒蟬：深秋に鳴く虫。○槿園：木槿の園。○凋傷：草木が凋み枯れること。

★ 秋日雜興

秋日雜興

明 何景明

雨花風葉總堪憐
海燕江鴻各渺然
莫向高樓空悵望
暮蟬多在夕陽邊

雨花 風葉 総すべて 憐むに堪えたり
海燕 江鴻 各 渺然おのおの びやうぜん
高樓おに向いて 空しく 悵望ちやうぼうする莫かれ
暮蟬 多く 夕陽の辺に在り

【語釈】

○渺然：遙かに広いさま。○悵望：恨めしい感じで遠くを眺めやる。

★秋感

秋感

明 錢楷

一夜西風枕簟涼
 一夜西風 枕簟涼し
 幾群征雁向衡陽
 幾群の征雁 衡陽に向う
 深宮猶自揮紈扇
 深宮猶お 自ら 紈扇を揮う
 此日邊城已下霜
 此の日 辺城 已に霜を下す

【語釈】

○西風：秋風。○枕簟：枕とたかむしろ。○征雁：渡る雁。○衡陽：湖南省衡陽市。（衡陽断雁）。○紈扇：薄絹でできた扇子。○辺城：辺地の街。

★感舊

旧に感ず

明 徐中行

自別燕臺白日徂
 燕台に別れてより 白日に徂く
 華陽碣石總荒蕪
 華陽の碣石 総て荒蕪
 獨留一片西山月
 独り 一片 西山の月を留め
 猶照當年舊酒壚
 猶お照らす 当年の 旧酒壚

【語釈】

○燕臺：河北省一帯。○華陽：四川省成都市武侯区。○碣石：墓石。○荒蕪：荒れて草叢になっているさま。○当年：昔。○酒壚：土で作った酒を温める炉。

★ 月夜聞笛

月夜 笛を聞く

明 張僉都

十載皋蘭三出師
角巾歸第鬢如絲
那知今夜關山月
卻向中原笛裏吹

十載の皋蘭^{こうらん} 三たび師を出だす
角巾^{かくしん} 第に帰り 鬢^{びん} 糸の如し
那^{なん}ぞ知らん 今夜 関山月^{かんざんげつ}
却^おって 中原^{ちゅうげん} に向いて 笛裏^{てきり}に吹くを

【語釈】

○皋蘭：甘肅省蘭州市。○出師：軍を発する。○角巾：稜角の有る頭巾。隠士が被る。○歸第：家に還る。○關山月：笛の曲名。辺境で吹かれる。○中原：黄河下流の平原。○

★ 重過大樑坡臺廢寺有感

明 余育

重ねて 大樑の坡台の廢寺に過ぎりて感有り

古寺無僧門半扃
重來往事暗傷神
一株殘柳猶青眼
似識當年繫馬人

古寺 僧 無く 門 半ば扃^{とぎ}す
重來 往事 倍神^{ますますしん}を傷ましむ
一株の殘柳 猶お青眼^{せいがん}
当年 馬を繫ぐ人を 識るに似たり

【語釈】

○大樑：河南省開封市西北の地名。○坡臺：堤の上の台。○重來：再び来る。○往事：昔の事。○神：心。○当年：昔年。○青眼：柳の青い芽。

★ 立春日感懷

立春の日感懷

明 陳薦伏

征袖翩翩泪痕
征袖せいしゅう 翩翩へんべん 泪痕なみだあと 泪痕うるお
別離無計但銷魂
別離べつり 計無けいむ 但ただ 魂たましい 銷け 魂け
應嗟不及墻東柳
應まさ 嗟なげ 不な 及た 墻東しょうとう 柳りゅう
歲歲春風在故園
歲々さいざい 春風しゅんぷう 在あ 故園こゑん 在あ 在あ

【語釈】

○征袖：旅衣の袖。○翩翩：行き来するさま。落ち着かないさま。○銷魂：悲しみで魂が消えたような気持になること。○應：「まさに「すべし」と読み、「すべきである」の意。○墻東：垣根の東。○故園：故郷。

★ 會稽過吳氏酒樓

會稽かいけい 吳氏の酒樓に過ぎる

明 陳邦注

紅粉佳人舊酒樓
紅粉こうふん の佳人かひにん 旧酒樓きゅうしゅうろう
管弦零落暮生愁
管弦くわんげん 零落ぜいらく して 暮くれ に愁しみ いを生な ず
長堤無限東風起
長堤ちやうてい 限げん り無な く 東風とうふう 起お 起お
吹起楊花滿渡頭
楊花やうか を吹ふ き起お こして 渡頭わだつ頭 に満み たしむ

【語釈】

○會稽：浙江省紹興市の地名。○吳氏：不祥。○紅粉：紅おしろい。○管弦：音楽。○零落：落ちぶれること。○東風：春風。○楊花：柳絮。○渡頭：渡し場。

★ 病中作

病中の作

明 朱妙端

剔盡寒燈夢不成
寒灯を剔尽して夢成らず
擁衾危坐到三更
衾を擁し危坐して三更に到る
不知何處吹羌笛
知らず何れの処か羌笛を吹く
落盡梅花月滿城
落ち尽くす梅花月城に滿つ

【語釈】

○剔盡：（灯火を）かき立て尽くす。○擁衾：半臥して、下半身に布団を掛ける。○危坐：正しく坐る。○三更：真夜中。○羌笛：異民族の吹く笛。

★ 秋夜聞笛

秋夜笛を聞く

明 鄧氏

秋風颯颯滿江城
秋風颯々 江城に滿つ
雁叫霜天月正明
雁は霜天に叫び月正に明らかなり
長夜蕭條多少恨
長夜蕭条 多少の恨
不堪更聽斷腸聲
更に断腸の声を聴くに堪えず

【語釈】

○颯颯：かぜがさつと吹くさま。○江城：川辺の街。○蕭條：静かで物寂しいさま。

★舟中見獵犬有感

舟中 獵犬を見て感有り

明 宋 琬

秋水蘆花一片明

秋水 蘆花 一片明らかなり

難同鷹隼共功名

鷹隼ようじゆんと同じく功名を共にし難し

檣邊飽飯垂頭睡

檣邊しょうへん 飽飯こうべ 頭を垂れて睡ねむる

也似英雄髀肉生

也また英雄に似て髀肉ひにく生ず

【語釈】

○蘆花…蘆の花。○檣邊…帆柱のあたり。○飽飯…満腹。○英雄…劉備玄德。○髀肉…もも肉。「髀肉の嘆」。

★秋夜有感

秋夜 感有り

清 宋 徽 輿

憔悴経時獨自慰

憔悴しょうすい 時を経て 独りみづか 自ら慰む

酒醒無奈欲悲秋

酒醒めて 奈いかんするとも無なし 悲秋ならんと欲するを

不堪木落風涼夜

堪えず 木落ち 風涼しき夜

卧對青燈憶舊遊

卧がして 青燈に對して 旧遊を憶うに

【語釈】

○憔悴…愁え悩む。○悲秋…もの悲しい秋。○青燈…青色の灯火。○旧遊…昔の遊び。

★ 書陳將軍便面

陳將軍の便面に書す

清 潘問奇

虎頭垂老卧江濱

虎頭老に垂んとして江浜に卧す

李廣空餘百戰身

李広空しく余す百戦の身

馬蹀平原芳草綠

馬平原を蹀みて芳草緑なり

角弓閑殺射鵬人

角弓閑殺す鵬を射る人

【語釈】

○陳將軍…不祥。○虎頭…虎に似た容貌の人。○江濱…河岸。○李廣…漢の名将、飛將軍李広。陳將軍をなぞらえている。○角弓…角で飾った強弓。○閑殺…暇なことにより愁えさせる。

★ 雜感

雜感

清 張實居

卧病蕭條黛水邊

卧病蕭条黛水の辺

樵風枚雨已三年

樵風枚雨已に三年

夢回忽覺秋衾薄

夢回り忽ち覚ゆ秋衾の薄きを

鴻雁一聲霜滿天

鴻雁一声霜天に満つ

【語釈】

○卧病…病に臥す。○蕭條…物寂しいさま。○黛水…不祥。○樵風…順風。唐李賢注引孔靈符《會稽記》。○夢回…夢が覚める。○秋衾…秋のしとね。○鴻雁…雁。

★ 聞撫洞庭秋思曲

洞庭秋思の曲を撫でるを聞く

清 方朝

曾放扁舟泝楚天

曾て扁舟を放ち 楚天に 泝る

清猿淚竹思淒然

清猿 淚竹 思に淒然

廿年夢裏湘山月

廿年 夢裏 湘山の月

今夜分明在七絃

今夜 分明に 七絃に在り

【語釈】

○洞庭：洞庭湖。湖南省北東部にある淡水湖。○楚天：湖北省、湖南省の地。○淚竹：竹の一種。斑竹。湘妃竹ともいう。○淒然：寂しく痛ましいさま。○湘山：君山。洞庭湖にある山。○分明：はっきりと。○七絃：七絃琴。

★ 中秋有感

中秋感有り

清 錢之青

去年醉月曲江頭

去年 月に酔う 曲江の頭

綠酒紅牙記勝遊

綠酒 紅牙 勝遊を記す

今夜中秋形與影

今夜 中秋 形と影と

故人還復上南樓

故人 還りて 復た 南樓に上る

【語釈】

○曲江：長安東南部にある池。○綠酒：美酒。○紅牙：紅色の牙板を持つ樂器の名。○勝遊：決意の遊覧。

★ 雜興

雜興

清

沈祖考

天意欲寒鳥夜號
霜空木落暮雲高
川原一望無青草
那得愁人不二毛

天意寒からんと欲し鳥夜に号す
霜空木落ちて暮雲高し
川原一望青草無し
那んど得ん愁人二毛ならざるを。

【語釈】

○号…鳴く。○川原…荒野。○二毛…白くて斑な頭髪。

★ 憶法蔵寺前柳

法蔵寺前の柳を憶う

清

陳維崧

一樹青絲拂寺前
毵毵和月復和煙
當時春夜頻來往
曾見依依十二年

一樹の青糸 寺前を払う
毵々として月に和し 復た煙に和す
当時 春夜 頻りに來往す
曾て見る 依々 十二年

【語釈】

○毵毵…毛の長いさま。○煙…霞。○依依…遠くぼんやりしているさま。

★ 山塘間歩

山塘閑歩

清 宋樹穀

疎狂猶記少年時
幾處歌場鬪雪詩
今日舊遊零落盡
酒痕只有故衫知

疎狂 猶お記す 少年の時
幾処の歌場 雪を鬪わす詩
今日 旧遊 零落し尽し
酒痕 只だ故衫の知る有るのみ

【語釈】

○山塘：山にある湖沼。○疎狂：豪放で束縛を受けないこと。○舊遊：昔の遊び。○零落：落ちぶれること。○故衫：なじみの服。

★ 盧溝橋

盧溝橋

清 元璟

日色纔分萬衆囂
黃塵漠漠馬蹄驕
題詩笑問桑乾水
曾有閑人過此橋

日色 纔に分ちて 万衆 囂し
黄塵 漠々 馬蹄 驕る
詩を題して 笑って問う 桑乾の水
曾て 閑人の 此の橋を過ぐる有りやと

【語釈】

○日色：日光。○漠漠：遠く遙かなさま。○桑乾水：桑乾河。山西省北部と河北省西北部を流れる河川のひとつで、海河水系に属する。北京市西部から天津市を流れる永定河の主な支流である。

絶句類選 卷之十一 哀傷類

★ 題李將軍林園

李將軍の林園に題す

唐 武元衡

落英飄藥雪紛紛

落英 飄藥雪紛紛

啼鳥如悲霍冠軍

啼鳥 悲しむが如し 霍冠軍

逝水不回弦管盡

逝水 回らず 弦管尽く

玉樓迢遼鎖浮雲

玉樓 迢遼として 浮雲を鎖さす

【語釈】

○李將軍…不祥。○落英…落花。○飄藥…漂う花の蕊。○紛紛…乱れ散るさま。○霍冠軍…漢の驃騎將軍霍去病。李將軍になぞらえる。○逝水…流れ去る水。○迢遼…高いさま。

★ 哭孟寂

孟寂を哭す

唐 張籍

曲江院裏題名處

曲江院裏 名を題せし処

十九人中最少年

十九人中 最少年

今日春光君不見

今日 春光 君見えず

杏花零落寺門前

杏花 零落す 寺門の前

【語釈】

○孟寂：不詳、進士合格同期生。○曲江院裏：慈恩寺、科挙及第者は、曲江で宴を開き、慈恩寺大雁塔に名を記する習慣があった。○風光：景色。○零落：凋んで落ちる。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』『三体詩』

★ 傷愚溪

愚溪を傷む

唐 劉禹錫

柳門竹巷依依在

柳門竹巷 依々として在り

野草青苔日日多

野草 青苔 日々に多し

縱有鄰人解吹笛

縦い 隣人 笛を吹くを解する有るとも

山陽舊侶更誰過

山陽の旧侶 更に誰か過ぐ

【語釈】

○愚溪：柳宗元。○柳門竹巷：幽靜でつましい住宅。○依依：遠くぼんやりとしているさま。○山陽：江西省九江市山陽。○舊侶：旧友。○転句、結句は、「山陽笛」《晉書・卷四九・向秀傳》の故事を踏まえる。

★ 賦此詩

此の詩を賦す

唐 劉長卿

事去人亡跡自留 事去りて人亡く跡 自ら留る
黄花綠蒂不勝愁 黄花 綠蒂 愁いに勝えず
誰能更向青門外 誰か能く更に青門の外に向いて
秋草茫茫覓故侯 秋草 茫茫 故侯を覓めん

【語釈】

○黄花：黄色の花。菊。○綠蒂：緑色の花のしべ。○茫茫：あてもなくつかみ所の無いさま。○故侯：漢の召平。○覓故侯：《史記》卷五十三《蕭相國世家》の故事。
（家園の瓜が熟したが、是は蕭相（漢の蕭何）の瓜の種から伝わったものであったので、召平のことを思い出して作った詩）

★ 題柳郎中茅山故居

柳郎中の茅山の故居に題す

唐 李德裕

下馬荒堦日欲曛 馬を下りて荒堦日 曛ぜんとす
潺潺石溜靜中間 潺潺たる石溜 靜中に聞く
鳥啼花落人聲絶 鳥啼き花落ち 人声絶え
寂寞山窗掩白雲 寂寞たる 山窓 白雲掩う

【語釈】

○柳郎中：不祥。○茅山：江蘇省鎮江市茅山。○故居：昔の住まい。○荒堦：荒れたきざし。○潺潺：浅い水の流れるさま。さらさら。○石溜：岩石の間の水流。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。

★西亭

西亭

唐 李商隱

此夜西亭月正圓

此の夜西亭月正まじに円まじかなり

疎簾相伴宿風煙

疎簾それん相伴あそばさいて風煙ふうえんに宿とどす

梧桐莫更翻清露

梧桐ぼくとう更さらに清露せいろうを翻ひるす莫なれ

孤鶴從來不得眠

孤鶴こかく從來しゆらい眠ねることを得えず

【語釈】

○疎簾…まばらな簾。○風煙…風にたなびくもや。○梧桐…アオギリ。○孤鶴…孤独で高潔な人のたとえ。

★江樓書感

江樓にて感を書す

唐 趙嘏

獨上江樓思渺然

独ひとりり江樓きやうろうに上のぼりて思おもい渺然びやうぜん

月光如水水聯天

月光げつこう水の如ごとく水みづ天あまに連つなる

同來玩月人何處

同ともに來きたりて月つきを玩もびし人ひと何れどこの処ところぞ

風景依稀似去年

風景ふうけい依稀いき去年こぞに似にたり

【語釈】

○江樓…川辺の高樓。○渺然…果てしなく広がる。果てしないさま。○如水…水のように冴えわたる。○水連天…川の水は大空まで続いている。○翫月…月を眺めて楽しむこと。○依稀…はつきりしないがうだ。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 悼楊氏妓琴弦

楊氏の妓琴弦を悼む

唐 韋莊

魂歸寥廓魄歸煙

魂は寥廓に歸し 魄は煙に歸す

只住人間十八年

只だ人間に住むこと十五年

昨日施僧裙帶上

昨日僧に施す 裙帶の上

斷腸猶繫琵琶弦

斷腸 猶お繫ぐ 琵琶の弦

【語釈】

○魂…人の精神を司るたましい。○魄…人の肉体や形質を司る魂。○冥漠…天空。○煙…靄、霞。ここでは地のこと。○施僧…死後十七日目に死者が愛用していた物を僧に施す習慣があった。○裙帶…もすその紐。○繫琵琶弦…裙帶を縛るのに、琵琶の弦を使用する。

(参考文献)

『三体詩』

★ 無題

無題

宋 王周

梨花如雪已相迷

梨花 雪の如く 已に相迷う

更被驚鳥半夜啼

更に驚かさる 鳥の 半夜に啼くに

簾捲玉樓人寂寂

簾 捲いて 玉樓 人 寂々

一鉤新月未沈西

一鉤の新月 未だ西に沈まず

【語釈】

○半夜…真夜中。○玉樓…玉で飾った楼閣。○寂寂…寂しく静かなさま。○一鉤…一つの釣り針のような。

★ 用西林舊韻

西林の旧韻きゅういんを用う

宋 朱熹

一自籃輿去不回 一たび籃輿らんよ去りて回かえらざるより
故山空鎖舊池臺 故山 空しく鎖くわさす 旧池台
傷心觸目經行處 傷心しよくもく 觸目 經行する處
幾度親陪杖屨來 幾度か 親しく 杖屨じょうりに陪ばいして來る

【語釈】

○籃輿…あじろの輿。○故山…故郷の山。○池台…池苑楼台。○觸目…目に触れる。○杖屨…老人に対する尊称。

★ 題陳景明梅廬

陳景明ちんけいめいの梅廬ばいりうに題す

宋 戴復古

手栽梅核待成林 手 梅核ばいかくを栽かえて 林と成るを待つ
慈母當年屬望深 慈母 当年 屬望しよくぼう深し
梅未成林人已往 梅 未だ林を成さざるに 人已ひとに往く
空酸孝子一生心 空しく酸さんす 孝子 一生の心

【語釈】

○陳景明…不祥。○梅廬…梅を植えたいおり。○梅核…梅の種。○當年…当時。○屬望…将来を期待する。○酸…酸味を感じる。

★ 悼阿駒

阿駒を悼む

宋 劉克莊

吾老方期汝亢宗
愛憐不與衆雛同
豈知希世千金產
止作空花賺乃翁

吾老いて方に期す 汝の亢宗
愛し憐れむ 衆雛と同じからざるを
豈に知らんや 希世 千金の産
止みて 空花と作りて 乃翁を賺すを

【語釈】

○阿駒…不祥。作者の子。○亢宗…宗族をおおい守ること。○衆雛…諸稚子。○希世…世に希であること。○空花…かすんだ目で天空をみるときにチラチラ見える雪のような物。○乃翁…兒孫に対して言う親の自称。○賺…あざむく。

★ 悼阿駒

阿駒を悼む

宋 劉克莊

人生憂患本無涯
強取瞿聃語自排
吾母白頭猶念我
吞聲不敢惱慈懷

人生の憂患 本より涯無し
強いて 瞿聃の語を取りて 自ら排す
吾が母 白頭 猶お我に念ず
声を呑み 敢えて 慈懷を悩せず

【語釈】

○阿駒…不祥。作者の子。○瞿聃…仏教と道教。○慈懷…慈しみの思い。

★ 殤女

殤女

宋 劉克莊

靈照羈魂章水西

靈照 羈魂 章水の西

冷風殘雪古招提

冷風 殘雪 古招提

老懷已作空花看

老懷 已に 空花を看るを作す

更把楞嚴曉病妻

更に 楞嚴を把りて 病妻に曉す

【語釈】

○殤女：死んだ女。○靈照：女性の代称。○羈魂：旅先で死んだ人の魂。○章水：不祥。
○招提：寺院。○老懷：老人の心の想い。○空花：かすんだ目で天空をみるとき、チラチ
ラ見える雪のような物。○楞嚴：楞嚴經。仏教の經典の名。

★ 失子

子を失う

金 周昂

白髮飄蕭老病身

白髮 飄蕭 老病の身

幾因兒女淚沾巾

幾か 兒女に因って 涙巾を沾す

虚談誤世王夷甫

虚談 世を誤る 王夷甫

只有情鍾語最真

只だ 情鍾の語 最も真なる有り

【語釈】

○飄蕭：頭髮のまばらなさま。○巾：ハンカチ。○虚談：現実と離れた議論。○王夷甫：
王衍。西晉瑯邪臨沂の人。口中雌黄（口からでまかせを言って、真相をおおい隠すこと）
の人といわれた（晉書王衍伝）。○情鍾語：人情が集まるといふ語。王衍が言った言葉に
よる。『大漢和辞典参照』

★ 還家

家に還る

金 李天翼

牡丹樹下影堂前

牡丹樹下 影堂の前

幾醉春風穀雨天

幾醉 春風 穀雨の天

二十六年渾一夢

二十六年 渾て一夢

堂空樹老我華顛

堂空しく 樹老いて 我は華顛

【語釈】

○影堂：先人の遺影を置く堂。○穀雨：二十四節季の一つ。4月20日ごろ。○華顛：白髪。

★ 輓道士

道士を輓む

明 王恭

雲卧山房秋草青

雲卧 山房 秋草青し

步虚聲斷月冥冥

步虚 声は断え 月冥々

凄凉行到空壇上

凄凉 行き到る 空壇の上

拾得松間舊鶴翎

拾い得たり 松間 旧鶴翎

【語釈】

○雲卧：隱居の家。○步虚：道士の経を唱える声。○冥冥：暗くかすかなさま。○凄凉：痛ましい。○空壇：何もない壇。○鶴翎：鶴の羽。

★ 感舊

旧に感ず

明 方孝孺

王郎遠逐雲中戍 王郎遠く逐う雲中の戍
許子俄爲地下郎 許子俄に地下の郎と為る
重訪故人尋舊迹 重ねて故人を訪ね 旧迹を尋ぬ
嶺雲溪月總堪傷 嶺雲 溪月 総て傷むに堪えたり

【語釈】

○王郎…王さん。○戍…守りの寨。○許子…許さん。○地下郎…死者。○故人…昔なじみ。

★ 一清軒感舊

一清軒 旧に感ず

明 林景清

往事淒涼似夢中 往事 淒涼 夢中に似たり
香奩人去玉臺空 香奩 人去りて 玉台空し
傷心最是秦淮月 心を傷ましむるは 最も是れ 秦淮の月
還對秋闈燭影紅 還た対す 秋闈 燭影の紅なるに

【語釈】

○往事…昔。○淒涼…ものさびしい。○香奩…香を入れる箱。○玉臺…玉で飾った鏡台。
○秦淮…秦淮河。南京を流れる川。○秋闈…秋の寢室。

★ 八月十三日夜夢亡室安人：

明 楊 慎

八月十三日夜 亡室安人を夢む：

五更殘夢正迷離

五更の殘夢 正に迷離

窓紙光明燭焰遲

窓紙 光明 燭焰遲し

卻憶去年當此日

却つて憶う 去年 此の日に当たり

催人晨起早朝時

人を催して 晨起す 早朝の時

【語釈】

○亡室安人：世を去った妻。○五更：夜明け方。○殘夢：明け方になつてうとうとしながら見続けている夢。○迷離：ぼんやりしているさま。○晨起：朝早く起きる。○早朝：朝早く。朝見の儀。

★ 八月十三日夜夢亡室安人：

明 楊 慎

八月十三日夜 亡室安人を夢む：

稚子今朝是兩週

稚子 今朝 是れ 兩週

新衣戲舞拜前頭

新衣 戲舞 前頭に拜す

傷心孺慕聲聲切

心を傷め 孺慕 声々切なり

母在重泉聽得不

母は 重泉に在りて 聴き得や不や

【語釈】

○稚子：幼兒。○今朝：今日。○兩週：二週。○前頭：全面、面前。○孺慕：父母に対する哀悼。○重泉：九泉、黄泉。

★ 輓王中丞

王中丞を輓む

明 李攀龍

司馬臺前列栢高

司馬台前 列栢高し

風雲猶自夾旌旄

風雲 猶自 旌旄を夾む

屬鏤不是君王意

屬鏤は 是れ 君王の意ならず

莫作胥山萬里濤

作す莫かれ 胥山 万里の濤

【語釈】

○王中丞…不祥。○司馬臺…不祥。○列栢…連なつた栢の木。○猶自…未だ。○旌旄…指揮をするのに用いる旗。○屬鏤…屬鏤の名劍。伍子胥がこの劍で自殺を命じられた。○胥山…江蘇省呉県の西南にある山。伍子胥の廟があつた。

★ 輓王中丞

王中丞を輓む

明 李攀龍

幕府高臨碣石開

幕府 高く臨みて 碣石開く

薊門丹旒重裴徊

薊門の丹旒 重ねて裴徊す

沙場入夜多風雨

沙場 夜に入つて 風雨多し

人見親提鐵騎来

人は見る 親しく 鉄騎を提て来るを

【語釈】

○幕府…將軍の指揮所。○碣石…墓石。○薊門…北京城西德勝門外西北の地。○丹旒…喪を出すときに用いる赤色の名前を書いた旗。○沙場…戰場。○鐵騎…精銳の騎兵。

★感事

事に感ず

明 屠 隆

玉堂人去事荒涼
蔓草春回白野牆
唯有多情雙燕子
猶來江上覓彫梁

玉堂人は去りて事荒涼
蔓草春回りて自ら野牆
唯だ多情の双燕子のみ有りて
猶お江上に来て 彫梁を覓む

【語釈】

○玉堂…玉で飾った堂。○蔓草…つるくさ。○野牆…野原の牆。○雙燕子…つがいの燕。
○彫梁…彫刻を施した梁。

★無題

無題

明 陸 弼

珠簾寂寞網流塵
舞歇歌殘已十春
惟有香魂消不得
至今猶作夢中人

珠簾寂寞として流塵を網し
舞歇み歌残り已に十春
惟だ香魂の消え得ざる有り
今に至って猶お夢中の人と作る

【語釈】

○珠簾…玉すだれ。○寂寞…ひっそりとして寂しいさま。○網…網で捕らえる。○十春…十年。○香魂…美人の魂。

★ 過程學士墓

程學士の墓を過ぐ

明 孫友簾

野水空山拜墓堂
野水空山墓堂を拝す
松風濕翠灑衣裳
松風 翠を湿し 衣裳に灑く
行人欲問前朝事
行人問わんと欲す 前朝の事
翁仲無言對夕陽
翁仲 言無く 夕陽に對す

【語釈】

○程學士…不祥。○行人…旅人。○前朝…前の時代の朝廷。○阮翁仲…秦の時代の阮翁仲。身長一丈三尺の豪傑。ここではその銅像。

★ 哭句章公

句章公を哭す

明 沈一貫

從此斯文失主盟
此從り 斯文 主盟を失う
海鷗飛去不留情
海鷗 飛び去り 留らざるの情
可憐櫟社長橋月
憐むべし 櫟社 長橋の月
曾照詩翁散髮行
曾て照らす 詩翁 散髮して行くを

【語釈】

○句章公…不祥。句章は、浙江省寧波市鄞州区。○斯文…文学。○主盟…盟主。○櫟社…神社の象徴として立っているクスギの木。故郷。○詩翁…詩人の尊称。○散髮…官を辞めて隠棲する。

★ 哭張天如先生

張天如先生を哭す

清

陳子龍

江城日日坐相思

江城 日々 坐に相思う

尺素我傳絶命詩

尺素 我に伝う 絶命詩

讀罷驚魂如夢裏

讀み罷みて 驚魂 夢裏の如し

千行落涙不堪悲

千行の落涙 悲に堪えず

【語釈】

○張天如：張溥。江蘇省蘇州太倉の人。蘇州虎丘の会を設け数千人を集めた。○江城：川辺の街。○尺素：書信。○夢裏：夢の中。

★ 哭張天如先生

張天如先生を哭す

清

陳子龍

越山北望指吳關

越山 北望し 吳関を指す

一月緘書幾往還

一月 緘書 幾往還

數日不傳雲裏字

數日 伝えず 雲裏の字

那知非復在人間

那んぞ知らん 復た 人間に在るに非ざるを

【語釈】

○張天如：張溥。江蘇省蘇州太倉の人。蘇州虎丘の会を設け数千人を集めた。○越山：越（江蘇省会稽を中心とする地方）の山。○北望：北方を眺める。○吳關：江蘇省杭州の地。○一月：一ヶ月。○緘書：書信。○雲裏：雲の中。

★ 悼亡

悼亡 あひぼう

明 孟淑卿

斑斑羅袖濕啼痕

斑々たる羅袖 啼痕に湿る はんぱん らしゅう ていこん しめ

深恨無香使返魂

深く恨む香の返魂せしむ無きを へんこん

荳蔻花開人不見

荳蔻花開いて人見ず とうこう

一簾明月伴黄昏

一簾の明月 黄昏に伴う いちれん こうこん

【語釈】

○悼亡：死者を哀悼する。○斑斑：斑な点の多いさま。○羅袖：薄絹の着物の袖。○啼痕：涙の痕。○返魂：死者が復活する。○荳蔻：シヨウガ科の多年草。○黄昏：たそがれ。

★ 悼長孺集句

長孺を悼む集句 ちやうじゆ いた しゅうく

明 丘劉

江流曲似九迴腸

江流 曲ること 九迴の腸に似たり きゅうかい

愁思非春亦自傷

愁思 春に非ずして 亦た自ら傷む ま おのずか

明月不知人世變

明月は知らず 人世の変わるを

夜來依舊下西廂

夜來 旧に依りて 西廂を下る せいしやう

【語釈】

○集句：先人の句を寄せ集めて作った詩。○九迴腸：腸が多く曲がっていること。愁いの思いが解きがたいことのとえ。○夜來：夜になってから。○西廂：西側のひさし。

★ 夢長兄悽然有作

長兄を夢みて悽然として作る有り

明 僧明秀

獨夜殘燈一雁鳴

独夜 残灯 一雁鳴く

淒涼夢裏似半生

淒涼たる 夢裏 半生に似たり

相看無奈幽明隔

相見て 奈んするとも無し 幽明に隔たるを

枕畔蕭蕭風雨聲

枕畔 蕭々 風雨の聲

【語釈】

○悽然：痛ましくおもふ。○独夜：独り寝の夜。○夢裏：夢の中。○無奈：どうしようもない。○幽明隔：この世界とあの世とで別れていること。○枕畔：枕もと。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★ 過孫山人故居

孫山人の故居を過ぐ

明 僧明秀

溪邊野竹映寒沙

溪辺の野竹 寒沙に映ず

茅屋青山處士家

茅屋 青山 処士の家

燕子歸來寒食雨

燕子 帰り来る 寒食の雨

春風開徧野棠花

春風 開くこと徧し 野棠の花

【語釈】

○孫山人：不祥。○故居：旧宅。○寒沙：寒々とした砂浜。○茅屋：茅吹き of 粗末な家。○處士：官職につかず隠棲していた人。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○野棠：野原の海棠。

★ 題謝岱怡古稿

謝岱怡の古稿に題す

明 黎士弘

詩魂苦瘦看猶在
方駕曾劉意未尙
尚更十年身不死
無人道着買長江

詩魂 苦瘦 看ること猶お在り
駕を曾劉に方べ意 未だ尙らざ
尚お更に十年 身死せず
人の 買長江を道着する無し

【語釈】

○謝岱怡…不祥。○古稿…古い枯れ木。○詩魂…詩人の精神。○苦瘦…苦勞して瘦せること。○駕…乗り物。○道着…言い尽くす。着は助字。○買長江…？

★ 悼亡詩

悼亡詩

清 王士禛

病中送我向南秦
感逝傷離涕淚新
長憶啼猿斷腸處
嘉陵江驛雨如塵

病中 我を 南秦に向いて送る
逝を感じ 離を傷みて 涕淚 新なり
長く 啼猿を憶い 断腸する処
嘉陵江驛 雨塵の如し

【語釈】

○悼亡…死者を哀悼する。○南秦…雲南省昭通市。○涕淚…涙をながす。○断腸…非常な悲しみ。○嘉陵江驛…長江上遊支流で四川省東部を流れる川の側にある宿場街。

★ 悼亡詩

悼亡詩

清 王士禛

藥罇經卷送生涯
禪榻春風兩鬢華
一語寄君君聽取
不教兒女衣蘆花

藥罇 經卷 生涯を送る
禪榻の春風 兩鬢の華
一語 君に寄す 君聴取せよ
兒女をして 蘆花を衣せしめず

【語釈】

○悼亡：死者を哀悼する。○藥罇：薬を入れる壺。○經卷：宗教の教典。○禪榻：座禅を組む腰掛け。○蘆花：蘆依、蘆で作った粗末な衣。《太平禦覽》卷八一九《孝子傳》…
“ 閔子騫の故事。”

★ 輓馬章民年丈

馬章民年丈を輓む

清 張玉書

辛苦中閨罷錦機
白頭曾未識宮衣
可憐風雨寒燈夢
猶是書堂夜讀歸

辛苦 中閨 錦機を罷む
白頭 曾て 未だ 宮衣を識らず
憐む可し 風雨 寒灯の夢
猶お是れ 書堂 夜読して帰る

【語釈】

○馬章民：馬世俊。江蘇省常州市溧陽の人。順治十八年の狀元，修撰を授かり、侍讀に移った。○年丈：年伯。父と同じ年に進士に及第した人。○中閨：内室。○錦機：錦を織る機織り機。○宮衣：宮中で着る衣服。○可憐：感嘆の言葉。ああ。○書堂：学堂。

★重經采石江懷曹梁父

重ねて采石江を經 曹梁父を懷う

清 王士祐

憶向江于惜別離

憶う 江于に向いて 別離を惜しみ

黄昏石壁共題詩

黄昏 石壁 共に詩を題す

今來寂寞空江上

今來 寂寞 空江の上

獨酌青蓮夜雨祠

ひとり 青蓮を酌ぐ 夜雨の祠

【語釈】

○采石江：安徽省馬鞍山市を流れる川。○曹梁父：不祥。○江于：川岸。○寂寞：寂しいさま。○青蓮：青色の蓮の花。

★重經采石江懷曹梁父

重ねて采石江を經 曹梁父を懷う

清 王士祐

禪榻何人對寂寥

禪榻 何人か 寂寥に対す

短檠和淚雨瀟瀟

短檠 涙に和し 雨 瀟々

若為麗向寒江裏

若為 麗向 寒江の裏

月黒雲深欲上潮

月は黒く 雲は深く 上潮ならんと欲す

【語釈】

○采石江：安徽省馬鞍山市を流れる川。○曹梁父：不祥。○禪榻：腰掛け。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○短檠：短い灯。○瀟瀟：雨風が寂しく降る（吹く）音の形容。○若為：「いかんぞ」と読み、「どのように」「どうして」の意。

★悼亡妾趙氏

妾 趙氏を悼亡す

清 惠過惕

春時初嫁秋來病
春時初めて嫁し 秋來病なり
九月東遊我未歸
九月東遊し我未だ帰らず
獨擁寒衾壓針線
ひとり寒衾を擁し 針線を圧す
辛勤還為寄寒衣
辛勤還た為に寒衣を寄す

【語釈】

○妾…妻。○悼亡…死者を悼む。○秋來…秋になってから。○東遊…東方に旅をする。○寒衾…寒い掛け布団。○針線…裁縫刺繍の仕事。○辛勤…辛苦勤勞。○寒衣…冬着。

★悼亡妾趙氏

妾 趙氏を悼亡す

清 惠過惕

年來無夢到彤扉
年來夢の彤扉に到る無く
臥聽三商玉漏稀
臥して聴く 三商 玉漏稀なるを
記得去春風雪夜
記得す 去春 風雪の夜
添香喚我著朝衣
香に添いて 我を喚び 朝衣を著くを

【語釈】

○妾…妻。○悼亡…死者を悼む。○年來…一年この方。○彤扉…赤い扉。○三商…三刻。○六時間。○玉漏…水時計の美称。○記得…覚えている。○去春…昨年。○朝衣…参内するときの礼服。

★舟泊劍津懷亡友劉復菴

舟劍津に泊し亡友劉復菴を懷う

清 許潤

分手齊安隔數春

齊安に手を分かちて數春を隔つ

何緣龍劍合延津

何に縁りて龍劍延津を合す

可堪風雨孤舟夜

堪える可し風雨孤舟の夜

白髮盈頭哭故人

白髮頭に盈ち故人を哭す

【語釈】

○劍津：福建省南平県。○劉復菴：不祥。○齊安：廣東省江門市恩平市。○龍劍：古代の寶劍の一つ、龍泉ともいう。○延津：延平津（福建省南平市東南にある津）、晉の時、龍泉・太阿の兩劍が分離後、この地において合併して龍となったとの伝説がある。

★七夕詞

七夕詞

清 沈德潛

璇宮休怨渺難攀

璇宮怨むを休めよ渺として攀ずこと難きを

地久天長往復還

地久天長往復して還る

但有生離無死別

但だ生離有りて死別無し

果然天上勝人間

果然として天上は人間に勝る

【語釈】

○璇宮：玉で飾った宮殿。○地久天長：時間の長いことの形容。○生離：生きて離ればなれになること。○果然：はたして。思った通り。○人間：人間世界。

★ 悼亡

悼亡 あいはらう

清 張照

邊關暑夕冷於秋
孤鵲驚飛別樹頭
此夜萬家明月裏
幾家思婦獨登樓

へんかん 邊關の暑夕 しよせき 秋よ於りも冷かなり
孤鵲驚飛し 樹頭に別る
此の夜 万家 明月の裏 うち
幾家か 婦るを思い 独り楼に登る

【語釈】

○邊關：辺境の関所。○孤鵲：群れを離れたカササギ。○思婦：死者の魂が帰ってくる。

★ 過吳寧若故宮過

吳寧の若故宮に過ぎる へいねいじやくこくう

清 儲雄文

三年不到西州路
松下重來歎竹扉
鶯語空堂春寂寂
緑陰深護舊漁磯

三年到らず 西州の路
松下 重ねて来り 竹扉を歎く たた
鶯語 空堂 春 寂々 おうご せせせせ
緑陰 深く護る 旧漁磯 りくいん かくまひる いくいし

【語釈】

○吳寧：浙江省金華市東陽市。○若故宮：不祥。○西州：不祥。○寂寂：寂しく静かなさま。○漁磯：魚を釣る川辺の石。

★ 哭女

女を哭すじよ

清

姚世鈺

十歳言詩有性靈

十歳詩を言い 性靈有り

木蘭愛説替爺征

木蘭愛し説きて 爺に替りて征ゆ

黄泉不是黄河水

黄泉こうせん 是れ 黄河の水ならず

聞否耶嬢喚女聲

聞くや否や 耶嬢やじょう 女を喚よぶ声

【語釈】

○性靈…性情。○耶嬢…父母。

★ 哭女

女を哭すじよ

清

姚世鈺

貧家生小儉梳妝

貧家 生小 梳妝しよしょうげん 儉なり

竹筒練裙少盛裝

竹筒ちくす 練裙れんくん 盛装まれ 少なり

繡得羅襦幾回著

繡い得たる羅襦らしゆ 幾回ちやく 著す

送終猶是嫁衣裳

終を送りて 猶お是れ 嫁衣裳

【語釈】

○生小…幼少。○儉…つつましい。○梳妝…化粧をすること。○竹筒…衣裳を入れる竹製の容器。○練裙…絹製の裳裾。○羅襦…綢製の短衣。

★ 哭女

女を哭す

清 姚世鈺

傳業方今羨蔡邕
慰情那更比陶公
明知此恨古人少
哭女偏當無子翁

業を伝え方に今蔡邕を羨むべし
情を慰めて那ぞ更に陶公に比せん
明知此に恨む古人に少なるを
女を哭するは偏えに当に子無きの翁なるべし

【語釈】

○業：家に伝わる学問。方：「まさにすべし」と読み、「ちようど」の意。○蔡邕：後漢末期の政治家・儒者・書家。○陶公：陶淵明。「弱女雖非男，慰情良勝無。」○當：「まさにすべし」と読み「〜であるのが当然である」の意。

★ 方舟廬先姑墓感賦

方舟先姑の墓に廬る感じて賦す

清 朱柔即

寝苦枕塊空山裏
却望松楸淚泫然
縱使慈烏能反哺
可能飛得到九泉

苦に寝ね塊に枕す空山の裏
却つて松楸を望めば涙 泫然
縦い慈烏をして能く反哺せしむとも
能く飛びて九泉に到るを得べけんや

【語釈】

○方舟：はこぶね。○先姑：亡くなった姑。○松楸：松とひさぎ。○泫然：涙などのハラハラと落ちるさま。○慈烏：白居易「慈烏夜啼」による。○反哺：鳥が成長して親にエサを与えること。

★癸丑秋陳妾得舉一子誌喜

清 吳 巽

癸丑きちゆうの秋あき 陳妾ちんしやう一子を舉げ得たり 喜びて誌す

窮薄還憑世澤存

窮薄きゆうはく 還たのつて憑せたくむ 世沢せたくの存ぞんすを

朝來弧矢喜懸門

朝來ちやうらい 弧矢こ 喜びて門かに懸く

翻嗟姑舅先朝露

翻ひるがえつて嗟さす 姑舅こしゆう 朝露あさつゆに先んじ

未得生前一弄孫

未だ 生前せうぜん 一孫いつそんを弄ろうす を得ざるを

【語釈】

○窮薄…不幸せ。○世澤…先祖からの財産。○朝來…朝になってから。○姑舅…しゅうととしゅうとめ。

絶句類選 卷之十二 仙釋類

★ 題法院

法院に題す

唐 常建

勝景門開對遠山

勝景門開いて遠山に対す

竹深松老半含煙

竹深く松老いて半ば煙を含む

素月殿中三度磬

素月殿中 三度の磬そげつでんちゆう

水晶宮裏一僧禪

水晶宮裏 一僧禪すいしやうきゆうり

【語釈】

○勝景…光風景。○煙…霞、靄。○素月殿…不祥。素月(明るい月光)に照らされた殿? ○磬…石や金属で出来たへ字型の樂器。○水晶宮…不祥。水晶のような宮殿?

★ 過融上人蘭若

融上人の蘭若に過る

唐

孟浩然

山頭禪室挂僧衣
山頭の禪室 僧衣を挂く
窗外無人溪鳥飛
窗外 人無く 溪鳥飛ぶ
黄昏半在下山路
黄昏 半ば 山路の下に在り
却聽鐘聲度翠微
却つて聴く 鐘聲の翠微を度るを

【語釈】

○融上人…不祥。○蘭若…寺院。○溪鳥…谷に棲む鳥。○黄昏…たそがれ。○翠微…山の緑の深い中腹あたり。

★ 柏林寺南望

柏林寺の南望

唐

郎士元

溪上遙聞精舍鐘
溪上 遙に聞く 精舍の鐘
泊舟微徑度深松
舟を泊して 微徑 深松を度る
青山霽後雲猶在
青山 霽れて後雲 猶お在り
畫出西南四五峰
畫き出す 西南の四五峰

【語釈】

○柏林寺…河北省趙県にある寺。○精舍…祇園精舍。転じて寺院。○微徑…細い道。

★ 題淨居寺

淨居寺じようきよじに題す

唐 戴叔倫

玉峰山下雲居寺

玉峰山下ぎよくほうさんかの雲居寺うんきよじ

六百年來選佛場

六百年來せんふつじやう選仏場

滿地白雲關不住

滿地の白雲とぎ関し住まず

石泉流出落花香

石泉い流れ出で落花かんば香し

【語釈】

○淨居寺：江西省吉安市淨居寺。○玉峰山：不確定。○雲居寺：淨居寺。○選佛場：座禪の修行をする僧堂。

★ 夏日登鶴巖偶成

夏日かきがん鶴巖に登る偶成

唐 戴叔倫

天風吹我上層岡

天風 我を吹いて 岡層に上らしむ

露灑長松六月涼

露は 長松に灑そそいで 六月涼し

願借老僧雙白鶴

願くは 老僧の双そうはくちやう白鶴を借りて

碧雲深處共翱翔

碧雲へきうん 深き処 共に翱翔じやうしやうせん

【語釈】

○鶴巖：福建省南平市鶴岩？。○岡層：重なりあつた丘。○翱翔：鳥が高く飛び上がる。

(参考文献) 「ブログ 詩詞世界」

★ 過柳溪道院

柳溪の道院に過るよぎ

唐 戴叔倫

溪上誰家掩竹扉
鳥啼渾似惜春暉
日斜深巷無人跡
時見梨花片片飛

溪上誰が家か竹扉を掩す
鳥啼渾て春暉を惜しむに似たり
日斜して深巷人跡無く
時に見る梨花の片々として飛ぶを

【語釈】

○道院…道教の寺。○春暉…春日の陽光。○深巷…奥深い道。○片片…ひらひらと軽く飛ぶ。

★ 玉真公主影殿

玉真公主の影殿影殿

唐 盧綸

夕照臨窗起暗塵
青松繞殿不知春
君看白髮誦經者
半是宮中歌舞人

夕照窓に臨んで暗塵起る
青松殿を繞りて春を知らず
君看よ白髮経を誦する者
半ば是れ宮中歌舞の人

【語釈】

○玉真公主…唐の睿宗の娘。○影殿…遺影を飾った殿堂。

★ 題雲公山房

雲公うんこうの山房さんぼうに題す

唐 權徳興

雲公蘭若深山裏

雲公うんこうの蘭若らんにや 深山深山の裏うち

月明松殿微風起

月明あきらかにして松殿しょうでん 微風起る

試問空門清淨心

試問しもんす空門くうもん 清淨せいじやうの心

蓮花不著秋潭水

蓮花れんげ 著つかず 秋潭しゅうたんの水

【語釈】

○雲公…不祥。○蘭若…寺院。○松殿…周りに松を植えた殿堂。○試問…試みに尋ねる。
○空門…仏法。○秋潭…秋の淵。

★ 贈廣通上人

廣通こうつう上人しょうにんに贈る

唐 權徳興

身隨猿鳥在深山

身は猿鳥さるどりに随したがいて 深山深山に在り

早有詩名到世間

早つとに詩名しなの世間よに到いたる有り

客至上方留盥漱

客かく 至いたりて 上方かみ 留とどめて盥漱かんそうす

龍泓洞水晝潺潺

龍泓洞りゅうこうどう水みづ 晝ひる 潺潺せんせん

【語釈】

○廣通上人…不祥。○上方…僧侶の住まい。○盥漱…手を洗い口すすぐ。○龍泓洞…不祥。○潺潺…浅い水の流れるさま。さらさら。

★題張道士山居

張道士の山居に題す

唐 秦 系

盤石垂蘿即是家

盤石の垂蘿 即ち是の家

回頭猶看五枝花

頭を回して 猶お看る 五枝の花

松間寂寂無煙火

松間 寂々 煙火無く

應服朝來一片霞

応に服すべし 朝來 一片の霞

【語釈】

○張道士…不祥。○盤石…大石。○垂蘿…垂れ下がったつる草。○寂寂…静かで物寂しいさま。○應…「まさに「すべし」と読み、「どうぜんくであるはずだ」の意。○朝來…朝からの。

★生公講堂

生公の講堂

唐 劉禹錫

生公說法鬼神聽

生公 法を説き 鬼神聴く

身後堂空夜不扃

身後 堂 空くして 夜 扃さず

高坐寂寥塵漠漠

高坐 寂寥 塵 漠々

一方明月可中庭

一方の明月 中庭に可なり

【語釈】

○生公…晋末高僧竺道生の尊称。○身後…死後。○高坐…聴講者に法を説く高所の座席。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま。○漠漠…平らに連なっているさま。○一方…一片。

★ 春題華陽觀春

春華陽觀に題す

唐 白居易

帝子吹簫逐鳳皇 帝子簫を吹いて 鳳皇を逐い
空留仙洞號華陽 空しく仙洞を留めて 華陽と号す
落花何處堪惆悵 落花 何れの処か 惆悵に堪えん
頭白宮人掃影堂 頭白の宮人 影堂を掃う

【語釈】

○華陽觀：長安永嵩里にあった道觀。代宗の五女華陽後主の旧宅。○起句：亭主は華陽後主、秦の穆公の女弄玉が簫の名人簫史に嫁し、遂に自ら簫を吹いて、鳳に乗って仙境へ飛び去った故事を踏まえる。○仙洞：仙人の住む洞穴。○惆悵：嘆き悲しむ。

〔参考文献〕 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 苦熱題恆寂師禪室

熱に苦しみ恆寂師の禪室に題す

唐 白居易

人人避暑走如狂 人々 暑を避けて 走ること 狂するが如し
獨有禪師不出房 独り 禪師の 房を出でざる有り
可是禪房無熱到 可して 是れ 禪房 熱の到ること無けんや
但能心靜即身涼 但だ 能く 心靜かなれば 即ち身も涼し

【語釈】

○恆寂師：不祥。○可是：…といったいだろうか。当時の俗語。○但：…しさえすれば。当時の俗語。○能：直ちに、そのまま。

（参考文献） 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 題揚州木蘭院

揚州ようしゅうの木蘭院もくわんいんに題す

唐 王 播

三十年前此地遊

三十年前此の地に遊ぶ

木蘭花發院初修

木蘭花ひら発ひらいて院初めて修しゅうす

如今再到經行處

如今じよこん再び到り經行けいこうする処

樹老無花僧白頭

樹老いて花無く僧は白頭

【語釈】

○木蘭院：不祥。○揚州：江蘇省揚州市。○修：飾る。○如今：現在。○經行：一定の地を繞って往来する。

★ 宿冽上人房

冽上人れつじょうにんの房に宿す

唐 徐 凝

浮生不定若蓬飄

浮生ふせい定まらず蓬たなよの飄たひうが若し

林下真僧偶見招

林下の真僧たまた偶たまたま招き見る

覺後始知身是夢

覺めて後始めて知る身は是れ夢なるを

更聞寒雨滴芭蕉

更に聞く寒雨の芭蕉したたに滴したたたるを

【語釈】

○浮生：人生の定まらないこと。○真僧：戒律を嚴格に守っている人。

★ 題鶴林寺僧舍

鶴林寺の僧舎に題す

唐 李涉

終日昏昏醉夢間

終日 昏昏 醉夢の間

忽聞春盡強登山

忽ち 春の尽くるを聞いて 強いて 山に登る

因過竹院逢僧話

竹院に過りて 僧話に逢うに 因り

又得浮生半日閑

又得たり 浮生 半日の閑

【語釈】

○鶴林寺：江蘇省鎮江市南郊にある寺。○昏昏：うつらうつらしているさま。○竹院：周りに竹を植えてある院。○浮生：人生の定まらないこと。

★ 登慈恩寺

慈恩寺に登る

唐 劉滄

金界時來一訪僧

金界 時に來りて 一たび僧を訪ぬ

天香飄翠瑣窗凝

天香 翠を 飄えして 瑣窓 凝る

碧池靜照寒松影

碧池 靜かに照らす 寒松の影

清晝深懸古殿燈

清晝 深く懸く 古殿の灯

【語釈】

○慈恩寺：陝西省西安の南東にある名刹。○金界：仏寺。○天香：芳香の美称。○瑣窗：鎖の模様で飾った窓。○清晝：昼間。

★ 重過文上人院

重ねて文上人の院に過ぎる

唐 李涉

南隨越鳥北燕鴻

南は越鳥に随い北は燕鴻

松月三年別遠公

松月三年遠公に別る

無限心中不平事

限り無し心中不平の事

一宵清話又成空

一宵の清話又空と成る

【語釈】

○文上人：不祥。○越鳥：南方の鳥。○燕鴻：河北省（北方）のおおとり。○松月：松を照月。幽然とした情景。○遠公：晉の高僧慧遠、廬山の東林寺に居住した。

★ 題開聖寺

開聖寺に題す

唐 李涉

宿雨初收草木濃

宿雨初めて収まり草木濃なり

羣鴉飛散下堂鍾

群鴉飛び散ず下堂の鍾

長廊無事僧歸院

長廊事無く僧院に帰り

盡日門前獨看松

尽日門前独り松を看る

【語釈】

○開聖寺：不祥。○宿雨：前夜からの雨。長雨。○盡日：一日中。

★ 春晚遊鶴林寺寄使府諸公

唐 李涉

春晚 鶴林寺かくりんじに遊び 使府諸公しふしよこうに寄す

野寺尋花春已遲

野寺やじ花を尋ねれば春已に遅し

背巖唯有兩三枝

巖いわおに背そむきて 唯だ 兩三枝有り

明朝攜酒猶堪賞

明朝酒を携えて 猶お賞するに堪えたり

爲報春風且莫吹

為に報しほず 春風 且く吹く莫かれと

【語釈】

○鶴林寺：江蘇省鎮江市南郊にある寺。○使府：節度使の役所。○堪賞：愛でることができさる。

★ 贈楊煉師

楊煉師ようれんしに贈る

唐 鮑溶

紫煙衣上繡春雲

紫煙衣しえんい上 春雲を繡しゅうす

清隱山書小篆文

清隱 山書 小篆文しょうてんぶん

明月在天將鳳管

明月 天に在りて 鳳管ほうかんを將まさつて

夜深吹向玉晨君

夜深くして 吹いて 玉晨君ぎよくしんくんに向う

【語釈】

○楊煉師：不祥。○紫煙：紫色の瑞雲。○小篆文：秦の字臺に使われた文字かいた文書。○鳳管：簫や笙の美称。○玉晨君：道教の神。

★ 贈楊煉師

楊煉師ようれんしに贈る

唐 鮑溶

道士夜誦藥珠經

道士夜誦じやす 藥珠ずいじゆきやう經

白鶴下遶香煙聽

白鶴はくかく下りて 香煙めくを遶りて聽く

夜移經盡人上鶴

夜移り經 尽きて 人鶴に上り

仙風吹入秋冥冥

仙風 吹き入りて 秋 冥冥めいめいたり

【通釈】

○楊煉師…不祥。○道士…道教の僧。○藥珠經…道教の教典の一つ。○冥冥…奥深くかすかなさま。

★ 峰頂寺

峰頂寺ほうちやうじ

唐 張祜

月明如水山頭寺

月明 水の如し 山頭さんとうの寺

仰面看天石上行

面を仰ぎ 天を看て 石上に行く

夜半深廊人語定

夜半の深廊 人語定まり

一枝松動鶴歸聲

一枝松 動いて 鶴の歸る声

【語釈】

○峰頂寺…不祥。○山頭…山の頂上。○仰面…顔を上げて上を見る。○定…やむ。

★仙遊寺

仙遊寺に題す

唐

朱慶餘

雲抱龍堂蘚石乾
雲は竜堂を抱いて 蘚石乾き
山遮白日寺門寒
山は白日を遮りて 寺門寒し
長松瀑布饒奇狀
長松 瀑布 奇狀を饒し
曾有仙人駐鶴看
かつて 仙人の 鶴を駐めて 看る有り

【語釈】

○僊遊寺：陝西省周至県の南にある寺。○龍堂：龍の絵がある堂。○蘚石：苔の生えた石。○奇狀：珍しく美しい形状。

★酔後題禪院

酔後禪院に題す

唐

杜牧

觥船一掉百分空
觥船 一掉 百分空し
十歳青春不負公
十歳の青春 公に負かず
今日鬢絲禪榻畔
今日 鬢糸 禪榻の畔
茶煙輕颺落花風
茶煙 軽く颺がる 落花の風

【語釈】

○觥船：水牛の角で作った大杯。舟の形をしている。○一掉：舟を棹で一漕ぎする。一氣飲み。○百分空：全部空になる。○禪榻：禪寺の長椅子。

(参考文献) 『新釈漢文大系 詩人編 9』

★ 憶住一師

住一師を憶う

唐 李商隱

無事經年別遠公
無事 經年 遠公に別る
帝城鐘曉憶西峰
帝城の鐘曉 西峰を憶う
爐煙消盡寒燈晦
爐煙 消え尽くし 寒灯晦し
童子開門雪滿松
童子 門を開けば 雪松に満つ

【語釈】

○住一師…不祥。○遠公…晉の高僧慧遠。廬山の東林寺に居住した。○帝城…帝都長安。
○炉煙…香炉の煙。

★ 定山寺

定山寺

唐 薛逢

十里松蘿映碧苔
十里の松蘿 碧苔に映ず
一川晴色鏡中開
一川の晴色 鏡中に開く
遙聞上界翻經處
遙かに聞く 上界 經を翻する處
片片香雲出院來
片片たる 香雲 院を出て来る

【語釈】

○定山寺…不祥。○松蘿…松とカズラ。○上界…天界。仏のいる寺。○片片…ひらひらと
軽く飛ぶさま。○香雲…美しい雲。

★李侍御歸炭谷山居同宿華嚴寺

唐 趙 嘏

李侍御が炭谷の山居に帰り華嚴寺に同宿す

家在青山近玉京

家は青山に在りて 玉京に近し

白雲紅樹滿歸程

白雲紅樹 歸程に満つ

相逢一宿最高寺

相逢いて 一宿す 最高の寺

半夜翠微泉落聲

半夜 翠微 泉の落つる声

【語釈】

○李侍御：不祥。○炭谷：長安城の南にある靈母谷？○華嚴寺：陝西省西安市華嚴寺。○玉京：帝都長安。○歸程：歸路。○翠微：山の中腹の緑色の所。○

★ 尋僧

僧を尋ぬ

唐 趙 嘏

溪戸無人谷鳥飛

溪戸 人無く 谷鳥飛ぶ

石橋横木掛禪衣

石橋の横木に 禪衣を掛く

看雲日暮倚松立

雲を看て 日暮 松に倚りて立つ

野水亂鳴僧未歸

野水 乱れ鳴き 僧 未だ歸らず

【語釈】

○溪戸：溪にある家。○谷鳥：谷に棲む鳥。

★僧舎

僧舎

唐 趙嘏

溪上禪關水木間
水南山色與僧閑
春風盡日無來客
幽磬一聲高鳥還

溪上の禪関 水木の間
水南の山色 僧と与に閑なり
春風 尽日 來客無く
幽磬 一声 高鳥還る

【語釈】

○禪關：禪寺の門。○山色：山の気配。○盡日：一日中。○幽磬：奥深い磬（金属、石で出来たへの字型の楽器）の音。○高鳥：高く飛ぶ鳥。

★文殊院避暑

文殊院に暑を避く

唐 李羣玉

赤日黄埃滿世間
松聲入耳即心閑
願尋五百仙人去
一世清涼住雪山

赤日 黄埃 世間に満つ
松声 耳に入り 即ち心閑なり
願わくは 五百仙人を尋ねて去り
一世の清涼 雪山に住せん

【語釈】

○文殊院：四川省成都市文殊院。○赤日黄埃：俗世間の煩わしきの比喩。○五百仙人：不祥。

★ 峽山寺上方

峽山寺の上方

唐 李羣玉

滿院泉聲水殿涼
疎簾微雨野松香
東峰下視南溟月
笑踏金波看海光

滿院の泉声 水殿涼し
疎簾の微雨 野松香し
東峰 下に視る南溟の月
笑って 金波を踏み 海光を看る

【語釈】

○峽山寺…不祥。○上方…僧侶の住居。○滿院…中庭一杯。○水殿…水に臨む殿堂。○南溟…南の海。○金波…月光。

★ 紫極宮齋後

紫極宮 齋後

唐 李羣玉

紫府空歌碧落寒
曉星寥亮月光殘
一羣白鶴高飛上
唯有松風吹石壇

紫府の空歌 碧落寒し
曉星 寥亮 月光残る
一群の白鶴 高く飛上がり
唯だ 松風の石壇を吹く有るのみ

【語釈】

○紫極宮…不確定。○齋後…身を清めた後。○紫府…道教の仙人の住むところ。○碧落…道教の語で青空。○寥亮…清らかに響く。

★ 歩虚詞

歩虚詞

唐 高駘

青溪道士人不識

青溪道士 人識らず

上天下天鶴一隻

天に上り 天を下る 鶴一隻

洞門深鎖碧窗寒

洞門 深く鎖ざし 碧窓寒し

滴露研朱點周易

滴露 朱を研じて 周易に点す

【語釈】

○歩虚詞：道教を賛美する詩。○青溪道士：諸子百家一人である鬼谷子。道教では古の真仙とみなしている。○滴露研朱：朱筆で文書を改めること。○周易：易経に記された、爻辞、卦辞、卦画に基づいた占術。

★ 頭陀僧

頭陀僧

唐 陸龜蒙

萬峰圍繞一峰深

万峰 圍繞し 一峰深し

向此長修苦心行

此に向って 長修す 苦心の心

自掃雪中歸鹿跡

自ら掃う 雪中 歸鹿の跡

天明恐被獵人尋

天明 恐らくは 獵人に尋ねらるらん

【語釈】

○頭陀僧：俗塵、煩惱から離れた僧。○圍繞：取り囲む。○歸鹿跡：山に帰った鹿の足跡。○天明：夜明け。

★ 贈老僧

老僧に贈る

唐 陸龜蒙

枯貌自同霜裏木
餘生唯指佛前燈
少時寫得坐禪影
今見問人何處僧

枯貌こぼう 自ら同じおのずか 霜裏そうりの木に
余生 唯だ指す 仏前の灯
少時 写し得たる 坐禪の影
今見て 人に問う 何れの処の僧かと

【語釈】

○枯貌…老いた容貌。○少時…若年の時。

★ 贈日東鑿禪師

日東の鑑禪師に贈る

唐 司空圖

故國無心渡海潮
老禪方丈倚中條
夜深雨絕松堂靜
一點山螢照寂寥

故国 無心にして 海潮かいちょうを渡り
老禪の方丈 中条ちゆうじょうに倚る
夜深くして 雨絶え 松堂静かなり
一点さんけいの山螢 寂寥せきりょうを照す

【語釈】

○日東…日本。○鑿禪師…鑑禪師、日本人僧侶の名。○方丈…僧の居室。○中條…中條山、長安と洛陽の中間にある。○松堂…松林の中にある堂。○寂寥…ひっそりとして物寂しうさま。

(参考文献) 『三体詩』

★西蜀淨衆寺七祖院小山

唐 鄭谷

西蜀の淨衆寺の七祖院の小山

小巧功成雨蘚斑

小巧 功成りて 雨蘚 斑なり

軒車日日扣松關

軒車 日々 松關を扣く

峨眉咫尺無人去

峨眉 咫尺 人の去る無く

却向僧窗看假山

却つて僧窓に向つて假山を看る

【語釈】

○淨衆寺：不祥。○七祖院：不祥。○小巧：小さな技巧。○雨蘚：雨を帯びた苔。○軒車：大夫以上が乗る車。○松關：柴門。粗末な門。○峨眉：峨眉。四川省にある名山。○咫尺：距離の近いことの形容。○假山：庭に作った築山。

★別修覺寺無本上人

修覺寺の無本上人に別る

唐 鄭谷

松上閑雲石上苔

松上の閑雲 石上の苔

自嫌歸去夕陽催

自ら嫌う 帰り去りて 夕陽催すを

山門握手無語他

山門 手を握り 他語無し

祗約今冬看雪來

祗だ約す 今冬 雪を看に來らんと

【語釈】

○修覺寺：四川省成都市新津県修覺寺。○無本上人：不祥。○閑雲：悠悠として空に浮かんでいる雲。

★ 小遊仙詩

小遊仙詩

唐 曹唐

彤閣鐘鳴碧鷺飛

彤閣の鐘鳴りて碧鷺飛ぶ

皇君催熨紫霞衣

皇君催熨す紫霞衣

丹房玉女心慵甚

丹房の玉女心慵きことに甚え

貪看投壺不肯歸

投壺を貪り見て肯て帰らず

【語釈】

○小遊仙詩：俗界を離れて仙界に遊ぶことをうたった詩。○彤閣：赤色の楼閣。○碧鷺：青緑色のサギ。○皇君：？○催熨：熨で皺を延ばす。○紫霞衣：道教で仙人が着る紫色の雲の模様の衣。○丹房：神仙の住む部屋。○玉女：仙女。○投壺：矢を投げて壺の口に入る遊び。賭け事に使われた。

★ 小遊仙詩

小遊仙詩

唐 曹唐

北斗西風吹白榆

北斗の西風白榆を吹く

穆公相笑夜投壺

穆公相い笑う夜の投壺

花前玉女來相問

花前の玉女来りて相問う

賭得青龍許贖無

賭け得たる青竜贖うを許すや無や

【語釈】

○小遊仙詩：俗界を離れて仙界に遊ぶことをうたった詩。○西風：秋風。○白榆：星のこと。○穆公：春秋時代の秦の第10代公。○投壺：矢を投げて壺の口に入れる遊び。賭け事に使われた。○玉女：仙女。○青龍：木星。

★ 僧房聽雨

僧房 雨を聴く

唐 盧士衡

古寺松軒雨聲別
古寺の松軒 雨声別なり
寒窓聽久詩魔發
寒窓 聴くこと久しくして 詩魔発す
記得年前在赤城
記得す 年前 赤城に在りて
石樓夢覺三更雪
石樓 夢は覚む 三更の雪

【語釈】

○松軒：松の植えてある家。○詩魔：強烈な詩興。○記得：思い出す。○赤城：王宮。○三更：真夜中。

★ 贈僧

僧に贈る

唐 李洞

不羨王公與貴人
羨まらず 王公と貴人とを
唯將雲鶴自相親
唯だ 雲鶴を將つて 自ら相親しむ
閑來石上觀流水
閑來 石上 流水を觀る
欲洗禪衣未有塵
洗わんと欲す 禪衣の 未だ塵有らざるを

【語釈】

○雲鶴：鶴の形容。○閑來：閑散となって以来。

★ 題常樂寺

常樂寺に題す

唐 唐 求

天桂香聞十里間
殿臺渾不似人寰
日斜回首江頭望
一片閑雲落後山

天桂 香聞 十里の間
殿台 渾て 人寰に似ず
日斜めに して 首を回らして 江頭に望めば
一片の閑雲 後山に落つ

【語釈】

○常樂寺…不祥。○人寰…俗世間。○天桂…天上の桂の木。○香聞…香りの匂いを嗅ぐ。
○殿台…寺院の建物。○閑雲…悠悠として空に浮かんでいる雲。

★ 宿巾子山禪寺

巾子山の禪寺に宿す

唐 任 翻

絶頂新秋生夜涼
鶴翻松露滴衣裳
前峰月映半江水
僧在翠微開竹房

絶頂の新秋 夜涼を生ず
鶴は 松露を翻えして 衣裳に滴る
前峰 月は映ず 半江の水
僧は 翠微に在りて 竹房を開く

【語釈】

○巾子山…不確定。○翠微…緑がかつた山の中腹。○竹房…竹で囲まれた部屋。○翠微…
山の中腹の緑がかつたあたり。○竹房…竹林で囲まれた部屋。

★再遊巾子山寺

再び巾子山の寺に遊ぶ

唐 任翻

靈江江上幘峰寺

靈江の江上 幘峰寺

三十年來兩度登

三十年來 兩度登り來たる

野鶴尚巢松樹偏

野鶴 尚お 松樹に巢くいて偏し

竹房不見舊時僧

竹房 見えす 旧時の僧

【語釈】

○巾子山…不確定。○靈江…靈力のある江。○幘峰寺…不祥。○竹房…竹で囲まれた部屋。

★三遊巾子山寺感述

三たび巾子山の寺に遊びて感述す

唐 任翻

清秋絶頂竹房開

清秋の絶頂 竹房開く

松鶴何年去不回

松鶴 何年 去りて回らず

惟有前峰明月在

惟だ 前峰に 明月の在るのみ有りて

夜深猶過半江來

夜深くして 猶お 半江を過ぎて來る

【語釈】

○巾子山…不確定。○竹房…竹で囲まれた部屋。○松鶴…松に巢くう鶴。

★ 寄鑿上人

鑑上人に寄す

唐 左 偃

一從攜手阻戈鋌

一たび手を携えし従り 戈鋌に阻られ

屈指如今已十年

指を屈し 如今 已に十年

長記二林同宿夜

長記す 二林 同宿の夜

竹齋聽雨共忘眠

竹齋 雨を聴いて 共に眠るを忘るを

【語釈】

○鑿上人：不祥。○戈鋌：戦争。○屈指：指折り数える。○如今：現在。○竹齋：竹の植えてある書齋。

★ 訪邵道者不遇

邵道者を訪ねて 遇わず

唐 李 中

閑來仙觀問希夷

閑來 仙觀に希夷を問う

雲満星壇水満池

雲は 星壇に満ち 水は 池に満つ

羽客不知何處去

羽客は知らず 何れの処にか去る

洞前花落立多時

洞前 花落ちて 立つこと多時なり

【語釈】

○邵道者：不祥。○閑來：閑散となって以来。○仙觀：道教の寺院の美称。○希夷：道士。○星壇：道教の祭壇。○羽客：方士。

★遊紫陽宮

紫陽宮に遊ぶ

唐 成彦雄

古殿煙霞簇畫屏
直疑踪跡到蓬瀛
碧桃滿地眠花鹿
深院松窗擣藥聲

古殿の煙霞 画屏に簇る
直ちに疑う 踪跡 蓬瀛に到るか
へきとう 地に満ち 花に眠る鹿
深院の松窓 葉を擣く声

【語釈】

○紫陽宮：不祥。神仙を祀った宮。○煙霞：もや、やすみ。○畫屏：絵で飾られた屏。○踪跡：往来。○蓬瀛：東海にあるという蓬萊と瀛州の二仙山。○深院：奥深い中庭。○松窓：松が近くにある窓。

★山僧蘭若

山僧の蘭若

唐 崔峒

絶頂茅庵老此生
寒雲孤木獨經行
世人那得知幽逕
遙向中峰禮磬聲

絶頂の茅庵 此の生を老ゆ
寒雲 孤木 独り経行す
世人 那んぞ 幽徑を知ることを得ん
遙かに 中峰に向つて 磬声を礼す

【語釈】

○蘭若：寺院。○絶頂：頂上。○茅庵：茅葺きの粗末な家。○經行：座禅の時眠気を防ぐため、立って往来すること。○幽逕：静かな小径。○磬聲：磬（石や金属でできたへの字方の樂器）の音。

★宿靜林寺

靜林寺に宿す

唐 靈 一

山寺門前多古松

山寺の門前 古松多し

溪行欲到已聞鐘

溪行 到らんと欲して 已に鐘を聞く

中宵引領尋高頂

中宵 領を引いて 高頂を尋ぬ

月照雲峰凡幾重

月は雲峰を照らして 凡て幾重

【語釈】

○靜林寺…不祥。○中宵…夜半。○引領…待望して首を伸ばす。○凡…合わせて。

★僧院

僧院

唐 靈 一

虎溪閑月引相過

虎溪の閑月 引きて相過ぐ

帶雪松枝挂薜蘿

雪を帶ぶ松枝 薜蘿を挂く

無限青山行欲盡

限り無き青山 行きて尽きんと欲す

白雲深處老僧多

白雲深き処 老僧多し

【語釈】

○虎溪…江西省九江市廬山の東林寺の前にある溪。○閑月…清閑な月。○薜蘿…緑色の薄絹。

★ 晩秋宿破山寺

晩秋 破山寺はざんじに宿す

唐 皎然

秋風落葉滿空山

秋風落葉 空山に満つ

古殿殘燈石壁間

古殿の殘燈 石壁の間

昔日經行人去盡

昔日せきじつ經行けいこう 人去り尽くし

寒雲夜夜自飛還

寒雲 夜々 自らおのずか飛びて還る

【語釈】

○破山寺：江蘇省常熟市虞山北嶺下にある寺。○經行：座禪の時眠気を防ぐため、立って往来すること。

★ 贈九華上人

九華上人きゅうかしょうにんに贈る

唐 齊己

一法傳聞繼老能

一法 伝え聞く 老能ろうのうに継ぐと

九華閑臥最高峰

九華 閑臥かんがす 最高峰

秋鐘盡後殘陽暗

秋鐘 尽きて後 殘陽暗し

門掩松邊雨夜燈

門は掩しゅうへんう 松辺 雨夜の灯

【語釈】

○九華上人：不祥。○一法：仏教用語。一事一物。○九華：九華上人。○閑臥：静かに横たわる。

★七月過孤山勤上人院

七月孤山の勤上人の院に過ぎる

宋 蔡襄

青林藹藹日暉暉

青林藹々日暉々

薄晚涼生暑氣微

薄晚涼生して暑氣微なり

湖上清風如可載

湖上の清風如に載すべき

畫船十隻不空歸

画船十隻空しく帰らず

【語釈】

○孤山：浙江省杭州市の西湖中にある山。○勤上人：不祥。○藹藹：草木の茂るさま。○暉暉：日が明るく輝るさま。○薄晚：夕暮れ時。○画船：絵で飾った船。

★悟真院

悟真院

宋 王安石

野水從横漱屋除

野水從横 屋除に漱ぐ

午窗殘夢鳥相呼

午窓 殘夢 鳥相呼ぶ

春風日日吹香草

春風 日々 香草を吹き

山北山南路欲無

山北山南路 無からんと欲す

【語釈】

○悟真院：唐の詩僧であった悟真の院。○屋除：建物の前の階段。○殘夢：目が覚めて猶お残る夢ごころ。

★華山精舎

華山精舎かざんしょうじや

宋 楊備

巖屏晚樹噪寒鴉

巖屏がんぺい 晚樹ばんじゆ 寒鴉さむ 噪さわぎ

嵐翠樓臺釋子家

嵐翠らんすい 樓台ろうたい 釈子しゃくしの家

池面鏡光功德水

池面ちめんの鏡光きやうくわう 功德くどくの水

金波影裏石蓮花

金波きんぱ影裏えいり 石蓮せきれん花か

【語釈】

○華山…西省華陰市にある山。五岳の一つで西岳と呼ばれる。○精舎…寺院。○巖屏…巖の壁。○嵐翠…青緑色の山の靄。○釋子…僧侶。○石蓮花…サボテンの一種。

★宿餘杭山寺

杭山寺に宿余すしやうくよ

宋 蘇軾

暮鼓晨鐘自擊撞

暮鼓ぼこ 晨鐘しんしやう 自みづから擊撞げきとうし

閉門孤枕對殘紅

門を閉じ 孤枕こちん 殘紅ざんこうに對す

白灰旋撥通紅火

白灰はくかい 旋やがて撥ひらく 通紅つうこうの火

臥聽蕭蕭雨打窗

臥ふして聽く 蕭々しやうしやう として 雨の窓を打つを

【語釈】

○宿餘…宿泊する。○杭山寺…不祥。○暮鼓晨鐘…夕暮に敲く太鼓と夜明けに付く鐘。○擊撞…打つ。○孤枕…一人で眠る。○殘紅…消えかかっている灯火。○撥…払いのけて開く。○通紅…真っ赤。○蕭蕭…雨風、落葉等の物寂しい音の形容。

(参考文献)

『漢詩大系 19』

絶句

絶句

宋 蘇軾

天風吹月入欄干

天風 月を吹いて 欄干に入り

烏鵲無聲夜向闌

烏鵲 声無く 夜 闌に向う

織女明星來枕上

織女 明星 枕上に来り

乃知身不在人間

乃 ち知る 身は人間に在らざるを

【語釈】

○天風…天空を吹く風。
○人間…俗世間。

○烏鵲…カササギ。○夜向闌…夜が明けようとする。○織女…織

★ 佛日山榮長老方丈

仏日山榮長老の方丈

宋 蘇軾

日射回廊午枕明

日は回廊を射て 午枕 明なり

水沈銷盡碧煙橫

水沈 銷尽して 碧煙横わる

山人睡覺無人見

山人 睡覺めて 人の見る無く

只有飛蚊繞鬢鳴

只だ 飛蚊の鬢を繞りて 鳴く有り

【語釈】

○佛日山…広西省河池市日山の浄慧寺。○榮長老…不祥。○方丈…僧の住まい。○午枕…午睡の枕元。○水沈…沈香。香木の名。○銷盡…燃え尽くす。○山人…仙人、道士、ここでは僧侶。

★常州太平寺蒼蘆亭

常州太平寺蒼蘆亭

宋 蘇軾

六花蒼蘆林間佛

六花の蒼蘆 林間の仏

九節菖蒲石上仙

九節の菖蒲 石上の仙

何似東坡鐵拄杖

何ぞ似たる 東坡 鐵拄の杖に

一時驚散野狐禪

一時に驚散す 野狐の禪

【語釈】

○常州：江蘇省常州市一帶。○太平寺：江蘇省泰州市太平寺。○六花：六弁。○蒼蘆：くちなし 枇杷の花。○九節菖蒲：漢の武帝が崇山に登って採ったという仙草。○東坡：蘇軾の号。○鐵拄：鉄棒。○野狐禪：えせ修行者。

★夜間風雨有感

夜間の風雨 感有り

宋 張耒

留滯招提未是歸

招提に留滯して 未だ是れ帰らず

卧聞秋雨響疏籬

卧して聞く 秋雨の疏籬に響くを

何當粗息飄萍恨

何か当に 粗き 飄萍の恨みを息め

却誦僧窗聽雨詩

却って 僧窓に 雨を聴く詩を誦うべき

【語釈】

○留滯：滞留する。○招提：寺院。○疏籬：粗い籬。○當：「まさにすべし」と読み、「きつとくであろう」の意。○飄萍：漂流する浮き草。身の定まらない事の喩え。

★ 瑞巖庵清眺

瑞巖庵ずいがんあんの清眺せいちょう

宋 米芾

西山月落楚天低
不放紅塵點翠微
鶴唳一聲松露滴
水晶寒濕道人衣

西山月落ちて 楚天低し
紅塵こうじんを放たず 翠微すいびに点ず
鶴唳かくれい 一声 松露しょうろ滴たり
水晶寒湿す 道人の衣

【語釈】

○瑞巖庵：不祥。○楚天：湖北省・湖南省の空。○紅塵：車馬の土埃。○翠微：緑色をした山の中腹。○鶴唳：鶴の鳴き声。○寒湿：冷たく湿らす。○道人：道教徒。

★ 望道場山塔

道場山どうじょうざんの塔を望む

宋 孫覲

蕭寺知名四十年
身投籠檻到無緣
行人指點松間路
正在孤雲落照邊

蕭寺しょうじ 名を知りて 四十年
身を籠檻ろうかんに投じて 無緣むえんに到る
行人こうじん 指點してんす 松間の路
正に 孤雲 落照の辺に在り

【語釈】

○蕭寺：浙江省湖州にある山。○籠檻：竹で作った檻。不自由な世界。○無緣：仏の教えを聞く縁の無い者。○行人：旅人。○指點：指指す。○落照：夕陽の光。

★遊金沙寺

金沙寺に遊ぶ

宋 孫覲

緑筍遺苞半出籬
緑筍遺苞して半ば籬を出ず
清溪一曲翠相迷
清溪一曲翠相迷う
古苔稱意壞牆滿
古苔意に称って壞牆に満ち
好鳥盡情深樹啼
好鳥情を尽して深樹に啼く

【語釈】

○金沙寺：不祥。○緑筍：緑のタケノコ。○遺苞：皮から体を現す。○一曲：一回曲がること。○壞牆：壊れた垣根。

★重過楓橋寺示遷老

重ねて楓橋寺に過りて遷老に示す

宋 孫覲

白首重來一夢中
白首重來一夢の中
青山不改舊時容
青山改めず旧時の容
烏啼月落橋西寺
烏啼き月は落つ橋西の寺
敲枕猶聞半夜鍾
枕を敲て猶お聞く半夜の鍾

【語釈】

○楓橋寺：江蘇省蘇州の寒山寺。張継の「風橋夜泊」で名高い。○白首：白髪頭。○重來：再びやってくる。○半夜：真夜中。

★道經柘溪靜林寺

道柘溪の靜林寺を經

宋 邵棠

青山萬疊倚晴空 青山万疊 晴空に倚る
中有招提一徑通 中に招提 一徑の通ずる有り
衲子不關塵世事 衲子は関せず 塵世の事
黄花紅葉共秋風 黄花紅葉 共に秋風

【語釈】

○柘溪：浙江省衢州市の西にある溪。○靜林寺：不祥。○萬疊：山が多く重なるさま。○招提：寺院。○衲子：僧侶。○塵世：俗世間。

★寄南巖悟禪師

南巖の悟禪師に寄す

宋 王銓

雪後千峯玉刻成 雪後 千峰 玉刻成る
瓊瑤寒照寺樓明 瓊瑤 寒く 寺樓を照らして 明らかかなり
遙知禪老開窗坐 遙に知る 禪老 窓を開きて坐し
指點煙村看晚晴 煙村を指點して 晚晴を看るを

【語釈】

○南巖：不確定。○悟禪師：不祥。○瓊瑤：美しい姿の形容。○瓊瑤：美玉。雪のたとえ。○煙村：靄がかすんだ村。○指點：指指す。○晚晴：夕晴れ。

★上方

上方

宋 王 銍

松間清月佛前燈

松間の清月 仏前の灯

菴在孤峯更上層

菴は孤峰の 更に上層に在り

犬吠一聲秋意靜

犬吠えて 一声 秋意静なり

敲門時有夜歸僧

門を敲いて 時に 夜歸の僧有り

○上方：寺院。○秋意：秋の気配。

★鼓山寺

鼓山寺

宋 趙汝愚

幾年奔走厭塵埃

幾年か 奔走し 塵埃を厭う

此日登臨亦快哉

此の日 登臨す 亦た快なる哉

江月不隨流水去

江月 流水に随つて去らず

天風直送海濤來

天風 直ちに 海濤を送つて来る

【語釈】

○鼓山寺：福建省福州市の寺。○厭塵：俗世間の塵埃。○登臨：高所に登って下を見下ろす。○江月：川に映った月。○天風：空を吹く風。○海濤：海の波。

★示西林可師

西林の可師かしに示す

宋 朱熹

身世年來欲兩忘

身世しんせ 年來ふた 兩つながら 忘れんと欲す

一春隨意住僧房

一春 隨意 僧房じゅうぼうに住す

行逢舊隱低回久

行きて 旧隱きゅういんに逢い 低回久し

綠樹鶯啼清晝長

綠樹 鶯啼いて 清晝長し

【語釈】

○可師…不祥。○身世…自身と世の中。○年來…かねてより。○隨意…意のままに。○舊隱…以前に隱居していたところ。○低回…徘徊。

★示西林可師

西林の可師かしに示す

宋 朱熹

幽居四畔只空林

幽居の四畔 只だ 空林

啼鳥落花春意深

啼鳥 落花 春意深し

獨宿塵龕無夢寐

独り 塵龕じんがんに宿して 夢寐むび無し

五更山月照寒衾

五更の山月 寒衾かんきんを照す

【語釈】

○可師…不祥。○幽居…隱棲の住まい。○四畔…四方。○空林…人気の無い林。○春意…春ののどかな心持。○塵龕…俗世間の小部屋？。○夢寐…酔夢。○五更…夜明け。○寒衾…寒いふすま。

★ 金氏菴

金氏菴きんしあん

宋 范成大

醉墨題窗側暮鴉

醉墨すいぼく 窓に題して暮鴉ぼあを側そばだつ

蔓藤緣壁走青蛇

蔓藤まんとう 壁に縁そいて青蛇せうだを走らす

春深有燕捎飛蝶

春深くして燕の飛蝶とを捎とる有り

日暮無人掃落花

日暮くれて人の落花はらを掃はらう無し

【語釈】

○金氏菴：不祥。○醉墨：酔って作った詩画。○暮鴉：夕暮れ時の烏。○蔓藤：…つる草。

★ 贈德輪行者

德輪行者とくりんぎようじやに贈る

宋 楊萬里

刺血抄經奈若何

血を刺し經うつを抄なし若なんじを奈何いかんんせん

十年依舊一頭陀

十年 旧に依る 一頭の陀だ

袈裟未著愁多事

袈裟けさ 未だ著せざるに 事多く愁う

著了袈裟事更多

袈裟けさを著了すれば 事更に多し

【語釈】

○「奈A何」：「Aをいかんせん」と読み、「Aをどうしようか」の意。反語。○刺血：指を刺して血を流す。○依舊：旧のままである。○陀：仏陀。○著了：着る。了は完了を示す助字。

★ 聽雨

雨を聴く

宋 胡仲參

聽盡燈前細雨聲
聽き尽くす 灯前細雨の聲
聲聲總是別離情
声々 総て是れ 別離の情
何時斷得閑煩惱
何れの時か 閑かに煩惱を断じ得て
一任芭蕉滴到明
一任せん 芭蕉の 滴して明に到るに

【語釈】

○斷得…断ち切ることが出来る。○明…あかつき。

★ 閣皂山

閣皂山こうぞうざん

宋 劉遂初

春山靈草百花香
春山の靈草 百花香し
誰識仙家日月長
誰か識らん 仙家 日月長きを
滿院莓苔綠陰匝
滿院の莓苔 綠陰匝る
棋聲何處隔宮牆
棋声 何れの処か 宮牆を隔つ

【語釈】

○閣皂山…江西省宜春市閣皂山。○靈草…仙草，瑞草。草の美称。○莓苔…青緑色の苔。○棋聲…碁を打つ音。○宮牆…住宅の周りの垣根。

★ 僧門

僧門

宋 林景熙

一閑每笑不如僧	一閑毎 <small>いっかんじと</small> に笑するは僧 <small>し</small> に如かず
及到僧門閑未能	僧門 <small>しんもん</small> に到るに及び閑 <small>かん</small> 未だ能 <small>あた</small> わらず
昨夜褐袍風雪裏	昨夜 <small>かっぼう</small> 褐袍風雪 <small>うち</small> の裏
隔溪犬吠入林燈	溪を隔てて犬は吠え林灯 <small>い</small> に入る

【語釈】

○僧門：寺の門。○褐袍：衣服。

★ 沁水山寺

沁水山寺しんすいさんじ

金 王寂

兩峽山高月半輪	兩峽山高く月半輪
五更人起馬嘶頻	五更人起きて馬嘶 <small>いなな</small> くこと頻 <small>しきり</small> なり
無端又上長安道	無端 <small>はしな</small> 無くも又上る長安道 <small>ちやうあんどう</small>
輸與僧窓飽睡人	輸 <small>ゆ</small> 与 <small>よ</small> す僧窓飽睡 <small>ほうすい</small> の人に

【語釈】

○沁水山寺：不祥。○五更：夜明け方。○無端：思いがけなく。○輸與：給与。○飽睡：眠り足りる。

★ 月夜宿官塔下院

月夜官塔の下院に宿す

金 馮延登

喬松脩竹翠交陰

喬松脩竹翠陰を交う

涼月玲瓏地布金

涼月玲瓏として地金を布く

老懶無詩酬節物

老懶詩の節物に酬ゆる無く

脱巾和月卧昏黄

巾を脱し月に和し昏黄に卧す

【語釈】

○喬松…高い松。○脩竹…高い竹。○玲瓏…さえて鮮やかなさま。○老懶…老いておつくうになること。○節物…四季折々の花鳥、景色、品物など。○昏黄…たそがれ。○巾…頭巾。

★ 雑詩

雑詩

金 王良臣

道人知我愛禪房

道人 我の禪房を愛するを知る

浄埽階前紫石牀

浄め埽う階前の紫石床

軟飽三杯風味好

軟飽三杯 風味好し

脱巾和月卧昏黄

巾を脱し月に和し昏黄に卧す

【語釈】

○雑詩…主題を決めず作った詩。○道人…有徳の人。○禪房…寺院。○軟飽…飲酒。○昏黄…たそがれ。○巾…頭巾。

★ 三天竺道中

三天竺道中

宋 方回

三天竺路漸登高
高似雷峰塔幾層
山到無人行處好
松陰萬樹立孤僧

三天竺路漸く登高
高く雷峰塔に似て幾層
山は人行無き処に到りて好し
松陰 万樹 孤僧 立つ

【語釈】

○三天竺：浙江省杭州市天竺山上、中、下天竺寺があり、合せて三天竺という。○漸：だんだんと。○雷峰塔：浙江省杭州西湖の南、夕照山上にある塔。

★ 初秋夜坐

初秋夜坐

元 趙雍

月明如水侵衣濕
臺榭沈沈秋夜長
坐久高僧禪語罷
澹然相對玉簪香

月明 水の如く衣を侵して湿す
台榭 沈々 秋夜長し
坐すこと久くして 高僧 禪語罷む
澹然として 相対す 玉簪の香

【語釈】

○臺榭：うてなと高殿。○沈沈：夜がしんしんとふけていくさま。○澹然：静かで安らかなさま。○玉簪：玉簪花、百合科の多年草。

★遊會仙宮

会仙宮に遊ぶ

元 薩都刺

霏霏涼露濕瑤臺

ひひ
霏々たる涼露 瑤台を湿す

半夜吹簫月下來

半夜の吹簫 月下に來る

山外春風將雨過

山外の春風 雨將に過ぎんとす

隔水遙看是白雲

水を隔てて 遙かに看るは 是れ 白雲

【語釈】

○會仙宮：不祥。○霏霏：霜や露の沢山降りているさま。○瑤臺：宝玉で飾られてたうてな。○吹簫：縦笛の声。○半夜：真夜中。○將：「まさにくせんとす」と読み、「ちよううどくしようとしてゐる」の意。

★春日鎮陽柳溪道院

春日 鎮陽の柳溪の道院

元 薩都刺

城外青溪出洞門

城外の青溪 洞門を出ず

道人歸去日長曛

道人 帰り去りて 日 長く曛ず

柳花滿地無人掃

柳花 地に満ち 人の掃う無く

隔水遙看是白雲

水を隔てて 遙かに看るは 是れ 白雲

【語釈】

○鎮陽：不祥。○柳溪：柳が植わっている溪。○道院：道教の寺院。○道人：道教の僧。
○柳花：柳絮。

★遊法興寺

法興寺に遊ぶ

元 胡天游

山色揺光入袖涼

山色 揺光 袖に入りて涼し

松陰十丈印迴廊

松陰 十丈 迴廊に印す

老僧讀罷楞嚴呪

老僧は 讀みて罷ます 楞嚴呪

一殿神風柏子香

一殿の神風 柏子香し

【語釈】

○法興寺：山西省長治市法興寺。○山色：山の景色・気配。○迴廊：回り廊下。○楞嚴呪：教典の一つ、大乘仏典の『大仏頂首楞嚴經』に説かれる陀羅尼。○一殿：満殿。○柏子香、香の一種。

★南屏寺

南屏寺

元 陳陽極

禪心不動法堂空

禪心 動かす 法堂空し

日影斜侵半榻紅

日影 斜めに侵す 半榻の紅

一卷楞嚴看未了

一卷の楞嚴 見て 未だ了らず

篆煙香散竹窗風

篆煙 香散す 竹窓の風

【語釈】

○南屏寺：浙江省杭州市にある寺。○禪心：清浄で静かな心境。○法堂：寺院。○榻：こしかけ。○楞嚴：教典の一つ、大乘仏典の『大仏頂首楞嚴經』に説かれる陀羅尼。○篆煙：香を焚いたときの細い煙。

★ 寄金山普納

金山の普納に寄す

元 鄭元祐

金鰲背上鬱藍天

金鰲背上 鬱藍の天

長有神龍衛法筵

長に神竜 法筵を衛りて有り

午夜江聲推月上

午夜の江声 月を推して上り

浪花如雪寺門前

浪花 雪の如し 寺門の前

【語釈】

○金山…不祥。○普納…不祥。神话中海中金色巨亀。○金鰲…海に住むという金色の大海亀。○鬱藍…深い藍色。○法筵…仏教の法を説く者の座席。○江声…江の流れの音。○浪花…波のしぶきの花。

★ 宿焦山上方

焦山の上方に宿す

元 郭天錫

楊子江頭風浪平

楊子江頭 風浪 平らかなり

焦山寺裏晚鐘鳴

焦山寺裏 晚鐘鳴く

爐煙已斷燈花落

炉煙 已に断え 灯花落つ

喚起山僧看月明

山僧を喚起し 月明を看る

【語釈】

○焦山…江蘇省 鎮江市の東北にある山。○上方…寺院。○爐煙…香炉の煙。○燈花…灯心が燃え尽きて花の形になったもの。

★ 題解空寺

解空寺に題す

元 僧脩禪

古塔凌空玉筍高

古塔 空を凌ぎ 玉筍高し

斜陽半壓水嘈嘈

斜陽 半ば水を圧して嘈々たり

老僧掩却殘經坐

老僧 殘經を掩却して坐し

静聴松聲沸海濤

静かに聴く 松声の海濤を沸かすを

【語釈】

○解空寺…不祥。○玉筍…タケノコの美称。○嘈嘈…声の喧しいさま。○殘經…読み残した教典。○掩却…覆い尽くす。却は完了を示す助字。○海濤…海の波。

★ 師子林即景

師子林の即景

元 惟則

道人肩水灌畦蔬

道人 水を肩にして 畦蔬に灌ぐ

託鉢船歸粟有餘

託鉢 船帰りて 粟 余す有り

飽飯禪和無一事

飽飯 禪に和して 一事無し

繞池分食餒遊魚

池を繞り 食を分ちて 遊魚に餓す

【語釈】

○師子林…江蘇省蘇州ある庭園。蘇州四大庭園の一つに数えられる。元高僧・天如禪師（惟則）の弟子が禪師のために造営した庭園。○即景…目に映ったことをそのまま詠った詩。○道人…僧侶。○畦蔬…田畑の野菜。○飽飯…満腹。○餓…エサを与えて飼育する。

★山中別寧公歸西塢

山中 寧公の 西塢に帰るに別る

明 高啓

一上香臺看落暉

一たび香台に上りて 落暉を見る

沙村孤樹晚依微

沙村 孤樹 晩に依微たり

老僧不出青山寺

老僧は出でず 青山寺

只有鐘聲送客歸

只だ鐘聲の 客の帰るを送る有るのみ

【語釈】

○寧公…不祥。○西塢…不祥。○落暉…夕映え。○依微…ぼんやりしているさま。

★月林僧舍

月林の僧舍

明 許相卿

月午天霜破衲寒

月午にして 天霜ふり 破衲寒し

梵音蕭颯度林端

梵音 蕭颯として 林端を渡る

經殘香燼秋寥沆

經 残り 香燼きて 秋 寥沆

時有風枝語夜闌

時に風枝の 夜闌に語る有り

【語釈】

○月午…月が中天にある。真夜中。○破衲…破れた僧衣。○梵音…読經の声。○蕭颯…蕭条として寂しいさま。○寥沆…空虚で寂しいさま。○風枝…風で音を立てる枝。○夜闌…夜明け前。

★ 寄上清何尊師

上清じょうせいの何尊師かそんしに寄す

明 王 儼

雲母屏風月影孤

雲母うんもの屏風 月影孤なり

碧雲琪樹兩三株

碧雲きじゆ 琪樹 兩三株

道童慣識鈞天舞

道童 慣れ識る 鈞天の舞

偷向塔前教鶴雛

偷ひそかに 塔前かいぜんに向いて 鶴雛かくすうに教う

【語釈】

○上清…不祥。○何尊師…不祥。○琪樹…雪で覆われた樹木。○道童…修道者の召使いの童子。○鈞天舞…仙境の舞の一種。○鶴雛…鶴のひな。

★ 題方壺道人山房

方壺道人ほうことうじんの山房に題す

明 王 恭

洞門一逕入烟霞

洞門 一徑 烟霞えんかに入る

九曲溪泉繞洞斜

九曲の溪泉 洞を繞めぐつて斜なり

鐵笛一聲山月冷

鐵笛 一声 山月冷ひややかなり

獨騎黃鶴問仙家

獨り 黃鶴こうかくに騎のりて 仙家を問う

【語釈】

○方壺道人…不祥。○烟霞…靄と霞。○九曲…曲がりの多いこと。○鐵笛…鉄製の笛。隱者が吹くと言われる。

★訪僧不遇

僧を訪ねて遇わず

明 王恭

寺門深閉對青山

寺門深く閉ざして 青山に対す

何處浮杯更未還

何れの処か 杯を浮かべ 更に未だ還らず

萬壑千峯人不見

ばんがくせんぼう
万壑千峰 人 見えぬ

滿林霜葉磬聲閑

まんりんのかげはつばき
満林の霜葉 磬声閑なり

【語釈】

○萬壑千峯…:数多くの溪と山。○磬聲…:磬（石や金属でできたへの字方の楽器）の音。

★歩虚詩

歩虚詩

明 王恭

緑草封事奏瑤京

りくそうのふうじ 瑤京に奏す

侍女如花弄玉笙

しよにわのなごうすう
侍女 花の如く 玉笙を弄す

夜半朝回人上鶴

ちゆう ちゆう
夜半 朝より回りに 人鶴に上り

九天環珮月中明

くわんぱい
九天の環珮 月中に明かなり

【語釈】

○歩虚詩…:道教を讃える詩。○封事…:密封した上奏文。○瑤京…:神仙の世界。○玉笙…:玉で出来た笛。○朝回…:朝廷から帰る。○九天…:空の天辺。○環珮…:美女。

★憶原上人

原上人を憶う

明 劉 績

一兩棕鞋八尺籐
廣陵行遍又金陵
不知竹雨松風夜
吟對秋山那寺燈

一両の棕鞋 八尺の籐
廣陵行 遍くして 又金陵
知らず 竹雨 松風の夜
吟じて對す 秋山 那寺の燈

【語釈】

○一兩…一足。○棕鞋…シユロの毛を編んで作ったワラジ。○籐…籐製の物入れ。○広陵…江蘇省揚州市。○金陵…南京。○那寺…安閑とした寺。

★金山寺

金山寺

明 林 瀚

金山頂上梵王家
萬里江山四望餘
曙色漸分京口渡
數聲寒雁落霜花

金山の頂上 梵王の家
万里の江山 四望余す
曙色 漸く分つ 京口の渡
數聲の寒雁 霜花落つ

【語釈】

○金山寺…不祥。○梵王家…諸天の王の家。金山寺を指す。○四望…四方の眺め。○京口…江蘇省鎮江市。

★ 題空上人山房

空上人くわうしやうにんの山房さんぼうに題す

明 薛蕙

古寺殘冬倍悄然
老僧閉戸獨安禪
水滿瓶中無滴水
香消爐畔有餘煙

古寺 殘冬 倍々 悄然たり
老僧 戸を閉じて 独り安禪
水は 瓶へい中に満ち 滴水無し
香は消じて 炉畔 余煙有り

【語釈】

○空上人…不祥。○殘冬…春になってまだ冬の寒さが残っている状態。○悄然…もの寂しいさま。○安禪…静かに座禅に入ること。

★ 崇義院雜題

崇義院すうぎいん雜題

明 文徵明

六月門前暑似炊
殿堂深處未曾知
晚涼浴罷思歸去
更為松風佇少時

六月 門前暑 炊かしぐに似たり
殿堂 深き処 未だ曾て知らず
晚涼 浴を罷みて 歸去を思うも
更に 松風の為に 佇たたずむこと少時しょうじ

【語釈】

○崇義院…江西省贛州市にあった寺。○晚涼…夕方の涼しさ。○少時…しばしの間。

★ 卷禪堂即事

卷禪堂即事 かんぜんどう

明 華 察

啜茗禪房山月斜

茗を啜れば 禪房 山月斜なり

上方燈火望楞伽

上方の灯火 楞伽を望む

真僧獨悟空門妙

真僧 独り悟る 空門の妙

夜静諸天雨寶華

夜静にして 諸天 宝華を雨ふらす

【語釈】

○卷禪堂…不祥。○茗…茶。○禪房…禪寺の部屋。○上方…寺院。○楞伽…印度の山名。
○空門…仏法。○寶華…仏寺の花。

★ 永興寺散步

永興寺散步 えいこうじ

明 皇甫沔

帝城西覓古叢林

帝城 西に覓む 古叢林

萬木寒垂六月陰

万木 寒く垂る 六月の陰

庭下閑花齋後偈

庭下の閑花 齋後の偈

門前空水定時心

門前の空水 定時の心

【語釈】

○永興寺…不祥。○帝城…皇城。○叢林…叢がった林。○閑花…幽雅な花。○齋…身を清める。○偈…仏徳をたたえた韻文。○空水…天空に和した水の色。○定時…いつもと変わらない時。

★ 寄茅山道士

茅山道士に寄す

明 玉問

曾向華陽洞口過

曾て華陽に向い 洞口を過ぐ

三峰高處白雲多

三峰 高き処 白雲多し

仙房隱隱依巖竹

仙房 隠々として 巖竹に依る

清夜經聲出薛蘿

清夜の經聲 薛蘿を出ず

【語釈】

○茅山道士：不祥。○華陽：四川省広元市劍閣県。○仙房：道士の住むところ。○隱隱：かすかではつきりしなさま。○薛蘿：よもぎとツタ。

★ 湧泉菴

湧泉菴

明 李攀龍

錦陽川上女僧家

錦陽川上 女僧の家

紅樹蕭蕭白日斜

紅樹 蕭々 白日斜なり

弟子如雲人不見

弟子 雲の如く 人見えず

可憐秋老玉蓮花

憐むべし 秋老 玉蓮花

○湧泉菴：不祥。○錦陽川：不祥。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○展：伸びる。○秋老：秋が深まること。○玉蓮花：蓮の花の美称。○弟子：道教、仏教の信徒。

★遊仙曲

遊仙曲

明 李攀龍

一聴黄竹寫歌鐘 一たび黄竹を聴き 歌鐘を写す
人酔秦臺十二重 人は秦台に酔い 十二重
琪樹花開巢孔雀 琪樹花開いて 孔雀巢く
瑤池水煖出芙蓉 瑤池 水煖かにして 芙蓉出ず

【語釈】

○遊仙曲：仙界に遊ぶことを詠った詩。○黄竹：周の穆王が作った詩。○秦台：？ほ○歌鐘：鐘で伴奏すること。○琪樹花：仙界中の玉樹の名。○瑤池：崑崙山にあるという伝説中の池。

★遊金燈寺

金灯寺に遊ぶ

明 樹榛

策杖穿林路幾重 杖を策つき 林を穿ち 路 幾重
上方鐘磬出雲峯 上方の鐘磬 雲峰を出ず
再來只恐無尋處 再び来りて 只だ恐る 尋ぬる処無きを
好記懸崖一古松 好記す 懸崖の一古松

【語釈】

○金灯寺：不祥。○鐘磬：鐘と磬（金属や石でできたへの字型の打楽器）。○雲峰：雲のかかった峰。○好記：好ましく覚えていゝる。

★ 本公山房

本公の山房

明 榭 榛

満山秋色亂寒松

満山の秋色 寒松乱る

天外遙傳日暮鐘

天外遙かに伝う 日暮の鐘

争怪簷前起雲雨

争でか怪まん 簷前に雲雨の起るを

誰知鉢底卧蛟竜

誰か知らん 鉢底蛟竜卧うを

【語釈】

○本公…不祥。○秋色…秋景色。○天外…遙かかなた。○簷前…軒の前。○蛟竜…龍の一種で鱗のある物。雨を降らせる。

★ 道院秋夕

道院の秋夕

明 榭 榛

河漢横斜天宇清

河漢 横斜し 天宇清し

夜涼松鶴睡無聲

夜涼 松鶴 睡りて声無し

月光低照碧潭水

月光 低く照らす 碧潭の水

人倚洞門吹玉笙

人は 洞門に倚り 玉笙を吹く

【語釈】

○河漢…銀河。○天宇…天空。○松鶴…松に巢くう鶴。○碧潭…青い淵。○玉笙…笙の美称。

★宿香山

香山こうざんに宿す

明 謝榛

深夜無眠風露清

深夜 眠る無く 風露清し

天移北斗坐間横

天は 北斗を移して 坐間ざかん横う

幽人不作紅塵夢

幽人は作なさず 紅塵の夢

月照空山鶴一聲

月は 空山を照らして 鶴一声

【語釈】

○香山：香山寺、河南省洛陽市にあり白居易と縁が深い。○坐間：少しの間。○幽人：隠者。○紅塵：都会の車馬の塵。○空山：人気の無い山。○坐間：少しの間。○幽人：隠

★遊無相寺

無相寺むそうじに遊ぶ

明 陳鶴

玉輦曾經野寺中

玉輦ぎよくれん 曾かつて 野寺やじの中うち

宸書猶在翠華空

宸書しんしょ 猶なほお在りて 翠華すいかむな空し

斷碑世遠無人識

斷碑だんぴ 世遠くして 人の識る無し

落日鶯啼古殿風

落日 鶯は啼く 古殿の風

【語釈】

○無相寺：浙江省温州市甌海区にある寺。○玉輦：皇帝の乗る手押し車。○宸書：皇帝の書。○翠華：皇帝の儀仗である翠の羽の付いた旗。○斷碑：壊れた碑。

★ 登天台峰宿

天台峰に登りて宿す

明 吳兆

蘿磴松崖幾百層

蘿磴 松崖 幾百層

猿攀魚貫始徐登

猿攀 魚貫 始めて徐登

昨朝望處今宵歇

昨朝 望む処 今宵歇む

巖下雲埋入定僧

巖下 雲は埋む 入定の僧

【語釈】

○天台峰：天台山。○蘿磴：ツタの絡んだ石壇の道。○松崖：松の生えた崖。○猿攀：あ猿のようによじ登る。○魚貫：魚の列のように連なる。○徐登：徐々に登る。○入定：目をつぶって静かに坐す。

★ 宿香巖寺

香巖寺に宿す

明 蕭宗

方丈香銷客未眠

方丈 香銷じ 客 未だ眠らず

出城頓覺夜如年

城を出て 頓に覺ゆ 夜年の如きを

烏啼霜落僧歸院

烏啼き 霜落ちて 僧は院に帰る

雲滿空山月滿天

雲は空山に満ち 月は天に満つ

【語釈】

○香巖寺：河南省南陽市香巖寺。○方丈：寺院の部屋。○空山：人気の無い山。

★ 香巖寺

香巖寺に宿す

明 蕭 宗

鳥啼霜落夜漫漫

鳥啼き霜落ちて夜漫漫々

風入疏櫺客枕寒

風は疏櫺に入りて客枕寒し

戍鼓敲殘雞亂唱

戍鼓敲残りて雞亂れ唱う

半軒明月照欄干

半軒の明月欄干を照らす

【語釈】

○香巖寺：河南省南陽市香巖寺。○漫漫：夜の長いこと。○疏櫺：粗いれんじ。○客枕：旅枕。○戍鼓：番兵の鳴らす太鼓。○半軒：軒の半分の高さ。

★ 小遊仙

小遊仙

明 王 澤

中山千日酒初醒

中山千日酒初めて醒む

却愛玄都夜景清

帰って愛す玄都夜景の清きを

起坐天門吹玉笛

起坐し天門玉笛を吹く

月中珠樹起秋聲

月中の珠樹秋声を起す

【語釈】

○小遊仙：仙界に遊ぶことを詠った詩。○玄都：玄都觀、長安城内の南、朱雀大路に面してあった道教の寺。桃の名所でもあった。○起坐：起きて坐る。○天門：室女座。○玉笛：笛の美称。○秋聲：秋の気配を感じさせる物音。

★ 和寒山子詩

寒山子の詩に和す

明 陳芹

青煙紫霧夕冥冥

青煙せいえん 紫霧しむ 夕ゆふ 冥冥めいめい

似雨飛泉滿戸庭

雨こたてに似たる飛泉 戸庭こていに満つ

白日山人無一事

白日 山人 一事 無く

水精簾下閱金經

水精簾すいしょうれん下 金經きんきやうを閲す

【語釈】

○寒山子：唐代の詩僧寒山。○冥冥：暗く微かなさま。○水精簾：水晶でできた簾。○金經：仏教の經典。

★ 與僧一然聽鐘

僧一然と鐘を聴く

明 廖孔説

寥寥相對一燈明

寥寥りょうりょうとして相對あいたいして 一灯明かなり

數盡遙鐘百八聲

數え尽くす 遙鐘ようかね 百八の聲

題向山堂成故事

題して 山堂おに向いて 故事と成す

他年却好話平生

他年 却へつて好し 平生へいぜいを話するに

【語釈】

○僧一然：不祥。○寥寥：静かなさま。○遙鐘：遠くから聞こえて来る鐘。○他年：将来の地の年。○平生：平素のこと。

★遊仙詞

遊仙詞ゆせんし

明 朱妙端

洞天春暖碧桃芳

洞天春暖かにして 碧桃芳へきとうようし

瑤草金芝滿路香

瑤草 金芝 滿路香ようそう きんし かんぱし

吹徹玉簫天似水

玉簫を吹徹して 天水に似たりすいてつ

笑騎黃鶴過扶桑

笑って 黃鶴に騎り 扶桑を過ぐの ふそう

【語釈】

○遊仙詞：仙界に遊ぶことを詠った詩。○洞天：別天地。○碧桃：仙界の桃、西王母が武帝に与えた。○瑤草：伝説中の香草。○金芝：伝説中の仙草。○玉簫：玉で出来た笛。○扶桑：東海中にあると云う伝説中の樹。

★題西禪蘭若

西禪蘭若せいぜんらんじやに題す

明 僧明秀

尋幽偶到古禪關

幽を尋ねて 偶たまたま到る 古禪關ふるぜんかん

樓閣高低紫翠間

樓閣 高低 紫翠しすいの間

山鳥不鳴人境寂

山鳥鳴かず 人境せき寂たり

爐煙裊裊白雲閑

炉煙 裊々じようじよう 白雲閑かなり

【語釈】

○西禪蘭若：不祥。蘭若は寺院。○禪關：禪門。○裊裊：たおやかなさま。○紫翠：紫と緑。山の美しい形容。

★ 山房秋夜

山房の秋夜

明 僧明秀

寒蛩鳴砌夜蕭蕭

寒蛩 砌に鳴き 夜蕭々

一點禪燈伴寂寥

一點の禪灯 寂寥に伴う

楓落吳江吟不就

楓落ちて 吳江吟 就らず

那堪涼雨滴芭蕉

那んど堪えんや 涼雨の 芭蕉に滴るに

【語釈】

○寒蛩：晩秋のコオロギ。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○寂寥：ひっそりとしたもの寂しいさま。○吳江：江蘇省蘇州一帯の川。

★ 題月堂精舎

月堂の精舎に題す

明 文湛

雨後青苔路不分

雨後の青苔 路分たず

柴門竹裏映斜暎

柴門 竹裏 斜暎に映ず

松花落盡無人到

松花 落ち尽くし 人の到る無く

只有山童掃白雲

只だ 山童の 白雲を掃う有るのみ

【語釈】

○月堂：唐の李林甫が作った堂。○精舎：僧の学び舎。○柴門：柴で作った粗末な門。○斜暎：落日の餘暎。○山童：山寺に使える童子。

★題院壁

院の壁に題す

明 永瑛

自愛青山常住家

自ら愛す 青山 常住の家

銅餅閒煮壑源茶

銅餅 閑に煮る 壑源茶

春深白日巖扉静

春深くして 白日 巖扉静かなり

坐看蛛絲罨落花

坐して看る 蛛糸の 落花を罨くるを

【語釈】

○銅餅…銅のつるべ。○壑源茶…銘茶の一種。○巖扉…隠者の住居。○罨…網で捕らえる。

★山居

山居

明 徳清

平湖秋水浸寒空

平湖の秋水 寒空を浸す

古木霜餘落葉紅

古木 霜余 落葉紅なり

石逕小橋人迹斷

石径 小橋 人迹断え

一菴深鎖白雲中

一菴 深く鎖す 白雲の中

【語釈】

○平湖…平らな湖。○霜餘…霜が解けて消えた後。

★ 山居

山居

明 僧庵寛

苔花滿逕綠雲涼

苔花 徑に滿ち 綠雲涼し

嫩竹離離覆短牆

嫩竹 離々として 短牆を覆う

院静晝長人不到

院 静かに 晝長くして 人到らず

一簾風裊一爐香

一簾の風裊 一炉の香

【語釈】

○嫩竹：若い竹。○離離：草木が繁育しているさま。○短牆：短い垣根。○院：中庭。○風裊：しなやかな風。

★ 文殊院

文殊院

清 蔣 超

紫玉屏風敬佛筵

紫玉の屏風 仏筵に敬なり

諸峰如笏上青天

諸峰 笏の如く 青天に上る

偶來山寺空無主

偶ま 山寺に來れば 空しく 主無し

驚起白猿松際眠

驚起す 白猿の松際に眠るを

【語釈】

○文殊院：四川省成都市文殊院。○紫玉：紫色の宝玉。○佛筵：寺院の筵。○驚起：驚かせて起こす。

★ 自錦繡峰下至東林寺

錦繡峰下自り東林寺に至る

清 王士禛

江州郭外雪雲濃

江州郭外 雪雲 濃なり

翠壁丹崖錦繡重

翠壁 丹崖 錦繡重なる

行盡清溪三百曲

行き尽す清溪 三百曲

東林纔打午時鐘

東林 纔に打つ 午時の鐘

【語釈】

○錦繡峰：江西省九江市の南部の廬山の峰の一つ。○東林寺：廬山にある名刹。○江州：江西省九江市一帯の州。○錦繡：錦の刺繡のように色が入り交じる。○三百曲：多くの曲がり。○東林：東林寺。○午時：昼時。

★ 題寒山寺

寒山寺に題す

清 汪懋鱗

吳中池館日吹簫

吳中の池館 日に簫を吹く

只有寒山寺寂寥

只だ 寒山寺の寂寥なる有り

揺落江楓對漁火

揺落せる江楓 漁火に對す

行人歸去雨蕭蕭

行人 歸り去りて 雨 蕭々

【語釈】

○寒山寺：江蘇省蘇州市にある寺、張継の「楓橋夜泊」で有名。○吳中：蘇州を中心とした地方。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○揺落：揺れて落ちる。○行人：旅人。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★ 玉屏晚望待榛公不至

玉屏晚に望み榛公を待つも至らず

清 汪微遠

洞口無人山鳥飛

洞口 人無く 山鳥飛ぶ

寒烟一縷篆香微

寒煙 一縷 篆香微かなり

遊人薄暮倚松立

遊人 薄暮 松に倚りて立つ

眺盡落霞僧未歸

眺め尽くす 落霞 僧 未だ帰らず

【語釈】

○玉屏…玉で飾った屏風。○榛公…不祥。○一縷…一筋。○篆香…篆書のように曲がっている香の煙。○遊人…閑散な人。○落霞…夕焼け。

★ 恭和御製白雲泉元韻

「御製白雲の泉元韻」を恭和す

清 沈徳潜

石竇涓涓滴乳泉

石竇 涓々として 乳泉に滴たる

老僧相對日閑閑

老僧 相對し 日 閑々

清池只供山中飲

清池 只だ供す 山中の飲

不許白雲出世間

許さず 白雲の世間に出ずるを

【語釈】

○石竇…石穴。○涓涓…水がちよろちよろ流れるさま。○乳泉…美しく清い泉。○閑閑…ゆったりと落ち着いたさま。

★ 白雲泉僧舎題壁

白雲泉の僧舎の壁に題す

清 王廷諤

白板扉開小閣明

白板の扉開いて小閣明なり

閑雲漠漠水冷冷

閑雲漠々水冷々

脩然便覺塵襟滌

脩然として便ち覚ゆ塵襟の滌わるを

心與寒泉一樣清

心と寒泉と一樣に清し

【語釈】

○白雲泉：不祥。○閑雲：悠悠飄然として浮かぶ雲。○漠漠：一面に続いているさま。○冷冷：ひえびえとしているさま。○脩然：厳格なさま。○塵襟：世間の塵に染まったえり。

★ 宏濟寺

宏濟寺

清 田 露

初入長干第一關

初めて入る長干第一の関

果然幽境出塵寰

果然たる幽境塵寰を出ず

西風黃葉南朝寺

西風黄葉南朝の寺

前面長江後面山

前面の長江後面の山

【語釈】

○宏濟寺：不祥。○長干：南京の南にある街。○果然：思った通り。○幽境：優雅な境地。○塵寰：俗世間。○西風：秋風。○南朝：南北朝時代の南朝。南京を中心とする。

★宿蘆花寺

蘆花寺に宿す

清 徐郷坡

梅檀香細博山添

梅壇香細くして博山添う

蓮漏沈沈響夜籤

蓮漏沈々夜籤に響く

一覺東華塵土夢

一たび覚ゆ東華塵土の夢

長明燈下読楞巖

長明燈下楞巖を読む

【語釈】

○蘆花寺：不祥。○梅檀香：香草の一種。○博山：香炉の一種。○蓮漏：蓮の花の形をした水時計。○沈沈：夜の更けるさま。○東華：伝説上の仙人上の東王公。○楞巖：楞巖經、仏教の經典の一つ。

★秋夜宿八峰山房

秋夜八峰山房に宿す

清 大燈

黃花籬下亂蛩鳴

黃花籬下乱蛩鳴く

古寺秋高嶺月明

古寺秋高くして嶺月明かなり

夜半石床清睡去

夜半石床清睡去り

不知枕上落泉聲

知らず枕上落泉の聲

【語釈】

○八峰山：安徽省馬鞍山市と蕪湖市にまたがる地域にある山。○黃花：黃菊。○蛩：コオロギ。○嶺月：嶺に懸かっている月。

絶句類選標本 七

絶句類選 卷之十三 憑弔類

★ 汾陰行

ふんいんこう
汾陰行

唐 李嶠

山川満目涙沾衣

山川 満目 涙衣を沾す

富貴榮華能幾時

富貴 榮華 能く幾時ぞ

不見祗今汾水上

見ず 祗^ただ今 汾水の上

唯有年年秋雁飛

唯だ 年々 秋雁の飛ぶ有るのみ

【語釈】

○汾陰行：山西省萬榮県の歌。○満目：見渡す限り。○汾水：山西省にある川。

(注：古詩の最後の四句を切り取った物)

★ 邙山

邙山

唐 沈佺期

北邙山上列墳塋
萬古千秋對洛城
城中日夕歌鐘起
山上唯聞松柏聲

北邙山上墳塋列なり
萬古千秋洛城に對す
城中日夕歌鐘起る
山上唯だ聞く松柏の聲

【語釈】

○邙山：北邙山。洛陽の北にある黄土の平坦な山。後漢以来、王侯貴族の陵墓の多い所として有名。○墳塋：墓。○萬古千秋：千年も万年も。洛城：洛陽の町。

（参考文献）『唐詩選』

★ 銅雀臺

銅雀台

唐 劉庭琦

銅臺宮觀委灰塵
魏主園林漳水濱
即今西望猶堪思
況復當時歌舞人

銅台の宮觀 灰塵に委す
魏主の園林 漳水の浜
即今西望して猶お思うに堪えたり
況んや復た当時歌舞の人をや

【語釈】

○銅雀台：樂府題の一つ。魏の武帝、曹操が鄴の都（河北省臨漳県）に築いた楼台の名。○銅台：銅雀台のこと。○宮觀：宮殿や楼閣。○委：棄てられたままになっていること。○魏主：曹操。○園陵：帝王の陵墓。○漳水：漳河。○即今：今。○猶堪思：なお悲しい思いで胸がいっぱいになる。○況復：そのうえに。○歌舞人：銅雀台上で歌舞を演じた宮女たちを指す。

（参考文献）『唐詩選』

★蘇臺覽古

蘇台覽古

唐 李白

舊苑荒臺楊柳新

舊苑 荒台 楊柳新なり

菱歌清唱不勝春

菱歌 清唱 春に勝えず

只今惟有西江月

只今 惟だ 西江の月のみ有りて

曾照吳王宮裏人

曾て照らす 吳王宮裏の人

【語釈】

○蘇台：姑蘇台、吳王夫差の宮殿があった、江蘇省蘇州市の西・姑蘇山山頂にある。○覽古：昔を懐かしむこと。○旧苑：古い園。○荒台：荒れた高台。○菱歌：菱を取りながら歌う女性の歌。○清唱：清らかに歌う。○勝春：春の感傷に耐えられない。○西江：姑蘇台の西を流れている川。○吳王宮裏人：吳王夫差の宮殿にいた美女、西施のこと。

(参考文献)

『唐詩選』

★越中覽古

越中覽古

唐 李白

越王句踐破吳歸

越王句踐 吳を破って帰る

義士還家盡錦衣

義士 家に還って 尽く錦衣す

宮女如花滿春殿

宮女 花の如く 春殿に満つ

只今惟有鷓鴣飛

只今 惟だ 鷓鴣の飛ぶ有るのみ

【語釈】

○越中：春秋時代の越の国。○覽古：懐古する。○越王句踐：春秋時代の越の王の勾踐。○破：撃破する。○吳：ここでは吳王・夫差の軍。○義士：忠義の兵士。○錦衣：にしきをきる。○春殿：春の宮殿。○只今：現在。鷓鴣：シャコ。○鳥の名。キジ科の鳥。悲しげな鳴き声でなく。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 山房春事

山房春事 さんぼうしゅんじ

唐 岑 參

梁園日暮亂飛鴉

梁園の日暮 乱飛の鴉 りょうえん らんぴ からす

極目蕭條三兩家

極目 蕭條 三兩家 きょくもく しやうじやう

庭樹不知人去盡

庭樹は知らず 人去り尽すを

春來還發舊時花

春來りて 還た発く 旧時の花 ま ひら

【語釈】

○山房春事…山房での春のものの思い。○梁園…漢代に、文帝の子、梁の孝王が築いた園の名、河南省東部、商丘の東にある。○極目…目の届く限り。○蕭條…もの寂しいさま。○舊時…昔と変わらない。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 讀嶧山碑

嶧山碑を読む えきざんひ

唐 張 繼

六國平來四海家

六国 平げ来りて 四海家なり りつこく

相君當代擅才華

相君 当代 才華を擅す しやうくん

誰知頌徳山頭石

誰か知らん 頌徳山頭の石 しやうとくさんとう

却與他人戒後車

却って他人に与え 後車を戒むとは いまし

【語釈】

○嶧山碑…秦の始皇帝が山東省の嶧山を巡遊したときに建てた記念碑。○六國…齊、楚、燕、韓、趙、魏。○四海…全世界。○才華…文才の優れた者。○頌徳…功徳を讃える歌。○戒後車…悪い前例に倣わないように後から来る物を戒める。

★宿昭應

昭應に宿す

唐 顧況

武帝祈靈太乙壇

武帝 靈を祈る 太乙壇

新豊樹色繞千官

新豊の樹色 千官を繞る

那知今夜長生殿

那ぞ知らん 今夜 長生殿

獨閉空山月影寒

独り 空山 月影の寒きに閉ざされんとは

【語釈】

○昭應：陝西省西安市臨潼区。驪山の西北。○武帝：漢の武帝。○祈靈：神靈に祈願すること。○太乙壇：天帝の太乙を祀るために築いた祭壇。○新豊：昭應の旧名。○長生殿：華清宮の中にある宮殿の名。○空山：人ひと気のない寂しい山。○月影：月光。

（参考文献）『唐詩選』『三体詩』

★上陽宮

上陽宮

唐 竇庠

愁雲漠漠草離離

愁雲は漠々たり 草は離々たり

太乙句陳處處疑

太乙か句陳か 処々に疑う

薄暮毀垣春雨裏

薄暮 毀垣 春雨の裏

殘花猶發萬年枝

殘花 猶お発く 万年の枝

【語釈】

○上陽宮：現在の河南省洛陽市の西に唐の高宗が建てた宮殿、このころ已に荒廃していたらしい。○愁雲：さびしき雲。○漠漠：連なっているさま、うす暗いさま。○草離離：草が生茂っているさま。○太乙：太掖池、池のなまえ。○句陳：星の名前、星の名前を冠した宮殿の名。○處處：あちこち。○毀垣：破りくずれた垣根。○殘花：散りゆく花。○萬年枝：冬青樹。

（参考文献）『三体詩』

★ 南游感興

南游感興

唐 竇鞏

傷心欲問前朝事

傷心問わんと欲す 前朝の事

惟見江流去不回

惟だ見る 江流の去りて 回らざるを

日暮東風春草綠

日暮 東風 春草綠なり

鷓鴣飛上越王臺

鷓鴣 飛び上ぐ 越王台

【語釈】

○南游：南方（ここでは呉楚の地方）を旅すること。○前朝：春秋戦国時代の越。江流：長江の流れ。○越王臺：越王勾踐が築いた台。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 隋宮燕

隋宮の燕

唐 李益

燕語如傷舊國春

燕語 傷むが如し 旧国の春

宮花零落総成塵

宮花 零落して 総て塵と成る

自從一閉風光後

一たび 風光を閉して 自從後

幾度飛來不見人

幾度か 飛び来れども 人を見ず

【語釈】

○燕語：燕の声。○隋宮：隋の煬帝が揚州に築いた行宮。○旧国：隋の国。○零落：草木が枯れ落ちること。○自從：「ヨリ」と読み、「くから」の意。○風光：美しい輝き。

★ 汴河曲

汴河の曲

唐 李益

汴水東流無限春
隋家宮闕已成塵
行人莫上長堤望
風起楊花愁殺人

汴水 東流す 無限の春
隋家の宮闕 已に塵と成る
行人 長堤に上りて 望むこと莫れ
風起つて 楊花 人を愁殺す

【語釈】

○汴河・汴水：黄河と淮水とをつなぐ運河。○宮闕：本来は宮殿の意であるが、ここでは隋帝の離宮を指す。○已成塵：すでに荒廃して塵となってしまった。○行人：道行く人、旅人。○長堤：運河沿いに築かれた長い堤。○楊花：楊柳の花、白い綿毛が飛ぶ。○愁殺人：見る人を深い悲しみに沈ませる。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 綺岫宮

綺岫宮

唐 王建

玉樓傾倒粉牆空
重疊青山遶故宮
武帝去來羅袖盡
野花黃蝶領春風

玉樓 傾倒して 粉牆空し
重畳たる青山 故宮を遶る
武帝 去りて来り 羅袖 尽き
野花 黄蝶 春風を領す

【語釈】

○綺岫宮：長安の東の驪山もあつた離宮。○玉樓：宮殿の楼閣。○傾側：傾く。○粉牆：土塀。○重疊：幾重にも重なる。○武帝：漢の武帝をいうが、ここでは玄宗。○羅袖：後宮の美女。

(参考文献)

『三体詩』

★華清宮

華清宮かせいきゆう

唐 王建

酒幔高樓一百家

酒幔しゅまん 高樓 一百家

宮前楊柳寺前花

宮前の楊柳 寺前の花

内園分得溫湯水

内園 分ち得たり 温湯の水

二月中旬已進瓜

二月中旬 已に瓜を進む

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にあった宮殿。○酒幔：酒宴を開くとき、四方を蔽う膜。○寺：大常寺、内務省、文科省に当たる。○分得温湯水：一つの出口の温泉を方々に分かつ。○結句：温泉を利用しているので、瓜が育つのが早いという意味。

(参考文献)

『三体詩』

★會稽東小山

會稽かいけいの東小山

唐 陸羽

月色寒潮入剡溪

月色 寒潮 剡溪せんけいに入る

青猿叫斷綠林西

青猿 叫び断ゆ 緑林の西

昔人已逐東流去

昔人 已に東流を逐おいて去り

空見年年江草齊

空しく見る 年々 江草ひとしの齊ひときを

【語釈】

○會稽：浙江省紹興市の南。○剡溪：浙江省紹興市剡溪。○昔人：戴安道。王子猷の友人。『世説新語』任湛。○東流：東に流れる水。

★華清宮

華清宮を過ぐ

唐 李約

君王遊樂萬機輕

君王遊樂し 万機輕し

一曲霓裳四海兵

一曲の霓裳 四海の兵

玉輦升天人已盡

玉輦 天に升り 人已に尽き

故宮猶有樹長生

故宮猶お 樹の長生する有り

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にあった宮殿。○君王：玄宗皇帝。○萬機：皇帝が行う政治。○霓裳：霓裳羽衣の曲。楊貴妃が得意とした舞。○四海兵：安史の乱。○玉輦：皇帝の乗る手押し車。○故宮：華清宮。

★登闕閭古城

闕閭の古城に登る

唐 武元衡

登高遠望自傷情

登高し 遠望すれば 自ら情を傷ましむ

柳鞦花開映古城

柳鞦 花開いて 古城に映ず

全盛已隨流水去

全盛 已に 流水に随つて去り

黃鸝空嘯暮春聲

黃鸝 空しく嘯ず 暮春の聲

【語釈】

○闕閭：春秋時代の呉の王、夫差の父。○柳鞦：なよなよとした柳。○黃鸝：コウライウグイス。

★ 吳城覽古

吳城覽古

唐 陳羽

吳王舊國水煙空

吳王の旧国 水煙空し

香徑無人蘭葉紅

香徑 人無く 蘭葉紅なり

春色似憐歌舞地

春色は 歌舞の地を 憐むに似て

年年先發館娃宮

年々 先ず発く 館娃宮

【語釈】

○吳城：春秋時代の吳の都。江蘇省蘇州市。○覽古：古跡を尋ねて当時の面影を偲ぶ。○吳王：夫差のこと。○水煙：川の上に立つ霧。○香徑：採香徑、夫差が香草、香木を植え、西施と楽遊したところ。○春色：春景色、春の気配。○館娃宮：吳の宮殿、夫差が西施の為に建てた。

（参考文献）

『三体詩』

★ 題延平劍潭

延平の劍潭に題す

唐 歐陽詹

想象精靈欲見難

精靈を想象して 見んと欲すれども難し

通津一去水漫漫

通津 一たび去りて 水漫漫

空餘千催凌霜色

空しく 千催の霜を凌ぐの色を余して

長與澄潭白日寒

長えに 澄潭と与に 白日寒し

【語釈】

○延平：福建省南平市延平区。○劍潭：劍潭は、閩江の上流にあった渡し場。『晋書』張華伝。○想象：心に思い浮かべること。○精靈：精妙なる靈氣。ここでは竜に化した宝劍の靈氣。○通津：四通八達の渡し場。○漫漫：遠く遙かなさま。○凌霜色：霜にも勝る冴えて凜然とした刃の色。○澄潭：清く澄み切った潭ふち。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 題楚昭王廟

楚の昭王の廟に題す

唐 韓愈

丘墳満目衣冠盡

丘墳 満目 衣冠尽く

城闕連雲草樹荒

城闕 雲に連つて草樹荒る

猶有國人懷舊德

猶お 国人の 旧徳を懐う有りて

一間茅屋祭昭王

一間の茅屋 昭王を祭る

【語釈】

○楚：春秋戦国時代に長江中流域を領有していた国。昭王：春秋時代の楚の王、聖賢の大道に通じた有徳の王。○丘墳：墳墓。○満目：見渡す限り。○衣冠：衣冠を附ける身分のもの、官吏。○城闕：城の門、宮殿。○連雲：空に高く聳える様。○荒：雑草が地を覆う、あははてる。○国人：ある地域の人民。○旧徳：昔の徳行。ここでは楚の昭王の徳治を指す。○一間：一間の幅。○屋茅：かや・わらなどでふいた粗末な家。

(参考文献)

『中国詩人選集11』

★ 石頭城

石頭城

唐 劉禹錫

山圍故國周遭在

山は 故國を圍んで 周遭として在り

潮打空城寂寞回

潮は 空城を打って 寂寞として回る

淮水東邊舊時月

淮水東邊 旧時の月

夜深還過女牆來

夜深くして 還た 女牆を過ぎて来る

【語釈】

石頭城：金陵（南京）市街の西にある六朝の古都の城郭。故國：古都、六朝の古都・南京を指す。週遭：めぐる。空城：嘗ての首都、実態が無くなった寂しい首都。寂寞：回：めぐる、かえる。淮水：秦淮河のこと、金陵（南京）市街の南部、西部を回る川。女牆：ひめがき、城壁の上にある高い部分と低い部分のうち、低い部分をいう。

(参考文献)

『中国名詩選 (下)』

★ 烏衣巷

烏衣巷

唐

劉禹錫

朱雀橋邊野草花

朱雀橋邊 野草の花

烏衣巷口夕陽斜

烏衣巷口 夕陽斜なり

舊時王謝堂前燕

旧時 王謝 堂前の燕

飛入尋常百姓家

飛んで 尋常 百姓の家に 入る

【語釈】

○烏衣巷：金陵城（南京）の南側、秦淮区の白鷺洲公園のすぐ西側にある町内の名。○朱雀橋：南京城の南にある秦淮河の上の浮橋の名。○巷口：路地の入り口。○舊時：過ぎ去った昔。○王謝：王導や謝安を出した南朝の名族。○堂前：大きい建物の前。○尋常：普通の。○百姓：庶民。

（参考文献） 『唐詩三百首』

★ 臺城

台城

唐

劉禹錫

臺城六代競豪華

台城 六代 豪華を競う

結綺臨春事最奢

結綺 臨春 事 最も奢る

萬戸千門成野草

万戸千門 野草と成り

只緣一曲後庭花

只だ 一曲の 後庭花に縁る

【語釈】

○臺城：六朝時の禁城（南京）。○六代：南朝の六王朝。○結綺：陳の後主が建てた宮殿。○臨春：春に臨む。○後庭花：「玉樹後庭花」。南朝の陳の後主が作った詩。亡国の歌曲。

★ 法雄寺東樓

法雄寺ほうゆうじの東樓

唐 張籍

汾陽舊宅今爲寺

汾陽ふんようの旧宅 今 寺と爲る

猶有當時歌舞樓

猶お 当時の歌舞の樓 有り

四十年來車馬絕

四十年来 車馬絶え

古槐深巷暮蟬愁

古槐こかい 深巷しんこう 暮蟬愁ぼせんう

【語釈】

○法雄寺：不祥。○汾陽：汾河（山西省を南北に流れる大河）の北の地方。○深巷：深く長い道。

★ 長洲苑

長洲苑ちやうしゅうえん

唐 白居易

春入長洲草又生

春は長洲に入て 草又生ず

鷓鴣飛起少人行

鷓鴣しやこ 飛び起き 人行じんこう 少なり

年深不辨娃宮處

年深くして 弁あきゆうぜず 娃宮の処

夜夜蘇臺空月明

夜々や 蘇臺そだい 月明むな空し

【語釈】

○長洲苑：江蘇省蘇州虎丘の上であり、吳王闔閭の狩獵したところ。○長洲：長洲苑。○年深：久しい。冬至の俗語。○館娃宮：吳王夫差が西施の爲に建てた宮殿。○蘇臺：姑蘇臺：蘇州市姑蘇山にある、吳王夫差が西施を住ませた宮殿。

（参考文献）

『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★ 商山廟

商山廟

唐 白居易

臥逃秦亂起安劉

臥しては秦の乱を逃がれ 起ちては劉を安んず

舒卷如雲得自由

舒卷 雲の如く自由を得たり

若有精靈應笑我

若し 精靈 有らば 応に我を笑うべし

不成一事謫江州

一事を成さずして 江州に謫さる

【語釈】

○商山廟：商山（陝西省商県にある山）にある四皓（秦漢の乱を避けて商山に隠棲した四人の隱者）の廟。○安劉：漢の高祖の皇太子を守った。○舒卷：出処進退。○應：「まさしくすべし」と読み、「きつとくでるにちがいない」の意。○江州：江西省北部におかれた州。

〔参考文献〕

『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 題昭應溫泉

昭応の温泉に題す

唐 孫叔向

一道泉回繞御溝

一道の泉 回りて 御溝を繞る

先皇曾向此中游

先皇 曾て 此の中に向いて遊ぶ

雖然水は無情物

然水は 是れ 無情の物と雖も

也到宮前咽不流

也 宮前に到りて 咽びて流れず

【語釈】

○昭應：不祥。○一道：一筋の。○御溝：宮城の堀。○先皇：前朝の皇帝。

★ 題縉雲山鼎池

縉雲山の鼎池に題す

唐 徐凝

黄帝旌旗去不回

黄帝的旌旗 去りて回らず

空餘片石碧崔嵬

空しく片石を余す 碧崔嵬

有時風卷鼎湖浪

時有りて 風は巻く 鼎湖の浪

散作晴天雨點來

散じて 晴天の雨点と作りて来る

【語釈】

○縉雲山：重慶市西北北碚地区にある山。○鼎池：鼎湖のこと。○黄帝：伝説中の帝王の最高者。○旌旗：旗の総称。○片石：石碑。○碧崔嵬：碧いろの山頂。○鼎湖：浙江省麗水市鼎湖。黄帝が、ここで龍に乗り昇天したとの伝説がある。

★ 過襄陽上于司空頤

襄陽を過ぎ 于司空頤に上る

唐 李涉

方城漢水舊城池

方城 漢水 旧城池

陵谷依然世自移

陵谷 依然として 世 自ら移る

歌馬獨來尋故事

馬を歇て 独り来り 故事を尋ぬ

逢人唯說峴山碑

人に逢い 唯だ説く 峴山碑

【語釈】

○襄陽：湖北省襄陽市襄城区。○于司空頤：于頤。河南省洛陽市の人、遷湖、蘇二州刺史を勤め、司空に進んだ。○方城：河南省方城县。○漢水：長江の最長の支流。武漢で長江に合流する。○陵谷：墳墓。○依然：昔のまま。○峴山碑：晋の羊祜が襄陽の太守であった時、功績があったので、後の人がそれを書き記した碑、峴山（湖北省襄陽市南にある山）にある。

★ 隋宮

隋宮ずいきゆう

唐 鮑溶

柳塘煙起日西斜

柳塘りゆうとう煙起りて日は西に斜なり

竹浦風迴鴈弄沙

竹浦ちくほ風迴り鴈沙を弄す

煬帝春遊古城在

煬帝ようだいの春遊古城在り

壞宮芳草滿人家

壞宮かいきゆうの芳草人家に満つ

【語釈】

○隋宮：隋の煬帝が揚州に行幸したときの行宮。○柳塘：柳を植えた堤。○竹浦：竹の生えた浦。○壞宮：壊れた宮殿。

★ 望思臺

望思臺ぼうしだい

唐 鄭還古

讒語能令骨肉離

讒語さんご能く骨肉を離さ令む

姦情難測事堪悲

姦情かんじょう測り難く事悲むに堪えたり

何因掘得江充骨

何に因りてか江充の骨を掘り得て

搗作微塵祭望思

搗ついて微塵と作し望思ぼうしを祭らん

【語釈】

○望思臺：漢の武帝の時、奸臣江充に落とされ入れられて自殺した太子（巫蠱の獄）の無実を哀れんで武帝が建てた臺。○讒語：そしる言葉。讒言。○骨肉：ごく親しい間柄の者。○姦情：よこしまな心。○江充：巫蠱の獄を起こした奸臣。○望思：望思臺。

★華清宮

華清宮かせいきゆう

唐 張祜

紅樹蕭蕭閣半開
上皇曾幸此宮來
至今風俗驪山下
村笛猶吹阿濫堆

紅樹蕭々として閣半ば開く
上皇曾って此の宮に幸して来る
今に至る風俗驪山の下
村笛猶お吹く阿濫堆

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○上皇：玄宗皇帝。○阿濫堆：玄宗が作った曲の名。

★寶應縣

寶應縣ほうおうけん

唐 雍陶

雪樓當日動晴寒
渭水梁山鳥外看
聞說德宗曾到此
吟詩不敢倚闌干

雪樓 日に当って晴寒を動かす
渭水 梁山 鳥外に看る
聞説く 德宗 曾て此に到ると
詩を吟じ 敢て 闌干に倚らず

【語釈】

○寶應縣：江蘇省揚州市宝应県。○雪樓：雪に覆われた楼。○晴寒：寒い青空。○渭水：関中を東流し黄河に繋がる川。○梁山：陝西省韓城市にある山。○鳥外：高空。○聞説：聞くとことによれば。○德宗：唐朝の第12代皇帝。

★ 題桃花夫人廟

桃花夫人とうかふじんの廟らうに題だいす

唐 杜 牧

細腰宮裏露桃新

細腰宮裏さいようきゆうり 露桃新ろとうたなり

脈脈無言度幾春

脈々みやくみやくとして言無げんく幾春を度る

至竟息亡緣底事

至竟しきよう 息の亡ぶは底事なにごとにか縁よる

可憐金谷墜樓人

憐れむべし 金谷きんこく 墜樓ついろうの人

【語釈】

○桃花夫人：息婦人。楚の文王に息の国を滅ぼされ妻とされたが、一言も口をききななかつた。（『春秋左氏伝』文王十四年）。○細腰宮：楚の文王の宮殿。文王は細腰の女性を好んだ。○露桃：桃の花。○脈脈：思いを秘めている様子。○至竟：結局。畢竟。○金谷墜樓人：晋の石崇の愛姫であった緑珠。『蒙求』（緑珠墜樓）。

（参考文献） 『新釈漢文大系 詩人編9』

★ 題烏江亭

烏江亭に題す

唐 杜 牧

勝敗兵家事不期

勝敗は 兵家も 事期せず

包羞忍恥是男兒

羞を包み 恥を忍ぶ 是れ男兒

江東子弟多才俊

江東の子弟 才俊多し

卷土重來未可知

卷土重來かんつちちようらい 未だ知るべからず

【語釈】

烏江亭：安徽省の長江北岸にある亭。項羽と劉邦の天下争覇で、敗れた項羽が舟での戦場離脱を拒んだところ。烏江：安徽省東部を流れる川であり地名。・兵家：兵法家。事不期：予期することができない。男兒：立派な男である。是：強意の助辞、…である。江東：烏江の東側にある項羽の根拠地。才俊：才能にひいでた人物。捲土重來：砂塵を巻き起す勢いで、再びやってくる。未可知：その結果はどうなるかは、まだ、知ることができない。

（参考文献）

『漢詩大系 9』

★青塚

青塚

唐 杜牧

青塚前頭隴水流

青塚前頭 隴水流る

燕支山下暮雲秋

燕支山下 暮雲 秋なり

蛾眉一墜窮泉路

蛾眉 一たび 窮泉の路に墜ち

夜夜孤魂月下愁

夜々 孤魂 月下に愁う

【語釈】

○青塚：王昭君の墓。砂漠の中で草が青々と茂るので青塚と言われる。内蒙古自治区にある。○隴水：隴山（陝西省北部から甘粛省にかけての山脈）から流れる川。○燕支山：燕然山。モンゴル民族共和国にある。○蛾眉：美人。王昭君。○窮泉：黄泉の国。○孤魂：孤独な魂。

（参考文献）

『新釈漢文大系 詩人編 9』

★赤壁

赤壁

唐 杜牧

折戟沈沙鐵半銷

折戟 沙に沈んで 鉄 半ば 銷す

自將磨洗認前朝

自ら 磨洗を將って 前朝を認む

東風不與周郎便

東風 周郎の与に 便ぜずんば

銅雀春深鏤二喬

銅雀 春深くして 二喬を鏤さん

【語釈】

○赤壁：今の湖北省咸寧市赤壁市にある古戦場、呉の孫権と蜀の劉備の連合軍が、魏の曹操の軍を打ち破った所。○折戟：折れたほこ。○銷：錆びて朽ち果てる。○磨洗：洗う、磨くこと。○前朝：前の時代。赤壁の戦いのあった三国時代。周郎：呉の名將、周瑜のこと。○便：都合良くする。○銅雀：曹操が鄴（今の河北省臨漳県）に築いた台の名、銅雀台。○二喬：呉の喬氏の美人姉妹。○姉の大喬は孫策が、妹の小喬は周瑜が側室とした。

（参考文献）

『三体詩』

★ 泊秦淮

秦淮に泊す

唐 杜牧

煙籠寒水月籠沙

煙は寒水を籠め 月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家

夜 秦淮に泊して 酒家に近し

商女不知亡國恨

商女は知らず 亡国の恨を

隔江猶唱後庭花

江を隔てて 猶お唱う 後庭花

【語釈】

○秦淮：建康（南京）を貫流して長江へ注ぐ古代の運河。○煙：霞は靄。○寒水：寒々とした冬の川。○籠：月光が河の砂に射している。○籠：つつみこむ。○沙：砂州。○酒家：酒屋、飲み屋。○商女：妓女。○亡國恨：嘗てここに都を構えていた南朝の陳の後主が酒色に耽り、国を亡ぼしたという。○後庭花：『玉樹後庭花』。南朝の陳の後主が作った詩。

（参考文献）『漢詩大系 9』

★ 金谷園

金谷園

唐 杜牧

繁華事散逐香塵

繁華の事 散じて 香塵を逐う

流水無情草自春

流水 無情草 自ら春なり

日暮東風怨啼鳥

日暮 東風 啼鳥を怨む

落花猶似墮樓人

落花は 猶お似たり 墮樓の人に

【語釈】

○金谷園：西晋の石崇が洛陽の北の金谷に建てた別荘の庭園で、石崇は、ここで愛妾の緑珠と暮らしていた。○繁華事：昔、金谷園で遊んだこと。○香塵：香りの良い塵。○墮樓人：身投げをした人、石崇の愛妾の緑珠のこと。『蒙求』緑樹墮樓。

（新釈漢文大系 詩人編 9）

★ 登樂遊原

樂遊原らくゆうげんに登る

唐 杜牧

長空澹澹孤鳥沒

長空澹澹たんたんとして 孤鳥沒す

萬古銷沈向此中

萬古銷沈しょうせんして 此の中に向う

看取漢家何事業

看取かんしゅす 漢家 何事の業ぞ

五陵無樹起秋風

五陵 樹の 秋風を起す無し

【語釈】

○樂遊原：長安の東南にある遊覽の地で、高くなっており、長安を眺め渡すことのできる名勝地。○長空：大空。○澹澹：あつさりしたさま。○孤鳥：群を離れて一羽だけになった鳥。○沒：かくれて見えなくなる。○看取：みる。みてとる。○漢家：漢の王室。○何：なに、どれほど、疑問の助字。○事業：営む事がらとその成果。○五陵：長安にあった前漢の五帝陵。高祖長陵、惠帝安陵、武帝茂陵、昭帝平陵の五帝陵。

(参考文献) 『漢詩大系 14』

★ 途經秦始皇墓

途經秦始皇墓

唐 許渾

龍盤虎踞樹層層

龍盤虎踞りゅうばんとこきよ 樹層層じゆうそうそう

勢入浮雲亦是崩

勢い 浮雲に入るも 亦た是れ崩るまたこ

一種青山秋草裏

一種の青山 秋草の裏うち

路人唯拜漢文陵

路人 唯だ 拜す 漢文の陵

【語釈】

○龍盤虎踞：龍がとぐろを巻き、虎がうづくまるように、ある場所を根拠地として威勢を振るうこと。○層層：幾重にも重なっていること。○漢路人：道行く人。○漢文陵：仁君であった漢の文帝の陵。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 過湘妃廟

湘妃廟を過ぐ

唐 許渾

古木蒼山掩翠娥

古木 蒼山 翠娥を掩う

月明南浦起微波

月明 南浦 微波起る

九疑望斷幾千載

九疑 望斷す 幾千載

斑竹淚痕今更多

斑竹 淚痕 今 更に多し

【語釈】

○湘妃廟：堯帝の娘で舜帝の妃となり、舜帝が死去した後、湘水に入る水した娥皇、女英を祀る廟、君山にある。○翠娥：緑色の眉。○南浦：南側の水面。○九疑：九疑山、湖南省寧遠県の南にある山。舜を葬ったところ。○望斷：見える処まで見尽くす。○斑竹：まだら竹。娥皇、女英の涙が注がれて斑ができたと伝えられる。

★ 經故太尉段公廟

故太尉段公の廟を經

唐 許渾

靜想追兵緩翠華

靜かに想う 兵を追い 翠華を緩めるを

古碑荒廟閉松花

古碑 荒廟 松花を閉ざす

紀生不向滎陽死

紀生 滎陽に向いて 死せずんば

爭有山河屬漢家

争か 山河の 漢家に属する有らん

【語釈】

○故太尉段公：後漢の段熲、武將・官僚として功績があり、太尉にまで上り詰めたが、最後には投獄されて自殺した。○翠華：帝王、ここでは劉邦。○紀生：滎陽において劉邦が項羽に包圍されたとき、劉邦と偽って項羽に降伏し、その間に劉邦は脱出した。ここでは、段熲になぞらえている。○争：どうしてゝがありえようか。反語。

★ 驪山有感

驪山りしやん感有り

唐 李商隱

驪岫飛泉泛暖香

驪岫りしやうの飛泉 暖香を泛ふ

九龍呵護玉蓮房

九龍かじ 呵護ぎよくれんぼうす 玉蓮房

平明每幸長生殿

平明つね 毎こに幸じやうす 長生殿

不從金輿惟壽王

金輿きんよに従じやうわざるは 惟じやうた壽王

【語釈】

○驪山…陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。○驪岫…驪山。○呵護…加護。○玉蓮房…蓮の花の外包の美称。○平明…夜明け。○幸…寵愛する。○長生殿…華清宮の中にあつた宮殿。○金輿…皇帝の乗る輿。○壽王…李瑁、玄宗の子、楊貴妃は李瑁の妻であつた。

★ 龍池

龍池りやうち

唐 李商隱

龍池賜酒敞雲屏

龍池りやうち 酒を賜うんべいいて 雲屏ひらを敞ひらく

羯鼓聲高衆樂停

羯鼓かっこ 声 高くして 衆樂しやうがく 停とまる

夜半宴歸宮漏永

夜半宴 歸きゆうろうりて 宮漏永し

薛王沈醉壽王醒

薛王せつおうは沈醉じゆおうし 壽王じゆおうは醒さむ

【語釈】

○龍池…中書省。○雲屏…雲母で裝飾された屏風。○羯鼓…打楽器の一種。○宮漏…宮中の水時計。○薛王…李業、睿宗の子。○壽王…李瑁、玄宗の子、楊貴妃は李瑁の妻であつた。

★ 經汾陽舊宅經

汾陽の旧宅を經

唐 趙嘏

門前不改舊山河

門前改まらず 旧山河

破虜會輕馬伏波

虜を破り 曾て輕んず 馬伏波

今日獨經歌舞地

今日 独り經 歌舞の地

古槐疎冷夕陽多

古槐 疎冷にして 夕陽多し

【語釈】

○汾陽：山西省汾陽市。○汾陽舊宅：郭子儀の旧宅、郭子儀は、唐朝に仕えた軍人・政治家。安史の乱で大功を立て、以後よく異民族の侵入を防いだ。○虜：蛮族。○會輕：馬伏波以上の功績があることをいう、馬伏波は馬援、後漢の武将。○歌舞地：汾陽の舊宅のこと。○古槐：古い槐の樹。○疎冷：疎らでさびしいさま。○歌舞地：汾陽の舊宅のこと。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★ 易水懷古

易水懷古

唐 馬戴

荆卿西去不復返

荆卿 西に去りて 復た返らず

易水東流無盡期

易水 東流して 尽くる期無し

落日蕭條薊城北

落日 蕭条たり 薊城の北

黃沙白草任風吹

黃沙 白草 風の吹くに任す

【語釈】

○易水：河北省西部を流れる川、荆軻が燕太子丹に別れたところ。○荆卿：秦王を暗殺しようとした刺客、史記「刺客列伝」。○蕭條：もの静かで寂しいさま。○薊城：現在の北京。

★ 秋日過驪山

秋日 驪山を過ぐ

唐 孟 遲

冷日微煙渭水愁

冷日 微煙 渭水愁う

翠華宮樹不勝秋

翠華 宮樹 秋に勝えず

霓裳一曲千門鎖

霓裳 一曲 千門を鎖す

白盡梨園弟子頭

白盡す 梨園 弟子の頭

【語釈】

○驪山：陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。○微煙：かすかな水上のもや。○翠華：皇帝の儀仗である翠の羽の付いた旗。○霓裳：霓裳羽衣の曲。楊貴妃が得意とした舞。○白盡：すっかり真つ白になる。○梨園：宮廷の楽人、その養成所。○弟子：一同。

★ 華清宮

華清宮

唐 崔 櫓

草遮回磴絶鳴鑾

草は 回磴を遮って 鳴鑾を絶つ

雲樹深深碧殿寒

雲樹 深々として 碧殿寒し

明月自來還自去

明月 自ら來って 還た自ら去る

更無人倚玉欄干

更に 人の 玉欄干に倚る無し

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○雲樹：雲のかかる樹木。○深深：奥深くまで生い茂っている形容。○碧殿：青緑色に塗った宮殿、または碧玉で飾られた美しい宮殿。○寒：ひっそりとして肌寒く感じる。○自來：ひとりでにやっ来て。○自去：ひとりでに去っていく。○玉欄干：玉で飾った欄干。

(参考文献)

『唐詩選』

★華清宮

華清宮かせいきゆう

唐 崔櫓

障掩金雞蓄禍機

障さわりは金雞きんけいを掩おさめて禍機かきを蓄たくわう

翠華西拂蜀雲飛

翠華すいか西せいを払はらいて蜀雲しやくうん飛とぶ

珠簾一閉朝元閣

珠簾しゆれん一いつたび閉とめ朝元閣ちやうげんかく

不見人歸見燕歸

人ひとの歸かへるを見みず燕つばきの歸かへるを見みる

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○金雞：櫛樹の別名。○禍機：禍の起こるきざし。○翠華：皇帝の車。○西拂：玄宗が蜀に逃れたこと。○朝元閣：驪山にあった楼閣。

★華清宮

華清宮かせいきゆう

唐 崔櫓

門横金鎖悄無人

門かどは金鎖きんさを横よこたえて悄しやうとして人無なく

落日秋聲渭水濱

落日らくじつ秋聲しゅうせい渭水ゐすいの浜はま

紅葉下山寒寂寂

紅葉こうよう山やまを下くだりて寒せむせむ寂せむせむ々

濕雲如夢雨如塵

湿雲しつうんは夢ゆめの如ごとく雨あめは塵ちりの如ごとし

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○渭水：関中を東流し黄河に繋がる川。○寂寂：もの寂しくひっそりしたさま。

★ 桃源洞

桃源洞

唐 李羣玉

我到瞿真上昇處
山川四望使人愁
紫雲白鶴去不返
唯有桃花溪水流

我は到る 瞿真 上昇の処
山川を四望すれば 人を使って愁えしむ
紫雲 白鶴 去りて返らず
唯だ 桃花 溪水の 流るる有るのみ

【語釈】

○桃源洞：湖南省桃源県西南の桃源山の下にある洞、秦人洞ともいう。○瞿真：唐の時代の人で、桃源山に昇って羽化登仙したと言われる。○紫雲：紫色の瑞雲。

★ 二妃廟

二妃廟

唐 高駢

帝舜南巡去不還
二妃幽怨水雲間
當時珠淚知多少
直到如今竹尚斑

帝舜 南巡し 去りて還らず
二妃 幽怨す 水雲の間
当時の珠涙 知んぬ多少ぞ
直ちに 如今に到りて 竹尚お斑なり

【語釈】

○二妃廟：湘妃廟、堯帝の娘で舜帝の妃となり、舜帝が死去した後、湘水に入る水した娥皇、女英を祀る廟、君山にある。○南巡：南方に巡幸すること。○二妃：娥皇と女英。○幽怨：非常に悲しむ。○如今：現在。○竹尚斑：斑竹のこと、娥皇と女英の涙によって斑になったとされる。

★ 嚴陵釣臺

嚴陵の釣台げんりょう ちようだい

唐 黃滔

終向煙霞作野夫

終つひに煙霞えんかに向いて野夫むかと作りな

一竿竹不換簪裾

一竿いつかんの竹簪裾しんきよに換えず

直鉤猶逐熊羆起

直鉤ちよくこう猶なほお熊羆ゆうひを逐おいて起おこり

獨是先生真釣魚

獨ひとり是れ先生真まことに魚いしを釣つる

【語釈】

○嚴陵：嚴光、後漢の光武帝の幼なじみであったが、光武帝の再三の招奇を拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところが嚴子陵釣臺といわれる。○野夫：隱棲者。○簪裾：貴人の服装。○直鉤：真つ直ぐな針、太公望呂尚が用いた。○熊羆：熊。○先生：嚴光のこと。

★ 長城

長城

唐 汪遵

秦築長城比鐵牢

秦 長城を築つくいて鐵牢てつろうに比ひす

蕃戎不敢過臨洮

蕃戎ばんじゆう敢あえて臨洮りんたうを過すらなず

焉知萬里連雲勢

焉いずんぞ知らん万里連雲れんうんの勢いき

不及堯階三尺高

及およばず堯階ぎようかい三尺の高たかきに

【語釈】

○蕃戎：野蛮な異民族。○臨洮：甘肅省定西市あたり。○堯階：堯帝の宮殿。
（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★桐江

桐江

唐 汪遵

光武重興四海寧

光武 重興し 四海寧し

漢臣無不受浮榮

漢臣 浮榮を受けざるは無し

嚴陵何事輕軒冕

嚴陵 何事ぞ 軒冕を軽んじ

獨向桐江釣月明

ひとり 桐江に向いて 月明に釣るとは

【語釈】

○桐江：錢塘江の桐廬県の部分。○光武：後漢の開祖光武帝。○重興：王莽の篡奪から後漢を復興させたこと。○浮榮：虚栄。○嚴陵：嚴光、後漢の光武帝の幼なじみであったが、光武帝の再三の招奇を拒否して隱棲生活を送った。○軒冕：高位高官。

★梁寺

梁寺

唐 汪遵

立國從來爲戰功

国を立つるは 従来 戦功の為なり

一朝何事却談空

一朝 何事ぞ 却って空を談ず

臺城兵匪無人敵

台城 兵匪って 人敵無く

閑臥高僧滿梵宮

閑臥の高僧 梵宮に満つ

【語釈】

○梁寺：六朝の梁の時代の寺。○立國：建国。○一朝：ある日。○臺城：六朝時代の南朝の都。南京。○梵宮：仏寺。

★ 汴河懷古

汴河懷古

唐 皮日休

盡道隋亡爲此河
至今千里賴通波
若無水殿龍舟事
共禹論功不較多

今に至りて千里通波に頼る
若し水殿龍舟の事無くんば
禹と共に功を論じ多くを較べず

【語釈】

○汴河：隋の煬帝が開削した運河、広済渠。○通波：流水。水路の便。○水殿龍舟：帝王の乗る龍をかたどった豪華な巨船。○禹：夏朝の創始者、治水工事に成功し、舜から禪讓を受けた。

★ 長城

長城

唐 胡曾

祖舜宗堯自太平
秦皇何事苦蒼生
不知禍起蕭牆內
虛築防胡萬里城

祖舜宗堯自ら太平
秦皇何事ぞ蒼生を苦しめる
知らず禍の蕭牆の内に起るを
虚しく築く防胡万里の城

【語釈】

○祖舜：舜帝。○宗堯：堯帝。○秦皇：秦の始皇帝。○蒼生：人民。○蕭牆：垣根。○防胡：異民族の侵入を防ぐ。

★鳥江

鳥江

唐 胡曾

争帝圖王勢已傾
 帝を争い 王をはか図り 勢いきおい 已に傾く

八千兵散楚歌聲
 八千の兵 散じ 楚歌の聲

烏江不是無船渡
 烏江 是れ 船渡せんと 無からざるに

耻向東吳再起兵
 東吳とうごに向いて 再び兵を起こすを耻はず

【語釈】

○鳥江：安徽省馬鞍山市和県烏江鎮付近を流れる川。項羽最後の地。○船渡：舟で渡る手段。○東吳：蘇州地方一帯。

★金谷園

金谷園

唐 胡曾

一自佳人墜玉樓
 一たび佳人 玉樓を墜ちて自り

繁華東逐洛河流
 繁華 東に 洛河らくがを逐おいて流る

唯餘金谷園中樹
 唯だ余す 金谷園中の樹

殘日蟬聲送客愁
 殘日 蟬聲 客愁かくしゆうを送る

【語釈】

○晋の石崇が金穀澗に作った園、「緑珠墜楼」（蒙求）で知られる。○佳人：緑珠。○洛河：河南省洛陽市洛河。○殘日：夕陽。○客愁：旅の愁い。

★望仙臺

仙台を望む

唐 羅 鄴

千山壘土望三山

千山土を壘るいして三山を望む

雲鶴無蹤羽衛還

雲鶴うんかく蹤あと無く羽衛還うえいる

若説神仙求便得

若もし神仙しんせん求めて便うち得と説かば

茂陵何事在人間

茂陵もりよう何事ぞ人間じんかんに在らん

【語釈】

○三山：中国の伝説上の神山。渤海湾中にあるといわれる蓬萊山、方丈山、瀛洲（山の三山をいう。漢の武帝などが使者を出して海上にその神山を探させ、不死の薬を得ようとした。○雲鶴：鶴。○無蹤：消え去ること。○羽衛：帝王の護衛隊。○茂陵：漢の武帝の陵墓、陝西省興平県東北にある。

★陳宮

陳宮

唐 羅 鄴

白玉尊前紫桂香

白玉尊前紫桂香しけいかんばし

迎春閣上燕雙雙

春を迎え閣上燕そつそつ双々

陳王半醉貴妃舞

陳王半ば酔い貴妃舞い

不覺隋兵夜渡江

覺えず隋兵夜江を渡るを

【語釈】

○陳宮：南朝最後の陳の後主の宮殿。○尊前：酒宴。○紫桂：紫色の花が咲く桂。○雙雙：…つがいになつてとぶ。○陳王：陳の後主。○貴妃：張麗華、孔貴人。

★ 汴河懷古

汴河懷古

唐 羅 鄴

煬帝開河鬼亦悲
生民不獨力空疲
至今嗚咽東流水
似向清平怨昔時

煬帝 河を開きて 鬼も亦た悲しむ
生民 独力 空しく疲るるのみならず
今に至って 嗚咽す 東流の水
清平に向いて 昔時を怨むに似たり

【語釈】

○汴河：隋の煬帝が開削した運河、広済渠。○煬帝：隋の煬帝。○生民：人民。○清平：太平の世。

★ 焚書坑

焚書坑

唐 章 碣

竹帛煙消帝業虛
關河空鎖祖龍居
坑灰未冷山東亂
劉項元來不讀書

竹帛 煙消えて 帝業虚し
関河 空しく鎖ざす 祖龍の居
坑灰 未だ冷めざるに 山東乱る
劉項 元來 書を読まず

【語釈】

○焚書坑：秦の始皇帝が儒教の書物を焼き捨てた穴。○4竹帛：竹や帛の書籍。○銷：「消」に同じ。○帝業：秦の始皇帝による天下統一の事業。○関河：函谷関と黄河。○祖龍：秦の始皇帝。○居：始皇帝のいた咸陽の宮殿を指す。○坑灰：坑の中で焼いた書物の灰。○山東：函谷関の東方。○劉項：劉邦と項羽。

(参考文献) 『三体詩』

★ 鄧艾廟

鄧艾廟 とうがいびやう

唐 唐彦謙

昭烈遺黎死尚差

昭烈しょうれつの遺黎いれい 死して尚お差す

揮刀斫石恨譙周

刀を揮ふるい 石を斫きり 譙周しょうしゅうを恨む

如何千載留遺廟

如何いかんぞ 千載いびやう 遺廟いびやうに留まるとは

血食巴山伴武侯

血食ほくじき 巴山はざん 武侯ぶこうに伴う

【語釈】

○鄧艾：魏の武將。蜀に攻め入り成都を陥落させた。○昭烈：劉備の諡。○遺黎：滅ぼされた国の民。○譙周：蜀の劉禪の臣下で劉禪に降伏を勧めた。○血食：祭祀用の食品。○巴山：蜀の山。○武侯：諸葛孔明の諡。

★ 仲山

仲山

唐 唐彦謙

千載遺蹤寄薜蘿

千載の遺蹤いしやう 薜蘿へいらに寄る

沛中鄉里漢山河

沛中の郷里 漢の山河

長陵亦是閑丘隴

長陵 亦た是れ 閑丘隴かんきゅうろう

異日誰知與仲多

異日 誰か知る 仲ともに与よの多きを

【語釈】

○仲山：漢の高祖兄の劉仲の隱居したところ。○遺蹤：遺跡。○薜蘿：かずら。つる草の一種。○沛中：高祖の故郷。○長陵：高祖の墓。○丘隴：墳墓。○異日：従前。○仲：劉仲。○與：仲間。

華清宮

華清宮 かせいきやう

唐 吳融

四郊飛雪暗雲端

四郊の飛雪 雲端に暗し

唯此宮中落旋乾

唯だ此れ 宮中に落ちて旋り乾く

綠樹碧簷相掩映

綠樹 碧簷 相掩いて映じ

無人知道外邊寒

人の道する 外辺の寒きを知る無し

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○四郊：都土の四方の郊外。○碧簷：緑色の軒。

★華清宮

華清宮

唐 吳融

漁陽烽火照函關

漁陽の烽火 函関を照し

玉輦忽忽下此山

玉輦 忽々として 此の山を下る

一曲羽衣聽不盡

一曲の羽衣 聴いて尽きず

至今遺恨水潺潺

今に至りて 遺恨水 潺々たり

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○漁陽烽火：北京市付近で蜂起した安祿山軍の烽火。○函關：函谷関。○玉輦：皇帝の車。○忽忽：慌ただしいさま。○羽衣：霓裳羽衣の曲。楊貴妃が舞を得意とした。○潺潺：浅い水の流れるさま。さらさら。

★ 過金陵

金陵を過ぎる

唐 韋 莊

江雨霏霏江草齊

江雨 霏々として 江草 齊し

六朝如夢鳥空啼

六朝 夢の如く 鳥 空しく啼く

無情最是臺城柳

無情なるは 最も是れ 台城の柳

依舊煙籠十里堤

旧に依りて 煙は籠む 十里の堤

【語釈】

○金陵圖：金陵（南京）の風景画を見て、その印象を詠んだ詩。○江雨：長江に降る雨。
○霏霏：雨や雪などが絶え間なく降りしきる様子。○江草：川辺の草。○齊：一面に生は
え揃って茂っている様子。○六朝：建康を都とした六つの王朝。○如夢：夢のように消え
去ってしまったこと。○台城：玄武湖のほとりにあった宮城、建康宮。○依旧：昔のまま
に。昔ながらに。○煙籠：緑のしだれ柳が芽吹いて、春雨にけぶって見える様子。○十里
堤：玄武湖の十里あまりの長い堤。

（参考文献）

『唐詩三百首』

★ 繡嶺宮詞

繡嶺宮詞

唐 李 洞

春草萋萋春水綠

春草 萋々として 春水 緑なり

野棠開盡飄香玉

野棠 開き尽くして 香玉を 飄す

繡嶺宮前鶴髮翁

繡嶺宮前 鶴髮の翁

猶唱開元太平曲

猶お唱う 開元 太平の曲

【語釈】

○繡嶺宮：河南省陝県にあった唐の高宗が作った宮殿。○萋萋：草木の盛んに茂るさま。
○野棠：野生の海棠。○香玉：野棠の花の形容。○鶴髮：白髪頭。○開元太平曲：玄宗が
開元年間にこの地に御幸して作った曲。

★ 隋堤柳

隋堤の柳

唐 江 爲

錦纜龍舟萬里來
錦纜 龍舟 万里來る
醉郷繁盛忽塵埃
醉郷の繁盛 忽ち塵埃
空餘兩岸千株柳
空しく余す 兩岸 千株の柳
雨葉風花作恨媒
雨葉 風花 恨媒を作す

【語釈】

○隋堤：隋の煬帝が作った運河の堤。○錦纜：錦のともづな。○龍舟：龍の飾りのある大船。○醉郷：酔った気分。○恨媒：恨みを発生する元。

★ 過金陵

金陵を過ぐ

唐 包 佶

玉樹歌終王氣收
玉樹 歌終りて 王氣収まる
鴈行高送石城秋
鴈行 高く送る 石城の秋
江山不管興亡事
江山は管せず 興亡の事
一任斜陽伴客愁
一任す 斜陽の 客愁に伴うに

【語釈】

○金陵：南朝の首都、南京。○玉樹：「玉樹後庭花」。南朝の陳の後主が作った詩。亡国の歌曲。○王氣：帝王の居る所に立つ瑞気。○石城：石頭城。南京市清涼山にあった。○江山：川と山。自然。○客愁：旅の愁い。

★ 闔閭城懷古

闔閭城懷古

唐 劉 瑤

五湖春水接遙天
國破君亡不記年
唯有妖娥曾舞處
古臺寂寞起愁煙

五湖の春水 遙天に接す
国破れ君亡びて年を記せず
唯だ 妖娥の 曾て舞う処有り
古台 寂寞として 愁煙起る

【語釈】

○闔閭城：江蘇省蘇州市の別称。○五湖：太湖のこと。○遙天：遙かな空。○妖娥：なまめかしい美人。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○愁煙：愁いを含んだ煙波。

★ 題巫山神女廟

巫山の神女の廟に題す

宋 吳簡言

惆悵巫娥事不平
當時一夢是虛成
只因宋玉閑唇吻
流盡巴江洗不清

惆悵す 巫娥事 平かならざるを
當時の一夢 是れ 虚成
只だ 宋玉の 閑唇吻に因りて
巴江を流尽して 洗うも 清からず

【語釈】

○巫山：重慶市巫山県と湖北省の境にある名山。長江が山中を貫流して、巫峡を形成する。楚の宋玉の「高唐賦」（『文選』所収）序に、楚の懷王が高唐（楚の雲夢沢にあった台館）に遊んだ際、疲れて昼寝していると、夢の中に「巫山の女」と名乗る女が現れて王の寵愛を受けた、という記述がある。○惆悵：嘆き悲しむ。○巫娥：前記巫山の女。○虚成：空しくなる。○宋玉：「高唐賦」を書いた晉の宋玉。○閑唇吻：閑かな言詞。○巴江：重慶市の巴江。

★ 淮陰廟

淮陰廟 わいいんびやう

宋

黄好謙

築壇拜日恩雖厚

壇を築き 日を拝し 恩厚きと 雖も いへん

躡足封時慮已深

足を躡み 封する時 慮已に深し りよ

隆準早知同鳥喙

隆準 早に 鳥喙に同じきを知らば りゆうじゆん つと ちようかい

將軍應有五湖心

將軍 応に 五湖の心有るべし

【語釈】

○淮陰廟：漢の高祖、劉邦の將軍であつた韓信の廟。○築壇拜日：劉邦が韓信を將軍に取り立てたとき、盛大な儀式を行った。○躡足封時：劉邦は張良の勧めにより、地団駄を踏みながら、韓信に大領を与えた。○隆準：漢の高祖。○鳥喙：越王勾踐。苦勞を共には出来るが樂を共には出来ないとされた。○將軍：韓信。○五湖心：范蠡が五湖に浮かんで去つたように隠棲すること。

★ 題歌風臺

歌風臺に題す かふうだい

宋

張方平

落魄劉郎作帝歸

落魄 劉郎 帝と作りて歸る らくはく

樽前感慨大風詩

樽前 感慨 大風の詩

才如信越猶蒞醢

才 信越の如きも 猶お蒞醢 しんえつ しょうかい

安用思他猛士爲

安んぞ用いん 他の猛士を思ふことを爲すを いずく

【語釈】

○歌風臺：漢の高祖が故郷に帰り「大風歌」を歌つた台。○落魄：落ちぶれること。○劉郎：劉邦。○信越：韓信と彭越。○蒞醢：処刑した後、死者を塩漬けにすること。実際に蒞醢されたのは彭越だけであるが、『宋史列伝・梁周翰』に韓信と彭越、両者との記載がある。

★釣臺

釣臺ちようだい

宋 范仲淹

漢包六合網英豪

漢りくごう六合を包み英豪を網にす

一箇冥鴻惜羽毛

一箇の冥鴻めいこう羽毛を惜しむ

世祖功臣三十六

世祖の功臣 三十六

雲臺爭似釣臺高

雲台いかに争か似ん釣台ちようだいの高きに

【語釈】

○釣臺：嚴子陵釣臺。後漢の光武帝の幼なじみであった嚴光が光武帝の再三の招きを拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところがといわれる台。○漢：後漢の光武帝。○六合：天地四方。○英豪：英雄豪傑。○冥鴻：高く飛ぶ鴻雁。志の高い人。嚴光。○世祖：初代皇帝。光武帝。○三十六：数の多いこと。○雲臺：宮中の高台。光武帝の時に群臣の集まるところ。

★鶏鳴臺

鶏鳴台けいめいだい

宋 范鎮

古人惟恃衆心城

古人た惟だ恃す衆心城しゅうしんじょう

何事秦皇苦好兵

何事ぞ秦皇はなは苦だ兵を好む

本設函關禁奸詐

本もと函關を設け奸詐かんさを禁ず

不知半夜有雞鳴

知らず半夜 雞鳴有るを

【語釈】

○雞鳴臺：不祥。函谷関に設けられた物？○衆心城：多くの人が集まれば城のように堅固となること。○秦皇：秦の始皇帝。○函関：函谷関。○奸詐：ごまかし。○半夜有雞鳴：「鶏鳴狗盗」の故事。

★ 嘲范蠡

范蠡を嘲う

宋 鄭獬

千重越甲夜城圍

千重の越甲 夜城 囲む

宴罷君王醉不知

宴罷んで 君王 醉を知らず

若論破吳功第一

若し 吳を破る功 第一を論ずれば

黄金只合鑄西施

黄金 只だ合に 西施を鑄すべし

【語釈】

○范蠡：越王勾踐軍師。○越甲：越の兵士。○君王：越王勾踐。○合：「まさにくすべし」と読み、「くしなければならぬ」「当然くすべきである」の意。○西施：越から呉に送られ呉王夫差をおぼれさせた絶世の美女。

★ 金陵即事

金陵即事

宋 王安石

結綺臨春歌舞地

結綺 春に臨む 歌舞の地

荒蹊狹巷兩三家

荒蹊 狹巷 兩三家

東風漫漫吹桃李

東風 漫々として 桃李を吹く

非復當時仗外花

復た 当時の 仗外の花に非ず

【語釈】

○金陵：南京。南北朝時代の六朝の都。○結綺閣：南朝陳の後主が建てた楼閣。○荒蹊：荒れた小道。○狹巷：狭いちまた。○漫漫：広く遙かなさま。○仗外：？

★驪山

驪山りざん

宋 蘇軾

功成惟欲善持盈
可歎前王侍太平
辛苦驪山山下土
阿房纔廢又華清

功成りて 惟だ善く 盈を持せんと欲す
歎すべし 前王 太平を侍むを
辛苦す 驪山 山下の土
阿房 纔に廃すれば 又華清

【語釈】

○驪山：陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。○功成：開元の治。○盈：最盛期。○前王：玄宗皇帝。○阿房：阿房宮。秦の始皇帝が建てた大宮殿。○華清：華清宮。玄宗の冬の宮殿。長恨歌で名高い。

★驪山

驪山りざん

宋 蘇軾

海中方士覓三山
萬古明知去不還
咫尺秦陵是商鑑
朝元何必苦躋攀

海中の方士 三山を覓む
萬古明かに知る 去りて還らざるを
咫尺の秦陵は 是れ商鑑
朝元 何ぞ必ずしも 苦に躋攀せん

【語釈】

○驪山：陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。○海中方士：徐福。○三山：海上にあると言われる伝説中の三神山。仙人が住み不老長寿の薬があるとされる。○咫尺：極く近く。○商鑑：殷鑑不遠。自分のいましめとなるものは近くにあること。○秦陵：秦始皇帝の陵。○朝元：朝元閣。驪山にあった楼閣で、玄宗皇帝が玄元皇帝（老子）に会つて、降聖閣と改めた。○躋攀：登攀。

★長安覽古

長安覽古

宋 張舜民

黄鶴高飛去不還

黄鶴 高く飛び 去りて還らず

百年世事奕碁間

百年の世事 奕碁の間

沈香亭畔千株石

沈香亭畔 千株の石

散與人間作假山

与して人間に散じて 假山と作る

【語釈】

○黄鶴：黄色いおとり。○世事：世の中の出来事。○奕碁：囲碁。○沈香亭：長安の興慶宮にあった亭。牡丹の名所で知られ、玄宗と楊貴妃が花見を行ったこと、李白がこれを題材に詩を詠い、それを李龜年が歌にしたというエピソードで知られる。○與：一緒になつて。

★秦人洞

秦人洞

宋 潘輿嗣

秦人當日避風煙

秦人 当日 風煙を避く

自種桑麻老洞天

自ら 桑麻を種う 老洞天

綠竹橫溪鷄犬靜

綠竹 溪に横わりて 鷄犬静かなり

不知門外漢山川

知らず 門外 漢の山川

【語釈】

○秦人洞：桃源洞。湖南省桃源県西南桃源山の下にある。○秦人：秦の時代の人。○風煙：戦乱。○老洞天：仙人世界。桃源郷。

★城山

城山

宋 華 鎮

兵家制勝舊多門

兵家勝を制するに旧より門多し

贈答雍容亦解紛

贈答雍容亦た紛を解く

緩報一雙文錦鯉

緩報す一雙の文錦鯉

坐歸十萬水犀軍

坐歸す十萬水犀の軍

【語釈】

○城山：浙江省紹興市にある山。呉王闔閭が越に侵攻したとき越王句踐が立てこもった山。○制勝：勝利すること。○舊：昔から。○多門：方法が沢山ある。○贈答：呉王闔閭が鹽米の食事を贈り、越王句踐は鯉を二匹取って、呉王に返礼したこと。○雍容：やわらぎやすらかなさま。○解紛：紛争を解く。○緩報：諸侯の間の交流。○一雙：ひとつがい。○文錦鯉：錦鯉。○坐歸：呉の軍が囲みを解いて引き揚げたこと。○水犀軍：犀の皮で覆った水軍。

★遊華清留題

華清に遊び留題す

宋 王 瑜

廢宇頽垣不復新

廢宇頽垣復び新ならず

朝元輦道盡荆榛

朝元輦道尽く荆榛

惟餘一派温湯水

惟だ余す一派の温湯水

長與行人洗路塵

長く行人の与に路塵を洗う

【語釈】

○華清：華清宮。陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○留題：名所古跡を遊覧してその地のことを詠った詩。○廢宇：廢屋。○頽垣：崩れた垣。○朝元：朝元閣。驪山にあった宮殿。○輦道：皇帝の手押し車の通る道。○荆榛：叢生灌木。荒野の形容。○行人：旅人。

★題華清宮

華清宮に題す

宋 黄裳

東別家山十六程

家山に東別し 十六程

曉來残月到華清

曉來ぎょうらい 残月 華清に到る

朝元閣下西風急

朝元閣ちようげんかく下 西風急なり

都入長楊作雨聲

都すべて 長楊に入りて 雨声と作る

【語釈】

○華清宮：陝西省臨潼県の驪山の麓にある宮殿、「長恨歌」で名高い。○家山：故郷。○十六駅分の道のり百六十里。○曉來：曉になってから。○朝元閣：驪山にあった宮殿。

★驪山

驪山りせん

宋 杜常

漁陽烽燧起雲間

漁陽の烽燧 雲間に起る

玉輦蒼黃下此山

玉輦 蒼黃として 此の山を下る

何事君王自神武

何事ぞ 君王 自ら神武あるに

區區南渡鹿頭關

區々くくとして 南に渡る 鹿頭關ろくとうかん

【語釈】

○驪山：陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。○漁陽烽燧：北京付近から起こった戦乱。安史の乱。○玉輦：皇帝の手押し車。○蒼黃：慌ただしく。○君王：皇帝。○神武：神明のような武徳。○區區：努力するさま。○鹿頭關：四川省徳陽市鹿頭山にある関所。

★ 沿流館中得二絶句

沿流館中二絶句を得たり

宋 蘇軾

淮西功業冠吾唐

淮西の功業 吾が唐に冠たり

吏部文章日月光

吏部の文章 日月の光

千載斷碑人膾炙

千載の断碑 人膾炙す

不知世有段文昌

知らず世に段文昌の有るを

【語釈】

○沿流館：不祥。○淮西功業：憲宗が淮南西道の呉元済を滅ぼした事。○吏部文章：淮西功業を記した韓愈の文章。○断碑：韓愈の文を記した碑のかけら。○段文昌：唐び齊州臨淄の人、中書侍郎、同中書門下平章事となる。韓愈の文を改作したとされる。

★ 題嚴子陵釣臺

嚴子陵の釣台に題す

宋 陳貫道

足加帝腹似癡頑

足 帝腹に加う 痴頑に似たり

詎肯折腰求好官

詎んぞ 肯て腰を折り 好官を求めんや

明主莫將臣子待

明主 臣子を將つて 待すること莫かれ

故人只作友朋看

故人 只だ 友朋の看を作す

【語釈】

○嚴子陵釣臺：後漢の光武帝の幼なじみであった嚴光が光武帝の再三の招奇を拒否して隠棲生活を送った。釣りをしたところがといわれる台。○足加帝腹：嚴光が足を光武帝の腹に乗せて熟睡したこと。○癡頑：愚かでかたくななこと。○折腰：こびへつらうこと。陶淵明の故事。○明主：光武帝。○故人：嚴光。

★ 汴京紀事

汴京紀事

宋 劉子翬

空嗟覆鼎誤前朝 空しく嗟す 覆鼎 前朝を誤るを
骨折人間罵未銷 骨折れて 人間 罵 未だ銷せず
夜月池臺王傳宅 夜月 池台 王傳の宅
春風楊柳太師橋 春風 楊柳 太師橋

【語釈】

○汴京…河南省開封市。○紀事…事実の経過を記すこと。○覆鼎…国を滅ぼすこと。ここでは北宋が金に破れた「靖康の変」。○前朝…前の時代の朝廷。ここでは北宋。○骨折…「搜韻」に「骨朽」とあり。死後長時間が経って。「靖康の変」より時間が経って。○王傳…三公の一つ。○太師橋…不祥。

★ 汴京紀事

汴京紀事

宋 劉子翬

萬炬銀花錦繡圍 万炬の銀花 錦繡 囲む
景龍門外軟紅飛 景竜門外 軟紅 飛ぶ
淒涼但有雲頭月 淒涼 但だ 雲頭の月のみ有りて
曾照當時步輦歸 曾て照らす 当時 步輦の帰るを

【語釈】

○汴京…河南省開封市。○紀事…事実の経過を記すこと。○萬炬…数多くの蠟燭。○銀花…蠟燭の灯りのこと。○錦繡…あやにしき。○景竜門…不祥。汴京の城門の一つと思われる。○軟紅…柔らかな花びら。○淒涼…物寂しいさま。○步輦…人が引く車。

★ 泊釣臺

釣台ちやうだいに泊す

宋 毛 幵

洲渚寒雲薄暮天

洲渚しゅうちよの寒雲 暮天ぼてんに薄し

蕭蕭燈火落帆邊

蕭々しやうしやうたる灯火 落帆らくはんの辺

嚴陵灘下孤舟遠

嚴陵灘げんりやうたんか下 孤舟遠く

一夜歸心聽雨眠

一夜歸心 雨を聴いて眠る

【語釈】

○釣臺：嚴子陵釣臺。後漢の光武帝の幼なじみであった嚴光が光武帝の再三の招奇を拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところがといわれる台。○洲渚：中洲。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○落帆：帆を下ろす舟。○嚴陵灘：釣臺のあるところの早瀬。○歸心：故郷に帰りたいと思う心。

★ 項王廟

項王廟

宋 許彦國

千歲興亡莫浪愁

千歳の興亡 浪愁する莫かれ

漢家功業亦荒丘

漢家の功業 亦また荒丘

空餘原上虞姬草

空しく余す 原上 虞姬の草

舞盡春風未肯休

舞い尽す 春風 未だ肯えて休やまず

【語釈】

○項籍：項羽。○浪愁：無駄に愁う。○原上：草原。○虞姬草：虞美人草。

★ 黄陵廟

黄陵廟こうりょうびやう

宋 陸士規

東風吹草綠離離
東風草を吹き 緑離々たり
路入黄陵古廟西
路は入る 黄陵 古廟の西
帝子不知春又去
帝子は知らず 春又去るを
亂山無主鷓鴣啼
乱山主無く 鷓鴣啼く

【語釈】

○黄陵廟：舜の二妃、娥皇と女英の廟。湖南省湘陰県の北にある。○東風：春風。○離離：草木が生い茂っているさま。○帝子：娥皇と女英。

★ 虞姬墓

虞姬墓ぐき

宋 范成大

劉項家人總可憐
劉項の家人 総て憐われむべし
英雄無策庇嬋娟
英雄 策の嬋娟を 庇する無し
戚姬葬處君知否
戚姬 葬る処 君知るや否や
不及虞兮有墓田
及ばず 虞兮 墓田有るに

【語釈】

○虞姬：項羽の愛妾虞美人。○劉項：劉邦と項羽。○英雄：劉邦と項羽。○庇：かばう。○嬋娟：美人。○戚姬：劉邦の側室の戚夫人。劉邦の死後、呂后により惨殺された。墓はない。○虞兮：虞美人のこと。「垓下の歌」を踏まえる。○墓田：墳墓の地。

★雷萬春墓

雷万春墓

宋

范成大

九隕元身不隕名

九隕くいんの元身げんげん名を隕いんせず

言言千載氣如生

言々げんげん千載せんざい氣生きせいの如し

欲知忠信行蠻貊

忠信ちんしん蠻貊ばんばくに行くを知らんと欲す

過墓胡兒下馬行

墓を過ぐこじ胡兒こじ馬を下りて行く

【語釈】

○雷萬春：唐の武将。唐の名將の張巡配下として南霽雲とともに活躍した。○九隕：九死。○元身：美德の身。○不隕名：名は死なない。○忠信：忠誠信実。○蠻貊：四方の異民族。○胡兒：異民族の人。

★宣德樓

宣德樓

宋

范成大

曉闕叢霄舊玉京

曉闕ぎょうけつ叢霄そうしやう旧玉京

御牀忽有犬羊鳴

御床ごじょう忽ち犬羊の鳴く有り

他年若作清宮使

他年たねん若し清宮の使を作さば

不挽天河洗不清

天河てんがを挽ひかず洗ひいて清からず

【語釈】

○宣德樓：聖徳を顕す樓。○曉闕：皇宮の大門。○叢霄：皇帝の居所。○玉京：帝都。○御床：皇帝の坐臥具。○他年：未来のある年。○清宮：清涼な宮室。○天河：銀河。

★ 藺相如墓

藺相如の墓

宋 范成大

玉節經行虜障深
馬頭釃酒奠疎林
茲行壁重身如葉
天日應臨慕藺心

玉節の經行 虜の障に深く
馬頭 酒を釃しみて 疎林に奠る
茲に行きて 壁は重く 身は葉の如し
天日 応に臨むべし 藺を慕う心に

【語釈】

○戦国時代の末期に趙の恵文王の家臣。「完璧」や「刎頸の交わり」の故事で知られる。
○玉節：玉で出来た割り符。○經行：旅路。○虜障：金の国の寨。○馬頭：馬の側。○疎林：疎らかな林にある藺相如の墓。○壁：自分の任務を藺相如の壁になぞらえた。○天日：皇帝。○藺：藺相如。

★ 長沙王墓

長沙王の墓

宋 范成大

英雄轉眼逐東流
百戦工夫土一抔
蕎麥茫茫花似雪
牧童吹笛上高丘

英雄 眼を転じて 東流を逐う
百戦の工夫 土一抔
蕎麥 茫茫として 花雪に似たり
牧童 笛を吹いて 高丘に上る

【語釈】

○長沙王：三国志時代の呉の孫策。○英雄：孫策。○逐東流：空しく世を去ることの喩え。○蕎麥：そば。○茫茫：広大なさま。ひろびろとしたさま。

★ 楚城

楚城

宋 陸游

江上荒城猿鳥悲

江上の荒城 猿鳥悲し

隔江便是屈原祠

江を隔つるは 便ち是れ 屈原の祠

一千五百年間事

一千五百年間の事

只有灘聲似舊時

只だ灘聲の 旧時に似たる有るのみ

【語釈】

○楚城：春秋時代の楚の都。江西省九江市廬山区。

★ 慈恩塔

慈恩塔

宋 陸游

憶在長安爛漫遊

憶う 長安に在りて 爛漫として遊ぶを

大明宮闕與雲浮

大明宮闕 雲と浮ぶ

今朝偶上慈恩塔

今朝 偶ま上る 慈恩塔

北望茫茫禾黍秋

北望すれば 茫茫たり 禾黍の秋

【語釈】

○慈恩塔：長安にある慈恩寺の大雁塔。○爛漫：はなやかなさま。○大明宮闕：長安城の北にある大明宮の城門。○茫茫：広大なさま。広々としたさま。○禾黍：稲とキビ。

★ 釣臺

釣臺ちやうだい

宋 戴復古

萬事無心一釣竿

万事無心 一釣竿

三公不換此江山

三公も換えず 此の江山

當初誤識劉文叔

当初誤りて識る 劉文叔りゅうぶんしやく

惹起虛名滿世間

虚名を惹起して 世間に満たしむ

【語釈】

○釣臺：嚴子陵釣臺。後漢の光武帝の幼なじみであった嚴光が光武帝の再三の招きを拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところがといわれる台。○釣竿：釣り竿。○三公：最高官である太尉、司徒、司空。○劉文叔：光武帝。

★ 保應廟

保應廟

宋 董太初

廟食空山八百年

空山に 廟食びやうしょくして 八百年

衣冠猶是李唐前

衣冠猶お是れ 李唐りとうの前

扞河十里垂楊柳

扞河べんが 十里 垂楊柳

何以松陰數畝田

何を以ってか 松陰 数畝の田

【語釈】

○隋の諸王を祀った廟。○廟食：供えられた物を食べる。○李唐：唐王朝。○扞河：隋の煬帝が開削した運河。兩岸に柳を植えた。

★ 釣臺

釣臺ちやうたい

宋 林洪

三聘慇懃起富春

三聘さんへい 慇懃いんきん に富春ふしゅん に起く

如何一宿便辭君

如何いかん 一宿便ち君に辞す

早知閑脚無伸處

早つとに知るは 閑脚 伸ばす処無きを

只合青山卧白雲

只ただ合あに 青山 白雲に卧すべし

【語釈】

○釣臺：嚴子陵釣臺。後漢の光武帝の幼なじみであった嚴光が光武帝の再三の招きを拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところがといわれる台。○三聘：賢人を二度も三度も訪ねて招聘すること。○富春：富春江。浙江省富陽県にある。釣臺のある川。○閑脚無伸處：足を伸ばすところが無くて、光武帝の腹に足を載せたこと。○合：「まさにすべし」と読み、「しななければならない。」「当然くすべきである」の意。

★ 題梅壇

梅壇に題す

宋 呂防

封事悠悠即掛冠

封事ふうじ 悠悠ゆうゆう として 即ち冠を掛く

蒼烟古木鎖空壇

蒼煙そうえん 古木 空壇を鎖とざす

當時不識蓬萊客

當時 識しらず 蓬萊ほうらいの客かく

祇作南昌一尉看

祇ただ 作な南昌なんしやう 一尉の看かんを作す

【語釈】

○梅壇：漢の梅福（『漢書』卷六十七、梅福伝）を祀った壇。○封事：密封した奏書。○悠悠：無関心なさま。○掛冠：辞職すること。○蓬萊：蓬萊山。東海中にあると言われる三仙山の一つ。○蓬萊客：梅福が仙人になったので、こう呼ばれる。○南昌：江西省南昌市。○尉：県令の下の役職。梅福は、南昌の尉を辞めて仙人になった。

★石湖

石湖

宋 毛珣

一片湖光接薜蘿 一片の湖光 薜蘿に接す
 功名餘事屬吟多 功名余事吟多きに属す
 至今魚鳥皆堪敬 今に至りて魚鳥皆敬に堪えたり
 曾見烏巾照碧波 曾て見る烏巾碧波を照すを

【語釈】

○石湖：江蘇省蘇州市西南にある湖。范成大が晩年此の地に住んで皇帝から「石湖」の二字を賜って「石湖居士」と称した。この詩は范成大的ことを詠う。○薜蘿：かずら。○烏巾：隠棲者が被る頭巾。

★滄浪亭

滄浪亭

宋 毛珣

濯纓人去水空寒 濯纓人去りて水空寒し
 事屬明時欲問難 事は明時に属し問わんと欲すれども難し
 日暮客歸園館閉 日暮客は帰り園館閉じ
 鷺鷥飛上石棋盤 鷺鷥飛び上ぐ石棋盤

【語釈】

○滄浪亭：江蘇省蘇州市に存在する名園。詩人の蘇舜欽が蘇州に住み着いて改築し、屈原の詩の「滄浪の水」という魚歌から「滄浪亭」と名づけたといわれる。○濯纓：「漁夫の辞」「滄浪之水濁兮，可以濯吾足。」による。○人：屈原。○明時：政治が清らかだった時代。○園館：滄浪亭。○鷺鷥：さぎ。○石棋盤：文字を四角で囲んだ石碑。杜甫の物だと言われる。

★ 過杭州故宮

杭州の故宮を過ぐ

宋 謝 翱

紫雲樓閣宴流霞

紫雲樓閣 流霞に宴す

今日淒涼佛子家

今日淒涼 仏子の家

殘照下山花霧散

殘照 山を下り 花霧散じ

萬年枝上挂袈裟

萬年枝上 袈裟を挂く

【語釈】

○杭州：浙江省瀕杭州市。○故宮：古い宮殿。○紫雲樓：杭州にあった樓閣。○流霞：たなびく夕焼け雲。○淒涼：物寂しい。○佛子家：仏教寺院。○殘照：夕陽が沈んだ後の餘暉。○萬年枝：樹木の名前。

★ 過杭州故宮

杭州の故宮を過ぐ

宋 謝 翱

隔江風雨動諸陵

江を隔つる 風雨 諸陵に動く

無主園池草自春

主無き園池 草 自らなり

聞説就中誰最泣

聞説く 中就く 誰か最も泣く

女冠猶有舊宮人

女冠 猶お 旧宮人 有りと

【語釈】

○杭州：浙江省瀕杭州市。○故宮：古い宮殿。○聞説：言うところによれば。○就中：とりわけ。そのなかでも。○女冠：女道士。

★ 流杯池

流杯池りゅうはいち

宋 徐蘭皋

楚王宮闕馬王宮

楚王の宮闕しゅおうきゅうけつ 馬王の宮

惟有樓臺帶舊風

惟だ 樓台の旧風を帯びる有り

屬玉不知興廢事

屬玉ぞくぎよは知らず 興廢の事

雙雙飛入藕花叢

双々そうそうとして飛び入る 藕花ぐかの叢くさむら

【語釈】

○流杯池：五代十国時代の楚の第五代の王である馬希萼が掘った池。湖南省長沙市（馬希萼が都とした）近くにある。○楚王：馬希萼。○宮闕：宮城の門。○馬王：馬希萼。○屬玉：鳴に似た水鳥。○雙雙：つがいになって。○藕花：蓮の花。

★ 梁臺

梁臺りょうだい

金 密璫

汴水悠悠蔡水來

汴水べんすい 悠悠ゆうゆう 蔡水さいすい 來きた

秋風古道野花開

秋風 古道 野花やか 開か

行人驚起田間雉

行人 驚き起おこす 田間でんかんの雉きじ

飛上梁王鼓吹臺

飛びて上る 梁王りょうおうの鼓吹こすい臺だい

【語釈】

○梁臺：漢の梁孝王劉武が築いた台。○汴水：汴河。隋の煬帝が開削した運河。○悠悠：他と関わりなくゆったりしたさま。○蔡水：不祥。○行人：旅人。○梁王：漢の梁孝王劉武。○鼓吹臺：管弦を行った台。

★ 馬嵬

馬嵬ばかい

金 高有鄰

事去君王不奈何
荒墳三尺馬嵬坡
歸來枉為香囊泣
不道生靈淚更多

事去りて 君王 奈何いかんともせず
荒墳 三尺 馬嵬坡ばかい
歸來 枉まげて 香囊かうのうの為に泣く
道いわず 生靈せいれい 涙 更に多きを

【語釈】

○馬嵬：陝西省興平県馬嵬坡。安史の乱で玄宗が蜀に落ち延びる途中、楊貴妃が殺された所。○帰來：帰ってくる。○香囊：香を入れる袋。楊貴妃のこと。○生靈：人民。

★ 滕王閣

滕王閣わおうかく

元 虞集

滕王遺構麗飛臺
不見鳴鑾珮玉聲
惟有當時簷外月
夜深依舊照江城

滕王の遺構 飛臺麗わし
見みず 鳴鑾めいらん 珮玉はいぎよくの聲
惟だ 当時えんがい 簷外えんがいの月のみ有りて
夜深くして 旧に依りて 江城を照らす

【語釈】

○滕王閣：江西省南昌市東湖区滕王閣街道にある樓閣。岳陽の岳陽樓・武漢の黃鶴樓と並んで、江南の三大名樓とされる。○滕王：李元嬰（唐の高祖李淵の二十二男）。滕王閣を作った。○飛臺：高樓の屋根。○鳴鑾珮玉：高官が腰に付ける鈴と帯び玉。王勃「滕王閣」。

★ 彭城雜詠

彭城雜詠 ぼつじょうざつえい

元 薩都刺

亞父墳前春草齊

亞父墳前 あほふんぜん 春草齊 ひと

楚王城上夕陽低

楚王城上 そおうじょうじょう 夕陽低 し

黃鶯不解興亡事

黃鶯 解かず 興亡の事

飛過海棠枝上啼

海棠を飛び過ぎ 枝上に啼く

【語釈】

○彭城：江蘇省徐州市。一時項羽が本拠とした。○雜詠：いろいろな物事を詠じた詩歌。
○亞父：項羽の軍師范增。○楚王：項羽。○興亡：漢楚の興亡。

★ 岳武穆王

岳武穆王 がぶくおウ

元 宋 无

尅復神州指掌間

神州を尅復す かふく 指掌の間 ししょう

永昌陵側詔師還

永昌陵側 えいしょうりょうそく 師を詔して還る ししょう

丹心一片棲霞月

丹心 たんしん 一片 いっぺん 棲霞の月 せいか

猶照中原萬里山

猶お照らす 中原 万里の山

【語釈】

○岳武穆：宋の名將岳飛。○神州：中原地方。○指掌間：あつという間。北宋の創始皇帝趙匡陰の墓。河南鞏義市にある。○詔師還：皇帝の撤退命令により、やむなく軍を引き上げた。○丹心一片：いつわりの無い真心。岳飛の入れ墨。

★金陵懷古

金陵懷古きんりょうかいこ

元 宋 无

宮磚賣盡雨崩牆

宮磚きゆうせん 売り尽して 雨牆かきを崩す

苜蓿秋紅滿夕陽

苜蓿ぼくしゆく 秋紅にして 夕陽滿つ

玉樹後庭花不見

玉樹後庭 花見えず

北人租地種茴香

北人地そに租して 茴香かいこうを種う

【語釈】

○金陵：南朝の首都、南京。○宮磚：宮殿の瓦。○苜蓿：クローバ。○玉樹後庭：「玉樹後庭花」。南朝の陳の後主が作った詩。亡国の歌曲。○北人：北方民族。○茴香：多年草の一種。薬用となる。

★博浪沙

博浪沙はくろうさ

元 陳 孚

一擊車中膽氣豪

一擊 車中 胆氣豪なり

祖龍社稷已驚搖

祖龍そりゆうの社稷しゃしよく 已に驚き揺ぐ

如何十二金人外

如何いかんんぞ 十二金人の外ほか

猶有民間鐵未銷

猶お 民間 鉄の未だ銷しょうざる有らん

【語釈】

○博浪沙：張良が劉邦に使える前、秦の始皇帝を暗殺使用とした場所。○一擊車中：張良が力士に秦の始皇帝の車に向けて鉄堆を投げさせたこと。○祖龍：秦の始皇帝。○社稷：國家。秦始皇帝が天下を統一した後、天下の兵器尾を集めて十二個の銅人を作らせたことを指す。

★ 漂母塚

漂母塚 ひょうぼつづか

元 陳孚

英雄未遇亦堪羞

英雄未だ遇わず亦た羞ずるに堪えたり

一飯區區不自謀

一飯区々 みづか 自ら謀る ほか

莫笑千金酬漂母

笑う莫かれ 千金 漂母に酬いるを

漢家更有頡羹侯

漢家更に 頡羹侯 かんかつこう 有り

【語釈】

○漂母：水中でわたを打つのを業としていた老婆が、不遇な時の韓信が食にも困っているのを見て、食事を与えた。韓信がこれを喜び「漂母」と呼んだという「史記・淮陰侯伝」の故事から。○英雄：韓信。○區區：わずかなこと。○千金酬漂母：韓信が楚王になったときに、漂母に千金を与えたこと。○頡羹侯：劉邦がつらく当たっていた兄嫁の子に与えた侯爵の名前。

★ 古宿遷

古宿遷 こしゆくせん

元 陳孚

月落狐鳴野草黄

月落ち 狐 鳴いて 野草黄なり

雁飛無數水茫茫

雁 飛ぶこと無数 水茫茫 ぼうぼう

數星鬼火寒沙上

数星の鬼火 きか 寒沙の上 かんさ

知是何年舊戰場

知る是れ 何年 旧戰場

【語釈】

○宿遷：江蘇省宿遷市。○茫茫：広大なさま。

★ 經杜樊川水樹故基

杜樊川の水樹の故基を經

元 周砥

落花風裏酒旗搖

落花風裏 酒旗揺らぐ

水樹無人春寂寥

水樹 人無く 春寂寥

何許長亭七十五

何許 長亭 七十五

野鶯煙樹綠迢迢

野鶯 煙樹 綠 迢々

【語釈】

○杜樊川：杜牧。○水樹：水に望むうてな。○酒旗：酒屋の目印の青い旗。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○転句：杜牧の「題齊安城樓」に「不用憑闌苦回首，故鄉七十五長亭。」とある。長亭は十里毎に設けられた宿場。○迢迢：遙かなさま。遠いさま。

★ 煙霞洞

煙霞洞

宋 丘處機

白石磷磷繞洞泉

白石 磷々 洞泉を繞る

蒼松鬱鬱鎖寒煙

蒼松 鬱々 寒煙を鎖す

碧桃花發朱櫻秀

碧桃花 発きて 朱桜秀ず

別是人間一洞天

別に是れ 人間 一洞天

【語釈】

○煙霞洞：浙江省杭州市烟霞洞。○磷磷：玉石の輝くさま。○洞泉：洞から流出する泉水。○鬱鬱：樹木のこんもりと生い茂っているさま。○寒煙：冷たい霞。○洞天：道教の神仙の居処，洞中にある別天地。

★ 滕王閣

滕王閣

宋

釋晦機

檻外長江去不迴

檻外の長江 去りて迴らず

檻前楊柳後人栽

檻前の楊柳 後人栽ゆ

當時唯有西山在

当時 唯だ 西山の在る有るのみ

曾見滕王歌舞來

曾て 滕王 歌舞を見て來る

【語釈】

○滕王閣：江西省南昌市東湖区滕王閣街道にある樓閣。岳陽の岳陽樓・武漢の黃鶴樓と並んで、江南の三大名樓とされる。○承句：王勃の「滕王閣」に「檻外長江空自流」とある。○結句：王勃の「滕王閣」に「珮玉鳴鸞罷歌舞」とある。

★ 過蘇州

蘇州を過ぐ

明

劉基

姑蘇臺上垂楊柳

姑蘇臺上 垂楊柳

曾為張王護禁城

曾て 張王の為に 禁城を護る

今日淡烟芳草裏

今日 淡烟 芳草の裏

暮蟬猶作管絃聲

暮蟬 猶お管絃の声を作す

【語釈】

○蘇州：江蘇省蘇州市。○姑蘇臺：春秋時代の呉王夫差が姑蘇山（江蘇省呉県の西南）上に築いた台の名。○張王：不祥。○禁城：宮城。○淡烟：薄いもや。

★ 詠爛柯山

爛柯山を詠ず

明 張以寧

人説仙家日月遲

人は説く仙家 日月遅しと

仙家日月轉堪悲

仙家の日月 転た 悲しむに堪えたり

誰將百歳人間事

誰か 百歳の人間の事を將つて

只換山中一局碁

只だ 山中一局の碁に換えんや

【語釈】

○爛柯山：諸説あるが、浙江省衢州市柯城区が有力。『述異記』などにある伝説「爛柯」（晋の時代に信安郡の石室山へ王質という木こりが分け入ったところ、数人の童子が歌いながら碁を打っていた。王質は童子にもらった棗の種のようなものを口に入れてそれを見物していたが、童子に言われて気がつくとき斧の柄（柯）がぼろぼろに爛れていた。山から里に帰ると、知っている人は誰一人いなくなっていた）による。○仙家：仙人の住む世界。

★ 蘇公赤壁

蘇公赤壁

明 張以寧

赤壁江寒葉漸稀

赤壁 江寒くして 葉 漸く稀なり

黄泥陂静鷺斜飛

黄泥陂 静かにして 鷺斜めに飛ぶ

洞簫聲裏當時月

洞簫声裏 当時の月

應照千年化鶴歸

応に照らすべし 千年 鶴に化して帰るを

【語釈】

○蘇公赤壁：東坡赤壁（文赤壁） 中国湖北省黄冈市の長江沿岸にある岩。蘇軾が「赤壁の賦」を作ったところ。○漸：だんだんと。○黄泥陂：黄泥坂。湖北省黄冈市内の地名。後赤壁の賦に「二客予に従いて黄泥の坂を過ぐる。」とある。○洞簫：縦笛。赤壁の賦に「客に洞簫を吹く者有り」とある。○結句：後赤壁の賦において、東から飛んできた鶴が道士の化身で在り、その鶴が今、帰ってきたが、月がそれを照らすべきであるという意。

★夜宿姑蘇

夜姑蘇に宿す

明 張 煌

館娃宮外繫蘭橈

館娃宮外 蘭橈を繫ぐ

何處鐘聲月上潮

何れの処の鐘声か 月潮を上ぐ

露落臺空春樹暗

露落ち 台空しくして 春樹暗し

隔江漁火照楓橋

江を隔つる 漁火 楓橋を照らす

【語釈】

○姑蘇：江蘇省蘇州市。○館娃宮：春秋時代、呉王夫差が硯石山上に築き、西施を住まわせた宮殿。○楓橋：江蘇省蘇州市の西郊にある橋。張継の「楓橋夜泊」で有名。

★黄陵廟

黄陵廟

明 王 侁

芳洲烟草碧萋萋

芳洲の烟草 碧萋々

古廟雲深落日低

古廟 雲深く 落日低し

剥盡殘碑無可問

剥ぎ尽す 殘碑 問う可き無し

春山惟有鷓鴣啼

春山 惟だ 鷓鴣の啼く有るのみ

【語釈】

○黄陵廟：舜の二妃、娥皇と女英の廟。湖南省湘陰県の北にある。○芳洲：香しい草の朝いている洲。○烟草：煙霧のように茂っている草。○萋萋：草木が生い茂っているさま。○殘碑：損なわれた碑。

★宿鄂渚

鄂渚がくわよに宿す

明 王 儼

彌衡洲古白雲低

彌衡洲ちこうしゅう 古くして 白雲低し

庾亮樓空綠樹齊

庾亮樓ゆりょうろう 空しくして 綠樹齊し

惟見晚空漁艇火

惟ただ見る 晚空 漁艇の火

隨風遠過漢陽西

風に随したがって 遠く過ぐ 漢陽の西

【語釈】

○鄂渚：湖北省武漢市武昌区の長江中にある中洲。○彌衡洲：鸚鵡州。三国志の人物、彌衡が黃祖に殺され埋葬されたところ。○庾亮樓：湖北省鄂州市鄂城区にある樓。東晋の政治家庾亮が作った。○漢陽：湖北省武漢市漢陽区。

★古戰場

古戰場

明 徐 勃

衰草殘雲古戰場

衰草すいそう 殘雲 古戰場

腥風吹血濺衣裳

風 腥なまぐしく 血吹き 衣裳えいさつに濺なぐ

塵沙一望三千里

塵沙 一望 三千里

惟見馬頭斜日黃

惟ただ見る 馬頭斜日 黃なるを

【語釈】

○古戰場：湖北省鹹寧市古戰場。○塵沙：塵埃と砂土。○馬頭：前方。

★蘭亭懷古

蘭亭懷古らんていゝかいこ

明 王 恭

被禊亭中日漸低

被禊亭中日漸ふつけいていちゅう低ようやし

昔人行處草萋萋

昔人せきじん行いく處せ草せ萋せい萋せいたり

多情最是山陰鳥

多情なるは 最も是れ 山陰の鳥

啼向春風滿會稽

啼いて 春風に向い 会稽に満つ

【語釈】

○蘭亭：浙江省紹興市西南の蘭渚山上にある亭。王羲之が上巳の節句に曲水の宴を開き、「蘭亭の序」を書いたことで有名。○漸：段々と。○萋萋：草木が盛んに生い茂っているさま。○山陰：山の北側。○會稽：浙江省紹興市東南にある山。

★四知臺

四知臺しちだい

明 薛 瑄

人間無處不天公

人間 処として 天公ならざるは無く

却笑黃金餽夜中

却って笑う 黄金 夜中に餽おくるを

千載四知臺下過

千載 四知台下を過ぐ

馬頭猶自起清風

馬頭いまだ 猶自 清風起る

【語釈】

○四知臺：楊震の四知台。河北省定州市にあった。四知とは「天知り、地知り、我知り、子（相手）知る」という揚震の言葉（後漢書・楊震伝）。○天公：天帝。○黄金餽夜中：楊震が、賄の黄金を（誰も知らない）夜中に贈られようとしたこと。○千載：千年の後。○馬頭：前方。○猶自：いまだ。

★ 渡湘潭

湘潭を渡る

明 林 桂

瀟湘日夜向東流

瀟湘 日夜東に向って流る

萬里西行獨未休

萬里 西行し 独り 未だ休まず

擬吊汨羅何處是

汨羅 吊んと擬せども 何れの処か是れなる

江籬滿目不勝愁

江籬 滿目 愁に勝えず

【語釈】

○湘潭：湖南省衡陽市衡東県の淵。○瀟湘：瀟水と湘水の合流した下流。○汨羅：湘江の一支流汨羅江の下流域にあり、戦国時代、楚の忠臣で詩人として有名な屈原（が、国を憂い）身を投げた所として知られる。○江籬：川に沿ったまがき。○滿目：見渡す限り。

★ 愚閩門柳枝詞

閩門柳枝詞

明 蘇 平

此地吳王舊市朝

此地 吳王の旧市朝

空遺衰柳日蕭蕭

空しく 衰柳を遺して 日 蕭々

行人不用頻迴首

行人 用いず 頻りに首を迴らすを

煬帝宮前更寂寥

煬帝の宮前 更に寂寥

【語釈】

○瀟湘：江蘇省蘇州市昆山市の人。景泰十才子の一人。○閩門：江蘇省蘇州市の西の城門。○柳枝詞：楊柳詩詞（樂府題）。○吳王：夫差。○市朝：市場と朝廷。○蕭蕭：物寂しいさま。○行人：旅人。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。

★ 習池

習池

明 邊 貢

習家池上草萋萋
流水成渠稻作畦
山簡不來遊客散
居人猶唱白銅鞮

習家の池上草萋々
流水渠を成す稲作の畦
山簡来らず遊客散じ
居人猶お唱う白銅鞮

【語釈】

○習池：一名高陽池。湖北省襄陽市峴山の南にある。東晋の頃、習郁の末裔の習鑿齒が池を望み書物を読み、あずまやで史書を記し、「漢晋春秋」という名作を残した。○萋萋：草木が盛んに生い茂っているさま。○山簡：晋鎮南將軍の山簡、衆池で酒に溺れていた（晋書・山簡伝）。○白銅鞮：南朝の梁の歌謠名。

★ 峴山

峴山

明 邊 貢

大樹蕭蕭白日寒
羊公祠下獨凭欄
尋常一種青山石
長使行人洒淚看

大樹蕭々として白日寒し
羊公祠下 独り欄に凭る
尋常 一種 青山の石
長えに 行人をして 涙を洒ぎ看さしむ

【語釈】

○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。○峴山：湖北襄陽県にある山。峴首山ともいう。○羊公：羊祜。三国時代から西晋にかけての武将。襄陽に赴任中、羊祜は好んで峴山に登り、酒を飲みながら、時が経つのも忘れて景色を眺めていたという。○行人：旅人。

★越王臺

越王臺えつおうだい

明 林真

屠龍人去幾時歸
空有高臺對夕暉
回首舊時歌舞地
年年春草鷓鴣飛

屠龍とりりゆう 人去りて 幾時いくじにか帰る
空しく高台に有りて 夕暉せききに対す
首くびを回めぐらせば 旧時 歌舞の地
年々の春草 鷓鴣しやこ 飛ぶ

【語釈】

○越王臺：広東省広州市越秀山上にある台。○西漢の時に南越王の趙佗が築いたとされる。○屠龍：西漢の南越王屠龍。○夕暉：夕焼け。

★望夫石

望夫石ぼうふせき

明 吳國倫

月寫雙蛾霧結衣
望夫山上望夫歸
朝雲歲歲含愁散
暮雨年年作淚揮

月は 双蛾そうがを写し 霧は衣に結ぶ
望夫山ぼうふさん上 夫の帰るを望む
朝雲 歳々 愁いを含んで散ず
暮雨 年々 涙と作なって揮ふるう

【語釈】

○望夫石：湖北省武昌の北山にある。妻が出征する夫を見送り、そのまま化したものと伝える石。中国では、「神異経」などに見える伝説にもとづく。○雙蛾：美人の二つの眉、転じて美人。○望夫山：妻が出征する夫を見送り、そのまま化したものと伝える望夫石のある湖北省武昌の北山。

★ 隋宮

隋宮

明 陳 桂

錦帆不返廣陵舟

錦帆きんぱん 返かへらず 広陵こうりやうの舟

一代繁華逐水流

一代の繁華 水を逐おいて流る

堤柳欲収宮女淚

堤柳 収めんと欲す 宮女の淚

景陽鐘斷雁聲秋

景陽けいやうの鐘 断え 雁声秋なり

【語釈】

○隋宮：隋の煬帝が揚州に築いた行宮。○錦帆：錦の帆の豪華船。○広陵：江蘇省揚州市。○一代繁華：隋の煬帝の栄華。○景陽鐘：六朝時代斉の時、景陽楼（南京の北、玄武湖畔にあった陳の宮殿）にあった夜明けを告げる鐘。

★ 懿文陵

懿文陵いぶんりやう

明 榭 榛

秋盡郊原落木紛

秋 尽きて 郊原こうげん 落木 紛たり

空山日暮鎖愁雲

空山 日暮れて 愁雲を鎖さぎす

一從幽薊龍飛後

一たび 幽薊ゆうけい 竜の飛ぶに從したがいて後

陵寢何人謁懿文

陵寢りやうしん 何人か 懿文いぶんに謁えんせん

【語釈】

○懿文：明の太祖洪武帝の長男の朱標。早逝し、光武帝はその死を深く悲しんで懿文太子の諡号を贈った。実子の建文帝が即位する孝康皇帝と諡された。○郊原：郊外の野原。○空山：人氣の無い山。○幽薊：幽州と薊州。○龍飛後：洪武帝の四男、永樂帝は通州・薊州に出撃して領土としたが、兄である懿文の皇帝の諡号を太子に追降した。その後。○結句：帝王陵墓の墓守を訪ねても、誰もが懿文を拝謁することを拒否された。

★ 經下邳

下邳を經

明 袁宏道

諸儒坑盡一身餘
諸儒坑し尽して 一身を余す
始覺秦家網目疏
始めて覺ゆ 秦家網目の疏なるを
枉把六經灰火底
枉げて六經を把り 火底に灰にするも
橋邊猶有未燒書
橋邊 猶お有り 未だ燒かざる書

【語釈】

○下邳：秦始皇帝暗殺に失敗した張良が隠れていて、黄石公から太公の兵法を受けたところ。○坑：穴埋めにする。○一身：張良。○六經：儒教で貴ぶ六種の經典。すなわち「易經」「書經」「詩經」「春秋」「周礼」。○橋邊：圮橋のほとり。○未燒書：太公の兵法書。○未燒書：張良が貰った兵法書。

★ 樂遊原

樂遊原

明 徐 焰

荒原渺渺樹層層
荒原 渺々 樹層々
立馬斜陽問廢興
馬を斜陽に立てて 廢興を問う
何處銷沈多感慨
何れの処か 銷沈 感慨多き
秦時遺殿漢諸陵
秦時の遺殿 漢の諸陵

【語釈】

○樂遊原：長安東部にあった行樂の地。○渺渺：広々として果てしないさま。○層層：重なり合っているさま。○銷沈：気が沈む。

★ 潯陽夜泊

潯陽夜泊

明 方丈

微微秋月照江沙

微微たる 秋月 江沙を照らす

兩岸楓林蘆荻花

兩岸の楓林 蘆荻の花

若憶當年白司馬

若に 当年の白司馬を憶えば

不知何處聽琵琶

知らず 何れの処か 琵琶を聴かん

【語釈】

○潯陽：潯陽江、江西省北部の九江付近を流れる長江の異称。白居易の「琵琶行」に「潯陽江頭夜送客」とある。○微微：かすかなさま。○江沙：長江の砂浜。○蘆荻：あしとおぎ。○白司馬：白居易。江州司馬に左遷されていた。

★ 疑冢

疑冢

明 黄徳水

英雄事去貌難徵

英雄 事 去りて 貌として 徴し難し

疑冢累累半已崩

疑冢 累累 半ば已に崩る

試問當時銅雀妓

試問す 当時 銅雀の妓

定將若箇当西陵

定めて 若箇を將つて 西陵に当らん

【語釈】

○疑冢：発掘されることを恐れて周りに多く作った偽塚。ここでは魏の曹操の墓の疑冢。○英雄：曹操。○累累：続き連なっているさま。○銅雀妓：曹操が築いた銅雀台の歌妓。曹操は息子たちに対し、月の一日と十五日には、銅雀台に登って西陵を望みながら宮女たちに歌舞を演じさせるようにと言ったという。○若箇：少人数。○西陵：曹操の墓。

★ 廣陵懷古

廣陵懷古
こうりょうかいこ

明 趙德剛

白石黄流湖上堤

白石黄流湖上の堤

堤邊楊柳有鶯啼

堤邊の楊柳鶯の啼く有り

琵琶月伎今何處

琵琶の月伎今何れの処ぞ

二十四橋烟雨低

二十四橋煙雨低し

【語釈】

○廣陵：江蘇省揚州市。○琵琶月伎：白居易「琵琶行」の妓女。○二十四橋：揚州にあった二十四の石橋。○煙雨：霧雨。

★ 隋隄柳

隋隄の柳
ずいてい

明 任彪

剪綵池邊楊柳條

剪綵池邊楊柳の条
せんさいちへん

垂金拂翠逞春嬌

金を垂れ翠を払い春嬌を逞す
みどり しゅんきょう

不知亡國多遺恨

知らず亡国遺恨多きを

猶自風前舞細腰

猶自風前細腰を舞わす
いまだ

【語釈】

○剪綵池：隋河のことをいうか？○隋隄：隋の煬帝が作った運河の隄。柳を植えた。○春嬌：女子の妖艶な姿の形容。○細腰：ここでは細い柳の枝。

★ 過越王墓

越王の墓を過ぐ

明 陳椿

越王墳前日欲西

越王墳前えつおうふんぜん 日西せんと欲す

斷碑殘碣隱荒溪

斷碑だんび 殘碣ざんかつ 荒溪に隱る

可憐松柏摧薪後

憐れむべし 松柏さいしん 摧薪さいしんの後

一逕寒烟鳥自啼

一徑いちけいの寒煙おのずか鳥 自ら啼くを

【語釈】

○越王：春秋時代の越王勾踐。○斷碑：碎かれた残碑。○殘碣：損なわれたいしぶみ。○可憐：感嘆の言葉。ああ。○摧薪：碎かれて薪となる。○一徑：一筋。○寒烟：寒々とした煙霧。

★ 過彭澤縣

彭澤県を過ぐ

明 夏寅

古樓寂寂枕江聲

古樓ころう 寂々せきせき 江声まぐらに枕す

五里荒山二里城

五里の荒山 二里の城

彭澤到今更幾令

彭澤ほうたく 今いまに到るまで 幾令いくれいを更あらたむ

縣人開口說淵明

縣人えんめい 口を開いて 淵明を説く

【語釈】

○彭澤縣：中國江西省北部にある県。陶淵明が県令であった。○幾令：多くの県令。○淵明：陶淵明。

★金陵舊院

金陵の旧院

明 蔣超

錦繡歌殘翠黛塵
錦繡歌は残る 翠黛の塵
樓臺已盡曲池湮
樓台 已に尽き 曲池に湮む
荒園一種瓢兒菜
荒園 一種 瓢兒の菜
獨占秦淮舊日春
独り占む 秦淮 旧日の春

【語釈】

○金陵…南京。南北朝時代の南朝の都。○錦繡…錦の刺繡をした衣服。○翠黛…まゆ墨。
○蔬菜…蔬菜の一種。○秦淮…南京市内を通る河の名、その兩岸は歓楽街であった。

★鍊笛亭

鍊笛亭

明 施潤章

溪光漠漠樹冥冥
溪光 漠々 樹 冥々
勝事猶傳石上亭
勝事 猶お伝う 石上の亭
樵唱數聲人静後
樵唱 數声 人 静なる後
松風吹出片雲青
松風 吹き出す 片雲青し

【語釈】

○鍊笛亭…不祥。○溪光…溪流の水の色。○漠漠…ぼおーとして薄暗いさま。○冥冥…暗くかすかなさま。○勝事…よいこと。○樵唱…樵の歌。

★ 題昭烈孫夫人祠

昭烈孫夫人の祠に題す

清 王士禛

霸氣江東久寂寥

霸氣江東久しく寂寥

永安宮殿草蕭蕭

永安宮殿草蕭々

都將家國無窮恨

都て家國無窮の恨みを將つて

分付潯陽上下潮

分付す潯陽上下の潮に

【語釈】

○昭烈孫夫人：三国志時代の劉備の妻で孫権の妹。廟は安徽省蕪湖の西江中にある。○江東：長江下流の南岸地方。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○永安宮：三国志の劉備が四川省奉節県に建てた宮殿名。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○分付：分け与える。○潯陽：潯陽江。長江の江西省九江市のあたりの名前。

★ 楊妃墓

楊妃の墓

清 王士禛

巴山夜雨卻歸秦

巴山の夜雨却つて秦に帰る

金粟堆邊草不春

金粟の堆辺草春ならず

一種傾城好顔色

一種の傾城好顔色

茂陵終傍李夫人

茂陵終に李夫人に傍う

【語釈】

○楊妃：楊貴妃。墓は馬嵬坡（陝西省興平県）にある。○巴山：四川省の北・陝西省の南・湖北省の西の境界に位置する山脈。○秦：長安。○金粟：陝西省蒲城東北の金粟山にある玄宗の陵墓。○傾城：傾国の美女。○茂陵：漢の武帝の陵墓。陝西省興平県東北にある。○李夫人：漢の李延年の妹武帝に寵愛されたが早世した。墓は茂陵の近くにある。

★ 馬嵬懷古

馬嵬懷古ばかいかいこ

清 王士禛

何處長生殿裏秋

何れの処か 長生殿裏ちようせいいでんりの秋

無情清渭日東流

無情せいいの清渭 日に東に流る

香魂不及黃旛綽

香魂 及ばず 黃旛こうはんしやく綽

猶占驪山土一丘

猶お占む 驪山りせん 土一丘

【語釈】

○馬嵬：馬嵬坡。楊貴妃が殺された所。陝西省興平県。○長生殿：唐代宮中の神殿。玄宗と楊貴妃が永遠の愛を誓ったとされる(長恨歌)。○清渭：清らかな渭水。○香魂：美人の魂。○黃旛綽：玄宗に使えた芸人。○驪山：長安の東にある山で麓に華清宮がある。

★ 謁文忠烈公祠

文忠烈公の祠に謁すぶんちちゆうれつこう

清 王士禛

精神如破貝州時

精神 貝州はいしゅうを破る時の如く

晚節猶能動四夷

晩節 猶お能く 四夷よを動かす

天遣不同韓富没

天 韓富ともと同一に没しつし遣めず

姓名留冠黨人碑

姓名 留冠りゅうかんたり 黨人とうじん碑ひ

【語釈】

○文忠烈公：文彦博。北宋の宰相、司馬光と並ぶ旧法派の代表者の一人。清代には「よく中正を守り傾險がなかった。」と評価された。○貝州：河北省邢台市清河県。王則の乱が起こり、文彦博が鎮圧した。○四夷：四方の異民族。○留冠：最上部に留まる。○韓富：韓琦と富弼。共に旧法派の代表的人物○黨人碑：新法派の蔡京が旧法派三百九人を「姦党」として名前を刻んだ「元祐黨籍碑」。南宋では名誉ある人物達とされた。

★ 黄櫨夢盧生祠

黄櫨の夢の盧生の祠

清 屈復

夢作公侯醒作仙
人間願欲那能全
從知秦漢真天子
不及盧生一餉眠

夢に公侯と作り醒むれば仙と作る
人間の願欲して那んぞ能く全き
従りて知る秦漢の真天子
及ばず盧生一餉の眠りに

【語釈】

○黄櫨夢：「黄櫨一炊の夢」。『枕中記』に出てくる話で「邯鄲の枕」「邯鄲の夢」ともいう。「榮枯盛衰も、ほんのひとときの夢のように、はかないものである。」こと。○盧生：「黄櫨一炊の夢」を見た書生。○餉：食料。ここでは「炊」の意。

★ 次江東門懷古

江東門懷古に次す

清 徐元文

歌舞臺空跡已更
莫愁湖水尚盈盈
英雄消歇知多少
紅粉尚傳身後名

歌舞台空しくして跡已に更る
愁うる莫かれ湖水尚お盈々たるを
英雄消え歇んで知んぬ多少ぞ
紅粉尚お伝う身後の名

【語釈】

○江東門：不祥。広東省広州市？○歌舞臺：不祥。曹操が銅雀台の前に築かせた物？○盈盈：水の満ちているさま。○英雄：曹操？○紅粉：美人。

★ 朱雀航

朱雀航すざくこう

清 余 懷

紅旗曾挂大航西

紅旗かつ曾かて挂かく 大航の西

日暮蕭蕭疎鳥啼

日暮しよつしよつ 蕭々そちよちよ 疎鳥啼く

野火閑雲齊滿地

野火やか 閑雲 齊かしく地ちに満みつ

橋邊風雨夜淒淒

橋邊の風雨 夜せいせい淒淒たり

【語釈】

○朱雀航：六朝の都城建康（南京市）の朱雀門の外にあった浮き橋。○紅旗：儀仗兵の赤旗。○大航：朱雀航。○蕭蕭：物寂しい様、音の形容。○閑雲：静かに浮かんでいる雲。○淒淒：ひえびえとしたさま。寂しくいたましいさま。

★ 過夷門

夷門いもんを過ぐ

清 黄 雲

依舊夷門汴水濱

旧いにに依いる夷門いもん 汴水べんすいの浜

由来豪傑混風塵

由来 豪傑 風塵に混じる

馬前莫漫輕關吏

馬前みだり 漫に 閑吏を軽んずる莫れ

恐有當年侯姓人

恐らくは 当年 侯姓の人有らん

【語釈】

○夷門：河南省北東部にあった汴水（汴河）の浜にあった地名。○依舊：昔のままである。○由来：それ以来。○豪傑：戦国時代の魏の信陵君。○風塵：俗世間。○關吏：門番の役人。大梁の夷門で門番をしていた老人の侯嬴に、魏の信陵君が礼を尽くして食客に加えるた故事（『史記』魏公子列伝）による。○侯姓人：侯嬴のような優れた人（『史記』魏公子列伝）。

★ 過易水

易水えいすいを過ぐ

清 王邦畿

地入幽州白日沈

地は幽州ゆうしゅうに入りて 白日沈む

寒雲奔奔水陰陰

寒雲 奔々ほんほん 水陰々いんいん

亦知匕首無成事

亦た知る 匕首ひしゅ事の成る無きを

只重荊軻一片心

只だ 荊軻けいかを重んず 一片の心

【語釈】

○易水：河北省を流れる川。秦始皇帝暗殺に赴く荊軻を燕の太子丹等が見送ったことで名高い。○幽州：戦国時代の燕の地。○奔奔：走ることが速いさま。○陰陰：静かなさま。○匕首：あいくち。○無成事：始皇帝暗殺が失敗したこと。

★ 烏江

烏江

清 宋 犖

落日烏江繫小船

落日 烏江 小船を繫ぐ

拔山氣勢想當年

山を抜く氣勢 当年を想う

一間古屋荒煙外

一間の古屋 荒煙の外

野鼠銜髭上几筵

野鼠 髭を銜え 几筵きえんに上る

【語釈】

○安徽省和県の東北にある川。項羽最後の地。○拔山氣勢：「垓下の歌」による。○当年…：当時。○一間：間口一間。○荒煙：荒野の煙霧。○几筵…：肘掛けと敷物。

★古於陵城

古於陵城こおりのうりょうじょう

清 徐夜

仲子城邊日向中

仲子城邊ちゆうしじょうへん 日中に向う

田家饁敵自西東

田家敵おのすかに饁おくりて 自おのすから西東

高原雨脚牛羊外

高原の雨脚うきやく 牛羊の外

一逕秋深豆葉風

一徑 秋は深し 豆葉の風

【語釈】

○於陵：春秋時代の齊の国の陳仲子。富家である実家の世話になるのを嫌い、於陵に逃げ込んだ。○中：中天。○田家：農家。○饁：昼食を贈りどける。

★曹操疑塚

曹操の疑塚そうそうのぎとが

清 查慎行

分香賣履獨傷神

分香売履ぶんこうばいり 独り神を傷む

歌吹聲中總帳陳

歌吹声中 總帳けいちようなら陳ふ

到底不知埋骨地

到底 知らず 骨を埋むる地

却教臺上望何人

却って台上 何人をも望ましむとは

【語釈】

○疑家：発掘されることを恐れて周りに多く作った偽塚。○分香賣履：死に臨んでの妻妾への愛情。曹操が死に臨んで夫人には香を分け与え、妾には履を作る方法を教えて売れるようにし、死後の生活のささえとさせた故事による。○總帳：細糸のとばり。

★ 嚴陵釣臺

嚴陵の釣台

清 洪 升

逃却高名遠俗塵

高名を逃却し俗塵を遠ざく

披裘澤畔獨垂綸

裘を披いて沢畔独り綸を垂る

千秋一個劉文叔

千秋一個劉文叔

記得微時有故人

記し得たり微時故人有るを

【語釈】

○嚴陵：嚴光、後漢の光武帝の幼なじみであったが、光武帝の再三の招奇を拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところが嚴子陵釣臺といわれる。○千秋：千年。○劉文叔：東漢の光武帝。○微時：卑賤で榮達する前。

★ 曹操疑塚

曹操疑塚

清 陸次雲

疑塚累累漳水頭

疑塚累累漳水の頭

如山七十二高丘

山の如き七十二高丘

正平只有墳三尺

正平 只だ墳三尺有り

千古安眠鸚鵡洲

千古安眠す鸚鵡洲

【語釈】

○疑冢：発掘されることを恐れて周りに多く作った偽塚。○累累：続き連なって並んでい
るさま。○漳水：湖北省を流れる長江の支流。○七十二高丘：多くの高い丘。○正平：平
地。○鸚鵡洲：武漢にあった長江の中洲。

★蘇隄口號

蘇隄口號

清 瀋受宏

六橋遙帶兩峰孤

六橋 遙かに 兩峰を帯びて 孤なり

煙水茫茫舊宋都

煙水 茫茫 旧宋都

一向鄂王墳上拜

一たび 鄂王墳上に向かいて 拜すれば

回頭不忍見西湖

頭を回して 西湖を見るに忍びず

【語釈】

○蘇隄：西湖にある蘇軾が作った隄。○口號：紙に書かずに作った即興の詩。○六橋：蘇隄の上にある六つの橋。○煙水：水面のもや。○茫茫：広々としたさま。○舊宋都：杭州。一時南宋の都となった。○鄂王：南宋の名将岳飛。墳は西湖の畔にある。

★田氏紫荆里

田氏紫荆の里

清 翁志琦

田氏遺墟沒草萊

田氏の遺墟 草萊に没す

春風猶見紫荆開

春風 猶お見る 紫荆の開くを

願攜當日連枝種

願わくは 当日の連枝の種を携え

分與人間處處栽

人間に分与して 処々に栽えしめんことを

【語釈】

○田氏紫荆：春秋時代の齊の都に住む田真兄弟3人が父の遺産を分割しようとした。分割可能なものはみな平等に分けたが、家の前の紫荆樹も三分しようとしたが、紫荆樹はたちまち枯れた。それを見て、抑えきれず、木のことに思いが至らなかつた」と。木はこの言葉聞いて、兄弟は父の財産をひとまとめにして共有することにした。紫荆樹はもとのように茂り始めた。(続齋諧記)。○遺墟：廢墟。○草萊：雜草。○人間：人間世界。○分與：分け与える。

★馬陵道

馬陵道ばりょうじょう

清 魏荔彤

戰壘千秋沙草平
更無殘戟礙春耕
荒城夜半喧雷雨
還似當年萬弩聲

戰壘 千秋 沙草 平かなり
更に 殘戟ざんげきの 春耕はるまがを 碍さまたぐる無し
荒城 夜半 雷雨 喧かまひすし
還また 当年ぼんどの 万弩ばんどの 声に似たり

【語釈】

○山東省聊城市莘県の道。戦国時代に魏と斉が激突した戦で、孫臏が龐涓を討ち取り、斉の圧勝に終わった地。○殘戟：損なわれて土に埋まったほこ。○萬弩：多くの弩弓。孫臏が計略により龐涓を石弩で射殺した。

★峴山

峴山けんざん

清 劉震

當塗典午事紛紛
西蜀山川付暮雲
我到峴山無淚洒
秋風會拜臥龍墳

当塗の典午 事 紛々ふんぶん
西蜀の山川 暮雲を付す
我 峴山けんざんに到り 涙の洒そそぐ無し
秋風 曾かつて拜す 臥龍墳がりようふん

【語釈】

○峴山：所在不詳。○當塗：三国志の魏のこと。○午事：司馬懿仲達。○紛紛：ごたつくさま。○臥龍墳：陝西省勉県の定軍山にある諸葛孔明の墓？

★ 秦准雜詠

秦准雜詠

清

沈德潛

六代江山久寂寥

六代の江山久しく寂寥

勝朝宮闕亦湮銷

勝朝の宮闕亦た湮銷

祗餘燕子憐春色

祗だ余す燕子の春色を憐むを

依舊銜泥過内橋

旧に依り泥を銜えて内橋を過ぐ

【語釈】

○秦准：南京市内を通る河の名、その兩岸は歡樂街であった。○雜詠：主題を決めずに作った詩。○六代：南北朝時代の南朝六朝。○寂寥：ひっそりとして物寂しいさま。○勝朝：滅亡前の一朝。陳。○宮闕：宮城の門。○湮銷：消失。○春色：春景色。○依舊：昔の如く。

★ 華容

華容

清

王元勳

楓林橘樹自成叢

楓林橘樹自ら叢と成る

廬舍臨湖接遠空

廬舍湖に臨み遠空に接す

回首楚王歌舞地

首を回らせば楚王歌舞の地

斜陽衰草細腰宮

斜陽衰草細腰の宮

【語釈】

○華容：湖北省にあった春秋時代の楚の都。○廬舍：墓守の住むところ。○楚王：春秋時代の楚の靈王。細腰の臣下を好んだので臣下が減食し、餓死する者が出たという。(元は「墨子」による)。

★ 淮陰候祠

淮陰候の祠

清 王言從

蹇項摧秦益世功

項に蹇り 秦を摧く 益世の功

盟寒帶礪失英雄

盟寒 帶礪 英雄を失う

四方尚有誰堪守

四方尚お 誰か守りに堪える有らん

枉上高臺詠大風

枉げて 高台上りて 大風を詠ず

【語釈】

○淮陰候：漢の高祖の將軍韓信。功なりて後肅正された。○項：項羽。○益世：社会に貢獻する功績。○盟寒：盟約が薄らぐ。○帶礪：河山帶礪。永久に変わらない誓のたとえ。○大風：高祖が郷土（沛）に帰って作った「大風の歌」。「安得猛士兮守四方」とある。

★ 淮陰候祠

淮陰候の祠

清 王言從

全身只合老漁竿

身を全うし 只だ 合に 漁竿に老ゆべし

若愛炎劉上將壇

若に愛す 炎劉 上將の壇

鳥盡弓藏多少恨

鳥尽き 弓藏せらる 多少の恨

荒祠古木夕陽寒

荒祠 古木 夕陽寒し

【語釈】

○淮陰候：漢の高祖の將軍韓信。功なりて後肅正された。○合：「まさにすべし」と読み、「しななければならぬ」「当然であるはずである」の意。○漁竿：隱棲の身。○炎劉：火徳の劉氏の漢王朝。○上將壇：上將軍韓信の祠。○鳥盡弓藏：韓信（范蠡）の言葉「狡兔死して良狗亨られ、高鳥盡きて良弓藏せられ、敵國破れて、謀臣亡ぶ」。○多少：多くの。

★ 嚴陵釣臺

嚴陵の釣台

清 唐夢賚

群山疊疊水層層

群山 疊々 水層々

詞客探奇為一登

詞客 奇を探して 為に一登す

試向咸陽秋草望

試みに 咸陽に向って 秋草に望めば

樵歌聲遍漢諸陵

樵歌 声は遍し 漢の諸陵

【語釈】

○嚴陵：嚴光、後漢の光武帝の幼なじみであったが、光武帝の再三の招奇を拒否して隱棲生活を送った。釣りをしたところが嚴子陵釣臺といわれる。○疊疊：重なり合っているさま。○層層：幾重にも重なっているさま。○詞客：詩人の旅人。○咸陽：秦の都。ここでは西安、洛陽地帯。○樵歌：きこりの歌。

★ 籌筆驛

籌筆驛

宋 潘復

駐軍荒驛筆能籌

軍を駐むる荒驛 筆能く籌る

將畧休輕議武侯

將畧 武侯に議すを 軽んずるを休めよ

若使渭川星未墜

若し 渭川をして 星 未だ墜とさしざら使めば

銅臺應是漢宮秋

銅台 応に是れ 漢宮の秋なるべし

【語釈】

○籌筆驛：四川省廣元市北八十里にあった宿場真知。諸葛亮が出師したとき、常にこの地に駐屯して作戦をねったと伝えられる。○籌：作戦を練る。○將畧：用兵の策略。○武侯：諸葛亮孔明。○渭川：渭水。長安付近を東流して黄河に合流する川。○星未墜：孔明の詩に於いて巨星が落ちた事による。孔明が死ななければ。○銅臺：銅雀台。魏の曹操が河北省邯鄲市に作った楼台。○漢宮秋：漢朝の復興がなつて、漢の物として秋を迎えたであらうことを言う。

★ 秦淮雜感

秦淮雜感

清 趙文哲

翠袖朱家舊擅名
翠袖 朱家 旧名を擅にす
荒園遺跡尚關情
荒園の遺跡 尚お情を関す
重門深掩棠梨樹
重門 深く掩う 棠梨の樹
聽盡瀟瀟暮雨聲
聴き尽す 瀟々たる暮雨の聲

【語釈】

○秦淮：南京市内を通る河の名、その兩岸は歡樂街であった。○翠袖：女子的装束。女子。○朱家：漢の魯の俠客。○重門：重なりあった門。○瀟瀟：風雨の寂しく降る（吹く）音のさま。

★ 烏衣巷

烏衣巷

清 徐薌坡

瑯琊池館 久荒涼
瑯琊池館 久しく荒涼
嗚咽寒聲淮水長
嗚咽 寒聲 淮水長し
唯有銜泥雙燕子
唯だ 泥を銜う 双燕子のみ有りて
年年巷口弔斜陽
年々 巷口 斜陽を弔う

【語釈】

○烏衣巷：金陵城（南京）の南側、秦淮区の白鷺洲公園のすぐ西側にある町内の名。○瑯琊池館：不祥。○嗚咽：咽び鳴く。○寒聲：寒々とした声。○淮水：秦淮河。南京を流れる川で、兩岸は歡樂街であった。○雙燕子：つがいの燕。○巷口：街の入り口。

★ 五人墓

五人墓 ごにんぼ

清 徐薈坡

亂鴉幾點夕陽殘

亂鴉 らんあ 幾點 せきせん 夕陽殘 せきようざん ず

酌酒蒼碑拂蘇看

酒 さけ を酌 そく ぐ蒼碑 そうひ 蘇 そ を払 はら って看 み る

颯颯陰風山鬼語

颯 さつ 々 さつ たる陰風 いんふう 山鬼 さんき の語 ご

冬青花落石壇寒

冬青 とうせい 花 はな 落 おち ちて石壇 いしだん 寒 さむ し

【語釈】

○五人墓：明末の宦官魏忠賢によって殺害された東林党の五人の墓。江蘇省蘇州市にあった。○颯颯：風がさつと吹くさま。○陰風：冬の風。陰気で殺伐とした風。○山鬼：山中の怪物。○冬青：常緑の喬木。

★ 過宛陵李太白酒樓

宛陵 えんりやう の李太白 りたいはく 酒樓 しうろう に過 よ ぎる

清 楊青藜

寒日登高眺晚秋

寒日 かんじつ 登 のぼ り高 たか して晚秋 ばんしゅう を眺 なが む

謫仙人去水空流

謫 たく 仙人 せんじん 去 い りて水空 すいこう しく流 なが る

傷心萬古陵陽月

傷心 しやうしん 萬古 まんこ 陵陽 りやうやう の月 つき

長送江風入酒樓

長 なが えに江風 かうふう を送 おく りて酒樓 しうろう に入る い る

【語釈】

○宛陵：安徽省宣城市宣州区。○李太白：李白。○謫仙人：李白のこと。○陵陽：安徽省池州陽県。

★景帝陵

景帝陵 けいていりやう

清 李蔚

蒼蒼栝栢冷烟凝

蒼々たる栝栢 冷煙凝る そうそう かつはく

古瓦頽垣牧豎登

古瓦 頽垣 牧豎登る こが たいかい ぼくじゆ

白髮中官扶杖立

白髮の中官 杖に扶りて立ち

向人指點景皇陵

人に向つて 指点す 景皇陵 けいこうりやう

【語釈】

○景帝陵：漢の六代目皇帝の陵。陝西省咸陽市渭城区にある。○栝栢：ビヤクシンとカシワの木。○冷煙：冷たいもや。○頽垣：くずれた垣根。○牧豎：牧童。○中官：朝内の官。宦官。○指点：指指す。○景皇陵：景帝陵。

★青龍江

青龍江 せいりゆうかう

清 廖景文

百戦樓船畫角昏

百戦の樓船 画角昏し がかくら

空江何處弔征魂

空江 何れの処か 征魂を弔う

夕陽惨淡荒城路

夕陽 惨淡たり 荒城の路 せきやう さんたん

黄葉西風滬瀆邨

黄葉 西風 滬瀆の村 こたく

【語釈】

○青龍江：不祥。吳淞江のこと？○樓船：櫓のある大船。○畫角：画で彩られた角笛。○空江：物影の無い川。○征魂：遠征で死んだ兵士の魂。○惨淡：物寂しいさま。○西風：秋風。○滬瀆：吳淞江。黄浦江の主要な支流。上海市街地の外灘北端にある外白渡橋の近くで黄浦江に合流する。上海市の北にある地の地名。

★鄧艾祠

鄧艾の祠

清 張馬慶

奇兵未扼一丸泥

奇兵未だ扼さず一丸の泥

綿竹懸軍萬仞梯

綿竹の懸軍萬仞の梯

奄忽當塗更典午

奄忽として當塗更りて典午

翻嫌多事鄧征西

翻って嫌う多事鄧の征西

【語釈】

○鄧艾：三国志時代の魏の武将。蜀に攻め入り後主劉禪を降伏させた。○奇兵：刀劍などの兵器。○一丸泥：極小さな土地。劍閣から攻めた本軍が守備兵を破れなかったこと。

○綿竹：四川省德阳市綿竹市。○懸軍：独り深く敵地に侵入する軍隊。○萬仞梯：深い谷に懸けた棧橋。○奄忽：たちまち。○當塗：魏の国。○典午：晋の国。○多事：忙しいこと。○鄧艾は、蜀を滅ぼす功績を挙げたが、三年後に魏も晋に変わり、鄧艾は邪魔者扱いされて殺されたことを詠う。

★馬嵬

馬嵬

清 袁枚

莫唱當年長恨歌

唱うる莫れ当年の長恨歌

人間亦自有銀河

人間亦た自ら銀河有り

石壕村裏伏妻別

石壕村裏夫妻別れ

淚比長生殿上多

淚長生殿上に比して多し

【語釈】

○馬嵬：陝西省興平県馬嵬坡。安史の乱で玄宗が蜀に落ち延びる途中、楊貴妃が殺された所。○當年：当時。○人間：平民の人間世界。○銀河：（天上で牽牛（牛郎）と織女とを隔てる働きをする）天の川。○石壕村裏：杜甫の「石壕吏」における別れた老夫妻。○長生殿：玄宗と楊貴妃が「比翼の鳥」「連理の枝」となる永遠の愛を誓った宮殿。

参考文献 「ブログ詩詞世界」

★ 黄梁夢廬生祠

黄梁の夢 廬生の祠

清 無名氏

四十年中公與候

四十年中公と候

雖然是夢也風流

然りと雖も 是れ夢也た風流

我今落魄邯鄲道

我今落魄して 邯鄲の道

要替先生借枕頭

先生に替わりて 枕頭を借るるを要す

【語釈】

○黄梁夢：「枕中記」の故事で、粟飯をたきあげるほどの短い間にみた廬生の夢の意。人間の富貴や功名が、きわめてはかなく短いことのたとえ。○廬生：「枕中記」の廬生。○廬生が夢の中で公爵や侯爵になったこと。○落魄：落ちぶれる。○邯鄲：河北省南部の都市。戦国時代、趙の都としてもつとも栄えた。「黄梁夢」を「邯鄲夢」「邯鄲枕」ともいう。○先生：廬生。○枕頭：「邯鄲の枕」。

★ 露筋祠

露筋祠

清 僧岑霽

沙草凄凉煙樹昏

沙草 凄凉として 煙樹昏し

荒祠寂寞託貞魂

荒祠 寂寞として 貞魂を託す

靈旗高捲秋風晚

靈旗 高く捲く 秋風の晩

惟有清淮照墓門

惟だ 清淮の 墓門を照らす有るのみ

【語釈】

○露筋祠：江蘇省揚州高郵県の南にある祠。俗称・仙女廟。唐代貞女とその嫂が旅をしていて日も暮れ、夜になろうとしたので、嫂は近くの百姓家に入って泊めてもらうことにしたが、貞女は見ず知らずの他人の家に泊まるのは、貞節に反ずるとして、屋内に入らなかつた。一夜明けた後、貞女は蚊のために血を吸い尽くされ、筋だけが残っているという姿になって斃れていた。里人たちは、貞女の高潔な節操を讃え、その死を悼んでそこに祠を建てた。○凄凉：ぞつとずするほど物寂しいさま。○煙樹：靄霞のかかった樹。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○靈旗：神霊の旗。○清淮：清い淮水（河南省に源を発し、安江蘇省を流れる）。

絶句類選 卷之十五 征戍類

★ 從軍行

從軍行 じゅうぐんじょう

唐 李白

百戰沙場碎鐵衣 沙場に百戦して鉄衣を砕く
 城南已合數重圍 城南已に合す數重の囲み
 突營射殺呼延將 營を突いて射殺す呼延の將
 獨領殘兵千騎歸 獨り殘兵千騎を領して歸る

【語釈】

○從軍行…樂府題。從軍の歌。○沙場…沙漠の地。○鉄衣…鉄のよろい。○營…陣營。
 ○呼延將…匈奴の最も身分の高い姓の將軍。○殘兵…生き残りの兵。

〔参考文献〕『中国詩人撰集 7』

★ 從軍行

從軍行

唐 王昌齡

驢馬新跨白玉鞍 驢馬新たに跨がり白玉の鞍
 戰罷沙場月色寒 戦罷み沙場月色寒し
 城頭鐵鼓聲猶震 城頭の鉄鼓声猶お震い
 匣裏金刀血未乾 匣裏の金刀血未だ乾かず

【語釈】

○驢馬…黒い尾を持った赤馬。○沙場…砂漠。○鐵鼓…戦鼓。○匣裏…箱の中。○金刀…
 刀の美称。

★ 從軍行

從軍行

唐

王昌齡

青海長雲暗雪山

青海の長雲 雪山を暗くろう

孤城遙望玉門關

孤城 遙かに望む 玉門關

黃沙百戰穿金甲

黃沙 百戰 金甲を穿つも

不破樓蘭終不還

樓蘭を破やぶらずんば 終ついにに還かへらじ

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○青海：ココノール湖。○雪山：天山。○玉門關：西域に置かれた関所の名。○金甲：金属製のよろい。○樓蘭：新疆ウイグル自治区、ロプノール湖の西にあった小独立国。

（参考文献）『唐詩選』

★ 從軍行

從軍行

唐

王昌齡

秦時明月漢時關

秦時の明月 漢時の関

萬里長征人未還

万里 長征 人未だ還らず

但使龍城飛將在

但だ 竜城の飛将をして 在しら使しめば

不教胡馬度陰山

胡馬をして 陰山を 度しら教しめず

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○秦時：秦の時代。○漢時：漢の時代。○関：関所。○竜城：匈奴の築いた砦。○飛将：漢の名将、李広。○胡馬：…えびすの馬。○陰山：陰山脈のこと。内モンゴル自治区を東西に走る山脈。漢族と匈奴との境界となっていた。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 従軍行

従軍行 じゅうぐんこう

唐 馬逢

漢馬千蹄合一羣

漢馬 千蹄 せんてい 一群に合す

單于鼓角隔山聞

單于 ぜんう の鼓角 山を隔てて聞ゆ

沙埽風起紅樓下

沙埽 さつゐ 風起るは紅樓の下

飛上胡天作陣雲

飛んで 胡天に上り 陣雲 な と作る

【語釈】

○従軍行…樂府題。従軍の歌。○漢馬…唐の馬。時の王朝を漢にたとえる。○千蹄…千頭。○單于…匈奴の王。○沙埽…小砂丘。○胡天…異民族地方の空。○陣雲…戦闘の兆しを示す雲。

★ 従軍行

従軍行

明 王世貞

蹋臂歸來六博場

蹋臂 歸り来る 六博場

城中白羽募征羌

城中 白羽 征羌 せいきやう を募る

相逢試解吳鉤看

相逢 あいあ いて 試 こころみ に 吳鉤 ごこう を解いて看れば

已是金河萬里霜

已に是れ 金河 万里の霜

【語釈】

○従軍行…樂府題。従軍の歌。○蹋臂…?。○六博場…?○白羽…士兵。○征羌…異民族を征服する軍。○吳鉤…刀劍。○金河…内モンゴル自治区境内にある大黒河。

★ 從軍行

從軍行 じゅうぐんこう

明 王世貞

夜深鄰帳送胡笳

夜深くして 鄰帳 りんちやう 胡笳 こかを送る

三月春寒雪作花

三月春寒くして 雪花 なと作る

吹盡關山楊柳曲

吹き尽くす 関山楊柳の曲

壯心元自不思家

壯心元 おのずか 自ら 家を思わず

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○鄰帳：とぼりの外。○胡笳：異民族のあしぶえ。○關山：関山月。縦笛の曲。○楊柳：折楊柳。横笛の曲。○壯心：豪壯な心。

★ 從軍行

從軍行

明 王世貞

蹀馬吹塵紫極昏
馬を蹀し塵を吹いて紫極昏し
洗刀飛血九河渾
刀を洗い血を飛ばして九河渾う
長城直拓三千里
長城直ちに拓く三千里
表取陰山作北門
陰山を北門と作すを 表取す

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○蹀馬：馬を舞わせること。○紫極：天子の宮殿。○九河：黃河。○長城：万里の長城。○陰山：內蒙古自治区南境にある陰山山脈。匈奴との国境としていた。○北門：北の国境。○表取：勝ち取る。

★ 從軍行

從軍行

明 陳子龍

彎弓獨上李陵臺
弓を彎き独り上る李陵台
極目燕支秋色來
極目燕支秋色來る
磧路西迴三萬里
磧路 西迴 三万里
青天遙挂白龍堆
青天遙かに挂く白竜堆

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○彎弓：弓を引きしぼる。○李陵臺：李陵の墓。○極目：見渡す限り。○燕支：草の名。紅の材料となる。○秋色：秋景色。秋の気配。○磧路：砂石の多い道。○白龍堆：新疆ウイグル自治区南東部から甘肅省最西部一帯に広がる砂漠。

★ 從軍行

從軍行

明 陳子龍

疎勒城南木葉秋

疎勒城南 木葉 秋なり

紇干山下月西流

紇干山下 月 西に流る

莫將此夜西樓夢

此の夜 西樓の夢を將つて

添作征人萬里愁

征人 万里の愁を 添作する莫れ

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○疏勒：タリム盆地に存在したオアシス都市国家。○紇干山：不祥。○西樓夢：女性（妻）の部屋で出征している夫のことを思つて見る夢。○征人：出征兵士。○添作：増す。

★ 從軍行

從軍行

明 陳子龍

一望穹廬匝地寬

一望の穹廬 地を匝りて 寬し

將軍中夜出臯蘭

將軍 中夜 臯蘭を出ず

月臨青海千烽亂

月は 青海に臨みて 千烽乱れ

雲照黃河萬馬寒

雲は 黃河を照らして 万馬寒し

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○穹廬：遊牧民族の家。ゲルのようなもの。○臯蘭：甘肅省蘭州市南にある山。○青海：青海湖。青海省にある中国最大の湖。○千烽：多くの烽火。

★ 從軍行

從軍行

明 陳子龍

十丈黃沙沒馬鞍
健兒吹角暮雲端
可憐丹鳳樓前月
夜夜飛孤嶺上看

十丈の黃沙 馬鞍を没す
健兒 角を吹く 暮雲の端
憐れむべし 丹鳳樓前の月
夜々 飛孤するを 嶺上に看る

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○黃沙：黃砂。○可憐：感嘆の言葉。ああ。○丹鳳樓：長安の宮殿である大明宮の正門の樓閣。○飛孤：孤独なさまで飛ぶ。

★ 從軍行

從軍行

明 馬森

陰風漠漠塞雲飛
萬里從軍着鍔衣
幾度鄉書傳雁足
家山唯向夢中歸

陰風 漠々 塞雲飛ぶ
万里 軍に従い 鍔衣を着る
幾度か 郷書 雁足に伝う
家山 唯か 夢中に向いて帰る

【語釈】

○從軍行：樂府題。從軍の歌。○陰風：殺気のある風。寒い風。○漠漠：寂しいさま。○塞雲：塞にかかる雲。○鍔衣：金属のよろい。○郷書：故郷からのたより。○雁足：かりの足に結ばれた手紙。蘇武の故事。○家山：故郷の山。故郷。

★ 從軍行

從軍行

清 乾隆帝

三邊烽火照軍營
十萬丁男夜練兵
但使腰間懸寶刀
丈夫何處不成名

三辺の烽火 軍營を照らし
十万の丁男 夜兵を練る
但だ 腰間に 宝刀を懸け使めば
丈夫 何れの処か 名を成さざらん

【語釈】

○從軍行：樂府題、出征兵士や戦場のさまを詠う。○三辺：延綏、寧夏、甘肅の三つの国境守備地域。○烽火：のろし火。○軍營：軍隊の営所。○丁男：成人した男子。○但使：ただ、くでさえあれば。

（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 從軍行

從軍行

清 乾隆帝

關山月冷夜黃昏
指日應擿吐谷渾
誰憶樓頭新小婦
一聲橫笛正銷魂

關山 月冷やかにして 夜 黃昏
日を指さし 応に擿にすべし 吐谷渾
誰か憶わん 楼頭の 新小婦
一声の横笛 正に銷魂するを

【語釈】

○從軍行：樂府題、出征兵士や戦場のさまを詠う。○關山：関所のある山。○黃昏：たそがれどき。○吐谷渾：異民族の首領。○銷魂：魂が消え去るような寂しさ、悲しさ。

★ 從軍行

從軍行

清 乾隆帝

沙漠風高列戎連

沙漠風 高くして 列戎連なる

寒侵行張不成眠

寒は行張を侵し 眠成らず

狼山夜半聞新警

狼山 夜半 新警を聞く

披甲爭聽號令傳

甲を披り 争い聴く 号令の伝

【語釈】

○從軍行：樂府題、出征兵士や戦場のさまを詠う。○沙漠：砂漠。○列戎：守りの要塞。
○行張：軍中でのとばり。○狼山：不祥。狼煙火のある山か？○新警：新たな警報。○甲
：よろい。○號令：命令を伝える使者。

★ 出塞曲

出塞曲

唐 賈至

萬里平沙一聚塵

万里平沙 一聚の塵

南飛羽檄北來人

南飛の羽檄 北來の人

傳道五原烽火急

伝道 五原 烽火急なり

單于昨夜寇新秦

單于 昨夜 新秦に寇す

【語釈】

○出塞曲：塞から出發するときの歌。○平沙：砂漠。○一聚：一堆。○羽檄：目印に鳥の羽を付けた急速に兵を發する爲の檄文。○五原：内蒙古巴彦淖爾市五原県。○單于：匈奴の王。

★ 出塞曲

出塞曲

明 蔣山卿

禪于秋色自堪哀
自おのずから哀むに堪えたり
霜滿天山黃葉摧
霜は天山に満ち黄葉摧くだく
落日懸軍度沙漠
落日懸軍 沙漠を度る
邊頭惟見雁飛回
邊頭惟だ見る 雁の飛回するを

【語釈】

○出塞曲：塞から出発するときの歌。○單于：匈奴の王。○秋色：秋景色。○天山：新疆ウイグル自治区を横断する山脈。○懸軍：深く敵地に入った孤軍。○邊頭：辺地。○邊境。

★ 從軍北征

軍に従って北征す

唐 李益

天山雪後海風寒
天山雪後 海風寒し
橫笛偏吹行路難
橫笛 偏えに吹く「行路難」
磧裏征人三十萬
磧裏せきり 征人 三十万
一時回首月中看
一時に 首こゝろを回めぐらして 月中に看る

【語釈】

○天山：新疆ウイグル自治区を横断する山脈。○雪後：雪が晴れた後。○海風：青海など西方の湖から吹く風。○偏：しきりに、折悪しく。○行路難：古楽府の歌曲の名、旅路の苦難を主題とする。○磧裏：砂漠（ゴビ砂漠）の中。○征人：遠征の兵士。○一時：いっせいに。○回首：振り向いて。振り返って。○月中：月の光の下で。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 出塞行

出塞行

唐 王昌齡

白草原頭望京師

白草原頭 京師を望めば

黃河水流無盡時

黃河水 流れて 尽くる時無し

秋天曠野行人絶

秋天 広野 行人絶ゆ

馬首東來知是誰

馬首 東來するは 知る是れ誰ぞ

【語釈】

○出塞行…樂府題、塞を出ていくときの歌。○白草…白っぽい色の草、乾燥すると白くなる草。○原頭…野原、原野。○京師…みやこ、ここでは長安。○行人…旅人。○東來…東に向かつてやってくる。○知是誰…誰であろうか、分からない(反語)。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 出塞詞

出塞詞

唐 馬戴

金帶連環束戰袍

金帯の連環 戦袍を束ぬ

馬頭衝雪度臨洮

馬頭 雪を衝いて 臨洮を渡る

卷旗夜劫單于帳

旗を巻き 夜 劫かす 単于の帳

亂斫胡兒缺寶刀

胡兒を乱斫し 宝刀を缺す

【語釈】

○出塞詞…塞を出ていくときの歌。○連環…鎖。○戰袍…戦闘用の衣服。○臨洮…甘肅省定西市臨洮県。○單于…匈奴の王。○胡兒…異民族の兵士。○亂斫…切り刻む。

★後出塞

後出塞

明 陳第

萬里秋風海上生
駐車今復戍檀城
天寒夜渡韋溝水
馬尾凝冰碎有聲

万里の秋風海上より生ず
車を駐めて今復た壇城を戍る
天寒くして夜渡る韋溝の水
馬尾の凝氷碎けて声有り

【語釈】

○後出塞…前の出塞の後に、再び塞を出ること。○檀城…不祥。○韋溝…不祥。○凝冰…凝り固まった氷。

★出軍

出軍

唐 戎昱

龍繞旌竿獸滿旗
翻營乍似雪山移
中軍一隊三千騎
盡是并州遊俠兒

龍は旌竿を繞り 獸は旗に満つ
翻營 乍ち 雪山の移るに似たり
中軍 一隊 三千騎
尽く是れ 并州 遊俠の児

【語釈】

○旌竿…旗竿。○翻營…陣營。○并州…山西省太原市。○遊俠兒…男伊達の良い男児。

★ 出關

出關しゅつかん

清 徐 蘭

憑山俯海古邊州

山に憑り海を俯す古辺の州

旆影風翻見戍樓

旆影はいえい風翻ふうはんして戍樓じゆろうを見る

馬後桃花馬前雪

馬後の桃花馬前の雪

出關爭得不迴頭

関を出で争い得て頭を迴らさず

【語釈】

○旆影：旗影。○風翻：風に翻る。○戍樓：守りの爲の見張り台。

★ 塞下曲

塞下の曲さいか

唐 常 建

玉帛朝回望帝鄉

玉帛朝より回りて帝郷を望む

烏孫歸去不稱王

烏孫帰り去りて王を称せず

天涯靜處無征戰

天涯静けき処征戦無く

兵氣銷爲日月光

兵氣しやう銷じて日月の光と為る

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○玉帛：宝玉と絹布。諸侯が天子に拜謁する時の献上品。ここでは烏孫国王の献上品を指し、烏孫国王が唐朝に帰順したことを表す。○朝回：朝廷より退出した後も。○帝郷：天子の都。○烏孫：漢代から南北朝にかけて西域にいたトルコ系遊牧民族。○天涯：空の果て。○征戦：討伐のための戦。○兵氣：殺伐とした戦争の妖気。

(参考文献)

『唐詩選』

★塞下曲

塞下の曲

唐 常建

北海陰風動地來

北海の陰風地を動かして来る

明君祠上望龍堆

明君祠上 竜堆を望む

勸饑盡是長城卒

勸饑 尽く是れ 長城の卒

日暮沙場飛作灰

日暮 沙場に 飛んで 灰と作る

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○北海：北方にある湖。○陰風：陰気な風。冬の北風のこと。○明君：漢の元帝の宮女で美人の王昭君のこと。○竜堆：白竜堆の略称。今の新疆ウイグル自治区東部、ロプノール湖の東にある砂漠。○長城卒：万里の長城のほとりで戦死した兵士。○沙場：沙漠。

(参考文献)

『唐詩選』

★塞下曲

塞下の曲

唐 戎昱

漢將歸來虜塞空

漢將 歸り来りて 虜塞空し

旌旗初下玉關東

旌旗 初めて下る 玉関の東

高蹄戰馬三千匹

高蹄 戰馬 三千匹

落日平原秋草中

落日 平原 秋草の中

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○漢將：漢になぞらえて唐の將軍。○虜塞空：胡の要塞が空になった。○旌幟：旗、幟の総称。ここでは軍隊。○玉関：玉門関。

★塞下曲

塞下の曲

唐 王烈

紅顏歲歲老金微
砂磧年年臥鐵衣
白草城中春不入
黃花戍上鴈長飛

紅顏 歳々 金微に老ゆ
砂磧 年々 鉄衣に臥す
白草 城中 春入らず
黃花 戍上 鴈長飛す

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○金微：アルタイ山脈。唐の時代に金微都督府が置かれた。○砂磧：砂漠の砂。○鉄衣：鉄のよろい。○白草：牧草。○戍上：守りの寨の上。

(参考文献) 『唐詩選』

★塞下曲

塞下の曲

唐 令狐楚

雪滿衣裳冰滿鬚
曉隨飛將伐單于
平生意氣今何在
把得家書淚似珠

雪は 衣裳に満ち 氷は鬚に満つ
曉に 飛將に随つて 單于を伐つ
平生の意氣 今 何にか在る
家書を把得して 涙珠に似たる

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○飛將：漢の飛將軍李広。一般に名將の意味で用いられる。○單于：匈奴の王。○家書：家からの手紙。○把得：得る。

★塞下曲

塞下の曲

唐

令狐楚

邊草蕭條塞鴈飛

辺草 蕭条 として 塞鴈飛ぶ

征人南望淚沾衣

征人 南望して 涙衣を沾す

黃塵滿面長須戰

黄塵 満面 長く戦に須まり

白髮生頭未得歸

白髪 頭に生ずれども 未だ歸るを得ず

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○邊草：辺地に生えている草。○蕭條：草木が枯れしおれるさま。○征人：遠征に出ている兵士。

★塞下曲

塞下の曲

唐

令狐楚

陰磧茫茫寒草腓

陰磧 茫茫として 寒草腓る

桔梗烽上暮煙飛

桔梗烽上 暮煙飛ぶ

交河北望天連海

交河 北望すれば 天海に連なる

蘇武曾將漢節歸

蘇武 曾って 漢節を將って歸る

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○陰磧：塞外の砂漠。○茫茫：果てしなく広大なさま。○桔梗烽：烽火の通称。○暮煙：夕靄。○交河：河北省滄州市。○蘇武：漢の武帝の臣。匈奴に使いして捕虜となり、十九年間荒れ地で過ごした。○漢節：漢の皇帝が与えた使者である事を示す証明。

★塞下曲

塞下の曲

唐 張仲素

獵馬千行鴈幾雙

獵馬 千行 鴈幾雙

燕然山下碧油幢

燕然山下 碧油幢

傳聲漠北單于破

伝声 漠北 單于破れ

火照旌旗夜受降

火は旌旗を照らして 夜降を受く

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○獵馬：狩人の乗る馬。ここでは軍馬。○燕然山：蒙古境内杭愛山。転じて征戦の対象地。○碧油幢：青緑色の軍での帳。○傳聲：伝令の言葉。○單于：匈奴の王。○旌旗：旗と幟の総称。

★塞下曲

塞下の曲

唐 張仲素

三戍漁陽再渡遼

三たび 漁陽を成りて 再び遼に渡る

驛弓在臂劍橫腰

驛弓は臂に在り 劍は腰に横たう

匈奴似欲知名姓

匈奴 名姓を知らんと欲するに似たり

休傍陰山更射雕

陰山に傍いて 更に 雕を射るを休む

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○漁陽：北京一帯。○遼：満州地帯の北方民族の地。○驛弓：赤い弓。○陰山：陰山山脈のこと。内モンゴル自治区を東西に走る山脈。漢族と匈奴との境界となっていた。○雕：わしさぎ。

★ 塞下曲

塞下の曲

唐 張仲素

朔雪飄飄開鴈門

朔雪 飄々として 鴈門を開き

平沙歷亂卷蓬根

平沙 歴乱として 蓬根を巻く

功名恥計擒生數

功名 擒生の数を計るを恥ず

直斬樓蘭報國恩

直ちに 樓蘭を斬って 国恩に報いん

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○朔雪：朔風（北風）に吹きつけられる雪。○飄飄：風に吹かれて、ひらひらと舞うさま。○鴈門：山西省の北部、代県の西北にある雁門山頂上関所の名。○平沙：砂漠。○歴乱：乱れ散るさま。○蓬根：枯れたよもぎの根。○擒生：捕虜。○樓蘭：新疆ウイグル自治区、ロプノール湖の西にあった小独立国。

★ 塞下曲

塞下の曲

唐 僧皎然

都護今年破武威

都護 今年 武威を破る

胡沙萬里鳥空飛

胡沙 万里 鳥空しく飛ぶ

旄竿瀚海掃雲出

旄竿 瀚海 雲を掃って出ず

氈騎天山蹋雪歸

氈騎 天山 雪を蹋んで帰える

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○都護：軍隊を率いて一地方を鎮め守る官職。○武威：甘肅省武威市。○胡沙：異民族の地の砂漠。○旄竿：？○旄竿：旗竿。○瀚海：砂漠。○氈騎：？○天山：天山山脈。

★塞下曲

塞下の曲

唐 僧皎然

寒塞無因見落梅

寒塞かんさい 落梅を見るに 因し無し

胡人吹入笛聲來

胡人 吹いて 笛声に入りて来る

勞勞亭上春應度

勞勞亭上らうらうていじやう 春 応に度るべし

夜夜城南戰未回

夜々 城南戰 未だ回かえらず

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○寒塞：寒苦の塞。○無因：きつかけがない。方法がない。○胡人：異民族の人。○承句：曲名は「梅花落」。○勞勞亭：南京にある亭。新亭ともいう。東晋の王導達が集まって再興を願ったところ。○應：「まさしくすべし」と読み「くであるに違いない」の意。

(参考文献) 『唐詩選』

★塞下曲

塞下の曲

宋 嚴仁

漠漠孤城落照間

漠々ばくばくたる孤城 落照の間

黄榆白葦滿關山

黄榆こうゆ 白葦はくい 関山に満つ

千枝羌笛連雲起

千枝の羌笛せうてい 雲に連つて起る

知是胡兒牧馬還

知る是れ 胡兒 馬を牧して還るを

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○落照：夕陽の光。○黄榆：秋になって黄色になったニレ。○白葦：枯れて白くなったアシ。○關山：関所のある山。○羌笛：異民族のあしぶえ。○胡兒：異民族の兒童。

(本詩は、高適の「塞上聞吹笛」を下敷きにしたもの)

★塞下曲

塞下の曲さいいか

明 薛 蕙

陰山縛盡犬羊群

陰山縛り尽す 犬羊の群

萬里胡天散陣雲

万里の胡天 陣雲を散す

塞外降王三十郡

塞外の降王 三十郡

來朝盡隸霍將軍

來朝 尽隸じんれい 霍將軍かくしょうぐん

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○陰山：陰山山脈のこと。内モンゴル自治区を東西に走る山脈。漢族と匈奴との境界となっていた。○犬羊群：捕虜のたとえ。○胡天：異民族の住む地域の空。○陣雲：重なり起こって兵陣のように見える雲。○降王：降伏した王。○來朝：諸侯が天子のもとに挨拶に来ること。○霍將軍：漢の大將軍霍去病。

★塞下曲

塞下の曲さいいか

明 薛 蕙

日暮陰風吹鐵衣

日暮 陰風 鉄衣を吹く

孤軍轉鬪陷重圍

孤軍 転鬪し 重圍に陥る

虜中白骨行應朽

虜中の白骨 行々 応に朽ちるべし

樓上紅妝尚憶歸

樓上の紅妝 尚お 帰るを憶う

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○陰風：陰気な風。冬の北風のこと。○陰風：陰気な風。冬の北風のこと。○轉鬪：転戦。○虜中：胡の地の中。○紅妝：美人。ここでは戦死した兵士の妻。

(「隴西行」陳陶)

★塞下曲

塞下の曲

明 唐順之

青袍白馬紫金鞦

青袍 白馬 紫金の鞦

不向沙場便酒樓

沙場に向わずんば 便ち酒樓

夜來一賭青錢盡

夜來 一賭 青錢尽き

尚有囊中血髑髏

尚お 囊中の 血髑髏有り

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○青袍：青色の衣。○紫金：赤銅の異名。○鞦：しりがい。○沙場：砂漠。○夜來：夜になってから。○青錢：青銅の貨幣。

★塞下曲

塞下の曲

明 石星

絶塞黄塵没錦鞦

絶塞の黄塵 錦鞦を没す

陰山昨日射鵬旋

陰山 昨日 鵬を射て旋る

西風忽報狼煙急

西風 忽ち報ず 狼煙の急なるを

又向祁連逐左賢

又 祁連に向いて 左賢を逐う

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○絶塞：非常な辺地にある寨。○錦鞦：錦の鞍しき。○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○陰山：陰山山脈のこと。内モンゴル自治区を東西に走る山脈。○西風：秋風。○祁連県：青海省海北チベット族自治州。○左賢：左賢王。匈奴の单于に次ぐ地位の者。

★塞下曲

塞下の曲

明屠隆

鐵騎橫行大漠空
將軍羽箭插長虹
禪于臺上看秋色
獵獵旌旗捲朔風

鐵騎てつき 橫行す 大漠たいばくの空
將軍しょうの羽箭うせん 長虹ちやうこうを挿す
禪ぜん于う台上だいじやう 秋色しよくを看る
獵り々りたる旌旗せいき 朔風さくふうを捲く

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○鐵騎：精銳の騎兵。○大漠：西北の大砂漠。○羽箭：白羽の矢。○禪于臺：匈奴の地にある台。○秋色：秋景色。○獵獵：物の翻る形容。○旌旗：旗と幟の総称。○朔風：北風。

★塞下曲

塞下の曲

明屠隆

朝随都護出行邊
斬得胡頭馬上懸
萬里無人沙月白
霜前獨枕大刀眠

朝あしたに都護とごに随つて 出でて辺に行く
胡頭こくを斬り得て 馬上かに懸く
万里 人無く 沙月白し
霜前 独り 大刀に枕して眠る

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○都護：軍隊を率いて一地方を鎮め守る官職。○胡頭：異民族の首。○沙月：砂漠にかかる月。

★塞下曲

塞下の曲

明 李化龍

黄龍東去海雲低
黄竜 東に去りて 海雲低し
殺氣連天望欲迷
殺氣 天に連なり 望み 迷わんと欲す
生得胡兒挟馬上
生きて 胡兒を得て 馬上に 挟む
夜深一騎到遼西
夜深くして 一騎 遼西に到る

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○黄龍：黄色い煙霞、黄砂の比喩。
○胡兒：異民族の兵士。○遼西：遼寧省の西部。

★塞下曲

塞下の曲

明 陳薦伏

塞草黄雲萬里哀
塞草 黄雲 萬里 哀し
胡天漠漠鳥飛迴
胡天 漠々 鳥 飛び迴る
漢家幾見封侯印
漢家 幾つか見る 封侯の印
曾繫沙場白骨來
曾て 沙場 白骨を繫ぎ來る

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○黄雲：辺塞の雲。○胡天：異民族の地の空。○漠漠：広々として果てしないさま。○漢家：ここでは明王朝のこと。○封侯の印：戦で手柄を立てた人に与える侯爵の印。

(一將成功萬骨枯)

★ 塞下曲

塞下の曲

明 轅文

邊城一曲古涼州
邊城一曲古涼州
十萬征人盡白頭
十萬の征人 尽く白頭
青海連天明月夜
青海 天に連なる 明月の夜
黃沙動地朔風秋
黃沙 地を動かし 朔風秋なり

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○邊城：辺塞の街。○古涼州：涼州。○詞。樂府題の曲。○征人：遠征の兵士。○青海：青海湖。青海省にある中国最大の湖。○朔風：寒い風。

★ 塞下曲

塞下の曲

明 許景樊

前軍吹角出轅門
前軍 角を吹いて 轅門を出ず
雪撲紅旗凍不翻
雪は 紅旗を撲ち 凍りて 翻らず
雲暗磧西看候火
雲 暗くして 磧西 候火を見る
夜深遊騎獵平原
夜 深くして 遊騎 平原に 獵す

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○角：角笛。○轅門：軍營の門。○磧西：砂漠の西。○候火：烽火。

★ 塞下曲

塞下の曲

清 任彦芳

長天一雁度關城
長天一雁 関城を渡る
白草黄沙列戦営
白草 黄沙 戦営に列す
貂錦五千渾是夢
貂錦 五千 渾て是れ夢
止餘燐火照人明
止めよ 燐火を余し 人に照らして明かなるを

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○長天：広闊な空。○關城：関所の
ある街。○白草：枯れて白くなった草。○貂錦：美麗な衣服を着た士卒。○燐火：鬼火。
(陳陶「隴西行」)

★ 塞下曲

塞下の曲

清 史夔

明月中天秋氣清
明月 天に中りて 秋氣清し
令嚴刁鬥最分明
令 嚴なりて 刁鬥 最も分明
前山夜半彫翎響
前山 夜半 彫翎 響く
知是官軍射虎行
知る是れ 官軍 虎を射るの行

【語釈】

○塞下曲：樂府題。塞下は、辺境の塞のあたりの意。○秋氣：秋の気配。○刁鬥：どら。
○分明：はっきりと明らかさま。○彫翎：帽子の羽根飾り。

★塞上曲

塞上の曲

唐 戴叔倫

軍門頻納受降書

軍門頻りに納む受降の書

一劍橫行萬里餘

一劍横えて行く万里余

漢祖謾夸婁敬策

漢祖謾夸す婁敬が策

卻將公主嫁單于

却って公主を將つて單于に嫁す

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○受降書：敵の降伏文書。漢の高祖天下平定の時に受け取ったもの。○承句：高祖が匈奴に攻め入ったこと。○漢祖：漢の高祖劉邦。○謾夸：あなどって誇り相手にしなかった。○婁敬策：匈奴はわざと弱みを見せているので闘わない方が良いという婁敬（劉敬）の策。○公主：皇帝の娘。○單于：匈奴の王。○結句：匈奴に破れて屈辱的な条約を結ばざるを得なかったこと。

★塞上曲

塞上の曲

唐 戴叔倫

漢家旌幟滿陰山

漢家の旌幟陰山に満つ

不遣胡兒匹馬還

胡兒の匹馬をして還ら遣めず

願擲微軀聊報國

願はくは微軀を擲ちて聊か国に報ぜん

何須生入玉門關

何んぞ須いん生きて玉門関に入るを

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○漢家：ここでは唐王朝。○旌幟：旗の総称。○陰山：陰山山脈のこと。内モンゴル自治区を東西に走る山脈。漢族と匈奴との境界となっていた。○胡兒：異民族の兵士。○微軀：小さな体。○何須：「なんぞもちいん」と読み「どうしてゝすることがあろうか」と反語の意。

★ 塞上曲

塞上の曲

唐 江爲

萬里黃雲凍不飛
万里の黄雲 凍りて飛ばず
磧煙烽火夜深微
磧煙 烽火 夜深くして微なり
胡兒移帳寒筋絶
胡兒 帳を移し 寒筋絶え
雪路時聞探馬歸
雪路 時に聞く 探馬の歸るを

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○黄雲：辺塞地の雲。○磧煙：砂漠の砂埃。○胡兒：異民族の人。○寒筋：寒々とした蘆笛の音。○探馬：探していた馬。

★ 塞上曲

塞上の曲

元 迺賢

秋高沙磧地椒稀
秋高く 沙磧 地椒 稀なり
貂帽狐裘晚出圍
貂帽 狐裘 晩に 圍を出す
射得白狼懸馬上
白狼を射得て 馬上に懸け
吹笛夜半月中歸
笛を吹いて 夜半 月中に歸る

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○沙磧：砂漠。○地椒：北方にはえるはじかみの一種。○貂帽：貂の皮で作った帽子。○狐裘：狐の皮で作った皮衣。○筋：あしぶえ。

★ 塞上曲

塞上の曲

明 張 經

每歲防秋西戎邊

每歲 秋を防ぐ 西戎の辺

荒城落日枕戈眠

荒城 落日 戈を枕して眠る

祈連山下朝朝雪

祈連山下 朝々の雪

不識鶯花二月天

識らず 鶯花 二月の天

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○防秋：秋になると侵入してくる異民族を防ぐ。○西戎：中国北西の地方。○祈連山：甘肅省と青海省に跨がる山脈。○鶯花：鶯と花。春日の景色をいう。

★ 塞上曲

塞上の曲

明 張 經

銀鞍白馬羽林郎

銀鞍 白馬 羽林郎

孤帽貂裘塞上装

孤帽 貂裘 塞上の装

腰下錦囊斜挿箭

腰下 錦囊 斜に箭を挿し

隔河射殺左賢王

河を隔てて射殺す 左賢王

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○羽林郎：近衛兵。○狐裘：狐の皮で作った皮衣。○貂帽：貂の皮で作った帽子。○錦囊：錦の袋。○左賢王：匈奴の单于に次ぐ地位の者。

★ 塞上曲

塞上の曲

明 謝 秦

秋高沙漠斷鴻哀

秋高くして 沙漠 斷鴻哀し

大將旗翻風色來

大將旗 翻りて 風色來る

落日半天追虜騎

落日 半天 虜騎を追い

彎弓直過李陵臺

弓を彎 っ て 直ちに過ぐ 李陵台

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○斷鴻：群れから離れた孤独な雁。○風色：風。○半天：中空。○虜騎：異民族の騎兵。○李陵臺：李陵の墓。所在地不祥。

★ 塞上曲

塞上の曲

明 謝 秦

窮邊寒日慘無光

窮邊の寒日 慘として 光無し

沙草連天走白狼

沙草 天に連なり 白狼を走らす

百戰健兒爭射獵

百戰の健兒 争いて射獵す

秋風躍馬黑山陽

秋風に馬を躍らす 黒山の陽

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○窮邊：荒れ果てた辺塞の地。○沙草：砂に生えた草。○黒山：不祥。普通名詞？。○陽：南側。

★塞上曲

塞上曲

明 謝 秦

暮雲點澹壓邊樓

暮雲 点澹てんたんとして 辺楼へんろうを圧す

雪滿黄河凍不流

雪は黄河に満ちて 凍りて流れず

野燒連山胡馬絶

野燒 連山 胡馬絶え

何人月下唱涼州

何人か 月下に 涼州りょうしゅうを唱う

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○點澹：暗いさま。○邊樓：辺塞地の城楼。○野燒：野火。○胡馬：異民族の騎馬兵。○涼州：涼州詞。樂府題の曲。

★塞上曲

塞上の曲

清 黄 伯

黄雲隴水起邊聲

黄雲 隴水ろうすい 辺声起る

白草寒沙接塞城

白草 寒沙 塞城さいじょうに接す

征雁不來鄉信斷

征雁せいがん 来らず 郷信きょうしん断ゆ

月明空照漢家營

月明 空しく照らず 漢家の營

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○黄雲：黄色い雲、黄塵を巻き上げた雲。○隴水：甘肅省にある川。黄河上流の支流の一になる。○邊聲：辺境の地における胡笳、画角などの音。○白草：枯れて白くなった草。○塞城：城塞。○征雁：渡り鳥の雁。手紙を運ぶという。蘇武の故事。○郷信：家郷からの便り。○漢家：ここでは清王朝。○營：軍營。

★ 塞上曲

塞上の曲

清 王昶

軍符昨日下西京
都護行邊事遠征
鼓角風高秋出塞
旌旗月冷夜移營

軍符 昨日 西京に下る
都護 辺に行き 遠征を事とす
鼓角 風高くして 秋に塞を出で
旌旗 月冷かにして 夜営を移す

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○軍符：軍を発する命令の爲の割り符。○西京：不確定。西域の都護府の意味？○都護：軍隊を率いて一地方を鎮め守る官職。○旌旗：旗と幟の総称。軍士。○營：軍營。

★ 塞上曲

塞上の曲

清 王昶

絶塞秋高萬馬霜
邊城寒色晚蒼蒼
夜深明月横滄海
獨上高臺望故郷

絶塞 秋は高し 万馬の霜
辺城の寒色 晩に蒼々たり
夜深くして 明月 滄海に横わる
ひとり 高台上りて 故郷を望む

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○絶塞：究極の遠さにある塞。○寒色：寒々とした気配、景色。○蒼蒼：空などの青青としたさま。○滄海：大海。

★塞上曲

塞上の曲

清 王昶

羽林十萬盡橫戈
不許天驕更請和
纔捲旌旗臨上郡
前軍已渡白狼河

羽林 十萬 尽く戈を横う
許さず 天驕の更に和を請うを
纔に旌旗を捲いて上郡に臨む
前軍 已に渡る 白狼河

【語釈】

○塞上曲…樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○羽林…近衛兵。○天驕…匈奴のこと。○旌旗…旗の総称。○上郡…陝西省北部。○白狼河…不祥。

★塞上曲

塞上の曲

清 王昶

颯颯飛霜點鉄衣
親提一旅破重圍
沙上日暮黄雲合
獨斬樓蘭報捷歸

颯々たる 飛霜 鉄衣に点ず
親しく 一旅を提し 重圍を破る
沙上 日暮 黄雲合す
独り 楼蘭を斬りて 捷を報じて帰る

【語釈】

○塞上曲…樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○颯颯…風がさつと吹くさま。○鉄衣…鉄のよろい。○黄雲…黄色い雲、黄塵を巻き上げた雲。○楼蘭…新疆ウイグル自治区、ロプノール湖の西にあった小独立国。

★塞上曲

塞上の曲

清 楊 涵

斷梗飛蓬帶雪殘 斷梗 飛蓬 雪を帯びて残す
高臺倒射北風寒 高台 倒射し 北風寒し
須知恩婦樓頭月 須く知るべし 恩婦樓頭の月
不及征人馬上看 及ばず 征人の馬上に看るに

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○斷梗：ちぎれたヤマニレ。○飛蓬：根がちぎれて風に飛ばされるヨモギ。○残：損なわれる。○恩婦樓：不祥。

★塞上曲

塞上の曲

清 楊 涵

點點哀鴻沒遠空 点々たる 哀鴻 遠空に没し
牧兒歸去背鵬弓 牧兒 歸り去りて 鵬弓を背う
晚來畧看風沙息 晚來 略ぼ看る 風沙の息を
疑貢城邊夕照紅 疑貢城邊 夕照紅なり

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○點點：小さい物が多くあるさま。○哀鴻：哀れに見える雁。○牧兒：牧童。○鵬弓：精美な弓。○晚來：夜になつてから。○風沙：大風が砂を捲き上げること。○疑貢城：不祥。

★ 塞上曲送王元美

塞上の曲 王元美を送る

清 李燮龍

西出居庸大漠開

西のかた 居庸を出ずれば 大漠開く

胡塵遙暗白登臺

胡塵 遙かに暗し 白登臺

愁看塞上蕭條色

愁い 看る 塞上 蕭條の色

落日秋風萬里來

落日 秋風 万里來る

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○王元美：王世貞。明を代表する詩人。江蘇省蘇州の人、嘉靖二十六年の進士、刑部尚書に到る。李燮龍とは友人関係。○居庸：薊門関、天津市最北部に位置した関所？○大漠：大砂漠。○胡塵：異民族居住地の土埃。○白登臺：不祥。○蕭條：もの静かなさま。

★ 塞上曲送王元美

塞上の曲 王元美を送る

清 李燮龍

白羽如霜出塞寒

白羽 霜の如く 出塞寒し

胡烽不斷接長安

胡烽 断えず 長安に接す

城頭一片西山月

城頭 一片 西山の月

多少征人馬上看

多少の征人 馬上に看る

【語釈】

○塞上曲：樂府題。塞上は、辺境の塞のあたりの意。○王元美：王世貞。明を代表する詩人。江蘇省蘇州の人、嘉靖二十六年の進士、刑部尚書に到る。李燮龍とは友人関係。○白羽：将帥が持つ指揮旗。○胡烽：異民族居住地の烽。○多少：多く。○征人：出征兵士。

★ 塞上聞吹笛

塞上にて吹笛を聞く

唐 高適

雪淨胡天牧馬還

雪淨くして胡天牧馬還り

月明羌笛戍樓間

月は明かに羌笛戍樓の間

借問梅花何處落

借問す梅花何れの処にか落つる

風吹一夜滿關山

風吹きて一夜関山に満つ

【語釈】

○淨：きよらかである。○胡天：えびすの地の空。○牧馬：飼養している馬。○還：（出かけていったものが）かえる。○羌笛：西方異民族（チベット系）の吹く笛。○戍樓：辺境防備用の望楼。○借問：ちよつと質問する。○關山：関所となるべき要害の山。
（参考文献） 『唐詩選』

★ 隴西行

隴西行

唐 陳陶

漢主東封報太平

漢主 東封して 太平を報ず

無人金闕議邊兵

人の 金闕に辺兵を議する無し

縱饒奪得林胡塞

縦饒 林胡の塞を奪い得ても

磧地桑麻種不生

磧地の桑麻種 生ぜず

【語釈】

○隴西行：樂府題、隴西（甘肅省西部）の歌。○東封：匈奴を東の国に封じ、和睦が成立したこと。○金闕：宮城。邊兵：匈奴との戦い。○縦饒：縦令と同じ、「たとい」と読み、「たとえりしても」の意。○林胡塞：匈奴の塞、位置不明。○磧地：砂漠の地。

★ 隴西行

隴西行ろうせいぎょう

唐 陳陶

誓掃匈奴不顧身
五千貂錦喪胡塵
可憐無定河邊骨
猶是春閨夢裏人

匈奴を掃はらわんと誓ちかつて身を顧かえりみず
五千の貂てんじき錦こじん 胡塵こじんに喪なう
憐むていむべし 無定河むていかへん辺の骨
猶しゅんけいお是れ 春閨むり夢裏の人

【語釈】

○隴西行：樂府題、隴西（甘肅省西部）の歌。○掃：討ち滅ぼす。○貂錦：美しい軍装の兵士。○胡塵：異民族が攻めてくる土埃。無定河：内モンゴルオルドス砂漠から始まり、南に黄土峡谷と農地に流れ込む。下流部は天井川をなし、河道が移動して、流路が定まらないため〈無定河〉と呼ばれていた。○春閨：艶めかしい婦人の部屋。

（参考文献） 『唐詩三百首』

★ 隴西行

隴西行ろうせいぎょう

唐 陳陶

點虜生擒未有涯
黑山營陣識龍蛇
自從貴主和親後
一半胡風似漢家

點虜かつりよ 生擒せいきん 未だ涯がい有らず
黑山の營陣 竜蛇を識る
貴主 和親の後より自從
一半の胡風 漢家に似たり

【語釈】

○隴西行：樂府題、隴西（甘肅省西部）の歌。○點虜：狡猾な敵人。○生擒：捕虜。○黑山：遼寧省錦州市黑山県。○龍蛇：勝者と敗者。○貴主：外国の国王への尊称。○自從：「より」と読み「くして以来」の意。○一半：二分の一。○胡風：異民族の風習。

★涼州詞

涼州詞 りょうしゅうし

唐 王翰

葡萄美酒夜光杯

葡萄の美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催

飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す もよお

醉臥沙場君莫笑

酔うて 沙場に臥す 君笑うこと莫かれ さしやう

古來征戰幾人回

古來 征戰 幾人か回る かえ

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○葡萄美酒：西域産の葡萄酒。○夜光杯：わずかな光で輝く、ガラス、白玉製の杯。○催：せきたてるように弾く。うながすという読み方もある。○沙場：砂漠の土の上。○征戰：戦に行くこと。

（参考文献）

『唐詩選』

★涼州詞

涼州詞 りょうしゅうし

唐 柳中庸

關山萬里遠征人

関山 万里 遠征の人

一望家山淚滿巾

一望 家山 涙中に満つ きん

青海戍頭空有月

青海 戍頭 空しく月有り じゅとう

黃沙磧裏本無春

黃沙 磧裏 本より春無し せきり

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○關山：関所のある山。○家山：家郷の山。○青海：青海湖。青海省にある中国最大の湖。○戍頭：守備地の上。○磧裏：砂漠の中。

★涼州詞

涼州詞 りょうしゅうし

唐 王之渙

黄河遠上白雲間

黄河遠く上る白雲の間

一片孤城萬仞山

一片の孤城 万仞ばんじんの山

羌笛何須怨楊柳

羌笛きやうてき 何んぞ須もちいん 楊柳を怨むを

春光不度玉門關

春光度らず 玉門関

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○一片：ぼつんと一つあるさま。○孤城：ぼつんと一つだけの城塞。○萬仞：非常に高いこと。○羌笛：西方のチベット系の人の吹く笛。○楊柳：『折楊柳』の曲調、別離の曲。

（参考文献） 『唐詩選』

★涼州詞

涼州詞 りょうしゅうし

唐 張籍

邊城暮雨鴈飛低

辺城 暮雨 鴈の飛ぶこと低し

蘆筍初生漸欲齊

蘆筍ろじゆん 初めて生じ 漸ようやく齊せいわんと欲す

無數鈴聲遙過磧

無數の鈴声 遙かに 磧せきを過ぐ

應馱白練到安西

應まさに 馱白たはくをして 安西あんせいに到らしむべし

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○邊城：辺地にある街。○漸：だんだんと。○しだいしだいに。○鈴声：隊商の馬、駱駝に付けた鈴の音。○磧：砂漠。○應：「まさにくすべし」と読み「きつとくであるに違いない」の意。○白練：白色の練り絹。○安西：安西（トルファン市、クツチャ市一帯）の都護府。

★涼州詞

涼州詞

唐 張籍

鳳林關裏水東流

鳳林関裏水東流す

白草黃榆六十秋

白草黄榆六十秋

邊將皆承主恩澤

辺將皆主の恩沢を承わり

無人解道取涼州

人の涼州を取るを解道する無し

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○鳳林関：甘肅省臨夏市の東北、黄河の南岸にあった関所。○白草：寒さのため白く枯れた草。○黄榆：葉の黄ばんだニレの木。○六十秋：六十年。○解道：理解する。○取涼州：涼州を攻め取る。

（参考文献）

『唐詩選』

★涼州詞

涼州詞

明 胡侍

落日黃河水倒流

落日黄河水倒しまに流る

沙場旌旆風悠悠

沙場の旌旆風悠悠

新降胡奴不解語

新たに胡奴を降せども語を解せず

笛中吹出古涼州

笛中吹き出す古涼州

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○沙場：砂漠。○旌旆：戦争用の旗。○悠悠：他と関わりなくのんびりしたさま。○胡奴：敵の異民族。○古涼州：古い涼州の歌。

★涼州詞

涼州詞

明 王毓德

風捲狼烟塞日曛

風は狼煙を捲き塞日曛ず

流泉愁向隴山聞

流泉愁いて隴山に向いて聞く

玉門關外遙西望

玉門關外遙かに西望すれば

漠漠黃砂接白雲

漠々たる黃砂白雲に接す

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○狼烟：烽火の煙。○塞日：要塞にかかる日。○流泉：泉から湧いて流れる水。○隴山：陝西・甘肅両省境中部、陝西省隴県の西北にある山。○漠漠：一面に続いているさま。

★涼州詞

涼州詞

明 徐勃

隴水秋風胡雁鳴

隴水 秋風 胡雁鳴く

戍樓羌笛動邊聲

戍樓の羌笛 辺声を動かす

朔雲萬里無青草

朔雲 万里 青草無く

唯見黃沙接渭城

唯だ見る 黃沙の渭城に接するを

【語釈】

○隴水：渭水のこと。西安の近くを東流する黄河最大の支流。○胡雁：異民族の地の雁。○戍樓：要塞の物見櫓。○羌笛：異民族の笛の音。○朔雲：北方の雲気。○渭城：現在の西安空港のあるところ。

★涼州詞

涼州詞

明 徐勃

雪消城窟水潺湲
 雪消えて 城窟水 潺湲たり
 月照黄榆飲馬還
 月は黄榆を照らして 馬に飲いて還る
 烽火臺前聞曉角
 烽火台前 曉角を聞く
 思郷悵望漢關山
 思郷 悵望す 漢の関山

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌○城窟：万里の長城のあたりの泉水。○潺湲：浅い水の流れるさま。さらさら。○黄榆：葉の黄ばんだニレの木。○曉角：夜明けを告げる角笛。○悵望：悲しい気持で眺めやる。○關山：関所のある山。

★涼州詞

涼州詞

清 傅昂霄

九月霜高塞草腓
 九月霜 高くして 塞草腓る
 征鴻無數向南飛
 征鴻 無数 南に向って飛ぶ
 深閨莫道秋砧冷
 深閨 道う莫かれ 秋砧冷ゆと
 夜夜寒光滿鐵衣
 夜々 寒光 鉄衣に滿つ

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○塞草：寒の周りの草。○征鴻：空を渡る雁。○深閨：女性の部屋（にいる妻）。○秋砧：秋に衣を打つ砧。

★涼州詞

涼州詞 りょうしゅうし

清 黄文連

營門鼓角夜蒼茫

營門の鼓角 夜 蒼茫そうぼうたり

羌女琵琶斷客腸

羌女きやうじよの琵琶 客かくの腸を斷つ

一曲涼州齊下淚

一曲の涼州 齊ひとしく 涙 下る

李陵臺上月如霜

李陵台上 月 霜の如し

【語釈】

○涼州詞：樂府題。涼州（甘肅省中部）の歌。○蒼茫：薄暗いさま。○羌女：羌族の女。
○涼州：涼州曲。○李陵台：李陵の墓。所在地不祥。

★邊詞

邊詞 へんし

唐 張敬忠

五原春色舊來遲

五原の春色 旧來遅し

二月垂楊未挂絲

二月 垂楊 未だ糸を挂かけず

即今河畔冰開日

即今 河畔 氷開く日

正是長安花落時

正に是れ 長安 花落つる時

【語釈】

○邊詞：邊境を詠んだ詩。○五原：関内道塩州にある町の名。現・陝西省西北部で、寧夏回族自治区と内蒙古自治区との接点近くの地で現・定辺。○春色：春景色。○旧來：もともと、昔から。○二月：陰曆二月で、春も盛りどころ。○掛糸：芽を吹いたしだれ柳の枝が垂れ下がること。○即今：ただいま。○正是：ちようど……である。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 邊庭四時怨

邊庭四時の怨

唐 盧汝弼

春風昨夜到榆關
故國煙花想已殘
少婦不知歸未得
朝朝應上望夫山

春風昨夜 榆関ゆかんに到る
故國の煙花 想おもい已まに残す
少婦は知らず 帰ること未だ得ざるを
朝々 応おこに望夫山ぼうふざんに上るべし

【語釈】

○邊庭：辺地。○四時：四季（この詩は「春夏秋冬」四連作のうち「春」を詠ったもの）。○榆關：北方の辺塞。○煙花：花がすみ。○殘：損なわれる。○少婦：若い妻。○朝朝：毎朝。毎日。○應：「まさにすべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。○望夫山：妻が出征する夫を見送り、そのまま化したものと伝える望夫石のある湖北省武昌の北山。

★ 邊庭四時怨

邊庭四時の怨

唐 盧汝弼

盧龍塞外草初肥
雁乳平蕪曉不飛
鄉國近來音信斷
至今猶自著寒衣

盧竜塞外 草初めて肥ゆ
雁乳 平蕪 曉に飛ばず
郷国 近來 音信断ゆ
今に至るまで 猶自 寒衣を着す

【語釈】

○邊庭：辺地。○四時：四季（この詩は「春夏秋冬」四連作のうち「夏」を詠ったもの）。○盧龍塞：河北省にあった要塞。○雁乳：雁のひな鳥。○平蕪：草木が群生した原野。○郷國：故郷。○猶自：未だ。

★ 邊庭四時怨

邊庭四時怨

唐 盧汝弼

八月霜飛柳半黃

八月霜飛んで柳半ば黄なり

蓬根吹斷雁南翔

蓬根吹断し雁南に翔ぶ

隴頭流水關山月

隴頭の流水関山の月

泣上龍堆望故郷

泣いて竜堆に上り故郷を望む

【語釈】

○邊庭：辺地。○四時：四季（この詩は「春夏秋冬」四連作のうち「秋」を詠ったもの）。○吹斷：風に吹かれてちぎれる。○隴頭：隴山、辺塞の山を指す。○關山：関所のある山。○竜堆：白竜堆の略称。今の新疆ウイグル自治区東部、ロプノール湖の東にある砂漠。

★ 邊庭四時怨

邊庭四時怨

唐 盧汝弼

朔風吹雪透刀瘢

朔風雪を吹いて刀瘢に透る

飲馬長城窟更寒

馬に飲えば長城の窟更に寒し

半夜火來知有敵

半夜火来りて敵有るを知る

一時齊保賀蘭山

一時に齊保す賀蘭山

【語釈】

○邊庭：辺地。○四時：四季（この詩は「春夏秋冬」四連作のうち「冬」を詠ったもの）。○朔風：北風。○刀瘢：刀きず。○長城窟：万里の長城の下にある岩穴。○半夜：真夜中。○火來：のろしの火が伝わってくる。○一時：瞬間的に。○齊保：守備を固める。○賀蘭山：今の寧夏回族自治区の首府銀川市の西北にある山脈。

（参考文献）

『唐詩選』

★ 邊庭四時怨

邊庭 四時の怨

唐

盧汝弼

昨夜西風入戎樓

昨夜 西風 戎樓に入る

前軍移帳急防秋

前軍 帳を移し 急に秋を防ぐ

陰山獵火龍沙月

陰山の 獵火 龍沙の月

併照征人萬里愁

併せ照らす 征人 万里の愁

【語釈】

○邊庭：辺地。○四時：四季（この詩は「春夏秋冬」四連作のうち「秋」を詠ったもの）。○西風：秋風。○戎樓：国境を守る物見やぐら。○防秋：夷狄を防ぐこと。○陰山：陰山山脈のこと。内モンゴル自治区を東西に走る山脈。漢族と匈奴との境界となっていた。○獵火：烽火。○龍沙：北西塞外の砂漠。○征人：遠征の兵士。

★ 邊上聞胡笳

邊上胡笳を聞く

唐 杜牧

何處吹笳薄暮天

何れの処か 笳を吹く 薄暮の天

塞垣高鳥沒狼煙

塞垣 高鳥 狼煙を没す

遊人一聽頭堪白

遊人 一たび聴くも 頭 白くするに堪えたり

蘇武爭禁十九年

蘇武 争か禁えん 十九年

【語釈】

○邊上：辺境の地。○邊上：異民族のあしぶえ。○塞垣：塞のかき。○狼煙：のろし。○蘇武：漢の武帝の臣。匈奴に使用して捕虜となり、十九年間荒れ地で過ごした。

（参考文献）『杜樊川絶句詳解』

★ 邊上作

辺上の作

唐 僧貫休

陣雲忽向沙中起
陣雲忽ち 沙中おに向いて起る
探得胡兵過遼水
胡兵を探し得て 遼水りょうすいを過ぐ
堪嗟護塞征戍兒
嗟さするに堪えたり 塞を護る征戍せいじゆの兒
未戰已疑身是鬼
未だ戦わずして 已に疑う 身は是れ鬼なるを

【語釈】

○邊上…辺境。○陣雲…軍陣に似た重なった雲、戦鬪の起こる前触れとされる。○沙中…砂漠の中。○胡兵…敵である異民族の兵。○遼水…河北省平泉市の麒麟山を源流とし、内モンゴル自治区、吉林省を流れ、遼寧省の渤海に注ぐ河。○征戍兒…国境守備兵。○鬼…死者。

★ 邊城春雪

辺城の春雪

明 王越

二月邊城雪尚飛
二月 辺城 雪 尚お飛び
年年草色見春遲
年々 草色 春を見ること遅し
不知上苑新桃李
知らず 上苑じょうえんの新桃李しんとちり
開到東風第幾枝
開くに到る 東風 第幾枝だいくし

【語釈】

○邊城…辺地にある街。○上苑…皇帝の庭園。○東風…春風。○第幾枝…多くの枝。

★ 行邊

辺に行く

明 王庭相

榆林上郡跨雄圖

榆林上郡 雄図に跨がる

況是君王拜鄯都

況んや是れ 君王 鄯都を拜するをや

夜發金符催出塞

夜 金符を発して 出塞を催し

朝開罽帳獻擒胡

朝に 罽帳を開いて 擒胡を献ず

【語釈】

○榆林上郡：陝西省榆林市。○跨雄圖：壮大な計画に乗り出す。○鄯都：漢の景帝時代に酷吏と恐れられた人物。○發金符：皇帝の命令をだすこと。○罽帳：皇帝の寝所に設けられた布のとばり。○擒胡：虜にした異民族。

★ 贈友人邊遊回

友人の辺遊して回るに贈る

唐 馬戴

遊子新從絕塞回

遊子 新たに 絶塞従り回る

自言曾上李陵臺

自ら言う 曾て 李陵台上ると

尊前語盡北風起

尊前 語 尽きて 北風起り

秋色蕭條胡鴈來

秋色 蕭条として 胡鴈来る

【語釈】

○邊遊：辺境の地を巡る。○遊子：旅人。○絶塞：極めて遠い地の寨。○李陵臺：李陵の墓。所在地不祥。○尊前：酒樽の前。酒宴中に。○秋色：秋の気配。秋景色。○蕭條：もとの静かで寂しいさま。○胡鴈：えびすの地方のかり。

★軍城早秋

軍城早秋

唐 嚴 武

昨夜秋風入漢關
昨夜秋風 漢関に入る
朔雲邊月滿西山
朔雲 辺月 西山に満つ
更催飛將追驕虜
更に 飛將を催して 驕虜を追わん
莫遣沙場匹馬還
沙場の匹馬をして 還らしむる莫かれ

【語釈】

○軍城：軍隊が駐屯している町。○漢関：国境に設けられた唐の関所。○朔雲：北方の雲。○辺月：辺境の月。○西山：四川省成都の西北にある大雪山を指す。○飛將：前漢の武将、李広のこと。○驕虜：驕り高ぶった胡人。○沙場：砂漠。

(参考文献) 『唐詩選』

★奉和嚴大夫軍城早秋 嚴大夫の「軍城早秋」に和し奉つる 唐 杜 甫

秋風裏裏動高旌
秋風 裏々 高旌を動かし
玉帳分弓射虜營
玉帳 弓を分つて 虜營を射る
已收滴博雲間戍
已に 滴博 雲間の戍を収めたり
更奪蓬婆雪外城
更に奪わん 蓬婆 雪外の城

【語釈】

○嫋嫋：風がそよそよと吹く様子。○高旌：高くかかげた大将の旗。○玉帳：將軍の陣営。○虜營：夷狄の陣営。○蓬婆：大雪山、一名蓬婆山。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 磧中作

磧中の作

唐 岑 参

走馬西來欲到天
馬を走らせて 西來 天に到らんと欲す
辭家見月兩回圓
家を辞してより月の 兩回圓かなるを見る
今夜不知何處宿
今夜知らず 何れの処にか宿せん
平沙萬里絶人煙
平沙 万里 人煙 絶ゆ

【語釈】

○磧中作：砂漠の中で作った詩。○西來：西に向かってやってきたこと。○欲到天：今にも天まで届きそうだ。○辞家：家を出てから。○月兩回圓：月が二度満月になった、二か月経過したこと回：二廻りすること。○平沙：砂漠。○人煙：人家から立ち上る炊事の煙。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 夜上受降城聞笛

夜 受降城に上りて 笛を聞く

唐 李 益

回樂峰前沙似雪
回樂峰前沙 雪に似たり
受降城外月如霜
受降城外 月霜の如し
不知何處吹蘆管
知らず 何れの処か 蘆管を吹く
一夜征人盡望鄉
一夜 征人 尽く 郷を望む

【語釈】

○受降城：漢の武帝の時、將軍公孫敖が匈奴の降伏を受けるために築いた城。位置不確定。○回樂峰：受降城の近くにあった山。○蘆管：あしぶえ。○征人：遠征の兵士。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 寓懷

寓懷くわかい

唐 高駘

關山萬里恨難銷
關山 万里 恨み銷じ難し
鐵馬金鞭出塞遙
鐵馬 金鞭 塞を出でて遙かなり
爲問昔時青海畔
為に問う 昔時 青海の畔
幾人歸到鳳林橋
幾人か 歸りて到る 鳳林橋

【語釈】

○寓懷：思いを寄せる。○關山：関所のある山。○鉄馬：鉄の鎧を着た馬。○金鞭：鞭の美称。○青海：青海湖。青海省にある中国最大の湖。○鳳林橋：不祥。

★ 九日作

九日きゅうじつの作

唐 王縉

莫將邊地比京都
辺地を將つて 京都に比ぶる莫かれ
八月嚴霜草已枯
八月 嚴霜 草 已に枯る
今日登高樽酒裏
今日 登高 樽酒の裏
不知能有菊花無
知らず 能く菊花の有るや無きやを

【語釈】

○九日：旧曆九月九日。重陽の節句。○京都：長安。○登高：重陽の節句に高所に登って菊酒を飲み、邪気を払う習慣。

★ 奉和裴相公東征途經女几山下作

唐 韓愈

裴相公の「東征の途にて女几山下を経て作る」に和し奉る

旗穿曉日雲霞雜

旗は 曉日ぎやうじつを穿うがつて 雲霞うんかま雜まじわり

山倚秋空劍戟明

山は 秋空しゅうくうに倚よりて 劍戟けんかく 明あかなり

敢請相公平賊後

敢あて請まねう 相公しやうこう 賊ぞくを平なげて後

暫攜諸吏上崢嶸

暫しばらく諸吏しよりを携もつて 崢嶸そうこうに上あられんことを

【語釈】

○裴相公：裴度。山西省運城市の人。七八九年の進士、同中書門下平章事となり、戦功により晋国公に封ぜられた。韓愈は行軍司馬として、吳元済の乱を鎮圧する裴度の軍に従っていた。○女几山は：中宜陽県にある山。○劍戟：劍と矛。兵器。○相公：裴度。○崢嶸：険しい山。女几山のこと。

(参考文献)

『漢詩大系』

★ 凱歌

凱歌がいか

唐 岑參

官軍西出過樓蘭

官軍 西に出いでて 樓蘭ろうらんを過くぎ

營幕傍臨月窟寒

營幕えいぼく 傍かたいて 月窟げつくつに臨まんで寒さし

蒲海曉霜凝馬尾

蒲海ほかいの曉霜ぎやうせつ 馬尾ばびに凝こり

蔥山夜雪撲旌竿

蔥山そうざんの夜雪やせつ 旌竿せいかんを撲うつ

【語釈】

○樓蘭：新疆ウイグル自治区、ロプノール湖の西にあった小独立国。○營幕：野外で宿泊するためのテント。○蒲海：新疆ウイグル自治区にある巴裏坤湖。○蔥山：パミール高原。○旌竿：軍旗の旗竿。

★ 凱歌

凱歌

唐 岑 參

暮雨旌旗溼未乾
暮雨 旌旗 溼て 未だ乾かず
胡煙白草日光寒
胡煙 白草 日光寒し
昨夜將軍連曉戰
昨夜 將軍 曉に連りて戦い
蕃軍只見馬空鞍
蕃軍 只だ見る 馬の空鞍なるを

【語釈】

○旌旗…軍用の旗。○胡煙…異民族の地の砂煙。○白草…枯れて白くなった草。○蕃軍…異民族の敵軍。○蕃軍…乗り手が殺されて空になった鞍。

★ 凱歌

凱歌

唐 岑 參

日落轅門鼓角鳴
日落ちて 轅門 鼓角鳴る
千群面縛出蕃城
千群 面縛して 蕃城を出ず
洗兵魚海雲迎陣
兵を洗い 魚海 雲陣を迎う
秣馬龍堆月照營
馬に秣かえば 龍堆 月 營を照らす

【語釈】

○轅門…將軍の宮門。○鼓角…太鼓と角笛。○面縛…投降。○蕃城…敵の異民族の寨。○魚海…湖の名。不祥。○龍堆…白龍堆。西域の砂漠。

★凱歌

凱歌

宋 楊景

旌旗風暖颺春暉
旌旗風暖かにして 春暉を颺ぐ
的皦寒光照鐵衣
寒光を的皦して 鉄衣を照らす
壯士銜枚聽傳令
壯士枚を銜えて 伝令を聴く
邊鴻敢傍陣雲飛
邊鴻 敢えて 陣雲に傍いて 飛ぶ

【語釈】

○旌旗：軍旗。○春暉：春日の陽光。○的皦：鮮明にする。○鉄衣：鉄の鎧。○枚：言葉
を発しないように口に銜える箸のようなもの。○邊鴻：辺境の雁。

凱歌

凱歌

明 沈明臣

銜枚夜度五千兵
枚を銜えて 夜に度る 五千の兵
密領軍符號令明
密かに軍符を領し 号令明らかかなり
狹巷短兵相接處
狹巷 短兵 相接する處
殺人如草不聞聲
人を殺すこと 草の如く 声を聞かず

【語釈】

○枚：言葉を発しないように口に銜える箸のようなもの。○軍符：兵を徴集するときに使
われた割り符。○狹巷：狭い道。○短兵：劍などの短い武器。

★ 大金川凱歌

大金川 凱歌

清 黄文連

平沙萬幕塵雲高
塞外風霜上戰袍
狂寇千群須面縛
元戎下令蕭秋毫

平沙 万幕 塵雲高し
塞外の風霜 戦袍に上る
狂寇 千群 須く面縛すべし
元戎 令を下して 秋毫 蕭たり

【語釈】

○大金川：四川省西北部にある川。○平沙：砂漠。○万幕：多くの陣幕。○戦袍：戦闘用の衣服。○狂寇：狂った外敵。○須：「すべからくすべし」と読み、「必ずしななければならぬ」の意。○元戎：主将。○秋毫：秋毫侵犯。少しも違反しないこと。

★ 永王東巡歌

永王東巡歌

唐 李白

丹陽北固是吳關
畫出樓臺雲水間
千巖烽火連滄海
兩岸旌旗繞碧山

丹陽の北固は 是れ吳関
画き出す楼台 雲水の間
千巖の烽火 滄海に連り
兩岸の旌旗 碧山を繞る

【語釈】

○永王：李璘、肅宗の弟。水軍を任され南方の鎮圧に当たった。○東巡：東方を巡察する。○丹陽：江蘇省鎮江市。○北固：江蘇省鎮江市の東北にある山。○吳関：吳の地方の関所。○千巖：多くの岩山。○烽火：烽火台。○旌旗：戦の旗。

(参考文献) 『漢詩大系 8』

★ 按部道中

按部道中 あんぶどうちゆう

金 蕭 貢

寒城睥睨插山隅

寒城 睥睨 へいげいし 山隅に挿す

秋半霜風塞草枯

秋 半ばにして 霜風 塞草 さいそう枯る

月轉譙樓天未曉

月は譙樓に転じて 天 未だ 曉 あかつきならず

角聲吹徹小單于

角声 吹徹 すいてつす 小單于 しょうぜんう

【語釈】

○按部…不祥。○睥睨…見下ろす。○塞草…寒の周りの草。○譙樓…城門の上の見晴台。
○角声…角笛の音。○吹徹…大いに吹く。○小單于…大きな角笛の曲名。

★ 漠北詞

漠北詞 ばくほくし

明 謝 榛

大漠蕭蕭黑水流

大漠 蕭々 たいばく しょうしょうとして 黒水流る

健兒七月換羊裘

健兒 七月 羊裘 けんじ しちがつ ようきゅうを換う

駱駝背上吹蘆管

駱駝背上 蘆管 らくだせじょう ろかんを吹く

日暮長風動地秋

日暮れて 長風 地を動かして 秋なり

【語釈】

○漠北…蒙古大砂漠以北の地。○蕭蕭…物寂しい様、音の形容。○羊裘…羊のかわごろも。○蘆管…あしぶえ。○長風…大風。

★ 漠北詞

漠北詞 ぼくほくし

明 謝榛

石頭 敲火炙黃羊

石頭 火を敲こして 黃羊あぶを炙る

邊女 低歌勸酪漿

邊女 低歌し 酪漿らくじょうを勸む

醉殺 群胡不知夜

醉殺すいさつ 群胡ぐんこ 夜を知らず

鶴兒 嶺下月如霜

鶴兒ようじ 嶺下れいか 月霜の如し

【語釈】

○漠北：蒙古大砂漠以北の地。○敲火：火打ち石で火をおこす。○黃羊：野生の羊の一種。○邊女：辺境の女。○酪漿：動物の乳で造った酒。○醉殺：泥酔。○鶴兒嶺：不祥。

★ 雲中曲

雲中曲 うんちゆう

明 李夢陽

黑帽健兒黃貉裘

黒帽の健兒 こうかく 黃貉かむころもの裘

匹馬追胡紫塞頭

匹馬 胡を追う 紫塞しさいの頭ほどり

相逢不肯通名姓

相逢いて 肯えて 名姓を通ぜず

但稱家住古雲州

但だ称す 家は 古雲州こうんしゆうに住むと

【語釈】

○雲中：山西省大同市地方。○黃貉裘：黄色いむじなのかわごろも。○匹馬：一頭の馬。○紫塞：塞。紫は黄の対として使った。○古雲州：江蘇省鎮江市丹陽市。

★ 征夫怨

征夫の怨うらみ

明 王野

黄雲白草没燕山

黄雲 白草 燕山えんざんを没す

百戰空存兩鬢斑

百戰 空しく存す 兩鬢はんの斑

不識征夫三十萬

識らず 征夫せいふ 三十萬

幾人生入玉門關

幾人か生きて 玉門関に入るかを

【語釈】

○征夫：出征の兵士。○黄雲白草：辺塞地の風景の形容。風によって捲き上げられる黄砂と枯れて白くなった草。○燕山：辺塞の地をいう。

★ 關山月

關山月

明 林世薛

北塞西山青海灣

北塞 西山 青海灣

夜懸明鏡玉門關

夜 明鏡を懸かく 玉門関

那堪千里沙場影

那なんぞ堪えんや 千里 沙場さじょうの影

十萬征人尚未還

十萬の征人 尚お 未だ還らず

【語釈】

○關山月：樂府題、横笛の曲。辺塞の関所のある山に懸かる月を詠ったもの。○青海：青海湖。青海省にある中国最大の湖。○明鏡：明月。○沙場：沙漠。○征人：遠征の兵士。

★ 夜宿榆關

夜 榆關ゆかんに宿す

明 襲用卿

海天長望戎樓間
烽火荒原隔暮山
永夜朔風傳漏鼓
邊城明月照榆關

海天長望す 戎樓の間
烽火 荒原 暮山を隔つ
永夜 朔風 漏鼓を伝う
辺城の明月 榆關ゆかんを照らす

【語釈】

○榆關：北方の辺塞。○長望：遠望。○戎樓：塞の見張りやぐら。○烽火：のろし。○朔風：北風。○漏鼓：水時計の鼓。○辺城：辺塞の街。

★ 渡榆關

榆關を渡る

明 襲用卿

朔漠風高草木枯
桓桓騎士列前驅
夜歸雪滿弓刀白
羌笛一聲山月孤

朔漠風 高くして 草木枯る
桓桓かんかんたる 騎士ぜんく 前驅ぜんくに列す
夜歸れば 雪 満ちて 弓刀白し
羌笛きやうてき 一声 山月孤なり

【語釈】

○榆關：北方の辺塞。○朔漠：北方の大砂漠。○桓桓：勇猛な。○前驅：さきがけ。○羌笛：チベット民族の笛。

★ 哀蜀人爲南詔俘虜

蜀人の南詔の俘虜と爲るを哀れむ

唐 雍陶

雲南路出洱河西

雲南路は出ず 洱河の西

毒草長青瘴色低

毒草 長青し 瘴色低し

漸近蠻城誰敢哭

漸く 蠻城に近く 誰か敢えて哭せん

一時收淚羨猿啼

一時 涙を収め 猿啼を羨やむ

○南詔：∞世紀半ば、雲南地方のに勃興したチベット・ビルマ語族の王国。○俘虜：捕虜。○雲南路：山東省青島市雲南路。○洱河：雲南省大理市を流れる川。○瘴色：熱病の元なる空気。○漸：だんだんと。しだいしだいに。○蠻城：野蠻人の街。○猿啼：猿の鳴き声。悲しみを誘うとされる。

★ 城南書事

城南書事

明 趙犴

三年爲客寄龍沙

三年 客と爲り 龍沙に寄る

望斷南雲不見家

望斷して 南雲 家を見ず

惟有受降城外月

惟だ 受降城外の 月のみ有りて

照人清淚落胡笳

人の 清淚の 胡笳に落つるを照らす

【語釈】

○龍沙：白龍堆。新疆ウイグル自治区南東部から甘肅省最西部一帯に広がる砂漠。○望斷：目の届く限り見渡す。○受降城：漢の武帝の時、將軍公孫敖が匈奴の降伏を受けるために築いた城。位置不確定。○胡笳：異民族。

★ 賊平

賊平らぐ

明 陸之裘

波浪兼天寇盜窮

波浪 天を兼ね 寇盜窮まる

將軍乘勝奏虜功

將軍 勝に乘じ 虜功を奏す

三年戎馬關河月

三年 戎馬 関河の月

不及狼山一夜風

及ばず 狼山 一夜の風に

【語釈】

○寇盜：盜賊。○虜功：捕虜を得た功績。○戎馬：戦争。○關河：関山（国境の山）と河。○狼山：不祥。

★ 感懷

感懷

明 沈鍊

割生獻馘古來無

生を割り 馘を獻ずること 古來無し

解道功成萬骨枯

解道す 功成つて 万骨枯るを

白草黄沙風雨夜

白草 黄沙 風雨の夜

冤魂多少覓頭顱

冤魂 多少 頭顱に覓む

【語釈】

○割生：殺す。○馘：取った首の代わりにする耳。○解道：理解する。○白草：枯れて白くなった草。○黄沙：風によって巻き上げられる黄塵。○冤魂：怨みをもった死者の魂。○多少：多く。○頭顱：髑髏。

★ 贈蕭大將軍移鎮漁陽

蕭大將軍が鎮漁陽に移るに贈る

明 張以誠

鳴沙城北接雲中

鳴沙城北 雲中に接し

千里飛狐一道通

千里の飛狐 一道通ず

十萬健兒齊上馬

十萬の健兒 齊しく馬に上り

旌旗獵獵動秋風

旌旗 獵々として 秋風に動く

【語釈】

○蕭大將軍…不祥。○鎮漁陽…天津市地方を統括する軍営。○鳴沙城…寧夏省中衛市鳴沙鎮。○飛狐…河北省保定市涑源鎮。○旌旗…軍隊の旗。○獵獵…物の翻るさま。

★ 答郭中丞

郭中丞に答う

明 李化龍

橫磨十萬吐霜花

橫磨 十萬 霜花を吐く

風攪軍聲咽暮笳

風は 軍声を攪し 暮笳に咽ぶ

越甲方鳴寧愛死

越甲 方に鳴き 寧ろ死を愛す

匈奴未滅敢言家

匈奴 未だ滅せず 敢えて家を言う

【語釈】

○郭中丞…不祥。○橫磨…橫磨劍、長くて大きな劍。精銳な兵士のたとえ。○霜花…冷たく光る劍の光。○暮笳…日暮れに聞こえるあしぶえ。○越甲…鎧を着た兵士。

★ 答寄延綏王中丞

延綏王中丞に答寄す

明 王世貞

中丞繡斧下青霄

中丞の繡斧 青霄より下る

十萬軍聲靜不囂

十萬の軍聲 静にして囂しからず

何限五原春草色

何限の五原 春草の色

莫令胡馬向秦驕

胡馬をして秦驕に向わしむ莫かれ

【語釈】

○延綏王中丞：不祥。○中丞：御史大夫（官吏を弾劾する役所の長官）の補佐役。○繡斧：地方巡察者が着る衣服と持つ斧。○青霄：帝都。○何限：無限。○五原：内蒙古自治区五原県。○胡馬：異民族の馬。○秦驕：関中の大きな馬？

★ 雁門作

雁門の作

明 屈大均

三年作客傍滹沱

三年 客と作り 滹沱に傍う

聽盡哀笳出塞歌

聴き尽す 哀笳 出塞の歌

白髮不愁明鏡滿

白髮 愁えず 明鏡に満つるを

秋霜只怨雁門多

秋霜 只だ怨む 雁門に多きを

【語釈】

○雁門：山西省北部。○滹沱：滹沱河、山西省繁峙県から河北省西部を流れる。○哀笳：…哀しいあしぶえの音。○秋霜：…白髪。

★ 晩登寶山鎮海樓

晩に宝山鎮ほんざんちんの海樓かいろうに登る

明 王元勳

危樓斜對夕陽開

危樓斜せに對し夕陽せ開く

水霧濛濛拂面來

水霧濛濛もももとして面を払はつて來る

一隊旌旗塘上轉

一隊の旌旗とうじょう塘上とうじょうに轉まず

將軍海上射鵬回

將軍海上わしに鵬かえを射かえて回かえる

【語釈】

○寶山鎮…不祥。○危樓…立派な樓閣。○濛濛…おぼろげなさま。うすぐらいさま。○旌旗…軍用の旗。

絶句類選標本 八

絶句類選 卷之十五 宮掖類

★ 宮詞

宮詞

唐 顧況

玉樓天半起笙歌

玉樓 天に半ばして 笙歌起り

風送宮嬪笑語和

風 送りて 宮嬪 笑語和らぐ

月殿影開聞夜漏

月殿 影開いて 夜漏を聞き

水精簾卷近銀河

水精の簾 卷いて 銀河近し

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○玉樓：りっぱな御殿。○天半：天のなかば。高殿の高
いさまを謂う。○宮嬪：宮中の女官。○月殿：月の照らしている宮殿の意。○影開：影の
場所が動く。時間の経過の表現。○夜漏：夜の水時計。

★ 宮詞

宮詞

唐 王建

龍煙日暖紫瞳瞳

龍煙りゆうえん 日暖かくして 紫瞳々とうとう

宣政門當玉殿風

宣政門せんせいもんに当る 玉殿の風

五刻閣前卿相出

五刻閣前きよくかく 卿相出で

下簾聲在半天中

簾れんを下し 声は 半天うちの中に在り

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○龍煙：六神の一つ。ここでは、瑞雲のことか？○瞳瞳：日のように光るさま。○宣政門：宣政殿の前側の宮門。○玉殿：宮殿の美称。○五刻：五更。夜明け方。○卿相：高位高官の人。○半天：中空。

★ 宮詞

宮詞

唐 王建

少年天子重邊功

少年の天子 辺功へんこうを重んず

親到凌煙畫閣中

親しく到る 凌煙りょうえん 画閣うちの中

教覓勳臣寫圖本

勳臣くんしんを覓め 図本に写さしむ

長將殿裏作屏風

長えに 將まさに 殿裏でんりに屏風と作なさんとす

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○邊功：辺境のちにおける功績。○凌煙：凌煙閣（唐の太宗が功臣を画かせた建物）の略称。○畫閣：画で飾られた閣。○將：「まさに〜せん」とす」と読み「いまにも〜しそうである」「すぐに〜しよう」の意。○殿裏：宮中。

★宮詞

宮詞

唐 王建

春風吹雨灑旗竿
春風 雨を吹いて 旗竿に灑ぐ
得出深宮不怕寒
深宮 出で得て 寒を怕れず
誇道自家能走馬
誇りて道う 自家 能く馬を走らすと
園中横過覓人看
園中 横過し 人の看るを覓む

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○旗竿…はたざお。

★宮詞

宮詞

唐 王建

御廚不食索時新
御廚 食わず 時新を索む
每見花開即苦春
花の開くを見る毎に 即ち春を苦しむ
白日臥多嬌似病
白日 臥すこと多く 嬌 病に似たり
隔簾教喚女醫人
簾を隔てて 喚ばしむ 女医人

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○御廚…宮中で提供される食物。○時新…時に応じた新鮮な物。○白日…真つ昼間。

★宮詞

宮詞

唐 王建

供御香方加減頻

供御香方きようぎようほう 加減かげん 頻しきりに

水沈山麝每回新

水沈山麝 毎回 新たななり

内中不許相傳出

内中 許さず 相伝の出ずるを

已被醫家寫與人

已に 医家に写して人に与えらる

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○供御香方：皇帝の食事に供する香料や薬草を整える女官。○水沈：沈香。香木的一种。○山麝：麝香。麝の腹からとった香。○内中：皇宮の中。○相傳：調整の仕方の秘伝。○結句：已に秘伝は医者に写し取られて世間に知れ渡っているの意。

★宮詞

宮詞

唐 王建

内人相續報花開

内人 相い続いて 花の開くを報ず

准擬君王便看來

准擬じゆんぎす 君王 便ち 看来るを

逢著五弦紅繡袋

逢著ほうちやくす 五弦 紅繡こうしゆうの袋

宜春院裏按歌回

宜春院裏ぎしゆんいんり 歌を按あんじて回かえるならん

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○内人：宮中の女官。○君王：皇帝。○准擬：推し量る。○逢著：出会う。○五弦：五弦琴。○宜春院：宮中の女官の住まい。

★宮詞

宮詞

唐 王建

金吾除夜進儺名

金吾 除夜に儺名を進む

畫袴朱衣四隊行

画袴 朱衣 四隊行く

院院燒燈如白日

院々 焼灯 白日の如く

沈香火底坐吹笙

沈香 火底に坐して笙を吹く

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○金吾：執金吾、首都警備隊長。○儺名：おにやらいを行う人の名簿。○畫袴朱衣：綺麗な袴と朱色の衣。○院院：家家。○沈香火底：沈香（香木の一種）が燃える傍ら。

（参考文献）『三体詩』

★宮詞

宮詞

唐 王建

五更初起覺風寒

五更 初めて起き 風の寒きを覚ゆ

香炷燒來夜已殘

香炷 焼き来りて 夜 已に残す

欲卷珠簾驚雪滿

珠簾 卷かんと欲して 雪の満つるに驚く

自將紅燭上樓看

自ら 紅燭を將つて 楼に上りて看る

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○五更：夜明け前。○香炷：香を焚くこと。○殘：尽きようとしているさま。○珠簾：たまたすだれ。

★宮詞

宮詞

唐 杜牧

銀燭秋光冷畫屏

銀燭 秋光 画屏冷え

輕羅小扇撲流螢

輕羅の小扇 流螢を撲つ

玉階夜色涼如水

玉階の夜色 涼きこと 水の如し

臥看牽牛織女星

臥して看る 牽牛織女星

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○銀燭：白いロウソク。○秋光：秋の景色。○畫屏：絵が描かれている屏風。○輕羅小扇：薄絹を張った軽やかなおうぎ。○流螢：飛び交うホタル。○天階：宮中のきざはし。○夜色：夜の景色。

(参考文献)

『唐詩三百首』

★宮詞

宮詞

唐 李商隱

君恩如水向東流

君恩 水の如く 東に向って流る

得寵憂移失寵愁

寵を得て 移るを憂い 寵を失うを愁う

莫向尊前奏花落

尊前に向いて 花の落つるを奏する莫かれ

涼風只在殿西頭

涼風 只だ 殿の西頭に在り

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○君恩：皇帝の寵愛。○尊前：宴席。○花落：曲「梅花落」。○西頭：西側のほとり。

★宮詞

宮詞

唐 段成式

二八能歌得進名
二八能く歌い名を進むを得たり
人言選入便光榮
人は言う選入便ち光榮
豈知妃后多嬌妬
あに豈知らんや妃后嬌妬多きを
不許君前唱一聲
許さず君前一声を唱うを

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○二八：十六歳。○進名：皇帝に謁見する人の名簿に載る。○選入：選ばれること。○妃后：皇后、皇妃。○嬌妬：嫉妬。○君前：皇帝の前。

★宮詞

宮詞

唐 韓偓

繡裙斜立正銷魂
繡裙斜に立ち正に銷魂
侍女移燈掩殿門
侍女灯を移して殿門を掩う
燕子不歸花著雨
燕子帰らず花雨を著す
春風應是怨黃昏
春風応に是れ黃昏を怨むべし

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○繡裙：女性の伝統的な衣服。ここでは宮女。○銷魂：魂が消えるほどの悲しさ、寂しさ。○殿門：宮殿の門。○應：「まさにすべし」と読み、「おそろくであるであろう」「たいていのはずである」の意。○黃昏：たそがれ。

★宮詞

宮詞

唐

李建勳

宮門長閉舞衣閑

宮門 長く閉し 舞衣 閑なり

略識君王鬢已斑

略か識る 君王 鬢 已に斑り

却羨落花春不管

却って羨やむ 落花 春管せざるを

御溝流得到人間

御溝に流れ得て 人間に到る

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○舞衣：舞うときの衣裳。○君王：皇帝。○不管：管理しない。○御溝：宮廷の堀。○人間：一般社会。宮廷の外。

★宮詞

宮詞

唐

徐凝

水色簾前流玉箱

水色 簾前 玉箱流る

趙家飛燕侍昭陽

趙家の飛燕 昭陽に侍す

掌中舞罷簫聲絶

掌中舞 罷みて 簫声絶え

三十六宮秋夜長

三十六宮 秋夜長し

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○玉箱：玉で飾った箱。○趙家飛燕：趙飛燕、漢の成帝の寵愛を受け皇后となったが、成帝の死後に庶民に落とされ自殺した。○昭陽：漢の宮殿で妃の住まうところ。○掌中舞：趙飛燕の舞。趙飛燕は軽かったのでこう呼ばれる。○三十六宮：多くの宮殿。

★宮詞

宮詞

唐

徐仲雅

内人曉起怯春寒

内人ないじん 曉あけに起おき 春寒しゅんかんに怯おびゆ

輕揭珠簾看牡丹

輕かろく珠簾しゆりんを掲かげ 牡丹ぼたんを看みる

一把柳絲收不得

一いっ把ぱの柳やなぎ糸いと 収とむるを得えず

和風搭在玉闌干

風かぜに和なして 搭たは 玉闌干ぎよくらんかんに在あり

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○内人…宮中の女官。○春寒…初春のうすら寒さ。○珠簾…玉すだれ。○柳糸…しだれやなぎの枝。○玉欄杆…玉で飾った闌干。

★宮詞

宮詞

宋

韓維

漸暖正當挑菜日

漸暖ぜんだん 正まに当ある 挑菜ちようさいの日

輕陰漸變養花天

輕陰ぜんいん 漸變ぜんへんす 養花やうかの天

君王勤政稀游幸

君王きんぎ 政勤せいぎんし 游幸ゆうこう稀まなり

院院相過理管弦

院々いんいん 相過あぎて 管弦くわんげんを理りす

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○漸暖…段々と暖かくなること。○挑菜日…花神節、花朝節。旧曆二月十二日、十五日。○輕陰…淡い雲。○漸變…段々変化する。○養花天…花曇りの空。○君王…皇帝。○勤政…政治に励む。○游幸…遊びのための御幸。○院院…多くの宮殿。○管弦…管楽器と弦楽器。

★宮詞

宮詞

宋 武衍

梨花風動玉蘭香

梨花 風動いて 玉蘭香ばし

春色沈沈鎖建章

春色 沈々 建章を鎖す

唯有落紅官不禁

唯だ 落紅 官の禁ぜざる有りて

儘教飛舞出宮牆

俛く 飛舞をして 宮牆を出ださしむ

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○玉蘭：白木蓮。○春色：春景色。春の気配。○沈沈：盛んなさま。○建章：建章宮、漢の武帝が長安西に造宮した宮殿。複道によって未央宮と連絡していた。○落紅：落花。○飛舞：飛び舞うこと。○宮牆：宮殿の垣根。

★宮詞

宮詞

宋 許安仁

輕寒慘慘透衾羅

輕寒 慘々として衾羅を透す

玉箭銅壺漏水多

玉箭 銅壺 漏水多し

常是未明供御服

常に是れ 未明 御服を供す

夢回頻問夜如何

夢 回りに頻りに問う 夜如何んと

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○輕寒：微寒。○慘慘：物寂しいさま。○衾羅：掛け布
団と薄物の着物。○玉箭：銅壺中の浮箭の美称。○銅壺：銅製の時計。○御服：皇帝の
服。○夢回：目が覚める。

★宮詞

宮詞

宋 劉克莊

一夜西風入碧梧
蟬聲永巷月華孤
幾回夢裏羊車過
又是銀牀轉轆轤

一夜西風 碧梧へきじに入る
蟬聲 永巷 月華孤げつかなり
幾回か夢裏むり 羊車ようしゃ過ぎ
又た是れ 銀床 轆轤ろくろを転ず

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○西風…秋風。○碧梧…緑色の梧桐樹。○永巷…宮中の長い道。○月華…月光。○夢裏…夢の中。○羊車…裝飾した綺麗な車。宮中で羊に引かせる。○銀床…轆轤を支える棚。

★宮詞

宮詞

宋 楊皇后

瑣窗宮漏滴銅壺
午夢驚回落井梧
風遞樂聲來玉宇
日移花影上金鋪

瑣窓さそう 宮漏きゅうろう 銅壺どうこに滴したたる
午夢 驚き回り 井梧せいに落つ
風は樂聲がくせいを通して 玉宇ぎよくうに來り
日は移り 花影かえい 金鋪きんぽに上る

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○瑣窗…花紋をちりばめた窓。○宮漏…宮中の水時計。○銅壺…銅製の水時計。○驚回…目が覚める。○井梧…井戸の周りにある梧桐の木。○玉宇…佳麗な宮殿。○金鋪…金の門環の台座。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

春風一面曉妝成
偷折花枝傍水行
却被内監遙覩見
故將紅豆打黃鶯

春風一面 曉妝成り
偷ひそかに花枝を折りて水に傍そばいて行く
却かえりつて内監ないかんに遙とほかに覩見そけん被せられ
故ゆゑに紅豆こうとうを將もつて黄鶯こうおうを打うつ

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○曉妝…朝化粧。○内監…宦官の通称。○覩見…窺い見
る。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

侍女争揮玉彈弓
金丸飛入亂花中
一時驚起流鶯散
踏落殘花滿地紅

侍女争ふるい揮きう玉彈弓ぎよくだんゆみ
金丸な飛なび入なる乱花なの中
一時りゆうおうに驚おどき起おき流鶯りゆうおう散ちじ
踏ふみ落おとす殘花ざんか地ちに満みちて紅べになり

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○彈弓…はじき弓（彈丸を飛ばす弓）の美称。○金丸…
金の彈丸。○流鶯…ウグイス。○殘花…散り残りの花。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

内庭秋燕玉池東

内庭 秋燕 玉池の東

香散荷花水殿風

香散じ 荷花 水殿の風

阿監采菱牽錦纜

阿監 菱を采り 錦纜を牽く

月明猶在畫船中

月明 猶お 画船の中に在り

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○内庭…宮城の中。○玉池…池の美称。○阿監…宦官。
○錦纜…錦のとも綱。○畫船…絵で飾った船。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

太液波清水殿涼

太液 波清く水殿涼し

畫船驚起宿鴛鴦

画船 驚起す 宿鴛鴦

翠眉不及池邊柳

翠眉 及ばず 池辺の柳

取次飛花入建章

取次 飛花 建章に入る

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○太液…太液池、漢では長安の西にあり、唐では大明宮の中にあつた。○水殿…水に臨ん殿堂。○畫船…絵で飾った船。○宿鴛鴦…宿っているおしどり。○翠眉…美人。○取次…かりそめに。しばらく。○建章…建章宮、漢の武帝が長安に建てた宮殿。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

釣練沈波漾彩舟
釣練波に沈み彩舟に漾う
魚争芳餌上龍鉤
魚は芳餌を争い龍鉤に上る
内人急捧金盤接
内人急に金盤を捧じて接す
撥刺紅鱗躍未休
撥刺たる紅鱗躍りて休まず

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○釣練：釣り竿の糸。○彩舟：彩られた舟。○芳餌：よい餌。○龍鉤：釣り針の美称。○内人：宮女。○撥刺：魚尾の水をはじく音。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

三清臺近苑牆東
三清台は近し苑牆の東
樓檻層層映水紅
樓檻層々水に映じて紅なり
盡日綺羅人度曲
尽日綺羅人曲に度る
管弦聲在半天中
管弦声は在り半天の中

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○三清臺：大明宮にある宮殿。○苑牆：庭園の垣根。○樓檻：楼の闌干。○層層：幾重にも重なっているさま。○盡日：一日中。○綺羅人：美しい衣裳の人。

★宮詞

宮詞

唐 花蕊夫人

東内斜將紫禁通

東内斜めに紫禁を將いて通ず

龍池鳳苑夾城中

龍池鳳苑夾城の中

曉鐘聲斷嚴妝罷

曉鐘聲断え嚴妝罷む

院院紗窗海日紅

院々の紗窓海日紅なり

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○東内：唐の大明宮。城内の東にある。○紫禁：皇帝の居場所。○龍池：興慶宮内にあった池の名。○鳳苑：皇帝の庭園。○夾城：狭い街。○嚴妝：嚴かな装い。○紗窗：カーテンをした窓。

★宮詞

宮詞

元 迺賢

廣寒宮殿近瑤池

廣寒宮殿瑤池に近く

千樹長楊綠影齊

千樹の長楊緑影齊う

報道夜來新雨過

報道道う夜來新雨過ぐと

御溝春水已平隄

御溝の春水已に隄に平かなり

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○廣寒宮：月の中にあると言われる宮殿。○瑤池：宮城の中にある池。○長楊：長いしだれ柳。○御溝：宮城の堀。

★宮詞

宮詞

明 申屠衡

青鎖春間漏點遲
博山香煖翠煙微
隔簾誰撼金鈴響
知是花間燕子歸

青鎖春間漏点遅し
博山香煖かにして翠煙微なり
簾を隔てて誰か撼かす金鈴の響
知る是れ花間燕子の帰るを

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○青鎖…宮殿。○漏點…水時計の音。○博山…香炉の一種。

★宮詞

宮詞

明 王蒙

南風吹斷采菱歌
夜雨新添太液波
水殿雲廊三十六
不知何處月明多

南風吹断す采菱の歌
夜雨新たに添う太液の波
水殿雲廊三十六
知らず何れの処か月明多きかを

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○南風…夏風。○采菱歌…菱を採るときに歌う歌。○太液…太液池。唐では大明宮の中にあつた。○水殿…水に臨む殿堂。○雲廊…高い楼閣の廊下。○三十六…数多いこと。

★宮詞

宮詞

明 王廷相

雲鬢蛾眉紫鳳笙

雲鬢うんびん 蛾眉がび 紫鳳しほうの笙

三千隊裏獨分明

三千の隊裏たいり 獨り分明

君王莫作尋常看

君王 作なす莫なれ 尋常かんの看

一別昭陽便隔生

昭陽に一別して 便なち生を隔かつ

【語釈】

○雲鬢蛾眉：美人の形容。○紫鳳：伝説中の神鳥の模様。○三千隊裏：多くの後宮の美女の中。○分明：際立つこと。○君王：皇帝。○昭陽：昭陽宮。后妃の住むところ。○一別昭陽：玄宗皇帝と楊貴妃の別れ。「昭陽殿裏恩愛絶，蓬萊宮中日月長。」長恨歌。

★宮詞

宮詞

明 謝榛

鸚鵡喚人池殿東

鸚鵡おうむ 人を喚おぶ 池殿ちでんの東

花開曉日照金籠

花開はないて 曉日ぎょうじつ 金籠きんろうを照あらす

繡簾不捲春將暮

繡簾しゅうれん 捲まかず 春將はるまに暮くれんとす

嬾向玉階掃落紅

嬾ものうく 玉階ぎよくかいに向むいて 落紅らくこうを掃はらう

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○池殿：池に臨んだ殿堂。○金籠：金製の鳥かご。○繡簾：刺繍を施した簾。○將：「まさに〜せんとす」と読み、「いまにも〜しようとしてい」の意。○玉階：玉でできたきざし。○落紅：落花。

★宮詞

宮詞

明謝榛

暁起懶妝眉黛殘

暁に起き 妝よめおうに 懶ものうく眉黛びたいざん殘す

玉階芳草捲簾看

玉階ぎよくかい 芳草うみお 簾すだれを捲いて看る

花間漫撲雙胡蝶

花間みだり 漫うに撲つ 雙胡蝶そうこちょう

宿露偏沾翠袖寒

宿露ひとえ 偏うみおに沾し 翠袖すいしゆう寒し

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○眉黛…眉のまゆざみ。○殘…損なわれる。○玉階…玉
でできたさざはし。○雙胡蝶…つがいの蝶。○宿露…前夜から残っている露。○翠袖…青
緑色の袖。

★宮詞

宮詞

明 謝榛

院院黃花秋色濃

院々の黃花 秋色濃し

幾看青鏡惜芳容

幾たびか 青鏡を看て 芳容を惜しむ

瓊窓忽夢金輿過

瓊窓 忽ち夢む 金輿の過ぐるを

長樂霜寒五夜鐘

長樂 霜は寒し 五夜の鐘

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○院院…多くの宮殿。○黃花…黄色い菊。○秋色…秋景色、秋の気配。○青鏡…青銅製の鏡。○芳容…美しい顔色。○瓊窓…玉の窓枠の窓。○金輿…皇帝の乗った輿。○長樂…漢の宮殿。皇后の住むところ。○五夜…五更。明け方。

★宮詞

宮詞

明 李先芳

緋桃半落柳絲長

緋桃 半ば落ち 柳糸長し

管領東風燕子忙

東風を管領して 燕子忙がし

玳瑁梁間棲不定

玳瑁梁間 棲定らず

又銜春色過昭陽

又た 春色を銜えて 昭陽を過ぐ

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○緋桃…桃花。○管領…すべ納める。○玳瑁梁…梁の美称。○春色…春景色、春の気配。○昭陽…昭陽宮。皇紀の住むところ。○玳瑁梁…梁の美

★宮詞

宮詞

明 徐燧

宮中無復望車塵
宮中復た車塵を望む無く
已分深宮老此身
已に分とす深宮に此の身を老とすを
縱使君王得相見
縱使君王に相見ゆるを得るとも
也應不愛白頭人
也た応に白頭の人を愛せざるべし

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○縱使…「たとい」と読み、「たとえであつても」の意。○應…「まさに〜せんとす」と読み、「きつと〜であるに違いない」の意。

★宮詞

宮詞

明 陳薦伏

雖言逐隊向長門
隊を逐いて長門に向うと言ふと雖も
十載何曾識至尊
十載何ぞ曾て至尊を識らん
命薄不教人見妬
命薄くして人をして妬まれず
始知無寵是君恩
始めて知る寵無きは是れ君恩なるを

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○逐隊…前人達に従つて。○長門…長安城の中にあつた宮殿。○至尊…皇帝。○寵…皇帝の寵愛。○君恩…皇帝のお恵み。

★宮詞

宮詞

明 徐勃

舞袖翩翩別樣裁
十年篋裏不曾開
可憐自閉長門後
未對春風舞一回

舞袖 翩翩 別樣に裁す
十年 篋裏 曾て開かず
憐われむべし 自ら 長門を閉じて後
未だ 春風に対して 舞うこと一回せず

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○舞袖：舞衣の袖。○翩翩：翻るさま。○別樣：特別。
○篋裏：箱の中。○長門：長門宮。武帝の寵を失った陳皇后が住んだところ。

★宮詞

宮詞

明 趙世顯

沈沈別殿自焚香
笑解羅襦拂御床
十二碧欄春寂寞
水晶簾捲月如霜

沈々たる別殿 自ら香を焚く
笑って 羅襦を解いて 御床を払う
十二の碧欄 春 寂寞
水晶の簾 捲けば 月霜の如し

【語釈】

○沈沈：夜のふける。○別殿：正殿以外の殿堂。○羅襦：綢製の短衣。○御床：皇帝の床。○碧欄：青緑色の欄干。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。

★宮詞

宮詞

明 邵生巳

月轉梧桐夜漸闌
月は梧桐に転じ夜は漸く闌なり
長門寂寂覺秋寒
長門寂々秋寒を覚ゆ
臨風欲奏相思曲
風に臨んで奏さんと欲す相思の曲
抱得琵琶不忍彈
抱き得たる琵琶弾くに忍びず

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○梧桐：アオギリ。○漸：だんだんと。○闌：終わりに近づく。○長門：長門宮。長安の中にあつた宮殿。武帝の寵を失つた陳皇后が住んだところ。○寂寂：寂しいさま。

★宮詞

宮詞

明 黄省曾

金鋪玉戸月流輝
金鋪玉戸月輝を流す
寶座瑤堂映紫衣
宝座瑤堂紫衣に映す
聖主觀書居大善
聖主書を観て大善に居す
三更龍輦未言歸
三更竜輦未だ言に帰らず

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○金鋪：金製の門環の台座。○玉戸：玉で飾られた戸。○寶座：玉座。○瑤堂：美しい石で出来た殿堂。○聖主：皇帝。○大善：この上もない優れた行い。○居：努める。○三更：真夜中。○龍輦：皇帝の車駕。○言：文のリズムを整える言葉。実質的な意味は無い。

★宮詞

宮詞

明 俞允文

一承恩澤入蓬萊

一たび恩澤を承わり蓬萊に入る

別賜輕綃稱體裁

別に輕綃を賜わり体裁を称す

剪得辟邪新繭子

剪ち得たり辟邪の新繭子

並房宮女鬪看來

並房の宮女鬪いて看し来る

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○恩澤：皇帝の恵み。○蓬萊：蓬萊宮。大明宮のこと。
○輕綃：薄くて花模様のある織物。○體裁：詩文の格式。○辟邪：伝説中の神獸。○繭子：
まゆ。○並房：隣り合っている部屋。

★宮詞

宮詞

明 蜀成王

向暖嬉遊笑語歡

暖に向って嬉遊し笑語歡す

宮官忽道過金鑾

宮官忽ち道う金鑾過ぐと

傳呼聲急人皆避

伝呼声急にして人皆避け

盡閉窗櫺紙隙看

尽く窓櫺を閉じて紙隙より看る

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○宮官：官僚。○金鑾：皇帝の車駕の鈴。○窗櫺：窓の
上の格子。○紙隙：〔窓の〕紙の隙間。

★宮詞

宮詞

明 週憲王

玉京涼早是初秋

玉京涼 早し是れ初秋

銀漢斜分大火流

銀漢斜めに分ち 大火流る

吹徹洞簫天似水

洞簫を吹徹して 天水に似たり

半鉤新月掛西樓

半鉤の新月 西樓に掛かる

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○玉京：帝都。○銀漢：銀河。○大火：さそり座。○洞簫：縦笛。○吹徹：吹く。徹は助字。○半鉤：釣り針を半分にした形。○新月：三日月。

★宮詞

宮詞

明 週憲王

月明深院有霜華

月明の深院 霜華有り

開遍階前紫菊花

開くこと遍し 階前の紫菊花

涼入繡幃眠不得

涼は繡幃に入りて 眠り得ず

起來窗下撥琵琶

起き来りて 窓下 琵琶を撥く

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○深院：奥深い庭。○霜華：美しい霜。○紫菊花：菊の一種。紫色の花を咲かせ薬用になる。○繡幃：刺繍を施したカーテン。

★宮詞

宮詞

明 週憲王

清曉龍闈侍寢回

清曉 龍闈 寢に侍して回る

髻髻雲鬢對妝臺

髻髻 雲鬢 妝台に對す

綺窗昨夜東風暖

綺窗 昨夜 東風暖かし

一樹梨花對雨開

一樹の梨花 雨に對して開く

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○清曉…清らかな夜明け。○龍闈…正門の脇に設けられた脇門で皇帝、高官だけが出入りできた。○侍寢…皇帝の側での宿直。○髻髻…たぶさを結んだだけで覆いをかけない髪。○雲鬢…美しい髪の毛。○綺窗…飾りのある美しい窓。○東風…春風。

★宮詞

宮詞

明 週憲王

御溝秋水碧如天

御溝の秋水 碧天の如し

偶憶當年事惘然

偶々 憶う當年 事 惘然たるを

紅葉縱教能寄恨

紅葉は 縱教い 能く 恨を寄するも

不知流得到誰邊

知らず 流れ得て 誰が辺に到るかを

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○御溝…宮城の堀。○惘然…気抜けしてがっかりしているさま。○縱教…たとえ。

★宮詞

宮詞

明 週憲王

夜夜空庭望女牛

夜々空庭女牛を望む

綺牕人静数聲流

綺牕人静かにして数声流る

羊車又過宮門去

羊車又宮門を過ぎて去り

斜月疎桐一院秋

斜月疎桐一院の秋

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○空庭：…人氣の無い庭。○女牛：牽牛・織女星。○綺牕：彫刻や絵で飾られた美しい窓。○羊車：装飾した綺麗な車。宮中で羊に引かせる。

★宮詞

宮詞

明 黄拍

团扇歌成不解愁

团扇歌成りて愁いを解かず

落花流水共悠悠

落花流水共に悠々

昭陽春色知無限

昭陽の春色知る限り無きを

唯有長門月似秋

唯だ長門の月の秋に似たる有るのみ

【語釈】

○宮詞：宮中の物事を詠じた詩。○团扇：…うちわ。○悠悠：…他と関わりなくゆったりしたさま。○昭陽：昭陽宮。后妃の住むところ。○春色：春の気配。春景色。○長門：長門宮。漢の武帝の時に寵愛を失った陳皇后が住んだ。

★宮詞

宮詞

明 黄 拍

秋光已滿玉芙蓉

秋光 已に滿つ 玉芙蓉ぎよくふよう

永巷無人月色濃

永巷 人無く 月色 濃こまねかなり

誰使五更寒夢斷

誰か 五更の寒夢をして 断たしめん

西風吹入景陽鐘

西風 吹き入る 景陽の鐘けいよう

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○永巷…宮中の長い小径。○五更…夜明けがた。○寒夢…夜の寒い夢。○西風…秋風。○景陽鐘…夜明けを告げる鐘。六朝時代に景陽楼に置かれた鐘が夜明けを告げたことに由来する。

★宮中詞

宮中詞

唐 王 建

宛轉黃金白柄長

宛轉えんでんたる黄金 白柄はくへい長し

青荷葉子畫鴛鴦

青荷葉子せいかうし 鴛鴦えんおうを画く

把來不是呈新様

把り来るは 是れ 新様しんさうを呈するならず

欲進微風到御牀

微風ぎふうの 御床ぎしやうに到るを 進めんと欲す

【語釈】

○宮中詞…宮中の物事を詠じた詩。○宛轉…柔らかく自由に動くさま。○白柄…白い柄。○青荷葉子…青い蓮の花。○鴛鴦…オシドリ。○新様…新しい花模様。○御牀…皇帝のベッド。

★ 宮中詞

宮中詞

唐 朱慶餘

寂寂花時閉院門
寂寂たる花時 院門を閉ざす
美人相並立瓊軒
美人 相並びて 瓊軒けいけんに立つ
含情欲説宮中事
情を含み 説かんと欲す 宮中の事
鸚鵡前頭不敢言
鸚鵡前頭おうむぜんとう 敢えて言わず

【語釈】

○宮中詞：宮中の物事を詠じた詩。○寂寂：寂しくひっそりとしたさま。○花時：花の咲き乱れる時節。○院門：庭の門。○瓊軒：宮殿のひさしの露台の美称。○前頭：面前。

★ 宮中詞

宮中詞

唐 李益

露湿晴花春殿香
露は 晴花を湿し 春殿香かんばし
月明歌吹在昭陽
月明かにして 歌吹 昭陽しょうやうに在り
似將海水添宮漏
海水を將もつて 宮漏きゅうろうに添うに似て
共滴長門一夜長
共に 長門ちやうもんに滴りて 一夜長し

【語釈】

○宮中詞：宮中の物事を詠じた詩。○歌吹：歌唱吹奏。○昭陽：昭陽宮。皇紀の住むところ。○宮漏：宮中の水時計。○長門：長門宮。漢の武帝の時に寵愛を失った陳皇后が住んだ。

★ 後宮詞

後宮詞

唐 白居易

雨露由來一點恩
雨露 由來 一點の恩
争能徧布及千門
争でか能く徧く布きて 千門に及ばん
三千宮女燕脂面
三千の宮女 燕脂の面
幾箇春來無淚痕
幾箇か 春來りて 涙痕無からん

【語釈】

○後宮詞：君王の寵を失った又は得られない宮女の悲しみを述べた詩。○雨露：君恩。○由來：元來。○千門：宮門。○三千宮女：数多い宮女。○燕脂：化粧のべに。○幾箇：いくつ。当時の俗語。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

後宮詞

後宮詞

唐 白居易

淚濕羅巾夢不成
淚は羅巾を湿し 夢成らず
夜深前殿按歌聲
夜深くして 前殿 歌を按ずる声
紅顏未老恩先斷
紅顏 未だ老いざるに 恩 先ず断え
斜倚薰籠坐到明
斜めに 薰籠に倚りて 坐到明に到る

【語釈】

○後宮詞：君王の寵を失った又は得られない宮女の悲しみを述べた詩。○羅巾：薄絹のハンカチ。○前殿：宮城の正面にあった宮殿の名。○按歌：歌を歌う。○薰籠：衣服に香を焚きしめる籠。○坐：そのまま、じつと。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★後宮詞

後宮詞こうきゅうし

唐 杜牧

監宮引出暫開門

監宮かんきゆう 引き出でて 暫しばらく門を開く

隨例須朝不是恩

例に隨つて 須すべらく朝ちゆうすべし 是れ 恩にあらざ

銀鑰却收金鎖合

銀鑰ぎんやく 却つて収めて 金鎖きんさ合す

月明花落又黃昏

月明かに 花落ちて 又た黃昏こうこん

【語釈】

○後宮詞：君王の寵を失つた又は得られない宮女の悲しみを述べた詩。○監宮：女官長。
○引出：出入りを監督する。○朝：皇帝に謁見する。○不是恩：天子の恩寵によるものではない。○銀鑰：銀の鍵。○金鎖：金の錠。○黃昏：たそがれ。

(参考文献) 『三体詩』

★宮怨

宮怨きゆうえん

唐 顧況

長樂宮連上苑春

長樂宮連ちやうらくきゆうれん 上苑春じやうえんなり

玉樓金殿豔歌新

玉樓金殿ぎよくろうきんでん 豔歌えんか新たなり

君門一入無由出

君門 一たび入りて 出ずるに由し無し

唯有宮鶯得見人

唯だ 宮鶯きゆうおうの 人を見得る有るのみ

【語釈】

○宮怨：宮女の怨情の意。天子の寵愛を失つても宮中を出ることができず、空しく後宮で過ごさなければならぬ宮女の悲しみを詠んだもの。○長樂宮：漢の高帝の時作られた宮殿。○上苑：皇帝の園。○玉樓金殿：多くの宮殿の美称。○豔歌：艶情の歌。○君門：宮廷の門。○宮鶯：宮中にいる鶯。

★ 宮怨

宮怨きゆうえん

唐 司馬扎

柳色參差掩畫樓

柳色しんし參差として 画樓を掩う

曉鶯啼送滿宮愁

曉鶯ぎょうわう啼き送りて 滿宮愁う

年年花落無人見

年々 花落ちて 人の見る無く

空逐春泉出御溝

空しく 春泉を逐おいて 御溝ぎょうこうに出でず

【語釈】

○宮怨：宮女の愁いと怨みを詠った詩。○參差：不揃いなさま。○畫樓：絵で飾られた楼。○御溝：宮城の堀。○春泉：泉から流れる春水。○畫樓：絵で飾られた

★ 宮怨

宮怨きゆうえん

明 蔣山卿

一夜梅開上苑東

一夜 梅は開く 上苑じょうえんの東

淡煙斜月影朦朧

淡煙 斜月 影 朦朧もうろう

春宮願逐香風去

春宮ねがいの願 香風を逐おいて去り

飛入君王曉夢中

飛び入る 君王 曉夢うちの中

【語釈】

○宮怨：宮女の悲しみ、愁い、苦しみ、怨みを詠った詩。○上苑：皇帝の宮苑。○淡煙：淡い靄。○朦朧：ほの暗くボートしているさま。○春宮：東の宮殿。○君王：皇帝。

★ 官怨

官怨

明 沈明臣

緑満南園桑葉肥

緑満の南園 桑葉肥そうようゆ

風光欲盡柳花飛

風光 尽きんと欲して 柳花飛ぶ

妾生不及呉蠶死

妾しやうが生 及ばず 呉蚕ごさんの死に

留得春絲上袞衣

春糸を留め得て 袞衣こんいに上る

【語釈】

○官怨…宮女の悲しみ、愁い、苦しみ、怨みを詠った詩。○広東省広州市の南にある庭園。明の洪武帝が作った。○風光…景色。風景。○柳花…柳絮。○呉蠶…呉の地のカイコ。○袞衣…皇帝の衣。

★ 官怨

官怨

明 張尚禮

庭院沈沈晝漏清

庭院 沈々ちんちん 晝漏清ちゆうろうし

閑門春草共愁生

閑門かんもん 春草 愁 共に生ず

夢中正得君王寵

夢中 正まさに得たり 君王の寵

却被黃鸝叫一聲

却って 黃鸝 叫ぶこと 一声せらる

【語釈】

○官怨…宮女の悲しみ、愁い、苦しみ、怨みを詠った詩。○沈沈…閑かなさま。奥深いさま。○晝漏…晝の水時計の音。○閑門…閑かな門。○君王…皇帝。○黃鸝…コウライウグイス。

★ 春宮曲

春宮曲

唐 王昌齡

昨夜風開露井桃
未央前殿月輪高
平陽歌舞新承
簾外春寒賜錦袍

昨夜風に開く露井の桃
未央の前殿月輪高し
平陽の歌舞新たに寵を承け
簾外春寒くして錦袍を賜う

【語釈】

○春宮曲：樂府題、宮女の怨みを詠う。○露井：屋根のない井戸。○未央：未央宮、漢の宮殿で長安にあった。○平陽：平陽公主、武帝の姉。○錦袍：錦の上着、陣羽織の類。
（参考文献）『唐詩選』

★ 春宮曲

春宮曲

唐 陳子龍

春宮烟樹夜蒼蒼
待宴將闌拂象床
月轉西樓花露冷
又移歌舞向昭陽

春宮の煙樹夜蒼々たり
宴に待し將に闌ならんとして象床を払う
月は西樓に轉じ花露冷やかなり
又た歌舞を移して昭陽に向う

【語釈】

○春宮曲：樂府題、宮女の怨みを詠う。○春宮：宮城の東にある宮殿。○煙樹：靄のかかった樹。○蒼蒼：草木などが青く茂るさま。○象床：象牙で裝飾された床。○昭陽：昭陽宮。皇紀の住むところ。

★ 春宮曲

春宮曲

明 王樂善

燕語花飛正斷魂

燕語花飛正に魂を断つ

黄金枉費賦長門

黄金枉げて費やす長門を賦するを

淒涼莫恨嬋娟誤

淒涼恨む莫かれ嬋娟の誤り

不嫁呼韓即主恩

呼韓に嫁せざるは即ち主恩

【語釈】

○春宮曲：樂府題、宮女の怨みを詠う。○枉費：空費する。○長門：長門怨。樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。「司馬相如の「長門の賦」が元になった。○淒涼：寂しいさま。○嬋娟：あでやかで美しいさま。○呼韓：单于。郷土の王。

★ 春宮曲

春宮曲

明 王樂善

楊花風散滿池塘

楊花風散じて池塘に満つ

倚檻看來暗自傷

檻に倚り看來りて暗に自ら傷む

紅粉爭如風裏絮

紅粉争うが如し風裏の絮

化萍猶得傍鴛鴦

萍と化し猶お鴛鴦に傍うことを得たり

【語釈】

○春宮曲：樂府題、宮女の怨みを詠う。○楊花：柳絮。○池塘：池。○檻：おぼしま。○紅粉：美女。○風裏絮：風に舞う柳絮。○萍：浮き草。○鴛鴦：オシドリ。

★秋宮詞

秋宮詞

明 林世璧

碧天明月淡悠悠
獨上高樓望女牛
昨夜西風何處起
宮中無樹不知秋

碧天の明月 淡として悠悠
ひとり 高樓に上りて 女牛を望む
昨夜 西風 何れの処にか起こる
宮中 樹無く 秋を知らず

【語釈】

○秋宮詞：秋の宮中のことを詠った詩。○悠悠：他と関わりなくのんびりしたさま。○女牛：牽牛・織女星。○西風：秋風。

★春怨

春怨

唐 劉方平

紗窗日落漸黃昏
金屋無人見淚痕
寂寞空庭春欲晚
梨花滿地不開門

紗窓 日落ちて 漸く黃昏
金屋 人無く 涙痕を見る
寂寞たる 空庭 春 晩んと欲す
梨花は地に満ち 門を開かず

【語釈】

○春怨：（女性の）春の怨み。○紗窗：カーテンをした窓。○漸：だんだんと。○黃昏：たそがれ。○金屋：華美な家。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○空庭：誰もいない庭。

★ 春詞

春詞

明 謝榛

雲鬢高結靚妝新

雲鬢 うんびん 高く結びて 靚妝 せいしょう 新たなり

白玉屏開光照人

白玉屏 はくぎよくへい 開いて 光人 ひかりひと を照らす

莫為桃花怨風雨

桃花 とうか の為に 風雨 ふうう を怨む 莫 な かれ

牡丹亭上有餘春

牡丹亭 ぼたんていじょう 上 じょう 余 よ 春 しゅん 有り

【語釈】

○雲鬢：雲のような美しい髪の毛。○靚妝：美しく化粧すること。○白玉屏：白玉のできた屏風。○牡丹亭：南京市牡丹亭。牡丹が植えてある亭。○餘春：残っている春。

★ 春詞

春詞

明 謝榛

御河橋畔是儂家

御河橋 ぎよかきょうはん 畔 はん 是 これ 儂 わ が家

一入深宮虛歲華

一 ひと たび 深宮 さいくう に入りて 歲華 さいか を虚 むな しくす

別院黃昏吹鳳管

別院 べつえん 黃昏 わうこん 鳳管 ほうかん を吹 ふ き

月鉤斜照刺桐花

月鉤 げつこう 斜 しや めに照 て す 刺桐花 しとうか

【語釈】

○御河橋：不祥。○儂家：自分の家。○深宮：後宮。○歲華：年月。○別院：本館とは別の建物。○黃昏：たそがれ。○鳳管：簫笙の美称。○月鉤：弓張り月。○刺桐花：キリの花。

★ 春詞

春詞

明 謝榛

城烏何意夜深啼
城烏 何の意か 夜深くして啼く
紅杏梢頭片月低
紅杏梢頭 片月低し
香冷熏籠人不寐
香 冷ややかにして 熏籠 人 寐ず
春風吹過玉欄西
春風 吹き過ぐ 玉欄の西

【語釈】

○城烏：宮城にいる鳥。○紅杏：紅色の杏の花。○梢頭：こずえの上。○熏籠：香を衣に
焚きしめるための籠。○玉欄：闌干の美称。

★ 和樂天春詞

樂天の春詞に和す

唐 劉禹錫

新妝面下朱樓
新妝 面々 朱樓を下る
深鎖春光一院愁
深く 春光を鎖す 一院の愁
行到中庭數花朵
行きて 中庭に到りて 花朵を数う
蜻蜓飛上玉搔頭
蜻蜓 飛上る 玉搔頭

【語釈】

○樂天：白居易。○新妝：新たな装いをした女性。○春光：春の気配、春景色。○花朵：
花の咲いている枝。○玉搔頭：玉簪。

★秋詞

秋詞

元 薩都刺

清夜宮車出建章

清夜宮車 建章けんしょうを出ず

紫衣小隊兩三行

紫衣の小隊 兩三行

石闌干畔銀燈過

石闌干せきらんかんの畔 銀灯ぎんとう過ぐ

照見芙蓉葉上霜

照見しょうけんす 芙蓉葉上の霜

【語釈】

○宮車：皇帝の車。○建章：建章宮、漢の武帝が長安西に造営した宮殿。複道によって未央宮と連絡していた。○紫衣：高官。宮女。○石闌干：石の闌干。○照見：照らし看る。

★漢宮詞

漢宮詞

唐 李商隱

青雀西飛竟未回

青雀せいじゃく 西に飛んで 竟ついにに 未だかえ回らず

君王長在集靈臺

君王 長く 集靈台しゅうれいだいに在り

侍臣最有相如渴

侍臣 最も相如しょうじよが渴あせき 有れども

不賜金莖露一杯

賜たまわず 金莖きんけいの 露一杯

【語釈】

○漢宮詞：漢の宮中のことを詠った詩。○青雀：西王母から漢の武帝に遣わされたという青鳥（『漢武故事』）。○君王：武帝。○集靈臺：武帝が西王母を迎えるために建てた宮殿。○相如：司馬相如、口が渴く病があった。○金莖：不老長寿の露を受けるために作った承露盤を支える金の柱。

★漢宮曲

漢宮曲

明 劉基

小雨如烟晝掩扉
捲簾忽見燕雙飛
不知春色能多少
總向昭陽柳上歸

小雨煙の如く晝扉を掩う
簾を捲いて忽ち見る燕双の飛ぶを
知らず春色能く多少なるを
総て昭陽に向つて柳上に歸る。

【語釈】

○漢宮詞：漢の宮中のことを詠った詩。○燕双：つがいの燕。○春色：春の気配。春景色。○昭陽：昭陽宮。皇紀の住むところ。

★漢宮詞

漢宮詞

明 潘緯

棄置長門鬢欲華
後宮又道選良家
君恩好似三春雨
半為開花半落花

長門に棄て置かれて鬢華ならんと欲す
後宮 又た道う 良家を選ぶと
君恩 好く 三春の雨に似て
半ば為す 花を開き 半ば花を落すを

【語釈】

○漢宮詞：漢の宮中のことを詠った詩。○長門：長門宮。漢の武帝の時に寵愛を失った陳皇后が住んだ。○選良家：趙飛燕が貧賤の生まれだったために寵愛を失ったこと？○君恩：皇帝の寵愛。○三春：春。孟春、仲春、季春の総称。

★ 漢宮春曉

漢宮の春曉

明 徐勃

春明乘曉試新妝

春明しゅんめい 曉しやうめいに乗じて 新妝を試む

玉輦金輿出建章

玉輦ぎよくれん 金輿きんよ 建章けんしやうを出ず

三十六宮都望倅

三十六宮みやくこ 都みやこ 倅こを望む

車聲先已向昭陽

車聲しやうせう 先まづ 已に 昭陽しやうやうに向かう

【語釈】

○春明：春光明媚なこと。○玉輦：皇帝の手押し車。○金輿：皇帝の乗る輿。○建章：建章宮、漢の武帝が長安西に造営した宮殿。複道によって未央宮と連絡していた。○三十六宮：多くの宮殿。○倅：幸い。皇帝のお出まし。○昭陽：漢の宮殿で妃の住まうところ。

★ 漢苑行

漢苑行かんえんこう

唐 張仲素

春風澹蕩景悠悠

春風たんとう 澹蕩たんとう 景ゆうゆう 悠悠

鶯囀高枝燕入樓

鶯さえずは高枝に 囀り 燕は楼に入る

千步回廊聞鳳吹

千歩せんぱうの回廊 鳳吹ほうすいを聞く

珠簾處處上銀鉤

珠簾しよしよ 処々ぎんこう 銀鉤ぎんこうに上る

【語釈】

○漢苑行：漢の宮苑を詠った歌。○澹蕩：悠閑自在。○悠悠：他と関わりなくゆったりとしたさま。○鳳吹：簫笙の美称。○珠簾：たますだれ。○銀鉤：銀製の止め具。

★ 漢苑行

漢苑行 かんえんこう

唐

張仲素

回雁高飛太液池

回雁 かいがん 高く飛ぶ 太液の池 たいえき

新花低發上林枝

新花 低く発く 上林の枝 じょうりん

年光到處皆堪賞

年光 到る処 皆賞するに堪えたり

春色人間總未知

春色 しんかん 人間 総て未だ知らず

【語釈】

○漢苑行：漢の宮苑を詠った歌。○回雁：戻ってきた雁。○太液：陝西省長安の西にあった池。○上林：皇帝の庭園。○年光：春光。春景色。○春色：春の気配。春景色。○人間：一般の民間社会。

★ 長門怨

長門怨 ちやうもんえん

唐

李白

天回北斗挂西樓

天は 北斗を回らして 西樓に挂く

金屋無人螢火流

金屋 人無く 螢火流る

月光欲到長門殿

月光 到らんと欲す 長門殿

別作深宮一段愁

別に 深宮一段の愁を作す な

【語釈】

○長門怨：樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。〔司馬相如の「長門の賦」が元になった。○金屋：黄金作りの宮殿。○深宮：奥深い長門宮。

（参考文献）『中国詩人撰集 7』

★ 長門怨

長門怨

唐 裴交泰

自閉長門經幾秋

自ら長門を閉ざして幾秋を経たり

羅衣濕盡淚還流

羅衣濕り尽して涙還た流る

一種蛾眉明月夜

一種の蛾眉明月の夜

南宮歌管北宮愁

南宮の歌管北宮の愁

【語釈】

○長門怨：樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。「司馬相如の「長門の賦」が元になった。s ○幾秋：幾年。○羅衣：薄絹のころも。○蛾眉：美人。○南宮：建章宮、宮中央など、長安の南側にあった。○北宮：長門宮。長安の北端にあった。

★ 長門怨

長門怨

唐 鄭谷

流水君恩共不回

流水 君恩 共に回らず

杏花爭忍掃成堆

杏花 争か忍ばん 掃いて堆を成すを

殘春未必多煙雨

殘春 未だ必ずしも 煙雨多からず

淚滴閑階長綠苔

淚は 閑階に滴たりて 綠苔を長くす

【語釈】

○長門怨：樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。「司馬相如の「長門の賦」が元になった。○君恩：皇帝の寵愛。○煙雨：霧雨。○閑階：閑かなきぎはし。

★ 長門怨

長門怨 ちやうもんえん

唐 劉媛

雨滴長門秋夜長

雨滴りて 長門 秋夜長し したた

愁心和雨到昭陽

愁心 雨に和して 昭陽に到る しゆうしん

淚痕不學君恩斷

淚痕 学ばず 君恩の断るを たゆ

拭却千行更萬行

千行を拭却して 更に万行 せんこう

【語釈】

○長門怨：樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。〔司馬相如の「長門の賦」が元になった。○長門：長門宮。○昭陽：漢の宮殿で妃の住まうところ。○君恩：皇帝の寵愛。○千行：千筋。○拭却：ぬぐい去る。却是助字。

★ 長門怨

長門怨 ちやうもんえん

唐 劉媛

學畫蛾眉獨出群

画を学びて 蛾眉 独り群を出ず がび

當時人道便承恩

当時の人は道う 便ち 恩を承わらんと い

年年不見君王面

年々 見ず 君王の面 くんのう

花落黃昏空掩門

花落ち 黃昏 空しく門を掩う こうこん

【語釈】

○長門怨：樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。〔司馬相如の「長門の賦」が元になった。○蛾眉：美人。○年年：毎年。○黃昏：たそがれ時。

★ 長門怨

長門怨 ちやうもんげん

明 馬 燦

永夜含愁夢不成

永夜 愁を含み 夢成らず

長門寂寂月空明

長門 寂寂 月 空しく 明かなり

強携瑤瑟瓊軒立

強いて 瑤瑟を携え 瓊軒に立つ

斷腸昭陽歌吹聲

斷腸 昭陽 歌吹の 声

【語釈】

○長門怨…樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。「司馬相如の「長門の賦」が元になった。○長門…長門宮。○寂寂…寂しく静かなさま。○瑤瑟…玉で裝飾された琴瑟。○瓊軒…廊台の美称。○昭陽…漢の宮殿で妃の住まうところ。○歌吹…歌と管弦。

★ 長門怨

長門怨 ちやうもんげん

明 陸 粲

金屋承恩事已非

金屋 恩を 承る 事 已に非なり

玉顔憔悴度春暉

玉顔 憔悴して 春暉を 度る

無因得似宮前柳

宮前 柳に似得るに因し無し

時有長條拂御衣

時に 長条の 御衣を 払う有り

【語釈】

○長門怨…樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。「司馬相如の「長門の賦」が元になった。○金屋…美麗な宮殿。○玉顔…美しい顔色。○春暉…春の陽光。○無因…方法がない。○長條…長い枝。○御衣…皇帝の衣服。

★ 長門怨

長門怨 ちやうもんえん

明 籃世卿

少小深宮侍至尊

少小深宮 至尊に侍す

舞衣歌扇夜承恩

舞衣歌扇 夜恩を承わる

一朝花老春光去

一朝花老いて 春光去り

長對黄昏空閉門

長く黄昏こうこんに對し 空しく門を閉ざす

【語釈】

○長門怨…樂府題、長門宮に幽閉された、漢の武帝の陳皇后の怨情を詠ったもの。「司馬相如の「長門の賦」が元になった。○少小…若いとき。○至尊…皇帝。○黄昏…たそがれ時。

★ 長門月

長門の月

明 張泰

昭陽歌吹晚風移

昭陽しょうようの歌吹かすい 晚風移る

金屋春寒獨睡遲

金屋の春寒 独り睡ること遅し

何事西宮楊柳月

何事ぞ 西宮 楊柳の月

一彎猶似妒娥眉

一弯いちわん 猶いお似たり 娥眉がびを妬ねたむに

【語釈】

○長門…長門宮。漢の武帝の寵を失った陳皇后が幽閉されたところ。○昭陽…漢の宮殿で妃の住まうところ。○歌吹…歌と管弦。○金屋…美しい宮殿。○春寒…初春のうすら寒さ。○一彎…彎曲した姿。○娥眉…美人。

★西宮怨

西宮怨

明 王世貞

點點蓮花漏未央

點々たる蓮花漏未だ央ばならず

乍寒如水透羅裳

乍寒水の如く羅裳を透す

誰憐金井梧桐露

誰か憐れむ金井梧桐の露

一夜鴛鴦瓦上霜

一夜鴛鴦瓦上の霜

【語釈】

○西宮：長信宮、寵を失った班婕妤が移された宮殿。○點點：一点一点。○蓮花：蓮花の形をした水時計。○漏未央：水時計が夜半でないことを言う。○乍寒：急な寒さ。○羅裳：薄絹の衣。○金井：秋の井戸。○梧桐：あおぎり。

〔参考文献〕

『和漢名詞選類評釈』

★西宮春怨

西宮春怨

唐 王昌齡

西宮夜靜百花香

西宮夜静かにして百花香ばし

欲捲珠簾春恨長

珠簾を捲かんと欲して春恨長し

斜抱雲和深見月

斜めに雲和を抱いて深く月を見る

朧朧樹色隱昭陽

朧々たる樹色昭陽を隠す

【語釈】

○西宮春怨：樂府題、寵を失った宮女の怨みを詠う。○西宮：長信宮、寵を失った班婕妤が移された宮殿。○雲和：瑟の名。○朧朧：おぼろげなるさま。○昭陽：趙飛燕がいた宮殿。

〔参考文献〕

『唐詩選』

★西宮秋怨

西宮秋怨

唐 王昌齡

芙蓉不及美人妝

芙蓉も及ばず美人の妝

水殿風來珠翠香

水殿風来りて珠翠香ばし

却恨含情掩秋扇

却って恨む情を含んで秋扇を掩い

空懸明月待君王

空しく明月を懸けて君王を待つを

【語釈】

○西宮：長信宮、寵を失った班婕妤が移された宮殿。○秋怨：若い女性が秋の気配に感じ
てもの思いにふけること。○芙蓉：はすの花。○美人：前漢の成帝の妃であった班婕
妤。○水殿：池のほとりに建てた宮殿。○珠翠：真珠や翡翠の髪飾り。○秋扇：秋の
扇。扇は秋になれば用がなくなり棄てられるところから、寵を失った女性（班婕妤）に喩
える。○懸：月が中天に懸かっているさま。○空懸明月：班婕妤の長門賦の「懸明月以自
照」に基づく。

（参考文献）

『唐詩選』

★長信春詞

長信春詞

唐 孟 遲

君恩已盡欲何歸

君恩已に尽き 何に帰らんと欲す

猶有殘香在舞衣

猶お 殘香の 舞衣に在る有り

自恨身輕不如燕

自ら恨む 身軽きこと 燕の如からざるを

春來長遶御簾飛

春來 長く 御簾を遶りて飛ぶ

【語釈】

○長信秋詞：長信宮の春の歌、長信宮に孤独な班婕妤の嘆きを歌ったもの。○君恩：皇
帝の寵愛。○春來：春になってから。○御簾：皇帝のすだれ。

★ 長信秋詞

長信秋詞

唐 王昌齡

奉帚平明金殿開
且將團扇暫裴回
玉顏不及寒鷗色
猶帶昭陽日影來

帚そうを奉ほうじ 平明へいめい 金殿開きんてんひらく
且しばらく 團扇だんせんを將もつて 暫しばらく 裴回ばいかいす
玉顏たまごゝろは及およばず 寒鷗かんあの色いろに
猶なほお 昭陽しょうやうの日影ひかげを帯おびて来る

【語釈】

○長信秋詞：長信宮の春の歌、長信宮に孤独な班婕妤の嘆きを歌ったもの。奉帚：箒で宮殿を掃除する。○平明：夜明け。○金殿：黄金で飾った立派な御殿。○團扇：うちわ。○玉顔：美しい顔。○寒鷗：冬の鳥。○昭陽：昭陽宮。皇紀の住むところ。○日影：日光。

長信秋詞

長信秋詞

唐 王昌齡

真成薄命久尋思
夢見君王覺後疑
火照西宮知夜飲
分明復道奉恩時

真成まことに薄命はくめい 久ひさしく尋思じんしす
夢くんのうに君王みまに見え 覺さめて後のち 疑うたがう
火ひは 西宮せいきゆうを照てらし 夜飲やこんを知る
分明ぶんめいなり 復道ふくどう 恩おんを奉ほうずる時とき

【語釈】

○長信秋詞：樂府題。長信宮の秋の歌、長信宮に孤独な秋の夜を過ごす班婕妤の嘆きを歌ったもの。○真成：ほんとうに。○薄命：不幸せなこと。○尋思：いろいろ考えること。○西宮：長信宮。○夜飲：夜の酒宴。○分明：ありありと、はっきりとしていること。○復道：上下二層の渡り廊下。宮殿と宮殿とをつなぎ、上層は天子、下層は臣下が通った。○奉恩時：天子の寵愛を受けるとき。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 長信秋詞

長信秋詞

唐 王昌齡

金井梧桐秋葉黃

金井の梧桐 秋葉黄なり

珠簾不捲夜來霜

珠簾 捲かず 夜來の霜

熏籠玉枕無顔色

熏籠 玉枕 顔色無し

臥聽南宮清漏長

臥して聴く 南宮 清漏の長きを

【語釈】

○長信秋詞…樂府題。長信宮の秋の歌、長信宮に孤独な秋の夜を過ごす班婕妤の嘆きを歌ったもの。○金井…梓が美しく裝飾されている井戸。○梧桐…アオギリ。○珠簾…玉すだれ。○熏籠…宮中での暖を取る道具で、香炉を組み合わせた網目の覆いのあるもの。○玉枕…玉で飾った枕。○南宮…皇帝の居処。○清漏…清らかな音のする水時計。

★ 長信怨

長信怨

明 鄧原吉

長信秋風冷綺羅

長信の秋風 綺羅 冷やかなり

玉顔憔悴淚痕多

玉顔 憔悴し 淚痕多し

空將舊恨題團扇

空しく 旧恨を將つて 團扇に題す

不及昭陽子夜歌

及ばず 昭陽の子夜の歌

【語釈】

○長信怨…長信宮における班婕妤の嘆きを歌ったもの。○綺羅…刺繍を施した衣服。○玉顔…美しい顔。○團扇…うちわ。○昭陽…昭陽宮。后妃の住むところ。○子夜歌…歌曲の一種。男女の恋愛を詠う。

★ 長信宮落花

長信宮の落花

明 王 恭

深宮花謝使人愁
片片隨風滿御溝
妾命自憐花共薄
君恩那似水東流

深宮花謝して人をして愁えしむ
片片たる隨風御溝に満つ
妾が命自ら憐む花と共に薄きを
君恩那んぞ似たる水の東流するに

【語釈】

○長信宮：寵愛を失った班婕妤が住んだ宮殿。○花謝：花が散ってなくなる。○片片：ひらひらと軽く飛ぶさま。○隨風：自由自在に吹くかぜ。○御溝：宮城の堀。○君恩：皇帝の寵愛。

★ 吳宮詞

吳宮詞

明 高 啓

芙蓉水殿屨廊東
白苧秋來不耐風
怪得君王長夜醉
月明歌舞在舟中

芙蓉の水殿 屨廊の東
白苧 秋来りて風に耐えず
怪しみ得たり 君王 長夜の醉
月明らかにして 歌舞 舟中に在り

【語釈】

○吳宮詞：吳の宮中のことを詠った詩。○屨廊：春秋時代の吳宮の廊下の名前。○白苧：白いカラビシの衣。○君王：吳王夫差。

★ 吳宮詞

吳宮詞

清

毛先舒

蘇臺月冷夜烏棲

蘇臺月冷やかにして夜烏棲み

飲罷吳王醉似泥

飲罷みて吳王醉泥に似たり

別有深恩酬不得

別に深恩有りて酬い得ず

向君歌舞背君啼

君に向つて歌舞し君に背いて啼く

【語釈】

○吳宮詞：吳の宮中のことを詠った詩。○蘇臺：吳の宮中のことを詠った詩。○蘇臺：姑蘇台春秋時吳王夫差が姑蘇山（江蘇省吳県の西南）上に築いた台の名。夫差は越を破つて得た美人西施など、千人の美女を住まわせて榮華をきわめたという。○転句：越王勾踐〔范蠡〕に恩があつて、夫差の寵愛酬いることができないこと。

★ 吳宮詞

吳宮詞

清

朱受新

夜擁笙歌百盡臺

夜は笙歌を擁す百尽台

太湖月落宴還開

太湖月落ちて宴還た開く

君王自愛傾城色

君王自ら愛す傾城の色

卻忘人從敵國來

却つて忘る人敵国従り来るを

【語釈】

○吳宮詞：吳の宮中のことを詠った詩。○笙歌：音楽と歌。○太湖：江蘇省と浙江省の間にある湖。○君王：吳王夫差。○傾城：絶世の美人。○人：西施。○敵國：越。

★ 吳宮詞

吳宮詞

清 龐 鳴

屨廊移得苧蘿春

屨廊 移るを得たり 苧蘿の春

沈醉君王夜宴頻

沈醉す 君王 夜宴頻なり

臺畔臥薪臺上舞

台畔 薪に臥し 台上に舞う

可憐同是不眠人

憐れむべし 同じく是れ 眠らざる人

【語釈】

○吳宮詞：吳の宮中のことを詠った詩。○屨廊：春秋時代の吳宮の廊下の名前。○苧蘿：芋蘿山。西施の故郷。諸暨市南部の浣紗江の畔にある。○沈醉：ひどく酔う。○君王：吳王夫差。○臥薪：臥薪嘗胆の臥薪。○可憐：詠嘆のことば。ああ。

★ 楚宮怨

楚宮の怨

唐 許 渾

十二山晴花盡開

十二山 晴れ花 尽く開く

楚宮雙闕對陽臺

楚宮の雙闕 陽台に対す

細腰爭舞君王醉

細腰 争いて舞い 君王 酔う

白日秦兵天上來

白日 秦兵 天上より来る

【語釈】

○楚宮：春秋時代の楚の宮殿。○十二山：巫山の十二峰。○雙闕：宮門。○陽臺：屋根のない台の上に立てられた建物。ここでは、楚の懷王が巫山の巫女との情交のあと、巫女が「朝雲暮雨」となって現れると言った陽台のこと。○細腰：細い腰の美女。楚の靈王が好んだが、懷王も好んだという逸話がある。○君王：懷王。秦の張儀の謀略に引きずり回され、国力を消耗し、最後は秦との戦いに敗れ秦に幽閉されたまま死去した。

★ 楚宮詞

楚宮詞

明 高啓

雨去雲來十二峯

雨去り雲来る 十二峰

渚宮樓閣暮重重

渚宮 樓閣 暮に重々たり

細腰無限空相妒

細腰 限り無く空しく相い妬む

不覺瑤姬夢裏逢

覚えず 瑤姬 夢裏に逢うを

【語釈】

○楚宮詞：春秋時代の楚の宮殿を詠った詩。○雨去雲來：「朝雲晚雨」の故事を踏まえる。○十二峰：巫山の十二峰。○渚宮：春秋時代の楚の宮殿宮名。湖北省江陵県にある。○重重：重なり合うさま。○細腰：細い腰の美女。楚の靈王が好んだが、懷王も好んだという逸話がある。○瑤姬：巫山の巫女。楚の懷王の夢の中で懷王と情交を結んだ。

★ 楚宮詞

楚宮詞

清 董以寧

一幸高唐暮復朝

一たび高唐に幸せられ 暮復た朝

章華臺畔柳蕭條

章華台畔 柳 蕭条たり

相思且自加餐飯

相思い 且つ 自ら餐飯を加う

莫信君王愛細腰

君王の細腰を愛するを 信ずること莫かれ

【語釈】

○楚宮詞：春秋時代の楚の宮殿を詠った詩。○高唐：楚の国の望観台の名。○暮復朝：「朝雲暮雨」の故事。○章華臺：楚の靈王が作った見晴台。○君王：楚の懷王。○細腰：細い腰の美女。楚の靈王が好んだが、懷王も好んだという逸話がある。

★魏宮詞

魏宮詞

明 高啓

翡翠明珠入掌新
翡翠明珠 掌 に入りて新たなり
承恩長占鄴宮春
恩を承まり 長く占しむ 鄴宮の春
至尊休信陳王賦
至尊 信ずるを休めよ 陳王の賦
那得人間有洛神
那んぞ得ん 人間 洛神有るを

【語釈】

○魏宮詞：三国時代の魏の宮殿を詠った詩。○明珠：光沢のある珍玉。○鄴宮：魏の宮殿。○至尊：魏の文帝曹丕。○陳王賦：曹植の《洛神賦》。甄氏は曹植が思いをかけていたが曹丕の後宮に入り皇后となった。曹植の思いを知った曹丕は甄氏の枕を与えて曹植を慰めた。それに答えて曹植が作った賦で、甄氏を洛神になぞらえているとされる。○洛神：古代中国の伝説に出てくる伏羲氏の娘であり、水と川を司る洛水の女神。黄河の神・河伯の妻。

★魏宮怨

魏宮の怨

明 陳仲湊

當日銅臺望幸時
當日 銅台 望幸の時
西陵今見草離離
西陵 今 見る 草 離々たるを
夜來一掬傷春淚
夜来 一掬 傷春の涙
惟有漳河流水知
惟だ 漳河流水の 知る有るのみ

【語釈】

○魏宮：三国魏の都。○當日：魏が栄えていた昔。○銅台：銅雀台。曹操が作った楼台。○望幸：臣下や妃が皇帝の臨幸を望むこと。○西陵：曹操の墓。○離離：草木が盛んに生い茂っているさま。○夜来：夜になってから。○一掬：ひとすくい。○漳河：華北を流れる川。

★ 吳越宮詞

吳越宮詞

明 范 洵

千門斜月四窗星
千門の斜月 四窓の星
山近簾衣分外青
山は簾衣に近く 分外に青し
侍女夜間眠不穩
侍女 夜間 眠 穩おだやかならず
御床圓枕綴金鈴
御床 円枕 金鈴を綴つづる

【語釈】

○吳越宮詞…春秋時代の吳と越の宮廷の事を詠った詩。○千門…多くの家。○四窗…四方の窓。○簾衣…すだれと幕。○分外…過分。○御床…皇帝の座臥する具。○円枕…円木を用いた枕。

★ 楊柳詞

楊柳詞

唐 温庭筠

金縷^{きんる}珍^{さん}珍^{さん}碧瓦^{へきが}溝
金縷^{きんる} 珍^{さん}珍^{さん} 碧瓦^{へきが}の溝
六宮^{りくくう}眉黛^{ふんたい}惹^{ひか}春愁
六宮の眉黛 春愁に惹る
晚來更^{りようち}帶龍池雨
晚來 更に帯ぶ 竜池の雨
半拂^{はんぱ}闌干^{らんかん}半入樓
半ば闌干を払い 半ば楼に入る

【語釈】

○金縷…金の糸。ここでは柳の枝。○珍珍…ふさふさとしたさま。○碧瓦…青緑色の琉璃瓦。○六宮…宮城。○眉黛…美人。○春愁…春日の愁情。○晚來…夕方になってから。○龍池…長安の興慶宮内にある池の名。

★ 折楊柳

折楊柳

唐 段成式

枝枝交影鎖長門

枝々 交影 長門を鎖す

嫩色曾沾雨露恩

嫩色 曾て沾す 雨露の恩

鳳輦不來春欲盡

鳳輦来らず 春 尽きんと欲す

空留鶯語到黃昏

空しく鶯語を留め 黃昏に到る

【語釈】

○折楊柳：樂府題。別れの曲ちよう。○長門：長門宮。武帝の寵を失った陳皇后が身を引いて住んだところ。○嫩色：若々しい色。○鳳輦：皇帝の乗る手押し車。○黃昏：たそがれ。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 雨霖鈴

雨霖鈴

唐 張祜

雨淋鈴夜卻歸秦

雨淋鈴 夜 秦に却歸す

猶是張徽一曲新

猶お是れ 張徽 一曲新たなり

長説上皇垂淚教

長く説く 上皇 涙を垂れて教うると

月明南内更無人

月明かにして 南内 更に人無し

【語釈】

○雨霖鈴：玄宗皇帝が楊貴妃の死を悲しんで作ったとされる楽曲の名。○秦：長安。○卻歸：帰る。却は助字。○張徽：不祥。人名？○上皇：玄宗皇帝。○南内：長安の興慶宮。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 東都望幸

東都 幸を望む

唐 章 碣

懶脩珠翠上高臺

懶く 珠翠を脩め 高台上る

眉月連娟恨不開

眉月 連娟 恨みて開かず

縱使東巡也無益

縱使 東巡 無益也とも

君王自領美人來

君王 自ら 美人を領して来らん

【語釈】

○東都…洛陽。○幸…行幸。○珠翠…珍玉と翡翠。女性の裝飾物。○眉月…新月のような眉。○連娟…曲がって細い眉。○縱使…たとえ〜であっても。○東巡…当方への行幸。○君王…皇帝。

★ 皇后閣春帖子

皇后閣春帖子

宋 司馬光

春衣不用蕙蘭薰

春衣 用いず 蕙蘭の薰するを

領縁無加刺繡文

領縁 加うこと無し 刺繡の文

曾在蠶宮親織就

曾在 蠶宮に在りて 親織に就く

方知縷縷盡辛勤

方に知る 縷々 尽く 辛勤なるを

【語釈】

○蕙蘭…多年生植物。良い香りがする。○領縁…礼服の袖や襟に付ける飾り。○蠶宮…宮城の養蚕所。○親織…織物の一種。○縷縷…糸のように長く続くさま。○辛勤…辛苦な勤務。

★景陽鐘

景陽鐘

宋 劉子翬

景陽鐘動曉寒清
景陽鐘 動いて 曉寒清し
度柳穿花隱隱聲
柳を度り 花を穿つ 隠々の声
三十六宮梳洗罷
三十六宮 梳洗 罷む
却吹殘燭待天明
却って 殘燭を吹いて 天明を待つ

【語釈】

○景陽鐘：夜明けを告げる鐘。六朝時代に景陽楼に置かれた鐘が夜明けを告げたことに由来する。○隱隱：大きな音の形容。○三十六宮：多くの宮殿。○梳洗：髪を梳り顔を洗う。化粧をする。○吹殘燭：残った燭を吹き消す。○天明：夜明け。

★景陽鐘

景陽鐘

宋 劉子翬

一刀殘月淡觚稜
一刀の残月 觚稜に淡なり
遙望林梢曉色升
遙かに望む 林梢 曉色の升るを
寂寞小簾風露冷
寂寞たる小簾 風露冷かなり
玉盆脂水已生冰
玉盆の脂水 已に 氷を生ず

【語釈】

○景陽鐘：夜明けを告げる鐘。六朝時代に景陽楼に置かれた鐘が夜明けを告げたことに由来する。○一刀：刀のような。○觚稜：宮城。○林梢：木の梢。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○玉盆：玉で作った盆。○脂水：口紅などを洗い落とす水。

★老宮人

老宮人

唐 劉得仁

白髮宮娃不解悲

白髮の宮娃 悲しみを解かず

滿頭猶自插花枝

滿頭猶自 花枝を挿す

曾緣玉貌君王寵

曾て 玉貌 君王の寵に縁り

準擬人看似舊時

準擬す 人の看て 旧時に似んことを

【語釈】

○宮娃…宮女。○猶自…いまだ。○玉貌…玉のような美貌。○君王…皇帝。○準擬…なぞ
らえ擬すること。

★出宮人

出宮人

明 張煒

一自承恩得放歸

一たび 恩を承わりて 放歸を得てより

夢魂還繞御屏飛

夢魂 還た 御屏を繞りて飛ぶ

舞衣猶有殘香在

舞衣 猶お 殘香の在る有り

花落花開獨掩扉

花落ち 花開いて 独り扉を掩う

【語釈】

○出宮人…宮廷から暇を出された宮女。○放歸…家に歸される。○御屏…皇帝の屏風。

★ 岐王宮侍兒出家

岐王宮の侍兒の出家

宋 張叔夜

六尺輕羅染麴塵

六尺の輕羅 麴塵を染む

金蓮步穩襯湘裙

金蓮步 穩やかにして 湘裙を襯す

從今不入君王夢

今從り入らず 君王の夢

剪盡巫山一朵雲

剪盡す 巫山 一朵の雲

【語釈】

○岐王宮：魏王の宮殿。○侍兒：侍妾。○出家：お暇をいただくこと。○輕羅：薄絹の布。○麴塵：青に黄色を混ぜたいろ。○金蓮：女性の細い足。○湘裙：糸で織った女性の衣服の裾。○襯：身につける。○君王：皇帝。○剪盡：裁ち切る。盡は助字。○巫山三峽にある山。「朝雲暮雨」の故事の舞台。○一朵：ひとひら。

★ 宮人斜

宮人斜

唐 雍裕之

幾多紅粉委黃泥

幾多の紅粉 黃泥に委てらる

野鳥如歌又似啼

野鳥 歌うが如く 又た 啼くに似たり

應有春魂化爲燕

應に 春魂の 化して 燕と為り

年年飛入未央棲

年々 飛びて 未央に入りて 棲む有るべし

【語釈】

○宮人斜：長安郊外にある女官の墓地。○紅粉：美女。○應：まさにべしと読み、きつとくに違いないの意。○春魂：宮女の魂。○未央：未央宮、西安市の西北にあった宮殿。前漢の皇帝の居場所であった。

(参考文献)

『三体詩』

★ 宮人斜

宮人斜きゆうじんしや

唐 陸龜蒙

草著愁煙似不春

草は愁煙しゆうえんを著ちやくし 春ならざるに似たり

晚鶯哀怨問行人

晚鶯 哀怨し 行人に問う

須知一種埋香骨

須く知るべし 一種しゆうこつ 香骨を埋むるも

猶勝昭君作虜塵

猶お 昭君の 虜塵りよじんと作るに勝れり

【語釈】

○宮人斜：長安郊外にある女官の墓地。○著愁煙：悲しみ悶えるさま。○晚鶯：晚春の鶯。○須：「すべからくべし」と読み、「当然くすべきである」「くするのは当然である」の意。○一種：同様。○昭君：王昭君。匈奴に嫁いだ悲劇の美女。○虜塵：匈奴の地の塵。

★ 宮人斜

宮人斜きゆうじんしや

明 林懋和

春雲漠漠草如烟

春雲 漠々ばくばくとして 草煙の如し

無限香魂哭杜鵑

限り無き香魂 杜鵑とくせんを哭こくす

為語蛾眉漫惆悵

為に語る 蛾眉がび 漫みだりに惆悵ちゆうちやうすと

絶勝青塚寄胡天

絶勝せいちやうたる青塚 胡天に寄る

【語釈】

○宮人斜：女官の墓地。○漠漠：一面に連なっているさま。○香魂：美人の魂。○杜鵑：ホトトギス。杜鵑は愛する人を失った女性が化けた鳥だと言われ、杜鵑は悲しみや別離の象徴とされる。○蛾眉：美人。○惆悵：嘆き悲しむ。○絶勝：景色のよい。○青塚：王昭君の墓。砂漠の中で草が青々と茂るので青塚と言われる。内蒙古自治区にある。○胡天：異民族居住地の空。

★ 宮人斜

宮人斜きゆうじしや

明 謝 杰

埋玉空山土一杯

玉を埋むうず 空山 土一杯

落花飛盡水悠悠

落花 飛び尽くして 水悠悠ゆうゆう たり

年年灑作杜鵑血

年年としねん 灑そそぎ作なす 杜鵑とけんの血

遺恨春風十二樓

遺恨いこん 春風 十二樓

【語釈】

○宮人斜：女官の墓地。○玉：ここでは宮女。○空山：人氣の無い山。○悠悠：他と関わりなくのんびりしたさま。○杜鵑血：ホトトギスは血を吐くような声で鳴くとされる。○十二樓：多くの楼。

★ 宮人斜

宮人斜

明 謝 肇 澗

落花啼鳥怨青春

落花 啼鳥 青春を怨む

生不銜恩死作塵

生きて恩を銜かじ 死して塵と作なる

長信月明秋寂寂

長信 月明らかにして 秋寂せきせき々

君王只夢李夫人

君王 只だ夢む 李夫人

【語釈】

○宮人斜：女官の墓地。○長信：長信宮。寵愛を失った班婕妤が住んだ宮殿。○李夫人：漢の武帝の側室で若くして無くなった。

★ 宮人斜

宮人斜

明 徐 渤

空山冥冥夜沈沈

空山 冥々めいめい 夜 沈々ちんちん

多少芳魂不可尋

多少の芳魂 尋ぬべからず

莫怨埋香在黄土

怨む莫かれ 香を埋めて 黄土に在るを

長門深以墓門深

長門 深くして 墓門の深きに以たり

【語釈】

○宮人斜：女官の墓地。○冥冥：暗くかすかなさま。○沈沈：夜の更けるさま。○多少：多くの。○芳魂：美人の魂。○黄土：墓。よみじ。○長門：長門宮。漢の武帝の時に寵愛を失った陳皇后が住んだ。

絶句類選 卷之十六 閨閣類

★江南行

江南行 こうなんこう

唐 張潮

茨菰葉爛別西灣

茨菰葉爛れて西灣に別る しご ただ

蓮子花開猶未還

蓮子花開いて猶お未だ還らず れんし

妾夢不離江上水

妾が夢は江上の水を離れず しょう

人傳郎在鳳凰山

人は伝う郎は鳳凰山に在りと ろう

【語釈】

○江南行…樂府題。江南地方の歌。○茨菰…くわい。○葉爛…晩春○西灣…西の入り江。場所不祥。○蓮子…蓮の花。○妾…わらわ。○人傳…人のうわさによると。○郎…家の宿六。○鳳凰山…場所不定。つがいの鳳が仲良く暮らす山。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 閨怨

閨怨 けいえん

唐 王昌齡

閨中少婦不知愁

閨中の少婦愁を知らず けいちゆう

春日凝妝上翠樓

春日妝いを凝らして翠樓に上る よせお

忽見陌頭楊柳色

忽ち見る陌頭楊柳の色 はくとう

悔教夫婿覓封侯

悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めしむことを ふせい

【語釈】

○閨中…妻の寢室。○少婦…若妻。○翠樓…青く塗った高殿、青樓に同じ。○陌頭…道ばた。○楊柳…やなぎ。○夫婿…夫。○4封侯…諸侯として封ずる。

(参考文献)

『唐詩選』『唐詩三百首』

★ 春怨

春怨

唐 王昌齡

音書杜絶白狼西

音書いんしょ 杜絶とぜつ 白狼はくろうの西

桃李無顔黃鳥啼

桃李 顔無くして 黃鳥啼く

寒雁春深歸去盡

寒雁 春深くして 歸り去りて 尽き

出門腸斷草萋萋

門を出で 腸斷ちやうだん 草 萋々せいせいたり

【語釈】

○春怨：若い女性が春の気配に感じてもの思いにふけること。○音書：手紙。ここでは出征している夫からの物。○杜絶：途絶える。○白狼：満州熱河省朝陽県。○黄鳥：コウライウグイス。○寒雁：冬の雁。○腸断：ハラワタがちぎれる程の悲しみ。○萋萋：草木が生い茂るさま。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 春夢

春夢

唐 岑參

洞房昨夜春風起

洞房昨夜春風起

遙憶美人湘江水

遙かに美人を憶う 湘江の水

枕上片時春夢中

枕上片時春夢の中

行盡江南數千里

行き尽す 江南數千里

【語釈】

○洞房：寢室。○湘江：湖南省を東に流れて洞庭湖にそそぐ河。○片時：短い時間。○江南：長江中下流の南岸地方。

（参考文献） 『新編中国名詞選（中）』

★ 古意

古意

唐 耿漳

雖言千騎上頭居

千騎上頭に居すと 言うと 雖も

一世生離恨有餘

一世の生離 恨余り有り

葉下綺窗銀燭冷

葉下の綺窓 銀燭冷やかなり

含啼自草錦中書

啼を含み 自ら草す 錦中の書

【語釈】

○古意：昔を思う心。○千騎上頭居：多数の騎兵の中で最も高い位置にいる。○生離：生き別れ。○綺窗：裝飾された美しい窓。○銀燭：銀色の灯火。○草：書き起こす。

★ 春怨

春怨

唐 戴叔倫

金鴨香消欲斷魂

金鴨きんお香消え魂こんを断たんと欲す

梨花春雨掩重門

梨花 春雨 重門ちゆうもんを掩う

欲知別後相思意

知らんと欲す 別後 相思そうしの意

回看羅衣積淚痕

回かえり看る 羅衣らい 淚痕 積つむ

【語釈】

○春怨…若い女性が春の気配に感じてもの思いにふけること。○金鴨…金製の鴨の形をした香炉。○重門…重門宮。武帝の寵を失った陳皇后が住んだ宮殿。○羅衣…薄絹の衣。

★ 寫情

情を写す

唐 李益

水紋珍簾思悠悠

水紋ちんたんの珍簾 思ゆうゆう 悠悠々

千里佳期一夕休

千里の佳期 一夕や休む

從此無心愛良夜

此れ従り 心無し 良夜を愛するに

任他明月下西樓

任さもあらばあれ他 明月 西樓を下るを

【語釈】

○水紋珍簾…水紋の模様がある美しい竹むしろ。○悠悠…他と関わりなくゆったりしたさま。○佳期…美しい時期。○任他…ままよ。

★ 江南曲

江南の曲

唐 于鵠

偶向江邊採白蘋
還隨女伴賽江神
衆中不敢分明語
暗擲金錢卜遠人

たまたま 江辺に向いて 白蘋を採す
また 女伴に随つて 江神に賽す
衆中 敢えて 分明に語らず
暗に 金錢を擲ちて 遠人に卜す

【語釈】

○江南曲…長江中下流域の歌。○白蘋…白い浮き草。○女伴…女の連れ合い。○江神…川の神。○衆中…衆人の中。○分明…はっきりと。○卜…与える。

★ 浪淘沙

浪淘沙詞

唐 劉禹錫

鸚鵡洲頭浪颭沙
青樓春望日將斜
銜泥燕子爭歸舍
獨自狂夫不憶家

おうむしゅうとう 浪 沙を颭し
青樓の春望 日 將に斜めらんとす
泥を銜む燕子は 争いて 舍に帰るも
ひとり 狂夫のみ 家を憶わず

【語釈】

○浪淘沙…なみが砂を洗う。○鸚鵡洲…武漢西南(武昌)の長江にある中洲。頭…ほとり。○颭…風が物を動かす、波だてる。○青樓…青く塗った華美なたかどの。○春望…春の眺め。○日將斜…日が傾こうとしている。舍…巢。○独自…自分ひとりだけで、自は、(だけでの意)。○狂夫…気の狂った男(作者)。

(参考文献)

『唐詩選』

★ 秋夜曲

秋夜の曲

唐 張仲素

丁丁漏水夜何長
漫漫輕雲露月光
秋迫閨蟲通夕響
寒衣未寄莫飛霜

ちようちよう 丁々たる漏水夜何ぞ長き
まんまん 漫々たる輕雲露月光る
あんちゆう 秋迫りて閨虫通夕響く
寒衣未だ寄せず霜を飛ばすこと莫かれ

【語釈】

○丁丁…水時計の音の形容。○漏水…水時計の水。○漫漫…広く遙かなさま。○閨蟲…コオロギ。○通夕…夜通し。○寒衣…冬用の衣服。

★ 秋閨思

秋閨の思

唐 張仲素

秋天一夜靜無雲
斷續鴻聲到曉聞
欲寄征人問消息
居延城外又移軍

しゆうけい 秋天一夜靜かに雲無し
こうせい 斷続する鴻聲曉に到りて聞く
せいじん 征人に寄せて 消息を問わんと欲す
きよえんじやうがい 居延城外 又軍を移す

【語釈】

○秋閨思…夫と別れている夫人が、秋に独り寝の寂しさを詠った詩。○鴻聲…雁の声。雁は手紙を運ぶという。蘇武の故事。○征人…遠征に出ている夫。○居延城…漢の武帝のとき、匈奴に対する最前線として、甘肅省の酒泉から張掖にかけて築かれた城。

★ 秋閨思

秋閨の思

唐 張仲素

碧窗斜月藹深暉

碧窓の斜月 深暉藹たり

愁聽寒螿淚濕衣

寒螿を 愁え聴き 涙衣を湿す

夢裏分明見關塞

夢裏 分明に 関塞を見る

不知何路向金微

知らず 何の路か 金微に向うかを

【語釈】

○秋閨思：夫と別れている夫人が、秋に独り寝の寂しさを詠った詩。○碧窗：青緑色のカーテンをした窓。○寒螿：晩秋に鳴く虫。○分明：はっきりと。○關塞：辺境の寨。○金微：アルタイ山脈。

★ 閨怨

閨怨

唐 白居易

寒月沈沈洞房靜

寒月 沈々として 洞房静なり

真珠簾外梧桐影

真珠簾外 梧桐の影

秋霜欲下手先知

秋霜 下らんと欲して 手先ず知る

燈底裁縫剪刀

灯底 裁縫 剪刀冷やかなり

【語釈】

○閨怨：夫と別れている怨み。○沈沈：夜が更けていくさま。○洞房：奥深い寝室。○真珠簾外：真珠で作った暖簾。

★ 閨婦

閨婦けいふ

唐 白居易

斜凭繡牀愁不動

斜しやうめに繡しゅう牀じやうに凭よりて愁しゆうえて動どうかず

紅綃帶緩綠鬟低

紅き綃せうえ帶おび緩ゆるくして綠りよく鬟かん低たる

遼陽春盡無消息

遼りやう陽やう春はる盡ききて消しょう息めし無し

夜合花前日又西

夜よる合ごう花か前ぜん日ひ又また西せいす

【語釈】

○閨婦：夫のいない寢室の妻。○繡牀：刺繡をした寢台。○紅：頬紅。○綠鬟：緑の黒髪
のまげ。○遼陽：遼寧省遼陽県、夫の出征先。○夜合花：ねむの花。

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★ 燕子樓

燕子樓えんしろう

唐 白居易

滿窗明月滿簾霜

滿まん窓そうの明めい月げつ 滿まん簾れんの霜そう

被冷燈殘拂臥牀

被ひ冷ひやかに灯あか残ざんして臥がし床しょうを払はらう

燕子樓中霜月夜

燕えん子しろう樓ちゆう中ちゆう 霜そう月げつの夜や

秋來只爲一人長

秋しゅう來らい 只ただ一ひとりの為ために長ながし

【語釈】

○燕子樓：徐州刺史であった張惜の愛妾盼盼が、張惜の死後に籠もった楼、序に詳しく説
明がある。○燈殘：灯が消えかかる。○拂臥牀：寢床に付く。○秋來：秋になって以来。
○一人：独り寝。

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★燕子樓

燕子樓

唐 白居易

鈿暈羅衫色似煙

鈿暈羅衫色煙に似たり

幾回欲著即澹然

幾回か著せんと欲して即ち澹然たり

自從不舞霓裳曲

霓裳の曲を舞わざりしより

疊在空箱十一年

疊みて空箱に在ること十一年

【語釈】

○燕子樓：徐州刺史であった張愔の愛妾盼盼が、張愔の死後に籠もった樓、序に詳しく説明がある。○鈿暈：螺鈿細工の帯び。○羅衫：薄絹の着物。○煙：霞、靄、雲。○澹然：涙の流れるさま。さめざめ。○霓裳曲：霓裳羽衣の曲、玄宗が楊貴妃のために作った曲とされる。○空箱：空しい衣装箱。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★戌婦詞

戌婦詞

宋 許棐

半落鈿花午夜闌

半ば落つ鈿花午夜闌なり

戍衣裁就寄君難

戍衣裁就すれども君に寄すること難し

雁來不帶平字安

雁來たれども帯びず平安の字

却帶邊風入帳寒

却って辺風を帯びて帳に入りて寒し

【語釈】

○戍婦：遠征に出ている人の妻。○鈿花：灯心の燃え尽きるときに出来る花形。○午夜：真夜中過ぎ。○戍衣：兵士が着る戦闘服。○裁就：裁縫して作る。○邊風：辺境からの風。

★ 昨夜

昨夜

唐 李商隱

不辭鷓鴣妬年芳

鷓鴣ていけつの年芳ねんぼうを妬ねたむを辞せず

但惜流塵暗燭房

但だ流塵りゅうじんの燭房しよくぼうに暗きを惜しむ

昨夜西池涼露滿

昨夜西池涼露滿ち

桂花吹斷月中香

桂花すいだん吹斷す 月中の香

【語釈】

○辭鷓：ホトトギス。○年芳：春の美しい花。女性の比喩。○流塵：空中の塵。○燭房：女性の部屋。○桂花：桂の木の花。月には桂があるという伝説。○起句：ホトトギスが鳴くと草が香らなくなる（『離騷』）。

★ 寄遠

遠きに寄す

唐 趙 嘏

禁鐘聲盡見棲禽

禁鐘きんしやう 声 尽きて 棲禽せいきんを見る

關塞迢迢故國心

関塞きんざい 迢々じょうじやう 故国の心

無限春愁莫相問

限ち無き春愁 相問うこと莫れ

落花流水洞房深

落花 流水 洞房どうぼう深し

【語釈】

○禁鐘：宮中の鐘。○棲禽：樹木に棲み着いている鳥。○関塞：辺境の寨。○迢迢：遠く遙かなさま。○故國：故郷。○春愁：春の日になんとなく気がふさがりもの悲しく感じられること。○洞房：女性の寢室。

★ 閨情

閨情

唐 孟 遲

山上有山歸不得

山上山有り 歸り得ず

湘江暮雨鷓鴣飛

湘江の暮雨 鷓鴣飛ぶ

靡蕪亦是王孫草

靡蕪 亦た是れ 王孫草ならば

莫送春香入客衣

春香を送りて 客衣に入ること莫かれ

【語釈】

○閑情：妻が遠くにいる夫のことを思う情。○湘江：洞庭湖に注ぐ湖南省最大の川。○鷓鴣：鳴き声が「行不得」と聞こえるので、行く事ができない事を意味する。○靡蕪：川岸に生じる草で当帰草（当に帰るべし）という。○王孫草：「楚辞・招隠詩」の「王孫遊不歸兮 春草生萋萋」に基づく。○客衣：旅の衣。

（参考文献） 『三体詩』

★ 江南織綾詞

江南織綾詞

唐 施肩吾

卿卿買得越人絲

卿々 買得たり 越人の糸

貪弄金梭嬾畫眉

金梭を弄することを貪りて 眉を画くを嬾る

女伴能來看新篔

女伴 能く来りて 新篔を見る

鴛鴦正欲上花枝

鴛鴦 正に 花枝に上らんと欲す

【語釈】

○江南織綾詞：長江中下流地方の織物をするときの歌。○卿卿：高位の人たち。○越人：浙江省の当たりの人。○金梭：金の梭（機織りの道具の一つ）。○女伴：女性の伴侶。○新篔：不明。誤字？○鴛鴦：オシドリ。

★ 閨怨

閨怨

唐 羅 鄴

夢斷南窗啼曉鳥
新霜昨夜下庭梧
不知簾外如珪月
還照邊城到曉無

夢 断 えて 南 窓 曉 鳥 啼 く
新 霜 昨 夜 庭 梧 に 下 る
知 ら ず 簾 外 珪 の 如 き 月
還 た 辺 城 を 照 し て 曉 に 到 る や 無 や

【語釈】

○閨怨…夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○庭梧…庭のアオギリ。○辺城…辺境の街。

★ 春愁

春愁

唐 韋 莊

自有春愁正斷魂
不堪芳草思王孫
落花寂寂黃昏雨
深院無人獨倚門

自 ら 春 愁 正 に 魂 を 断 つ 有 り て
堪 え ず 芳 草 王 孫 を 思 う に
落 花 寂 々 黃 昏 の 雨
深 院 人 無 く 独 り 門 に 倚 る

【語釈】

○春愁…春の日になんとかなく気がふさがりもの悲しく感じられること。○芳草…香草。○王孫…「楚辞・招隠詩」の「王孫遊不歸兮 春草生萋萋」に基づく。○寂寂…寂しく静かなさま。○黃昏…たそがれ。○深院…奥深い中庭。

★ 春閨怨

春閨怨

唐 李中

塵昏菱鑑懶修容

塵昏くして菱鑑容を修するに懶し

雙臉桃花落盡紅

雙臉桃花落ち尽して紅なり

玉塞夢歸殘燭在

玉塞夢歸りて殘燭在り

曉鶯窗外轉梧桐

曉鶯窓外梧桐に轉ず

【語釈】

○春閨怨…夫と別れた夫人が独り寝の寂しさを歌った詩。○塵昏…塵が積もって暗いこと。○菱鑑…鏡の一種。○雙臉…両頬。○玉塞…玉門関。○夢歸…夢が醒める。

★ 已涼

已涼

唐 韓偓

碧闌干外繡簾垂

碧闌干外繡簾垂る

猩色屏風畫折枝

猩色の屏風折枝を画く

八尺龍鬚方錦褥

八尺の竜鬚方に錦褥

已涼天氣未寒時

已に涼しき天氣未だ寒ならざる時

【語釈】

○已涼…已に涼しくなったこと。○碧闌干…青緑色の闌干。○繡簾…刺繍を施した布すだれ。○猩色…猩々色。○龍鬚…シヤクナグ科の植物で茎は織物に使われる。○錦褥…美しい衣服。

★ 春女怨

春女怨 しゅんじょ

唐 朱絳

獨坐紗窗刺繡遲

独坐 紗窓 刺繡遅し

紫荊花下嘒黃鸝

紫荊花下 黃鸝嘒ず

欲知無限傷春意

限り無き 春を傷む意を 知らんと欲せば

盡在停針不語時

尽く 針を停めて 語らずの時に在り

【語釈】

○春女怨…若い女性が春の気配に感じて、物思いにふけること。○紗窗…薄絹のカーテンをした窓。○紫荊花…バウヒニア。豆科の常緑高木。○黄鸝…コウライウグイス。○嘒…さえずる。

★ 春女怨

春女怨 しゅんじょ

唐 薛維翰

白玉堂前一樹梅

白玉堂前 一樹の梅

今朝忽見數枝開

今朝 忽ち見る 数枝の開くを

兒家門戶重重閉

兒家の門戸 重々閉ざす

春色因何入得來

春色 何に因りてか 入り得て来る

【語釈】

○春女怨…若い女性が春の気配に感じて、物思いにふけること。○白玉堂…高貴な人の邸宅。○重重…重なるさま。○春色…春の気配。春景色。

★ 寄人

人に寄す

唐 張泌

酷憐風月爲多情
還到春時別恨生
倚柱尋思倍惆悵
一場春夢不分明

酷だ憐れむ 風月 為に多情なるを
還た 春時に到りて 別恨生ず
柱に倚りて 尋思し 倍々 惆悵す
一場の春夢 分明ならず

【語釈】

○別恨：離別の愁い。○尋思：考慮、思索。○惆悵：嘆き悲しむ。○分明：はっきりする。

★ 寄夫

夫に寄す

唐 陳玉蘭

夫戍邊關妾在吳
西風吹妾妾憂夫
一行書信千行淚
寒到君邊衣到無

夫は辺関を戍り 妾は吳に在り
西風 妾を吹き 妾は夫を憂う
一行の書信 千行の涙
寒は君の辺に到る 衣は到るや無や

【語釈】

○邊關：辺境の関所。○妾：わらわ。○吳：江蘇省一帶。○西風：秋風。○書信：手紙。

★留別

留別りゅうべつ

唐 慎 氏

當時心事已心關
當時の心事しんじ 已に心に関す
雨散雲飛一餉間
雨散じ雲飛ぶ 一餉いっしょうの間
便掛孤帆從此去
便ち孤帆こはんを掛けて 此こ従り去り
不堪重過望夫山
堪えず重ねて望夫山に過ぎるに

【語釈】

○留別：別れるときに残す詩。○心事：心情。○一餉：一食する間。○孤帆：一つの帆掛
け船。○望夫山：妻が出征する夫を見送り、そのまま化したものと伝える望夫石のある湖
北省武昌の北山。

★燕子樓

燕子樓えんしろう

唐 關盼盼

北邙松柏鎖愁煙
北邙ほくぼうの松柏 愁煙に鎖さる
燕子樓中思悄然
燕子樓えんしろう中 思 悄然たり
自埋劍履歌塵散
自みずから劍履を埋めて 歌塵かじん散じ
紅袖香銷已十年
紅袖こうしゆう 香銷えて已に十年

【語釈】

○燕子樓：白居易の時代の徐州の長官・張尚書の邸内の樓閣のことで、張の死後、その妾
が長い間、ひとりで暮らしていた（白居易「燕子樓」）。○北邙：墓地のあるところ。○
愁煙：物寂しい霧靄。○悄然：しよんぼりしているさま。○歌塵：美しく響き渡る歌声。
○紅袖：女性の紅色の衣服。

★ 春思

春思

唐 張窈窕

門前花柳爛春暉
獨坐深閨繡舞衣
雙燕不知腸欲斷
銜泥故自傍人飛

門前の花柳 春暉に爛たり
独坐 深閨 舞衣を繡す
双燕は知らず 腸 断えんと欲するを
泥を銜えて 故に 自ら人に傍いて飛ぶ

【語釈】

○春思…春の日の思い。○春暉…春の光。○爛…鮮やか。○深閨…女性の部屋。○雙燕…
つがいの燕。

★ 贈遠

遠きに贈る

唐 薛濤

芙蓉新落蜀山秋
錦字開緘總是愁
閨閣不知戎馬事
月高還上望夫樓

芙蓉 新たに落つ 蜀山の秋
錦字 緘を開けば 総て是れ愁
閨閣は知らず 戎馬の事
月高くして 還た上る 望夫樓

【語釈】

○芙蓉…木蓮。○錦字…錦織の文字。ここでは夫からの手紙。○緘…とじひも。○閨閣…
…女性の寝室。○戎馬…戦争。○望夫樓…遠征している夫のいる方向を眺めやる楼閣
（「望夫山」の連想）。

（参考文献） 『漢詩大系 15』

★ 遣侍兒朝華

侍兒を朝華に遣る

宋 秦觀

月露茫茫曉柝悲

月露 茫茫 曉柝 悲し

玉人揮手斷腸時

玉人 手を揮う 斷腸の時

不須重向燈前泣

須らく重ねて 灯前に向いて泣くべからず

百歲終當一別離

百歲 終に一別離に当たる

【語釈】

○侍兒：侍妾。○朝華：朝早く開いた花枝。○茫茫：あてもなくつかみ所のないさま。○曉柝：曉を告げる拍子木。○玉人：愛する人。○須：「すべからくすべし」と読み、「当然くすべきである」の意。

★ 爲亞卿作

亞卿の為に作る

宋 韓駒

君住江濱起畫樓

君は 江濱に住み 画楼を起こす

妾居海角送潮頭

妾は 海角に居し 潮頭を送る

潮中有妾相思淚

潮中 妾の 相思の涙有り

流到樓前更不流

流れて 楼前に到り 更に流れず

【語釈】

○亞卿：愛しい人。○畫樓：絵で飾った楼閣。○妾：わらわ。○海角：海に突き出た陸地。○潮頭：波頭。○相思：相手を思うこと。相は自分の動作が相手に及ぶこと。

★春日

春日

宋 范成大

藥欄花暖小猶眠

藥欄花暖かにして小猶眠る

雪白晴雲水碧天

雪白くして晴雲水碧の天

煮酒青梅寒食過

酒を煮て青梅寒食過ぐ

夕陽庭院鎖鞦韆

夕陽庭院鞦韆を鎖す

【語釈】

○藥欄：芍薬の花の棚。○小猶：雄の子豚。○寒食：当時から百五日目。この日を挟んで前後の計三日間は火を使わない風習があった。○庭院：中庭。○鞦韆：ブランコ。

★春日

春日

宋 范成大

西窗一雨又斜暉

西窓一雨又斜暉

睡起薰籠換夾衣

睡起し薰籠夾衣を換う

莫放珠簾遮洞戸

珠簾を放ちて洞戸を遮ぎること莫れ

従教燕子作雙飛

従教燕子双飛を作すを

【語釈】

○斜暉：夕陽。○薰籠：衣に香を焚きしめるための籠。○夾衣：裏地のある衣服。○珠簾…玉すだれ。○洞戸：奥深い部屋。○従教：ままよ。○雙飛：つがいになって飛ぶ。

★ 柳葉詞

柳葉詞

宋 徐照

嫩葉吹風不自持
嫩葉 風に吹かれて 自ら持たず
浅黄微綠映清池
浅黄 微綠 清池に映ず
玉人未識分離恨
玉人 未だ識らず 分離の恨
折向堂前學畫眉
折りて 堂前に向いて 画眉を学ぶ

【語釈】

○嫩葉：若葉。○玉人：愛する人。○分離恨：柳の枝が分離されることの悲しみ。○畫眉：…黛をほどこす。

★ 寄衣曲

寄衣曲

宋 嚴仁

君戎交河春復冬
君 交河を戎りて 春復た冬
寒衣倒日看親封
寒衣 倒る日 親封するを看ん
莫嫌襟上班班色
嫌う莫かれ 襟上 班々の色
是妾燈前滴淚縫
是れ 妾が 灯前 涙を滴たらせて縫う

【語釈】

○寄衣曲：遠くに出かけている夫に衣服を送る歌。○交河：新疆ウイグル自治区トルファン市高昌区の中心部の街。○寒衣：冬の衣服。○班班：まだら。○妾：わらわ。

★ 傷春

春を傷む

宋 何應龍

玉織輕揭綉簾開
玉織ぎよくせん 輕く掲げ 綉簾しゅうれん開く
行到花前淚滿腮
行きて 花前に到りて 淚腮あじに満つ
正爾春心無處託
正に 爾なんじの春心 託す処無し
一雙胡蝶忽飛來
一雙の胡蝶こちよう 忽ちたちま飛び來る

【語釈】

○玉織：美人の手。○綉簾：絹や麻などの自然纖維で織ったすだれ。○春心：春景色を
ての春の感情。○一雙：つがい。○胡蝶：蝶々。

★ 閨情

閨情けいじょう

宋 陳允平

閑拈花片貼紗窗
閑かに 花片を拈つまんで 紗窓さそうに貼てんす
繡幕斜飛燕子雙
繡幕しゅうぼく 斜めに飛びて 燕子えんしなら双ふ
細數歸期相次近
細かく 歸期を数うれば 相次あいつぎて近し
倚樓日日望春江
樓よに倚りて 日々 春江を望む

【語釈】

○閨情：女性の愛情。○紗窗：カーテンをした窓。○繡幕：刺繍をした垂れ幕。

★ 戍婦

戍婦

宋 羅公升

夫戍關西妾在東
夫は関西を戍り 妾は東に在り
東西何處望相從
東西 何れの処か 望みて相從わん
只應兩處秋宵夢
只だ応に 兩処 秋宵の夢
萬一關頭得暫逢
万一 関頭にて 暫く逢うを得べし

【語釈】

○戍婦：遠征に出ている人の妻。○関西：ここでは西域の関所。○應：「まさに〜すべし」と読み、「おそらく〜であろう」の意。○関頭：関所のあたり。

★ 閨怨

閨怨

宋 葉元紫

長安遊子誤歸期
長安の遊子 帰期を誤まる
懶織回文錦字詩
懶く織る 回文 錦字の詩
紅聲黃金寬一寸
紅声 黄金 寬さ一寸
逢人猶道不相思
人に逢いて 猶お道う 相思わずと

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○遊子：旅人。○回文錦字詩：秦の時代に秦州刺史竇滔西域の流砂の地に流された。彼の妻蘇蕙は機織機で錦を織り、八百四十字から成る「迴文旋図の詩」（上から読んでも下から読んでも意味が通じる詩）をその中に織りこんで贈ったという故事を踏まえる。

★束綾詩

束綾詩

宋 蒨桃

一曲清歌一束綾 一曲の清歌 一束の綾
美人猶自意嫌輕 美人猶自意 輕きを嫌う
不知織女螢窗下 知らず織女 螢窓の下
幾度拋梭織得成 幾度か梭を抛ちて 織り得ること成る

【語釈】

○束綾詩：綾を整える詩。○清歌：無伴奏の歌。○織女：織女星。ここでは機を織る婦人。○螢窗：螢の灯りの窓。○梭：機織りの道具。

★束綾詩

束綾詩

宋 蒨桃

風勁衣單手屢呵 風 勁く衣単にして手 屢呵す
幽窗軋軋度寒梭 幽窓 軋々 寒梭を度る
臘天日短不盈尺 臘天 日短くして尺 盈たず
何似妖姬一曲歌 何ぞ似たる 妖姫の 一曲の歌に

【語釈】

○呵：息を吹きかけて暖める。○幽窗：奥深く閑かな部屋。○軋軋：ギシギシ。軋む音。
○寒梭：機織りの梭。○臘天：陰曆十二月の空。○妖姫：妖絶な侍女。

★秋懷

秋懷

宋 趙令時

白藕作花風已秋

白藕はくこう花なを作し風已に秋なり

不堪殘睡更回頭

殘睡ざんすいに堪えず更こうくに頭めくを回らす

晚雲帶雨歸飛急

晚雲 雨を帯びて 歸り飛ぶこと急なり

去作西窗一夜愁

去りて西窓 一夜の愁うれいと作る

【語釈】

○秋懷…秋の想い。○白藕…白い蓮の根。○殘睡…目覚めた後の眠さ。○西窓…女性の部屋屋の窓。

★春夜

春夜

宋 朱淑真

半簷斜月人歸後

半簷はんえんの斜月 人歸りて後

一枕清風夢破時

一枕の清風 夢破るる時

無奈梨花春寂寂

奈いかともする無し梨花春せきせき寂々たるを

杜鵑聲裏祇顰眉

杜鵑聲裏とけんせいり 祇ただ眉ひそを顰む

【語釈】

○半簷…ひさし半分の高さ。○一枕…一眠り。○夢破…夢から覚める。○無奈…どうしようも無い。○寂寂…静かで物寂しいさま。○杜鵑…ホトトギス。

★ 清晝

清昼

宋

朱淑真

竹搖清影罩幽窗

竹揺れて 清影 幽窓を罩む

兩兩時禽噪夕陽

両々時禽 夕陽に噪ぐ

謝卻海棠飛盡絮

海棠 謝却して 絮を飛び尽す

困人天氣日初長

人を困らす天氣 日初めて長し

【語釈】

○幽窗：静かな窓。○兩兩：幾つものつがい。○時禽：季節にあった鳥。○謝卻：散り尽くす。卻は助字。

★ 感懷

感懷

宋

黃氏女

欄桿閒倚日偏長

欄桿 閑に倚れば 日 偏えに長し

短笛無情苦斷腸

短笛 無情 苦だ断腸

安得身輕如燕子

安んぞ 身の燕子の如く軽きを得て

隨風容易到君傍

風に随って 容易に 君の傍に到らん

【語釈】

○感懷：心に感じ思うこと。○斷腸：非常に哀しいこと。○安得：何とかして〜したいものだ。

★ 哀被擄婦

擄せらる婦を哀れむ

宋 聶守真

當年結髮在深閨
當年 結髮して 深閨に在り
豈料人生有別離
豈に料らんや 人生 別離有りとは
到底不知因色誤
到底 知らず 色に因り誤まるを
馬前猶自買臙脂
馬前 猶自 臙脂をかう

【語釈】

○被擄：とりことなる。被は受け身の助字。○当年：昔年。○結髮：結婚。○深閨：人の近づかない女性の部屋。○猶自：いまなお。○臙脂：化粧用の紅色の顔料。

★ 春江曲

春江曲

明 劉基

江上風帆日日歸
江上の風帆 日々 帰る
獨自狂夫音信稀
ひとり 狂夫 音信稀なり
無因化作鷓鴣鳥
化して 鷓鴣鳥と作り
隨著郎船到處飛
郎が船に隨著して 到る処に飛ぶに因し無し

【語釈】

○風帆：帆掛け船。○獨自：ただ独り。○狂夫：内の旦那。○無因：…する方法が無い。○鷓鴣鳥：五位鷺。○郎：お前様。○隨著：従う。著は助字。

★ 月下裁衣

月下衣を裁う

明 陳 繼

香幃風捲月團團
睡起裁衣思萬崙
秋葉未紅金剪冷
玉門關外不勝寒

香幃 風を捲いて月 団々
睡起し衣を裁えば思 万崙
秋葉 未だ紅ならず 金剪冷やかなり
玉門関外 寒に勝えざらん

【語釈】

○香幃…香りのするとばり。○團團…まんまる。○萬崙…さまざま。○金剪…鋏の美称。

★ 洞房曲

洞房の曲

明 高 啓

洞房香吐合昏花
月轉勾欄啼乳鴉
今宵有酒留君醉
不信娼家勝妾家

洞房 香を吐く合昏花
月 勾欄に転じて 乳鴉啼く
今宵 酒有り君を留めて酔わしめん
信ぜず 娼家の 妾が家に勝るを

【語釈】

○洞房…奥深い女性の部屋。○合昏花…ねむの花。○勾欄…欄干。○乳鴉…鴉のひな。○娼家…妓楼。

★ 秋閨思

秋閨思 しゅうけいし

明 孫 賁

涼夜簫聲處處過

涼夜 簫聲 しょうせい 処々に過ぐ

玉樓高起偪天河

玉樓 高く起き 天河に偪る せま

西風瘦盡梧桐葉

西風 瘦尽す 梧桐の葉 そうじん ごとう

添得西窓月影多

添え得たり 西窓 月影の多きを

【語釈】

○秋閨思：女性の部屋での秋の思い。○玉樓：玉で飾った樓閣。○天河：天の川。○瘦盡：凋ませ尽くす。○梧桐：アオギリ。○西窓：女性の部屋。

感懷

感懷

明 夏 寅

寶鴨煙消幾縷香

寶鴨 ほうこ 煙 消す 幾縷の香 いくる

月移花影過長廊

月は花影を移して 長廊を過ぐ

春情一種無聊賴

春情 一種 聊 ちやう か頼り無し

自起燒燈照海棠

自ら起き 灯を燒き 海棠を照らす

【語釈】

○寶鴨：鴨の形をした香炉。○幾縷：幾すじ。○春情：男女の春を思う心持ち。

★春詞

春詞

明 梅鼎祚

海棠残月照人低
 海棠 残月 人を照らして低し
 枕上關山路欲迷
 枕上の関山路 迷わんと欲す
 生怕啼鶯驚曉夢
 生ただおそ怕る 啼鶯 曉夢を驚さんことを
 垂楊不種畫欄西
 垂楊 種えず 画欄がらんの西

【語釈】

○関山：関所のある山。○驚：夢を覚ます。○畫欄：画で飾った欄干。

★春風

春風

明 梅鼎祚

將軍鐵騎戰金微
 將軍 鉄騎 金微きんびに戦いくさす
 八月長安盡搗衣
 八月 長安 搗衣とうい尽く
 砧聲欲落三更月
 砧声ちんせい 落おちんと欲す 三更の月
 翡翠樓頭鴈卻飛
 翡翠樓頭ひすいろうとう 鴈 却また飛ぶ

【語釈】

○鐵騎：精銳の騎兵。○金微：アルタイ山脈。○搗衣：砧で敲いて柔らかくした衣。○砧聲：衣を打つ砧の音。○三更：真夜中。○翡翠樓：翡翠で飾った楼閣。

★ 閨怨

閨怨 けいえん

明 王世貞

聞説邊關樂事多
 前庭蹋鞠後庭歌
 不知刁斗聲中月
 曾照流黃錦上梭

聞説きくならく 辺關らくじ 樂事多しと
 前庭とうきくの蹋鞠 後庭の歌
 知らず 刁斗とうと 声中の月
 曾て照らす 流黃錦上りゅうこうきんじょうの梭ひ

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○聞説：聞くところによる
 と。○邊關：辺境の地にある関所。○蹋鞠：けまり。○刁斗：どら。○流黃錦：褐黄色の
 錦。○梭：機織り道具の一つ。

★ 秋閨

秋閨

明 謝榛

棠梨落葉滿園秋
 門掩蛩聲入夜愁
 未寄征衣霜露冷
 夢魂先到古雲州

棠梨の落葉 満園の秋
 門 掩いて 蛩声きようせい 夜に入りて愁うらう
 未だ 征衣せいゐを寄せざるに 霜露そうろ冷ゆ
 夢魂 先ず到る 古雲州こうんしゆちゆう

【語釈】

○秋閨：秋の女性の寢室。○蛩聲：コオロギの声。○征衣：軍服。○古雲州：内モンゴル
 自治区フフホト市一帯。

★ 搗衣曲

搗衣の曲

明 謝 榛

秦關昨夜一書歸
秦関 昨夜 一書帰る
百戦郎従劉武威
百戦 郎は従る 劉武の威
見説平安收涕淚
見説く平安 涕涙を収むを
梧桐樹下搗征衣
梧桐樹下 征衣を搗く

【語釈】

○搗衣：砧で衣を敲いて柔らかくする。○秦關：国境に設けられた関所。○郎…夫。○…漢の皇族。文帝の子で景帝の同母弟。呉楚七国の乱での功績があった。○見説…くを見たという事であるが。○梧桐：アオギリ。○征衣：軍服。

★ 效閩中語

閩中の語に効

明 徐禎卿

繡罷還呼姊妹看
繡 罷みて 還た 姉妹を呼びて看る
午風晴日滿欄干
午風 晴日 欄干に満つ
花間打散雙蝴蝶
花間 打ち散ず 双蝴蝶
飛過兒牆又作團
兒牆を飛び過ぎて 又た 団を作す

【語釈】

○閩中…女性の寢室。○繡…刺繡。○雙蝴蝶…つがいの蝶々。○兒牆…屏。

★ 寄遠

遠きに寄す

明 楊 慎

濯錦江頭烟水綠

たくきんこうとう
濯錦江頭 煙水綠なり

相思萬里人如玉

相思う万里 人玉の如し

瑤琴別後不曾彈

瑤琴 別後 曾て弾かず

今朝才理將歸曲

今朝才理す「將歸曲」

【語釈】

○濯錦江：錦江。成都を流れる川。○江頭：川のほとり。○烟水：水面に立つ靄。○人：夫。○瑤琴：玉で裝飾した琴。○將歸曲：歌曲の一つ。「詩経」にあり。

★ 閨怨

閨怨

明 週 在

江南二月試羅衣

江南 二月 羅衣を試む

春盡燕山雪尚飛

春 尽きて 燕山 雪 尚お飛ぶ

應是子規啼不到

應に是れ 子規 啼けども到らず

故鄉雖好不思歸

故郷 好しと雖も 帰るを思わざるべし

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○羅衣：軽く柔らかい糸で編んだ衣服。○燕山：燕山山脈。河北省の河北平原の北を囲むようにそびえる。○子規：ホトトギス。故郷に帰るを促す鳥。

★ 闡意

闡意

明 李先芳

阿郎空自解談文
阿郎空しく 自ら 文を談ずるを解す
文似何人薦子雲
文何人に似せて 子雲を薦す
聞道田文能好客
聞道く 田文 能く客を好むと
為郎繡箇猛嘗君
郎が為に 箇の 猛嘗君を繡す

【語釈】

○闡意：女性の寢室での思い。○阿郎：私の旦那。○子雲：揚雄。漢代の儒学者、文人。成都の人。学者として高名である。『太玄経』、『法言』の著者。○聞道：聞くところによると。○田文：戦国四君の一人である猛嘗君。

★ 浣紗曲

浣紗の曲

明 林鳳儀

閑起春晴出浣紗
閑に 春晴を趣いて 出でて紗を浣う
東風吹落鬢邊花
東風 吹き落とす 鬢辺の花
郎君行過休相捨
郎君 行き過ぎて 相捨うを休めよ
柳下門開是妾家
柳下 門の開くは 是れ妾が家

【語釈】

○浣紗：薄絹を洗う。○東風：春風。○郎君：旦那様。○妾：わらわ。

★ 閨人曲

閨人の曲

明 陳鳴鶴

聞君遠在古榆關
此去千山復萬山
終日登樓人不見
開簾唯有燕飛還

聞く君遠く古榆関に在りと
此を去り千山復た万山
終日登楼すれども人見えず
簾を開けば唯だ燕の飛びて還る有るのみ

【語釈】

○閨人：寢室に一人いる夫人。○古榆關：河北省秦皇島市付近の関所。

★ 閨思

閨思

明 郭文涓

青樓弧枕憶天涯
紫陌垂楊影縫紗
啼罷曉鶯香夢覺
含情愁對海棠花

青楼 弧枕 天涯を憶う
紫陌 垂楊 影 紗を縫う
啼 罷んで 曉鶯 香夢覚む
情を含み 愁えて対す 海棠の花

【語釈】

○閨思：寢室での女性の思い。○青樓：妓院。○弧枕：独り寝。○天涯：空の果て。○紫陌：帝都の郊外の道路。○紗：薄絹。○香夢：甘い密のような夢。

★ 閨情

閨情

明 金 誠

欲剪紅霞作舞衣

紅霞を剪りて舞衣を作らんと欲す

薄雲涼霧共霏霏

薄雲 涼霧 共に霏々たり

玉簫吹冷天邊月

玉簫 吹けば冷やかなり 天辺の月

只待乘鸞子晉歸

只だ待つ 鸞に乗じて 子晋の歸るを

【語釈】

○閨情：寝室での女性の思い。○紅霞：夕焼け。○霏霏：雲の起こるさま。○玉簫：縦笛の美称。○子晉：周代の仙人、王子喬。白い鶴に乗り、笙を吹きながら空中を飛翔したという。

★ 裁衣

裁衣

明 董少玉

芙蓉江北雁飛飛

芙蓉江北 雁 飛々たり

燕子磯邊人未歸

燕子磯邊 人 未だ帰らず

只怕沈郎腰已瘦

只だ怕る 沈郎 腰 已に瘦なるを

遲迴難寄舊時衣

遅廻し 寄せ難し 旧時の衣

【語釈】

○芙蓉江：不確定。○飛飛：翻るさま。○燕子磯：南京市東北部觀音山にある。○沈郎：沈約。南朝齊の文人、宰相。老病に苦しみ腰が細くなっていた。「沈約瘦腰」と言われる。ここでは自分の夫になぞらえる。○遲迴：ぐずぐずする。

★ 裁衣

裁衣さいい

明 魏時敏

別後衡門鎮不開

別後こうもん 衡門ちん 鎮として開かず

年年春雨長莓苔

年々の春雨 莓苔まいたいを長くす

東風似欲添離恨

東風 離恨を添えんと欲するに似て

故引雙雙燕子來

故こに 雙々さうさうの燕子えんしを引いて來る

【語釈】

○衡門：粗末な門。○莓苔：こけ。○東風：春風。○離恨：離別の恨み。○雙雙：二つずつ。

★ 征婦怨

征婦の怨

明 魏時敏

聞説沙場雪未乾

聞説きくならく 沙場さじょう 雪 未だ乾かざるに

移師又欲向樓蘭

師を移して 又 樓蘭ろうらんに向わんと欲すと

憑誰為借東風力

誰よに憑りてか 為に 東風の力を借りて

吹轉三邊地不寒

吹き転じて 三辺地 寒ならしめざらん

【語釈】

○聞説：聞くとくところによれば。○沙場：沙漠。○樓蘭：新疆ウイグル自治区、ロプノール湖の西にあった小独立国。○東風：春風。

★ 秋闈曲

秋闈の曲

明 朱無瑕

芙蓉露冷月微微
芙蓉露冷く月微々たり
小院風清鴻雁飛
小院風清くして鴻雁飛ぶ
聞道玉門千萬里
聞道く玉門千万里
秋深何處寄寒衣
秋深くして何れの処か寒衣を寄せん

【語釈】

○微微…奥深く静かな様子。○小院…小さな中庭。○鴻雁…かり。○聞道…聞くとところによれば。○玉門…玉門関。○寒衣…冬の衣。

★ 秋日書懷

秋日書懷

明 孟淑卿

蟬咽庭槐泣素秋
蟬咽いて庭槐素秋に泣く
幾行新鴈度南樓
幾行の新鴈南樓を渡る
天邊莫看如鈎月
天辺看ること莫かれ鈎の如き月
釣起新愁與舊愁
釣起す新愁と旧愁とを

【語釈】

○素秋…秋の季節。○幾行…幾列。○天邊…空の地平線近く。○釣起…つり上げるように新たにおこす。

★ 春晚

春晚

明 黄淑德

春風日日閉深閨
柳老花殘鶯自啼
寂寞小窗天又暮
一鉤新掛月樓西

春風 日々 深閨を閉ざす
柳は古い 花は残し 鶯 自ら啼く
寂寞たる小窓 天 又た暮る
一鉤の新月 楼西に掛かる

【語釈】

○深閨…人の近づかない女性の寝室。○殘…そこなわれる。○寂寞…ひっそりとして物寂しいさま。○一鉤…一つの釣り針のような。

★ 春日偶成

春日偶成

明 謝五孃

乳燕銜泥春晝長
倚欄無語立斜陽
桃花紅雨梨花雪
相逐東風過粉牆

乳燕 泥を銜えて 春晝長し
欄に倚りて 語無く 斜陽に立つ
桃花 紅雨 梨花の雪
東風を相逐いて 粉牆を過ぐ

【語釈】

○乳燕…子供の燕。○東風…春風。○粉牆…黒塗りの防火屏。

★ 雨夜聞簫

雨夜簫を聞く

明 葉小鸞

紗窗徙倚倍無聊
香燼熏爐懶更燒
一縷簫聲何處弄
隔簾微雨濕芭蕉

紗窓 徙倚すれば 倍々無聊
香燼きて 熏炉 懶く更に焼く
一縷の簫声 何れの処にか弄す
簾を隔てて 微雨 芭蕉を湿らす

【語釈】

○紗窗：薄絹のカーテンをした窓。○徙倚：徘徊。○熏爐：香炉。○一縷：一筋。

★ 懷潘郎

潘郎を懷しむ

明 陳氏

良人挾策上長安
欲訴哀腸隔萬山
乳燕似隣人寂寞
雙雙飛近玉欄干

良人 策を 挟みて 長安に上る
哀腸を訴えんと欲すれども 万山を隔つ
乳燕 人の寂寞を 隣れむに似て
双々 飛んで近づく 玉欄干

【語釈】

○潘郎：晋の潘岳。若いとき美貌であった。自分の夫をなぞらた。○良人：夫。○挾策：奔走する事のとえ。○哀腸：非常に哀しい思い。○乳燕：子供の燕。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○雙雙：二つずつ。○玉欄干：玉で飾った欄干。

★ 寄遠

遠きに寄す

明 陳氏

暮雨沈沈不肯休
暮雨沈々 肯えて休まず
知君今夜宿誰樓
知る君今夜 誰が楼に宿すや
可憐楚水吳山外
憐れむべし 楚水 吳山の外
旅況閨情一樣愁
旅況 閨情 一樣に愁う

【語釈】

○沈沈：静かなさま。 奥深いさま。 ○楚水：湖北省・湖南省の河川。 ○吳山：揚州・荊州・交州地方の山。 ○旅況：旅先での気分や風景。 ○閨情：女性の寢室での愛情。

★ 感夢

夢に感ず

明 陳氏

忽夢夫君得意旋
忽ち 夫君を夢み 意旋るを得たり
醒來情緒轉悽然
醒め来りて 情緒 転た悽然
曉風不管閨中恨
曉風は管せず 閨中の恨
故送鐘聲到枕邊
故に 鐘声を送りて 枕辺に到らしむ

【語釈】

○悽然：寂しくいたましいさま。 ○閨中：女性の寢室。

★ 冬 閨夜怨

冬 閨夜怨 とうけいやえん

清 宋微輿

落盡飛雲暮色寒 落ち尽くす 飛雲 暮色寒し
黄昏北斗照欄干 黄昏 北斗 欄干を照らす
可憐一片如霜月 憐むべし 一片霜の如き月
惟有深閨獨自看 惟だ 深閨 独り 自ら看る有るのみ

【語釈】

○冬 閨夜怨…冬の女性の寝室での夜の独り寝のうらみ。○黄昏…たそがれ。○深閨…人の近づかない女性の寝室。

★ 閨怨

閨怨 けいえん

清 董以寧

流蘇空繫合歡床 流蘇 空しく繫ぐ 合歡床
夫婿長征妾斷腸 夫婿 長征して 妾 腸を断つ
留得當時臨別淚 留め得たり 当時 臨別の涙
経年不忍浣衣裳 経年 衣裳を浣うに忍びず

【語釈】

○閨怨…夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○流蘇…五色の糸を交えたふさ。○合歡床…新婚のベット。○妾…わらわ。○臨別…別れに臨む。○経年…年を経る。

★ 閨怨

閨怨けいえん

清 尢翼宗

緑楊深處倚紅樓 緑楊 深き処 紅樓に倚る
 遙憶征人萬里愁 遙かに憶う 征人 万里の愁
 何事花間雙蛺蝶 何事ぞ 花間の 双蛺蝶そうきょうちよう
 朝來飛上玉搔頭 朝 来たりて 飛び上る 玉搔頭たみやくさうじゆう

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○征人：遠征にでている夫。
 ○雙蛺蝶：つがいの蝶々。○玉搔頭：玉のかんざし。

★ 閨怨

閨怨けいえん

清 尢翼宗

一樹梨花小院香 一樹の梨花 小院香ばし
 紛紛舞雪撲空床 紛紛かんかんたる舞雪 空床を撲つ
 月明自照鞦韆影 月明 自ら照らす 鞦韆しゅうせんの影
 却背傍人數雁行 却って 傍人に背いて 雁行を数う

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○：小さな中庭。○紛紛：乱れ飛び散るさま。○空床：独り寝のベッド。○鞦韆：ブランコ。○傍人：傍にいる人。

★ 擣衣曲

擣衣の曲

清 週永銓

一夕涼生秦女機
 砧聲不待雁南飛
 誰知萬里黃雲戍
 已有新霜上鐵衣

一夕涼生^{しんじょ} 秦女の機^き
 砧聲^{ちんせい} 待たず 雁南に飛ぶを
 誰か知らん 万里 黃雲の戍^{じゆ}
 已に 新霜 鉄衣の上に有るを

【語釈】

○擣衣：砧で衣を打つ。○秦女：蘇蕙（蘇若蘭）のこと。蘇氏は夫・竇滔が罪を得て流沙に流されたのを偲び、錦を織り、その中に回文を織り込んで送った故事に基づく。○砧聲：衣を打つ砧の音。○黃雲：辺塞の馳。○戍：守りの寨。○鐵衣：鉄のよろい。

★ 閨怨

閨怨

清 陳棟

鏡臺寂寂掩芳塵
 又換深閨一度春
 除却慙慙花上鳥
 他鄉應少勸歸人

鏡台^{せきせき} 寂々 芳塵を掩^{ほうじん}
 又 換^{かわ}る 深閨^{しんけい} 一度の春^{ひとたび}
 慙慙^{いんぎん}に 花上の鳥を除却^{じまきやく}して
 他郷^{たきやう} 応^{まさ}に少かるべし 歸^{かえる}を勸むる人

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○寂寂：寂しく静かなさま。○深閨：人の近づかない奥の婦人の寢室。○除却：除き去る。○應：「まさにべし」と読み「きつとくであるに違いない」の意。

★ 閨怨

閨怨 けいえん

清

楊青黎

分明賺得兩眉開
分明に 賺し得たり 両眉の開くを
手折黃花上鏡臺
手に 黃花を折りて 鏡台に上る
侍女無端忙報道
侍女 端無くも 忙しく報道す
隣家昨夜遠人回
隣家 昨夜 遠人 回ると

【語釈】

○閨怨：夫と別れている夫人が独り寝の寂しさを詠った詩。○分明：はっきりと。○賺得：勝ち取る。○兩眉開：安心して両眼を開ける。○黃花：黄色の花。菊。○無端：思いがけなく。○遠人：遠征に出かけている夫。

★ 春閨怨

春閨怨 しゅんけいえん

清

楊青黎

燕子將雛蠶欲絲
燕子 雛を將い 蚕 糸ならんと欲す
海棠開放已多時
海棠 開き放ちて 已に多時
従他紅落蒼苔滿
従す 他の紅落ちて 蒼苔に滿つるに
閉却空閨総不知
空閨を閉却して 総て知らず

【語釈】

○春閨怨：春の女性の寝室での独り寝のうらみ。○多時：長い時間がたったこと。○蒼苔：青緑色のこけ。○空閨：独り寝の部屋。○閉却：閉ざし尽くす。

★ 春閨怨

春閨怨 しゅんけいげん

清 金是崑

鶯啼花落掩重扉	鶯啼き花落ちて重扉を掩う
人去天涯竟不歸	人去りて天涯竟に帰らず
惟有畫梁雙燕子	惟だ画梁の双燕子のみ有りて
春風還向舊巢飛	春風還た旧巢に向つて飛ぶ

【語釈】

○春閨怨…春の女性の寝室での独り寝のうらみ。○天涯…空の果て。○畫梁…画で飾られた梁。○雙燕子…つがいの燕。

★ 古意

古意

清 張延松

荷葉風香隔水涯	荷葉風 香しくして水涯を隔つ
吳姬盪槳濕裙紗	吳姬 槳を盪かして裙紗を湿らす
晚來滿載新蓮子	晚來 滿載す 新蓮子
月到橫塘正到家	月 橫塘に到つて正に家を到す

【語釈】

○古意…昔を偲ぶ心。○吳姬…吳の地方出身の妓女、美人が多い。○裙紗…薄絹の衣服のすそ。○晚來…夜になってから。○橫塘…横の隄。

★ 春閨怨

春閨怨

清 駱綺蘭

春寒料峭乍晴時
睡起紗窓日影移
何處風箏吹斷線
飄來落在杏花枝

春寒 料峭 乍晴時
睡起すれば 紗窓 日影移る
何れの処の 風箏か 線を吹断し
飄り来て 落ち 杏花の枝に在り

【語釈】

○春閨怨…春の女性の寢室でのひとり寝のうらみ。○料峭…春の風の肌寒いさま。○紗窓…薄絹のカーテンをした窓。○風箏…凧。

★ 春閨

春閨

清 李氏

重門深鎖寂無塵
滿樹花開不見人
獨有畫梁雙燕子
年年相伴過殘春

重門 深く鎖ざし 寂として 塵無し
樹に満つる 花開いて 人を見ず
独り 画梁の双燕子 有りて
年々 相い伴いて 残春を過ぐ

【語釈】

○春閨…艶めかしい婦人の部屋。○重門…重なっている門。○畫梁…画で飾ったはり。○雙燕子…つがいの燕。

★ 秋夜

秋夜

清 顔 氏

夜月沈沈静掩扉
空庭秋氣逼簾衣
梧桐小院支機石
擣素聲中落葉飛

夜月沈沈ちんちん 静かに扉をお掩う
空庭 秋氣 簾衣たんいに逼る
梧桐 小院の支機石
擣素聲どうそせい中 落葉 飛ぶ

【語釈】

○沈沈：夜がふけて行くさま。○空庭：人気の無い庭。○簾衣：竹で編んだ衣服。○梧桐：アオギリ。○支機石：織女が機織り機を支えるために使った石。○擣素：素材の糸をつく砧の音。

★ 女郎詞

女郎詞じやろうし

清 胡氏慎容

相呼同伴到簾幃
偷看新來客是誰
又恐被人先瞥見
却從紈扇隙中窺

同伴を相呼びて 簾幃れんいに到る
偷みすみ看る 新たに來たる 客かく 是れ誰そ
又た恐る 人に 先に 瞥見べっけんとさるるを
却つて 紈扇がんせん 隙中げきちゆうに 従りて窺う

【語釈】

○女郎：若い女性。○同伴：つれあい。○簾幃：スタレとトバリの中。○瞥見：ちらりと見る。○紈扇：白い薄絹で作った団扇。

絶句類選 卷之十七 歌曲類

★ 明妃曲

明妃曲 めいひきょく

唐 儲光羲

胡王知妾不勝悲

胡王 妾が 悲しみに勝えざるを知る

樂府皆傳漢國辭

樂府 皆伝う 漢国の辞

朝來馬上箏篔引

朝來 馬上 箏篔引

稍似宮中閑夜時

稍や似たり 宮中 閑夜の時

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○胡王：匈奴の王。○樂府：樂符題の詩。○朝來：朝になつてから。○箏篔引：樂府題の詩の一つ。○閑夜：閑かな夜。

★明妃曲

明妃曲

唐 儲光羲

日暮驚沙亂雪飛
日暮 驚沙 乱雪 飛ぶ
傍人相勸易羅衣
傍人 相勸めて 羅衣を易む
強來前殿看歌舞
強いて 前殿に來りて 歌舞を看る
共待單于夜獵歸
共に待つ 單于 夜獵して 歸るを

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○驚沙：疾風に吹かれる沙。○傍人：付け人。○羅衣：薄絹の衣。○單于：匈奴の王。

★明妃曲

明妃曲

唐 白居易

漢使却回憑寄語
漢使 却回するに 憑りて 語を寄す
黃金何日贖蛾眉
黃金 何れの日か 蛾眉を贖わん
君王若問妾顏色
君王 若し 妾が 顔色を問わば
莫道不如宮裏時
道う 莫かれ 宮裏の時に 如かずと

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○却迴：ひき返す。○憑：頼む。○蛾眉：美人。王昭君。○君王：皇帝。○妾：わらわ。○宮裏：宮中。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 (三三)』

★ 明妃曲

明妃曲

唐 王 渙

夢裏分明入漢宮
夢裏分明に漢宮に入る
覺來燈背錦屏空
覺え来れば 灯背 錦屏空し
紫臺月落關山曉
紫台月は落つ 関山の暁
腸斷君王信畫工
腸断す 君王の 画工を信ずるを

【語釈】

○明妃曲…王昭君のことを詠った曲。○夢裏…夢の中。○分明…はっきりと。○灯背…灯火の背面。○錦屏…銀の屏風。○紫臺…皇帝の居場所。○關山…関所のある山。○腸断…非常な悲しみを起こす。○君王…皇帝。

★ 明妃曲

明妃曲

唐 王 偃

北望單于日半斜
北望 单于 日半ば斜なり
明君馬上泣胡沙
明君 馬上 胡沙に泣く
一雙淚滴黃河水
一雙の涙滴 黄河の水
應得東流入漢家
應に 東流して 漢家に入るを得べし

【語釈】

○明妃曲…王昭君のことを詠った曲。○單于…匈奴の王。○明君…王昭君。○胡沙…郷土の地の砂漠。○應…「まさにくすべし」と読み「くすべきである」の意。

★ 明妃曲

明妃曲

唐 許忱甫

馬背東風去路餘
幾多幽意寄琵琶
妾身若是能傾國
盡捲胡沙入漢家

馬背 東風 去路 余なり
幾多の幽意 琵琶に寄す
妾が身 若し是れ 能く国を傾くれば
尽く 胡沙を捲いて 漢家に入らしめん

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○東風：春風。○去路：進むべき道。○幽意：愁える心。○胡沙：匈奴の地の沙。

★ 明妃曲

明妃曲

唐 楊達

漢國明妃去不還
馬駝弦管向陰山
匣中縱有菱花鏡
羞對單于照舊顏

漢国の明妃 去りて還らず
馬駝 弦管 陰山に向う
匣中 縦い 菱花の鏡有れども
羞ずらくは 单于に対して 旧顔を照らすを

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○明妃：王昭君。○馬駝：馬と駱駝。○陰山：陰山脈。匈奴との国境。○匣中：箱の中。○單于：匈奴の王。

★明妃曲

明妃曲 めいひきよく

明 林 爐

四面悲歌夜起風 四面の悲歌 夜風を起こす
玉顔憔悴對秋空 玉顔 憔悴して 秋空に對す
琵琶欲奏腸先斷 琵琶 奏せんと欲して 腸 はわた先ず断ゆ
胡月分明照漢宮 胡月 分明に 漢宮を照らす

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○玉顔：玉のように美しい顔。○胡月：匈奴の地方の月。○分明：はっきりりと。

★明妃曲

明妃曲

明 彭 華

抱得琵琶不忍彈 琵琶を抱き得て 弾ずるに忍びず
胡沙獵獵雪漫漫 胡沙 りようりょう 獵々 雪 まんまん 漫漫々
曉來馬上寒如許 曉來 ぎょうらい 馬上 寒 許 かく の如し
信是將軍出塞難 信ず 是れ 將軍 出塞の難きを

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○胡沙：匈奴の地方の沙。○獵獵：物の翻る形容。○漫漫：雪の静かに盛んにふるさま。○曉來：曉になって以来。

★明妃曲

明妃曲

明 李 養

翠袖啼痕日日新
翠袖の啼痕 日々に新なり
迴看漢月遠隨人
迴看すれば漢月遠く人に隨う
不知世上黃金貴
知らず世上黄金の貴きを
空信朱顔鏡裏春
空しく信ず朱顔鏡裏の春

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○翠袖：青緑色の袖。○啼痕：涙の痕。○迴看：振り返って見る。○漢月：漢で見た月。○朱顔：紅色の美しい顔。

★明妃曲

明妃曲

明 李攀龍

青海長雲萬里秋
青海の長雲 万里の秋
琵琶一曲淚先流
琵琶一曲涙先ず流る
六宮多少良家女
六宮多少良家の女
不到沙場不解愁
沙場に到らず愁いを解かず

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○青海：青海省にある中国最大の湖。○六宮：宮城。○多少：多くの。○沙場：砂漠。

★ 明妃曲

明妃曲

明 李攀龍

玉門關外起秋風
玉門関外 秋風起る
雙鬢蕭條傍轉蓬
双鬢 蕭条として 転蓬に傍う
怪得紅顏零落盡
怪み得たり 紅顏 零落し 尽くすを
春光只在合歡宮
春光 只だ在り 合歡宮

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○玉門關外：玉門関の西方。○蕭條：枯れ萎れるさま。○轉蓬：根が切れて風に吹かれるよもぎ。○零落：おちぶれること。○合歡宮：宮殿の名。

★ 明妃曲

明妃曲

明 李攀龍

天山雪後北風寒
天山 雪後 北風寒し
抱得琵琶馬上彈
琵琶を抱き得て 馬上に弾ず
曲罷不知青海月
曲 罷んで 知らず 青海の月
徘徊猶作漢宮看
徘徊し 猶お 漢宮の看を作す

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○天山：天山山脈。中央アジアのカザフスタン、キルギスから中国西部にかけての国境地帯に広がる山脈群。○青海：青海省にある中国最大の湖。

★ 明妃曲

明妃曲
めいひきよく

明 李攀龍

燕支山下幾回春
坐使蛾眉誤此身
二八漢宮含笑入
一時紅粉更無人

えんしさんか 燕支山下 幾回の春
まさ 坐に 蛾眉をして 此の身を誤らしむ
にはち 二八 漢宮 笑を含んで入り
一時 紅粉 更に人無し

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○燕支山：中国甘肅省蘭州の北、張掖の東南にある山。○蛾眉：美人。○二八：十六歳。○紅粉：美人。

★ 明妃曲

明妃曲
めいひきよく

明 吳國倫

玉關西去馬長鳴
不獨琵琶作苦聲
最恨胡兒誇往事
漢家曾困白登城

玉關 西に去れば 馬 長く鳴く
独り 琵琶 苦声を作すのみならず
最も恨む 胡兒 往事を誇るを
漢家 曾て 困む 白登城

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○玉關：玉門関。○胡兒：匈奴の人々。○往事：昔。○漢家曾困白登城：漢の高祖劉邦が、匈奴と戦い包囲されて屈辱的な条件で講話した白登山。

★ 明妃曲

明妃曲

明 陳子龍

陰山一夕起秋風
陰山一夕秋風起
撥盡琵琶玉帳空
琵琶を撥き尽くして玉帳空し
遙思漢家今夜月
遙かに思う漢家今夜の月
清光先照未央宮
清光先ず照らす未央宮

【語釈】

○明妃曲…王昭君のことを詠った曲。○陰山…陰山山脈。匈奴との国境。○玉帳…玉をちりばめた帳。○未央宮…漢の高祖が作った宮殿で皇帝の居場所。

★ 明妃曲

明妃曲

明 陳子龍

千群胡馬合長圍
千群の胡馬 長圍を合す
火照禪于夜獵歸
火は照して 禪于夜獵して帰る
一曲悲歌争送酒
一曲の悲歌 争いて酒を送る
幾行紅淚濕羅衣
幾行の紅淚 羅衣を湿す

【語釈】

○明妃曲…王昭君のことを詠った曲。○合長圍…長い囲みを併せて完全に包圍する。○禪于…匈奴の王。○幾行…幾すじ。○羅衣…薄絹の衣服。

★ 明妃曲

明妃曲

明 陳子龍

日落浮雲暗玉關
月明青海又黃昏
生平唯解西宮怨
誰道沙場更斷腸

日落ちて 浮雲 玉関に暗し
月明の青海 又た黄昏
生平 唯だ解く 西宮怨
誰か道う 沙場 更に断腸と

【語釈】

○明妃曲…王昭君のことを詠った曲。○玉關…玉門関。○青海…青海省にある中国最大の湖。○生平…今まで。○西宮怨…寵を失った宮女の怨み。○沙場…砂漠。

★ 明妃曲

明妃曲

明 陳子龍

二月天山雪未乾
重重氈張不勝寒
春風自滿昭陽殿
獨上龍堆立馬看

二月 天山 雪 未だ乾かず
ちようちよう せんちよう た 勝えず
春風 自ら満つ 昭陽殿
ひとり 竜堆に上りて 馬を立てて看る

【語釈】

○明妃曲…王昭君のことを詠った曲。○天山…天山山脈。中央アジアのカザフスタン、キルギスから中国西部にかけての国境地帯に広がる山脈群。○重重…重なりあうさま。○氈張…毛氈の帳。○昭陽殿…漢の成帝の築いた宮殿。皇后趙飛燕とその妹趙昭儀が住んでいた。○竜堆…白竜堆の略称。今の新疆ウイグル自治区東部、ロプノール湖の東にある砂漠。

★ 妃曲

明妃曲

明 僧宗泐

玉貌風沙勝畫圖

玉貌ぎよくぼう 風沙 画図がとに勝えず

琵琶難寫舊恩疎

琵琶 写し難し 旧恩の疎なるを

宮中咫尺如千里

宮中の咫尺しせき 千里の如し

況復胡天萬里餘

況んや復たまた 胡天 万里余なるをや

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○玉貌：美しい姿。○畫圖：醜く画かれた絵。○旧恩：以前の皇帝の寵愛。○咫尺：極めて近い距離。○胡天：匈奴の地方の空。

★ 明妃曲

明妃曲

清 劉獻廷

漢主曾聞殺畫師

漢主 曾て聞かく 画師を殺すと

畫師何足定妍媸

画師 何んぞ足らん 妍媸けんしを定むるに

宮中多少如花女

宮中 多少 花の如じよき女

不嫁禪于君不知

禪ぜん于に嫁かせずんば 君 知らず

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○妍媸：美醜。○多少：多い。○禪于：匈奴の王。○君：皇帝。

★ 明妃曲

明妃曲 めいひきょく

清 王元勳

琵琶一曲淚雙流

琵琶 一曲淚 双流 そうりゅう

明月高懸青海頭

明月 高く懸かる 青海の頭 ほとり

記得當時曾獨看

記得 きどく 當時 かつ 曾て 独り 看たるを

淒涼猶是漢宮秋

淒涼 猶お是れ 漢宮の秋

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○青海：青海省にある中国最大の湖。○記得：覚え
ている。○淒涼：寂しく静かなさま。

★ 明妃曲

明妃曲 めいひきょく

清 諸延槐

蛾眉宛轉欲銷魂

蛾眉 がびえんてん 宛轉 魂を銷さんと欲す

一曲琵琶雙淚痕

一曲の琵琶 双淚の痕

不到陰山水雪地

陰山 冰雪の地に 到らずんば

那知永巷是君恩

那んぞ知らん 永巷 是れ君恩

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○蛾眉宛轉：三日月形の美しい眉。美しい顔容の形
容。○陰山：陰山山脈。匈奴との国境。○永巷：宮中の長巷。宮女達のすまい。○君恩：
皇帝の恵み。

★ 明妃曲

明妃曲

清 徐增

琵琶觸手淚沾巾
琵琶 手を触れて 涙巾を沾す
馬背西風捲地塵
馬背の西風地を捲く塵
愁向李陵墳畔過
愁えて 李陵墳畔に向いて 過ぐ
可憐俱是漢家人
憐むべし 俱に是れ 漢家の人

【語釈】

○明妃曲：王昭君のことを詠った曲。○巾：ハンカチ。○西風：秋風。○李陵：漢の將軍。匈奴を相手に勇戦しながらも敗北して抑留され、以降匈奴の地で生涯を終えた。

★ 昭君詞

昭君詞

唐 戴叔倫

漢家宮闕夢中歸
漢家の宮闕 夢中に帰る
幾度氈房淚濕衣
幾度か 氈房 涙衣を湿す
惆悵不如邊鴈影
惆悵す 辺鴈の影に如かざるを
秋風猶得向南飛
秋風猶お 南に向って飛ことを得たり

【語釈】

○昭君詞：王昭君のことを詠った詩。○宮闕：宮城。○氈房：毛氈を張って作った天幕。○惆悵：嘆き悲しむ。○邊鴈：辺境の雁。

★ 昭君怨

昭君の怨

唐 汪遵

漢家天子鎮寰瀛
塞北羌胡未罷兵
猛將謀臣徒自貴
蛾眉一笑塞塵清

漢家の天子 寰瀛を鎮む
塞北の羌胡 兵を罷めず
猛將 謀臣 徒に自貴す
蛾眉 一笑 塞塵清し

【語釈】

○昭君…王昭君。○寰瀛…天下。○塞北羌胡…匈奴。○自貴…自分を大切にする。○蛾眉…美人。○塞塵清…兵乱が収まる。

★ 昭君怨

昭君の怨

唐 僧皎然

自倚嬋娟望主恩
誰知美惡忽相翻
黃金不買漢宮貌
青塚空埋胡地魂

自ら 嬋娟に倚り 主恩を望む
誰か知らん 美惡 忽ち相翻えるを
黄金 買わず 漢宮の貌
青塚 空しく埋む 胡地の魂

【語釈】

○昭君…王昭君。○嬋娟…美貌。○主恩…皇帝の寵愛。○青塚…王昭君の墓。

★ 解昭君怨

昭君の怨みを解く

唐 王 勣

莫怨工人醜畫身 怨む莫かれ 工人 醜く身を画くを
莫嫌明主遣和親 嫌う莫かれ 明主 和親を遣るを
當時若不嫁胡虜 当時 若し 胡虜に嫁せずんば
祇是宮中一舞人 祇だ是れ 宮中の一舞人

【語釈】

○昭君：王昭君。○胡虜：匈奴

★ 烏孫公主歌

烏孫公主の歌

明 陳鳴鶴

生長深宮未出門 深宮に生長して 未だ門を出でず
九千里外嫁烏孫 九千里外 烏孫に嫁す
一聲胡角空回首 一声の胡角 空しく首を回らせば
何處天邊是故国 何れの処の天辺か 是れ故国

【語釈】

○烏孫公主：劉細君。漢の江都王劉建の娘。烏孫の王に嫁いだ。○深宮：帝王の住居。○烏孫：漢代から南北朝時代の初め頃まで天山山脈の北方にいた遊牧民族。○胡角：異民族の角笛。○天邊：空の果て。

★ 烏孫公主歌

烏孫公主の歌

明 陳鳴鶴

赤谷城中雨不休

赤谷城中雨休せず

雁聲日暮使人愁

雁声 日暮 人をして愁えしむ

漢家今夜平陽第

漢家 今夜 平陽第

宮女如花倚玉樓

宮女 花の如く 玉楼に倚る

【語釈】

○赤谷城…不祥。○平陽第…不祥。○玉楼…玉で飾った楼閣。

★ 緑珠怨

緑珠の怨

明 邊 貢

主家高樓天與齊

主家の高樓 天と齊し

妾身不惜委黃泥

妾が身 惜まず 黄泥に委ぬ

他生願作銜泥燕

他生 願わくは 泥を銜うる燕と作り

長傍高樓梁上棲

長えに 高樓 梁上に傍いて棲まん

【語釈】

○緑珠…大富豪の石崇に愛された妓女。『蒙求』（緑樹墜樓）。○妾…わらわ。○他生…来世。

★ 續長恨歌

続長恨歌

宋 范成大

人似飛花去不歸

人は飛花に似て 去りて帰らず

蘭昌宮殿幾斜暉

蘭昌宮殿 幾斜暉

百年只有雲容姊

百年 只だ 雲容姊 有り

留得當時舊舞衣

留め得たり 当時の旧舞衣

【語釈】

○蘭昌宮：連昌宮。唐代の行宮の一つで、河南省宜陽県にあり、唐の玄宗と楊貴妃がしばしば訪れた。○斜暉：西日。○雲容姊：唐の玄宗の寵妃である楊貴妃の侍女。舞を得意とした。ここでは霓裳羽衣の曲を舞う舞姫。

★ 燕京歌

燕京歌

明 劉效祖

元會初分庭燎光

元會 初めて分つ 庭燎の光

君王親御紫霞觴

君王 親しく御す 紫霞の觴

不知五夜春多少

知んぬ 五夜 春 多少ぞ

白日猶聞蠟炬香

白日 猶お聞く 蠟炬の香

【語釈】

○燕京歌：北京地方の歌。○元會：元旦の朝見の儀。○庭燎：庭を照すかがり火。○君王：皇帝。○紫霞觴：仙人の盃。○五夜：五更。夜明け。○聞：匂いを嗅ぐ。○蠟炬：ろうそく。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

唐 王維

出身仕漢羽林郎

出身して漢つかに仕うう 羽林郎うりんろう

初隨驃騎戰漁陽

初めて驃騎ひょうきに隨まい 漁陽りやうに戦いくう

孰知不向邊庭苦

孰たれか知しらん 辺庭へんていに向むかわさざるの苦くるしみを

縱死猶聞俠骨香

縦たとい死しすとも 猶なお 俠骨きやうこつの香かを聞きかん

【語釈】

○少年行：少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○出身：仕官する。○羽林郎：皇帝を守護する近衛兵、兩家の子を当てた。○驃騎：驃騎將軍。○漁陽：現在の北京近郊、漢代には匈奴など異民族との戦いの最前線であった。○俠骨香：遊俠の気高い気骨。○聞：匂いを嗅ぐ。

(参考文献) 『唐詩選』 『新釈漢文大系 詩人編 3』

★ 少年行

少年行しょうねんこう

唐 王維

新豐美酒斗十千

新豐しんほうの美酒びいしゆ 斗と十千じゅうせん

咸陽遊俠多少年

咸陽かんやうの少年せうねん 遊俠ゆうきやう多おほし

相逢意氣爲君飲

相逢さうぶついて 意氣いき 君きみの為ために飲のむ

繫馬高樓垂柳邊

馬うまを繫ひぐ 高樓たうろう 垂柳すいりうの邊へ

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○新豐：長安の東、華清宮のあるところ。○斗十千：一斗(今の一升)が一万錢もする高級酒。○咸陽：渭城。○遊俠：勇氣があり男気にとむ人。○垂柳：しだれ柳。

(参考文献) 『新釈漢文大系 詩人編 3』

★ 少年行

少年行しょうねんこう

唐 李白

五陵年少金市東
五陵の年少 金市の東
銀鞍白馬度春風
銀鞍ぎんあ 白馬 春風を渡る
落花踏盡遊何處
落花 踏み尽くし 何れの処にか遊ぶ
笑入胡姬酒肆中
笑って入る 胡姬こき 酒肆しゅしの中

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○五陵年少：五陵付近に住む若者。五陵は、漢の五帝の陵墓。この付近には富裕層が住んでいた。○年少：若者・青年。○胡姬：西域の女。○酒肆：酒場。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 少年行

少年行しょうねんこう

唐 令狐楚

弓背霞明劍照霜
弓背きゅうはい 霞明かめい 劍霜を照す
秋風走馬出咸陽
秋風 走馬 咸陽かんようを出す
未收天子河湟地
未だ 天子 河湟かこうの地を 収めず
不擬回頭望故鄉
擬なせず 頭こうえを回めぐらして 故郷を望むを

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○弓背：曲がった弓の一面。○霞明：霞のような明るさ。○咸陽：長安の西、西安空港の地。○河湟：黄河と黄泉の間にある地域の名称。○不擬：ししようとしない。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

唐 吳彥之

承恩借獵小平津

恩を承わりて 借獵 小平津しょうへいしん

使氣常遊中貴人

氣をして常に遊中の貴人たらしむ

一擲千金渾是膽

一擲千金いってきせんきん 渾て是れ胆たん

家無四壁不知貧

家 四壁無く 貧を知らず

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○小平津河南省孟金県の北東、黄河沿いに位置する。東漢の靈帝の時代、河南八門の一つであった。○一擲千金：一回の掛け金が千金であるような大博打。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

明 高啓

下直平明出禁門

下直平明かちよくへいめい 禁門を出で

提隼博局伴王孫

博局を提隼はくきよくていけいして 王孫を伴う

寶刀不敢輕輸卻

寶刀 敢えて輕がるしく輸却ゆきやくせず

明日沙場欲報恩

明日沙場あしたじょうにて 恩に報いんと欲す

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○下直：宿直を終えて退出する。○平明：明け方。○禁門：宮城の門。○博局：すごろくの盤。○王孫：貴公子。○輸却：賭けものとして出して取られる。○沙場：砂漠。

★ 少年行

少年行

明 王毓德

装成七寶匣吳鈎

七宝を装成して 吳鈎を匣にす

笑擁吳姬走馬遊

笑つて 吳姬を擁きて 馬を走らせて遊ぶ

半醉直衝馳道過

半醉 直ちに 馳道を衝きて過ぐ

横鞭遙揖富民候

鞭を横たえて 遙かに揖す 富民候

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壮士を詠う。○七寶：多くの宝石。○装成：装いに付ける。○吳鈎：鋭い劍。○吳姬：吳の地方出身の女性。美人が多い。○馳道：馬や馬車が通る道。○揖：両手を組んで会釈する。○富民候：侯爵の一つ。

★ 少年行

少年行

明 徐燉

朝入平康暮酒樓

朝に平康に入り 暮には酒樓

千金寶劍百金裘

千金の宝劍 百金の 裘

醉來走馬長安道

酔 来りて 馬を走らす 長安道

不肯停鞭避五侯

肯えて 鞭を停めて 五侯を避けず

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壮士を詠う。○平康：長安の段峰街の平康広場。娼婦が住んでいた。○五侯：權門貴族の総称。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

明 趙世顯

紫駟玉勒控青絲

紫駟しりゆう 玉勒ぎよくろく 青糸を控え

挟彈花間歸去遲

弾を挟み 花間 帰り去ること遅し

雲錦夜筵歌越女

雲錦うんきん 夜筵やえん 越女に歌わせ

桃花春帳擁吳姬

桃花 春帳しゅんちやう 吳姬いだを擁く

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壮士を詠う。○紫駟：駿馬。○玉勒：玉で飾った鞍。○雲錦：雲の模様を織り込んだ絹織物。○夜筵：夜の宴会。○越女：越の地出身の女性。美女が多い。○春帳：春の帳の中。○吳姬：吳の地出身の女性。美女が多い。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

明 穆世顯

貂裘雪滿踏寒威

貂裘てんきゆう 雪満ちて 寒威を踏む

薄暮南山射虎歸

薄暮 南山 虎を射て歸る

相逢醉尉無須問

相逢あいあ 醉尉すいゐ 問うことを須もちいる無し

明日邊城羽檄飛

明日 邊城へんじやう 羽檄うげき飛ぶ

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壮士を詠う。○貂裘：貂の河で作ったかわごろも。○寒威：厳しい寒さの威力。○南山：不祥。○醉尉：俗物。『史記』（李將軍列伝）李広が職を免ぜられたとき、醉尉に侮辱された故事。○邊城：辺塞の街。○羽檄：国家有事の時、急速に兵を徴するための檄文。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

清 方 還

不解陰符與六韜

解かず陰符いんぷと六韜りくとう

似知名姓五陵豪

知るに似たり 名姓 五陵の豪

此身未識為誰用

此の身未だ識らず 誰が為めに用いるかを

慷慨長歌看寶刀

慷慨こうがい 長歌し 宝刀を見る

【語釈】

○少年行：樂府題。いなせな若者や壯士を詠う。○陰符：兵法書の一つ。○六韜：太公望呂尚が書いたとされる兵法書。○名姓：姓名。○五陵：漢の高祖、惠帝、景帝、武帝、昭帝の陵墓の在る地で富豪が多く住んでいる。

★ 少年行

少年行しょうねんこう

清 彭 源

下馬同傾酒一樽

馬を下りて 同ともに傾く 酒一樽

侍兒じ首し壁へき蒸じやう純じゆん

侍兒じ首し 蒸じやう純じゆんをき擘きく

生平不着黄金甲

生平 着ちやくせず 黄金甲

醉祖貂裘數箭痕

酔すいいて 貂裘てんきやうをと祖そりて 箭痕せんこんを数かずう

【語釈】

○侍兒：侍妾。○匕首：あいくち。○蒸純：蒸した豚肉。○生平：ふだん。○黄金甲：黄金の鎧。○貂裘：貂の裘。○箭痕：矢の痕。

★ 少年行

少年行 しょうねんこう

清 葉抱松

錦帯呉鉤白花駒

錦帯 きんたい 呉鉤 ごこう 白花駒 はくかか

姓名曾隸李輕車

姓名 せいせい 曾 せい 隸 れい 李輕車 りけいしや

功成笑却千金賞

功成 こうせい 笑却 しょうきやく 千金 せんぎん の賞

玉碗春風醉落花

玉碗 ぎよくわん 春風 しゆんぷう 落花 らつが に酔う

【語釈】

○呉鉤…刀劍。○白花駒…体に白斑のある口先が黒い黄色の毛の馬。○李輕車…李広の弟、李彩のことを指す。勇敢で戦上手な輕車両の將軍であったことから、そう呼ばれるようになった。○笑却…笑い飛ばす。却是助字。○玉碗…玉製の杯。

★ 公子行

公子行 こうしこう

唐 羅 鄴

金鞍玉勒照花明

金鞍 きんあん 玉勒 ぎよくろく 花を照らして明なり

過後香風特地生

過後 かご 香風 かうふう 特地 とくち に生ず

半醉五侯門裏出

半醉 はんすい 五侯 ごこう の門裏 もんり に出ず

月高猶在禁街行

月高 つきたか くして猶 なほ お禁街 きんがひ に在りて行く

【語釈】

○公子行…貴族の子を詠った詩。○玉勒…玉で飾ったくつわ。○過後…後に。○特地…突然。○五侯…権門貴族の総称。○禁街…京城の街道。

★ 公子行

公子行こうしこう

唐 孟賓子

錦衣紅奪彩霞明
錦衣の紅 彩霞を奪って明らかなり
侵曉春遊向野庭
暁を侵して春遊し野庭に向う
不識農夫辛苦力
識らず農夫の辛苦の力
驕驄蹋爛麥青青
驕驄 蹋爛す 麦 青々たるを

【語釈】

○公子行：貴族の子を詠った詩。○彩霞：華やかな彩雲。○驕驄：壮健な駿馬。○蹋爛：踏みつけてただれさす。

★ 採蓮曲

採蓮曲さいれんせきょく

唐 白居易

菱葉縈波荷颭風
菱葉は波を縈い 荷は風に颭ぐ
荷花深處小船通
荷花 深き処 小船通ず
逢郎欲語低頭笑
郎に逢いて 語らんと欲し 頭を低れて笑えば
碧玉搔頭落水中
碧玉の搔頭 水中に落つ

【語釈】

○采蓮曲：樂府題。蓮を取るとき之歌。○碧玉：青く美しい玉。○搔頭：かんざし。

〔参考文献〕 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★采蓮曲

采蓮曲さいれんきょく

明 謝榛

湖上西風吹綺羅
靚妝越女照清波
折將蓮葉伴遮面
權過前灘笑語多

湖上の西風 綺羅を吹く
靚妝の越女 清波を照す
蓮葉を折りて 将って 伴って面を遮る
權は 前灘を過ぎて 笑語多し

【語釈】

○采蓮曲：樂府題。蓮を取るときの歌。○西風：秋風。○綺羅：美しい絹の衣服。○靚妝：着飾った。○越女：越の地方出身の女性。美人が多い。○前灘：前の早瀬。

★采蓮曲

采蓮曲さいれんきょく

明 沈明臣

月照波紋似鴨頭
一船雙槳蕩中流
採蓮不道羅裙濕
歸晒彫欄夜不收

月は波紋を照らして 鴨頭に似たり
一船 双槳 中流に蕩す
蓮を採り 道わず 羅裙の湿るを
歸りて 彫欄に晒して 夜収めず

【語釈】

○采蓮曲：樂府題。蓮を取るときの歌。○鴨頭：鴨の頭のような緑色。○雙槳：…二つのかい。○羅裙：薄絹の衣服の裾。○彫欄：彫刻や色とりどりの装飾を施した欄干。

★ 怨歌行

怨歌行 えんかこう

明 謝 榛

長夜生寒翠幕低

長夜寒を生じ 翠幕低し すいばく

琵琶別調為誰悽

琵琶 別調 誰が為にか悽たる べつちやう せい

君心無定如明月

君が心 定まる無きこと 明月の如し

纔照樓東復轉西

纔に 樓東を照らし 復た西に転ず わづか ま

【語釈】

○怨歌行…樂府題。怨みを述べた歌。○翠幕…翠色の幕。○別調…別の味わい。

★ 江南曲

江南の曲

清 宋 琬

菡萏池塘隔畫橋

菡萏 池塘 画橋を隔つ かんだん

月明樓上美人簫

月明らかに 楼上 美人の簫

十年不到傷心地

十年到らず 傷心の地

夢逐長江來往潮

夢は逐う 長江 来往の潮 お うしお

【語釈】

○江南…長江中下流の南側の地方。○菡萏…蓮の花。○池塘…池の隄。○画橋…画で飾った橋。

絶句類選標本 九

絶句類選 卷之十八 詠古類

★詠史(夏禹)

詠史(夏禹)

唐 周曇

堯違天孽頼詢謨

堯 天孽に違ひ 詢謨に頼る

頓免洪波浸碧虚

頓に免がる 洪波 碧虚を浸すを

海内生靈微伯禹

海内の生靈 伯禹微くんば

盡應隨浪化爲魚

尽く 応に 浪に随いて 化して 魚と爲るべし

【語釈】

○夏禹：伝説上の皇帝で、夏王朝の創始者。治水工事に成功し、堯帝から帝位を譲られた。○堯：伝説上の皇帝で理想の帝王とされる。○天孽：天災。○詢謨：対策を尋ねる。○頓：すぐに。○洪波：大波浪。○碧虚：碧空。○海内：世界中。○生靈：人類。○伯禹：夏禹。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。

★ 詠史（周公）

詠史（周公）

唐 周曇

文武傳芳百代基
幾多賢哲守成規
仍聞吐握延儒素
猶恐民疵未盡知

文武 芳を伝う 百代の基
幾多の賢哲 成規を守る
仍ち 聞く 吐握 儒素を延べ
猶お恐る 民疵 未だ尽く知らざるを

【語釈】

○周公：周公旦。周王朝の政治家で且つ、周邑の君主。初代武王の補佐をして殷打倒に当たった。『周礼』、『儀礼』を著したとされる。孔子は文武両道の且を理想の聖人と崇めた。○傳芳：美名を伝える。○賢哲：賢明睿智の人。○成規：前人の決めた規則。『周礼』、『儀礼』。○吐握：握髪吐哺。立派な人材を求めること（『韓詩外伝』三）。○儒素：儒者の平素の行い。

★ 詠史（細柳營）

詠史（細柳營）

唐 胡曾

文帝變輿勞北征
條侯此地整嚴兵
轅門不峻將軍令
今日爭知細柳營

文帝の變輿 北征を勞う
条侯 此の地 嚴兵を整う
轅門 將軍の令を峻とせずんば
今日 争か 細柳營を知らん

【語釈】

○細柳營：陝西省咸陽県の西南にあたる地名。漢の將軍周亞夫が細柳に営んだ軍營。匈奴に備えて設置された他の將軍の軍營に比べ、規律が嚴格に守られていたことで有名になった。○文帝：唐の太宗李世民。○變輿：皇帝の車駕。○條侯：漢の周亞弗。○轅門：將軍の軍營門。

★ 詠史

詠史

宋 文 同

不得滎陽遂失秦
始知成敗盡由人
可憐一擲贏天下
只使黃金四萬斤

滎陽を得ずんば遂に秦を失わん
始めて知る 成敗 尽く人に由るを
憐むべし 一擲 天下を贏け
只だ使う 黄金四万斤

【語釈】

○滎陽：河南省鄭州市新陽市。○失秦：秦の後を継ぐことを失する。○成敗：ことの成否。○盡由人：全て人間の信頼関係による。○可憐：感嘆の言葉。ああ。○贏天下：項羽が天下を得ていたこと。○只使黄金四萬斤：陳平の四万金を使った工作の爲に（范増を失って）天下を失ってしまったこと。

★ 詠史（韓淮陰信）

詠史（韓淮陰信）

金 李 汾

仗劍淮陰去復還
舉頭西望識龍顏
堂堂竟握真王印
未害男兒辱胯間

劍を仗つき 淮陰 去りて復た還る
頭を舉げて西望し 龍顔を識る
堂々 竟に握る 真王の印
未だ害せず 男兒 胯間に辱めらるるを

【語釈】

○韓淮陰信：淮陰侯となった韓信。○淮陰：韓信の故郷。○龍顔：龍のような劉邦の顔。劉邦。○真王印：韓信が斉王から故郷のある楚王になったこと。○未害男兒辱胯間：又くぐりをさせた男を殺さず、却って中尉の位に就けたこと。

★ 詠史（朱震）

詠史（朱震）

元 張養浩

交道衰微數百年

交道 衰微す 數百年

死亡誰肯與周旋

死亡して 誰か肯えて 周旋を与にせんや

如何當日陳蕃榻

如何ぞ 当日の陳蕃の榻

止為南州孺子懸

止だ 南州の孺子の為にのみ懸くるとは

【語釈】

○朱震：陳蕃の友人。処刑された陳蕃の子の陳逸をかくまい、拷問を受けても白状しなかった。○周旋：立ち振る舞い。○如何：どうして／＼なのだろうか。○陳蕃：東漢の高潔な政治家。○陳蕃榻：陳蕃は賓客を好まなかったのだが徐稚（東漢の隱士）のためだけに椅子一脚をあつらえ、彼が帰るとその椅子を片付けた。賢下士を礼遇する意味。○南州：南昌。徐稚の出身地。○孺子：徐稚の字。

★ 詠史（相如滌器を図）

詠史（相如器を滌う図）

明 唐寅

琴心挑取卓文君

琴心 挑取 卓文君

賣酒臨邛石凍春

酒を売り 臨邛の石凍春

狗監猶能薦才子

狗監 猶お能く 才子を薦す

當時宰相是閑人

当時の宰相 是れ閑人

【語釈】

○相如：司馬相如。○琴心：琴の音で表現した愛情。○挑取：選り取る。○卓文君：司馬相如と駆け落ちした妻。中国古代四大才女の一人。○臨邛：四川省邛崃県。卓文君の故郷。○石凍春：不祥。○狗監：漢の時代の内官の名前。皇帝の狩猟犬を管理する役であった。司馬相と同郷の楊得意。

★ 詠史（雪夜倅趙普）

詠史（雪夜 趙普を倅す）

明 唐寅

宋朝受命政維新

宋朝 命を受け 政 維新たり

魏國稱為社稷臣

魏国 称し 社稷臣と為る

空使終年讀論語

空しく終年 論語を讀ましむ

如何不做託孤人

如何んぞ 孤を託す人に 做わざる

【語釈】

○趙普：北宋初期の宰相で宋朝建国の元勳。○受命：天命を受ける。○社稷臣：国家の安全保障に関わる重要な臣下。○転句：趙普に学問がないとされたため、太祖趙匡胤は『論語』を読ませた。○如何：どうして。○託孤人：劉備玄德。諸葛孔明に劉禪を託した。

★ 詠史

詠史

清 陸次雲

儒冠儒服委丘墟

儒冠 儒服 丘墟に委てられ

文採風流化土苴

文採 風流 土苴と化す

尚有陸生坑不盡

尚お 陸生 坑にし尽くさざる有りて

留他馬上説詩書

他を留めて 馬上 詩書を説く

【語釈】

○儒冠儒服：儒者の冠と衣服。○土苴：泥かす。卑しい物のたとえ。○陸生：地上に住む生き物。

★ 詠史

詠史

清

沈紹姬

為報君讐奮一椎

君讐くんしゅうに報いぜんが為ために一椎いちつい奮うう

副車雖誤亦雄哉

副車ふくしゃ誤まちると雖なも亦またた雄ゆうなる哉

淮陰也是韓王後

淮陰わいいん也また是まれ韓王かんわうの後

何須當時躡足來

何なにぞ当たう時じ 足あしを躡もみ來きるを須もちいん

【語釈】

○君讐：張良の楚国魏の仇。○一椎：始皇帝の車に投げた鉄槌。○副車：始皇帝の副車。
○淮陰：韓信。○韓王：劉邦。○何須：どうしてゝができたのだろうか。○躡足：張良が
劉邦の足を踏んで、韓信を仮王でなく真王にさせよと言ったこと。

★ 詠史

詠史

清

黄文運

天馬蒲萄遠道収

天馬てんま 蒲萄ぼとう 遠道えんどう 収とまる

安西大夏入邊州

安西あんせい 大夏たいか 辺州へんしゅう に入る

誰知衛霍論功日

誰たれか知しらん 衛霍えいかく 論功ろんこうの日

卜式捐金已拜侯

卜式ぼくしき 金かねを捐すて 已すでに侯こうを拜まつすを

【語釈】

○天馬蒲萄：天馬や蒲萄を産出する西域の国。衛霍：漢の武帝のときの將軍、衛青と霍去
病。○遠道：遙かに遠い地域。○安西：トルファン、クチャ地方。○大夏：中国西北部
(甘肅省・寧夏回族自治区)に建国した西夏。○邊州：中国の辺境の州。○衛霍：漢の武
帝のときの將軍、衛青と霍去病。○卜式：漢の武帝の時の人。財産家で、財産の半分を国
に寄付する嘆願書を出し、左庶長の爵位を与えられた。○捐金：寄付する。

★ 讀史有感

史を讀みて感有り

清 郁 植

兵壓邯鄲氣欲吞
時危公子下監門
滿堂珠履三千客
朱亥從來未受恩

兵は邯鄲を圧し氣吞まんと欲す
時危くして公子監門に下る
滿堂の珠履 三千の客かく
朱亥從來 未だ恩を受けず

【語釈】

○邯鄲：戦国時代の趙の首都。秦軍に包囲された。○公子：戦国四君の一人である信陵君。○監門：門番のいる城門。侯生がいた。○珠履：高貴な人達。○朱亥：侯生が信陵君に推薦した人物。

(参考文献) 『新釈漢文大系 89 魏公子列伝第十七』

★ 湘妃

湘妃しょうひ

明 林西壁

日落風淒湘水湄
蒼梧人去暮雲悲
于今一種江千竹
猶似當年染淚時

日落ち風淒し湘水の湄みぎわ
蒼梧そうご人去りて暮雲悲し
今いまに于いて一種江千の竹
猶お似たり 當年 涙を染むる時に

【語釈】

○湘妃：堯帝の娘で舜の妃である娥皇と女英。舜が蒼梧で死ぬると人は湘水に身を投げてその神になったのだとされている。○湘水：洞庭湖に注ぐ湖南省最大の河川。○湄：岸辺。○蒼梧：アオギリ。○于：…に。○江千竹：湘竹(斑竹) 湘妃の涙で皮が斑になったとされる。○当年：昔年。

★ 夷齊

夷齊

元 宋 无

干戈爰及父君間

干戈爰に及ぶ父君の間

叩馬難令木主還

馬を叩き木主をして還らしむること難し

若向使曾食周粟

若し向に曾て周の粟を食らわしめば

千年誰說首陽山

千年誰か説かん首陽山

【語釈】

○夷齊：伯夷と叔齊。殷の国君の後継者であったが、その地位を譲り合つて国を去り、周に使えた。○干戈：戦争。○父君：父である殷と君である周。○木主：位牌。殷を討伐するに際し、武王は父である文王の位牌を戦車に乗せた。○向使：「さきにしめば」と読み、過去の事実に反する仮定を示す。○曾食周粟：殷に生まれず周の臣下となつていたならば。○首陽山：中国山西省の西南部にある山。周の武王をいさめた伯夷・叔齊が隠棲し餓死した山として知られる。

★ 讀老子

老子を讀む

唐 白居易

言者不知知者默

言う者は如らず知る者は黙す

此語吾聞於老君

此の語吾老君より聞けり

若道老君是知者

若し老君是れ知者と道わば

緣何自著五千文

何に縁りてか自ら五千文を著わさんや

【語釈】

○老君：老子。○緣何：もしくならば。○五千文：『老子』のこと。史記の老子列伝による。

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 十一』

★ 晏嬰

晏嬰

明 高啓

一裘身著久經年

一裘 身に著し 久しく年を経たり

祿米分炊幾戸烟

祿米 分ちて炊しむ 幾戸の煙

盡説大夫能養士

尽く説く 大夫 能く士を養うと

却於尼叟惜封田

却って 尼叟に於いて 封田を惜しむ

【語釈】

○晏嬰：晏子。中国春秋時代の斉の政治家。○一裘身著：「三十年一狐裘」晏子は狐の毛皮から仕立てた一枚きりの服を、30年も着ていた。○祿米：晏子が貰った俸祿米○大夫：晏子。○尼叟：孔子。○惜封田：景公が孔子に領地を与えようとしたのを止めさせた。

★ 屈原

屈原

清 乾隆帝

千秋遺恨楚江濱

千秋の遺恨 楚の江浜

宗社將傾敢惜身

宗社 將に傾かんとし 敢えて 身を惜まざ

何事承平漢文代

何事ぞ 承平 漢文の代

長沙偏欲學斯人

長沙 偏く斯の人に学ばんと欲すとは

【語釈】

○屈原：戦国時代の楚の政治家、詩人。懷王を必死で諫めたが受け入れられず、楚の将来に絶望して入水した。○千秋：千年。○宗社：国家。○承平：治平相承；太平。○漢文：漢の文帝。○長沙：漢の賈誼。文帝の時代に長沙の王に降格された。

★ 薊子訓

薊子訓げいしুকん

宋 陸游

世上年光東逝波

世上の年光 東逝の波とうせい

咸陽銅狄幾摩挲

咸陽の銅狄 幾摩挲いくまさ

神仙不死成何事

神仙不死 何事か成る

只向秋風感慨多

只だ 秋風に向いて 感慨多し

【語釈】

○薊子訓：『搜神記』にある漢の仙人。○世上：人間世界。○年光：年月。○東逝：東に去る。○咸陽：秦の都。ここでは秦檜のこと。秦の正王は咸陽を守るために土地を割譲した。それと同じように秦檜は南宋の土地を割譲した。○銅狄：銅で作った人像。秦の始皇帝が天下統一後没収した武器で十二人の人像を造った。○摩挲：手でこする。

★ 讀秦紀

秦紀を読むしんき

宋 蕭 澥

築了連雲萬里城

築了す 連雲 万里の城ちくりよう

春風弦管醉中聽

春風 弦管 醉中に聴く

淒涼六籍寒灰裏

淒涼たり 六籍 寒灰の裏りくせき

宿得咸陽火一星

宿り得たり 咸陽火 一星かんようか

【語釈】

○秦紀：秦の歴史書。○築了：築き終わる。○淒涼：寂しく静か。○六籍：六経。詩経、書経、礼記、楽経、易経、春秋。○寒灰裏：焚書の灰。○咸陽火：秦の都を焼く項羽が付けた火。

★ 讀秦紀

秦紀を読む

宋 元端本

海上空求五色芝
鮑魚風起竟堪悲
桃源自有長生路
却是秦皇不得知

海上空しく求む 五色の芝
鮑魚風起り 竟に 悲しむに堪たり
桃源 自ら 長生の路有り
却つて是れ 秦皇知るを得ず

【語釈】

○秦紀：秦の歴史書。○五色芝：不老長寿の薬とされる芝。○鮑魚：塩漬けにした肴。始皇帝が死んだとき、腐敗臭を隠すため車に積み込んだ。○桃源：桃源郷。秦の支配を逃れた人が隠れ住んだ。○秦皇：始皇帝。

★ 讀秦紀

秦紀を読む

清 陳恭尹

謗聲易弭怨難除
秦法雖嚴亦甚疏
夜半橋邊呼孺子
人間猶有未燒書

謗声 弭め易く 怨 除き難し
秦法 嚴なりと雖も 亦た 甚だ疏なり
夜半 橋辺 孺子を呼ぶ
人間 猶お未だ 焼かざる書有り

【語釈】

○秦紀：史記の秦始皇本紀。○謗聲：誹しる声。弭：止める。○秦法：挾書律、始皇帝の時、民が密かに書を蔵するのを禁止した。○孺子：張良のこと、老翁から兵書を与えられた。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★秦始皇

秦始皇

清 汪 繹

方丈瀛洲杳莫攀

方丈瀛洲杳として攀じるもの莫し

金銀宮闕湧煙鬢

金銀宮闕煙鬢湧く

桃源自是人間世

桃源自らはれ人間の世

卻遣童男問海山

却つて童男をして海山を問わしむ

【語釈】

○宮闕方丈：伝説上の仙山。○瀛洲：伝説中の仙山。仙人が住むという。○杳：遙かに遠い。○宮闕：宮城の門。○桃源：桃源郷。○童男：若い男。

★秦始皇

秦始皇

清 硃 瑄

徐市樓船竟不還

徐市の樓船 竟に還らず

祖龍旋已葬驪山

祖龍 旋り 已に 驪山に葬らる

蓬萊覓得長生藥

蓬萊 長生の藥を覓め得ば

眼見諸侯盡入關

眼に見ん 諸侯 尽く関に入るを

【語釈】

○徐市：徐福。仙薬を採ると言つて大船団を組んで東海に去つた。○祖龍：始皇帝。○驪山：西安の東、臨潼県城の南にある山。○蓬萊：東海の中にあるとされる仙山。○關：関中。

★ 蕭相

蕭相しょうしょう

清 高樹程

英風猶想入關初 英風猶お想う 関に入るの初はじめ
相國功勳世莫知 相國の功勳世 知ること莫しな
猶恨未離刀筆吏 猶お恨む 未だ刀筆の吏を離れず
只收國籍不收書 只だ国籍を収め 収を書せざるを

【語釈】

○蕭相…漢の丞相蕭何。○英風…高尚な風格。○關…関中。○相國…丞相蕭何。○刀筆吏…文人の官吏。竹簡を刀で削り筆で書を書いた。○国籍…国の戸籍。○収…收入。

★ 虞姬

虞姬ぐき

明 朱妙端

力盡重瞳霸氣消 力尽き 重瞳じゆうとう 霸氣消ゆ
楚歌聲裏恨迢迢 楚歌声裏 恨み迢々ちようちようたり
貞魂化作原頭草 貞魂ていこん 化して 原頭の草と作り
不逐東風入漢郊 東風を逐おって 漢郊いに入らず

【語釈】

○虞姬…項羽の愛妾虞美人。○重瞳…項羽。瞳が二つあったという。○迢迢…重なるさま。○漢郊…漢の地の郊外。

★ 叔孫通

叔孫通しゅくそんつう

金 李 汾

秦時博士魯諸生

秦時の博士 魯の諸生

漏網驪山百丈阬

網を漏らす 驪山りせん 百丈の阬

邂逅劉郎習綿蕪

劉郎に邂逅かいこうし 綿蕪めんせつを習う

便能彈壓漢公卿

便ち 能く彈圧す 漢の公卿

【語釈】

○叔孫通：始め秦に仕え、後で漢に使えた儒者。劉邦が儒教を大切にすることに功績があった。○魯諸生：孔子の弟子の儒者。○漏網：逃れさせた。○驪山：陝西省臨潼県にある山。麓に華清宮があった。○百丈阬：儒者を生き埋めにした穴。○邂逅：思いがけなく出会う。○綿蕪：劉邦が儀式に儒教を取り入れたこと。『史記』劉敬叔孫通列傳。○彈壓漢公卿：漢の重臣達を儒教の礼法に従わせた。

★ 賈生

賈生かせい

唐 李商隱

宣室求賢訪逐臣

宣室せんしつ 賢を求め 逐臣ちくしんを訪う

賈生才調更無倫

賈生かせいが才調さいちやう 更に倫無し

可憐夜半虛前席

憐れむべし 夜半 虚しく席すずを前め

不問蒼生問鬼神

蒼生そうせいを問わず 鬼神を問う

【語釈】

○賈生：漢の賈誼、文帝の時、一旦左遷されたが呼び戻され、文帝が鬼神のことを問うと、その答えが上意にかなうものだったため、末子の梁懷王劉揖の太傅となった。○宣室：文帝の使者。○逐臣：左遷された人、賈誼。○才調：文才。○無倫：並外れている。○前席：一所懸命に聞く。○蒼生：人民。

(参考文献) 『唐詩三百首』 『三体詩』

★ 讀公孫弘傳

公孫弘伝を読む

金 李過庭

古來好客數平津

古來好客平津を数う

我道真龍未必真

我道真龍未だ必ずしも真ならず

一箇仲舒容不得

一箇の仲舒容得ず

不知開閣為何人

知らず閣を開くは何人の為ぞ

【語釈】

○公孫弘：漢の武帝の時代の宰相。○平津：北京・天津地方。公孫弘は平津侯に封じられた。○真龍：真実で変えようがないこと。○仲舒：哲學家。○開閣：公孫弘は丞相府に客館を開き、賓客を招いて謀議に参与させたこと。

★ 司馬相如

司馬相如

清 顧宗泰

琴心一曲感慙慙

琴心一曲慙慙に感ず

酤酒還憐犢尾禪

酒を酤り還た憐む犢尾禪

底事白頭悲惋切

底事ぞ白頭悲惋切なる

何人更與賦長門

何人か更に与らん長門を賦すに

【語釈】

○司馬相如：漢の武帝に使えた文章家。○琴心：琴を弾いて相手に心を通わすこと。○慙慙：卓文君が感動したこと。○酤酒：卓文君と駆け落ちして酒屋を開いたこと。○犢尾禪：子牛の皮の禪をして働いたこと。○白頭：卓文君の父。○悲惋：悲しみ嘆くこと。○賦長門：司馬相如が陳皇后のために作った賦（文選）。

★揚雄

揚雄ようゆう

明 高啓

執戟三朝老從臣

執戟しつげき 三朝 老從臣

從來無意據通津

從來 意無く 通津つうしんに拠る

如何晚把玄經筆

如何いかんんぞ 晩に 玄經の筆を把り

却為新都著劇秦

却つて新都の為に劇秦を著すとは

【語釈】

○揚雄：前漢末の文学者・学者。前漢、王莽、後漢の三朝に仕えた。○執戟：宮廷侍衛官。○通津：目立つ位置のたとえ。○玄經：大玄經。○新都：王莽の都。○劇秦：揚雄の著「劇秦美新」。王莽の政治を讃えて封禅を進めるもの。

★綠珠

綠珠りよくじゆ

元 宋无

紅粉捐軀為主家

紅粉 軀みを捐すつ 主家の為

明珠一斛委泥沙

明珠めいじゆ 一斛 泥沙でいせに委すてらる

年年金谷園中燕

年々 金谷園中の燕きんこくえんちゆう

銜取香泥葬落花

香泥かうでいを銜取かんしゆして 落花を葬うう

【語釈】

○綠珠：晋の石崇の愛妾。蒙求「綠珠墜樓」。○紅粉：美人。○明珠：光沢のある宝玉。○一斛：十斗。○金谷園：洛陽の西北にあった石崇の庭園。○銜取：銜え取る。

★ 劉伯倫

劉伯倫

清 汪紹焯

生死窮通付醪醕

生死窮通 醪醕みくぐれいを付す

婦言雖好不須聽

婦言好しと雖も聴くを須いず

利名役役真成醉

利名役々 真成に酔う

只有先生是獨醒

只だ有り 先生是れ 独醒

【語釈】

○劉伯倫：西晋の劉伶。竹林の七賢の一人。『世説新語』任湛に記載あり。○窮通：困窮と栄達。○醪醕：美酒の一つ。○婦言雖好不須聽：妻から禁酒するように進められたが聴かなかつた。○利名：名利。○役役：勞役して休まぬさま。○独醒：一人だけ世俗を超越しているさま。

★ 桓温

桓温かんおん

清 王廷諤

十萬雄師擁入秦

十万の雄師ゆうし擁いだきて秦に入る

可兒才畧自超倫

可兒才略おのずか 自ちやうりんら超倫

關中漫説無豪傑

関中みだり漫みだりに説く豪傑無しと

失却當前捫蝨人

失却当前しつみ蝨ひねを捫ひねる人

【語釈】

○桓温：東晋の政治家、武将。蜀の成を滅ぼし、前秦の軍を破り、さらに前燕を討った。自ら東晋の帝になろうとしたが、野望を達成しないまま死んだ。○秦：関中。前秦の地。○可兒：能人。○超倫：世の標準を超越する。○関中：函谷関の西側の地方。○捫蝨：「虱をひねって当世の務を談ず」（晋書 王猛載記）。桓温が、虱をひねりつぶしながら、晋の政治家である王猛と時世や政治を論じた故事。

★感天寶事

天寶の事に感ず

清 黄宗臣

青瑣如烟御柳斜

青瑣せいさ 煙けむりの如く御柳斜ごりゅうなり

承恩輦路及誰家

恩おんを承うけたまげ輦路れんろ 誰たれが家いへにか及およぶ

居延城外無春草

居延城きよえんじょう外がわ 春草はるくさ無なし

羯鼓猶催上苑花

羯鼓かっこ 猶なほお催もよほす 上苑じやうえんの花はな

【語釈】

○天寶：唐の玄宗の治世後半に使用された元号。742年・756年。○青瑣：窓を飾る青色の鎖模様。○御柳：宮城の柳。○輦路：皇帝の乗る手押し車が通る道。○居延城：匈奴に對する最前線として、甘肅省の酒泉から張掖にかけて築かれた城の名。○羯鼓：打楽器の一つ。○上苑：上苑宮。皇帝が政治を行う宮殿。

★楊妃

楊妃ようひ

宋 真山民

三郎掩淚馬嵬坡

三郎さんらう 涙なみだを掩おほう 馬嵬坡ばかい

生死恩深可奈何

生死せいじ 恩おん深こほく 奈何いかんすべき

瘞玉驛傍何足恨

玉たまを瘞うずむ 驛傍えきぼう 何なにぞ恨うらむに足たりらん

潼關戰骨不埋多

潼關とうかんの戰骨せんこつ 埋うずめざる多おほし

【語釈】

○楊妃：楊貴妃。○三郎：玄宗皇帝。○馬嵬坡：陝西省西安市の興平県の地名。楊貴妃が殺された。○瘞玉：楊貴妃の遺体を埋めた。○驛傍：宿場の傍。○陝西省渭南市潼關県の北部に位置する。黄河の屈曲点に位置し、古来中原から関中に入る交通の要衝・軍事の要地として知られる。

★楊妃襪

楊妃襪

宋 曾原一

萬騎西行駐馬嵬
凌波曾此墮塵埃
誰知一掬香羅小
踏轉開元宇宙來

萬騎西行し 馬嵬に駐まる
波を凌ぎ 曾て此れ 塵埃に墮つ
誰か知らん 一掬の香羅 小さきも
開元の宇宙を 踏転して来るを

【語釈】

○楊妃襪：楊貴妃のくつした。○馬嵬：馬嵬坡。陝西省西安市の興平県の地名。楊貴妃が殺された。○一掬：ひとすくい。小量。○香羅：美しく上等な布。○開元：玄宗の治世前半にあたる開元年間（713年—741年）。治世が安定し「開元の治」と呼ばれる。○踏轉：足でひっくり返す。

★邠王小管

邠王小管

唐 張祐

虢國潛行韓國隨
宜春深院映花枝
金輿遠幸無人見
偷把邠王小管吹

虢國は潛行し 韓國は隨う
宜春の深院 花枝に映ず
金輿 遠く幸し 人の見る無し
偷に 邠王小管を把りて吹く

【語釈】

○邠王：周朝の第三代目の太王。太王は、周の創始者・武王の孫で、父親は周公旦。○小管：小さな管楽器。○虢國：現在の河南省温県に位置し周の宣王の子である公子虢が建てた国。紀元前六八七年に周に滅ぼされた。○韓國：周時代に存在した都市国家。初め現在の河北省にあり、のち現在の陝西省に移った。○宜春深院：宜春院。妓人が召されて入る宮殿の名。○金輿：金の輿。

★ 王荊公

王荊公

宋 羅大經

錯認蒼姬六典書

錯認す蒼姬六典の書

中原從此變蕭疏

中原 此に従りて変じて蕭疏たり

幅巾投老鍾山日

幅巾 老を鍾山に投ずる日

辛苦區區活數魚

辛苦 區々 數魚を活かす

【語釈】

○王荊公：王安石。○錯認：誤って判断する。○蒼姬？○六典：開元年間に編纂された各官庁ごとに関係の諸法規を集めたもので、主として吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部の六部の下にこれを分載した。○中原：河南一帯の平野。○蕭疏：不景気。○幅巾：頭を包む布。王安石のこと。○鍾山：南京の東北にある名山。王安石の隱棲の地。○區區：わずかなこと。

★ 王婉容

王婉容

元 宋 无

貞烈那堪點虜求

貞烈 那ぞ堪えん 點虜の求

玉顔甘沒塞垣秋

玉顔 甘じて没す 塞垣の秋

孤墳若是鄰青冢

孤墳 若し是れ 青冢に隣せば

地下昭君見亦羞

地下の昭君 見て亦た羞じん

【語釈】

○王婉容：靖康の変で徽宗にしたがって金に連れ去られたが、金の人の妾となることを拒んで自殺したとされる宮女。○貞烈：非常に固い貞操。○點虜：ずるがしこい胡。○玉顔：美人。○塞垣：塞の垣根。○青冢：王昭君の墓。○昭君：王昭君。

絶句類選 卷之十九 農桑類

★ 野老曝背

のろうばくはい
野老曝背

唐 李頎

百歳老翁不種田

百歳の老翁 田を種えず

惟知曝背樂殘年

惟だ知る 背を曝して 殘年を楽しむを

有時捫虱獨搔首

時有りて 虱を捫り 独り首を搔く

目送歸鴻籬下眠

帰鴻の籬下に眠るを 目送す

【語釈】

○野老：村の老人。○曝背：背を日にさらすこと。ひなたぼっこ。○歸鴻：帰ってきた雁。○目送：目で以て送る。

★ 觀祈雨

雨を祈るを觀る

唐 李約

桑條無葉土生煙

桑条 葉無く土煙を生ず

簫管迎龍水廟前

簫管 竜を迎う 水廟の前

朱門幾處看歌舞

朱門 幾処か 歌舞を看る

猶恨春陰咽管弦

猶お恨む 春陰 管弦に咽ぶを

【語釈】

○桑條：桑の枝。○簫管：管楽器。○水廟：龍を祀った廟。○朱門：朱塗りの門。○春陰：春の曇り空に漂う陰影。

★ 村夜

村夜

唐 白居易

霜草蒼蒼蟲切切

霜草そうそう蒼々そうそうとして虫切々せつせつたり

村南村北行人絶

村南村北こうじん行人絶ゆ

獨出前門望野田

獨ひとり前門ひとに出て野田を望めば

月明蕎麥花如雪

月明かにして蕎麥きょうばく花雪の如し

【語釈】

○蒼蒼：青白い月明かりの形容。○切切：さびしい風や虫の形容。○蕎麥：そば。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集(三三)』

★ 宋氏林亭

宋氏の林亭

唐 薛能

地濕莎青雨後天

地は湿り 莎はまぎは青し 雨後の天

桃花紅近竹林邊

桃花 紅くれない近し竹林の邊ほとり

行人本是農桑客

行人 本もと是れ 農桑かくの客

記得春深欲種田

記し得たり 春深くして 田を種えんと欲するを

【語釈】

○林亭…林の中にある亭。○行人…旅人。○農桑…農業と養蚕。

★ 蠶婦

蚕婦

唐 來鵬

曉夕採桑多苦辛

曉夕桑を採り苦辛多し

好花時節不閑身

好花の時節不閑身

若教解愛繁華事

若教解愛繁華事

凍殺黃金屋裏人

凍殺黃金屋裏人

★ 再經胡城縣

再び胡城縣を經

唐 杜荀鶴

去歲曾經此縣城
縣民無口不冤聲
今來縣宰加朱紱
便是生靈血染成

去歲曾て經 此の県城
県民 口に冤声せざるは無し
今來 県宰 朱紱を加う
便ち是れ 生靈 血染 成る

【語釈】

○胡城縣：安徽省阜陽市潁州区。○去歲…去年。○冤聲…恨み言。○今來…今。○県宰…
県令。○朱紱…朱色の糸で縫い合わせた官服。○生靈…人民。

★ 田家

田家

宋 歐陽修

綠桑高下映平川
賽罷田神笑語喧
林外鳴鳩春雨歇
屋頭初日杏花繁

綠桑 高下し 平川に映ず
賽を罷め 田神 笑語 喧し
林外の鳴鳩 春雨歇み
屋頭の初日 杏花繁し

【語釈】

○賽…お祭り。○田神…農神。○屋頭…屋根の上。○初日…朝日。

★ 出郊

郊に出ず

宋 王安石

川原一片綠交加

川原 一片綠 交加す

深樹冥冥不見花

深樹 冥々 花を見ず

風日有情無處著

風日 情有りて 著く処無し

初迴光景到桑麻

初めて 光景を廻り 桑麻に到る

【語釈】

○川原…原野。○交加…入り交じる。○冥冥…奥深く遠いさま。○光景…景色。○桑麻…桑畑と麻畑。

★ 田家

田家

宋 鄭獬

田家汨汨流水渾

田家 汨々 流水渾る

一樹高花明遠村

一樹の高花 遠村に明らかなり

雲意不知残照好

雲意は知らず 残照の好きを

却將微雨送黄昏

却って 微雨を將つて 黄昏を送る

【語釈】

○汨汨…水が早く流れるさま。○雲意…陰雲。○残照…日が沈んだ後の夕焼け。○黄昏…たそがれ。

★山村

山村

宋 蘇軾

竹籬茅屋趁溪斜

竹籬茅屋溪に趁おもむいて斜なり

春入山村處處花

春は山村に入る処々の花

無象太平還有象

無象むしようの太平 還また象しよう有り

孤煙起處是人家

孤煙起こる処 是れ人家

【語釈】

○竹籬：竹で作った垣根。○茅屋：茅吹きの家。○無象：具体的な形象のないこと。○孤煙：一筋の炊事の煙。

★禾熟

禾熟かす

宋 孔平仲

百里西風禾黍香

百里の西風 禾黍かしよ香し

鳴泉落竇穀登場

鳴泉あな竇あなに落ちて 穀場こくに登ある

老牛粗了耕耘債

老牛粗ほぼ了らす 耕耘こうりんの債さい

齧草坡頭臥夕陽

草を齧かみ 坡頭はとう 夕陽せきやうに臥がす

【語釈】

○禾：稻。○西風：秋風。○禾黍：稻とキビ。○場：脱穀場。○耕耘債：田を耕す仕事のノルマ。○坡頭：丘の上。

(参考文献) 『宋詩選注』(東洋文庫)

★ 秋日田家

秋日の田家

宋 文同

淘漉溝源築野塘
滿坡烟草卧牛羊
今年且喜輸官辦
豆莢繁多粟穗長

淘漉とうろく 溝源こうげん 野塘やたうを築く
滿坡まんぱの烟草たんそう 牛羊ぎやう卧す
今年ことし 且かつつ喜よろこぶ官くわんに輸おむ辦はん
豆莢とうきやう 繁さかること多おほく 粟穗ぞくすい長ながし

【語釈】

○淘漉：浚渫。○野塘：野原の池。○滿坡：丘に満ちる。○烟草：靄に包まれた草。○輸官：政府に納める。○豆莢：豆のさや。

★ 田家

田家

宋 張耒

門外清流繫野船
白楊紅槿短籬邊
早蝗千里秋田淨
野秫蕭蕭八月天

門外もんがいの清流せいりゅう 野船やせんを繫つなぐ
白楊はくよう 紅槿こうきん 短籬たんせきの邊へ
早蝗かんこう 千里せんり 秋田きよ淨きよし
野秫やじゆつ 蕭々しょうしょう 八月はつげつの天あま

【語釈】

○野船：鄉村の小舟。○白楊：はこやなぎ。○紅槿：紅色のむくげ。○早蝗：ひでりとイナゴ。○野秫：野原のもち米。○蕭蕭：物寂しいさま。

★ 柯山雜詩

柯山雜詩 かざんざっし

宋 張耒

蕭蕭茅屋土山前

蕭々たる茅屋 土山の前 しょうしょう ぼうおく

翁媪關門去穫田

翁媪 門を関し 田を穫て去る おうおん とせ

朝日滿簷雞犬靜

朝日 簷に満ち 雞犬静かなり ちようじつ

荻籬深處有炊烟

荻籬 深き処 炊煙有り

【語釈】

○柯山：不確定。○蕭蕭：物寂しいさま。○茅屋：茅吹きの家。○荻籬：オギでできたまがき。

★ 插秧

插秧 そうびよう

宋 范成大

種密移疎綠毯平

種くこと密に 移すこと疎にして 綠毯 平かなり ま りよくたん

行間清淺穀紋生

行間 清淺 穀紋生ず こくもん

誰知細細青青草

誰か知らん 細々青青の草 さいさいせいせい

中有豐年擊壤聲

中に 豐年擊壤の聲 有るを うち

【語釈】

○插秧：田植え。○綠毯：緑の絨毯のような苗。○行間：苗の行間。○穀紋：縮緬のようななざぎ波。○擊壤：太平を喜んで土を撃つ。鼓腹擊壤。
（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

柳花深巷午雞聲

柳花の深巷 午雞の聲

桑葉尖新綠未成

桑葉 尖新 綠 未だ成らず

坐睡覺來無一事

坐睡 覺め来れば 一事無し

滿窗晴日看蠶生

滿窓の晴日 蚕の生るるを見る

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○柳花：柳と花。○深巷：奥深い道。○午雞：正午を告げる雞。○尖新：葉が尖って柔らかい。○坐睡：坐つてうたた寝をすること。

（参考文献） 『漢詩大系 16』

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

步履尋春有好懷

歩の履もて 春を尋ぬれば 好懷有り

雨餘蹄道水如杯

雨余の蹄道 水杯の如し

隨人黃犬攙前去

人に隨う黃犬 攙く前に去り

走到溪橋忽自迴

走りて 溪橋に到りて 忽ち 自ら迴る

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○雨餘：雨上がり。○蹄道：動物の蹄や鳥の足跡のある歩道。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

海雨江風浪作堆

海雨の江風浪堆を作す

時新魚菜逐春回

時新の魚菜春を逐いて回る

荻芽抽筍河魴上

荻芽筍を抽き河魴上る

棟子開花石首來

棟子花を開いて石首來る

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○時新：時に応じて新しい。○魚菜：魚と野菜。○河魴：フグ。○棟子：おうちの花。○石首：しゃくなげ。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

種園得果塵償勞

園に種え果を得て塵かに勞を償う

不奈兒童鳥雀搔

奈んともせず兒童鳥雀の搔ぐを

已插棘針樊筍徑

已に棘針を挿し筍徑に樊す

更鋪漁網蓋櫻桃

更に鋪く漁網の櫻桃を蓋うを

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○不奈：どうしようもない。○棘針：棘のとげ。○筍徑：タケノコの生えている道。○樊：垣根を築いて取り囲む。○鋪：広げる。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

小婦連宵上絹機
 大耋催稅急於飛
 今年幸甚蠶桑熟
 留得黃絲織夏衣

小婦連宵絹機に上る
 大耋稅を催すこと飛ぶよりも急なり
 今年幸甚に蚕桑熟し
 留め得たり黄糸夏衣を織るを

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○小婦：若い女性。○連宵：毎晩。○絹機：機織り機。○大耋：長老。村長。○蠶桑：桑の葉とカイコ。○黄絲：黄色い糸。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

晝出耘田夜績麻
 村莊兒女各當家
 童孫未解供耕織
 也傍桑陰學種瓜

晝は出て田を耘り夜は麻を績ぐ
 村莊兒女各家に当たる
 童孫未だ解せず耕織に供するを
 也た桑陰に傍いて瓜を種うるを学ぶ

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○耘田：田の草を取る。○村莊：村の若者。○當家：家計を助ける。○耕織：耕したり織物をしたりすること。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

黄塵行客汗如漿

黄塵こうじんの行客こうかく汗しょう漿しょうの如し

少住儂家漱井香

少しばらく儂わが家いへに住すままつて井香せいこうに漱くちすぐ

借與門前磬石坐

門前もんぜんの磬石びんせきを借しゃくよ与よして坐ませしむ

柳陰亭午正風涼

柳陰りゅういん亭午ていご正風涼し

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○行客：旅人。○漿：飲み物。汁。○儂：我。○井香：爽やかな井戸の水。○磬石：平たい大きな石。○借與：貸し与える。○亭午：正午。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

杞棘垂珠滴露紅

杞棘ききよく珠しゆを垂たれ滴露てきろう紅こうなり

兩蛩相應語莎叢

兩蛩りゅうしやう相あ應おうじて莎叢さそうに語かたむる

蟲絲胃盡黃葵葉

蟲絲ちゅうし胃い盡じんす黃葵こうきの葉は

寂歷高花側晚風

寂歷せきれきたる高花こうか晚風かたむに側かたむく

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○杞棘：イバラ。○兩蛩：二つのコオロギ。○莎叢：ハマナスゲの草むら。○蟲絲：クモの糸。○胃盡：絡め取り尽くす。○寂歷：ひっそりとしたもの寂しいさま。○側：傾く。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

靜看簷蛛結網低

靜かに看る 簷蛛の網を結びて低きを

無端妨礙小蟲飛

端無くも 小虫の飛ぶを妨礙す

蜻蜓倒挂蜂兒窘

蜻蛉倒しまに挂かり 蜂兒窘しむ

催喚山童爲解圍

山童を催喚して 爲に圍を解かしむ

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○簷蛛：軒の蜘蛛。○無端：思いがけず。○妨礙：妨げる。○蜻蜓：とんぼ。○蜂兒：蜂の子。○窘：苦しむ。○催喚：呼ぶ。○山童：田舎で使っている子供の小使。

（参考文献）『漢詩大系 16』

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

朱門乞巧沸歡聲

朱門乞巧 歡声沸く

田舎黄昏靜掩扃

田舎 黄昏 静に 扃を掩す

男解牽牛女能織

男は牛を牽いて解き 女は能く織る

不須邀福渡河星

須いず 福を河を渡る星に邀むるを

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○朱門：高貴な人の門。○乞巧：七夕にあやかり手仕事の上達を祈願する習わし。○黄昏：たそがれ。○扃：門のかんぬぎ。○解：開墾する。○邀：求める。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

垂成穡事苦艱難
成るに垂とする穡事 苦だ艱難

忌雨嫌風更怯寒
雨を忌み 風を嫌い 更に寒に怯ゆ

牋訴天公休掠剩
牋もて天公に訴う 掠剩を休めよと

半償私債半輸官
半ばは私債を償い 半ばは官に輸む

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○穡事：農事。農業。○牋：上奏文。文書。○天公：天帝と天子。掠剩：あまったものをかすめる。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

斜日低山片月高
斜日は山に低く 片月高し

睡餘行藥繞江郊
睡余 行藥に 江郊を繞る

霜風掃盡千林葉
霜風 掃い 尽す 千林の葉

閑倚筇枝數鸛巢
閑かに 筇枝に倚り 鸛巢を数う

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○斜日：夕陽。○片月：片割れ月。○睡餘：眠った後。○行藥：薬を飲んだ後、作用を高める爲に散歩すること。○江郊：江に臨んだ村。○筇枝：筇竹を用いた杖。○鸛巢：コウノトリの巢。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

屋上添高一把茅
密泥房壁似僧寮
從教屋外陰風吼
卧聽籬頭響玉簫

屋上添え高し 一把の茅
密泥 房壁 僧寮に似たり
從教 屋外 陰風吼ゆるを
卧して聴く 籬頭 玉簫の響くを

【語釈】

○四時田園雜興：四季の田園のさまざまな事物に感じて感興を述べた詩。○密泥：？○房壁：部屋の壁。○僧寮：僧舎。○從教：ままよ。○陰風：朔風。冬の冷たい風。○玉簫：縦笛の美称。

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

松節然膏當燭籠
凝煙如墨暗房櫳
晚來拭淨南窗紙
便覺斜陽一倍紅

松節 膏を然して 燭籠に当つれば
凝煙 墨の如く 房櫳暗し
晚來 拭淨す 南窓の紙
便ち覚ゆ 斜陽 一倍紅なるを

【語釈】

○松節：松の節くれ立った頃。○燭籠：灯籠。○凝煙：煙のすす。○房櫳：れんじまど。○晚來：夕方。○拭淨：掃除して綺麗にする。○斜陽：夕陽。

(参考文献) 『漢詩大系 16』

★ 四時田園雜興

四時田園雜興

宋 范成大

放船閑看雪山晴
船を放ち 閑しずかに看る 雪山の晴るるを
風定奇寒晚更凝
風定まりて 奇寒きかん 晩こに更に凝る
坐聽一篙珠玉碎
坐して聴く 一篙しゅうごう 珠玉しゆぎよく 碎くを
不知湖面已成冰
知らず 湖面 已に氷を成すを

【語釈】

○奇寒：非常な寒さ。○一篙：竿一つの高さ。

★ 顔橋道中

顔橋道中

宋 范成大

村村籬落總新修
村々の籬落りらく 總て新たに修す
處處田疇盡有秋
處々の田疇でんちゆう 尽く秋有り
一段農家好風景
一段の農家 好風景
稻堆高出屋山頭
稻堆とうつたい 高く出ず 屋山頭おくざんとう

【語釈】

○顔橋道：不祥。○籬落：竹や葦、枝などで作った垣根。○田疇：田地。○稻堆：稻を積んだもの。○屋山頭：屋根の棟。

★ 至後入城道中雜興

至りて後城に入る道中雜興

宋 楊萬里

大熟仍教得大晴
今年又是一昇平
昇平不在簫韶裏
只在諸村打稻聲

大熟 仍すなわち 大晴を得るを教ゆ
今年 又た是れ 一いっしやう昇平かなり
昇平は 在らず 簫韶しやうしやうの裏に
只だ 諸村 稻を打つ声に在り

【語釈】

○大熟…大豊作。○一昇平…太平そのもの。○昇平…太平。○簫韶…舜帝の楽の名。

★ 桑茶坑道中

桑茶坑道中

宋 楊萬里

蠶麤今歲十分強
催得農家日夜忙
已縛桁竿等新麥
更將了木撐欹桑

蚕麤さんぼう 今歲 十分強し
農家を催うながし得て 日夜忙ぼうなり
已に 桁竿こうかんを縛り 新麥に等し
更りやうぼくに 了木りやうぼくを將もつて 欹桑きくわを撐ささぐ

【語釈】

○桑茶坑…不祥。○蠶麤…カイコと大麦。○今歲…今年。○桁竿…竿と桁でできた稲麦を干す道具。○新麥…新しく収穫された麦。○了木…上部が二股にでくの字型の木。○欹桑…傾いた桑の木。

★桑茶坑道中

桑茶坑道中

宋 楊萬里

清明風日雨乾時

清明の風日 雨乾く時

草滿花隄水滿溪

草は花隄に満ち 水は溪に満つ

童子柳陰眠正著

童子 柳陰 眠 正に 著し

一牛喫過柳陰西

一牛 喫い過ぐ 柳陰の西

【語釈】

○桑茶坑：不祥。○清明：清明節。春分から十五日目。

★憫農

農を憫れむ

宋 楊萬里

稻雲不雨不多黃

稻雲 雨ふらず 黄多からず

蕎麥空花早著霜

蕎麥 空しく花さきて 早に霜を著す

已分忍饑度殘歲

已に分とす 饑を忍び 殘歲を度るを

不堪歲裏閏添長

堪えず 歲裏 閏 長を添うに

【語釈】

○稻雲：雲のような稻穂。○不多黃：黄色に実るのは多くない。○蕎麥：ソバ。○分：推測する。○殘歲：年末。○歲裏：一年の中。○閏添長：閏年で一年が長い。

★ 暮行田間

暮に田間を行く

宋 楊萬里

布穀聲中日脚收
瘦藤扶我看西疇
露珠走上青秧葉
不到梢頭便肯休

布穀聲中日脚收まる
瘦藤 我を扶け 西疇を看る
露珠 走り上る 青秧の葉
梢頭に到らずんば 便ち 肯えて休まんや

【語釈】

○布穀：中国伝説上の鳥。「布穀」と啼くと言われる。○日脚：雲の間から漏れる夕陽の光。○瘦藤：細い藤。○西疇：西方の田地。○露珠：真珠のような露の玉。○梢頭：てっぺん。○青秧：緑色の苗。

★ 農桑

農桑

宋 陸游

采桑蠶婦念蠶饑
陌上匆匆負籠歸
却羨鄰家下湖早
畫船青繖去如飛

桑を采る 蚕婦 蚕の饑うるを念ず
陌上 匆匆 籠を負いて帰る
却って羨やむ 隣家 湖を下ること早きを
画船 青繖 去ること 飛ぶが如し

【語釈】

○農桑：農業と養蚕業。○蚕婦：カイコを養う女性。○陌上：道の上。○匆匆：慌ただしいさま。○畫船：絵で飾った船。○青繖：青い傘

★農舎

農舎

宋 陸游

三農雖隙亦匆忙
稼事何曾一夕忘
欲曬胡麻愁屢雨
未收蕎麥怯新霜

三農は隙ひまと雖も亦また匆忙そうぼう
稼事かじは何ぞ曾かつつて一いっ夕も忘れんや
胡麻ごまを曬さらさんと欲すれば屢しばしばの雨を愁うう
未だ蕎麥きょうばくを収めざれば新霜しんじょうに怯おそゆ

【語釈】

○三農…農業。○匆忙…忙しい。○稼事…農作業。○曬…日光にさらす。○蕎麥…そば。

★農舎

農舎

宋 陸游

神農之學未爲非
日夜勤勞備歲饑
雨畏禾頭蒸耳出
潤憂麥粒化蛾飛

神農の学未だ非な為ならず
日夜の勤勞歳饑さいきに備たもつ
雨あめに畏おそる禾頭かとう耳みみを蒸いして出いで
潤うるおいは憂うれう麦粒あひ蛾がに化かして飛とぶを

【語釈】

○神農…伝説上の帝王。人間に農業を教えた。○歳饑…収穫が悪い歳の飢饉。○禾頭…稲穂。

★ 鄰曲有未飯被追入郭者憫然有作

宋 陸游

隣曲に未だ飯せずして追せられて郭に入る者有り 憫然として作有り

春得香杭摘緑葵

香杭を春き得て 緑葵を摘む

縣符急急不容炊

縣符 急々として 炊ぐを容れず

君王日御金華殿

君王 日に金華殿に御するも

誰誦周家七月詩

誰か誦せん 周家 七月の詩

【語釈】

○鄰曲：隣近所。○追：（税未納のため）逮捕される。○郭：外側の城壁。○憫然：哀れに思うさま。○香杭：江南地方に育成する稲の種類。○葵：セリに似た野菜。○縣符：縣の役所から出た命令書。○金華殿：漢代の宮殿の名。成帝がここ論語の講義を聴いた故事。○周家：周の王朝。○七月詩：「詩経」豳風七月詩。

★ 秋懷

秋懷

宋 陸游

園丁傍架摘黃瓜

園丁 架に傍いて 黃瓜を摘み

村女沿籬采碧花

村女 籬に沿いて 碧花を採す

城市尚餘三伏熱

城市 尚お余す 三伏の熱

秋光先到野人家

秋光 先に到る 野人の家

【語釈】

○秋懷：秋の思い。○園丁：畑をつくる人傍：そう。○架：苗を支える柱。○摘：つむ。○黃瓜：キュウリ。○村女：村娘。○籬：かきね。○碧花：アサガオ。○尚餘：なおも余している。○三伏：猛暑の候。○野人：庶民。

★秋懷

秋懷しゅうかい

宋 陸游

桑竹成陰不見門
桑竹陰を成し門を見ず
牛羊分路各歸村
牛羊路を分け各々村に歸る
前山雨過雲無迹
前山雨過ぎて雲の迹無く
別浦潮回岸有痕
別浦潮回りに岸に痕有り

【語釈】

○秋懷…秋の思い。○潮回…潮が引く。○別浦…川が海に入るところ。

★盱江途中

盱江途中かんこうちゆう

宋 劉仙倫

過雨青山鳴杜鵑
過雨青山杜鵑鳴く
池塘水滿柳飛綿
池塘水満ちて柳綿を飛ばす
田家正是忙時節
田家正に是れ忙しき時節
女采桑歸男下田
女は桑を采りて帰り男は田に下る

【語釈】

○盱江…不祥。○過雨…通り雨の後。○杜鵑…ホトトギス。○池塘…池。○綿…柳絮。

★ 新春喜雨

新春 雨を喜ぶ

宋 徐 璣

農家不厭一冬晴
歲事春來漸有形
昨夜新雷催好雨
蔬畦麥壠最先青

農家厭わず 一冬の晴
歲事 春來りて 漸く形有り
昨夜 新雷 好雨を催し
蔬畦 麥壠 最も先に青し

【語釈】

○歲事…一年でやるべきこと。○漸…だんだんと。○蔬畦…野菜を植えた畦。○麥壠…麦畑。

★ 村居即景

村居即景

宋 范成大

綠遍山原白滿川
子規聲裏雨如烟
鄉村四月閑人少
纔了蠶桑又插田

綠は山原に遍く 白は川に満つ
子規声裏 雨煙の如し
鄉村 四月 閑人少なり
纔に 蚕桑を了えて 又た田に挿す

【語釈】

○即景…見たままの風景を詠った詩。○子規…ホトトギス。○蠶桑…春の養蚕。○插田…田植え。

★ 農桑

農桑

宋 朱繼芳

裏飯驅兒候暖耕
 膳泥滑滑不堪行
 如何說得農家苦
 雨笠風蓑過一生

飯を裏み 児を駆りて 暖を候いて耕す
 膳泥 滑々 行に堪えず
 如何ぞ 說得す 農家の苦み
 雨笠 風蓑 一生を過ごす

【語釈】

○農桑…農業と養蚕業。○膳泥…畦の泥。○滑滑…すべすべしているさま。○如何…どのようにして。○說得…言って理解して貰う。

★ 農桑

農桑

宋 朱繼芳

婦饁夫耕日向長
 碓聲嗚咽宿春糧
 尋思一飯何時飽
 秧種青青麥未黃

婦は饁し 夫は耕して 日長きに向う
 碓声 嗚咽し 春糧に宿す
 尋思す 一飯 何れの時にか飽く
 秧種 青青 麥 未だ黄ならず

【語釈】

○農桑…農業と養蚕業。○饁…弁当を作って送る。○碓聲…石うすの音。○春糧…粉にした食物。○尋思…思索、考慮する。○秧種…苗床にまいた種。

★農謠

農謠のうよう

宋方岳

春雨初晴水拍堤

春雨初めて晴れて水堤を拍うつ

村南村北鵝鳩啼

村南村北鵝鳩啼ほつこく

含風宿麥青相接

風を含む宿麥青相接せいあいせつし

刺水柔秧綠未齊

水を刺す柔秧綠未だ齊としのわず

【語釈】

○鵝鳩：鳩の一種。○宿麥：秋に蒔いて春熟す麦。○柔秧：やわらかな苗。

★農謠

農謠のうよう

宋方岳

問舍求田計未成

舎に問い田を求めて計未だ成らず

一蓑鉏月每含情

一蓑月に鉏すき毎つねに情を含む

春山樹暖鶯相覓

春山樹暖にして鶯相あいもと覓め

曉隴雨晴人獨耕

曉隴ぎようろう雨晴れて人獨り耕す

【語釈】

○一蓑：蓑を着た独りの人。○鉏月：月明かりの下で農作業をする。○曉隴：曉の丘。

★農謠

農謠

宋 方岳

漠漠餘香著草花
漠々たる余香 草花に著き
森森柔綠長桑麻
森々たる柔綠 桑麻に長し
池塘水滿蛙成市
池塘 水満ちて 蛙 市を成し
門巷春深燕作家
門巷 春深くして 燕 家を作す

【語釈】

○漠漠…一面に続いているさま。○森森…樹木がさかんに茂るさま。○門巷…門と道。

★春旱

春旱

宋 劉克莊

清明未雨下秧難
清明 未だ雨ふらず 秧を下し難し
小麥低低似剪殘
小麦 低々として 剪殘に似たり
窮巷蕭然惟飲水
窮巷 蕭然として 惟だ水を飲む
家童忽報井源乾
家童 忽ち報ず 井源の乾くを

【語釈】

○春旱…春のひでり。○清明…清明節。春分から十五日目。○低低…低いさま。○剪殘…切り残し。○窮巷…窮まった小路。○蕭然…がらんとしたさま。○井源…井戸の水の源。

★ 久旱

きゅうかん
久旱

宋 劉克莊

暘鳥下飲百川空
暘鳥 下り飲みて 百川空し
民自祠龍禱社公
民 自ら龍を祠り 社公に禱る
豈是長官渾忘却
豈に是れ 長官渾て忘却し
水車聲不到城中
水車の声 城中に到らざらんや

【語釈】

○久旱…長いひでり。○暘鳥…太陽。○百川空…多くの川が空になる。○龍…龍神。雨を呼ぶ神。○社公…土地の神。○豈…「あにくんや」と読み、「まさか」ではあるまい」の意。

★ 蠶婦吟

ようふじん
蚕婦吟

宋 謝枋得

子規啼徹四更時
子規 啼き徹す 四更の時
起視蠶稠怕葉稀
起きて視て 蚕稠 葉の稀なるを怕る
不信樓頭楊柳月
信ぜず 楼頭 楊柳の月
玉人歌舞未曾歸
玉人の歌舞 未だ曾て帰らず

【語釈】

○蠶婦…養蚕をする女性。○子規…ホトトギス。○四更…午前一時～三時。○蠶稠…カイコの多さ。○玉人…美貌の人。

★ 田父吟

田父吟

宋 葉茵

逢逢社鼓佐豐年
酒熟那逢釀雪天
擘橘煮雞償一醉
布衾烘暖抱孫眠

逢々たる社鼓 豊年を佐す
酒熟して 那んぞ逢わん 雪を釀す天
橘を擘き 雞を煮て 一酔を償す
布衾 烘暖にして 孫を抱いて眠る

【語釈】

○逢逢…太鼓の音の形容。○社鼓…村祭りの太鼓。○布衾…布のしとね。○烘暖…温かい。

★ 何山白水田

何山の白水田

宋 俞德鄰

離離遠樹接山低
白水田頭杜宇啼
昨夜前村新雨過
桔槔閑在石橋西

離々たる 遠樹 山に接して低し
白水田頭 杜宇啼く
昨夜 前村 新雨過ぐ
桔槔は 閑かに 石橋の西に在り

【語釈】

○何山…浙江省湖州市何山。○白水田…清らかな水の田。○離離…草木が盛んに生い茂っているさま。○杜宇…ホトトギス。○桔槔…跳ねつるべ。

★ 勸農

農を勧む

宋 陳自齋

清曉松間喝道聲

清曉 松間 喝道かっどうの聲

勞煩父老出郊迎

父老を勞煩ろうはんして 郊いに出でて迎わしむ

卧廬應有高人笑

廬に卧して 応まさに 高人の笑 有るべし

自不歸耕却勸耕

自みずからは 歸耕きこうせず 却かつて 耕を勧む

【語釈】

○喝道：役人が通行するとき前払いする爲のかけ声。○父老：むらおき。○勞煩：手間をかけ煩わすこと。○郊：郊外。○高人：志行高尚の人。○歸耕：官を辞して農業に就く。

★ 寄題高大清東村

高大清東村に寄題す

宋 僧道璨

浮花浪蕊易飄零

浮花ふ浪蕊かろうしん 飄零ひょうれいし易く

看著桑麻眼便青

桑麻かんちやくに 看著して 眼 便ち青し

荷鋤歸來春晝永

鋤すきを 荷にないて 歸來し 春晝 永し

案頭重讀相牛經

案頭あんとう 重ねて 讀む 相牛經

【語釈】

○寄題：その地に行かないで思いを寄せて詩を作ること。○高大清東村：不祥。○浮花浪蕊：普通の草花。○飄零：空中に漂い落花する。○案頭：物入れや机の上。○相牛經：仏教の經典の一つ。

★ 村行

村行

金 郭邦彦

棗花初落路塵香	棗花 <small>そうか</small> 初めて落ち 路塵 <small>ろじん</small> 香 <small>か</small> ばし
燕掠麻池乍頡頏	燕 <small>ま</small> は 麻池 <small>あし</small> を掠 <small>かす</small> め 乍 <small>たちま</small> ち頡頏 <small>けつこう</small> す
一片雲陰遮十頃	一片の雲陰 十頃 <small>じゅうこう</small> を遮 <small>かざ</small> り
賣瓜棚下午風涼	売瓜 <small>ばいか</small> 棚下 <small>ほうか</small> 午風涼し

【語釈】

○麻池…麻の生えた池。○頡頏…鳥が上下するさま。○一片…満天。ひとひら。○雲陰…雲影。

★ 村居

村居そんきょ

元 周 權

疎竹人家短短牆	疎竹 <small>そちく</small> 人家 <small>たんだん</small> 短々 <small>たんたん</small> たる牆 <small>かき</small>
綠陰深處水村涼	綠陰 深き処 水村涼し
山風吹斷巖前雨	山風 吹断 <small>すいだん</small> す 巖前 <small>がんぜん</small> の雨
高樹蟬聲正夕陽	高樹の蟬声 正 <small>ま</small> に夕陽 <small>せきやう</small>

【語釈】

○村居…郷村に寓居すること。○短短…短いさま。○綠陰…緑の木陰。○水村…水辺の村。○吹斷…吹きちぎる。○巖前…岩の前。

★涿南見蠶婦本汴梁貴家

元 楊 奐

涿南たくなんに蚕婦さんぶを見る 本もと汴梁べんりょうの貴家

蠶月何曾出

蚕月さんげつ 何ぞ曾て 後堂いを出ず

干戈流落客他郷

干戈かんか 流落りゅうらくす 他郷かくに客たるを

羅衣著盡無人問

羅衣らい 著きつくして 人の問う無し

自把荆籃摘野桑

自みずから 荆籃けいらんを把とり 野桑やそうを摘む

【語釈】

○涿南…不祥。○汴梁…河南省開封市。○蠶月…養蚕に忙しい月。○後堂…後面の堂屋。
○干戈…戦乱。○流落…おちぶれさすらう。○羅衣…薄絹の衣。○荆籃…いばらの枝で編
んだかご。

★村園

村園

明 金 涓

半畝村園接水涯

半畝の村園 水涯すいがいに接す

誅茅新構小書齋

誅茅ちゅうぼうし 新たに構う 小書齋

窗前不用栽花柳

窓前そうぜん 用いず 花柳かりゆうを栽うるを

只對青山景自佳

只だ 青山に對せば 景 自おのずから佳かなり

【語釈】

○水涯…水辺。○誅茅…雑草を取り除く。○花柳…花と柳。

★ 村居

村居

明 王 恭

楓林草屋半蒼苔

楓林 草屋 半ば蒼苔

寂寂柴扉映竹開

寂々たる柴扉 竹に映じて開く

啼鳥數聲春自好

啼鳥 數聲 春 自ら好し

五陵年少不曾來

五陵の年少 曾て来らず

【語釈】

○草屋：草葺きの家。○蒼苔：青い苔。○寂寂：さびしく閑かなさま。○柴扉：柴で作った粗末な門。○五陵：漢の高帝以下五帝の陵があったところで、富豪の人が住んでいた。李白「少年行」。○年少：若者。

★ 村居

村居

明 王 恭

草徑茆扉帶軟沙

草徑 茆扉 軟沙を帯ぶ

隔林雞犬幾人家

林を隔つる 雞犬 幾人家

青山盡日垂簾坐

青山 尽日 簾を垂れて坐す

落盡棕櫚一樹花

落ち尽す 棕櫚 一樹の花

【語釈】

○草徑：草の生えている道。○茆扉：茅吹きの家。○盡日：一日中。○棕櫚：シユロ。ヤシ科の植物。

★ 夏日田家雜興

夏日 田家 雜興

明 王世懋

草席繩床夜不眠
草席繩床 夜眠らず
晚涼新浴坐青天
晚涼 新たに浴びて 青天に坐す
月明一片禾頭露
月明 一片 禾頭の露
看作長堤十里烟
看れば 長堤十里の煙と作る

【語釈】

○草席：草の茎で編まれた座具。○繩床：縄で編まれた床。○晚涼：夜の涼しさ。○禾頭
…稲の頂部。○烟：霞靄。

★ 秋日題田家壁

秋日 田家の壁に題す

明 鄭渭

一水廻村小逕長
一水 村を廻りて 小径長し
數家茅屋蔭柴桑
數家の茅屋 柴桑を蔭う
野田刈盡秋郊霽
野田 刈り尽して 秋郊霽る
籬雀群飛滿夕陽
籬雀 群れ飛び 夕陽に滿つ

【語釈】

○題：書き付ける。○茅屋：茅葺きの家。○柴桑：柴と桑。○秋郊：秋の郊外。○籬雀：
垣根に巢を作っている雀。

★ 過水道口

水道口を過ぐ

明 劉侃

山樹參差石徑斜

山樹 參差として 石徑斜なり

雨餘飛瀑過桑麻

雨余 飛瀑 桑麻を過ぐ

山翁放罷村前犢

山翁 放ち罷む 村前の犢

倚杖溪頭護稻花

杖に倚り 溪頭 稻花を護る

【語釈】

○水道口…不祥。○參差…不揃い。○雨餘…雨上がり。○桑麻…桑畑と麻畑。○溪頭…溪のほとり。

★ 過村家

村家を過ぐ

明 樊阜

細莎村路繞山斜

細莎 村路 山を繞って斜なり

澗水西頭一兩家

澗水 西頭 一兩家

桑柘葉乾鳩雨歇

桑柘 葉 乾き 鳩雨 歇む

茅簷索索響纜車

茅簷 索々 纜車 響く

【語釈】

○細莎…小さな草。○澗水…山中の溪水。○西頭…西側。○桑柘…桑とつげ。○鳩雨…雨の時節。○茅簷…茅吹きひさし。○索索…音の形容。さらさら、サクサク。○纜車…糸車。

★ 涼生豆花

涼 豆花を生ず

明 王伯稠

豆花初放晚涼淒

豆花初めて放つ晚涼の淒

碧葉陰中絡緯啼

碧葉陰中絡緯啼く

貪與鄰翁棚底語

隣翁と棚底に語るを貪る

不知新月照清溪

知らず新月の清溪を照すを

【語釈】

○晚涼…夕方の涼しさ。○淒…寒さ。○絡緯…コオロギ。○新月…三日月。

★ 春日田家

春日の田家

明 肅靖王

屋後青山門外溪

屋後の青山門外の溪

小橋遙接稻秧畦

小橋遙に接す稲秧の畦

人家遠近蒼煙裏

人家遠近蒼煙の裏

桑柘陰陰戴勝啼

桑柘陰々戴勝啼く

【語釈】

○稻秧…稲の苗。○蒼煙…青色の靄。○桑柘…桑とつげ。○陰陰…木が茂って暗いさま。
○戴勝…鳥の名。キクイタダキ。

★青魚灘

青魚灘

明 王 鑛

青魚灘上野人家

青魚灘上野人の家

曲徑疎籬夕照斜

曲徑 疎籬 夕照斜なり

漠漠午煙吹不散

漠々たる午煙 吹き散ぜず

鷓鴣飛出木棉花

鷓鴣 飛び出す 木棉の花

【語釈】

○青魚灘：不祥。○野人：郊外に住む人。○漠漠：一面に続いているさま。○午煙：昼の霞。

★田家

田家

清 宋 琬

碧水平沙接草亭

碧水 平沙 草亭に接す

槿籬疎密柳青青

槿籬は疎密 柳は青々

閑來散帙憑烏几

閑來 帙を散じ 烏几に憑り

自寫龜蒙耒耜經

自ら写す 龜蒙が 耒耜經

【語釈】

○草亭：草葺きの亭。○平沙：砂浜。○槿籬：ムクゲの垣根。○閑來：引退して暇になつてから。○散帙：本を読むこと。○烏几：烏の皮を張った机。○龜蒙：陸龜蒙。唐の詩人。○耒耜經：陸龜蒙が著した農業書。

★ 灌溉

灌溉かんがい

清 乾隆帝

抱甕終輸氣力微

甕かめを抱かいて 終ついに輸まけ 氣力きりき微びなり

桔槔輪轉迅如飛

桔槔けつこう 輪りん轉てんして 迅はやこと飛ひぶが如ごとし

池塘水滿新禾潤

池塘 水みづ満みちて 新しん禾かう潤おい

樹下乘涼待月歸

樹下 涼すずに乗のじて 月つきを待まちちて歸かへる

【語釈】

○抱甕…不器用なことのたとえ。莊子・天地。力を入れること多くして功を見ることが少ない。○輸…負ける。○桔槔…水をくみ上げる跳ねつるべ。○新禾…新しい稲。

★ 田間

田間でんかん

清 汪楫

小婦扶聲大婦耕

小婦せうふは 聲こゑを扶たすけ 大婦たいふは耕かす

隴頭一樹有啼鶯

隴頭ろうとう 一樹いつしゆ 啼てい鶯おう有り

兒童不解春何在

兒童いどうは解いせず 春はる 何いずにか在あるを

只向遊人多處行

只ただ 遊人ゆうじん 多處むかに向むかいて行いく

【語釈】

○聲…カラ牛。○隴頭…丘の頂上。○遊人…旅人。

★ 東湖曲

東湖の曲

清

朱彝尊

鱸郷蟹舎説豊年

鱸郷 蟹舎 豊年を説く

杭稻東湖熟最先

杭稻 東湖に熟すること最も先なり

一雨新晴纔幾日

一雨新たに晴れ 纔に幾日かして

家家門外送租船

家々の門外 租船を送る

【語釈】

○東湖：湖北省武漢市武昌の東郊にある湖。○鱸郷蟹舎：漁師の家。○杭稻：もち米と米。○租船：租税を乗せた船。

★ 田家樂

田家樂

清

汪繹

短籬矮屋板橋西

短籬 矮屋 板橋の西

十畝桑陰接稻畦

十畝の桑陰 稻畦に接す

滿眼兒孫滿簷日

滿眼の兒孫 滿簷の日

飯香時節午雞啼

飯香の時節 午雞啼く

【語釈】

○田家樂：農家の趣を詠った詩。○矮屋：小さくて低い家。○桑陰：桑の木の影。○稻畦：稲田の畦。○滿眼：目一杯の。○滿簷：ノキ一杯の。○飯香：香しい飯。

★ 即事

即事

清 高 珩

井欄緑滿蒲萄葉

井欄 緑は滿つ 蒲萄の葉

籬落紅垂扁豆花

籬落 紅垂 扁豆の花

窓下蔬畦騷客圃

窓下の蔬畦 騷客の圃

門前樵逕野人家

門前の樵徑 野人の家

【語釈】

○即事…事に触れて、そのままを詠った詩。○井欄…井戸の枠。○蒲萄…葡萄。○籬落…垣根。○紅垂…紅色をして垂れている。○扁豆…インゲン豆。○蔬畦…野菜を植えた畦。○騷客…詩人。文人。○樵逕…樵の通う小路。○野人…野にあって仕官していない人。

★ 田家樂

田家樂

清 陳授衣

兒童下學惱比鄰

兒童 学を下りて 比隣を悩ます

抛壻池塘日幾巡

抛壻 池塘 日に幾巡

折得松枝當旗纛

松枝を折り得て 旗纛に当て

又來阿殿學官人

又た来て 阿殿して 官人を学ぶ

【語釈】

○田家樂…農家の趣きを詠った詩。○下學…学校から帰る。○抛壻…?○比鄰…となり近所。○當…代わりとする。○旗纛…鳥の毛をあしらった大きな旗。○阿殿…宮中のまねごとをする。

絶句類選 卷之二十 圖畫類

★ 題畫

画に題す

宋 陳與義

分明樓閣是龍門

分明なる樓閣 是れ竜門

亦有溪流曲抱村

亦た 溪流の曲りて 村を抱く有り

萬里家山無路入

万里の家山路の入る無く

十年心事與誰論

十年の心事 誰と論ぜん

【語釈】

○分明：はっきりしたさま。○龍門：都の門。○家山：故郷。○心事：心情。

★ 題畫

面に題す

元 陳旅

誰家林麓近溪灣

誰が家の林麓りんれいか 溪灣けいわんに近く

高樹扶疏出石間

高樹 扶疏 石間を出ず

落葉盡隨溪雨去

落葉 尽きて 溪雨に随つて去り

只留秋色滿空山

只だ 秋色の 空山に満つるを留むるのみ

【語釈】

○林麓：山林。○溪灣：谷川の屈曲する処。○扶疏：木の枝や葉が生い茂っているさま。

○秋色：秋景色。秋の気配。○空山：人気の無い山。

★ 題畫

面に題す

元 貢性之

馬足車輪盡日忙

馬足 車輪 尽日忙じんじつし

夢魂不到水雲鄉

夢魂 到らず 水雲郷

閒人自識閒邊趣

閒人かんじん 自おのずから識る 閒邊の趣

小簾疎簾坐晚涼

小簾しょうたん 疎簾それん 晚涼に坐す

【語釈】

○盡日：一日中。○夢魂：夢。○水雲郷：川と雲があり、風景がひっそりとしている地。○閒者の好む所。○閒人：閑なひと。○閒邊：閑かな辺地。○小簾：小さな竹製の坐具。○疎簾：まばらなスダレ。

★ 題畫

面に題す

元 貢性之

山接天台路萬重
山は天台に接し路は万重

仙家樓閣杳難通
仙家の樓閣杳として通じ難し

不知昨夜溪頭雨
知らず昨夜溪頭の雨

流出桃花幾許紅
流出す桃花幾許の紅

【語釈】

○天台：天台山。浙江省東部の天台県の北方2kmにある靈山である。○仙家：仙人の住む家。○杳：暗い。遙かに遠い。○溪頭：溪のほとり。

★ 題畫

面に題す

元 貢性之

滾滾長江入窅冥
滾々たる長江窅冥に入る

越山無數隔江青
越山 無數 江を隔てて青なり

一雙白鳥誰驚起
一雙の白鳥 誰か驚起す

衝破蒼煙下別汀
蒼煙を衝破して別汀を下る

【語釈】

○滾滾：水のさかんに流れるさま。○窅冥：奥深いさま。○越山：越の地方の山。○一雙…一つがいの。○衝破：突き破る。○蒼煙：青い靄。

★ 題畫

画に題す

元 鮑 恂

煙溼空林翠靄飄

煙は溼い 空林 翠靄飄える

渚花汀草共蕭蕭

渚花 汀草 共に蕭々たり

仙家應在雲深處

仙家 応に 雲深き処に在るべし

只許人間到石橋

只だ許す 人間の石橋に到るを

【語釈】

○煙：霞。○空林：人氣のない林。○翠靄：緑色のもや。○渚花：岸辺の花。○汀草：岸辺の草。○蕭蕭：たくさんあるさま。○仙家：仙人の住む山。○應：「まさにすべし」と読み「きつとくであるに違いない。」の意。

★ 題畫

画に題す

明 浦 源

青山欲轉綠溪迴

青山 転ぜんと欲す 緑溪の廻るを

古木春雲掩復開

古木 春雲 掩い復た開く

不識桃源在何處

識らず 桃源 何れの処にか在る

但看流水落花來

但だ看る 流水 落花の来るを

【語釈】

○青山：青々とした山。○桃源：桃源郷。

★題畫

面に題す

明 倪敬

溪雲靄靄樹團團

溪雲靄々樹団々

溪上幽亭六月寒

溪上の幽亭 六月寒し

日暮看山人已去

日暮 山を看れば 人已に去り

水禽飛上石欄干

水禽 飛び上る 石欄干

【語釈】

○靄靄：雲のたなびくさま。○團團：垂れ下がるさま。○幽亭：世間から離れてひっそりしている亭。○水禽：水鳥。

★題畫

面に題す

明 沈周

清暑茂林風日好

清暑茂林 風日好し

兩翁談屑落高寒

兩翁の談屑 高寒に落つ

白雲故故沒行徑

白雲 故々 行徑に没し

要絶世人來此山

要^{かなら}ず 世人の 此の山に^{きた}来るを^た絶つ

【語釈】

○清暑：避暑。○茂林：茂った林。○風日：風と日。風光。○談屑：話の絶えないこと。○高寒：高く寒い地形。○行徑：通行用の小路。

★ 題畫

画に題す

明 屠 瀟

碧水丹山映杖藜
夕陽猶在小橋西
微吟不道驚溪鳥
飛入亂雲深處啼

碧水 丹山 杖藜に映ず
夕陽 猶お 小橋の西に在り
微吟 道わず 驚溪鳥
飛んで 乱雲 深き処に 入りて啼く

【語釈】

○杖藜：アカザを杖にしたもの。隠者、老人が用いる。

★ 題畫

画に題す

明 張 弼

江上新涼霽色開
綠雲樹杪見樓臺
老漁未肯拋蓑笠
還恐輕雷送雨來

江上の新涼 霽色開く
綠雲 樹杪 樓台を見る
老漁 未だ 肯えて 蓑笠を抛たず
還つて恐る 輕雷の雨を送りて来るを

【語釈】

○霽色：晴朗な空の色。○樹杪：木の梢。○輕雷：かすかな雷の音。

★題畫

面に題す

明 唐寅

楊柳陰濃夏日遲
楊柳陰濃やかにして 夏日遅し
村邊高館漫平池
村辺の高館 漫く平池
鄰翁挈盒乘清早
となりおきな 盒を挈げて 清早に乘じ
來決輸贏昨日碁
來り決す 輸贏 昨日の碁

【語釈】

○盒…ふたと本体とを合わせて用をなす用具。○清早…清らかな夜明け。○輸贏…勝敗。
○碁…碁。

★題畫

面に題す

明 唐寅

雪滿梁園飛鳥稀
雪満つ 梁園 飛鳥稀なり
煖煨榑柶閉柴扉
煖煨 榑柶 柴扉を閉す
地爐温却松花酒
地炉 温却す 松花の酒
剛是溪頭拾蟹歸
剛に是れ 溪頭 蟹を拾って帰るならん

【語釈】

○梁園…宮中の園。○煖煨…暖かい埋み火。○榑柶…木や柴の塊。○柴扉…柴で出来た粗末な扉。○地爐…地に掘られた暖炉。○温却…暖める。却是完了助字。○松花酒…松の花で作った酒。○溪頭…溪のほとり。

★ 題畫

面に題す

明 唐寅

鯉魚風急繫輕舟

鯉魚風急に輕舟を繫ぐ

兩岸寒山宿雨收

兩岸の寒山 宿雨収まる

一抹斜陽歸雁盡

一抹の斜陽 歸雁尽き

白蘋紅蓼野塘秋

白蘋紅蓼 野塘の秋

【語釈】

○鯉魚…鯉。○輕舟…軽い小舟。○宿雨…昨夜からの雨。○白蘋…白い浮き草。○紅蓼…
紅色のタデ。○野塘…野原の丘。

★ 題畫

面に題す

明 宗周

孤松百尺掛垂藤

孤松 百尺 垂藤に掛かる

雲際高峯十二層

雲際の高峯 十二層

日暮鳥啼山寺遠

日暮鳥啼いて 山寺遠し

野橋流水獨歸僧

野橋 流水 独り帰る僧

【語釈】

○垂藤…垂れ下がった藤。○雲際…雲のそば。

★題畫

画に題す

明 王直

緑樹青山帶晚霞
樹間處處有人家
孤舟最愛滄浪客
得共眠鷗占淺沙

緑樹青山 晚霞を帯ぶ
樹間 処々 人家有り
孤舟 最も愛す 滄浪の客
眠鷗と共に 淺沙を占むるを得たり

【語釈】

○晚霞：夕焼け。○滄浪客：隱棲してさまよう人。○眠鷗：眠っている鷗。「列子」の故事を踏まえる。

★題畫

画に題す

明 李日華

霜落蒹葭水國寒
浪花雲影上漁竿
畫成未擬將人去
茶熟香温且自看

霜落ちて 蒹葭 水國寒し
浪花 雲影 漁竿に上る
画成りて 未だ擬せず 人の將いて去るを
茶熟し 香温かにして 且く自ら看る

【語釈】

○蒹葭：ヨギとオシ。○浪花：白い波頭。○漁竿：釣り竿。○未擬：まだくだとは思わない。○將人去：（画を）人が持って行ってくれる。○転句：絵の出来が余り良くないこと。○看：自分で書いた画を見る。

★ 題畫

画に題す

明 朱誠泳

翠壁丹厓淡夕暉

翠壁すいへき 丹厓たんがい 夕暉せきこん 淡し

往来麋鹿自成羣

往来みしか 麋鹿おのずか 自みしか 成おのずか 羣おのずか を成す

仙家住せんか 在せんか 空青外

仙家住せんか 住せんか して 空青の外せんか に在り

只隔桃花一片雲

只ただ 隔だけ 桃花ももはな を隔だけ つ 一片ひとひら の雲

【語釈】

○夕暉…落日の餘暉。○麋鹿…トナカイと鹿。○仙家…仙人の家。

★ 題畫

画に題す

明 雷鯉

細路小橋人獨往

細路せろ 小橋せうきやう 人ひと 獨ひとり 往い く

落花流水燕飛忙

落花らくわ 流水りゅうすい 燕つばき 飛と ぶこと 忙いそ がし

松陰匝地露衣濕

松陰しょういん 地ち を匝めぐ りて 衣うしろお 露うるお いて 濕しめ り

空翠滿身風露香

空翠くうすい 滿身みんしん 風露ふうろ 香かん ばし

【語釈】

○空翠…緑がかかった湿った霧。○風露…風と霧。

★ 題畫

面に題す

明 雷 鯉

古塘秋曉淨煙沙

古塘 秋曉 煙沙を淨む

籬落西風菊自花

籬落 西風菊 自ら花さく

滿目紅塵無處著

滿目の紅塵 著する処無し

半簾殘日隔溪斜

半簾の殘日 溪を隔てて斜なり

【語釈】

○煙沙：曇空で霧のかかった砂浜。○籬落：垣根。○西風：秋風。○滿目：見渡す限り。

○紅塵：車馬の立てる埃。○半簾：簾半分を捲き上げると見えるような高さ。

★ 題畫

面に題す

明 陳 桂

老樹懸崖葉半秋

老樹 崖に懸かり 葉半ば秋なり

草亭三面枕寒流

草亭 三面 寒流に枕す

釣船歸去斜陽盡

釣船 帰り去りて 斜陽尽き

惟有青山對白鷗

惟だ 青山の 白鷗に對する有るのみ

【語釈】

○草亭：草葺きの粗末な家。○枕：臨む。

★ 題畫

面に題す

元 僧大圭

積雨平原煙樹重
積雨平原煙樹重なる
翠厓千丈削芙蓉
翠厓千丈芙蓉を削る
招提更在秋雲外
招提更に秋雲の外に在り
只許行人聽曉鐘
只だ許す行人曉鐘を聴くを

【語釈】

○積雨…長雨。○煙樹…霧がかかった木。○翠厓…緑色の崖。○芙蓉…木蓮。○招提…寺院の別称。○行人…旅人。

★ 題畫

面に題す

清 乾隆帝

高柳陰濃暑不生
高柳陰濃やかにして暑さ生ぜず
小亭終日有餘清
小亭終日余清有り
筠簾捲處風吹到
筠簾捲く処風吹き到り
送過涼蟬斷續聲
送り過ぐ涼蟬断続の声

【語釈】

○筠簾…竹のスタレ。○涼蟬…涼しい蟬の声

★ 題畫

画に題す

清 乾隆帝

板橋幾曲接廻塘

板橋はんきょう幾曲かいどう廻塘に接す

煙樹迷濛晚影蒼

煙樹えんじゆ迷濛めいもう晚影蒼し

欸乃一聲人卧月

欸乃あいだい一聲人月がに卧す

不知身在水雲郷

知らず身は水雲郷に在るを

【語釈】

○廻塘：曲折した堤岸。○煙樹：霧のかかった木。○迷濛：薄暗いさま。○欸乃：舟歌。
○水雲郷：風景清幽の地方。多くは隱者の居住地を指す。

★ 題畫

画に題す

清 李澄中

楓林挾岸碧霞屯

楓林岸を挟みて碧霞へきかたむろ屯す

石激江流風浪喧

石激しくして江流かうろう風浪かまひす喧し

一片孤帆雲際下

一片の孤帆雲際を下る

兩峯對起是天門

兩峰對起す是れ天門

【語釈】

○碧霞：緑色の霞。○風浪：水面の風と波。○雲際：雲の果て。遠い天空。○天門：天に通じる門。

★ 題畫

画に題す

清 黄任

桃花灼灼水潺潺

桃花 灼灼しやくしやく 水 潺潺せんせん

隔斷千山與萬山

隔斷かくだんす 千山と万山と

生怕漁郎漏消息

生怕せいはいくす 漁郎 消息を漏すを

不流一片到人間

一片を流して 人間じんかんに到らしめず

【語釈】

○灼灼：花が盛んに開いているさま。○潺潺：浅い水の流れるさま。さらさら。○隔斷：分け隔てる。○生怕：恐れること。○漁郎：桃源郷に行った漁夫。○消息：事情。○一片：ここでは桃の花びら一片。

★ 題畫

画に題す

清 馮班

長板橋南舊酒樓

長板橋ちやうはんきやうなん南 旧酒樓

昔年曾此記觥疇

昔年 曾て此こゝに 觥疇こうちゆうを記す

主人莫訝容顔老

主人 訝ること莫かれ 容顔の老ゆを

已到秦淮十度遊

已しんに秦淮わいに到り 十度遊とたびぶ

【語釈】

○長板橋：不祥。○觥疇：酒器。酒器を用いた宴会。○容顔：美しい顔。○秦淮：南京を流れる秦淮河。兩岸は歓楽街であった。

★ 題畫

面に題す

清 惠椿亭

誰家亭子碧山嶺

誰が家の亭子か 碧山の嶺

白板橋通屋巖椽

白板橋は通ず 屋巖椽

遠樹層層山半角

遠樹層々 山の半角

杖藜人立夕陽天

杖藜の人は立つ 夕陽の天

【語釈】

○亭子…亭。○白板橋…不祥。普通名詞？○屋巖椽…不祥。○層層…重なりあうさま。○杖藜…あかざ（軽いので老人、隠者が使う）を杖つく。

★ 題畫

面に題す

清 僧超源

春浦風生柳岸斜

春浦風生じて 柳岸斜なり

好山何處著人家

好山何れの処か 人家を著せん

白雲遮斷橋西路

白雲遮断す 橋西の路

不許漁郎問落花

許さず 漁郎の落花を問うを

【語釈】

○柳岸…柳の植わっている岸。○漁郎…漁夫。

★ 題畫雜詩

画に題す雜詩

元 馬 臻

採菱渡頭秋日晚
採菱 渡頭 秋日 晚れ
孤樓隔岸知誰家
孤樓 岸を隔でて 知んぬ誰が家ぞ
參差遠樹雜雲氣
參差さんしたる 遠樹 雲氣を雜まじう
滅沒漁舟浸浪花
滅沒す 漁舟 浪花に浸ひたる

【語釈】

○雜詩：物にあつて言い、流例にこだわらない詩。○採菱：採菱歌。菱を採るときに歌う歌。○渡頭：渡し場。○參差：高さが不揃いであること。○雲氣：雲。○滅沒：消えて無くなる。○浪花：白い波頭。

★ 題米南宮畫

米南宮の画に題す

元 郊 韶

風流不見米南宮
風流 見えす 米南宮
依舊雲林遠樹重
旧に依り 雲林 遠樹重なる
貌得匡廬舊游處
貌かき得たり 匡廬 旧游の処
半江秋色洗芙蓉
半江の秋色 芙蓉を洗う

【語釈】

○米南宮：北宋の書画家である米芾。○依舊：昔の如く。○雲林：雲のかかっている林。○貌得：画くことが出来た。○匡廬：江西省の廬山。隱棲の地。○半江：江の半分。○秋色：秋景色、秋の気配。○芙蓉：蓮の花。

★ 題曹雲西畫

曹雲西の画に題す

元 倪瓚

吳松江水碧於藍

吳松の江水 碧よりも藍なり

怪石喬柯在渚南

怪石 喬柯 渚南に在り

鼓柁長吟採蘋去

柁を鼓し 長吟して 蘋を採りて去る

新晴風日更清酣

新晴 風日 更に清酣

【語釈】

○曹雲西：曹知白。元代の画家・書家でもありました。山水画を得意とし、江南三大名士の一人とされている。○吳松：上海市市轄区宝山区。○喬柯：高い枝。○鼓柁：舟を浮かべる。○新晴：晴れたばかりの天気。○清酣：清新で酔いしれるような気持ち。

★ 題半山道人畫

半山道人の画に題す

明 方文

一著袈裟絶萬緣

一たび 袈裟を着て 万縁を絶つ

猶餘破硯習難捐

猶お 破硯を余して習う 捐つる難きを

江山本是无情物

江山 本是れ 無情の物

寫到荒殘亦可憐

写して 荒殘に到る 亦た憐むべし

【語釈】

○半山道人：不祥。○破硯：硯を壊すこと。○荒殘：荒れて損なわれること。

★ 題趙仲穆畫

趙仲穆の面に題す

明 王汝玉

十二瑠樓紫翠重

十二の瑠樓 紫翠重し

萬年琪樹落秋風

萬年の琪樹 秋風に落つ

南朝無限傷心事

南朝 無限 傷心の事

都在殘山剩水中

都在 殘山 剩水の中に在り

【語釈】

○趙仲穆：趙雍。元の湖州桂庵のひと、宦官の称号で海州総督の称号を与えられ、数年間仕えた。書画の名人。○瑠樓：美しい樓閣。○紫翠：紫と緑の混合色。○琪樹：玉のように美しい樹木。○南朝：南北著時代の六朝。○殘山剩水：破壊されて残っている山河。

★ 題王翬畫

王翬の面に題す

清 朱彝尊

帝城日日足風霾

帝城 日々 風霾足る

眯眼黃塵漲六街

眼に眯む黃塵 六街に漲る

對此溪山最清絕

此の溪山 最も清絶なるに對し

便思衝雨踏櫻鞵

便ち思ふ 雨を衝いて 棕鞵を踏むを

【語釈】

○王翬：清代初期の画家。四王呉惲一人。山水画は清代第一と称された。○風霾：風で舞い上がった塵や曇り空の現象。○六街：帝都の大通り。○清絶：非常に美しい。○便：たちどころに。○櫻鞵：布で作られた草履。

★ 題王安節畫

王安節の面に題す

清 李漁

家住寒山過客稀

家は寒山に住し客の過ること稀なり

一林風雨夢回初

一林風雨夢 回るの初

道人日課無餘事

道人の日課 余事無し

了却彈琴便讀書

彈琴を了却して 便ち書を読む

【語釈】

○王安節：王安石。○寒山：冷落寂靜な山。○夢回：夢が覚める。○道人：徳の高い人。
○了却：完了。

★ 僧巨然畫

僧巨然の画

元 鮮于樞

秋鱸春鰈足杯羹

秋鱸 春鰈 杯羹に足る

萬頃煙波兩權橫

万頃の煙波 両つながら 權横わる

就使直鈎隨分曲

就使 直鈎 分曲に随いても

不將浮世釣浮名

浮世を將つて 浮名を釣らず

【語釈】

○僧巨然：五代目宋の初期に活躍した僧侶。五代から宋代初期にかけて、南方の山水画の一大流派として「董卓」と呼ばれ、後世に大きな影響を与えた。○秋鱸：秋のスズキ（淡水魚）。○春鰈：春の鮭。○杯羹：酒の肴とあつもの。○萬頃：非常に広い範囲。○煙波：水面に立つ靄。○就使：たとひであつても。○直鈎：真つ直ぐな釣り針。太公望が用いた。隱棲のたとえ。

★ 方匠師畫

方匠師の画

明 高啓

畫圖忽見白雲峰

画圖 忽ち見る 白雲峰

茶屋香臺樹幾重

茶屋 香台 樹 幾重

身若在師行道處

身は 師の行道の処に在るが若し

晚來唯訝不聞鐘

晚來 唯か訝かる 鐘を聞かざるを

【語釈】

○方匠師：不祥。○香臺：仏殿の別称。○行道：修行で通る道。○晚來：晩になつてから。

★ 為瀋趣菴題畫

瀋趣菴が為に画に題す

明 偶 桓

溪山深處野人居

溪山 深き処 野人の居

小小簾櫳草閣虚

小々の簾櫳 草閣 虚なり

灑面松風吹夢醒

面に灑ぐ松風 夢を吹いて醒まし

凌霄花落半床書

凌霄花は落つ 半床の書

【語釈】

○瀋趣菴：沈方。蘇州の昆山の人。名画や書を好んだ。○野人：野にあって使えぬ人。○簾櫳：窓とカーテン。○草閣：草葺きの家。○凌霄花：ノウゼンカズラ。○半床：床の半分くらいの大きさ。

★ 爲愚山侍講題嚴蓀友畫爲

愚山侍講が爲に嚴蓀友の面に題す

清 王士禎

山氣化雲雲作烟

山氣雲に化し雲煙と作る

幽人篋笠不知年

幽人の篋笠年に知せず

清谿曲逐楓林轉

清谿は曲を逐い楓林は轉ず

紅葉無風落滿船

紅葉風無く落ちて船に滿つ

【語釈】

○山氣：山中の空氣。○烟：靄。○幽人：世俗から離れた人。

★ 題畫卷

画卷に題す

明 張適

青山歴歴樹重重

青山歴々樹重々

寺在雲深第幾峰

寺は雲深き第幾峰に在り

比屋人家西崦下

比屋の人家西崦の下

夕陽長聽講時鐘

夕陽長く聽く講時の鐘

【語釈】

○畫卷：絵を書いた巻物。○歴歴：明らかさま。はっきりしたさま。○重重：重なりあうさま。○第幾峰：多くの峰。○比屋：家が相隣り合っているさま。○西崦：西山。○講時鐘：僧侶が説教する時を知らせる鐘。

★題燕肅畫卷

燕肅の画巻に題す

元 仇遠

溪路迢迢繞碧峰

溪路 迢々として 碧峰を繞る

白雲迷却舊行蹤

白雲 迷却す 旧行蹤

買舟歸去山中住

舟を買って 帰り去り 山中に住す

終日茆亭坐聽松

終日 茆亭に 坐して 松を聴く

【語釈】

○顏蘇。青州（現山東省青州市）の人。進士に挙げられ刑部侍郎となった。○迢迢…遙かに遠いさま。○迷却…失う。○舊行蹤…昔の人の通った道。○茆亭…茅吹きの亭。

★曹雲西畫卷

曹雲西の画巻

元 黄公望

十載相逢正憶君

十載 相逢いて 正に君を憶う

忽從紙上見寒雲

忽ち 紙上に従りて 寒雲を見る

空江漠漠漁歌度

空江 漠々として 漁歌 度り

一片疏林帶夕曛

一片の疏林 夕曛を帯ぶ

【語釈】

○曹雲西…宋江の華頂の人。昆山の教職に推薦されたが、辞職した。書物や名画のコレクションが多く、多くの文人画家が好んで彼を訪ねてきた。優れた画家であった。○畫卷…絵を書いた巻物。○空江…がらんとした江。○漠漠…広々として果てしないさま。○夕曛…夕陽の餘暉。

★題山水圖

山水図に題す

元 滌 穎

青山千仞聳高秋

青山 千仞せんじん 高秋に聳え

山北山南水亂流

山北 山南 水は乱流す

欲訪川源無路入

川源せんげんを訪ねんと欲すれども 路いの入る無し

釣魚人在碧溪頭

釣魚ちようぎよの人は 碧溪へきけいの頭ほどりに在り

【語釈】

○千仞：非常に高いさま。○高秋：高く爽快な秋空。○川源：川の源。

★題畫山水

画山水に題す

元 倪 瓚

秋潮夜落空江渚

秋潮しゅうちよう 夜に落つ 空江くうかうの渚なみ

曉樹離離含宿雨

曉樹ぎようじゆ 離々として 宿雨しゆくうを含む

伊軋中流聞櫓聲

伊軋いあつ 中流 櫓声を聞く

臥聽漁人隔煙語

臥して聴く 漁人の煙を隔つる語

【語釈】

○落：潮が引く。○空江：がらんとした江。○離離：草木の繁茂しているさま。○伊軋：櫓のギシギシする音の形容。○煙：水上の靄。

★ 題畫

画に題す

明 文徵明

矗矗青山帶白雲

矗々たる青山 白雲を帯ぶ

石梁鷄犬數家村

石梁 鷄犬數家の村

江空不遣漁郎到

江空しくして 漁郎をして到らしめず

落盡桃花自掩門

落ち尽す桃花 自ら門を掩う

【語釈】

○矗矗：高く聳えるさま。○石梁：石の橋。

★ 題畫

画に題す

明 文徵明

寂寞平阜帶淺灘

寂寞たる平阜 淺灘を帯ぶ

幽人時共夕陽還

幽人時に 夕陽と共に還る

水禽飛去疎煙滅

水禽 飛び去りて 疎煙滅す

目送秋光入斷山

秋光を目送し 斷山に入る

【語釈】

○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○平阜：水辺の平地。○淺灘：水中の浅いところ。○幽人：世間から離れて暮らしている人。○疎煙：疎らな靄。○目送：めで見送る。○斷山：そそり立つ山。

★ 題畫

面に題す

明 文徵明

丹楓絶壁照空江

丹楓 絶壁 空江を照らす

万里青天在野航

万里の青天 野航に在り

卧展南華秋水讀

卧して南華 秋水を展じて 読めば

不知嵐翠湿衣裳

知らず 嵐翠 衣裳を湿らすを

【語釈】

○丹楓…紅葉した楓。○空江…広くて閑かな江。○野航…野中の渡し船。○南華…『庄子』の別名。○秋水…『庄子』の「秋水」の篇。○嵐翠…緑色の山霧。

★ 題畫

面に題す

明 文徵明

過雨空林萬壑奔

過雨 空林 万壑 奔る

夕陽野色小橋分

夕陽 野色 小橋 分かる

春山何似秋山好

春山 何ぞ似ん 秋山の好きに

紅葉青山鎖白雲

紅葉 青山 白雲を鎖ざす

【語釈】

○過雨…通り雨。○空林…人気の無い林。○万壑…多くの山。○野色…野原の景色。

★ 山水圖

山水圖

明 林環

青山幾里入煙霞

青山幾里 煙霞えんかに入る

杖履尋春未覺賒

杖履じょうり 春を尋ね 未だ賒はるかなるを覚えぬ

流水小橋村路晚

流水 小橋 村路 晩る

隔林應有野人家

林を隔まぎてて 応に 野人の家 有るべし

【語釈】

○煙霞：靄と霞。○杖履：杖をついて漫歩すること。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。○野人：野にあって官職に就かない人。

★ 山水圖

山水圖

明 陳航

數里平沙接遠村

數里の平沙 遠村に接す

千重喬木蔭柴門

千重の喬木 柴門を蔭おほう

可人最是滄洲晚

人に可なるは 最も是れ 滄洲くわいの晩

潮落依稀見水村

潮落ちて 依稀いいきたり 水村を見る

【語釈】

○平沙：平らかな砂浜。○喬木：高木。○柴門：柴で作った粗末な門。○滄洲：水辺に在る場所。隱者の住まいを意味する。○依稀：ぼんやりとしているさま。

★ 山水圖

山水圖

明 釋宗泐

危峯削玉出雲端

危峰 玉を削り 雲端に出ず

仙館霜清古木寒

仙館 霜清く 古木寒し

記得匡廬秋雨後

記し得たり 匡廬 秋雨の後

彭郎湖上倚篷看

彭郎 湖上 篷に倚りて 看るを

【語釈】

○危峯…高峻な山峰。○雲端…雲の上。○仙館…仙人が修行し遊ぶ館。○記得…絵に描くことが出来た。○匡廬…江西省廬山。陶淵明隱棲の地。○彭郎…陶淵明。○篷…舟の帆。

★ 題山水

山水に題す

明 趙迪

江上千峰紫翠浮

江上千峰 紫翠浮ぶ

松門苔逕映清流

松門 苔徑 清流に映ず

茅堂雨絶湘簾暝

茅堂 雨絶えて 湘簾暝し

卧聴空山一夜秋

卧して聴く 空山 一夜の秋

【語釈】

○紫翠…紫幹翠葉。山の木がみずみずしく美しいさま。○茅堂…茅吹ききの堂。○湘簾…細い竹やアシなどで編んだ簾。

★ 題山水

山水に題す

明 趙 廸

流水人家洞裏幽

流水 人家 洞裏幽どうりなり

清猿古木思悠悠

清猿 古木 思悠悠

別家幾度藤蘿月

家に別れて 幾度か藤蘿とうらの月

閑却瑤琴石上秋

閑却かんきやくす 瑤琴ようきん 石上の秋

【語釈】

○洞裏…洞窟の中。○清猿…清らかな猿の鳴き声。○藤蘿…藤のつた。○閑却…すておく。○瑤琴…玉で飾った琴。

★ 題山水

山水に題す

明 趙 廸

幾家茅屋水邊村

幾家の茅屋か 水辺の村

花落春潮夕到門

花落ち 春潮しゅんちよう 夕ゆうべに門に到る

溪上數峰青似染

溪上の數峰 青きこと染むるに似て

居人說是武陵原

居人説く是れ 武陵原と

【語釈】

○武陵原…湖南省常德武陵の原。桃花源記における漁師の住んだところ。

★題山水小画

山水小画に題す

明 程本立

太湖三萬六千頃

太湖 三万六千頃

七十二峯湖上山

七十二峰 湖上の山

草閣酒醒風雨過

草閣そうかくに酒醒さうかくむれば 風雨過ぎ

棹歌聲在水雲間

棹歌とうか 声は在り 水雲の間

【語釈】

○三萬六千頃：頃は一八二アール。広いことを言う。○七十二峯：多くの峰。○草閣：草葺きの閣。○棹歌：舟歌。

★題山水卷

山水卷さんすいかんに題す

宋 錢選

煙雲出沒有無間

煙雲 出沒す 有無の間

半在空虛半在山

半はは空虚に在り 半はは山に在り

我亦閑中消日月

我も亦た 閑中 日月を消じ

幽林深處聽潺湲

幽林深き処 潺湲を聴く

【語釈】

○山水卷：山水画の巻物。○煙雲：雲と霧。○有無：有体物と無体物。○空虚：空中。天空。○閑中：閑な中。○日月：月日。○幽林：奥深く閑かな林。○潺湲：浅い水の流れる音。

★ 題稚川山水

稚川の山水に題す

唐 戴叔倫

松下茅亭五月涼

松下しょうかの茅亭ぼうてい 五月の涼

汀沙雲樹晚蒼蒼

汀沙ていさ 雲樹 晩ばんに蒼々そうそう

行人無限秋風思

行人 限り無し 秋風の思

隔水青山似故郷

水を隔つる青山 故郷に似たり

【語釈】

○稚川：道教の伝説上の仙都。○茅亭：茅吹きの亭。○汀沙：渚の砂。○雲樹：高く聳える樹。○蒼蒼：青々としたさま。

★ 題陸芙蓉山水

陸芙蓉の山水に題す

清 王元勳

浪跡頻年賦遠遊

浪跡ろうせき 頻年ひんねん 遠遊を賦す

湖山佳處輒拘留

湖山 佳よき処 輒すなわち拘留こりりゆうす

披圖却憶辰州道

図ひらを披ひらいて 却かえって憶おぼう 辰州の道

殘夜泉聲響竹樓

殘夜 泉声 竹樓に響く

【語釈】

○陸芙蓉：不祥。木蓮？○浪跡：到る処を漫遊すること。○頻年：他年。○輒：そのたびに。○拘留：引き留める。○辰州：湖南省懷化市沅陵県。○殘夜：夜がまさに明けようとするとき。○竹樓：竹で作った樓房。

★ 題鄧國材水墨寒林

鄧國材の水墨寒林に題す

宋 楊萬里

人間那得箇山川

人間じんかん 那な ぞ得とん 箇この山川

船上漁郎便是仙

船上の漁郎 便べち是ぜれ仙

遠嶺外頭江盡處

遠嶺の外頭 江 尽つくる處

問渠何許洞中天

渠なんじに問とう 何なにぞ許よすか 洞中の天

【語釈】

○鄧國材：不祥。○漁郎：漁夫。○外頭：外面。○渠：あなた。○洞中天：洞窟の中にあるとされる仙界。

★ 題燕肅山水菴

燕肅の山水菴に題す

明 冷謙

依稀廬岳高僧舍

依稀いき 廬岳ろがく 高僧の舍

彷彿商山隱者家

彷彿ほうふつたる 商山 隱者の家

我亦抱琴來谷口

我も亦た 琴を抱かいて 谷口こくこうに來り

白雲深處拾松花

白雲 深こき處 松花しょうかを拾ひろう

【語釈】

○燕肅：宋の益都の人。進士に挙げられ礼部侍郎に至った。山水画を得意とした。○依稀：ぼんやりとした。○廬岳：江西省の廬山。○高僧舍：東林寺。○彷彿：ぼんやりとして明らかでないさま。○商山：陝西省商洛市商山。○隱者：商山四皓。

★ 題錢舜舉山水小景

錢舜舉の山水小景に題す

明 薛瑄

琪樹秋風生早寒

琪樹^{きじゆ} 秋風 早寒を生ず

樓臺縹緲暮雲間

樓台^{ひょうひょう} 縹緲 暮雲の間

橋頭有客長無事

橋頭^{きやうとう} 客^{かく} 有りて 長く事無く

閑聽溪聲靜看山

閑に 溪聲を聴いて 靜かに山を見る

【語釈】

○錢舜舉：不祥。○琪樹：玉のように美しい木。○縹緲：遠くかすかなさま。

★ 臺中遇直晨覽蕭侍御壁畫山水

唐 羊士諤

台中^{ぐうちゆうく}の遇直^{あした}の晨^{そうじぎよ}に蕭侍御^{せうじぎよ}の壁畫山水を覽る

蟲思庭莎白露天

虫は思^{てい}う 庭莎^{ていさ} 白露の天

微風吹竹曉淒然

微風 竹を吹いて 曉^{せいぜん} 淒然たり

今來始悟朝回客

今來 始めて悟^{ちゆうかい}る 朝回^{かく}の客

暗寫歸心向石泉

暗に 歸心を寫して 石泉に向うを

【語釈】

○臺中：禁中。○遇直：偶々宿直すること。○蕭侍御：不祥。○庭莎：庭のハマナスゲ。○白露：秋天の露水。○淒然：冷え冷えとして寂しいさま。○今來：ただいま。○朝回：朝に帰る。○歸心：故郷に帰ろうとする気持。

★ 題蕭照江山圖

蕭照の江山図に題す

元 柳貫

萩浦楓林宿暮烟

萩浦 楓林 暮煙に宿す

夕陽収盡月浮灣

夕陽 収まり尽き 月灣に浮ぶ

騷人一曲江南思

騷人 一曲 江南を思ふ

彈徹箜篌送雁還

弾じて 箜篌を徹し 雁の還るを送る

【語釈】

宋の澤州陽城の人。李唐に画法を学び、朝廷の絵師となった。山水画を得意とした。○萩浦：萩の生えた浦。○暮煙：夕もや。○騷人：詩人。文人。○江南：長江中下流の南岸地方。○箜篌引。樂府題の曲の一つ。

★ 出都王山人畫山水送別

清 朱彝尊

都を出で 王山人 山水を画いて 別れを送る

王郎五載一相逢

王郎 五載 一たび相逢う

寫出雲巒別思重

雲巒を写し出して 別思重なる

髣髴攝山風月夜

髣髴たる 攝山 風月の夜

秋窓同聽六朝松

秋窓 同じく聴く 六朝の松

【語釈】

○王山人：不祥。○王郎：王山人。○雲巒：雲と山。○別思：別れを悲しむ思。○髣髴：ぼんやり見えるさま。○江蘇省南京市の攝山。○六朝：南北朝時代の六朝。

★ 題小景

小景に題す

明 劉泰

隔岸峰巒過雨新
岸を隔つる 峰巒 過雨新たなり
桃花水暖碧潏潏
桃花水暖くして 碧潏々たり
誰家艇子閑來往
誰が家の艇子か閑かに來往す
只載春光不載人
只だ春光を載せ 人を載せず

【語釈】

○峰巒：山々。○過雨：通り雨。○潏潏：水の清いさま。○艇子：小舟。○春光：春の光。春景色。

★ 題畫

画に題す

明 聶大年

緩鞚青驄踏軟沙
緩鞚 青驄 軟沙を踏む
畫橋煙樹酒旗斜
画橋 煙樹 酒旗斜なり
玉樓人醉東風晚
玉樓 人は酔う 東風の晩
高捲紅簾看杏花
高く 紅簾を捲いて 杏花を見る

【語釈】

○緩鞚：緩いくつわ。○青驄：体毛が青みがかかった灰色をしている馬。○画橋：画で飾った橋。○煙樹：霞がかかった樹。○酒旗：酒屋の目印の旗。○玉樓：玉で飾った楼閣。○東風：春風。

★ 題小景

小景に題す

明 聶大年

水禽沙鳥自相呼

水禽沙鳥 自ら相呼ぶおのずか

遠近雲山半有無

遠近の雲山 半ば有無

一葉扁舟兩三客

一葉の扁舟 兩三の客かく

載將煙雨過西湖

煙雨を載せ將ちて 西湖を過ぐも

【語釈】

○水禽…水鳥。○沙鳥…砂浜の鳥。○兩三…二三人。○煙雨…霧雨。

★ 題小景

小景に題す

明 陳蒙

野籐刺水竹籬斜

野籐 水を刺し 竹籬斜めなりやとう ちくり

落盡東風枳殼花

落ち尽くす 東風 枳殼の花

日午不聞茶臼響

日午 聞かず 茶臼の響き

春城買藥未還家

春城 薬を買いて 未だ家に還らず

【語釈】

○野籐…野生のヤシ科トウ族の植物。○竹籬…竹で作った籬。○東風…春風。○枳殼…カラタチ。○春城…春の街。

★題小景

小景に題す

明 程敏政

緑樹蕭然覆草亭

緑樹 蕭然しょうぜんとして 草亭を覆う

酒船安坐蓼花汀

酒船 安坐す 蓼花りょうかの汀なづな

分明一夜溪頭雨

分明 一夜 溪頭の雨

洗出春山數點青

洗い出だす 春山 数点の青

【語釈】

○蕭然…物寂しいさま。○草亭…草葺きの亭。○蓼花汀…蓼の花が生えた岸。○分明…はつきりしていること。

★題小景

小景に題す

明 呂淵

緑樹橋頭路轉回

緑樹 橋頭きょうとう 路 転回す

水光山色映樓臺

水光山色 楼台に映ず

扁舟蕩入荷花裏

扁舟へんしゅう 蕩ち入る 荷花うちの裏

知是遊人避雨來

知る是れ 遊人 雨を避けて 來るきたを

【語釈】

○橋頭…橋のほどり。○水光山色…山水の景色。○扁舟…小舟。○遊人…旅人。○蕩…壊す。

★題大年晝

大年の面に題す

宋 黃庭堅

水色煙光上下寒

水色煙光 上下して寒し

忘機鷗鳥恣飛還

忘機の鷗鳥 恣に飛還す

年來頻作江湖夢

年來頻りに作す 江湖の夢

對此身疑在故山

此に對し身疑うらくは故山に在るか

【語釈】

○水色：水面の色。○煙光：水面に立つ靄の光。○忘機：世間の事柄を気につけないさま。○年來：近年になつてから。○江湖：隱棲の地。○故山：故郷の山。

★雲山小景

雲山の小景

元 黃鎮成

飛瀑潺潺瀉碧岑

飛瀑 潺々として 碧岑に瀉ぐ

野橋分路入雲深

野橋 路を分け雲に入りて深し

三椽草屋長松下

三椽の草屋 長松の下

應有先生抱膝吟

應に先生 膝を抱いて吟ずる有るべし

【語釈】

○飛瀑：滝。○潺潺：水の流れるさま。さらさら。○碧岑：緑の峰。○三椽：三軒。○草屋：草葺きの粗末な家。○應：「まさに「すべし」と読み、「きつと」であるに違いない」の意。

★ 題米元暉山水小景贈陳原貞別

明 釋似杞

米元暉べいげんきの山水小景に題し 陳原貞ちんげんていが別れに贈る

江頭雨足春水生 江頭雨足りて春水生じ

江上青山煙樹暮 江上の青山煙樹暮る

扁舟明發去如飛 扁舟明發し去りて飛ぶが如し

目斷征帆入蒼霧 目斷す征帆の蒼霧に入るを

【語釈】

○米元暉：米友仁。北宋末・南宋初の書家・画家・官僚。米芾の子で水墨山水画が得意。
○陳原貞：不祥。○江頭：江のほとり。○煙樹：霧に煙る樹。○扁舟：小舟。○明發：朝早く出発する。○目斷：目の届く限り眺めやる。○征帆：遙かに旅行く舟。

★ 雲林畫山水竹石

雲林画山水竹石

元 華幼武

秋雲無影樹無聲 秋雲に影無く樹に声無し

湛湛長江鏡面平 湛々たる長江鏡面平かなり

遠岫煙銷明月上 遠岫煙銷え明月上り

小亭危坐看潮生 小亭に危坐して潮の生ずるを見る

【語釈】

○湛湛：水を深くたたえるさま。○遠岫：遠くに見える山々。○煙：靄霞。○危坐：体を前に傾け、背中を丸め、膝を抱えるようにして座ること。

★題雪景

雪景に題す

元 李 祁

瓊林瑤樹擁樓臺
瓊林けいりん瑤樹ようじゆ樓台ろうたいを擁す
戸牖臨風晚自開
戸牖こゆう風に臨みおのずか晩に自ら開く
一鳥不飛人跡斷
一鳥飛じんせきばず人跡断え
扁舟何處獨歸來
扁舟何れの処か独り帰り来る

【語釈】

○瓊林…雪を被って玉のように美しい林。○瑤樹…美しい樹。○戸牖…家の窓。

★青山白雲圖

青山白雲圖

元 黄 潛

十年失脚走紅塵
十年失脚し紅塵こうじんに走る
忘却山中有白雲
忘却す山中に白雲有るを
忽見畫圖疑是夢
忽ち画図を見て是れ夢かと疑う
冷花涼葉思紛紛
冷花涼葉思ふんぶん紛紛

【語釈】

○失脚…地位を失う。○紅塵…俗世間の煩わしいことから。○涼葉…秋天の樹葉。紅葉。
○紛紛…まじり乱れるさま。

★ 青山白雲圖

青山白雲圖

元 虞集

獨向山中訪隱君
行窮千澗水云
仙家更在空青外
只許人間禮白雲

獨り 山中に向いて 隱君を訪ぬ
行窮まりて 千澗 水云々
仙家 更に 空青の外に在り
只だ許す 人間 白雲に礼するを

【語釈】

○隱君…隱者。○千澗…非常に長い距離。○云云…水が渦巻いて流れるさま。○仙家…仙人の住む家。○空青…青色の天空。

★ 題米南宮雲山圖

米南宮の雲山の図に題す

宋 魏了翁

漠漠雲林疊疊山
誰家茅屋隱松間
石橋雨過天台遠
采藥仙人去未還

ばくばく 漠々たる 雲林 疊々たる山
誰が家の茅屋か 松間に隠る
石橋 雨 過ぎて 天台遠し
薬を采る 仙人 去りて 未だ還らず

【語釈】

○米南宮…北宋の書画家米芾。花鳥画を得意とし、書道家としても知られており、その書風は「米体」と呼ばれる。○漠漠…一面に続いているさま。○疊疊…重なり合っているさま。○茅屋…茅吹きの家。○石橋…浙江省天台山の名勝である石梁。○天台…天台山。浙江省東部の天台県にある霊山。中国三大霊山のひとつ。

★ 郭熙秋山平遠

郭熙の秋山平遠

宋 蘇軾

目盡孤鴻落照邊

目^{もくじん}尽^{こころ}す孤鴻 落照の^{ほとり}辺

遙知風雨不同川

遙かに知る 風雨の川を同じくせざるを

此間有句無人識

此の間句 有あり 人の識る無し

送與襄陽孟浩然

送^{そうよ}与^す 襄陽の孟浩然に

【語釈】

○郭熙：北宋の山水画家。○目盡：目力の尽きる処まで見渡す。○孤鴻：一羽の雁。○落照：夕陽の餘暉。○句：詩。○襄陽：湖北省襄陽市。

★ 題秋江圖

秋江の図に題す

元 倪瓚

長江秋色渺無邊

長江の秋色 渺^{びよう}として 辺無し

鴻雁來時水拍天

鴻雁^{こうがん} 來^{きた}る時 水 天を拍つ

七十二灣明月夜

七十二灣 明月の夜

荻花楓葉覆漁船

荻花 楓葉 漁船を覆^{おお}う

【語釈】

○秋江：秋の長江。○鴻雁：かり。○七十二灣：多くの湾。○荻花：オギの花。

★ 寒村雪暮圖

寒村雪暮の図

宋 五師道

木杪栖鴉景已殘

木杪もくさの栖鴉せいあ景已ざんに残す

沙邊落雁雪猶寒

沙邊の落雁 雪猶お寒し

江南江北曾行路

江南江北 曾こつて 行こうの路

今日山窓借畫看

今日 山窓 画を借りて看る

【語釈】

○木杪：フタバ萩科の常緑高木。○栖鴉：住んでいる鳥。○殘：損なわれる。

★ 惠崇春江晚景

惠崇の春江晚景

宋 蘇軾

竹外桃花三兩枝

竹外の桃花 三兩枝

春江水暖鴨先知

春江 水暖かにして 鴨 先ず知る

萋萋滿地蘆芽短

萋萋ろうこうは地に満ち 蘆芽ろうがは短かし

正是河豚欲上時

正はに是れ 河豚かとんの上らんと欲する時

【語釈】

○惠崇：宋初の画僧。建陽（福建省）の人。北宋山水画の三大家の一人で、特に雁・鷺・鳥などの絵を得意とした、また、詩人でもあり、九僧の一人としても知られる。○竹外：竹の生えている向こう側。○桃花：桃の花。○三兩枝：二、三の枝。○萋萋：よもぎの一種、フグの毒を消すという。○滿地：一面に生い茂る。○蘆芽：蘆：あしの芽、フグの毒を消すという。正是：ちょうど今である。河豚：フグ。欲上時：川をさかのぼってくる時期

（参考文献）

『漢詩大系17』

★ 書李世南所畫秋景

李世南りせいなん画く所の秋景に書す

宋 蘇軾

野水參差落漲痕

野水 參差さんしとして 漲痕ちやうこん落ち

疏林敲倒出霜根

疏林 敲倒そりん きとうし 霜根しもねを出す

扁舟一櫂歸何處

扁舟 一櫂へんしゅう いちせう 何れの処にか帰る

家在江南黃葉村

家は江南 黃葉こうようの村に在り

【語釈】

○李世南：北宋の画家、字は唐臣、山水画に巧み。○野水：野中の流れ。○參差：長短不揃いのさま。○落：減る。○漲痕：増水時、水が漲った時の痕かた。○疎林：樹木のまばらな林。○欹倒：かたむきたおれたさま。欹：かたむく。○霜根：霜の降りた。○扁舟：小舟。一櫂：一艘。○江南：長江下流の南側の地方。

(参考文献) 『中国詩人選集二―6』

★ 為吳溥泉畫窠石平遠詩

吳溥泉が為に窠石平遠を画す詩

元 倪瓚

地僻林深無過客

地僻に 林深くして 過客かかく無し

松門元自不曾關

松門しょうもん元 自おのずかから 曾しばしばて 關とぎさず

展將一幅谿藤滑

一幅 谿藤けいとうの滑てんしょうを展將てんしょうし

寫得谿陰數點山

写し得たり 谿陰けいいん 数点の山

【語釈】

○吳溥：江西省崇仁の人。建文二年進士。國子司業となる。○過客：訪れる客。○松門：自然の松を門と為した物。○谿藤：剡溪紙。公文書等に用いられる紙で、浙江省剡溪が名産地である。○展將：展開する。

★ 江山漁樂圖

江山漁樂の図

元 謝應芳

數口妻兒網一張

數口の妻兒網一張

船為家舍水為郷

船を家舍と為し水を郷と為す

江南江北山如畫

江南江北山画の如し

欸乃聲中送夕陽

欸乃聲中夕陽を送る

【語釈】

○數口…數人。○欸乃…舟歌。

★ 題溪村煙雨圖

溪村 煙雨の図に題す

元 鄒韶

山雨朝來不作泥

山雨朝來泥を作さず

望中煙雨使人迷

望中の煙雨人をして迷わしむ

依稀絶似羌村路

依稀として絶えるに似たり 羌村の路

無數春船逆上溪

無数の春船 逆に溪を上る

【語釈】

○煙雨…霧雨。○朝來…明け方以來。○望中…視野の中。○依稀…ぼんやりとしているさま。○羌村…陝西省郿県にある村。

★ 清溪放棹圖

清溪放棹の図

明 劉泰

溶溶新水碧於苔
風靜菱花幾個開
小艇不知何處客
載將秋色過溪來

溶々たる新水 苔よりも碧なり
風靜かにして 菱花 幾個か開く
小艇 知らず 何れの処の客かを
秋色を載將して 溪を過ぎて来る

【語釈】

○放棹：乗船。○溶溶：水がさかんに流れるさま。○載將：載せもつ。○秋色：秋の気配。秋景色。

★ 題許子厚扇

許子厚の扇に題す

明 史鑑

好山多在石湖西
草色新年綠未齊
亭子半開修竹裏
一簾春雨鷓鴣啼

好山 多く 石湖の西に在り
草色 新年 綠 未だ 齊わらず
亭子 半ば開く 修竹の裏
一簾の春雨 鷓鴣啼く

【語釈】

○許子厚：不祥。○石湖：江蘇省蘇州市西南にある湖。○亭子：あずまや。○修竹：高い竹。

★ 隱因畫鷗波春雨亭

隠し因りて画す 鷗波 春雨の亭

明 張 寧

一櫂煙波載雨還

一櫂の煙波 雨を載せて還る

白鷗相對主人閑

白鷗 相對して 主人閑なり

如何誤落紅塵裏

如何ぞ 誤って落つ 紅塵の裏

夜夜寒燈夢小山

夜々 寒灯 小山を夢む

【語釈】

○鷗波：鷗鳥が生活する水面。悠閑自在の退隱生活の比喩。○一櫂：ひとしきり。○煙波：水面に立つ靄。○紅塵：車馬のたてる埃。

★ 李遵道溪山春曉圖

李遵道の溪山春曉の図

元 張 雨

誰寫江南雨後岑

誰か写す 江南 雨後の岑

清寒空濶撲雲林

清寒 空は濶く 雲林を撲す

何當載我圖書去

何か 当に 我が圖書を載せ去りて

共試野航春水深

共に 野航 春水の深さを 試すべし

【語釈】

○李遵道：李士行。薊丘の人。黃巖知州に至る。山水画を善くす。○江南：長江中下流の南岸地方。○清寒：寒い清涼さ。○雲林：靄のかかった林。○何當：「いつかまさにくすべし」と読み、「いつくであろうか」の意。○野航：農家の舟。

★ 杜東原溪山讀書圖

杜東原の溪山読書の図

元 沈周

桑柘村深日影斜
桑柘村深く 日影斜なり
白雲深處帶山家
白雲 深き処 山家を帯ぶ
分明萬里橋西路
分明 万里 橋西の路
只欠春風幾樹花
只欠く 春風 幾樹の花

【語釈】

○杜東原…不祥。○桑柘…桑とツゲ。○分明…はっきりしているさま。

★ 蘆汀夜笛圖

蘆汀夜笛の図

元 金幼孜

上下天光接水光
上下の天光 水光に接す
滿汀蘆葉晚蒼蒼
滿汀の蘆葉 晩に蒼々たり
一聲長笛驚殘夢
一声の長笛 殘夢を驚かし
明月滿船風露涼
明月 滿船 風露涼し

【語釈】

○蘆汀…アシの生えているなぎさ。○天光…空の光。○水光…水面に現れる光。○蒼蒼…青々としたさま。○殘夢…目覚めたあとの夢うつつの状態。○驚…夢から覚めさせる。

★ 李昇林泉高隱圖

李昇の林泉高隱の図

元 郭天錫

為厭繁華愛好山
繁華を厭い 好山を愛するが為に
幽棲贏得此身閑
幽棲 贏得たり 此の身の閑なるを
生平已足林泉興
生平 已に足る 林泉の興
留取高名滿世間
高名を留取して 世間に満たす

【語釈】

○李昇：元の濠梁の人。竹石画、山水画に巧みであった。○幽棲：隱棲。○生平：常日頃。○留取：留める。

★ 漁舟夜歸圖

漁舟夜歸の図

明 陳顯

罷釣歸來月未明
釣を罷め 帰り来れば 月未だ明かならず
隔籬遙見一燈青
籬を隔てて 遙かに見る 一灯青さを
不知潮落江風轉
知らず 潮落ちて 江風転じ
流却扁舟過別汀
扁舟を流却して 別汀に過るを

【語釈】

○潮落：潮が引く。○江風：川風。○流却：流し去る。却是助字。○過：訪れる。

★ 風雨維舟圖

風雨舟を維ぐ図

明 李日華

江店酒香花正濃
江店酒香しくして花正に濃なり
午潮初上碧連空
午潮初めて上りて碧空に連る
篷籠暫擡蕭蕭雨
篷籠暫く擡う蕭々の雨
柳外晴霞一縷紅
柳外の晴霞一縷紅なり

【語釈】

○江店：江畔の店。○篷籠：舟。○蕭蕭：風雨の物寂しい音の形容。○晴霞：明るい霞。
○一縷：一筋。

★ 溪行看松圖小卷

溪行松を看る図小卷

明 李日華

閣外雲山隔岸峯
閣外の雲山岸を隔つ峯
去帆漠漠帶雲容
去帆漠々として雲容を帯ぶ
新涼喚起蘋花夢
新涼喚起す蘋花の夢
緩歩來看拂水松
緩歩看來る水を払う松

【語釈】

○閣外：樓閣の外。○去帆：去って行く帆船。○漠漠：ぼおつとしているさま。○雲容：雲の形。○蘋花：浮き草の花。

★ 寄石田先生

石田先生に寄す

明 無名氏

寄將一幅剡溪籐

寄將す 一幅 剡溪籐

江面青山畫幾層

江面の青山 画 幾層

筆到斷厓泉落處

筆 斷厓 泉の落つる処に到つて

石邊添箇看雲僧

石辺 箇れ 雲を看る僧を添えよ

【語釈】

○寄將：贈る。○剡溪籐：剡溪（浙江省杭州市にある地名）産の紙。

★ 秀上人課經圖

秀上人 課經の図

明 劉 泰

山繞清溪樹繞亭

山は清溪を繞り 樹は亭を繞る

隔雲金磬曉泠泠

雲を隔つる 金磬 曉に泠々たり

道人不管花開落

道人は管せず 花の開落

白乳香中讀觀經

白乳香中 觀經を読む

【語釈】

○秀上人：不祥。○課經：教典を学ぶ。○金磬：金属でできたへの字型の打楽器。○泠泠：音響の清らかなさま。○道人：高い徳のある人。○白乳香：ムクロジ目カンラン科ボスウエリア属の樹木から分泌される樹脂から作った香。○觀經：仏教の經典のひとつ。

★ 徽宗雪江獨棹圖

徽宗の雪江独棹の図

明 釋宗泐

良嶽秋深百卉腓

良岳 秋深くして 百卉腓れ

沙塵吹滿袞龍衣

沙塵 吹き滿つ 袞龍衣

淒涼五國城邊路

淒涼たる 五国 城辺の路

得似寒江獨棹歸

寒江 独り棹さして 歸るに 似たるを得んや

【語釈】

○徽宗：北宋第8代皇帝。書画の才に優れ、北宋最高の芸術家の一人と言われる。○雪江獨棹圖：雪の降っている江で一人釣っている人を画いた図。○良嶽：河南省開封市城内東北隅にある山。○袞龍衣：黄色地に龍の模様が付けられた皇帝用の衣服。○淒涼：物寂しい。○五國：徽宗が金の兵に捕らえられ、ここで虜囚の身となった地。黒龍江省宜蘭県。

★ 過鶴汀書齋觀董文敏畫

清 李基和

鶴汀の書齋に過ぎり董文敏の画を観る

曉雨初晴煙未收

曉雨 初めて晴れ 煙 未だ収まらず

江雲一帶引輕舟

江雲 一帶 輕舟を引く

模糊認得南徐樹

模糊 認め得たり 南徐の樹

不到家山十六秋

家山に到らざること 十六秋

【語釈】

○鶴汀：不祥。○董文敏：董其昌。松江府華亭の人。明代の官僚で、文人画家、書家。○煙：霧。○模糊：ぼんやりとしてはっきりしないさま。○南徐：江蘇省南部にある地名。○家山：故郷。○十六秋：十六年。

★ 題西莊課耕圖

西莊課耕の図に題す

清 王廷諤

宿霧全開卯色天

宿霧全開す卯色の天

遙山半碧澹生煙

遙山半ば碧にして澹として煙を生ず

連村雨足新秧長

連村雨足りて新秧長し

龍骨閑抛屋角田

龍骨閑に抛つ屋角の田

【語釈】

○課耕…耕作を課す。○宿霧…昨夜からの霧。○遙山…遙かな山。○煙…もや。○龍骨…龍骨車。水車のこと。

★ 題玉蘭泉柳漁莊圖

玉蘭泉柳漁莊の図に題す

清 徐薌坡

晴光激灑碧迢迢

晴光激灑碧迢々

淡靄輕陰覆板橋

淡靄輕陰板橋を覆う

昨夜菰蒲疎雨過

昨夜菰蒲疎雨過ぐ

一溪春水長魚苗

一溪の春水魚苗に長ず

【語釈】

○玉蘭泉…不祥。○柳漁莊…不祥。○激灑…水の相連なるさま。○迢迢…遙かなさま。○淡靄…淡い雲。○菰蒲…マコモとガマ。○魚苗…繁殖のために卵から孵化させた小魚。

★ 題玉蘭泉柳漁莊圖

玉蘭泉 柳漁莊の図に題す

清 徐薈坡

桃花浅浪送春帆

桃花 浅浪 春帆を送る

蟹齧魚罾夕照銜

蟹齧 魚罾 夕照を銜う

坐對涼波吹笛罷

坐して 涼波に對して 笛を吹くを罷む

自縫衲衫舊漁衫

自ら縫う衲衫 旧漁衫

【語釈】

○玉蘭泉：不祥。○柳漁莊：不祥。○蟹齧：竹の簾のような蟹取り器具。○魚罾：魚を捕る四つ手の網。○衲衫：はかま。○漁衫：漁師の衣服。

★ 為朱蘊泉題杏花春雨圖

朱蘊泉の為に杏花春雨の図に題す

清 舒瞻

浅深春色幾枝含

浅深の春色 幾枝を含む

翠影紅香半欲酣

翠影 紅香 半ば 酣ならんと欲す

簾外輕陰人未起

簾外の輕陰 人未だ起きず

買花聲裏夢江南

買花声裏 江南を夢む

【語釈】

○朱蘊泉：不祥。○春色：春景色。○翠影：緑色の影。○紅香：紅色で香りのするもの。○輕陰：薄曇り。○江南：長江中下流の南岸地域。

★ 題劉伯山蕃殖圖

劉伯山の蕃殖図に題す

宋 楊萬里

老子平生只荷鋤
誤携破硯到清都
歸來荒盡西疇却
媿見劉家蕃殖圖

老子平生只だ鋤を荷す
誤って破硯を携えて清都に到る
帰り来って西疇を荒尽し却す
見るを媿ず劉家蕃殖の図

【語釈】

○劉伯山…不祥。○蕃殖…繁殖。○老子…老人の自称。○平生…ふだん。○荷鋤…農業を行ふ。○清都…帝都。○西疇…田。

★ 巫山枕障

巫山の枕障

唐 李白

巫山枕障畫高丘
白帝城邊樹色秋
朝雲夜入無行處
巴水橫天更不流

巫山の枕障 高丘を画く
白帝城辺 樹色秋なり
朝雲 夜に入つて行く処無く
巴水 天に横わりて更に流れず

【語釈】

○巫山枕障…巫山（三峡の巫峡にある山）を描いた枕屏風。○巴水…重慶市の巴江。

★ 題畫建溪圖

建溪圖に題画す

唐 方干

六幅輕綃畫建溪

六幅の輕綃 建溪を画く

刺桐花下路高低

刺桐花下路 高低

分明記得曾行處

分明に記し得たり 曾て行く処

祇欠猿聲與鳥啼

祇に欠く 猿声と鳥啼と

【語釈】

○題畫：画に書き付ける。○建溪：福建省南平市建溪。○六幅：幅は二尺二寸。○輕綃：透明で柄のある絹織物。○刺桐：豆科刺桐属の落葉性の高木で、別名海桐。○分明：はっきりと。○記得：記憶している。

★ 朱陳村圖

朱陳村の図

宋 蘇軾

我是朱陳舊使君

我は是れ 朱陳の旧使君

勸農曾入杏花村

農を勧め 曾て入る 杏花の村

而今風物那堪畫

而今 風物 那ぞ画くに堪えん

縣吏催租夜打門

縣吏 租を催し 夜門を打つ

【語釈】

○朱陳村：陝西省漢中市陳村。○使君：刺史。○而今：現在。○風物：風光景物。○縣吏：…県の役人。

★ 觀明州圖

明州圖を觀る

宋 王安石

明州城郭畫中傳

明州城郭 画中に伝う

尚記西亭一艤船

尚お記す 西亭 一たび船を艤す

投老心情非復昔

老に投じて 心情 復た昔に非ず

當時山水故依然

當時の山水 故に依然たり

【語釈】

○明州…浙江省宁波市。○艤船…船の準備をして岸に着ける。○投老…老年になって。○依然…昔のまま。

★ 題范才元湘江喚舟圖

范才元が湘江にて舟を喚ぶ図に題す

宋 朱松

天涯投老鬢驚秋

天涯 老に投じて 鬢 秋なるに驚く

夢想長江碧玉流

夢想す 長江に 碧玉の流るるを

忽對畫圖揩病眼

忽ち 画図に対して 病眼を揩う

失聲便欲喚歸舟

失声 便ち 歸舟を喚ばんと欲す

【語釈】

○范才元…不祥。○湘江…湖南省長沙市湘江。○天涯…空の果ての地。○投老…老年になつて。

★ 題茗溪漁隱圖

茗溪 漁隱の図に題す

宋 胡仔

溪邊短短長長柳

溪辺 短々 長々の柳

波上來來去去船

波上 来々 去々の船

鷗鳥近人渾不畏

鷗鳥 人に近く 渾て畏れず

一雙飛下鏡中天

一雙 飛び下る 鏡中の天

【語釈】

○茗溪：胡仔。宋の徽州績溪の人。奉議郎に至ったが湖州に住み、魚を釣る自適の生活を送った。詩論書「茗溪漁隱叢話」がある。○漁隱：隠棲して魚を釣って暮らすこと。○溪邊：溪のほとり。○鷗鳥：かもめ。○転句：『列子』黄帝篇を踏まえる。○一雙：ひとつがい。

★ 題茗溪漁隱圖

茗溪 漁隱の図に題す

宋 胡仔

秋雲漠漠烟蒼蒼

秋雲 漠々 煙 蒼々

蘆花初白蓮葉黃

蘆花 初めて白くして 蓮葉黄なり

釣船盡日來往處

釣船 尽日 来往する処

南村北村杭稻香

南村北村 杭稻香し

【語釈】

○茗溪：胡仔。宋の徽州績溪の人。奉議郎に至ったが湖州に住み、魚を釣る自適の生活を送った。詩論書「茗溪漁隱叢話」がある。○漁隱：隠棲して魚を釣って暮らすこと。○漠漠：一面に続いているさま。○烟：靄霞。○盡日：一日中。○蒼蒼：青々としたさま。○杭稻：うるち米。

★ 題 茗溪漁隱圖

茗溪 漁隱の図に題す

宋 胡仔

卷起綸竿撇權歸

綸竿を卷起して 權を撇して帰る

短篷斜掩宿漁磯

短篷 斜めに掩いて 漁磯に宿す

日高春睡無人喚

日高くして 春に睡り 人の喚ぶ無し

撩亂楊花繞夢飛

撩乱たる楊花 夢を繞りて飛ぶ

【語釈】

○茗溪…胡仔。宋の徽州績溪の人。奉議郎に至ったが湖州に住み、魚を釣る自適の生活を送った。詩論書「茗溪漁隱叢話」がある。○漁隱…隱棲して魚を釣って暮らすこと。○卷起…○綸竿…釣り竿。○撇…たたく。○短篷…小舟。○漁磯…魚を釣るのに都合の良い磯。○撩亂…乱れ飛ぶさま。○楊花…柳絮。

★ 題 三茅風雨圖

三茅風雨の図に題す

宋 蔡肇

筆間雲氣生毫末

筆間の雲氣 毫末に生ず

紙上松聲聽有無

紙上の松声 聴いて 有る無し

收得三茅風雨樣

収め得たり 三茅風雨の様

高堂六月是冰壺

高堂 六月 是れ冰壺

【語釈】

○三茅…江蘇省句容県の東南にある山。○雲氣…雲と霧。○毫末…筆の先。○冰壺…氷を入れた壺。

★ 蜀山書舎圖

蜀山書舎しよくせんしよしやの圖

明 高啓

山月蒼蒼照烟樹

山月せうせう蒼々 煙樹を照し

碧浪湖頭放船去

碧浪湖頭へきろうことう 船を放ちて去る

隔林夜半見孤燈

林を隔てて 夜半 孤灯を見る

知是幽人讀書處

知る是れ 幽人 讀書の処

【語釈】

○蜀山：浙江省呉興の山の名。高啓の友人である徐賁が隱棲したところ。○書舎：書齋。
○蒼蒼：月光の青白いさま。○烟樹：靄の籠めた樹。○碧浪湖：浙江省湖州市碧浪湖。○
幽人：俗世間を避けてひっそりと暮らしている人。

（参考文献） 『中国詩人撰集第二集 10』

★ 雲山樓閣圖

雲山樓閣の圖

明 高啓

碧樹香臺錦繡連

碧樹へきじゆ 香台 錦繡連なる

畫師應見亂離前

画師 応に乱離らんりの前を見るなるべし

如今風景那堪寫

如今 風景 那なんぞ 写すに堪んや

廢寺空山鎖暮烟

廢寺 空山 暮煙むいに鎖さる

【語釈】

○碧樹：緑色の樹木。○香臺：仏殿。○錦繡：錦の織物のような景色。○應：「まさに」
「すべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。○亂離：政治の混乱。○空山：人
気の無い山。○暮烟：夕靄。

★ 題漢宮圖

漢宮の図に題す

明 羅倫

白蛇中斷赤旗開
白蛇中斷し 赤旗開く
四百年中夢兩回
四百年中夢 兩回す
惟有終南舊山色
惟だ終南 旧山色のみ有りて
雨餘猶自送青來
雨余 猶自 青を送つて来る

【語釈】

○白蛇中斷：劉邦が白帝の子である白蛇を切ったこと。○赤旗：漢の赤旗。○兩回：巡り巡ること。○終南：陝西省西安市南方にある終南山。○雨餘：雨上がり。○猶自：未だ。今なお。

★ 桃源圖

桃源の図

明 薛惠

溪上春風笑語溫
溪上の春風 笑語温かし
溪頭春水漲新痕
溪頭の春水 新痕に漲る
中原逐鹿人誰在
中原に 鹿を逐う 人誰か在る
桃葉桃花自一村
桃葉 桃花 自ら一村

【語釈】

○桃源圖：陶淵明の「桃花源記」を題材にした図。○溪頭：溪のほとり。○新痕：新月。○中原逐鹿：天下を争う。

★ 題趙松雪苕溪圖

趙松雪の苕溪図に題す

明 虞堪

王孫今代玉堂仙

王孫今代玉堂の仙

自畫苕溪似輞川

自ら苕溪を画して輞川に似たり

如是青山紅樹底

是の如く青山紅樹の底

可無十畝種瓜田

無かるべし十畝瓜を種うる田

【語釈】

○趙松雪：元代の書画家の趙孟頫。画風において、文人画を復興した。○苕溪：中国の浙江省湖州市にある溪谷。○王孫：貴族の子弟。趙孟頫は宋の宗室であった。○今代：現在。○玉堂仙：翰林学士の雅号。○輞川：輞川荘。長安の南にあった王維の別荘。○種瓜田：秦の東陵侯であった邵平が、秦が滅ぼされた後は、庶民に戻って、長安の東で瓜を栽培して生活をしたことになぞらえた。

★ 題黃尊古上都秋色圖

黃尊古の上都秋色の図に題す

清 湯右曾

落日牛羊下遠村

落日牛羊遠村に下る

平沙萬馬別開屯

平沙万馬別れて屯を開く

君看鵲沒鵬盤處

君看ずや鵲没し鵬の盤する処

莽莽青山是塞垣

莽々たる青山是れ塞垣

【語釈】

○黃尊古：黃鼎。清代の画家であり、山水画を得意とした。○上都：内蒙古錫林郭勒盟上都鎮。○秋色：秋景色。○平沙：平らな砂原。○鵲：はやぶさ。○鵬：ワシ。○盤：旋回する。○莽莽：草深いさま。○塞垣：北方の辺塞地。

★ 西湖雨浮泛圖

西湖 雨に泛ぶ圖

清 朱彝尊

蓴絲淩葉浸魚天

蓴糸 淩葉 魚天を浸す

十里湖山思悄然

十里の湖山 思 悄然

疎雨夜眠聽亦好

疎雨 夜に眠りて聽くも 亦た好し

莫因月黑便回船

月の黒きに因りて 便ち 船を回す莫れ

【語釈】

○池や沼に自生するスイレン科の多年草植物。○淩葉：菱の葉。○悄然：しよんぼりするさま。物寂しいさま。

★ 吳王夜宴圖

吳王夜宴の圖

宋 真山民

銀漏迢迢夜未晨

銀漏 迢迢として 夜未だ 晨ならず

管絃聲裏綺羅春

管絃声裏 綺羅の春

飲闌方擁名娃睡

飲むこと 闌にして 方に名娃を擁きて睡る

豈料稽山正卧薪

豈に料らんや 稽山 正に薪に卧すを

【語釈】

○吳王：吳王夫差。○銀漏：銀製の水時計。○迢迢：夜の更けていくさま。○綺羅：きらびやかなさま。○名娃：絶世の美女。西施。○稽山：会稽山。○卧薪：越王勾踐が復讐を誓って薪の上に寝たこと。

★ 子猷訪戴図

子猷しゆう戴たいを訪ぬ野津

宋 來 梓

四山如玉夜光浮 四山玉の如く夜光浮ぶ
 一舸玻璃凝不流 一舸の玻璃はり凝りて流れず
 若使過門相見了 若し門を過ぎ相見あいけんりよう了せしめば
 千年風致一時休 千年の風致一時に休やまん

【語釈】

○子猷：王徽之、字は子猷。王羲之の子。黃門侍郎となる。『世説新語』任湛の故事で名高い。「嘗居山陰、夜雪初霽、忽憶戴逵、泛舟往訪、造門不入而返。人問則曰：“乘興而來、興盡而返、何必見戴？”」○戴：南朝宋の劉義慶《世説新語任誕》：“王子猷居山陰、夜大雪……忽憶戴安道。○玻璃：穩やかで澄んだ水面。○相見了……（王子猷と劉義慶）とが会うことが出来た。○（『世説新語』にあるような）おもむぎ。

★ 題孫登長嘯圖題

孫登そんとう長嘯ちようしやうする図に題す

元 趙孟頫

在澗幽人樂考槃 澗たにに在る幽人 樂考槃らくこうはん
 南山白石夜漫漫 南山の白石 夜に漫々まんまん
 空林無風萬籟寂 空林 風無く 萬籟ばんさい寂し
 長嘯一聲山月寒 長嘯ちようしやう 一声 山月寒し

【語釈】

○孫登：三國魏末く西晋の人。于郡の北山に隱棲し、司馬昭が阮籍を派遣して召し出そうとしたが応じなかった。○長嘯：（詩を吟じて）長くうそぶく。○幽人：隱者。○樂考槃：隱遁して自分の好きなように楽しむこと。○漫漫：広く遙かなさま。○萬籟：あらゆる物音。

★ 題淵明小像

淵明えんめいの小像せうざうに題たいす

元 貢師泰

烏帽青鞋白鹿裘

烏帽うぼう 青鞋せいあい 白鹿はくろくの 裘かわころも

山中甲子自春秋

山中かの甲子おのずか 自おのずから春秋

呼童檢點門前柳

童を呼び 檢点けんてんす 門前かどまへの柳

莫放飛花過石頭

飛花ていけを放はなち 石頭いしづつを過すぎること莫なかれ

【語釈】

○烏帽…隱者の用いる黒い帽子。○青鞋…わらじ。○甲子…曆。年月。○檢點…点検。○飛花…柳絮。

★ 題淵明像

淵明えんめいの像ざうに題たいす

明 林景清

南山秋色滿東籬

南山なんざんの秋色あきいろ 東籬とうせきに満みつ

彭澤歸家鬢未絲

彭澤ほうたく 家かに歸かへりて 鬢びん 未なだ糸いとをななさず

白酒黃花聊自足

白酒びやく 黃花かうか 聊いささか 自おのずから足たりり

扶筇絕勝折腰時

筇たすに扶たすけらるれば 絶勝ぜつしょう 腰こしを折をる時に

【語釈】

○淵明…陶淵明。○南山…江西省九江市南部にある廬山。○秋色…秋景色。○彭澤…陶淵明。○黃花…黄色の菊。○絶勝…遙かに勝る。○折腰時…「五斗米の為に腰を折らず」「晋書」陶潜伝。

★ 松下淵明圖

松下の淵明の図

宋 僧良琦

謝安却為蒼生起
謝安 しゃあん 却 くわつて 蒼生 そうせい の為 の に起 つ
陶令可辭印綬廻
陶令 たうりやう 印綬 いんじゆう を辭 して 廻 える べし
若使生逢聖明世
若 し 生 を して 聖明 せいめい の世 に 逢 わ しめば
青松老盡不歸來
青松 せいそう 老 れ 盡 ぜ ぞども 歸 り 來 たら ざらん

【語釈】

○淵明：陶淵明。東晋中期の名政治家。初め王羲之等と清談をしていたが、後に政治家と
なった。陶淵明より前の時代の人。○蒼生：人民。○陶令：陶淵明。○聖明：名君。この
場合、謝安を指す。

★ 題淵明歸去來圖

淵明 えんめい 歸去來 ききよらい の図 に 題 す

金 王若虛

抛却微官百自由
抛 ほう 却 きやく して 百 ひゃく の自由
應無一事挂心頭
應 まさ に 一 いつ 事 じ を 心頭 しんとう に 挂 か く 無 な かるべし
銷憂更借琴書力
憂 うれい を 銷 け し 更 さら に 琴書 きんしよ の力 ちから を 借 か へる
借問先生有底憂
借 しゃもん 問 もん す 先 せん 生 しやう 底 てい の 憂 うれい 有 あ りや

【語釈】

○淵明：陶淵明。○歸去來：「歸去來の辞」。○抛却：抛つ。却是助字。○應：「まさに
くすべし」と読み、「きつとくであるに違いない。」と言う意味。○借問：ちよつとお尋
ねするが。○底：根源。

★ 明皇打鞠圖

明皇打鞠の図

宋 晁説之

宮殿千門白晝開

宮殿の千門 白昼に開く

三郎沈醉打毬回

三郎 沈酔し 打毬して回る

九齡已老韓休死

九齡は已に老い 韓休は死す

明日應無諫疏來

明日 応に諫疏の來たる 無かるべし

【語釈】

○明皇…玄宗皇帝。○打鞠…馬に乗って球を打って争うポロに似た遊戯。○三郎…玄宗皇帝。睿宗の三男○九齡…張九齡。唐の玄宗の時代の名宰相。○韓休…玄宗の時代の名宰相。玄宗に諫言をした。○諫疏…諫言の上書。

★ 明皇小車圖

明皇小車の図

元 大圭

宮門日出乳鴉啼

宮門 日出でて 乳鴉啼く

仙漏沈沈樹影低

仙漏 沈々 樹影低し

朝罷千官無一事

朝 罷んで 千官一事無く

車聲又過壽陽西

車声 又た過ぐ 壽陽の西

【語釈】

○明皇…玄宗皇帝。○乳鴉…雛の鳥。○仙漏…宮廷の水時計。○沈沈…奥深く静かなさま。○朝…朝廷での政治。○罷…行われなくなる。○壽陽…壽陽宮。楊貴妃が住んでいた宮殿の一つ。

★ 題馬遠竹溪吟弈圖

馬遠の竹溪吟弈の図に題す

元 陶宗儀

好詩應向過橋成

好詩 応に橋を過ぎるに 向いて成るべし

逸興還從對局爭

逸興 還た局に對するに従りて争う

此日山林無一事

此の日 山林 一事無く

竹香細細晚風清

竹香 細々 晚風清し

【語釈】

○馬遠：南宋の画院画家。南宋後半期の院体山水画を代表する画家で、南宋四大家の一人。○吟弈：詩を吟じながら碁を打つ。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとくであるに違いない。」と言う意味。○逸興：世俗を脱した優れたおもむき。

★ 東坡赤壁圖

東坡赤壁の図

元 鄭允端

老瞞雄視欲吞吳

老瞞 雄視 呉を吞まんと欲す

百萬樓船一炬枯

百万の樓船 一炬に枯る

留得清風明月在

清風明月を 留め得て在り

網魚謀酒付髯蘇

魚を網し酒を謀り 髯蘇に付す

【語釈】

○東坡：蘇軾。○東坡赤壁：北省黃岡市東坡赤壁。蘇軾が「赤壁賦」を作ったところ。○老瞞：魏の曹操。○雄視：威勢を張って他を見下す。○呉：三国時代の呉。○百萬樓船：曹操の水軍。○一炬：ひとたび火を付ける。曹操の水軍が火攻めにあったこと。○髯蘇：蘇軾の別称。

★ 東坡赤壁圖

東坡赤壁の図

元 鄭允端

焼天烈火萬艘空
天を焼く烈火 万艘空し
横槩英雄智力窮
槩を横たう英雄 智力窮す
何以扁舟今夜客
なにゆえ 扁舟 今夜の客
洞簫聲在月明中
洞簫の声は 月明の中に在り

【語釈】

○萬艘：多くの船。○横槩英雄：曹操。「矛を横たえて詩を賦す」。○扁舟：小舟。○洞簫：縦笛。

★ 二喬觀兵書圖

二喬 兵書を観る図

明 高啓

共憑花几倦新妝
共に 花几に憑り 新妝を倦く
玄女陰符讀幾行
玄女の陰符 読むこと 幾行
銅雀那能鎖春色
銅雀 那んぞ能く 春色を鎖す
解將竒策教周郎
竒策を將って 周郎に教え解く

【語釈】

○二喬：三国時代に、才色兼備の姉妹として知られた大喬・小喬をいう。大喬は呉の孫策の、小喬は周瑜の妻。○花几：花模様の脇息。○玄女：伝説中の神女。黄帝から兵法を授かったという。○陰符：兵法書。○銅雀：銅雀台。曹操が魏王に昇爵した時に鄴（河北省邯鄲市臨漳県）に造営した宮殿。○春色：二喬のこと。○周郎：赤壁の戦いで曹操を破った周瑜。

★ 題楊妃上馬圖

楊妃 馬に上る図に題す

宋 韓駒

翠華欲幸長生殿

翠華 幸せんと欲す 長生殿

立馬樓前待貴妃

馬を立て 樓前 貴妃を待つ

尚覓君王一回顧

尚お覓む 君王 一たび回顧すれば

金鞍欲上故遲遲

金鞍 上らんと欲して 故に遅々たり

【語釈】

○楊妃：楊貴妃。○翠華：皇帝の代称。ここでは玄宗皇帝。○長生殿：華清宮にあった宮殿。○貴妃：楊貴妃。○君王：玄宗皇帝。○金鞍：金製の鞍。

★ 題楊妃上馬圖

楊妃 馬に上る図に題す

宋 韓駒

金鞍欲上故徐徐

金鞍 上らんと欲して 故に徐々たり

想見華清被寵初

想い見る 華清 寵を被る初

後日延秋門下路

後日 延秋門下の路

不應有暇作踟躕

応に 踟躕を作す暇 有らざるべし

【語釈】

○楊妃：楊貴妃。○金鞍：金の鞍。○華清：長安の東北、驪山の麓にある宮殿。○被寵初：「春寒賜浴華清池，温泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力，始是新承恩沢時（長恨歌）。○延秋門：長安宮の西門。安史の乱に際し，玄宗はここから蜀に向かつて避難した。○應：「まさに「すべし」と読み、「きつと」であるに違いない。」と言う意味。○踟躕：ためらいしりごみする。

★ 明妃出獵圖

明妃出獵の図

明 登 定

八月天山雪花

八月天山雪花を作す

合圍千騎度龍沙

合圍の千騎 龍沙を渡る

傳呼莫射南飛雁

伝呼す南に飛ぶ雁を射る莫れ

欲寄平安到漢家

平安を寄せ 漢家に到らんと欲す

【語釈】

○明妃：王昭君。○天山：天山山脈。○合圍：取り囲む。○龍沙：白龍堆。天山南路方面の沙漠地帯。○傳呼：声をかけて伝える。

★ 題梅鶴高士圖

梅鶴高士の図に題す

元 陶宗儀

月明孤鶴唳前汀

月明らかにして 孤鶴前汀に唳く

一樹寒梅護石屏

一樹の寒梅 石屏を護る

香篆已消童子倦

香篆已に消え 童子倦む

道人猶對葢珠經

道人猶お対す 葢珠經

【語釈】

○梅鶴高士：林逋。梅を妻、鶴を子として、西湖の孤山に隱棲した。○香篆：篆字を刻んだ器の刻みに香を詰めてくべる香炉。○道人：高德の人。○葢珠經：道教の教典の一つ。

★ 題自畫小像

自らの画小像に題す

明 顧 瑛

儒衣僧帽道人鞋

儒衣 僧帽 道人の鞋

到處青山骨可埋

到處 青山骨を埋むべし

還憶少年豪俠興

還た憶う 少年 豪俠の興

五陵裘馬洛陽街

五陵の裘馬 洛陽の街

【語釈】

○道人：道教の信者。○青山：墓地。○豪俠：豪強任侠の人。○長安の北郊にあった地名。漢の五帝の陵があり、近くには富豪の人が住んでいた。○裘馬：輕裘肥馬。豪華な生活の形容。

★ 避暑圖

避暑圖

元 黄 潛

一丘一壑古遺民

一丘 一壑 古遺民

十里清風不屬人

十里の清風 人に属さず

閑對青山揮白扇

閑に 青山に対し 白扇を揮う

世間何物是紅塵

世間 何物ぞ 是れ紅塵

【語釈】

○遺民：前朝の人民で新朝に仕えない人。○紅塵：車馬の立てる土埃。繁栄の街。

★ 俠客圖

俠客の図

宋 陸游

趙魏胡塵千丈黃
趙魏 胡塵 千丈黃なり
遺民膏血飽豺狼
遺民の膏血 豺狼に飽く
功名不遣斯人了
功名 斯人を遣わして了せず
無奈和戎白面郎
奈ともする無し 戎に和す 白面の郎

【語釈】

○俠客：仁俠。○趙魏：春秋時代の晋の領域だった中原の地。北宋が手放し、既に金の領土になっていた。○胡塵：金の軍馬の立てる塵。○遺民：取り残された宋の民族。○膏血：血とあぶら。○豺狼：やまいぬと狼のような金軍。○斯人：画に描かれた俠客。○戎：金。○白面郎：年少で経験の乏しい者。紹興の和議を結んだ秦檜達。

★ 題蠶婦圖

蚕婦の図に題す

明 趙雙硯

蠶未成絲葉已無
蚕 未だ糸を成さざるに 葉 已に無し
髣雲撩亂粉痕枯
髣雲 撩亂し粉痕枯る
宮中羅綺輕如布
宮中の羅綺 軽きこと布の如し
争得王孫見此圖
争か 王孫 此の図を見るを得んや

【語釈】

○蠶婦：カイコを飼う女性。○羅綺：綺麗な女性の衣服。○○撩亂：まつわりもつれる。王孫：貴族の子弟。

★ 漁父圖

漁父圖

清 僧性休

東西南北任遨遊
萬里長江一葉舟
夢裏不知身是客
醒來大地忽新秋

東西南北遨遊じゆうゆうに任す
万里の長江一葉の舟
夢裏むり知らず 身は是れ客かくなるを
醒め来れば 大地たちま 忽ち新秋

【語釈】

○遨遊…漫遊。○客…旅人。

★ 釣魚圖

釣魚の図

元 貢性之

谿樹蒼茫帶晚煙
谿流逆上似登天
歸來釣得鱸魚美
只博西窓一覺眠

谿樹けいじゆ 蒼茫そうぼうとして 晚煙を帶ぶ
谿流 逆上して 天に登るに似たり
歸り来りて 釣り得たり 鱸魚ろぎよの美
只だ 博はくす 西窓 一覺ねむりの眠

【語釈】

○蒼茫…薄暗いさま。夕暮れの色のさま。○晚煙…夕靄。○鱸魚…ケツギヨ（鰯魚）と呼ばれる淡水魚。○博…手に入れる。

★ 題老嫗騎牛吹笛圖

老嫗ろうろう牛のに騎りて 笛ふえを吹く図ずに題す

明 范氏

玉環賜死馬嵬坡

玉環ぎよくかん 死しを賜たまう 馬嵬坡ばかい

出塞昭君怨更多

塞さいを出でて 昭君しょうきん 怨うらみ 更さらに多おほし

争似阿婆牛背穩

争いかでか似にたる 阿婆あばの牛背ぎゅうはいの穩いん

笛中不吹太平歌

笛中てきちゆう 吹ふかず 太平たいへいの歌か

【語釈】

○玉環：楊貴妃。○馬嵬坡：陝西省興平市にある地名で、唐の楊貴妃の最期の地。○昭君
…王昭君。

★ 背面美人圖

背面美人の図

宋 韓駒

睡起昭陽暗淡粧

睡起すいす 昭陽しょうよう 暗淡あんたんたる 粧よそお

不知緣底背斜陽

知ならず 底なに縁えんり 斜陽しゃように背むくを

若教轉盼一回首

若ごとし 轉盼てんげんして 一ひとたび 首くびを回まわさらしめば

三十六宮無粉光

三十六宮さんじゅうろくきゆう 粉光こなひかり 無なからん

【語釈】

○昭陽：昭陽宮。后妃の住むところ。○轉盼：振り返る。○三十六宮：多くの宮殿。○粉
光：美しい光。

★ 題耿氏所藏艷畫

耿氏所藏の艷面に題す

元 陳旅

五月風生水殿涼

五月 風生じて 水殿涼し

綠楊深處奏鶯簧

綠楊 深き処 鶯簧を奏す

佳人偏愛臨池坐

佳人 偏に愛す 池に臨みて坐すを

欲與荷花鬥晚妝

荷花と 晚妝を 鬥わんと欲す

【語釈】

○耿氏…不祥。○水殿…水に臨んだ殿堂。○鶯簧…黄鶯の鳴き声。○晚妝…夜の装い。

★ 宮女圖

宮女圖

明 高啓

女奴扶醉踏蒼苔

女奴 醉を扶けて 蒼苔を踏み

明月西園侍宴回

明月 西園 宴に侍りて回る

小犬隔花空吠影

小犬 花を隔てて空しく 影に吠ゆ

夜深宮禁有誰來

夜深くして 宮禁 誰 有りてか来る

【語釈】

○女奴…女性の召使い。○醉…酔った宮女。○影…人影。○宮禁…宮城の大奥。

(太宗洪武帝の好色を風刺したとして腰斬の刑に処せられたという逸話のある詩)

(参考文献) 『中国詩人撰集二—10』

★ 仕女春繡圖

仕女春繡の図

明 楊基

風送楊花滿繡床
飛來紫燕亦雙雙
閑情正在停針處
笑嚼殘絨唾碧窓

風は楊花を送り 繡床に満つ
飛び来る紫燕亦た双々
かんじよう 正に在り 針を停むる処
ざんじゆう 笑って 残絨を嚼し 碧窓に唾す

【語釈】

○仕女：美女。○紫燕：燕の一種。越燕ともいう。○繡床：裝飾された華麗な床。○雙雙：…つがいをなすさま。○閑情：…もの静かな心。○殘絨：残っている刺繡糸。

★ 紅綠蕉二仕女圖

紅綠蕉二仕女の図

明 楊基

兩樹紅蕉隔禁扉
曉涼攜伴試羅衣
金鈴小犬迎人吠
應怪秋來出院稀

兩樹の紅蕉 禁扉を隔つ
ばんりよう 曉涼 伴を携えて 羅衣を試む
しんしょう 金鈴 小犬 人を迎えて吠ゆ
まさ 応に 秋来りて 院を出ること 稀なるを 怪しむべし

【語釈】

○紅綠蕉：紅色と緑色の美人蕉。○仕女：美女。○禁扉：宮内の門。○羅衣：軽くて柔らかい糸で織った衣服。○應：「まさにくすべし」と読み「きつとくに違いない」の意。

★折花背立二美人圖

花を折る背立二美人の図

明 徐 貴

綉罷春衫出閣遲

春衫を綉ぬい罷やみて 閣を出でずること遅し

辛夷花下立多時

辛夷花下立しんいかかつこと多時

内園自是無人到

内園 自おのずからは 是れ 人の到たる無し

不省含羞怕見誰

省かえりみず 羞しゆうを含おみて 誰かを見みんことを怕おそるを

【語釈】

○春衫：春の衣。○辛夷花：こぶしの花。○内園：宮廷内の庭園。

★題姮娥奔月圖

姮娥月に奔る図に題す

明 蘭廷瑞

竊藥私奔計已窮

薬を窃ぬすみ 私ひそかに奔はしり 計已に窮す

藁砧應恨洞房空

藁砧こうちん 応まさに恨むべし 洞房くうの空

當時射日弓猶在

当時 日を射いし 弓 猶いお在り

何事無能近月中

何事よぞ 能よく 月中に近よづく無なき

【語釈】

○姮娥：嫦娥ともいう。夫の後羿が西王母からもらい受けた不死の薬を盗んで飲み、月に逃げ、蟾蜍（ヒキガエル）になったと伝えられる（嫦娥奔月）。○藁砧：夫の隠語。后羿のこと。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとくであるにちがいない」。○洞房：新婚の夫婦の寝室。○當時：昔時。○射日：后羿が十箇あった太陽の九つを射落として民を救ったという伝説。

★ 瑤池春宴圖

瑤池春宴の図

元 黄 潛

西飛青雀幾時還

西に飛びし青雀 幾時にか還る

貝闕琳宮縹緲間

貝闕琳宮 縹緲の間

筆底春風殊未老

筆底の春風 殊に未だ老いず

蟠桃積核已如山

蟠桃 積核 已に山の如し

【語釈】

○瑤池：伝説中の崑崙山中の地名。西王母の居所。○青雀：西王母の使者の神鳥。○貝闕：紫の貝殻で作った宮殿で河伯のいるところ。竜宮城の類い。○琳宮：道教の寺。○縹緲：遠くかすかなさま。○蟠桃：三千年に一回開花するという伝説上の桃の木。

★ 仙女醉歸圖

仙女醉歸の図

明 陳景融

碧桃花下宴初還

碧桃花下 宴初めて還る

雲御逍遙擁侍鬢

雲御 逍遙 侍鬢を擁す

兩鬢天風吹不醒

兩鬢 天風吹いて醒めず

肯教清夢落人間

肯えて清夢をして 人間に落とさしむ

【語釈】

○雲御：仙女？○侍鬢：従者？

★ 馬遠放鶴圖

馬遠ばえんの鶴を放つ図

元 吳 鎮

載鶴輕舟湖上歸
鶴を載せ 輕舟 湖上より帰る
重重樓閣鎖煙霏
重々たる 樓閣 煙霏えんぴに鎖さる
仙家正在幽深處
仙家 正に 幽深ゆうしんの処に在り
竹裏雞聲半掩扉
竹裏ちくりの雞聲 半ば扉を掩う

【語釈】

○馬遠…宋の臨安府錢塘の人。山水、樓閣、人物、花鳥画を得意とした。○輕舟…小舟。
○重重…重なり合うさま。○煙霏…霞ともや。○仙家…仙人の住む家。○幽深…もの静かで奥深い。

★ 題一雁圖

一雁の図に題す

明 僧德祥

萬里江湖一葉身
万里の江湖 一葉いちようの身
來時逢雪又逢春
來時 雪に逢い 又 春に逢う
天南地北年年客
天南地北 年々の客かく
只有蘆花似故人
只だ 蘆花の 故人に似たる 有るのみ

【語釈】

○一葉…孤独。一つの小舟。○客…旅人。○故人…昔なじみ。

★棠梨雙鳩

棠梨雙鳩

明 陳 桂

淡月溶溶香未殘
幽禽飛上玉欄干
相呼不失雌雄好
喚起春耕雨滿山

淡月溶々 香未だ残せず
幽禽 飛び上ぐ 玉欄干
相呼びて 失わず 雌雄の好きを
春耕を喚起し 雨山に満つ

【語釈】

○棠梨：からなし。○淡月：おぼろ月。○溶溶：ゆったりしたさま。○殘：損なわれる。
○幽禽：鳴き声が優雅な鳥。○玉欄干：玉で飾った欄干。○春耕：春の耕作。

★題秋鷺圖

秋鷺の図に題す

宋 范成大

昨夜新霜冷釣磯
綠荷消瘦碧蘆肥
一江秋色無人問
盡屬風標雨雪衣

昨夜 新霜 釣磯を冷やす
緑荷は消瘦し 碧蘆は肥ゆ
一江の秋色 人の問う無し
尽く 風標 雨雪の衣に属す

【語釈】

○釣磯：魚を釣るときに腰掛ける岩石。○綠荷：緑色の蓮の葉。○消瘦：やせ衰える。○碧蘆：緑色のアシ。○秋色：秋景色。秋の気配。○風標：外側に現れた風雅なおもむき。

★題雙雀梅花扇

雙雀梅花の扇に題す

宋 范成大

東厨殘食競飢鴉
西舍飽蜂喧晚衙
豈是中庭無滯穗
皎然雙雀坐梅花

東厨の殘食 飢鴉競う
西舍の飽蜂 晚衙に喧し
豈に是れ 中庭 滯穗無からん
皎然たる雙雀 梅花に坐す

【語釈】

○晚衙：長官の夕方の勤務場所。○滯穗：落ち穂。○皎然：明らかさま。

★錢舜舉禾鼠

錢舜舉禾鼠

元 袁桷

七尺長身媿負多
清時空食幾困禾
営営倉鼠纔分寸
不奈詩人総譴訶

七尺の長身 媿負多し
清時 空食す 幾困禾
営々たる倉鼠 纔に分寸
奈ともせず 詩人の総譴訶

【語釈】

○媿負：愧負。羞じること。○清時：太平の世。○空食：空しく職禄を食むこと。○困禾：米倉の米。○営営：激しく動くこと。○倉鼠：米倉の鼠。○分寸：微少なことの喩え。○譴訶：呵ること。

★ 和張規臣水墨梅

張規臣ちやうきしんの水墨梅に和す

宋 陳與義

自讀西湖處士詩

みすか 自ら読む 西湖処士の詩

年年臨水看幽姿

年々 水に臨み 幽姿を見る

晴窗畫出橫斜影

晴窓 画き出だす 横斜の影

絶勝前村夜雪時

絶勝 前村 夜雪の時

【語釈】

○張規臣：不祥。○西湖處士：林逋。○幽姿：幽雅な姿態。○横斜：斜めになっている梅の枝。林逋「山園小梅」。○絶勝：非常に良い眺め。

★ 題梅月圖

梅月図に題す

明 周瑛

孤山處士舊時家

孤山処士 旧時の家

門巷深深一徑斜

門巷 深々として 一径斜なり

惆悵詩魂呼不醒

ちゆうちやう 惆悵す 詩魂 呼べども醒めず

只留明月照梅花

只だ 明月を留め 梅花を照すを

【語釈】

○孤山処士：林逋。○門巷：家門と街巷。○惆悵：嘆き悲しむ。○詩魂：詩人の亡魂。

★ 題梅月圖

梅月図に題す

明 秦旭

孤山山上月明多

孤山山上月明多し

長憶西湖瑪瑙坡

長く憶う 西湖の瑪瑙坡ばとうは

安得扁舟吹短笛

安くんぞ 扁舟を得て 短笛を吹き

梅花香裏一經過

梅花香裏 一たび經過せん

【語釈】

○孤山：浙江省西湖にある山。林逋隱棲の地。○瑪瑙坡：西湖の南岸に位置する堤。蘇軾が愛した場所。○安：「いづくんぞくせん」と読み、「何とかしてくしたいものだ」の意。○扁舟：小舟。

★ 宋徽宗畫半開梅

宋の徽宗の画 半開の梅

明 張迪

上皇朝罷酒初酣

上皇朝 罷みて酒初めて 酣たけなわなり

寫出梅花蕊半含

写し出す 梅花蕊 半なかば含む

惆悵汴宮春去後

惆悵ちゆうちやうす 汴宮べんきやう 春去りて後

一枝流落到江南

一枝流落して 江南に到るを

【語釈】

○徽宗：宋の六代目皇帝。政治的には無能であったが書画の才に優れ、北宋最高の芸術家の一人と言われる。○上皇：徽宗。○朝：朝廷の政治。○惆悵：嘆き悲しむ。○汴宮：汴京（河南省開封市）北宋の首都の宮。○春去後：北宋の滅亡（靖康の変）。

★ 墨菜

墨菜 ぼくさい

元 顧彝舉

朱門盡日多珍味

朱門 尽日 珍味多し

貧士窮年祇采羹

貧士 窮年 祇だ采羹 きゅうねん た さいかん

請語當朝肉食者

請いて語る 当朝 肉食の者

由来此色在蒼生

由来 此の色 蒼生に在りと そうせい

【語釈】

○墨菜：墨絵の野菜。○朱門：貴族の家。貴族。○采羹：野菜のあつもの。○当朝：元王朝。○由来：従来。○蒼生：人民。

★ 畫松

画松

唐 景雲

畫松一似真松樹

画松 一に 真の松樹に似る いつし

且待尋思記得無

且く待ち 尋思 記得するや無や しほ じんし

曾在天台山上見

曾って 天台山上に在りて 見る

石橋南畔第三株

石橋南畔 第三株 せききょうなんぱん だいさんしゆ

【語釈】

○一：真に。○尋思：物事を尋ね極めて考える。○記得：覚える。○天台山：浙江省東部の天台県の北方にある靈山。○石橋：天台山の「石梁飛瀑」と呼ばれる滝の上に架かる自然の石橋。

★ 鄭克剛雙松圖

鄭克剛の双松の図

元 黃鎮成

老幹懸霜紫翠分

老幹 霜を懸け 紫翠分る

一山風雨半空聞

一山の風雨 半空に聞く

携琴欲掃苔根石

琴を携え 掃わんと欲す 苔根石

爲寫秋聲寄白雲

為に 秋声を写し 白雲に寄す

【語釈】

○鄭克剛…鄭克。河南省開封の人。徽宗宣和六年の進士。○半空…空中。○苔根石…苔むした石。○秋聲…秋の気配を感じさせる風や葉の音。

★ 題柯博士墨竹

柯博士の墨竹に題す

元 陳旅

京洛緇塵染素衣

京洛の緇塵 素衣を染む

故園清夢苦相思

故園の清夢 苦に相思う

歸來無限江南意

歸り来りて 限り無し 江南の意

寫作春風暮雨枝

写し作す 春風暮雨の枝

【語釈】

○柯博士…不祥。○墨竹…墨絵の竹。○京洛…帝京。○緇塵…俗世間の汚れた塵。○素衣…白色の衣服。○故園…故郷。○清夢…美しい夢。○江南…長江中下流の南岸地方。

★ 題趙松雪畫竹

趙松雪の画竹に題す

元 林延模

滿湘寫出一枝春

滿湘 写し出す 一枝の春

宋代王孫筆意新

宋代の王孫 筆意 新たなり

見説清風更千畝

説くを見る 清風 更に千畝

結茅還可避胡塵

茅に結び 還た 胡塵を避くべし

【語釈】

○趙松雪：趙孟頫。南宋から元にかけての政治家・文人（書家、画家）。宋の皇族出身であるが、元のフビライ（世祖）に召され、以後の代の皇帝に仕えた。趙孟頫は書道史上最高峰とされる「六如居士帖」を残し、その書風は「趙体」と呼ばれる。○王孫：貴族の子弟。趙孟頫のこと。○筆意：画の雰囲気。○結茅：茅葺きの粗末な家に住む。○胡塵：異民族の塵。

★ 畫竹

画竹

明 徐渭

昨夜窓前風月時

昨夜 窓前 風月の時

數竿疏影響書幃

数竿の疏影 書幃に響く

今朝榻向溪藤上

今朝 榻 溪藤の上に向いて

猶覺秋聲筆底飛

猶お覚ゆ 秋声 筆底に飛ぶを

【語釈】

○數竿：数本の竹。○疏影：疎らな影。○書幃：書斎のとばり。○秋声：秋の気配を感じさせる風や葉などの物音。

★海棠圖

海棠の図

明 楊基

沈香亭北繞欄裁
沈香亭北欄を繞りて裁つ
曾藉花奴羯鼓催
曾て花奴羯鼓催すに藉る
今夜不須銀燭照
今夜須いず銀燭の照すを
待他明月上枝來
待他の明月枝に上りて來る

【語釈】

○沈香亭…長安にあった興慶宮内の宮殿。○花奴…唐の玄宗の時の汝南王李璣。羯鼓を打つのが得意であった。○羯鼓…打楽器の一種。

★剪菊圖

剪菊の図

明 陳顥

西風三逕近秋期
西風 三徑 秋期に近し
閒看山童理菊枝
閑かに山童を見て菊枝を理す
浪藥浮花都剪却
浪藥浮花 都て剪却す
剛留幾朵傲霜姿
剛留 幾朵 霜に傲る姿

【語釈】

○西風…秋風。○三逕…隱者の庭園。○浪藥浮花…尋常の花草。○剪却…剪りとる。却是助字。○剛留…強く留まる。○傲霜…寒霜に屈しない。

★ 月下蒲萄圖

月下蒲萄の図

明 周旋

驪龍飛出水精宮

りりゆう 飛出す 水精宮
すいしょうきゅう

嫋嫋長鬚翠拂風

じょうじょう たる長鬚 翠風を払う
すいふう

亂吐珊瑚千萬顆

らんとう 珊瑚 千万顆
せんまんか

夜深高挂月明中

夜深くして 高く挂く 月明の中
うち

【語釈】

○驪龍：龍の一種。○水精宮：伝説中の竜王の宮殿。○嫋嫋：しなやかで美しいさま。

絶句類選標本 十

絶句類選 卷之二十一 詠物類

★ 暁日

ぎょうじつ
暁日

唐 韓偓

天際霞光入水中

天際の霞光 水中に入る

水中天際一時紅

水中の天際 一時に紅なり

直須日觀三更後

直ちに 日觀 三更の後を須って

首送金鳥上碧空

首めて 金鳥を送りて 碧空に上る

【語釈】

○暁日…朝日。○天際…水平線、地平線。○霞光…朝焼け。○日觀…日觀峰。泰山の峰の一つで、朝日の美しい名所。○三更…真夜中。○金鳥…太陽。

★ 夕陽

せきやう
夕陽

唐 韓偓

花前灑淚臨寒食

花前 涙を灑ぎて 寒食に臨む

醉裏回頭問夕陽

酔裏 頭を回らして 夕陽に問う

不管相思人老盡

管せず 相思の人老尽くして

朝朝容易下西牆

朝々 容易に 西牆を下る

【語釈】

○寒食…冬至から百五日目。この日の前後三日間は火を使わない習慣があった。○朝朝…毎日。

★ 皓月

皓月こうげつ

明 祝允明

玉田金界夜如年

玉田ぎよくでんの金界 夜年の如し

大地人間事幾千

大地じんかん 人間事 幾千

萬籟蕭蕭微不辨

萬籟ばんらい 蕭々しょうしょう 微かすかにして弁ぜず

露繁霜重月盈天

露繁くして霜重く月天に盈みつ

【語釈】

○皓月…明月。○玉田…田園の美称。○金界…仏寺。○年…年々。○人間…人間社会。○萬籟…いろいろな物音。○蕭蕭…物寂しい音の形容。

★ 春月

春月

金 呂中孚

柳塘漠漠暗啼鴉
一鏡晴飛玉有華
好是夜闌人不寐
半庭寒影在梨花

柳塘漠漠暗啼鴉りゅうとう ばくばく ていあ
一鏡晴に飛び玉華有か
好し是れ夜闌人寐いねず
半庭の寒影梨花に在り

【語釈】

○柳塘：柳を植えた堤。○漠漠：広々として果てしないさま。○一鏡：月のこと。○夜闌：夜が尽きようとしているとき。○半庭：庭の半分。

★ 新月応制

新月 応制おうせい

宋 盧多遜

太液池邊看月時
好風吹動萬年枝
誰家玉匣開新鏡
露出清光些子兒

太液池邊看月の時ふとしえきちへん
好風吹き動かす万年の枝
誰が家の玉匣か新鏡を開きぎやくこう
露出せん清光些子兒さしじ

【語釈】

○応制：皇帝の命令で作った詩。○太液池：長安の大明宮にあった池の名。○玉匣：玉で飾った小箱。○些子兒：少しだけ。
(「些子兒」を用いて作れと命ぜられて作った詩)

★ 新月

新月

清 莊素磐

簾捲西風小院門

簾は西風を捲く 小院の門

玉階涼動近黄昏

玉階涼は動き 黄昏に近し

蛾眉一曲横天平

蛾眉 一曲 天平に横わる

疑是嫦娥指爪痕

疑らくは 是れ 嫦娥 指爪の痕かと

【語釈】

○西風：秋風。○小院：小さな庭。○玉階：玉のきざはし。○黄昏：たそがれ時。○蛾眉：眉のような三日月。○一曲：三日月の曲がったさま。○天平：地平線上。○嫦娥：夫の後羿が西王母からもらい受けた不死の薬を盗んで飲み、月に逃げ、蟾蜍（ヒキガエル）なつたと伝えられる（嫦娥奔月）。

★ 八月十四夜

八月十四夜

宋 孫復

銀漢無聲露暗垂

銀漢 声無く 露 暗く垂る

玉蟾初上欲圓時

玉蟾 初めて上り 円ならんと欲する時

清樽素瑟宜先賞

清樽 素瑟 宜しく 先に賞すべし

明夜陰晴不可知

明夜 陰晴 知るべからず

【語釈】

○銀漢：銀河。○玉蟾：月。○清樽：清酒。○宜：「よろしくすべし」と読み「すするのが良い」の意。○素瑟：大琴。○明夜：明日の夜。○陰晴：曇りか晴れか。

★ 十五夜望月

十五夜月を望む

唐 王建

中庭地白樹棲鴉

中庭地白くして樹鴉を棲ましめ

冷露無聲濕桂花

冷露声無く桂花を湿す

今夜月明人盡望

今夜月明人尽く望む

不知秋思在誰家

知らず秋思誰が家にか在る

【語釈】

○望月：月を眺めて楽しむこと。中庭：母屋の正面にある庭。棲：ねぐらにつく。冷露：冷やかな露。桂花：木犀の花。秋思：秋の思いにふけっている人。

(参考文献) 『唐詩選』

★ 中秋月

中秋の月

唐 成彦雄

王母粧成鏡未收

王母粧成りて鏡未だ収めず

倚欄人在水精樓

欄に倚る人は水精樓に在り

笙歌莫占清光盡

笙歌清光を占め尽くす莫かれ

留與溪翁一釣舟

留与せよ溪翁の一釣舟に

【語釈】

○王母：西王母。○水精樓：水晶で飾った楼。○笙歌：吹笙唱歌。○留與：分け与えてやる。

★ 中秋月

中秋の月

宋 蘇軾

暮雲收盡溢清寒

暮雲 收まり尽くして 清寒溢る

銀漢無聲轉玉盤

銀漢 声無く 玉盤 転ず

此生此夜不长好

此の生 此の夜 長えに好からず

明月明年何處看

明月 明年 何れの処にか看ん

【語釈】

○清寒…晴朗な寒気。○銀漢…銀河。○玉盤…月。

(参考文献) 『漢詩大系 17』

★ 中秋月

中秋の月

宋 文同

隔林灑灑生寒浪

林を隔てて 灑々 寒浪生ず

倚漢岩岩數亂峰

漢に倚り 岩々 乱峰を数う

記得舊山曾此夕

記し得たり 旧山 曾て此の夕

碧巖千尺坐高松

碧巖 千尺 高松に坐すを

【語釈】

○灑灑…なみなみと満ちるさま。○漢…銀河。○岩岩…山の高いさま。○記得…はつきりと記憶している。

★ 中秋月

中秋の月

宋 白玉蟾

千崖爽氣已平分
千崖の爽氣 已に平分
万里青天輾玉輪
万里の青天 玉輪を輾す
好向錢塘江上望
好し 錢塘江上に向いて 望まん
相逢都是廣寒人
相逢うは 都て是れ 廣寒の人

【語釈】

○平分…平等に分ける。○玉輪…月。○錢塘江…浙江の下流域。○廣寒…伝説で月にあるとされる広寒宮。

★ 中秋無月

中秋無月

宋 范成大

撲地癡雲欲萬重
地を撲つ痴雲 万重ならんと欲す
家家簾幙護房櫳
家々の簾幙 房櫳を護る
世間第一無情物
世間第一無情の物
誰似中秋雨與風
誰か似たる 中秋の雨と風に

【語釈】

○中秋…旧暦八月十五日。○癡雲…停滞して動かない雲。○簾幙…簾と幕。○房櫳…部屋。

★ 中秋無月

中秋無月

金 敏 之

佳辰無物慰相思
佳辰 物の相思を 慰むる無く
先賞空吟昨夜詩
先ず賞し 空吟す 昨夜の詩
莫怪更深仍坐待
怪しむこと莫かれ 更に深くして 仍ち坐待するを
密雲或有暫開時
密雲 或いは 暫く開く時 有らん

【語釈】

○中秋：旧曆八月十五日。○佳辰：吉日、ここでは旧曆八月十五日。○相思：いろいろな物思い。○坐待：坐って待つ。

★ 春風

春風

元 李孝光

春風隨處作春晴
春風 隨処 春晴を作す
楊柳依依綠未成
楊柳 依々として 緑 未だ成らず
昨夜池塘新雨足
昨夜 池塘 新雨 足り
蛙聲剛亂讀書聲
蛙声 剛乱す 讀書の聲

【語釈】

○依依：細くなよなよしているさま。

★ 秋風

秋風

宋 劉克莊

黄葉蕭蕭忽滿街

黄葉蕭々として 忽ち街に満つ

獨騎瘦馬豫章臺

独り瘦馬に騎る 予章台

莫將宋玉心中事

宋玉を將つて 心中の事を

吹向潘郎鬢上來

吹いて 潘郎鬢上に 向つて来たること莫かれ

【語釈】

○蕭蕭：風や木の葉などの物寂しいさま。○豫章臺：江西省南昌市南昌県。○宋玉：戦国時代末期の楚の文人で、屈原の弟子とも後輩ともいわれる。代表作に「九弁」「高唐賦」「神女賦」などがある。

★ 秋風

秋風

明 王恭

青蘋江上響瀟瀟

青蘋江上 響 瀟々

吹得林間萬葉飄

吹き得て 林間 万葉飄える

何處凄凉最關別

何れの処か 凄凉 最も關別たる

數株殘柳灞陵橋

数株の残柳 灞陵橋

【語釈】

○青蘋：青いうきくさ。○瀟瀟：雨風の寂しい音のさま。○万葉：多くの葉。○凄凉：ものさびしい。いたましい。○殘柳：昔に植えられた柳の中でわずかに残っている物。○灞陵橋：長安から東に向かつて流れる灞水に架かっており、唐代に建設されたもの。

★秋風

秋風

清 若 華

滿耳蕭騷夢不成

滿耳まんじの蕭騷しょうそう 夢 成らず

殘雲涼月夜悽清

殘雲 涼月 夜に悽清せいせい

等閑吹落長林葉

等閑とうかんに吹き落とす 長林の葉

雜入千家擣練聲

雜に入る 千家 練れんを擣つく声

【語釈】

○蕭騷…風に吹かれる樹木の音の形容。○涼月…秋月。○悽清…もの悲しく寂しいさま。
○等閑…なんとはなしに。○練…ねりぎぬ。

★風止

風止む

宋 范成大

收盡狂飊捲盡雲

狂飊きやうひやうを收尽しゆうじんして 尽雲じんうんを捲く

一竿晴日曉光新

一竿いつかんの晴日 曉光新たなり

柳魂花魄都無恙

柳魂りゅうこん 花魄かはく 都すべて恙つがな無し

依舊商量作好春

旧よに依る商量 好春なを作す

【語釈】

○狂飊…非常に強い暴風。○一竿…竿ひとつくらの高さ。○柳魂…柳の魂。○花魄…花の魂。○依舊…もとのままの。○商量…考えはかること。

★雲

雲

唐 來鵬

千形萬象竟還空
映水藏山片復重
無限早苗枯欲盡
悠悠閑處作奇峰

千形 万象 竟ついにに空くうに還る
水に映じ 山を蔵し 片復た重ちゆう
無限の早苗かんびよう 枯れて尽きんと欲す
悠悠ゆうゆうとして 閑かなる処 奇峰を作す

【語釈】

○千形萬象…宇宙間一切の事物、景象。○早苗…干ばつ中の苗。○悠悠…他と関わりなく
ゆったりしたさま。

★雲

雲

唐 郭震

聚散虚空去復還
野人閑處倚筇看
不知身是無根物
蔽月遮星作萬端

聚散しゆさん 虚空きよくう 去りて復た還る
野人 閑處かんじよ 筇に倚りて看る
知らず 身は是れ 無根の物
月を蔽い 星を遮り 万端なを作す

【語釈】

○聚散…集まり散じること。○虚空…空中。○野人…郊外に住んで官職に就かない人。○
閑處…家で閑かに暮らすこと。○無根…根がなくて行方が定まらないもの。○萬端…携帯
がさまざまで定まらないさま。

★ 曉雲次子端韻

曉雲 子端の韻に次す

金 党懷英

灤溪經雨浪生花

灤溪 雨を経て浪花を生ず

曉碧翻光漾曉霞

曉碧 光を翻えし 曉霞 漾う

川上風煙無定態

川上の風煙 定態無く

盡供新意與詩家

尽く 新意を供して 詩家に与う

【語釈】

王庭筠。金代の文人。遼陽府蓋州熊岳県の人。詩文書画に通じ、書法は米芾に学んで金代第一と称される。また山水墨竹をよくした。○次：次韻して作った詩。○灤溪：溪の名。不祥。○曉碧：曉の緑色。○曉霞：朝焼け。○風煙：風と靄。○定態：定まった姿。

★ 孤雲

孤雲

唐 張喬

舒卷因風何所之

舒卷 風に因りて何れの所か之なる

碧天孤影勢遲遲

碧天の孤影 勢遅々たり

莫言長は無心物

言う莫かれ 長きは是れ無心の物と

還有隨龍作雨時

還って 竜に随って 雨を作す時 有り

【語釈】

○舒卷：展開したり巻いたりすること。

★夏雲

夏雲

宋 余靖

如峯如火復如綿
飛過微陰落檻前
大地生靈枯欲盡
不成霖雨漫遮天

峯の如く火の如く復た綿の如し
飛び過ぐ微陰 檻前に落つ
大地の生靈 枯れて尽きんと欲す
霖雨と成らず 漫に天を遮る

【語釈】

○微陰…稀薄な雲の影。○檻前…欄干の前。○生靈…生命。○霖雨…恵みの長雨。

★晚霞

晚霞

宋 朱熹

日落西南第幾峰
斷霞千里抹殘紅
上方傑閣憑欄處
欲盡餘暉怯晚風

日は落つ 西南 第幾峰
断霞 千里 残紅 抹す
上方の傑閣 欄に憑る 処
尽きんと欲する 余暉 晚風に怯ゆ

【語釈】

○第幾峰…多くの峰々。○斷霞…切れ切れの霞。○残紅…餘暉、夕焼け。○上方…寺院。

★ 曉霧

曉霧

宋 楊萬里

不知香霧濕人鬚
日照鬚端細有珠
政是春山眉樣翠
被渠淡粉作糊塗

知らず香霧の人鬚を湿すを
日は鬚端を照らし細く珠有り
政に是れ春山眉樣の翠
渠に淡粉せられて糊塗と作る

【語釈】

○香霧：香りを含んだ霧。○眉樣：画眉のようなさま。○淡粉：淡く分断される。○糊塗
…模糊たるありさま。

★ 水村霧

水村の霧

宋 白玉蟾

淡處還濃綠處青
江風吹作雨毛腥
起從水面縈層嶂
恍似簾中見畫屏

淡処 還つて濃く 綠処は青なり
江風 吹いて 雨毛 腥と作す
水面に從つて起り 層嶂を縈る
恍として似たり 簾中 画屏を見るに

【語釈】

○雨毛：細雨。○縈層：層状に重なりあう山峰。○恍：ぼんやりしてはつきりしない。○
畫屏：画が書かれた屏風。

★ 雨

雨

唐 杜牧

連雲接塞添迢遞

雲に連なり 塞に接して 迢遞を添え

灑幕侵燈送寂寥

幕に灑ぎ 灯を侵して 寂寥を送る

一夜不眠孤客耳

一夜眠らず 孤客の耳

主人窗外有芭蕉

主人の窓外に 芭蕉有り

【語釈】

○迢遞：遠く遙かなさま。○寂寥：ひっそりとして寂しいさま。○孤客：独り旅の人。○主人：宿を貸してくれた人。

(参考文献) 『新釈漢文大系 詩人編 9』

★ 春雨

春雨

宋 楊萬里

却是春殘景更佳

却つて是れ 春殘 景 更に佳し

詩人須記許生涯

詩人 須く記すべし 許の生涯

平田漲綠村村麥

平田 緑を漲らす 村々の麦

嫩水浮紅岸岸花

嫩水 紅を浮かぶ 岸々の花

【語釈】

○春殘：春が将に尽きようとしているとき。○嫩水：春の水。

★ 春雨

春雨

宋 徐璣

柳着輕黃欲染衣

柳は輕黃けいおうを着し衣を染めんと欲す

汀沙漠漠草菲菲

汀沙ていさ漠々ばくばく草ひひ菲菲

曉風吹斷寒煙碧

曉風すいだん吹斷して寒煙碧なり

無數鴛鴦溪上飛

無數えんおうの鴛鴦溪上に飛ぶ

【語釈】

○輕黃…淡黄。柳の芽。○汀沙…渚の砂。○漠漠…平らに連なっているさま。○菲菲…草木の茂るさま。○吹斷…吹きちぎる。○寒煙…寒冷な煙霧。

★ 春雨

春雨

清 湯闊祖

一夜聲喧客夢搖

一夜声かまひす喧しくして客夢かくむ揺ぐ

春風送雨響瀟瀟

春風雨を送りて響しょうしょう瀟々たり

不知新水添多少

知らず新水添うこと多少なるを

漁艇都撐進板橋

漁艇すべ都て撐ささえ板橋はんきょうに進む

【語釈】

○客夢…旅中の夢。○瀟瀟…風雨の音の物寂しいさま。○多少…どのくらいか。

★ 長安春雨

長安春雨

唐 羅 鄴

兼風颯颯灑皇州
風を兼ねて 颯々 皇州に灑ぐ
能滯輕寒阻勝遊
能く輕寒を滯め 勝遊を阻む
半夜五侯池館裏
半夜 五侯 池館の裏
美人驚起爲花愁
美人驚起し 花の為に愁う

【語釈】

○颯颯…雨の降るさま。○皇州…帝都長安。○輕寒…微寒。○勝遊…遊覽しようとする決意。○半夜…真夜中。○五侯…公侯伯子男の貴族。

★ 雷雨

雷雨

宋 劉克莊

海激天飜電雹噴
海は激し 天は飜えり 電雹 噴る
蒼松十丈劈爲薪
蒼松 十丈 劈けて薪と爲る
須臾龍卷他山去
須臾にして 竜卷 他山に去り
誤殺田頭望雨人
誤って殺す 田頭 雨を望む人

【語釈】

○電雹…雷に伴うひょう。○須臾…またたくまに。○田頭…他のほとり。

★ 甘雨應祈

甘雨祈に応ず

宋 范成大

晚稻成苞未肯肥
鵝鳩啼曉雨來時
黃紬被冷初眠覺
先向芭蕉葉上知

晚稻苞ほうを成し未だ肯えて肥えず
鵝鳩ぼつきゅう 曉あけに啼ないて 雨來る時
黃紬こうしゅう 被冷ひやにして 初はじめてめて 眠覺ねがめ
先まづ 芭蕉ばしやうに向むかいて 葉上はの上に知る

【語釈】

○晚稻：晩熟の稻。○鵝鳩：鳥の一種。雨の前に啼くと言われる。○黄紬：黄色い絹織物。

★ 甘雨應祈

甘雨祈に応ず

宋 范成大

終日雖蒙霰霑
浥塵終恨太廉纖
今朝健起巡檐看
恰似廬山看水簾

終日 霰せんの沾つかいを蒙かぶると雖も
塵ちりを浥うるす終恨 太ただ廉纖れんせん
今朝 健起し 檐えんを巡めぐりて看れば
恰ちやも似たり 廬山ろせん 水簾すいれんを看るに

【語釈】

○霰霑：小雨。○廉纖：微細。○廬山：江西省九江市にある名山。○水簾：瀑布。

★ 初秋暮雨

初秋暮雨

宋 楊萬里

禾稔輕黃尚淺青
村春已報隔林聲
忽驚暮色翻成曉
仰見雙虹雨外明

禾稔かすい輕黃けいおうにして尚お淺青
村春 已に報あやず 林を隔へつる声
忽ち驚く暮色 翻りて曉と成るを
仰あやぎ見れば 双虹そうこう 雨外に明らかなり

【語釈】

○禾稔…稻穂。○輕黃…淡黃。○村春…村中で春米を搗く音。○暮色…夕方の薄暗い空の色。

★ 秋雨

秋雨

宋 楊萬里

濕侵團扇不能輕
冷逼孤燈分外明
蕉葉半黃荷葉碧
兩家秋雨一家聲

湿りて團扇だんせんを侵し 軽くする能わず
冷は孤灯に逼せまり 分外に明かなり
蕉葉しょうようは半ば黄ばみ 荷葉かようは碧みどり
両家の秋雨 一家の声

【語釈】

○團扇…うちわ。○分外…特別。○蕉葉…芭蕉の葉。○荷葉…蓮の葉。

★ 雨聲

雨聲

唐 元 積

風吹竹葉休還動
風竹葉を吹きて休還た動
雨點荷心暗復明
雨荷心に点じて暗復た明
曾向西江船上宿
曾つて西江に向いて船上に宿す
慣聞寒夜滴篷聲
聞くに慣れたり寒夜篷に滴たる声

【語釈】

○西江…不確定。○篷…船の窓。

★ 聽雨

雨を聴く

唐 司空圖

半夜思家睡裏愁
半夜家を思い睡裏に愁う
雨聲落落屋簷頭
雨声落々屋簷の頭
照泥星出依前黑
泥を照らす星出でて前に依りて黒し
淹爛庭花不肯休
爛庭の花を淹い肯えて休まず

【語釈】

○半夜…真夜中。○睡裏…眠っているうち。○落落…まばらなさま。物寂しいさま。○屋簷…家ののき。

★ 聽雨

聽雨

清

莊廷延

梅花風裏雨霏霏

梅花風裏雨霏々たり

人臥空堂靜掩扉

人は空堂に卧し静かに扉を掩う

一夜滄浪亭畔水

一夜滄浪亭畔の水

料應陡没釣魚磯

料るに応に陡ち釣魚の磯を没すべし

【語釈】

○霏霏：雨のしきりに降るさま。○空堂：がらんとした物寂しい堂。○滄浪亭：江蘇省蘇州市にある名園。○應：「まさにすべし」と読み「きつとであるに違いない」の意。

★ 雨意

雨意

宋

鄭清之

雲頭點地黑如黦

雲頭地に点じ黒きこと黦の如し

雨脚粘天未肯飛

雨脚天に粘じ未だ肯て飛ばず

待得風師來判斷

待ち得たり風師来りて判断し

一齊併作晚涼歸

一齊に併せて晚涼と作りて帰るを

【語釈】

○雲頭：雲。○黦：黒檀。○雨脚：雨の雫が長く糸のように続くさま。○肯：「あえて」とよみ「すすんでくする」の意。○風師：伝説中の風神。

★雪

雪

金 呂中孚

隨風拂拂玉花飄

風に随つて 払々 玉花 飄える

入夜寒窗更寂寥

夜に入つて 寒窓 更に寂寥

爐火已殘燈未燼

炉火 已に残し 灯 未だ燼せず

一簾疎竹白蕭蕭

一簾の疎竹 白くして 蕭々

【語釈】

○拂拂…散布するさま。○玉花…白い花。ここでは雪。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま。○殘…損なわれる。○燼…燃え尽きる。○一簾…ひとかたまり。○蕭蕭…物寂しいさま。

★春雪

春雪

唐 韓愈

新年都未有芳華

新年 都て 未だ 芳華有らず

二月初驚見草芽

二月初めて驚き 草芽を見る

白雪却嫌春色晚

白雪 却つて嫌う 春色の晩

故穿庭樹作飛花

故に 庭樹を穿ちて 飛花と作る

【語釈】

○芳華…香花。○春色…春景色。

★霽雪

霽雪

唐 戎昱

風卷寒雲暮雪晴
 風は寒雲を巻いて暮雪晴れ

江煙洗盡柳條輕
 江煙洗い尽くして柳條輕し

簷前數片無人掃
 簷前えんぜん數片人の掃はらう無く

又得書窗一夜明
 又た得たり書窓一夜の明めい

【語釈】

○江煙：水の上に立つ霧。○柳条：柳の枝。○簷前：軒の前。

★雪詩

雪詩

宋 蘇軾

石泉凍合竹無風
 石泉は凍合とうごうし竹に風無く

夜色沈沈萬境空
 夜色ちんちん沈々万境ばんきやう空し

試向靜中閑側耳
 試みに靜中に向かつて閑かに耳を側そばだつれば

隔窗撩亂撲飛蟲
 窓を隔りようらんてて撩亂飛虫を撲うつ

【語釈】

○凍合：凍り付く。○夜色：夜の気配。○沈沈：夜が更けていくさま。○萬境：全ての空間。○撩亂：乱れあう。

★夜雪

夜雪

清 張實居

斗室香添小篆煙

斗室香は添う 小篆煙しょうてんえん

一燈靜對似枯禪

一燈靜に對し 枯禪に似たり

忽驚夜半寒侵骨

忽ち驚く 夜半寒 骨を侵すに

流水無聲山皓然

流水は声無く 山は皓然こうぜんたり

【語釈】

○斗室…狭い部屋。○小篆煙…篆字のように曲がって細くたつ香煙。○枯禪…座禪。○皓然…色の白いさま。

★雪意

雪意

宋 朱熹

向晚浮雲四面平

晩に向つて 浮雲 四面平かなり

北風號怒達天明

北風 号怒し 天明に達す

寒窗一夜清無睡

寒窓 一夜 清くして 睡る無し

擬聽杉篁葉上聲

杉篁さんこう 葉上ようじょうの声を聴くと擬す

【語釈】

○北風…冬風。○號怒…怒号。○天明…夜明け。○杉篁…杉と竹。

★ 雪中偶題

雪中偶題

唐 鄭谷

亂飄僧舍茶煙濕
密灑歌樓酒力微
江上晚來堪畫處
漁翁披得一蓑歸

乱れて僧舎に飄り茶煙湿り
密に歌樓に灑ぎて酒力微なり
江上晚來画くに堪える処
漁翁一蓑を披得して歸る

【語釈】

○歌樓：歌舞を行う楼。○晚來：夕方になってから。○披得：着得て。

★ 秋山

秋山

唐 張籍

秋山無雲復無風
溪頭看月出深松
草堂不閉石牀靜
葉間墜露聲重重

秋山雲無く復た風無く
溪頭月を見て深松を出づ
草堂閉じず石床静なり
葉間の墜露声重々

【語釈】

○溪頭：溪のほとり。○深松：深い松林。○草堂：草葺きの家。○重重：露が落ちる音のさま。はらはら。

★ 春水生

春水生

唐 杜甫

二月六夜春水生

二月六夜春水生

門前小灘渾欲平

門前の小灘渾て平ならんと欲す

鷗鷺鶻鶻莫漫喜

鷗鷺鶻鶻漫りに喜ぶこと莫れ

吾與汝曹俱眼明

吾と汝曹と俱に眼明かなり

【語釈】

○春水…春の雪溶け水。○小灘…小さな早瀬。○鷗鷺…ウ。鶻鶻…オシドリ。○汝曹…おまえたち。

★ 觀潮

觀潮

宋 陳師道

潮頭初出海門山

潮頭初めて出ず海門の山

千里平沙轉面間

千里の平沙 転面の間

猶有江神怜北客

猶お江神の北客を怜む有り

欲將奇觀破衰顔

將に奇觀衰顔を破らんと欲す

【語釈】

○觀潮…錢塘江の海嘯を見ること。○潮頭…波頭。○海門…海口。○平沙…平らかな砂浜。○轉面…非常に短時間。○江神…伝説中の江水の神。○將…「まさに〜せんとす」とよみ、「いまにも〜しようとする」の意。○北客…北からきた旅人。

★泉

泉

唐 崔塗

遠辭巖竇瀉潺湲

遠く巖竇がんとうを辞し 瀉そそぐこと 潺湲せんかん

靜拂雲根別故山

静かに雲根を払い 故山に別る

可惜寒聲留不得

惜しむべし 寒声 留む得ざるを

旋添波浪向人間

旋めぐりて 波浪を添え 人間じんかんに向う

【語釈】

○巖竇…岩穴。○潺湲…浅い水の流れるさま。さらさら。○雲根…山中の雲の生じるところ。○故山…故郷の山。○人間…人間社会。

★野池

野池

唐 王建

野池水滿連秋隄

野池 水満ちて 秋隄しゅうていに連なる

菱花結實蒲葉齊

菱花りょうか 実を結びて 蒲葉ほよう齊う

川口雨晴風復止

川口 雨晴れて 風復またた止み

蜻蜓上下魚東西

蜻蜓せいてい 上下し 魚は東西

【語釈】

○蜻蜓…トンボ。

★ 盆池

盆池

唐 韓愈

老翁真個似童兒

老翁 真個 童兒に似る

汲水埋盆作小池

水を汲んで 盆に埋め 小池を作る

一夜青蛙鳴到曉

一夜 青蛙 鳴いて 曉に到る

恰如方口釣魚時

恰も 方口に 魚を釣る時の如し

【語釈】

○盆池：水を引いて作った小池。○真個：確實に。○方口：四角い口。

★ 盆池

盆池

唐 韓愈

莫道盆池作不成

道う莫かれ 盆池 作ること成らずと

藕稍初種已齊生

藕稍 初めて種え 已に齊生

從今有雨君須記

今從り 雨有り 君 須く記すべし

來聽蕭蕭打葉聲

來るに聴く 蕭々 葉を打つ声

【語釈】

○盆池：水を引いて作った小池。○藕稍：蓮。○齊生：整って生長する。○須…：「すべからくすべし」と読み「くするのがよい」の意。○蕭蕭：物寂しい音の形容。

★ 盆池

盆池

唐 韓愈

池光天影共青青

池光 天影 共に青々

拍岸纔添水數餅

岸を拍ち 纔に添う 水數餅

且待夜深乘月去

且く夜深きを待ちて 月に乗じて去り

試看涵泳幾多星

試に看よ 涵泳す 幾多の星

【語釈】

○盆池：水を引いて作った小池。○数餅：つるべ数杯分。○乘月：月明かりを利用して。

○涵泳：遊泳。

★ 盆池

盆池

宋 陳與義

三尺清池窗外開

三尺の清池 窓外に開く

芡菰葉底戲魚回

芡菰葉底 魚 戯れて回る

雨聲轉入浙江去

雨声 転じて 浙江に入りて去り

雲影還從震澤來

雲影 還た 震沢に従りて来る

【語釈】

○盆池：水を引いて作った小池。○芡菰：バラ科の低木の総称。○浙江：錢塘江の下流域帯。○震澤：江蘇省太湖。

★ 盆池

盆池

金 施宜生

盆池 激灑 蔭芭蕉

盆池 激灑れんえんとして 芭蕉を蔭う

點水 圓荷 未出條

水に点ずる 円荷 未だ条を出さず

分得 江湖 好風景

分ち得たり 江湖の好風景

斷雲 飛去 晚蕭蕭

断雲 飛び去り 晚蕭々しょうしょう

【語釈】○盆池：水を引いて作った小池。○激灑：水が浪立ち美しいさま。○円荷：蓮の葉。○江湖：川と湖。○蕭蕭：物寂しいさま。○芭蕉：蓮の

★ 小池

小池

宋 楊萬里

泉眼 無聲 澗細流

泉眼 声無く 細流せうせう流る

樹陰 照水 愛晴柔

樹陰 水を照し 晴柔せいじゆうを愛す

小荷 纔露 尖尖角

小荷 纔かに露す 尖々せんせんたる角つの

早有 蜻蜓 立上頭

早に 蜻蜓せいていの 上頭じょうとうに立つ有り

【語釈】

○泉眼：泉の湧き出る孔。○小荷：若い蓮。○尖尖：尖ったさま。○蜻蜓：トンボ。

★ 題韋家泉池

韋家の泉池に題す

唐 白居易

泉落青山出白雲
泉 青山より落ちて 白雲出ず
縈村繞郭幾家分
村を縈り 郭を繞り 幾家にか分る
自從引作池中水
引いて 池中の水と作して 自從りは
深淺方圓一任君
深淺 方圓 一に君に任す

【語釈】

○自從…としてより。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★ 和茅山高拾遺山泉

茅山の高拾遺の山泉に和す

唐 儲嗣宗

香味清機仙府回
香味 清機 仙府より回る
縈紆亂石便流盃
亂石を縈紆して 盃を流すに便なり
春風莫泛桃花去
春風 桃花を泛べて 去る莫かれ
恐引漁人入洞來
恐らくは 漁人を引いて 洞に入りて來らん

【語釈】

○茅山：江蘇省鎮江市茅山。○高拾遺：不祥。○香味：香氣。○清機：清淨な心機。○仙府：仙人の住むところ。道教の寺。○縈紆：曲がり繞る。○便流盃：曲水の宴のような状態に適する。○結句：桃花源記。

★ 漁村

漁村

明 王汝玉

汀葦蒼蒼白露凝
汀葦蒼々白露凝る
一灘寒月未收罾
一灘の寒月 未だ罾に収まらず
西風吹醒江南夢
西風 吹き醒ます 江南の夢
四壁蛩聲半夜燈
四壁の蛩声 半夜の灯

【語釈】

○蒼蒼：盛んに茂るさま。○罾：四つ手あみ。○西風：秋風。○江南：長江下流の南岸地方。○蛩聲：コオロギの声。

★ 漁莊

漁莊

元 李瓊

織織新月上簾鉤
織々たる新月 簾鉤に上る
楓葉蘆花隔水秋
楓葉 蘆花 水を隔つる秋
一曲清歌來送酒
一曲の清歌 来りて酒を送る
雙鬟小妓木蘭舟
双鬟の小妓 木蘭の舟

【語釈】

○織織：微細なさま。○新月：三日月。○簾鉤：簾をまいて掛ける鉤。○雙鬟：両側に束ねた髪。○小妓：若い妓女。

★ 溪聲

溪聲

清 趙 愈

結廬何日住深山

廬を結んで 何日深山に住す

竹月松風相對閑

竹月松風 相對して閑なり

卻笑溪聲忙底事

却って笑う 溪聲 忙きこと 底事ぞ

奔流偏欲到人間

奔流 偏えに 人間に到らんと欲す

【語釈】

○人間：俗世間。

★ 老将

老将

清 黄宗臣

百戰曾騎汗血騮

百戰 曾って騎す 汗血の騮

專征萬里度龍沙

專征 万里 竜沙を度る

玉關生入頭如雪

玉関 生きて入る 頭 雪の如し

風雨悲歌劇孟家

風雨 悲歌 劇孟が家

【語釈】

○汗血：血のような汗を出す駿馬。○騮：口先が黄色い黒色の馬。○龍沙：白龍堆。新疆ウイグル自治区のロブノール近くの砂漠。○玉關：玉門関。○劇孟：西漢の遊俠。政治、軍事に影響力が大きかったが、財産を残さなかった。

★ 羽林騎

羽林騎うりんぎ

唐 韓 翃

駿馬牽來御柳中

駿馬牽ひき來る 御柳ぎよりゅうの中うち

鳴鞭欲向渭橋東

鞭を鳴らし 向わんと欲す 渭橋いきょうの東

紅蹄亂蹋春城雪

紅蹄こうてい 乱蹋らんとうす 春城の雪

花領驕嘶上苑風

花領かこう 驕嘶きょうせい 上苑じょうえんの風

【語釈】

○羽林騎：近衛兵の馬。○御柳：宮城の柳。○渭橋：長安付近の渭水にかかっていた橋。
○亂蹋：乱れ踏みつける。○花領：衣服の首元に花を飾るために開けた部分。○驕嘶：驕
つたいなき。○上苑：皇帝の庭園。

★ 獵騎

獵騎りょうぎ

唐 杜 牧

已落雙鷗血尚新

已に落つ 雙鷗そうしゅう 血 尚お新たなり

鳴鞭走馬又翻身

鞭を鳴らし 馬を走らせ 又た身を翻えす

憑君莫射南來鴈

君たのに憑たのむ 射ること莫かれ 南來みなりの鴈かり

恐有家書寄遠人

恐らくは 家書の遠人に寄する有らん

【語釈】

○獵騎：獵をする馬に乗った人。○雙鷗：つがいの鷗。○家書：家族からの手紙。

(参考文献)

『杜樊川絶句詳解』

★ 漁父

漁父

唐

陸龜蒙

雨後沙虛古岸崩
魚梁移入亂雲層
歸時月墮汀洲暗
認得妻兒結網燈

雨後沙虛むなしくして古岸崩る
魚梁ぎよりょう移りて乱雲の層に入る
歸時月墮おちて汀洲ていしゅう暗し
認め得たり妻兒網を結ぶ灯

【語釈】

○魚梁…魚を捕るやな。○汀洲…中洲。

★ 漁父

漁父

宋

游次公

竹裏茅茨竹外溪
粼粼白石護漁磯
想應日來垂釣
石上蓑衣不帶歸

竹裏ちくりの茅茨ぼうし竹外の溪
粼りんりん々たる白石りょうき漁磯を護る
想うに応まさに日々来きたりて釣ちようを垂るるべし
石上の蓑衣帯びて帰らず

【語釈】

○茅茨…草茅葺きの粗末な家。○粼粼…水石の鮮鋭なさま。○釣…釣り糸。○蓑衣…みの。

★ 漁父

漁父

明 黄 准

撤網移舟碧浪中
網を撤し 舟を移す 碧浪の中
一蓑一笠任西風
一蓑一笠 西風に任す
生年自得煙波與
生年 自ら得たり 煙波の与
醉卧蘆花月滿舡
酔いて 蘆花に卧して 月舡に満つ

【語釈】

○西風…秋風。○煙波…水上に立つ靄。○與…仲間。

★ 漁父詞

漁父の詞

宋 方 岳

沽酒歸來雪滿船
酒を沽って 帰り来れば 雪船に満つ
一蓑撐傍斷磯邊
一蓑の撐傍 断磯の辺
誰家庭院無梅看
誰が家の庭院か 梅の看無く
不似江村欲暮天
似ず 江村 暮んと欲する天に

【語釈】

○斷磯…水辺に吐出した石の堆。○江村…江畔の村。

★ 漁翁

漁翁

唐

柳宗元

漁翁夜傍西巖宿
曉汲清湘燃楚竹
煙銷日出不見人
欸乃一聲山水綠

漁翁 夜 西巖に傍いて宿し
暁に清湘を汲んで 楚竹を燃やす
煙 銷え 日 出て 人を見ず
欸乃 一声 山水緑なり

【語釈】

○清湘：清らかな湘水。○楚竹：楚の地方の竹。○欸乃：舟歌。
（蘇軾の評に従って、六句の古詩の後二句を切りとった物。）
（参考文献） 『唐詩三百首』 『漢詩鑑賞辞典』

★ 賦湖中漁翁

湖中の漁翁を賦す

宋

蜀

僧

籃裏無魚欠酒錢
酒家門外繫漁船
幾回欲把蓑衣當
又恐明朝是雨天

籃裏 魚無く 酒錢を欠く
酒家の門外 漁船を繫ぐ
幾回か 蓑衣を把り当らんと欲す
又た恐る 明朝 是れ 雨天なるを

【語釈】

○籃裏：かごの中。○蓑衣：みの。

★ 漁翁

漁翁

元 周 權

轉權收緝日未西

權を転じ 緝を収め 日未だ西せず

短篷斜閣斷沙低

短篷 斜に閣め 断沙低し

賣魚買酒歸來晚

魚を売り 酒を買い 帰り来る晚

風颭蘆花雪滿溪

風は蘆花を颭し 雪は溪に満つ

【語釈】

○緝：釣り糸。○短篷：小舟。

★ 漁翁

漁翁

清

孔 毓 璘

青蓑帶雨下長川

青蓑 雨を帯び 長川を下る

網得金鱗換酒錢

金鱗を網得て 酒錢に換う

醉卧蘆花人不見

酔いて 蘆花に卧し 人見えず

鷓鴣飛上打魚船

鷓鴣 飛び上がり 魚船を打つ

【語釈】

○青蓑：青い蓑。○網得：網で捕る。○金鱗：魚の美称。○鷓鴣：鶉。

★ 淮上漁者

淮上の漁者

唐 鄭谷

白頭波上白頭翁
白頭の波上 白頭の翁
家逐船移浦浦風
家は 船を逐おいて移る 浦々の風
一尺鱸魚新釣得
一尺の鱸魚ろぎょ 新たに釣り得て
兒孫吹火荻花中
兒孫じそん 火を吹く 荻花てきかの中うち

【語釈】

○淮上…淮河（長江・黄河に次ぐ第三の大河）のほとり。○白頭…白い波頭。○鱸魚…ハゼに似た淡水魚。

★ 秋江釣者

秋江しゅうかうの釣者ちようじや

明 潘徳元

江湖最樂是漁翁
江湖 最も楽しむは 是れ漁翁
何地無天著釣篷
何れの地か 天の釣篷ちようぼうに著く無し
見慣白鷗渾不避
見慣れたる白鷗はくおう 渾すべて避けず
一絲晴颺蓼花風
一糸せいよう 晴颺りようす 蓼花りようかの風

【語釈】

○江湖…江と湖。○釣篷…釣魚の舟。○転句…列子「黄帝編」の故事。○晴颺…晴れた空に昇る。○蓼花…たでの花。

★牧童

牧童

唐 盧肇

誰人得似牧童心
牛背橫眠秋興深
時復往來吹一曲
何愁南北不知音

誰れ人か 牧童の心に 似たるを得ん
牛背 横わりて眠り 秋興深し
時に 復た 往來し 吹くこと一曲
何ぞ愁う 南北音を知らざるを

【語釈】

○秋興…秋のおもむき。

★牧童

牧童

宋 黄庭堅

騎牛遠遠過前村
吹笛風斜隔壠間
多少長安名利客
機關用盡不知君

牛に騎りて 遠々 前村を過ぐ
吹笛 風斜めに 壠を隔てて 聞く
多少 長安 名利の客
機關 用い尽くして 君を知らず

【語釈】

○名利…名声と利益。○機關…心中の計略。

★牧童

牧童

宋逸名

草鋪横野六七里
草は横野に鋪す六七里
笛弄晚風三四聲
笛は晚風を弄す三四声
歸來飽飯黃昏後
歸り来りて飯に飽く黃昏の後
不脫蓑衣臥月明
蓑衣を脱せず月明に臥す

【語釈】

○鋪…広げる。○黃昏…たそがれ。○蓑衣…みの。

★牧童

牧童

清薛龍光

藉草眠莎任自由
草を藉き莎に眠り自由に任す
煙蓑雨笠不關愁
煙蓑雨笠愁に關せず
日斜横笛穿林去
日斜めにして横笛林を穿ちて去る
倒跨鳥韃過渡頭
倒に鳥韃に跨がりて渡頭を過ぐ

【語釈】

○莎…はまなすげ。○煙蓑…みの。

★ 牧兒

牧兒

清 駱文盛

東風吹雨過前溪
東風雨を吹いて前溪を過ぐ
草長長原小犢肥
草長じて長原小犢肥ゆ
短笛數聲歸去晚
短笛數声 歸り去る晚
半山明月照蓑衣
半山の明月 蓑衣を照らす

【語釈】

○東風：春風。○小犢：子牛。○蓑衣：みの。

★ 送碁客

碁客を送る

唐 陸龜蒙

滿目山川奕似碁
滿目の山川 奕た碁に似たり
況當秋雁正斜飛
況んや 秋雁の 正に斜めに飛するに当るをや
金門若召羊玄保
金門 若し 羊玄保を召せば
賭取江東太守歸
江東の太守を 賭取して帰らん

【語釈】

○碁客：碁を打ちに来た客。○滿目：見渡す限り。○金門：富貴の人。皇帝。○羊玄保：南朝宋の官僚。困碁を得意とし、文帝と太守の任を賭けて勝利し、宣城郡太守に任じられた。○江東太守：宣城郡（江蘇省揚州市）の太守。○賭取：賭けに勝って取る。

★村女

村女

宋 方回

青荷葉傘茜裙紅

青荷葉傘 茜裙 紅なり

隨母歸寧省外翁

母に隨つて 歸寧し 外翁を省す

莫笑梳裝未京樣

笑う莫かれ 梳裝 未だ京樣なるを

兵餘猶見太平風

兵余 猶お見る 太平の風

【語釈】

○青荷葉傘…蓮の花の傘。○茜裙…あかね色の袖。○歸寧…帰ってくる。○外翁…外祖父。○梳裝…髪形や装い。○京樣…華美。○兵餘…兵乱の後。

★賣薪女

薪を売る女

唐 白居易

亂蓬爲鬢布爲巾

亂蓬を鬢と爲し 布を巾と爲す

曉蹋寒山自負薪

曉に寒山を蹋みて 自ら薪を負う

一種錢唐江畔女

一種の錢唐 江畔の女

著紅騎馬是何人

紅を著け 馬に騎るは 是れ 何人ぞ

【語釈】

○諸妓…妓女。○亂蓬…ヨモギのように乱れたさま。○布…麻布。○巾…頭巾。○一種…

(参考文献)

『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★貧女

貧女

宋 朱繼芳

燈下穿針影伴身
燈下針を穿てば影身に伴う
嬾將心事訴諸親
心事を將つて諸親に訴うに嬾し
阿婆許嫁無消息
阿婆嫁すを許し消息無し
芍藥花開又一春
芍藥花開き又た一春

【語釈】

○心事…心中の思い。○諸親…親族。○阿婆…おばあさん。○消息…便り。

★貧女

貧女

宋 王岳

難把菱花照素顏
菱花を把り素顔を照らすこと難く
試臨春水插花看
試みに春水に臨み花を挿して看る
木蘭船上遊春子
木蘭船上遊春の子
笑指荆釵下遠灘
笑つて荆釵を指さし遠灘を下る

【語釈】

○木蘭船…木蘭で作った立派な船。○遊春…春の遊び。○荆釵…棘の枝で作った粗末なかんざし。

★ 上竿伎

上竿伎じょうかんし

宋 晏殊

百尺竿頭裏裏身

百尺の竿頭 裏々たる身じょうじょう

脚騰跟掛駭傍人

脚騰 跟掛 傍人を駭かすきゃくとう こんかひ おどろ

漢陰有叟君知否

漢陰 叟 有り君知るや否やかんいん おきな

抱甕區區亦未貧

甕を抱き 区々として 亦た 未だ貧ならずかめ くく

【語釈】

○上竿伎：垂直に立てられた竿を登る技。○竿頭：竿のてっぺん。○裏裏：しなやかなさま。○脚騰：脚を騰げる技。○跟掛：かかとを掛け技。○漢陰：陝西省南部の県名。○區區：満足しているさま。

★ 傀儡

傀儡かいらい

唐 玄宗

刻木牽絲作老翁

木を刻み 糸を牽き 老翁と作すな

雞皮鶴髮與真同

雞皮鶴髮 真と同じけいひかくはつ

須臾弄罷寂無事

須臾にして 弄し罷みて 寂として 事無ししゅゆ ろう や せき

還似人生一夢中

還つて 人生に似たり 一夢の中かえ うち

【語釈】

○雞皮鶴髮：皮膚の皺と白髪。垂老の形容。

★ 傀儡

傀儡かいらい

宋 楊億

鮑老當筵笑郭郎

鮑老ほうろう筵えんに当りて郭郎かくろうを笑う

笑他舞袖太郎當

笑他しょうたの舞袖まいそで太郎當たろうとう

若教鮑老當筵舞

若し鮑老ほうろうをして筵舞えんぶに当らしめば

轉更郎當舞袖長

轉じて更に郎當舞袖長からん

【語釈】

○鮑老…戯劇の配役の名。○筵…宴席。○郭郎…道化師。○舞袖…舞妓が着る衣服。○太郎當…太くてダブダブしていること。

★ 藏撇

藏撇ぞうへつ

宋 夏竦

舞拂跳珠復吐丸

払うを舞い珠を跳び復た丸がんを吐く

遮藏巧技百千般

遮藏しやざう巧技百千般

主公端坐無由見

主公端坐たんざし見るに由無よしなし

却披傍人冷眼看

却って傍人に冷眼で看らる

【語釈】

○藏撇…古代魔術の一種。変戲法。○遮藏…隠して外に現さないこと。○端坐…正座。○主公…主人の尊称。

★鶴

鶴

唐 褚 載

欲洗霜翎下澗邊
霜翎を洗わんと欲して澗辺に下る
却嫌菱刺汚香泉
却つて嫌う菱刺の香泉を汚すを
沙鷗浦鴈應驚訝
沙鷗 浦鴈 応に驚訝すべし
一舉扶搖直上天
一挙 扶搖 直ちに天に上る

【語釈】

○霜翎…白羽。○澗邊…溪のほとり。○菱刺…菱のとげ。○沙鷗…砂浜に住む鷗。○浦鴈…浦に住む雁。○應…「まさにくすべし」と読み「きつとくであるにちがいない」の意。
○驚訝…驚き訝る。○扶搖…飛び上がる。

★獨鶴

独鶴

唐 韋 莊

夕陽灘上立裴回
夕陽 灘上 立ちて裴回す
紅蓼風前雪翅開
紅蓼 風前 雪翅開く
應爲不知棲宿處
応に 棲宿の処を 知らざるが為に
幾回飛去又飛來
幾回か 飛去り 又た飛び来るべし

【語釈】

○灘上…早瀬のほとり。○紅蓼…紅色の蓼。○雪翅…雪のように白い羽。○棲宿…ねぐら。

(参考文献) 『中国名詩集』

★ 失鶴

失鶴

唐 陸龜蒙

養汝由來歲月深
汝を養いて由来 歲月深し
籠開不見意沈沈
籠を開きて 見えず 意沈々
想應只在秋江上
想う 応に 只だ 秋江の上に在るべし
明月蘆花何處尋
明月 蘆花 何れの処にか尋ねん

【語釈】

○由來…以来。○沈沈…心が憂鬱なさま。○應…「まさに「すべし」と読み、「きつと」であるにちがいない」の意。

(参考文献) 『和漢名詞選類評釈』

★ 新鴈

新鴈

唐 羅鄴

暮天新鴈起汀洲
暮天の新鴈 汀洲に起る
紅蓼花開水國秋
紅蓼 花開いて 水国秋なり
想得故園今夜月
想い得たり 故園 今夜の月
幾人相憶在江樓
幾人か 相い憶いて 江樓に在る

【語釈】

○汀洲…中洲。○紅蓼…紅色の蓼。○故園…故郷。○江樓…江に臨んだ楼。

★早雁

早雁

明高棟

涼霜八月塞天寒

涼霜八月塞天寒し

飛度衡陽楚水寬

飛び度る衡陽楚水寬し

少婦樓頭初掩瑟

少婦樓頭初めて瑟を掩い

一行先向夕陽看

一行先ず夕陽に向かいて看る

【語釈】

○塞天：辺塞の地の空。○衡陽：衡山（湖南省衡陽市にある五岳の一つ）の南のこと。衡山の南にある回雁峰は険しい峰で、雁かりがやって来ても、これを越えて南下することはできないと言われる。「衡陽雁断」。○楚水：楚の地方の川。○瑟：大琴。○一行：雁の一つの行列。

★秋雁

秋雁

清任大椿

閑堂清冷畫屏開

閑堂清冷にして画屏開く

嘹唳遙傳塞北哀

嘹唳遙かに伝う塞北の哀

無那秋江人去遠

那ともする無し秋江人去ること遠きを

曉風殘月數聲來

曉風殘月数声来る

【語釈】

○畫屏：画で飾られた屏風。○嘹唳：音の清涼さの形容。○塞北：北方の辺塞地。○無那：…どうしようもない。

★ 歸雁

歸雁

唐 錢 起

瀟湘何事等閑回

瀟湘しょうしょうより何事なにかぞ等閑とうかんに回かえる

水碧沙明兩岸苔

水みづは碧あざに 沙いさごは明あかにして 兩岸りょうがん苔こけむす

二十五弦彈夜月

二十五弦じゅうごくせん 夜月やげつに彈ひずれば

不勝清怨却飛來

清怨せいえんに勝たえずして 却きやく飛ひし來きる

【語釈】

○瀟湘…瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地。○等閑…なござりにすること。○二十五弦…瑟。大琴。○清怨…美しいものあわれ。○却飛來…飛び戻る。來は助字で意味が無い。

★ 鴛鴦

鴛鴦

唐 吉師老

江島濛濛煙靄微

江島かうとう 濛濛もうもう 煙靄えんか 微かすかなり

綠蕪深處刷毛衣

綠蕪りよくぶ 深ふかき処ところ 毛衣もういを刷すぐ

渡頭驚起一雙去

渡頭わたりづか 驚おど起こし 一雙いっしやう去いる

飛上文君舊錦機

飛とび上ある 文君ぶんきんの旧ふる錦機きんき

【語釈】

○鴛鴦…おしどり。○江島…江の中の島。○濛濛…煙るようにはおっとしているさま。○煙靄…霞と靄。○綠蕪…青々と茂っている雑草。○毛衣…羽毛。○渡頭…渡し場。○一雙…ひとつがい。○文君…卓文君。司馬相如の妻。ウイキペディア。○錦機…錦織機。

★鷺

鷺

宋

趙希卮

漠漠江湖自在飛

漠々たる江湖 自在に飛ぶ

一身到處占漁磯

一身到る処 漁磯を占む

稻田水淺魚能幾

稻田 水浅くして魚能く幾

莫被泥沙汗雪衣

泥沙を被りて 雪衣を汗す莫かれ

【語釈】

○漠漠…広々として果てしないさま。○江湖…江と湖。○漁磯…魚を捕る磯。○雪衣…白い羽毛。

★鷺鷥

鷺鷥

唐 鄭谷

閑立春塘煙澹澹

閑かに 春塘に立ち 煙澹々

靜眠寒葦雨颼颼

静かに 寒葦に眠り 雨颼々

漁翁歸後汀沙晚

漁翁 歸りて後 汀沙晚れ

飛下灘頭更自由

飛びて 灘頭に下りて 更に自由

【語釈】

○鷺鷥…サギ。○春塘…春の堤。○煙…霞。○澹澹…静かで淡いさま。○寒葦…寒い葦。○颼颼…風雨の音の形容。○汀沙…砂浜。○灘頭…早瀬のほとり。

★放鷺鷥

鷺鷥を放つ

唐 李中

池塘多謝久淹留

池塘多謝久しく淹留す

長得霜翎放自由

長に得たり霜翎放つに自由なるを

好去蒹葭深處去

好し蒹葭深き処に去りて

月明應認舊江秋

月明 応に認むべし 旧江の秋を

【語釈】

○鷺鷥…サギ。○淹留…逗留。○霜翎…霜のように白い羽。○蒹葭…オギとヨシ。○應…「まさにくすべし」と読み「くすするのが適当である」の意。

★燕

燕

宋 劉克莊

野老柴門日日開

野老の柴門 日々に開く

且無欄檻礙飛迴

且く欄檻に飛び廻りて 礙ぐる無し

勸君莫入珠簾去

君に勧む 珠簾に入りて 去ること莫かれ

羯鼓如雷打出來

羯鼓 雷の如く 打ち出でて来る

【語釈】

○野老…郊外に住む老人。○柴門…柴で作った粗末な門。○欄檻…欄干。○珠簾…玉すだれ。○羯鼓…両側から打つ太鼓。

★燕

燕

明

李東陽

繡戸珠簾有路岐

繡戸珠簾路岐有り

別時嫌早到嫌遲

別時早きを嫌い到ること遅きを嫌う

主家只解憐毛羽

主家只だ毛羽を憐むを解す

沈盡雕梁不自知

彫梁ちやうりやうを沈えんじん尽して自みずから知らず

【語釈】

○繡戸：彫刻や絵で飾られた美しい家。○珠簾：玉すだれ。○路岐：分かれ道。○毛羽：鳥の羽毛。○沈盡：汚し尽くす。

★燕

燕

明

王世貞

曾逐東風入紫微

曾て東風を逐おいて紫微しびに入る

晚拋江海滯烏衣

晩に江海を抛ち烏衣を滯ぶ

空誇萬里封侯領

空しく誇る万里封侯あごの領

還傍人家門戸飛

還また人家門戸に傍まいて飛ぶ

【語釈】

○東風：春風。○紫微：帝王の宮殿。○烏衣：貧賤者の衣。

★新燕

新燕

元

張弘範

海棠開後月黄昏

かいどう 海棠 開いて後月 黄昏

王謝樓臺寂寂春

おうしゃ 王謝の樓台 寂々の春

柳外東風花外雨

柳外の東風 花外の雨

香泥高壘畫堂新

かうでい 香泥 高壘 画堂に新なり

【語釈】

○黄昏：たそがれ。○王謝：東晋の王導・謝安らの大貴族。（「舊時王謝堂前燕」劉禹錫）。○寂寂：寂しく静かなさま。○東風：春風。○香泥：香りのある泥。○高壘：ここでは燕の巢。○畫堂：画で飾られた堂。

★新燕

新燕

明

王恭

海燕雙飛下柳塘

海燕 双飛す 柳塘の下

主家臺榭已荒涼

主家の台榭 已に荒涼

玉窗綉戸春雲外

玉窓 綉戸 春雲の外

不忍翻飛過別牆

忍びず 翻飛して 別牆を過ぐ

【語釈】

○双飛：つがいとなって飛ぶ。○柳塘：柳を植えた堤。○臺榭：樓閣などの建造物。○玉窗：玉で飾ったまど。○綉戸：彫刻や絵で飾った門戸。○翻飛：翻って飛ぶ。

★ 歸燕下第後獻主司

「歸燕」下第の後主司に獻ず

唐 章孝標

舊壘危巢泥已落

旧壘危巢泥已落つ

今年故向社前歸

今年故に社前に向つて歸る

連雲大廈無棲處

連雲大廈棲む処無く

更繞誰家門戸飛

更に誰が家の門戸を繞りて飛ぶ

【語釈】

○下第：科挙に落第する。○主司：科挙の試験官。○舊壘：昔の巢。○危巢：高い木のうえにある鳥の巢。○社前：故郷の社の前。○大廈：広大な部屋。

★ 聞子規

子規を聞く

唐 羅鄴

蜀魄千年尚怨誰

蜀魄千年尚お誰をか怨む

聲聲啼血染花枝

声々血に啼き花枝を染む

滿山明月東風夜

満山明月東風の夜

正是愁人不寐時

正に是れ愁人寐らざる時

【語釈】

○子規：ホトトギス。○蜀魄：ホトトギス。○東風：春風。

★子規

子規

唐 李中

暮春滴血一聲聲
暮春 血を滴す 一声々
花落年年不忍聽
花落ち 年々 聴くに忍びず
帶月莫啼江畔樹
月を帯び 啼く莫かれ 江畔の樹
酒醒遊子在離亭
酒醒むれば 遊子 離亭に在り

【語釈】

○子規…ホトトギス。○遊子…旅人。

★ 聞子規

子規を聞く

唐 杜荀鶴

楚天空闊月成輪
楚天 空 闊く 月 輪を成す
蜀魄聲聲似告人
蜀魄 声々 人に告ぐるに似たり
啼得血流無用處
啼き得て 血流 用いる処無し
不如緘口過殘春
如ず 口を緘じて 殘春を過ぐるに

【語釈】

○子規…ホトトギス。○楚天…楚の地方の空。○蜀魄…ホトトギス。○不如…にすに及ばない。

★ 聞子規

子規を聞く

宋 楊萬里

花愁月恨只長啼
雨夕風晨不住飛
自出錦江歸未得
至今猶勸別人歸

花は愁い 月は恨む 只だ長く啼くを
雨夕 風晨 飛ぶを住めず
自ら 錦江を出で 帰るは未だ得ず
今に至りて 猶お勸む 別人の帰るを

【語釈】

○子規…ホトトギス。○錦江…蜀の成都を流れる川。

★ 夜聞子規

夜子規を聞く

宋 朱熹

空山初夜子規鳴
靜對琴書百慮清
喚得形神兩超越
不知底是斷腸聲

空山 初夜 子規鳴く
靜かに琴書きんしょに対し 百慮清し
喚さけび得たり 形神けいしん 両つながら超越
知らず 底これは是れ 断腸の聲

【語釈】

○子規…ホトトギス。○空山…人気の無い山。○初夜…初更のころ。○琴書…琴と書物。
○形神…形骸と精神。○断腸…非常な悲しさ。

★ 畫眉鳥

画眉鳥 がびちよう

宋 歐陽修

百囀千聲任意移

百囀 ひやくてん 千声 意に任せて移る

山花紅紫樹高低

山花は紅紫 樹は高低

始知鎖向金籠聽

始めて知る 鎖 とぎして 金籠 きんろうに向いて聴くは

不及林間自在啼

及ばず 林間 自在に啼くに

【語釈】

○金籠：金の鳥かご。

★ 畫眉鳥

画眉鳥

宋 文同

盡日閑窗生好風

尽日 じんじつ 閑窓 かんそう 好風生ず

一聲初聽下高籠

一声 初めて聴く 高籠 こうろうを下るを

公庭事簡人皆散

公庭 かんと事簡にして 人皆散じ

如在千岩萬壑中

千岩 せんがん万壑 ばんがくの中に 在る如し

【語釈】

○盡日：一日中。○閑窗：静かな窓。○高籠：高い所にある鳥かご。○公庭：朝廷。○簡
：わずかなさま。○千岩萬壑：多くの岩や山。

★ 凍鳧

凍鳧 とうぶ

明 貢性之

江天歳晩景凄凄

江天 歳晩 景 凄々 さいばん せいせい

雲脚低垂望欲迷

雲脚 低く垂れ 望 迷わんと欲す うんきゃく ぼう

水鳥畏寒飛不起

水鳥 寒を畏れ 飛び起さず みづとり おそ

黄蘆枝上並頭棲

黄蘆枝上 頭を並べて棲む こうろしじょう こうへ

【語釈】

○凍鳧：凍えた小型の鴨。○江天：江と空。○歳晩：年の暮れ。○凄凄：冷え冷えとしたさま。○雲脚：雲足。○望：眺め。○黄蘆枝上：黄色い蘆の枝の上。

★ 翠禽

翠禽 すいぎん

宋 王復之

擺弄風前翠羽衣

擺弄す 風前 翠羽の衣 はいろう すいいう

小魚剽掠費心幾

小魚 剽掠して 心幾を費やす ひよりのやく しんぎ

平生不解窺江海

平生 解かず 江海を窺う へいせい

長向洿池來去飛

長く 洿池に向いて 來去して飛ぶ おち お

【語釈】

○翠禽：緑色の鳥。○擺弄：揺動。○剽掠：脅かしたる。○心幾：心の働き。○平生：常日頃。○洿池：汚れた池。

★ 十二紅

十二紅

明 楊基

何處飛來十二紅

何れの処より 飛び来る 十二紅

萬年枝上立東風

萬年枝上 東風に立つ

楚王宮殿皆零落

楚王の宮殿 皆 零落す

說盡春愁暮雨中

說き尽す 春愁 暮雨の中

【語釈】

○十二紅：鳥の名。ひれんじやく。○萬年枝：木の名。モチノキ。○東風：春風。○楚王宮殿：楚の懷王（「朝雲暮雨」の故事。屈原の主。）の宮殿。○零落：落ちぶれること。○春愁：春のもの悲しい愁。

★ 寒雀

寒雀

宋 楊萬里

百千寒雀下空庭

百千の寒雀 空庭に下り

小集梅梢話晚晴

梅梢に小集して 晚晴に話す

特地作團喧殺我

特地 団を作して 我を喧殺す

忽然驚散寂無聲

忽然 驚き散じて 寂として声無し

【語釈】

○寒雀：冬の雀。○空庭：誰も居ない庭。○晚晴：晴れた夕空。○特地：ことさらに。○喧殺：非常にやかましい。○忽然：突然。

（参考文献） 『漢詩大系 16』

★詠馬

馬を詠ず

唐

唐彦謙

峻嶒高聳骨如山
峻嶒高く聳え骨山の如し
遠放春郊苜蓿間
遠く放つ春郊苜蓿の間
百戦沙場汗流血
百戦沙場汗血を流す
夢魂猶在玉門關
夢魂猶お玉門関に在り

【語釈】

○峻嶒…骨節の顯露なさま。○春郊…春の郊外の野原。○苜蓿…うまごやし。○沙場…沙漠。

★桃花馬

桃花馬

元

胡炳文

望夷宮裏失天真
望夷宮裏天真を失う
走入桃源避虐秦
桃源に走り入り虐秦を避く
背上下落紅吹不起
背上下落紅吹き起らず
至今猶帶武陵春
今に至り猶お帶ぶ武陵の春

【語釈】

○桃花馬…白色に紅点のある色をした名馬。○望夷宮…秦代の宮名。陝西省涇陽県東南にあった。○天真…本来の面目。○桃源…「桃花源記」の桃源郷。○虐秦…暴虐な秦。○落紅…落花。○武陵…湖南省常德市武陵。桃源郷のあったところ。

★老馬

老馬

明 王 恭

百戦沙場老此身
長楸宮草幾回春
只今棄擲寒郊路
猶自悲鳴戀主人

百戦 沙場さじょう 此の身老ゆ
長楸ちやうしゅう 宮草みやうそう 幾回の春
只今 棄擲きてき する 寒郊の路
猶自いまだ 悲しく鳴き 主人を恋う

【語釈】

○沙場…砂漠。○長楸…高い楸の木。○棄擲…投げ捨てる。○寒郊…寒い郊外の野原。○猶自…今なお。

★老牛

老牛

元 宋 无

草繩穿鼻繫柴扉
殘喘無人問是非
春雨一犁鞭不動
夕陽空送牧兒歸

草繩そうじょう 鼻うが を穿ち 柴扉さいひ に繫ぐ
殘喘ざんぜん 是非を問う人無し
春雨いちり 一犁 鞭 動かず
夕陽せきやう 空しく送る 牧兒の帰るを

【語釈】

○柴扉…柴で作った粗末な扉。○殘喘…衰老による喘息。

★ 題犬

犬に題す

元 貢性之

深宮飽食恣猗猗

深宮に飽食し猗猗を恣にす

臥毯眠氎慣不驚

毯に臥し氎に眠り慣れて驚かず

卻被卷簾人放出

却って簾を巻き人に放出せられ

宜男花下吠新晴

宜男花下新晴に吠ゆ

【語釈】

○深宮…帝王の住居。○猗猗…荒々しく怖いさま。○毯…絨毯。○氎…毛氎。○宜男花…萱草の別名。○新晴…雨後の晴天。

★ 猫兒

猫兒

宋 林逋

織鈎時得小溪魚

織鈎時に小溪魚を得

飽卧花陰興有餘

飽きて花陰に卧し興余す有り

自是鼠嫌貧不到

自らはれ鼠貧を嫌い到らず

莫嫌尸素在吾廬

嫌う莫かれ尸素吾が廬に在るを

【語釈】

○織鈎…微細な釣り針。○尸素…位にいながらその責を尽くさない人。

★ 蟬

蟬

唐 許渾

噪柳鳴槐晚未休
不知何事愛悲秋
朱門大有長吟處
剛傍愁人又送愁

柳に噪さわぎ 槐かいに鳴き 晩に未だ休せず
知らず 何事ぞ 悲秋を愛す
朱門 大いに 長吟の処有り
剛まさに 愁人しゅうじんに傍まいて 又た 愁を送る

【語釈】

○朱門…貴族富豪の家。

★ 蟬

蟬

宋 寇準

寂寂宮槐雨乍晴
高枝微帶夕陽明
臨風忽起悲秋思
獨聽新蟬第一聲

寂々せきせきたる宮槐 雨 乍たちまち晴れ
高枝 微かに 夕陽せきようを帯びて 明かなり
風に臨み 忽たちまち起る 悲秋の思
独り聴く 新蟬の第一声

【語釈】

○寂寂…寂しく静かなさま。○宮槐…槐樹。

★ 聽蟬

蟬を聴く

唐 趙嘏

噪蟬聲亂日初曛

噪蟬そうちん 声乱れて日初めて曛くんず

絃管樓中永不聞

絃管 樓中 永く聞かず

獨奈愁人數莖髮

独り奈たう 愁人 数莖の髮

故園秋隔五湖雲

故園 秋は隔つ 五湖の雲

【語釈】

○噪蟬…うるさい蟬。○絃管…音楽。○奈…耐える。○数莖…数本。○故園…故郷。○五湖…太湖（江蘇省南部と浙江省北部の境界にある湖）を中心とする湖。

★ 秋蝶

秋蝶

明 姚廣孝

粉態凋殘抱恨長

粉態 凋殘し 恨みを抱いて長し

此心應是怯淒涼

此の心 応まをに是れ 淒涼せいりょうに怯おびゆべし

如何不管身憔悴

如何いかんぞ管くだせざらん 身の憔悴しょうすい

猶戀黃花雨後香

猶お恋こう 黃花こうか 雨後の香

【語釈】

○粉態…妍美な容姿。○凋殘…疲れ衰える。○應…「まさに「すべし」と読み、「きっと」であるに違いない」の意。○淒涼…つめたさ。○憔悴…やせ衰える。○黃花…黄色い花。菊。

★ 秋日見蝶

秋日蝶を見る

明 朱静菴

江空月落雁聲悲
霜染丹楓百草萎
胡蝶不知身是夢
又随秋色上寒枝

江空 月落ちて 雁声悲し
霜は丹楓を染め 百草は萎む
胡蝶は知らず 身は是れ夢なるを
又た 秋色に随つて 寒枝に上る

【語釈】

○江空…江の上の空。○丹楓…赤くなった楓。○胡蝶…蝶。○秋色…秋景色。秋の気配。

★ 螢

螢

唐 郭震

秋風凜凜月依依
飛過高梧影裏時
處暗若教同衆類
世間爭得有人知

秋風 凜々 月 依依
飛びて 高梧影裏を過ぐる時
暗きに処して 若し 衆類と同じからしめば
世間 争か 人の知る有ることを得ん

【語釈】

○凜凜…寒さの厳しいさま。○依依…遠くぼんやりとしているさま。○高梧…高い梧桐の木。○衆類…一般の（光を発しない）昆虫類。

★ 螢

螢

唐 羅 鄴

水殿清風玉戸開

水殿の清風 玉戸開く

飛光千點去還來

飛光 千点 去りて還^また來^{きた}る

無風無月長門夜

無風 無月 長門^{ちやうもん}の夜

偏到階前點綠苔

偏^{ひじょう}に階前に到^{いた}り 綠苔^{りよくたい}に点^つず

【語釈】

○水殿：水に臨んだ殿堂。○玉戸：玉で飾った戸。○長門：長門宮。漢の武帝の寵愛を失った陳皇后が住んだ宮殿。○階前：きざはしの前。

★ 流螢詞

流螢詞

清 安 期

熠熠流光漾水煙

熠熠^{しゅうしゅう}たる 流光 水煙^{ただよ}に漾^う

池亭雨歇晚涼天

池亭 雨歇^やんで 晚涼の天

西風吹墮紅蕖裏

西風 吹き墮^{こうきよ}とす 紅蕖^{うち}の裏

照見鴛鴦自在眠

照見^{しょうけん}す 鴛鴦^{えんおう}の自在に眠るを

【語釈】

○熠熠：鮮やかで明眸なさま。○水煙：水上の靄。○池亭：池に臨んだ亭。○西風：秋風。○紅蕖：紅色の蓮の花。○照見：光で照らして見る。○鴛鴦：オシドリ。

★流螢詞

流螢詞

清 硯受新

暗飛幾點隔簾櫳
影亂繁星度遠空
莫入班姬金閣裏
恐隨團扇落秋風

暗飛^{あんび} 幾點^{いくてん} 簾櫳^{れんろう}を隔つ
影^{かげ} 乱れて^{みだ} 繁星^{はんせい} 遠空^{えんくう}を度る^{わた}
入^いる莫^なかれ^れ 班姬^{はんき} 金閣^{きんかく}の裏
恐^{おそ}らくは^は 團扇^{だんせん}に随^まつて^つ 秋風^{あきかぜ}に落^おちん

【語釈】

○簾櫳：簾のかかったれんじ窓。○繁星：多くの星（螢の光）。○班姬：班昭。東漢の学者。歴史家班彪（の娘、班固の妹。○團扇：うちわ。

★ 螢

螢^{てんとう虫}

唐 郭 震

愁殺離家未達人
一聲聲到枕前聞
苦吟莫向朱門裏
滿耳笙歌不聽君

愁殺^{しゆしか}す 離家^{りか} 未達^{みだつ}の人
一^{いっ}声^{せい}は到^{いた}り 枕前^{まくらまへ}に聞^きく
苦^く吟^{いん} 向^{むか}うこと莫^なれ^れ 朱門^{しゆもん}の裏
滿^{まん}耳^じの笙歌^{しやうか} 君^{きみ}を聴^きかず

【語釈】

○愁殺：ひどく愁えさせる。○苦吟：苦勞して吟じること。ここでは鳴いているコオロギ。○朱門：貴族、富豪の家。○笙歌：音楽と歌。

★ 聞蛩

蛩を聞く

唐 白居易

暗蟲唧唧夜懸懸

暗蟲 唧唧々として 夜綿綿たり

況是秋陰欲雨天

況んや是れ 秋陰 雨ふらんと欲する天

猶恐愁人暫得睡

猶お恐る 愁人 暫く睡を得んとするに

聲聲移近臥牀前

声々 臥床の前に 移り近づくを

【語釈】

○唧唧…虫の形の形容、チーチー。○懸懸…長く続くさま。○況是…まして。○秋陰…雨の曇り空。○愁人…愁える人、作者。○暫…やっど。当時の俗語。

〔参考文献〕 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 促織

促織

唐 張喬

念爾無機自有情

念爾 機 無く 自ら情有り

迎寒辛苦弄梭聲

寒を迎え 辛苦 梭を弄する声

椒房金屋何曾識

椒房 金屋 何ぞ 曾て識らん

偏向貧家壁下鳴

偏に 貧家に向いて 壁下に鳴く

【語釈】

○促織…コオロギ。○念爾…爾を思う。○無機…自然に任す。○梭…機織り機のヒ。○椒房…后妃の住む部屋。○金屋…華美な部屋。

★ 絡緯

絡緯らくい

明 邾 經

牽牛風露滿籬根

牽牛けんぎゅうの風露ふうろ籬根りこんに満つ

淡月疎星夜未分

淡月疎星夜未だ分たず

燈下有人抛錦字

灯下人有りて錦字を抛ち

機絲零亂不成文

機糸れいらん零亂れいらん文を成さず

【語釈】

○牽牛…牽牛花。アサガオ。○風露…風と露。○籬根…垣根。○錦字…蘇蕙の回文詩の故事。○機絲…機織り機の糸。○零亂…ゆらゆら動く。

★ 蠅

蠅はえ

明 郭 登

眇形纔脱糞中胎

眇形びょうけい纔わずかに脱す糞中ふんちゅうの胎たい

鼓翅搖頭可惡哉

翅はねを鼓し頭こつへを揺がし悪なるべき哉かな

苦不自量何種類

苦ねんじろに自みずから量みらず何の種類ぞ

玉階金殿也飛來

玉階たま金殿きん也また飛來とす

【語釈】

○眇形…小さな形。○胎…ウジ虫。○玉階…玉で飾ったきざはし。○金殿…宮殿。

★ 蛟

蛟

清 瀋紹姬

斗室何來豹脚蚊

斗室何ぞ来る 豹脚の蚊

殷如雷鼓聚如雲

殷とすること 雷鼓の如く 聚ること 雲の如し

無多一點英雄血

多無く 一點 英雄の血

閑到衰年忍付君

閑かに 衰年に到り 君に付するに忍びんや

【語釈】

○斗室：狭い部屋。○豹脚蚊：脚に斑点のある蚊。○殷：盛んであるさま。○無多：すこしばかり。○衰年：衰老の年。○付：与える。

★ 蛙聲

蛙聲

唐 吳融

釋圭倫鑿未精通

釋圭 倫鑿 未だ精通ならず

只把蛙聲鼓吹同

只だ 蛙聲を把り 鼓吹を同じくす

君聽月明人靜夜

君 聴く 月明 人 静なる夜

肯饒天籟與松風

肯えて 饒えんや 天籟と松風と

【語釈】

○釋圭：南齊の孔稚珪。○倫鑿：人物のかがみ。○鼓吹：古代の合奏曲。○天籟：自然に鳴る風の音。

★ 鯉魚

鯉魚りぎよ

唐 章孝標

眼似真珠鱗似金

眼は真珠に似 鱗は金に似たり

時時動浪出還沈

時々 浪を動かし 出でて還た沈む

河中得上龍門去

河中 龍門に上りて去り得

不歎江湖歲月深

歎ぜず 江湖 歲月の深きを

【語釈】

○時時：常々。○龍門：山西省河津市にある山峽名。「登龍門」という故事にちなむ「龍門の滝」がある。○江湖：江河湖海。隱棲の地。

★ 點額魚

點額魚てんがくぎよ

唐 白居易

龍門點額意何如

龍門りようもんに額ひたいを点ひす 意い何いかん如

紅尾青鬢却返初

紅尾こうび 青鬢せいき 却かえつて初はじめに返る

見説在天行雨苦

見説まぐたらく 天あまに在りては 雨あめを行やるの苦ありと

爲龍未必勝爲魚

龍と為りて 未だ必ずしも 魚と為るに勝からず

【語釈】

○點額魚：龍門を昇って龍になりえず、あたら額を打ち付けて引き返す魚。作者自身。○紅尾：赤い尾ひれ。○青鬢：青いヒゲ。○初：最初の場所。○見説：〜と云われている。○當時の俗語。

★銀刀魚

銀刀魚ぎんとうぎょ

清 宋 琬

銀花爛漫委筠筐

銀花爛漫 筠筐いんきやうに委すてられ

錦帶吳鉤總擅場

錦帶きんたい 吳鉤ごこう 総だんじやうて擅場

千載專諸留俠骨

千載せんしよ 專諸せんしよ 俠骨きやうこつを留め

至今匕箸尚飛霜

今に至るまで 匕箸ひぢよ 尚お霜を飛ばす

【語釈】

○銀花：光彩が四方を刺す形容。○爛漫：色彩の美しいさま。○筠筐：竹製の箱。○錦帶：錦の帯び。吳鉤：兵器の一種。（李白詩・結客少年場行「珠袍曳錦帶，匕首插吳鴻」によるか？吳鴻は宝劍の名。（吳越春秋）。○專諸：魚腸劍により王を殺害した刺客（史記・刺客列伝）。○俠骨：武勇の性格と氣質。○匕箸：さじと箸。

★放魚

魚を放つ

唐 竇 鞏

金錢贖得免刀痕

金錢あがな 贖あがない得て 刀痕とうこんを免れしむ

聞道禽魚亦感恩

聞道きくならく 禽魚きんぎょ 亦た 恩を感ずと

好去長江千萬里

好し去れ 長江 千万里

不須辛苦上龍門

須もちいず 辛苦して 竜門りゆうもんに上るを

【語釈】

○刀痕：刀キズ。ここでは、包丁で切られること。○聞道：聞るところによれば。○禽魚：鳥と魚。○龍門：山西省河津市にある山峽名。「登竜門」という故事にちなむ「龍門の滝」がある。

★梅花

梅花

唐 陸希聲

凍藥凝香色豔新

凍藥とうやく 香を凝こらし 色豔しきえん 新なり

小山深塢伴幽人

小山しんこう 深塢 幽人に伴ともう

知君有意凌寒色

知る 君意 有りて 寒色を凌しのぎ

羞共千花一樣春

羞はづ 千花を共にす 一樣の春

【語釈】

○凍藥：凍ったしべ。○色豔：色の美しさ。○深塢：奥深い山の隈。○幽人：隠者。○寒色：寒気。

★梅花

梅花

宋 王淇

不受塵埃半點侵

受けず 塵埃 半点の侵しん

竹籬茅舍自甘心

竹籬ちくりの茅舍おのずか 自ら甘心かんしん

只因誤識林和靖

只だ 誤あやって 林和靖りんわせいを識るに因よりて

惹得詩人說到今

詩人を惹ひき得て 説きて 今に到る

【語釈】

○半點：ごく僅かであることの形容。○竹籬：竹で作った垣。○茅舍：茅葺きの粗末な家。○甘心：快い気持。○林和靖：林逋。北宋の詩人。鶴を妻とし、梅を子として、西湖の孤山に隠棲して暮らした。

★梅花

梅花

宋 方岳

竹遶疎籬水遶村

竹は疎籬を遶り 水は村を遶る

一枝相伴到黄昏

一枝 相伴い 黄昏に到る

暗香似識騷人意

暗香 識るに似たり 騷人の意

月淡無風自入門

月淡く 風無く 自ら門に入る

【語釈】

○疎籬…まばらな垣。○黄昏…たそがれ。○暗香…清淡な香氣。梅の縁語。○騷人…詩人。

★梅花

梅花

元 黃鎮成

吟屋蕭疎霜後村

吟屋 蕭疎たり 霜後の村

江頭千樹欲黃昏

江頭の千樹 黃昏ならんと欲す

等閒又被春風覺

等閒に 又た 春風に覺えられ

添得寒梢月一痕

添え得たり 寒梢 月 一痕

【語釈】

○吟屋…詩人の家。○蕭疎…ひっそりとして物寂しいさま。○江頭…江のほとり。○黃昏…たそがれ。○等閒…何の意識もなく。○寒梢…寒々とした梢。○一痕…欠けた月の形容。

★早梅

早梅

唐 張 謂

一樹寒梅白玉條

一樹の寒梅 白玉條はくぎょくよくじょう

迴臨村路傍溪橋

迴はるかに 村路に臨む 溪橋の傍そば

不知近水花先發

知らず 近水 花 先ひらず発はくを

疑是經春雪未銷

疑うらくは 是れ 春を經へし雪の 未だ銷きえざるかと

【語釈】

○白玉條：白い球をちりばめたような枝。

★月梅

月梅

元 釋明本

數枝姑射門嬋娟

數枝の姑射こしゃ 嬋娟せんけんを門たなかう

疏影分明不夜天

疏影そえい 分明 夜の天ならず

散卻廣寒宮裏桂

散却さんきやくす 廣寒宮裏こうかんきゅうりの桂

春光長滿玉堂前

春光 長く滿みつ 玉堂うじょうの前

【語釈】

○姑射：仙人が住んでいるという伝説の姑射山。肌の白い仙人を梅の花に喩えた物。○嬋娟：あでやかで美しいさま。○疏影：疎らな（枝）の影。梅の縁語。○分明：はっきりしているさま。○散却：散り尽くす。却是助字。○廣寒宮：月にあるとされる宮殿。○玉堂：玉で飾った殿堂。

★梅月吟

梅月吟ばいげつぎん

宋 姚宋佐

梅花得月太清生
梅花 月を得て 太はなは清せい生せい
月到梅花越様明
月は梅花に到り 越こ様さまに明あかなり
梅月蕭疏兩奇絶
梅月 蕭しょう疏そにして 兩ふたつながら奇き絶ぜつ
有人踏月繞花行
人有りて 月を踏ふみ 花を繞まりて行く

【語釈】

○梅月：梅と月。○越様：飛び抜けて。○蕭疏：しずかで物寂しいさま。○奇絶：非常に美しい。○踏月：月明かりを踏む。

★雪梅

雪梅

宋 楊萬里

雪正飛時梅政開
雪 正ただに飛とぶ時 梅 政せいに開ひく
情人和雪折庭梅
人たに情なみ 雪ゆきに和なし 庭梅ていばいを折をる
莫教顛脫梢頭雪
莫なれど顛せん脱だつし 梢頭しょうとうの雪ゆきを 顛脱せんだつしむる莫なかれ
千萬輕輕折取來
千せん万ばん 輕けい々けいに 折をり取とりて来きらん

【語釈】

○梢頭：梢のてっぺん。○顛脱：震えて落ちる。○千万：多くの人々。

★雪梅

雪梅

宋 方岳

有梅無雪不精神
梅有りて 雪無ければ 精神ならず

有雪無詩俗了人
雪有りて 詩無ければ 人を俗了すぞくりよう

薄暮詩成天又雪
薄暮詩 成りて 天 又た 雪ふる

與梅併作十分春
梅と併せて 十分の春を作すな

【語釈】

○精神：生氣、光彩があつて美しいこと。○俗了：俗化してしまふ、無学、無風流なものとしてしまふ。○十分春：完全な春。

(参考文献) 『漢詩鑑賞事典』

★惜梅

梅を惜む

元 僧明本

香銷泥汙意徘徊
香 銷せうえ 泥 汙よじして 意 徘徊かいす

掠地迴風玉作堆
地を掠かむる 迴風かいふう 玉 堆つひを作す

愁絶黃昏無一語
愁絶しゅうぜつ 黃昏こつこん 一語 無し

怕看孤月上窓來
看るを怕おそる 孤月の窓に上りて来るを

【語釈】

○徘徊：さまよう。○迴風：旋風。○愁絶：極端な憂愁。○黃昏：たそがれ。

★探梅

梅を探す

宋 陸游

江路雲低糝玉塵
暗香初探一枝新
平生不喜凡桃李
看了梅花睡過春

江路 雲低く 玉塵を糝まじう
暗香 初めて探く 一枝新たなり
平生 喜ばず 凡桃李ぼんとうり
梅花を看了かんりようすれば 過す春を睡すこる

【語釈】

○江路：江と道。○玉塵：雪のこと。○暗香：どこからともなく漂って来る香り。梅の縁語。○平生：ふだんから。○凡桃李：平凡な桃やスモモ。○看了：見終わる。見尽くす。

★探梅

梅を探す

清 沈徳潜

才過野店便溪橋
携却詩囊又酒瓢
但覓幽香最深處
不須前路問山樵

才わすかに 野店を過ぎれば 便ち溪橋
携却けいさやくす 詩囊しのう又た酒瓢しゅひょう
但もとだ覓ゆむ 幽香ゆうこう 最も深き處
須もちいず 前路さんしやうに山樵を問うを

【語釈】

○野店：野原にある茶店。○携却：携える。却是助字。○詩囊：詩箋を入れる袋。○酒瓢：酒を入れる瓢箪。○幽香：どこからともなく漂って来る香。○山樵：きこり。隱者。

★ 盆梅

盆梅

清 宋樹穀

數枝也復影横斜

數枝也復た影横斜

惹得羈人鄉夢餘

惹き得たり羈人鄉夢余なり

抛却西谿千樹雪

抛却す西谿千樹の雪

尾盆三尺看梅花

尾盆三尺梅花を見る

【語釈】

○盆梅：盆栽の梅。○羈人：旅人。○抛却：放っておく。却是助字。○鄉夢：故郷の夢。

★ 紅梅

紅梅

元 丁鶴年

姑射仙人鍊玉砂

姑射の仙人玉砂を鍊る

丹光晴貫洞中霞

丹光晴貫す洞中の霞

無端半夜東風起

端無くも半夜東風起り

吹作江南第一花

吹き作す江南第一の花

【語釈】

○姑射：仙人が住んでいるという伝説の姑射山。梅があるという伝説がある。○丹光：丹を練るときの火光。○無端：思いがけず。○半夜：真夜中。○東風：春風。○江南：長江下流南岸地方。○第一花：ここでは紅梅。

★桃花

桃花

宋 向敏中

千朵穠芳倚檻斜

千朵せんだの穠芳じようほう 檻かんに倚りて斜なり

一枝枝綴亂雲霞

一枝枝いちし綴とじて雲霞を乱す

憑君莫厭臨風看

君に憑たのむむ 厭いとう莫かれ 風に臨んで看るを

占斷春光は是此花

春光を占斷するは是れ此の花

【語釈】

○千朵…多くの枝。○穠芳…馥郁とした芳香。○檻…欄干。○春光…春景色。○占斷…占め尽くす。

★慶全菴桃花

慶全菴の桃花

宋 謝枋得

尋得桃源好避秦

尋ね得て 桃源 好く秦を避く

風光又見一年春

風光 又た見る 一年の春

花飛莫遣隨流水

花 飛びて 流水に随わしむる莫かれ

怕有漁郎來問津

怕おそらくは 漁郎おとの 津しんを問いて来る有り

【語釈】

○慶全菴…釋齊己。南宋の僧侶。邛州蒲江（四川省）の人。○桃源…桃花源記の桃源郷。○漁郎…漁夫。○津…渡し場。（「桃花源記」による。）

★ 山舍南溪小桃花

山舍の南溪の小桃花

唐 李九齡

一樹繁英奪眼紅

一樹繁英 眼を奪う紅

開時先合占東風

開時 先ず合まに 東風を占むべし

可憐地僻無人賞

憐む可し地 僻へにして 人の賞する無きを

抛擲深山亂木中

抛擲ほうてきす 深山 乱木の中うち

【語釈】

○繁英：盛んに咲いた花。合：「まさにくすべし」と読み、「くしなければならぬ」の意。○可憐：感嘆の言葉。○抛擲：ほおっておかれる。

★ 院桃再花有感

院桃 再花 感有り

清 蔣士銓

竹外重開一兩枝

竹外 重く開く 一両枝

花神何事與秋期

花神 何事ぞ 秋期を与う

風霜影裏誇顔色

風霜影裏ふうそうえいうら 顔色を誇る

也是人生晚達時

也また是れ 人生 晚達ばんたつの時

【語釈】

○再花：（秋に）再び開花する。○花神：花を咲かせる神。○風霜：風と霜。○晚達：晩年に官職を得る。

★ 白桃花

白桃花 はくとうか

清 汪易堂

褪盡鉛華露一叢

褪あせ尽くす 鉛えん華か 露い一っ叢そう

輕陰漠漠淡煙籠

輕けい陰いん 漠ぼく々ぼく 淡たん煙えん籠かごむ

漁郎錯忍仙源路

漁い郎さく 錯さく忍くにんす 仙源せんげんの路

洞口春深雪未融

洞くわう口くわう 春しゅん深しんくして 雪ゆき 未まだ融とけず

【語釈】

○鉛華：落花の比喩。○一叢：ひと叢がり。○輕陰：僅かに明るい空の色。○漠漠：広々として果てしないさま。○淡煙：淡い霞。○錯忍：見誤る。○仙源：桃源郷の入り口。○春深：春の盛り。

★ 梨花

梨花 りか

宋 黄庭堅

桃花人面各相紅

桃おの花おの 人あ面い各く々れ 相あ紅いなり

不及天然玉作容

及ぎばず 天てん然ぜん 玉ぎよく 容かたちを作なすに

總向風塵塵莫染

總ふう向じん 風ふう塵じんに 向むかって 塵ちん 染せんむる 莫なかれ

輕輕籠月倚牆東

輕しょう々じょうに 月げつを籠かごめて 牆しょう東とうに 倚よらん

【語釈】

○玉作容：梨花が白い玉のような形をなすこと。○風塵：風によって起こる塵。○牆東：垣の東。

★ 和孔密州 東欄梨花

孔密州こうみつしゅうに和す 東欄とうらんの梨花りか

宋 蘇軾

梨花淡白柳深青

梨花りかは淡白にして 柳は深青

柳絮飛時花滿城

柳絮りゅうじょ 飛ぶ時 花城に満つ

惆悵東欄二株雪

惆悵ちゆうちやうす 東欄とうらん 二株の雪

人生看得幾清明

人生 看得みるは 幾清明

【語釈】

○孔密州：蘇軾の後任としえ密州（山東省濰坊市密州）の刺史となった孔宗翰。○東欄：密州の官舎の東側の欄干。淡白：淡い白色。深青：深い緑色。柳絮：柳の白い綿毛のついた種子。○城：城壁で囲まれた町。惆悵：嘆き悲しむこと。傷み悲しむこと。○株雪：一本の梨の木の花を雪に喩えている。○清明：二十四節氣の一つ。春分から十五日目。○看得：見ることが出来る。

（参考文献）

『漢詩大系 17』

★ 杏花

杏花

唐 羅隱

暖氣潛催次第春

暖氣せんき 潛催 次第の春

梅花已謝杏花新

梅花 已に謝し 杏花 新たなり

半開半落閑園裏

半ば開き 半ば落つ 閑園かんえんの裏うち

何異榮枯世上人

何ぞ異らん 榮枯 世上の人に

【語釈】

○潛催：ひそかに催す。○次第：だんだん。○謝：去る。散る。○閑園：静かな園。○榮枯：榮枯盛衰。

★ 北陂杏花

北陂の杏花

宋 王安石

一陂春水繞花身
花影妖嬈各占春
縱被春風吹作雪
絕勝南陌碾成塵

一陂の春水 花身を繞り
花影 妖嬈 各々春を占む
縦い 春風に吹かれて 雪と作るとも
絶えて勝る 南陌に碾かれて 塵と成るに

【語釈】

○北陂：北の堤。○花影：花と、その水に映った影。○妖嬈：あでやか。○雪：花吹雪。
○南陌：南の道。
(参考文献) 『中国名詞選』

★ 唐昌觀玉蕊花

唐昌觀の玉蕊花

唐 王建

一樹瓏鬆玉刻成
飄廊點地色輕輕
女冠夜覓香來處
惟見階前碎月明

一樹 瓏鬆して 玉刻成り
廊に飄えって 地に点じ色 軽々
女冠 夜 覓む 香の来る処
惟だ見る 階前 碎月の明かなるを

【語釈】

○唐昌觀：長安安業坊の南にあった道觀の名。○玉蕊花：ビロードモウズイカ。○瓏鬆：繁茂する。○玉刻：美しい携帯の形容。○點地：地に着く。○女冠：女道士。○階前：きざはしの前。○碎月：花によって碎かれてバラバラになった月光。

★海棠

海棠

唐 何希堯

著雨胭脂點點消
 雨に著つき 胭脂えんし 點々てんてんとして消ゆ

半開時節最妖嬈
 半開の時節 最も妖嬈よつじょう

誰家更有黃金屋
 誰が家か 更に黄金の屋有りて

深鎖東風貯阿嬌
 深く鎖して 東風 阿嬌あきょうを貯またん

【語釈】

○胭脂：綺麗で鮮やかな紅色。ここでは海棠の花の紅色。○妖嬈：美しくてなまめかしい。○東風：春風。○阿嬌：娘さん。

海棠

海棠かいとう

宋 蘇軾

春風嫋嫋泛崇光
 春風 嫋々じょうじょうとして 崇光すうこう泛ぐ

香霧空濛月轉廊
 香霧 空濛くうもうとして 月 廊に転まず

只恐夜深花睡去
 只だ恐る 夜深くして 花の睡り去さらんことを

更燒高燭照紅妝
 更に高燭こうしよくを燒くきて 紅妝こうしよくを照す

【語釈】

○嫋嫋：たおやかなさま。○崇光：かがり火の高く燃え上がるさま。○香霧：春の花の香りを籠めた霧。○高燭：花を照らすかがり火。○紅妝：紅の化粧。海棠。

（参考文献） 『漢詩大系 17』

★海棠

海棠

宋 陳與義

海棠脈脈要詩催	海棠 脈々 <small>みやくみやく</small> として詩を要す <small>うなが</small> を催す
日暮紫綿無數開	日暮 紫綿 <small>しめん</small> 無數開く
欲識此花奇絶處	識らんと欲す 此の花 奇絶 <small>きぜつ</small> の処
明朝有雨試重來	明朝 雨有れば 試 <small>こころみ</small> に重来せん

【語釈】

○脈脈…感情が心の中に波打っているさま。○紫綿…ここでは海棠の花。○奇絶…非常に美しい。

★海棠

海棠

宋 陸游

蜀地名花擅古今	蜀地の名花 古今を 擅 <small>ほししいま</small> にす
一枝氣可壓千林	一枝の氣 千林を圧すべし
譏彈更到無香處	譏彈 <small>きだん</small> 更に到る 香無き処
常恨人言太刻深	常に恨む 人言 <small>はやは</small> 太だ刻深 <small>こくしん</small> なるを

【語釈】

○蜀地…四川省。○譏彈…そしりただす。○無香處…海棠の花は香りが薄いとされる。○刻深…嚴酷。

★ 興教寺海棠

興教寺の海棠

明 楊慎

兩樹繁花占上春

兩樹の繁花 上春を占む

多情誰是惜芳人

多情なるは誰か是れ 芳を惜しむ人

京華の一朶千金價

京華 一朶 千金の価

肯信空山委路塵

肯えて信ぜんや 空山路塵に委てらるるを

【語釈】

○興教寺：陝西省長安県杜曲鎮の南の少陵原上にある寺。○繁花：繁密な花。○上春：旧曆一月。○京華：京城の美称。○一朶：一枝。○空山：人氣の無い山。

★ 未開海棠

未開の海棠

金 元好問

枝間新緑一重重

枝間の新緑 一えに重々

小蕾深藏數點紅

小蕾 深く藏し 數点紅なり

愛惜芳心莫輕吐

愛惜す 芳心 軽く吐くこと莫れ

且教桃李鬧春風

且 桃李をして 春風に鬧がしめよ

【語釈】

○重重：非常に深いさま。○愛惜：愛し惜しむ。○芳心：花芯。

★ 白秋海棠

白秋海棠 はくしゅうかいどう

清 尤怡

誰將清淚洒幽墀
散作瑤華別有姿
最是玉人腸斷後

誰か清涙を將つて幽墀に洒ぐ
瑤華を散作して別に姿有り
最も是れ玉人腸断の後

淡妝無語背人時

淡妝語無く人に背く時

【語釈】

○幽墀：奥深いぎざはし。○瑤華：玉白色の花。○散作：散らす。○玉人：美人。○淡妝：薄化粧。○背：背を向ける。

★ 白秋海棠

白秋海棠 はくしゅうかいどう

清 朱受新

清秋湛露浥瓊芳
素影風揺玉砌旁
夜静看花人独立
水晶簾外月如霜

清秋湛露瓊芳を浥し
素影風に揺れる玉砌の旁
夜静かにして花を見て人独り立つ
水晶簾外月霜の如し

【語釈】

○湛露：繁くおく露。○瓊芳：玉のように美しい花。ここでは白秋海棠。○素影：月影。○玉砌：玉で飾ったみぎり。

★楊花

楊花ようか

唐 吳融

不關穠華不占紅

穠華のうかを闘わず 紅を占めず

自飛晴野雪濛濛

自おのずから 晴野を飛び 雪濛濛もつもつ

百花長恨風吹落

百花 長く恨む 風の吹き落すを

唯有楊花獨愛風

唯だ 楊花の 独り 風を愛する有り

【語釈】

○楊花：柳絮。○穠華：花枝の繁盛美麗さ。○濛濛：煙るようにポーとしているさま。

★楊花

楊花ようか

金 高士談

來時官柳萬絲黃

來時かんにりやう 官柳 万糸 黄なり

去日飛毬滿路傍

去日ひきゆう 飛毬 路傍に満つ

我比楊花更飄蕩

我 楊花に比すれば 更に飄蕩ひょうとう

楊花只是一春忙

楊花 只だ是れ 一春のみ忙し

【語釈】

○楊花：柳絮。○官柳：政府が路傍に植えた柳。○万糸：全ての枝。○飛毬：空中にある飛球。柳絮のこと。○飄蕩：流浪。

★ 木犀

木犀

宋 楊萬里

只道秋花艷未強
只だ道う 秋花 艷 未だ強からずと
此花儘更有商量
此の花 俛せ 更に商量有り
東風染得千紅紫
東風 染め得たり 千紅紫
曾有西風半點香
曾て 有や西風 半点の香

【語釈】

○商量：考え計る。○西風：秋風。○半點：ごく僅かなこと。

★ 凝露堂木犀

凝露堂の木犀

宋 楊萬里

夢騎白鳳上青空
夢は 白鳳に騎り 青空に上る
徑度銀河入月宮
徑は 銀河を度り 月宮に入る
身在廣寒香世界
身は 廣寒の香の世界に在り
覺來簾外木犀風
覺め来れば 簾外 木犀の風

【語釈】

○凝露堂：不祥。○廣寒：月にあるとされる広寒宮。後の林には桂があるとされる。○簾外：簾の外。

★紅木犀

紅木犀 べにもくせい

宋 曹勛

秋入幽巖桂影圓

秋は幽巖ゆうがんに入りて桂影けいゑい円まじかなり

香心粟粟照林丹

香心ぞくぞく粟々林を照らして丹たんなり

應隨王母瑤池宴

應まさに王母の瑤池ようちの宴まに随まつて

染得朝霞下廣寒

朝霞ちようかを染得ぞめえて 廣寒こうかんを下るべし

【語釈】

○幽巖：深く暗い岩の洞。○桂影：月影。○香心：花のつぼみを保護して覆う物。○應：「まさに「すべし」と読み、「すべきである」の意。○王母：西王母。○瑤池：伝説で崑崙山にあるという西王母の居所。○朝霞：朝焼け。○廣寒：月にあるとされる広寒宮。後の林には桂があるとされる。

★百日紅

百日紅 ひゃくにちいし

明 楊慎

李徑桃蹊與杏叢

李徑りけい 桃蹊とうけい 杏叢きようそうを与う

春來二十四番風

春來 二十四番の風

朝開暮落渾堪惜

朝開き暮すべに落つ 渾すべて惜むに堪えたり

何似雕蘭百日紅

何んぞ似ん 雕蘭ちようらんの百日紅ひゃくにちいしに

【語釈】

○百日紅：サルスベリ。○李徑：杏のある径。○桃蹊：桃の木の豊富な地方。○杏叢：杏の豊富なくさむら。○春來：春になってから。○二十四番風：二十四番花信風。二十四節気中の小寒から穀雨に至る八節気をふたに分け、各候に咲く花を知らせる風で、ふた候にそれぞれ新たな風が吹くとして、それに花を配したものだ。○雕蘭：欄干の美称。

★ 槐花

槐花

唐 翁承贊

雨中妝點望中黃
雨中的妝点 望中 黄なり
勾引蟬聲送夕陽
蟬声を勾引して 夕陽を送る
憶得當年隨計吏
憶い得たり 当年 計吏に随い
馬蹄終日爲君忙
馬蹄終日 君の為に忙し

【語釈】

○妝點：飾りたてる。○望中：視野の中。○勾引：引き寄せる。○計吏：會計を司る官吏。○馬蹄：ここでは馬にのる身。

★ 雨中看牡丹

雨中牡丹を見る

唐 竇梁贊

東風未放曉泥乾
東風 未だ放たず 曉泥の乾くを
紅藥花開不奈寒
紅藥花開き 寒を奈ともせず
待得天晴花已老
天晴を待ち得たるは 花已に老い
不如攜手雨中看
如^にず 手を携え 雨中に看るに

【語釈】

○東風：春風。○紅藥：芍薬花。

★ 惜牡丹花

牡丹花を惜しむ

唐 白居易

惆悵階前紅牡丹

惆悵す 階前の紅牡丹

晚來唯有兩枝殘

晚來 唯だ 兩枝の残れる有り

明朝風起應吹盡

明朝 風 起りて 応に吹き尽くすべし

夜惜衰紅把火看

夜 衰紅を惜しみて 火を把りて看る

【語釈】

○惆悵：嘆き悲しむ。○階前：庭に降りる階段の前。庭。○晚來：夜になってから。○兩枝：二輪。○應：「まさにすべし」と読み、「きつとくに違いない」の意。○衰紅：残っている紅い花。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集 三』

★ 裴給事宅白牡丹

裴給事宅の白牡丹

唐 盧綸

長安豪貴惜春殘

長安の豪貴 春の残するを惜しむ

爭賞新開紫牡丹

争か賞せん 新開の紫牡丹

別有玉盤承露冷

別に 玉盤の承露の冷かなる有り

無人起就月中看

人の起きて 月中に就きて 看る無し

【語釈】

○裴給事：不祥。○春殘：春が去って行く。○玉盤：玉で作った盤。ここでは承露盤(飲むと不老長寿になるといふ天の露を受ける盤)。○承露：承露盤に溜まった露。

★ 白牡丹

白牡丹

唐 韋 莊

閨中莫妬新妝婦

閨中 妬む莫かれ 新妝の婦

陌上須慚傳粉郎

陌上 須く慚ずべし 伝粉郎

昨夜月明渾似水

昨夜 月明 渾て水に似たり

入門唯覺一庭香

門に入りて 唯だ覺ゆ 一庭の香しきを

【語釈】

○閨中…女性の部屋。○陌上…道の上。○須…「すべからくすべし」と読み、「必ずし
しななければならない。」の意。○傳粉郎…伝粉何郎。美男子のこと。（『世説新語』）

★ 綠牡丹

綠牡丹

清 吳 巽

平臺冉冉黛初勻

平台 冉冉 黛 初めて勻う

不逐鄰園鬥麗春

隣園を逐いて 麗春と鬥わず

金谷荒涼成往事

金谷 荒涼 往事 成り

風前猶想墜樓人

風前 猶お想う 墜楼の人

【語釈】

○平臺…休憩、眺望の為の屋根のない台。○冉冉…しなやかなさま。○麗春…ひなげし。
○金谷…金谷園。晋の石崇所蔵の庭園（『蒙求』緑樹墜樓）。○往事…昔時。○墜樓人…
緑樹。

★芙蓉

芙蓉

唐 高蟾

天上碧桃和露種

天上の碧桃 露に和して種え

日邊紅杏倚雲栽

日辺の紅杏 雲に倚りて栽ゆ

芙蓉生在秋江上

芙蓉 生在り 秋江の上

不向東風怨後開

東風に向つて 後に開くを怨まず

【語釈】

○日邊…京城の付近。○東風…春風。

★木芙蓉

木芙蓉

宋 王安石

水邊無數木芙蓉

水辺 無數 木芙蓉

露滴燕脂色未濃

露は燕脂を滴らせ 色未だ濃ならず

正似美人初醉著

正に美人に似て初めて醉著し

強抬清鏡照粧慵

強いて清鏡を抬げて 粧を照らすこと慵し

【語釈】

○燕脂…紅色。○醉著…酔う。

★ 瓊花

瓊花けいか

明 程敏政

貪看江都第一春

貪り看る 江都第一の春

龍舟元不為東巡

竜舟元 東巡の為ならず

閑花亦自能傾國

閑花かんか 亦た 自ら能く国を傾く

何況當時解語人

何ぞ況んや 当時解語の人

【語釈】

○瓊花：アジサイに似た植物。○江都：江蘇省揚州市の別名。○竜舟：龍を飾った大船。ここで隋の煬帝の龍船。○東巡：皇帝の東方（ここでは揚州）への巡幸。○閑花：瓊花のこと。臣下から揚州の瓊花の話を聞いて、洛陽から揚州への船旅を思いついたという。〔『隋煬帝艷史』〕。○解語人：美女。

★ 瑞香花

瑞香花ずいこうか

宋 韓琦

不管鶯聲向曉催

管せず 鶯声の 曉に向って 催すを

錦衾春晚尚成堆

錦衾 春晚 尚お堆を成す

香紅若解知人意

香紅 若し 人の意を知解せば

睡取東君莫放回

東君を睡取し 放回すること莫かれ

【語釈】

○瑞香花：チンチョウゲ。○錦衾：錦で作ったしとね。○春晚：晩春。○香紅：花。○東君：春の神。○放回：解放。

★ 茉莉花

茉莉花 まつりか

宋 江奎

雖無艷態驚群目

艷態 えんたい 群目を驚かす無きと雖ども

幸有濃香壓九秋

幸に濃香の九秋を圧する有り

應是仙娥宴歸去

應 まさに是れ 仙娥 せんが 宴より帰り去り

醉來掉下玉搔頭

醉 よいきた来りて 掉下 とうかす 玉搔頭 ぎよく搔とう

【語釈】

○茉莉花：アラビアンジャスミン。○艷態：艶美な容姿。○群目：群衆の目。○九秋：陰曆九月の天。秋天。○掉下：ふるい落とす。○仙娥：仙女。○玉搔頭：玉のかんざし。

★ 月季花

月季花 げつきか

宋 韓琦

牡丹殊絶委春風

牡丹 しゆぜつ 殊絶 春風に委てられ

露菊蕭疎怨晚叢

露菊 ろぎく 蕭疎 しょうそ 晚叢 ばんそうを怨む

何似此花榮艷足

何ぞ似たる 此の花 榮艷 えいえん足り

四時長放淺深紅

四時 長く放つ 淺深の紅

【語釈】

○月季花：コウシンバラ。○殊絶：超絶。○蕭疎：草木の葉がまばらで寂しいこと。○晚叢：秋の終わりに茂る。○榮艷：長く艶やかであること。○四時：四季。

★菊花

菊花

唐 元稹

秋叢繞舍似陶家
遍繞籬邊日漸斜
不是花中偏愛菊

秋叢舍を繞り陶家に似たり
遍く籬邊を繞り日漸く斜なり
是れ花中偏く菊を愛するならず
此の花開き尽くせば更に花無し

【語釈】

○秋叢…ここでは菊のこと。○陶家…陶淵明の家。○籬邊…垣根のあたり。○漸…次第次第に。

★菊花

菊花

唐 白居易

一夜新霜著瓦輕
芭蕉新折敗荷傾
耐寒惟有東籬菊
金粟花開曉更清

一夜新霜瓦に著いて輕し
芭蕉は新たに折れて敗荷は傾く
寒に耐うるは惟だ東籬の菊のみ有りて
金粟の花は開いて曉更に清し

【語釈】

○敗荷…枯れて破れた蓮の葉。○東籬菊…陶潜の「飲酒其の五」に基づく。○金粟…キンモクセイのことだが、ここでは菊の花の色。

(参考文献)

『和漢名詞選類評釈』

★ 十日菊

十日の菊

唐 鄭谷

節去蜂愁蝶不知
節去り蜂愁うるに蝶は知らず
曉庭還繞折殘枝
曉庭 還また繞めぐる 折殘の枝
自緣今日人心別
自おのずから 今日 人心の別なるに縁よる
未必秋香一夜衰
未だ必ずしも 秋香は一夜に衰えず

【語釈】

○十日菊：重陽の節句の翌日の菊をいう。○節去：重陽が過ぎたことをいう。曉庭：明け方の庭。還繞：蝶が菊の周りを飛ぶ。折殘枝：重陽が過ぎ、折れ損なわれた菊のこと。人心別：重陽が過ぎると誰も菊に見向きもしないのは、人の節に重きをおくがためなり。菊が変わるわけではない。秋香：菊の香り。重陽が過ぎても菊の香りに変わりはない、一日過ぎたとしても十分に賞するに値する。

★ 重陽後菊花

重陽後の菊花

宋 范成大

寂莫東籬濕露華
寂莫たる東籬 露華に湿うるおう
依前金罍照泥沙
依いぜん前たる金罍 泥沙を照らす
世情兒女無高韻
世情 兒女 高韻無く
只看重陽一日花
只だ看る 重陽 一日の花

【語釈】

○重陽：旧曆九月九日。○寂莫：ひっそりとして物寂しいさま。○東籬：陶淵明「飲酒其の五」による。○露華：露水。○依前：以前のままである。○金罍：菊花の比喩。○世情：世俗の情。○高韻：高雅な詩文。

★ 枯菊

枯菊

宋 陸游

翠羽金錢夢已闌
空餘殘蕊抱枝乾
紛紛輕薄隨流水
黃與姚花一樣看

翠羽すいう 金錢 夢 已にたけなわ 闌なり
空しく余す殘蕊ざんしん 枝を抱いて乾く
紛紛ふんぶん たる輕薄 流水に随い
黄と姚花ようか と 一樣に看る

【語釈】

○翠羽：ネギの葉の喩え。○金錢：金錢花。○殘蕊：損なわれたしべ。○紛紛：まじり乱れるさま。○黄：菊。○姚花：牡丹の名稱。

★ 葵

葵

宋 劉敞

白露清風催八月
紫蘭紅葉共淒涼
黃花冷落無人看
獨自傾心向太陽

白露 清風 八月をうなが 催す
紫蘭 紅葉 共にせじりよう 淒涼
黃花 冷落して 人の看る無く
独り 自らみずか 心を傾け 太陽に向う

【語釈】

○葵：向日葵。ヒマワリ。○白露：秋天の露水。○淒涼：もの寂しいさま。○冷落：さびれる。

★ 黄葵

黄葵 こうき

宋 陸游

開時閑淡斂時愁

開時 かんとん 閑淡 れんじ 斂時愁 う

蘭菊應容預勝流

蘭菊 らんきく 応 まき に勝流 あす に預 あす かることを容 あす すべし

剩欲持杯相領略

剩 あまつせ え杯 あまつせ を持ち あまつせ ちて 相領 あいつり 略 あいつり せんと欲 あいつり し

一庭風露不禁秋

一庭 あいつり の風露 あいつり 秋 あいつり に禁 あいつり ぜず

【語釈】

○黄葵：黄蜀葵。トロロアオイ○閑淡：閑静で淡泊なこと。○斂時：つぼむ時、散るとき。○應：「まさにくすべし」とよみ「くすべきである」の意。○勝流：優れた身分。○預：仲間に入る。○容：受容する。○領略：意義をさとる。

★ 金錢花

金錢花 きんせんか

唐 皮日休

陰陽爲炭地爲爐

陰陽 いんやう 炭 たん と為 な り地 ち 炉 ろ と為 な る

鑄出金錢不用模

鑄 ちゆう 出 しゆつ す 金錢 きんせん 模 も するを を 用 もち い い ず

莫向人間逞顔色

人間 じんかん 向 むか いて 顔色 げんしき を逞 てい する莫 な かれ

不知還解濟人無

知 し ら ら ず 還 ま た 人 ひと の 濟 せい なることを を 解 と けるや や 無 いな や

【語釈】

○金錢花：キンポウゲ。○金錢：金錢花。○人間：人間社会。○濟：すっきりと整っているさま。

★ 金銭花

金銭花

清 藩鐘彦

鄧氏銅山虚設想

鄧氏の銅山 虚しく想を設く

藩郎榆莢許為鄰

藩郎の榆莢 隣の為に許す

清宵風露頻頻擲

清宵風露 頻々として擲つ

似向空庭卜遠人

空庭に向いて 遠人を卜するに似たり

【語釈】

○金銭花：キンポウゲ。○鄧氏銅山：富の源泉や富を得るための資本。『史記』佞幸列伝による。○藩郎：南朝の梁の沈約。腰が細かった。○藩郎榆莢：沈郎錢。榆莢のこと。○頻頻：度重なるさま。

★ 虞美人草

虞美人草

明 孫七政

薔薇開盡綠陰涼

薔薇 開き尽し 緑陰涼し

西國名花此際芳

西国の名花 此の際に芳し

夜月空懸漢宮鏡

夜月 空に懸かる 漢宮の鏡

幽姿猶帶楚雲妝

幽姿 猶お帯ぶ 楚雲の妝

【語釈】

○西國：西域。虞美人草はヨーロッパからもたらされた。○此際：このとき。○幽姿：優雅な姿。○楚雲：女性の秀美な髪の比喩。

★ 雞冠花

雞冠花けいかんか

唐 羅 鄴

一枝穠豔對秋光
一枝穠豔 秋光に對す
露滴風搖倚傍
露滴 風に揺れて 砌傍に倚る
曉景乍看何處似
曉景 乍ち看る 何ぞ似たる処
謝家新染紫羅裳
謝家 新たに染む 紫羅裳

【語釈】

○雞冠花：鶏頭（ケイトウ）。○穠豔：非常に美しいさま。○秋光：秋景色。○砌傍：みぎりの傍ら。○謝家：晋の太傅謝安の家。転じて貴族の家柄の人の家。○紫羅裳：紫の衣の裾。

★ 秋荷

秋荷しゅうか

清 宋 俶

露冷蓮陂半已空
露 冷かにして 蓮陂 半ば已に空し
芳叢零落泣西風
芳叢 零落して 西風に泣く
無人解道殘花好
人の殘花の好きを 解道する無く
獨立寒塘煙雨中
独り立つ 寒塘 煙雨の中

【語釈】

○秋荷：秋のハス。○蓮陂：蓮の生えている隄。○芳叢：叢がっている花。○零落：草木が枯れ落ちること。○西風：秋風。○解道：理解する。○寒塘：寒い池塘。

★ 敗荷

敗荷はいか

宋 黄 濟

紅錦機空水國窮

紅錦こうきん 機空しくして 水国窮まる

轉頭千盖優秋風

頭こづくをせん転がいずれば 千盖 秋風にたお優る

鴛鴦一段榮枯事

鴛鴦えんおう 一段 榮枯の事

都在沙鷗冷眼中

都すべて 沙鷗さおうの冷眼中に在り

【語釈】

○敗荷：損なわれた蓮の葉。○紅錦：紅色の錦。○水国：水郷。○千盖：ここでは多くの蓮の葉。○鴛鴦：オシドリ。○沙鷗：砂浜の鷗。『列子』黄帝篇による？

★ 題敗荷

敗荷に題す

元 王 翰

曾向西湖載酒歸

曾おて 西湖に向いて 酒を載せて帰る

香風十里弄晴暉

香風 十里 晴暉せいぎを弄す

芳菲今日凋零盡

芳菲ほうひ 今日 凋零ちようれいし尽し

却送秋聲到客衣

却かえつて 秋声を送り 客衣かくいに到る

【語釈】

○敗荷：損なわれた蓮の葉。○西湖：浙江省杭州市の近くにある風光明媚な湖。○芳菲：香花芳草。○凋零：しほみ落ちる。○秋声：秋の気配を感じさせるもの音。○客衣：旅衣。

★ 盆荷

盆荷 ほんか

宋 僧居簡

萍粘老瓦水涵天

ひょう 萍は老瓦ろうがに粘り 水涵すいかんの天

數葉田田貼帖錢

數葉 でん 田々 帖錢ちようせんを貼る

才大古來無用所

才 大きなるは 古來 用いる所無し

不須十丈藕如船

須もちいず 十丈藕じゆ 船の如きなるを

【語釈】

○盆荷：水盆で生育された蓮。○老瓦：老瓦盆。古い陶製の酒器。○水涵天：水に映って見える空。○田田：蓮などの水草の広い葉が水に浮かんでいるさま。○藕：蓮の根。

★ 詠盆中品字蓮

盆中の品字蓮を詠ず

明 徐中行

笑看菡萏出盆池

笑い看る 菡萏かんしやう 盆池に出ずるを

並蒂三花宛宛垂

並蒂へいてい 三花 宛々えんえんとして垂る

却似太真新浴罷

却やつて似たり 太真たいしんの新浴を罷むに

雙携秦鏡鏡中窺

秦鏡しんかくを双携そうけいして 鏡中うかがに窺う

【語釈】

○菡萏：蓮花。○盆池：水を引いて作った池。○並蒂：同じ茎に咲く二つの花。○宛宛：しなやかなさま。○太真：楊貴妃。○秦鏡：玄宗皇帝の秦國夫人と虢國夫人の併称。

★牽牛花

牽牛花

宋 秦觀

銀漢初移漏欲殘
 步虛人倚玉闌干
 仙衣染得天邊碧
 乞與人間向曉看

銀漢 初めて移り 漏 残せんと欲す
 步虚の人は倚る 玉闌干
 仙衣 染め得たり 天辺の碧
 人間に乞与し 暁に向いて看さしむ

【語釈】

○牽牛花：アサガオ。○銀漢：銀河。○漏：水時計。○殘：尽きる。○步虚人：道士。○玉闌干：玉で飾った欄干。○天邊：地平線近くの空。○乞與：給与。○人間：人間世界。

★牽牛花

牽牛花

明 朱茂曙

金風初動露華滋
 看得朝暉未上時
 多少紅樓昏夢裏
 不知秋色到疎籬

金風 初めて動きて 露華 滋し
 看得たり 朝暉 未だ上らざる時
 多少の紅樓 昏夢の裏
 知らず 秋色の疎籬に到るを

【語釈】

○牽牛花：アサガオ。○金風：秋風。○露華：露水。○朝暉：朝日。○紅樓：華美な楼房。○秋色：秋の気配。○疎籬：疎らな垣根。

★ 玉簪花

玉簪花ぎょくしんか

宋 黃庭堅

宴罷瑤池阿母家

宴は罷むや 瑤池ようち 阿母あぼの家

嫩瓊飛上紫雲車

嫩瓊じょんけい 飛び上る 紫雲車しうんしゃ

玉簪墮地無人拾

玉簪ぎょくしん 地に墮ち 人の拾う無く

化作東南第一花

化して 東南第一の花と作なる

【語釈】

○玉簪花：ユリ科の多年草。○瑤池：崑崙山にあるという伝説上の池。西王母の居所。○阿母：西王母。○紫雲車：天帝が乗る車。○玉簪：玉簪花。

★ 霧中花

霧中花むちゆうか

清 汪應銓

名花籠霧認難真

名花 霧を籠め 認むること真なり難し

道是還非夢裏身

道いう 是れ 還また 夢裏むりの身に非ずと

彷彿漢家宮殿冷

彷彿ほうふつ 漢家 宮殿冷やかなり

隔帷遙見李夫人

帷を隔てて 遙かに見る 李夫人

【語釈】

○霧中花：霧の中で咲く花。○夢裏：夢の中。○彷彿：似ているさま。○漢家：漢の王朝。○李夫人：李夫人（西漢の李延年の妹。舞が上手く武帝の寵愛を受けた）のような容姿。

★ 春來風雨無一日好晴因賦瓶花

宋 范成大

春來 風雨 一日の好晴無し 因りて瓶花を賦す

滿插瓶花罷出遊

瓶花を滿挿して 出遊を罷む

莫將攀折爲花愁

攀折を將つて 花の為に愁う莫かれ

不知燭照香薰看

知らず 燭照 香薰の看

何似風吹雨打休

何ぞ似ん 風吹き雨打ちて休するに

【語釈】

○滿插：一杯に挿す。○出遊：外出して遊ぶこと。○攀折：折り取る。○燭照：燭台の光。○香薰：薰じた香。

★ 殘花

殘花

唐 韋莊

江頭沈醉泥斜暉

江頭に沈酔して 斜暉に泥む

却向花前慟哭歸

却つて花前に向いて 慟哭して歸る

惆悵一年春又去

惆悵す 一年 春又た去り

碧雲芳草兩依依

碧雲 芳草 兩つがら依々たるを

【語釈】

○殘花：今にも落ちようとして散り残っている花。○江頭：江のほとり。○沈酔：泥酔。○斜暉：夕陽。○惆悵：ひどく悲しむ。○依依：遠くぼんやりしているさま。

★ 殘花

殘花ざんか

明 邱雲霄

昨日看花花滿枝
今朝爛漫點青池
無情莫抱東風恨
作意開時是謝時

昨日花を看れば花枝に満つ
今朝爛漫らんまん青池に点つず
無情抱いだくこと莫かれ東風の恨
作意開く時は是れ謝する時

【語釈】

○殘花…今にも落ちようとして散り残っている花。○東風…春風。○作意…心を用いる。
○謝…散る。

★ 落花

落花

宋 僧贊寧

蝶醉蜂狂香正濃
晚來階下墜衰紅
開時費盡陽和力
落處難禁一陣風

蝶は酔い蜂は狂う香正に濃よやかかなり
晚來階下ばんらい衰紅墜すいこうつ
開時費し尽す陽和ようわの力
落つる処禁いじ難し一陣の風

【語釈】

○晚來…夜になってから。○衰紅…凋んで衰えた花。○陽和…のどかな春候。

★感花

花に感ず

唐 崔塗

繡軛香韉夜不歸

繡軛しゅうあく香韉こうせん夜歸やきらず

少年爭惜最高枝

少年しょうねん争あ惜おしむ最高さいこうの枝えだ

東風一陣黃昏雨

東風とうふう一陣いちじん黃昏こうこんの雨あめ

又是繁華夢覺時

又また是これれ繁華はんか夢覺むせきむる時とき

【語釈】

○繡軛…刺繡を施したくびき。○香韉…華美な鞍。○東風…春風。○黃昏…たそがれ。○繁華…咲き乱れている花。若くて美しいこと。

★種花

花を種う

宋 歐陽修

淺深紅白宜相間

淺深せんしん紅白こうはく宜あしく相間あいまじゆ

先後仍須次第栽

先後かくのこ仍なほく須すべく次第しだいに栽うゆべし

我欲四時携酒去

我われ四時しじ酒さけを携もちて去いらんと欲ほす

莫教一日不花開

一いち日も花はなを開ひらかざらしむる莫なれ

【語釈】

○仍…このように。○次第…順序よく。○四時…四季。○去…訪れる。

★買花

花を買う

清 王澤宏

賣花擔上露纔乾

売花担上露纔かに乾く

野老移來滿藥欄

野老移り来りて薬欄に満つ

抛却故山花事盛

抛却す故山花事の盛なるを

翻來燕市買花看

翻つて燕市に來りて花を買うを看る

【語釈】

○賣花擔：売る花を担ぐ荷物。○野老：郊外に住む老人。○藥欄：薬草園。○抛卻：抛つ。却是助字。○故山：故郷の山。○燕市：今の北京。

★惜花

花を惜しむ

宋 張泌

蝶散鶯啼尚數枝

蝶散じ鶯啼いて尚お数枝

日斜風定更離披

日斜に風定まりて更に離披

看多記得傷心事

看ること多くして記得す傷心の事

金谷樓前委地時

金谷楼前地に委てらるる時

【語釈】

○離披：花が十分咲ききること。○記得：はっきりと覚える。○金谷樓：晉の石崇が持っていた金谷園の楼。『蒙求』緑樹墜楼。

★惜花

花を惜む

唐 來鵬

東風漸急夕陽斜

東風漸よきつく急にせ夕陽斜ゆりやうせなり

一樹夭桃數日花

一樹の夭桃よつじつ數日の花

爲惜紅芳今夜裏

為に惜む紅芳こうほう今夜の裏うち

不知和月落誰家

知らず月に和して誰が家にか落つる

【語釈】

○東風…春風。○漸…だんだんと。○夭桃…佳麗な桃の花。○紅芳…紅色の花。

★松

松

宋 李師中

半依巖岫半雲端

半はんばは巖岫がんしゅうに依り半はんばは雲端うんたん

獨立亭亭耐歲寒

独り立つ亭亭ていてい々歲寒さいかんに耐ゆ

一事頗爲清節累

一事頗りに清節るいの累るいを爲し

秦時曾作大夫官

秦時曾かつて大夫の官なを作す

【語釈】

○巖岫…山々。○雲端…雲の端。○亭亭…高く聳えるさま。○歲寒…一年の嚴寒の時節。
○清節…高潔な節操。

★ 松棚

松棚

宋 陳元信

旋斫松枝架作棚

旋りて松枝を斫り架して棚と作す

蒼髯如戟畫崢嶸

蒼髯戟の如く画崢嶸

清陰堪愛還堪恨

清陰愛するに堪え還た恨むに堪えたり

遮却斜陽礙月明遮

斜陽を遮却して月明を礙ぐ

【語釈】

○蒼髯：青いヒゲ。○崢嶸：高く険しいさま。○清陰：清らかな影。○遮却：遮る。却是助字。

★ 柳

柳

唐 杜牧

數樹新開翠影齊

数樹新たに開きて翠影齊し

倚風情態被春迷

風に倚る情態春に迷わさる

依依故國樊川恨

依々たり故国樊川の恨み

半掩村橋半掩溪

半ばは村橋を掩い半ばは溪を掩う

【語釈】

○新開：枝を伸ばし始める。○翠影：緑色の姿。○依依：なよなよしているさま。遠くぼんやりしているさま。○樊川：長安南郊を流れる川。杜牧の祖先からの莊園があった。

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 9』

★柳

柳

唐 顧 雲

灞橋晴來送別頻
相俚相依不勝春
自家飛絮猶無定
爭把長條絆得人

灞橋はきょう晴來はれきた送別頻しきりなり
相俚よ相依よりて春に勝えず
自家の飛絮猶お定まる無く
争いかでか長條とを把とくじんり得人つなを絆がらん

【語釈】

○灞橋：長安の東の灞上にある橋。灞上は東に出発する人の送別の地。○飛絮：飛ぶ柳絮。○長條：柳の枝。○得人：才徳兼備の人。

★柳

柳

唐 李 中

春來無樹不青青
似共東風別有情
閑憶舊居溢水畔
數枝煙雨屬啼鶯

春來 樹の青々ならざるは無く
東風と共に 別わかれに 情有るに似たり
閑に憶う 旧居 溢水の畔
數枝の煙雨 啼鶯ていおうに属しよぐす

【語釈】

○春來：春になってから。○東風：春風。○舊居：旧宅。○溢水：江西省を流れる河川。九江市を通り、鄱陽湖に注ぐ。○煙雨：こぬか雨。

★柳

柳

唐

唐彦謙

絆惹東風別有情

東風を絆惹し別に情有り

世間誰敢鬪輕盈

世間誰か敢えて輕盈を鬪わん

楚王王宮三千女

楚王の王宮三千の女

餓損蠻腰學不成

蠻腰を餓損し學も成らず

【語釈】

○絆惹：引き繫ぐ。○東風：春風。○輕盈：女性の姿態の纖柔なさま。楚の靈王。腰の細い美人を好んだため、寵を争って絶食し餓死するものが多く出たという。『荀子』君道。○蠻腰：細腰。○餓損：餓えて損なうこと。

★柳

柳

宋

張耒

永豊坊裏舊腰股

永豊坊裏旧腰股

曾見青青初種時

曾て見る青青初めて種えし時

看盡道傍離別恨

看尽す道傍離別の恨

爭教風絮不狂飛

争か風絮をして狂飛せしめざらん

【語釈】

○永豊坊：洛陽にある地名。○腰股：腰。腰身。ここでは柳の枝。○道傍：道の脇。○風絮：風に飛ぶ柳絮。

★柳

柳

明 陳輝

空塘流水浸長條
細雨疎煙拂灞橋
長笛數聲人不見
春風斜繫木蘭橈

空塘 流水 長条を浸す
細雨 疎煙 灞橋を払う
長笛 数声 人見えず
春風 斜めに繫ぐ 木蘭の橈

【語釈】

○長條…柳の長い枝。○細雨…こぬか雨。○疎煙…疎らな靄。○灞橋…長安の東の灞上にある橋。灞上は東に出発する人の送別の地。○橈…かい。

★衰柳

衰柳

明 王恭

西風昨夜灞陵秋
千樹蕭條帶驛樓
莫道離人空有恨
暮蟬寒雀也關愁

西風 昨夜 灞陵の秋
千樹 蕭条として 驛楼を帯ぶ
道う莫かれ 離人空しく恨有りと
暮蟬 寒雀 也た愁に關わる

【語釈】

○西風…秋風。○灞陵…長安の東にある古城。○蕭條…もの静かなさま。○驛樓…宿場街の楼房。○離人…旅だって行く人。

★楊柳枝

楊柳枝ようりゅうし

唐 劉禹錫

城外春風吹酒旗
行人揮袂日西時
長安陌上無窮樹
唯有垂楊管別離

城外 春風 酒旗を吹く
行人 袂を揮う 日 西する時
長安陌上 無窮の樹
唯だ 垂楊の別離を 管する有り

【語釈】

○楊柳枝…樂府題。横笛の曲から派生。○酒旗…酒屋の目印の旗。○行人…旅人。○陌上…道の上。

★楊柳枝

楊柳枝ようりゅうし

唐 白居易

紅板紅橋青酒旗
館娃宮暖日斜時
可憐雨歇東風定
萬樹千條各自垂

紅板 紅橋 青き酒旗
館娃宮 暖かなり 日斜なる時
憐むべし 雨歇んで東風定まり
万樹千条 各々 自ら垂るるを

【語釈】

○楊柳枝…樂府題。横笛の曲から派生。○館娃宮…吳王夫差が西施のために建てた宮殿。○東風…春風。

★楊柳枝

楊柳枝ようりゅうし

唐 溫庭筠

宜春苑外最長條
閑裊春風伴舞腰
正是玉人腸斷處
一渠春水赤闌橋

宜春苑外 最長の條
閑かに 春風に裊そよぎ 舞腰ぶように伴う
正に是れ 玉人 腸断の処
一渠いっきよの春水 赤闌せきらんの橋

【語釈】

○楊柳枝：樂府題。横笛の曲から派生。○宜春苑：庭園の名。秦の時長安の東。宋のとき開封の東にあった。○玉人：美人。○腸斷：非常な悲しみ。○赤闌橋：紅色の欄干の橋。

★楊柳枝詞

楊柳枝詞ようりゅうしし

明 劉基

多事垂楊管送迎
長條折盡短條生
不知幾許東風裏
猶帶輕烟冒晚晴

多事 垂楊 送迎に管す
長條 折り尽して 短條生ず
知らず 幾許いくばくか 東風の裏うち
猶お 輕煙を帯び 晚晴おかを冒すを

【語釈】

○楊柳枝詞：樂府題。横笛の曲から派生。○長條：長い柳の枝。○折盡：別れの時に追って環にして相手の首に掛ける。○東風：春風。○輕烟：輕淡な煙霧。

★楊柳枝詞

楊柳枝詞

明 胡儼

罨畫樓前雨歇時

罨畫樓前 雨歇む時

千絲萬縷綠垂垂

千糸 万縷 緑垂々

無端却被風吹起

端無くも 却って 風に吹起され

繚亂春心不自持

繚亂 春心 自ら持たず

【語釈】

○楊柳枝詞：樂府題。横笛の曲から派生。○罨畫樓：色彩鮮明な絵画で飾られた楼閣。○千絲萬縷：数え切れないほどの〔柳の枝〕。○垂垂：垂れ下がっているさま。○繚亂：散り乱れるさま。○無端：思いがけず。

★楊柳枝詞

楊柳枝詞

清 虞黃昊

楊花如雪撲征衣

楊花 雪の如く 征衣を撲つ

馬上征夫苦憶歸

馬上の征夫 苦だ帰るを憶う

曾向曲中迴首望

曾て 曲中に向いて 首を迴らして望み

而今真在路傍飛

而今 真に 路傍に在りて飛ぶ

【語釈】

○楊柳枝詞：樂府題。横笛の曲から派生。○楊花：柳絮。○征衣：旅衣。○征夫：旅人。○曲中：曲がりくねった道。○而今：今。

★折楊柳

折楊柳

明 晏 鐸

河橋楊柳半無枝

河橋の楊柳 半ば枝無し

多為行人送別離

多くは 行人の為に 別離を送る

羌虜不知蕭索盡

羌虜は知らず 蕭索し尽くすを

月明猶向笛中吹

月明に 猶お 笛中に向いて吹く

【語釈】

○折楊柳…樂府題。横笛の曲から派生。別れに際し、柳の枝を折って環にし、相手の首に掛ける。○羌虜…えびすの軍隊。○蕭索…少ないさま。

★折楊柳

折楊柳

明 魏時敏

嫩葉柔條拂短簷

嫩葉 柔条 短簷を払う

鶯啼燕語曉風恬

鶯啼 燕語 曉風に恬し

傷春無計留春住

春を傷み 計無く春住するに留まる

怕見飛花不捲簾

見るを怕る 飛花 簾を捲かざるを

【語釈】

○折楊柳…樂府題。横笛の曲から派生。別れに際し、柳の枝を折って環にし、相手の首に掛ける。○嫩葉…若葉。○柔條…柔らかい枝。○短簷…短い軒。○飛花…柳絮のこと。

★折楊柳

折楊柳

唐 楊巨源

水邊楊柳麴塵絲

水辺の楊柳 麴塵きくじんの糸

立馬煩君折一枝

馬を立たじめ 君を煩わして 一枝を折る

惟有春風最相惜

惟ただだ 春風の 最も相惜あいおしむ有り

殷勤更向手中吹

殷勤いんぎんに 更に 手中に向むかって吹く

【語釈】

○折楊柳：樂府題。横笛の曲から派生。別れに際し、柳の枝を折って環にし、相手の首に掛ける。○麴塵糸：若芽を吹いた柳の細い枝が黄緑色の糸のように見えること。○向：於いて。

〔参考文献〕 『漢詩鑑賞辞典』

★對竹

竹に對す

唐 李中

懶穿幽徑衝鳴鳥

幽徑うがを穿うちて 鳴鳥を衝つくに懶ものうし

忍踏清陰損翠苔

清陰を踏ふみて 翠苔すいたいを損ううに忍しのびんや

不似閑閑欹枕聽

似にず 閑々かんかんとして 枕まくらを欹よけて聴きくに

秋聲如雨入軒來

秋声 雨の如く軒に入りて来る

【語釈】

○幽徑：静かな小路。○清陰：清涼な木陰。○翠苔：緑の苔。○閑閑：静かに落ち着いて
いるさま。○秋声：秋の気配を感じさせるもの音。

★ 題竹

竹に題す

元 劉永之

讀易茅齋夏日長

易を讀み 茅齋 夏日長し

琅玕繞屋擬瀟湘

琅玕 屋を繞り 瀟湘に擬す

山風一夜吹疏雨

山風 一夜 疏雨を吹き

共愛西窗五月涼

共に愛す 西窓 五月の涼

【語釈】

○茅齋：茅吹きの書齋。○琅玕：竹の青緑の形容。竹。○瀟湘：瀟水と湘水の合流する洞庭湖南岸地方。○疏雨：疎らな雨。

★ 新竹

新竹

清除緒

森森碧玉已成行

森々たる碧玉 已に行を成す

一雨長梢盡過牆

一雨 長梢 尽く牆を過ぐ

微露粉痕初解籜

微かに粉痕を露し 初めて籜を解く

疑君已帶九秋霜

疑うらくは 君 已に九秋の霜を帯ぶかと

【語釈】

○森森：樹木が盛んに茂るさま。○碧玉：青緑の玉。竹のこと。○長梢：〔竹〕の長いこずえ。○籜：竹の皮。○九秋：陰曆九月。

★新筍

新筍

宋 朱松

春風吹起籜龍兒
戢戢滿山人未知
急喚蒼頭斷烟雨
明朝吹作碧參差

春風吹き起す 籜竜の児
戢々として 山に満ち人未だ知らず
急に 蒼頭を喚び 煙雨を斷る
明朝 吹き作す 碧 參差たり

【語釈】

○籜龍：タケノコの異名。○戢戢：寄り集まるさま。○蒼頭：青い頭巾を被った兵卒。○烟雨：こぬか雨。○參差：不揃い。

★初食笋呈座中

初めて笋を食し座中に呈す

唐 李商隱

嫩籜香苞初出林
五陵論價重如金
皇都陸海應無數
忍剪凌雲一寸心

嫩籜 苞香 初めて林を出ず
五陵 論價 重きこと金の如し
皇都陸海に 応に無数なるべし
忍剪す 凌雲 一寸の心

【語釈】

○嫩籜：若い竹の皮。○苞香：包んだもの（皮）の香。○五陵：漢の高帝以下五人の帝の墓があるところの付近、豪遊の人が多く住んでいる。○論價：議定價格。○皇都：長安。○陸海：物産の豊富な地。○應：「まさに「すべし」と読み、「きつとくであるに違いない」の意。○忍剪：残酷に剪る。○凌雲：直上の雲霄。志が崇高又は意氣高超のたとえ。○一寸心：一片の誠心。

★ 河邊枯樹

河辺の枯樹こじゆ

唐 長孫佐輔

數圍孤樹半心存

數圍の孤樹 半心存す

野火燒枝水洗根

野火やか 枝を燒き 水根を洗う

應は無機承雨露

應まさに是れ 機まきの 雨露うけたまわを 承うる無かるべし

却將春色寄苔痕

却かえつて 春色もを將もつて 苔痕たいこんに寄す

【語釈】

○半心：少しの心。○機：ころあい。○應：「まさにくすべし」と読み、「きつとくであ
るに違いない」の意。○春色：春景色。春の気配。

★ 落葉

落葉

宋 陸游

萬瓦清霜伴月明

萬瓦ばんがの清霜せいそう 月明げつめいに伴う

卧聽殘漏若爲情

卧ふして聽きく殘漏ざんろう 若いかん為なんぞ情なさなる

無端木葉蕭蕭下

端はしな無くも 木葉もくよう 蕭々しょうしょうとして下り

更與愁人作雨聲

更たに愁人なの与よに 雨聲あめこゑを作す

【語釈】

○萬瓦：多くの瓦。○殘漏：夜明けに尽きようとしている水時計の音。○若爲：どれほ
ど。○無端：思いがけず。○蕭蕭：主として馬・落葉・風雨などのもの寂しい形容。

★ 夜間落葉聲

夜落葉の声を聞く

清 乾隆帝

霜後疎林葉已乾

霜後の疎林葉已に乾く

清霄風送打窓寒

清霄風送り窓を打ちて寒し

飄冷今夜知多少

飄冷今夜知んぬ多少ぞ

曉起憑欄仔細看

曉起し欄に憑りて仔細に看る

【語釈】

○清霄：清静な夜晩。○飄冷：漂い落ちる。○曉起：曉に起きる。

★ 春草

春草

宋 劉 敞

春草綿綿不可名

春草綿々名づくべからず

水邊原上亂抽榮

水辺原上乱れて榮を抽ず

似嫌車馬繁華處

嫌うに似たり車馬繁華の処

纔入城門便不生

纔に城門に入りて便ち生ぜず

【語釈】

○綿綿：長く続いて絶えないさま。

★ 春草

春草

宋

楊萬里

天欲遊人不踏塵

天遊人の塵を踏まざるを欲す

一年一換翠茸茵

一年一換翠茸の茵

東風猶自嫌蕭索

東風猶自嫌蕭索を嫌い

更遣飛花繡好春

更に飛花をして好春を繡わしむ

【語釈】

○遊人：旅人。○一年一換：年ごとに換わる。○翠茸：細密な若草。○東風：春風。○猶自：今なお。○蕭索：もの寂しいさま。

★ 曲江春草

曲江の春草

唐

鄭谷

花落江堤簇暖煙

花落つ江堤 暖煙簇がる

雨餘草色遠相連

雨余草色 遠く相連なる

香輪莫輾青青破

香輪 青々を輾じて破る莫かれ

留與遊人一醉眠

留与せよ遊人の一醉眠に

【語釈】

○曲江：長安東南の慈恩寺の近くの地。曲江池があった。○暖煙：暖かい靄。○雨餘：雨上がり。○香輪：車の美称。○輾：車輪で轆く。○留与：残しておいて与える。○遊人：旅人。

★ 芳草

芳草

唐 羅 鄴

芳草和煙暖更青

芳草煙に和し暖更に青し

閑門要路一時生

閑門かんもん 要路ようろに一時いちじに生なず

年年點檢人間事

年々ねんねん 点檢てんけんす 人間じんかんの事

唯有春風不世情

唯だ春風の世情ならざる有り

【語釈】

○閑門…人の出入りの少ない静かな門。○要路…遮られた道。○点檢…考察。○人間…人間社会のこと。○世情…世俗の情。

★ 春蔬

春蔬しゆんそ

宋 張 耒

新春書劍滯江城

新春 書劍 江城きやうじやうに滯とどる

又見南蔬入旅羹

又た見る 南蔬なんその旅羹りよかんに入るを

關心太昊祠前路

心こころに関かんす 太昊たいこう祠し前の路

小甲連畦带雪晴

小甲せうが 連畦れんけい 雪ゆきを帯おびて晴はる

【語釈】

○春蔬…春の野菜。○書劍…文武両道に優れた者。○江城…長江のほとりにある街。○南蔬…南方の野菜。○旅羹…旅中で食べるあつもの。○太昊…伝説中の古帝伏羲氏。兄妹または夫婦と目される女媧と共に、蛇身人首の姿で描かれることがある。○小甲…植物生長初期の若葉。

★ 擷菜

菜を擷す

宋 蘇軾

秋來霜露滿東園

秋來 霜露 東園に満つ

蘆葍生兒芥有孫

蘆葍は兒を生じ 芥には孫有り

我與何曾同一飽

我 何曾と同一に飽く

不知何苦食雞豚

知らず 何の苦か 雞豚を食わん

【語釈】

○秋來…秋になってから。○蘆葍…大根。○芥…からしな。○何曾…晋の人。非常な美食家であった。

★ 雨蕉

雨蕉

明 湯顯祖

東風吹展半廊青

東風 吹き展ず 半廊の青

數葉芭蕉未擬聽

數葉の芭蕉 未だ聴くを擬せず

記得楚江殘雨後

記得す 楚江 殘雨の後

背燈人語醉初醒

灯に背く人語 醉初めて醒むを

【語釈】

○雨蕉…雨に打たれる芭蕉の葉。○東風…春風。○擬…くしようとする。○記得…記憶している。○楚江…楚の地方の長江。

★ 蕉雨

蕉雨しやうう

清 高 珩

風動仙鸞尾滿庭
風動いて 仙鸞尾庭に満つ
幽人欵枕幾回聽
幽人 枕を欵てて 幾回か聴く
雨聲昨夜添多少
雨声 昨夜 添うこと多少
又展芭蕉一葉青
又た展ず 芭蕉 一葉の青

【語釈】

○蕉雨：芭蕉の葉に降る雨。○仙鸞：鳳凰に似た伝説上の鳥。○仙鸞尾：ここでは雨のたとえ。○幽人：隱者。

★ 雁來紅

雁來紅がんらいこう

元 周 翼

朔雁南來塞草秋
朔雁さくがん 南來す 塞草さいそうの秋
未霜紅葉已先愁
未だ霜ふらざるに 紅葉 已に先に愁う
綠珠宴罷歸金谷
綠珠りよくじゆ 宴罷みて 金谷きんこくに歸る
七尺珊瑚夜未收
七尺の珊瑚 夜 未だ収まらず

【語釈】

○雁來紅：葉鶏頭。雁がやってくる秋になると花が紅色に染まるのでこの名がある。○朔雁：北地から南方に飛來する雁。○塞草：寒の草。○綠珠：晋の石崇の愛妾。『蒙求』綠珠墜樓。○金谷：金谷園。晋の石崇が持っていた庭園。

★ 種蒲

蒲かばを種くさゆ

唐 陸龜蒙

杜若溪邊手自移

杜若溪邊とじやくけいへん 手自みずから移あたう

旋抽煙劔碧參差

旋めぐりて 煙劔えんけんを抽ひきて 碧きん 參差さんしたり

何時織得孤帆去

何れの時か 孤帆こはんを織り得て去り

懸向秋風訪所思

懸はるかに 秋風あきかぜに向つて 所思しよしを訪たずねん

【語釈】

○杜若…カキツバタ。○參差…不揃い。○孤帆…孤独な舟の帆。○所思…思うところの事。

★ 苔錢

苔たい錢せん

唐 鄭谷

春紅秋紫繞池臺

春紅 秋紫 池台めいを繞めぐる

箇箇圓如濟世財

箇々まじか 円まじかなること 世さいに濟さいす財さいの如し

雨後無端滿窮巷

雨後 端無はしなくも 窮巷ききやうこうに満ち

買花不得買愁來

花はなを買い 愁しみいを買い得ずして來る

【語釈】

○苔錢…ゼニゴケ。○池臺…池苑の樓台。○濟世財…世人を救う財。円形の錢。○無端…思いもよらず。○窮巷…むさくるしい巷。

★茶

茶

宋 林逋

石碾輕飛瑟瑟塵

石碾せきてん 輕飛す 瑟瑟の塵

乳香烹出建溪春

乳香ほうしゆつ 烹出す 建溪けんけいの春

世間絕品人難識

世間 絕品 人の識る難く

閑對茶經憶古人

閑かに 茶經ちやきやう に対し 古人を憶う

【語釈】

○石碾…石製の茶臼。○瑟瑟…寂しい様子や色の形容。○塵…茶粉。○乳香…乳花（茶を似るときに出る乳白色の泡）の香。○建溪…福建省建溪。名茶の産地。○茶經…唐代の陸羽によって著された茶についての書物。

★詠酒

酒を詠ず

唐 汪遵

萬事銷沈向一杯

萬事 銷沈しょうちん して 一杯に向う

竹門啞軋爲風開

竹門 啞軋あくあつ 風の為に開く

秋宵睡足芭蕉雨

秋宵 睡りは足る 芭蕉の雨

又是江湖入夢來

又た是れ 江湖 夢に入りて来る

【語釈】

○銷沈…元気がなくなる。○啞軋…ギシギシと軋る音の形容。○江湖…江と湖。

★糖霜

糖霜とうそう

宋 楊萬里

亦非崖蜜亦非餈

亦た崖蜜がいみつに非ず 亦た餈あめに非ず

青女吹霜凍作冰

青女せいじよ霜を吹き凍りて氷と作る

透骨清寒輕著齒

骨を透す清寒せいかん 輕く齒つに著き

嚼成人迹板橋聲

嚼かめば 人迹じんせき 板橋きょうはんの聲と成る

【語釈】

○糖霜：綿白糖。シロップが加えられ純度の低い砂糖。○崖蜜：山崖間の野の蜂が作った蜂蜜。○青女：霜を降らす女神。○人迹板橋聲：人が板橋を渡るときに立てる音。

★橋

橋

清 錢錦城

丹實離離間碧林

丹実たんじつ 離々りりとして 碧林へきりんを間まう

千頭聲價重南金

千頭の声価 南金を重んず

踰淮若改平生質

淮わいを踰こえ 若し平生もの質を改むれば

孤負當年作頌心

孤負こふす 当年な 頌じゆを作す心に

【語釈】

○丹實：赤い実。○離離：果実が良く実って垂れ下がるさま。○南金：南方出産の銅。○平生：往生。○孤負：そむく。○当年：昔年。○頌：褒め称える。

★梅子

梅子

宋

黄庭堅

帶葉連枝摘未殘
葉を帶ぶ連枝 摘みて未だ残る
依依茶塢竹籬間
依依たる茶塢 竹籬の間
相如病渴應須此
相如 渴を病み 応に此を須むべし
莫與文君感遠山
文君に与え 遠山を感じる莫かれ

【語釈】

○依依：遠くぼんやりとしているさま。○茶塢：茶を楽しむための場所。○相如：司馬相如。喉の渴きの病気があった。○應：「まさに「すべし」と読み「すべきである」の意。○文君：卓文君。司馬相如の妻。○遠山：卓文君の眉は遠山の如しと言われていた。『西京雜記』。○結句：卓文君に与えてしまうと、自分の渴きが直らなくて、卓文君の瞳が曇り、自分が愁えることになる。そうしてはならない。

★楊梅

楊梅

宋

余尊舒

摘來鶴頂珠猶濕
摘み来る鶴頂 珠 猶お湿う
剋去龍睛淚未乾
剋り去りて 竜睛 涙未だ乾かず
若使太真知此味
若し 太真をして 此の味を知らしめば
荔支應不到長安
荔支 応に長安に到らざるべし

【語釈】

○楊梅：ヤマモモ。○鶴頂：鶴頂梅。楊梅のこと。○龍睛：楊梅のこと。○太真：楊貴妃。荔支を好んで蜀から早馬で取り寄せた。○應：「まさに「すべし」と読み「きつと」であるに違いない」の意。

★荔枝

荔枝

唐 韓 偓

遐方不許貢珍奇

遐方かほう 許さず 珍奇ちんきを貢するを

密詔唯教進荔枝

密詔 唯か荔枝を進めしむ

漢武碧桃爭比得

漢武の碧桃しかで 争か比べ得ん

枉令方朔號偷兒

枉まげて 方朔ほうさくをして 偷兒ゆじと号せしむ

【語釈】

○遐方：遠方。○珍奇：珍しく素晴らしい物。ここでは荔枝。漢の時代に南方より早馬で献上されていたが、民を苦しめるという理由で廃止された。『後漢書』。○密詔：秘密の詔勅。○漢武：漢の武帝。○碧桃：漢の武帝が西王母から貰ったとされる仙桃。『博物志』。○方朔：東方朔。武帝に仕え太中大夫にまで上った。辭賦を以て武帝の豪奢ぶりを諷めた。○偷兒：盗人。武帝が西王母から仙桃を貰ったときに東方朔が覗いたので、西王母が「偷兒」と言った。

★荔枝

荔枝

唐 韓 偓

封開玉籠雞冠溼

封 開けば 玉籠ぎよくろう 雞冠けいかん溼うるお

葉襯金盤鶴頂鮮

葉襯ようき 金盤 鶴頂かくちよう 鮮かなり

想得佳人微啓齒

想い得たり 佳人 微かに齒ひらを啓き

翠釵先取一雙懸

翠釵すいさ 先ず 一雙を取りて懸く

【語釈】

○玉籠：鳥かごの美称。○雞冠：庭鳥のとさか。○佳人：美人。楊貴妃。○翠釵：翡翠の簪。

★蒲萄

蒲萄

唐 韓愈

新莖未徧半猶枯 新莖未だ徧あまねねからず 半ば猶お枯る
 高架支離卷復扶 高架 支離 卷まき復たすた扶く
 若欲滿盤堆馬乳 若し 滿盤に 馬乳を堆たいせんと欲たつすれば
 莫辭添竹引龍鬚 辭りする莫うかれ 竹を添りゅうびんえ龍鬚を引くを

【語釈】

○高架…高く架かる。○支離…分裂する。○馬乳…葡萄の一種。○龍鬚…葡萄の一種。ここではその蔓。

★食老菱有感

老菱ろうめいを食して感有り

宋 楊萬里

幸自江湖可避人 幸こうじ自 江湖 人を避くべし
 懷珠韞玉冷無塵 珠を懷つき 玉を韞つみ 冷として塵無し
 何須抵死露頭角 何んぞ須もちいん 死に抵し 頭角を露すを
 荇葉荷花老此身 荇葉こうよう 荷花かか 此の身を老ろうす

【語釈】

○幸自…もとより。元来。○江湖…江と湖。隱棲の地。○何須…「なんぞもちいん」と読み「どうしてししようか〔反語〕」の意。○荇葉…アサザ。○荷花…蓮の花。

★ 史

史

元 劉 因

記録紛紛已失真

記録 紛々として 已に真を失う

語言輕重在詞臣

語言の輕重 詞臣に在り

若將字字求心跡

若し 字々を將つて 心跡を求むれば

恐有無邊受屈人

恐らくは 無邊 屈を受く人有らん

【語釈】

○紛紛：混じり紛れるさま。○語言：言語。○詞臣：歴史書を書いた人。○心跡：思想と行為。○無邊：無数。

★ 題印囊

印囊に題す

唐 皮日休

金篆方圓一寸餘

金篆 方圓 一寸余

可憐銀艾未思渠

憐れむべし 銀艾 未だ思を渠かざるを

不知夫子將心印

知らず 夫子 心印を將つて

印破人間萬卷書

印破す 人間 万卷の書

【語釈】

○金篆：金で書いた篆書。○方圓：四角と円。○銀艾：銀印と綠綬。○心印：言葉で表さず心で伝えること。○夫子：男子の尊称。○印破：心印で伝え尽くす。○人間：人間世界。

★硯

硯

清 顧陳埏

端溪誰割紫雲腴

端溪誰か割らん 紫雲の腴ゆ

萬古文心向此攄

萬古の文心 此こゝに向いて攄のぶ

小心墨池成巨浪

小心の墨池 巨浪を成し

就中飛出北溟魚

中就なかんずく 飛び出す北溟ほくめいの魚

【語釈】

○端溪：広東省肇慶市端溪。硯石の産地。○紫雲：紫色の硯石。○腴：うまみ。○文心：文章。○攄：思いを述べる。○墨池：墨つぼ。○就中：とりわけ。○北溟：北方の最果てにあると言われる大海。

★秃筆

秃筆とくひつ

宋 林逋

神鋒雖缺力能存

神鋒 欠くと雖も 力能く存す

架琢珊瑚欠策勲

架琢かたく 珊瑚さんご 策勲さくくんを欠く

日暮閑窓何所似

日暮れて 閑窓かんそう 何ぞ似たる所ぞ

灞陵憔悴李將軍

灞陵はりように憔悴しょうすいす 李將軍

【語釈】

○秃筆：先の毛が不揃いな毛筆。○神鋒：鋭く尖った毛先。○策勲：勲功と名誉を記すこと。○灞陵：陝西省西安市東にあった古城。○李將軍：西漢の武將李広。

★ 謝靜遠惠紙

靜遠が紙を恵むに謝す

元 顧瑛

蜀郡金花新著様
剡溪玉板舊齊名
荷君寄我黟川雪
猶帶漣漪瀉月聲

蜀郡の金花 新たに様を著く
剡溪の玉板 旧名を齊う
荷う 君が我に寄す 黟川の雪
猶お帶ぶ 漣漪 月に瀉ぐ声

【語釈】

○靜遠：陸徳原。平江路長洲の人，徽州路岳教授となる。○蜀郡：四川省。○金花：金花箋。紙の一種。○様：模様。○剡溪：浙江省紹興市剡溪。○玉板：光沢とハリのある宣紙（上質の紙の一種）。○漣漪：さざ波。○瀉月：泉水の月光の如くそそぐ形容。

★ 倭扇

倭扇

元 賈性之

外番巧藝奪天工
筆底丹青智莫窮
好似越裳供翡翠
也從中國被仁風

外番の巧芸 天工を奪う
筆底の丹青 智窮まる莫し
好似 越裳 翡翠を供え
也た 中国に従って 仁風を被る

【語釈】

○倭扇：日本の扇。○外番：異民族。日本。○天工：造物主のなせる技。○丹青：赤と青。○好似：良く似ている。くの如き。○越裳：南海にあるとされた国の名。○仁風：仁徳の風化。

★漳州僧宗要見遺紙扇每扇各書一詩

宋 蔡襄

漳州しょうしゅうの僧宗要そうそうようが紙扇かきせんを遺おくらる 每扇おのおのに各一詩ひとしを書かす

老去將携ま只ただ要輕やす

老去りて將まさに携たずえんとし 只ただ輕やすきを要す

況臨炎暑い遶風清わん

況いや炎暑えんじゆに臨まみ 風かぜを遶めぐらして清ききをや

兒童愛畫青鸞せ樣い

兒童こども 画えを愛あす 青鸞せいらん樣よう

未識山翁質素情ま

未まだ識しらず 山翁さんゆう 質素しつその情なさけ

【語釈】

○漳州：福建省漳州市。○宗要見：不祥。○青鸞樣：女性の模様。

★謝鄭閔中惠高麗畫扇

宋 黃庭堅

鄭閔中ていこうちゆうが高麗こうらい画扇がせんを惠めぐむに謝うす

會稽內史三韓扇かいけい

會稽かいけいの内史ないし 三韓さんかんの扇せん

分送黃門畫省中ぶん

分わかち送くる 黃門わうもん 画省がしやうの中ちゆう

海外人煙來眼界かいがい

海外かいがいの人煙にんえん 眼界がんがいに來きり

全勝博物注魚蟲ぜん

全ぜんて勝かる 博物はくぶつ 魚蟲いさごに注しゆするに

【語釈】

○鄭閔中：鄭穆。福州侯官の人。仁宗皇祐五年の進士。國子祭酒、寶文閣待制に除せらる。門弟数千人。○會稽：江蘇省東部と浙江省西部。○内史：官名。○三韓：朝鮮南部の馬韓、辰韓、弁辰。○黃門：門下省。○眼界：目に見える範圍。○博物：万物。

★琵琶

琵琶 びわ

唐 白居易

弦清撥刺語錚錚
 弦清く撥 はち 刺 す して語錚々たり
 背却殘燈就月明
 殘灯に背却 はいきやく して月明に就 つ く
 頼是心無惆悵事
 頼 さいわい に是れ心に惆悵 ちゆうちやう する事無し
 不然爭奈子弦聲
 然らずんば子が弦聲 げんせい を爭奈 いかん せん

【語釈】

○錚錚：金属的な高く清んだ音。○背却：捨てる。○殘燈：消えかかった灯。○頼是…さいわいに、都合良く。○惆悵：嘆き悲しむ。○爭奈…どうしようもない。冬至の俗語。

〔参考文献〕 『新釈漢文大系 白氏文集 四』

★珊瑚

珊瑚 さんご

清 錢 鑾

石家擎出獨稱高
 石家 けいしめつ 擎出 けいしめつ し独り高と称す
 七尺冷瓏映綺寮
 七尺 れいろう 冷瓏として綺寮 きりやう に映 さ ず
 不識瓊枝來海底
 識 けいし らず瓊枝の海底より来るを
 却疑火樹燦元宵
 却 げんしやう ちて疑 げんしやう う火樹の元宵に燦 さん たるかと

【語釈】

○擎出…そばだち出る。○冷瓏…玉や宝石などが美しく輝き、冴え冴えするような音を奏でる様子。○綺寮…彫刻や絵で飾られた佳麗な家。○瓊枝…伝説中の玉樹のような珊瑚。○火樹…樹形の灯火。○元宵…旧暦正月十五日（上元）の夜。松明や提灯を灯す夜祭りがあった。

★ 風箏

風箏 ふうとう

清 除天球

誰向天邊認塞鴻 誰か 天辺に向って 塞鴻を認む
 但憑一紙可騰空 但だ 一紙に憑り 空に騰るべし
 任他風信東西轉 任他 さもあらばあれ 風信東西に転ずる
 百丈遊絲在掌中 百丈の遊糸 掌中に在り

【語釈】

○風箏…風。○天邊…空の果て。○塞鴻…辺境の地を飛ぶ大きな鳥。○任他…ままよ。○
 風信…ここでは風のこと。○遊絲…ここでは風糸。

★ 江帆

江帆 かうはん

唐 羅 鄴

別離不獨恨蹄輪 別離 独り ひと 蹄輪を恨まず
 渡口風帆發更頻 渡口の風帆 ふうはん 発すること更に頻なり
 何處青樓方凭檻 何れの処の青樓か せいろう 方に檻 かん に凭り
 半江斜日認歸人 半江の斜日 歸人を認む

【語釈】

○江帆…江上の舟。○蹄輪…車馬。○風帆…帆掛け船。○青樓…妓院。○檻…欄干。

★ 花上金鈴

花上の金鈴

宋 蕭永崖

揺曳金銭日幾回

揺曳ようえい 金銭きんせん 日に幾回いくかい

不教紅紫委蒼苔

紅紫こうしをして 蒼苔せいたいに委いせしめず

誰知鳥雀驚飛去

誰か知らん 鳥雀ちようじゃくの驚おどいて飛び去さるを

別有銜花野鹿來

別に花くわを銜くわえて 野鹿やろくの來きる有り

【語釈】

○揺曳：揺れ動く。○紅紫：紅色の花と紫色の花。○蒼苔：緑色の苔。○委：棄てる。○鳥雀：小鳥。

★ 書舎寒燈

書舎の寒燈

元 葉 顒

青燈黃卷伴更長

青燈黃卷 更に長きに伴う

落照銀缸午夜香

落照 銀缸かんぱ 午夜香かんばし

異日長檠珠翠處

異日 長檠ちようけい 珠翠しゆすいの処

苦心寒燄莫相忘

苦心かんえん 寒燄 相あい忘わする莫なれ

【語釈】

○寒燈：寒々とした灯。○青燈黃卷：清苦して讀書する生活。○落照：夕陽。○銀缸：銀白色の灯。○午夜：真夜中。○異日：将来の日。○長檠：長い灯火の台。○珠翠：珍珠と翡翠。○寒燄：寒々とした火炎。

★ 漁燈

漁燈

清 汪 衡

月落空江露氣浮
月落ち 空江 露氣浮ぶ
蘆花深處宿漁舟
蘆花 深き処 漁舟を宿す
寒燈映水繁星亂
寒燈 水に映じて 繁星乱れ
夜半潮回帶影流
夜半 潮回^{うしかえ}りて 影を帯びて流る

【語釈】

○空江：静寂な江面。○寒灯：寒々とした灯。○繁星：多くの星。

★ 代夫作白蠟燭詩贈人

夫に代りて白蠟燭の詩を作り人に贈る

唐 孫 氏

景勝銀缸香比蘭
景勝 銀缸 香蘭に比す
一條白玉偈人寒
一条の白玉 人に偈^{せま}りて寒し
他時紫禁春風夜
他時 紫禁 春風の夜
醉草天書仔細看
醉草 天書 仔細に看ん

【語釈】

○銀缸：銀白色の灯火。○一條白玉：白蠟燭。○他時：将来。○紫禁：宮城。○醉草：草書。

★ 墩邊漁火

墩邊の漁火

明 林 瀚

釣罷歸來月滿船
江天人靜夜如年
推篷忽露孤燈火
驚起魚龍不敢眠

釣罷み 帰り来れば 月船に満つ
江天人 静かにして 夜年の如し
篷を推せば 忽ち露る 孤灯の火
魚竜を驚起し 敢えて眠らず

【語釈】

○江天…江と天。○篷…舟の窓。○驚起…驚かせて眼を醒まさせる。○魚龍…水中に住む生物。

★ 燭淚

燭淚

元 張弘範

惜別終宵話不休
煌煌燈燭照離愁
蠟花本は無情物
特向人前也淚流

別を惜しみ 終宵話 休まず
煌々たる灯燭 離愁を照す
蠟花 本是れ 無情の物
特に 人前に向いて 也た涙流る

【語釈】

○燭淚…蠟燭が燃えるときに滴る涙状の液体。○終宵…一晚中。○煌煌…光り耀くさま。
○蠟花…蠟燭を燃やすときに中心に出来る花の形を為した物。